新潟県埋蔵文化財調査報告書　第249集

一般国道116号

和島バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ

大 武 遺 跡 Ⅱ

（古代～縄文時代編）

２０１４

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道１１６号

和島バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ

大武（だいぶ）遺跡 Ⅱ

（古代～縄文時代編）

２０１４

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

新潟県教育員会は、道路建設などの道路事業に伴う発掘調査を行っており、その成果を発掘調査報告書として公表してまいりました。

本書は国道116号和島バイパス建設に伴い実施した、長岡市（旧和島村）大武遺跡の発掘調査報告書です。

国道116号は柏崎市を起点とし、新潟市に至る中・下越地域の幹線道路で、社会・経済の発展に大きな役割を果たすとともに、沿線市町村の生活道路として重要な役割を果たしています。しかし、国道116号のうち長岡市島崎地区では、道路幅員が狭く人家連担部を通過するため、交通事故や渋滞・騒音等の交通環境の悪化が深刻な社会問題となっていました。和島バイパスはこのような問題を解決し、地域の幹線道路としての役割を強化するとともに、現道を地域の生活道路としての機能を回復させるために計画された事業で、現在は全線が開通し、その効果を上げています。

大武遺跡では、縄文時代から安土桃山時代まで断続的に営まれた遺跡で、谷の中から土器・石器・木製品が多数発見され、往時の人々の暮らしぶりを知るうえで貴重な資料が多く発見されました。

今回の報告書が、地域の歴史を解明する資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と知識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に当たっては旧和島村教育委員会より多大なるご協力とご援助をいただきました。また、北陸地方整備局長岡国道事務所には、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の配慮を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

2014年3月

新潟県教育委員会

教育長　高　井　盛　雄

例　　言

1　本報告書は、新潟県長岡市（旧和島村）島崎字大武 1910 番地ほかに所在する大武遺跡の発掘調査記録である。

2　本調査は、一般国道 116 号和島バイパスの建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼し、1994 ～ 1997 年度に実施した。

3　埋文事業団は、1995 ～ 1997 年度の掘削作業などを、株式会社 吉田建設に委託し、発掘調査を行った。

4　整理作業及び報告書作成にかかる作業は、県教委が埋文事業団に委託し、主に 2011・2012 年度に実施した。

5　出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。

6　遺物の注記は、「大ブ」とし、調査年度・出土地点・層位などを続けて記したものと、遺物台帳の番号を記したものがある。

7　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。

8　遺物番号は遺物の種類ごとに通し番号とした。本文及び挿図・観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。

9　本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は著者および発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第Ⅵ章については各分析の文末に掲載した。

10　各種図版作成・編集は、有限会社 不二出版に委託した。

11　自然科学分野に関わる各種分析は以下の個人・機関に委託した。

樹種同定 … 株式会社 古環境研究所、赤色顔料の材質分析 … 株式会社 パレオ・ラボ（竹原弘展）、漆紐および籃胎漆器の塗膜分析 … 株式会社 パレオ・ラボ（藤根　久・米田恭子）、漆紐の構造・材質 … 永嶋正春（前国立歴史民俗博物館）、漆紐の年代測定 … 今村峯雄（国立歴史民俗博物館（2000 年当時））・坂本　稔（国立歴史民俗博物館）、琥珀原石の産地同定分析 … 植田直見（財団法人 元興寺文化財研究所）

12　「第Ⅵ章 自然科学分析」を除く本書の執筆は、春日真実（埋文事業団 課長代理）・坂上有紀（同 嘱託員）・加藤学（同　班長）・渡邊裕之（現 新潟県教育庁文化行政課）がこれにあたり、編集は春日・坂上が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章～第Ⅳ章、第Ⅴ章 1・2A ～ C・E ～ G、第Ⅶ章 1・4 … 春日、第Ⅴ章 3B ～ E・4、第Ⅶ章 2・3 … 坂上、第Ⅴ章 3A … 加藤、第Ⅴ章 2D・E、4（372）… 渡邊

13　縄文時代前期の土器の年代などについて小熊博史（長岡市立科学博物館）、斎藤　準（株式会社 帆苅組）、寺﨑裕助（新潟市弥生の丘展示館）、谷藤保彦（公益財団 群馬県埋蔵文化財調査事業団）、弥生時代中期の土器の年代などについて笹澤正史（株式会社 吉田建設見附支店）、阿部泰之（阿賀町教育委員会）に御指導を得て報告書に反映させた。縄文時代前期土器の施文原体については斎藤　準の同定結果を記載した。また、XV 層を除く石器については、高橋保雄（調査課課長代理（当時））、弥生時代後期～古墳時代前期土器の年代などについては滝澤規朗（文化行政課埋蔵文化財係 専門調査員）の指導を受けた。ただし、聞き間違いや記載ミス・誤認などによ間違いも考えられ、その責は春日・坂上にある。

14　調査成果の一部は現地説明会資料［1995・1997］、埋蔵文化財事業団 年報平成 6 ～ 9 年［1995 ～ 1998］、埋文にいがた第 18・19・76・80 号［1997・2011・2012］、遺跡発掘調査報告会 '98［1998］、第 25 回新潟県考古学会研究発表会「2013」などで公表しているが、本報告をもって正式な報告とする。

15　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

出雲崎町教育委員会　　小林巌夫　　駒形敏朗　　高濱信行　　田中　靖　　新潟県立歴史博物館　　山田昌久

寺泊町教育委員会・与板町教育委員会（現長岡市教育委員会）

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査と整理作業 …… 2

A　試掘確認調査 …… 2

B　本発掘調査範囲と工法変更の経緯 …… 2

C　本発掘調査の経過 …… 4

D　整 理 作 業 …… 6

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 7

1　地理的環境 …… 7

2　周辺の遺跡 …… 7

3　遺跡周辺の土地更正図 …… 12

第Ⅲ章　調査の概要 …… 13

1　グリッドの設定 …… 13

2　地　区　名 …… 14

3　基 本 層 序 …… 14

第Ⅳ章　遺　　構 …… 17

1　概　　要 …… 17

2　古代（平安時代） …… 17

3　弥生時代後期から古墳時代 …… 17

4　縄 文 時 代 …… 19

第Ⅴ章　遺　　物 …… 20

1　概　　要 …… 20

2　土器・土製品 …… 20

A　土器の概要 …… 20

B　縄文時代前期 …… 20

C　縄文時代中期～後期初頭 …… 26

D　縄文時代後期中葉～晩期中葉 …… 27

E　弥生時代中期 …… 31

F　弥生時代後期～古墳時代 …… 35

G　古　　代 …… 41

H　追 加 土 器 …… 41

I　土　製　品 …… 41

3　石器・石製品 …… 42
A　XV層 …… 42
B　XIV層 …… 50
C　XIII～XI 層 …… 51
D　IX層より上層 …… 58
E　玉 作 関 連 …… 65
4　木製品・漆製品 …… 71

第VI章　自然科学分析 …… 81
1　樹 種 同 定 …… 81
2　赤色顔料の材質分析 …… 93
3　漆紐および藍胎漆器の塗膜分析 …… 96
4　漆紐について …… 99
5　漆紐の実年代について …… 100
6　琥珀原石の産地同定分析 …… 102

第VII章　ま　と　め …… 105
1　土器・陶磁器 …… 105
A　層序と出土土器・陶磁器 …… 105
B　主要土器群と既存の編年案の対応関係 …… 117
2　石器・石製品 …… 121
3　木製品・漆製品 …… 124
4　遺跡の動向 …… 126

《要　　約》…… 130

《引用・参考文献》…… 131

《観　察　表》…… 136
土器・陶磁器 …… 136
石器・石製品 …… 159
木製品・漆製品 …… 168

挿 図 目 次

第 1 図　和島バイパス建設に伴い調査された主な遺跡 …… 1
第 2 図　試掘確認調査・予備調査のトレンチと本発掘調査必要範囲の変遷 …… 3
第 3 図　工法変更後の法線図 …… 4
第 4 図　各年度の調査範囲 …… 4
第 5 図　遺跡の位置（1）…… 8
第 6 図　遺跡の位置（2）…… 9

第 7 図　周辺の遺跡 …… 11
第 8 図　明治26年の土地更正図と大武遺跡の調査区 …… 12
第 9 図　グリッドの設定 …… 13
第10図　地区の名称 …… 13
第11図　縄文時代前期前葉の土器分類 …… 21
第12図　41・72の文様 …… 23
第13図　縄文時代後期～晩期の土器分類 …… 28
第14図　弥生時代中期中葉の土器分類 …… 32
第15図　弥生時代後期～古墳時代の土器分類 …… 36
第16図　古墳時代の土器分類 …… 37
第17図　XV層石器組成 …… 43
第18図　磨石類の分類 …… 48
第19図　玦状耳飾編年模式図 …… 49
第20図　XIII～XI層石器組成 …… 51
第21図　石鏃の分類 …… 53
第22図　石鏃未成品の分類 …… 53
第23図　石錐の分類 …… 54
第24図　石核の分類 …… 55
第25図　磨製石斧の分類 …… 56
第26図　磨製石斧未成品の分類 …… 56
第27図　IX層より上層の石器組成 …… 59
第28図　石器実測図 …… 61
第29図　大武遺跡出土管玉の製作工程 …… 66
第30図　大武遺跡出土勾玉の製作工程 …… 69
第31図　時代・時期における樹種構成 …… 88
第32図　木製品の顕微鏡写真（1）…… 91
第33図　木製品の顕微鏡写真（2）…… 92
第34図　木製品の顕微鏡写真（3）…… 93
第35図　EPMA分析スペクトル …… 95
第36図　X線回折分析結果 …… 95
第37図　赤色顔料の材質分析 …… 96
第38図　漆塗試料と塗膜構造と反射電子像、塗膜の赤外吸収スペクトル図 …… 98
第39図　漆紐の構造 …… 100
第40図　暦年較正年代グラフ …… 101
第41図　琥珀分析試料 …… 102
第42図　赤外吸収スペクトル …… 103
第43図　出土琥珀および標準琥珀のTGA曲線 …… 103
第44図　出土琥珀および標準琥珀のDTA曲線 …… 103
第45図　大武遺跡出土土器・陶磁器（1）…… 106
第46図　大武遺跡出土土器・陶磁器（2）…… 107
第47図　大武遺跡出土土器・陶磁器（3）…… 108
第48図　大武遺跡出土土器・陶磁器（4）…… 110
第49図　大武遺跡出土土器・陶磁器（5）…… 111
第50図　大武遺跡出土土器・陶磁器（6）…… 112
第51図　大武遺跡出土土器・陶磁器（7）…… 114
第52図　大武遺跡出土土器・陶磁器（8）…… 115
第53図　大武遺跡出土土器・陶磁器（9）…… 116
第54図　大武遺跡XV層出土土器の諸属性 …… 118
第55図　管玉完成品のサイズ …… 121
第56図　管玉工程品のサイズ …… 122
第57図　「一木造り多方向穿孔型」の把を装着した鉄剣 …… 124
第58図　大武遺跡出土木製品 …… 125
第59図　A～G区の変遷（1）…… 128
第60図　A～G区の変遷（2）…… 129

表　目　次

第 1 表　和島バイパス建設に伴い調査された主な遺跡 …… 1
第 2 表　周辺の主な遺跡 …… 10
第 3 表　縄文時代前期前葉の土器分類 …… 20
第 4 表　縄文時代後期中葉～晩期中葉の土器分類 …… 27
第 5 表　弥生土器の分類 …… 32
第 6 表　F層・灰色粘土層出土土器の器種構成比率 …… 33
第 7 表　弥生時代後期～古墳時代の土器分類 …… 37
第 8 表　XV層石器・石製品集計 …… 44
第 9 表　XV層磨石類の分類・石材別集計 …… 47
第10表　XIII～XI層・XIIIe層石器・石製品集計 …… 52
第11表　不定形石器の分類 …… 54
第12表　IX層より上層の石器・石製品集計 …… 60
第13表　23層石器・石製品集計 …… 61
第14表　緑色凝灰岩製管玉製作資料　工程別集計 …… 65
第15表　工程別のサイズ・施溝分割の比率 …… 67
第16表　ヒスイ勾玉製作資料　工程別集計 …… 68
第17表　時代・時期における樹種構成 …… 88
第18表　器種別の選材傾向 …… 90
第19表　赤色顔料の材質分析試料 …… 94
第20表　簡易定量分析結果 …… 94
第21表　塗膜分析試料 …… 96
第22表　生漆の赤外吸収位置とその強度 …… 97
第23表　各試料のX線分析結果 …… 98
第24表　大武遺跡XV層出土土器の諸属性 …… 119
第25表　編年対応表 …… 120
第26表　管玉完成品のサイズ比較 …… 121
第27表　大武遺跡の動向 …… 127

図版目次

【図面図版】

図版 1　Ⅷb 層上面全体図
図版 2　A～G 区Ⅷb 層上面平面図
図版 3　SD50 木製品等出土状況図
図版 4　SD46・47・51・83 木製品等出土状況図
図版 5　A～G 区Ⅹ・XIIIa 層上面コンタ図
図版 6　G 区灰色粘土層　土器出土状況図
図版 7　XIV層上面全体図
図版 8　XVI層上面全体図
図版 9　A～G 区XVI層上面平面図
図版 10　断面図（1）
図版 11　断面図（2）
図版 12　古代・弥生時代後期～古墳時代の遺構（1）
図版 13　弥生時代後期～古墳時代の遺構（2）
図版 14　弥生時代後期～古墳時代の遺構（3）
図版 15　弥生時代後期～古墳時代の遺構（4）
図版 16　弥生時代後期～古墳時代の遺構（5）
図版 17　弥生時代後期～古墳時代の遺構（6）・縄文時代の遺構
図版 18　土器（1）　XV層（1）
図版 19　土器（2）　XV層（2）
図版 20　土器（3）　XV層（3）
図版 21　土器（4）　XV層（4）
図版 22　土器（5）　XV層（5）
図版 23　土器（6）　XV層（6）
図版 24　土器（7）　XV層（7）
図版 25　土器（8）　XV層（8）
図版 26　土器（9）　XV層（9）
図版 27　土器（10）XV層（10）
図版 28　土器（11）XV層（11）
図版 29　土器（12）XV層（12）
図版 30　土器（13）XV層（13）
図版 31　土器（14）XV層（14）
図版 32　土器（15）XV層（15）
図版 33　土器（16）XV層（16）
図版 34　土器（17）XV層（17）
図版 35　土器（18）XV層（18）
図版 36　土器（19）XV層（19）
図版 37　土器（20）XV層（20）
図版 38　土器（21）XIIIe 層
図版 39　土器（22）XIIIb 層、XIIIa 層（1）
図版 40　土器（23）XIIIa 層（2）、XIIb 層（1）
図版 41　土器（24）XIIb 層（2）
図版 42　土器（25）XIIb 層（3）
図版 43　土器（26）XIIa 層、その他の縄文時代後期～晩期の土器
図版 44　土器（27）D 区 F 層・G 区灰色粘土層（1）
図版 45　土器（28）D 区 F 層・G 区灰色粘土層（2）
図版 46　土器（29）D 区 F 層・G 区灰色粘土層（3）
図版 47　土器（30）D 区 F 層・G 区灰色粘土層（4）
図版 48　土器（31）D 区 F 層・G 区灰色粘土層（5）
図版 49　土器（32）D 区 F 層・G 区灰色粘土層（6）
図版 50　土器（33）D 区 F 層・G 区灰色粘土層（7）
図版 51　土器（34）D 区 F 層・G 区灰色粘土層（8）
図版 52　土器（35）その他の弥生時代中期の土器
図版 53　土器（36）SD50・51・83-3 層（1）
図版 54　土器（37）SD50・51・83-3 層（2）
図版 55　土器（38）SD50・51・83-3 層（3）
図版 56　土器（39）SD50・51・83-3 層（4）
図版 57　土器（40）SD50･51･83-3 層（5）､23 層（1）
図版 58　土器（41）23 層（2）
図版 59　土器（42）23 層（3）
図版 60　土器（43）23 層（4）
図版 61　土器（44）23 層（5）､SD50･51･83-1 層（1）
図版 62　土器（45）SD50・51・83-1 層（2）、SD47
図版 63　土器（46）SD46、SK70、SK85
図版 64　土器（47）SD33、SK40、SK55
図版 65　土器（48）SK95、21 層、20 層、VIc 層
図版 66　土器（49）SX88
図版 67　土器（50）その他の土坑、⑥層、Ⅷa・b 層、VIb 層・B 層（1）
図版 68　土器（51）VIb 層・B 層（2）、その他の弥生時代後期～古墳時代の土器、古代の土器
図版 69　土器（52）追加土器（1）
図版 70　土器（53）追加土器（2）
図版 71　土器（54）追加土器（3）
図版 72　石器・石製品（1）　XV層（1）
図版 73　石器・石製品（2）　XV層（2）
図版 74　石器・石製品（3）　XV層（3）
図版 75　石器・石製品（4）　XV層（4）
図版 76　石器・石製品（5）　XV層（5）
図版 77　石器・石製品（6）　XV層（6）
図版 78　石器・石製品（7）　XV層（7）
図版 79　石器・石製品（8）　XV層（8）
図版 80　石器・石製品（9）　XV層（9）
図版 81　石器・石製品（10）XV層（10）
図版 82　石器・石製品（11）XV層（11）
図版 83　石器・石製品（12）XV層（12）
図版 84　石器・石製品（13）XV層（13）
図版 85　石器・石製品（14）XV層（14）
図版 86　石器・石製品（15）XV層（15）
図版 87　石器・石製品（16）XV層（16）・XVa 層
図版 88　石器・石製品（17）XIV層
図版 89　石器・石製品（18）XIII～XI 層（1）

図版 90　石器・石製品（19）　XIII～XI 層（2）
図版 91　石器・石製品（20）　XIII～XI 層（3）
図版 92　石器・石製品（21）　XIII～XI 層（4）・
IX層より上層（1）
図版 93　石器・石製品（22）　IX層より上層（2）
図版 94　石器・石製品（23）　IX層より上層（3）
図版 95　石器・石製品（24）　IX層より上層（4）
図版 96　石器・石製品（25）　IX層より上層（5）
図版 97　石器・石製品（26）　IX層より上層（6）
図版 98　石器・石製品（27）　IX層より上層（7）
図版 99　石器・石製品（28）　IX層より上層（8）
図版 100　石器・石製品（29）　IX層より上層（9）
図版 101　石器・石製品（30）　IX層より上層（10）
図版 102　石器・石製品（31）　IX層より上層（11）
図版 103　石器・石製品（32）　IX層より上層（12）
図版 104　石器・石製品（33）　玉作関連（1）
図版 105　石器・石製品（34）　玉作関連（2）
図版 106　石器・石製品（35）　玉作関連（3）
図版 107　石器・石製品（36）　玉作関連（4）
図版 108　石器・石製品（37）　玉作関連（5）
図版 109　石器・石製品（38）　玉作関連（6）・玉類
図版 110　木製品（1）　SK96・SE89・SK49・SK55・
SD33
図版 111　木製品（2）　SD33・SD46
図版 112　木製品（3）　SD46・SD47
図版 113　木製品（4）　SD47
図版 114　木製品（5）　SD47
図版 115　木製品（6）　SD47
図版 116　木製品（7）　SD47・SD48・SD50
図版 117　木製品（8）　SD50
図版 118　木製品（9）　SD50
図版 119　木製品（10）　SD50
図版 120　木製品（11）　SD50
図版 121　木製品（12）　SD50
図版 122　木製品（13）　SD50・SD51
図版 123　木製品（14）　SD51・SD83
図版 124　木製品（15）　SD83
図版 125　木製品（16）　SD83・SK95
図版 126　木製品（17）　SK95・SX87・SX88
図版 127　木製品（18）　SX88
図版 128　木製品（19）　SX88、XV～XII 層
図版 129　木製品（20）　XIII～XI 層
図版 130　木製品（21）　IX層・灰色粘土層
図版 131　木製品（22）　F 層・D 層・31 層・27 層・23 層
図版 132　木製品（23）　23 層・21 層・20 層・VIII層・VII層
図版 133　木製品（24）　VII層
図版 134　木製品（25）　VII層
図版 135　木製品（26）　VII層・VI層
図版 136　木製品（27）　VI層・V 層
図版 137　木製品（28）　V 層・青灰砂層
図版 138　木製品（29）　青灰砂層
図版 139　木製品（30）　青灰砂層
図版 140　木製品（31）　青灰砂層・D 区 A, B, C 層
図版 141　木製品（32）　D 区 A, B, C 層・D 層・不明など
図版 142　木製品（33）　不明など
漆製品　XV 層
図版 143　土製品

【写真図版】

図版 144　遺跡遠景・完堀
図版 145　遺物出土状況
図版 146　遺跡の層序
図版 147　縄文時代前期・弥生時代中期・古墳時代の土器
図版 148　木製品・漆製品
図版 149　管玉・勾玉製作工程資料
図版 150　石器・石製品
図版 151　漆製品分析試料
図版 152　A・B 区の調査状況
図版 153　E・F 区の調査状況
図版 154　D・G・H・I 区の調査状況
図版 155　遺跡の層序、古代の遺構・遺物出土状況
図版 156　古墳時代後期の遺構・遺物出土状況
図版 157　古墳時代後期の遺物出土状況
図版 158　SD33・水田跡
図版 159　SD50・33、水田跡
図版 160　SD50・51、SX84
図版 161　SD50・83 遺物出土状況
図版 162　SD50 遺物出土状況
図版 163　SD50 遺物出土状況
図版 164　弥生時代後期～古墳時代の土坑（SK85・59）
図版 165　弥生時代後期～古墳時代の遺構
（SK6・40・43・70）
図版 166　弥生時代後期～古墳時代の遺構
（SK55・SE89）
図版 167　弥生時代後期～古墳時代の遺構
（SK49・72・73・74・95）
図版 168　23 層土器出土状況・G 区灰色粘土層
土器出土状況（1）
図版 169　G 区灰色粘土層土器出土状況（2）
図版 170　G 区灰色粘土層土器出土状況（3）・
D 区 F 層土器出土状況
図版 171　XII・XIIb～XIIIa 層土器出土状況
図版 172　XIIIb～XIIIe 層遺物出土状況、樹木根検出
状況、SK97
図版 173　SK90・93・94、XVc 層土器出土状況
図版 174　XVc・XVd 層土器出土状況
図版 175　XVc 層遺物出土状況
図版 176　作業風景

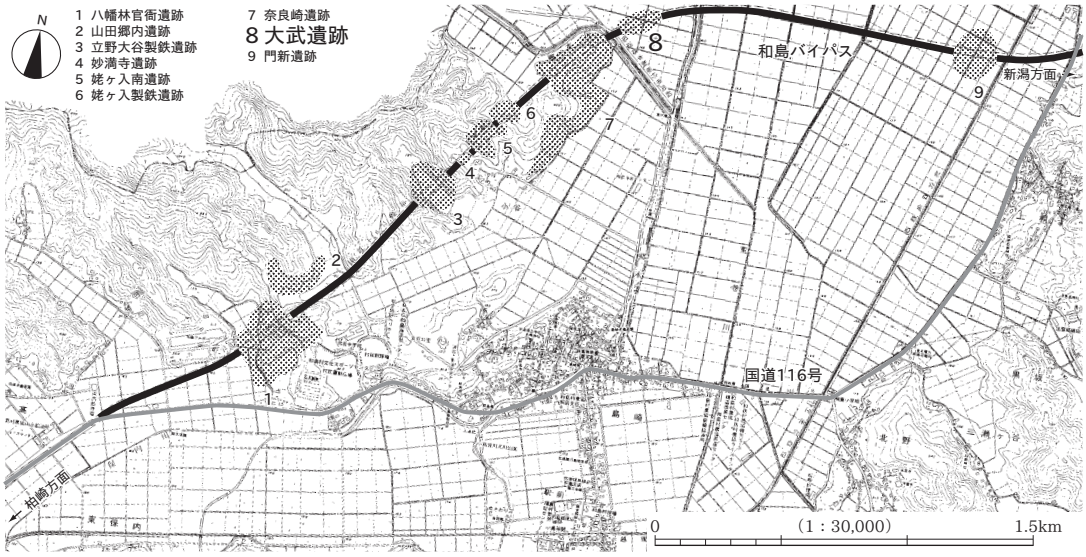
図版 177　土器(1)　縄文時代前期(1)
図版 178　土器(2)　縄文時代前期(2)
図版 179　土器(3)　縄文時代前期(3)
図版 180　土器(4)　縄文時代前期(4)
図版 181　土器(5)　縄文時代前期(5)
図版 182　土器(6)　縄文時代前期(6)
図版 183　土器(7)　縄文時代前期(7)
図版 184　土器(8)　縄文時代前期(8)
図版 185　土器(9)　縄文時代前期(9)
図版 186　土器(10)　縄文時代前期(10)
図版 187　土器(11)　縄文時代前期(11)
図版 188　土器(12)　縄文時代前期(12)
図版 189　土器(13)　縄文時代前期(13)
図版 190　土器(14)　縄文時代前期(14)
図版 191　土器(15)　縄文時代前期(15)
図版 192　土器(16)　縄文時代前期(16)
図版 193　土器(17)　XV・XVa 層出土の縄文時代中期～晩期・XIIIe 層
図版 194　土器(18)　XIIIe・XIIIb・XIIIa 層
図版 195　土器(19)　XIIIa・XIIb 層
図版 196　土器(20)　XIIb・XIIa 層
図版 197　土器(21)　XIIa 層･その他の縄文時代後期～晩期、D 区 F 層・G 区灰色粘土層(1)
図版 198　土器(22)　D 区 F 層・G 区灰色粘土層(2)
図版 199　土器(23)　D 区 F 層・G 区灰色粘土層(3)
図版 200　土器(24)　D 区 F 層・G 区灰色粘土層(4)
図版 201　土器(25)　D 区 F 層・G 区灰色粘土層(5)
図版 202　土器(26)　D 区 F 層・G 区灰色粘土層(6)
図版 203　土器(27)　D 区 F 層・G 区灰色粘土層(7)
図版 204　土器(28)　D 区 F 層・G 区灰色粘土層(8)、その他の弥生時代中期(1)
図版 205　土器(29)　その他の弥生時代中期(2)、SD50・51・83-3 層(1)
図版 206　土器(30)　SD50・51・83-3 層(2)
図版 207　土器(31)　SD50・51・83-3 層(3)
図版 208　土器(32)　SD50･51･83-3 層(4)、23 層(1)
図版 209　土器(33)　23 層(2)
図版 210　土器(34)　23 層(3)
図版 211　土器(35)　23 層(4)、SD50･51･83-1 層(1)
図版 212　土器(36)　SD50・51・83-1 層(2)・その他、SD46・47
図版 213　土器(37)　SK85・70・55、SD33
図版 214　土器(38)　SD33、SK40・95、21 層、20 層、VIc 層
図版 215　土器(39)　SX88、SK49
図版 216　土器(40)　SK6、⑥層、VIIIa･b 層、VIb 層相当、その他の弥生時代後期～古墳時代(1)
図版 217　土器(41)　その他の弥生時代後期～古墳時代(2)、古代、追加土器(1)
図版 218　土器(42)　追加土器(2)
図版 219　土器(43)　追加土器(3)・土製品
図版 220　石器・石製品(1)　XV 層(1)
図版 221　石器・石製品(2)　XV 層(2)
図版 222　石器・石製品(3)　XV 層(3)
図版 223　石器・石製品(4)　XV 層(4)
図版 224　石器・石製品(5)　XV 層(5)
図版 225　石器・石製品(6)　XV 層(6)
図版 226　石器・石製品(7)　XV 層(7)
図版 227　石器・石製品(8)　XV 層(8)
図版 228　石器・石製品(9)　XV 層(9)
図版 229　石器・石製品(10)　XV 層(10)・XVa 層
図版 230　石器・石製品(11)　XIV 層・XIII～XI 層(1)
図版 231　石器・石製品(12)　XIII～XI 層(2)
図版 232　石器・石製品(13)　XIII～XI 層(3)・IX 層より上層(1)
図版 233　石器・石製品(14)　IX 層より上層(2)
図版 234　石器・石製品(15)　IX 層より上層(3)
図版 235　石器・石製品(16)　IX 層より上層(4)
図版 236　石器・石製品(17)　IX 層より上層(5)
図版 237　石器・石製品(18)　IX 層より上層(6)・玉作関連(1)
図版 238　石器・石製品(19)　玉作関連(2)
図版 239　石器・石製品(20)　玉作関連(3)
図版 240　石器・石製品(21)　玉作関連(4)・玉類
図版 241　木製品(1)　SK96、SE89、SK49・55、SD33
図版 242　木製品(2)　SD33・46・47
図版 243　木製品(3)　SD47
図版 244　木製品(4)　SD47・48・50
図版 245　木製品(5)　SD50
図版 246　木製品(6)　SD50
図版 247　木製品(7)　SD50
図版 248　木製品(8)　SD50
図版 249　木製品(9)　SD50・83
図版 250　木製品(10)　SD83・SK95
図版 251　木製品(11)　SK95、SX87・88
図版 252　木製品(12)　SX88、XV～XII 層
図版 253　木製品(13)　XIII 層・XI 層・IX 層・灰色粘土層・F 層・D 層・31 層
図版 254　木製品(14)　27 層・23 層・21 層・20 層・VIII 層・VII 層
図版 255　木製品(15)　VII 層
図版 256　木製品(16)　VII 層・VI 層
図版 257　木製品(17)　V・VIa 層、V 層、青灰砂層
図版 258　木製品(18)　青灰砂層
図版 259　木製品(19)　青灰砂層、D 区 A・B・C 層、D 層、出土地点不明など
図版 260　木製品(20)　出土地点不明など・漆製品

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

大武遺跡は、一般国道 116 号和島バイパス建設に伴い発掘調査が行われた。一般国道 116 号は、新潟県柏崎市を起点とし、刈羽村･出雲崎町･長岡市･燕市を経過し新潟市に至る総延長 77.6km の路線である。

当路線は一般国道 8 号および北陸自動車道の代替路線として、また中越地区の幹線道路として、社会・経済の発展に大きな役割を果たすとともに、沿線 4 市 1 町 1 村の通勤・通学・買い物などの生活道路として重要な役割を果たしている。しかし、一般国道 116 号のうち長岡市島崎地区（旧三島郡和島村島崎）では道路幅員が狭く、人家連担部を通過するために、交通渋滞・交通事故・降雪時の交通傷害・騒音などの交通環境の悪化が深刻な社会問題となっていた。和島バイパスはこのような問題を解決し現道を地域の活動道路としての機能を回復させるほか、地域の幹線道路としての役割を果たすために「一般国道 116 号改築事業」の一部として計画された長岡市両高から硲田（はさまだ）に至る延長 6,260m の事業であり、1984 年度に事業化された。



第 1 図　和島バイパス建設に伴い調査された主な遺跡　和島村　平成 5 年作製「和島村地図」 1：5,000 原図

	遺跡名／調査年度	S63	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	報　告　書	備考（調査者）
1	八幡林官衙遺跡			■		■								［田中 2005］	和島村教委
2	山田郷内遺跡			■										［丸山ほか 2007］	和島村教委
3	立野大谷製鉄遺跡											■		［渡邊ほか 2010］	埋文事業団
4	妙満寺遺跡											■		［丸山 2003］	和島村教委
5	姥ヶ入南遺跡									■	■			［渡邊ほか 2010］	埋文事業団
6	姥ヶ入製鉄遺跡									■			■	［渡邊ほか 2010］	埋文事業団
7	奈良崎遺跡		■	■			■					■	■	［春日ほか 2002］	埋文事業団
8	大武遺跡							■	■	■	■	■		［春日ほか 2000］・本書	埋文事業団
9	門新遺跡						■							［田中 2005］	和島村教委

凡例　工事立会い　試掘確認調査　本発掘調査

第 1 表　和島バイパス建設に伴い調査された主な遺跡　［春日ほか 2002］に加筆

これを受け、新潟県教育委員会（以下県教委）と建設省（現国土交通省）の間で、計画用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査等に関する協議が本格化した。県教委は建設省の依頼を受け 1986・1987 年に和島バイパス法線内の分布調査を行い、この区間に 8 遺跡以上の埋蔵文化財包蔵地があることを確認し、このことを建設省に通知している。また、県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下事業団）に試掘・確認調査を依頼し、事業団は 1993 年 2 月 1・2 日の 2 日間、大武遺跡の試掘確認調査を実施した。調査の結果、縄文時代から中世の遺物が出土し、大武遺跡は縄文時代から中世までの遺跡であるとして、6,200m^2 の本発掘調査が必要であると、県教委に報告した。その後、建設省・県教委・事業団の三者は協議を重ね、遺跡の性格・調査面積や和島バイパスの工事工程・事業団の調査体制を考慮した結果、1994 年度 4 月から本発掘調査を行うこととした。

2　調査と整理作業

A　試掘確認調査

試掘確認調査は 1993 年 2 月 1・2 日の 2 日間実施した。対象面積は 17,000m^2、調査面積は 260m^2 であり、比率は 1.5%である。調査方法は対象地域に、トレンチを任意に設定し、掘削用重機および人力で掘削・精査を行い、土層の堆積状況、遺構・遺物の検出状況、トレンチ位置などを図面・写真に記録するものである。調査の結果、24・25・30 トレンチから縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世の遺物と中世の遺構・遺物を検出し、6,200m^2（1,600 × 4 層）の本発掘調査が必要と判断した。

B　本発掘調査範囲と工法変更の経緯

1994 年度：現地を踏査し地形などを検討した結果、当初設定された本発掘調査範囲外に遺跡が広がる可能性が推定できた。そこで事業団・県教委・建設省は協議を行い、本発掘調査範囲周辺に事業団が「予備調査」を行うこととした。調査期間は 4 月 13 ～ 15 日、5 月 9・10 日である。調査方法は試掘確認調査と同様であり、対象地域に任意にトレンチを設定し、削用重機および人力で掘削・精査を行い、土層の堆積状況、遺構・遺物の有無を確認した。調査の結果 37・38・40・42・43・45・46・51 トレンチから弥生時代・古墳時代・中世の遺構・遺物が検出された。しかし、縄文時代の遺物は検出されず、今後の課題となった。調査面積は 6,400m^2（1,600 × 4 層）から 12,600m^2（4,200 × 3 層）+ α へ拡大したが（第 2 図 2）、本発掘調査の進展に伴い、この範囲の外側にも遺跡が広がるとともに、さらに下位にも遺物包含層が存在する可能性が考えられた。そこで弥生時代の遺物包含層の掘削が終了した地点において 2 月 14・15 日の 2 日間、上下位の遺物包含層の有無を確認した。調査の結果、縄文時代前期の遺物包含層が確認できた。

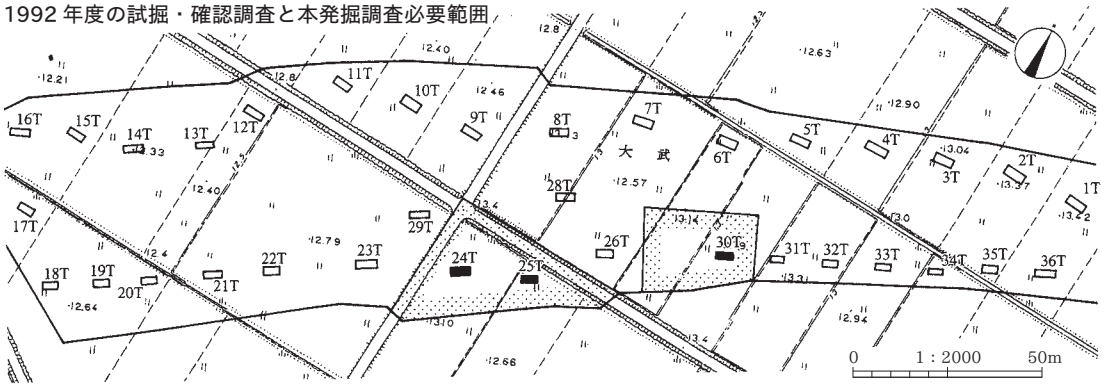
これを受け、建設省・県教委・事業団は協議を行い、1995 年度に大武遺跡の範囲確定のための確認調査を再度行うこととなった。また縄文時代前期の遺物包含層については、1995・1996 年度に調査を行い、1995 年度のうちに縄文時代前期の遺物包含層下位の遺物包含層の有無を確認することとした。

1995 年度：5 月 8 ～ 17 日・9 月 11 ～ 24・27・28 日に本発掘調査と並行して、確認調査を行った。調査の方法は 1992・1994 年度の試掘確認調査・予備調査と同様であるが、1994 年度の本発掘調査で中世と古墳時代前期の水田跡が検出されたことから、主要な土層はプラント・オパール分析用の土壌サンプルを採取し、民間の分析機関に分析を依頼した。調査面積は 500m^2 で、調査対象面積 12,800m^2 に対

する比率は約 4%である。調査の結果 1a・1b・1c・2a・4d・6・9・10 トレンチから古墳時代・中世の遺物が出土し、7～12 トレンチでは耕作の結果と考える土層の堆積状況を確認した。また、広範囲にわたって稲のプラント・オパールを検出した。この結果、対象範囲全域が本調査必要範囲となった。また、新たに本発掘調査必要範囲となった地点については、下位に縄文時代の遺物包含層が存在する可能性があるため、弥生時代までの調査がある程度進展したのち、より下位の試掘･確認調査を行う必要があるとした（第 2 図③）。12 月 4･5 日に縄文時代の遺物包含層（XV 層）の下位の遺物包含層の有無を確認する調査を行い、XV 層の下位には遺物包含層が無いことを確認した。

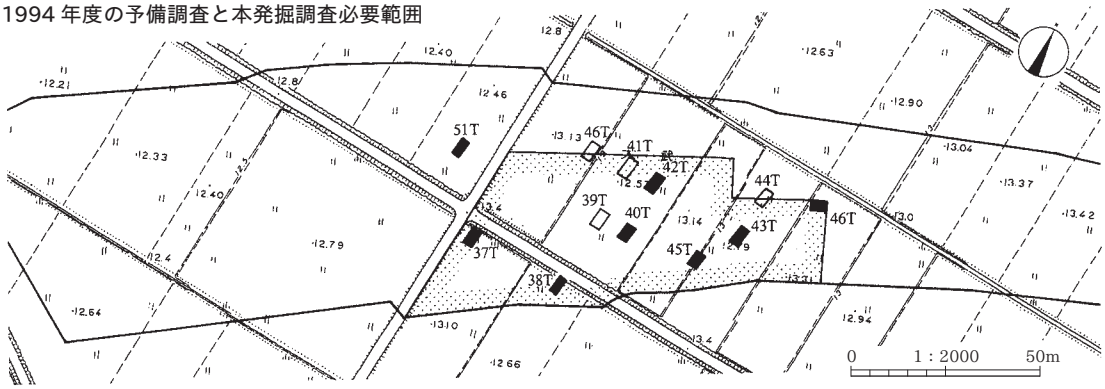
工法変更：1995 年までの調査結果を踏まえ建設省・県教委・事業団は協議を重ね、今後の調査面積や埋文事業団の調査体制、現国道 116 号の交通環境を考慮し、道路建設の工法が変更された。工法変更の

① 1992 年度の試掘・確認調査と本発掘調査必要範囲

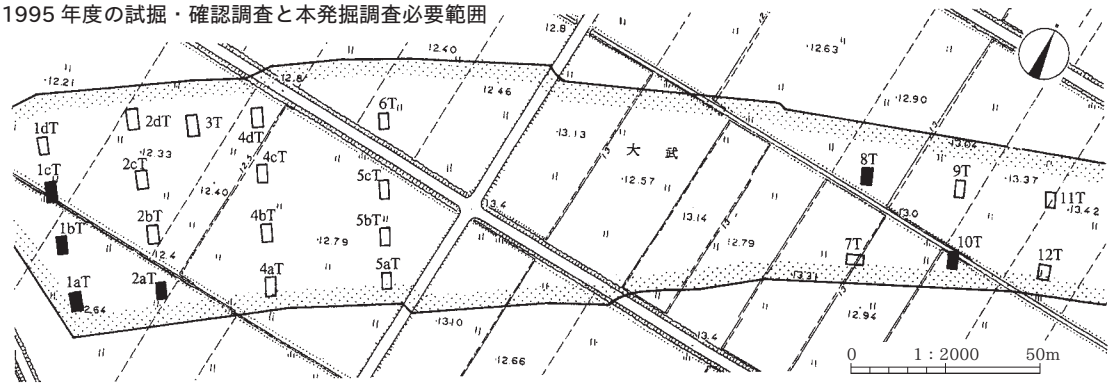


□ 遺物が出土していないトレンチ　■ 遺物が出土したトレンチ

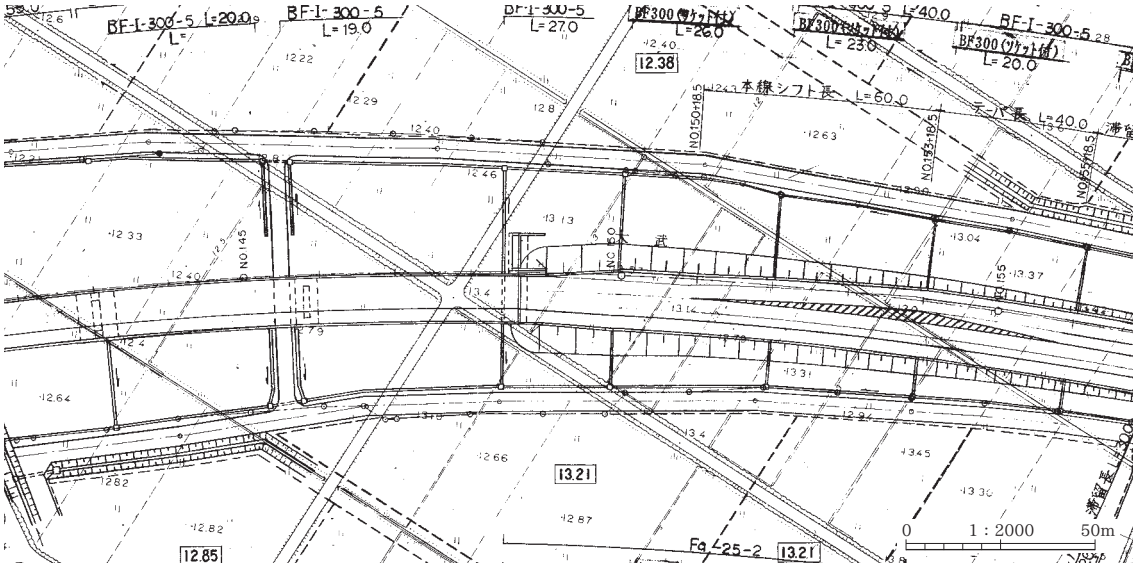
② 1994 年度の予備調査と本発掘調査必要範囲



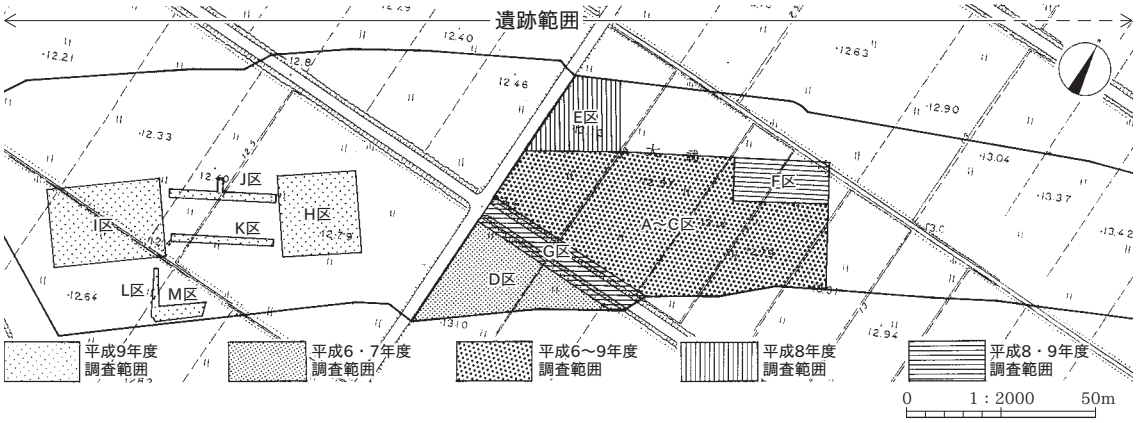
③ 1995 年度の試掘・確認調査と本発掘調査必要範囲



第 2 図　試掘確認調査・予備調査のトレンチと本発掘調査必要範囲の変遷
（建設省北陸地方建設局　長岡国道事務所作成　昭和 51 年　1：1000）



第３図　工法変更後の法線図



第４図　各年度の調査範囲
（建設省北陸地方建設局　長岡国道事務所作成　昭和 51 年　1：1000）

内容は、センター杭 No.149 以西を高架、これより東側を低盛土とし、地盤改良範囲も最小限にとどめるとするものである。本発掘調査範囲は、とりあえず１期線のみとし、地盤改良部分については全面調査を行うが、高架部分は橋脚および橋台部分のみを調査、低盛土部分は１期線を暫定的に開通させ、２期線の拡幅が近づいた段階でバイパスを切り回し、１・２期線分を交互に調査するというものである。

C　本発掘調査の経過

1994 年度　４月 13 日から予備調査を開始し、５月 11 日よりＡ～Ｄ区の本発掘調査を開始した。Ａ～Ｃ区は中世の遺物包含層（Ⅳ層）・遺構の調査を終了し、Ⅷ層上面で、古墳時代初頭の水田・水路などを検出し、調査を終了した。Ｄ区は古墳時代（Ｂ～Ｄ層）・弥生時代中期（Ｆ層）の調査を終了し、Ｆ層の下位から縄文時代前期を中心とする遺物包含層を検出し、12 月 16 日に撤収した。

1995 年度　４月 10 日からＡ～Ｄ区の本発掘調査を開始した。Ａ～Ｃ区は昨年度検出した古墳時代初頭の水田・水路などの調査を行い、６月 27 日に航空写真撮影、７月９日に現地説明会を実施した。調査の進展に伴い、弥生時代中期の遺物包含層相当層（Ⅸa ～ c 層）の下位に厚いところで約 1m の間層（Ⅹ層）

を挟んで縄文時代後期～晩期の遺物包含層（XII・XIII層）があり、その下位には厚いところで約120cmの間層（XIV層）と縄文時代前期の遺物包含層（XV層）があることがわかり、D区との層序の対応が概ね明らかになった。また、掘削深度が深くなるのに従い、10月中頃から調査区内の湧水と地山の崩落が著しくなり、11月5日にはA区とD区の間の農道が一部崩落した。応急措置として崩落部分に山砂を置き、長さ6m・Ⅲ型の矢板を打設した。XV層の掘削は11月10日から開始した。11月19日に2回目の現地説明会を行った。D区は調査を終了し、A～C区はXV層より下位に遺物包含層が無いことを確認し、12月8日に撤収した。

1996年度　4月15日より本発掘調査を開始した。調査範囲は、1995年の工法変更を受け、橋台の一部となる地点（E区）、従来の調査区以外で地盤改良が及ぶ地点（F区）、1995年に一部が崩落した農道部分（G区）である。XI層の掘削終了後、湧水と地山の崩落が著しくなったため、9月26日～10月11日の間、A～G区に、長さ8m・Ⅲ型の矢板を打設した。11月24日に現地説明会を行った。E区は調査終了、A～C・F・G区はXV層の一部を残し、11月26日に撤収した。

1997年度　4月14日より本発掘調査を開始した。A～C・F・G区のXV層の調査を行い、6月24日に航空写真撮影、6月28日に現地説明会を行った。8月5日には、新潟県立歴史博物館の建設を進めている新潟県企画調整部企画課が費用を負担し、F区で検出されたクルミ種子が詰まったピット（SK97）を移築し、A～C・F・G区の調査を終了した。遺跡西側の橋脚部分（H・I区）の調査は、橋脚の位置が決定した7月2日から調査を開始した。掘削深度が深くなったI地区は10月10日に矢板を打設し、11月28日にすべての現地調査を終了し撤収した。

調査の体制は以下のとおりである。

［試掘確認調査］

調査期間	1993（平成5）年2月1日・2日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　本間栄三郎）
調　　査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	藍原　直木（事務局長）
管　　理	渡辺　耕吉（総務課長）
庶　　務	藤田　守彦（総務課　主事）
調査指導	茂田井信彦（調査課長）
調査担当	藤巻　正信（調査課　第二係長）
調査職員	遠藤慎之介（研修生）

［本発掘調査］
1994（平成6）年度

調査期間	4月13日～12月16日（本発掘調査）
	12月17日～3月31日（整理作業）
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　本間栄三郎）
調　　査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	藍原　直木（事務局長）
管　　理	渡辺　耕吉（総務課長）
庶　　務	泉田　　誠（総務課　主事）
調査総括	茂田井信彦（調査課長）
調査指導	寺﨑　裕助（調査課　第二係長）
調査担当	塩路　真澄（調査課　文化財調査員）
調査職員	永井　　学（調査課　主任調査員）
	中江　茂雄（調査課　主任調査員）
	阿部　雄生（調査課　文化財調査員）
	滝沢　規朗（調査課　文化財調査員）
	木村　孝一（調査課　嘱託員）
	大杉　真実（調査課　嘱託員）
	内山　良典（調査課　嘱託員）
	山下　　健（調査課　嘱託員）

1995（平成7）年度

調査期間	4月10日～12月8日（本発掘調査）
	12月9日～3月31日（整理作業）
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　平野清明）
調　　査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	藍原　直木（事務局長）
管　　理	山上　利雄（総務課長）
庶　　務	泉田　　誠（総務課　主事）
調査総括	茂田井信彦（調査課長）
調査指導	寺﨑　裕助（調査課　第二係長）
調査担当	永井　　学（調査課　主任調査員）
調査職員	春日　真実（調査課　文化財調査員）
	木村　孝一（調査課　嘱託員）

1996（平成 8）年度

調査期間	4 月 15 日～11 月 26 日（本発掘調査）
	11 月 27 日～ 3 月 31 日（整理作業）
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　平野清明）
調　　査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	藍原　直木（事務局長）
管　　理	山上　利雄（総務課長）
庶　　務	泉田　　誠（総務課　主事）
調査総括	亀井　　功（調査課長）
調査指導	寺﨑　裕助（調査課　第二係長）
調査担当	春日　真実（調査課　文化財調査員）
調査職員	高橋　洋一（調査課　主任調査員）
	木村　孝一（調査課　嘱託員）
支　　援	株式会社 吉田建設

1997（平成 9）年度

調査期間	4 月 14 日～11 月 28 日（本発掘調査）
	11 月 29 日～ 3 月 31 日（整理作業）
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　平野清明）
調　　査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	須田　益輝（事務局長）
管　　理	若槻　勝則（総務課長）
庶　　務	泉田　　誠（総務課　主事）
調査総括	亀井　　功（調査課長）
調査指導	寺﨑　裕助（調査課　第二係長）
調査担当	春日　真実（調査課　文化財調査員）
調査職員	渡邉　尚紀（調査課　主任調査員）
	白井　利夫（調査課　嘱託員）
支　　援	株式会社 吉田建設

D　整　理　作　業

1994 ～ 1997 年は、現地作業と並行して水洗・注記等の作業を行った。1998・1999 年度は『大武遺跡（中世編）』の報告書作成作業を行うとともに、古墳時代の土器の接合・復元を一部行った。本報告書作成にかかる本格的な作業は 2008 年・2011・2012 年度にかけて実施した。2008 年度は木製品実測・写真撮影と水洗した土壌内容物の抽出、2011・2012 年度は接合・復元・実測・写真撮影・図版作成・原稿執筆・編集など、2013 年度に印刷・刊行した。

整理作業の体制

2008（平成 20）年度

整理期間	4 月 1 日～ 3 月 31 日
整理主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）
整理実施機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	木村　正昭（事務局長）
管　　理	斎藤　　栄（総務課長）
庶　　務	長谷川　靖（総務課　班長）
整理総括	藤巻　正信（調査課長）
整理担当	高橋　　保（調査課　課長代理）
整　　理	間　栄子・小林智美・田口和子・ 東條シゲ子・渡辺和子・渡辺知子 （調査課　嘱託員）

2012（平成 24）年度

整理期間	4 月 1 日～ 3 月 31 日
整理主体	新潟県教育委員会（教育長　高井盛雄）
整理実施機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	木村　正昭（事務局長）
管　　理	熊倉　宏二（総務課長）
庶　　務	伊藤　　忍（総務課　班長）
整理総括	北村　　亮（調査課長）
整理担当	春日　真実（調査課　課長代理）
整理職員	坂上　有紀（調査課　嘱託員）
整　　理	小倉睦子・小林智恵子・小林智美・ 田口和子･鶴田須美子（調査課　嘱託員）

2011（平成 23）年度

整理期間	4 月 1 日～ 3 月 31 日
整理主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）
整理実施機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	木村　正昭（事務局長）
管　　理	今井　　亘（総務課長）
庶　　務	伊藤　　忍（総務課　班長）
整理総括	北村　　亮（調査課長）
整理担当	春日　真実（調査課　課長代理）
整理職員	坂上　有紀（調査課　嘱託員）
整　　理	小倉睦子・小林智恵子・小林智美・ 田口和子･鶴田須美子（調査課　嘱託員）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地 理 的 環 境

遺跡の位置（第５図）：大武遺跡は長岡市（旧和島村）島崎字大武 1910 他に所在し、丘陵裾付近の沖積地に立地する。遺跡が道路法線となる以前の旧状は水田であった。新潟県のほぼ中央、中越地方の海岸寄りに位置しており、北緯 37 度 35 分 36 秒、東経 138 度 46 分 21 秒、標高は 12 ～ 13m である。

地形概観（第５図）：遺跡が所在する長岡市北西部は、長野県との県境付近から信濃川の左岸に沿って、南南西 - 北北東に伸びる東頸城丘陵の北東端付近にあたり、その先端は弥彦山・角田山に連なる。東頸城丘陵が示す南南西 - 北北東の方向性は、新潟県の中・下越地方の丘陵・平野に特徴的であることから「新潟方向」と呼ばれるが､これは第三紀から第四紀前期にかけて堆積した地層の褶曲軸の方向が原因である。

東山丘陵は、出雲崎町沢田付近で東西二つの丘陵に分岐する。大武遺跡の周辺では幅約 2km の平坦な沖積低地を挟んで２つの丘陵が対峙する。沖積低地では現在、島崎川・郷本川・新島崎川の３本の川が流れ、それぞれ日本海に注いでいる。しかし明治から 1922（大正 11）年に通水した大河津分水路開削以前は、一本の河川：旧島崎川となり、信濃川の分流である西川と合流していた。

遺跡に隣接する郷本川は 1774（安永３）年に工事が開始され、1873（明治６）年に完成、大河津分水路完成に伴い改修され、ほぼ現在の形となった人工的な放水路である。

地　層：遺跡周辺の地層の分布を見ると島崎川の流れる沖積地を挟んで、対照的な配置が見られる。外側から西山層・灰爪層・魚沼層がそれぞれ分布しており、これらの地層が丘陵を構成している。各地層は地層中に含まれる貝化石・珪藻化石・火山灰などから、地層の堆積した年代と環境が明らかになってきており、西山層は第三紀鮮新世の海中、灰爪層は第四紀更新世前期頃の浅海、魚沼層は第四紀更新世前期から中期にかけて浅海から内湾そして潟へと変化していく過程で堆積した土層とされる［藤田・長谷川 1996］。大武遺跡の基盤となる土層は、魚沼層と考えられる。

気　象：遺跡周辺は海岸に近く、三方を丘陵に囲まれるために、年間を通じての気候変化がそれほど激しくない、新潟県内では恵まれた地域といえる。夏は日中海風が入りやすく、比較的涼しい日が多い。冬は比較的温暖で、降雪量も少なく、北部の平野部で積雪が 30cm を超えることは近年ではほとんどない。冬期に比較的温暖なのは上記の理由のほかに対馬海流の影響も大きい。積雪も県内では少ない地域で、30cm を越える日は稀である。

2　周 辺 の 遺 跡

旧島崎川（島崎川・郷本川・新島崎川）流域の遺跡について概観する。当地域は弥生時代から古代の遺跡が多く確認でき、新潟県内でも有数の遺跡密集地帯となっている（第７図・第２表）。

縄文時代：大武遺跡で最も多く遺物が出土している縄文時代前期の遺跡は少ない。有馬崎遺跡（1）・五分一城跡（16）、奈良崎遺跡（22）からは縄文時代前期の土器が出土している。また潟端遺跡（10）も採集された石匙の形態から考え、縄文時代前期の遺跡である可能性が高い。ただし、いずれの遺跡も遺物の

第５図　遺跡の位置（1）

［渡邊ほか 2010］より転載・改変（国土地理院［長岡］1：200,000 原図）

出土量は少ない。北野丸山遺跡（35）からは縄文時代中期前葉を中心とする時期の土器・石器が多く出土している。

中期以前の遺跡は少ないが、後期以降遺跡は増加する。十二遺跡（42）は後期前葉を中心とする土器・石器が多数出土した。幕島遺跡（3）は丘陵裾付近に位置する遺跡で、縄文時代後期～晩期の土器が層位的に出土したほか動植物遺体も出土している。下桐松葉遺跡（14）は縄文時代晩期を中心とする土器・土製品・石器・玉類などが出土している。姥ヶ入製鉄遺跡（24）は丘陵にはさまれた谷から縄文時代後期～

第６図　遺跡の位置（2）
（和島村　平成５年作成「和島村地図」）

晩期の土器が出土した。寺前遺跡（48）も丘陵にはさまれた谷部に立地する遺跡で、縄文時代後期～晩期の土器が出土し、木組み遺構が検出された。乙茂遺跡（47）は寺前遺跡の居住域と推測されている。

弥生時代：弥生時代前期の遺跡は現在のところ未確認で、中期の遺跡も少ない。土手上遺跡（13）からは、1点だけだが中期前葉頃の土器が出土している。諏訪田遺跡（6）は中期中葉から後葉頃の土器・玉作関連遺物が出土し、土壙墓が検出された。松ノ脇遺跡（33）は台地上に位置する遺跡で、北陸系の中期後半の土器と東北系の後期前半の土器が出土した。

弥生時代後期は遺跡数が増加する。奈良崎遺跡（22）、上桐城跡（31）、赤坂遺跡（32）、北野大平遺跡（34）などは平地との比高差が15m以上の台地・丘陵上に位置する遺跡で、高地性集落と考える。このうち奈良崎遺跡からは弥生時代後期の竪穴建物が2基（以上）検出されている。大慶寺御経塚（45）からは後期前半の周溝付竪穴建物を1基検出した。

屋敷塚1・2号墳（18・19）は当期の台状墓であり、このうち屋敷塚1号墳は発掘調査が行われ、10.5×8.7mの方形周溝墓が検出された。長4.1m、幅1.9m、深1.0mの巨大な墓坑の形状から丹後や出雲との関連が指摘されている［八重樫2004］。奈良崎遺跡（22）ではL字状の溝を2条伴う一辺約12mの特異な形態の方形周溝墓を検出した。

古墳時代：古墳時代早期から前期の古墳として下小島谷古墳群（41、前方後方形2基・方形1基）、大久

番号	遺跡名	種別	市町	所在地	時代	文献
1	有馬崎遺跡	遺物包蔵地	燕市	国上字長崎	縄文・平安	分水町2004
2	居下遺跡	遺物包蔵地	燕市	国上字居下	平安	分水町2004
3	幕島遺跡	遺物包蔵地	燕市／長岡市	渡部字幕島ほか	縄文	分水町2004
4	京田三の割遺跡	遺物包蔵地	長岡市	寺泊竹森字京田	古代	寺泊町1991
5	京田寄割遺跡	遺物包蔵地	長岡市	寺泊竹森字京田	古代	寺泊町1991
6	諏訪田遺跡	遺物包蔵地	長岡市	寺泊竹森字諏訪田	弥生･古墳･古代	寺泊町1991
7	横滝山廃寺跡	包蔵地・寺院跡	長岡市	寺泊竹森字横滝	縄文～古代	寺泊町1991
8	庚塚古墳	古墳	長岡市	寺泊竹森字横滝	古墳～古代	寺泊町1991
9	横滝山舞台塚古墳	古墳	長岡市	寺泊竹森字横滝	古墳～古代	寺泊町1991
10	潟端遺跡	遺物包蔵地	長岡市	寺泊北曽根字大溜	縄文	寺泊町1991
11	宝崎遺跡	遺物包蔵地	燕市／長岡市	渡部字宝崎ほか	縄文・古代	寺泊町1991
12	本山舞台島遺跡	遺物包蔵地	長岡市	寺泊本山字舞台島	弥生	寺泊町1991
13	土手上遺跡	遺物包蔵地	長岡市	寺泊下桐字土手上	弥生・古墳	寺村ほか1999
14	下桐松葉遺跡	遺物包蔵地	長岡市	寺泊下桐字松葉	縄文	寺泊町1991
15	五分一稲葉遺跡	遺物包蔵地	長岡市	寺泊五分一字稲葉	縄文･古墳･古代	寺泊町1991
16	五分一城跡	遺物包蔵地	長岡市	寺泊五分一字大谷割	縄文・室町～戦国	寺泊町1991
17	大久保古墳群	古墳・墳墓	長岡市	寺泊町軽井字大窪	古墳	寺泊町1991
18	屋敷塚1号墳	墳墓	長岡市	寺泊入軽井沢字屋敷	弥生	八重樫2004
19	屋敷塚2号墳	墳墓	長岡市	寺泊入軽井沢字屋敷	弥生	八重樫2004
20	夏戸城跡	城館跡	長岡市	寺泊夏戸字城の腰	中世	寺泊町1991
21	**大武遺跡**	遺物包蔵地	長岡市	島崎字大武	縄文～中世	本書
22	奈良崎城跡	城館跡	長岡市	島崎字奈良崎	南北朝～戦国	春日ほか2002
23	奈良崎遺跡	遺物包蔵地	長岡市	島崎字奈良崎・小谷	縄文～中世	春日ほか2002
24	姥ヶ入製鉄遺跡	製鉄跡・墳墓	長岡市	島崎字姥ヶ入	縄文・中世	渡邊ほか2010
25	姥ヶ入南遺跡	包蔵地・墳墓	長岡市	島崎字姥ヶ入・立野	弥生・古代	渡邊ほか2010
26	妙満寺跡	寺院跡	長岡市	島崎字立野	古代～近世	丸山2003
27	立野大谷製鉄遺跡	製鉄跡	長岡市	島崎字立野	中世	渡邊ほか2010
28	山田郷内遺跡	集落跡	長岡市	山田郷内	古墳～中世	丸山ほか2007
29	八幡林遺跡	包蔵地・官衙	長岡市	島崎	旧石器～中世	田中ほか2005
30	門新遺跡	集落跡	長岡市	上桐字門新	古墳～古代	田中ほか1995
31	上桐城跡	城館跡	長岡市	上桐字城山	弥生・中世	和島村1996
32	赤坂遺跡	遺物包蔵地	長岡市	上桐字赤坂	弥生	和島村1996
33	松ノ脇遺跡	遺物包蔵地	長岡市	三瀬ヶ谷字松ノ脇	弥生～古代	丸山1998
34	北野大平遺跡	遺物包蔵地	長岡市	北野字大平	弥生・古代	和島村1996
35	北野丸山遺跡	遺物包蔵地	長岡市	北野字上田・丸山	縄文～古代	田中2003
36	川東遺跡	遺物包蔵地	長岡市	島崎字川東	弥生～中世	山賀2012
37	浦反甫東遺跡	遺物包蔵地	長岡市	島崎	古代	丸山2013
38	浦反甫西遺跡	遺物包蔵地	長岡市	島崎	古代	
39	下ノ西遺跡	包蔵地・官衙	長岡市	小島谷字下の西	縄文～中世	和島村1996
40	北辰中学校遺跡	遺物包蔵地	長岡市	小島谷	古代	和島村1996
41	下小島谷古墳群	古墳・墳墓	長岡市	下小島谷	古墳	和島村1996
42	十二遺跡	遺物包蔵地	長岡市	小島谷字十二	縄文	和島村1996
44	城の丘遺跡	遺物包蔵地	長岡市	落水城の丘	平安	和島村1996
43	村岡城跡	城館跡	長岡市	落水字川城の腰ほか	中世	和島村1996
45	大慶寺御経塚	塚・包蔵地	出雲崎町	大寺字後山	弥生･古代･江戸	小田ほか2006
46	梯子谷窯跡	窯跡・包蔵地	出雲崎町	乙茂字金谷川内	古代	春日ほか2001
47	乙茂遺跡	遺物包蔵地	出雲崎町	乙茂字稲葉・石場坂	縄文	出雲崎町1988
48	寺前遺跡	包蔵地・集落	出雲崎町	乙茂字寺前	縄文～中世	高橋ほか2008
49	本与板城跡	城館跡	長岡市	与板町本与板字萩岩井	中世	与板町1999

第2表　周辺の主な遺跡

第７図　周辺の遺跡

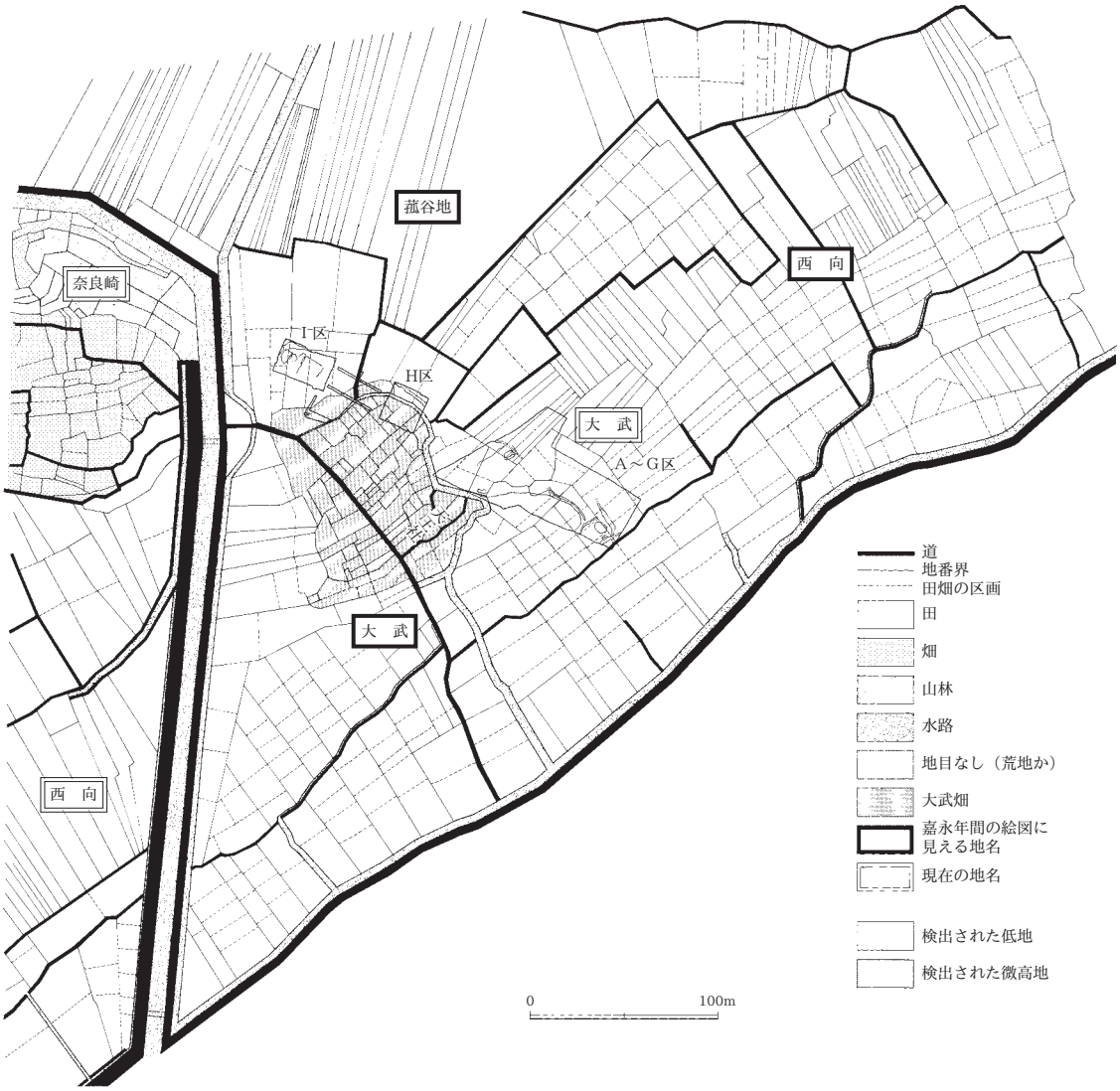
（国土地理院　1：50,000　平成 19 年 9 月 1 日「出雲崎」、平成 20 年 4 月 1 日「三条」）

保古墳群（17、前方後方形２基・方形３基）、姥ヶ入南遺跡（25、円形１基）、奈良崎遺跡（22、円形２基、方形１基）などがある。いずれも小規模だが、比較的多くの古墳が確認できる。中期の古墳は未確認だが、後期から７世紀頃の古墳として、夷塚古墳（8）、横滝山舞台塚古墳（9）が確認できる。

集落遺跡は、前期から中期の土器が出土し、中期の水田跡が検出された門新遺跡（30）、早期～前期・後期の土器が出土し竪穴建物・土坑などを検出した奈良崎遺跡（22）、前期の土器が出土した山田郷内遺跡（28）、中期の土師器・須恵器が出土した五分一稲葉遺跡（15）、後期の土器が出土した土手上遺跡（13）などがある。

3　遺跡周辺の土地更生図

第８図に調査区周辺の明治 26 年の土地更生図を示した。調査区南側に「大武畑」と呼ばれる微高地（埋没した丘陵の一部？）があることがわかる。



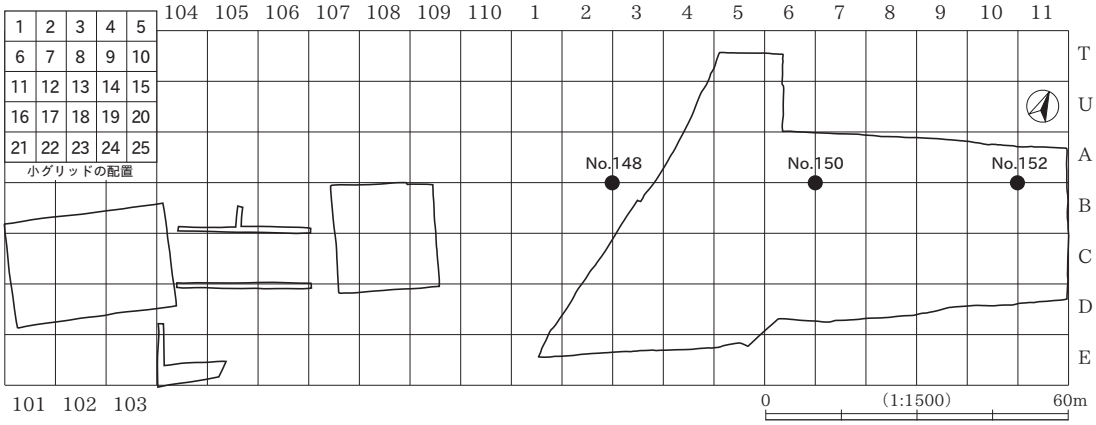
第８図　明治 26 年の土地更正図と大武遺跡の調査区（［渡邊 2000］より転載）

第Ⅲ章　調 査 の 概 要

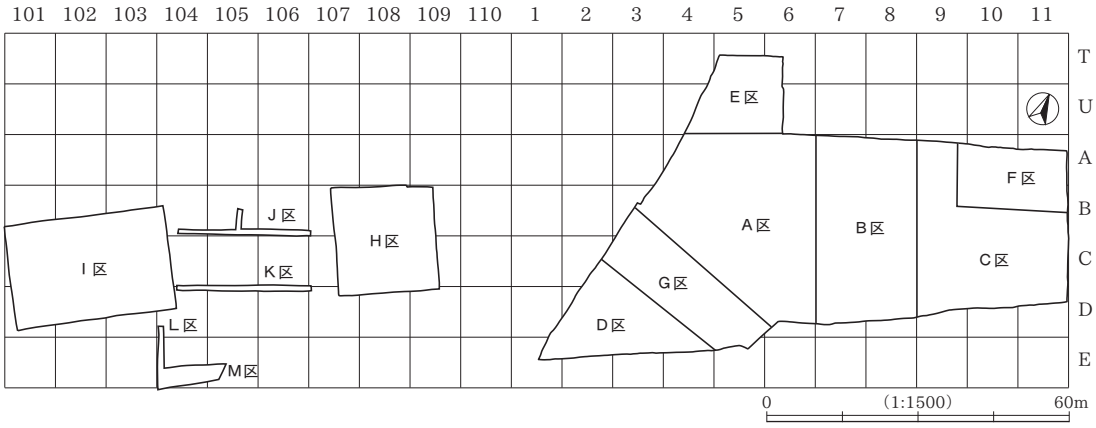
1　グリッドの設定

大武遺跡が位置する和島バイパスの線形は曲線（R=1000m）のため、和島バイパスのセンター杭 No.148（旧測地系 X : 176482.452、Y : 24295.422（3B））と No.152（旧測地系 X : 176513.452、Y : 24368.172（11B））を結んだラインを主軸（東西軸）とした。これに直行する方向は No.150（旧測地系 X : 176497.952、Y : 24332.297（7B））の位置を基準とし、南北軸を設定した。南北軸は真北から 23.5 度東偏している。

グリッドは大小 2 種あり、大グリッドは 10m 四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを 2m 四方に 25 分割したものである。大グリッドは西から東に向かって 1･2･3･4････、北から南に向かって A･B･C･D・E・F としたが、平成 8・9 年度に調査した調査区は、1 より西側、A より北側の場所を含むため、1 以西については 100～110、A 以北については T・U グリッドを追加した。小グリッドは 1～25 の算用数字で示し、北西隅が 1、北東隅が 5、南西隅が 21、南東隅が 25 に配置した。グリッド名は 3B15 のように呼称した（第 9 図）。



第 9 図　グリッドの設定



第 10 図　地区の名称

2 地　区　名

大武遺跡は平成６～９年にかけて４年間本発掘調査を行い、その間調査範囲や工事内容が変更され、複雑な調査行程を経た。現地では調査行程や調査地点を考慮し、Ａ～Ｍ区の 12 地区に区分した。以下の記述では位置を表記する場合に、グリッド名の他に第 10 図に示した地区名を使用する場合がある。

3 基 本 層 序

調査地点は埋没谷・埋没丘陵が存在し、層序は地点によって大きく異なる。Ａ～Ｇ区、Ｈ区、Ｉ区の３地点の基本層序を中心に記述する。

Ａ～Ｇ区（図版７～11）

調査区を南西から北東に向かって谷が存在する（図版 9）。谷底部の標高は、調査区内の最も低いところで約 5.6m である。なお、調査区周辺の標高は 12.5～13m であった。

谷底付近の土層堆積状況は、16 層に大別できる。ピート層と青灰色シルト・砂層の互層であるが、これらの中に褐色や灰色の炭化物を含む土壌化した土層が介在する（図版 10・11）。

Ⅰ～Ⅲb 層は現代から中世末までの土層である。Ⅳa 層は青灰色粘土層で炭化物をあまり含まない土層である。出土遺物も少ない。中世までの土層と考えるが、詳細は不明。

Ⅳb 層は灰色の粘土層で、炭化物を定量含む。Ａ～Ｇ区に広く確認でき、14～15 世紀の土器・陶磁器や木製品が比較的多く出土した。中位付近に砂層が存在する地点もある。他に 14～15 世紀の遺物を含む土層として、4・5C グリッド（以下、「グリッド」省略）に部分的に存在する黒色土①～⑤などがある。

Ⅴ層・Ⅵa 層は黒色ないしは黒褐色のピート層であり、谷部を中心に広く分布する。色調はⅤ層に比べⅥa 層がやや明るい。9 世紀の土師器・須恵器が少量、木製品が定量出土した。

Ⅵb 層・Ⅵc 層は古墳時代後期の土師器・須恵器が定量出土する。Ⅵb 層は灰色の粘土層で炭化物を定量含む。谷部を中心に広く分布する。Ⅵc 層は黄褐色のシルト層で、9・10C を中心に分布する。

Ⅶ層は黒色のピート層である。古墳時代早期～前期の土器が出土するが量は少ない。21 層・23 層はⅦ層の下位に位置する灰色の粘土層で炭化物を多く含む。弥生時代後期と古墳時代早・前期の土器が多量に出土した。21 層は 4B、5・6C、23 層は８～11C を中心に分布する。本来は古墳時代早期～前期の土層で、弥生時代後期の土器は下位の⑥層からの混入や、⑥層と 21・23 層の誤認によるものと考えている。

Ⅷ層は２層に細分した。Ⅷa 層は暗青灰色粘土で炭化物を少量含む。Ⅷb 層上面で検出された水田跡の畦畔や床土となる土層で弥生時代後期から古墳時代前期の土器が少量出土する。21・23 層と近似した時期の土層と考える。Ⅷb 層は青灰色シルトで古墳時代早・前期の土器が出土したが量は少ない。

Ⅸ層は３層、Ⅹ・ⅩⅠ層は２層に細分した。Ⅸa・Ⅸc・ⅩⅠa・ⅩⅠb 層は黒色ピート層、Ⅸb・Ⅹa・Ⅹb 層は青灰色シルト層である。いずれも谷部に広く分布する土層であり、遺物の出土量は少ない。Ⅹa 層からは海水域に生息する珪藻が検出されており［古環境研究所 2000］、形成要因が興味深い土層である。

Ｄ区・Ｇ区では、21 層の下位・Ⅹa 層の上位でＦ層・灰色粘土層を検出した。ともに弥生時代中期の土器・石器を多量に含む。

ⅩⅠ層は３層に細分した。ⅩⅠa・ⅩⅠc 層は黒色ないしは黒褐色のピート層、ⅩⅠb 層は青灰色シルト

層である。A ～ C･E･F 区で確認できる。遺物の出土は少なく、縄文時代晩期中葉の土器が少量出土した。

XⅡ層は４層に細分した。XⅡa 層は灰色粘土層で炭化物を少量含む。縄文時代晩期中葉（大洞 C1 式など）の土器・石器が少量出土した。XⅡb 層も灰色の粘土層であるがXⅡa 層よりもやや暗く、炭化物を多く含む。XⅡa 層同様縄文時代晩期前葉（大洞 C1 式など）の土器・石器が出土した。XⅡc 層・XⅡd 層はE 区・G 区周辺で確認できる土層である。XⅡc 層は灰色の粘土層で炭化物を定量含む。XⅡb 層に比べると色調はやや明るく炭化物は少ない。XⅡb 層と同様に縄文時代晩期中葉の土器・石器が出土した。

XⅡc・XⅡd 層はG 区で部分的に確認される土層で、XⅡc 層は黒褐色のピート層、XⅡd 層は青灰色の粘土層で、炭化物をほとんど含まず土器・石器の出土量も少ない。

XⅢ層は４層に細分した。XⅢa 層は黒色のピート層で、谷部に広く確認できる。下部が黒味が強くXⅢa' 層・XⅢa2 層という層名で取り上げた遺物もある。縄文時代晩期前葉（大洞 B・BC 式など）の土器・石器が出土した。XⅢb 層は褐色の粘土層で谷部に広く分布する。縄文時代後期後様(瘤付土器など)の土器・石器が定量出土した。XⅢc 層・XⅢd 層は 6AB、7・8A など谷底付近に部分的に確認できた土層である。XⅢc 層は青灰色粘土、XⅢd 層は黒色ピート層で２層とも炭化物をあまり含まず、遺物は少ない。XⅢe 層は褐色の粘土層で炭化物を定量含む。縄文時代後期中葉（加曽利 B 式など）の土器・石器が出土した。

XⅣ層は青灰色シルト層である。下部に青灰色の砂礫層を含む地点もあり、上部のシルト層から出土した遺物をXⅣa 層、下部の砂礫層から出土した遺物をXⅣb 層として取り上げたものもある。縄文時代前期前葉（布目式・新谷式など）の土器・石器が定量出土したが、これは本来XⅤc 層に含まれていた遺物で、XⅣ層そのものは縄文時代中期末～後期中葉の間の比較的短い期間に堆積した土層と考えている。

XⅤ層は８層に細分した。XⅤc 層以外は、谷底付近に部分的に確認できる土層である。XⅤa 層は黒色のピート層で縄文時代中期後葉（大木 9a・9b 式など）の土器・石器が出土した。XⅤb 層は褐色の砂礫層で縄文時代前期前葉の土器・石器が出土したが、これは本来XⅤc 層に含まれていた遺物で、XⅤb 層そのものは縄文時代前期前葉以降～中期の間の比較的短い期間に堆積した土層と考えている。XⅤc 層は褐色の粘土層で炭化物を多く含む。縄文時代前期前葉の土器（布目式・新谷式など）・石器が多量に出土した。1996 年９月の矢板打設後に調査区が拡張し、より深い地点の調査が可能となった後にXⅤa 層・XⅤb 層の認識したため、XⅤc 層の遺物の多くは「XⅤ層」として取り上げた。XⅤd 層は黒褐色の粘土層で炭化物を定量含む。縄文時代前期前葉の土器（布目式・新谷式など）・石器が定量に出土した。XⅤe ～XⅤh 層はXⅤd 層の下位に位置する土層で遺物は出土していない。

XⅥ層は遺跡の基盤となる土層（いわゆる地山）で、黄褐色の粘土と砂礫の互層である。東側の丘陵に位置する奈良崎遺跡の地山と同一の土層で、魚沼層群の新相に対応できるものと考える。

H　区（図版 7）

調査区の地形は南から北に向かって緩やかに傾斜し、北端付近で急激に 50 ～ 60cm 落ち込む。最も低い地点の標高は 11.2m であり、A ～ G 区・I 区に比べかなり高い。調査区周辺の標高は 12.79m である。A ～ G 区との土層の対比は難しいが、３～５層は４・5C に部分的に存在する黒色土①～⑤・灰色土①～③などに対応する可能性が高いと考えている。

H 区では、A ～ G 区のⅤa 層～XⅤh 層に対応するは土層は確認できなかった。XⅥ層 (6) はA ～ G 区同様、遺跡の基盤となる土層（いわゆる地山）である。黄褐色の粘土と砂礫の互層で、魚沼層群の新相に対応できるものと考える。

Ⅰ 区（図版 8）

調査区の地形は南東から北西に向かって緩やかに傾斜し、最も低い地点の標高は 7.3m、調査区周辺の現地表面は 12.3 ～ 12.6m である。基本層序は粘土層とピート層の互層である。A ～ G 区と異なる。

Ⅲb 層は黄褐色のピート層で、近世の土層と考える。Ⅳa 層は青灰色粘土であり、中世の土層と考えるが、遺物の出土が少ないため詳細は不明。Ⅳb 層は黄灰色粘土層で炭化物を少量含む。中世の遺物が散発的に出土する。土質や色調、出土遺物からⅠ区のⅣb 層はA ～ G 区のⅣb 層と一連の土層の可能性が高い。中位付近に灰白色のシルト層が薄く堆積しており、これを境にⅣb1 層とⅣb2 層に細分した。Ⅳb1 層とⅣb2 層の色調・土質・混入物の状況はほぼ同じである。

Ⅴa 層～Ⅵ層はピート層で、Ⅴa 層から下位の層ほど色調が明るく、粘土質に近くなる。遺物の出土は少ない。Ⅶ層は調査区南東コーナー付近では炭化物を定量含む褐色の粘土であるが、北西側に行くに従い土質が変化しピート層となる。古墳時代早期～前期の土器が一定量出土した。土質や色調、出土遺物からⅠ区のⅦ層はA ～ G 区のⅦ～Ⅷ層と一連の土層と考える。

Ⅸa 層～Ⅹb 層からは遺物がほとんど出土していない。Ⅸa 層・Ⅸb 層はピート層、Ⅹa 層・Ⅹb 層は青灰色粘土層である。

ⅩⅠ層はピート層で、下位ほど色調が明るく、粘土質に近くなる。縄文時代晩期中葉（大洞 C1 式など）が出土した。縄文時代晩期中葉の土器は、A ～ G 区ではⅩⅡb 層を中心に出土しており、Ⅰ区でⅩⅠ層とした土層の一部はA ～ G 区のⅩⅡb 層に対応する可能性がある。

ⅩⅡ層は淡褐色粘土層、ⅩⅢ層は黒褐色ピート層、ⅩⅣa 層は青灰色シルト層、ⅩⅣb 層は青灰色砂礫層である。ⅩⅡ層～ⅩⅣ層の遺物の出土量は僅かだが、土質や色調、下位の土層の出土遺物からⅠ区のⅩⅣa 層・ⅩⅣb 層はA ～ G 区のⅩⅣ層と一連の土層と考える。

ⅩⅤa 層は黒色ピート層、ⅩⅤb 層は青灰色シルト層である。ⅩⅤa 層からは縄文時代中期前葉（新崎式）を中心とする土器が出土した。A ～ G 区のⅩⅤa 層では縄文時代中期後葉（大木 9a・9b 式など）を中心とする土器が出土しており、Ⅰ区とA ～ G 区では、主体的に出土する土器に時期差があるが、ともに縄文時代中期の中には収まっている。Ⅰ区ⅩⅤa 層はA ～ G 区ⅩⅤa 層と一連の土層の可能性が高い。

ⅩⅤc 層は褐色粘土層で炭化物を定量含む。縄文時代前期前葉（布目式・新谷式）の土器が少量と前期後葉（諸磯 a 式・b 式）の土器が定量出土している。A ～ G 区のⅩⅤc 層では縄文時代前期前葉（布目式・新谷式）の土器が多量、前期後葉（諸磯 b 式・c 式）の土器が少量出土している。

主体的に出土する土器の時期差はあるが、Ⅰ区ⅩⅤc 層とA ～ G 区ⅩⅤc 層は一連の土層の可能性が高い。また、ⅩⅤa 層とⅩⅤc 層にはさまれて存在する、Ⅰ区ⅩⅤb 層とA ～ G 区ⅩⅣ～ⅩⅤb 層も一連の土層の可能性が高い。

ⅩⅥ層はA ～ G 区、H 区同様、遺跡の基盤となる土層（いわゆる地山）である。黄褐色の粘土と砂礫の互層で、魚沼層群の新相に対応できるものと考える。

第Ⅳ章　遺　　構

1　概　　要

縄文時代前期、縄文時代中期、古墳時代早期・前期、古墳時代後期の遺構がある。土坑・溝・水田跡などの遺構があるが、数は少ない。古墳時代前期の井戸は確認できるが建物跡は未確認である。縄文時代前期、弥生時代中期、古墳時代早・前期は大量の土器が出土しているのに対して、建物跡が未確認なのは、後世の削平の結果で、かつて大武畑と呼称されていた５～８D 以南の高所に集落が存在した可能性が高いと考えている。以下、時代ごとに遺構の記述をする。

2　古　　代（平安時代）

SX87（図版 12・155）　11B22・23、11C2・3 に位置する木製品集中地点。掘り込みは確認できなかった。Ⅴ層～Ⅵa 層掘削途中に検出した。木製品にまじり須恵器無台杯（図版 68　766）が出土した。また、Ⅴ層～Ⅵa 層からは９世紀を中心とする時期の土器が出土している。９世紀の遺構と考える。

3　弥生時代後期から古墳時代

SK85（図版 1・2・14・164）　8B16・17・21・22 に位置する長さ 2.19m、幅 2.11m、深さ 0.78m、平面が略円形、断面が皿状の土坑。覆土はレンズ状堆積で３層に区分した。４本の大型部材が土坑中から出土し、内１本は杭で固定されていた。SD50 掘削後Ⅻ層・Ⅷｂ層上面で検出したが、SD50 との前後関係は不明。覆土３層（最下層）から古墳時代早期～前期の土器が出土しており（図版 63　651 ～ 654）、この時期の遺構と考える。

SE89（図版 1・2・14・166）　10B21・10A1 に位置する長さ 1.45m、幅 1.23m、深さ 1.16m、平面が略円形、断面が台形状の井戸。23 層掘削後Ⅻ層上面で検出した。内部に丸太刳り抜きの井戸側（図版 110　5）がある。底面付近から土師器壺（図版 71　851）が出土した。古墳時代早期～前期の遺構と考える。

SK70（図版 1・2・13・165）　3D10・14・15 に位置する長さ 1.64m、幅 1.23m、深さ 1.16m の楕円形の土坑。D 層もしくはＦ層掘削後にⅻ層上面で検出した。古墳時代早期・前期の土器と弥生時代中期の土器が出土した（図版 63　655 ～ 660）。長さ・幅に比べ深さがあり、井戸の可能性もある。古墳時代早期～前期の遺構と考える。

P61（図版 1・2・13）　8B21 に位置する長さ 0.78m、幅 0.50m、深さ 0.15m、平面は楕円形、断面が皿状の土坑。覆土はレンズ状堆積で２層に区分した。23 層除去後にⅻ層上面で検出した。土器片が定量出土したが図化した土器は無い。古墳時代早期～前期の遺構と考える。

SK76（図版 1・2・13）　11C23 に位置する長さ 1.32m、幅 1.24m、深さ 0.32m、平面形は多角形、断面が箱状の土坑。中世の溝の覆土を除去後、Ⅻ層上面で検出した。覆土はレンズ状堆積で７層に区分した。土器片が定量出土したが、図化した土器は無い。古墳時代早期～後期の遺構と考えるが、これ以降

の遺構の可能性もある。

SK72・73・74（図版 1・2・13・167）　5AB に位置する土坑。SK73 と SK74・72 の切り合い関係は不明。SK72 はこの 3 基の中では最も大きな土坑で、長さ 2.05m、幅 1.68m、深さ 0.74m、平面は略円形、断面は台形状である。覆土はレンズ状堆積で 5 層に区分した。

SK73 は長さ 1.08m、幅 1.04m、深さ 0.38m、平面形が台形で、断面も台形、SK74 は長さ 0.88m、幅 0.64m、深さ 0.32m、平面形が楕円形、断面が皿状である。3 基とも 21 層除去後XVI層上面で検出した。いずれも土器片が出土しているが図化した土器は無い。古墳時代早期～前期の遺構と考える。

SK301・302・303（図版 1・2・13）　3C7・8・13 に位置する土坑。SK303 が SK301・302 を切る。3 基ともⅣb 層除去後XVI層上面で検出した。土器片が定量出土したが、図化した遺物は無い。古墳時代早期･前期の遺構と考える。SK301 は長さ 1.79m、幅 1.52m、深さ 0.51m、平面は円形、断面は階段状、覆土はレンズ状態で 2 層に分けた。SK302 は長さ 1.57m、幅 1.38m、深さ 0.57m、平面は円形、断面は階段状、覆土はレンズ状堆積で 4 層に区分する。SK303 は長さ 1.02m、幅 0.87m、深さ 0.51m、平面は隅丸方形、断面は「U」字状である。覆土はレンズ状堆積で覆土は 2 層に分けた。

SK95（図版 1・2・13・167）　5C25・5D5 に位置する長さ 1.46m、幅 1.38m、深さ 0.54m、平面形が略円形､断面が箱状の土坑。21 層除去後XVI層上面で検出した。覆土はレンズ状堆積で 4 層に区分した。古墳時代中期の土器（図版 65　672 ～ 675）、木製品（図版 125・126　310 ～ 328）が出土した。古墳時代中期の遺構と考える。平成 6 年度の調査で SK49 とした土坑と同一の遺構の可能性が高い。SK49 からは図版 67　717 が出土している。

SK6（図版 1・2・12・165）　5A22 に位置する長さ 1.52m、幅 1.08m、深さ 0.62m、平面形が楕円形、断面が台形状の土坑。覆土は水平堆積で 3 層に区分した。21 層の除去後XVI層上面で検出した。弥生時代後期の釜（図版 67　718）が出土している。弥生時代後期の遺構と考える。

SK59（図版 1・2・12・164）　4A5・5A1 に位置する長さ 1.94m、幅 1.12m、深さ 0.38m、平面形が楕円形、断面が皿状の土坑。覆土は 23 層の除去後XVI層上面で検出した。土器片が出土したが、図化した土器はない。

SK40（図版 1・2・12・165）　6B25・7C5 に位置する長さ 1.61m、幅 0.98m、深さ 0.42m、平面形が円形、断面が台形状の土坑。覆土はレンズ状堆積で 4 層に区分した。23 層もしくは⑥層の除去後XVI層上面で検出した。弥生時代後期から古墳時代前期の釜（図版 64　670・671）が出土している。弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と考える。

SK55（図版 1・2・12・166）　6C7 に位置する長さ 1.58m、幅 1.66m、深さ 1.02m、平面形が円形、断面が半円状の土坑。覆土はレンズ状堆積で 4 層に区分した。23 層の除去後XVI層上面で検出した。古墳時代早期～前期の釜・壺・鉢（図版 64　661 ～ 665）が出土している。古墳時代早期～前期の遺構と考える。

SD50・51・83（図版 1 ～ 4・17）　5 ～ 11BC に位置する溝。6 ～ 11C は直線的にのびるが 5C 付近で北側に屈曲する。SD52 との合流点以西を SD51、SD52 の合流点から、SD33 との合流点を SD50、SD33 との合流点以東を SD83 とした。調査時・整理作業時に遺構番号を誤認し、「SD84」として取り上げた遺物もある。Ⅶ層を除去し、Ⅷa 層もしくはⅧb 層上面で検出した。覆土はレンズ状堆積で 2 ～ 3 層に区分した。1 層･3 層から多くの遺物が出土した。古墳時代早期～前期の遺構と考える。多量の土器･木製品が出土した。

SX84（図版 16）　SD83 北側で、SD83 に沿って検出した木列と杭列。2 列の木列があり、南側の木列の南側、北側の木列の北側に杭列が確認できた。水田跡に関係する遺構と考える。SD83 に直行するように検出された木列が人為的なものか、自然の堆積によるものかは不明。

SD33（図版 1・2）　7・8B に位置する溝。7B で SD50 から分岐し、8B で SD50 に合流する。北岸に畦畔状の高まりと水口状の高まりの切れ目がある。覆土はレンズ状堆積で 3 層に区分した。直線的にのびるが 5C 付近で北側に屈曲する。Ⅶ層を除去し、Ⅷa 層もしくはⅧb 層上面で検出した。覆土はレンズ状堆積で 3 層に区分した。古墳時代早期～前期の遺構と考える。

SD52（図版 2）　6B に位置する溝。6B24 付近で SD50 に合流する。Ⅶ層を除去し、Ⅷa 層もしくはⅧb 層上面で検出した。覆土はレンズ状堆積で 3 層に区分した。古墳時代早期～前期の遺構と考える。

SD46・47（図版 1・2・4）　4U から 6B に位置する溝。6B24 で SD50 に合流する。Ⅶ層を除去し、Ⅷa 層もしくはⅧb 層上面で検出した。SD47 が SD46 を切る。覆土はレンズ状堆積で SD46 は 3 層、SD47 は 5 層に区分した。弥生時代後期から古墳時代早期～前期の土器が出土しており（図版 62　645・646、図版 63　647 ～ 649）このころの遺構と考える。木製品も多く出土した（図版 112 ～ 116　45 ～ 125）。

SX88（図版 1・2・4・16・17）　10・11AB に位置する溝もしくは旧河道。SD83（50）を切る。Ⅵb 層を除去し、Ⅷb 層上面で検出した。遺構名を記入せずグリッド名と青灰砂、あるいは「旧河道」の名称で取り上げた遺物も少なくない（図版 66　693 ～ 716、図版 137 ～ 140　536 ～ 590）。11A17・18、11B1・6 周辺に杭列がある（図版 16・17）。

4　縄　文　時　代

SK90（図版 8・11・17・173）　6B20 に位置する長さ 1.54m、幅 0.61m、深さ 0.21m、平面が楕円形、断面が皿状の土坑である。XⅤc 層除去後にXⅥ層上面で検出した。覆土はレンズ状堆積で 3 層に区分した。覆土中から縄文時代前期前葉の土器片が定量出土した。前期前葉の遺構と考える。

SK93（図版 8・11・17・173）　7B22・7C2 に位置する長さ 1.28m、幅 1.13m、深さ 0.28m、平面が隅丸方形、断面が皿状の土坑である。XⅤc 層除去後にXⅥ層上面で検出した。覆土は茶褐色粘土の単層で、縄文時代前期前葉の土器片が少量、クルミ種子が定量出土した。クルミ種子はほぼ同一のレベルで、底面からやや浮いた状態で出土している。縄文時代前期前葉の遺構と考える。

SK94（図版 8・11・17・173）　7A12・17 に位置する長さ 0.81m、幅 0.69m、深さ 0.86m、略円形の袋状土坑。XⅤa 層掘削中にXⅤa 層中で検出した。覆土は水平堆積で 3 層に区分した。覆土中からクルミ種子、縄文時代前期前葉の土器片が出土した。XⅤa 層からは縄文時代中期の土器が出土しており、縄文時代中期の遺構と考える。

SK97（図版 8・11・17・172）　11A12・17 に位置する長さ 0.40m、幅 0.32m、深さ 0.28m、平面が略円形、断面が「U」字状の小土坑である。XⅤa 層掘削中にXⅤa 層中で検出した。覆土はクルミ種子が密に詰まっていた。XⅤa 層からは縄文時代中期の土器が出土しており、縄文時代中期の遺構と考える。

SD96　5B・C に位置する不整形の溝。XⅣ層上面で検出した。覆土は灰色粘土の単層。遺構ではなく地割れや樹木の根の跡の可能性が高いと判断し、図示しなかった。

第Ⅴ章　遺　　物

1　概　　要

大武遺跡から出土した遺物には①土器・土製品、②石器・石製品、③木製品・漆製品などがある。遺物の報告番号は、種別ごとに連番とした。以下では、土器・土製品、石器・石製品、木製品・漆製品の順に概要を述べる。

2　土器・土製品

A　土器の概要

時代は縄文時代前期前葉、縄文時代前期後葉、縄文時代中期、縄文時代後期中葉～晩期中葉、弥生時代中期前葉、弥生時代中期中葉、弥生時代後期、古墳時代早期～前期、古墳時時代中期、古墳時代後期、古代（8～9世紀）、中世（14世紀前後）の土器・陶磁器が出土した。中世の土器・陶磁器ついては既に報告済［春日ほか2000］であり、ここでは触れない。縄文時代前期前葉、弥生時代中期、古墳時代早期～前期の土器が多く、縄文時代後期中葉の土器も定量出土したが、他の時期は少ない。時期別に概要を述べる。個々の土器の特徴については観察表参照。

B　縄文時代前期

概　　要　前期前葉の土器は器形などにより第3表・第11図のように分類する。縄文時代前期前葉（布目式）のものが大半を占めるが、前期後葉のものも少量ある。土器のほとんどは包含層（XVc層・XVd層、大半はXV層として取り上げ、第Ⅲ章3基本層序15頁参照）からの出土である。遺存状況が良好な土器が比較的まとまって出土した地点もある。

6B17・18出土土器（図版18・19　1～13）　6B17・18のXVc層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した。1は深鉢Ⅱ2D類で、口縁部には矢羽状の多段の爪形列と凸帯による蕨手状文がある。地文は結束羽状縄文（片翼状）である。2は深鉢Ⅰ2D類で、口縁部の上下端に矢羽状の爪形列があり、その間に半截竹管による平行沈線の波状文がある。地文は非結束羽状縄文である。12は深鉢Ⅱ2E類で文様帯の上下端に多段の同一方向爪形列があり、その間に半截竹管による平行沈線と爪

口縁形態

Ⅰ	平口縁
Ⅱ	波状口縁（4単位が基本）
Ⅲ	段切り状の口縁
Ⅳ	環状の突起を持つもの
Ⅴ	双頭状の突起を持つもの

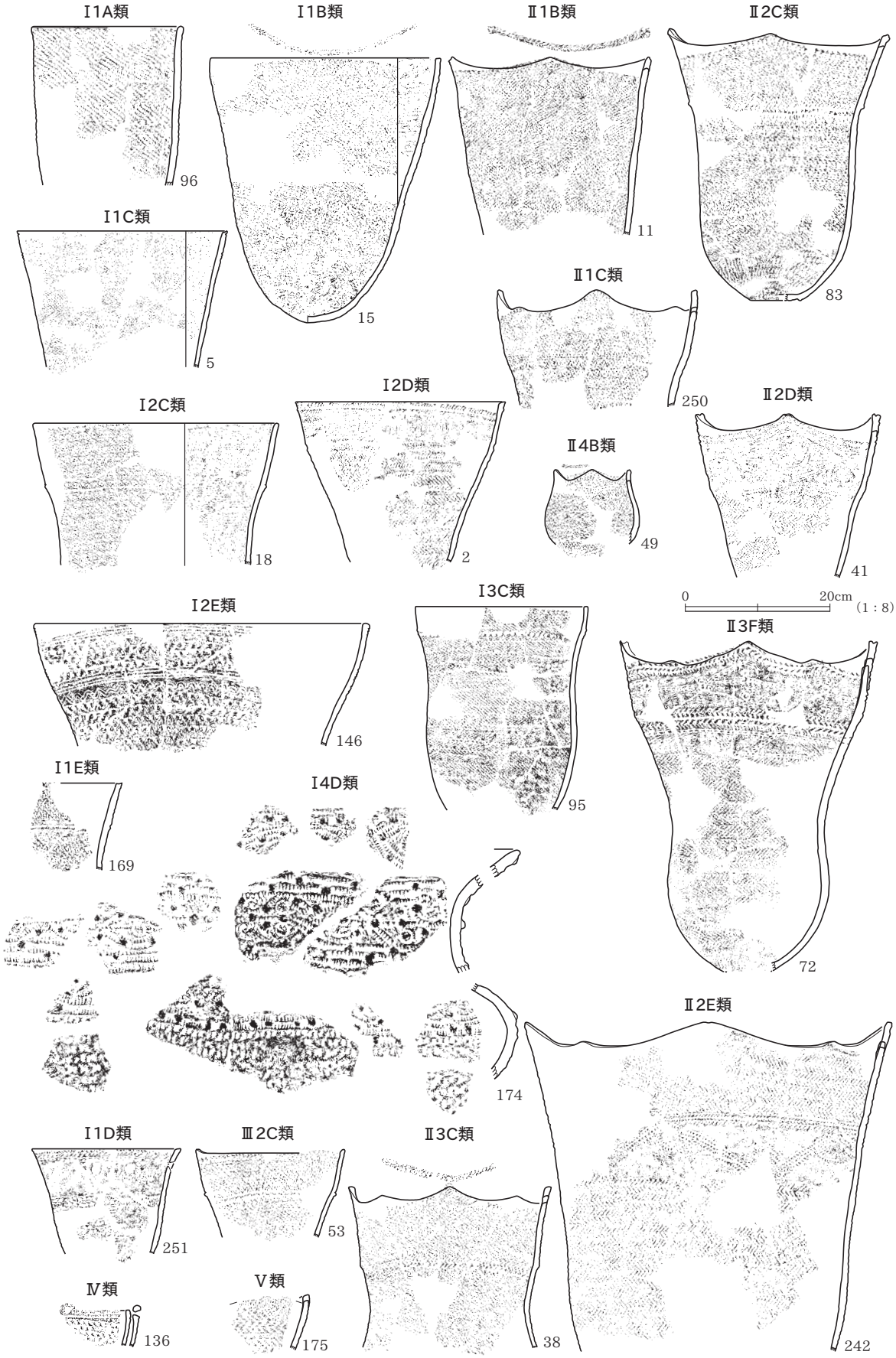
胴部形態

1	寸胴のもの
2	口縁部が屈曲し、胴部に張りがないもの
3	口縁部が屈曲し、胴部が張るもの
4	その他のもの

文様

A	地文のみの
B	口縁端部（付近）にのみ地文以外の文様がある
C	口縁端部（付近）と口縁部下端（付近）に地文以外の文様がある
D	口縁部に文様帯があり、文様帯上下端（付近）に地文以外の文様がある。
E	胴部上位に文様帯があり、口縁端部（付近）と文様帯上下端（付近）に文様がある。
F	口縁部と胴部上位に文様帯があり、口縁端部（付近）と文様帯上下端（付近）に文様がある。

第3表　縄文時代前期前葉の土器分類



第 11 図　縄文時代前期前葉の土器分類（S=1：10（5）、S=1：8（その他））

形を組み合わせた「S」字状文がある。

6B14・19 出土土器（図版 19・20　14～22）　6B14・19 のXVc 層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した。15 は深鉢Ⅰ1B 類で底部は尖底、地文は結節回転文であるが、底部から胴下端付近は螺旋状の爪形列があり、口唇部から口縁上端にかけて矢羽状爪形列がある。17 は深鉢Ⅰ2D 類で口縁部に狭い無文帯があり、その下には矢羽状爪形列がある。18 は深鉢Ⅰ2C 類で、地文は結節回転文であるが、他の多くと異なり下段の結節回転の列が上段の結節回転の列を切る。20 は深鉢Ⅰ2E 類で文様帯には半截竹管の平行沈線による鋸歯状文と円形竹管文がある。口縁部と文様帯の上下端には同一・矢羽状爪形列がある。21 は口縁部には篦状工具による刺突列が 2 段、半截竹管による並行沈線のコンパス文がある。

6B5・10・15 出土土器（図版 20・21　23 ～ 29）　6B5・10・15 のXVc 層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した。24・25 は小型の深鉢である。24 の底部は尖底で外面全面に矢羽状爪形列がある。25 の底部は平底で、口縁部から胴上部は無文、胴下部から底部外縁には矢羽状爪形列がある。29 はⅠ1B 類で口縁部には 2 段の同一方向爪形列がある。

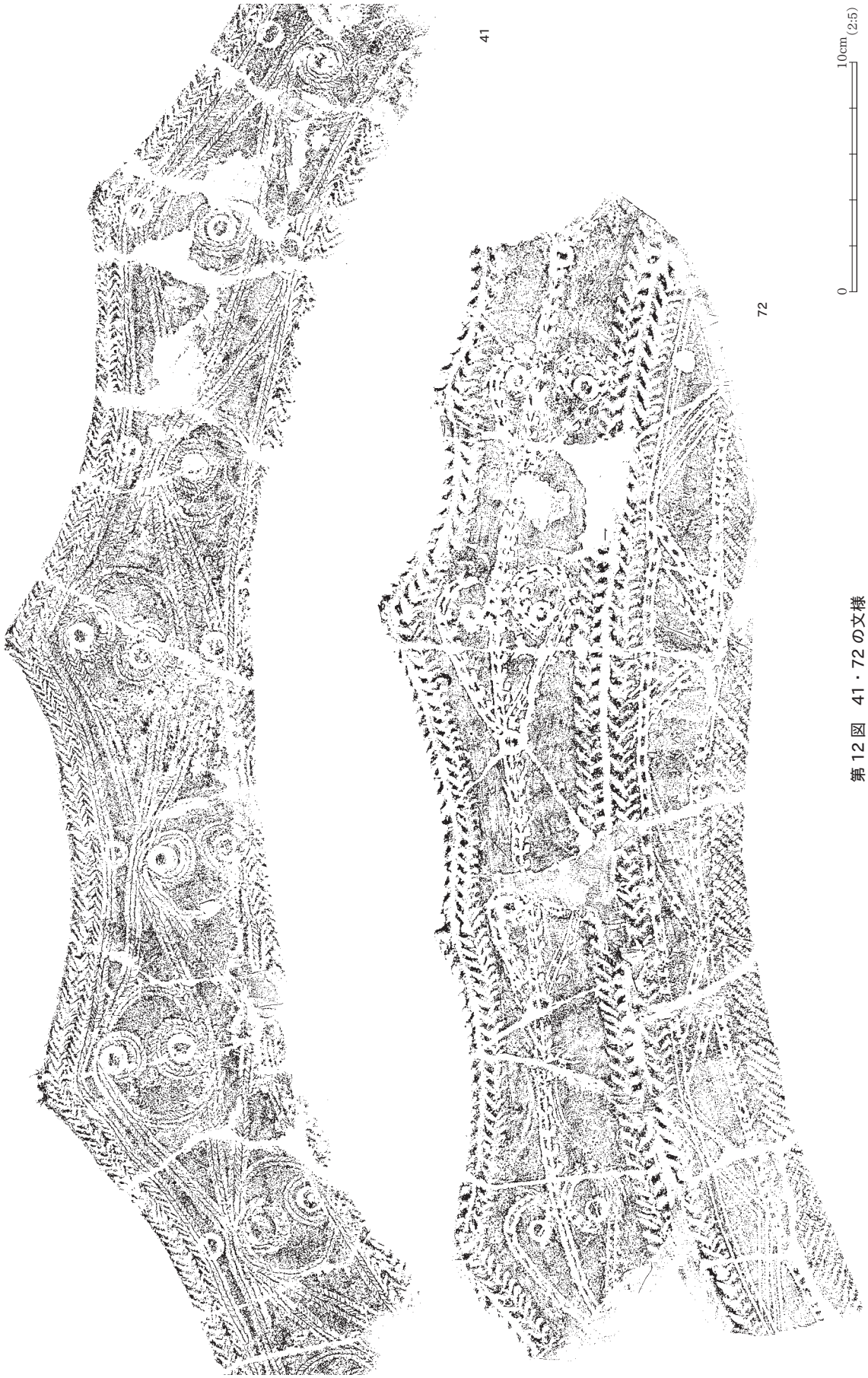
6B5 出土土器（図版 21　30 ～ 35）　6B5 のXVc 層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した。33 は篦状工具による刻みの付いた凸帯と撚糸側面圧痕がある。地文は非結束羽状縄文である。34 は半截竹管の平行沈線による歪な鋸歯状文と「S」字状文がある。35 は深鉢 2E 類で文様帯には半截竹管による平行沈線の格子目文、文様帯上端には逆「C」字状の爪形列を施した粘土紐貼付けによる隆帯がある。

6B9 出土土器（図版 21・22　36 ～ 38）　6B9 のXVc 層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した。36 は他に比べ口縁部から体部の開きが大きい。37 はⅠ1A 類で地文は結節回転文で他のものに比べ足が長い。38 はⅡ3C 類で口縁部と胴部に矢羽状爪形列がある。地文は結節回転文である。

6B13・14 出土土器（図版 22　39・40）　6B13・14 のXVc 層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した。39 は深鉢Ⅰ1A 類で上半が半截竹管を使った縦位の平行沈線、下半に RL 縄文がある。40 は深鉢Ⅰ1B 類で地文は「Z」字状になる特異な結節回転文である。

その他の 6A・B 出土土器（図版 22 ～ 24　41 ～ 71）　41 は深鉢Ⅱ2D 類で、口縁端部に矢羽状爪形列、口縁部の文様帯に蕨手状の撚糸側面圧痕がみられる。地文は非結束羽状縄文である。他に蕨手状の撚糸側面圧痕があるものに 43 ～ 45 があり、このうち 43・45 には刺切文がある。42 は表裏に RL 縄文がある。46 は細い半截竹管を用いた平行沈線による斜格子文がある。47 にも半截竹管による並行沈線がある。48 は胴部径が 10cm に満たない小型土器である。胴部に文様がみられるがモチーフは不明。地文は矢羽状爪形列である。49 は深鉢Ⅱ4B 類で地文には結節回転文と網目状撚糸文を交互に配置する。51 は 4 単位の波状の最底部にも突起がみられる。53 は口縁部に段差がある深鉢Ⅲ類である。55 は口縁部に棒状工具による円形の押圧列が巡る。57 は半截竹管による並行沈線と矢羽状爪形列・円形竹管による蕨手状文がある。62 はコンパス文が 2 列ある。地文は非結束羽状縄文である。66 は口縁端部に同一方向爪形列がある。口縁部の文様帯にも横位の爪形列がある。口縁端部の爪形と文様帯の横位の爪形列は異なった施文具と考える。67 は地文が組紐で、上部には 66 の口縁端部とよく似た爪形列がある。同一個体の可能性が高い。

7A XVd 層出土土器（図版 24　72 ～ 82）　XVd 層は埋没谷の谷底付近でのみ確認できた土層である。7A18・21・22 などから比較的まとまって土器が出土した。72 は深鉢Ⅱ3F 類で、胴部文様帯上半に半截竹管の並行沈線、爪形列、円形竹管などにより蕨手状文、文様帯下半に半截竹管の平行沈線による鋸



第12図　41・72の文様

歯状文がある。口縁端部と文様端の境には矢羽状爪形列が巡る。76 は深鉢 1C 類でコンパス文、半截竹管による平行沈線、同一方向爪形列などが確認できる。地文は非結節羽状縄文である。77 はコンパス文、円形竹管・2 列の同一方向爪形列による「S」字状文がある。79 は地文が付加条縄文である。80 には半截竹管による格子目文がある。

7B1・2 出土土器（図版 25　83 ～ 93）　7B1・2 のⅩⅤc 層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した。83 は深鉢Ⅱ2C 類で、底部は平底となる。口縁部と胴部の段には矢羽状爪形列がある。地文は結節回転文で胴部下端付近は爪形列が螺旋状に巡る。87 は深鉢Ⅱ類で地文は二重の網目状撚糸文である。88 は半截竹管による横方向の平行沈線、89 は半截竹管を用いた平行沈線による格子目文がある。90 はＥもしくはＦ類で半截竹管による平行沈線と爪形による鋸歯状文があり、鋸歯状文の上下端には矢羽状爪形列が巡る。93 は地文（結束羽状縄文（結束部強調））の上に粘土紐を貼り付けた隆帯で文様を表す。

7A・B 出土土器（図版 26　94 ～ 118）　95 はⅠ3C 類で地文は結束羽状縄文（片翼状）である。100 は深鉢Ⅰ1B 類で、地文は組紐である。101 は口縁部に撚糸側面圧痕による蕨手状文などがある。102 は結束羽状縄文の上に隆帯を貼付ける。103 は細い半截竹管の平行沈線と爪形列により蕨手状文を表す。地文は矢羽状爪形列で蕨手文を表す爪形とは異なる形状である。104・106・107 は連続刺突・半截竹管・円形竹管などにより鋸子状・菱形状などの幾何学状の文様を表す。105 は半截竹管・円形竹管・同一方向爪形列で蕨手状文・鋸歯状文を表す。109 は半截竹管による平行沈線・波状文、同一方向爪形列などがある。110 は地文が網目状撚糸文、111 は文様帯に網目状撚糸紋を用いる。112 は平行沈線と RL 縄文がある。115・116 は縦位の矢羽状爪形列がある。117 は底径約 3cm の小型の土器で、底部外面には渦巻き状の沈線がある。

8A・B 出土土器（図版 27　119 ～ 132）　120 は深鉢Ⅱ2D 類で、口縁部の文様帯には矢羽状爪形列、円形竹管文による蕨手状文がある。口縁端部や胴部の段には蕨手状文と同一の工具を用いた矢羽状爪形列がある。121・122・124 は棒状工具による連続刺突で文様を表す。121 の意匠は不明、122 は蕨手状文、124 は幾何学文である。123・125 は爪形列で文様を表す。123 は鋸歯状文と連結文、125 は上段が鋸歯状文と連結文で下段が「S」字状文である。128 ～ 132 は底部で 128 は尖底、129 ～ 132 は平底である。130 は渦巻き状に爪形が巡る。129・131 は中央付近が横位、外縁付近が渦巻き状に爪形を施す。129 ～ 131 は底部と胴部は同じ爪形を使用している。132 は底部外縁に爪形が巡る。胴部と底部外縁とは異なった工具である。

9A15 出土土器（図版 28　133 ～ 136）　9B15 のⅩⅤc 層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した。133 はⅠ2C 類で、地文は結束羽状縄文（片翼状）である。134 はＥ類かＦ類で地文は結節回転文である。連続円形竹管による「S」字状文がある。135 はⅠ1b 類で、条痕・LR 縄文痕がある。

9B5･10 出土土器（図版 28　137 ～ 140）　9B5･10 のⅩⅤc 層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した。137 はⅡ2C 類で、底部は尖底である。地文は結節回転文であるが、底部から体部下にかけて螺旋状に爪形列が巡る。139 はⅡＤ×Ｆ類で､口縁部の文様帯に断面方形の棒状工具の連続刺突がある。140 はⅠ2D 類で口縁部に無文帯がある。

9A・B 出土土器（図版 29　141 ～ 156）　146 はⅠ2E 類で口縁端部に半截竹管による平行沈線、胴部に半截竹管に平行沈線と波状文がある。地文は非結束羽状縄文である。147 はⅡ類で口縁部に 3 列の同一方向爪形列がある。地文は組紐である。149 はⅡＤ×Ｆ類で、半截竹管による平行沈線と爪形列で鋸歯状文などを表す。150 は地文が円形竹管の連続刺突で、上半と下半で刺突の方向が異なる。151・152 は

Ⅱ類で地文が矢羽状爪形である。151 は口縁部、152 は胴部に無文帯がある。153 はⅡ1D 類で口縁部の文様帯に撚糸側面圧痕がある。154 は、地文の非結束羽状縄文のなかに半截竹管による平行沈線と爪形列による蕨手状文がある。155 はⅠD × F 類で、口縁部の文様帯に半截竹管による平行沈線で幾何学文を表す。156 はⅠ1B 類で、外面は条痕で口縁上端には爪形列が巡る。

10A・B 出土土器（図版 30 ～ 34　157 ～ 241）　10B14・15・20 のXVc 層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した（157 ～ 171）。157・158 はⅠ1B 類で、地文は 157 が結節回転文、158 は斜縄文である。159 ～ 161 はⅡ2D 類もしくは、Ⅱ2D × F 類で、159 口縁部の文様帯には棒状工具の連続刺突による鋸歯状文がある。160 は口縁部に無文帯がある。161 は矢羽状連続刺突の下に無文帯があり部分的に赤彩を行う。162 ～ 164・169 は、胴部に半截竹管による波状文・コンパス文がある。169 の地文は組紐である。162 はⅡ類で口縁部には同一方向爪形列がある。163 は口唇部に棒状工具による連続刺突がある。165・167 はⅠD × F 類で同一方向爪形列による「S」字状文などがある。165 の爪形の方向は逆「C」字型である。168 は地文が付加条縄文である。170 はⅠ1B 類で地文が組紐である。171 はⅡ類で口縁部には半截竹管による平行沈線と同一方向爪形列がある。地文は口縁部付近に非結束羽状縄文が 3 列あるが、これより下はループ文である。

10A17・18 のXVc 層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した（174 ～ 185）。174 は口縁部が外反し胴部が張る特異な器形で口縁部の文様帯には刻みのある貼付けの凸帯、瘤状の突起、円形竹管などにより幾何学文・蕨手状文などを表す。175 はⅤ類で口縁端部付近に半截竹管による平行沈線と同一方向爪形列による連結文がある。地文は非結束羽状縄文である。176 はⅡD × F 類で、口縁部と胴部に棒状工具による連続刺突がある。177 はⅠ2C 類で口縁部は棒状工具による連続刺突、胴部は矢羽状円形列がある。178 はⅠ1A 類で、底部は丸底となる。地文は結節回転文である。179・180 はⅠ1B 類で地文はループ文である。181 はⅡD × F 類で口縁端部は矢羽状爪形列、口縁部の文様帯は同一方向爪形列による文様がある。182 は尖底の底部で、底部から胴部にかけて爪形が螺旋状に巡る。183 はⅠ1B 類で地文は結節回転文である。185 はⅠ1C 類で、胴部に半截竹管による平行沈線がある。地文は篦状工具による連続刺突である。

10A17・18・22・23 XVc 層から土器が比較的まとまって出土した（186 ～ 189）。186 は口縁部に同一方向の爪形列が 2 列あり、地文は太い原体を用いた非結束羽状縄文である。188 はⅡ1E 類で半截竹管による平行沈線、爪形の同一方向爪形列、円形竹管による鋸歯状文や扇状文がある。189 は 2 類で胴部には矢羽状爪形列がある。地文は組紐である。

10B1・2 のXVc 層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した（190 ～ 201）。190・192 はⅠ2C 類で、190 の胴部は同一方向爪形列があり地文は結節回転文、192 は矢羽状爪形列で地文は結束羽状縄文（結束部強調）である。191 はⅠ1B 類で地文は結節回転文である。193 はⅠ2E 類で胴部の文様帯は無文である。地文は結束羽状縄文（結束部強調）である。194 はⅠ1B 類で口縁端部には棒状工具による連続刺突が巡る。195 はⅠD × F 類、196 はⅡF 類で同一方向爪形列、円形竹管による「S」字状文がある。197 は半截竹管の平行沈線による格子目文がある。198 は半截竹管の平行沈線による格子目文がある。199 はⅠ類で、口縁部には半截竹管による平行沈線があり、地文は組紐である。200 はⅠ類で、地文は同一方向爪形列である。201 はⅡ1B 類で地文は条痕文である。口縁部は爪形列がある。

202 は文様帯に撚糸側面圧痕がある。文様帯の下端には同一方向爪形列がある。203・204 は棒状工具による刺突による文様がある。205 ～ 207 は爪形による文様があるもので、このうち 205・206 は

爪形列による幾何学文がある。207 は矢羽状爪形列・円形竹管文による蕨手状文がある。211 ～ 214・218 ～ 220・221 はコンパス文・波状文がある。このうち 211・212・218・219 は半截竹管による平行沈線と同一方向爪形列がある。地文は 211 が斜縄文、212・218・219 が結束羽状縄文（結束部強調）、220 が組紐である。213・214 は半截竹管文による平行沈線があるが爪形はない。213 の地文は非結束羽状縄文である。221 は篦状工具による刺突があり、地文は非結束羽状縄文である。224 はⅡ類で地文は絡条体、225 は小波状の口縁で外面は条痕文である。226 は口唇部に棒状工具による連続刺突がある。地文は半截竹管の平行沈線による格子目文である。227 は円形竹管の連続刺突がある。228 は隆帯の文様がある。229 ～ 331 は地文が爪形のもので、229 は矢羽状爪形列、230･231 は同一方向爪形列である。232 ～ 241 は底部破片で、232 は外面に爪形文があり、尖底となる。爪形は底部から胴部に向かって放射状に施文される。233 ～ 235 は径 3cm 以下の小型の底部、236 ～ 241 は底径 4.5cm 以上の平底の底部。236・237・239・240 は爪形を渦巻き状に施文する。238 は同一方向爪形列、円形竹管による「S」字状文がある。241 は底部外縁に同一方向爪形列がある。

11A・B 出土土器（図版 35　242 ～ 249）　242 はⅡ1E 類。胴部文様帯には半截竹管による平行沈線、同一方向爪形列、円形竹管による鋸歯状文・連結文がある。文様帯上下端には矢羽状爪形列がある。地文は非結束羽状縄文である。243 はⅠ1c 類で、口縁端部には同一方向爪形列、胴部には口縁部とは異なる爪形列が巡る。地文は結束羽状縄文（結束部強調）である。244 は小形の土器で他のものに比べ体部の外傾度が大きい。地文は矢羽状爪形列である。245・247 はⅡ類で口縁端部に棒状工具による刺突が巡る。246 は文様帯に半截竹管による平行沈線の鋸歯状文、文様帯上端には矢羽状爪形列がある。地文は非結束羽状縄文である。

4C・D、5B・C・D 出土土器（図版 35･36　250 ～ 261）　250 はⅡ1C 類で、胴部には同一方向爪形列がある。地文は結節回転文である。251 はⅠ1D 類である。口縁部文様帯は無文である。地文は横位の爪形列である。255 は矢羽状爪形列による幾何学文がある。257 は半截竹管による平行沈線と爪形列の文様がある。258 はⅡ1B 類で地文は横位爪形列である。260 は口縁部に円形竹管の連続刺突による幾何学文、口縁端部と下端に矢羽状爪形列がある。

Ⅰ区（102・103C）**出土土器**（図版 36　262 ～ 266）　262 は口縁端部に矢羽状爪形列があり、地文は結束羽状縄文（片翼状）である。

263・265 は細い半截竹管による平行沈線と半截竹管による文様がある。266 は口縁部が小波状となり、胴部は斜縄文である。3 点とも諸磯 b 式平行の土器と考える。264 は大木 5 式の深鉢である。

その他（図版 36　267 ～ 275）　267 ～ 269 は十三菩提式の深鉢で、同一個体である。270 は諸磯 c 式平行の深鉢である。271 ～ 275 はXV層以外の土層（層序が不明なものも含む）から出土したものや出土地点が不明な前期前葉の土器である。271 はⅠ類で口縁部から胴部に同一方向爪形列・コンパス文による文様がある。272 は小型土器Ⅰ2C 類で、地文は矢羽状爪形列である。274 は凸帯による蕨手状文がある。275 は尖底となる底部で文様は底部から体部に向かって放射状に施文される。

C　縄文時代中期～後期初頭

縄文時代中期から後期初頭の土器（276 ～ 286・288）はXVa 層を中心に出土した。276 ～ 280 は縄文時代中期初頭から前葉の土器で 278・280 を除きⅠ区（103C・D）からの出土である。281 ～ 286 は中期後葉の土器でA・B・F 区からの出土である。

D　縄文時代後期中葉～晩期中葉

分　類

縄文時代後期中葉～晩期中葉までの土器を帰属時期および系統・器種により、次のとおり分類する。

第Ⅰ群（後期中葉）　関東地方の加曽利Ｂ式に併行する一群で、XⅢe 層からまとまって出土している。器種には深鉢・浅鉢・壺がある（第 13 図）。深鉢は第４表のように細分した。深鉢Ａは加曽利 B1 式期に比定すると考えるが、一部は加曽利 B2 式期に下るかも知れない。深鉢Ｂ類は、加曽利 B3 式期に位置づけられる可能性が高い。

第Ⅱ群（後期後葉）　東北地方（新潟県下越地方を含む。以下同じ。）のいわゆる瘤付土器に併行する一群である。出土量は少ないが、XⅢb 層にややまとまりが認められる。器種には深鉢・壺が確認できる。

第Ⅲ群（晩期前葉）　東北地方の大洞Ｂ式～ BC 式に併行する一群で、XⅢa 層からまとまって出土している。器種には深鉢・浅鉢・台付鉢・壺・注口土器がある。深鉢は第４表のように細分した。

第Ⅳ群（晩期中葉）　東北地方の大洞 C1 式に併行する一群で、XⅡb 層からまとまって出土している。器種には深鉢・浅鉢・壺がある（第 13 図）。浅鉢は第４表のように細分した。いずれも磨消縄文手法による雲形文が器面全体で展開する。

第Ⅴ群（北陸系土器）　北陸地方西部（富山県・石川県方面。以下同じ。）に系譜を持つ土器を一括する。後期後葉～晩期前葉が認められ、搬入品の可能性がある。

第Ⅵ群（粗製土器）　粗製の深鉢を一括する。器形や法量に大小の違いがあるが、ここでは器面調整及び地文の施文方法の違いから第４表のように細分した（第 13 図）。Ａ類は信濃川上・中流域に主な分布域があり、地域色の濃い器種である。第Ⅳ群に組成する可能性が高い。

XV・XVb 層（図版 37　287・289 ～ 293）

第Ⅰ群（287・289）　287 は深鉢 A2 類である。櫛状工具による擦痕が特徴的である。289 は深鉢 A1 類である。外面は LR 縄文の上から不連続な３条の沈線が施され、内面には外面よりも太い沈線が２条めぐる。内面施文は加曽利 B1 式に特徴的であるが、外面の粗雑な沈線は一般的ではないらしい。

第Ⅱ群（290・292）　290 は壺または注口土器の胴部で、刺突列で装飾帯の区画および弧線文を表出する。瘤付土器第Ⅱ段階に位置づけられようか。292 は大波状口縁の深鉢で、比較的幅広い口頸部装飾帯に LR 縄文を充填した曲線的なモチーフが描かれる。磨り消された無文部に比べて縄文充填範囲が比較的広いこと、頸部で括れる器形から瘤付土器第Ⅰ段階（西ノ浜式）

Ⅰ群土器（加曽利Ｂ式平行）

深鉢Ａ	口縁部に平行沈線帯を持つもので、平行沈線を縦に区切る単位文がしばしば伴う	1	口縁部が「く」字に内屈する
		2	口縁部が屈折しない
深鉢Ｂ	口縁部から胴部上半にかけて、磨消縄文手法による曲線的なモチーフを描くもの		

Ⅲ群土器（大洞Ｂ～ＢＣ平行）

深鉢Ａ	口縁部から胴部上半を広く装飾帯とするもので、胴部中ほどに括れを持ち、口縁部にかけて外反する。		
深鉢Ｂ	口縁部の比較的狭い範囲を装飾帯とするもの	1	口縁部が「く」字に屈折する
		2	口縁が屈折せず外反または内湾する

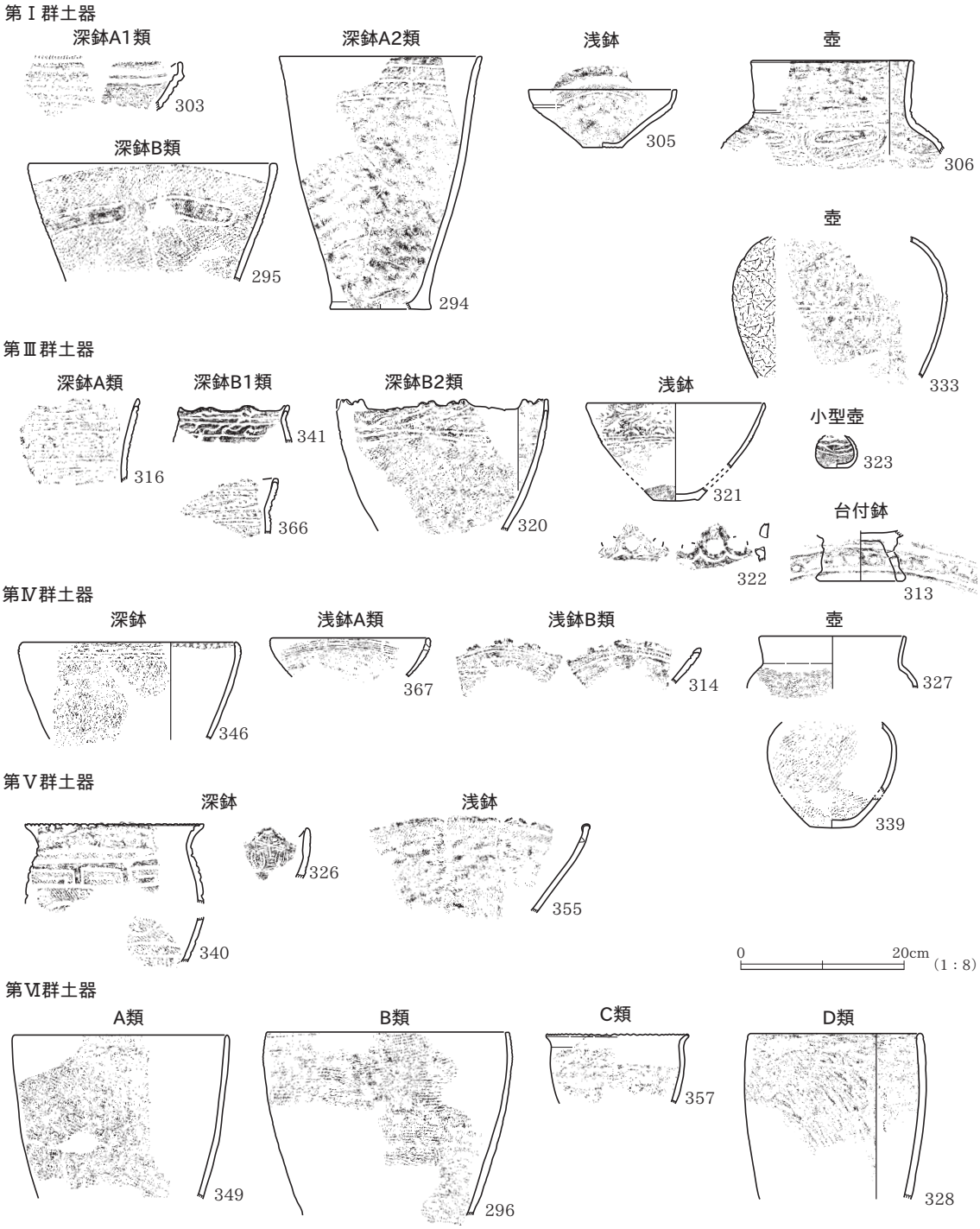
Ⅳ群土器

浅鉢Ａ	底部から強く内椀しながら立ち上がるボール形のもの
浅鉢Ｂ	広い底部から口縁部にかけて直線的に外反する台形のもの

Ⅵ群土器（粗製土器）

Ａ類	口縁部を丁寧にナデ調整して無文帯を作り出し、以下に縄文･撚糸文･網目状撚糸文などの各種地文を施文するもの。原体を縦位方向に移動し、無文帯直下に結節回転文を施すものが多い。
Ｂ類	口縁部無文帯を作り出さないもの
Ｃ類	口縁部が「く」字に短く外反するもの
Ｄ類	器面を粗いナデ又はケズリ調整した無文土器。

第４表　縄文時代後期中葉～晩期中葉の土器分類



第 13 図　縄文時代後期～晩期の土器分類（S=1：8）

と判断したが、当該期に特徴的な口縁部の肥厚が認められないことから第Ⅰ群（加曽利 B3 式）に遡る可能性もある。

第Ⅳ群（291・293）　291 は浅鉢Ｂ類で、口縁内面には装飾的な粘土紐が貼付される。293 は浅鉢Ａ類で、外面には炭化物が厚く付着している。

XⅢｅ層（図版 38　294 ～ 305）

第Ⅰ群（294・295・297～303・305）　303 は深鉢 A1 類、294・298 ～ 300 は深鉢 A2 類である。303 は、多条の平行沈線を左右逆に開口する弧線で区切るもので、LR 縄文を地文として施されている。内面の平

行沈線が右端でやや上がることから振幅の小さな波状口縁と推測される。299 は、加曽利 B1 式の指標である「の」字文が施文されたもので、最上段の「の」字文の上端には円形の刺突が加えられる。また、上下の「の」字文では巻き方が左右異なる。294・298・300 は平行沈線を縦の短沈線で区切るもので、前 2 者が平行沈線内に LR 縄文を充填するのに対して、300 では縄文施文が欠落する。294 の口縁内面では、図面では上手く表現できていないが段が形成されている。なお、300 と同様の連続する刻みが 294・298 の口端部でも認められる。301 は細い平行沈線が粗雑に施されただけの小型品であるが、内面には漆膜が厚く付着しており、漆容器として利用されたことが良く分かる。

295・297 は深鉢 B 類である。295 は胴部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がり、口縁部で内湾する器形で、全面に LR 縄文を施文した後、研磨により「D」字状の無文部を表出している。口端部が肥厚する点が特徴的である。297 は胴部に括れを持つ器形で、胴部には逆三角形のモチーフが磨消縄文手法によって表出されている。地文は LR 縄文で、加曽利 B3 式期に特徴的な羽状縄文にはならない。胴部下位のやや幅広い無文帯は、上端を 2 条の刺突列で、下端は沈線のみで区画する。305 は、口縁部下端に段を作り出し、その下に LR 縄文による縄文帯を形成する浅鉢である。口端部を面取りし、器面をよく研磨するのが特徴的である。

第Ⅱ群（304）　304 は大波状口縁深鉢で、波頂部とその直下に 2 個 1 対の刺突を充填した瘤を貼付している。口端には「ハ」字状沈線、波頂部下の三角形区画内には円形・楕円形のモチーフを充填するものは、柏崎市周辺の海岸部や信濃川上流域など、新潟県中・上越地方に特徴的に認められ、地域型式として設定できる可能性がある。東北地方の瘤付土器第Ⅱ～Ⅲ段階に併行すると推測されるが、詳細な対応関係は不詳である。

第Ⅵ群（296）　296 は口縁部から胴部にかけて横走する RL 縄文で充填された B 類である。口縁端部を面取りして、比較的薄く仕上げた特徴は第Ⅲ群に組成する粗製土器にしばしば認められる。

XⅢb 層（図版 39　306 ～ 314）

第Ⅰ群（306）　306 は大型壺で、筒形の口頸部はよく研磨されて光沢を持つ。肩部では粗い LR 縄文を地文として楕円形の区画文が磨消縄文手法で表出されている。一方、内面ではハケ目状の工具痕が明瞭に認められる。

第Ⅱ群（307 ～ 311）　307・310 は大波状口縁深鉢である。307 は波頂部とその直下に刻みある円形の瘤が貼付され、波頂部下は無文とする。一方、310 は台形の大振りな波頂部を持ち、口端には「ハ」字状の刻みを連続して加える。波頂部下は、RL 縄文を地文としてレンズ形の区画や弧線・刺突などを充填して加飾が著しく、XⅢe 層の 304 と特徴を共有する。なお、口縁部下は無文帯が貫入し、縄文の帯で文様が描かれるらしい。309 は口縁部装飾帯と頸部無文帯の重畳が明瞭なもので、頸部には補修孔が穿たれている。口縁部には突起が付き、頂部には 2 個 1 対の刻みを加えた瘤が貼付される。全体の文様構成が不詳だが、突起直下に三叉文が認められることから、後期末：瘤付土器第Ⅳ段階の可能性がある。また、頸部を無文とする波状口縁深鉢は富山県方面に特徴的であり、本例は北陸地方西部に由来する第Ⅴ群に位置づけるべきかも知れない。308 の 2 点は同一個体と思われる。胴部中ほどに弱いくびれを持つ深鉢の胴部上半と推測され、LR 縄文を充填した右下がりの入組文が施文される。311 は胴部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がる平口縁深鉢で、口端には外面に肥厚したヒレ状の突起を持つ。胴部上半には 308 左に似たレンズ形の入組文が描かれるが、入組文及び胴下半にはハケ目状工具による条線文が充填される。

第Ⅲ群（312・313）　312 は外面を赤彩した壺で、RL 縄文を地文として三叉文やクランク状の沈線が施文される。313 は台付鉢の脚部で、円形・鼓形の透かしを持つ。特筆されるのは脚部の内面にアスファルトと推測されるタール状の黒色物が厚く付着していることで、反転のうえ容器として再利用されたことが良く分かる。全て大洞 B 式に位置づけられる。

第Ⅳ群（314）　314 は第Ⅳ群の浅鉢 B 類である。粘土紐を貼り付けた内面装飾や雲形文を描く沈線は粗雑で、大洞 C1 式を模倣したものと推測できる。

XⅢa 層（図版 39・40　315 ～ 330）

第Ⅰ群（315）　315 はモチーフの全形が不明であるが、295 に類似した「D」字状の無文部が展開すると推測する。加曽利 B3 式並行期に位置づけられるだろう。

第Ⅱ群（316）　316 は胴部上半で括れる小波状口縁深鉢で、複数の装飾帯が重畳する。三叉状の陰刻が装飾帯の区画と接続し、いわゆる三叉文としての独立性が未発達であることから、後期末 : 瘤付土器第Ⅳ段階に併行するものと考える。

第Ⅲ群（317 ～ 324）　317 は口頸部を無文とする広口壺で、頸部と肩部の境界に段を持つのが特徴的である。肩部以下は LR 縄文が施される。318 は内外面を赤漆塗布したもので、壺の頸部と推測される。器壁が薄く、胎土はシルト質で精良である。319・321・322 は浅鉢、320 は深鉢 B2 類である。いずれも対向する三叉文が結合した入組三叉文が定型化しており、大洞 B2 式期に比定することができる。壺の 323 も同時期のミニチュア品である。322 は浅鉢の大型突起で、本来は円形の透かしが 3 個並んだものであるが、中央を除いた左右の透かし部が欠損している。324 は注口土器の胴下半で、注口基部に施文された玉抱き三叉文が認められる。器面調整が粗く、成形時の粘土の凹凸が明瞭に残っている。322・324 は大洞 B1 式に位置づけられる。

第Ⅴ群（326）　326 は北陸地方西部の八日市新保式で、器面は黒色研磨されて鈍い光沢を持つ。搬入品の可能性が高い。

第Ⅵ群（325・327 ～ 330）　327 は広口壺である。口頸部は黒色研磨され、焼成も良好で堅緻な胎土を持つ。肩部以下は LR 縄文を地文として結節回転が複数段にわたり施される。328 は D 類で、ヘラ工具による粗いナデ調整の痕跡が明瞭に残る。329 は B 類で、器面調整が粗いため器面の凹凸が激しいが、LR を原体として条が横走する。330 は胴部に LR 縄文を施した粗製深鉢の底部付近であるが、内外面及び破断面に厚くアスファルトが付着している点が特徴的である。

XⅡb 層（図版 40 ～ 42　331 ～ 354）

第Ⅲ群（331 ～ 334・341）　332 は壺の胴部破片である。磨消縄文手法により曲線的なモチーフが描かれ、節の細かい LR 縄文が充填される。無文部のミガキが顕著であり大洞 B1 式と推測した。331・333 も壺である。331 は細頸壺で、胴部上半には入組三叉文を祖形とするモチーフが描かれ、大洞 BC1 式に比定することができる。333 は外面には赤漆、内面には黒漆が塗布された大型壺で大洞 B2 式に位置づけることができる。胎土は非常に軟質で、パッチ状の剥落が認められる。334 は「く」字に外反する深鉢 B1 類である。口縁部装飾帯には定型化以前の羊歯状文が認められ、大洞 BC1 式に位置づけられる。341 は第Ⅲ群深鉢 B1 類で大洞 B2 式に比定できる。装飾帯の上段では単位文化した入組三叉文が 2 個見えるが、その右側では玉抱き三叉文の残存がよく認められ、大洞 B2 式のなかでも古相を示す可能性がある。

第Ⅳ群（335 ～ 339・342・343・344・345・346）　335・337・338・342 は浅鉢 B 類である。335・337 では口縁部の内外面に二溝間の截痕が配される。特に 335 の内面では、羊歯状文の特徴がより残存

しており、古相を示す可能性がある。一方、338・342 の口縁部は平行沈線帯のみとなる。336・343 ～ 346 は深鉢である。いずれも口縁部の装飾帯が幅狭く、346 では装飾帯の狭小化のため羊歯状文が斜行する隆線に形骸化している。また内面には円形の押圧が連続して施される。口縁部の装飾帯は、343 では平行する沈線、344 は平行沈線間に不連続な沈線が充填されている。なお、両者共に胴部は縦位の撚糸文が施され、343 では口縁直下に結節回転が認められる。

第Ⅴ群（340）　340 は北陸地方西部の中屋式土器である。胴部の装飾帯は 2 段に分かれ、上段では「日」字状のモチーフが磨消縄文手法で表出され、下段では入組文が沈線のみで描かれる。RL 縄文を地文とする。

第Ⅵ群（347 ～ 354）　347 ～ 349・352 は A 類である。347 と 349 は網目状撚糸文または LR 縄文を縦位回転施文し、348 は LR 縄文を横位回転施文している。いずれも口縁部を無文帯として、348・349 では結節回転文が口縁部と胴部を区画している。352 は解けたような粗い網目状撚糸文が回転施文されたもので、口縁部直下に見える連続する縦方向の陰刻は、撚糸文を結わえた原体の痕跡と推測され、長さ 35 ～ 40mm 程度を測る。350 は C 類で、「く」字状に外反する口縁部には中央を刻んで B 形にした突起が貼付されている。351 は RL 縄文を数段にわたり横位回転施文したもので、底部直上をミガキ調整して無文帯を作り出している。353 は網目状撚糸文を施文したもので、後者の底部直上ではナデ調整により無文帯としている。354 の底部には十字に重ねたササの圧痕が確認できる。

XⅡa 層（図版 43　355 ～ 360）

第Ⅴ群（355）　355 は北陸地方西部の中屋式土器の浅鉢である。口端部の 1 か所に「ハ」字状の粘土紐を貼付し、その周辺のみ縄文施文する。また口縁外面では一定の幅を縄文帯とし、それ以下をミガキ調整で無文とする。

第Ⅵ群（356・357・359）　356 は口縁部を無文帯とする A 類で、横位回転施文された網目状撚糸文が胴部全面に展開する。357 は無文の C 類で、口頸部が短く外反し、口端部は連続する小波状となる。

その他（358・360）　358 は大型壺の口頸部である。第Ⅲ群に組成する可能性がある。360 は節の粗い LR 縄文が施された台付深鉢又は鉢の台部である。

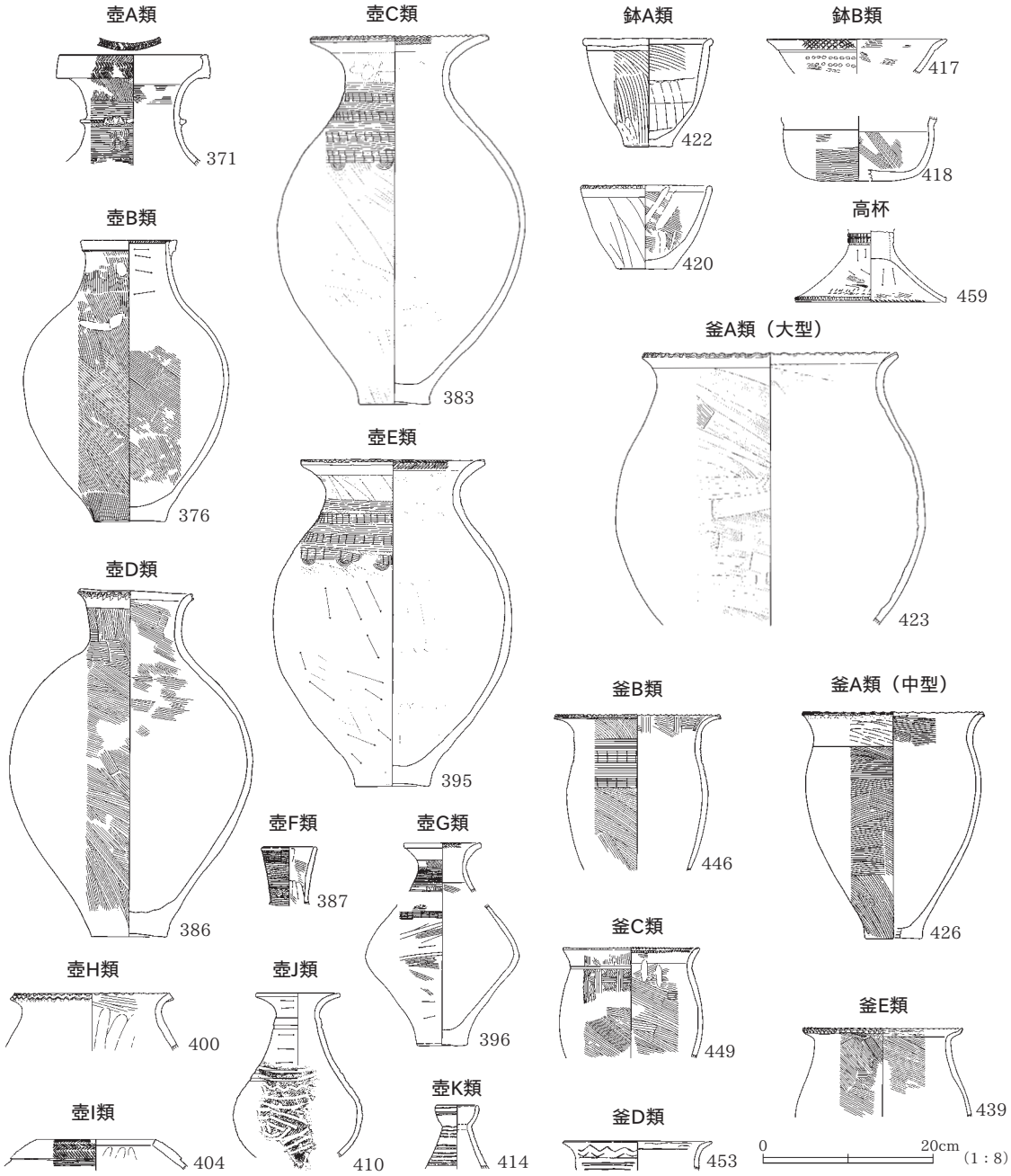
その他の縄文時代後期～晩期の土器（図版 43　361 ～ 368）

361 は第Ⅲ群の深鉢 B2 類、366 は深鉢 B1 類、362 は壺である。羊歯状文の存在から大洞 BC2 式に位置づけられるが、装飾帯の幅に差異があり、366 が 361 よりも古相を示している可能性が高い。367 は椀形の浅鉢で、口縁部には羊歯状文を祖形とする二溝間の截痕、胴部には磨消縄文手法による雲形文が展開している。二溝間の截痕は一部で羊歯状文の様相が残存しており、第Ⅳ群のなかでも古相を示す可能性がある。363 は撚糸文を縦位回転した第Ⅵ群 B 類、368 はケズリ調整した第Ⅵ群 D 類である。

E　弥生時代中期

概　　要　弥生時代中期の土器は弥生時代中期前半に位置づけられるものと中期後半に位置づけられるものがある。中期前葉の土器は 5A ～ C の SD47・51 や 20 層などと 9B の 23 層や SD50 などから出土している。これらは古墳時代前期を中心とする時期の遺構・土層と考えており、当期の水田造営などに伴う掘削の結果、これらの遺構・土層に混入したものと考える。

中期後半の土器は D 区（主に 3・4D）F 層、G 区（4・5D）灰色粘土層から出土している。G 区の調査は D 区の調査終了後に着手したため、D 区 F 層と G 区灰色粘土層を同時に見比べることはできなかったが、土層の特徴や出土遺物から同一の層序と考えている。第 5 表・第 14 図のように分類した。



第 14 図　弥生時代中期中葉の土器分類（1：8）

壺	A類	口縁部が受口状となる壺
	B類	口縁部が比厚する壺
	C類	やや細い頸部に大きく外反する口縁部がつく壺
	D類	細くやや外反する口頸部をもつ壺
	E類	太く短い頸部に外反する口縁部がつく壺
	F類	非常に細い直立気味の口頸部をもつ壺（細頸壺）
	G類	算盤玉型の体部に外反する口頸部がつく壺
	H類	口頸部が短く屈曲する壺
	I類	無頸壺
	J類	信州系の壺を一括した
	K類	東北系の壺を一括した

鉢	A類	身の深い鉢を一括した
	B類	身の浅い鉢を一括した
釜	A類	頸部・胴部に文様がない釜
	B類	頸部・胴部に文様のある釜
	C類	信州系の釜を一括した
	D類	東北系の釜を一括した
	E類	受口状口縁の釜

第 5 表　弥生土器の分類

D 区 F 層・G 区灰色粘土層（図版 44 ～ 51　369 ～ 453）

壺（図版 44 ～ 47　369 ～ 414）　369 ～ 373 は受口状口縁を持つ壺 A 類である。体部の形態は不明。369・370 は頸部に凸帯が 2 条ある。371 は凸帯が 1 条で、頸部には櫛による擬流水文が巡る。372 は頸部に幅広の凸帯が巡る。凸帯には口縁部同様矢羽状櫛目文が巡る。頸部下には廉状文と波状文がある。374 は口縁部がないが凸帯が 2 条巡ることから A 類の可能性が高い。

375 ～ 377・379・388 は口縁部が比厚する壺 B 類。375 は口縁端部に刺突が巡る。376 は全形がわかる資料で安定した平底にやや長い体部が付く。頸部・体部は無文である。388 は口縁端部に櫛目文、口縁部外面に LR 縄文、頸部に直線文と廉状文がある。

378・380 ～ 383・389 は体部がやや長く、頸部が細く口頸部が外反する壺 C 類。377 は口縁端部に櫛目文、口縁部内面が矢羽状の連続刺突を行う。380 は口縁部が小波状となり、口縁部内面に斜行短線文がある。381 は口縁部が小波状となるほかは無文、382 は口縁端部に格子状櫛目文があるほかは無文である。383・389 は口縁が小波状となり外面には直線文・廉状文がある。内面は 383 が矢羽状櫛目文、389 は櫛目文・廉状文・懸垂文がある。

384 ～ 386 は体部がやや長く頸部が細く、口縁部があまり外反しない壺 D 類。3 点とも頸部・体部は無文である。384・386 は口縁部が小波状となる。

387 は細く直線的に伸びる口頸部を持つ壺 F 類。口頸部外面には直線文・廉状文・波状文がある。1 点のみの出土で、全形のわかる資料はない。

390 ～ 395・397・398 は体部が丸く、頸部がやや太く、口縁部が外反する壺 E 類。390 の口縁端部は櫛目文、口縁部内面は矢羽状櫛目文、外面は擬流水文・廉状文がある。391 の口縁端部は櫛目文、体部外面は直線文・廉状文・コンパス風波状文・扇形文、口縁部内面は凹凸のある凸帯がある。392・394・399 は無文である。このうち 392 は口縁部が小波状となる。393 は口縁端部に櫛目文、395 は頸部から体部外面に直線文・廉状文、口縁部内面には矢羽状櫛目文がある。397 は口縁部が小波状となり頸部から体部外面に直線文・廉状文がある。

396 は算盤玉形の体部に外反する細く短い口縁部がつく壺 G 類。体部外面には直線文・廉状文、口縁部内面には矢羽状櫛目文がある。出土例は少なく 1 点のみ図化できた。

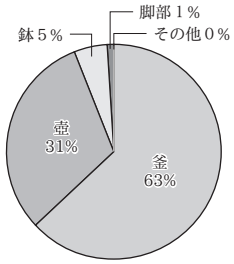
400・401 は頸部がやや太く短く外反する口縁部をもつ壺 H 類。3 点とも口縁部は小波状となる。釜の可能性もあるが、他の釜に比べ器壁が厚いことから壺とした。

399 は口縁部が外反し、端部に広い面を持ち、上下端を箆状工具で刻む。405 は内面に円形竹管文が密にある。2 つとも壺 C・E・G 類などの可能性があるが、頸部以下が無いため詳細は不明。

402 ～ 404 は無頸壺（壺 I 類）。402・404 は口縁部に矢羽状櫛目文があり、このうち 404 は体部に直線文がある。403 は無文である。

406 ～ 413 は信州系の壺で多様な形態を含むが、一括して壺 J 類とした。406 ～ 408 は新諏訪町Ⅲ式～栗林 I 式の古段階のものと考える。409 ～ 413 は LR 縄文の後に棒状工具で直線文・鋸歯状文・多重菱形文などを描く。412・413 は三角形の連続刺突がある。体部下半は、412 は LR 縄文である

器種／項目	破片数	口縁部・脚部残存率 /36	比率（残存率）
釜	2727	2139.0	62.9%
壺	2747	1045.5	30.7%
釜か壺	82	10.0	0.3%
鉢	61	168.5	5.0%
脚部	21	40.0	1.2%
把手	1	0.0	0.0%
胴部・底部	12708	0.0	0.0%
合　計	18347	3403.0	100.0%



第 6 表　F 層・灰色粘土層出土土器の器種構成比率

が、413 はハケメである。

414 は東北系の壺 K 類である。2 本 1 単位の平行沈線がある。縄文は確認できない。

鉢（図版 47・48　415 ～ 422）　深身の 415・416・420 ～ 422 は鉢 A 類、浅身の 417・418・419 は鉢 B 類とする。415 は口縁部が小波状となる。416 は口縁部付近に小孔が 2 か所ある。417 は口縁部に格子目状櫛目文、体部に円形竹管の連続刺突がある。418・419・422 は無文、420・421 は口縁端部に櫛目文がある。

釜（図版 48 ～ 51　423 ～ 453）　423 ～ 438 は頸部から体部外面に文様のない釜 A 類。423 は体部最大径が 33cm 以上となる大型の釜で、口縁部は小波状となる。424 ～ 434・437・438 は体部最大径 17 ～ 27cm の中型の釜。424 ～ 431 は口縁部が小波状となる。423・424・426 などは押圧により、口縁を小波状にするが、425・427 などは櫛の刺突（櫛目文）により小波状とする。432 ～ 434・437・438 は平縁である。432 は口縁端部に櫛目文がある。430 は口縁部内面に矢羽状櫛目文がある。435・436 は体部最大径が 15cm 前後の小型の釜。2 点とも小波状口縁で、口縁部内面に櫛目文がある。

439 は口縁が受口状となる釜 E 類。口縁端部を櫛状工具で刺突する。近江地方と関連すると考える。

440 ～ 447 は頸部・体部外面に直線文・廉状文・波状文などの櫛描文がある釜 B 類。441 は体部最大径約 35cm の大型の釜で、小波状口縁となる。頸部から体部外面には擬流水文・廉状文がある。440・442 ～ 445 は体部最大径 19 ～ 27cm の中型の釜。440･442 は小波状口縁で､440 は体部外面に直線文･廉状文、442 は体部外面に直線文・廉状文・波状文、口縁部内面には矢羽状櫛目文がある。443 ～ 445 の口縁部は平縁で、443 は頸部外面に直線文、口縁部内面に矢羽状櫛目文がある。444 は口縁端部に櫛目文､頸部から体部に直線文･波状文がある。445 は口縁端部に格子状櫛目文､頸部から体部外面に直線文･廉状文、口縁部内面に懸垂文がある。446・447 は体部最大径が 15cm 前後の小型の釜。2 点とも小波状口縁で、頸部から体部外面に直線文・廉状文があり、このうち 446 は、口縁部内面に懸垂文がある。

448 ～ 452 は信州系の釜で、多様な形態を含むが一括して釜 C 類とした。448 は小波状口縁で体部は横位のハケメの後、縦位のハケメを行う。449 は小波状口縁で、体部外面は蛇行懸垂文→（横位の）直線文→懸垂文の順で施文している。口縁部内面には三角形の刺突が巡る。450 は平口縁の釜で口縁端部に櫛目文がある。体部外面は（横位の）波状文→懸垂文→廉状文の順で施文している。451 は平口縁の釜で口縁端部には櫛目文がある。体部外面は（横位の）直線文・扇形文→懸垂文→（横位の）直線文の順で施文している。452 は小波状口縁で頸部に三角形の連続刺突がめぐる。

453 は東北（南部）系の釜で D 類とする。2 本 1 単位の平行沈線で鋸歯状文や直線文を表す。

その他の弥生時代中期の土器（図版 52　454 ～ 482）

弥生時代中期後半の土器（図版 52　458 ～ 467）　弥生時代後期の遺物包含層である⑥層、およびこれより上位と考える土層から出土した土器である。454 は壺 C 類で口縁端部に櫛目文、頸部外面に格子状櫛目文のある幅広の凸帯が付く。口縁部内面には円形浮文と矢羽状櫛目文がある。455 は壺 A 類で、口端端部には櫛目文、頸部外面には擬流水文がある。

456 ～ 458 は釜で、456・457 は文様が無く釜 A 類である。458 は体部外面に櫛描文による文様がある釜 B 類である。口縁端部に櫛目文､体部外面に直線文･廉状文･斜行短線文､口縁部内面に矢羽状櫛目文･円形浮文がある。

459・460 は高杯。脚下端部には篦状工具による刻みがあり、459 の脚上部には幅広の凸帯、460 は篦状工具による 2 本一対の縦位の沈線がある。

461 は鉢 B 類で口縁部外面に LR 縄文がある。462 は鉢 B 類で 3 段 2 列の円形浮文が、6 ないしは 8 単位あるものと考える。

463 は釜 C 類（信州系の釜）、464 ～ 466 は壺 K 類（東北南部系の壺）で、464 は内面に波状文風の沈線、466 は RL 縄文がある。467 は台付鉢の脚部である。地文は LR 縄文、3 本 1 単位の沈線が 3 単位ある。

弥生時代中期前半の土器（図版 52　468 ～ 482）　468 は在地系の深鉢である。外面は工具の異なる 3 つの施文帯で構成され、口縁部：LR 縄文帯→胴部上半：波状文帯→胴部下半：条痕文帯となる。波状文は 3 条の櫛歯状工具により施文される。また胴部下半の条痕文は針葉樹の板を工具とした「細密条痕」である。波状文施文の粗製土器は本県の弥生前期～中期初頭に類例が認められており、本例も当該期に位置づけることができるだろう。一方、口縁部、胴部上半・下半で施文工具を変える粗製土器は、本遺跡の縄文土器第Ⅳ群（図版 43　347 ～ 349 など）に系譜が求められ、縄文晩期以来の伝統的な器種と思われる。

469 ～ 472 は信州系の土器群である。469 は壺の肩部片で、沈線による工字文風のモチーフに LR 縄文による充填が伴う。上下を列点で区画した縄文帯の存在が特徴的である。470 は鉢の胴部で、コの字状の区画が施文される。沈線は太く、LR 縄文を充填する。471・472 の 2 点は、壺の肩部および胴部下半と推測される同一個体片である。LR 縄文を地文としてやや太めの沈線で文様を描く。矩形のモチーフを主体として、曲線や連続する短沈線が付加されるのが特徴的である。

473 ～ 482 は、東北地方に由来する土器群である。474・476 ～ 480・482 は福島県の西麻生～今和泉式に位置づけられる。磨消縄文手法の発達が顕著で、弥生前期の変形工字文が三角形や菱形を基調としたモチーフに変化している点が特徴的である。476 はやや丁寧なミガキが認められるが、全般的に無文部の研磨が欠落する。抽出できた当該系統の土器はすべて深鉢で、地文は LR 縄文で統一されている。

473 は福島県の南御山 2 式の深鉢である。磨消縄文手法によって三角形のモチーフが描かれるが、鋭く細い沈線と無文部の丁寧なミガキが特徴的である。475 もまた無文部の研磨が著しい深鉢であるが、473 に比べて沈線が太い点が異なる。南御山 2 式あるいはそれより古くなるかも知れない。

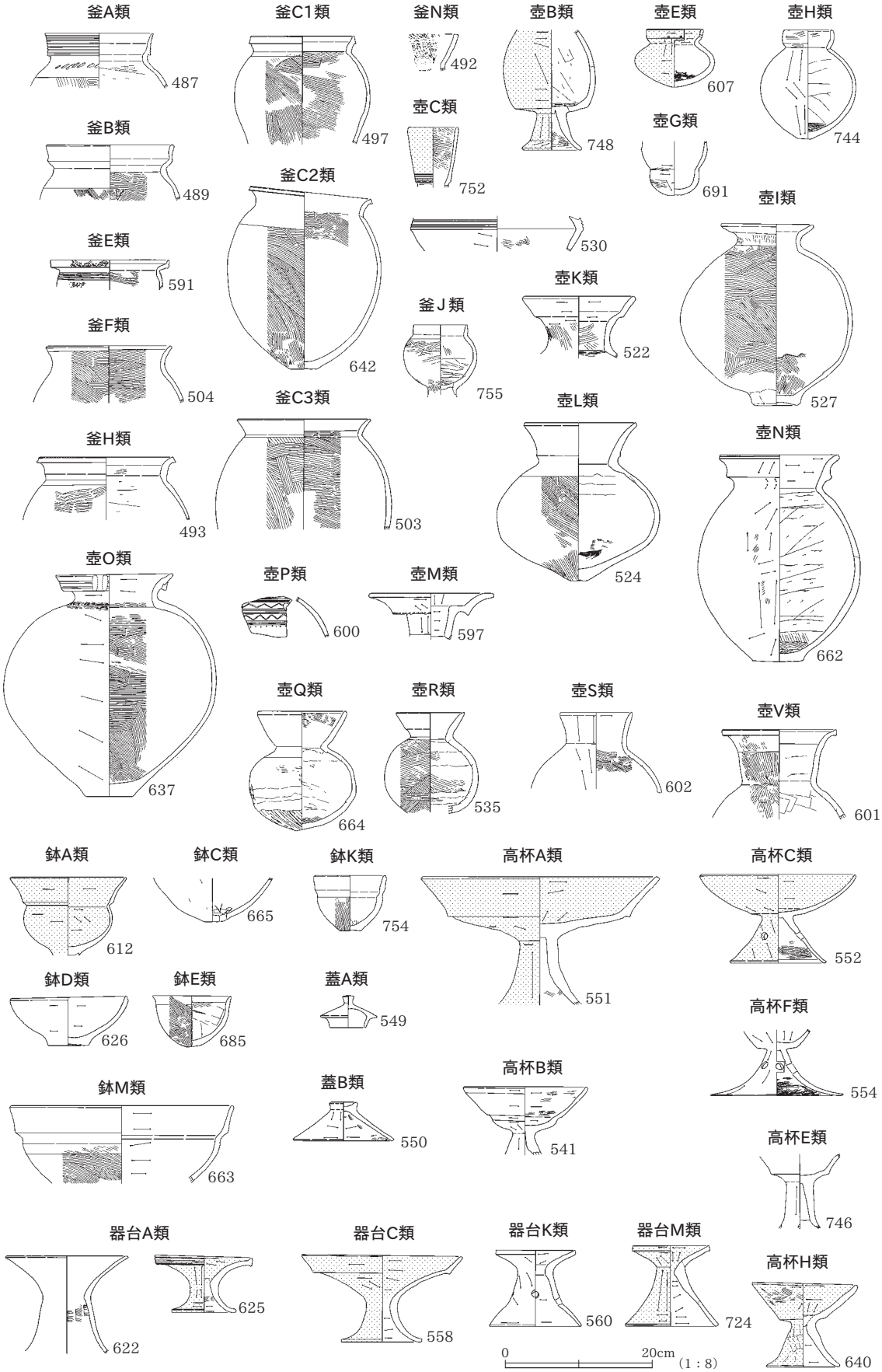
481 は高杯の杯部と推測される。楕円形の区画に沈線が付加される構図が特徴的で、区画内に LR 縄文が充填され無文部はやや弱いミガキが認められる。文様全体の構図が不明であるため詳細な検討はできないが、東北地方の「山王Ⅲ層式」かも知れない。

F　弥生時代後期～古墳時代

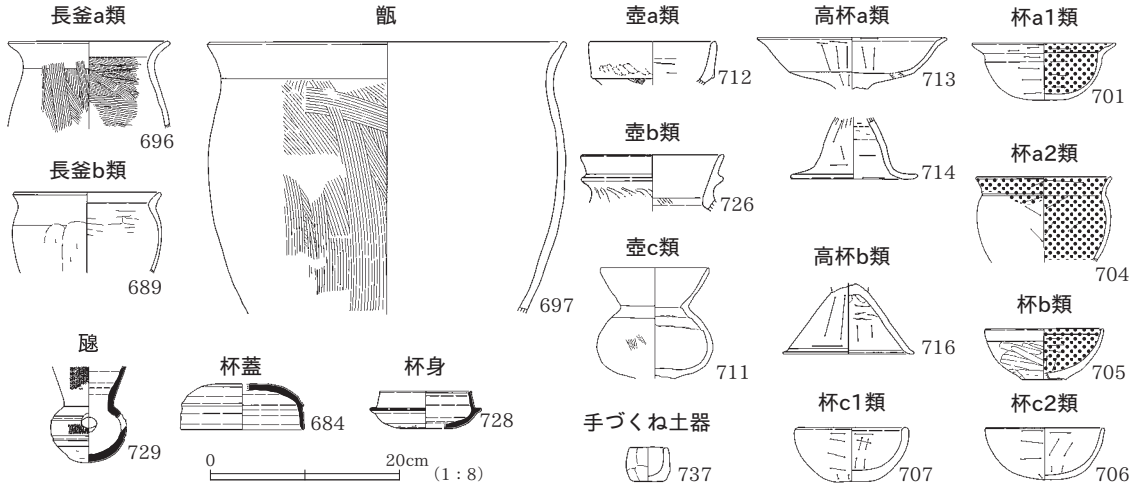
弥生時代後期～古墳時代の土器は、弥生時代後期前半、古墳時代早期～前期、古墳時代中期、古墳時代後期のものがある。量的には古墳時代早期～前期のものが多く、他の時期は少ない。弥生時代後期～古墳時代前期の土器分類は滝沢規朗の分類［滝沢 2005］、古墳時代後期の土器食膳具は相田泰臣の分類［相田 2004］を参考にした（第 7 表、第 15・16 図）。

SD50・51・83-3 層出土土器（図版 53 ～ 57　483 ～ 561）　SD50・51・83 は調査区中央付近を流れる一連の溝で、3 層は溝の最下層にある砂層である。

483 ～ 488・490 は有段口縁で口縁部に擬凹線が巡る釜で 484 ～ 488・490 は A 類、483 は C1 類に分類される。口縁部が短い 483、口縁部が長い 485 ～ 488、段が明瞭でない 490 などがある。内面に指頭圧痕があるものはない。体部内面はヘラケズリを行うものが多い。489・491 は有段口縁で口縁部が無文の釜 B 類。体部内面の調整は 489 がハケメ、491 はハケメ後ヘラケズリである。492 は天王山式の釜の口縁部破片で、釜 N 類である。493 は体部外面にタタキ痕が残る釜 H 類。内面にヘラケズリを行う。



第 15 図　弥生時代後期～古墳時代の土器分類



第 16 図　古墳時代の土器分類

弥生時代後期～古墳時代

釜	A類	有段口縁で口縁部に擬凹線が巡るもの。
	B類	有段口縁で口縁部が無文のもの。
	C類	在地系の「く字」・「コ字」口縁の釜。口縁端部が付加状口縁となるものを C1 類、口縁端部に面を持つものを C2 類、口縁端部が丸いものを C3 類とする。
	E類	近江に多くみられる受口状口縁の釜。
	F類	口縁部がハケメ調整で、口縁部にヨコナデをほとんど行わない釜。
	H類	胴部にタタキ調整を行う釜。
	J類	台（脚）が付く釜。
	N類	東北系の釜。
壺	B類	身が深く内彎して立ち上がる無頸壺。
	C類	扁平な胴部に細長い有段口縁が付く壺。
	E類	小型の有段口縁壺。
	G類	畿内系の小型壺。
	H類	東海系の瓢壺またはこれを模倣したもの。
	I類	「く」字単口端の壺。
	K類	細口有段口縁で頸部が長いもの。
	L類	細口有段口縁で頸部が短いもの。
	M類	頸部が直立する畿内系二重口縁壺。
	N類	頸部・口縁部が共に外反する二重口縁壺。
	O類	東海・近江系の二重口縁壺。
	P類	東海系のパレススタイル壺。
	R類	畿内系の長頸壺およびその系譜を引く可能性がある壺。
	S類	直立する短い口縁をもつ壺（短頸直口壺）。
	V類	あまり外反しない長い口頸部を持つ壺(広口長頸壺)。
鉢	A類	半球形の体部に外反する口縁がつく鉢(有段口縁鉢)。
	C類	底部に小孔がある鉢（有孔鉢）。
	D類	椀型の鉢。
	E類	小型で短頸の鉢。多様な形態のものがある。
	K類	体部と口縁部の境界に段があり口縁部が内彎して立ち上がるもの。
	M類	大型の有段口縁鉢。
高杯	A類	有段口縁で口縁部が外反・外傾して口縁端部にいたるもの。
	B類	半球形の杯部に外反する口縁がつくもの。A 類に比べ小型で深身のものが多い。
	C類	無段で口縁部が内彎する高杯（東海系高杯・東日本形高杯）。
	E類	棒状の脚部が途中で屈曲して大きく広がるもの（畿内系屈折脚高杯）
	F類	小さい杯部に大きく外反する脚部を持つ高杯（小型高杯）。
	H類	C 類と E 類の折衷的な要素を持つ高杯。
器台	A類	受部が無段の大型の器台とその系譜を引くもの。
	C類	受部が有段で脚部が無段の大型の器台。
	K類	受部が外反する小型器台。
	M類	受部が直線的に開き、口縁端部に面を持つ器台。

古墳時代後期

長釜	a類	体部外面にハケメ調整を行う長胴の釜。
	b類	体部外面にヘラケズリ調整を行う長胴の釜。
壺	a類	有段口縁の大型・中型の壺。
	b類	口縁部と頸部の境に凸帯は巡り有段口縁様となる大型・中型の壺。
	c類	球形の胴部に外傾するやや長い口縁部が付く小型の壺。
高杯	a類	脚部が途中で屈曲するもの。
	b類	脚部が「ハ」字状に広がるもの。
杯	a1類	口縁部が屈曲外形する杯のうち身が浅いもの。黒色処理を行うものが多い。
	a2類	口縁部が屈曲外形する杯のうち身が深いもの。黒色処理を行うものが多い。
	b類	底部が平底で口縁部が内彎するもの。
	c1類	丸底で口縁部が強く内彎するもの。黒色処理を行わないものが多い。
	c2類	丸底で口縁部が内彎するもの。C1 に比べ彎曲の度合いが弱く、器壁が薄い。黒色処理を行わないものが多い。

第 7 表　弥生時代後期～古墳時代の土器分類

口縁端部は面を持つ。

494 ～ 497 は「く」字口縁で口縁端部が付帯状となる釜 C1 類。496 は口縁端部に篦状工具による刻みが細かいピッチで巡る。498 ～ 502・505・506 は「く」字口縁で口縁端部に面を持つ釜 C2 類。内面の調整はハケメ・ナデ・ヘラナデなどでヘラケズリを行うものは、図化した中にはない。503・507 ～ 514 は「く」字口縁で口縁端部が丸くなる釜 C3 類。508・509 は体部内面にヘラケズリを行うが、他のものはハケメ・ヘラナデなどを行う。514 は外面に粘土の縮れがある。

515・516・520 ～ 539 は壺。515・516 は小型の壺である。515 は比較的大きな平底に算盤玉形の体部を持つ。有段口縁を持つ小型の壺 E 類となる可能性が高い。516 は畿内系の小型壺の系譜を引くものと考え壺 G 類とした。

520 ～ 525 は壺 L 類である。520・521 は口縁部に擬凹線が巡るが、他は無文である。526・527・528・538 は「く」字口縁の壺 I 類である。このうち 526 は口縁端部と頸部・胴部に円形竹管文を連続刺突がある。529 は渦巻き様の大きな円形浮文がある壺 M 類。530 は算盤玉形の体部に擬凹線がある凸帯を持つ壺 C 類である。535 ～ 537 は細い頸部から直線的に広がる比較的長い口縁部を持つ壺 R 類、539 は壺 N 類で、口縁部内外面に擬凹線が巡る。

517 ～ 519・540 は鉢。517 口縁端部付近がわずかに屈曲する。E 類に含めて考えた。518・519 は口縁部が内彎し、底部が平底の鉢 D 類である。540 は有段口縁となる鉢 A 類である。

541 ～ 548・551 ～ 557 は高杯。541・542・547 は口縁部が外反し杯部下半が内彎する高杯 B 類。このうち 541・542 は外反する脚部を持つ。547 の口縁下部には擬凹線が巡る。543・545・546・548・551 は高杯 A 類。このうち 546・548・551 は脚部が「ハ」字状に開く。544 は裾部が有段になるものである。552・553 は口縁部が内彎する大型の杯部を持つ高杯 C 類。556 は脚部が内彎することから C 類の脚部と考える。554・555・557 は小型の杯部に大きく広がる脚を持つ高杯 F 類。557 は外面に櫛描文による文様がある。

549・550 は蓋。549 は内面に返りを持つ蓋 A 類である。摘みはボタン状である。550 は返りが無く山笠状になる蓋 B 類。摘みは環状である。

558 ～ 561 は器台。558・559 は器高に比べ短い口縁部が外傾する器台 C 類である。560・561 は小型で受部がわずかに外反する器台 K 類である。560 には脚中位に円形の透かしが 4 個あるが、561 には透かしがない。

23 層出土土器（図版 57 ～ 61　562 ～ 628）　23 層は SD50・83 の南側の丘陵斜面に堆積する褐色ないしは灰色で、炭化物を多量に含む土層である。層位的には SD50･83-3 層の上位に位置する土層であるが、SD50・83-3 層と接合する土器も多い。

562 ～ 592 は釜。562 は有段口縁の口縁部に擬凹線がある釜 A 類である。口縁部内面に指頭圧痕はなく、体部内面はヘラケズリである。563・564 は有段口縁で口縁部外面に擬凹線が無い釜 B 類である。566 ～ 568・591・592 は口縁部が受口状となる釜 E 類である。566 は口縁部外面に擬凹線、体部外面には櫛描波状文や直線文がある。591・592 は口縁端部外面に櫛目文がある。

565・569 ～ 572・582 ～ 584 は「く」字口縁で、端部が付帯状口縁となる釜 C1 類。565 は口縁端部に擬凹線がある。569 は肩部に連続刺突が巡る。573 ～ 576・581・585 は「く」字口縁で口縁端部に面を持つ釜 C2 類、577 ～ 580・587 ～ 590 は口縁端部が丸い釜 C3 類である。C 類の体部内面の調整は、ヘラケズリを行うもの（569・585）もあるが、ハケメ・ナデ・ヘラナデが大半を占める。586 は

口縁部下端に刻みがあり、体部外面に撚糸文がある釜Ｎ類である。

593 ～ 608 は壺。593 ～ 596・606 は短い頸部に有段口縁が付く壺Ｌ類である。606 は器高が 20cm に満たない小型のものである。593 ～ 596 はこれより大型になる。593 は口縁部外面に擬凹線が巡る。

597 ～ 599 は壺Ｍ類。597 は口縁部下端に刻みがある。598 は口縁部下端付近に円形浮文がある。

600 は体部に直線文や鋸歯状文、円形刺突などがある。東海地方のパレス壺を模した壺Ｐ類である。601・602 は比較的長い口頸部を持つもので 601 は壺Ｖ類、602 は壺Ｓ類とした。601 は口縁端部をつまむ。603 は算盤玉型の体部に凸帯が巡る壺Ｃ類、604・605 は「く」字口縁の壺Ｉ類である。609 ～ 613 は鉢Ａ類で、611 は口縁部下端付近に擬凹線が巡る。618 は体部が内彎するもので、蓋Ｂ類である。

614 ～ 617・619 ～ 621 は高杯。614 ～ 616 は高杯Ａ類で、614 は口縁部外面に暗文風の鋸歯状文がある。617 は内彎する小型の杯部に大きく外反する脚が付く高杯Ｆ類、619 ～ 621 は高杯Ｃ類である。

622 ～ 625 は器台。622・625 は受け部・脚部が無段で受け部・脚部・裾部の境界が不明瞭な器台Ａ類である。623 は 622 と似た器形になるものと考えるが。脚部に段がある。624 は上部を欠き受け部の形態が不明だが脚部は無段である。626 ～ 628 は鉢。口縁部から底部にかけて内彎する鉢Ｄ類である。

SD50・51・83-1 層出土土器（図版 61・62　629 ～ 641）　23 層の上位に位置する黒色のピート層である。釜 C2 類（631）・釜 C3 類（630・632・633・636）、鉢Ｅ類（634・635）、壺Ｌ類（638）、壺Ｏ類（637）、高杯Ｃ類（639）、高杯Ｆ類（641）、高杯Ｈ類（640）、長釜ａ類（629）などが出土している。636 は口径 20cm を超える大型の釜で内外面ともヘラミガキを行っており、壺として分類すべきかもしれない。体部外面下部には、接合痕が明瞭に残る。638 の口縁部内面は屈曲が無く直線的である。639 は大型だが外面にハケメが残る。640 はヘラミガキ・赤彩を行う。

SD50・83（その他）**出土土器**（図版 62　642 ～ 644）　釜 C2 類（642）、器台Ｃ類（643）、高杯Ｆ類（644）がある。643 は口縁部が急激に立ち上がる。644 は内彎気味に広がり、外面に櫛描直線文･刺突文がある。

SD47 出土土器（図版 62　645・646）　SD47 は SD50 に連なる溝で SD46 を切る遺構である。釜 C1 類（646）と釜 C2 類（645）がある。645 は口縁端部に面を持つが胴部に張りがない。弥生時代中期の釜の可能性もある。646 は口縁部外面には擬凹線が巡る。2 点とも覆土 5 層からの出土である。

SD46 出土土器（図版 63　647 ～ 650）　SD50 に連なる溝で SD47 に切られる遺構である。釜 C1 類（647）・釜 C2 類（648・649）・壺（650）などが出土している。647 は内面にヘラケズリを行う。648・649 は同一個体と考える。口径 25cm を超える大型の釜で口縁部内面はヘラミガキを行う。650 は口縁上半を欠く。

SK85 出土土器（図版 63　651 ～ 654）　釜 C2 類（651）・釜 C3 類（652・653）・壺Ｍ類（654）がある。覆土 3 層からの出土である。651 は SD50-3 層からも破片が出土している。

SK70 出土土器（図版 63　655 ～ 660）　高杯Ｆ類（655）、鉢Ｄ類（656）、壺Ｌ類（657）、壺Ｇ類（658･659）がある。657 の有段部の屈曲はあまり明瞭でない。659 の口縁部は内彎する。660 は弥生時代中期の壺Ｃ×Ｅ類と考える。

SK55 出土土器（図版 64　661 ～ 665）　釜 C3 類（661）･壺Ｎ類（662）･鉢Ｍ類（663）･鉢Ｃ類（665）･壺Ｑ類（664）がある。662 は体部内面ヘラケズリを行う。663 は内面ヘラミガキを行うが外面はハケメが残る。664 の調整はハケメ・ナデなどでヘラミガキは行わない。

SD33 出土土器（図版 64　666 ～ 669）　SD50･51 と分岐し、8B 付近で再び SD50 に合流する溝である。釜 C3 類（666）・釜 C1 類（667・668）・器台（669）がある。667・668 は同一個体と考える。667 は口縁部外面に擬凹線がある。

SK40 出土土器（図版 64　670・671）　釜 C3 類（670）、釜 C2 類（671）が出土している。671 は体上部外面に連続刺突が 2 列巡る。

SK95 出土土器（図版 65　672 ～ 675）　SK95 は 1997 年度の調査で確認した遺構で、1994 年度に部分的に検出した SK49 と同一の遺構である可能性が高い。釜（672）・高杯（673 ～ 675）が出土している。SK49 からは釜（図版 68　717）が出土している。

21 層出土土器(図版 65　676 ～ 683)　21 層はⅦ層･20 層より下位でⅨ層より上位の土層である。Ⅷa 層･Ⅷb 層・23 層との上下関係は不明。釜 A 類（678）・釜 B 類（679）・釜 C3 類（676・677）・鉢 E 類（680）・高杯 F 類（681）・壺 I 類（682）などがある。678 の体部内面はヘラケズリである。676・677 は頸部の括れが弱く体部が張る。681 の外面は櫛描波状文がある。682 の頸部には円形の刺突列が密に巡る凸帯がある。

20 層出土土器（図版 65　684 ～ 687）　20 層はⅦ層の下位で 21 層の上位に位置する土層である。須恵器杯蓋（684）・鉢 E 類（685）・鉢 D 類（686・687）などがある。684 は天井部に回転ケズリを行う。

Ⅵc 層出土土器（図版 65　688 ～ 692）　Ⅵc 層はⅦ層の上位、Ⅵb 層の下位に位置する土層である。釜 C2 類（688）、長釜 b 類（689）、壺 N 類（690）、壺 G 類（692）、手づくね土器（691）などが確認できる。

SX88 出土土器（図版 66　693 ～ 716）　長釜 a 類（693 ～ 696）・甑（697）・杯 a1 類（698 ～ 703）・杯 a2 類（704）・杯 b 類（705）・杯 c 類（706 ～ 708）・鉢（709）・壺 c 類（710・711）・壺 a 類（712）・高杯 a・b 類(713 ～ 716)がある。長釜は体部に張りが無く長胴になる。693･694 は体部外面にヘラケズリを行う。杯は a 類に内面黒色処理を行うものが多く、c 類には少ない。高杯は古墳時代中期以来の伝統的な形式が確認できる。

その他の土坑出土土器（図版 67　717・718）　717 は SK49 出土の釜。SK49 は 1994 年度に検出した遺構で、1997 年度に検出した SK95 と同一の遺構である可能性が高い。SK95 からは図版 65　672 ～ 675 が出土している。718 は SK6 出土の釜。頸部の括れが弱く、体部はあまり張らず、口縁端部は丸い。

⑥層出土土器（図版 67　719 ～ 721）　釜 C1 類（719）・釜 C2 類（720）・小型の壺（721）などが出土している。719 は口縁端部外面に擬凹線が巡る。720 は体外面上部に刺突列が 2 列巡る。他に⑥層から出土した土器として 459・460・468 がある。

Ⅷa・Ⅷb 層、D 区 D 層出土土器（図版 67　722 ～ 724）　鉢 E1 類（722）･蓋 B 類（723）･器台 M 類（724）が確認できる。

Ⅵb 層･B 層出土土器（図版 67･68　725 ～ 745）　須恵器杯蓋(727)・須恵器杯身(728)・須恵器甕(729)・高杯 b 類（725）・壺 b 類（726）・小型の壺（730）・手づくね土器（731 ～ 739）・釜 C3 類（740）・釜 C1 類（741）・釜 B 類（742）・壺 V 類（743）・壺 H 類（744）・蓋 A 類（745）などが出土している。727 は天井部、728 は底部に回転ケズリを行う。729 は口縁部に櫛描波状文、体部に櫛目文がある。741 は口縁部下端と体外面上部に刺突列がある。

そ の 他（図版 68　746 ～ 756）　高杯 E 類（746）・鉢 C 類（747）・壺 B 類（748）・壺 M 類（749）・壺 O 類（750）・壺 I 類（751）・壺 C 類（752）・鉢 K 類（754）・釜 J 類（755）などが確認できる。

G　古　　代

主に V 層・Ⅵa 層から出土した。須恵器は杯蓋（757 ～ 759）・有台杯（760・761）・無台杯（762 ～ 767）・長頸瓶（768 ～ 770）・甕（771）がある。胎土は 757・758・760・762・767・770・771 を除

きＢ類である。土師器には無台椀（772・773）・長釜（775 ～ 777）・小釜（774）・鍋（778）が確認できる。年代は 757・760・771 が 8 世紀代に遡る可能性が高いが、他は 9 世紀前半から末頃のものと考える。

Ｈ　追　加　土　器

縄文時代前期の土器（図版 69　779 ～ 797）　779 は双頭の突起を持つ土器で、地文はループ文、口縁部と胴部に矢羽状の爪形列が巡る。780・781 は内外面に縄文が確認できる土器である。782 は口径 11.4cm の小型の土器、783 は内面に爪形が確認できる。784・785 は地文が網目状撚糸文である。786 は外面に条痕状の縦位の沈線がある。787 は非結束羽状のループ文である。788 は棒状工具の連続刺突による蕨手状文がある。789 は口縁部が小波状となり、地文はループ文である。790 は口縁部に凸帯がある。791 は口縁部に同一方向の 2 列の爪形列とコンパス文が巡る。地文は組紐である。792 は口縁部に無文帯が巡る。795 は口縁部に凹線様の多条の沈線が巡る。796 は内面に漆の焼き付けがみられる。797 は大型の平底で、外面に渦巻き状の爪形列がある。

その他の縄文土器（図版 69　798 ～ 800）　798 はⅩⅤa 層から出土した土器で、時期は中期後葉の可能性が高い。799 は外面に赤色漆を塗る。800 は口縁端部付近に結節回転文がある。

弥生時代中期の土器（図版 69・70　801 ～ 831）　釜Ｄ類（801）、壺Ｊ類（803・804）、壺Ａ類（806・807）、壺Ｂ類（808）、壺Ｃ類（810）、壺Ｅ類（811・812・814）、壺Ｄ類（813）、鉢Ｂ類（816 ～ 819）、鉢Ａ類（820）、把手（821）、脚部（823 ～ 828）、釜Ｃ類（829）、釜Ｂ類（830）、釜Ａ類（831）などがある。815 は断面形が楕円となる特異な形態の土器である。804 の口頸部は短く直立し、下端付近には凸帯がある。830 は肩部付近に円形浮文、細い櫛状工具による直線文・やや長めの斜行短線文がある。

弥生時代後期～古墳時代の土器（図版 71　832 ～ 850）　832 は口径約 30cm の大型の釜Ｃ類である。835 は壺Ｑ類もしくはＲ類で、胴部中位付近に焼成後の穴がある。836・838 は口縁端部に幅広の面を持ち、836 は擬凹線が巡る。843 は結合器台の受部、848 は段を持つ高杯の脚部である。849 は須恵器杯蓋で天井部はヘラケズリを行う。850 は、胴部中位付近に円孔を持つことから甑と考える。

Ｉ　土　製　品（図版 143　1 ～ 39）

土製品には、土鈴（1）・土偶（4）・土器片錘（5 ～ 15）・土錘（16 ～ 19）・紡錘車（20）・転用紡錘車（22 ～ 31）・土器片円盤（32 ～ 37）・支脚（38）・土製勾玉（39）がある。1 はⅩⅤb 層からの出土で、Ｘ線透過写真では内部に 5 個の土塊があり、振るとわずかな音がする。4 は縄文時代後期～晩期の土層と考えている D-2 層からの出土である。土器片錘は多く出土している。ⅩⅤc 層から出土するものがほとんどで、素材も縄文時代前期前葉の土器片を使用している。

土錘の出土例は少ないが、21 層や 23 層など古墳時代早～前期の土層から出土するものがほとんどである。

転用紡錘車は弥生時代中期の土器片を素材としているものが多いが、21 層や 23 層、SD50 など古墳時代の遺構や遺物包含層から出土しているものも多い。30・31 は中央の円孔が貫通しておらず、未成品の可能性がある。

3　石器・石製品

本遺跡からは、石器・石製品が浅箱で 243 箱出土した。総計 17,940 点におよぶ（ヒスイ以外の砕片は含まない）。

縄文前期前葉・後期～晩期・弥生時代の石器・石製品と古墳時代の石製品がある。

XV 層では「松原型」と呼ばれる石匙が特徴的である。石匙を含め剥片石器の石材は珪質頁岩が多く用いられるが、これは東北地方から成品として搬入されたものである。また、糸魚川産の蛇紋岩を使用して磨製石斧の生産も行われていた。XIII～XI 層では、柳葉型の片面加工に近い石鏃と、琥珀原石が特筆される。IX 層より上層では、緑色凝灰岩製管玉とヒスイ製勾玉の生産が特徴的である。ヒスイの総重量は 21.9kg で、これまで全国で最も多いと言われた上越市吹上遺跡の 2.4 倍という驚異の量である。ほかに、磨製石斧では搬入品の太型蛤刃石斧と扁平片刃石斧、柱状片刃石斧が揃って出土したことも特徴として挙げられる。

A　XV　層

XV 層から出土した石器群は、前期前葉の資料としては北陸地方有数の質と量を誇る。剥片石器の石材は阿賀北地域の利用状況とよく似ており、東北地方で製作されたと考えられる松原型石匙の存在を考えれば、東北方面からの影響を受けた石器群と考えられる。一方、磨製石斧・滑石製装身具の素材は糸魚川地域から搬入されたと考えられる。このように、XV 層出土石器群は、東北方面と北陸方面、双方からの影響を受けながら形成されたと考えられる。

1）帰　属　時　期

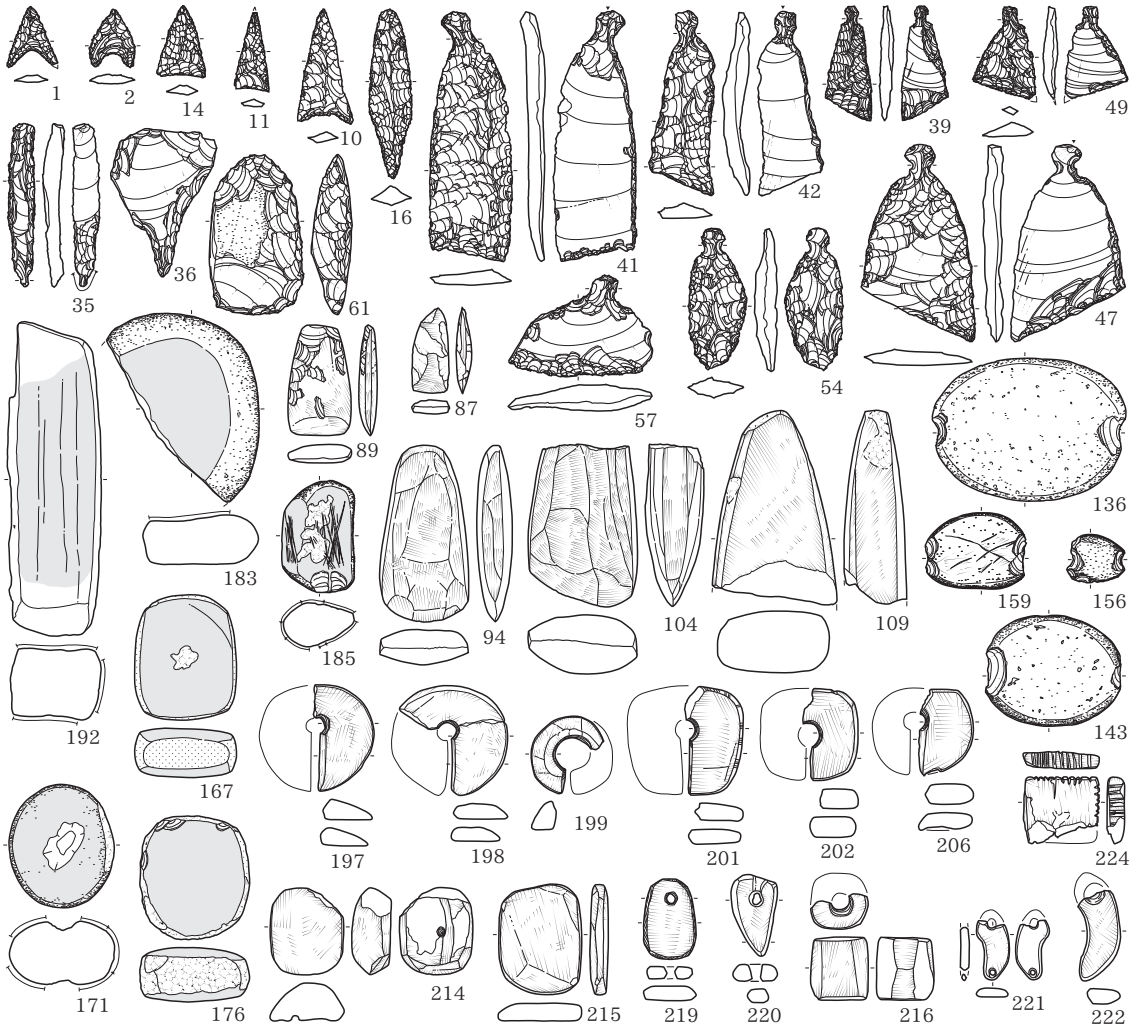
XV 層は、縄文時代前期前葉の土器が大半を占めることから、当該期の石器組成を極めて良く示すと考えられる。なお、層位不明のものも若干あったが、技術・形態・石材から XV 層に比定できると考えられた資料も、ここにあわせて報告する。

2）石　器　組　成

石鏃 20 点、石鏃未成品 68 点、尖頭器 1 点、石錐 8 点、石匙 34 点、石箆 6 点、石鋸 2 点、楔形石器 134 点、不定形石器 164 点、石核 3 点、異形石器 2 点、磨製石斧 80 点、磨製石斧未成品 121 点、剥片 2477 点、磨石類 447 点、石皿・台石 36 点、砥石 606 点、石錘 468 点、礫器 3 点、玦状耳飾 19 点、玉類 8 点、赤色顔料 716 点、原石 5 点からなる。

薄手で精緻な二次加工が施された珪質頁岩製の石鏃や松原型石匙［秦 1977・1991］が定量認められる。特に松原型石匙の数量は県内でも有数であり、東北地方との強い結びつきがうかがえる。蛇紋岩製磨製石斧の製作が盛んに行われており、素材から製品に至る一連の過程を示す資料と、工具である敲石・砥石が出土している。蛇紋岩は糸魚川から海路で搬入された可能性が高い。石錘が多いことも特筆されるが、これは当該期の特徴と言える。玦状耳飾等の石製品が充実することも特筆される。特に玦状耳飾の多さは県内 2 位であり、原産地（糸魚川）から離れた地で、これだけの数量を保有した背景については検討を要する。

また、剥片の数量に比して、石核が 2 点と異常に少ない。すなわち、遺跡内で剥片剥離が盛んに行わ



第 17 図　XV 層石器組成

れたとは考えにくく、素材剥片や成品・未成品として石器が搬入されたと考えられる。この状況から、遺跡周辺に原石産地がある可能性は低く、比較的離れた地点で素材や成品に加工して搬入されたものと考えられる。

3）石　材　組　成

点数で見ると、鉄石英が最も多い。ここには剥片石器も含まれるが、その多くは赤色顔料と考えられる原石である。XV 層と同時期に位置づけられる胎内市二軒茶屋遺跡においても多量の赤色顔料が出土している。当該期に赤色顔料が多用された実態を垣間見ることができる。赤色顔料の母材である鉄石英は、五十嵐川流域で採取できる。ちなみに五十嵐川沿いに立地する後期旧石器時代の荒沢遺跡では、国内最古の赤色顔料が出土している［小熊 2003］。出土した重量を考えれば、ことさら遠くから運搬されたとは考えにくく、比較的近距離を流れる五十嵐川流域からもたらされた可能性がある。

剥片石器では、凝灰岩・頁岩・珪質頁岩・流紋岩が多い。これらの石材組成は、阿賀野川流域以北または五十嵐川流域で採取可能な石材である。一方、遺跡から出土する剥片石器の石材構成という観点から見ると、下越地方における縄文時代の遺跡の状況に良く似る。また、良質な珪質頁岩で製作された「松原型石匙」という洗練された形態が、成品として搬入されている状況からは、東北地方や新潟県北部地域との

XV層	剥片石器　3120点　57.44%																									
	石鏃		石鏃未成品		石錐		石匙		尖頭器		石篦		石鋸		楔形石器		不定形石器		石核		異形石器		磨製石斧		磨製石斧未成品		剥片	
流紋岩	4	3.35	8	54.78			3	44.50					1	35.00	17	174.12	22	762.87									272	2908.62
凝灰岩	1	1.20	9	47.34	2	24.50	1	11.50			2	80.50			26	301.07	20	849.23	1	55.87			1	12.42	1	130.02	753	7995.32
頁岩	1	0.30	33	335.40	1	5.82					2	64.00			48	862.76	59	1544.46									639	8024.38
珪質頁岩	10	11.30	8	58.45	2	23.20	23	244.34			1	33.00			18	186.61	25	462.54									193	1894.35
玉髄	2	1.50	6	42.23	1	20.41	1	3.60							12	159.93	19	400.83	1	95.50							168	1933.90
メノウ			1	8.60																							2	1.49
チャート																											7	107.57
鉄石英			2	35.90	2	14.09	2	22.20			1	31.00			7	54.10	5	109.13			1	2.00					294	2914.51
黒曜石	1	0.50					2	19.24							5	122.77	4	19.83			1	11.74					8	41.84
ガラス質安山岩	1	0.50	1	3.50													2	26.33					1	22.50			8	101.50
緑色凝灰岩									1	27.00							1	8.00										
黒色頁岩							2	23.00							1	13.00			1	142.00								
粘板岩																												
礫岩																												
泥岩																												
砂岩													1	58.50			4	344.08									17	325.22
硬砂岩																							12	1914.16	11	2266.57	1	7.40
安山岩																	1	65.15					16	1733.27	21	4384.61	3	39.05
閃緑岩																							2	529.49				
花崗岩																									1	164.44		
ホルンフェルス																	2	124.87									4	119.17
片岩																												
蛇紋岩																							48	4236.31	86	13188.42	107	1795.01
石英																											1	31.41
滑石																												
不明																									1	176.93		
計	20	18.65	68	586.20	8	88.02	34	368.38	1	27.00	6	208.50	2	93.50	134	1874.36	164	4717.32	3	293.37	2	13.74	80	8448.15	121	20310.99	2477	28240.74
点数比（%）	0.90%		3.05%		0.36%		1.53%		0.04%		0.27%		0.09%		6.02%		7.37%				0.09%		3.59%		5.43%			

XV層	礫石器　1560点　28.72%										玉類　27点　0.50%				その他　725点　13.34%				計	
	石錘		磨石類		石皿・台石		砥石		礫器・類石棒		玦状耳飾		玉類		原石・赤色顔料		不明			
流紋岩	8	2065.98	16	8239.36			3	272.00	1	295.15									355	14855.70
凝灰岩	32	4812.55	9	3114.07	2	1005.00	92	12112.84	1	372.50									953	30925.90
頁岩	3	681.80	2	398.05			1	100.00											789	12017.00
珪質頁岩																			280	2913.79
玉髄																			210	2657.90
メノウ																			3	10.09
チャート			2	538.12															9	645.69
鉄石英															716	16365.12			1030	19458.05
黒曜石															2	26.50			23	242.40
ガラス質安山岩																			13	154.30
緑色凝灰岩																			2	35.00
黒色頁岩																			4	178.00
粘板岩	2	267.74																	2	267.70
礫岩	3	640.36																	3	640.40
泥岩	3	289.82																	3	289.80
砂岩	101	18321.66	24	6857.39	9	4540.00	480	73124.52											636	103571.40
硬砂岩			87	28478.29	1	1930.00													112	34596.40
安山岩	286	70717.89	255	85272.46	23	2685.48	30	5650.00	1	303.00									636	170850.90
閃緑岩																			2	529.50
花崗岩	24	5600.03	50	17004.71	1	1580.00													76	24349.20
ホルンフェルス	2	326.79	1	77.00															9	647.80
片岩	1	249.10																	1	249.10
蛇紋岩	3	909.24	1	178.05											1	95.50	1	4.00	247	20406.50
石英																			1	31.40
滑石											19	176.00	8	49.50	2	27.00	1	9.50	30	262.00
不明																	2	345.49	3	522.40
計	468	104882.96	447	150157.50	36	11740.48	606	91259.36	3	970.65	19	176.00	8	49.50	721	16514.12	4	358.99	5432	441308.32
点数比（%）	21.01%		20.07%		1.62%		27.21%		0.14%		0.85%		0.36%						100.00%	

※　各器種の左列は、点数（点）、右列は重量（g）を示した。
点数比は、二次加工が施されない石核・剥片・原石・不明を除いた 2227 点を母数として算出した。

第８表　XV層石器・石製品集計　※XVa 層を除く

関係がうかがえる。

蛇紋岩製の磨製石斧の製作工程品の出土も特筆される。蛇紋岩は、剥片石器とは正反対の糸魚川地域から海路で運搬されたと考えられ、海岸線沿いに磨製石斧の製作遺跡が点在する［鈴木 1998］。出土した未成品の数量から考えれば、当遺跡はその拠点のひとつと見られる。

黒曜石は、原産地分析を行っていないものの、外見は県内で類例のあまり見られない特徴的なものばかりである（66・76・79・81）。原産地推定を行えば興味深い結果を得られるかもしれない。

なお、当遺跡周辺の丘陵地を構成する礫層には、信濃川に由来すると考えられる石材が産出する。しかし、遺跡から剥片石器の原石や石核が少数しか出土していない状況を鑑みれば、それを利用した可能性は低い。ただし、重量がかさむ礫石器の石材は、ことさら遠方から運搬したとは考えにくく、これを利用していた可能性もある。

4）各　　説（図版 72 ～ 87）

石　　鏃（1 ～ 34・58）　石鏃の基本的な形態は、凹基無茎鏃である。両側縁が直線的で、やや縦に長い三角形をなす。基部の抉りは比較的小さく平坦に近いものが多いが、1 ～ 6 のように明らかに抉りを作出しているものもある。剥離は緻密で、内側にまで達するように施されることも特徴的である。高い技術を保持する集団が製作したことがうかがえる。このような状況は、当該期の特徴のひとつといえる。16・17 は有茎鏃である。16 は良質な珪質頁岩を用いていること、剥離が緻密であることを鑑みてⅩⅤ層に帰属する可能性が高いと判断した。17 は、当該期にあまり見られない形態であり、混入である可能性も否定できない。

石鏃は、成品として搬入品されたものがあるほかに、未成品（19 ～ 34）も存在することから遺跡内でも製作されていることが明らかである。素材剥片は石刃のような細長い縦長剥片ではなく、横長または寸詰まりなものが多い。未成品の中には、石鏃製作の初期段階を示すもの（33・34 など）から、全面が二次加工により覆われているもの（20・21・25・26・29・30 など）まで認められる。石核がほとんど出土していない状況を鑑みれば、剥片の状態で搬入され、二次加工が施され石鏃が製作されたと考えられる。なお、不定形石器に分類した 78・80 も、石鏃の未成品である可能性が考えられる。

石　　錐（35 ～ 38）　石錐は、大きく 2 種類に分類できる。棒状の 35 と、素材剥片の一端に錐部を作出する 36 ～ 38 がある。素材剥片も両者では異なり、35 は縦長剥片、36 ～ 37 は長幅比が 1 に近い寸詰まりな剥片である。前者は、両側縁を丹念に加工して棒状にした上で錐部を作出する。錐部には使用痕と考えられる光沢も認められる。後者は両側縁に加工が見られるものの、素材剥片の形状を著しく修正するようなものではない。錐部の作出に重点が置かれた二次加工が施される。

石　　匙（39 ～ 57）　石匙は、縦形の石匙（39 ～ 56）が主体であり、横形は 1 点（57）認められるのみである。縦形の多くは、いわゆる「松原型」［秦 1977・1991］である。その定義については、あいまいな面もあるが、秦昭繁氏が最も重視した表面加工の打面を準備する過程（裏面加工）に置くとすれば、39 ～ 49・51・53 が相当する。ただし、39 ～ 49 と 51・53 では、押圧剥離の深度が異なる。背面に残された素材剥片の剥離面が、前者ではより狭く、後者ではより広い。すなわち、前者の押圧剥離は深度が深く、二次加工によって素材剥離面が除去されている。両者では石材も異なる。前者が良質な珪質頁岩であるのに対し、後者は流紋岩である。前者ほど良質な珪質頁岩の剥片・砕片はほとんどなく、成品として搬入された可能性が極めて高い。一方、後者は素材剥片等が多量に出土している流紋岩であり、遺跡内で製作された可能性もある。石材の相違が、技術の相違に反映された可能性もあるが、このような状況を鑑みれば、そもそも製作者の技量の相違を反映したと考えるべきかもしれない。

平面形態においては、小刀の刃部のような明瞭な「角」が形成されるものと、「角」が形成されず木葉形をなすものとがある。前者は、松原型の大半と 50 が相当する。50 は裏面加工がないため、松原型に含めなかったものの、形態的には松原型とよく似ており、石材も良質な珪質頁岩である。「角」が形成される点は、松原型の特徴の一つといえよう。一方、後者は松原型の 46・53 と、松原型に含まれない 52・54・55 がある。木葉形をなすものは完全な左右線対称でなく、一方がより膨らみ、もう一方がやや直線的であり、半月形石器のような体部といえる。58 は尖頭器とも捉え得る形態であるが、後者の体部と形態が似ることから、石匙の未成品と考えた。なお、縦形の石匙の大半は縦長剥片を素材とするが、後者に該当する 53・55 は横長剥片を素材とする。また、56 は縦長剥片を素材とし、抉入部のみを作出し

たものである。

石　　箆（61 ～ 65）　61 ～ 65 は石箆としたが、典型的なものではない。石材は比較的緻密なものを用いており、石箆の石材選択に共通する。二次加工の状態は、両面調整のもの（62・64）、半両面調整のもの（63）、片面調整のもの（60・65）とバラエティーに富むが、いずれも片刃を意識して成形している。

楔形石器（67 ～ 76）　両極技法を経た形態の総称であるため、バラエティーに富む。両極技法を利用する目的の一つとして、厚さを減じることがある。楔形石器が最終形態ではなく、何らかの石器を製作する一過程と捉えたほうが適切である。法量的に考えると、石鏃製作との関係を想定することが、最も順当であろう。

尖 頭 器（60）　尖頭器に分類したが、半損品であり全容が不明である。尖頭器であれば、幅の広い木葉形をなすと考えられる。

異形石器（59・81）　59 は上半を欠損しているが、石材も鮮やかな朱色の鉄石英であり、ひときわ目立つ存在である。左右対称形に仕上げられているがモチーフは不明である。81 の下半部は左右対称形に仕上げられているが、上半部は非対称である。白濁した特徴的な黒曜石を素材とする。これもまたモチーフは不明であるが、下半部の作出方法には共通性も見出せる。

石　　鋸（84･85）　擦切具である石鋸である。いずれも砂岩製で、剥片の鋭利な端部に明瞭な使用痕（砥面）が認められる。石鋸は、縄文時代中期前葉以降の蛇紋岩製磨製石斧の製作、弥生時代の玉作における分割等に使用される。XV 層段階（縄文前期前葉）では、磨製石斧の製作で擦切は用いられず、これに対応する製作の痕跡は認められない。滑石製装身具（玦状耳飾の切目作出時等）や遺跡に残らなかった骨角製品の製作時に利用された可能性がある。また、223 は蛇紋岩製の石製品であるが、この製作には擦切技術が用いられている。対象物は明らかでないが、石鋸の存在は前期前葉に擦切技術が存在したことを示している。

磨製石斧（86 ～ 135）　磨製石斧は、遺跡内で製作を行っており、原石から成品に至る一連の工程品が認められる。磨製石斧は、小型・中型・大型の 3 種類に分類できる。破損品が大多数のため、原石産出地で磨製石斧を集約的に生産している糸魚川市大角地遺跡の分類を参考にする。報告書［加藤ほか 2006］では、大型品が長さ 10 ～ 15cm・幅 5 ～ 10cm ほど、中型品が長さ 5 ～ 12cm・幅 4 ～ 7cm ほど、小型品が長さ 4 ～ 5cm・幅 2.5 ～ 4cm ほどとされている。数値的には若干、相違も認められるが、大きく 3 種類に分類できることは当遺跡においても言うことができる。

小型品（86 ～ 93）は、いずれも片刃であり、鑿として利用されたものであろう。86 以外はすべて蛇紋岩製であり、中型品・大型品に比べて蛇紋岩への依存度が高い。硬く鋭い刃部を必要とすることから、蛇紋岩の利用に固執した可能性がある。また、92 の表裏面に残された剥離面の構成から、剥片素材であったことがうかがえる。大型品が破損し、再利用する際に副次的に生じた剥片を素材とした可能性もあろう。原石産出地から離れた土地における、石材の効率的利用を反映しているのであろう。なお、86 はガラス質安山岩の扁平礫を素材とし、刃部と両側面のみを研磨して成形したものである。使用石材が異質であるほか、全面を研磨しない点において、他とは全く異なる。破損品が多い中、中型と大型とを区別することは難しいが、おおむね 94 ～ 103 が中型、104・105・107 ～ 111 が大型品といえよう。中型・大型にも蛇紋岩が多用されるが、ほかにも安山岩・閃緑岩・硬砂岩も用いられる。この点は、蛇紋岩の利用に固執した小型品と決定的に異なる。

当遺跡では蛇紋岩製磨製石斧の製作が盛んに行われている。原石またはそれに近い状態で搬入されたことが 125 ～ 135 の資料から理解できる。その後、剥離（117･118･121 ～ 129）、敲打（119･120）、研磨（115･

116）を経て成品に至る一連の過程を示す資料がそろう。また、工具は砥石（189 ～ 194）が存在する。敲石は、磨石類の一部が充てられたことが想定されるほか、磨製石斧の未成品とした 125 の側面の敲打痕は敲石としての使用痕かもしれない。硬質な蛇紋岩の敲打整形には、それなりの硬度の石材が必要であり、蛇紋岩は磨製石斧の素材であると同時に、敲石としても搬入された可能性がある。

石　　錘（136 ～ 162）　扁平な円礫の長軸上両端を剥離し、抉りを作出することを基本形とする。157 のように短軸上両端を剥離する場合、158 のように長軸上・短軸上の 4 極 2 対を剥離する場合もあるが、イレギュラーなものである。159 ～ 162 には線状痕が認められる。断面形がＶ字をなすことから、鋭利な対象物との接触によって形成された使用痕と考えられる。しかし、これに対応する石器・石製品は存在せず、遺跡に残らなかった骨角器・木製品がその有力な候補となる。石材は、軟質な凝灰岩と頁岩であり、石器など硬質な対象物の研磨には効率的でない。このような石材選択の様子からも、骨角器・木製品といった対象物を想定することができる。また、161 のように、破損面周辺を研磨している事例もあることから、この種の石材は石錘と研磨具双方の用途に用いられたと考えられる。

なお、出土点数はXV層（XVa 層を除く）だけで 468 点にのぼる。北陸地方における早期末葉～前期前葉の遺跡においては石錘が多数出土する傾向にあり、当遺跡もこの傾向に一致する。他の層位からも多数の石錘が出土しているが、これも本来的にはXV層に含まれるものである可能性がある。これらも含めると、当遺跡から出土した石錘の総計は 784 点となり、北陸地方で最も多く石錘が出土した遺跡の一つとなる。この点数は、石川県甲・小寺遺跡の 700 点以上という数量と肩を並べる。

磨 石 類（163 ～ 180）　磨石類については、全ての層において共通の分類基準で分類した（第 18 図）。分類にあたっては、野地遺跡［加藤 2009c］を参考に行った。本遺跡でも、野地遺跡で「磨り潰し痕」とされた「磨面とは異なるやや荒れた平坦面」が数多く確認でき、磨痕･凹痕･敲痕との組合せで分類した。

Ａ類：磨痕･磨り潰し痕のみで構成されるもの。さらに、1 類:磨痕のみ、2 類:磨痕＋磨り潰し痕、A' 類:磨り潰し痕のみ、に細分した。

Ｂ類：凹痕が観察されるもの。さらに、1 類:凹痕のみ、2 類:凹痕＋磨痕、3 類:凹痕＋磨痕＋磨り潰し痕、4 類：凹痕＋磨り潰し痕、の 4 類に細分した。

Ｃ類：敲痕が観察されるもの。さらに、1 類:敲痕のみ、2 類:敲痕＋磨痕、3 類：敲痕＋磨痕＋凹痕、4 類：敲痕＋磨り潰し痕、5 類:敲痕＋凹痕、6 類:敲痕＋磨痕＋磨り潰し痕、7 類:敲痕＋磨痕＋凹痕＋磨り潰し痕、8 類：片端が敲痕でもう一端が磨り潰し痕のもの、に細分した。

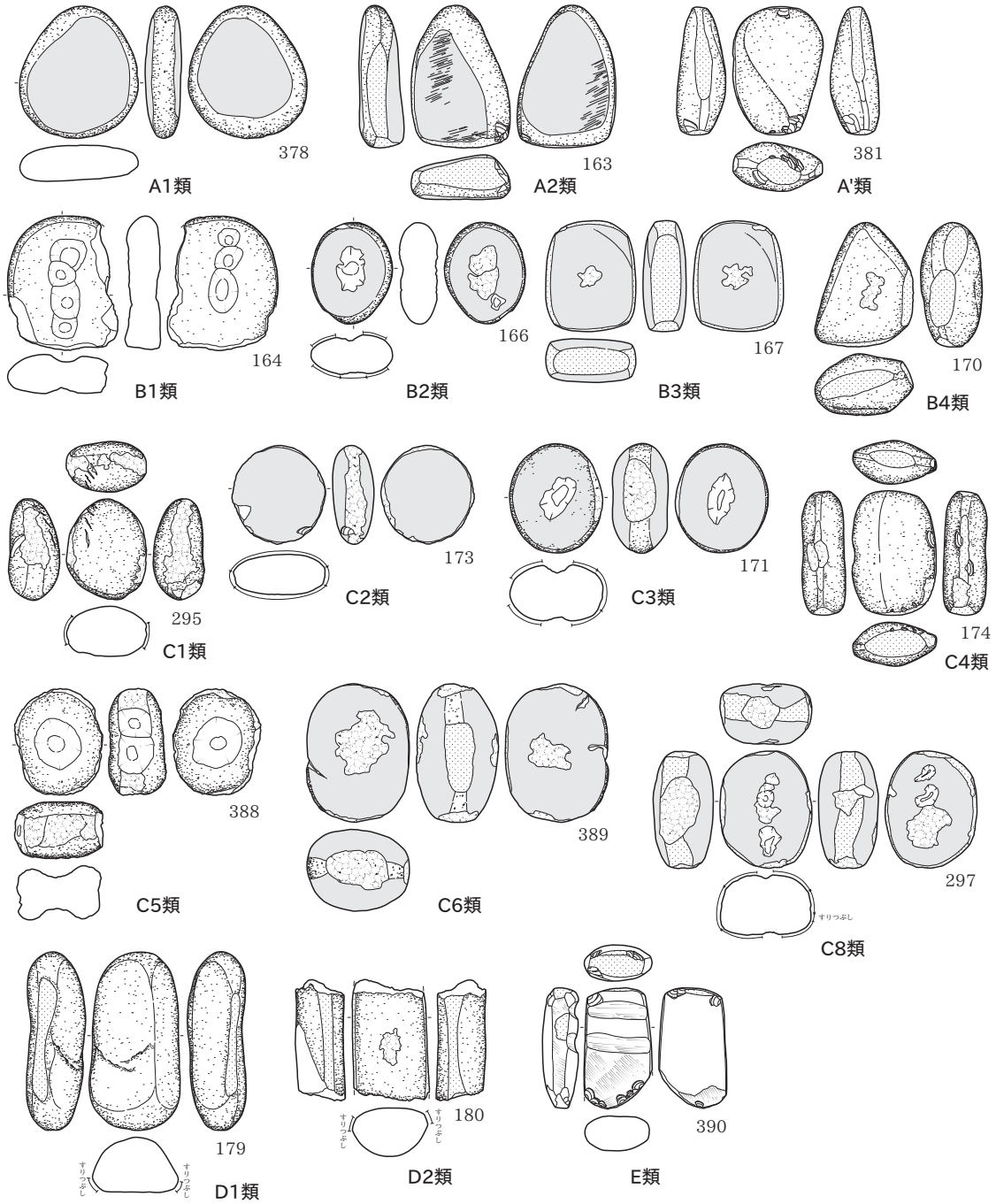
Ｄ類：柱状礫の稜の部分に細長い磨痕が認められるもの。いわゆる特殊磨石。さらに、1 類：磨り潰し痕のみ認められるもの、2 類：敲痕＋磨り潰し痕が認められるもの、の 2 つに細分した。

Ｅ類：磨製石斧を転用したもの。

XV層からは 447 点出土した。分類別の点数は第 9 表のとおりである。特定の分類が突出することはなく、各類とも偏りなく出土しているが、その中では A2 類、A' 類、B2 類、B3 類、C1 ～ C3 類、C8 類がやや多い。また、D 類はいわ

	安山岩	硬砂岩	砂岩	花崗岩	凝灰岩	頁岩	チャート	流紋岩	蛇紋岩	ホルンフェルス	計
A1	12			2		1					15
A2	18	5	1	2				3			29
A'	7	17	1	1				2			28
B1	2	2	3		2						9
B2	14		2	2							18
B3	17		1	3	1			1			23
B4		1			1						2
C1	2	15		2	1		1	2			23
C2	12			2	2						16
C3	10	2	1	3				3			19
C4		7	1				1	1			10
C5	2	4						1			7
C6	10	1		1							12
C7	1	2									3
C8	13	1	3	5	1			1			24
D1	4	3		1				1			9
D2	1	2									3
×	130	25	11	26	1	1		1	1	1	197
計	255	87	24	50	9	2	2	16	1	1	447

第 9 表　XV層磨石類の分類・石材別集計



第 18 図　磨石類の分類（S=1：6）

ゆる特殊磨石で縄文時代早期に特徴的なものであるが、XV 層から 12 点出土している。石材は、安山岩が 57%を占め、次いで硬砂岩 20%、花崗岩 11%、砂岩 5%となる。安山岩が約半数を占め、硬砂岩・花崗岩・砂岩がやや多いという状況は上層も同様である。

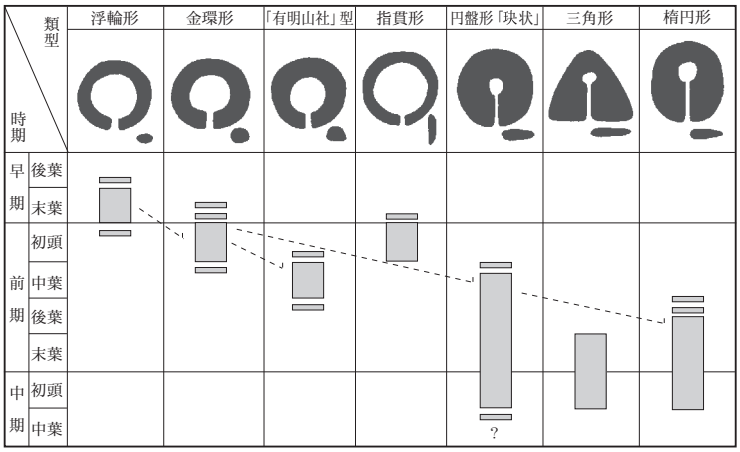
石皿・台石（181 ～ 184）　36 点出土した。完全な形をとどめたものはなく、すべて破損している。また、磨滅が著しい個体が多い。そのため、残存率の良いものは器種を特定できたが、それ以外のものは石皿・台石として一括した。石皿・台石と砥石の区別は、野地遺跡［加藤 2009c］に従い、ほぼ平坦な面を持つものを石皿、単位をもちながら湾曲し筋状の使用痕が認められるものを砥石とした。区別が困難な砂岩製のものについては台石が多く、石皿はわずかであった。石材は、砂岩が 25%を占めるが、安山岩が最

も多く約 64%で、これに花崗岩・凝灰岩・硬砂岩が少数加わる。

砥　　石（185 ～ 194）　595 点出土した。その中でも砂岩製のものは非常に脆く割れやすくなっている個体が多いため、この数字は現在数えられる破片等を数えた点数であり、当時の状態を反映したものではないことを予め断っておく。ただし重量をみても約 50kg あることから、かなり多量であると言えよう。このうち、砂岩製が約 79%を占める。砂岩は磨製石斧の研磨によく使用される石材であるといわれ、本遺跡から磨製石斧未成品が多く出土していることは、このことを裏付けるものと推測できる。

類 石 棒（195・196）　195 は破片であるが、ほぼ全面に敲打痕が認められ、頭部を丸く作出していることから、断定はできないが、類石棒の製作途中のものの可能性がある。石材は安山岩である。196 は断面形が略六角形を呈し、下部は欠損している。石材は流紋岩である。

玦状耳飾（197 ～ 215）　玦状耳飾は、縄文時代前期を代表する石製品である。その多くは加工が容易な滑石製であるが、当遺跡における玦状耳飾もすべて滑石製である。当遺跡からは 19 点出土しているが、この点数は県内で第 2 位（第 1 位は糸魚川市大角地遺跡の 57 点）の多さである［加藤 2010］。原石産出地から離れた地において、これだけの点数が出土したことに加え、製作途中の資料も出土しており、その意義について検討する必要がある。また、破損後に紐等で結束するために穿たれた二次穿孔［加藤 2009a･b］の多さも特筆できる。また、211・212 のように破損部分を研磨して、変形させる事例もある。これらは、原石を容易に入手できない環境においてしばしば見られる事象であり、成品を有効活用した結果といえる。



第 19 図　玦状耳飾編年模式図

当遺跡より若干先行すると見られる糸魚川市大角地遺跡と比べると、形態的なバラエティーに富み、相違点が多く認められる。最大の相違点は､外径に比して内径が小さいことである。大角地遺跡では浮輪形･金環形［川崎 2004］が圧倒的に多いのに対し、当遺跡では中央の孔が外形に比して小さい円盤形が主体をなす。加えて断面が D 字をなす有明山社型［藤田 1971］が特徴的に加わる。大角地遺跡とは異質な形態組成といえる。従前の変遷観［藤田 1983a・1983b、川崎 2004、加藤 2010］と比べると、前期前葉の資料としては外形に比して内径が著しく小さい。このような形態は、前期中葉ころから出現する形態と考えていた［加藤 2010］が、当遺跡に伴う土器の様相を勘案すれば、前期前葉までさかのぼることは確実であろう。

当遺跡においても少数ではあるが製作途中の資料が認められる。225 ～ 227 は研磨によって板状の素材を作出する過程、213・215 は円盤状素材を作出する過程、214 は中央部の穿孔と切れ目を作出する過程［加藤 2009a・b］を示す資料である。213・214 は扁平な円盤状素材であるのに対し、214 は断面 D 字形をなすものである。前者は円盤形、後者は有明山社型の素材と考えられる。なお、214 には中央の穿孔と切目作出の中途段階の資料である。近年、切目作出において糸鋸を用いたとする説が提唱されているが、もし、そのような過程を経た場合には 214 のような溝は形成されないと考えられる。

管　　玉（216 ～ 218）　いずれも半損しているため、穿孔部分をよく観察できる。両者とも、上下両端から回転穿孔していることが分かり、217 においては穿孔後、回転方向と直交する方向の擦痕が認められる。すなわち、回転穿孔したのち、棒状の研磨具で孔を仕上げたと考えられる。石材はいずれも滑石だが、216 は黒色不透明、217 は黄褐色半透明である。早期末葉以降の管玉には黒色の滑石があてられる傾向にあり、色を選択していた可能性がある。218 は角柱状を呈した管玉の素材と考えられる。色調は、黒色不透明で管玉に特徴的に用いられる石材である。

垂　　玉（219 ～ 222）　219 の垂玉は、楕円形の板状に仕上げた素材の一端に穿孔したものである。黒色の滑石を素材とする。大角地遺跡・富山県極楽寺遺跡の出土品に酷似するものがある。220 は黒色の滑石を素材とした三角形の垂玉である。221 は弧状の素材の両端部に穿孔が見られる。薄手で丁寧に仕上げられており、玦状耳飾の破損品からの転用とは考えにくい。「璜状頸飾」［谷藤 2004］である可能性もある。222 は勾玉形の垂飾である。大角地遺跡においては、犬歯をモチーフにしたと見られる勾玉が存在し、それと関連付けて考えることができよう。同様の形態は富山県極楽寺遺跡にも存在する。北陸地方における前期前葉には、勾玉形の垂飾が存在したことを裏付ける補足資料といえる。

その他の石製品（223 ～ 227）　223 は擦切技法によって素材が切り出された蛇紋岩製の石製品である。磨製石斧の基部である可能性も考えたが、XV 層段階にこのような細身・小型の磨製石斧は知られていない。したがって、不明石製品としたが、磨製石斧の可能性も否定できない。224 は四角形の板状に仕上げた素材の縁辺部に、刻みを入れている。225 ～ 227 は滑石の原石である。225・226 は求心的な剥離を行い、平面円形に整えたのちに研磨している。

XVa 層出土石器（228 ～ 239）

XVa 層から出土した石器の組み合わせは、基本的にXV 層に共通する。縄文時代中期に比定される層準であるが、基本的な組成は前期前葉との変化は認められない。

石鏃（228）は、凹基無茎鏃で内側まで深く剥離面が進入しており、精緻な作りである。石匙は、松原型（229･230）と横形（231）とがある。石篦（234）は、基本的に片面加工で断面形が「D」字形をなす。良質な珪質頁岩製であり、成品として搬入品されたと考えられる。232 は寸詰まりな剥片の両側縁に裏面から表面への二次加工が施された不定形石器である。スクレイパーと呼んでも良い形態である。礫器（233）は、亜角礫を素材とし、長軸上端部の表裏面に二次加工を施したものである。両刃礫器ではあるが、側面図を見てもわかるとおり片刃に近い形態である。礫面には線状痕が認められる。砥石にしばしば利用される凝灰岩製であることを勘案すれば、何らかの研磨に利用したもの考えられよう。砥石は 1 点図化した。明瞭な砥面はないが、砥石にしばしば用いられる石英粒を含む黄褐色の砂岩製である。石錘（236 ～ 239）は、扁平礫の長軸上両端部に抉りを作出したものである。大きさのバラエティーもXV 層出土石器に近似する。また、403 の表裏両面には鋭利な対象物との接触によって形成された線状痕が認められる。線状痕が認められる石材は、いずれも凝灰岩であり、きめが細かく軟質な石材である。何らかの道具の研磨具としても利用されたのであろう。

B　XIV　層

XIV 層、XIVb 層は青灰色の砂礫層で、縄文時代前期前葉の土器が多く混入しており、石器もXV 層に比定されるものと推測できる。

石器は 251 点出土した。剥片石器が 193 点で 66.9%を占め、そのうち約 90%は剥片である。

石錘 244 は、横長形態の A2 類であるが、表面左側のみ抉りが認められる。245 は表裏面に凹みが見られ、磨石類から転用されたことがうかがえる。砥石 248 は正面と右側面に平坦な面を持ち、鋭い線状痕が多く残っている。249 は明瞭な磨痕は認められないが、平坦面が広く残り、石皿と判断した。

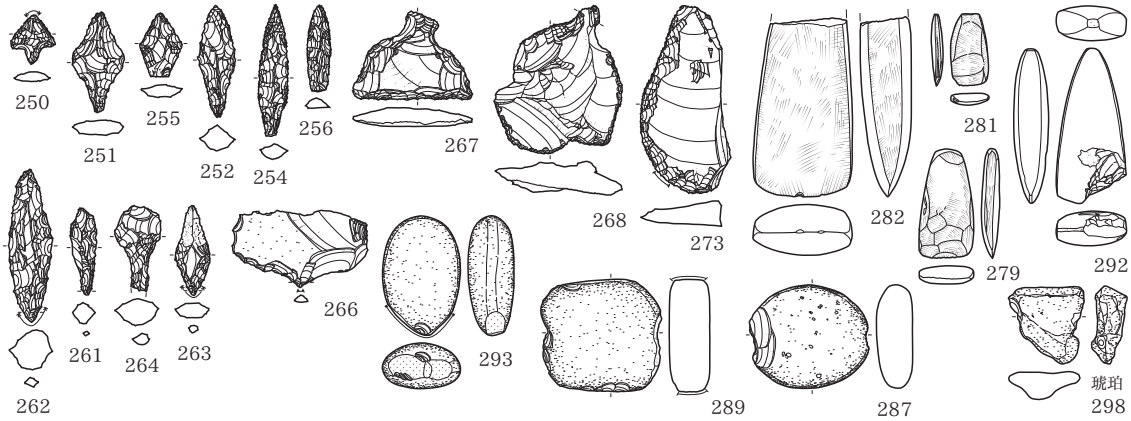
C　XⅢ　～　XⅠ　層

1）帰　属　時　期

XⅢe 層は縄文時代後期中葉（加曽利 B 式）に比定される。XⅢb 層は瘤付土器段階（後期末）、XⅢa 層は大洞 B・BC 式、XⅡa・b 層は大洞 C1 式を主体とする。XⅠ層までは縄文時代晩期の遺物が出土していることから、XⅢ～XⅠ層を縄文時代後期～晩期としてまとめて記述する。ただしXⅢe 層については、石器・石材組成のみ単独で示す（第 10 表）。

2）石　器　組　成

石器は 1487 点出土した。このうち、剥片石器が 1152 点で 77.6%を占める。石鏃（未成品含む）99 点、石錐 22 点、石匙 12 点、楔形石器 97 点、不定形石器 51 点、石核 27 点、剥片 774 点、磨製石斧（未成品含む）72 点、磨石類 138 点、石皿・台石 18 点、砥石 54 点、石錘 122 点、琥珀原石 1 点からなる。剥片を除くと、磨石類・石錘の多さが特徴的である。狩猟・漁撈具 221 点 > 調理具 168 点 > 採取・加工具 94 点で狩猟・漁撈具が多い。県内における石器組成の分析［鈴木 1999］の傾向とも一致している。



第 20 図　XⅢ～XⅠ層石器組成

3）石　材　組　成

第 10 表のとおりである。剥片石器については、前期と同様に珪質頁岩が最も多いが、成品を搬入するのではなく素材として使用している点では前期と異なる。珪質頁岩に次いで頁岩、凝灰岩、流紋岩と続き、多用される石材はXV層と同じである。礫石器でも前期同様、安山岩や砂岩、硬砂岩が多用されるが、花崗岩も一定量認められる。また、磨製石斧では前期に引き続き、蛇紋岩が多くみられ、糸魚川からの搬入品と考えられる。

XⅢ～XⅠ層	剥片石器　1152点　77.57%																				礫石器　332点　22.36%								0.07%		計	
	石鏃		石鏃未成品		石錐		石匙		楔形石器		不定形石器		石核		剥片		磨製石斧		磨製石斧未成品		石錘		磨石類		石皿・台石		砥石		原石			
流紋岩	7	8.87	17	122.80	4	43.38	2	20.51	21	263.69	9	199.73	1	572.61	96	1020.30					17	4507.89	9	2692.86							183	9452.64
凝灰岩	5	3.25	6	16.91	3	13.70	1	1.72	23	180.50	3	58.14	5	445.11	128	1201.08	2	16.71	1	24.70	7	1167.60	4	1052.20	2	1178.00	20	2007.00			210	7366.62
頁岩	8	7.78	9	81.08	7	177.48	1	3.77	16	173.76	20	666.80	8	877.53	185	2732.59					1	148.05	2	223.15							257	5091.99
珪質頁岩	14	9.14	18	164.14	4	23.26	3	35.23	23	197.59	15	193.90	6	151.37	212	1906.31															295	2680.94
玉髄	1	0.46	6	39.28	4	66.51			8	60.72	2	91.09	1	22.59	25	203.36															47	484.01
メノウ	1	0.33					2	7.02	1	0.73			3	127.60	2	11.21															9	146.89
チャート	2	3.29					1	21.60	2	46.72			2	389.20	3	364.01					2	199.05									12	1023.87
鉄石英	1	0.64							0						59	786.39							1	170.00							61	957.03
黒曜石	2	1.04							0						4	13.22															6	14.26
ガラス質安山岩	1	0.59					1	12.19	1	20.84	1	22.28			10	470.04															14	525.94
緑色凝灰岩							1	3.40	1	3.01	1	20.29	1	182.62	4	23.74															8	233.06
黒色頁岩																																
粘板岩																					1	223.05									1	223.05
礫岩																					1	27.42	4	1539.45							5	1566.87
泥岩																					1	88.05	1	200.00							2	288.05
安山岩																	4	590.24	6	1797.90	54	12799.30	68	25766.48	11	3983.00					143	44936.92
硬砂岩																	8	1157.01	4	499.89	4	589.20	25	6888.17		1970.00					41	11104.27
砂岩			1	10.72					1	75.28					2	76.35					22	3749.22	10	1582.98	4		34	4327.00			74	9821.55
花崗岩																					10	2224.31	10	3555.25							20	5779.56
閃緑岩																	1	360.79													1	360.79
ホルンフェルス																							2	360.10							2	360.10
蛇紋岩															44	404.64	23	1647.62	23	3509.74	1	235.05	2	404.15	1	850.00					94	7051.20
琥珀																													1	4.50	1	4.50
不明																					1	100.00									1	100.00
計	42	35.39	57	434.93	22	324.33	12	105.44	97	1022.84	51	1252.23	27	2768.63	774	9213.24	38	3772.37	34	5832.23	122	26058.19	138	44434.79	18	7981.00	54	6334.00	1	4.50	1487	109574.11
点数比％	6.13%		8.32%		3.21%		1.75%		14.16%		7.45%						5.55%		4.96%		17.81%		20.15%		2.63%		7.88%				100.00%	

XⅢe層	剥片石器　262点73.18%																				礫石器　95点　26.54%										計	
	石鏃		石鏃未成品		石錐		石匙		楔形石器		不定形石器		石核		剥片		磨製石斧		磨斧未成品		石錘		磨石類		石皿・台石		砥石		原石			
流紋岩									6	36.60	3	79.47	1	572.61	26	246.78					4	745.55	1	206.25							41	1887.26
凝灰岩			1	4.64	1	3.93	1	1.72	11	92.16	1	32.84	2	85.17	9	67.02					1	13.05					7	398.00			34	698.53
頁岩					1	79.77	1	3.77	5	60.97	5	102.55	1	62.50	55	772.24					1	148.05									69	1229.85
珪質頁岩	1	0.76	3	43.65			1	24.68	11	78.59	1	25.31			33	425.21															50	598.20
玉髄	1	0.46	2	11.22	1	56.26			3	32.47	1	13.15			7	50.83															15	164.39
メノウ																																
チャート															1	326.13															1	326.13
鉄石英															28	415.41							1	170.00							29	585.41
黒曜石	1	0.38													1	8.12															2	8.50
ガラス質安山岩															1	79.71															1	79.71
緑色凝灰岩											1	20.29			1	17.79															2	38.08
黒色頁岩																																
粘板岩																																
礫岩																					1	27.42	2	681.15							3	708.57
泥岩																																
安山岩																	2	420.88			21	5198.00	16	4301.35	2	435.00					41	10355.23
硬砂岩																	1	175.80	2	237.62	3	589.20	7	1723.29							13	2725.91
砂岩									1	75.28											5	970.35	2	204.15	2	849.38	12	1106.00			22	3205.16
閃緑岩																																
花崗岩																					2	610.86	4	1701.45							6	2312.31
軽石																																
ホルンフェルス																							1	98.05							1	98.05
蛇紋岩															7	77.00	18	1046.40	2	129.02											27	1252.42
琥珀																																
計	3	1.60	6	59.51	3	139.96	3	30.17	37	376.07	12	273.61	4	720.28	169	2486.24	21	1643.08	4	366.64	38	8302.48	34	9085.69	4	1284.38	19	1504.00			357	26273.71
点数比％	1.63%		3.26%		1.63%		1.63%		20.11%		6.52%						11.41%		2.17%		20.65%		18.48%		2.17%		10.33%				100.00%	

※　各器種の左列は、点数（点）、右列は重量（g）を示した。
　　点数比は、二次加工が施されない石核・剥片・原石を除いた点数（上段685点、下段184点）を母数として算出した。

第10表　XⅢ～XⅠ層・XⅢe層石器・石製品集計

4）分　　類

磨石類については、すべての層において共通の分類とし、使用痕を重視した。その他の石器については、XV層と、XIV層より上層（XIV層、XIIIe～XI層、IX層より上層）とで異なる分類としたため、本項で説明を行う。分類にあたっては、剥片石器は形態を、礫石器は使用痕を重視した。破損などにより分類不能なものは、観察表の分類欄に「×」と記載した。

石　鏃

分類は、基部の形状により行った［赤堀 1929・佐原 1964］。

A類：茎があるもの（有茎鏃）。さらに、凹基のものを１類、平基を２類、凸基を３類とした。

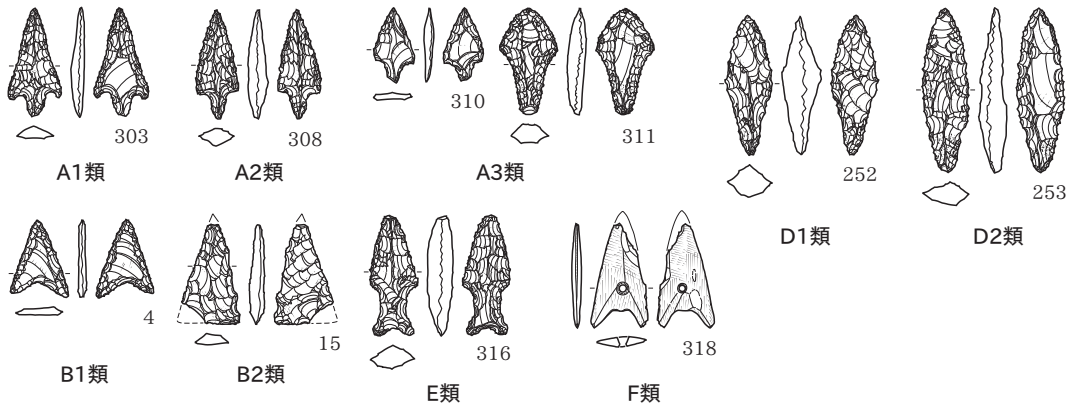
B類：茎がないもの（無茎鏃）。さらに、基部に抉りがあるもの（凹基無茎鏃）を１類、基部が平らなもの（平基無茎鏃）を２類とした。

C類：基部が丸みを帯びるもの（円基鏃）

D類：基部が尖っているもの（尖基鏃）。側縁が直線的なものを１類、外彎するものを２類とした。

E類：異形のもの

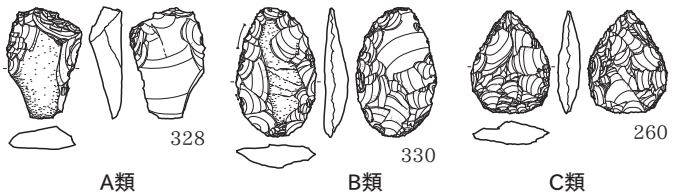
F類：磨製石鏃



第 21 図　石鏃の分類（S=1：2）

石鏃未成品

分類は、野地遺跡［加藤 2009c］、元屋敷遺跡［高橋ほか 2002］、北野遺跡［高橋ほか 2005］を参考に行った。ただし、A～Cは連続的であり、厳密に区別はできない。



第 22 図　石鏃未成品の分類（S=1：3）

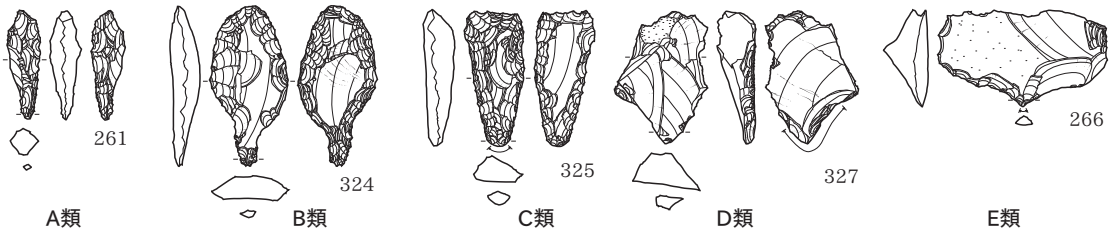
A類：素材の一側縁または二側縁に部分的な二次加工が施された段階

B類：素材のほぼ全周に粗い二次加工が施された段階

C類：B類の二次加工の上に、細かな二次加工を重複させた段階

石　錐

［鈴木 1996］等で「不定形石器D類」とされた、鋭利な先端部を持ち、刺突穿孔の機能（尖端部からの樋状剥離が見られるもの）を有すると考えられるものもこれに含めた。



第 23 図　石錐の分類（S=1：2）

錐部とつまみ部（頭部）の形状から分類した。

Ａ類：全体の形状が棒状で、二次加工はほぼ全面に及ぶもの。両面・両側縁加工を基本とする。

Ｂ類:つまみ状の頭部を有し、錐部とつまみ部の境が明瞭なもの。錐部はやや長く、両側縁加工が多い。

Ｃ類：錐部が次第に広がり、錐部とつまみ部の境が不明瞭なもの。二次加工の少ないものもある。不定形石器Ｄ類の一部がここに含まれる。

Ｄ類：明瞭なつまみ状の頭部を有するが、錐部が著しく短いもの。素材の形状を生かし、二次加工の少ないものが多い。不定形石器Ｄ類の多くがここに含まれる。

Ｅ類：石鏃を転用したもの。

楔形石器

分類は、両極剥離痕の状態から二分した。

Ａ類：上下二極一対の剥離痕を持つもの。その中で、素材の長さと剥離痕の関係から細分し、縦長のものを１類、横長ものを２類とした。

Ｂ類：上下および左右の四極二対の剥離痕を持つもの。

素材は礫素材のものと剥片素材のものがあり、楔としての石器、両極技法で得られた剥片・砕片、石鏃などの厚みを減ずるための二次加工の一部として用いられたものなどが含まれているものと考えられる。

なお､明らかに両極技法による石核は、石核として分類した。

不定形石器

二次加工や使用痕がある石器で、定型的でない石器を不定形石器とした。分類は、清水上遺跡［鈴木 1996］、五丁歩遺跡［高橋 1992］に従った。この中で、Ｄ類は石錐に、Ｋ類は石鏃未成品・石錐

分類	刃部形状			刃部ライン	素材	二次加工部位
Ａ類	スクレイパー 中型・急角度・連続剥離			－	縦長	側縁と端部
					横長	片側縁と底縁
Ｂ類	スクレイパー 中型・急角度・連続剥離			外彎状	縦長	片側縁と端部
					横長	底　縁
Ｃ類	鋸歯縁石器 大型・中型・急角度・鋸歯状剥離			直線状	縦長・厚手	片側縁
					横長・厚手	底　縁
				内彎状	縦長・厚手	片側縁
					横長・厚手	底　縁
				外彎状	縦長・厚手	片側縁
					横長・厚手	底　縁
	スクレイパーと鋸歯縁石器の複合形			－	厚手	－
Ｄ類	鋭利な尖端部をもつ石器	大型・急角度剥離		直線状	厚手	片側縁（一方の側縁は古い剥離面や折断面等を利用する）
				内彎状	厚手	
		大型・浅角度剥離		直線状	厚手	片側縁（D1類と同じ）
						両側縁
				内彎状	厚手	片側縁（D1類と同じ）
						両側縁
		小型剥離		直線状	厚手	片側縁（D1類と同じ）
				内彎状		両側縁
				直線状	薄手	両側縁
				内彎状		
Ｅ類	抉入石器（ノッチ）	大ノッチ	大型・中型・急角度剥離	内彎状	横長・厚手	側縁
					横長・厚手	底縁
			大型・中型・浅角度剥離		縦長	側縁
					横長	底縁
		小ノッチ	中型・急角度剥離	内彎状	縦長	側縁
					横長	側縁・底縁
			小型剥離		縦長	側縁
					横長	側縁・底縁
Ｆ類	中型・小型・急角度・不連続剥離			－	縦長	側縁
				端部に丸味	縦長	側縁と端部
				－	横長	底縁
						側縁
						底縁と側縁
Ｇ類	大型・中型・浅角度剥離			直線状	縦長	側縁
					横長	底縁
				外彎状	縦長	側縁
					横長	底縁
Ｈ類	無加工（使用痕的微細剥離・使用痕）小型・浅角度剥離			外彎状	背面は自然面 横長	底縁
Ｉ類	端部に小型・連続剥離			端部に丸味	横長・薄手	端部
					横長・薄手	
Ｊ類	無加工（使用痕的微細剥離・使用痕）			－	縦長	側縁
					横長	側縁・底縁
Ｋ類	両面加工（調整）石器（刃部平面形は波状、側面観はジグザグ状）			外彎状	薄手	

※ゴシック以外の明朝体は、一般的傾向を表したものが多い

第 11 表　不定形石器の分類（［鈴木 1996］より転載）

未成品として器種認定し、不定形石器から分離した。

石　核

分類は、北野遺跡［高橋ほか 2005］・五丁歩遺跡［高橋 1992］を参考に行った。

Ａ類：一つの打面から一つの剥離作業面に、同方向の剥離が施されるもの（打面１面、剥離作業面１面）

Ｂ類：一つの剥離作業面に複数の打面（約 90°・180°ずれる）から剥離が施されるもの（打面２面以上、剥離作業面１面）

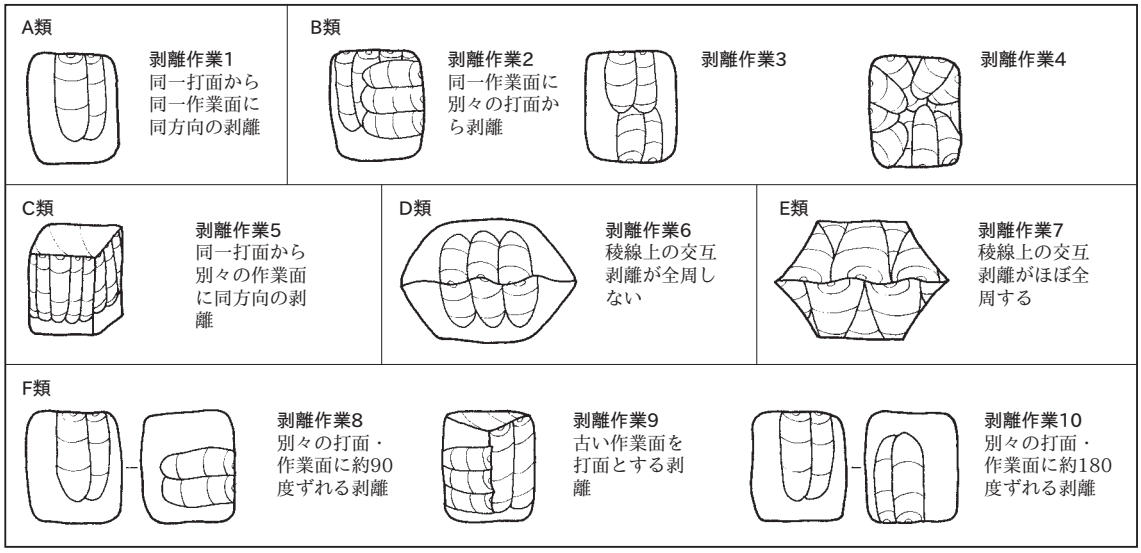
Ｃ類：一つの打面から複数の剥離作業面に、同方向の剥離が施されるもの（打面１面、剥離作業面２面以上）

Ｄ類：石核の稜線上からの交互剥離による剥離が施されるもの。稜線上の片面を剥離した後、その剥離面を打面として残りの片面に剥離を行い、剥離作業は全周しない。

Ｅ類：Ｄ類同様、石核の稜線上からの交互剥離による剥離が施されるもので、剥離作業が全周するもの。

Ｆ類：複数の打面と複数の剥離作業面で剥離が施されるもの（打面２面、剥離作業面２面）。

Ｇ類：両極技法による剥離が行われるもの。



第 24 図　石核の分類（［高橋ほか 2005］より転載）

磨製石斧

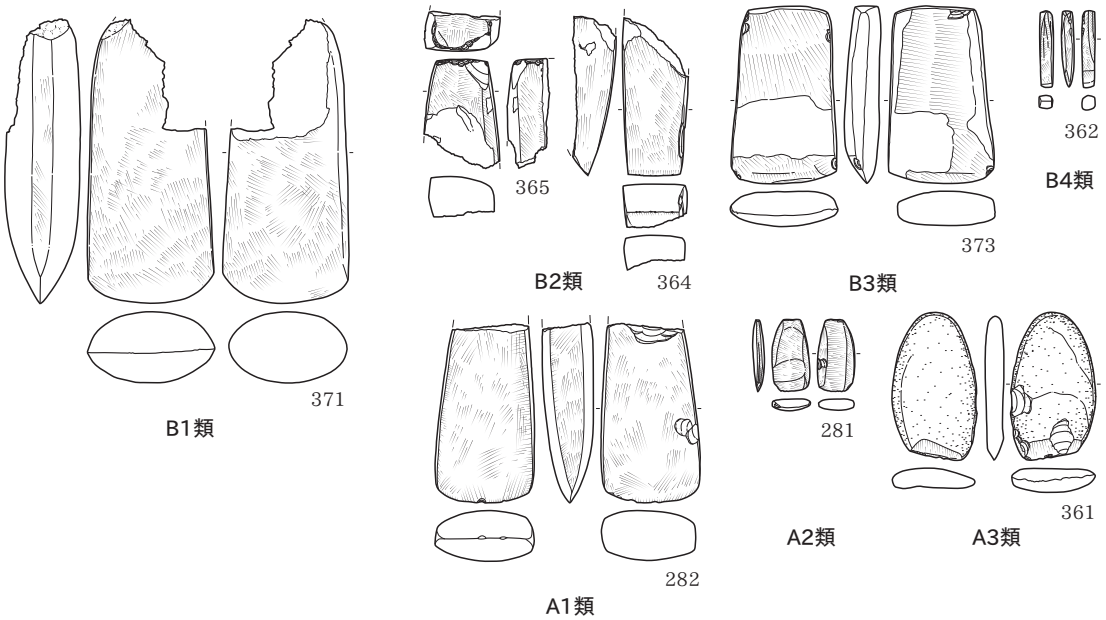
縄文時代からの系統をひくものと大陸系の磨製石斧に系統をひくものの二つに大分できる。よって、基本的にⅩⅣ～ⅩⅠ層のものはＡ類のみとなる。破片資料は分類不能とした。

Ａ類：縄文時代からの系統のもの。刃部幅に対し、基部幅が狭い。３つに細分した。

１類：定角式磨製石斧。両側縁及び基部が研磨され、横断面は長方形または隅丸長方形、刃部は両刃となる。２類：小型磨製石斧。１類と比較して小型のもの。おおむね長さ 60mm、幅 35mm 以下であり、両側縁及び基端が研磨される。３類：定角式でないもの。横断面形は楕円形を呈し、刃部のみ研磨されるもの。

Ｂ類：大陸系磨製石斧の系統のもの。４つに細分した。

１類：太型蛤刃石斧。側縁が平行で基部に厚みを持ち、断面形は楕円形または扁平長円形を呈する。側面観は膨れた蛤のような形状で、両刃となる。２類：柱状片刃石斧。丁寧に研磨され、正裏面と側面に鋭い稜を有する。抉りを持つものと持たないものが存在する。３類：扁平片刃石斧。幅広で、厚みはない。



第 25 図　磨製石斧の分類（S=1：4）

4 類：小型方柱状石斧。柱状片刃石斧を小型にした形態のもの。鑿形石器ともいう。本遺跡では、片刃のものと両刃のものがある。

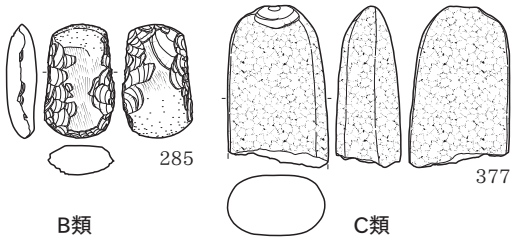
磨製石斧未成品

XV 層とは異なり小規模ではあるが、製作している。素材はいずれも扁平礫である。製作過程を、剥離成形→敲打整形→研磨と想定し、制作過程の進捗状況から分類した。なお、A ～ C は連続的であり、必ずしも明確に分類できるものではないことを断っておきたい。

A 類：外周の 1 ～ 3 割程度しか調整剥離が進行しておらず、素材の礫面が 5 割以上残るもの（成形段階）。

B 類：おおむね外周の 5 割以上に粗い調整剥離が施されるもの（成形段階）。側面には敲打により平坦面が形成されるものもある。

C 類：成形段階の粗い剥離面の上に、細かい剥離面や敲打が著しく重複する。ほぼ磨製石斧の外形が整えられているもの（整形段階）。



第 26 図　磨製石斧未製品の分類（S=1：6）

石　錘

分類は、大角地遺跡［加藤ほか 2006］を参考に行った。

A 類：扁平礫の一方の軸に剥離によって糸掛けを作り出すもの。糸掛けが作出される軸の長短によりさらに細分し、1 類：長軸に糸掛けを作出するもの、2 類：短軸に糸掛けを作出するもの、3 類：長幅比が同じで長軸・短軸の区別ができないもの、とした。

B 類：扁平礫の二方の軸に剥離によって糸掛けを作り出すもの。

C 類：敲打によって糸掛けを作り出すもの。

5）各　　説（図版 89 ～ 92）

石　鏃（250 ～ 260）　42 点出土した。分類別の出土点数は、A2 類 1 点、A3 類 2 点、B1 類 19 点、B2 類 6 点、D1 類 3 点、D2 類 3 点である（分類不能としたものは、数を記さない。以下の器種も同様である。）平基のものが多く、その中でも抉りを持つ B1 類が多数を占めるが、そのうち数点は形態や石材、技術から縄文時代前期に帰属する可能性がある。250 は長幅比が 0.9 で寸詰まりな印象である。256 は流麗な柳葉形を呈する。最大径が中間にあり、くびれがない形態であまり類例のないものである。断面形は D 字状で裏面は平坦、先端のみ加工しているが、片面加工に近い。基部は衝撃剥離痕が認められる。全体の 1/3 ほどまでアスファルトが付着している。なお、42 点中 11 点の基部にアスファルトの付着が認められる。石材は珪質頁岩が 30%、頁岩が 19%を占め、流紋岩が約 17%と続く。257 ～ 260 は未成品である。全体では 57 点出土した。分類別の出土点数は、A 類 23 点、B 類 18 点、C 類 9 点である。B 類の段階までは素材剥離面が観察できるが、横長剥片の長軸を石鏃の長軸として、打面を側面側に置き二次加工を行うものが多く認められる。石材は成品同様、珪質頁岩が 30%で最も多いが、流紋岩もほぼ同率である。

石　錐（261 ～ 266）　22 点出土した。分類別では、A 類 3 点、B 類 2 点、C 類 6 点、D 類 11 点である。266 のように、二次加工の少ない簡素な形態のものが多い。石材別では多寡なく出土しているが、頁岩が 31.8%で最多である。

石　匙（267・268）　12 点出土した。数が少ないため細分類は行わない。大型のもの（268）や横長のもの（267）が認められる。石材別ではそれぞれ 1 ～ 3 点と偏りなく出土し、石材は 8 種類にのぼる。

楔形石器（269 ～ 271）　98 点出土した。分類別では A1 類が 51 点、A2 類 18 点、B 類 27 点で、縦長の A1 類が半数を占める。石材別では珪質頁岩と凝灰岩が最も多く、流紋岩、頁岩と続く。

不定形石器（272 ～ 276・278）　51 点出土した。分類別では A 類・B 類が各 2 点、C 類 9 点、E 類・G 類各 4 点、F 類 12 点、I 類 1 点、J 類 10 点である。石材別では頁岩･珪質頁岩で 7 割近くを占め、流紋岩、凝灰岩、メノウなどが少数ずつ存在する。273 は A 類で、縄文前期のエンドスクレイパーに近似しており、東北地方の印象が色濃い。石材も同地方の珪質頁岩である。東北との結びつきがうかがえる資料である。

横長剥片を素材とするもの（272・274・275）は、90°前後方向を変えて石鏃未成品にする例がある［鈴木 1992］ことから、石鏃未成品の可能性があることを指摘しておきたい。

石　核（277）　27 点出土した。分類別の点数は A 類・C 類各 1 点、B 類・G 類が各 3 点、D 類 7 点、E 類 2 点である。分類不能が最も多く、打面や剥離作業が定型的でないことがうかがえる。

磨製石斧（279 ～ 285）　36 点出土した。当該期の定型である A1 類が、当然ながら圧倒的に多く 29 点、A2 類が 6 点である。石材は蛇紋岩が 64%を占め、安山岩、硬砂岩が数点ずつという状況である。284・285 は未成品である。全体では 34 点出土した。分類別の出土点数は A 類 10 点、B 類 13 点、C 類 2 点である。石材別では成品と同じ傾向がうかがえる。

石　錘（286 ～ 289）　137 点出土した。分類別では A1 類が 104 点で圧倒的に多く、A2 類 8 点、B 類 4 点、C 類 5 点である。石材別では安山岩が 55%でその後凝灰岩が 9.5%、砂岩と硬砂岩がそれぞれ 8%と続く。石材組成は縄文前期とほとんど変化がない。286 は幅 43.5mm で小型であるが、この 1 点のみの出土である。289 は磨石類を転用したもので、上下面に磨り潰し痕、左右側面に敲打痕が観察できる。正面の磨痕は不明瞭である。

磨 石 類（290 ～ 297）　136 点出土した。分類別では A 類 22 点（A1 類 9 点、A2 類 11 点、A' 類 2 点）B

類 20 点（B1 類 3 点、B2 類 11 点、B3 類 4 点、B4 類 2 点）、C 類 42 点（C1 類 19 点、C2 類 8 点、C3 類 9 点、C4 類･C5 類各 1 点､C6 類 2 点､C8 類 2 点）､E 類 5 点である。破片が多いことから分類不能の点数が多くなっている。石材別では安山岩が 50%で半数を占める。そのほか硬砂岩・砂岩・花崗岩・流紋岩・礫岩・凝灰岩・頁岩・蛇紋岩・ホルンフェルスがあり、様々な石材を使用している。292 は定角式磨製石斧(A1 類)の転用品で、磨製石斧では刃部に比して基部幅が狭い形態である。上部（基部）と下端（刃部）、正面に敲打痕が見られる。293 は先端を尖らせるように V 字状となっている。A' 類では下面を平坦にする形態が多く、このような形態は珍しい。296 は上面が敲打、下面が磨り潰しである。下面周縁には使用の際にできた剥離痕が並ぶ。297 は C8 類である。表裏面には磨痕と凹痕、上下左右の端面には敲打痕、側面には磨り潰し痕が見られる。

琥珀原石（298）　琥珀原石が 1 点出土した。ほとんどが礫面または風化面に覆われていたが、内側は赤色・透明であることを確認、水に浮いたことから琥珀と判断した。出土層位から後期終末に位置づけられると考えられる。これまでの県内における琥珀の出土例は、和泉 A 遺跡（上越市・前期前葉）、大久保遺跡（上越市・前期前葉）、馬高遺跡（長岡市・中期後葉）、青田遺跡（新発田市・晩期終末）、野地遺跡（胎内市・後期末～晩期前葉前半及び後期中葉～後葉）がある。和泉 A・大久保が丸玉、馬高が大珠、青田が砕片、野地が原石であり、いずれもややくすんだ赤色で透明な原石を用いている［加藤 2003］。これらすべてを植田直見氏（元興寺文化財研究所）が赤外吸収スペクトル分析を行っており、銚子産原石とよく似た波長を示すという結果が得られてきた。しかし、当遺跡出土資料の分析においては、岐阜県瑞浪産の可能性が出てきた。そこで、これまでのデータを見直したところ、野地遺跡・青田遺跡の資料も瑞浪産である可能性があるとされた。当遺跡及び野地遺跡・青田遺跡の資料は、いずれも縄文時代後期・晩期の資料であり、この時期に銚子以外に瑞浪の原産地も開拓された可能性がある。

石　　皿（299）　18 点出土しているが、すべて破片資料である。

類 石 棒（300）　1 点のみ出土した。石材は粘板岩で、薄く剥がれるように剥落している。断面は台形に近い。下部は剥離によって斜めに整形している。第 28 図 4（61p）は、安山岩製で頭部を丸く作出し、上部にわずかながら抉りが認められることから石棒の可能性が高いと考える。表面は風化が進んでいる。数か所あるキズはガジリ痕と判断される。

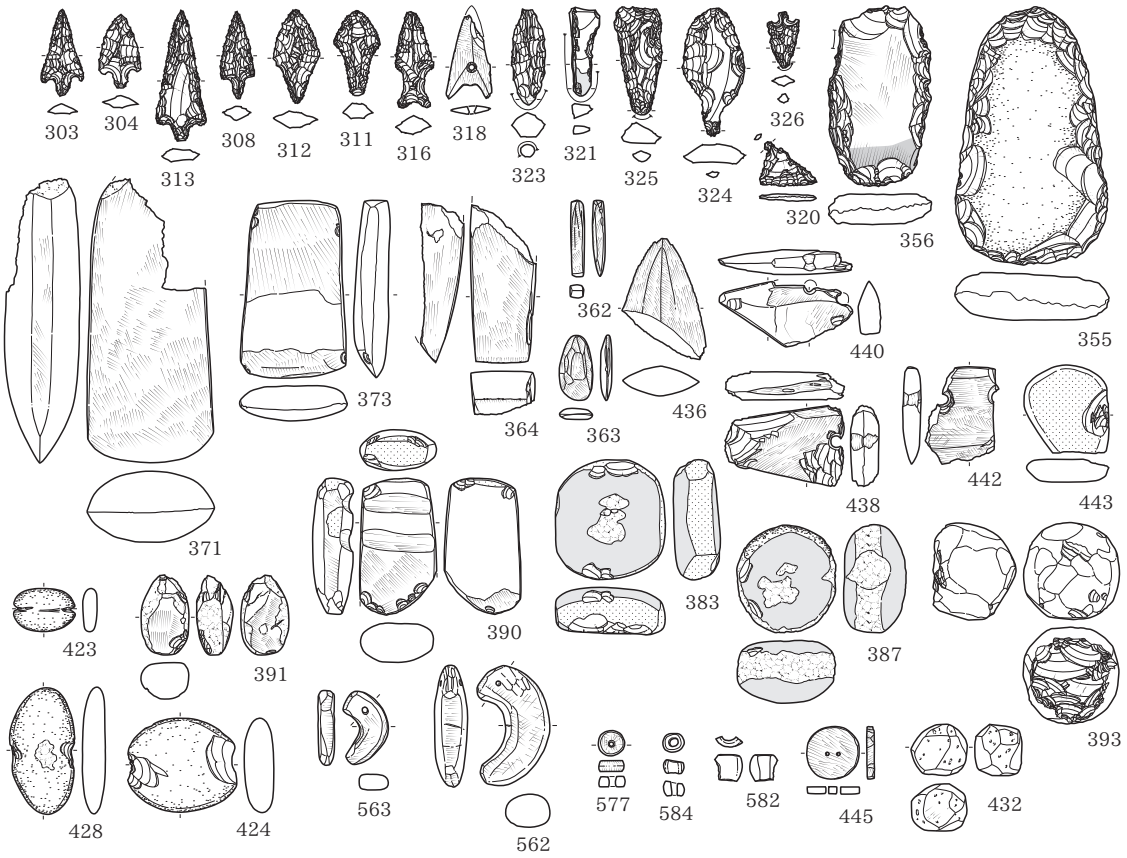
D　Ⅸ層より上層

1）帰　属　時　期

Ⅸ層・灰色粘土層・F 層については、出土土器から弥生時代中期中葉に比定される。Ⅸ層・灰色粘土層のみでの出土量は多くないが、技術・形態・石材からⅨ層と同時期に比定できると考えられた資料が、Ⅸ層より上層のⅥ層や 23 層などからも多く出土していることから、「Ⅸ層より上層」と呼ぶこととし、一括して述べる。なお、23 層については弥生時代後期（法仏式古段階）に比定されることから、単独で石器･石材組成を示すが、文章・図版での記載については一括して行う。

2）石　器　組　成

石器は 10,770 点出土した。このうち剥片石器が 7342 点（68.2%）、礫石器が 834 点（7.7%）、玉作関連遺物が 2521 点(23.4%)である。玉作関連遺物については次項で述べる。内訳は石鏃(未成品含む)698 点、石錐 175 点、石匙 5 点、楔形石器 259 点、不定形石器 274 点、石核 151 点、剥片 5642 点、打製石斧



第 27 図　Ⅸ層より上層の石器組成

9 点、磨製石斧（未成品含む）129 点、磨石類 164 点、石皿･台石 19 点、多面体敲石 1 点、砥石 480 点、石錘 170 点、石製品 46 点、玉類 27 点である。剥片を除くと、石鏃・石鏃未成品の多さが目立ち、石鏃の製作が活発であったことがうかがえる。また、磨製石斧については、搬入品の太型蛤刃・柱状片刃・扁平片刃石斧の出土が特筆される。太型蛤刃・扁平片刃石斧については北信地方で製作されたものの可能性が高い。

3）石　材　組　成

第 12 表のとおりであるが、縄文時代とは明らかに異なる。流紋岩が 42.9%で最も多く、緑色凝灰岩（15.3%）、頁岩（10.2%）、ヒスイ（6.4%）、凝灰岩（6.1%）と続く。このうち緑色凝灰岩とヒスイはそのほとんどが玉作関連遺物であることから、一般の石器組成としては、流紋岩が過半数を占めることになる。流紋岩は、磨製石斧を除く剥片石器において、すべての器種において最多となっている。流紋岩や凝灰岩は前述したように、比較的近距離で採取可能な石材であり、身近な石材を主体として使用したことがうかがえる。

4）各　　説（図版 92 ～ 103　301 ～ 452）

石　　鏃（301 ～ 319・328 ～ 334）　295 点出土した。分類別では、A 類 218 点（A1 類 94 点、A2 類 57 点、A3 類 42 点、A 類 25 点）、B1 類 2 点、D1 類 6 点、D2 類 8 点、E 類 1 点、F 類 2 点である。A 類が 74%を占め、このうち A1 類が最多である。316 は有茎・凹基である。茎部が短ければアメリカ式石

鏃に分類されようが、茎部が長いことから異形とした。石材は流紋岩でやや粗雑なつくりであることから、搬入品ではないと考える。317 は上下とも衝撃剥離痕が認められ、上部側縁には二次加工が施されている。F 類は磨製石鏃ということで一括したが、凹基のもの（318）と有茎のもの（319）がある。318 は当該期において中部から東海・関東にかけて特徴的に分布する、茎部に穿孔されたものである。石材は結晶片岩で、搬入品である。319 は茎部に稜を有するもので、上部が折損しているため全長は不明であるが、3mm 前後と推測される。石材は流紋岩が圧倒的に多く 75%を占める。頁岩 9%、ガラス質安山岩 4%のほか、様々な石材が用いられる。328 ～ 334 は石鏃未成品である。全体では 403 点出土した。分類別では A 類 183 点、B 類 93 点、C 類 51 点である。C 類の中には、ごくわずかではあるが 333 のようにほぼ石鏃の形になっているものもある。石材は成品同様に流紋岩

	点数（点）		重量（g）	
	点数	点数比(%)	重量	重量比(%)
流紋岩	4620	42.90	52998.81	15.89
凝灰岩	659	6.12	20992.60	6.29
緑色凝灰岩	1647	15.29	10948.59	3.28
頁岩	1096	10.18	21597.60	6.47
珪質頁岩	358	3.32	2603.99	0.78
玉髄	100	0.93	780.77	0.23
メノウ	91	0.84	737.02	0.22
チャート	20	0.19	2831.16	0.85
鉄石英	369	3.43	4202.88	1.26
黒曜石	41	0.38	114.23	0.03
ガラス質安山岩	82	0.76	1476.70	0.44
結晶片岩	1	0.01	1.09	－
黒色頁岩	4	0.04	104.45	0.03
粘板岩	23	0.21	745.61	0.22
泥岩	5	0.05	747.40	0.22
硬砂岩	52	0.48	9025.39	2.71
砂岩	472	4.38	85106.46	25.51
安山岩	241	2.24	67591.44	20.26
花崗岩	19	0.18	11989.06	3.59
閃緑岩	35	0.32	6747.05	2.02
ホルンフェルス	9	0.08	1361.36	0.41
蛇紋岩	80	0.74	7830.50	2.35
ヒスイ	693	6.43	21895.75	6.56
石英	7	0.06	139.82	0.04
滑石	19	0.18	19.52	0.01
軽石	17	0.16	296.91	0.09
珪化木	2	0.02	14.63	0.01
ヒン岩	1	0.01	282.29	0.08
礫岩	1	0.01	437.85	0.13
ガラス	5	0.05	0.91	－
不明	1	0.01	38.61	0.01
	10770	100.00	333590.45	99.99

	剥片石器　7342 点　68.17%																	
	石鏃		石鏃未成品		石錐		石匙		楔形石器		不定形石器		石核		剥片		打製石斧	
流紋岩	222	241.34	317	2457.86	124	638.30	2	67.23	162	1887.33	185	3612.83	76	9067.20	3380	26893.06	2	33.23
凝灰岩	3	3.84	10	63.69	3	63.35			5	30.92	17	606.98	13	1731.11	461	6281.35	2	581.48
緑色凝灰岩	7	4.09	5	28.40	5	8.10					4	93.12			1	20.65		
頁岩	27	38.56	28	287.50	25	294.18			36	800.51	46	1250.47	39	5316.70	885	11256.11	1	44.30
珪質頁岩	6	9.54	18	161.28	8	46.00	2	10.58	25	238.12	12	173.89	4	154.97	283	1809.61		
玉髄	4	5.16	5	50.94	2	2.20			5	60.72	3	23.44			81	638.31		
メノウ	4	2.80	1	1.30	6	11.46			8	42.04			11	349.28	61	330.14		
チャート									3	53.41			3	915.49	6	71.31		
鉄石英	3	8.19	6	26.54	2	20.32			3	17.03	3	58.73	1	58.19	351	4013.88		
黒曜石	4	0.46	2	3.00					5	15.75	1	2.91			29	92.11		
ガラス質安山岩	13	16.63	8	134.46			1	0.55	3	35.35	3	127.98	2	191.58	52	1005.50		
結晶片岩	1	1.09																
黒色頁岩																		
粘板岩	1	0.79	3	25.85											3	22.26	1	248.29
硬砂岩									3	105.55					1	8.11	1	53.90
砂岩															19	326.96		
安山岩									1	43.44			1	290.00	6	76.66		
閃緑岩															1	6.80		
ホルンフェルス															3	48.59		
蛇紋岩															13	195.48	2	146.38
石英													1	24.59	4	114.96		
滑石															1	2.32		
珪化木															1	9.77		
計	295	332.49	403	3240.82	175	1083.91	5	78.36	259	3330.17	274	5950.35	151	18099.11	5642	53223.94	9	1107.58
点数比%	5.93%		8.10%		3.52%		0.10%		5.20%		5.51%						0.18%	

	礫石器　834 点　7.74%														石製品　73 点　0.68%				玉作関連　2521 点　23.41%			
	磨製石斧		磨製石斧未成品		磨石類		石皿・台石		多面体敲石		砥石		石錘		石製品		玉類		玉作工程品		玉作関連石製品	
流紋岩			2	642.66	8	3024.78			1	515.88	3	1011.44	10	1819.36							126	1086.31
凝灰岩	1	48.09			2	721.00					62	6101.36	19	3548.91	4	53.48					57	1087.04
緑色凝灰岩	10	653.69															3	5.14	1612	10135.40		
頁岩					2	317.80	1	940.00			3	334.87	3	716.60								
チャート					3	984.20							5	806.75								
黒色頁岩															3	56.97	1	12.13				
粘板岩													1	177.34	14	271.08						
泥岩					2	491.20							3	256.20								
硬砂岩	12	1392.54	1	180.88	20	4564.58							12	2450.79							2	269.04
砂岩	3	929.53			13	2532.40	7	6490.64			405	72124.78	15	2103.29	2	74.82					8	524.04
安山岩	10	1374.90	5	1023.79	87	36922.59	10	7389.50			4	1524.50	92	18943.33							25	2.73
花崗岩					12	3495.44	1	6880.00					6	1613.62								
閃緑岩	24	4284.93	1	862.74	9	1592.58																
ホルンフェルス	1	287.70			2	378.60					1	182.60	2	463.87								
蛇紋岩	43	3631.18	16	3092.46	3	590.76							1	138.10	2	36.14						
ヒスイ																	3	1.39	671	18778.96	19	3115.40
石英																	2	0.27				
滑石															5	10.09	13	7.11				
軽石											2	129.03			15	167.88						
珪化木																					1	4.86
ヒン岩					1	282.29																
礫岩													1	437.85								
ガラス																	5	0.91				
不明															1	38.61						
計	104	12602.56	25	5802.53	164	55898.22	19	21700.14	1	515.88	480	81408.58	170	33476.01	46	709.07	27	26.95	2283	28914.36	238	6089.42
点数比%	2.09%		0.50%		3.30%		0.38%		0.02%		9.64%		3.42%		0.92%		0.54%		45.87%		4.78%	

※　各器種の左列は、点数（点）、右列は重量（g）を示した。点数比は、二次加工が施されない石核・剥片を除いた 4806 点を母数として算出した。「－」は 0.01%未満である。

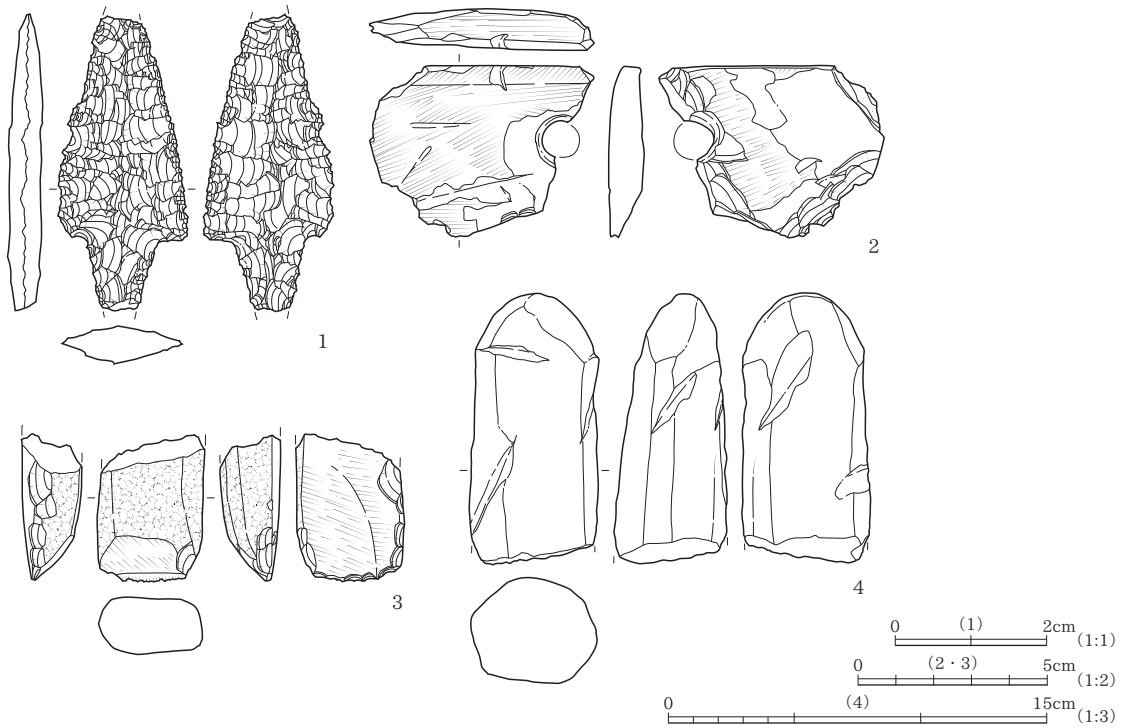
第 12 表　Ⅸ層より上層石器・石製品集計

23 層	剥片石器　794 点　73.38%																	
	石鏃		石鏃未成品		石錐		楔形石器		不定形石器		石核		剥片		磨製石斧		磨製石斧未成品	
流紋岩	5	9.40	44	423.97	3	46.42	26	260.73	29	523.57	16	2985.43	273	2653.88				
凝灰岩	2	1.90	3	55.16	1	6.00			2	195.58	5		85	1385.08				
頁岩			1	3.00			6	407.56	8	143.34	5	575.93	122	1480.01				
珪質頁岩	2	2.60	2	7.40			5	85.63	2	53.13			38	263.85				
玉髄							2	13.15					5	31.93				
メノウ					1	1.13					4	109.27	3	27.85				
鉄石英			1	2.43							1	58.19	34	440.72				
黒曜石			1	1.90			1	2.83	1	2.91			1	15.52				
ガラス質安山岩			2	13.80			1	13.13			1	55.27	10	113.40				
緑色凝灰岩															1	51.10		
粘板岩													1	0.92				
安山岩							1	43.44					3	18.87	1	38.00		
硬砂岩															5	452.12		
砂岩													3	119.45				
閃緑岩													1	6.80	8	2061.21		
蛇紋岩													4	37.91	7	621.89	2	334.10
石英											1	24.59	2	49.04				
計	9	13.90	54	507.66	5	53.55	42	826.47	42	918.53	33	3808.68	585	6645.23	22	3224.32	2	334.10
点数比%	1.94%		11.64%		1.08%		9.05%		9.05%						4.74%		0.43%	

23 層	礫石器　123 点　11.37%						石製品・玉類　7 点　0.65%				玉作関連　158 点　14.60%				計	
	磨石類		砥石		石錘		石製品		玉類		玉作工程品		玉作石製品			
流紋岩	1	192.69			2	480.80							4	49.76	403	7626.65
凝灰岩	1	560.20	12	1026.70	4	813.20	1	30.50					7	85.57	123	4159.89
頁岩	2	317.80	3	363.64											147	3291.28
珪質頁岩															49	412.61
玉髄															7	45.08
メノウ															8	138.25
鉄石英															36	501.34
黒曜石															4	23.16
ガラス質安山岩															14	195.60
緑色凝灰岩											106	995.63			107	1046.73
黒色頁岩							1	16.83							1	16.83
粘板岩							2	83.53							3	84.45
泥岩					1	83.70									1	83.70
安山岩	15	6755.21			12	2155.90									32	9011.42
硬砂岩	1	58.20			1	179.80									7	690.12
砂岩	2	440.40	61	15211.95	1	78.30							1	40.88	69	15890.98
花崗岩	1	470.40			1	112.80									2	583.20
閃緑岩															9	2068.01
ホルンフェルス					2	463.87									2	463.87
蛇紋岩															13	993.90
ヒスイ											40	1910.23			40	1910.23
石英															3	73.63
滑石							2	6.28							1	6.28
ガラス									1	0.06					1	0.06
計	23	8794.90	76	16602.29	24	4368.37	6	137.14	1	0.06	146	2905.86	12	176.21	1082	49317.27
点数比%	4.96%		16.38%		5.17%		1.29%		0.22%		31.46%		2.59%		100.00%	

※　各器種の左列は、点数（点）、右列は重量（g）を示した。点数比は、二次加工が施されない石核・剥片を除いた 464 点を母数として算出した。

第 13 表　23 層石器・石製品集計



第 28 図　石器実測図（1：S=1/1，2・3：S=1/2，4：S=1/3）

が 8 割近くを占める。次いで頁岩 7%、珪質頁岩 4%となっている。第 28 図 1 は大型の石鏃で、本遺跡から出土した石鏃のうち最大のものである。長さ 48.9mm を測るが、上下とも欠損していることから完形では 55mm 以上になると推測できる。黒曜石製で、緻密な剥離が施される。技術的には縄文前期の様相を呈するが、形態は該期には見られないものである。中世の溝から出土しており、所属時期は不明である。

石　　匙（320）　5 点出土した。少数のため分類は行っていない。320 は長さ・幅とも 2cm に満たず、重量は 0.5g という極小型のものである。ほかに、大型で横長のもの（半損品）、小型で縦長のものがある。

石　　錐（321 ～ 327）　175 点出土した。分類別では A 類 53 点、B 類 26 点、C 類 29 点、D 類 24 点、E 類 28 点である。A 類が多いほかは各類ともほぼ同率である。321 は側縁のみに二次加工が施される。左側縁では上半まで回転痕が認められ、正面下半は磨滅しており、使用痕が顕著である。323 も下端で回転痕が顕著である。E 類（326）は縄文時代には見られなかったものであるが、当期では 28 点（16.0%）出土している。石材は流紋岩が約 71%、頁岩が約 14%である。

楔形石器（335 ～ 339）　259 点出土した。分類別では A 類 172 点（A1 類 120 点、A2 類 52 点）、B 類 87 点で A1 類が最も多い。335 のように礫素材のものも少数ある。石材はやはり流紋岩が多数を占め 63%、頁岩が約 14%、珪質頁岩が約 10%となる。

不定形石器（340 ～ 348）　276 点出土した。分類別の点数は、A 類 9 点、B 類 12 点、C 類 26 点、E 類 26 点、F 類 31 点、G 類 25 点、I 類 14 点、J 類 22 点である。比較的偏りなく出土している。石材は流紋岩が 67%を占め、頁岩 17%、凝灰岩 6%、珪質頁岩 4%である。

石　　核（349 ～ 352）　151 点出土した。分類別では、A 類 3 点、B 類 7 点、C 類 5 点、D 類 18 点、E 類 24 点、F 類 4 点、G 類 27 点で、分類不能としたものが最多である。分類不能としたものの多くは A 類から F 類の組み合わせであることから、剥離面や剥離の方向性が定型的でないことがうかがえる。石材はやはり流紋岩が多く 50%、頁岩 26%、凝灰岩 8%と続くが、それに次いでメノウが 7%を占めることが特徴的である。

打製石斧（354 ～ 356）　9 点出土した。354 正裏面の二次加工は刃部のみで、それ以外は側面のみの加工によって仕上げられている。左右非対称の撥形を呈する。刃部に光沢が認められ、裏面に残る線状痕は左側縁のラインと平行している。355 は凝灰岩製で、非常に重量感がある。礫素材を加工し左右はほぼ対称形に仕上げている。356 は自然面を残す横長剥片を使用しており、石材は頁岩である。裏面下部には広い範囲に線状痕と光沢が認められる。線状痕は刃部にほぼ直交する。光沢は正面の上部・下部にも見られるが、それを切る新しい剥離があることから、刃部再生を行った可能性が高い。

磨製石斧（357 ～ 377）　成品 104 点、未成品 25 点が出土した。成品の分類別では A 類 50 点、B 類 34 点であり、分類できない破片資料が多い。A 類の中では A1 類と A2 類の数が拮抗しており、小型品が多い。A 類の石材は蛇紋岩が 36 点、安山岩・硬砂岩が各 10 点、砂岩 3 点、凝灰岩 1 点である。B 類は太型蛤刃石斧（B1 類）が多いが、完形品は皆無である。

370 は刃部が欠損しており、371 は上部の大半が欠損している。371 の基部には敲打痕が認められる。敲石へ転用したものかもしれない。石材はすべて閃緑岩で、長野市榎田遺跡などが位置する北信からの搬入品と考える。柱状片刃石斧（B2 類）は 9 点出土したがすべて破片資料であり全体形をうかがうことはできない。いずれの資料も精緻なつくりで、丁寧に磨き上げられている。石材は 9 点とも緑色凝灰岩であるが、在地の石材とは異なり暗青灰色を呈する。搬入品と判断されるが、産地は不明である。366・367 は抉りを有する。厚さは両者とも 43mm である。B3 類は扁平片刃石斧を一括したが、369・373

のような幅 50 ～ 60mm 前後のものと 374・375 のような幅 30 ～ 40mm のものがある。4 点出土したが、石材は閃緑岩 2 点、硬砂岩 1 点、蛇紋岩 1 点である。371 は、研磨されていない部分が帯状にめぐっている。第 28 図 3 は小型の扁平片刃石斧である。裏面と刃部以外は敲打痕が残り、側面には剥離も見られることから、欠損した扁平片刃石斧を小型品に再生したものと判断される。石材は閃緑岩である。

376・377 は未成品Ｃ類である。未成品は25点出土し、分類別ではＡ類７点、Ｂ類８点、Ｃ類２点である。石材は蛇紋岩 64%、安山岩 20%、流紋岩 8%、硬砂岩と閃緑岩がそれぞれ 4%である。Ａ類成品と未成品で蛇紋岩が多く見られるが、形態や技術からも縄文時代の石斧との区別は困難であり、堆積状況からも前期遺物が混入している可能性も否定できない。

磨 石 類（378 ～ 392）　164 点出土した。分類別ではＡ類 27 点（A1 類 9 点、A2 類 14 点、A' 類 4 点）、Ｂ類 21 点（B1 類 4 点、B2 類 12 点、B3 類 4 点、B4 類 1 点）、Ｃ類 54 点（C1 類 12 点、C2 類 19 点、C3 類 15 点、C5 類 3 点、C6 類 4 点、C8 類 1 点）、Ｅ類 18 点である。Ａ類からＣ類の多寡については縄文時代と変わらないが、Ｅ類が 18 点（11%）と多くなっている。石材では安山岩が 53%で過半数を占め、硬砂岩 12%、砂岩 8%、花崗岩 7%と続く。ほかに 8 種類の石材が出土しており、多様な石材を使用する点は縄文時代と同様である。

形態もほとんど変わらない。円形・楕円形・隅丸方形・棒状などがある。ただしＥ類については、弥生時代では磨製石斧の形態にバラエティが出てくるため、縄文時代とは当然ながら異なってくる。390 は太型蛤刃石斧の転用であるが、抉りが 2 か所見られ、磨製石斧としても希少なものであったと考えられる。下半を折損したため磨石類として使用したものと推測できる。上下面と左側面に磨り潰し痕が認められる。392 は 390 同様、下半を折損した太型蛤刃石斧の転用であろう。上面に磨り潰し痕、側面と正面、下端に敲打痕が認められる。391 は小型品の転用だが、転用以前を考えると、成品にしては厚すぎることから、未成品を転用したものかもしれない。

Ｅ類以外で見てみると、388 の凹痕は大きく深いものであるが、本遺跡ではこの形状は 1 点のみの出土である。左右の一部を除いて側面全面敲打痕が認められる。389 は非常に重量感がある。石材は流紋岩である。

多面体敲石（393）　1 点のみ出土した。下面は全面剥離が施されるが、下面以外は全面敲打されている。石材は流紋岩で、重量感がある。

石皿・台石（394 ～ 397）　19 点出土した。そのほとんどは破片資料である。安山岩が半数を占める。394・395 は石皿で、396・397 は台石である。396 は花崗岩製で、重量は 6.9kg もある。下面中央に敲打痕が認められるが、表裏面の痕跡は不明瞭である。397 は中央に凹痕があり、その周りに粗い磨痕が認められる。

砥　　石（398 ～ 421）　480 点出土した。砂岩が圧倒的に多く 84%を占め、凝灰岩が 13%である。ただし、点数については、XV 層でも記述したように、砂岩製のものは非常に脆く割れやすく、破片資料がほとんどであるため、現在の点数のみで多寡を判断することはできない。さらに、砥石は弥生時代以降にも使用され続けるものであることから、Ⅷ層より上層から出土したものの中には、古墳時代以降のものも含まれている可能性がある。特に、凝灰岩製で四角柱状の 415 や 417 などは、その形態から鉄製品研磨に使用されたものと考えられる。

管玉・勾玉の製作資料の出土量に比較して、筋砥石など玉作に関連する砥石の数は非常に少なく、筋の見られる砥石は、報告遺物を含めても 17 点ほどしか出土していない。401 は表裏面中央に、敲打痕が溝

状に認められる。408 は長さ約 30cm の置砥石であるが、上面に筋が集中している。面によって使い分けていたのであろうか。414 は凝灰岩製で、砥面は非常に滑らかであることから、玉砥石の可能性もある。420 は軽石製である。鋭い線状痕を有する。

石　　錘（422 ～ 430）　170 点出土した。分類では A1 類 81%、A2 類 5%、B 類 2%、C 類 3%で、A1 類が圧倒的に多い。

422・423 は幅 4 ～ 5cm、長さ 3 ～ 4cm の小型品であるが、出土したのはこの 2 点のみである。糸掛けの作出は剥離によるものがほとんどであるが、425 のように鋭い線状痕によるものや、敲打によるもの（429）がある。両端に敲打痕が認められる。430 は形態が異なる。

石 製 品（431 ～ 451）　431 ～ 433 は軽石製で多面体を有するものである。裏山遺跡［小池ほか 2000］に倣い、軽石製研磨具とした。本遺跡からは 15 点出土したが、このような痕跡を持たない軽石も多く出土している。434 は磨製石製品で蛇紋岩製である。中央部分は表裏面とも稜を有し、凹みが認められる。裏面は平坦だが表面はやや盛り上がる。左右側面には幅 1mm の面を有する。用途不明である。

435 ～ 442 の石材は黒色頁岩と粘板岩で、本遺跡の中では異色の一群である。435 は偏四角形を呈し、外側四方に稜を有するが、種類は不明である。436 は磨製石剣の可能性が高い。断面形は菱形を呈し鎬を有する形態で、希少なものである。刃部先端のみの破片資料であるが、幅は断面位置で 44mm あり、大型品に属する。切先には微細な剥離が見られるが、これは刃こぼれ痕と考えられ、銅剣と同様、祭祀で使用されたものと推測する。437 も磨製石剣の可能性は否定できない。438 は穿孔されていることから石包丁の可能性があると考えたが、石包丁にしては厚みがあることから器種を特定できない。ただし、上越市吹上遺跡からは、厚さ 16mm を超える石包丁が数点出土している。440 も、見た目は石包丁に近似しているが、孔が上端に接するほど近く、さらに上面に刃部を作り出していることから、不明石製品とした。実測図の天地も異なる可能性がある。439 は磨製石製品を転用したものであろうか。周縁には二次加工が施される。442 は石包丁の可能性がある。刃部先端がわずかに残存している。第 28 図 2 も、石包丁の可能性があるもので、石材は粘板岩である。442（図版 103）と近似している。443 は表裏面とも非常に平滑にされており、石材は蛇紋岩である。西郷遺跡［土橋ほか 2009］などで出土している「ミガキ具」の可能性がある。

444 ～ 447 は石製模造品である。周縁を丸く仕上げるもの（444・445）と多角形にするもの（446・447）がある。すべて滑石製である。448 は緩やかな抉りを作出し表面は平らに仕上げているが、裏面と右半分を欠損しているため全体形は不明で、器種も特定できない。449 は凝灰岩の自然礫に孔が 3 か所穿たれ、下面は削られている。下面には線状痕が明瞭に残る。450・451 は凝灰岩製である。450 は上下面中央に溝を切り、直交方向にも端部のみ切込みを入れる。上下対になるかたちで、側面も面取りをするなど丁寧に仕上げているが、用途は不明である。451 は円柱状に整形しており、全面に横方向の擦痕が認められる。

玉　　類（562 ～ 586）　ここでは、玉作製作資料以外のものを一括した。臼玉については古墳時代の帰属であるが、ほかの玉については時期の特定は困難である。562 ～ 567 は勾玉である。562・567 はいわゆる定型の C 字状、564・565 は半玦状、563 は二者の中間のような形態である。563 は滑石製であるが白色を呈し、やや硬質な感じである。563 ～ 565 も滑石製である。566 は三角形状で、長さ・幅 5mm、厚さは 2mm、孔径はわずか 0.3 ～ 0.8mm という、非常に小さい垂玉である。石材はヒスイで、透明感のある綺麗な緑色を呈する。569・570 も同類とできるものである。569 は穿孔途中の未成品で、

両側穿孔であることがわかる。570 は臼玉で、一端が欠損している。571・572 は形態や滑石の質感から縄文時代前期に帰属する可能性が高い。573 は不思議な形状である。上から見ると 2 孔穿孔された痕跡があり、いずれも破損したように見えるが、（実測図における）表面は破損後研磨されている。一方裏面は破損したままであるが、裏面の破損は表面の穿孔・研磨面よりも新しい。このことから、最初の穿孔に失敗した後、破損面を研磨し再加工しようとして再び穿孔したが、再失敗したという過程が、可能性のひとつとして想像できる。574 ～ 581 は滑石製の臼玉である。68 点出土した。直径は 3.5mm ～ 5.4mm の範囲に多く分布し、平均は 4.7mm である。厚さは 1.8mm ～ 3.4mm の範囲におさまるものが多く、平均は 2.6mm である。582 ～ 586 はガラス製である。582・585 は群青色、583・584・586 は青緑色を呈する。孔の両端は研磨により平坦面が作出されている。

E　玉　作　関　連

本遺跡からは、弥生中期の緑色凝灰岩製の管玉･ヒスイ製勾玉の製作工程を示す遺物が多量に出土した。管玉製作資料が 1612 点（約 10.1kg）、勾玉製作資料が 672 点（約 18.8kg）、玉作関連の石製品が 238 点（約 6.1kg）である。管玉製作資料については、1cm 四方未満の剥片・砕片は点数に含めておらず、それらを含めば数万点に及ぶことは必至である。管玉は緑色凝灰岩のみで、鉄石英製は出土していない。ヒスイは糸魚川産である可能性が高いと考え、海路から搬入されたと想定できる。近くはない距離でありながら、なぜこれほど大量に運ばれてきたのであろうか。敲石も含めた総量は 21.9kg にもおよび、上越市吹上遺跡を上回り、北陸地方で最多、つまり全国でも最多の遺跡となる。

玉作工具としての石製品では、石針・擦切具・弾車・砥石が出土している。砥石については前項で一括して述べた通りである。石針の石材は安山岩製のみで、メノウなどほかの石材は出土していない。

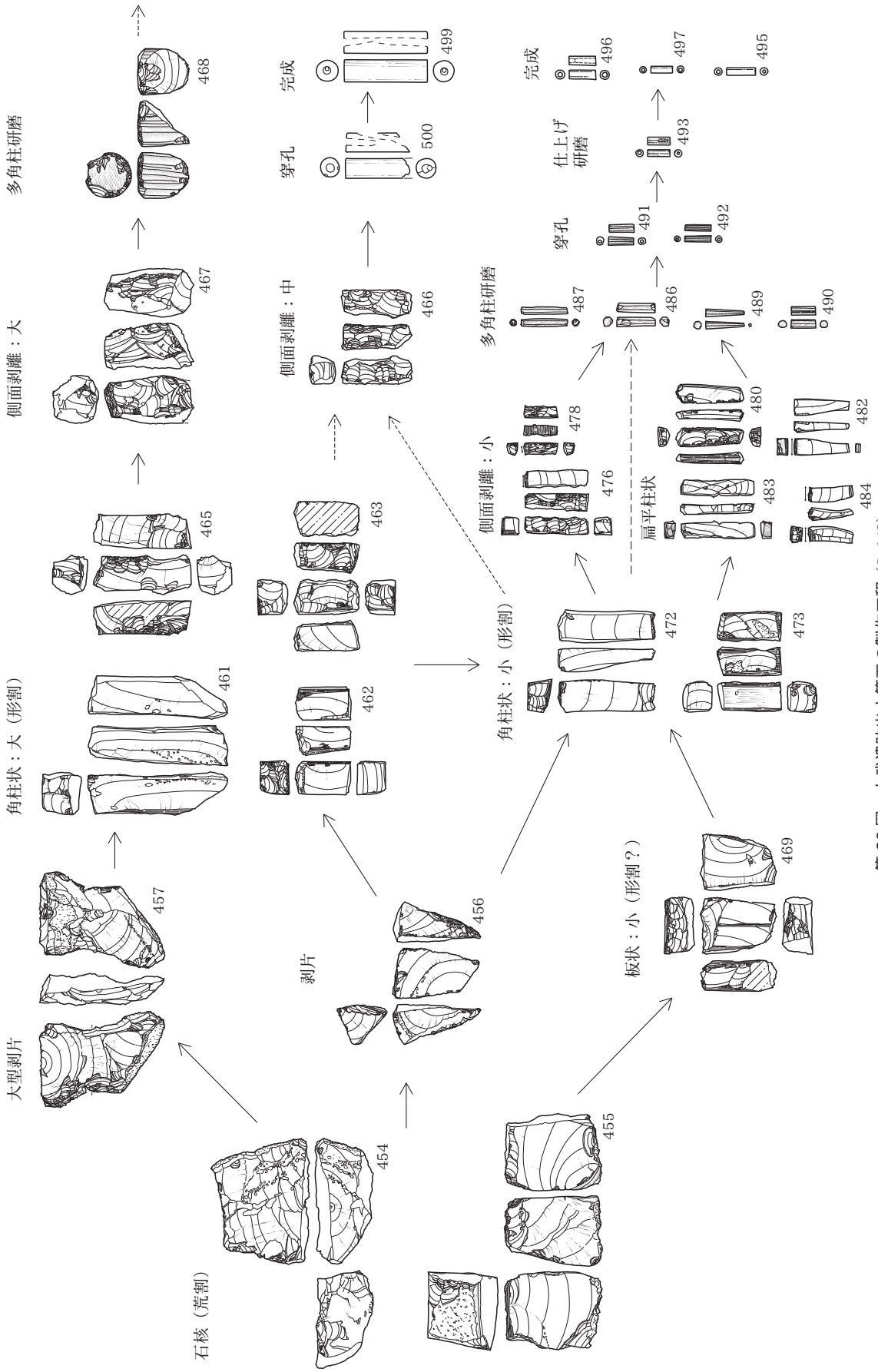
1）緑色凝灰岩製管玉製作資料（図版 104 ～ 106　452 ～ 500）

緑色凝灰岩製管玉の製作工程については、先学の様々な研究成果があり、技法や地域差などが解明されつつある。しかし、地域差があることも要因のひとつであろうが、工程についての呼称などは統一されておらず、その定義については、筆者の理解不足もあろうが曖昧なところもあるように思える。本遺跡では、「角柱状」「扁平柱状」など形態そのもので呼び表すこととし、これに対応すると考える「荒割」「形割」といった用語を平行して表記する。なお、緑色凝灰岩製の楔形石器も工程品として数量に含めた。

本遺跡における管玉製作工程の流れを第 29 図に示す。基本的な流れは下谷地遺跡［齋藤 1979］、平田遺跡［田海 2000］と同じであるが、本遺跡では分類に当てはまらないものが多く存在する。角柱状剥片を作出し、分割を行って目的のサイズまで小さくした後、研磨、穿孔、仕上げ磨きという流れは確かに存在するが、角柱状剥片を作出するまでの工程は一様ではなかったと考えられる。つまり、定型的な順序があるわけではなく、最終形態を意識して作業が行われていたと推測する。石核から板状の剥片を採取できれば、それを分割して角柱状剥片を作り出す。あるいは剥片が適当なサイズであれば、剥片から角柱状剥片を作出することもあると想定できる。角柱状剥片は幅広いサイズがあり、便宜的に大小の 2 種類に区分した。厳密に区分

分類	点数	重量（g）
原石・分割礫	5	465.25
石核	33	2003.61
大型剥片	9	503.06
楔形石器	4	32.47
角柱状：大	62	889.43
側面剥離：大	5	69.67
工程不明：大	1	0.93
多角形研磨：大	1	8.33
側面剥離：中	1	2.92
穿孔：中	1	1.06
完成品：中	1	3.10
板状：小	40	614.90
角柱状：小	75	335.42
側面剥離：小	14	8.10
扁平柱状：小	63	34.70
多角形研磨：小	16	2.52
穿孔：小	4	0.75
仕上げ研磨：小	3	0.43
完成品：小	55	3.05
剥片	1219	5155.70
計	1612	10135.40

第 14 表　緑色凝灰岩製管玉製作資料　工程別集計



第29図　大武遺跡出土管玉の製作工程（S=1/2）

できるものではないが、大きいもの（以下、角柱状：大とする）は平均長さ 29.7mm、幅 20.3mm、厚さ 17.5mm で、小さいもの（以下、角柱状：小とする）は平均長さ 23.5mm、幅 11.8mm、厚さ 9.8mm である。角柱状：小の幅は角柱状：大のほぼ 1/2 サイズであることから、角柱状：大は太型管玉の工程品であるだけではなく、細型管玉の工程品にもなり得るのではないだろうか。

分類	計測点数	法量平均（mm）			擦切溝				
		長さ	幅	厚さ	あり	1	2	3	4
石核	26	41.6	42.8	30.9	7.7%	2	0	0	0
板状	32	29.3	30.2	14.0	43.8%	5	8	1	0
角柱状：大	54	29.5	20.2	17.5	68.5%	15	21	1	0
側面剥離：大	3	42.1	18.5	17.5	－				
側面剥離：中	1	24.3	9.8	9.0	－				
角柱状：小	65	23.2	11.5	9.4	69.2%	19	24	1	1
側面剥離：小	14	14.8	5.3	4.6	－				
扁平柱状	56	16.0	6.9	4.3	57.1%	16	15	1	0

第 15 表　工程別のサイズ・施溝分割の比率

扁平柱状剥片は、全体的に幅：厚さが 2：1 程度のものを分類したが、485 のように上面から下端部まで同じ厚さを保つ個体は少なく、上部に厚みを持つ剥片状のものが多い。上部では幅と厚さにそれほど差はなくとも、全体的に扁平なものはここに分類した。

それでは報告番号の順に個々の石器について述べる。452 ～ 455 は石核（荒割段階）である。454 は横長の剥片を作出した残りである。でべそ状に打点が残っている。石材としては、気泡が多く入り適当な素材とは言えないものである。455 は直方体を呈し、典型的な石核である。擦切溝が上面と側面に認められるが、側面の溝は 2 か所とも斜方向に入っている。

456 ～ 458 は剥片である。大型のもの（457）や小型のもの（456）があるが、両者の区分は明瞭ではなく、457 は両者の中間サイズとも言える。456 は断面三角形状で、正面と右側面上端に擦切溝が残る。

459 ～ 465 は角柱状：大（形割段階）としたものである。459 は現状では板状に近いが、裏面は節理面で割れていることから、本来はもっと厚みがあったと思われ、ここに分類した。右側面は擦切溝に対して剥離方向が逆であるが、これは施溝分割の際、上からの衝撃よりも下からの衝撃のほうが強かったことを示している。硬い物体の上で分割を行ったのであろうか。460・462 は上面が盛り上がっていたためか、集中して剥離を行っている。461 の擦切溝は長軸 1 か所であるが、きれいな直方体に分割できている。細かい調整剥離は上面のみである。464 は長軸方向の擦切溝が 3 か所あるもので、本遺跡では大変珍しい。左側面中央の細かい剥離が集中している部分は潜在的な割れであり、剥離ではない。右側面と裏面には側面剥離が施される。

467 は極太型管玉［河村 2010］（以下、極太型とする）の側面剥離工程品（以下、側面剥離：大とする）である。468 は極太型の多角形研磨段階である。直径は 20mm 近くあり、467 のサイズとほぼ一致する。上面には連続した剥離がめぐり、稜を作出している。

469・470 は板状剥片である。469 は、幅が厚さの約 2 倍で、典型的な板状剥片である。正面中央に擦切溝が残るが、溝はごく浅く、施溝を始めたばかりの段階であったことがわかる。上面縁辺の微細剥離は一辺全体に及ぶ。

471 ～ 475 は角柱状：小（形割段階）である。473 は上下面を除く面に磨痕が認められる。擦切溝を 4 か所有するものはこの 1 点のみであるが、施溝分割面した面を新たな打面として使用し、90°ずつ転位している。474 は本遺跡では珍しい、上面に直交する擦切溝が入るものである。側面の擦切溝がそれらより新しい。

476 ～ 478 は側面剥離：小としたものである。476 は上面に、直交する擦切溝を持つが、施溝分割面には剥離が認められない。477 は全面に剥離が施されるが、捩れた状態は解消していない。

479 ～ 485 は扁平柱状剥片である。477 正面は全体的に磨痕が見られるが、磨面は稜を有し平坦では

ない。480 は左側面と縁辺部が研磨されており、稜を取ろうとしているようである。482 ～ 484 はいずれも上面に擦切溝が入るものである。479 については、下部が扁平であるためここに分類したが、角柱状:小との区分が微妙なところである。481 も形状からここに分類したが、擦切溝が正面中央に入る。とすると、工程としてはもう一段階存在することになる。この 1 点のみの出土のため断定はできないが、扁平柱状からさらに極小の角柱状剥片を作出する工程が存在する可能性も想定しておきたい。

486 ～ 490 は多角柱状に研磨する工程である。489 は下部が細くなっており、下端の最小径はわずか 1.2mm である。下端に合わせて細く仕上げようとしたのか、あるいは別の用途に使用するためのものであろうか。491・492 は多角柱状に穿孔されたものである。492 は両側穿孔であることがわかる資料であるが、貫通孔の径は針の先ほどしかなく（0.2mm 程度）、穿孔途中のものかもしれない。外面はやや研磨が進み全体的に丸みを帯びている。493・494 はかすかに稜線が残り、493 は完成品と比較して光沢が不足していることから、仕上げ研磨の段階と判断した。495 ～ 497 は細型の完成品である。54 点出土した。そのうち完形品は 41 点であり、長さ平均 6.6mm（4.2 ～ 10.6mm）、直径平均 2.4mm（1.8 ～ 3.2mm）、孔径平均 1.4mm（1.2 ～ 1.7mm）である。全体的に短いものが多く、10mm を超えるものは 1 点のみである。ただし、研磨の段階では 486・487・489・494 のように 15mm 前後のものも見られることから、長いタイプのものも製作していたと思われる。499・500 は太型で、499 は完成品、500 は穿孔途中に失敗したものである。両面穿孔されているが、貫通しないまま外面まで到達し破損している。2 点とも直径は 7mm 台で、サイズとしては側面剥離工程 466 からの流れを想定できる。ただし、石材は緑色凝灰岩ではあるが淡色で質感が異なるため、搬入品である可能性、あるいは新しい時期に帰属する可能性も考えられる。

2）ヒスイ製勾玉製作資料（図版 106・107　501 ～ 532）

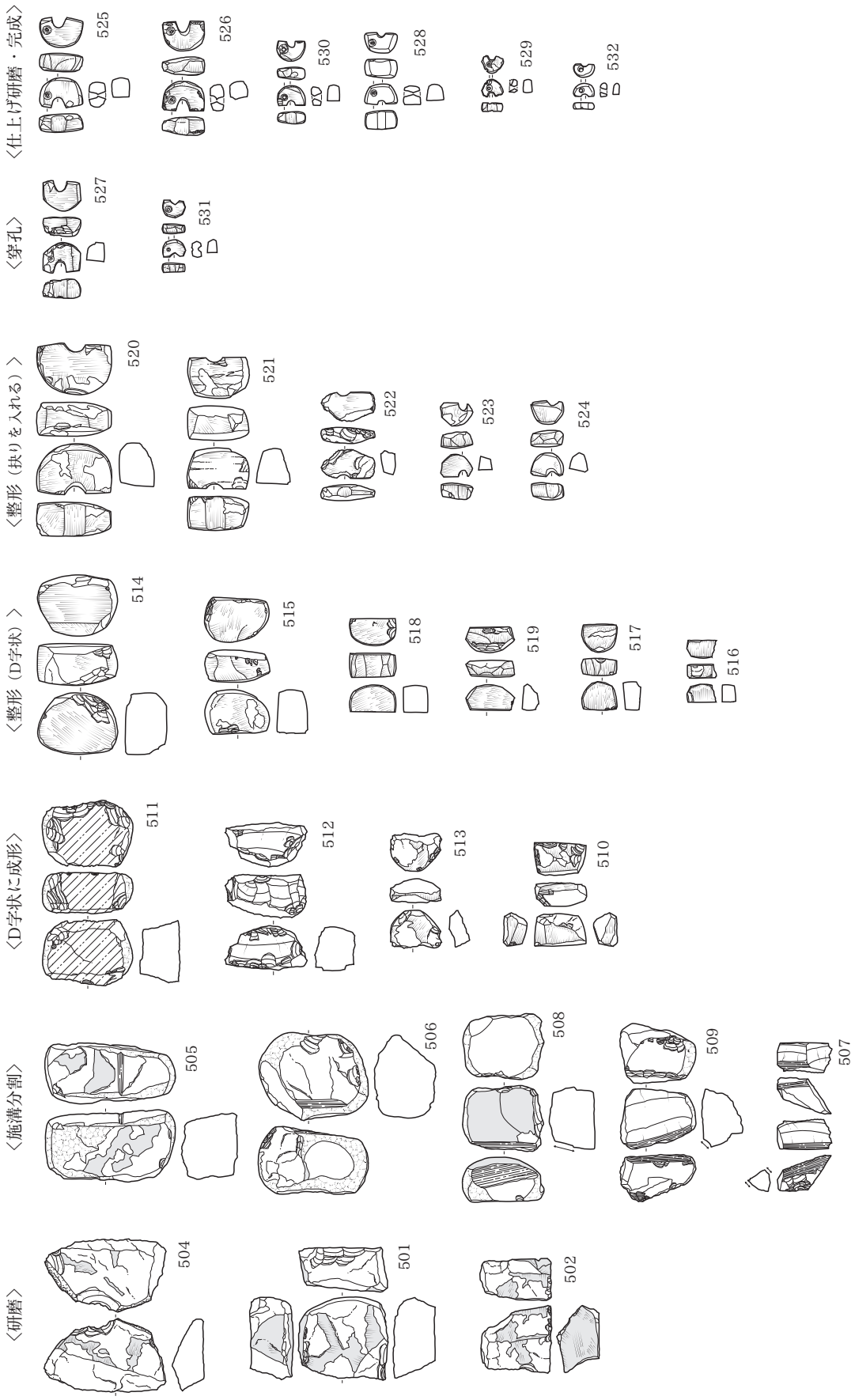
ヒスイ勾玉の製作工程資料についても、工程品の呼称は管玉同様、形態そのものあるいは「～段階」で呼ぶこととしたい。原石・分割段階のもの、剥片、D 字状に近い段階から完成に至るまでの製作工程品に分類した。原石と分割段階は区別が難しく一括した。剥片は、長さに対して厚みのないもの、周縁部が薄くなるものとした。出土したヒスイのうち、原石・分割段階と剥片が 9 割近くを占め、整形段階のものが少ないことから、D 字状に成形するまでの工程は不明瞭である。分割を繰り返し D 字状に整形した後は研磨を行い、抉りを作出し穿孔するという工程となる。ただし、分割段階でも研磨痕を有するものが 15 点あり、検討を要する。

施溝分割の痕跡が認められるものはわずか 7 点である。被熱した原石や剥片は少なからず存在するため、熱を利用して分割する場合が多かったのかもしれない。原石・分割・剥片は勾玉以外の工程品の可能性もあるが、本項目で一括して述べる。

それでは報告番号の順に個々の石器について述べる。501・502・504 は磨痕の認められる分割礫である。16 点出土した。磨痕は部分的なものであるが、石器の表面に凹凸があることで、研磨すると凸の部分のみ磨痕が残るためこのような状態になっている。502 はかなり研磨が進んでおり表面は平滑である。左側面の割れ口は磨痕よりも新しい。意図の有無は不明であるが、研磨の後分割されている。499

分類	点数	重量（g）
研磨痕あり	16	1522.46
穿孔痕あり	1	12.24
擦切溝あり	7	405.73
成形（D 字状にする段階）	7	161.67
成形（D 字状にする段階か）	3	45.41
整形（D 字状）	16	210.45
抉りあり	5	22.96
穿孔途中	2	1.57
仕上げ研磨・完成品	6	4.94
原石・分割	161	13667.28
剥片	448	2724.25
計	672	18778.96
敲石（その他）	14	2487.40
敲石（端部のみ敲打）	5	628.00
計	19	3115.40
合　計	691	21894.36

第 16 表　ヒスイ勾玉製作資料
工程別集計



第30図　大武遺跡出土勾玉の製作工程（S＝1/2）

左側面も同様である。

503 は剥片で、正面に穿孔痕が認められる。穿孔痕の直径は 2.5mm である。

505 ～ 509 は擦切溝の確認できるものである。7 点出土した。505･506 などは一見すると敲石である。505 は、短軸方向に浅い溝が見られるが、分割までは至っていない。507 は、他の個体よりも工程としては進んだ段階のものであろうが、1 点のみの出土であり工程として位置づけが困難であったためここに含めた。擦切溝は 2 か所、長軸方向に入る。508 は擦切溝の深さが 10mm にも達する。509 の擦切溝に接する剥離は溝よりも新しく、施溝分割する際に生じた剥離の可能性がある。

510 ～ 513 はＤ字状に整形している段階のものである。10 点出土した。510 は擦切溝を有するが、形状からここに分類した。研磨が進んでいる。513 はＤ字状にかなり近いが、表裏面の凹凸が残る。

514 ～ 519 はＤ字状に整形されたものである。16 点出土した。これより先の工程品については出土した全点を掲載した。サイズは長さ 9.6 ～ 26.8mm、幅 6.0 ～ 20.5mm のものがある。518 のように比較的上下対称形のものと、515 のように下部が若干細くなるものが認められる。

520 ～ 524 は、Ｃ字状にするために中央に抉りを入れた段階のものである。5 点出土した。サイズは前段階同様、長さ 10 ～ 25mm ほどの幅がある。523・524 は背面に稜が残っている状態である。

527・529 ～ 531 は穿孔段階、528・530 は完成品である。525・526 は穿孔されているものの稜が残り、当初は仕上げ研磨段階と考えたが、完成品でも稜の残るものが多い［廣瀬 2006］とのことから、完成品の可能性が高い。525 は穿孔された痕跡が認められるが、片面のみで、ごく浅い段階にとどまっている。529 は両面から穿孔されているが、未貫通である。穿孔方法は、532 以外は両面穿孔であり、両面穿孔が基本であったことがうかがえる。525・528 はかなり研磨が進んでおり、完成品と呼んでもよいかもしれない。ヒスイのほかに石英・蛇紋岩製のものもわずかに存在するが、これらは石材名が異なるだけで同じ岩石の中に存在し得るもので、当時の人々が意図して使用していたわけではないと想像されることから、一括した。

3）関 連 石 製 品

ここでは玉作工具と考えられている石針・擦切具・弾車と、ヒスイ製敲石について述べる。

石　　針（533 ～ 543）　26 点出土した。このうち工程品は 5 点、完成品は 22 点である。531 ～ 535 は工程品、536 ～ 543 は完成品である。多角形を呈するものでも下面に使用痕が確認できるものが多いことから、多角柱状のものも完成品としてカウントした。完成品のサイズは長さ 9.9 ～ 23.8mm で平均 14.0mm（12 点）、直径は 1.6 ～ 2.6mm で平均 2.3mm（22 点）である。細型管玉の孔径が 1.2 ～ 1.7mm であることから、矛盾が生じている。

533・534 は角柱状で上面に擦切溝が確認できる。533 左右側面には研磨痕が確認できる。本遺跡では、角柱状剥片は 4 点のみの出土である。わずかではあるが、施溝分割はすべて縦取りである。535 は剥片で、1 点のみの出土である。

536 は表裏面を削り扁平に作出している。537 は上面を尖らせている。使用痕は下面縁辺のみに認められ、中央まで及んでいない。538 は片面が欠損しているが、537 と同じ形態の可能性があり、その場合実測図の天地は逆転する。539 ～ 543 の下面にはすべてへそ状の使用痕が見られ、542・543 では側面にも回転痕が認められる。542 は上下が欠損していることから、実際どのくらいの深さまで穿孔したのかは不明であるが、残存長の 1/2 から 3/4 程まで回転痕が及んでいる。

石材はすべて安山岩で、佐渡の玉作遺跡で出土するものなどと同質のものである。風化して灰色を呈するものと、黒色で緻密なものが確認できる。

擦 切 具（544 ～ 551）　175 点出土した。石材は流紋岩 119 点、凝灰岩 55 点、珪化木 1 点である。点数としては流紋岩が多いが、重量ではそれほど差がない。擦切具に使用される流紋岩は流理構造を持ち、薄く剥落しやすいことから、本来の個体数よりも多くなっている可能性が高い。

545 は珪化木製で、この 1 点のみである。木目に沿う方向で刃部が作出されている。544・546・547 は流紋岩製である。やはり流離構造の方向に沿って刃部が作り出されるが、547 のように異なる方向を刃部とするものもわずかに存在する。548 ～ 551 は凝灰岩製である。548 は本遺跡で最も大きいものであるが、そのサイズは他と比較して極めて大きく、異質な印象も受ける。形態からここに分類したが、石包丁に近いものである可能性も否定できない。549 は表裏面とも全面研磨されている。刃部との境界に入る稜は確認できない。

551 は、石器の表面に凹凸があることから凸の部分のみ研磨されたと考えられ、表面が平滑であれば 549 同様、全面研磨されたものと考えられる。

弾　　車（552 ～ 556）　11 点出土したが、破片資料が多い。単純なかたちであるが断面形をみると、それぞれ異なっている。両端が細くなる形がほとんどであるが、552 のように断面四角形のものも 2 点ある。直径はすべて 10 ～ 11cm におさまる。石材は砂岩が 5 点、硬砂岩が 4 点、凝灰岩が 1 点である。

ヒスイ製敲石（557 ～ 561）　18 点（3,080g）出土した。勾玉工程品の中には敲打痕の見られるものがあり、これらも玉作工程品の可能性がある。原石や分割礫を素材として、面的に敲打痕が見られるもの（557・558・560）が 12 点、端部や稜線など尖っているところのみ敲打するもの（561 など）が 5 点ある。いずれの個体も磨痕が部分的に見られるが、玉作工程品の項で述べたように、全面を研磨した結果、磨痕が部分的に残っているものと考えられる。

4　木製品・漆製品

本遺跡では、縄文時代前期前葉から中世までの木製品が多量に出土した。今回報告する縄文時代から古代における出土量は、小型木製品が浅箱（内法 54 × 34 × 10cm）200 箱、大型木製品は 150 × 90 × 60cm の水槽 3 つ分（浅箱換算で 112 箱）にのぼる。

縄文時代前期前葉の層（XV 層）からは漆製品（漆紐）が出土した。全国的にも古い貴重な資料であり、非常に高い技術がうかがえる資料として特筆される。また、縄文時代後・晩期の層（XⅢ層～XⅠ層）からは、斧柄・脚付盤・籃胎漆器・漆塗腕輪が出土している。その中でも斧柄はほぼ完形で、当時の使用状況がわかる貴重なものである。本遺跡で最も出土量が多いのは古墳時代早期～前期の水田に伴う水路跡である。その大半が棒状や板状の材で用途不明ではあるが、農具（鋤・鍬・田下駄）のほか、高杯・槽などの容器、刀剣把・盾といった武具も確認でき、高い階層性がうかがえる。

分類・呼称

器種が明らかなもの、推測できるものについては『木の考古学　出土木製品用材データベース』［伊東・山田編 2012］・『木器集成図録　近畿原始篇』『木器集成図録　近畿古代篇』［奈良国立文化財研究所（以下、奈文研とする）1993・1985］に従ったが、特定できたものは少ないため、『木の考古学』における木製品分類のような器種の細分は行っていない。それ以外の用途不明のものについては、形状・断面形から、便

宜的に以下のように分類した。これは記述する際の便宜的なもので厳密な分類ではない。棒状（円）：断面形が円形の棒状のもの。ただし断面が多角形でも、円形を志向したと思われるものは、ここに分類した。棒状（角）：断面形が多角形で、幅と厚さの比率が概ね２：１未満の棒状のもの。棒状（平）：断面形が多角形あるいは楕円形で、幅と厚さの比率が概ね２：１程度の扁平なもの。板状：幅と厚さの比率が概ね３：１程度以上のもの。短冊状：板状のもののうち、厚さ５～7mm 程度・長さ 30mm 未満の薄く短いもの。加工材：棒状にも板状にも該当しない不定形なもの。

器種の特定できないものに加えて、遺物の天地の判断も困難なものが多い。天地が不明なものについては、レイアウト上、長軸方向を縦方向とした。上下とも欠損している棒状や板状のものについては、図化あるいは写真撮影での設置の容易さから決定している場合があり、本来の天地とは異なる可能性があることを予め述べておく。

A　各　　説

1）遺　　構

a　縄文時代前期

SK96（1～4）　すべて杭状のものである。1 は直径 2.5cm の細い木枝を利用している。2～4 は先端を加工して尖らせてはいるが簡素であり、杭として機能したかどうか疑問であることから杭状とした（以下、「杭状」としたものも同様である）。

b　古墳時代前期

SE89（5・6）　5 は直径 60cm の井戸枠である。丸木を刳り抜いて作出している。内面下部には加工痕が認められるが、上部は乾燥による収縮のため確認できない。樹種はクリである。6 は丸木の先端を片面のみ斜めに削っている。

SK55（10～15）　10・11 は杭であるが、10 は二方向から、11 は一方向からのみの加工である。12・13 は右側面に「く」字状の抉りが見え、やや厚みを持つが形代の可能性もあるかもしれない。14 は下部にいくにしたがい、幅はそのままで厚みを減じている。それとは逆に、15 は厚さそのままで左右を削り、尖らせている。

SD33（16～38）　16～18 は３点とも、長方形の枠を持つ田下駄の桟の可能性が高い。幅や枘の形状がほぼ一致する。このような、長方形の枠を持つ田下駄は大足とも呼ばれるが、本稿では［伊東・山田編 2012］に倣い、「角枠型田下駄」と呼称する。19 は武具のうち盾の破片と推測される。直径 1mm の孔が、縦は 8mm 間隔、横は 5mm 間隔で穿たれている。漆は塗られていない。樹種はモミ属で、当該期においては県内ではあまり出土していない樹種で、近畿地方などの出土品などと一致する。23～26 は板状の部材で、25 は枘、ほかは楕円形の孔があけられている。このうち 25・26 は長さ 1m 前後に及び、建築材と考えられる。25 は両端にコの字状の深い抉りが入る。26 は板材の片側に楕円形の孔が３つ、30cm 前後の間隔で並ぶ。27～29・31 は板状の材で、27・28 は裏面に削り痕が見られ段差を有する。32 は劣化が著しく加工痕は不明瞭である。30・33～38 は棒状の材であるが、いずれも片端あるいは両端が欠損しているため、全長は不明である。

SD46（39～68）　39 は杓子形である。柄と身の境界には表面・側面ともわずかな段を持つ。40 は断

面円形に削り出した棒状の製品である。上端を釘頭状に作り出し、下端を細める。41 も下端を尖らせるが上端は欠損しており、形状は不明である。42・43 は下部の片面のみ削り、薄くするものである。45 の上部は把手状にも見えるが直下に「く」字状の抉りを入れる。46 は両端を斜めに削る。木釘が残り、左右は欠損していることから、底板の可能性もある。47 は上部に向かって幅をわずかに細めるため、上部の孔は側縁に接するほど近い。孔ではなく抉りの可能性もある。表裏面の削り痕が明瞭である。49 はＹ字状の自然木を利用したもので、下端を尖らせる。50 は丁寧なつくりの製品である。半円状と「く」字状の抉りを入れ、上下（左右の可能性もある）対称をなす。断面形はほぼ正方形に整えられる。51 は片端に逆台形状の切込みが入るが、左右非対称で均一ではない。55 はやや厚みをもつ板状のクリ材で、明瞭な二次加工の痕跡は認められない。製品の素材あるいは礎盤かもしれない。一部炭化している。52・53 は短冊状、56 ～ 68 は棒状の材である。59・63・64 は先端を尖らせ、58・65 は斜めに削る。その他は上下とも欠損のため不明であるが、66・68 などは比較的かたちが整えられている。

SD47（69 ～ 125）　69 は直柄平鍬のうち、身幅の狭い狭鍬である。刃先が装着される部分は一部欠損している。着柄角度は 65°で、孔径から鍬柄の直径は 4cm 程度と想定できる。70 は一木鋤の平鋤である。柄部分から水平に肩がのび、肩幅が刃部最大幅となる形態である。身の前面がやや膨らみ、後面は平坦となる。

71 ～ 73 は片側が欠損しているが角枠型田下駄の桟である可能性が高い。74 は角枠型田下駄の枠である。桟の枘部を差し込む孔には、桟の枘部分が５か所残存しているが、固定のための楔もはめ込まれている。両端から１孔目と２孔目の間には、手綱を緊縛するために緩やかな抉りあるいは凹みが見られる。枘孔は長幅 1.5cm 前後の方形あるいは長方形を呈し、約 3.5cm 間隔で 11 か所穿たれる。

75 は形態は横槌状であるが、側縁に切込みを配列する。柄部分はひと回り細く作出される。長さは異なるが大阪府瓜生堂遺跡で類似品が出土しており［奈文研 1993］、棍棒の可能性がある。76 は破片資料であるが、湾曲の具合から匙の可能性がある。

77・78 は形状と樹種から弓の弭部分と判断した。樹種はイヌガヤである。弭は、77 は枘状に作り出しているが、78 は切込みを入れるのみである。78 は弓腹を平坦にする。77 も片側を平坦にすることから、平坦な側が弓腹と想定される。79 は鉄剣の把と考えられる。把頭が扇形に広がる形で、把間の中心付近に孔が１個認められる。裏面は把頭のみ残存する。茎挿入孔は把の下端まで貫通しており、把頭における孔の大きさは幅 1.4cm、長さ（＝剣の入る厚さ）0.7cm を測る。ただし、この遺物は自然乾燥させてしまったために、収縮している可能性があることを付け加えておきたい。樹種はカヤである。

80 は刳物の桶である。底部から緩やかに内湾して立ち上がるかたちで、口縁部には２個突起が付されている。縦木取りで、樹種はスギである。81 は周縁部に外形と平行する浅い段を有し、実測図の下部中心に向かって緩く湾曲している。実測図の下端は欠損しているが、破断面に沿って孔が４個見られる。また、中心部分に長方形の孔があり、それと直交するようなかたちで紐状の凹みが認められる。盤のような形状であるが、不明である。82 も緩く湾曲する形状で、実測図右側の周縁部にはわずかに稜が見られる。盤のような形になる可能性もある。

83 は刀形である。刃部は山形をなし、把部は片側のみ削り作り出している。84 は上端近くに両側から切込みを入れ、下部は左右から削る。85 の左側面は湾曲する一方、右側面は直線的で、孔が３個不規則に穿たれる。両端は細くなる。86 の孔はいずれも斜めに穿たれているのが特徴的である。87 は縦に４孔並ぶが、間隔は一定ではなく、徐々に広がっている。88 の先端は杭状に尖らせる。上端は欠損してい

るが、貫孔のような長方形の孔が存在したと推測できる。89 は浮子の可能性が高い。

90・91 は両端をやや尖らせるように加工している。90 は側面に抉りを入れるが、用途不明である。94 は形状から直柄斧柄の可能性が指摘できるが、握り手部分の断面形が整っていないなど、未成品の要素が多い。95 は片端を膨らませ丸く作りだす。何らかの柄である可能性が高い。101 ～ 115 は棒状の材である。104・105 は右側面を、112 ～ 114 は表裏面を削る。74 と垂直な状態で出土している（図版 163）ことから、115 は、枘部分が欠損した田下駄桟の可能性が高い。116 は丁寧な加工で表面は丸みを帯びる。117 ～ 125 は板状または短冊状のものである。121・123 の表面は削り痕が認められる。

SD48（126 ～ 129）　126 は片面のみを削る杭状である。129 は中央付近に欠込があり、それより上部に方形の凹みが見られるが、不明瞭であり仕口とは判断できない。

SD50（130 ～ 263）　130 は曲柄の斧柄である。柄は枝を利用している。欠損と劣化のため、柄の直径は本来の状態よりも細くなっている。131 は直柄平鍬の身であろう。破片資料のため詳細は不明である。132 は高杯である。口径は 43.6cm を測り、外面は段を有する。下半にはわずかながら口縁部と直交するラインが見られ、下面から見て放射状の文様になる可能性がある。内面には稜線が入り、挽物のような雰囲気もあるが、挽物か刳物か判断できない。133 は把手付容器と考えられるが、破片資料のため器種は不明である。口縁部が直線を呈することから、方形または長方形の容器の可能性が高い。132・133 とも横木取りである。

134・135 は錘の可能性がある。134 は上下とも欠損しているが、中央に抉りが入る。135 は上部を釘頭状に作り出す。頭部の直下には紐をかけたような圧痕が残る。136 は片面（樹心側）を平坦に作ることや幅厚から弓の可能性を指摘できる。137 は炭化のため下半を欠損している。持ち手は丁寧に加工され、叩板と推測される。139・140 は櫂である。138 は破片資料であるが、身の長さ・形状から櫂の可能性もある。141 は梯子である。段差の間隔は約 40cm、段の奥行は 8cm 弱である。樹心に近い板目材を使用している。下端は山形に削り込んでおり、二又状に仕上げている。裏面には線状痕が多数認められる。142・143 は棒状の製品で丁寧に加工されているが、用途不明である。144 ～ 147 は自然木の上下端を削るのみで、材はすべて広葉樹である。製品の素材であろうか。148 は上辺の両隅に穿孔され、下部は二又状に作出される。311 のような又鍬に装着する泥除けと考えられる。

152・153・158 は指物である。153 は木釘孔の深さが 2.5 ～ 3cm にも達する。149 ～ 151・154 ～ 157・159 ～ 170・172・173・176 は部材である。150・151 は目釘孔のほか、1 ～ 2cm 程度の孔も混在する。154 は木釘孔が一列に配され、そのうち 1 個は木釘が残る。やや離れたところにも 1 孔あり、その孔には樺皮がわずかに残存している。157 は孔が 3 個見られるが、1 個のみ斜めに穿孔されている。159 は中央付近に孔が 2 個見られるが、裏面ではその 2 孔間に圧痕が確認できる。紐掛け痕であろうか。165 は木釘孔のほか、樺皮綴じ孔が 3 か所確認できる。166 ～ 168 は扁平な棒状の部材で、孔が中央に配列されるものであろう。175 は薄い板材で、左右に抉りが交互に配される。176 は細い棒状で、先端に向かって細く薄く仕上げている。先端近くには欠込が認められる。178 ～ 189・192 ～ 196 は杭であり、そのうち 183 は板杭である。184 ～ 191・193・196 は、SD50 で杭が集中して検出された SK85 付近（図版 10・11）から出土した杭である。木取りは芯持ち丸木のものと削出のものが見られる。

197・198・202 は加工材である。202 は表面に削りと線状痕が認められる。199 は棒状の材で片面のみ削り出す。201 の平面形は刀子状に近似しているが、断面形が整っていない。200・201・203 ～ 213 は板状あるいは短冊状である。208 は逆 L 字状を呈する。213 は薄い板状で、側縁は皿状のように

やや内湾する。

214 は刳物や挽物によく見られる広葉樹材である。製品の素材の可能性も考えられる。216 ～ 242・246 ～ 263 は棒状の材である。225 ～ 227 は比較的整った円形ないしは楕円形に仕上げる。233 ～ 237 は比較的幅広のもの、238 ～ 250 は細いものである。後者は 239・240・244・247 ～ 250 など先端を尖らせるものが多い。251 ～ 263 は両端を削るなど加工が認められるものである。

SD51（264 ～ 272）　264 は直柄平鍬の身である。劣化が進んでおり、外形もやや崩れている。孔径は直径 4cm である。265 は栓であろうか。上端は中心部に向かって削り小さな突起状を作出している。半分に割れている。266 ～ 268 は部材である。267 は孔のある先端部分をやや細く作りだす。269 は下端を丸く仕上げ右側は段を作り出している。上端は欠損している。270 は上下端の加工痕は不明瞭である。重量感のある材で、礎盤や製品の素材の可能性が想定できる。271・272 は断面円形の棒状材である。いずれも先端をやや尖らせる。272 は先端を扁平に仕上げている。

SD83（273 ～ 309）　273 は竪杵と考えられる。両端の径が最大で、握部に近づくにしたがって細くなり、搗き部と握部の境が不明瞭な形態である。木取りは芯持丸木ではなく削り出している。274 は盤である。口縁部は欠損しているが、長辺よりも短辺を厚く仕上げていることがわかる。脚は 4 つ付くものと判断できる。裏面から短辺側縁にかけて炭化している。275 は刳物桶の一部である。276 は端部を丸く作出し括れを有するが、下部は欠損し裏面にかけて劣化していることから、全形は不明である。277 は折曲げ式の竪櫛である。竹ひご状のものを並べて中央で結束し、それをアーチ形に曲げて作り出したものである。頭部のみ残存している。全面黒漆塗りであるが、漆塗で固めるのは主に頭部のみであるという［奈文研 1993］が、歯は確認できていない。本遺跡ではもう 1 点、ほぼ同じサイズのものが出土している（312）。

278 は扁平な棒状の一端に三角形状の突起を作出している。280 は円形板と推測される。木釘痕は確認できない。281 ～ 288 は部材である。283 は両端を山形状に加工し、両端及び中央部分に帯状の凹みを作出する。加工は丁寧である。284 の上部は断面円形で、切込みを境として下部は断面半円形に作る。143 と形態がやや似ているが用途は不明である。285 ～ 288 は長さ 60cm を超え、建築材の可能性もある。

289・290 は自然木の両端を加工するのみである。劣化が進み加工痕は不明瞭である。291 ～ 293 は杭である。292 は分枝した枝を切り落として杭として利用している。294・296 は板状の材、295・297 ～ 309 は棒状の材である。298・300・301・305・306 は丁寧なつくりであり、柄などの製品である可能性が考えられる。

c　古墳時代中期

SK49（7 ～ 9）　7 は篦状を呈するが、劣化が進んでいるため外形も崩れている。8 は上部の片側のみ抉りを入れる。9 は一端に大きく抉りを入れ、一見指物のように思われるが、木釘孔は確認できない。

SK95（310 ～ 328）　310 は形状から鍬または鋤の未成品と推測される。311 は直柄又鍬である。着柄角度は 69° ～ 74° である。柄孔周囲の隆起は明瞭な段を有し、隆起に近接して左右 1 対の方形孔が確認できる。これは泥除けを装着するための孔である。しかし、泥除けを装着するのは本来平鍬であり、さらに、311 の形態も又部分を除けば平鍬そのものであることから、非常に珍しいものと考えられる。312 は 277 同様、折曲げ式の竪櫛である。277 よりも残存状態が良く、歯の数は 32 本と推測できる。頭部と歯部の境には断面円形の材を巻いているようであるが、残存部分が少なく、詳細は不明である。

313 は杓子形である。314 は枝の一端に火鑽孔が 1 か所ある。孔の直径は 1cm ほどである。315 は部材、

316・317 は不明木製品である。316 のように、上部に切込みや抉りを入れて頭部を作り出し、下端は尖らせるという形態は本遺跡で数点か見られるが、すべて少しずつ異なっており、全く同じ製品は確認できない。319 は杭である。318・320 ～ 328 は棒状の材である。320 ～ 322・324 は丁寧なつくりで、何らかの製品の一部である可能性もある。

d　古墳時代後期

SX88（330 ～ 357）　330 は板田下駄の一部である可能性もある。332 は樹皮製で、周縁にほぼ等間隔で穿孔する。中心部分に見られるのは孔ではなく欠損である。容器蓋の可能性が指摘できる。333 は、弭が作出されておらず、弓または網枠の輪である可能性が考えられる。上端は尖らせ、下端は箆状にする。下部のみ細かい削りが認められるが、上部よりも下部のほうが径は大きいことから、径を減じるためと考えられる。335 は部材で、上下に差込孔が見られるが、その形状は上部が円形、下部が長方形と異なる。337 は内面下部に突帯がないことから井戸枠の側板と推測される。内面下部は厚みを減じるためか削り痕が多数認められる。一部は炭化している。

340 ～ 345 は杭で、いずれも芯持丸木を使用し先端のみ加工している。341 や 343 のように多少曲がっている材も用いられる。344 は裏面半分を欠損している。346 ～ 349 は棒状の材である。350・351 は両端を加工するが劣化が進み、加工痕が不明瞭である。表面にも若干加工痕が見える。352 ～ 357 は棒状の材である。355 は両端、356 は片端を尖らせる。

e　古　　代

SX87（329）　上部に 1 孔認められる部材である。上部は断面板状であるが、下部は断面三角形となる。

2）包　含　層

基本的には時代の古い順に記載しているが、各層の所属時期については第Ⅲ章を参照されたい。また、各個体の詳細な層位についても観察表に記載した。

XV 層・XVd 層（359 ～ 362）　359 ～ 361 は杭状である。361 は上部にも加工痕が見られる。362 は扁平な棒状材であるが、劣化が進み加工痕は不明瞭である。

XIV 層・XIVb 層（363 ～ 365）　363 は棒状の材で樹皮が残るが、中央付近に削り痕も認められる。365 は半円形に整えている。樹種はサワグルミである。

XIIIa 層～XIIId 層（358・369 ～ 371）　358 は刳物で、四脚を削り出しており、片端に肘掛状のものがついている。形状から脚付盤としたが、肘掛状のものがつく例は確認できず、別の器種の可能性もある。

369 は自然木の両端を加工したもので、樹皮が残っている。370 は手斧の柄で、斧台の一部を柄と一体に仕上げている。本体と添え木 3 点で石斧を挟み込み固定する。固定しやすいように斧と直交する切込みを 3 段入れる。添え木 3 点のうち 1 点は裏面中心に突帯を持つが、本体も同じ構造になっており一対をなす。復元図のように添え木を組み合わせたと推測でき、3 点を組み合わせる位置は決まっていたと言える。実際に添え木を組み合わせてみると、石斧の入る幅は想像よりも小さく、幅・厚さとも 2.4cm であったが、紐等で緊縛して使用することから、これよりも大きい石斧も使用可能であろう。樹種は本体と添え木 1 点（370a）がモチノキ属、添え木 2 点（370b・c）がヤブツバキである。対で組み合わせるものが同じ樹種となる。371 は樹皮付きの板材で、片端を連続的に加工しているが、用途不明である。

XⅡ層・XⅡd層・XⅡ砂層（366 ～ 368）　366 は籃胎漆器である。破片資料のため全形は不明であるが、頸部と胴部の境にはわずかに稜を有し、広口壺と推測される。残存している破片の下部には孔が 1 個認められ、器壁に垂直に穿たれている。補修孔と考えられる。胎である編み物材は消失して、塗膜と粗形材のみが残存している。粗形材に残された編物圧痕から、編み方はござ目編みと推測する。ござ目編みは、1 本超え 1 本潜り 1 本送りで構成される技法で、タテ材の間隔に比してヨコ材の間隔が狭い。367 は先端が炭化した棒状材、368 は大きく斜めに加工された材である。

XⅠc層（372 ～ 374）　372 は全面が赤色塗彩された木胎漆器である。直径は約 8cm と推測され、1/3 ほどが遺存する。外面に認められるハケメ状の擦痕は漆を塗布した際の工具痕と思われる。なお、外面中央の盲孔は破損によってできた陥没である。

外面の文様は、中央の陽刻部を境にして、上下二段の横線化したモチーフで構成される。上段のモチーフは、主軸線から上部に棘状の陰刻が伸び、それらが連結して矩形の陽刻部を表出させる。主軸線の末端は三又に分かれ、縄文時代晩期初頭の土器に特徴的な「玉抱三叉文」を連想させる。一方、下段では主軸線の両端が開いて、I 字を横にしたようなモチーフとなる。

上下のモチーフは共に「三叉文」に比定することが可能で、縄文時代晩期前葉に位置づけることができる。本遺跡ではXⅢa 層から同時期の遺物がややまとまって出土していることを考慮すれば、XⅠc 層から出土した本資料は紛れ込みの可能性が高い。なお、本資料のような主軸線の伸長化が著しい三叉文は、宮城県北半の大洞 B2 式～ BC1 式土器の特徴とされ［小林 2008a］、新潟県内の土器文様としては一般的ではない。本資料が腕輪であることに注意が必要であるが、文様の地域性･系統を考えるうえで興味深い。

373 は半割材の木表側を下端に向かって徐々に薄く加工している。374 は杭状である。両端に加工されるが、劣化が著しく裂け目が数か所見られる。

Ⅸ層・Ⅸc層（375 ～ 388）　375 は円形になると思われる板である。劣化が進む。376 は節周辺の部分を加工したものである。孔は自然に抜けたものと推測するが断定はできない。377 は紡錘車である。長さ 7.0cm、幅 7.5cm を測り、楕円形を呈する。中心部には直径 4 ～ 5mm の孔が見られる。378 は握部に最大径があり、握部の上下を 2 段削り込んで弓幹との境界とし、弓幹を細く作り出す。木取りは芯持丸木ではなく削出である。

379 は抉りを入れて頭部を丸く作出する部材である。380 は井戸枠側板と考えられる。内面は削り痕が見られ、上部に向かって厚みを減じている。381 は杭、383 は上下とも欠損のため加工痕は認められないが、形態とサイズから柱根の可能性がある。

灰色粘土（389 ～ 391）**・F層**（392・393）　389・390 は短冊状の材で、389 は表面下部に円形の浅い凹みが認められる。391 はおそらく円形を呈すると思われる。側面は加工単位が明瞭に見えるが、角を残し丸く仕上げられていない。392・393 は短冊状である。392 は上部に浅い抉りが見られ、393 は両端の片側が刀状を呈しているが劣化が著しく、加工痕は不明瞭である。

D層（394・395・600）　いずれも部材である。394 は両面に線状痕を有する。端部に 1 個木釘孔が見られる。395 は実測図右半が欠損しており、本来は円形を呈すると考えられる。中央に細長い孔が穿たれており、木釘孔が 3 個認められる。容器蓋の可能性もある。

31 層（396 ～ 398）　396 は上部に切込みを入れ、直下を細く削る。両端とも欠損しているため全形は不明である。表面は比較的丁寧に作られている。397 は扁平な棒状の部材で、上端中央に孔が見られる。398 は削出により作り出された杭であるが、やや扁平である。表面中央には節が見られる。

27 層（399 ～ 401）　いずれも棒状材である。399 は断面台形状の材を片側のみ鋭く切り落としている。400 の上端は刀状を呈し、下端には山形の抉りが入る。

23 層（402 ～ 408）　402・403 は部材である。402 は板材の片端を丸く仕上げ、端部 1cm 前後を残して大きく孔を穿つ。403 は板状の材に方形孔を 3 個、不規則に配する。下の 2 孔には樺皮を二重に巻きつけ、結び目をつくる。丁寧なつくりである。404 は刳物桶であろう。劣化が進み変形しているが、内面下部の突帯が認められる。上端は欠損している。407 は片側に抉りが 2 か所あり、抉りの間には半円状の浅い凹みが見られる。上端は欠損しているが、孔の痕跡が認められる。下部は緩やかに厚みを減じている。408 は底面を平らに加工し、柱根と考えられる。劣化が著しく樹心部分は消失している。

21 層（409・410）・**20 層**（411・412）　409 ～ 411 は棒状の材である。409 は徐々に径を減じ、上部は扁平に削る。412 は破片資料である。先端を尖らせており、形代の可能性も考えられる。

Ⅷa 層・Ⅷb 層（413 ～ 426）　416・419 は部材、418・425 は短冊状、そのほかは棒状の材である。419 は片側に方形孔が 3 個、ほぼ等間隔で配される。表面中央部分に線状痕が認められる。415 は直径 1.7cm ほどの細い棒であるが、丁寧な加工であり何らかの製品の一部と考えられる。413・424 は先端を薄く作り出し、420 は短く切り落とす。422 は上端に欠込を有する。

Ⅶ層・Ⅶa 層・Ⅶb 層（427 ～ 486・492・493）　427 は直柄平鍬の柄孔周囲の隆起部分が剥落したものと推測される。隆起部分は上部が丸く、下部は尖頭状に長くのびる形態である。428 は表裏面の両端に抉りを入れる浮子である。

429 は上端が欠損しているが、ほぼ完形品の弓である。全面に細かい削りが認められ、節は落として平坦にしている。430 は杓子形であるが、身の部分に孔が見られる。431 は上端に切込みを入れてわずかに段を作出し、下端を尖らせる。栓の可能性もある。432 は曲物底板で、木釘孔が 6 か所認められる。433 は長さ推定 103cm を測る大型の槽である。長辺と口縁部は欠損している。底面は非常に薄いのに対して短辺は厚く、内外面に削り痕が残る。

434 は端部から 3cm ほどに段を作り出している。つくりは丁寧で、刀剣把の可能性も考えられる。裏面は欠損している。435 は端部を尖らせ、細い削り痕が認められる。節のある材で、弓の一部かもしれない。437 は鋤または曲柄平鍬の身、もしくは未成品と推測される。幅に比して厚みがあり、前面は盛り上がる。側面はゆるく湾曲している。438 は刀形と判断したもので、精緻なつくりである。材は酷似している。438a は下部を緩やかに抉る。438b は下端近くに切込みが見られ、把を表現しているものと思われる。441 は 66cm を測る剣形と考えられる。剣部分が非常に長く、わずかな抉りで把部を表現する。

439・440・442 は棒状の材で、何らかの製品またはその一部と考えられる。447 ～ 450・455 は部材である。447 は板状で左右交互に抉りを入れ、2 孔 1 対の孔を上下に配する。449 は中央から下部に向かって、2 孔 1 対の方形孔を 3 か所に穿つ。中央の孔には別の材が残る。先端は炭化している。450 は 2 孔 1 対の孔と大小の孔がほぼ等間隔で配されるが、一直線上ではなく、規則性は不明である。左右側縁の抉れている部分も孔の可能性がある。

451 ～ 453 は板状、454 は短冊状、456 ～ 458 は棒状の材である。453 は厚みのある板材で、表面に削り痕と線状痕がわずかに認められる。459 は杭状だが先端が平坦にされている。461 は板杭と思われる。461 は櫂のような形状であるが、劣化が著しく上下とも欠損しているため全形は不明である。462 ～ 478・482 ～ 486・493 は棒状の材である。470 ～ 475 は片端、476 ～ 478 は両端を尖らせるもので、端部が炭化しているものが多い。

479 は両端加工の自然木、480 は杭である。481 は上端と右側面を加工する板材である。492 は裏面下半を削り、下端を粗く切り落としている。

Ⅵ・Ⅵb 層・Ⅵc 層（487 ～ 491・494 ～ 500）　487・488 は箸であろう。490 は角枠型田下駄の桟である可能性が高い。491・493・499・500 は棒状の材である。499・500 は端部を尖らせる。494 は上面に長方形の差込孔、下部には円形の孔が穿たれる。495 は円形板と推測される。496 は表面のみ線状痕が認められる。497 は先端を 2 方向からの加工で尖らせており、柱根とした。498 は扁平な材の先端を尖らせている。

Ⅴ・Ⅵa 層（501 ～ 504）　501・502 は指物である。501 は表面と側面に木釘が見られる。502 は左側両端を L 字状に削るが、対称形ではない。右側縁に木釘孔を配する。504 は差歯下駄の歯であろう。線状痕が見られる。

Ⅴ層（505 ～ 535）　505 は曲物側板の一部である。内面にはケビキ痕が認められる。506 は上端に小さいつまみを作り出す。札（ふだ）などの可能性も考えられる。507 は頭部左右から抉りを入れる。506 と近似しているが、形代の可能性もある。508・509 は円形板であろう。木釘孔は確認できない。510 は表裏面とも削り痕が確認できるが、裏面中央は炭化のため不明である。511 は丁寧なつくりで、中央付近で切込みを入れ段を作出する。512 は削りが細かい。木目に沿って 3 片に分かれていたものが接合した。514・515 は下部を細く仕上げる。516 ～ 519 は棒状材である。

521・529 は丁寧なつくりで、側面に切込みを多数入れるが不規則であり用途不明である。521 は 128cm 以上を測る大型品で、一方、529 は 60cm を測る。528 の浮子は 428 とほぼ同一サイズである。522・527 は部材、523・531 は板状、525 ～ 527・532・534 は棒状である。532 は上端を四方から削り、尖らせる。533 は円形板と考えられるが、周縁部は厚みを減ずる。加工によるものか摩耗によるものか、劣化が進んでおり判断できない。535 は箸である。断面方形を呈する。

青灰砂層（536 ～ 590）　536 は上部を丸く作り出し、人形と推測される。537 は刳物で楕円形槽である。長径は 46 ～ 48cm 程度と推定できる。器高は 9.7cm である。538 は曲柄平鍬の身である。前面と推測される面の中心線にはわずかに稜が確認できる。上下と右半が欠損しており全形は不明である。539 は鋤・鍬あるいは櫂と考えられるが破片資料のため特定できない。541・543・545 は指物であろう。541 は中央よりやや下部が欠込状になっており、別の板材と組み合わせたと推測される。それより下部はやや厚みを減じる。側面から裏面へは木釘が打たれるが、1 か所では失敗して木釘がはみ出している。543 は上下が対称形をなし、片側に 4 個の方形孔を穿つ。中央には 543 の厚さほどの幅で切込を入れている。545 は上端に木釘が残る。表面にも孔が 1 個認められる。右側面下半は欠損しているが、上半には弧状の抉りがあり、その上下にも切込みが認められる。540・542・544・546 は部材である。542 は上部を削り細め、端部に抉りを入れる。中心線上には孔を 2 個穿っている。547 は側面が緩い弧を描く。弧の内面上部には鋭く深い線状痕が認められる。549 は左右交互に抉りがあり、何らかの建築材である可能性がある。550 ～ 553 は加工材で用途不明である。554 は厚みのある板材で、表面には線状痕が残り作業台と推測される。555･556 は杭である。断面形では 555 は三角形、556 は半円形であるが、欠損しており、本来は芯持丸木であったと判断される。557 ～ 564・571 は板状および短冊状、565 ～ 590 は棒状である。棒状材のうち 576 は斧柄、580･581 の断面は整った円形を呈し、何らかの柄の可能性も考えられる。587 ～ 590 は 1.5m を超えるもので、いずれも先端を細くする。588 の裏面先端は欠損している。

D 区 A 層・B 層・C 層（591 ～ 598）　591 は中央付近に段を作出し一段細くする。握部であろうか。上

下とも欠損し全形は明らかではない。592 下端には細い切込みを入れる。表裏面とも線状痕が認められる。594 ～ 596 は部材である。594 の上部は穿孔されるが、端部は欠損している。下端は枘状に作り出す。596 は中央部分や下部に欠込が見られる。上部の加工痕は不明瞭であるため、欠損かもしれない。597・598 は棒状の材で、597 は両端を細め、598 は徐々に幅を広げる。下端は欠損している。

不明（599・601 ～ 625）　599 は板田下駄である。緒孔は 3 孔で、孔の配置を見ると、上の孔が若干右に寄っており、左足用であった可能性も考えられる。上部の孔付近から上端に向かってわずかに凹んでいるが、削り痕は認められない。601 は指物で、2 辺の側縁に孔が配される。602・603 は箸である。604 ～ 607 は板状を呈するが用途不明の製品である。604 は孔が不規則に 3 個穿たれる。605 は表面を削る際に残された擦痕が明瞭である。606・607 は角を斜めに加工している。608 ～ 610 は部材である。608 は上部を枘状に削る。左側は欠損である。609 は上下両端を削り、一端を目違継状とする。中央には木釘孔が見られるが、孔の方向は直交する。611 の下部は欠損しているため、目違継を作出しているわけではない。614 は丁寧なつくりである。対称形をなしており、端部に大きい円形孔、やや中央よりに小さい方形孔を穿つ。616 は上部に欠込を有するが浅い。下端を細めている。617 は下半を削ってやや扁平にするが、それほど厚みを減じていない。618 は下部周縁が刃部のように尖り、鍬または鋤の可能性がある。619・620 は棒状、622・623 は加工材、624・625 は杭である。625 は 176cm を測る大型品であるが、削出によって作出される。下部は緩やかに削られ嘴状を呈する。

漆紐（626・627）　2 点ともⅩⅤc 層から出土した。626 は深鉢（図版 69-796）、石匙（図版 73-46）とともに出土した。幾重にも重なっており、太さ 2mm 前後、長さは数 mm ～ 40mm 程度と幅がある。紐は中空の状態で、斜方向あるいは直交方向の裂痕が認められ、本来は長い紐状であったと想定できる。

科学分析の結果、太さ 1.5mm 前後の紐あるいは糸を 2 本、Z 方向にゆるく撚り合わせたものを芯とし、これを胎としてその表面にベンガラ漆を塗布していることが判明した。中空となっているのは、漆が中心部までは浸透せず腐朽消失したためである。紐の素材はカラムシ（苧麻）あるいはこれに近似する草本性の繊維を使用している可能性が高い。また、用途は装身具で首飾りである可能性があると考えられる。

放射性炭素 14 年代測定を行った結果、今から概ね 6600 年前（5760 ± 40　^{14}CBP、暦年較正 INTCAL98）の製品であることが判明した（詳細は第Ⅵ章 5 参照）。

627 も分析は行っていないものの、同様の構造と推測される。

第Ⅵ章　自然科学分析

1　樹　種　同　定

は　じ　め　に

木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

大武遺跡は、新潟県のほぼ中央部海岸より、長岡市島崎字大武に所在する。島崎川左岸の西山丘陵の支陵裾付近に立地し、標高は約 13m、現況は水田である。当遺跡は大きく縄文時代前期･晩期、弥生時代中期、古墳時代早期～前期・後期、中世の複合遺跡であり、遺物では縄文時代前期前葉から中世にいたる土器・石器・木製品が出土している。

本報告では、大武遺跡から出土した木製品について、木材解剖学的手法を用いて樹種同定を行い、当時の木材利用および森林植生について検討する。

試 料 と 方 法

試料は、大武遺跡から出土した杭、板杭、浮子、指物、形代、杓子形、槽、底板、円形板、曲物側板、高杯、柱根、箸、梯子、部材、刀形、刳物桶、弓、井戸枠側板、斧柄、櫂、鍬、鋤、田下駄、竪杵、竪櫛、部材などの木製品 233 点である。時期別には縄文時代前期の木製品 3 点、縄文時代後期の木製品 1 点、縄文時代晩期の木製品 2 点、弥生時代中期の木製品 10 点、弥生時代後期の木製品 5 点、古墳時代早～前期の木製品 140 点、古墳時代中期の木製品 11 点、古墳時代後期の木製品 9 点、古代の木製品 34 点、時期不明の木製品 15 点である。

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって 40 ～ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

結　　果

観察表および第 31 図、第 17・18 表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

1　カヤ　*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.　イチイ科　（第 32 図 1）

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で 1 分野に 4 個存在するものが多い。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し 2 本対になる傾向を示す。放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には 2 本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在するが不鮮明である。

以上の形質よりカヤに同定される。カヤは、宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ 25m、径 90cm に達する。材は均質緻密で堅硬であり、弾性が強く水湿にも耐え、

保存性が高い。弓などに用いられる。

2　イヌガヤ　*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch　イヌガヤ科　（第 32 図 2）

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は非常に狭く、樹脂細胞が散在する。放射柔細胞の分野壁孔は、トウヒ型で 1 分野に 1 ～ 2 個存在する。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が散在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1 ～ 10 細胞高ぐらいである。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりイヌガヤに同定される。イヌガヤは、岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木または小高木で、高さ 10 ～ 15m、径 20 ～ 30cm である。材はやや堅硬で、木理は緻密であるが不整でしばしば波状を呈する。建築、器具、土木、ろくろ細工、薪炭などに用いられる。

3　モミ属　*Abies*　マツ科　（第 32 図 3）

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で 1 分野に 1 ～ 4 個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、数珠状末端壁を有する。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりモミ属に同定される。モミ属は、日本に 5 種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの 4 種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ 45m、径 1.5m に達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

4　スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科　（第 32 図 4 ～ 7）

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1 分野に 2 個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、10 細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは、本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ 40m、径 2m に達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

5　ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Endl.　ヒノキ科　（第 32 図 8）

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は極めて狭い。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で 1 分野に 2 個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1 ～ 15 細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは、福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ 40m、径 1.5m に達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭であり、耐朽性、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

6　アスナロ　*Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.　ヒノキ科　（第 32 図 9）

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が存在する。放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型からややヒノキ型を示し、1 分野に 2 ～ 4 個存在する。また放射柔細胞内に内容物が多い。放射組織は単列で、樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりアスナロに同定される。アスナロは、常緑高木で、本州、四国、九州に分布し、関東北部や木曽に比較的多い。日本特産の常緑高木で、通常高さ 40m、径 1m に達する。材は耐朽性、保存性が高く、建築など広く用いられる。特殊用途には漆器木地があり、輪島塗り（石川県）で利用されている。

7　ヒノキ科　Cupressaceae

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔はやや小型であるが型は不明瞭であり、1 分野には 1 ～ 3 個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりヒノキ科に同定される。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコなどがある。

8　ハコヤナギ属　*Poplus*　ヤナギ科　（第 32 図 10）

小型で丸い、やや放射方向にのびた道管が、単独あるいは 2 ～ 3 個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は同性である。放射組織は、単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりハコヤナギ属に同定される。ハコヤナギ属には、ハコヤナギ、ドロノキなどがあり、落葉の高木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。材は軽軟で、耐朽性、保存性は低く、建築、器具などに用いられる。

9　ハンノキ属ハンノキ節　*Alnus* sect. *Gymnothyrsus*　カバノキ科　（第 32 図 11）

小型で丸い道管が、放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は 20 ～ 30 本ぐらいである。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなる。放射組織は、同性放射組織型で単列のものと大型の集合状のものからなる。

以上の形質よりハンノキ属ハンノキ節に同定される。ハンノキ属ハンノキ節は、落葉の低木から高木である。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

10　アサダ　*Ostrya japonica* Sarg.　カバノキ科　（第 32 図 12）

小型で丸い道管が、単独あるいは 2 ～ 5 個放射方向に複合してややまばらに散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁には微細ならせん肥厚が存在する。放射組織は、ほとんどが平伏細胞であるが上下の縁辺部には方形細胞が現れる。放射組織は、上下の縁辺部が方形細胞からなる異性放射組織型で、1 ～ 3 細胞幅である。

以上の形質よりアサダに同定される。アサダは、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ 15m、径 60cm に達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、土木、船舶、車両などに用いられる。

11　サワグルミ　*Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc　クルミ科　（第 33 図 13）

大型で丸い道管が、単独あるいは 2 ～数個放射方向に複合し、全体としてやや放射方向に配列する傾向を示して、まばらに散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は徐々に減少する。軸方向柔細胞が接線状に 1 列配列し、波状を示す。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。放射組織は同性放射組織型で、1 ～ 2 細胞幅で細い。

以上の形質よりサワグルミに同定される。サワグルミは、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ 30m、径 1m に達する。材は耐朽性、保存性は低いが、下駄、マッチの軸、器具、家具などに用いられる。

12　クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　（第 33 図 14）

年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは、北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ 20m、径 40cm ぐらいであるが、大きいものは高さ 30m、径 2m に達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

13　ブナ属　*Fagus*　ブナ科　（第 33 図 15）

小型でやや角張った道管が、単独あるいは 2 ～ 3 個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるがほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、2 ～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

以上の形質よりブナ属に同定される。ブナ属には、ブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ 20 ～ 25m、径 60 ～ 70cm ぐらいであるが、大きいものは高さ 35m、径 1.5m 以上に達する。材は堅硬で緻密、靭性があるが、保存性は低い。容器などに用いられる。

14　コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　（第 33 図 16）

年輪のはじめに大型の道管が、1 ～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節には、カシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ 15m、径 60cm 程に達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

15　コナラ属クヌギ節　*Quercus* sect. *Aegilops*　ブナ科　（第 33 図 17）

年輪のはじめに大型の道管が、1 ～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節には、クヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ 15m、径 60cm に達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

16　コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　（第 33 図 18）

中型から大型の道管が、1 ～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属には、アカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ 30m、径 1.5m 以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

17　ケヤキ　*Zelkova serrata Makino*　ニレ科　（第 33 図 19）

年輪のはじめに大型の道管が 1 ～ 2 列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射

組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらむものがある。放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は１～７細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靭で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

18　ヤマグワ　*Morus australis* Poiret　クワ科　（第33図20）

年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が、単独あるいは２～３個複合して配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径はやや急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の１～３細胞ぐらいは直立細胞である。放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、１～５細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワに同定される。ヤマグワは、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ10～15m、径30～40cmである。材は堅硬で靭性に富み、建築などに用いられる。

19　モクレン属　*Magnolia*　モクレン科　（第33図21）

小型の道管が、単独あるいは放射方向に２～４個複合して多数散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、導管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は階段状である。放射組織は上下端のみときに直立細胞からなる異性である。放射組織は異性放射組織型で、１～２細胞幅である。

以上の形質よりモクレン属に同定される。モクレン属には、ホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉または常緑の高木ないし低木である。

20　カマツカ属　*Pourthiaea*　バラ科　（第33図22）

小型の道管が、ほぼ単独で、散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に配列する。道管の穿孔は、単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。放射組織は、異性放射組織型で、中ほどは平伏細胞であるが、上下の縁辺部に方形細胞、直立細胞が存在する。幅は１～４細胞幅である。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりカマツカ属に同定される。カマツカ属には、カマツカ、ワタゲカマツカがあり、落葉の低木から小高木である。カマツカは本州、四国、九州に分布し、ワタゲカマツカは北海道、本州、四国、九州に分布する。木材は粘り強く、器具（柄、杖、牛の鼻輪、櫛）などに用いられる。

21　カエデ属　*Acer*　カエデ科　（第33図23）

小型で丸い道管が、単独あるいは２～４個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細ならせん肥厚が存在する。放射組織は、平伏細胞からなる同性である。放射組織は、同性放射組織型で１～６細胞幅である。道管の内壁には微細ならせん肥厚が存在する。

以上の形質よりカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の形質からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ20m、径1mに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

22　トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　トチノキ科　（第 33 図 24）

小型でやや角張った道管が、単独ないし放射方向に 2 ～数個複合して密に散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はすべて平伏細胞からなり、高さが揃っており同性である。放射組織と道管との壁孔は、小型で密に分布する。放射組織は単列の同性放射組織型で、層階状に規則正しく配列する。

以上の形質よりトチノキに同定される。トチノキは、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ 15 ～ 20m、径 50 ～ 60cm に達する。材は軟らかく緻密であるが耐朽性・保存性がなく、容器などに用いられる。

23　キハダ属　*Phellodendron*　ミカン科　（第 34 図 25）

年輪のはじめに大型でやや厚壁の丸い道管が、単独あるいは 2 個複合して 2 ～ 3 列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で方形の小道管が、多数集合して接線方向に帯状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は徐々に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は多列の同性放射組織型で、紡錘形を呈する。幅は 1 ～ 3 細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりキハダ属に同定される。キハダ属には、キハダ、ヒロハノキハダなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ 25m、径 1m に達する。

24　ヤブツバキ　*Camellia japonica* Linn.　ツバキ科　（第 34 図 26）

小型でやや角張った道管が、単独ないし 2 ～ 3 個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は 8 ～ 30 本程度である。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、直立細胞には、大きく膨れているものが存在する。放射組織は、異性放射組織型で、1 ～ 3 細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の形質よりヤブツバキに同定される。ヤブツバキは、本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ 5 ～ 10m、径 20 ～ 30cm である。材は強靭で、耐朽性が強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

25　トネリコ属　*Fraxinus*　モクセイ科　（第 34 図 27）

年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で 1 ～ 3 列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまるい厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に 2 ～ 3 個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性である。放射組織は同性放射組織型で、1 ～ 3 細胞幅である。

以上の形質よりトネリコ属に同定される。トネリコ属には、ヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉の高木である。材は建築、家具、運道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

26　エゴノキ属　*Styrax*　エゴノキ科　（第 34 図 28）

年輪のはじめに、やや小型で丸い道管が、主に 2 ～ 4 個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけて緩やかに減少する。軸方向柔細胞が、晩材部において接線状に配列する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は 10 本前後である。放射組織は異性である。放射組織は、異性放射組織型で 1 ～ 3 細胞幅である。

以上の形質よりエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ 10m、径 30cm である。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

27　タケ亜科　Bambusoideae　イネ科　（第 34 図 29）

基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と師部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。柔細胞及び維管束、維管束鞘が桿軸方向に配列している。

以上の形質よりタケ亜科に同定される。タケ亜科には、マダケ属、メダケ属、ササ属などがある。

28　環孔材　ring-popous wood

部分的ではあるが、年輪のはじめに大型の道管が配列する。放射組織が存在する。

以上の形質より環孔材に同定される。本試料は保存状態が悪く、広範囲の観察が困難であることから、環孔材の同定にとどめる。

29　散孔材　diffuse-porous wood

小型の道管が、単独あるいは２～３個複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は階段状である。放射組織は上下の縁辺部のみ直立細胞からなる異性である。放射組織は異性放射組織型で、１～４細胞幅である。

以上の形質よりモクレン属などに類似するが、不明瞭な点が多く、同定には至らなかったので散孔材の同定にとどめる。

30　不明　unknown

試料は漆器壺であり、カミソリによる切片採取を試みたが、木地（木材）の部分が残っておらず、同定は困難である。

考　　察

同定の結果、大武遺跡の木製品 233 点は、多い樹種から順に、スギ 142 点、クリ 16 点、トネリコ属 12 点、コナラ属アカガシ亜属 12 点、イヌガヤ５点、コナラ属コナラ節４点、モミ属４点、ヒノキ４点、アサダ４点、ヤブツバキ３点、コナラ属クヌギ節２点、ケヤキ２点、ヤマグワ２点、カエデ属２点、タケ亜科２点、カヤ１点、アスナロ１点、ヒノキ科１点、ハコヤナギ属１点、サワグルミ１点、ハンノキ属ハンノキ節１点、ブナ属１点、モクレン属１点、カマツカ属１点、トチノキ１点、キハダ属１点、エゴノキ属１点、環孔材３点、散孔材１点、不明１点であった。

以上のように、大武遺跡の木製品の樹種はスギが極めて多いという特徴を有する。本地域はスギ林が主要な森林であり、スギが多用されたと考えられる。他の樹種も温帯ないし温帯下部の暖温帯に分布する樹種ばかりであり、当時遺跡周辺に分布していたか、近隣地域より流通によってもたらされたと考えられる。

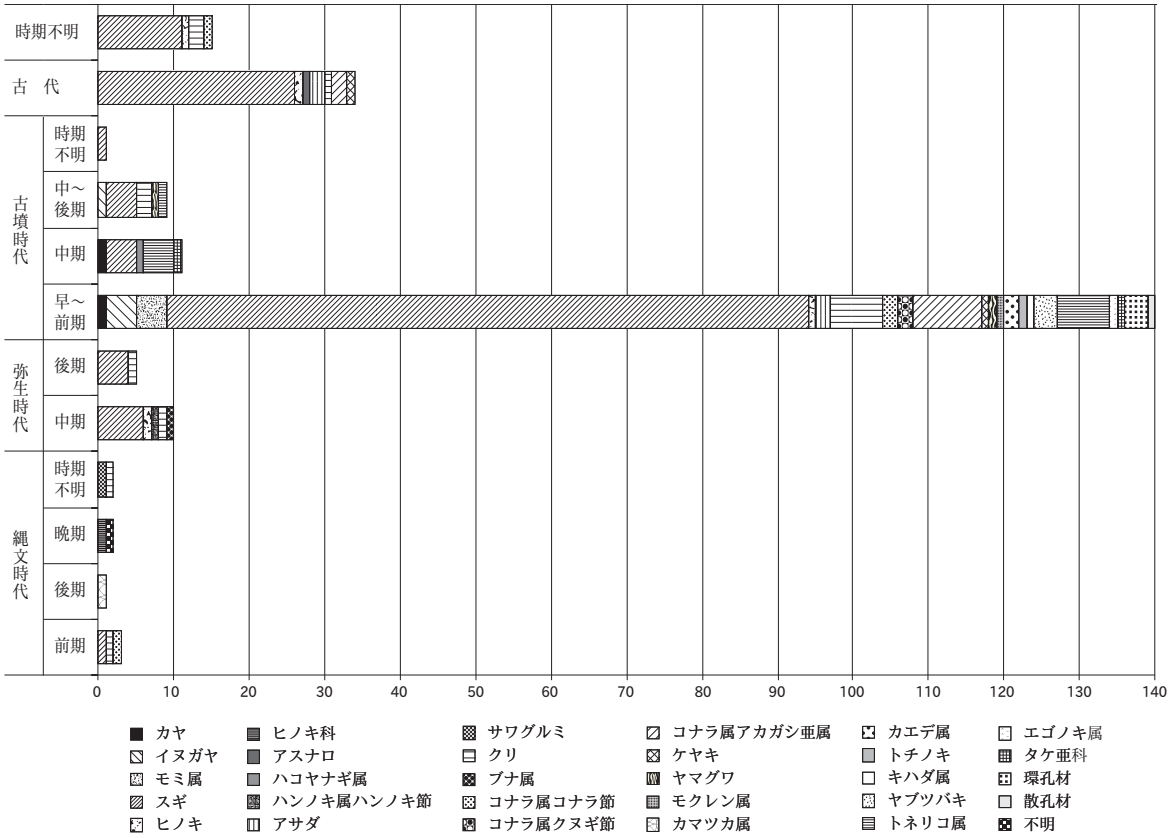
時代別の選材傾向（第 17 表）

時期別に見ると、縄文時代前期の木製品２点はスギであり、杭状・棒状の木製品に使用されている。縄文時代後期の木製品１点はカマツカ属であり、加工材に使用されている。縄文時代晩期の木製品２点は、棒状の木製品に使用されている。

弥生時代中期の木製品10点のうち、スギは紡錘車・部材・短冊状などの木製品、ヒノキは短冊状の木製品、ハンノキ属ハンノキ節は加工材、クリは井戸枠側板に使用されている。弥生時代後期の木製品５点のうち、スギは刳物桶・部材、クリは柱根に使用されている。

分類群	縄文時代				弥生時代		古墳時代				古代	時期不明	計
	前期	後期	晩期	時期不明	中期	後期	早～前期	中期	中～後期	時期不明			
カヤ							1	1					2
イヌガヤ							4		1				5
モミ属							4						4
スギ	1				6	4	85	4	4	1	26	11	142
ヒノキ					1		1				1	1	4
ヒノキ科			1										1
アスナロ											1		1
ハコヤナギ属								1					1
ハンノキ属ハンノキ節					1								1
アサダ							2				2		4
サワグルミ				1									1
クリ	1			1	1	1	7		2		1	2	16
ブナ属					1								1
コナラ属コナラ節	1						2					1	4
コナラ属クヌギ節							2						2
コナラ属アカガシ亜属							9				2		11
ケヤキ							1				1		2
ヤマグワ							1		1				2
モクレン属							1						1
カマツカ属		1											1
カエデ属							2						2
トチノキ							1						1
キハダ属							1						1
ヤブツバキ							3						3
トネリコ属							7	4	1				12
エゴノキ属							1						1
タケ亜科							1	1					2
環孔材							3						3
散孔材							1						1
不明			1										1
計	3	1	2	2	10	5	140	11	9	1	34	15	233

第 17 表　時代・時期における樹種構成



第 31 図　時代・時期における樹種構成

古墳時代早～前期の木製品 140 点のうち、スギは田下駄・杓子形・指物・形代・櫂・槽・叩き板・把手付容器・曲物底板・板状・棒状・箸状・部材・建築材などに、トネリコ属は栓・杭・部材に、イヌガヤは弓に、クリは杭などの木製品に、コナラ属アカガシ亜属は櫂・鋤・鍬身・杭に使用され、カエデ属は棒状の木製品に、コナラ属コナラ節は斧柄・鍬身に、コナラ属クヌギ節は鍬に、ケヤキは刀形に、モクレン属は梯子に、トチノキは高杯に、ヤブツバキは杭・加工材にそれぞれ使用されている。

古墳時代中期の木製品 11 点のうち、スギは杓子形・部材などに、コナラ属アカガシ亜属は鍬に、トネリコ属は杭、棒状木製品に使用され、コナラ属アカガシ亜属は鍬身に、タケ亜科は竪櫛に使用されている。古墳時代後期の木製品 9 点のうち、スギは井戸枠側板、円形板に、イヌガヤは弓に、クリは田下駄・部材に使用されている。

古代の木製品 34 点のうち、スギは、指物・槽・下駄の歯・円形板・部材などに、アサダは、櫂または鋤・鍬と考えられる木製品に、コナラ属アカガシ亜属は鍬に、ヒノキは曲物側板に、アスナロは棒状の木製品に、クリは斧柄と考えられる木製品に、ケヤキは円形板に使用されている。

以上、縄文時代前期・後期・晩期、弥生時代中期・後期は数量が少なく、用材の傾向は示されないが、古墳時代早～前期、古代は、いずれも同じ傾向を示し、スギが極めて多く、クリ・トネリコ属・コナラ属アカガシ亜属がやや多く、他は極めて少ない。

器種別の選材傾向（第 18 表）

縄文時代前期・後期・晩期、弥生時代中期・後期は数量が少なく傾向が示されないが、古墳時代早～前期、古代とも、各製品・板状・棒状の木製品や部材などはスギが多く、極めて多様に用いられている。農耕具には、鍬・鋤・竪杵などがあるが、コナラ属アカガシ亜属・コナラ属コナラ節・コナラ属クヌギ節を中心に、アサダ・トネリコ属の広葉樹の重硬な樹種が用いられている。礎板の可能性がある木製品にもコナラ属アカガシ亜属・トネリコ属・アサダ・ハンノキ属ハンノキ節の広葉樹の比較的重厚な樹種が用いられている。古墳時代早～前期では、弓 2 点にはイヌガヤ、剣把にはカヤが特徴的に用いられている。盾と考えられる木製品はモミ属で、これも特徴的な選材である。なお、竪櫛はタケ亜科であり、畿内からの搬入品の可能性もある。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第 1 号，植生史研究会，p.242.

縄文時代

		スギ	ヒノキ科	クリ	コナラ節属	サワグルミ	カマツカ属	不明	合計
容器	漆器壺							1	1
その他の加工品	杭状			1	1				2
	棒状	1	1	1					3
	加工材					1	1		2
合 計		1	1	2	1	1	1	1	8

弥生時代

		スギ	ヒノキ	クリ	ハンノキ節属	ブナ属	合計
容器	刳物桶	1					1
紡織具	紡錘車	1					1
建築材	井戸枠側板			1			1
	柱根			1			1
	その他	1					1
その他の加工品	円形板	1					1
	杭・杭状					1	1
	棒状	3					3
	板状	2					2
	短冊状	1	1				2
	加工材				1		1
合 計		10	1	2	1	1	15

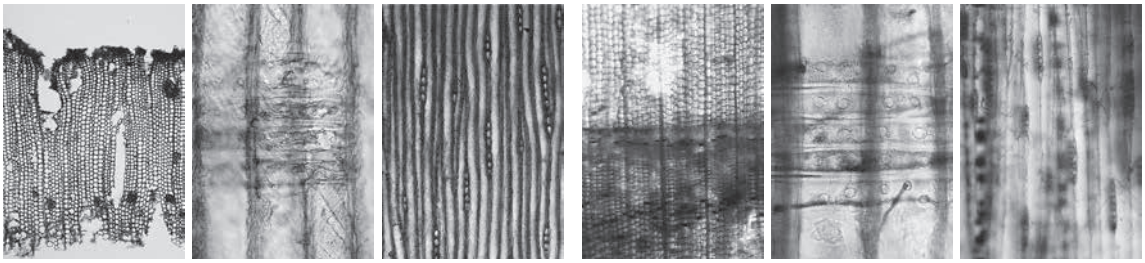
古代

		スギ	ヒノキ	アスナロ	アサダ	クリ	コナラ属アカガシ亜属	ケヤキ	合計
	曲物側板		1						1
	指物	3							3
	槽	1							1
農具	鍬・泥除け						1		1
	鍬・鋤または櫂				1				1
工具	斧柄か					1			1
服飾具	下駄（歯）	1							1
祭祀具	人形か	1							1
その他の加工品	不明製品	6							6
	作業台か				1				1
	円形板	2						1	3
	杭状	1							1
	棒状	4		1					5
	板状	7							7
	加工材						1		1
合 計		26	1	1	2	1	2	1	34

古墳時代

		カヤ	イヌガヤ	モミ属	スギ	ヒノキ	ハコヤナギ属	アサダ	クリ	コナラ節属	クヌギ節属	コナラ属アカガシ亜属	ケヤキ	ヤマグワ	モクレン属	キハダ属	トチノキ	カエデ属	ヤブツバキ	エゴノキ属	トネリコ属	環孔材	散孔材	タケ亜科	合計
容器	高杯																1								1
	把手付容器				1																				1
	指物				4																				4
	曲物底板				1																				1
	刳物桶				2																				2
	槽				1																				1
	栓											1									1				2
調理加工具	杓子・杓子形				4																				4
農具	鍬・泥除け				1					1	2	3													7
	鋤											1											1		2
	鍬または鋤																				1				1
	田下駄				6				1																7
	竪杵											1													1
工具	斧柄									1															1
漁撈具	錘								1																1
	浮子				2																				2
武器・武具	弓		4																						4
	盾			1																					1
	剣把	1																							1
運搬具	櫂				1							1													2
用具	紡錘車																								
祭祀具	剣形・刀形				2								1												3
	形代				1																				1
服飾具	竪櫛																							2	2
建築材	井戸枠側板				1				1																2
	梯子														1										1
	その他				2																				2
その他の加工品	叩き板				1																				1
	不明製品				5			1				1									1				8
	円形板				2																				2
	杭・杭状			1	3			1	2			1							1	1	3	1			14
	棒状		1	1	22		1		1					1				2			2	1			32
	箸状				2																				2
	板状			1	29	1			2												3	1			37
	短冊状				1											1									2
	加工材								1			2		1					2		1				7
合 計		1	5	4	94	1	1	2	9	2	2	11	1	2	1	1	1	2	3	1	12	3	1	2	162

第 18 表　器種別の選材傾向

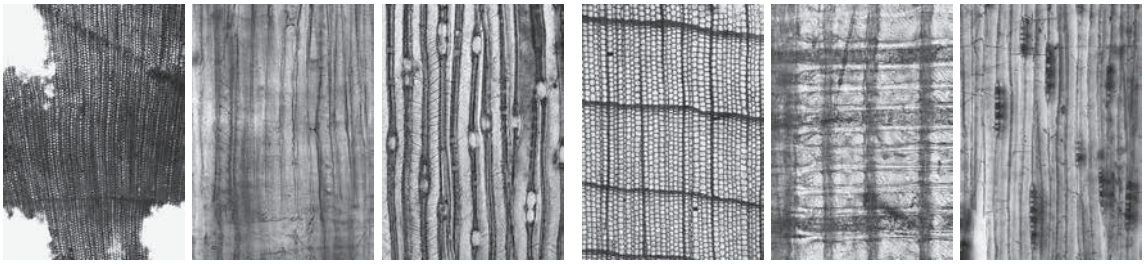


横断面 ▬ : 0.5mm　放射断面 ▬ : 0.05mm　接線断面 ▬ : 0.2mm

1．カヤ

横断面 ▬ : 0.5mm　放射断面 ▬ : 0.05mm　接線断面 ▬ : 0.2mm

7．スギ

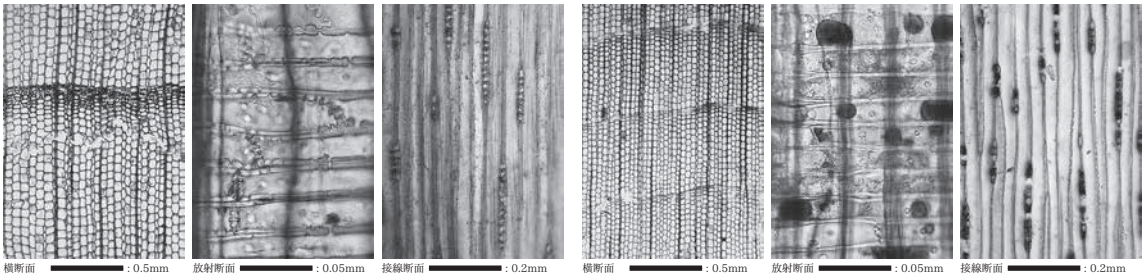


横断面 ▬ : 0.5mm　放射断面 ▬ : 0.1mm　接線断面 ▬ : 0.1mm

2．イヌガヤ

横断面 ▬ : 0.5mm　放射断面 ▬ : 0.05mm　接線断面 ▬ : 0.2mm

8．ヒノキ

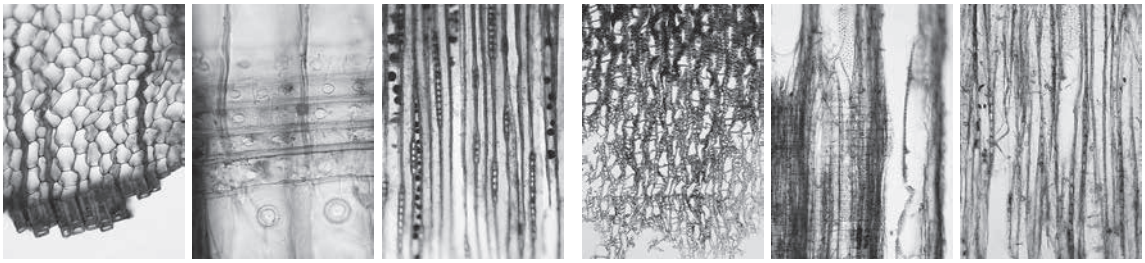


横断面 ▬ : 0.5mm　放射断面 ▬ : 0.05mm　接線断面 ▬ : 0.2mm

3．モミ属

横断面 ▬ : 0.5mm　放射断面 ▬ : 0.05mm　接線断面 ▬ : 0.2mm

9．アスナロ

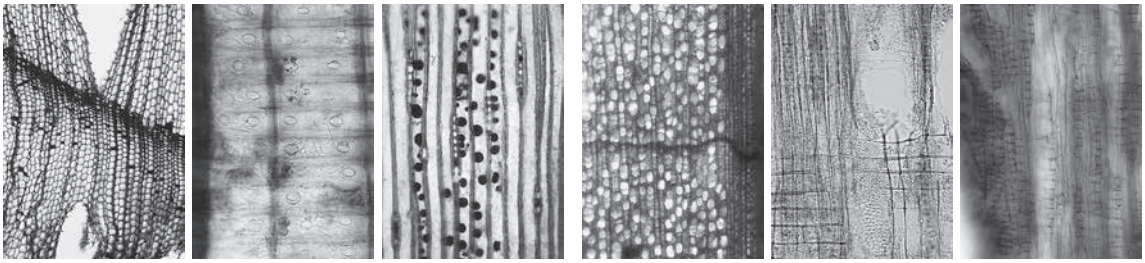


横断面 ▬ : 0.2mm　放射断面 ▬ : 0.05mm　接線断面 ▬ : 0.2mm

4．スギ

横断面 ▬ : 0.5mm　放射断面 ▬ : 0.2mm　接線断面 ▬ : 0.2mm

10．ハコヤナギ属

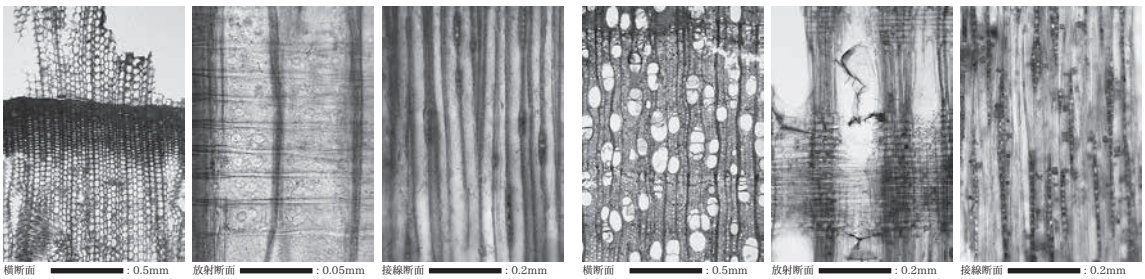


横断面 ▬ : 0.5mm　放射断面 ▬ : 0.05mm　接線断面 ▬ : 0.2mm

5．スギ

横断面 ▬ : 0.5mm　放射断面 ▬ : 0.1mm　接線断面 ▬ : 0.2mm

11．ハンノキ属ハンノキ節



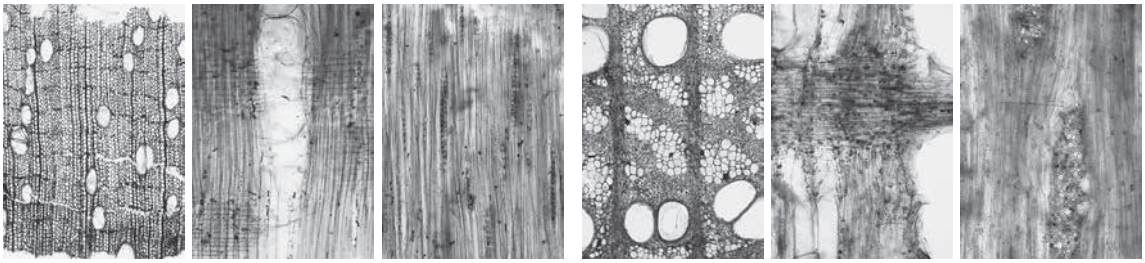
横断面 ▬ : 0.5mm　放射断面 ▬ : 0.05mm　接線断面 ▬ : 0.2mm

6．スギ

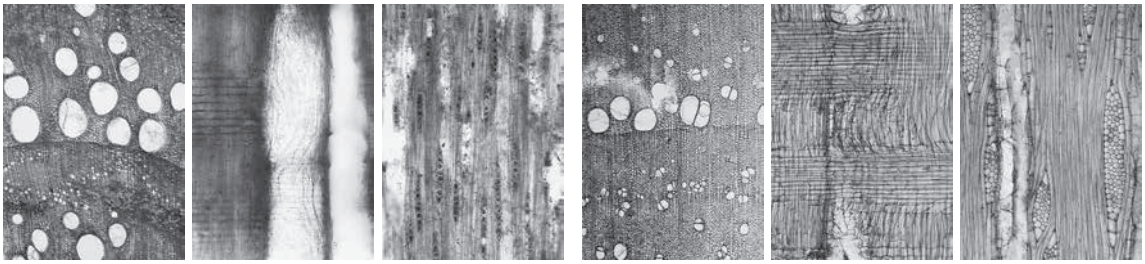
横断面 ▬ : 0.5mm　放射断面 ▬ : 0.2mm　接線断面 ▬ : 0.2mm

12．アサダ

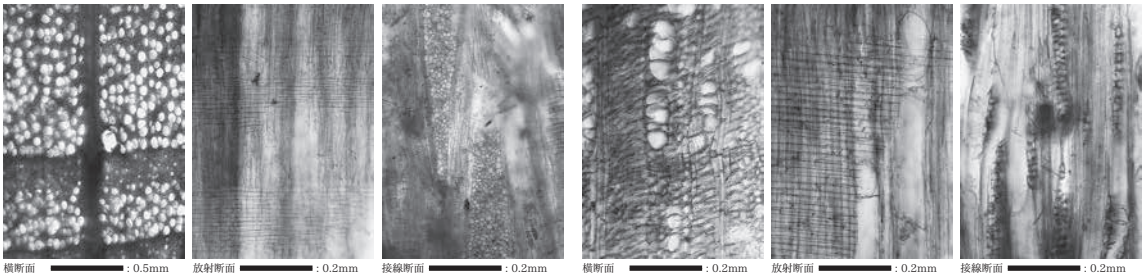
第 32 図　木製品の顕微鏡写真（1）



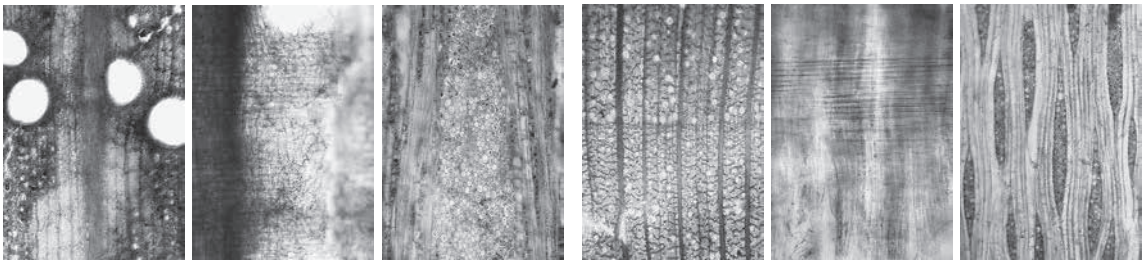
13. サワグルミ



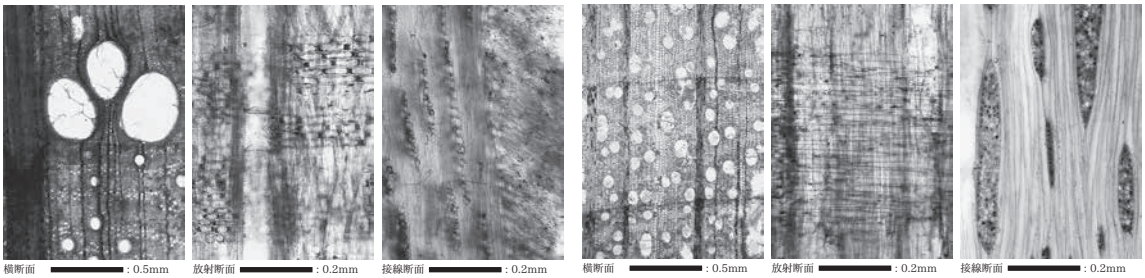
14. クリ



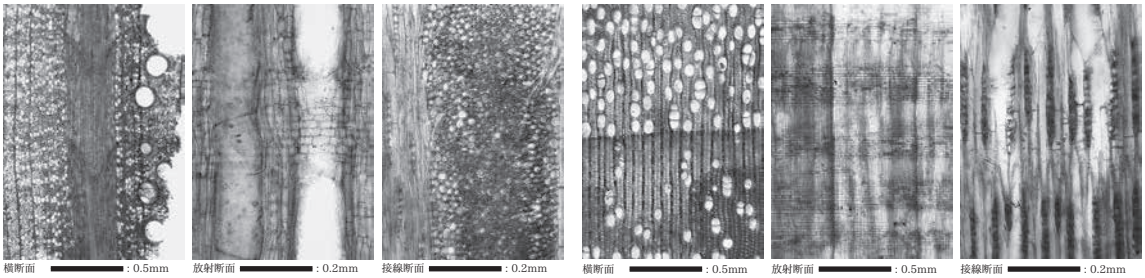
15. ブナ属



16. コナラ属コナラ節



17. コナラ属クヌギ節



18. コナラ属アカガシ亜属

19. ケヤキ

20. ヤマグワ

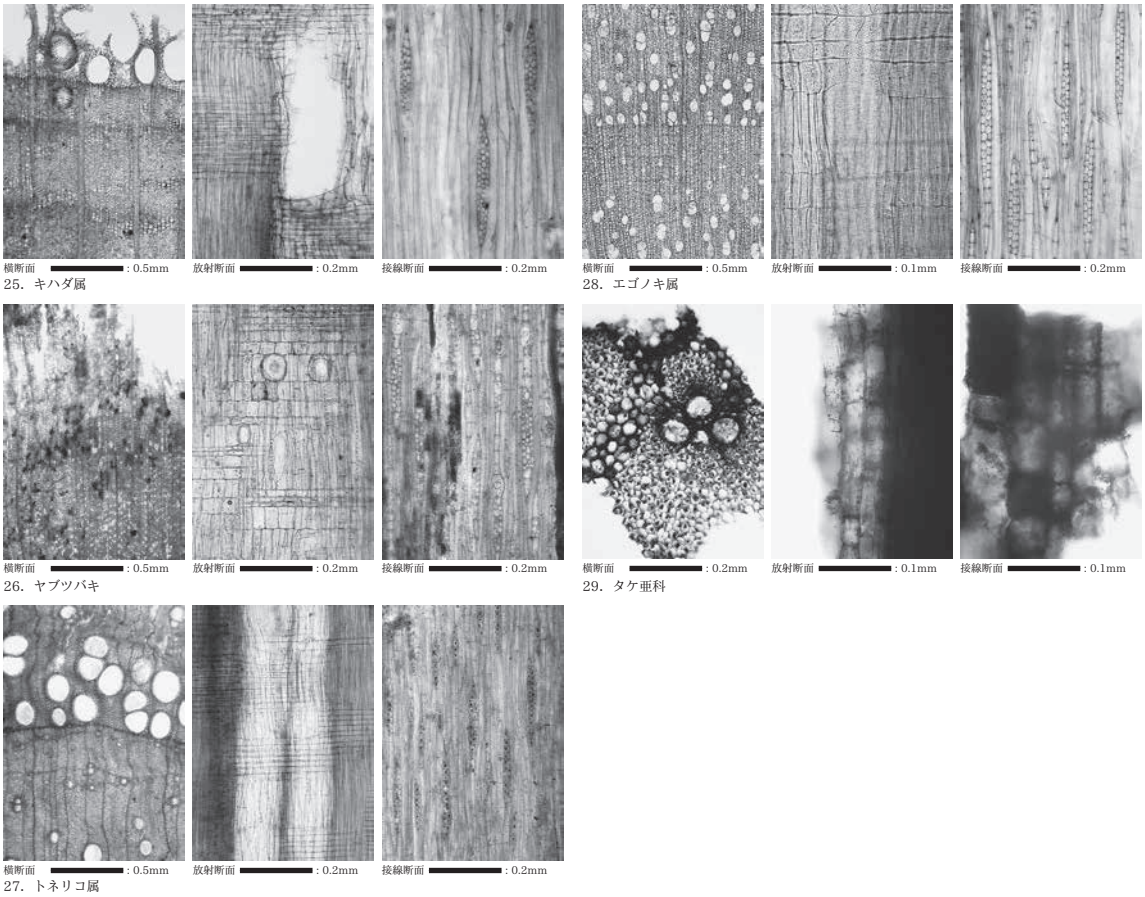
21. モクレン属

22. カマツカ属

23. カエデ属

24. トチノキ

第 33 図　木製品の顕微鏡写真（2）



第 34 図　木製品の顕微鏡写真（3）

2　赤色顔料の材質分析

は　じ　め　に

大武遺跡の埋没谷から出土した赤色顔料について、EPMA 分析と X 線回折分析を行い、材質を検討した。

試 料 と 方 法

分析対象は、縄文時代前期前葉（布目式～新谷式期）の漆紐（試料 No.1、以下 1）、および晩期前葉（大洞 B 式期）の籃胎漆器（2）に使用されている赤色顔料である。また、漆製品と同一層序より出土した鉄石英と呼ばれる赤色の岩塊（3・4）や、赤色ペースト状塊（5）、黄色ペースト状塊（6）も同時に分析した（第 19 表、第 37 図 1 ～ 5）。なお、漆製品については、FT-IR 分析および塗膜分析も実施しており、詳細は別項を参照されたい。

分析は、少量採取した赤色部分について、EPMA 分析および X 線回折分析を実施した。

EPMA 分析は、分析装置は日本電子（株）製走査型電子顕微鏡（JSM-5900LV）に付属するエネルギー分散型 X 線分析装置（同 JED-2200）を使用した。装置の仕様は、加速電圧が最大 30kV で、X 線検出器は Si（Li）検出器である。また同装置は、試料室を低真空とすることで、絶縁体試料の観察、分析も可能である。反射電子像による観察の後、分析を低真空下（約 20Pa）で行った。測定条件は、加速電圧 20kV、測定時間 300s に設定した。定量分析は、ϕ（ρz）法による定量補正をした簡易定量分析を行った。定量値の解釈

試料 No.	報告 No.	種類	グリッド	層位	時代	共伴土器型式	備考
1	626	漆紐	6B14・15	XV	縄文時代前期前葉	布目式～新谷式	小片、FT-IR、塗膜分析も実施
2	366	籃胎漆器	4C19	XⅡd	縄文時代晩期前葉	大洞 B 式	小片、FT-IR、塗膜分析も実施
3	－	鉄石英	6B20	XV	縄文時代前期前葉	布目式～新谷式	
4	－	鉄石英	4D14	XⅡd	縄文時代晩期前葉	大洞 B 式	
5	－	赤色ペースト状塊	6B14	XV	縄文時代前期前葉	布目式～新谷式	
6	－	黄色ペースト状塊	6B14・15	XV	縄文時代前期前葉	布目式～新谷式	

第 19 表　赤色顔料の材質分析試料

については、大まかな参考値程度にとどめておくべきである。

X 線回折分析は、1・3 ～ 6 については、試料をメノウ乳鉢で磨砕した後、無反射試料板に充填して測定試料とした。2 は、膜状物質のため、有姿のまま無反射試料板に固定し、測定試料とした。分析装置は、(株) リガク製 X 線回折装置 MultiFlex を使用した。装置の仕様は、X 線管が銅ターゲット、検出器がシンチレーションカウンターで、モノクロメーターに湾曲グラファイト結晶を使用している。測定条件は、40kV、40mA、走査速度 2°/min、ステップ幅 0.02°、走査範囲 3 ～ 65° に設定した。

結　　果

走査型電子顕微鏡観察により得られた反射電子像を第37図に、第 37 図の画像範囲の EPMA 分析により得られたスペクトルを第 35 図に、簡易定量値を第 20 表に示す。ケイ素（SiO_2）と鉄（Fe_2O_3）が主に検出された。ほかに、アルミニウム（Al_2O_3）、硫黄（SO_3）、カリウム（K_2O）が試料によっては検出された。また、1 からは、パイプ状粒子が観察された（第 37 図 12）。

試料 No.	Al_2O_3	SiO_2	SO_3	K_2O	Fe_2O_3
1	12.58	21.87	19.28	—	46.27
2	10.39	38.89	2.74	—	47.97
3	—	64.67	—	—	35.33
4	—	76.54	—	—	23.46
5	11.41	30.24	—	—	58.35
6	18.55	43.93	—	1.11	36.41

第 20 表　簡易定量分析結果（mass%）

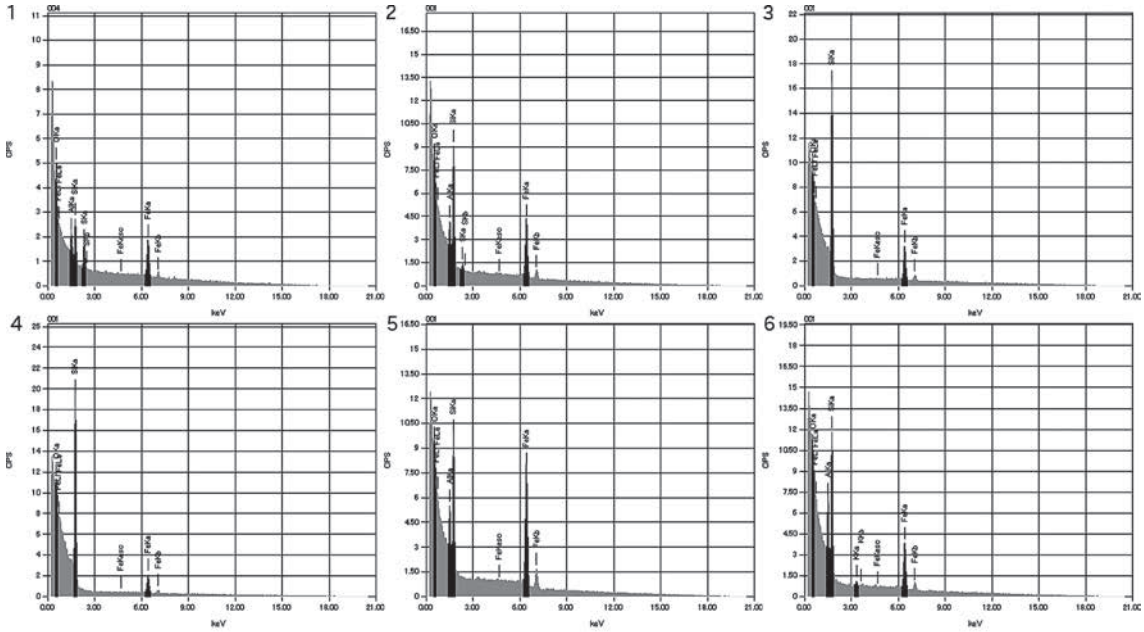
X 線回折分析により得られた回折パターンを第 36 図に示す。1 ～ 5 からは、石英（Quartz、SiO_2）、赤鉄鉱（Hematite、Fe_2O_3）とよく一致するピークが検出された。特に、3・4 は石英のピークが極めて高い。6 からは、石英は検出されたが赤鉄鉱は検出されなかった。

考　　察

漆製品 2 点（1・2）からは、EPMA 分析で鉄が多く検出されるとともに、X 線回折分析で赤鉄鉱が検出された。したがって、これらの赤色顔料にはベンガラが使用されているといえる。また、1 からはパイプ状粒子が観察されており、いわゆるパイプ状ベンガラであった。パイプ状ベンガラは、鉄バクテリアを起源とする［岡田 1997］。なお、2 は塗膜表面の観察ではパイプ状ベンガラが確認できなかったが、塗膜断面の観察において少量ではあるがパイプ状ベンガラが確認された（第Ⅵ章 3）。

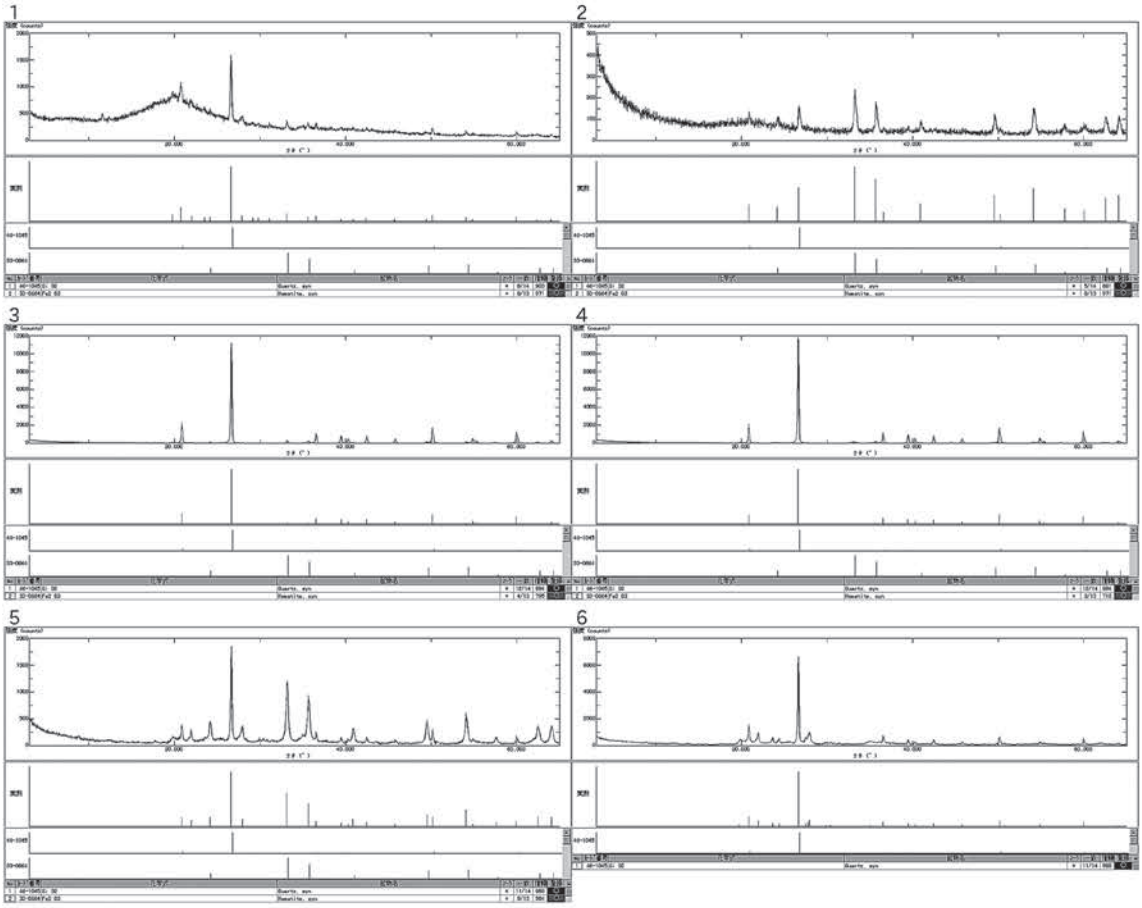
一方、赤色の岩塊（3・4）の分析結果をみると、X 線回折分析では赤鉄鉱も検出されたが、石英のピークが極めて高く検出されており、EPMA 分析においてもケイ素の含有量が多い。両者は、鉄石英とも呼ばれる、不純物（鉄）をかなり多く含んだ石英、すなわち碧玉の一種と考えられる。石英がかなり特徴的に検出されており、漆製品に使用されているベンガラとは素材が異なると考えられる。

ペースト状塊（5・6）の分析結果をみると、黄色ペースト状塊（6）は、X 線回折分析では赤鉄鉱が検出されなかったため、漆製品に使用されているベンガラとは鉱物組成が異なると考えられる。赤色ペースト塊（5）は、鉱物組成、化学組成ともに 2 に比較的近いが、パイプ状粒子は検出されなかったため、やはり由来が異なると考えられる。



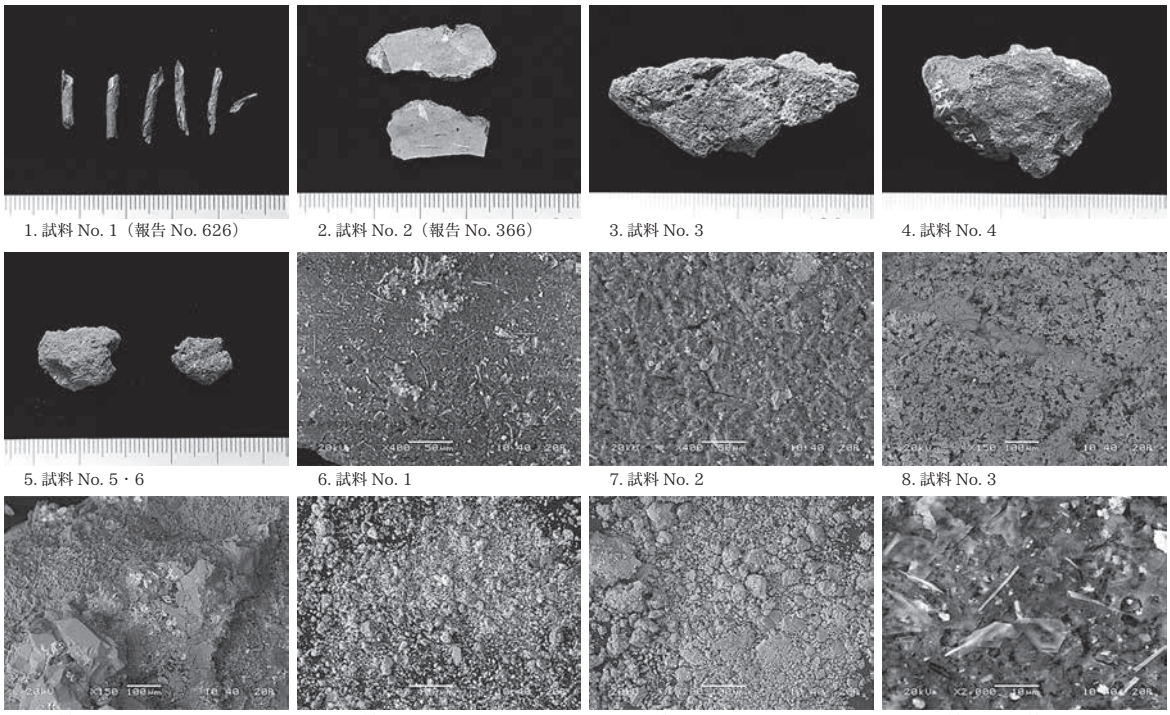
※ 左上の No. は試料番号に対応する。

第 35 図　EPMA 分析スペクトル



※ 左上の No. は試料番号に対応する。

第 36 図　X 線回折分析結果



1. 試料 No. 1（報告 No. 626）　2. 試料 No. 2（報告 No. 366）　3. 試料 No. 3　4. 試料 No. 4

5. 試料 No. 5・6　6. 試料 No. 1　7. 試料 No. 2　8. 試料 No. 3

9. 試料 No. 4　10. 試料 No. 5　11. 試料 No. 6　12. 試料 No. 1 の拡大

第 37 図　赤色顔料の材質分析（1 ～ 5. 試料写真、6 ～ 12. 反射電子像）

お　わ　り　に

大武遺跡より出土した漆製品について、EPMA 分析および X 線回折分析を行った。その結果、1 の漆紐、2 の籃胎漆器ではパイプ状ベンガラの使用が確認された。他の試料（3 ～ 6）からはパイプ状粒子は検出されておらず、漆製品の赤色顔料は、これらとは由来が異なると考えられる。

引用文献

岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元．日本文化財科学会第 14 回大会研究発表要旨集，38-39.

3　漆紐および籃胎漆器の塗膜分析

は　じ　め　に

長岡市（旧三島郡和島村）に所在する大武遺跡の調査では、縄文時代前期前葉の漆紐と晩期前葉の籃胎漆器が出土した。

ここでは、これらの漆紐と籃胎漆器について、塗膜薄片を作製し、肉眼観察、表面部試料の赤外分光分析、光学顕微鏡による塗膜構造、走査型電子顕微鏡による反射電子像の観察および X 線分析を行い、塗膜構造と材料について検討した。なお、同一試料について、赤色顔料分析を行っている（第Ⅵ章 2）。

試 料 と 方 法

分析試料は、縄文時代前期前葉の漆紐と縄文時代晩期前葉の籃胎漆器の 2 点である（第 21 表）。

はじめに、表面の漆成分を調べるために採取した塗膜片の赤外分光分析を行った。その後、高透明エ

試料 No.	報告 No.	種類	グリッド	層位	時代	共伴土器型式
1	626	漆　紐	6B14・15	XV	縄文時代前期前葉	布目式～新谷式
2	366	籃胎漆器	4C19	XⅡd	縄文時代晩期前葉	大洞 B 式

第 21 表　塗膜分析試料

ポキシ樹脂を使用して包埋した後、薄片作製機および精密研磨フィルム（#1000, #2000, #4000）を用いて厚さ約 50μm 前後に仕上げた。各塗膜薄片は、表面蒸着を施した後、おもに赤色塗膜層を対象としてX線分析を行った。X線分析を行った塗膜薄片は、再度精密研磨フィルム（#1000, #2000, #4000）を用いて厚さ約 10μm 前後に調整した後、偏光顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

なお、赤外分光分析では、各塗膜の表面部分において手術用メスなどを用いて薄く削り取った後、押しつぶして、厚さ 1mm 程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約 7 トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光（株）製 FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

また、X線分析では、エネルギー分散型X線分析装置を付属した走査型電子顕微鏡を用いて無機成分を調べた。観察および測定は、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-5900LV）による反射電子像の観察および付属するエネルギー分散型X線分析装置（同 JED-2200）による定性・簡易定量分析を行った。分析では、炭素（C）を合わせて計算した。

結果および考察

以下に、各試料の表面部試料の赤外分光分析、光学顕微鏡による塗膜構造、走査型電子顕微鏡による反射電子像の観察およびX線分析の各結果について述べる。

なお、各試料の表面部分の赤外吸収スペクトル図（第 38 図 3）では、縦軸が透過率（% T）、横軸が波数（Wavenumber（cm^{-1}）；カイザー）を示す。各スペクトル図はノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は生漆の赤外吸収位置を示す（第 22 表）。

吸収 No.	生　漆		
	位置	強度	ウルシ成分
1	2925.48	28.534	
2	2854.13	36.217	
3	1710.55	42.035	
4	1633.41	48.833	
5	1454.06	47.195	
6	1351.86	50.803	ウルシオール
7	1270.86	46.334	ウルシオール
8	1218.79	47.536	ウルシオール
9	1087.66	53.843	
10	727.03	75.389	

第 22 表　生漆の赤外吸収位置とその強度

［試料 No.1（漆紐）］

この漆紐は、淡赤褐色塗りのらせん状に切れ目のある中空の円筒の紐である（図版 151・1a, 1b）。

表面塗膜層では、赤外分光分析によりウルシオールの吸収（No.6 ～ 8）と一致した（第 38 図 3）。塗膜構造は、繊維集合 a 層、塗膜 c1 層および c2 層で構成される（第 38 図 1c・1d）。塗膜 c1 層は繊維の抜け痕をわずかに含む透明の褐色層である。C2 層は不透明の黒色層で、反射電子像の観察によると輝度の高い細粒の粒子やパイプ状粒子が散在する。繊維の層では、繊維は残存していないが、断面形状が長方形や集合した繊維痕が観察される。繊維痕の短径は約 30μm 前後である。塗膜 c1 層のX線分析では酸化鉄（Fe_2O_3）が最大 92.46％検出され（第 23 表）、酸化鉄による赤色であった。パイプ状を示す粒子はパイプ状ベンガラである［岡田 1997］。

この紐は、繊維集合 a 層において、繊維間に透明の漆と思われる淡褐色物が充填されていることから、繊維の外側は漆により固定され、中心部の繊維は消失したと考えられる。

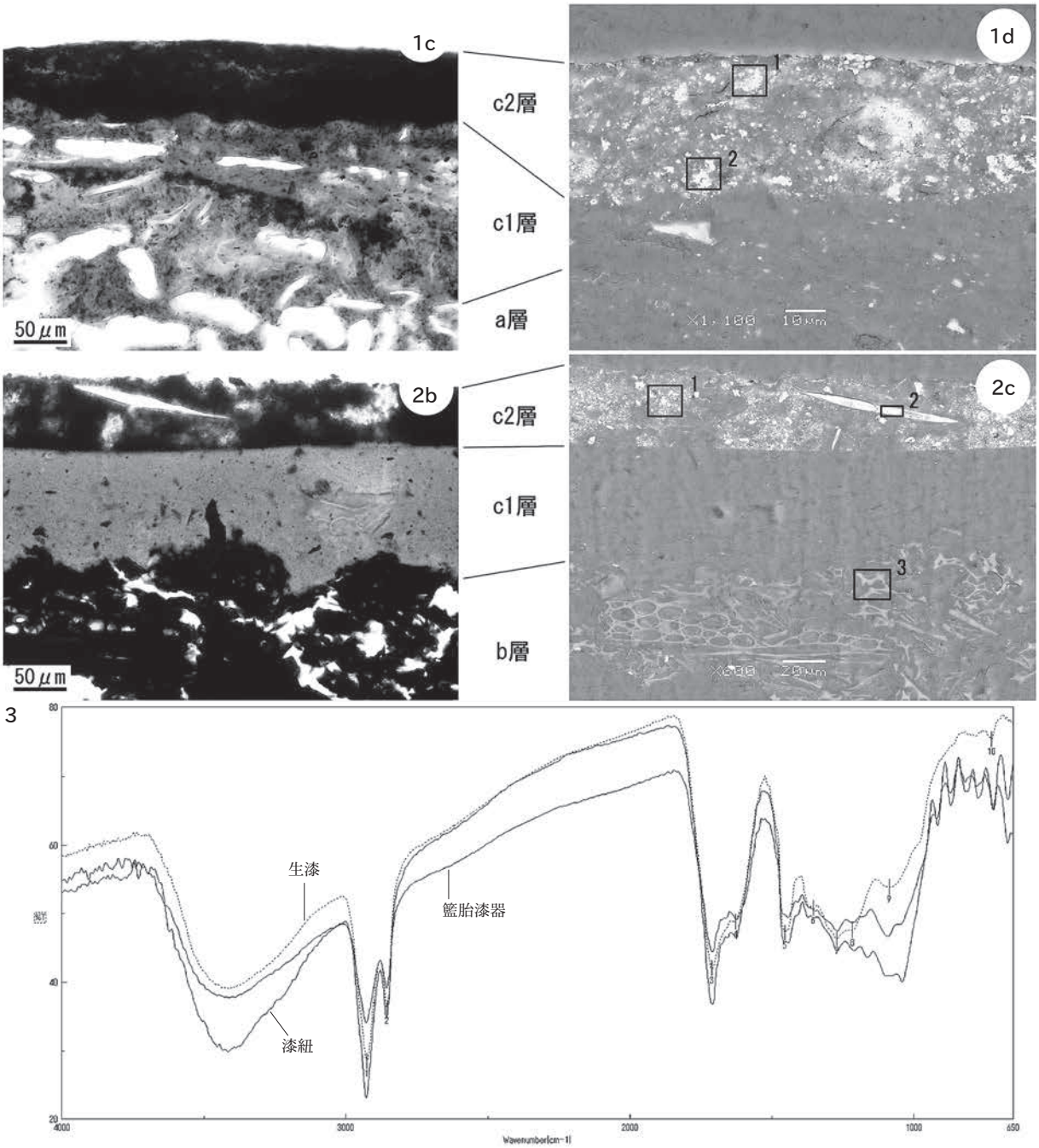
［試料 No.2（籃胎漆器）］

この籃胎漆器は、淡赤褐色塗り籃胎漆器で、下地黒色層で容易に剥離する（図版 151・2a）。

表面塗膜層では、赤外分光分析によりウルシオールの吸収（No.6 ～ 8）と一致した（第 38 図 3）。塗膜構造は、炭粉からなる下地 b 層、塗膜 c1 層および c2 層からなる（第 38 図 2b・2c）。下地 b 層は、10μm 以下の細粒の炭粉と黒色の植物組織からなる。塗膜 c1 層は透明の褐色層である。塗膜 c2 層は、不透明の黒色層で、反射電子像の観察によると輝度の高い細粒の粒子と少量のパイプ状構造の粒子が散在し、針

試料 No.	種類	点 No.	塗膜	C	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	Fe_2O_3	Total
1	漆　紐（626）	1	c1 層	−	0.00	0.00	0.16	2.02	4.28	0.31	0.69	0.07	92.46	99.99
		2	c1 層	−	0.00	0.22	0.43	7.28	6.67	0.31	0.37	0.10	84.61	99.99
2	籃胎漆器（366）	1	c2 層	−	1.55	0.67	0.17	6.18	2.22	0.00	0.90	0.05	88.27	100.01
		2	c2 層	−	0.40	0.00	28.34	56.03	0.00	2.84	0.55	0.38	11.46	100.00
		3	b 層	72.85	0.11	0.21	1.02	1.07	2.85	0.72	0.47	0.17	20.53	100.00

第 23 表　各試料の X 線分析結果（単位：%）



1a ～ 1d. 漆紐（試料 No.1）の塗膜試料　　2a ～ 2c. 籃胎漆器（試料 No.2）の塗膜試料
3. 各塗膜表面のスペクトル図
（縦軸：透過率、横軸：波数、数字：生漆の赤外吸収位置）

第 38 図　漆塗試料と塗膜構造と反射電子像、塗膜の赤外吸収スペクトル図

状物も見られた（第 38 図 2c）。塗膜 c2 層のＸ線分析では酸化鉄（Fe_2O_3）が 88.27％検出され（第 23 表）、酸化鉄による赤色であった。一部のパイプ状を示す粒子はパイプ状ベンガラである［岡田 1997］。塗膜 c2 層中の針状物のＸ線分析では酸化ケイ素（SiO_2）が 56.03％、酸化アルミニウム（Al_2O_3）が 28.34％など検出され、海綿骨針であった。なお、下地ｂ層中の植物組織は、炭素（C）が 72.85％であった（第 23 表）。

お　わ　り　に

縄文時代前期前葉の漆紐と晩期前葉の籃胎漆器について、表面塗膜層の赤外分光分析、塗膜薄片の観察を行った。その結果、縄文時代前期前葉の漆紐は、繊維集合ａ層、塗膜 c1 層および c2 層からなり、塗膜 c2 層中ベンガラを混ぜた赤色漆塗り紐であった。なお、繊維の外側は漆により固定され、中心部の繊維は消失したと考えられる。

一方、晩期前葉の籃胎漆器は、炭粉または炭化植物遺体からなる下地ｂ層、塗膜 c1 層および c2 層からなり、塗膜 c2 層中ベンガラを混ぜた赤色漆塗り容器であった。

引用文献

岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元 . 日本文化財科学会第 14 回大会研究発表要旨集 ,38-39.

4　漆紐について

調査の内容と目的

表記の資料について、以下のような調査を行った。

1. 細部についての肉眼観察、並びに顕微鏡観察
   今までの漆資料調査の経緯を踏まえ、細部についての製作技法的、漆工技術的特徴を抽出した。
2. Ｘ線透過検査
   土ごと取り上げた塊のままでＸ線透過撮影を行い、製作技術的得量を抽出した。
3. 蛍光Ｘ線分析
   上記製品の一部を対象として非破壊的な蛍光Ｘ線分析を行い、赤色顔料を特定した。
4. 層断面観察
   上記製品の一部をポリエステル樹脂に埋包固定した上で、光学顕微鏡観察用の層断面薄片資料を調製し、塗装工程分析などの漆工技術的調査を行った。

調　査　結　果

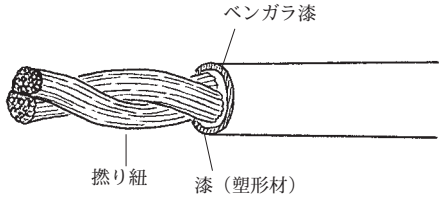
上記の調査結果は、概ね次のようにまとめられる。

Ａ　外観並びに層断面（図版 151）の観察によっても、漆製品であることは間違いない。

本漆製品は、太さ 1.5mm 前後の紐あるいは糸をＺ方向に２本撚り合わせたものを芯とし、そこに漆を塗りつけることで紐の各ブロック状を合わせ目とに発生する凹みを埋め、円筒状の形に整えている。これを胎とし、その表面にベンガラ漆を塗布することで、赤色漆塗り製品を作り出したものである。

Ｂ　紐の横断面と縦断面（図版 151）とを観察することで、次のようなことがわかる。

1　2本の紐は合わせ目で潰れ合い、交互に鏡面対象をなす蒲鉾形の断面を構成している。これは以後の漆作業を経ることによって断面が真円の製品を製作する場合、大変有利な状況である。



第 39 図　漆紐の構造

2　この2本の紐は漆で固められているが、漆は紐の中心部までは浸透しておらず、したがって紐の中心部は腐朽消失している。消失した面積は紐の断面積の半分近くに達しているが、紐の表層部分には漆がよく浸透しており、繊維の1本1本を非常によく接着固定している。当然ではあるが、2本の紐の合わせ目にも漆の層が認められており、紐同士がよく接着されている様子が確認できる。

3　紐の素材は確定できない。しかしながら下記に挙げた特徴を有するものとして、カラムシ（苧麻）あるいはこれに近似する草本性の繊維を使用している可能性が高い。

・　繊維断面は概ね長円形を呈しており、長径はおよそ 20 ～ 40 ミクロン（0.02 ～ 0.04mm）、短径はおよそ 10 ～ 20 ミクロンである。

・　繊維は1本1本にまで非常によく分離しており、しかも漆によく馴染む性質を有している。

4　紐へ塗りつけた漆、胎として整えるために使用した漆には、積極的な混ぜ物が認められない。すなわち、鉱物質の粉末を混入した漆（例えば、錆漆）ではなく、また植物質の混和物を混ぜた漆（木屎漆）でもない。おそらくゴミ等の汚れはあるものの、混ぜ物のない漆（生漆である可能性が高い）を使用したものと考える。

5　表面のベンガラ漆は1層であり、発色の良好な良質のベンガラ（赤色酸化鉄）を使用している。ベンガラ粒子は不定形で、その直径は大きなものでも数ミクロンに過ぎず、むしろ1ミクロン（千分の一ミリ）に達しないような微粒子のものが目立っている。

6　表面のワレは、2本の紐の撚り合わせた状態を反映したものであるが、反対側に達するほどに割れが進行していたとは考えられない。すなわち当初の状況としては、管玉風に寸断したものが連結していたとは考えられず、むしろ漆の浸透していない紐の中央部の存在とその自由度により、一連の長い状態のままで製品として機能していたと考えるべきであろう。

C　製品の用途であるが、装身具であることについての異論は生じないものと考える。なかでも、首飾りである可能性は十分存在するものと思われる。　（平成 12 年 3 月 31 日校了）

5　漆紐の実年代について

年代測定調査の概要

漆製品の一部を用いて炭素 14 法による年代測定を行った。漆資料薄片 6.3mg を超音波洗浄後年代測定用に採取した。漆は3次元的に化学結合した樹脂であり、物理的にも科学的にも強固なために、腐食やカビから資料を守ると同時に、中に含まれるベンガラや植物繊維を分離することは困難である。しかしながら、鉄酸化物（Fe_2O_3）であるベンガラは炭酸塩をつくることはなく、量的にも少ないので年代測定に影響を与えないと考えられ、また漆と植物繊維は同時代のものと考えられるので、この漆片試料全体の炭素は本製品が製作された時代の植物の炭素同位体をもっているとみなし得る。

そこで、この試料全体を民間機関である米国 Beta Analytic 社に送り、炭素 14 測定を依頼した。

試料は、標準的な汚染除去処理として、酸･アルカリ･酸処理を行い、これを酸化して炭酸ガスに転換し、さらにグラファイト炭素の形に変えて、加速質量分析(AMS)で炭素14測定を行った。Beta Analytic社は、世界の有力AMS施設（大学・研究所）と契約を結び、AMSによる高精度 ^{14}C 測定を代行している。

年代測定結果と試料の実年代

^{13}C による同位体効果（δ^{13}C = -30.1permil）を補正して得られた炭素14年代（モデル年代）は次のとおりである。

炭素14年代：5760 ± 40　14CBP（Bata-138261）

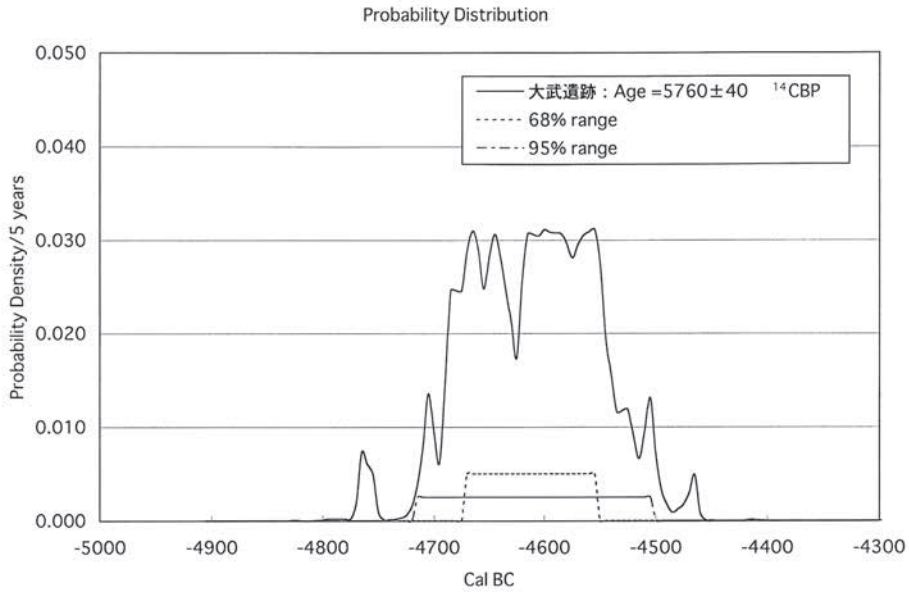
なお、^{14}CBP という表示は、西暦1950年を基点にして計算した炭素14年代（モデル年代）であることを示す。炭素14年代の数字は、縄文時代前期初頭でみると、実年代と比べ800 ～ 900年の開きがある。

年輪年代と炭素14年代との対応関係を示す暦年較正曲線：INTCAL98をデータベースとして用いて解析した結果を第40図に示す。この図では、年代を確率分布で示してあり、全体の確率が1になるよう規格化してある。暦年較正曲線自体は、過去の大気の ^{14}C の変動に加えて ^{14}C の測定誤差も重なり複雑であるため、確率分布曲線はやや複雑な形になっている。この解析をもとに具体的な数字で年代の範囲を推定すると、

実年代：4610 ± 60　calBC（68% range）

4610 ± 105　calBC（95% range）

ここでcalBCという表示は、暦年較正を行った年代（この場合紀元前）であることを示す。このように、この漆試料の実年代は、概ね現在より6600年前となる。　（平成12年3月31日校了）



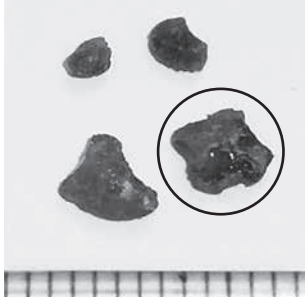
暦年代　4715 － 4505 BC　→　4610 ± 105 BC（95%）
4670 － 4550 BC　→　4610 ±　60 BC（68%）

第40図　暦年較正年代グラフ

6　琥珀原石の産地同定分析

は　じ　め　に

琥珀と思われる樹脂様試料は第 41 図に示したように、表面は殻をかぶったような状態の原石であるが、内部は比較的劣化が進行していない状態の良いものであると観察できた。この遺物が琥珀であるかどうかの確認をフーリエ変換赤外分光（以下 ATR-FTIR）により行った。琥珀であることがわかれば琥珀の主な産出地から採取した地質学的標準試料（標準琥珀）の分析結果と比較することによって産地推定を行うことが可能となる。そこで今回、ATR-FTIR、熱分析（以下 DTA・TGA）によりこれら 2 点の試料の科学分析を行ったのでその結果を報告する。



第 41 図　琥珀分析試料

分　析　試　料

今回の分析に使用した試料は第 41 図の破片の中で最も健全であると見られる部分から選んだ（黒丸印で囲った部分）。

同時に標準試料として、久慈市、いわき市、銚子市、瑞浪市から産出した試料を同様の方法・条件で分析し比較した。

分析方法および条件

分析装置は全反射フーリエ変換赤外分光光度計（ATR-FTIR）（SENSIR TECHNOLOGIES 製 TravelIR））と熱分析装置（DTA・TGA）（㈱島津製作所製 DTG-60）を使用した。

ATR-FTIR による分析では、試料に赤外線を照射することにより得られる分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を同定することができる。主に有機物の構造を解析する手段として用いられることが多く、琥珀を形成する樹脂の種類すなわち植物の種類によって分子構造が異なると考えられる。そのため、産地によってスペクトルに差が生じ、それを利用して産地推定に応用されてきた［室賀 1976］［植田 2002・2004］。

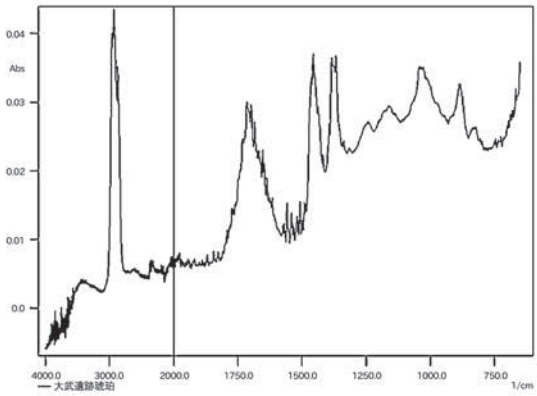
DTA・TGA は試料に熱を加え、得られる質量変化から気化温度、また熱分解などの化学変化を知ることができる熱重量測定（TGA）と、試料の融解などの状態の変化や化学反応の温度を知ることができる示差熱分析（DTA）があり、これらから試料の熱に対する挙動を調べることができる。

測定は ATR-FTIR は極微量（約 0.5mg）の試料をそのまま測定部に置き検出器に TGS を用い、分解能 $4cm^{-1}$ で測定した。また、DTA・TGA は試料の砕片（約 1mg）をアルミニウムセルに入れ、200ml/ 分の流量の窒素ガスを流しながら 10℃ / 分で昇温させ、その時の重量変化と熱量変化を測定した。

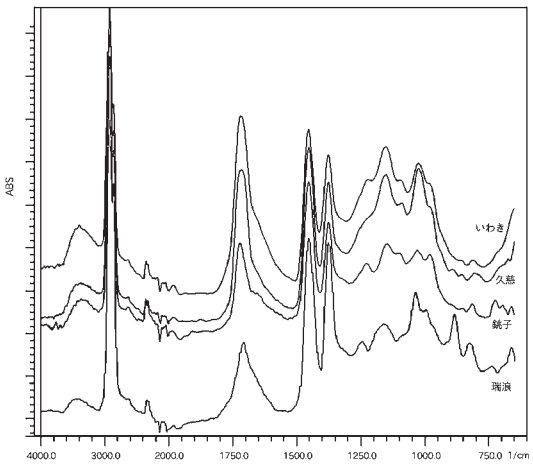
結果および考察

ATR-FTIR と DTA･TGA は有機化合物の分子構造を反映するため、劣化によりその構造が変化すると、本来のスペクトルや挙動とは異なる結果となる場合もある。特に劣化が激しいと、ATR-FTIR では全体的に吸収はブロードとなり特徴的な吸収が消失し､新たに異なった位置にピークが表れることがある。また、DTA・TGA は低温度から重量減少が始まり、分解温度も低温化する。そのため琥珀であるかどうかの判断および産地推定は、できるだけ健全な部分を選んで分析を行うことが必要である。

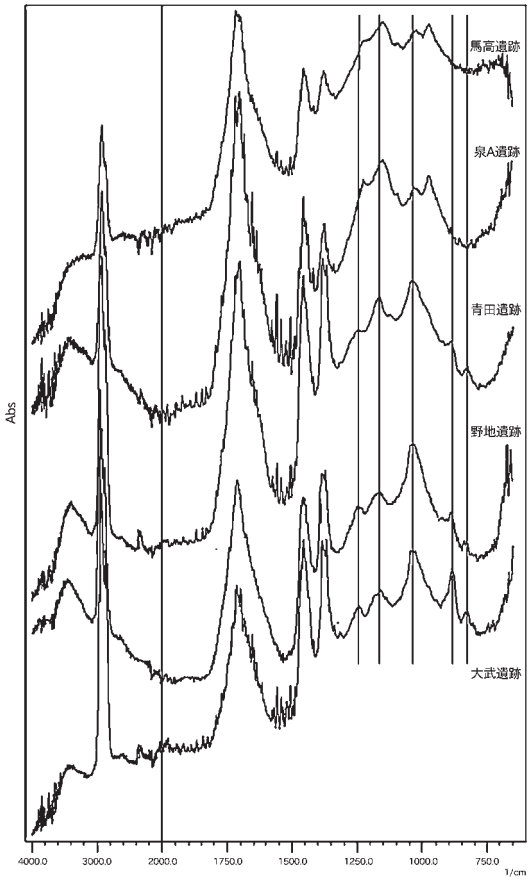
ATR-FTIR ではスペクトルの 3500 ～ 2800cm^{-1}、1710 cm^{-1}、1500 ～ 800cm^{-1} 付近の吸収位置より琥珀であることが確認できた（第 42 図①）。さらに 3500cm^{-1} および 1710cm^{-1} 付近の吸収強度から劣化の程度は比較的低く、健全な状態であることも確認できた。次に指紋領域と呼ばれる有機化合物を同定する際の目安となる 1300 ～ 750cm^{-1} 付近のスペクトルの吸収位置および強度と、産地の判明している標準琥珀から得られたスペクトルと比較し、産地推定を試みた（第 42 図①･②）。国内の主産地である久慈市、いわき市、銚子市、瑞浪市産のスペクトルと比較した結果、今回の試料は 1250 ～ 850cm^{-1} 付近の吸収位置と強度が瑞浪市に非常に近いスペクトルであることがわかった。以上の結果と、これまで発表された文献を参考に外国産、および国内産の分析結果も合わせて検討したが［室賀前掲］、瑞浪市産以外のスペ



① 大武遺跡出土琥珀の赤外吸収スペクトル

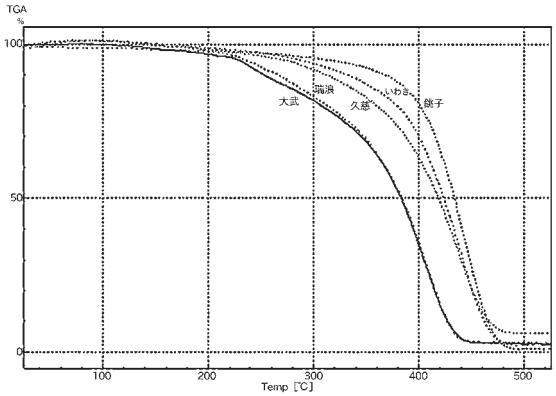


② 標準琥珀の赤外吸収スペクトル

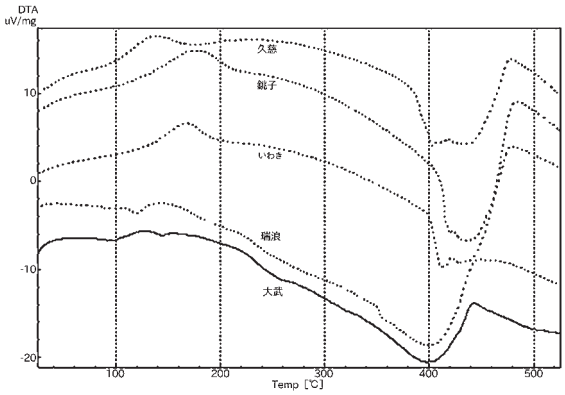


③ 新潟県内の縄文時代の遺跡出土琥珀の赤外吸収スペクトル

第 42 図　赤外吸収スペクトル



第 43 図　出土琥珀および標準琥珀の TGA 曲線



第 44 図　出土琥珀および標準琥珀の DTA 曲線

クトルと一致する結果は確認できなかった。まだ、分析が実施されていない産地および現在では消滅し確認できない産地の可能性は否定できないが、現時点では瑞浪産の可能性が非常に高い結果となった。

さらに、熱分析で出土琥珀を標準琥珀と比較した結果、ATR-FTIR と同様に瑞浪市産琥珀とに非常に良く似た挙動を示すことがわかった（第 43・44 図）。

以上より、今回分析した出土琥珀の産出地は ATR-FTIR、DTA・TGA ではいずれも瑞浪市産であることを示唆したことより、現時点では瑞浪市産と推定した。

また、瑞浪市産琥珀は新生代第四紀の地層から産出するもので、年代的にはかなり新しい。また、この琥珀は有機溶媒（アセトン、エタノールなど）にほぼ溶解し、高分子化が進んでいない半化石樹脂（コーパル樹脂）とよく似た性質を持つ。しかし、国内では琥珀と認識されており、出土品では古墳時代の琥珀製品が瑞浪産であるとの分析結果も報告されている［室賀 1988］。

加えてこれまで新潟県における縄文時代の遺跡では青田遺跡、野地遺跡、大久保遺跡、馬高遺跡、和泉A遺跡などから琥珀の出土例が報告されている。青田遺跡は非常に小さい破片であったため形状が不明で、野地遺跡は原石であり、その他は全て製品であった。これらの ATR-FTIR の結果を比較すると青田遺跡および野地遺跡は今回の大武遺跡と非常に良く似た結果となり、一方他の 3 遺跡は前記の結果とは異なるがこれら 3 遺跡についてはほぼ同じスペクトルが得られた（第 42 図③）。なお、大久保遺跡については完形品であったため今回と同一条件での分析ができず、以前の結果を参考にした。今回の試料が原石であり、同様の原石である野地遺跡および破片の青田遺跡出土琥珀が縄文時代後期から晩期頃、それ以外の加工された琥珀が中期頃と時代・形状・分析結果を含め、大きく 2 グループに分けることができた［加藤 2003］。

さ　い　ご　に

出土琥珀は劣化状態が様々で、それによって ATR-FTIR や DTA・TGA の結果が変わることが多い。しかし、今回は劣化の進行はあまり見られず、その影響をほとんど受けていなかったため、いずれの分析でも瑞浪産であることが確認でき、かなり信頼性の高い結果を導くことができた。なお、高分子化の度合いが低い琥珀については劣化の進行は早いと考えるのが妥当であり、そういう意味では今回の出土資料が比較的健全な状態で発掘されたことは興味深い。

琥珀の産地は国内でも、少量の産出地も含めると 10 か所以上もある。また国外でも各地で産出する。その中で、主産地の標準琥珀については様々な分析方法による多くの基礎データが揃っており、比較検討できる環境は整っている。一方、少量産地は科学分析がほとんど行われていないことも多く、今回の試料もそういった地域やまだ発見されていない琥珀産地である可能性は否定できない。今後、分析が実施されていない産地の琥珀についても今回のように分析を行い、基礎データを収集することでより精度の高い産地推定が可能になると考える。

参考文献

1）室賀照子（1976）　赤外吸収スペクトルによる琥珀の産地分析．考古学と自然科学，第 9 号，59
2）植田直見（2002）　銚子産琥珀の赤外分光分析．こはく，第 4 号，15
3）植田直見（2004）　いわき地方産琥珀の科学分析．こはく，第 5 号，13
4）室賀照子（1988）　奈良県曽我遺跡および御坊山古墳出土琥珀の産地同定（第 1 報）．研究紀要，由良大和古代文化研究協会，第 1 集，111
5）加藤　学（2003）　縄文時代の琥珀玉．新潟考古学談話会会報，第 27 号，1

第Ⅶ章　ま　と　め

1　土器・陶磁器

A　層序と出土土器・陶磁器

1）中 世 ～ 古 代

大武遺跡Ａ～Ｇ区では縄文時代前期以前に開析された埋没谷が検出され、埋没谷の中からは土器・陶磁器、石器、木製品などが出土し、層序を 15 層に大別した。ここでは、遺跡の層序と既存の土器・陶磁器の編年（案）が矛盾しないことと層序の年代・遺跡の存続期間について確認するため、主要遺構・各層から出土した土器・陶磁器について『大武遺跡Ⅰ（中世編）』［春日ほか 2000］で報告した中世の土器・陶磁器もあわせて検討する（第 45 ～ 53 図）。

Ⅲb 層はＡ～Ｇ区に広く確認できる黄褐色のピート層で、遺物の出土量は少ない。大窯期の灰釉小皿（17・18）や天目椀（15）が出土している。灰釉小皿（17・18）は高台の形態などから考え藤澤編年［藤澤 2002］の大窯Ⅱ期（16 世紀前半）と考える。Ⅲb 層は 16 世紀を中心とする時期の土層と考える（第 45 図）。

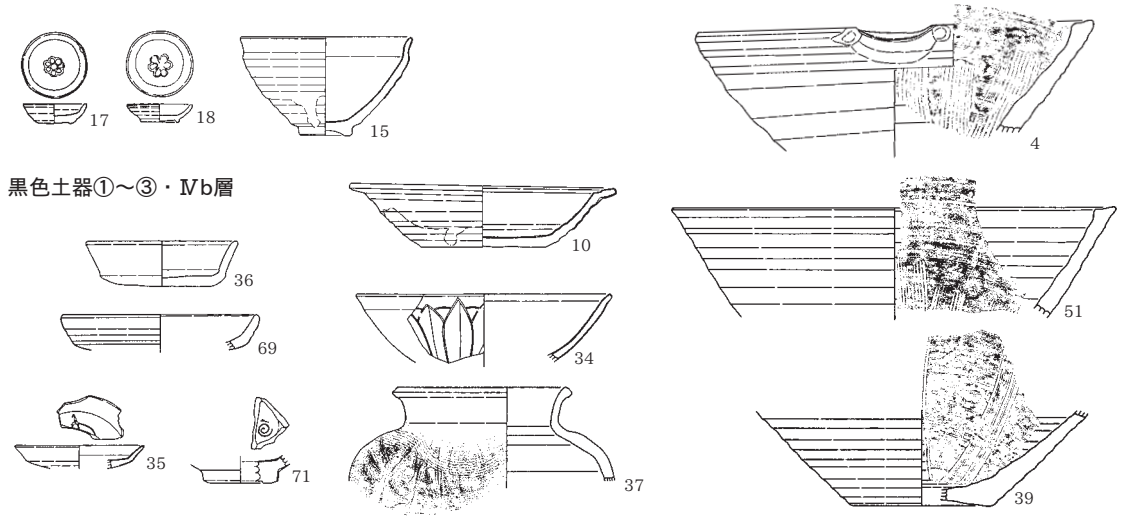
黒色土①～③層は炭化物を大量に含む土層で、Ｇ区に部分的に確認でき、Ⅳb 層の上位に堆積する。Ⅳb 層はＡ～Ｇ区に広く確認できる灰色の粘土層である。これらの土層からは水澤分類［水澤 2005］T1 類の土師器皿（36・69）、大宰府分類［山本 2000］Ⅵ×Ⅶ類の白磁皿（35）、Ⅱb・Ⅱc 類の青磁椀（34・71）、古瀬戸中期様式の瀬戸焼・美濃焼折縁深皿（10）、珠洲Ⅱ～Ⅳ期の珠洲焼（4・37・39・51）が出土している。土師器皿は口径が小さく深身のものと、口径が大きく浅身のものがある。また珠洲焼は図示したもののほかにⅤ期のものも出土している。黒色土①～③・Ⅳb 層は 13 ～ 15 世紀の土層と考える（第 45 図）。

SX87 はⅥa 層中で確認された木製品集中地点で、須恵器無台杯(764)が出土した。年代は筆者の編年[春日 1999・2005］の古代Ⅴ期（9 世紀前半）のものである。Ⅵa 層はＡ～Ｇ区に広く確認できる黒褐色のピート層で他に土器･陶磁器の出土例は少なく、9 世紀頃の土層と考えた。なお古代の土器はⅤ層･Ⅵb 層･Ⅵc 層・23 層などからも出土している。Ⅴ層からは中世の土器・陶磁器はほとんど出土しておらず、古代の土層の可能性が高い。一方、Ⅵb 層・Ⅵc 層・23 層は古墳時代（以前）の土器が圧倒的多く出土しており、これらは古墳時代の土層と考えている。古代の須恵器・土師器が出土している要因については、土器取り上げ時の土層誤認などのヒューマンエラーが主な原因と考える。古代の土師器・須恵器は古代Ⅴ期（9 世紀前半）のものが中心であるが、古代Ⅵ期（9 世紀後半から末）まで下るもの（773）、古代Ⅲ～Ⅳ1 期（8 世紀前半から後半）頃のもの（760・762）もあり、時期幅がある（第 45 図）。

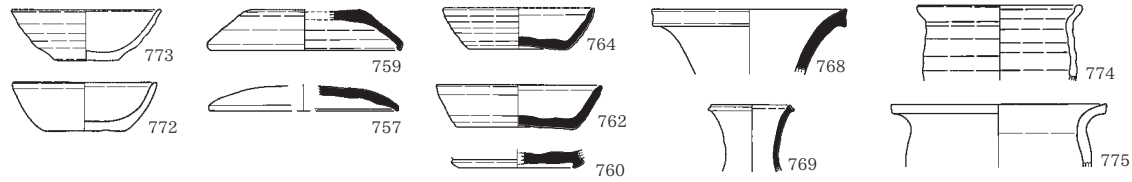
2）古墳時代後期～弥生時代後期

SX88 は 10・11AB（Ｆ区）のⅧ層上面で検出した旧河道で古墳時代後期の土師器・黒色土器がまとまって出土した。古墳時代後期の土器はこのほかⅥb 層・Ⅵc 層からも出土している。須恵器は 684 が 20 層、729 がⅥb 層からの出土で、684 は陶邑編年［田辺 1981］の TK47 ～ MT15 型式、729 は MT15 ～

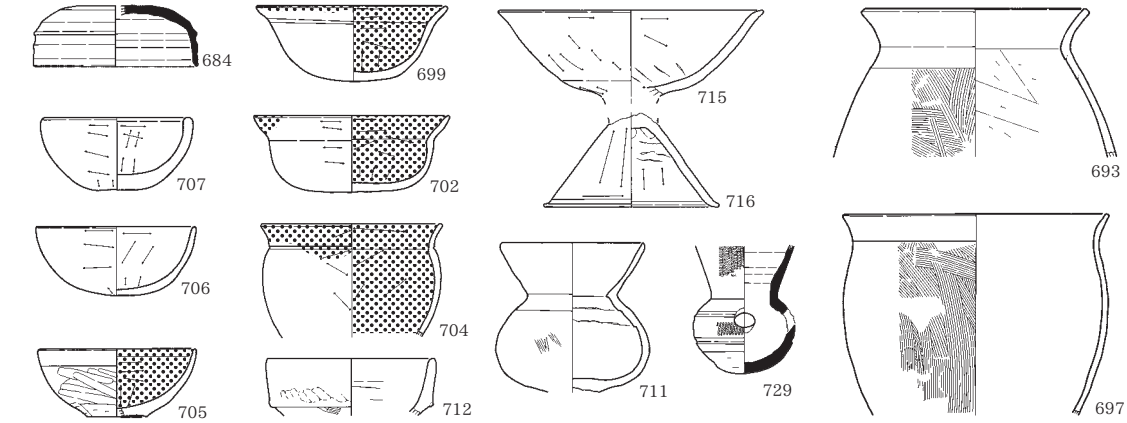
Ⅲb層



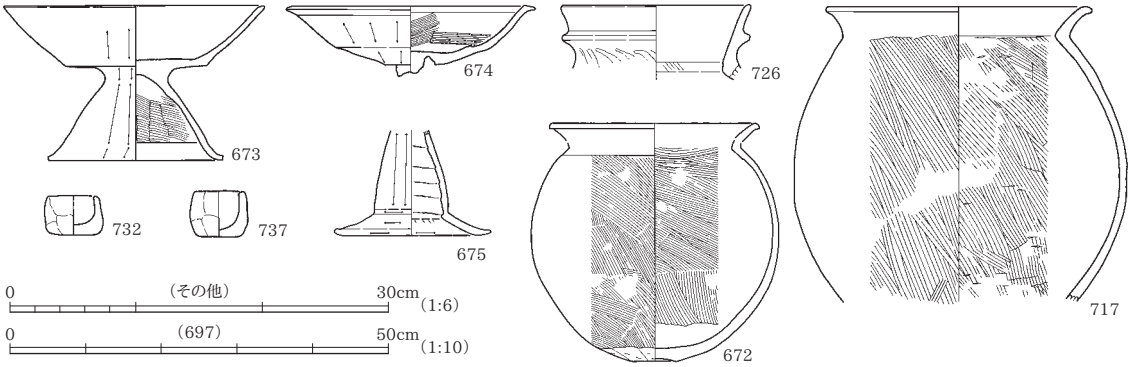
SX87・Ⅴ・Ⅵa層ほか



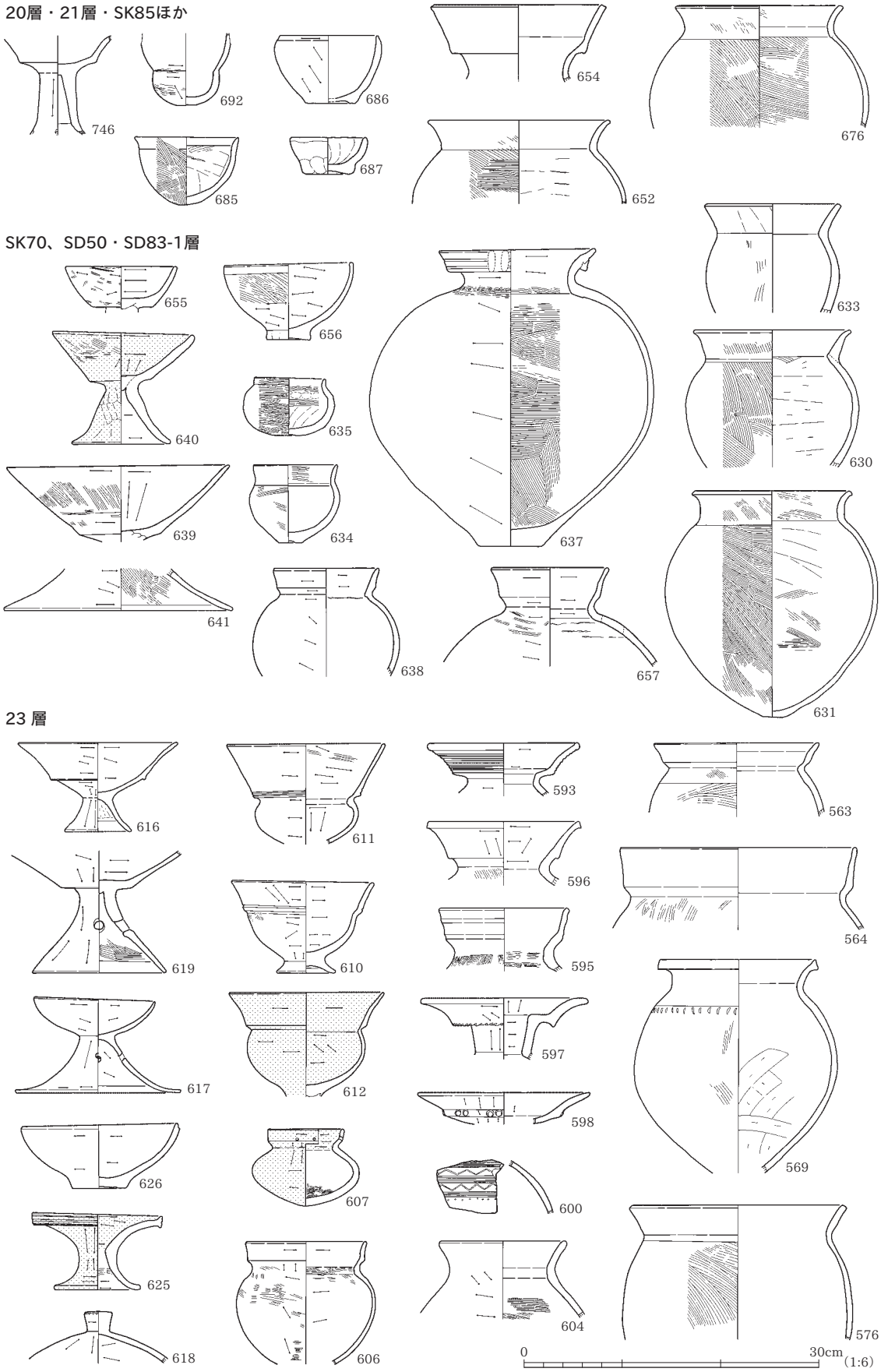
SX88ほか



SK49・95ほか



第 45 図　大武遺跡出土土器・陶磁器（1）



第 46 図　大武遺跡出土土器・陶磁器（2）

第 47 図　大武遺跡出土土器・陶磁器（3）

TK10 型式のもので、ほかの土師器・黒色土器の年代と近いと考える（第 45 図）。

SK49・95 はXVI層上面で検出した土坑（もしくは井戸）で同一の遺構の可能性が高い。古墳時代中期の土器がまとまって出土した。726･732･737 はVIb 層から出土したもので、古墳時代中期に通有の壺（726）と手づくね土器（732・737）である。SK49・95 の直上を覆っていた土層は明確ではないが、IVb ～VIa 層の可能性が高い。VIb 層・VIc 層は古墳時代中期から後期の土層である可能性が高い（第 45 図）。

20 層・21 層はＡ～Ｃ区・Ｇ区の丘陵斜面に部分的に確認できる土層で、VIb 層の下位に位置しVIII層の上位に位置する土層であるが、VII層・23 層との上下関係は不明である。SK85 はXVI層上面で検出した SD50 と重複する土坑である。これらの土層・遺構からは古墳時代前期後半の土器が出土している。20・21 層からは釜 C3 類（676）・鉢 D 類（686・687）・鉢 E 類（685）、SK85 からは釜 C3 類（652）、頸部が太く口縁部があまり外傾しない壺 M 類（654）が出土している。746・692 は当期に通有の高杯 E 類

と壺Ｇ類で、746 は 31 層、692 はⅥc 層からの出土である（第 46 図）。

SK70、SD50・83-1 層からは 20 層・21 層・SK85 出土土器にやや先行する土器群が出土している。SK70 からは高杯Ｆ類（655）、鉢Ｄ類（656）、壺Ｌ類（657）などが出土している。また SD50・83-1 層からは高杯Ｃ類（639）・Ｆ類（641）・Ｈ類（640）、鉢Ｅ類（634・635）、壺Ｌ類（638）・Ｏ類（637）、釜 C2 類（631）・C3 類（630・633）が確認できる。鉢はＤ・Ｅ類が主体を占め、高杯は東海系のＣ・Ｆ・Ｈ類が主体を占め、壺は弥生時代後期以来の在地の系譜を引くＬ類と東海系のＯ類が混在し、釜は C3 類が無く C2 類の他に C3 類が加わる様相は、20 層・21 層・SK85 出土土器と、後述する 23 層、SD50・51・83-3 層出土土器と中間的な土器様相である（第 46 図）。

23 層、SD50・51・83-3 層からは、古墳時代早期～前期初頭の土器群が出土している。23 層は SD50・51・83-3 層出土土器との上下関係は不明で、SD50・51・83-3 層の上位に位置する土層の可能性が高いが、接合する土器も多くあり、近接した時期の土器群と考える。SD50・51・83-3 層からは高杯Ａ類（551）・Ｂ類（542・541）・Ｃ類（552）・Ｆ類（554）、器台Ｃ類（558）・Ｋ類（560）、壺Ｉ類（527・526）・Ｌ類（520・523・524）・Ｍ類（529）、釜Ａ類（485・487）・Ｂ類（489）・C1 類（497）・C2 類（498・505）・Ｈ類（493）などが確認でき、23 層出土土器もこれに似た組成である（第 46・47 図）。

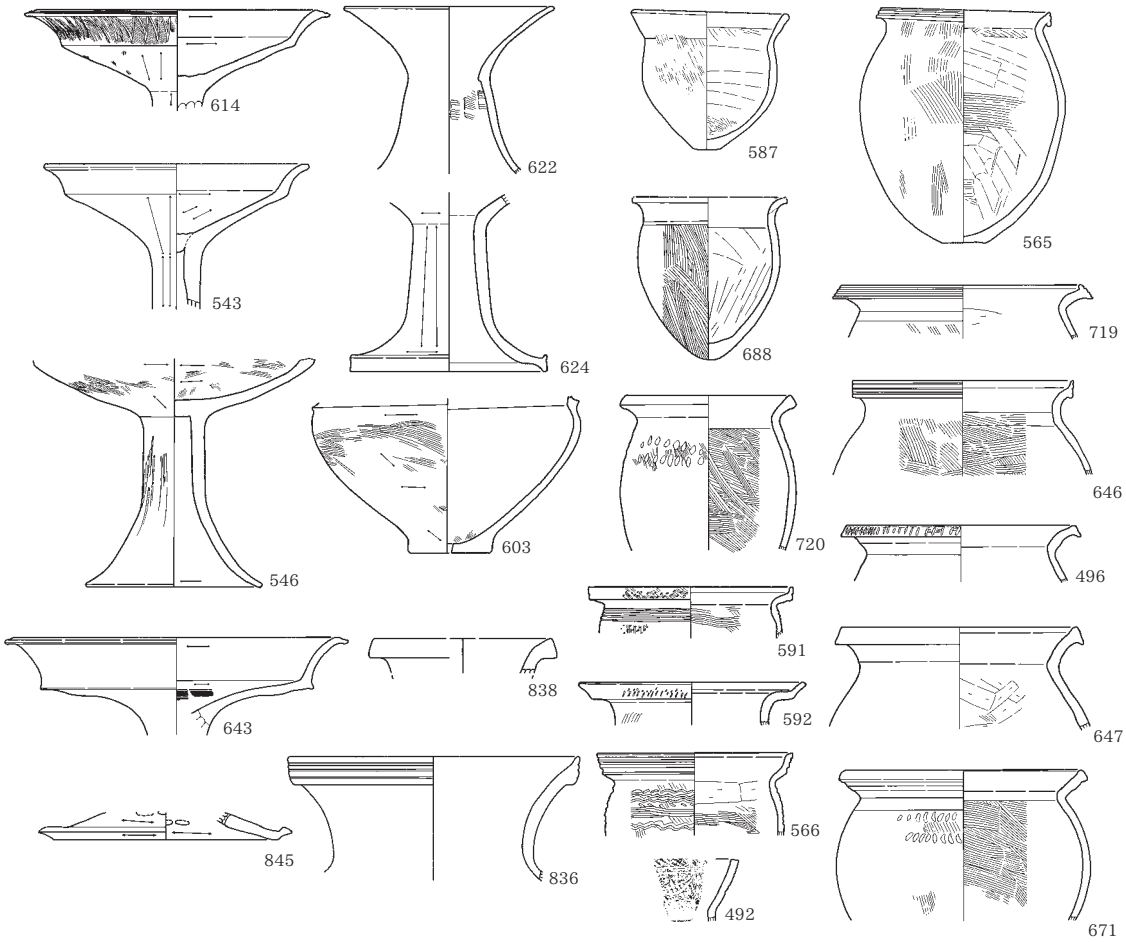
⑥層は 9B 周辺に部分的に確認できる土層で、23 層の下位、XⅥ層上位にあり、Ⅷ・Ⅸ層との上下関係は不明である。遺物の出土量は少ないが、口端端部に擬凹線が巡る釜 C1 類（719）、胴部が細身で肩部に連続刺突がある釜 C2 類（720）がある。これらは弥生時代後期前半頃に位置づけできる土器である。これに近い時期の土器は 23 層、SD50・51・83-3 層から散発的に出土しており、高杯Ａ類・器台Ｃ類のうち、口縁部が短く立ち上がりが急なもの（543・614・643）、器台Ａ類のうち大型のもの（622）、壺Ｃ・Ｓ・Ｖ類の一部（529・601 ～ 603）、釜 C1 類のうち口縁端部に擬凹線や櫛目文が巡るもの（496・565・646）、釜Ｅ・Ｎ類の一部などは 719・720 に近い時期の遺物の可能性が高い（第 48 図）。古墳時代早期～前期の土層と考える 23 層や SD50・51・83-3 層から弥生時代後期前半の土器が出土する主な理由は、古墳時代早期～前期に水田や水路の造営にともない掘削が行われたためであろう。なお⑥層からは弥生時代中期前半（第 50 図下段 468）、弥生時代中期後半（第 48 図下段 459）も出土している。⑥層は弥生時代後期前半に限定できる土層ではなく、弥生時代中期前半から後期前半の土層の可能性もある。

3）弥生時代中期

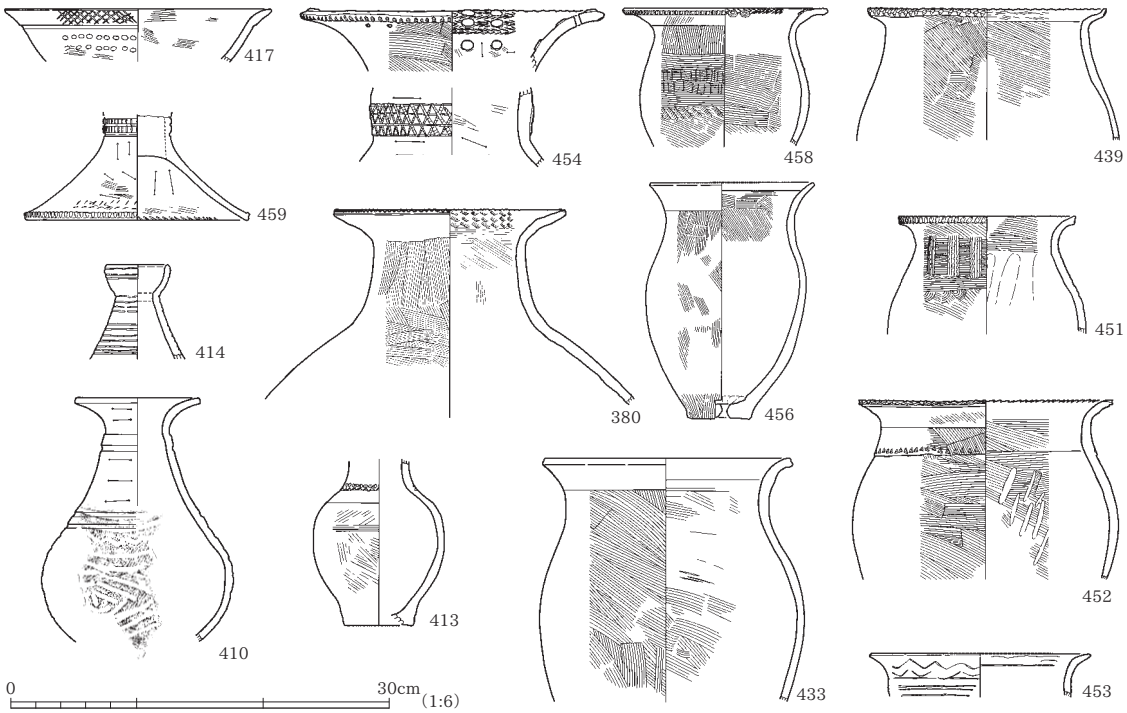
Ｄ区Ｆ層、Ｇ区灰色粘土層は同一の土層と考えており、21・23 層の下位でＸ層の上位に位置する。弥生時代中期後半の土器が大量に出土した。Ⅷ～Ⅸ層との上下関係は不明だが、Ⅷ層から古墳時代早期～前期の土器が出土しておりⅨ層に対応する土層と考えている。このほか弥生時代中期後半の土器は SD50・51、⑥層、23 層などからも散発的に出土している。弥生時代中期後半の土器は新相と古相に細分できる。新相と考えた土器は斜格子文に竹管文や円形浮文を施す鉢や壺（417・454）、斜行短線文がみられる壺や釜（330・458）、脚部上端付近に格子目文のある凸帯が付く高杯（459）、口縁部のヨコナデの範囲が広い釜Ａ類（433・456）、釜Ｅ類（439）、壺Ｊ類・釜Ｃ類のうち栗林Ⅱ式のもの（410・413・451・452）、壺Ｋ類・釜Ｄ類のうち川原町口式のもの（414・453）などであり、量的には少ない（第 48 図下段）。

Ｄ区Ｆ層、Ｇ区灰色粘土層から出土した土器の大半は古相のものと考えている（第 49・50 図）。壺は多様な形態があり、受口状口縁となる壺Ａ類は、口縁部に櫛もしくは篦状の工具で矢羽状の文様を施し頸部には凸帯を２条巡らすものがある（369・370）。壺Ｃ・Ｅ・Ｇ類は頸部から肩部にかけて太い櫛状工具

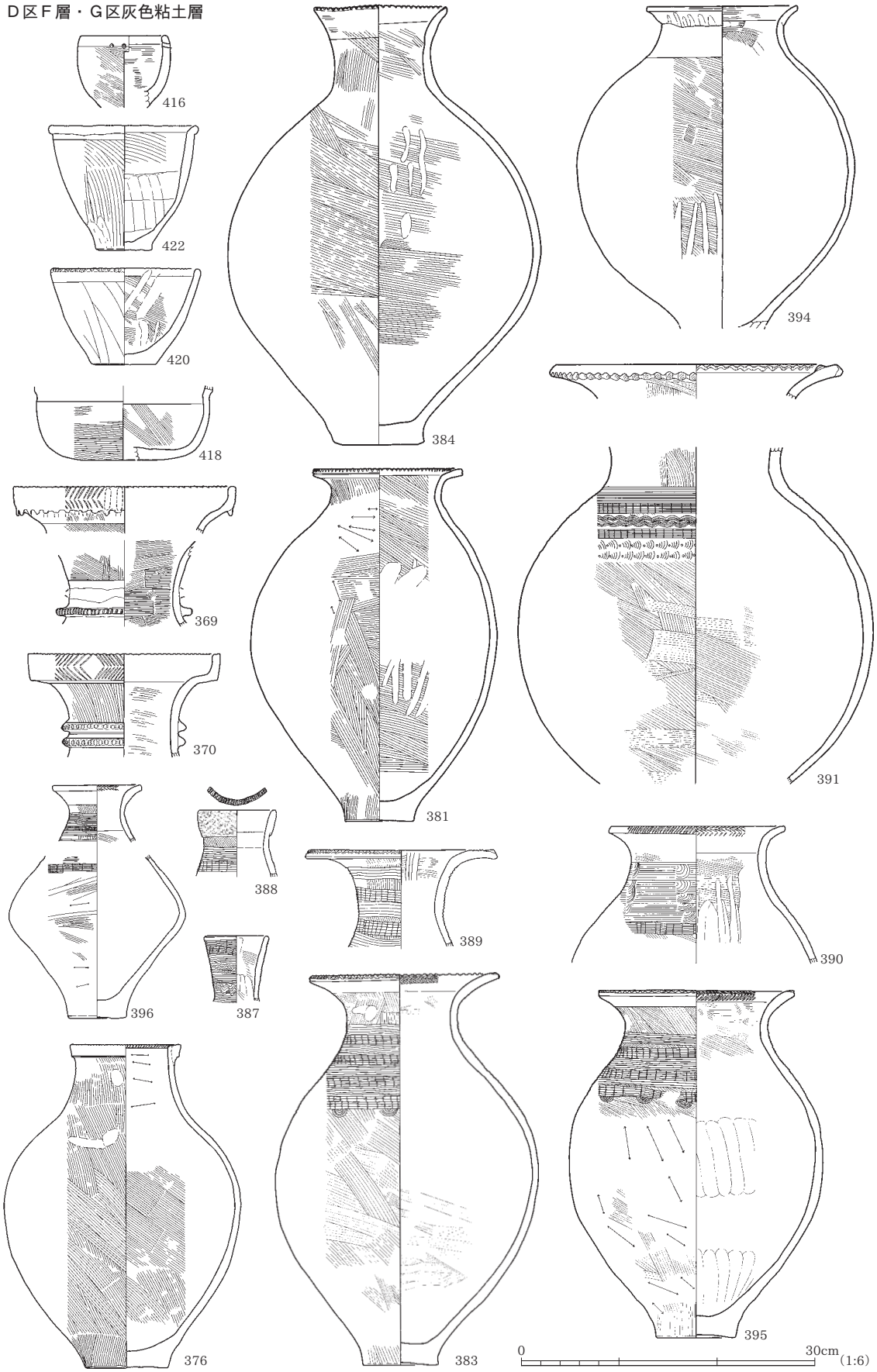
弥生時代後期（⑥層・23層・SD50・51・83-3層ほか）



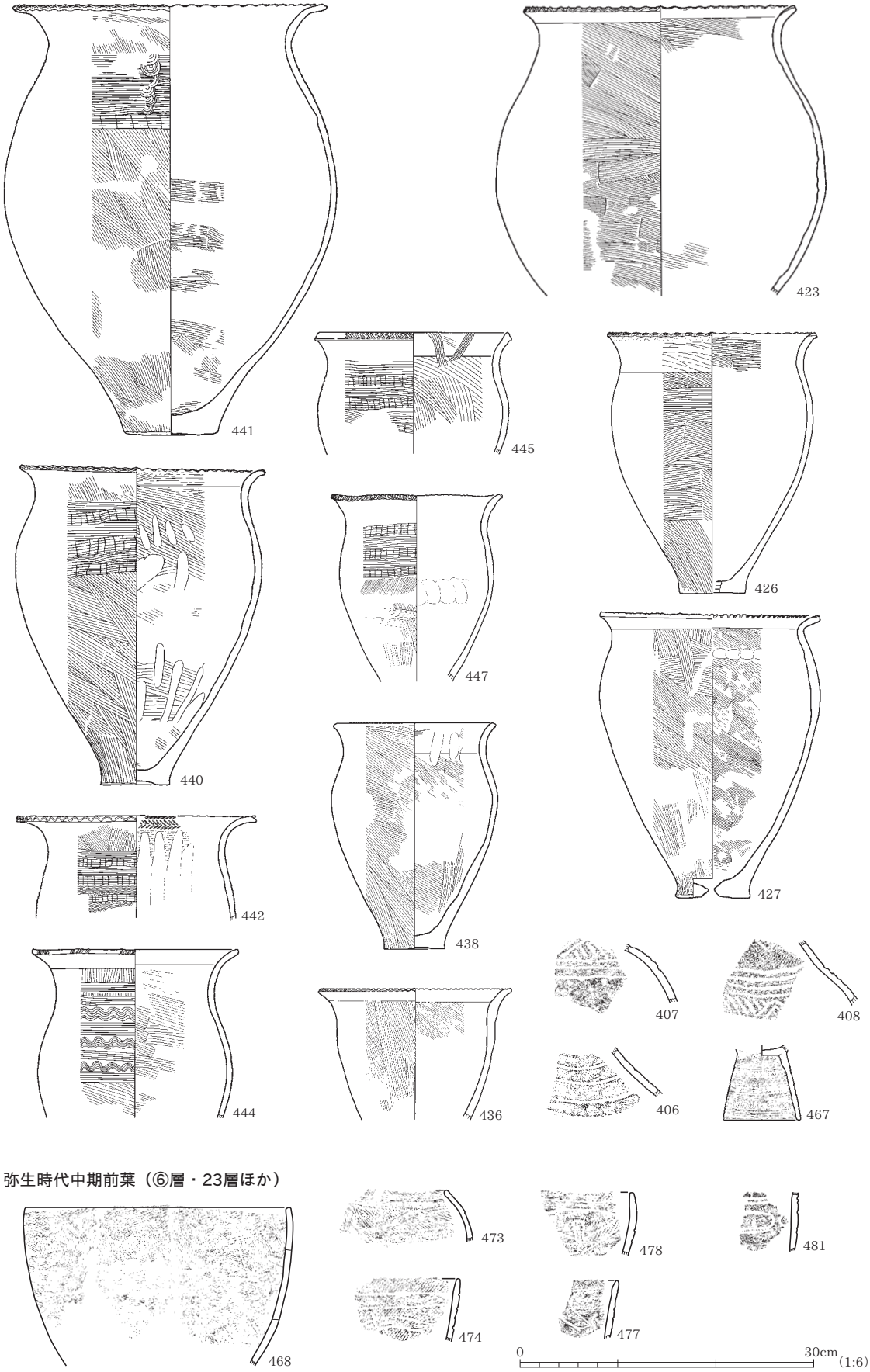
弥生時代中期後半（Ｄ区Ｄ層、SD50・51、23層、Ｇ区Ｆ層ほか）



第 48 図　大武遺跡出土土器・陶磁器（4）



第 49 図　大武遺跡出土土器・陶磁器（5）



第 50 図　大武遺跡出土土器・陶磁器（6）

で直線文や廉状文・扇状文を施すものが多く（383・389・395・396）、コンパス文風の波状文（391）や擬流水文（390）がある壺Ｅ類、口縁部を直線文･波状文･廉状文などで飾る壺Ｆ類（387）も確認できる。信州系の土器には新諏訪町Ⅲ式と考える壺（406 ～ 408）があり、段を持つ口縁部に斜縄文がある 388 も新諏訪町Ⅲ式の影響を受けた土器の可能性がある。

これらの土器群に若干先行する土器が 5B グリッド SD50-3 層、9B グリッド 23 層、⑥層などから散発的に出土している（第 50 図下段）。468 は在地の縄文時代晩期の深鉢に系譜が求められるもので、櫛目による波状文･LR 縄文･条痕文が確認できる。473 ～ 481 は「広義の磨消縄文」を行う東北系の土器で、474 ～ 480 は西麻生～今和泉式、473 は南御山Ⅱ式の筒形土器である。これらの土器は縄文時代中期前葉に位置づけられる土器群と考える。

4）縄文時代晩期～中期

Ⅸa ～ c 層の直下に位置するＸ層は青灰色シルト層、その下位のＸＩａ・ＸＩｂ層は黒褐色ピート層で、出土遺物は少量である。XⅡｂ層からXⅢe 層にかけて縄文時代晩期から後期の土器が出土している（図版 38 ～ 42）。XⅡｂ層は灰黄褐色の粘土層で縄文時代晩期中葉（主に大洞 C1 式）、XⅢa 層は黒色のピート層で縄文時代晩期前葉（主に大洞Ｂ～ BC 式）、XⅢb 層は褐色粘土層で縄文時代後期後葉（主に瘤付土器）、ＸⅢe 層は褐色粘土層で縄文時代後期中葉（加曽利Ｂ式土器）が出土しており、既存の土器編年と土層の堆積状況は調和的である。

XⅢe 層の下位に位置するXⅣ層は青灰色のシルト・砂礫層で、下位を中心に縄文時代前期前葉の土器が相当量出土した。ただし、これは本来ⅩⅤc 層に包含されていた土器で、XⅣ層堆積時に混入したものと考える。ⅩⅤa 層は谷中央付近や 10・11AB 周辺で部分的に検出できた土層で縄文時代中期後葉（大木 9a 式、図版 37　281 ～ 286）の土器が比較的まとまって出土した。11A13・18 でⅩⅤa 層掘削中に検出した SK97 の年代を示している。なお、縄文時代中期前葉の土器（図版 37　276 ～ 280）もⅠ区を中心にＸⅤa 層～ⅩⅤc 層から散発的に出土している。

5）縄文時代前期

ⅩⅤc（ⅩⅤ）層は炭化物を多量に含む褐色粘土層で縄文時代前期前葉の土器が大量に出土した。ⅩⅤc 層出土土器は出土地点により時期差があるものと考えている。最も新しい土器群は 10・11AB のⅩⅤc 層ほかから出土した土器で（第 51 図）、胴部に稜・凸帯を持たず、口唇部は方形、口縁端部や胴部を巡る爪形文は半截竹管を用いるものが多く、口唇部に爪形文を施すものは少ない。口縁端部や胴部に複数条の爪形列をめぐらす場合、爪形の方向は同一の方向を向くものが半数近くを占める。文様帯の文様は半截竹管や円形竹管を用い鋸歯状文や連結文、コンパス文を行うものが確認できる。地文が斜縄文や非結束羽状縄文のものは、太い原体が用いられることが多い。

9AB のⅩⅤc 層ほか出土土器は（第 52 図）、これに先行する土器群と考える。胴部に稜・凸帯を持ち、口唇部は内反りとなるものが一定量確認できる。口唇部・口縁端部や胴部を巡る爪形文に半截竹管を用いるものは少なく、複数条の爪形列をめぐらす場合、爪形の方向は矢羽状となるものが多数を占めるが、同一の方向を向くものも一定量見られる。文様帯の文様は半截竹管や円形竹管を用いた「S」字状文やコンパス文を行うもの、無文のままとするもののほか、小瘤状の粘土塊の貼付けと細かな刻みを持つ小隆帯で鋸歯状文・蕨手状文を組み合わせた複雑な文様を施すもの（174）が確認できる。

10AB・11AB 出土土器

第 51 図　大武遺跡出土土器・陶磁器（7）

第 52 図　大武遺跡出土土器・陶磁器（8）

6・7AB 出土土器

第 53 図　大武遺跡出土土器・陶磁器（9）

6・7AB のXVc 層ほかから出土した土器は（第 53 図）、大武遺跡から出土した土器のなかで最も古い土器群と考える。胴部に稜・凸帯を持ち、口唇部は内反りとなる深鉢のほか、体部の開きが少ない筒状の深鉢、底部が尖底となる砲弾系の深鉢なども確認できる。口唇部から口縁端部、胴部の稜・凸帯に２～３条の爪形文が巡るものが多く、爪形の方向は矢羽状となるものが多数を占める。爪形の原体は半截竹管を用いるものはほとんどない。文様帯の文様は撚糸側面・爪形・隆帯などを用いた蕨手状文が確認できるほか、半截竹管を用いた波状文も確認できる。

なお、A ～ G 区のXVc 層からは、量は少ないが十三菩提式頃の土器群（図版 36　267 ～ 270）、I 区のXVc 層からは諸磯 B 式頃の土器群（図版 36　263 ～ 266）が出土している。縄文時代前期後葉から縄文時代中期後葉にかけて大武遺跡とその周辺は断続的に利用されていた可能性が高い。

B　主要土器群と既存の編年案の対応関係

SX88 出土土器（第 45 図４段目）は黒色土器杯の形態や遺跡から出土している須恵器（684・729）の形態から考えて田嶋編年［1996］の４様式Ⅱ期を中心とする時期と考える。

SK49・95 出土土器（第 45 図最下段）は「ハ」字状に広がる脚を持つ土師器高杯、中膨らみで屈折脚の土師器高杯（673・675）が確認できるが、土師器杯は未確認である。こうした特徴は田嶋編年［1996］の３様式 I 期の特徴である。

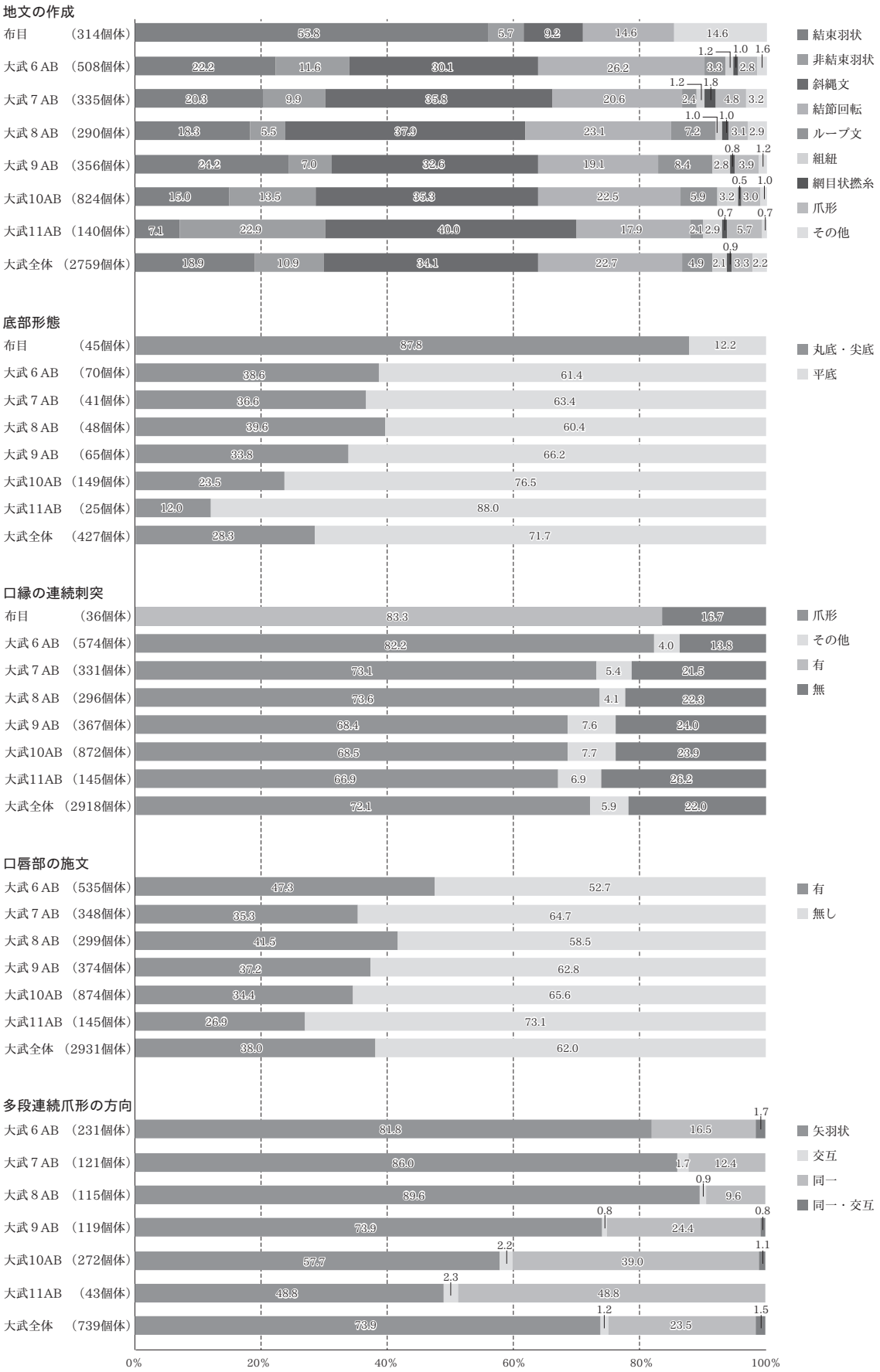
20 層・21 層・SK85 出土土器（第 46 図上段）は釜 C3 類（652・676）が釜の主体を占めることから滝沢編年［2005］の 9･10 期を中心とする時期の土器群と考える。共伴した壺 M 類（654）､鉢 D･E 類（685･686・687）もこの時期のものとして問題ない。

SK70 出土土器、SD50・83-1 層出土土器（第 46 図中段）のうち、631 は口縁端部に幅の狭い面を持つ釜 C2 類であるが､面の幅は狭く胴部も球形に近い。滝沢編年［2005］の８期を中心とする時期と考える。東海系と在地系の折衷と考える高杯 H 類（640）、東海系の壺が在地化した壺 O 類（637）、有段部の屈曲が緩い壺 L 類（657）も当期のものとして問題ない。

23 層、SD50・51・83-3 層出土土器（第 46 図下段・47 図）の釜は C2 類（498・505）が主体を占め、C1 類（569・497）･A 類（485・487）･B 類（564・489）･H 類（495）も確認できる。大型の器台 C 類（558）、有段部が明瞭な高杯 B 類(541)､口縁部に擬凹線が巡る壺 L 類(593・520)のほか､東海系の高杯 C 類(552・619)、高杯 F 類（617）、壺 P 類（600）、やや小型化した器台 A 類（625）、口縁部に擬凹線が巡る小型の有段口縁壺 L 類（539）などがある。弥生時代後期以来の伝統的器種と新来の器種が混在する様相は滝沢編年［2005］の５・６期を中心とする時期と考える。

第 48 図上段土器は釜は C1 類が主体を占め（565・646・647・719）、C2 類（671・720）、近江系の E 類（566・591・592）がこれに加わる。胴部はやや細身で倒卵形のものが多く、肩部に列点が巡るものもある(671･720)。高杯は A 類が主体を占め､口縁部の立ち上がりが急である(614)。器台は大型の A 類(622･624)、口縁部の立ち上りが急な C 類（643）が確認できる。滝沢編年［2005］の１期新から２期古を中心とする時期と考える。

D 区 F 層・G 区灰色粘土層の主体的土器群（第 49・50 図）は、文様に斜行短線文がほとんどみられず、直線文・波状文・廉状文・扇状文のほか擬流水文がみられること、櫛目が太いこと、新諏訪町Ⅲ式から栗林 I 式の古段階の土器が出土していることから考え田中・丸山編年［1999］の１期に先行する可能性が高い。包含層出土資料であり、ある程度の時間幅はあると考えるが、笹澤編年［2012］との対応関係で



第 54 図　大武遺跡XV層出土土器の諸属性

地文／グリッド		6AB　XV層出土土器				7AB　XV層出土土器				8AB　XV層出土土器				9AB　XV層出土土器				10AB　XV層出土土器				11A　XV層出土土器				その他　XV層出土土器				XV層合計			
		個体数		比率（%）		個体数		比率		個体数		比率		個体数		比率		個体数		比率		個体数		比率		個体数		比率		個体数		比率（%）	
結束羽状縄文	片翼状		58		11.4		33		9.9		13		4.5		47		13.2		58		7.0		6		4.3		40		13.1		255		9.2
	結束部強調	113	45	22.2	8.9	68	29	20.3	8.7	53	39	18.3	13.4	86	31	24.2	8.7	124	48	15.0	5.8	10	4	7.1	2.9	68	27	22.2	8.8	522	223	18.9	8.1
	両翼状		10		2.0		6		1.8		1		0.3		8		2.2		18		2.2		0		0.0		1		0.3		44		1.6
非結束羽状縄文			59		11.6		33		9.9		16		5.5		25		7.0		111		13.5		32		22.9		25		8.2		301		10.9
斜縄文			153		30.1		120		35.8		110		37.9		116		32.6		291		35.3		56		40.0		96		31.4		942		34.1
結節回転			133		26.2		69		20.6		67		23.1		68		19.1		185		22.5		25		17.9		80		26.1		627		22.7
組紐			6		1.2		4		1.2		3		1.0		10		2.8		26		3.2		4		2.9		5		1.6		58		2.1
ループ文			17		3.3		8		2.4		21		7.2		30		8.4		49		5.9		3		2.1		8		2.6		136		4.9
表裏縄文			2		0.4		0		0.0		0		0.0		0		0.0		1		0.1		0		0.0		0		0.0		3		0.1
絡条体	網目状撚糸	5	5	1.0	1.0	6	6	1.8	1.8	3	3	1.0	1.0	3	3	0.8	0.8	5	4	0.6	0.5	1	1	0.7	0.7	3	2	1.0	0.7	26	24	0.9	0.9
	その他		0		0.0		0		0.0		0		0.0		0		0.0		1		0.1		0		0.0		1		0.3		2		0.0
付加条縄文			0		0.0		2		0.6		0		0.0		0		0.0		1		0.1		1		0.7		2		0.7		6		0.2
網目状＋結節回転			1		0.2		0		0.0		0		0.0		0		0.0		0		0.0		0		0.0		0		0.0		1		0.0
網目状＋斜縄文			0		0.0		0		0.0		0		0.0		1		0.3		0		0.0		0		0.0		0		0.0		1		0.0
結節回転＋斜縄文			1		0.2		0		0.0		0		0.0		1		0.3		0		0.0		0		0.0		0		0.0		2		0.1
結節回転＋斜縄文＋ループ			0		0.0		0		0.0		0		0.0		0		0.0		0		0.0		0		0.0		1		0.3		1		0.0
非結束羽状＋ループ			1		0.2		0		0.0		0		0.0		0		0.0		1		0.1		0		0.0		0		0.0		2		0.1
爪形			14		2.8		16		4.8		9		3.1		14		3.9		25		3.0		8		5.7		6		2.0		92		3.3
沈線			2		0.4		3		0.9		0		0.0		0		0.0		0		0.0		0		0.0		3		1.0		8		0.3
沈線＋斜縄文			1		0.2		0		0.0		0		0.0		0		0.0		1		0.1		0		0.0		0		0.0		2		0.1
条痕			0		0.0		1		0.3		0		0.0		0		0.0		0		0.0		0		0.0		5		1.6		6		0.2
格子目			0		0.0		0		0.0		0		0.0		0		0.0		3		0.4		0		0.0		1		0.3		4		0.1
円形竹管文			0		0.0		1		0.3		1		0.3		1		0.3		0		0.0		0		0.0		0		0.0		3		0.1
無文			0		0.0		4		1.2		7		2.4		1		0.3		1		0.1		0		0.0		3		1.0		16		0.6
合　計			508		100		335		100		290		100		356		100		824		100		140		100		306		100		2759		100
尖底・丸底			27		38.6		15		36.6		19		39.6		22		33.8		35		23.5		3		12.0		0		0		121		28.3
平底			43		61.4		26		63.4		29		60.4		43		66.2		114		76.5		22		88.0		29		100		306		71.7
合　計			70		100		41		100		48		100		65		100		149		100		25		100		29		100		427		100
口唇文様有			253		47.3		123		35.3		124		41.5		139		37.2		301		34.4		39		26.9		135		37.9		1114		38.0
口唇文様無			282		52.7		225		64.7		175		58.5		235		62.8		573		65.6		106		73.1		221		62.1		1817		62.0
合　計			535		100		348		100		299		100		374		100		874		100		145		100		356		100		2931		100
口縁部連続爪形			472		82.2		242		73.1		218		73.6		251		68.4		597		68.5		97		66.9		227		68.2		2104		72.1
その他の施文			23		4.0		18		5.4		12		4.1		28		7.6		67		7.7		10		6.9		15		4.5		173		5.9
口縁部地文以外無			79		13.8		71		21.5		66		22.3		88		24.0		208		23.9		38		26.2		91		27.3		641		22.0
合　計			574		100		331		100		296		100		367		100		872		100		145		100		333		100		2918		100
爪形矢羽			189		81.8		104		86.0		103		89.6		88		73.9		157		57.7		21		48.8		98		78.4		753		73.9
爪形交互					0.0		2		1.7		1		0.9		1		0.8		6		2.2		1		2.3		1		0.8		12		1.2
爪形同一			38		16.5		15		12.4		11		9.6		29		24.4		106		39.0		21		48.8		19		15.2		239		23.5
爪形同一矢羽			4		1.7				0.0				0.0		1		0.8		3		1.1				0.0		7		5.6		15		1.5
合　計			231		100		121		100		115		100		119		100		272		100		43		100		125		100		1019		100

第 24 表　大武遺跡XV層出土土器の諸属性

はⅠ期に平行する資料が一定量存在するものと考えている。

10・11A・B XVc 層出土土器（第 51 図）は円形竹管・半截竹管・爪形による「S」字状文や鋸歯状文・連結文があり、地文に幅の広い原体を用いた斜縄文・羽状縄文を施す土器がある（188・242）。また口縁部の断面形は方形、口唇部に爪形を施すものは少なく、口縁部や胴部に複数段の爪形列がある場合は爪形の方向が同一のものが多い（171·219·162·205·243 など）。底部は平底のものが大半で、外面は中央部まで文様を充填する（238・239・240）。こうした特徴は小熊編年［2008］の新段階 1 期に対比できるもので、胎内市二軒茶屋遺跡出土の主体的な土器群とほぼ同一の時期の資料と考える。

6・7A・B 出土土器（第 53 図）には撚糸側面圧痕や爪形・円形竹管による蕨手状文がある土器（1・41・57・72 など）が確認でき、小熊編年[2008]の古段階に平行する土器群である。小熊氏が古段階 1 期の資料とした新潟市西蒲区（旧巻町）布目遺跡出土土器と類似した土器群と考える。ただし、布目遺跡に比べ、丸底・尖底の土器が少ないこと、布目遺跡出土土器の地文は、結束羽状縄文が大半を占めるが、6・7A・B 出土土器は、結束羽状縄文は 10％程度であることなどを考えると、布目遺跡出土土器に若干後続する資料の可能性が高い。

9A・B ほか XVc 層出土土器は、6・7A・B XVc 層土器と 10・11A・B XVc 層出土土器の中間的な土器様相である。小熊編年［2008］の古段階 2 期と新段階 1 期の間に位置づけられるものと考える。粘土塊貼り付けによる瘤状の小突起を多く持つ土器（174）が確認できる点もこのことを補強する。

時期		土器編年			大武遺跡主要土器
縄文時代	前期	布目式・新谷式	古 1	小熊 2008	
			古 2		6・7A・B XVc 層
					9A・B ほか XVc 層
			新 1		10・11A・B XVc 層
			新 2		
		後葉	1	石原・寺崎 1999	
			2		Ⅰ区 XVc 層
			3		
			4		A ～ G 区 XVc 層（一部）
	中期	前葉	1	高橋 1999	
			2		↑
			3		Ⅰ区 XVa ～ XVc 層
			4		
			5		↓
			6		
		中葉	1	寺崎 1999	
			2		
			3		
			4		
			5		
		後葉	1		A ～ G 区 XVa 層
			2		
			3		
	後期	前葉			
		中葉	1	渡邊（裕）1999a	A ～ G 区 XIIIe 層
			2		
			3		
		後葉	1		A ～ G 区 XIIIb 層
			2		
			3		
	晩期	前葉	1	渡邊（朋）1999	A ～ G 区 XIIIa 層
			2		
		中葉	1		A ～ G 区 XIIb 層
			2		
			3		
			4		
		後葉			
弥生時代	前期			渡邊（裕）1999b	
	中期	前半	1		
			2		第 51 図下段土器群
		後半		田中・丸山 1999	D 区 F 層・G 区灰色粘土層
			Ⅰ期		↓
			Ⅱ期		D 区 F 層・G 区灰色粘土層（一部）ほか
			Ⅲ期		
	後期	1 期	古	滝沢 2005	
			新		第 48 図上段土器群
		2 期	古		
			中		
			新		
		3 期			
古墳時代	早期	4 期			↑
		5 期			SD50・51・84-3 層
		6 期			23 層
	前期	7 期			↓
		8 期			SD50・84-1 層・SK40
		9 期			20 層・21 層・SK85 ほか
		10 期			
		11 期			↓
	中期	3 様式	Ⅰ期	田嶋 1996	SK89・SK49（一部）
			Ⅱ期		
	後期	4 様式	Ⅰ期		↑
			Ⅱ 1 期		SX88
			Ⅱ 2 期		↓

第 25 表　編年対応表

2　石器・石製品

弥生時代中期の管玉工程品

本遺跡から出土した完成品のうち、細型のものは 52 点（破損品を含む）で、長さ 4.2 ～ 10.6mm・直径 1.7 ～ 3.2mm、平均値は長さ 6.7mm・直径 2.4mm である。第 26 表は近隣の代表的な玉作遺跡と比較したものであるが、本遺跡例は長さが短いことがうかがえる。本遺跡では長さ 10.6mm のものが最長であるが、4 ～ 8mm が分布の中心である（第 55 図右上）。特に平田遺跡との比較では、単純な平均値比較はできないにしても、その差は 2 倍近くになると推測できる。しかし、そのような短い個体でも両面穿孔のものが少なからず認められる。

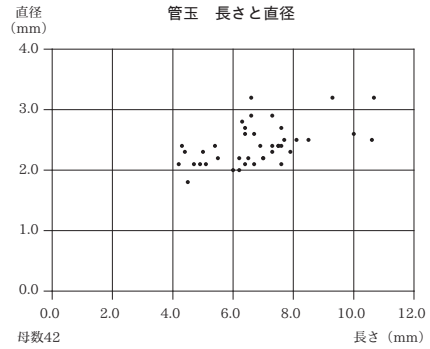
また、細型に加えて太型・極太型のものがわずかながら出土している。太型は 2 点あり、直径 7.1mm（500）と 7.7mm（499）である。極太型は多角柱研磨段階のもの（468）1 点のみの出土であるが、直径は 19.7mm を測る。現在のところ最大とされているのは、石川県八日市地方遺跡［宮田 2003］から出土した直径 20mm、長さ 43mm のものである。本遺跡 468 は完成品でないことから、現在の直径よりも一回り小さくなると判断できる。極太型は県内では初例と考えられる。完成品は近畿・東海に分布し、製作工程品は滋賀～石川県・奈良県で出土している［河村 2010］。

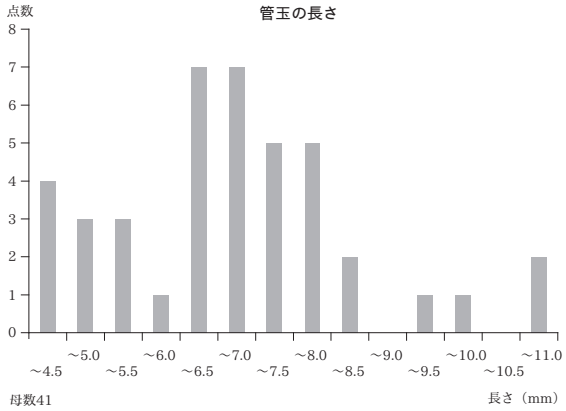
角柱状剥片については、幅が約 4 ～ 29mm と幅広い。肉眼観察により便宜的に大と小の 2 つに分類したが、分布図を作成してみると厳密な区分は難しい（第 56 図 1）。図では幅 12mm と 22mm 付近にわずかな空白が認められ、3 つのサイズに分類できる可能性も否定できない。また、側面剥離のものは、数が

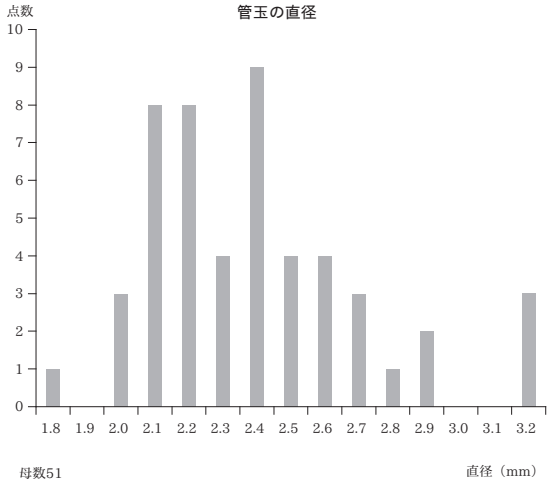
遺跡名	長　さ	直　径	孔径	点数
大　武	**6.8（4.2 ～ 10.6）**	**2.4（1.7 ～ 3.2）**	**1.4***	**41**
吹　上	8.1（3.5 ～ 20.2）	2.6（1.8 ～ 3.4）	1.2	77
平　田	（9.0 ～ 14.7）	（2.1 ～ 3.0）		5
八日市地方	8.4	3.0	1.5	111

＊ 吹上遺跡は遺物観察表より作成。長さは最大長と書かれているため、完形品ではない可能性もある。
大武遺跡の孔径は報告遺物完成品・仕上げ研磨段階 6 点の平均である。

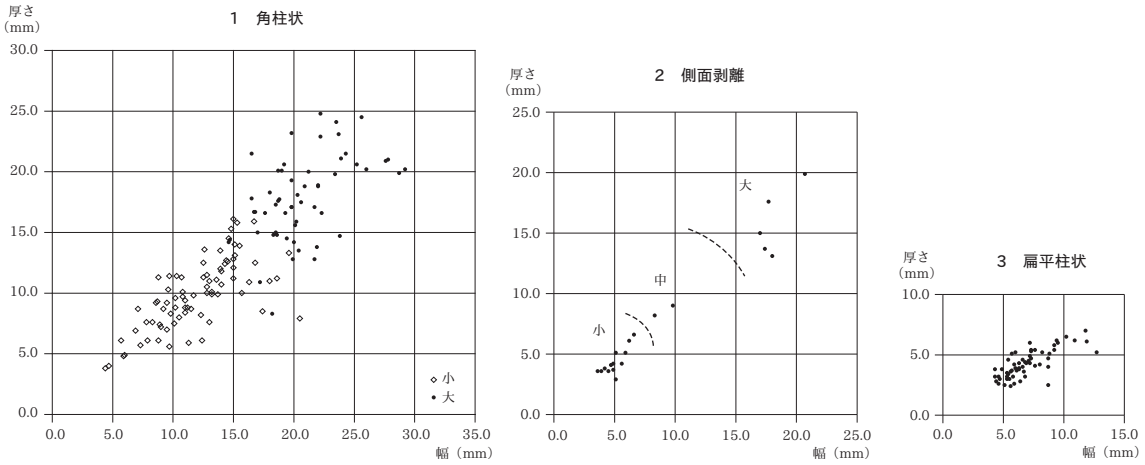
第 26 表　管玉完成品のサイズ比較







第 55 図　管玉完成品のサイズ



第 56 図　管玉工程品のサイズ

少ないため断定はできないが、3 つ（幅 5mm 前後・8 ～ 10mm[1]・17 ～ 21mm）に区分できる可能性が高い（第 56 図 2）。完成品の直径は、前述したように 3 つに分類できることから、これに対応する可能性が高い。

打面転位については、2 辺以上の施溝分割痕が認められるものを観察したところ、宮田［2003］の分類に従うと板状・角柱状ではⅠa1 類がやや多く、扁平柱状ではⅠa1 類とⅠa2 類が同程度見られる。しかし、この分類に当てはまらないものも少なからず存在する。工程が決まったものではなく、多様であることがここからもうかがえる。まだ観察・分析の余地があり、角柱状剥片の分類や打面転位については今後の課題としたい。

弥生時代中期の勾玉工程品

本遺跡から出土したヒスイ勾玉のうち、穿孔段階のものから完成品は 8 点で、長さは 7.1 ～ 14.5mm と幅広いが、長幅分布では数が少ないこともあり、明確に区分できない。抉りを入れる段階と D 字状の段階では長さ 18 ～ 27mm の大型品が認められ、大型品も製作していたことは明白である。形態はすべて半玦状である[2]。

本遺跡における製作工程は、施溝分割痕を有するものがわずか 7 点のみであることから、直接打撃により分割されたと判断できる。施溝分割は緑色部分を獲得するためとのことであり［冨山 1988］、本遺跡でも 507 や 516 のように、D 字状に整形する前から緑色部分を多く残そうとする意識が認められるものもある。しかし大多数は白色を呈する個体である。吹上遺跡でも、本遺跡同様に半玦状勾玉の大半が白色部分を多く含むものであり、笹沢氏はその理由として、東日本の消費遺跡で出土する勾玉も白色部分を多く含むものが一般的である［廣瀬 2006］ことから、「需要に対して緑色部分に大きくこだわる必要がなかったため、施溝分割が積極的に使用されなかった」と指摘されている。また、施溝分割を多用しないことについて「北陸でも東よりの地域に共通した現象であるかもしれない」とも述べられているが［笹澤 2006］、緑色凝灰岩製管玉についてもヒスイ同様、東にいくほど施溝分割の比率が低くなることは、原産地との距離といった理由以外に何か関連があるのかもしれない。

1）太型の完成品は石材の質感から搬入品または時期の異なるものの可能性もあり、3 つのサイズを本遺跡で製作していたとは断定できない部分もある。
2）ヒスイの定型勾玉も 1 点出土している（567）が、濃緑色を呈し質感が全く異なることから、半玦状勾玉と同時期に本遺跡で製作されたものではないと判断し、ここには含めていない。

縄文時代～弥生時代中期における石器石材の変遷

本遺跡では縄文時代前期前葉・縄文時代後晩期・弥生時代中期、大きく区分して３時期の石器がそれぞれ多量に出土しており、石材組成の変遷を考える上で良好な資料である。

まず剥片石器（玉作遺物を除く）からみると、縄文時代前期前葉では凝灰岩・頁岩・珪質頁岩・流紋岩が多く、石材構成は下越地方の遺跡と近似する。良質な珪質頁岩製の「松原型石匙」が成品で搬入されていること、黒曜石はわずかながらも県内で類例の少ない特徴的な外見のものであることなどから、東北地方や新潟県北部地域との関係が色濃く、石材あるいは石器を比較的遠距離から調達していたことがわかる。縄文時代後晩期では、珪質頁岩・頁岩・流紋岩・凝灰岩が多く、前期と比較的近似した様相を示すが、搬入品はほとんど認められない。弥生時代では、様相が一変し流紋岩が過半数を占め、すべての器種で最多となる。２番目に多い石材は、流紋岩とは大差があるものの頁岩となることもすべての器種で共通しており、縄文時代との違いがうかがえる。このことから石材は近隣で採取可能な石材を使用していたことがわかる。

磨製石斧については、縄文時代前期前葉では製作拠点のひとつとして盛んに製作されるが、石材は蛇紋岩で、糸魚川地域から搬入している。蛇紋岩は弥生時代まで引き続き利用される。縄文時代後晩期では、蛇紋岩のほかに砂岩製の定角式のものが一定量認められる。弥生時代では、いわゆる大陸型磨製石斧の搬入品が特徴的で、閃緑岩製の太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧と緑色凝灰岩製の柱状片刃石斧が挙げられる。閃緑岩は北信地方の可能性が高い。緑色凝灰岩は、ほかの石器や玉作工程品で認められるものとは色調や質感が異なり、原産地は現在のところ特定できていない。

礫石器については、器種ごとに述べる。磨石類では、３時期とも安山岩が過半数を占め、次いで硬砂岩･花崗岩の順となる。比率は縄文前期前葉で花崗岩が少し高い程度で、ほぼ同じ様相と言える。石錘で安山岩が約半数を占める点では３時期とも共通するが、縄文時代では砂岩・凝灰岩、弥生時代では凝灰岩・硬砂岩・砂岩と若干の差が表れる。砥石は砂岩が主体で凝灰岩が一定の比率を占め、３時期とも同様である。縄文時代後晩期においては、砂岩と凝灰岩の２種類しか認められない。

最後に石製品についてであるが、石製品は、特に時代時期によって異なるものであることから、ここではそれぞれの石製品の石材について述べるにとどめる。

縄文時代前期前葉においては玦状耳飾や玉類がある。石材は糸魚川地域の滑石であるが、石核が非常に少ないことから素材剥片や成品・未成品として搬入されたと考えられる。縄文後晩期では石製品の出土は非常に少ない。琥珀の原石が１点出土したが、岐阜県瑞浪産の可能性が高いとの分析結果が出ている。弥生時代中期においては緑色凝灰岩管玉とヒスイ勾玉の生産拠点となる。緑色凝灰岩は佐渡、ヒスイは糸魚川地域からの搬入であろう。当該期には本遺跡のほか、吹上遺跡や下谷地遺跡といった大規模な玉作遺跡の存在が知られているが、原産地から離れた地域へこれだけの数量が運搬され玉類の製作が行われていたことには、どのような背景があったのか興味深いところである。また、石剣・石包丁・不明石製品の石材である黒色頁岩・粘板岩については、搬入品と考えられるが原産地の特定には至っていない。特に石剣は、希少な遺物である上に鎬を有する優品であることから、西日本からの流れも想像できるが、推測にとどまる。今後の課題としたい。

3　木製品・漆製品

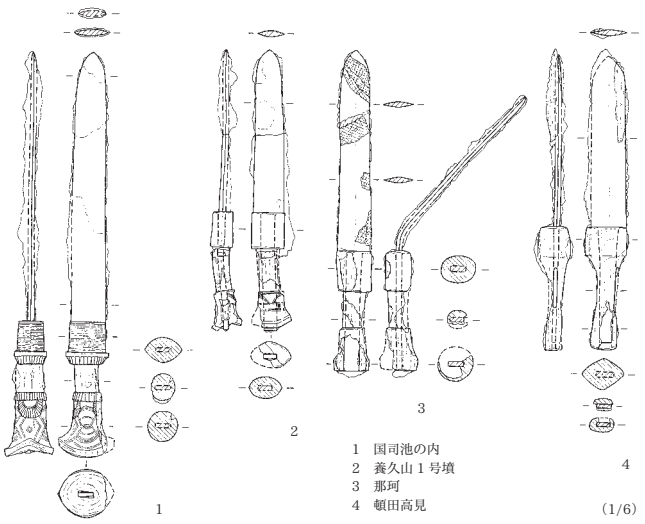
縄文時代～古代の器種による用材傾向・樹種選択

掲載遺物625点のうち、スギまたはスギと推測されるものは364点にのぼり、58%という高率を占める。本州日本海側は、弥生時代から古代にかけて、最も優先する樹種がスギということであり［鈴木2012］、多用されるのは当然のことと言える。スギは刳物桶や槽、田下駄をはじめ形代・箸・指物・部材など様々な器種に使用されている。

その他の樹種は比較的器種が限定されるものも多い。まず、農耕土木具のうち鍬・鋤・竪杵についてはコナラ属（アカガシ亜属、コナラ節、クヌギ節）にほぼ限定される。武器・武具では、弓はイヌガヤ、盾はモミ属、剣把はカヤである。弓以外については、県内はもとより近県でも出土例は少ないことから、近畿地方などの傾向を見ると、盾＝モミ属とほぼ限定されるほど樹種が限られているようである。容器の中では、高杯がトチノキ、刳物桶と槽、指物はスギである。トチノキは、中部日本海側では古墳時代までは定量を占める樹種で、特に弥生時代後期から古墳時代においてはスギに次いで２番目に多い樹種であるという［久田2012］。いずれの器種も、定型化した樹種選択から逸脱するものはないと言えよう。

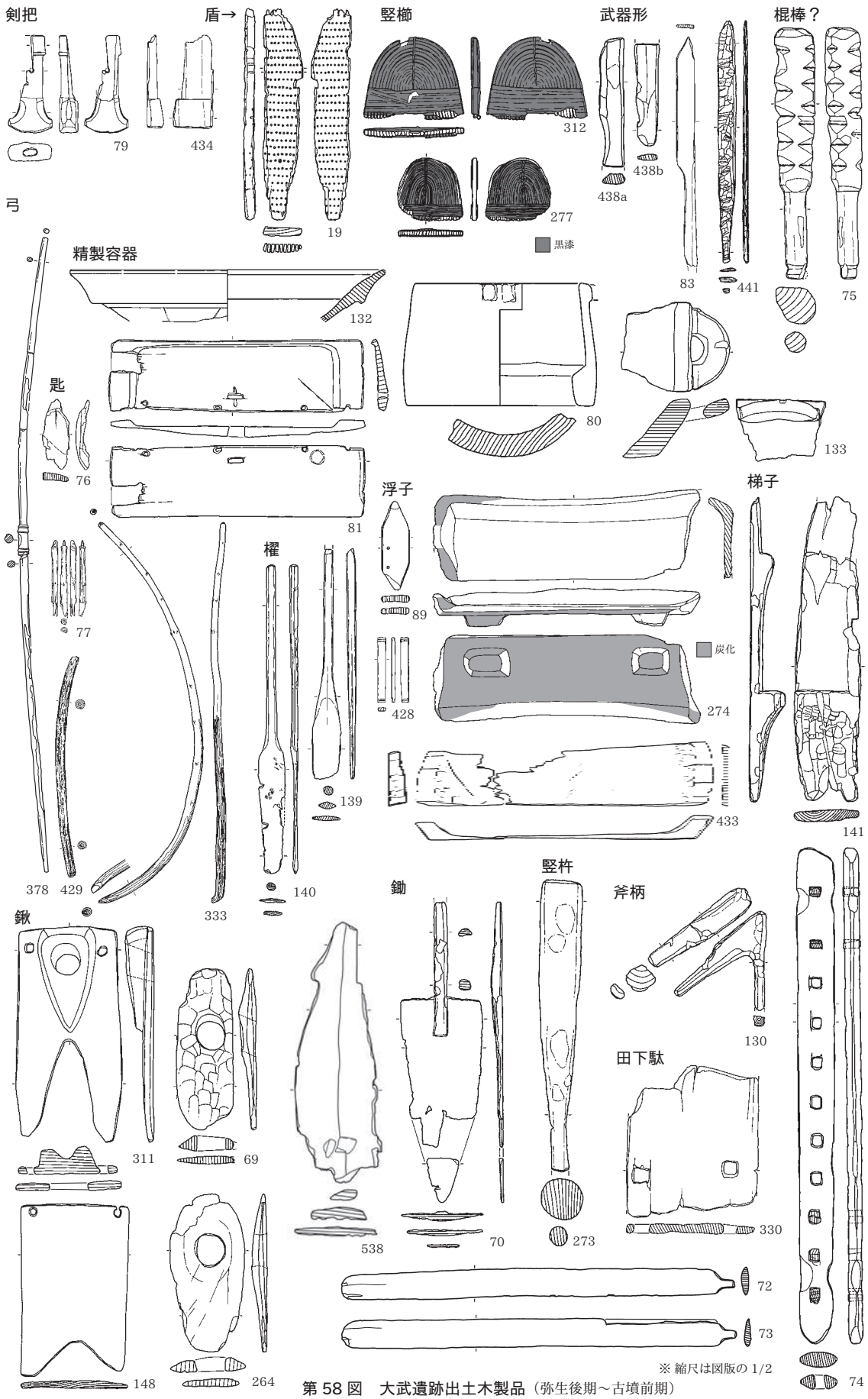
古墳時代早期～前期の剣把について

本遺跡からは希少な木製品が出土しているが、その中でも剣把は特筆されるものである。弥生時代から古墳時代にかけての鉄製刀剣については、豊島直博氏の論考がある。これまでの研究は、鉄剣本体のみ、あるいは剣把の材質ごとに行われてきたが、それら全体を見通した分類と編年を構築している［豊島2005］。「二枚合わせ式」、「鹿角Ｙ字式」、「一木造り式」、「四枚合わせ式」の４つに分類し、各型式の年代や分布について考察されているが、本遺跡79が分類される「一木造り式」は、把縁の端面から茎挿入穴をあける「把縁穿孔型」と、端面以外に把頭や把間の側面からも茎挿入穴をあける「多方向穿孔型」に細分されており、79は把縁が欠損しているものの把間の側面に孔が認められることから、「一木造り多方向穿孔型」となろう。類例としては、広島県国司池の内遺跡、兵庫県養久山（やくやま）１号墳、福岡県那珂遺跡、福岡県頓田高見遺跡が挙げられる（第57図）。本遺跡と全く同じ形態のものは見られない。前三者は墓からの出土で、養久山１号墳については、撥形の前方部を有する初期古墳である。また、那珂遺跡の南方150mにも同形態の初期古墳（那珂八幡古墳）が存在する。那珂遺跡自体も国内最古の弥生時代環濠集落が検出され、巴形銅器の鋳型が出土するなど、弥生時代から古墳時代にかけて福岡平野の拠点集落のひとつである［長家・榎本編1999］［久住2012］ほか。



第57図　「一木造り多方向穿孔型」の把を装着した鉄剣
（［豊島2005］より転載・改変）

「一木造り多方向穿孔型」剣把の時期は、



※ 縮尺は図版の 1/2

第 58 図　大武遺跡出土木製品（弥生後期～古墳前期）

弥生時代終末から古墳時代前期に位置づけられており、分布は、弥生時代では北部九州から瀬戸内地域と千葉県のみで数も少ないが、古墳時代前期になると北部九州から会津地域まで分布が広がるということである。79 が出土した SD47 は古墳時代早・前期の遺構であり、所属時期・分布とも合致する。

弥生時代後期～古墳時代前期における木製品の組成について

弥生時代後期から古墳時代前期に属する主な木製品を第 58 図に示す[1)]。県内で現在のところ類例の少ない、あるいは存在しないものとしては、〈武器・武具〉剣把・盾、〈服飾具〉竪櫛、〈祭祀具〉武器形、〈食事具〉匙、〈容器〉高杯・蓋？・把手付容器・脚付盤、〈建築部材〉梯子などがある。一般的なものでは〈工具〉斧柄、〈農耕土木具〉鍬・泥除け・鋤・竪杵・田下駄、〈運搬具〉櫂、〈漁撈具〉浮子、〈武器〉弓のほか、用途不明の部材が多数出土している。前者の希少な木製品の出土から、本遺跡の階層性はある程度高いものと推測できるが、このような出土遺物から集落の階層性を分類した論考がある［樋上 2004・2012］。

樋上氏は弥生時代から古墳時代早期の集落を 3 つの階層に分類され、第 58 図の「まつりの道具（上位）」・「首長の所有物（上位）」と「遠隔地の生産物」を有する遺跡（集落 A）、「まつりの道具（下位）」・「首長の所有物（下位）」と「近隣の生産物」を有する遺跡（集落 B）、日常生活の道具と在地の生産物のみを有する遺跡（集落 C）としている。

本遺跡では、骨角製品・銅製品・鉄製品は出土していないが、それ以外の遺物では、日常生活の道具に加えて「上位」の遺物が出土している。また、本遺跡と一連の関係性を有する奈良崎遺跡では、弥生時代後期に属する大型の周溝墓 3 基と古墳時代前期の円墳 2 基が検出され、円墳からは、小型彷製鏡（捩文鏡）が出土している。彷製鏡は前期後半に比定されることから、本遺跡の出土遺物と時期が若干異なる可能性はあるが、本遺跡が樋上氏の「集落 A」に分類できることを後押しする要素と言える。本遺跡から約 2km の距離に国史跡の八幡林官衙遺跡があり、古代において要衝の地であった和島地域が、前代においても同様に重要な地域であったことがうかがえる。

4 遺 跡 の 動 向

大武遺跡の土層の特徴や遺構、出土遺物、プラントオパール分析・珪藻分析・花粉分析などから推測できる大武遺跡周辺の環境［古環境研究所 2000］、奈良崎遺跡の調査成果［春日ほか 2002、丸山 2001・2002］をまとめると第 27 表となる。

Ⅰ期（縄文時代前期前葉）・Ⅲ期（弥生時代中期）の遺物は、A ～ G 区で検出された埋没谷から大量に出土しており、調査区の近隣に地域の中核となるような大規模集落が存在した可能性が高い。調査区南西に所在する「大武畑」と呼称された地点が、その有力な候補地と考える。

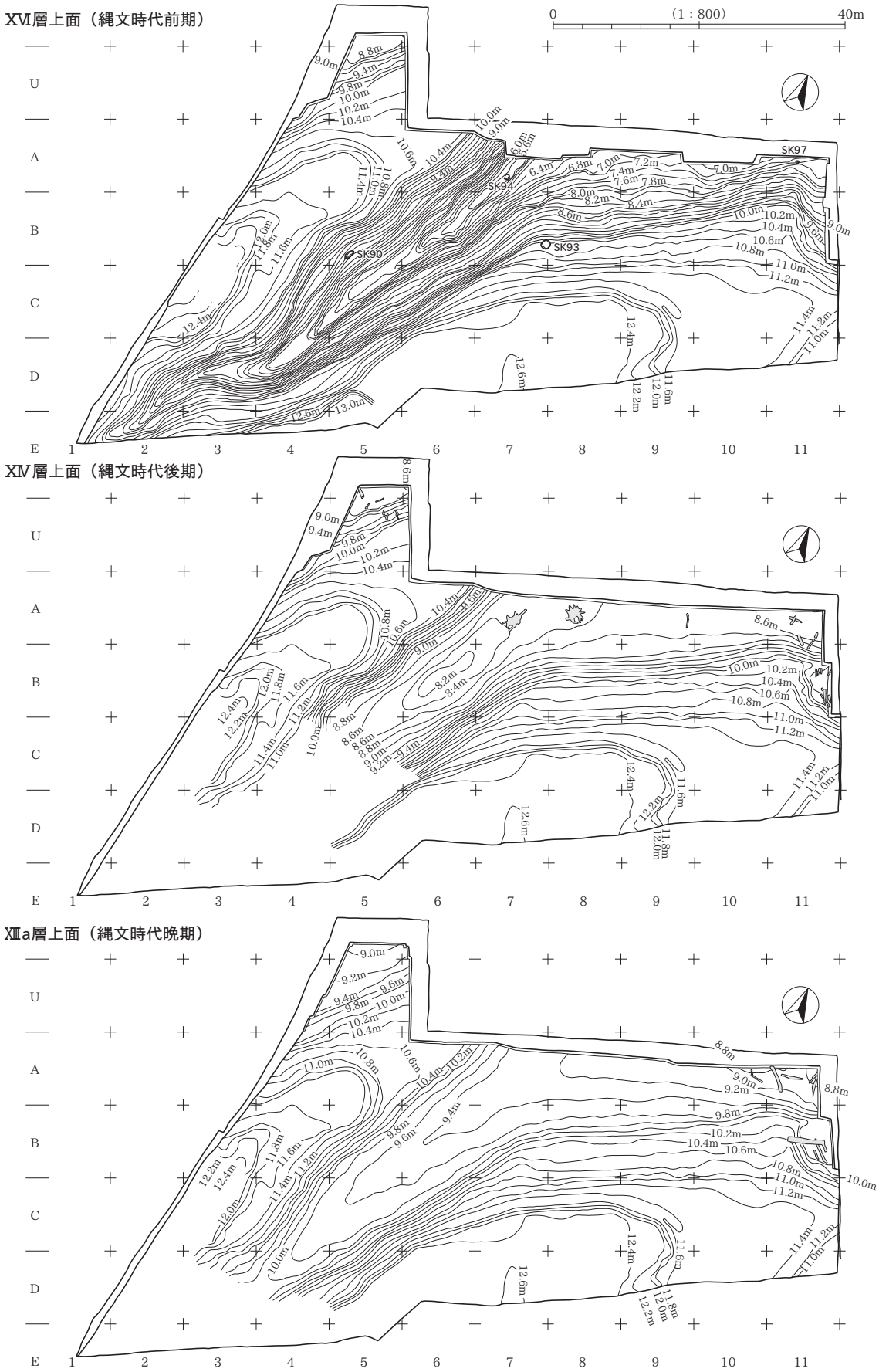
Ⅳa 期（滝沢 1 ～ 4 期）以降は、大武遺跡と奈良崎遺跡が相互に関連しながら変化していったことが推測できる。当期以降の両遺跡の盛衰はおおむね一致するが、Ⅳa 期・Ⅳb 期（滝沢編年 5 期～ 11 期）・Ⅵ b 期（14 世紀後半～ 16 世紀）のように、大武遺跡と奈良崎遺跡の丘陵上の様相が補完的（一方が拡大し、もう一方が縮小する）時期も確認できる。

1） 第 58 図のうち、311・312 は古墳時代中期の土坑（SK95）、330 は後期の遺構（SX88）から出土したものである。

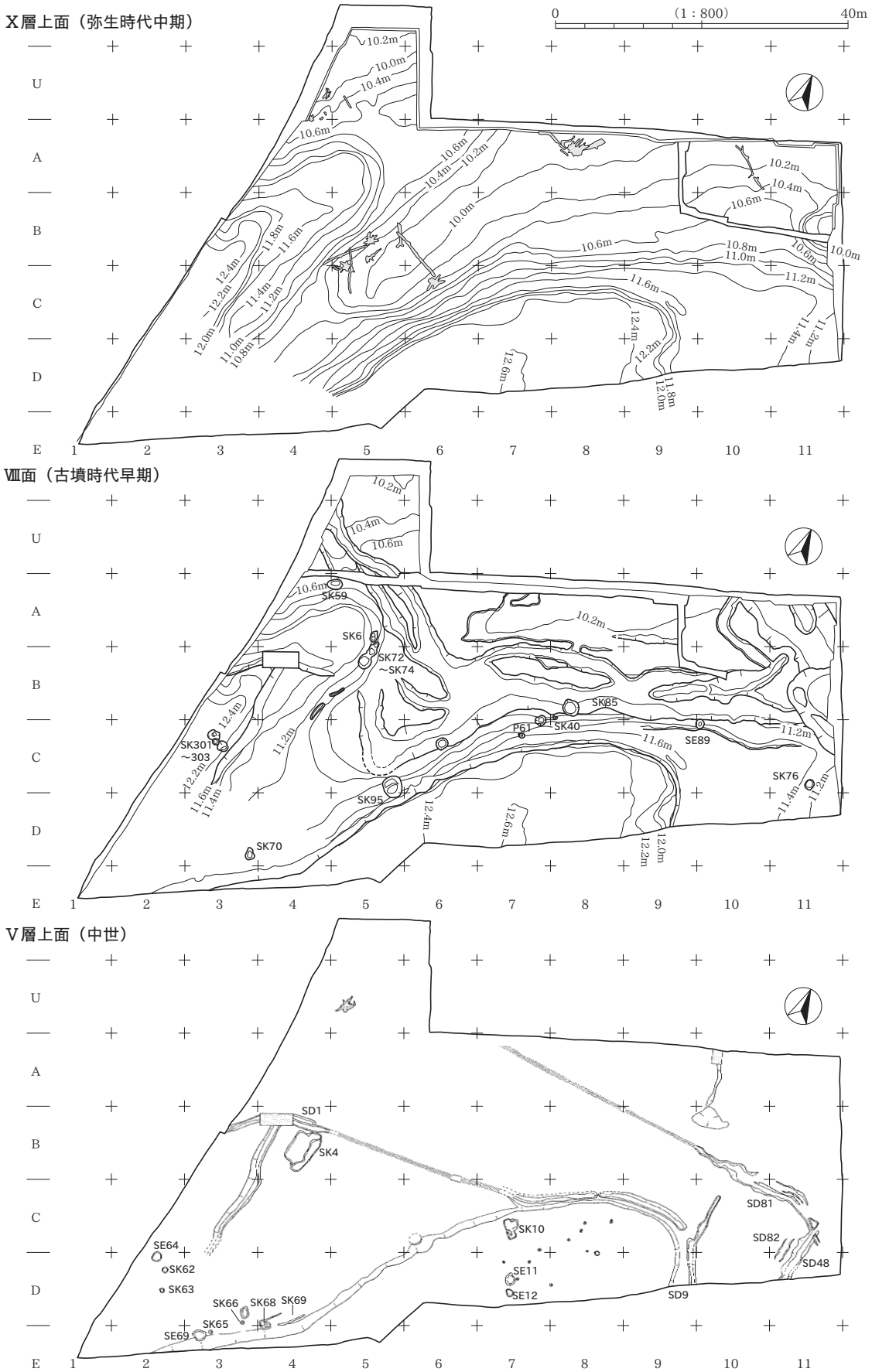
大武遺跡									奈良崎遺跡	
時期区分	時代		層位	遺構・土層の特徴など	主な遺物	自然科学的分析の評価（註１）	大武遺跡の性格など	遺跡盛衰のイメージ	遺跡盛衰のイメージ	動向
Ⅵb期	中世	後期	Ⅲb層	井戸・土坑（高地） 水田跡・溝（低地）	青磁・白磁・大窯・瀬戸焼・美濃焼・珠洲焼・漆器・木製品（容器類・下駄など）	水田が拡大する。	山城（奈良崎遺跡東側丘陵）に近接した集落で、奈良崎遺跡の西側を墓地として利用していた可能性がある。集落の中心は「大武畑」に存在た可能性が高い。低地部を水田として利用していた。	●	●	南北朝の騒乱を契機として東側丘陵に山城が築かれる。丘陵西側は土坑墓・塚が作られる。
			Ⅳa層					●		
Ⅵa期		前期	Ⅳb層				「大武畑」に集落の中心があり奈良崎遺跡東側丘陵を墓地として利用した可能性がある。低地部は水田。		●	丘陵東側を中心に地下式坑が作られる。
Ⅴ期	古代		Ⅴ層	明確な遺構無し 土層の乱れ（踏み抜き痕・耕作痕）あり	須恵器・土師器（古代Ⅳ～Ⅵ期）・木製品（曲物・円形板・下駄・浮子など）	周囲に水田が存在した可能性が高い。 草本（花粉）が増加する。 ハンノキの湿地林が増加する。	低地部を水田として利用する小規模な集落が「大武畑」に存在した可能性が高い。	●	●	竪穴建物（古代Ⅴ期）が作られる、小規模な集落。
			Ⅵa層							
Ⅳc期	古墳時代	後期	Ⅵb層	河道 土層の乱れ（踏み抜き痕・耕作痕）あり	土師器・須恵器（４様式Ⅱ期）・滑石製模造品・木製品（槽・鍬先・部材など）			●	●	ピット・土坑など作られる。土師器・須恵器（古墳４様式）・滑石製模造品出土。小規模な集落。
			Ⅵc層							
Ⅳb期		中～早期	Ⅶ層	土坑・井戸（高地） 水田・溝・河道（低地）	土器（滝沢５期～古墳３様式）・ガラス玉・木製品（剣把・盾・弓などの武器、鍬先・鋤・縦杵・大足等の農具、高杯・桶等の容器類、櫂・斧柄など）		武器や各種農具・精製容器類を持ち、奈良崎１・２号墳、３号周溝墓の造営主体となるような拠点的な集落が「大武畑」に存在した可能性が高い。低地部は水田。	●	丘陵上 ● 丘陵裾 ●	奈良崎１・２号墳が築かれる（滝沢９～11期）。丘陵裾部に大武遺跡から続く集落が営まれる。
			Ⅷa層							
			Ⅷb層	遺構無し						
Ⅳa期	弥生時代	後期	⑥層		弥生土器（滝沢１期新～２期古）		土器は一定量確認できるが、遺構は確認できない。滝沢２期新～３期の遺物が特に少ない。	●	●	尾根上に竪穴建物が作られる（広義の高地性集落、滝沢２期中心）。 奈良崎１・２号周溝墓が築かれる（１期古～２期新）。
Ⅲ期		中期	Ⅸa～c層	遺構無し	土器（小松式・新諏訪町Ⅲ・栗林Ⅰ・同Ⅱ・川原町口式）・石器（石鏃・大陸系磨製石器類・緑色凝灰岩製管玉製作資料・ヒスイ製勾玉製作資料など）		遺構は確認できなかったが遺物が大量に出土した。近隣の「大武畑」などに大陸系磨製石器類を一定量保有し、玉作りを行う拠点的な集落が存在した可能性が高い。	●	●	遺構は確認できないが遺物が定量出土する。
					土器（南御山Ⅱ式平行）など		小規模集落が近隣に存在した可能性が高い。	–	–	遺構が確認できず遺物が散発的に出土する。 上限は小熊編年新段階１期頃か
		前期	Ⅹ層	遺構無し、洪水堆積層？	遺物希薄	海水域に生息する珪藻化石検出	–			
Ⅱ期	縄文時代	晩期	ⅪⅠa・b層	遺構無し	土器（大洞C1式）、籃胎漆器など	トチノキとハンノキの湿地林が拡大する。 ナラ林が分布する。 周辺の森林にはカシ・スギが安定して分布する。 カヤツリグサ科・イネ科・ゴキツルなどの草本花粉が増加する。	優品を保有する小規模集落が「大武畑」に存在した可能性が高い。	●	●	
			ⅪⅡa層					●		
			ⅪⅡb層					●		
			ⅪⅢa層		土器（大洞B～BC式）、漆塗腕輪			●		
		後期	ⅪⅢb層		土器（瘤付土器）など・琥珀			●		
			ⅪⅢc層		遺物希薄		小規模集落が「大武畑」に存在した可能性が高い。	●		
			ⅪⅢd層		土器希薄、組み合わせ式斧柄			●		
			ⅪⅢe層		土器（加曽利B式）・脚付盤	クリ林とナラ林が主に分布し、ハンノキ・トチノキ・トネリコの湿地林が沢沿いなどに分布する。 周辺の森林にはブナ属が安定して分布する。		●		
		中期	ⅪⅣ層	遺構無し、洪水堆積層？	ⅪⅤc層由来の遺物多く含む		–	–		
			ⅪⅤa層	土坑２	土器（大木9a式）		谷を水場として利用する小規模集落が「大武畑」に存在した可能性が高い。	●		
		前期	ⅪⅤb層	遺構無し、洪水堆積層？	ⅪⅤc層由来の遺物多く含む		–	–		
			ⅪⅤc層	土坑２	土器（前期後半から中期前葉）	クリ林が主に分布する。	キャンプ地が近隣に存在した可能性がある。	●		
Ⅰ期			ⅪⅤd層		土器（布目式・新谷式）、土鈴、漆焼付土器、石器（石鏃・石槍・石錐・石匙・磨製石斧・磨製石斧未成品・石錘・磨石類・石皿・台石・砥石・玦状耳飾・滑石製玉類）、漆紐		優品を一定量保有し、谷を水場として使用する大規模な拠点的集落が、「大武畑」に存座した可能性が高い。	●	–	遺物・遺構無し
0期		早期	ⅪⅤe～g層	遺構無し	遺物なし		–	–		

第27表　大武遺跡の動向

註１　古環境研究所 2000



第 59 図　A ～ G 区の変遷（1）



第 60 図　A ～ G 区の変遷（2）

要　　約

1　大武遺跡は、国道116号和島バイパスの建設に伴い、1994年度から1997年度（平成6年～平成9年度）の4年間発掘調査を実施した。

2　大武遺跡は長岡市島崎字大武1910ほかに所在する。遺跡は丘陵裾付近の沖積地に所在し、旧状は水田であった。

3　調査の結果、縄文時代前期以前に開析された埋没谷が検出され、縄文時代前期前葉から中世の遺物が層位的に出土した。本報告書はこのうち縄文時代前期前葉から古代の遺構・遺物を報告した。中世の遺構・遺物については2000年に報告している。

4　遺物は縄文時代前期前葉、縄文時代前期後葉～後期初頭、縄文時代後期中葉～晩期中葉、弥生時代中期、弥生時代後期～古墳時代後期、古代（8・9世紀）、中世（13世紀～16世紀）の遺物が出土した。このうち縄文時代前期前葉、弥生時代中期、古墳時代早期～前期の遺物が特に多く出土した。

5　遺構は、縄文時代前期の土坑2基、縄文時代中期の土坑2基、弥生時代後期～古墳時代後期の井戸1基・土坑12基・水田跡・溝・河道、古代の木製品集中地点1箇所を検出した。

6　縄文時代前期前葉の土器については、既存の編年を参考に、出土地点を基に3時期の変遷案を示した。

7　弥生時代中期～古墳時代後期の主要土器群について編年的位置を検討した。

8　石器・石製品の出土点数は17,000点以上におよぶ。縄文時代前期前葉では「松原型」石匙が特徴的であり、成品として東北地方から搬入されたものであることから、東北地方と強い結びつきがうかがえる。また糸魚川産の蛇紋岩を使用して磨製石斧の生産も行われていた。

9　弥生時代中期では緑色凝灰岩製管玉とヒスイ製勾玉の生産が盛んであったことがうかがえる。特にヒスイの出土総重量は17kg超であり、全国でも最多と考えられる。

10　木製品も多数出土したが、希少なものが各時代で認められる。縄文時代後～晩期では、添え木式固定の石斧柄・脚付盤、古墳時代前期では高杯や剣把・盾が挙げられる。

11　縄文時代後期中葉の琥珀原石については、理化学的分析の結果岐阜県瑞浪産であることが明らかとなった。

12　漆製品では縄文時代前期前葉の層から漆紐が出土した。約6,600年前という全国的にも古い貴重なものであり、非常に高い技術がうかがえる資料として特筆される。そのほか、縄文時代後～晩期の層から籃胎漆器・漆塗腕輪が1点ずつ出土している。

13　建物跡は検出されなかったが、調査区南西に位置する大武畑に、各時代の居住域が存在した可能性が高い。

引用・参考文献

相田泰臣　2004　「越後における古墳時代後期を中心とした土器の一様相　－頸城・魚沼地域の土師器を中心として－」『新潟考古』第 15 号　新潟県考古学会

赤塩　仁　2008　「十三菩提式土器」『総覧 縄文土器』小林達雄編　アム・プロモーション

赤堀英三　1929　「石器研究の一方法　－石鏃に関する二, 三の試み－」『人類學雑誌』第 44 巻 3 号　東京人類學會

秋田かな子　2008　「加曽利 B 式土器」『総覧 縄文土器』小林達雄編　アム・プロモーション

浅野良治　2003　「日本海沿岸における翡翠製勾玉の生産と流通」『蜃気楼』 六一書房

石原正敏・寺﨑裕助　1999　「第 2 章 縄文時代 第 2 節 縄文土器 第 3 項 前期」『新潟県の考古学』 高志書院

出雲崎町　1988　『出雲崎町史』資料編 1 原始・古代・中世・近世 I

伊東隆夫・山田昌久編　2012　『木の考古学 －出土木製品用材データベース』 海青社

小熊博史　1994　「布目遺跡」『巻町史』資料編 1 考古　巻町

小熊博史　2003　「新潟県荒沢遺跡出土の赤色顔料とその利用形態」『旧石器考古学』64　旧石器文化談話会

小熊博史　2008　「布目式・新谷式」『総覧 縄文土器』小林達雄編　アム・プロモーション

小田由美子　2006　『越巻 4 号塚　谷地製鉄跡　大慶寺御経塚』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 158 集　新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

小都　隆　1976　「広島県国司池の内遺跡出土の鉄剣」『考古學雑誌』第 62 巻 3 号　日本考古學會

小野　昭・小熊博史　1987　「巻町布目遺跡の調査」『巻町史研究』 巻町

春日真実　1999　「第 4 章 古代 第 2 節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会

春日真実　2005　「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について」『新潟考古』16　新潟県考古学会

春日真実ほか　2000　『大武遺跡 I （中世編）』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 97 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実ほか　2001　『梯子谷窯跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 104 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実ほか　2002　『奈良崎遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 116 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学　2003　「縄文時代の琥珀玉　－製作過程と原産地推定の問題－」『新潟考古学談話会会報』第 27 号　新潟考古学談話会

加藤　学ほか　2006　『大角地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 173 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学　2009a　「北陸地方における縄文時代早期末葉～前期前葉の玦状耳飾　－新潟県糸魚川市大角地遺跡の分析から－」『日々の考古学 2』東海大学文学部考古学研究室編　六一書房

加藤　学　2009b　「新潟県大角地遺跡における縄文時代早期末葉～前期前葉の玦状耳飾　－製作過程の復原を中心に－」『玦状耳飾（玦飾）の製作技術からみた玉文化交流』 日本玉文化研究会長野大会実行委員会

加藤　学　2009c　「第Ⅴ章 2 石器・石製品」『野地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 196 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学　2010　「新潟県における玦状耳飾」『玉文化』第 7 号　日本玉文化研究会

川崎　保　2004　「玦状耳飾」『季刊考古学』第 89 号　雄山閣

河村好充　2010　『倭の玉器 －玉つくりと倭国の時代－』 青木書店

北野博司　1988　「重ね焼の観察」『辰口西部遺跡群 I』 石川県立埋蔵文化財センター

久住猛雄　2012　『那珂 60 －那珂遺跡群第 125 次の調査－』 福岡市埋蔵文化財調査報告第 1155 集　福岡市教育委員会

小池義人ほか 2000 『裏山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 96 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

小林圭一　2008a 「大洞 BC 式に固有の「入組三叉文高坏」について」『研究紀要』第 5 号　山形県埋蔵文化財センター

小林圭一　2008b 「瘤付土器」『総覧　縄文土器』小林達雄編　アム・プロモーション

古環境研究所　2000 「2 大武遺跡におけるプラントオパール分析」「3 大武遺跡における珪藻分析」「4 大武遺跡における花粉分析」『大武遺跡Ⅰ（中世編）』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 97 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

齋藤基生　1979 「第 5 章　遺物　3 石製品」「第 6 章　総括　3 玉作の工具／4 玉作の手順」『下谷地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 19 集　新潟県教育委員会

笹澤正史　2006 「第Ⅵ章 4 節　土器・石器・特殊遺物について」『吹上遺跡』 新潟県上越地域振興局・上越市教育委員会

笹澤正史　2012 「下谷内遺跡の集落構造について」『新潟考古』第 23 号　新潟県考古学会

笹沢　浩　1996 「新諏訪町式」・「栗林式土器」『日本土器辞典』大川　清・鈴木公雄・工楽善通編　雄山閣出版株式会社

佐原　真　1964 「第四章　石器・土製品・骨角貝製品・鉄製品　第 1 節　石器」『紫雲出』 詫間町文化財保護委員会

縄文セミナーの会　1994 『早期終末・前期初頭の諸問題』

縄文セミナーの会　2006 『前期前葉の再検討』

鈴木俊成　1992 「縄文時代の石鏃について」『新潟考古』第 3 号　新潟県考古学会

鈴木俊成　1996 「第Ⅳ章 2C　石器」『清水上遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 72 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

鈴木俊成　1998 「新潟県の蛇紋岩製磨製石斧について　－縄文時代前半期の生産遺跡と消費遺跡を中心に－」『研究紀要』第 2 号　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

鈴木俊成　1999 「第 2 章　縄文時代　第 5 節第 2 項　早期から晩期の石器組成」『新潟県の考古学』 高志書院

鈴木三男　2012 「Ⅲ 日本列島の森林植生と木材利用　8 章　出土木製品利用樹種の時代的変遷」『木の考古学　－出土木製品データベース』 海青社

関根愼二　2008 「諸磯式土器」『総覧　縄文土器』小林達雄編　アム・プロモーション

高橋　保ほか 1979 『下谷地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 19　新潟県教育委員会

高橋　保ほか 2008 『寺前遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 189 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

高橋保雄　1992 「第Ⅳ章 4B 石器類 ／ 6C 石器について」『五丁歩遺跡・十二木遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 57 集　新潟県教育委員会

高橋保雄ほか 2002 「第Ⅴ章 5 石器・石製品」『元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XIV　新潟県朝日村教育委員会・新潟県

高橋保雄ほか 2005 『北野遺跡Ⅱ（上層）』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 141 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

滝沢規朗　2005 「土器の分類と年代」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第 1 分冊（発表要旨・紙上発表） 新潟県考古学会

滝沢規朗　2011 「阿賀北における古墳時代前期の土器について（上）－器種分類と基準資料の提示－」『三面川流域の考古学』第 9 号　奥三面を考える会

滝沢規朗　2012 「阿賀北における古墳時代前期の土器について（下）－細別器種分毎の変遷について－」『三面川流域の考古学』第 10 号　奥三面を考える会

田嶋明人　1996 「北陸の 6 世紀～ 7 世紀初頭の土器（第 4 様式）」『日本土器辞典』大川　清・鈴木公雄・工楽善通　雄山閣

田辺昭三　1981 『須恵器大成』角川書店

谷藤保彦　1988　「二ツ木式土器」『群馬県の考古学』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
谷藤保彦　2004　「中国の璜と列島の装身具」『環日本海の玉文化の始源と展開』 敬和学園大学人文科学研究科
田中和之　2008　「羽状縄文系土器」『総覧　縄文土器』小林達雄編　アム・プロモーション
田中　靖　1995　『門新遺跡』和島村文化財調査報告書第４集　和島村教育委員会
田中　靖　2003　『北野丸山遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第 15 集　和島村教育委員会
田中　靖　2005　『八幡林遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第 16 集　和島村教育委員会
田中　靖・丸山一昭　1999　「第３章 第２節 土器 第２項 弥生中期後半」『新潟県の考古学』 高志書院
寺﨑裕助　1999　「新潟県における縄文時代前期の土器 －その標識資料と編年－」『縄文土器論集』 縄文セミナーの会
寺﨑裕助・高橋　保　1999　「第２章 縄文時代 第２節 縄文土器 第４項２ 編年と地域性」『新潟県の考古学』 高志書院
寺泊町　1991　『寺泊町史』資料編１　原始・古代・中世
寺村光晴ほか　1999　『土手上遺跡』 寺泊町教育委員会
田海義正　2000　「第Ⅴ章２石器」『平田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 98 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
土橋由理子ほか　2009　『西郷遺跡・大蔵遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 200 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
冨山正明　1988　『下屋敷遺跡 堀江十楽遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第 14 集　福井県教育庁埋蔵文化財センター
長家　伸・榎本義嗣ほか　1999　『那珂 22　－那珂遺跡群第 62・63 次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告第 597 集　福岡市教育委員会
豊島直博　2005　『弥生時代の鉄製刀剣』 2002 年度～ 2004 年度科学研究費補助金（若手 B）研究成果報告書『弥生・古墳時代における鉄製武器の生産と流通に関する研究』（課題番号 14710287）　独立行政法人奈良文化財研究所
奈良国立文化財研究所　1985　『木器集成図録　近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊
奈良国立文化財研究所　1993　『木器集成図録　近畿原始篇』奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊
樋上　昇　2004　「集落・居館・都市的遺跡と生活用具 －中部」『考古資料大観』10　小学館
樋上　昇　2012　「Ⅵ 木工技術と木材・製品の流通 31 章 木製品の流通と社会階層」『木の考古学 －出土木製品データベース』 海青社
秦　昭繁　1977　『松原』 置賜考古学会
秦　昭繁　1991　「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙 －松原型石匙の分布と製作時期」『考古学雑誌』第 76 巻第４号　日本考古学会
馬場伸一郎　2006　「第Ⅵ章第１節 吹上遺跡の玉作りについて」『吹上遺跡』 新潟県上越地域振興局・上越市教育委員会
久田正弘　2012　「Ⅴ 遺跡出土木製品の種類と地域性 17 章 中部日本海側」『木の考古学 －出土木製品データベース』 海青社
廣瀬時習　2006　「弥生時代玉類の地域性」『季刊考古学』第 94 号　雄山閣
福海貴子　2003　「第Ⅵ章 第１節 八日市地方遺跡出土土器の検討」『八日市地方遺跡Ⅰ』 石川県小松市教育委員会
藤沢良祐　2002　「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要』
藤田　剛・長谷川　正　1996　「和島村の地質」『和島村史』資料編Ⅰ　自然・原始古代・中世・文化財
藤田富士夫　1971　「耳栓の起源について」『信濃』23-4　信濃史学会
藤田富士夫　1983a　「玦状耳飾」『縄文文化の研究７ 道具と技術』雄山閣
藤田富士夫　1983b　「玦状耳飾の変遷に関する一試論 －特に北陸及びその周辺地域を中心として－」『北陸の考古学 石川県考古学研究会会誌』第 26 号　石川県考古学会

分水町　2004　『分水町史』資料編Ⅰ　考古・古代・中世
前山精明　1994　「新谷遺跡」『巻町史』資料編１　考古　巻町
松尾　宏ほか 1998　『頓田高見遺跡Ⅲ　栗山遺跡Ⅳ』甘木市文化財調査報告書第 44 集　福岡県甘木市教育委員会
水澤幸一　2005　「越後の中世土器」『新潟考古』第 16 号　新潟県考古学会
水澤幸一ほか 2003　『二軒茶屋遺跡』中条町文化財調査報告書第 27 集　中条町教育委員会
丸山一昭　1998　『松ノ脇遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第 6 集　和島村教育委員会
丸山一昭　2001　『奈良崎遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第 10 集　和島村教育委員会
丸山一昭　2002　『奈良崎遺跡Ⅱ』和島村埋蔵文化財調査報告書第 11 集　和島村教育委員会
丸山一昭　2003　『妙満寺遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第 13 集　和島村教育委員会
丸山一昭　2005　『門新遺跡　谷内地区Ⅱ』和島村埋蔵文化財調査報告書第 17 集　和島村教育委員会
丸山一昭　2013　「浦反甫東遺跡の調査」『新潟県考古学会第 25 回大会　研究発表会発表要旨』　新潟県考古学会
丸山一昭ほか 2007　『山田郷内遺跡』　長岡市教育委員会
宮田　明　2003　「第Ⅳ章第 2 節　八日市地方遺跡における管玉製作の技法的特徴」『八日市地方遺跡Ⅰ』（第 1 分冊　本文・写真図版編）　石川県小松市教育委員会
宮田　明　2003　「第Ⅲ章　石器 ／第Ⅳ章　石製品 ／第Ⅵ章　玉類」『八日市地方遺跡Ⅰ』（第 2 分冊　遺物報告編）　石川県小松市教育委員会
森　幸彦　2008　「大木 9・10 式土器」『総覧　縄文土器』小林達雄編　アム・プロモーション
八重樫由美子　2004　『新潟県寺泊町屋敷塚遺跡発掘調査報告書』　寺泊町教育委員会
山内幹夫　2008　「繊維土器」『総覧　縄文土器』小林達雄編　アム・プロモーション
山賀和也　2012　『川東遺跡』　長岡市教育委員会
山本信夫　2000　『大宰府条坊跡XV　－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第 49 集　福岡県太宰府市教育委員会
与板町　1999　『与板町史』通史編　上巻　自然・原始古代・中世・近世
和島村　1996　『和島村史』資料編Ⅰ　自然・原始古代・中世・文化財
和島村　1997　『和島村史』通史編
渡邊尚紀　2000　「大武遺跡周辺の開発」『大武遺跡Ⅰ（中世編）』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 97 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
渡邊朋和　1999　「第 2 章　縄文時代　第 2 節　縄文土器　第 6 項　晩期　前葉・中葉」『新潟県の考古学』　高志書院
渡邊裕之　1999a　「第 2 章　縄文時代　第 2 節　縄文土器　第 5 項　後期　中葉・後葉」『新潟県の考古学』　高志書院
渡邊裕之　1999b　「第 3 章　弥生時代・古墳時代　第 2 節　土器　第 1 項　弥生前期・中期前葉」『新潟県の考古学』　高志書院
渡邊裕之・坂上有紀ほか　2010　『立野大谷製鉄遺跡　姥ヶ入製鉄遺跡　姥ヶ入南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 208 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

土器観察表　凡　例

縄文時代前期土器観察表

分　類：第 11 図の分類に一致する。

口縁端部：内反り・方形・丸の 3 種に便宜的に区分した。ただし、区分が困難なものも一定量存在する。

地文－種類：羽状縄文（結束部強調）・同（片翼状）は小野・小熊 1987 の分類に一致する。

口縁施文－口唇：口唇部に文様があるものを○、無いものを×とした。

口縁施文－方向：複数列の爪形があるものについて、矢羽・「丁」字状・同一・交互の 4 種に分けて記入した。ただし、矢羽と「丁」字状の区別が難しいものが一定量存在する。また、爪形列が 1 列であっても横位の爪形列を行うものは「横位」と記入した。

胴部区画－方向：口縁施文－方向に同じ。

内　面：内面の調整時期（素地の乾燥具合）を知る上で重要と考え、擦痕・平滑・ミガキの 3 種に区分した。平滑とミガキは区分が難しいものがある。遺存状態の悪い土器のミガキを平滑と記載したものも一定量存在する可能性が高い。

胎　土：混入物を主に記載した。繊：繊維、英：石英、長：長石、雲：雲母、白：白色小粒、黒：黒色小粒、灰：灰色小粒、赤：赤色小粒、褐：褐色小粒を略したものである。黒・灰はチャートもしくは硬質の砂岩、赤は赤色のチャートが大半を占めると考えている。褐には焼土粒を一定量含む可能性がある。白は風化した軟質のものが大半であるが、長石・石英が風化したものが相当量存在すると推測している。

色　調：農林水産省農林水産化学会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版　標準土色帳』に拠り、煤や黒斑の無い所の色調を記載した。

縄文時代中期土器観察表

胎土・色調：縄文時代前期土器観察表に同じ。

縄文時代後期～晩期土器観察表

分　類：第 13 図の分類に一致する。

内面・胎土・色調：縄文時代前期土器観察表に同じ。

弥生時代中期土器観察表

器形－器種：第 14 図の分類に一致する

大きさ（mm）－最大：体部の最大径を記載した。

調　整：内面・外面の主要な調整を記載した。口：口縁部、体：体部、外：外面、内：内面、上：上部、下：下部をそれぞれ略したものである。

文様－施文具：文様を施す工具を記載した。櫛：櫛(歯)状工具、篦：篦状工具、棒：棒状工具をそれぞれ略したもの。篦は棒に比べ幅が狭いものを指す。

文様－外面：口縁端部の施文は外面に含めた。

色調・胎土：縄文時代前期土器観察表に同じ。

弥生時代後期～古墳時代土器観察表

器　種：第 15・16 図の分類に一致する。

大きさ（mm）－最大径：体部の最大径を記載した。

調　整：内面・外面の主要な調整を記載した。口縁：口縁部、体：体部、杯：杯部、受：受部、外：外面、内：内面、上：上部、下：下部をそれぞれ略したものである。体部は縄文土器の胴部と同義。

色調・胎土：縄文時代前期土器観察表に同じ。

古代土器観察表

調　整：内面・外面の主要な調整を記載した。口：口縁部、体：体部、底：底部、外：外面、内：内面、上：上部、下：下部をそれぞれ略したものである。文様がある場合もここに記入した。

胎　土：土師器の胎土は縄文土器観察表に同じ。須恵器の胎土は以下のとおり。

A　群：石英・長石・雲母など花崗岩起源の大型の鉱物を多く含む粗い胎土。阿賀北地域の須恵器窯の主体的な胎土。

B　群：軟質の白色小粒子を定量含む胎土。きめ細かい B1 と、砂質の強い B2 の 2 種がある。後述の有台杯Ⅲ 3・無台杯には B1、その他の器種には B2 が主に用いられる。佐渡市（旧佐渡郡羽茂町）小泊窯跡など佐渡市南西部の須恵器窯の胎土。

C1 群：小型の石英・長石を少量含む比較的精良で粘土質の強い胎土。

C2 群：上越地域では高田平野東側の末野・日向窯跡群で主体的な胎土。他地域では新潟市東部の新津（丘陵）窯跡群、長岡市東部の東山（丘陵）窯跡群でも主体的な態度である。阿賀北の須恵器窯の一部にも見られる胎土。

C3 群：長岡市西部の旧和島村から三島郡郡出雲崎町にかけて分布する西古志窯跡群や渋海川流域に点在する須恵器窯に主体的にみられる。

D　群：その他

色　調：縄文土器観察表に同じ。

備　考：杯蓋の重ね焼きの分類は北野 1988 に一致。

縄文時代前期土器観察表（1）

報告番号	分類	グリッド	層位	口縁端部	法量（mm）			文様帯		地文		口縁施文			胴部区画			内面	底部形態	底部文様	胎土	色調	備考
					口径	器高	底径	文様	施文具	種類	原体	文様	口唇	方向	形状	文様	方向						
1	深鉢Ⅱ2D類	6B17・18一括	XV	内反り	286			矢羽状爪形蕨手状文	隆帯・爪形	結束羽状縄文(片翼状)	R+L	爪形1列	×	−	凸帯	爪形3列	矢羽	ミガキ	−		繊, 雲, 長, 白	10YR7/2にぶい黄橙	
2	深鉢Ⅰ2D類	6B17・18一括	XV	内反り	290			波状沈線文	半截竹管	非結節羽状縄文	RL+LR	凸帯・爪形3列	×	矢羽	凸帯4条	爪形8列	矢羽	平滑	−		繊, 雲・長・白	10YR5/4にぶい黄褐	
3	深鉢	6B17・18一括、6B22一括	XV	−			70			非結束羽状縄文、刺突	RL+LR	不明	−	−	不明	−	−	平滑	平底	爪形（渦巻き）	繊, 雲, 長, 白	10YR6/4にぶい黄橙	0段多条
4	深鉢Ⅰ1A類	6B17・18一括	XV	内反り	278			−	−	斜縄文	RL	無し	×	−	無し	−	−	擦痕	−		繊, 雲, 白	7.5YR6/4にぶい橙	補修孔
5	深鉢Ⅰ1C類	6B9, 6B17・18一括	XV	内反り	362			−	−	結節回転文	L	爪形1列	×	−	平坦	爪形3列	横位	擦痕	−		繊, 雲, 白	10YR6/3にぶい黄橙	
6	深鉢Ⅰ2C類	6B13・14一括、6B14・17一括、6B17・18一括	XV	内反り	388			−	−	結束斜縄文	LR+LR	爪形2列	○	同一	凸帯	爪形1列	横位	擦痕、一部ミガキ	−		繊, 雲, 白	10YR7/3にぶい黄橙	
7	深鉢Ⅰ2C類	6B17・18	XVb	内反り	210			−	−	結節回転文	L	爪形3列	○	矢羽	凸帯	爪形3列	矢羽	平滑	−		繊, 雲, 赤	10YR7/3にぶい黄橙	
8	深鉢?	6B17・18一括	XV	−			42	−	−	矢羽状爪形	爪形	不明	−	−	不明	−	−	平滑	平底	爪形（外周のみ）	繊, 雲, 白	10YR5/4にぶい黄褐	
9	深鉢?	6B17・18一括	XV	−			−	−	−	螺旋状爪形	爪形	不明	−	−	不明	−	−	平滑	丸底	爪形（螺旋状）	繊, 雲, 白, 赤	10YR6/4にぶい黄橙	
10	深鉢Ⅰ1B類	6B17・18一括	XV	内反り	248			−	−	結束斜縄文	RL+RL	爪形1列	×	−	無し	−	−	擦痕	−		繊, 雲, 白	10YR5/2灰黄褐	補修孔
11	深鉢Ⅱ1B類	6B13, 6B17・18一括	XV	内反り	272			−	−	羽状縄文（結束部強調）	RL+LR	爪形2列	○	矢羽	無し	−	−	擦痕、一部平滑	−		繊, 白, 雲	10YR6/3にぶい黄橙	
12	深鉢Ⅱ2E類	6B14一括, 6B14・19一括, 6B17・18一括、6B17	XV XVb	方形	373			「S」字状文	半截竹管、爪形	羽状縄文（片翼状）	R+L	爪形2列	×	同一	凸帯	爪形3列	同一	平滑	−		繊, 雲, 白	7.5YR5/2灰褐	
13	深鉢Ⅱ2C類	6B18	XV	方形	301			−	−	結節回転文	L	爪形2列	○	矢羽	凸帯	爪形1列	横位	擦痕	−		繊, 雲, 長, 白	7.5YR6/3にぶい褐	
14	深鉢Ⅱ2C類	6B14・19一括、6B13・20・22	XV	内反り	360			−	−	羽状縄文（結束部強調）	RL+LR	爪形3列	○	矢羽	凸帯	爪形3列	矢羽	擦痕	−		繊, 雲, 英, 白	10YR5/3にぶい黄褐	補修孔
15	深鉢Ⅰ1B類	6B14一括, 6B14.19一括	XV	内反り	317	366	−	−	−	結節回転文	L	爪形2列	○	同一	無し	−	−	擦痕	尖底	爪形（螺旋状）	繊, 雲, 白	10YR8/3浅黄橙	
16	深鉢Ⅰ2C類	6B14・19一括	XV	内反り	244			−	−	結節回転文L・斜縄文	RL+LR	爪形2列	○	矢羽	段差	爪形1列	横位	擦痕	−		繊, 雲, 白	10YR7/1灰白	
17	深鉢Ⅰ2D類	6B14一括, 6B14・19一括	XV	方形	244			無文帯	−	羽状縄文（結束部強調）	R+L	爪形1列	×	−	凸帯	爪形2列	同一	平滑	−		繊, 雲, 白	10YR4/1褐灰	補修孔
18	深鉢Ⅰ2C類	6B14, 6B14・19一括	XV	内反り	334			−	−	結節回転文	L	爪形1列	×	−	凸帯	爪形2列	「丁」字状	擦痕	−		繊, 雲, 白	10YR6/6名黄褐	口唇付近の爪形列は内面
19	深鉢Ⅰ2C類	6B5・10・15一括、6B9・14一括	XV	方形	330			−	−	結節回転文	深鉢	爪形2列・無文帯	×	同一	平坦	爪形4列・無文帯	矢羽	一部擦痕	−		繊, 雲, 白	10YR6/3にぶい黄橙	
20	深鉢Ⅰ2E類	6B14・19ほか	XV		444			鋸歯状文、円形竹管文、円形浮文	半截竹管・円形竹管	羽状縄文	RL+LR	爪形4列	○	矢羽・同一	凸帯	爪形3段	同一・矢羽	ミガキ	−		繊, 長, 雲, 赤	10YR6/3にぶい黄橙	
21	深鉢ⅠD×F類	6B9・14・19	XV・XVb	方形	124			コンパス文	半截竹管・篦状工具	片翼状	−	刺突2列	×	同一				平滑			繊, 雲, 白, 灰	10YR6/4にぶい黄橙	
22	深鉢?	6B14・19	XV	−			50	−	−	−	−	不明	−	−	不明	−	−	平滑	平底	爪形（外縁）	繊, 白	10YR6/4にぶい黄橙	
23	深鉢Ⅰ1B類	6B5・10・15一括	XV	内反り	230			−	−	斜縄文	LR	爪形1列	×	−	無し	−	−	擦痕	−		繊, 雲, 白	10YR7/3にぶい黄橙	
24	深鉢Ⅰ1B類	6B5・10・15一括	XV	内反り	127	146	−	−	−	矢羽状爪形	爪形	爪形2列	○	同一	無し	−	−	一部擦痕	尖底	爪形（螺旋状）	繊, 雲, 白	10YR7/3にぶい黄橙	
25	深鉢Ⅰ1A類	6B5・10・15一括	XV	内反り	115	110	64	−	−	無文 矢羽状爪形	爪形	無し	×	−	無し	−	−	平滑	平底	不調整	繊, 雲, 白	10YR6/2灰黄褐	
26	深鉢Ⅰ1B類	6B5・10・15一括	XV	方形	216			−	−	斜縄文	RL	爪形1列	○	−	無し	−	−	擦痕	−		繊, 雲, 白	10YR5/4にぶい黄褐	下部原体に比べ上部原体細い。
27	深鉢Ⅰ2C類	6B5・10・15一括	XV	内反り	304			−	−	結節回転文	L	爪形2列	○	矢羽	凸帯	爪形3列	横・矢羽	擦痕	−		繊, 雲, 白	10YR5/4にぶい黄褐	
28	深鉢Ⅰ2C類	6B5・10・15一括	XV	内反り	284			−	−	結節回転文	L	爪形2列	○	矢羽	凸帯	刺突1列	−	擦痕	−		繊, 雲, 長, 白	10YR6/2灰黄褐	
29	深鉢Ⅰ1B類	6B5・10・15一括, 6B9	XV	方形	300			−	−	非結束羽状縄文	RL+LR	爪形2列	×	同一	無し	−	−	平滑	−		繊, 雲, 白	10YR5/3にぶい黄褐	
30	深鉢Ⅱ2C類	6B5	XV	方形	232			−	−	非結束羽状縄文	RL+LR	ヨコナデ・爪形1列	×	−	凸帯	爪形1列	−	一部擦痕	−		繊, 雲, 白	10YR6/2灰黄褐	
31	深鉢Ⅱ2C類	6B5	XV	内反り	388	415	−	−	−	ループ文	LR	爪形2列	○	矢羽	凸帯	爪形1列	−	擦痕	丸底	爪形（螺旋状）	繊, 雲, 長, 白	10YR6/4にぶい黄橙	
32	深鉢Ⅰ2C類	6A25・6B5一括	XV	内反り	352			−	−	羽状縄文（結束部強調）	RL+LR	爪形1列	○	−	凸帯	爪形1列	−	一部擦痕	−		繊, 雲, 白	10YR7/4にぶい黄橙	
33	深鉢	6B5	XV					不明	撚糸側面	非結束羽状縄文	L・R RL+LR	不明	−	−	凸帯	刻み細隆帯	−		−		繊, 雲, 白	10YR6/3にぶい黄橙	
34	深鉢	6B5	XV	−				S字文・鋸歯状文	半截竹管	−	−	不明	−	−	不明	−	−	平滑	−		繊, 雲, 白	10YR4/2灰黄褐	
35	深鉢2E類	6B5、7A18	XV					格子目文・円形浮文	半截竹管	ループ文（非結束羽状）	RL+LR	不明	−	−	凸帯	爪形1列	−	擦痕	−		繊, 雲, 白	7.5YR6/4にぶい橙	
36	浅鉢Ⅰ2C類	6B9一括	XV	方形	376			−	−	非結束羽状縄文	RL+LR	爪形2列	×	矢羽	凸帯	爪形4列	矢羽	平滑	−		繊, 雲, 白	10YR3/2黒褐	
37	深鉢Ⅰ1A類	6B9一括	XV	内反り	358			−	−	結節回転文	L	無し	×	−	無し	−	−	擦痕	−		繊, 雲, 白, 灰, 褐色粒	7.5YR8/4浅黄橙	

縄文時代前期土器観察表（2）

報告番号	分類	グリッド	層位	口縁端部	法量（mm）			文様帯		地文		口縁施文			胴部区画			内面	底部形態	底部文様	胎土	色調	備考
					口径	器高	底径	文様	施文具	種類	原体	文様	口唇	方向	形状	文様	方向						
38	深鉢Ⅱ3C類	6B9一括	XV	内反り	280			－	－	結節回転文	L	爪形３列	○	矢羽	凸帯	爪形３列	矢羽	擦痕	－		繊，雲，白	10YR7/4にぶい黄橙	
39	深鉢Ⅰ1A類	6B13・14一括	XV	内反り	210			－	－	沈線 斜縄文	半截竹管 RL	無し	×	－	無し	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	7.5YR5/2灰褐	
40	深鉢Ⅰ1B類	6B10, 6B13・14一括	XV	方形	168			－	－	結節回転文	L	爪形２列	○	同一	無し	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	10YR6/2灰黄褐	補修孔
41	深鉢Ⅱ2D類	6B18・23一括， 6B18ほか	XV	内反り	254			蕨手状文	撚糸側面（LR）	非結束羽状縄文	RL＋LR（0段多条）	凸帯・爪形３列	×	矢羽	凸帯	爪形２列	矢羽	平滑	平底	爪形（渦巻状?）	繊，雲，長，白，赤	10YR7/4にぶい黄橙	0段多条
42	深鉢Ⅱ類	6B10	XV					－	－	斜縄文（表裏）	RL（表裏とも）	無し	－	－	無し	－	－	縄文	－		繊，雲，白	10YR3/1黒褐	
43	深鉢Ⅰ D×F類	6B15	XV	丸形				蕨手状文・刺切文	撚糸側面（RL）	－	－	爪形１列	×	－	不明	－	－	摩耗	－		繊，白	10YR3/3暗褐	
44	深鉢Ⅰ1D×F類	6B5	XVb	－				蕨手状文	撚糸側面（LR）	非結束羽状縄文	RL＋LR（0段多条）	不明	－	－	無し	－	－	摩耗	－		繊，雲，白	10YR5/3にぶい黄褐	
45	深鉢?	6B13	XV					蕨手状文・刺切文	撚糸側面（RL）	－	－	不明	×					平滑	－		繊，雲，白	10YR5/2灰黄褐	
46	深鉢Ⅰ1A類	6B21	XV	丸形	138			－		格子目	半截竹管	無し	×	－	無し?	－	－	擦痕	－		繊，雲	2.5Y5/2暗灰黄	
47	深鉢?	6B19	XV	－			－	－	－	沈線	半截竹管	不明	－	－	不明	－	－	平滑	丸底	無文?	繊，雲，白，海針	10YR6/4にぶい黄橙	
48	小型土器2F類	6B9	XV					鋸歯状文?	爪形（同一方向）	爪形(交互)	－		－		凸帯2列	刺突２列	－	平滑	－		繊，雲，白，灰	10YR4/2灰黄褐	
49	深鉢Ⅱ4B類	6B10	XV	方形	103			－	－	網目状撚糸文・結節回転文	L 撚糸L	爪形３～４列	○	矢羽	無し	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	10YR5/2灰黄褐	
50	深鉢	6B10	XV	－			60	－	－	爪形(横位)	L	不明	－	－	無し?	－	－	一部擦痕	平底	爪形	繊，雲，白	10YR7/2にぶい黄橙	
51	深鉢Ⅱ2C類	6B21一括	XV	内反り	480			－	－	羽状縄文（結束部強調）	RL＋LR	爪形３列	○	矢羽・同一	凸帯	爪形２列	矢羽	擦痕、一部ミガキ	－		繊，白，灰（チ?）	10YR6/4にぶい黄橙	
52	深鉢Ⅰ2C類	6B22一括	XV	内反り	480			－	－	羽状縄文（片翼状）	RL＋LR	爪形２列	×	矢羽	凸帯	爪形２列	横位＋矢羽	平滑	－		繊，雲	10YR6/4にぶい黄橙	
53	深鉢Ⅲ2C類	6B19一括	XV	内反り	204			－	－	結節回転文	L	爪形２列	×	同一	凸帯	爪形２列	横縦	擦痕	－		繊，雲，白	10YR6/2灰黄褐	
54	深鉢Ⅰ1A類	6B13	XV	内反り	232				－	斜縄文	L	無し	×	－	無し	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	10YR7/4にぶい黄橙	
55	深鉢Ⅱ2C類	6B12	XV	内反り	222				－	羽状縄文（結束部強調）	RL＋LR	押圧１列	×	－	凸帯	爪形２列	矢羽	擦痕	－		繊，雲，白	10YR6/4にぶい黄橙	
56	深鉢Ⅰ1A類	5B24・25、5C7、6B12	XV	内反り	320			－	－	網目状撚糸文（一重）	撚糸R	無し	×	－	無し	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	10YR5/3にぶい黄褐	補修孔
57	深鉢Ⅰ1D×F類	6B16	XV	内反り				蕨手状文	半截竹管・円形竹管・爪形（矢羽状）	－	－	爪形１列	×	－	不明	－	－	平滑	－		繊，雲，白	10YR6/4にぶい黄橙	
58	深鉢Ⅰ D×F類	6B18	XV	内反り				蕨手状文	半截竹管・爪形(同一)	－	－	半截竹管＋爪形３列	×	同一	不明	－	－	平滑	－		繊，雲，白，海針	10YR6/3にぶい黄橙	
59	深鉢Ⅰ D×F類	6B9	XV	方形	160			幾何学文	半截竹管・爪形(同一)	－	－	不明	－	－	不明	－	－	平滑	－		繊，雲，白	10YR4/1褐灰	
60	深鉢Ⅰ D×F類	6B9・21	XV	丸形				連弧文	棒(断面円)	非結束羽状縄文	RL L	爪形２列	○	同一	不明	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	10YR6/2灰黄褐	
61	深鉢Ⅱ D×F類	6B21一括	XV	方形				不明	円形竹管・爪形(同一)	－	－	爪形２列	×	同一	平坦	爪形１列以上	－		－		繊，雲，白	10YR4/1褐灰	
62	深鉢F類	6B12・17・18	XVa・XVb					コンパス文	半截竹管	非結束羽状縄文	RL＋LR		－		無し	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	2.5Y5/4にぶい黄色	0段多条
63	深鉢E×F類	6B6・10	XV	－				波状文	半截竹管	非結束羽状縄文	RL＋LR	不明	－	－	段差	無し	－	擦痕	－		繊，雲，長，白	10YR5/3にぶい黄褐	
64	深鉢2類	6B18	XV	－				－	－	矢羽状爪形列	爪形	不明	－	－	平坦	円形竹管３列	－	擦痕	－		繊，雲，白	10YR6/4にぶい黄橙	
65	深鉢Ⅰ2A類	6B13	XVb	丸形				－	－	矢羽状爪形列	爪形	爪形１列?	○	－	凸帯	爪形２列	矢羽	平滑	－		繊，白	10YR6/3にぶい黄橙	
66	深鉢Ⅱ D×F類	6B18・6C3	XⅢe・XⅢ	内反り				爪形列	爪形（横位）	－	－	爪形２列	×	同一	無し?	－	－	平滑	－		繊，雲，白	10YR5/1褐灰	67と同一個体か
67	深鉢	6B14・18	XV	－				－	－	組紐	L	不明	－	－	平坦	爪形２列	同一		－		繊，白	10YR5/3にぶい黄橙	66と同一個体か
68	深鉢Ⅰ1D類	6B12・13	XV・XVb	方形	139			無文帯	－	－	－	爪形２列	○	同一	凸帯	爪形３列	矢羽	平滑	－		繊，雲，白	7.5YR6/3にぶい褐	
69	深鉢	6B17	XVb	－			－	－	－	螺旋状爪形	爪形	不明	－	－				擦痕	丸底	爪形（螺旋状）	繊，雲，白，灰	10YR6/3にぶい黄橙	
70	深鉢	6B21一括	XV	－			65	爪形（外縁螺旋状２列＋十字（交互））	－	矢羽状爪形列	爪形	不明	－	－	不明	－	－	ミガキ	平底	爪形⊗	繊，雲，白	10YR7/3にぶい黄橙	
71	深鉢?	6B10	XV	－			60	－	－	非結束羽状縄文 同一方向爪形列	RL＋LR・爪形	不明	－	－				平滑	平底	外縁爪形３列	繊，白，海針?	10YR6/2灰黄褐	
72	深鉢Ⅱ3F類	7A22一括	XVd	内反り	328			蕨手状文 鋸歯状文	半截竹管・円形竹管・爪形	非結束羽状縄文	RL＋LR	爪形３列	×	交互					－		雲，白	10YR7/2にぶい黄橙	0段多条
73	深鉢Ⅰ2C類	7A21一括	XVd	丸形				－	－	羽状縄文（結束部強調）	R＋L	爪形１列	○	－	凸帯	爪形２列	横・斜め		－				
74	深鉢Ⅰ1A類	7A21一括	XVd	内反り	158			－	－	結節回転文	L	無し	×	－	無し	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	10YR6/4にぶい黄橙	
75	深鉢Ⅰ1A類	7A22	XVd	方形	150			－	－	矢羽状爪形列	爪形	無し	－	－	無し?	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	10YR3/1黒褐	
76	深鉢1c類	6B17・7A22	XⅣ・XVd	－				－	－	非結束羽状縄文	RL＋LR	不明	－	－	平坦	爪形３列・コンパス文	同一	ミガキ・一部擦痕	－		繊，長，雲，白	10YR4/3にぶい黄褐	0段多条
77	深鉢Ⅰ1D×F類	6B5、7A18	XV・XVd	方形				「S」字状文	半截竹管・爪形			爪形２列	×	同一	平坦	爪形２列・コンパス文	同一	ミガキ	－			10YR3/1黒褐	

縄文時代前期土器観察表（3）

報告番号	分類	グリッド	層位	口縁端部	法量（mm）			文様帯		地文		口縁施文			胴部区画			内面	底部形態	底部文様	胎土	色調	備考
					口径	器高	底径	文様	施文具	種類	原体	文様	口唇	方向	形状	文様	方向						
78	深鉢Ⅰ A類	7A21	XVd	方形				－	－	斜縄文	LRL	無し	×	－		－	－	平滑	－		繊，雲，白	7.5YR5/2 灰褐	
79	深鉢Ⅰ類	7A18	XVd	方形				－	－	付加条縄文	RLにLを巻きに絡める	刺突・沈線１条	×	－				擦痕	－		繊，白	10YR4/2 灰黄褐	
80	深鉢Ⅰ類	7A21	XVd	丸形				格子目文	－	沈線	－	爪形２列	×	矢羽				擦痕	－		繊，雲，白	10YR3/3 暗褐	
81	深鉢Ⅳ類	7A21一括	XVd	方形				－	－	非結束羽状縄文	RL＋LR	爪形２列	×	同一	不明	－	－	ミガキ	－		繊，雲，白	10YR5/2 灰黄褐	
82	深鉢？	7A21	XVd	－			40	－	－	爪形(同一)	－	不明	－	－	不明	－	－	平滑	平底	爪形（渦巻状）	繊，雲	10YR4/2 灰黄褐	
83	深鉢Ⅱ 2C類	7B1	XVb ～XV・XV	内反り	302	370	70	－	－	結節回転文 爪形(同一)	L － 爪形	爪形３列	○	矢羽	凸帯	爪形３列	矢羽	擦痕	平底	爪形	雲，白	7.5YR6/4 にぶい橙	
84	深鉢Ⅰ 1A類	6B10、7B1・2一括	XVC1・XV	内反り	232			－	－	結節回転文	RL	無し	×	－	無し	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	10YR6/3 にぶい黄橙	
85	深鉢Ⅱ 2B類	7B1・2一括	XV	内反り	365			－	－	結節回転文	L	爪形２列・刺突１列	○	同一	凸帯	爪形３列	同一・横	擦痕	－		繊，雲，長，白，赤	7.5YR7/4 にぶい橙	補修孔
86	深鉢Ⅰ D×F類	7B1・2一括	XV	丸形				波状文	半截竹管	－	－	爪形２列	○	矢羽	凸帯	爪形３列	矢羽	平滑	－		繊，雲，白	10YR6/3 にぶい黄橙	
87	深鉢Ⅱ 1B類	7B1・2一括	XV	内反り				－	－	網目状撚糸文（二重）	撚糸R・撚糸L	爪形２列	×	矢羽	無し？	－	－	擦痕	－		繊，雲，白，赤	10YR6/3 にぶい黄橙	
88	深鉢 1A類	7B1・2	XV	方形				－	－	沈線？	半截竹管？	無し	×	－	無し？	－	－	平滑	－		繊，雲，白，赤	10YR6/2 灰黄褐	
89	深鉢	7A22・、7B1・2一括	XV	－				－	－	格子目文	半截竹管	不明	－	－	平坦	半截竹管１列	－	擦痕	－		繊，雲，白	7.5YR8/4 浅黄橙	
90	深鉢 2F類	7A22・7B1	XVb ～XV	－				口：不明 胴：鋸歯状文	半截竹管・爪形	斜縄文	RL?	不明	－	－	凸帯	爪形４列	矢羽	ミガキ	－		繊，雲，白	10YR4/2 灰黄褐	
91	深鉢Ⅰ 1A類	7B1・2一括	XV	丸形				－	－	擦痕	－	無し	－	－	無し？	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	10YR7/2 にぶい黄橙	
92	深鉢	6B6、7B1・2一括、7A21、7B6	XV	－				－	－	結節回転文 螺旋状爪形	L 爪形	不明	－	－	不明	－	－	擦痕	丸底	爪形（螺旋状）	繊，雲，白	10YR7/3 にぶい黄橙	
93	深鉢Ⅱ D類	7A13，7B1・2一括	XV	－				連結文？	矢羽状爪形、隆帯	羽状縄文（結束部強調）、結節回転文	RL＋LR L	不明	－	－	凸帯２条	爪形３列	同一・矢羽	平滑	－		繊，雲，長，白	10YR6/4 にぶい黄橙	
94	深鉢Ⅱ 2C類	7B6一括	XV	内反り	250			－	－	ループ文	RL	爪形１列	×	－	凸帯	爪形３列	矢羽・同一	一部擦痕	－		繊，雲，長，白	10YR7/3 にぶい黄橙	補修孔
95	深鉢Ⅰ 3C類	7A19一括	XVb	方形				－	－	羽状縄文（片翼状）	RL	爪形１列			凸帯	爪形１列	－	平滑	－		繊，雲，白	10YR7/3 にぶい黄橙	
96	深鉢Ⅰ 1A類	7A13	XV	内反り	208			－	－	斜縄文	RL	無し	×	－	無し	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	7.5YR7/3 にぶい橙	
97	深鉢Ⅰ 1A類	7B6・8A11	XV	方形	270			－	－	絡条体	撚糸r	無し	－	－	無し？	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	10YR7/2 にぶい黄橙	
98	深鉢Ⅰ 1B類	7A23一括，7B7	XV	方形	154			－	－	斜縄文	RL	爪形２列	○	矢羽	無し	－	－	一部擦痕	－		繊，白	10YR7/2 にぶい黄橙	
99	深鉢Ⅱ 2D類	7A21	XVb	方形	120			無文	－	非結束羽状縄文	RL＋LR	爪形３列	×	矢羽	凸帯	爪形２列	矢羽	擦痕	－		繊，雲，海針，白	10YR7/3 にぶい黄橙	0段多条
100	深鉢Ⅰ 1B類	7A22	XVb ～XV	方形	160			－	－	組紐	L	円形竹管１列	○	－	無し？	－	－	擦痕	－		繊，雲	10YR7/1 灰白	
101	深鉢Ⅰ D×F類	7A23	XV	内反り				蕨手状文	撚糸側面(L)	－	－	なし	×	－	不明	－		擦痕	－		繊，雲，白	10YR4/2 灰黄褐	
102	深鉢Ⅰ D×F類	7A13、7B6	XV	方形				不明	矢羽状爪形、隆帯	結束羽状縄文（結束部強調）	RL＋LR L	突帯＋爪形５列	○	矢羽	不明	－	－	平滑	－		繊，雲，長，白	10YR7/2 にぶい黄橙	
103	深鉢Ⅰ D×F類	7A22	XVb	－				蕨手状文	半截竹管・爪形	矢羽状爪形	爪形	不明	－	－	無し	－	－	摩耗	－		繊，雲，白	10YR6/3 にぶい黄橙	
104	深鉢Ⅱ D×F類	7B1	XV	方形				鋸歯状文・円形竹管文	棒(断面円)・円形竹管	－	－	梯子状沈線	×	－	不明	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	10YR4/2 灰黄褐	
105	深鉢Ⅱ D×F類	7A15	XVb	方形				蕨手文・鋸歯状文	半截竹管・爪形	－	－	半截竹管＋爪形２列	×	同一	平坦	爪形２列以上	同一	平滑	－		繊，雲，白	10YR6/2 灰黄褐	
106	深鉢Ⅰ D×F類	7A22・7B1ほか	XVb・XV・XⅢb	方形				菱形文・円形竹管文	半截竹管・円形竹管	斜縄文？	RL?	沈線・刺突１列	×	－	無し	－	－	擦痕	－		繊，雲，白，黒	10YR7/2 にぶい黄橙	
107	深鉢Ⅱ D×F類	7A20一括	XV	方形				幾何学文	棒(断面円)	－	－	無し	×	－	平坦	爪形	同一	平滑	－		繊，雲，白	10YR5/2 灰黄褐	
108	深鉢	7B1	XVb ～XV	－				円形竹管文・無文	円形竹管	非結束羽状縄文	RL＋LR	不明	－	－	凸帯	爪形	同一	ミガキ	－		繊，雲，白	10YR4/2 灰黄褐	0段多条
109	深鉢 D×F類	7A23	XVb	－				波状文	半截竹管	斜縄文？	RL?	不明	－	－	平坦	半截竹管＋爪形２列	同一	平滑	－		繊，雲，白	10YR3/1 黒褐	
110	深鉢Ⅰ 1A類	7A14	XV	方形				－	－	網目状撚糸文（一重）	撚糸R・撚糸L	爪形１列	○	－	無し？	－	－	擦痕	－		繊，雲	10YR4/1 褐灰	
111	深鉢 D×F類	7A20	XVb	－				網目状撚糸文	網目状撚糸(L)・撚糸側面	斜縄文	R	不明	－	－	凸帯	波状	－	平滑	－		繊，雲，白	10YR4/3 にぶい黄褐	
112	深鉢Ⅰ類	7B2	XVb	方形				－	－	平行沈線・斜縄文	RL	縄文	○	－	不明	－	－	平滑	－		繊，雲，白	10YR7/3 にぶい黄橙	
113	深鉢Ⅰ類	7A22	XVb	方形				－	－	組紐	L	半截竹管	×	－	不明	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	7.5YR4/1 褐灰	
114	深鉢Ⅰ D×F類	7B19	XV	内反り				無文帯？	－	無文？	－	半截竹管＋爪形４列	×	同一	不明	－	－	平滑	－		繊，白，灰	10YR6/3 にぶい黄橙	
115	深鉢Ⅱ類	7A17	XVb	方形				－	－	矢羽状爪形列（縦位）	爪形	無し	×	－	不明	－	－	ミガキ	－		繊，雲，白，黒	10YR7/3 にぶい黄橙	
116	深鉢Ⅰ類	7B1	XV	丸形				－	－	矢羽状爪形（縦位）	爪形	爪形２列	○	矢羽	不明	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	10YR6/3 にぶい黄橙	
117	小型土器	7A23	XVb				30	－	－	矢羽状爪形	爪形	不明	－	－	不明	－	－		平底	沈線（渦巻状）	繊，雲，白，黒	10YR7/2 にぶい黄橙	

縄文時代前期土器観察表（4）

報告番号	分類	グリッド	層位	口縁端部	法量（mm）			文様帯		地文		口縁施文			胴部区画			内面	底部形態	底部文様	胎土	色調	備考
					口径	器高	底径	文様	施文具	種類	原体	文様	口唇	方向	形状	文様	方向						
118	深鉢?	7A15	XV	－			66	－	－	矢羽状爪形列	爪形	不明	－	－	不明	－	－	平滑	平底	爪形（渦巻状）・円形竹管文	繊，雲，長，白，灰	10YR6/4 にぶい黄橙	
119	深鉢Ⅱ 2C類	8A16	XV	内反り	318			－	－	斜縄文	RL	爪形２列	○	矢羽	凸帯	爪形２列	矢羽	擦痕	－		繊，雲，白	10YR7/4 にぶい黄橙	
120	深鉢Ⅱ 2D類	8B15・9B12	XV	内反り				蕨手状文・円形竹管文	爪形（矢羽状）・円形竹管	結節回転文	L	爪形２列	×	矢羽	凸帯	爪形３列	矢羽	一部擦痕	－		繊，雲，白	10YR7/3 にぶい黄橙	
121	深鉢Ⅱ D×F類	8A25	XV	内反り				不明	棒（断面円）	－	－	刺突２列	×	－	平坦	刺突１列以上	－	ミガキ	－		繊，雲，白	10YR6/2 灰黄褐	
122	深鉢Ⅱ D×F類	8A16	XV	方形				蕨手状文・円形竹管文	棒（断面円）・円形竹管	－	－	刺突３列	×	－	不明	－	－	摩耗	－		繊，雲，長，白石粒	10YR7/3 にぶい黄橙	
123	深鉢Ⅱ D×F類	8A10	XV	方形				鋸歯状文、連結文	半截竹管・爪形（同一）	－	－	半截竹管＋爪形４列	×	同一	平坦	半截竹管＋爪形１列以上	－	摩耗	－		繊，雲，長，白	7.5YR7/4 にぶい橙	
124	深鉢 D×F類	8A22	XV	－				幾何学文?・円形竹管文	棒（断面円）・円形竹管	斜縄文?	LR?	不明	－	－	不明	－	－	ミガキ	－		繊，雲，白	10YR4/2 灰黄褐	
125	深鉢F類	7A10、8A19・24	XVb・XV	－				鋸歯状文・連結文・「S」字条文	爪形（同一）・半截竹管	斜縄文?	LR	不明	－	－	凸帯	爪形３列	矢羽	平滑	－		繊，雲，白，灰	10YR7/2 にぶい黄橙	
126	深鉢Ⅰ D×F類	8B13	XV	方形				鋸歯状文?	半截竹管・爪形（同一）	－	－	爪形２列	○	矢羽	不明	－	－	平滑	－		繊，雲，海針，白	10YR6/2 灰黄褐	
127	深鉢	8A25	XV	－				－	－	ループ文	RL	不明	－	－	凸帯	刺突（断面円）1列	－	平滑	－		繊，雲，白	10YR7/4 にぶい黄橙	
128	深鉢	8B8	XV	－			－	－	－	斜縄文、螺旋状爪形列	LR? 爪形							擦痕	尖底	爪形（螺旋状）	繊，白，灰，赤	2.5Y7/2 灰黄	
129	深鉢	8B10	XV	－			90	－	－	羽状縄文（片翼状）矢羽状爪形	RL＋LR 爪形	不明	－	－	不明	－	－	擦痕	平底	爪形（横位・渦巻状）	繊，雲，長，白	7.5YR7/4 にぶい橙	
130	深鉢	8B5・10・15	XV	－				－	－	結節回転文矢羽状爪形	RL＋RL 爪形	不明	－	－	不明	－	－	擦痕	平底	爪形（渦巻状）	繊，雲，長，白	7.5YR7/4 にぶい橙	
131	深鉢?	8A17	XV	－			52	－	－	矢羽状爪形	－	不明	－	－	不明	－	－	平滑	平底	爪形（渦巻状）	繊，長，白，赤	7.5YR6/6 橙	
132	深鉢?	8A20、8B8	XV				60	－	－	矢羽状爪形	－	不明	－	－	不明	－	－		平底	爪形（外縁のみ）	英?，長，雲，赤	10YR6/3 にぶい黄橙	
133	深鉢Ⅰ 2C類	9A15	XV	方	296					羽状縄文（片翼状）	LR	爪形２列	○	矢羽	凸帯	爪形１列	横位	擦痕			繊，雲，白，灰	10YR6/3 にぶい黄橙	
134	深鉢 E×F類	6B17・18一括，9A15ほか	XV					「S」字状文	半截竹管、爪形	結節回転文	L	不明	－	－	平坦	爪形２列	同一	擦痕	－		繊，雲，白	7.5YR7/4 にぶい橙	
135	深鉢Ⅰ 1B類	9A15	XV	方形				－	－	斜縄文、条痕	LR	爪形１列	○	－	無し?	－	－	擦痕	－		繊，白，雲	10YR8/1 灰白	補修孔
136	深鉢Ⅳ類	9A15、10A11	XV	方形				－	－	非結束羽状縄文	RL＋LR?	半截竹管・爪形２列	×	同一	－	－	－	平滑	－		繊，雲，白	10YR6/3 にぶい黄橙	0段多条
137	深鉢Ⅱ 2C類	9B5一括，9B5・9・10ほか	XV	方形	434	520	－	－	－	結節回転文	L	爪形１列	○	－	凸帯	爪形２列	同一	ミガキ	尖底	爪形（螺旋状）	繊，雲，長，白	10YR6/3 にぶい黄橙	
138	深鉢Ⅰ 2C類	9B5・10一括、10A13	XV	内反り	180			－	－	羽状縄文（片翼状）	RL＋LR	爪形１列	×	－	凸帯	爪形２列	矢羽	平滑	－		繊，雲，長，白	7.5YR7/4 にぶい橙	
139	深鉢Ⅱ D×F類	9B5・10	XV	方形				幾何学文	棒（断面方）	斜縄文?	RL?	爪形１列		－	凸帯	爪形２列	矢羽	ミガキ	－		繊，海針，白	10YR6/3 にぶい黄橙	
140	深鉢Ⅰ 2D類	9B5・10一括、10A1・13	XV	方形	214			無文帯	－	矢羽状爪形	爪形	爪形３列	○	矢羽	凸帯	爪形３列	矢羽・同一	ミガキ	－		繊，雲，長，白石粒	7.5YR7/4 にぶい橙	
141	深鉢Ⅰ 1B類	9B4	XV	内反り	268			－	－	斜縄文結節回転文	LR L	爪形１列	×	－	無し	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	10YR7/4 にぶい黄橙	補修孔
142	深鉢Ⅰ 1B類	9B8	XV	内反り	250			－	－	羽状縄文（結束部強調）	RL＋LR	爪形２列	○	矢羽	無し	－	－	摩耗	－		繊，雲，白	10YR7/3 にぶい黄橙	
143	深鉢Ⅰ 1B類	9B6	XV	方形	382			－	－	結節回転文斜縄文ループ	L RL RL	無し	－	－	無し	－	－	擦痕	－		繊，雲，白，灰	10YR8/1 灰白	
144	深鉢Ⅱ 2B類	9A23・9B6・8	XV	内反り	212			－	－	羽状縄文（結束部強調）	RL＋LR	爪形２列	×	矢羽	凸帯	爪形２列	矢羽	ケズリ	－		繊，雲，白	7.5YR8/3 浅黄橙	
145	深鉢Ⅰ 1B類	9B7	XV	方形	260			－	－	網目状撚糸文（一重）	撚糸R	爪形１列	○	－	無し	－	－	摩耗	－		繊，雲，白，赤	10YR6/3 にぶい黄橙	
146	深鉢Ⅰ 2E類	9A20, 9A22一括	XV	方形	428			波状文	半截竹管	非結束羽状縄文	RL＋LR	半截竹管３列	×	－	平坦	半截竹管３列	－	摩耗	－		繊，雲，白，赤	10YR7/3 にぶい黄橙	0段多条
147	深鉢Ⅱ 1B類	9A24	XV	内反り	(294)			－	－	組紐	L	半截竹管＋爪形３条	×	同一	無し?	－	－	平滑（ミガキ?）	－		繊，雲，白	10YR5/2 灰黄褐	
148	深鉢Ⅰ 1B類	9A25	XV	方形	148			－	－	結節回転文	L	爪形１列	○	－	無し	－	－	平滑	－		繊，雲，白	10YR7/2 にぶい黄橙	
149	深鉢Ⅱ D×F類	9A25	XV	方形				幾何学文	半截竹管・爪形	－	－	爪形３列	○	矢羽	不明	－	－	摩耗	－		繊，雲，白	10YR7/2 にぶい黄橙	
150	深鉢Ⅰ 1B類	9A20・21・24、10B2	XV	内反り	138			幾何学文?	円形竹管	円形竹管文	円形竹管	爪形２列	○	矢羽	無し?	－	－	平滑	－		繊，雲，白，赤	10YR7/3 にぶい黄橙	
151	深鉢Ⅱ 2E類	9B12	XV	内反り	148			無文帯	－	矢羽状爪形	爪形	爪形２列	○	矢羽	凸帯	爪形２列	矢羽	一部擦痕	－		繊，雲，白	7.5YR5/3 にぶい褐	
152	深鉢Ⅱ 2D類	9A25、9B4	XV	内反り				無文帯	－	爪形（交互）	－	爪形２列	×	矢羽	凸帯	爪形２列	矢羽	平滑	－		繊，雲，長，白	10YR6/2 灰黄褐	
153	深鉢Ⅱ 1D類	9B2, 10B12	XV	内反り				無文帯	－	結節回転文?	L?	横位爪形２列	2	矢羽	平坦	横位爪形３列	－	摩耗	－		繊，雲，灰，海針	10YR6/4 にぶい黄橙	
154	深鉢	9A20	XVa	－				蕨手状文	半截竹管・爪形	非結束羽状縄文	RL＋LR	不明	－	－	不明	－	－	ミガキ	－		繊，雲，白	10YR5/3 にぶい黄褐	0段多条
155	深鉢Ⅰ D×F類	9A25	XV	方形				幾何学文	半截竹管	－	－	半截竹管２条	×	－	不明	－	－	ミガキ	－		繊，白	10YR8/3 浅黄橙	
156	深鉢Ⅰ 1B類	9A21、10A16・17	XV	方形	151			－	－	条痕文	条痕	刻み１列	×	－	無し	－	－	擦痕?	－		繊，白，赤	10YR7/3 にぶい黄橙	

縄文時代前期土器観察表（5）

報告番号	分類	グリッド	層位	口縁端部	法量（mm）			文様帯		地文		口縁施文			胴部区画			内面	底部形態	底部文様	胎土	色調	備考
					口径	器高	底径	文様	施文具	種類	原体	文様	口唇	方向	形状	文様	方向						
157	深鉢Ⅰ1B類	10A14・15・20一括	XV	方形	278			－	－	結節回転文	L	爪形1列	×	－	無し	－	－	摩耗	－		繊，白，赤	10YR7/3にぶい黄橙	
158	深鉢Ⅰ1B類	10A14・15・20一括	XV	方形	300			－	－	斜縄文	LRL	円形竹管1列	○	－	無し	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	7.5YR8/3浅黄橙	
159	深鉢Ⅱ2D類	10A15・14・20一括	XV	方形	128			鋸歯状文	半截竹管・棒(断面円)	斜縄文?	不明	半截竹管＋刺突3列	×	－	凸帯	半截竹管＋刺突3列	－		－		繊，雲，白	7.5YR7/3にぶい黄橙	
160	深鉢ⅡD×F類	10A14・15・20	XV	方形				無文帯	－	－	－	爪形2列	○	矢羽	不明	－	－	平滑	－		繊，雲，長，白	7.5YR8/2灰白	
161	深鉢D×F類	10A20一括	XV	－				無文帯（赤彩）	－	－	－	不明	－	－	凸帯	爪形4列	矢羽	摩耗	－		繊，雲，白	7.5YR5/3にぶい褐	
162	深鉢ⅡD×F類	10A20	XV	方形	176			コンパス文	半截竹管	斜縄文?	RL?	爪形3列	×	同一	不明	－	－	摩耗	－		繊，チャート，白	7.5YR7/3にぶい橙	
163	深鉢ⅠD×F類	10A20	XV	方形				コンパス文2列	半截竹管	－	－	刺突3列	○	－	不明	－	－	平滑	－		繊，白	10YR6/3にぶい黄橙	
164	深鉢ⅢD×F類	10A20	XV	内反り				鋸歯状文	半截竹管（背）・爪形	－	－	刺突1列	×	－	沈線2	半截竹管（背）	－	擦痕	－		繊，雲，白，赤	10YR8/3浅黄橙	
165	深鉢ⅠD×F類	10A20	XV	方形	121			「S」字状文?	爪形	－	－	爪形2列	×	同一	平坦?	刺突2列以上	－	平滑	－		繊，雲，白	10YR6/2灰黄褐	
166	深鉢	10A20	XV	－				直線文・鋸歯状文	半截竹管	－	－	不明	－	－	不明	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	7.5YR5/4にぶい褐	
167	深鉢ⅠD×F類	10A20	XV	方形				「S」字状文・円形竹管文	半截竹管・爪形(同一)・円形竹管	－	－	爪形2列	×	同一	平坦	爪形2列	同一	平滑	－		繊，雲，白	10YR4/3にぶい黄褐	
168	深鉢ⅠA類	10A20	XV	方形				－	－	付加条縄文	LR＋L	無し	×	－	－	－	－	ミガキ	－		繊，白	10YR4/2灰黄褐	
169	深鉢Ⅰ1E類	10A20	XV	内反り				波状文	半截竹管	組紐	L	爪形1列	×	－	沈線2	半截竹管（背）	－	擦痕	－		繊，雲，白	10YR7/2にぶい黄橙	
170	深鉢Ⅰ1B類	10A20	XV	方形	380			－	－	組紐	L	爪形1列	○	－	無し?	－	－	擦痕	－		繊，雲，白，赤	10YR8/3浅黄橙	
171	深鉢Ⅱ1B類	10A19・20	XV	方形				－	－	非結束羽状縄文 ループ文	RL＋LR RL	半截竹管＋爪形2列	×	同一	無し?	－	－	平滑	－		繊，雲，長，白	10YR6/3にぶい黄橙	0段多条
172	深鉢Ⅱ2E類	10A21・22一括	XV・XVb	内反り	334			無文帯	－	非結束羽状縄文	RL＋LR	爪形2列	×	同一	平坦	爪形2列	同一	平滑	－		繊，雲，白	7.5YR7/4にぶい橙	0段多条
173	深鉢Ⅱ1E類	10A21・22	XV	方形				コンパス文	半截竹管	斜縄文	RL＋LR	半截竹管＋爪形2列	×	同一	平坦	半截竹管＋爪形2列	同一		－		繊，雲，長，白	7.5YR5/3にぶい褐	
174	深鉢Ⅰ4D類	10A16，10A18一括	XV	－				蕨手状文・幾何学文・円形竹管文など	刻み細隆帯・瘤状貼付・円形竹管	ループ文（非結束羽状）	RL＋LR	刻み細隆帯	－	－	平坦	刻み細隆帯	－	平滑	－		繊，長，雲，白	7.5YR5/4にぶい褐	
175	深鉢ⅤD×F類	10A18	XV	方形				連結文	半截竹管・爪形（同一方向）	非結束羽状縄文	RL＋LR	無し？	×	－	刻み細隆帯	－	－	摩耗	－		繊，雲，長，白	10YR6/3にぶい黄橙	0段多条
176	深鉢ⅡD×F類	10A18	XV	方形				無文	－	－	－	刺突5列	×	－	平坦	半截竹管＋刺突2列以上	－	ミガキ	－		繊，雲，白	10YR7/3にぶい黄橙	
177	深鉢Ⅰ2C類	10A18一括	XV	方形				－	－	斜縄文	RL	刺突1列	×	－	凸帯	刺突2列	矢羽		－		繊，雲，白，長	10YR6/3にぶい黄橙	
178	深鉢Ⅰ1A類	10A18	XV	丸形	160	132	－	－	－	結節回転文	撚糸R	無し	×	－	無し	－	－		丸底	無文?	繊，雲，白	10YR7/3にぶい黄橙	
179	深鉢Ⅰ1B類	10A17・18一括	XV	方形	238			－	－	ループ文	RL	爪形1列	○	－	無し	－	－	平滑	－		繊，雲，海針，白	10YR6/3にぶい黄橙	
180	深鉢Ⅰ1B類	10A18	XV	丸形	212			－	－	ループ文	RL	縄押圧1列	○	－	無し	－	－	擦痕	－		繊，雲，白	10YR7/3にぶい黄橙	補修孔
181	深鉢ⅡD×F類	10A18	XV	方形				幾何学文?	爪形（同一方向）	－	－	爪形2列	×	矢羽	不明	－	－		－		繊，雲，白	10YR7/2にぶい黄橙	
182	深鉢?	10A18	XV	－			－	－		螺旋状爪形	爪形	不明	－	－	不明	－	－	平滑	尖底	爪形（螺旋状?）	繊，雲，白，黒	10YR8/3浅黄橙	
183	深鉢Ⅰ1B類	10A17・18	XV	方形	273			－	－	結節回転文	L	爪形1条	○	－	無し	－	－	擦痕	－		繊，長，雲，白	10YR6/3にぶい黄橙	
184	深鉢?	10A17	XV	－				突起・不明	棒（断面楕円）・爪形（矢羽）	－	－	不明	－	－	不明	－	－	平滑	－		繊，雲，白	10YR6/1褐灰	
185	深鉢Ⅰ1C類	10A16・17・18	XV	方形			32	－	－	同一方向爪形	爪形	無し	×	－	平坦	半截竹管	－	平滑	平底	爪形?	繊，雲，白	10YR7/3にぶい黄橙	
186	深鉢Ⅱ1B類	10A17・18・22・23一括	XV	方形				－	－	非結束羽状縄文	RL＋LR	半截竹管＋爪形2列	×	同一	無し	－	－	平滑	－		繊，長，雲，白	10YR5/4にぶい黄褐	0段多条
187	深鉢?	10A17・18・22・23一括	XV	－			104	－	－	－	－	不明	－	－	不明	－	－	平滑	平底	爪形（渦巻状）	繊，雲，白	7.5YR5/3にぶい褐	
188	深鉢Ⅱ1E類	9A22、10A13・18・21・22・24	XV	方形				連結文・コンパス文・円形竹管文・鋸歯状文	半截竹管・爪形・円形竹管	斜縄文?	RL	半截竹管＋爪形3列	×	同一	平坦	半截竹管・爪形2列	同一	平滑（ミガキ?）	－		繊，長，雲，白	10YR6/3にぶい黄橙	0段多条
189	深鉢2C類	10A23	XV	－				－	－	組紐	L	不明	－	－	凸帯	爪形2列	矢羽	擦痕	－		繊，雲，白	5YR8/4淡橙	
190	深鉢Ⅰ2C類	10B1一括	XV	内反り	344			－	－	結節回転文	L	爪形2列	○	同一	凸帯	爪形3列	同一		－		繊，雲，白	10YR5/4にぶい黄褐	
191	深鉢Ⅰ1B類	9B5・10B1一括	XV	内反り	282			－	－	結節回転文	L	爪形2列	○	同一	無し	－	－	擦痕	－		繊，雲，白，灰	10YR8/2灰白	
192	深鉢Ⅰ2C類	10B1	XV	方形	276			－	－	羽状縄文（結束部強調）	R＋L	爪形2列	×	矢羽	沈線・凸帯	爪形2列	矢羽	平滑	－		繊，雲，白，赤	10YR6/4にぶい黄橙	
193	深鉢Ⅰ2E類	10A21・22、10B1・2	XV・XVb	内反り	336			無文帯	－	羽状縄文（結束部強調）	RL＋LR	爪形2列	×	矢羽	凸帯	爪形3列	矢羽	ミガキ	－		繊，雲，長，白	7.5YR5/3にぶい褐	
194	深鉢Ⅰ1B類	10B1・2、10A18	XV	丸形				－	－	網目状撚糸文 斜縄文	撚糸R RL?	刺突1列	×	－	無し	－	－	一部擦痕	－		繊，雲白	10YR7/3にぶい黄橙	
195	深鉢ⅠD×F類	10B2、11A21	XV	丸形	157			「S」字状文・円形竹管文	半截竹管・爪形(同一)・円形竹管	－	－	半截竹管＋爪形1列	×	－	不明	－	－	ミガキ	－		繊，雲，白	7.5YR7/3にぶい橙	

縄文時代前期土器観察表（6）

報告番号	分類	グリッド	層位	口縁端部	法量（mm）			文様帯		地文		口縁施文			胴部区画			内面	底部形態	底部文様	胎土	色調	備考
					口径	器高	底径	文様	施文具	種類	原体	文様	口唇	方向	形状	文様	方向						
196	深鉢Ⅱ F類	10B2	XV	方形				「S」字状文?	半截竹管・爪形(同一)・円形竹管	－	－	半截竹管＋爪形２列	×	同一	平坦	半截竹管＋爪形２列	同一	摩耗	－		繊, 雲, 長, 白石粒	10YR6/4 にぶい黄橙	
197	深鉢Ⅰ 1B類	10B2	XV	方形				－	－	格子目文	半截竹管?	爪形２列	○	同一	無し	－	－	平滑	－		繊, 雲, 白	10YR5/2 灰黄褐	
198	深鉢?	10B2	XV	－				斜格子文?	半截竹管	－	－	不明	－	－	無し?	－	－	摩耗	－		繊, 白	10YR6/3 にぶい黄橙	
199	深鉢Ⅰ 1B類	10B2	XV	内反り				－	－	組紐?	L	半截竹管	×	－	無し?	－	^－	平滑	－		繊, 雲, 白	10YR5/4 黄褐	
200	深鉢Ⅰ 1B類	10B1	XV	方形	(192)			－	－	同一方向爪形列	爪形	爪形２列	○	矢羽	無し?	－	－	擦痕	－		繊, 雲, 白	10YR8/2 灰白	
201	深鉢Ⅱ 1B類	10B1・2一括	XV	内反り	162			－	－	条痕文	条痕	爪形２列	○	同一	無し?	－	－	擦痕	－		繊, 雲, 白	10YR8/3 浅黄橙	
202	深2D ×F類	10A25	XV	－				蕨手状文	撚糸側面(L)	－	－	不明	－	－	平坦	爪形２列以上	同一	擦痕	－		繊, 雲, 白	10YR7/4 にぶい黄橙	
203	深鉢Ⅱ 1C類	10A16・17	XV	方形				－	－	組紐	R	刺突３列		－	平坦	刺突４列以上	－	ミガキ	－		繊, 雲, 白	10YR6/4 にぶい黄橙	断面三角形の工具で刺突
204	深鉢Ⅱ D×F類	10A12	XV	方形				蕨手状文	棒(断面円)	－	－	刺突２列	×	－	不明	－	－	平滑	－		繊, 雲, 白	10YR7/3 にぶい黄橙	
205	深鉢Ⅱ D×F類	10A22	XV	方形				幾何学文	半截竹管・爪形(同一)	－	－	半截竹管＋爪形２列	×	同一	平坦	半截竹管＋爪形１列以上	－	平滑	－		繊, 雲, 白	10YR7/3 にぶい黄橙	
206	深鉢Ⅱ D×F類	10A12・10B8	XV	方形				幾何学文?・円形竹管文	半截竹管・爪形	－	－	半截竹管＋爪形１列	×	－	不明	－	－	平滑	－		繊, 雲, 白	10YR6/3 にぶい黄橙	
207	深鉢Ⅱ D×F類	10A17	XV	方形				蕨手状文・円形竹管文	半截竹管・爪形（矢羽状）・円形竹管	－	－	爪形２列	○	矢羽	不明	－	－	摩耗	－		繊, 雲, 白	7.5YR7/3 にぶい橙	
208	深鉢Ⅱ 類	10A21	XV	方形				－	－	－	－	刺突２列	△	同一	不明	－	－	ミガキ	－		繊, 雲, 白	10YR5/2 灰黄褐	篦状工具で刺突
209	深鉢E ×F類	10A21	XV	－				無文帯	－	羽状縄文（結束部強調）	R＋L	不明	－	－	段差	刺突２列	－	ミガキ	－		繊, 雲, 白	10YR7/2 にぶい黄橙	断面円形の工具で刺突
210	深鉢Ⅳ 類	10A25	XV	方形				－	－	－	－	爪形３列以上	×	同一	不明	－	－	平滑	－		繊, 雲, 白	10YR6/2 灰黄褐	
211	深鉢Ⅰ 類	10A17	XV	方形				－	－	斜縄文	LRr×LRR	半截竹管＋刺突３列	×	－	不明	－	－	ミガキ	－		繊, 雲, 白	10YR6/3 にぶい黄橙	篦状工具で刺突
212	深鉢Ⅱ 1E類	10A19	XV	方形	424			コンパス文	半截竹管	羽状縄文（結束部強調）	RL＋LR	半截竹管＋刺突３列	×	－	平坦	半截竹管＋刺突２列以上	－	ミガキ	－		繊, 雲, 白, 赤	10YR6/3 にぶい黄橙	
213	深鉢Ⅰ 1E類	10A16	XV	方形				コンパス文	半截竹管	非結束羽状縄文	RL＋LR	半截竹管３列	×	－	平坦	半截竹管３列	－		－		繊, 雲, 白	10YR5/4 黄褐	
214	深鉢	10A15	XV					波状文	半截竹管	－	－	不明	－	－	平坦	半截竹管２条以上		擦痕	－		繊, 雲, 白	10YR6/3 にぶい黄橙	
215	深鉢Ⅰ 1B類	10A11・12一括	XV	方形	222			－	－	斜縄文	LRL	爪形１列	○	－	無し	－	－	摩耗	－		繊, 雲, 白	7.5YR6/3 にぶい褐	
216	深鉢Ⅰ 1A類	10A18・19一括	XV	内反り				－	－	斜縄文 刺突列	RL 篦	無し	×	－	無し	－	－		平底		繊, 雲, 白	10YR6/1 褐灰	
217	深鉢Ⅰ 1B類	10A16・17	XV	方形	212			－	－	組紐	L	爪形２列	○	同一	無し?	－	－	一部擦痕	－		繊, 雲, 白	10YR8/4 浅黄橙	
218	深鉢Ⅱ 1D類	10B3	XV	方形				コンパス文	半截竹管	羽状縄文（結束部強調）	LR＋RL	半截竹管・爪形２条	×	交互	無し?	－	－	平滑	－		繊, 雲, 白	10YR6/4 にぶい黄橙	
219	深鉢Ⅳ 1E類	10A24	XV	内反り				コンパス文	半截竹管	羽状縄文（結束部強調）	RL＋LR	半截竹管＋爪形２列		同一	無し?	－	－	ミガキ	－		繊, 雲, 白	10YR5/3 にぶい黄褐	
220	深鉢Ⅱ 1E類	10A12	XV	内反り				コンパス文	半截竹管	組紐	L	爪形２列	×	交互	無し?	－	－	平滑	－		繊, 雲, 白	10YR6/1 褐灰	
221	深鉢Ⅱ 1E類	10A23・10B4・11A16	XV	方形				コンパス文	半截竹管（背）	非結束羽状縄文	RL＋LR	刺突２列	×	－	平坦	刺突３列	－	平滑?	－		繊, 白, 赤	10YR7/2 にぶい黄橙	篦状工具で刺突
222	深鉢Ⅱ 類	10A14	XV	方形				－	－	組紐	L	爪形２列	×	矢羽	不明	－	－	擦痕	－		繊, 雲, 白, 赤	7.5YR6/2 灰褐	
223	深鉢Ⅴ 類	10A11	XV	方形				－	－	非結束羽状縄文	LR＋RL	爪形２列	×	同一	無し?	－	－		－		繊, 雲, 白	10YR5/3 にぶい黄褐	
224	深鉢Ⅱ 類	10A16	XV	方形				－	－	絡条体	r?	無し	×	－	無し?	－	－	擦痕	－		繊, 雲, 白, 灰	10YR6/4 にぶい黄橙	
225	深鉢Ⅰ 類	10A22	XV	方形				－	－	条痕×斜縄文	R?	無し	×	－	不明	－	－	擦痕	－		繊, 雲, 白	10YR6/4 にぶい黄橙	小波状
226	深鉢Ⅰ 類	10B5	XV	方形				－	－	格子目文	半截竹管	刺突１列	×	－	無し?	－	－	擦痕	－		繊, 雲, 白	10YR5/1 褐灰	断面円形の工具で刺突
227	深鉢?	10B3	XV	－				－	－	円形竹管文	円形竹管	不明	－	－	凸帯	無し?	－	平滑	－		繊, 雲, 白	10YR5/3 にぶい黄褐	
228	深鉢?	10A17	XV	－				不明	細隆帯	斜縄文?	LR	不明	－	－	不明	－	－	平滑	－		繊, 雲	10YR6/3 にぶい黄橙	
229	深鉢Ⅰ 1B類	10B3・8	XV	方形				－	－	矢羽状爪形列	爪形	爪形２列	○	矢羽	無し?	－	－	擦痕	－		繊, 雲, 白	10YR6/3 にぶい黄橙	
230	深鉢Ⅰ 1A類	10A13一括	XV	方形				－	－	同一方向爪形列	爪形	無し	－	－	無し?	－	－	平滑	－		繊, 雲, 白	10YR6/4 にぶい黄橙	
231	深鉢Ⅰ 1A類	10B4	XV	方形	240			－	－	同一方向爪形列	爪形	爪形１列	○	－	無し?	－	－	擦痕	－		繊, 雲, 白	10YR7/4 にぶい黄橙	
232	深鉢?	10A21	XV	－			－	－	－	爪形列	爪形	不明	－	－	不明	－	－	平滑	尖底	爪形（放射状）	繊, 雲, 白白	10YR7/3 にぶい黄橙	
233	小型土器?	10A25	XV	－			14	－	－	矢羽状爪形列	爪形	不明	－	－	不明	－	－	平滑	平底	爪形（渦巻状?）	繊, 白	10YR7/3 にぶい黄橙	
234	小型土器?	10B4	XV	－			22	－	－	無文	－	不明	－	－	不明	－	－	平滑	平底	爪形（中央横・外縁円）	繊, 白	7.5YR7/6 橙	
235	小型土器?	10A19一括	XV	－			30	－	－		－	不明	－	－	不明	－	－		平底	無文	繊, 雲, 白	10YR8/3 浅黄橙	
236	深鉢?	10A14	XV	－			50	－	－	楕円形竹管文	楕円形竹管	不明	－	－	不明	－	－	平滑	平底	円形竹管	繊, 雲, 白	10YR7/2 にぶい黄橙	
237	深鉢	10A21一括	XV	－			78	－	－	爪形（同方向）	不明	不明	－	－	不明	－	－		平底	爪形（渦巻状）	繊, 雲, 白, 赤	10YR6/3 にぶい黄橙	
238	深鉢	10A15	XV	－			84	－	－		－	不明	－	－	不明	－	－	平滑	平底	爪形・円形竹管（S字状）	繊, 雲, 白, 赤	10YR6/4 にぶい黄橙	

縄文時代前期土器観察表（7）

報告番号	分類	グリッド	層位	口縁端部	法量（mm）			文様帯		地文		口縁施文			胴部区画			内面	底部形態	底部文様	胎土	色調	備考
					口径	器高	底径	文様	施文具	種類	原体	文様	口唇	方向	形状	文様	方向						
239	深鉢	10A13一括	XV	－			60	－	－	爪形(同一)	－	不明	－	－	不明	－	－	平滑	平底	爪形（渦巻状）	繊, 英, 長, 白, 赤	7.5YR6/4 にぶい橙	
240	深鉢	10A14	XV	－			88	－	－		－	不明	－	－	不明	－	－		平底	爪形（渦巻状）	繊, 雲, 白		
241	深鉢	10B1	XV	－			64	－	－	爪形(同一)	－	不明	－	－	不明	－	－	平滑	平底	爪形（外縁のみ）	繊, 雲, 白	10YR6/4 にぶい黄橙	
242	深鉢Ⅱ 1E類	8A10, 10A20、11A11・16一括	XV	方形	470			鋸歯状文・連結文・円形竹管文	半截竹管・爪形(同一)・円形竹管	非結節羽状縄文	RL＋LR	爪形３列	×	矢羽	平坦	半截竹管＋爪形４条	矢羽	平滑	－		繊, 雲, 白	7.5YR8/4 浅黄橙	0段多条
243	深鉢Ⅰ 1C類	11A16	XV	内反り	340			－	－	羽状縄文（結束部強調）	R＋L	爪形２列	×	同一	凸帯	爪形１列	－	摩耗	－		繊, 雲, 長, 英	10YR6/3 にぶい黄橙	「C」
244	深鉢Ⅰ類	11A11	XV	方形	130			－	－	矢羽状爪形列	爪形	爪形２列	×	同一	無し?	－	－	平滑	－		繊, 白, 赤	10YR7/3 にぶい黄橙	口演端部付近の爪形と地紋の爪形は異なる
245	深鉢Ⅱ類	11A11	XV	方形				－	－	非結束羽状縄文	RL＋LR（0段多条）	刺突３列	×	－	不明	－	－	ミガキ	－		繊, 雲, 白	7.5YR7/2 明褐	断面方形の工具で刺突
246	深鉢E ×F類	11A11・16一括	XV	－				鋸歯状文	半截竹管	非結束羽状縄文	RL＋LR（0段多条）	不明	－	－	凸帯	爪形３列	矢羽	擦痕	－		繊, 雲, 白	10YR7/3 にぶい黄橙	
247	深鉢Ⅱ類	11A16	XV	方形				無文帯	－	刺突	－	無し	×	－	無し	－	－	擦痕	－		繊, 白, 海針?	10YR6/4 にぶい黄橙	
248	深鉢Ⅰ類	11A18	XV	方形				－	－	非結束羽状縄文	RL＋LR（0段多条）	半截竹管３列	×	－	無し?	－	－	ミガキ	－		繊, 雲, 海針, 白	10YR7/2 にぶい黄橙	断面方形の工具で刺突
249	深鉢Ⅱ類	11A22	XV	方形				無文帯	－	非結束羽状縄文	RL＋LR	無し	×	－	不明	－	－	平滑	－		繊, 雲, 長, 白, 褐色粒	10YR7/3 にぶい黄橙	0段多条
250	深鉢Ⅱ 1C類	4C24一括	XV	方形	264			－	－	結節回転文	L	爪形１列	×	－	平坦	半截竹管＋爪形２列	同一	ミガキ	－		繊, 雲, 長, 白	10YR5/3 にぶい黄褐	
251	深鉢Ⅰ 1D類	4C25・4D3	XV	内反り	206			無文帯	－	爪形(横位)	爪形	爪形４列	○	矢羽	平坦	爪形（横位）1列	－	平滑	－		繊, 雲, 海針, 白	10YR5/3 にぶい黄褐	
252	深鉢Ⅰ 1B類	5B25一括	XV	内反り	314			－	－	羽状縄文（結束部強調）	RL＋LR	爪形２列	○	矢羽	無し	－	－	擦痕	－		繊, 雲, 長, 白	10YR6/4 にぶい黄橙	
253	深鉢Ⅱ類	4D13	XV	内反り				幾何学文?	隆帯＋爪形（矢羽状）	斜縄文	RL?	爪形２列	×	矢羽	不明	－	－	ミガキ	－		繊, 雲, 長, 白	10YR7/4 にぶい黄橙	
254	深鉢Ⅰ類	5C17	XV	内反り				波状文?	半截竹管（背）	結節回転文	L	爪形１列	×	－	不明	－	－	ミガキ	－		繊, 雲, 白	10YR7/3 にぶい黄橙	
255	深鉢Ⅱ D×F	5D2	XV	－				幾何学文?	爪形（矢羽状）	－	－	爪形２列	－	矢羽	不明	－	－	平滑	－		繊, 雲, 灰	7.5YR5/3 にぶい褐	
256	深鉢Ⅰ 2c類	4D8・11	XV	内反り	364			－	－	羽状縄文（結束部強調）	R＋L	爪形３列、円形浮文	×	矢羽	凸帯2列	爪形４列	矢羽	平滑（ミガキ?）	－		繊, 長, 雲, 白	10YR5/2 灰黄褐	
257	深鉢Ⅲ D×F類	5B4一括	XV	丸形	92			蕨手状文?・菱形状文	半截竹管・爪形・円形竹管	－	－	不明	－	－	不明	－	－	平滑	－		繊, チ, 白	7.5YR5/2 灰褐	
258	深鉢Ⅱ 1B類	4D12・17・18一括	XV	内反り	172			－	－	横位爪形列	爪形	爪形２列	○	同一	無し	－	－	擦痕	－		繊, 雲, 白	10YR7/3 にぶい黄橙	
259	深鉢E ×F類	4C11、9B2	XV	－				稜形状文・直線文	半截竹管	羽状縄文（片翼状）	R＋L	不明	－	－	凸帯2条	爪形４列	矢羽	平滑	－		繊, 雲, 長, 白	10YR7/2 にぶい黄橙	
260	深鉢Ⅱ D×F類	4D13	XV	内反り				幾何学文・直線文	円形竹管	－	－	爪形２列	○	矢羽	平坦	爪形２列	矢羽	ミガキ	－		繊, 白, 灰	10YR6/2 灰黄褐	
261	小形土器?	5B25一括	XV	－			34	－	－	無文	－	不明	－	－	不明	－	－	平滑	平底	無文	繊, 雲, 白	10YR6/4 にぶい黄橙	
262	深鉢Ⅰ類	103C21	XVc	方形						羽状縄文（片翼状）	RL＋LR	爪形２列	×	矢羽	不明	－	－	擦痕	－		繊, 雲, 白	10YR3/1 黒褐	
263	深鉢	103C21	XVc	丸形				直線文（多条）	半截竹管・爪形	斜縄文	LR	無し	×	－	無し?	－	－	平滑	－		繊, 雲, 白, 赤, 灰	10YR5/2 灰黄褐	
264	深鉢	103C12	XVc	方形	110			鋸歯状文	粘土紐貼付	斜縄文	LR	－	－	－	－	－	－	平滑	－		雲, 白	10YR4/3 にぶい黄褐	
265	深鉢	102C25	XVc	方形				直線文（多条）	半截竹管	斜縄文	LR＋RL	－	－	－	－	－	－	平滑	－		雲, 白	7.5YR5/2 灰褐	
266	深鉢	103C22	XVc	丸形	246			－	－	斜縄文	RL	－	－	－	－	－	－	ミガキ	－		雲, 白	10YR8/4 浅黄橙	小波状
267	深鉢	6B18	XVb	－				鋸歯状・渦巻文	粘土紐＋半截竹管	斜縄文	RL	不明	－	－	凸帯	粘土紐＋爪形	－	ミガキ	－		雲, 白	10YR6/4 にぶい黄橙	267～269は同一個体
268	深鉢	6B13	XV	－				鋸歯状・渦巻文	粘土紐＋半截竹管	斜縄文?	RL?	不明	－	－	凸帯	粘土紐＋爪形	－	ミガキ	－		雲, 白	10YR6/4 にぶい黄橙	267～269は同一個体
269	深鉢	6B12	XVa	－				不明	粘土紐＋半截竹管	斜縄文?	RL?	不明	－	－	不明	－	－	ミガキ	－		雲, 白	10YR6/4 にぶい黄橙	267～269は同一個体
270	深鉢	6B17一括	XV	－				鋸歯状文（縦位）	半截竹管・円形竹管（大・小）	無し	－	不明	－	－	不明	－	－	ミガキ			雲, 白	10YR5/4 にぶい黄褐	
271	深鉢Ⅰ F類	8B4	XⅢb	方形	210			幾何学文?・コンパス文	半截竹管・爪形(同一)	無し	－	半截竹管爪形２列	×	同一	平坦	半截竹管＋爪形２列	同一	ミガキ	－		繊, 雲, 白	7.5YR8/4 浅黄橙	
272	小型土器Ⅰ 2C類	8B10	XⅢb	方形	66			－	－	爪形（交互・同一）	爪形	爪形２列	○	交互	凸帯	爪形２列	同一	ミガキ			繊, 雲, 白	10YR7/2 にぶい黄橙	
273	深鉢Ⅱ類	B区崩落土	XV	方形				－	－	爪形(交互)	爪形	無し	×	－	不明	－	－	擦痕	－		繊, 雲, 長, 白	10YR5/1 褐灰	
274	深鉢F類	不明	不明	－				蕨手状文・無文帯?	隆帯＋爪形	不明	－	不明	－	－	凸帯2列	爪形４列	矢羽	ミガキ	－		繊, 雲, 繊	10YR7/3 にぶい黄橙	
275	深鉢?	不明	XV				尖底	－	－	矢羽状爪形（放射状）	爪形	不明	－	－	不明	－	－	平滑	尖底	爪形（放射状）	繊, 雲, 白	10YR6/2 灰黄褐	

縄文時代中期～後期土器観察表

報告番号	器形		グリッド	層位	文様など	形式	地文	原体	口径(mm)	胎土	色調	備考
	器種	口縁										
276	深鉢	突起	103D3	XVa	半截竹管?	新保	－	－		白	10YR6/3にぶい黄橙	
277	深鉢?	－	103D1	XVa	入組文（半截竹管）	新保～新崎	斜縄文	LR		白多	10YR4/2灰黄褐	
278	深鉢	平縁	9A16	XV	半截竹管４条以上（横位）	新崎	斜縄文	LR		白	10YR7/4にぶい黄橙	
279	深鉢	波状	103C12	XVc	入組「コ」字文（貼付隆帯・半截竹管）	新崎	斜縄文	LR		白, 褐	7.5YR7/4にぶい橙	
280	深鉢?		5C4	XV	半截竹管３条以上、蓮華文、爪形	新崎	－	－		雲, 白	10YR6/4にぶい黄橙	
281	深鉢	波状	6B16・21	XVa	渦巻き・弧状の隆帯、櫛歯状刺突	大木9a	－	－		雲, 長, 白	10YR6/3にぶい黄橙	
282	深鉢		8B17・20	XV	楕円形状の沈線	大木9a	斜縄文	LR		雲, 白, 灰	10YR3/3暗褐	
283	深鉢	平縁	7A13・18	XVa	口縁部連弧、胴部超楕円上の沈線	大木9a	斜縄文	RL	274	雲, 長, 白, 灰	10YR6/4にぶい黄橙	
284	深鉢	平縁	6B9	XVa	口縁端部付近無文	大木9a	斜縄文	LR	252	雲, 白, 灰	10YR5/2褐灰	
285	深鉢	平縁	7A14	XVa	無文	大木9a	無文	－	226	雲, 長	10YR3/3暗褐	
286	深鉢	平縁	6B21	XV	縦位の長楕円の区画内に斜縄文	大木9a	斜縄文	RL		雲	10YR6/3にぶい黄橙	
287	深鉢	平縁	11A17	XV	沈線、櫛描直線文	加曽利B1	－	－		雲, 長, 灰	10YR6/3にぶい黄橙	
288	深鉢?		11A10・19	XVb	突帯２条、突帯頂部に連続刺突	三十稲葉	無文	－		白多	10YR6/4にぶい黄橙	

縄文時代後期～晩期土器観察表（1）

報告番号	器形		グリッド	層位	型式	文様など	地文	原体	大きさ（mm）				内面	胎土	色調	群など
	器種	口縁							口径	器高	最大	底径				
289	深鉢A1類	平縁	11A24	XVb	加曽利B1	多条沈線	斜縄文	LR					ミガキ	雲, 英, 白	10YR5/2褐灰	第Ⅰ群
290	壺×注口土器		8B12	XV	加曽利B1	幾何学文（(半截竹管＋刺突）１列)、(半截竹管＋刺突）１列							平滑	雲, 白	10YR5/2灰黄褐	第Ⅱ群
291	浅鉢B類	小突起	4C11	XVb	大洞C1	磨消縄文		LR					ミガキ	雲, 灰	10YR7/2にぶい黄橙	第Ⅳ群
292	深鉢	波状	10A22	XV	加曽利B3～瘤	磨消縄文	斜縄文	LR					ミガキ	雲, 白	7.5YR3/2黒褐	第Ⅱ群
293	浅鉢A類	小突起	10B13	XV	大洞C1	沈線、刺突、磨消縄文		LR	210				ミガキ	雲, 白	10YR5/2褐灰	第Ⅳ群
294	深鉢A2類	平縁	5C25, 6C6, 7B8	XⅢe XⅢb	加曽利B1	多条沈線・区切り縦線文、内：沈線１条	斜縄文	LR	248	31	123		ミガキ	雲, 白, 灰	7.5YR7/2明褐灰	第Ⅰ群
295	深鉢B類	平縁	5C2	XⅢe	加曽利B3	磨消縄文	斜縄文	LR	302				ミガキ	雲, 白	10YR5/4にぶい黄橙	第Ⅰ群
296	深鉢B類	平縁	6A10・12, 7B9	XⅢe XⅢd XⅢb	加曽利B?		横位縄文	LR	296		305		平滑	雲, 長, 白	10YR7/3にぶい黄橙	第Ⅵ群
297	深鉢B類		E区	XⅢe（地山直上）	加曽利B3	沈線、刺突	斜縄文	LR				76	ミガキ	雲, 海針	10YR6/3にぶい黄橙	第Ⅰ群
298	深鉢A2類	平縁	9B22	XⅢe	加曽利B1	多条沈線、口唇：キザミ、内：沈線３条	斜縄文	LR					ミガキ	雲, 白, 黒色粒	7.5YR6/3にぶい褐	第Ⅰ群
299	深鉢A2類	平縁	6B20	XⅢe	加曽利B1	多条沈線、の字状単位文	斜縄文	LR					ミガキ	長, 白	10YR5/2褐灰	第Ⅰ群
300	深鉢A2類	平縁	8B10	XⅢe	加曽利B1	多条沈線、口唇：刺突	無文（ミガキ）	－					ミガキ	雲, 長, 英, 白	7.5YR6/3にぶい褐	第Ⅰ群
301	深鉢A2類	－	6B20	XⅢe	加曽利B1	無文				55			不明	雲, 白	10YR7/2にぶい黄橙	内面漆付着、第Ⅰ群
302	深鉢A1類	平縁	6B12	XⅢe	加曽利B1	多条沈線、内：沈線２条	斜縄文	LR					ミガキ	雲, 白（混入物少い）	10YR6/3にぶい黄橙	第Ⅰ群
303	深鉢A1類	波状	5B22	XⅢe	加曽利B1	多条沈線･カッコ文、口唇：キザミ、内：沈線２条	斜縄文	LR					ミガキ	雲, 白	7.5YR8/3黒褐	第Ⅰ群
304	深鉢	波状	9B12	XⅢe	瘤Ⅱ段階?	円形浮文、円・弧状の沈線・細隆線		－					ミガキ	雲, 白	10YR4/2灰黄褐	第Ⅱ群
305	浅鉢	平縁	5B18	XⅢ	加曽利B1	沈線	斜縄文	LR	182	71	48		ミガキ	雲, 白	10YR7/2にぶい黄橙	第Ⅰ群
306	壺	平縁	7B4・9	XⅢa・XⅢb	加曽利B2?	磨消縄文	斜縄文	LR	192				ミガキ・擦痕	白	10YR6/1褐灰	第Ⅰ群
307	深鉢	波状	9B2	XⅢb	瘤Ⅱ段階?	磨消縄文	斜縄文	LR					ミガキ	雲, 白	7.5YR6/4にぶい橙	第Ⅱ群
308	深鉢	－	9B2・6・7	XⅢb	瘤Ⅱ段階	入組文	斜縄文（充填）	LR					ミガキ	雲, 白	10YR7/4にぶい黄橙	第Ⅱ群
309	深鉢	突起	8B2	XⅢb	瘤Ⅳ段階	充填縄文	斜縄文	RL					ミガキ	雲, 白	10YR1.7/1黒	第Ⅱ群
310	深鉢	波状	4D6	XⅢb	瘤Ⅱ段階?	刺突、瘤、弧線文	斜縄文	RL					擦痕	雲, 白	10YR7/2にぶい黄橙	第Ⅱ群
311	深鉢	波状	9B1	XⅢb	瘤Ⅱ段階		斜縄文	RL					ミガキ	雲, 白, 褐	10YR7/3にぶい黄橙	第Ⅱ群
312	壺		4C23	XⅢb	大洞B	三叉文	斜縄文 赤色漆	RL					ナデ	白	10R4/3赤褐	第Ⅲ群
313	台付鉢	－	4D4	XⅢb	大洞B	透かし	ミガキ	－				102	ミガキ	雲, 長, 白	10YR6/3にぶい黄橙	内面アスファルト付着、第Ⅲ群
314	浅鉢B類	突起	7A19	XⅢb	大洞C1	雲形文・沈線、羊歯状文（内面）	斜縄文	LR					ミガキ	雲, 長, 白	10YR6/2灰黄褐	第Ⅳ群
315	深鉢B類	平縁	103D2	XⅢa	加曽利B3	磨消縄文	斜縄文	RL	196				ミガキ	雲, 白	10YR6/2灰黄褐	第Ⅰ群

縄文時代後期～晩期土器観察表（2）

報告番号	器形		グリッド	層位	型式	文様など	地文	原体	大きさ（mm）				内面	胎土	色調	群など
	器種	口縁							口径	器高	最大	底径				
316	深鉢A類	波状	5C2	XIIIa	瘤Ⅳ段階	弧線文、直線文、充填縄文	斜縄文	LR					摩耗	雲, 白, 灰	10YR7/3 にぶい黄橙	第Ⅱ群
317	壺	平縁	6B21	XIIIa	大洞B～BC		斜縄文	LR	120				ミガキ	雲, 白	7.5YR5/3 にぶい褐	第Ⅳ群
318	壺	－	5B21	XIIIa		無文	ミガキ、赤色漆	－					ミガキ、赤色漆	雲, 海針	10YR6/4 にぶい黄橙	第Ⅳ群
319	浅鉢	平縁	5B19・22・23	XIIIa	大洞B2	入組三叉文	斜縄文	LR	164	51		48	平滑	雲, 白	10YR6/3 にぶい黄橙	底外ミガキ、第Ⅲ群
320	深鉢B2類	波状	5B15	XIIIa	大洞B2	入組三叉文	斜縄文	LR	254				擦痕	雲, 白	10YR6/3 にぶい黄橙	第Ⅲ群
321	浅鉢	平縁	5C21	XIIIa	大洞B2	入組三叉文、沈線3条	斜縄文	LR					平滑	雲, 白	10YR6/2 灰黄褐	第Ⅲ群
322	浅鉢	波状	5C16	XIIIa	大洞B1	三叉文	斜縄文	LR					ミガキ	雲, 白	10YR6/2 灰黄褐	第Ⅲ群
323	小型壺	－	7B10	XIIIa	大洞B2	入組三叉文	斜縄文	LR			51	28	?	雲, 白	10YR6/3 にぶい黄橙	底外ミガキ、第Ⅲ群
324	注口土器	－	6B21	XIIIa	大洞B1	玉抱き三叉文	（ミガキ）	－					ナデ	雲, 白	7.5YR6/2 灰褐	第Ⅲ群
325	浅鉢?	平縁	6B19	XIIIa		無文	（ミガキ）	－	140				ミガキ	雲, 白	10YR4/2 灰黄褐	第Ⅵ群
326	深鉢	波状	7A20	XIIIa	八日市新保	沈線による文様	無し	－					ミガキ	雲, 長, 白	10YR4/2 灰黄褐	第Ⅴ群
327	壺	平縁	4C15	XIIIa	大洞C1?	無文（ミガキ）	斜縄文	LR	174		180		ケズリ？	雲, 白	7.5YR5/3 にぶい褐	第Ⅳ群
328	深鉢D類	平縁	7B19	XIIIa		無文	（ミガキ）	－	208		222		擦痕	雲, 白	10YR4/3 にぶい黄褐	第Ⅵ群
329	深鉢B類	平縁	5B24	XIIIa			撚糸（横位）		256				ミガキ	雲, 白	7.5YR4/1 褐灰	第Ⅵ群
330	深鉢	－	5B22, 7B2・3	XIIIa	大洞B～BC	無文	斜縄文	LR		95			不明	雲, 白	10YR4/4 褐	アスファルト入り、第Ⅵ群
331	壺	－	4C9、4D2, 5C1・2	XIIb・XIId	大洞BC1	入組三叉文、沈線	斜縄文	LR			182	88	ミガキ	雲, 長, 白	10YR6/3 にぶい黄橙	第Ⅲ群
332	壺?		4C7	XIIb	大洞B1	磨消縄文		LR					ミガキ	雲, 白, 海針	10YR4/1 灰褐	第Ⅲ群
333	壺		4C8/6B20	XIIb/XIIIe	大洞B2	沈線	ミガキ、黒色漆						ミガキ、黒色漆	灰	7.5YR8/2 灰白	第Ⅲ群
334	深鉢B1類	平縁	5C7, 6A24, 6C6, 7A20	XIIb	大洞BC1	羊歯状文・沈線	網目状撚糸文	R・R					ミガキ	雲, 白	10YR4/1 灰褐	第Ⅲ群
335	浅鉢B類	突起	6A19,7A14・22	XIIb	大洞C1	羊歯状文（内外）、雲形、磨消縄文	斜縄文	LR					ミガキ	雲, 白	N1.5/黒	第Ⅳ群
336	深鉢	突起	6A19,7A14・22	XIIb		磨消縄文	斜縄文	LR						雲, 白	N1.5/黒	第Ⅳ群
337	浅鉢B類	平縁	5C3	XIIb	大洞C1	羊歯状文・沈線	斜縄文	LR					ミガキ	雲, 海針, 白	10YR4/1 灰褐	第Ⅳ群
338	浅鉢B類	突起	5C2	XIIb	大洞C1	雲形文	斜縄文	LR	268				ミガキ	雲, 白, 灰	10YR7/3 にぶい黄橙	第Ⅳ群
339	壺	－	4D7	XIIb	大洞C1?		斜縄文	LR			158	54	ミガキ	雲, 白, 灰	10YR6/3 にぶい黄橙	第Ⅳ群
340	深鉢	平縁	4D5	XIIb	中屋式	帯状鍵状文、綾操帯状文、内：刺突・沈線	斜縄文	RL	218				ミガキ	雲, 長, 白	10YR6/4 にぶい黄橙	第Ⅴ群
341	深鉢B1類	波状	5C2	XIIb	大洞B2	入組三叉文、玉抱き三叉文	無文（ミガキ）	－	136				ミガキ	雲, 白, 混入物少ない	7.5YR3/1 黒褐	第Ⅲ群
342	浅鉢B類	小突起	4C10、4D1	XIIb	大洞C1	沈線、磨消縄文		LR					ミガキ	雲, 白, 海針	10YR7/3 にぶい黄橙	第Ⅳ群
343	深鉢	平縁	4C10・22	XIIb	大洞C1	沈線	結節回転文、撚糸文	R・R	208		218		ミガキ	雲, 長, 白	10YR7/3 にぶい黄橙	第Ⅳ群
344	深鉢	平縁	8B9・10、9A23	XIIb	大洞C1	羊歯状文・沈線	撚糸、櫛歯	R・R					平滑	雲, 白	10YR6/3 にぶい黄橙	第Ⅳ群
345	深鉢	平縁	6A24	XIIb	大洞C1	刺突、沈線、羊歯状文	網目状撚糸文	R・R	235		250			雲, 長, 白	10YR7/3 にぶい黄橙	第Ⅳ群
346	深鉢	平縁	6A24	XIIb	大洞C1	沈線、刺突	網目状撚糸文		260				ミガキ	雲, 白	10YR6/4 にぶい黄橙	第Ⅳ群
347	深鉢A類	平縁	7A15	XIIb	大洞BC～C1	口：ヨコナデ	結節回転文、網目状撚糸文	R・R	400		420		ケズリ・擦痕	雲, 白, 灰	10YR6/3 にぶい黄橙	第Ⅵ群
348	深鉢A類	平縁	6A24	XIIb	大洞BC～C1	口端ヨコナデ、結節回転文	結節回転文、斜縄文	LR					平滑	雲, 白, 灰	7.5YR6/3 にぶい褐	第Ⅵ群
349	深鉢A類	平縁	4D7	XIIb	大洞BC～C1		斜縄文（縦）	LR	260				ケズリ	雲, 白	10YR7/2 にぶい黄橙	第Ⅵ群
350	深鉢C類	波状	6A16, 6C6	XIIb		口端ヨコナデ	斜縄文	LR					平滑	雲, 白	7.5YR6/2 灰褐	第Ⅵ群
351	深鉢		6A25	XIIb		沈線	斜縄文	RL				57	ミガキ	雲, 白	7.5YR8/3 浅黄橙	第Ⅵ群
352	深鉢A類	平縁	4D6・8	XIIb	大洞BC～C1	口縁：ヨコナデ	網目状撚糸文		300		312		擦痕	雲, 長, 白	10YR7/4 にぶい黄橙	第Ⅵ群
353	深鉢		6B11	XIIb	大洞BC～C1		網目状撚糸文	R・R				85	ミガキ	雲, 白, 灰	10YR7/4 にぶい黄橙	第Ⅵ群

縄文時代後期～晩期土器観察表（3）

報告番号	器形		グリッド	層位	型式	文様など	地文	原体	大きさ（mm）				内面	胎土	色調	群など
	器種	口縁							口径	器高	最大	底径				
354	深鉢		6B8	XⅡb		無文	（ナデ）	－				79	ナデ	雲，白	7.5YR5/3 にぶい褐	底外葉脈圧痕、第Ⅵ群
355	浅鉢	平縁	7B25、SK95	XⅡa	中屋式	口唇：貼付隆線・斜縄文	斜縄文	LR					ミガキ	雲，白	10YR4/4 褐	第Ⅴ群
356	深鉢 A類	平縁	6B25	XⅡa		口縁ヨコナデ	網目状撚糸文（縦位?）	R・R	312				ミガキ	雲，英，白	10YR6/6 明黄褐	第Ⅵ群
357	深鉢 C類	小波状	5B24	XⅡa		無文	（ナデ）		172				ミガキ	雲，白，海針	10YR6/4 にぶい黄橙	第Ⅵ群
358	壺	平縁	5B25	XⅡ	大洞C1?	無文	（ミガキ）		182				ミガキ	雲，白	N1.5/黒	第Ⅲ群？
359	深鉢 B類	平縁	10A20	XⅡ			斜縄文	LR	142	106	142	50	ミガキ	雲，白	10YR6/3 にぶい黄橙	底外ミガキ、第Ⅵ群
360	台付鉢		11A21	XⅡ			斜縄文、ナデ	LR				86	ナデ	雲，白，赤	7.5YR8/2 灰白	第Ⅵ群？
361	深鉢 B2類	平縁	103C10	XⅠ	大洞BC	羊歯文・沈線	斜縄文	LR					平滑	長，白，灰	10YR7/1 灰白	第Ⅲ群
362	壺		10A14	XⅠc	大洞BC	刺突、沈線	ミガキ、赤色漆						ミガキ、赤色漆	白	2.5YR2/4 極赤褐	第Ⅲ群
363	深鉢 B類	平縁	103D10	XⅠ			撚糸	R・R	335		342		ミガキ	雲，長，英，白	10YR7/3 にぶい黄橙	第Ⅵ群
364	深鉢 A1類	波状	6C7	XⅢb～XV	加曽利B1	多条沈線・の字文・カッコ文、口唇：キザミ	斜縄文	LR					ミガキ	雲，白	7.5YR7/3 にぶい橙	第Ⅰ群
365	深鉢 A類	－	7B9	Ⅷa	大洞B1	三叉文	斜縄文斜縄文	LR					ミガキ	雲，白	10YR6/2 灰黄褐	第Ⅲ群
366	深鉢 B1類	突起？	2D25	B層	大洞BC	羊歯状文、玉抱き入り組み文	斜縄文	RL					ミガキ	雲，白，赤	10YR6/4 にぶい黄橙	第Ⅲ群
367	浅鉢 A類	平縁	崩落土	－	大洞BC～C1	沈線、羊歯状文、雲形文	斜縄文	LR	190				摩耗	雲，海針，白	2.5Y5/1 黄灰	第Ⅳ群
368	深鉢 D類	小波状	G区崩落土			無文	（ナデ）	－	86	137	55	96	ナデ	雲，白，灰	2.5Y6/3 にぶい黄	第Ⅵ群

弥生時代中期土器観察表（1）

報告番号	器形		グリッド	層位	大きさ（mm）				調整	文　様			色調	胎土	備考
	分類	口縁			口径	器高	最大	底径		施文具	外面	内面			
369	壺A類	受口	4D3	灰色粘土	226				口縁ヨコナデ、頸内外ハケメ	櫛	棒状浮文、矢羽状櫛目文、凸帯＋櫛目文2条	無し	10YR8/4 浅黄橙	雲，白，灰	
370	壺A類	受口	4D16・17	F層	196				口縁内ヨコナデ、頸内外ハケメ後ナデ	櫛・篦・棒	矢羽状櫛目文、凸帯＋櫛目文2条	格子状櫛目文	10YR7/3 にぶい黄橙	雲，白，灰	
371	壺A類	受口	4D5・10	灰色粘土	172				口縁内ヨコナデ、頸外ハケメ、頸内ハケメ後ナデ	櫛	矢羽状櫛目文、直線紋・凸帯＋刻み・擬流水文	無し	7.5YR8/2 灰白	雲，白，灰	
372	壺A類	受口	4D4・5，5D1	灰色粘土	176				頸内外ハケメ	櫛	矢羽状櫛目文、凸帯＋矢羽状櫛目文・廉状文・波状文	無し	10YR7/4 にぶい黄橙	雲，灰，赤	
373	壺A類	小波状・受口	3D18	F層	162				口縁ヨコナデ、頸外ハケメ	櫛	無し	櫛目文	10YR8/3 浅黄橙	雲，長，灰，赤	
374	壺A類？		4D9	灰色粘土					頸外ヨコナデ、頸内剝落	棒（断面円）	凸帯＋刺突2条	無し	10YR7/4 にぶい黄橙	雲，白	
375	壺B類	小波状	4C23，4D4・5，5D3	灰色粘土	134				内外ハケメ	篦	刺突	無し	7.5YR8/3 浅黄橙	雲，長，白，灰	
376	壺B類	小波状	4D5・10	灰色粘土	112	330	240	48	口縁ヨコナデ、頸・体外ハケメ、頸内ミガキ、体内ハケメ・ナデ	櫛	無し	櫛目文	2.5YR7/4 淡赤橙	雲，白，灰	
377	壺C類	平縁（面取り）	4C19	灰色粘土	75				外ハケメ、口縁・頸内ハケメ、体内ナデ	櫛	櫛目文	矢羽状櫛目文	10YR8/3 浅黄橙	雲，白，黒	
378	壺B類	平縁	4D5・10、5D1	灰色粘土	160				口縁・頸ヨコナデ	櫛	格子状櫛目文、直線文	無し	10YR7/4 にぶい黄橙	雲，白，灰，赤	
379	壺B類	平縁	4D5・10	灰色粘土	146				内外ハケメ	櫛	矢羽状櫛目文	無し	10YR8/3 浅黄橙	雲，白，灰，赤	
380	壺C類	小波状	4D4	灰色粘土	182				口縁ヨコナデ、頸・体外ハケメ、頸内ハケ後ナデ	櫛	無し	斜行短線文	10YR8/3 浅黄橙	雲，長，白，灰，赤	体内剝落
381	壺C類	小波状	4D8・9・13・14	灰色粘土	150	360	251	70	口縁ヨコナデ、体外ハケメ後ミガキ、体内ハケメ後ナデ	櫛	櫛目文	櫛目文	7.5YR8/3 浅黄橙	雲，白，灰，赤	
382	壺C類	平縁（面取り）	4D5・10	灰色粘土	134	355	240	83	口ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ	櫛	格子状櫛目文	無し	7.5YR8/3 浅黄橙	雲，白，灰	
383	壺C類	小波状	4D5・10	灰色粘土	188	402	270	76	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ・ハケメ	櫛	櫛目文、直線文・廉状文・扇形文	矢羽状櫛目文	10YR8/4 浅黄橙	雲，白，灰，黒	
384	壺D類	小波状	4D5・10	灰色粘土	132	449	318	76	口縁ヨコナデ、頸・体外ハケメ、頸・体内ハケ後ナデ	櫛	櫛目文	櫛目文	7.5YR7/6 橙	雲，白，灰，赤	

弥生時代中期土器観察表（2）

報告番号	器形		グリッド	層位	大きさ（mm）				調整	文　様			色調	胎土	備考
	分類	口縁			口径	器高	最大	底径		施文具	外面	内面			
385	壺D類	平縁（面取り）	4D9・10	灰色粘土	160	399	300	84	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ	－	無し	無し	7.5YR8/2 灰白	雲, 白, 灰	
386	壺D類	小波状	4D5・10	灰色粘土	130	409	283	88	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、内ハケメ後ナデ	櫛	櫛目文	無し	10YR8/4 浅黄橙	雲, 長, 白, 灰	
387	壺F類	平縁	3D14	F層	60				内ハケメ後ナデ	櫛	直線文・廉状文・波状文	無し	10YR7/3 にぶい黄橙	雲, 白, 灰	
388	壺B類	平縁	4D8・13	灰色粘土	78				口縁内ヨコナデ、頸外ハケメ、頸内ナデ	櫛・LR縄文	斜縄文、直線文・廉状文	無し	10YR8/2 灰白	雲, 長, 白・灰・赤	
389	壺C類	小波状	3D20	F層	192				口縁内ハケメ、頸外ハケメ	櫛	直線文・廉状文	櫛目文・廉状文・懸垂文	7.5YR7/4 にぶい橙	雲, 長, 白	内面剥落
390	壺E類	平縁（面取り）	4D5・10	灰色粘土	176				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ	櫛	櫛目文、擬流水文・廉状文	矢羽状櫛目文	7.5YR8/2 灰白	雲, 長, 白, 灰, 赤	
391	壺E類	小波状	4D9, 5D1・9	灰色粘土	288		362		口縁外・頸外・体内外ハケメ	櫛	櫛目文、直線文・廉状文・波状文・扇形文	凸帯＋櫛目文	7.5YR7/6 橙	雲, 長, 赤, 白, 黒	
392	壺E類	小波状	4D11・12・13	灰色粘土	170				内外摩耗	－	無し	無し	10YR8/3 浅黄橙	雲, 白, 赤, 黒	
393	壺E類	平縁（面取り）	5D1	灰色粘土	170		332		口縁・頸ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ	櫛	櫛目文	無し	7.5YR7/4 にぶい橙	雲, 白, 灰	
394	壺E類	平縁（面取り）	4D10	灰色粘土	152		282		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ	－	無し	無し	10YR7/3 にぶい黄橙	雲, 灰, 赤, 黒	
395	壺E類	小波状	4D4, 5D1	灰色粘土	200	355	260	80	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ	櫛	櫛目文、直線文・廉状文・扇形文	矢羽状櫛目文	7.5YR7/4 にぶい橙	雲, 白, 灰, 赤	
396	壺G類	平縁（面取り）	5D1	灰色粘土	90		180	60	口縁ヨコナデ、体外ハケメ後ヘラミガキ、内摩耗	櫛	直線文・廉状文	矢羽状櫛目文	7.5Y8/2 灰白	雲, 白, 灰, 赤	
397	壺E類	小波状	4D7・9	灰色粘土	137			226	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ	櫛	直線文・廉状文	無し	10YR7/3 にぶい黄橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	
398	壺E類	平縁	5D6	灰色粘土	140		192		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ	－	無し	無し	7.5YR8/6 浅黄橙	雲, 白, 灰, 赤	
399	壺C×E類	小波状	3D12	F層	208				口縁ヨコナデ、頸部内外ハケメ	篦	刺突	無し	10YR5/2 灰黄褐	雲, 白, 赤	
400	壺H類	小波状	4D6・11	F層	182				口縁ヨコナデ、体内ナデ	－	無し	無し	7.5YR8/4 浅黄橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	
401	壺H類	小波状	4D8・13	灰色粘土	154				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ	棒（断面円）	刺突	無し	7.5YR8/3 浅黄橙	雲, 長, 白, 灰	
402	壺I類	小波状	4D5	灰色粘土	130				口縁附近ヨコナデ、外ハケメ、内ナデ	櫛	矢羽状櫛目文	櫛目文	10YR8/4 浅黄橙	雲, 白, 灰	
403	壺I類	平縁	2D6・15	D層, F層	140		194		外ハケメ後ナデ、内ナデ	－	無し	無し	7.5YR6/4 にぶい橙	雲, 白, 灰	
404	壺I類	平縁	3D20	F層	140				内ナデ	櫛	矢羽状櫛目文、直線文	無し	10YR8/4 浅黄橙	雲, 長, 石英, 白, 赤	
405	壺C×E類	平縁	不明	F層					口縁ヨコナデ	円形竹管	無し	円形竹管文	7.5YR7/4 にぶい橙	雲, 長, 白, 灰	口縁部小孔2
406	壺J類		3D17	F層					外赤彩、内ナデ	LR縄文, 棒	斜縄文（LR）・沈線	無し	2/5YR4/8 赤	白, 灰, 赤, 砂質強い	
407	壺J類		3D6	F層					外ミガキ、内ナデ	棒	沈線	無し	7.5YR6/4 にぶい橙	雲, 長, 白, 灰	
408	壺J類		3D24	F層					内ナデ	棒	斜縄文・沈線	無し	7.5YR5/6 橙	雲, 長, 白, 灰	
409	壺J類		2D15	F層					内ナデ	LR縄文, 棒	斜縄文・沈線（鋸歯状）	無し	2.5Y8/3 淡黄	雲, 白	
410	壺J類	平縁（面取り）	4D4	灰色粘土	98		151		外ヘラミガキ、内ナデ	LR縄文, 棒	斜縄文・沈線	無し	10YR8/2 灰白	雲, 白, 赤	
411	壺J類		4D5	灰色粘土			170	70	外ヘラミガキ、内ナデ	LR縄文, 棒	斜縄文・沈線	無し	10YR8/2 灰白	雲, 白, 赤	
412	壺J類		4D5・10	灰色粘土					内ナデ	LR縄文, 棒	斜縄文, 三角形刺突				
413	壺J類		3D8	F層			104	52	体外ハケメ後ナデ、体内ナデ	棒	三角形刺突	無し	10YR5/4 にぶい黄褐	雲, 長, 白, 灰	
414	壺K類	平縁	4D5	灰色粘土	48				外ナデ×ミガキ、内ナデ	棒	並行沈線（直線）	無し	10YR6/1 褐灰	雲, 白, 赤	
415	鉢A類	小波状	4D12	F層	64	49	－	40	外ナデ、内ハケメ後ナデ	櫛	櫛目文	無し	2.5Y2/1 黒	雲, 白	
416	鉢A類	平縁	5D2・7	灰色粘土	86		94		口縁ヨコナデ、体内外ハケメ後ナデ	－	無し	無し	10YR8/4 浅黄橙	雲, 白, 灰	口縁部小孔2
417	鉢B類	平縁	3D13	F層	210				口縁ヨコナデ、内外ハケメ後ナデ	櫛、円形竹管	格子状櫛目文、竹管文	無し	10YR8/3 浅黄橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	

弥生時代中期土器観察表（3）

報告番号	器形		グリッド	層位	大きさ（mm）				調整	文　様			色調	胎土	備考
	分類	口縁			口径	器高	最大	底径		施文具	外面	内面			
418	鉢B類		3D25	F層					ハケメ	－	無し	無し	10YR8/3 浅黄橙	雲, 白, 灰	
419	鉢B類	平縁	4D21	F層	190				口縁外ヨコナデ、体外ハケメ、内ハケメ	－	無し	無し	10YR7/3 にぶい黄橙	雲, 白, 赤	
420	鉢A類	小波状	3D20	F層	145	98		61	口縁ヨコナデ、体外ナデ、体内ハケメ後ナデ	櫛	櫛目文	無し	10YR8/3 浅黄橙	雲, 長, 赤, 白	
421	鉢A類	平縁	4D8・9・13	灰色粘土	168	108		68	口縁外ヨコナデ、体外ハケメ、内ハケメ・ナデ	櫛	櫛目文	無し	7.5YR8/3 浅黄橙	雲, 白, 灰, 赤	
422	鉢A類	平縁（面取り）	5D6	灰色粘土	146	128		57	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ	－	無し	無し	7.5YR8/2 灰白	雲, 白, 灰	
423	釜A類	小波状	4D10・15	灰色粘土	274		339		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、内ハケメ・ナデ	－	無し	無し	2.5Y7/3 浅黄	雲, 白, 灰	
424	釜A類	小波状	5D1・2	灰色粘土	210	260	216	64	外ハケメ、口縁内ヨコナデ、体内ハケメ後ナデ	－	無し	無し	7.5YR8/2 灰白	雲, 白, 灰	底部焼成後穿孔
425	釜A類	小波状	4D16	F層	216		192		口縁ヨコナデ、外ハケメ、内ハケメ後ヨコナデ	櫛	櫛目文	無し	10YR7/3 にぶい黄橙	雲, 白, 黒	
426	釜A類	小波状	4D8・13	灰色粘土	210	266	214	66	口縁外ヨコナデ、体外ハケメ、口内ハケメ、体内ナデ	－	無し	無し	10YR7/3 にぶい黄橙	雲, 長, 白, 黒	
427	釜A類	小波状	4D10・5D6	灰色粘土	224	292	225	74	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ	櫛	無し	櫛目文	10YR8/3 浅黄橙	雲, 長, 白, 灰	底部焼成後穿孔
428	釜A類	小波状	4D11	灰色粘土	218			222	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、内ナデ	櫛	無し	櫛目文	7.5YR7/4 にぶい橙	雲, 白, 赤	
429	釜A類	小波状	5D6	灰色粘土	172	257	197	63	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ	－	無し	無し	10YR8/4 浅黄橙	雲, 白, 灰, 赤	底部焼成後穿孔
430	釜A類	小波状	4C23, 4D4・5	灰色粘土					口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ	櫛	無し	矢羽状櫛目文	10YR5/3 にぶい黄褐	雲, 長, 白	
431	釜A類	小波状	4D12	F層	220		224		口縁ヨコナデ、外ハケメ、内ナデ	－	無し	無し			
432	釜A類	平縁（面取り）	3D20	F層	228		270		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ	櫛	櫛目文	無し	7.5YR8/3 浅黄橙	雲, 長, 白, 灰	
433	釜A類	平縁（面取り）	3D11	F層	193		208		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ	－	無し	無し	7.5YR7/6 橙	雲, 白, 赤	
434	釜A類	平縁（面取り）	3D20, 4D16	F層					口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ	－	無し	無し	10YR6/3 にぶい黄橙	雲, 白, 灰	
435	釜A類	小波状	5D6	灰色粘土	168		144		口縁ヨコナデ、外ハケメ、内ナデ	櫛	無し	櫛目文	7.5YR8/2 灰白	雲, 白, 灰	
436	釜A類	小波状	4D8・13、5D6	灰色粘土	193		162		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ	櫛	無し	櫛目文	10YR7/3 にぶい黄橙	雲, 長, 石英, 白, 灰	
437	釜A類	平縁（面取り）	4D20	F層	188	286	191	64	口縁外ヨコナデ、体外ハケメ、口縁内ハケメ、体内ハケメ・ナデ	－	無し	無し	7.5YR8/3 浅黄橙	雲, 白, 黒	底部焼成後穿孔
438	釜A類	平縁（面取り）	4D17	灰色粘土	158	231	170	62	外ハケメ、口縁内ナデ、体内ハケメ・ナデ	－	無し	無し	10YR6/3 にぶい黄橙	雲, 白, 灰	
439	釜E類	小波状・受口	4D9・10	灰色粘土	188		210		外ハケメ、口縁内ハケメ後ヨコナデ、体内ハケメ・ナデ	櫛	櫛目文	無し	10YR6/4 にぶい黄橙	雲, 白, 黒	
440	釜B類	小波状	4D5・10	灰色粘土	248	327	252	70	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ	櫛	櫛目文、直線文・廉状文	無し	10YR8/2 灰白	雲, 白, 灰	
441	釜B類	小波状	4D5・10	灰色粘土	330	340	338	96	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ	櫛	櫛目文、擬流水文・廉状文	無し	7.5YR8/4 浅黄橙	雲, 白, 灰	
442	釜B類	小波状	4D4	灰色粘土	242				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ	櫛	直線文・廉状文・波状文	矢羽状櫛目文	2.5Y7/2 浅黄	雲, 白, 灰	
443	釜B類	平縁	4D8・13, 5D6	灰色粘土	272				外ハケメ、口縁内ハケメ、体内ナデ	櫛	櫛目文、直線文	矢羽状櫛目文	7.5YR8/3 浅黄橙	白・灰・黒（丸い）	
444	釜B類	平縁（面取り）	4D12・17	F層	208		198		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ	櫛	櫛目文、直線文・波状文	無し	7.5YR6/4 にぶい橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	
445	釜B類	平縁（面取り）	4D11・16	F層	194				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ	櫛	格子状櫛目文・直線文・廉状文	懸垂文	10YR8/3 浅黄橙	雲, 白, 灰	
446	釜B類	小波状	4D5・10	灰色粘土	190		166		外ハケメ、口縁内ハケメ後ヨコナデ、体内ナデ	櫛	直線文・廉状文	櫛目文、懸垂文	7.5YR6/6 橙	雲, 白, 灰, 赤	

弥生時代中期土器観察表（4）

報告番号	器形		グリッド	層位	大きさ（mm）				調整	文　様			色調	胎土	備考
	分類	口縁			口径	器高	最大	底径		施文具	外面	内面			
447	釜B類	小波状	4D9・10	灰色粘土	172		158		口縁ヨコナデ、外ハケメ、内ナデ	櫛	櫛目文・廉状文・直線文	無し	10YR7/3にぶい黄橙	雲, 白, 褐色粒	
448	釜C類	小波状	4D9・14	F層	168				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ	－	無し	無し	10YR4/2灰黄褐	雲, 白	ハケメが栗林式風
449	釜C類	小波状	4D4	灰色粘土	158		168		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ	櫛	直線文・懸垂文・蛇行懸垂文	櫛目文2列	10YR7/3にぶい黄橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	
450	釜C類	平縁（面取り）	3D12	F層	180				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ	櫛	廉状文・波状文・懸垂文	無し	5YR6/4にぶい橙	雲, 白	
451	釜C類	平縁（面取り）	5D6	灰色粘土	138		158		外ハケメ、口縁内ハケメ、体内ナデ	櫛	櫛目文、直線文・蛇行懸垂文・扇形文	無し	7.5YR7/4にぶい橙	雲, 白	
452	釜C類	小波状	3D20	F層	200		210		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ	櫛、棒	三角形刺突	櫛目文	10YR5/3にぶい黄褐	雲, 白, 褐色粒	
453	釜D類	平縁	3D11	F層					内外摩耗	櫛	並行沈線（直線・鋸歯状）	沈線（直線・弧状）	10YR6/2灰黄褐色	雲, 白	
454	壺C類	平縁	2D10・15、3D8・11・25、4C17ほか	B層・D層・23層・Ⅳb層	240				口縁外ハケメ、口縁内ミガキ、頸部内外ミガキ	櫛	櫛目文、凸帯＋格子状櫛目文	円形浮文・矢羽状櫛目文	7.5YR6/6橙	雲, 長, 白, 灰	
455	壺A類	平縁	2D25, 2E5	B層	181				口縁ヨコナデ、頸内外ハケメ	櫛	櫛目文、擬流水文	無し	7.5YR8/2灰白	雲, 白, 灰, 赤	
456	釜A類	平縁	6C12	23層	128	185	126	48	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体外ハケメ・ナデ	－	無し	無し	7.5YR7/4にぶい橙	雲, 長, 白, 赤, 黒	底部穿孔
457	釜A類		5C8	SD51-1層			96	62	外ミガキ?、内ナデ	－	無し	無し	10YR8/3浅黄橙	雲, 白	
458	釜B類	小波状	4B24	Ⅶ層	160		136		口縁ヨコナデ、体内外ハケメ	櫛	櫛目文、直線文・廉状文・斜行短線文	矢羽状櫛目文・円形浮文	7.5YR7/4にぶい橙	雲, 長, 白, 赤	
459	高杯		7B22, 7C2	⑥層				174	内外ハケメ後ミガキ	櫛・篦	櫛目文・凸帯	櫛目文	7.5YR5/2灰褐	雲, 長, 白, 黒	
460	高杯		7C2	⑥層				123	外ナデ、内ハケメ後ナデ	櫛・篦	櫛目文、懸垂文	無し	2.5Y7/3浅黄	雲, 白, 灰, 赤	
461	鉢B類	平縁	4D13	Ⅳb層	(243)				外ナデ、内ハケメ後ナデ	LR縄文	斜縄文	無し	2.5Y7/3浅黄	雲, 白, 灰, 赤	
462	無頸壺	平縁	3D6	B層	168		186		内外ハケメ後ナデ	－	円形浮文	無し	10YR8/3浅黄橙	雲, 白, 灰	
463	釜C類	平縁	1E10	A層	92				摩耗	棒	沈線（多条、方形）	無し	7.5YR4/2灰褐	雲, 白	
464	壺K類	平縁	8B16	SD51-3層	133				内外ナデ	棒	並行沈線(弧状)	並行沈線(波状)	10YR7/2にぶい黄橙	白, 灰	
465	壺K類	平縁	7C1	Ⅵb層	59				口縁・頸外ヨコナデ、頸内ハケメ、体内外ナデ	棒	沈線（弧状）	無し	10YR7/2にぶい黄橙	雲, 白, 黒	
466	壺K類		9A20	XⅢc層					外ナデ、頸内ミガキ、体内ナデ	棒	並行沈線(直線)	無し	10YR7/3にぶい黄橙	雲, 白, 灰	
467	台付鉢		3D15	21層				76	内ナデ	LR縄文、棒	斜縄文・並行沈線	無し	10YR8/2灰白	雲, 白, 黒	

弥生時代中期土器観察表（5）

報告番号	器種	グリッド	層位	文様など	地文	原体	口径(mm)	内面	胎土	色調	備　考
468	深鉢	5B18、9B12・18ほか	SD51-3層、⑥層、23層ほか	櫛描波状文3段	斜縄文・条痕文	LR	268	ナデ	雲, 白	10YR2/1黒?	
469	壺?	3D8	21層	多条沈線・刺突	斜縄文	LR		擦痕	雲, 白, 赤	10YR6/3にぶい黄橙	胎土砂質強い
470	深鉢	5A24	SD46-2層	多条沈線	斜縄文	LR		ナデ	雲, 白	10YR4/1褐灰	胎土砂質強い
471	壺	9B24	SD50-3層	多条沈線	斜縄文	LR		ナデ	雲, 白	10YR7/3にぶい黄橙	胎土砂質強い
472	壺	9B20	SD50-3層	多条沈線	斜縄文	LR		ナデ	雲, 白	10YR6/2灰黄褐	胎土砂質強い
473	深鉢	5C24	Ⅳ～23層	広義の磨消縄文	斜縄文	RL		ミガキ	雲, 白, 灰	10YR4/1褐灰	
474	深鉢	9B25	23層	広義の磨消縄文	斜縄文	LR		ミガキ	雲, 白	10YR3/1黒褐	
475	深鉢	9B18	23層	広義の磨消縄文	斜縄文	LR		ナデ	雲, 白	10YR4/2灰黄褐	
476	深鉢	9B21	23層	広義の磨消縄文	斜縄文	LR		ナデ	雲, 白	10YR4/2灰黄褐	
477	深鉢	9B19	SD50-3層	広義の磨消縄文	斜縄文	LR		ナデ	雲, 白	10YR2/2黒褐	
478	深鉢	5B18、9B15	SD50-3層、SD51-2層	広義の磨消縄文	斜縄文	LR		ナデ	雲, 白	10YR7/3にぶい黄橙	
479	深鉢	9B19	SD50-3層	広義の磨消縄文	斜縄文	LR		ナデ	雲, 白	10YR4/2灰黄褐	
480	深鉢	Bベルトトレンチ		広義の磨消縄文	斜縄文	LR		ナデ	雲, 白	10YR6/2灰黄褐	
481	高杯	5B16	20層	広義の磨消縄文	斜縄文	LR		ナデ	雲, 白	10YR7/4にぶい黄橙	胎土砂質強い
482	深鉢	9B23	23層	広義の磨消縄文	斜縄文	LR		ナデ	雲, 白	7.5YR6/3にぶい褐	

弥生時代後期～古墳時代土器観察表（1）

報告番号	器種	グリッド	遺構	層位	大きさ（mm）				調整	文様	色調	胎土	備考
					口径	器高	最大径	底径					
483	釜C1類	8B21	SD50	3層	168				口縁ヨコナデ、体外摩耗、体内ナデ	擬凹線	7.5YR6/3 にぶい褐	雲, 白, 赤	弥生時代後期
484	釜A類	7B24	SD50	3層	180				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラケズリ	擬凹線	7.5YR7/3 にぶい橙	雲, 長, 白	弥生時代後期
485	釜A類	10B14	SD50	3層	186				口縁ヨコナデ、体内ヘラケズリ	擬凹線	7.5YR6/3 にぶい褐	雲, 長, 白, 赤, 黒	指頭圧痕無し
486	釜A類	9B20, 10B11	SD50	3層	168				口縁ヨコナデ、体内ヘラケズリ	擬凹線	10YR7/4 にぶい黄橙	雲, 白, 灰, 赤	指頭圧痕無し
487	釜A類	10B13ほか	SD50	3層	144				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ヘラケズリ	擬凹線・頸部刺突	10YR7/3 にぶい黄橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	指頭圧痕無し
488	釜A類	10B7・12	SD50	3層	147				口縁ヨコナデ、体内ヘラケズリ	擬凹線	7.5YR8/4 浅黄橙	雲, 灰, 赤	指頭圧痕無し
489	釜B類	10B12	SD50	3層	168				口縁ヨコナデ、体内外ハケメ		10YR7/2 にぶい黄橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	
490	釜A類	9B20	SD50	3層	152				口縁ヨコナデ	擬凹線	10YR6/4 にぶい黄橙	雲, 長, 白, 灰	
491	釜B類	6B14	SD50	3層	118				口縁ヨコナデ、体内ハケメ・ヘラケズリ		10YR5/3 にぶい黄橙	雲, 灰, 赤	
492	釜N類	8B24	SD50	3層					内外ナデ	斜縄文（RL縄文）・並行沈線（直線・弧状）	10YR7/2 にぶい黄橙	白, 灰	天王山式
493	釜H類	10B17・18・22	SD50	3層	180				口縁ヨコナデ、体外叩き、体内ヘラケズリ		10YR6/4 にぶい黄橙	雲, 白, 赤	
494	釜C1類	6B13	SD50	3層	192				口縁ヨコナデ、体内ハケメ		10YR6/3 にぶい黄橙	雲, 長, 灰	
495	釜C1類	7B14	SD50	3層	177				内外ヨコナデ		10YR7/2 にぶい黄橙	雲, 長, 白	
496	釜C1類	7B15	SD50	3層	180				口縁ヨコナデ	口端刺突	10YR5/4 にぶい黄褐	雲, 白, 灰, 赤	弥生時代後期
497	釜C1類	6B19, 7B20 ほか	SD50	3層	140		184		口縁ヨコナデ、体ハケメ		10YR6/4 にぶい黄橙	白, 赤	釜F類の可能性がある
498	釜C2類	8B19	SD50	3層	178		222		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラナデ・ナデ		7.5YR7/4 にぶい橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	
499	釜C2類	8B18・19・24	SD50	3層	164		189		外ハケメ、口縁内ハケメ、体内ナデ		10YR6/4 にぶい黄橙	雲, 白, 灰	
500	釜C2類	7B25	SD51	3層	132		217		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	
501	釜C2類	7B16	SD50	3層	180				口縁ヨコナデ、体部ハケメ		10YR6/4 にぶい黄橙	雲, 白, 赤	
502	釜C2類		SD50	3層	168				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ		7.5YR5/6 明褐色	雲, 長, 白	
503	釜C3類	7B14・8B16 ほか	SD50	3層	178	238			口縁ヨコナデ、体ハケメ		7.5YR7/4 にぶい橙	雲, 長, 白, 灰, 黒	
504	釜F類	7B12・19	SD50	3層	166				口縁ヨコナデ、体内外ハケメ		10YR6/3 にぶい黄橙	雲, 白, 灰	
505	釜C2類	6B7・8・12	SD50	1·3層	158		174		口縁ヨコナデ、体ハケメ		10YR8/3 浅黄橙	雲, 白, 灰	
506	釜C2類	8B11・16	SD50	3層	162				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ		10YR6/4 にぶい黄橙	雲, 白	
507	釜C3類	8B17	SD50	3層	146				口縁ヨコナデ、体ハケメ		10YR6/4 にぶい黄橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	
508	釜C3類	6B13	SD50	3層	178		184		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ヘラナデ・ヘラケズリ		10YR7/4 にぶい黄橙	雲, 白, 灰	
509	釜C3類	5B5	SD51	3層	156				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラケズリ		7.5YR7/6 橙	長, 白, 赤	
510	釜C3類	6B14・15	SD50	3層	142		182		口縁ヨコナデ、体外ハケメ・ナデ、体内ハケメ後ナデ		10YR4/3 にぶい黄褐	雲, 白, 黒	
511	釜C3類	6B8	SD50	3層	164		174		口縁ヨコナデ、体外ハケメ。胎内ナデ×ヘラナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	雲, 白, 灰	
512	釜C3類	9B17	SD83	3層	142		131		口縁ヨコナデ、体外ハケメ		7.5YR8/4 浅黄橙	雲, 白, 赤	
513	釜C3類	8B16	SD50	3層	118		146		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ		7.5YR5/3 にぶい褐	雲, 長, 灰	
514	釜C3類	9B15・18・19・22	SD50・83	3層	76	63	78	40	口縁ヨコナデ、体外縮れ、体内ナデ		5YR6/6橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	
515	壺E類?	9B15	SD50	3層			72	34	体外ヘラミガキ、体内ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙	長, 白	
516	壺G類	8B16	SD50	3層	58	66	88	21	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		10YR6/2 灰黄褐	雲, 白	
517	鉢E類	9B15	SD50	3層	126	74		丸底	口縁ヨコナデ、体内外ヘラケズリ・ヘラミガキ		2.5Y7/2灰黄	雲, 長, 白, 灰	
518	鉢D類	9B18	SD50	3層	78	40		34	外ナデ、内ハケ後ナデ		7.5YR8/5 浅黄橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	
519	鉢D類	9B17	SD50	3層	55	38	63	46	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	雲, 白, 灰	
520	壺L類	6B6	SD51	3層	128				口縁ヘラミガキ、体外ヘラミガキ、体内ヘラケズリ	擬凹線	10YR8/3 浅黄橙	雲, 白, 灰, 赤	

弥生時代後期～古墳時代土器観察表（2）

報告番号	器種	グリッド	遺構	層位	大きさ（mm）				調整	文様	色調	胎土	備考
					口径	器高	最大径	底径					
521	壺L類	11B6	SD83	3層	116	93	116	丸	外赤彩・ヘラミガキ、口縁内ヘラミガキ、体外ヘラケズリ・ハケメ・ナデ・ヘラナデ	擬凹線	10R4/8赤	白	
522	壺K類	6B15	SD50	3層	134				口縁外ヘラミガキ、口縁内ヨコナデ、体ハケメ		10YR6/4にぶい黄橙	雲, 白, 灰	
523	壺L類		SD50	3層	168				口縁外ヨコナデ、口縁内ハケメ、体内ヘラナデ		10YR6/4にぶい黄橙	雲, 白, 灰	
524	壺L類	7B11・15, 9B11・12・16・18	SD50	3層	150	214	222	22	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		10YR6/4にぶい黄橙	雲, 白, 黒	
525	壺L類	9B15, 10B11・13	SD50	3層			300	54	口縁ヨコナデ、体外ヘラミガキ、体内ナデ・ハケメ		10YR7/3にぶい黄橙	雲, 長, 白, 灰	
526	壺I類	6B6, 7B12	SD50	3層	193				口縁内ヘラミガキ、他摩耗	円形竹管文	7.5YR8/2灰白	白, 灰, 赤	
527	壺I類	7B13・14	SD50	3層	124	248	233	65	口縁ヨコナデ、外ハケメ、内ナデ・ハケメ		7.5YR7/4にぶい橙	雲, 白, 灰	
528	壺I類	6B8・14他	SD50	3層	142				口縁ヨコナデ、頸・体内ハケメ		10YR7/4にぶい黄橙	雲, 長, 白	
529	壺M類	8B16	SD50	3層	316				内外赤彩・ヘラミガキ	円形浮文	7.5R4/6赤	雲, 白	
530	壺C類	5C8, 6B3・24	SD50	3層				234	外ヘラミガキ、内ナデ	擬凹線	10YR7/3にぶい黄橙	雲, 白, 灰	弥生時代後期
531	壺K類	6B10	SD50	3層	127				外ヘラミガキ、内ヨコナデ		7.5YR7/6橙	雲, 長, 白, 灰	
532	壺K類	5C8・14・20、9B20	SD50	3層	146				口縁赤彩・ヘラミガキ、頸外ハケ後ヘラミガキ、頸内ハケメ、体外ヘラミガキ、体内ハケメ		10YR7/4にぶい黄橙	雲, 白, 灰, 赤	弥生時代後期?
533	壺N類	8B17	SD50	3層	148				口縁内外ヘラミガキ、体外ハケメ後ナデ、体内ナデ		10YR7/3にぶい黄橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	
534	壺V類	10B14	SD50	3層	150				口縁ハケメ後ヨコナデ		7.5YR7/4にぶい橙	雲, 白, 赤, 黒	
535 536	壺R類		SD50	1·3層	92		126	21	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ		7.5YR6/3にぶい褐	雲, 長（多), 灰	
537	壺R類	7B14	SD50	3層	100				口縁・体外ヘラミガキ、体内ナデ		10YR7/6明黄褐	雲, 長, 白	
538	壺Ｉ類	7B12	SD50	3層	102		111		外ヘラミガキ、口縁内ヨコナデ、体内ハケメ・ナデ		10YR6/4にぶい黄橙	雲, 白, 灰	
539	壺L×N類	11B10	SD50	3層	166				口縁ヨコナデ	擬凹線	7.5YR7/4にぶい橙	雲, 白, 赤, 灰	
540	鉢A類	9B17・11B10	SD50	3層	141				内外ヘラミガキ		10YR7/4にぶい黄橙	雲, 白, 灰	高杯B類の可能性がある
541	高杯B類	B区	SD50	3層	164				杯部・脚外ハケメ後ヘラミガキ、脚内ナデ		10YR6/4にぶい黄橙	雲, 白	
542	高杯B類	6B15	SD50	3層	132				内外ヘラミガキ		10YR6/4にぶい黄橙	雲, 白, 灰	
543	高杯A類		SD50	3層	208				口縁ヨコナデ、杯下・脚外ヘラミガキ		7.5YR8/4浅黄橙	雲, 白, 灰	弥生時代後期
544	高杯	5B23	SD51	3層					外赤彩・ヘラミガキ、内ナデ		10YR7/3にぶい黄橙	白, 灰	
545	高杯A類	8B19	SD50	3層	248				内外ヘラミガキ	擬凹線	10YR7/4にぶい黄橙	雲, 白, 灰	弥生時代後期
546	高杯A類	8B11・16・17・19ほか	SD50	3層				136	杯部ハケメ後ヘラミガキ、脚外ヘラミガキ、脚内ナデ·ヘラミガキ		10YR6/4にぶい黄橙	雲, 白, 灰	弥生時代後期
547	高杯B類	6B11・13・14・15・19	SD50	3層	258				内外ヘラミガキ	擬凹線	10YR7/4にぶい黄橙	雲, 白, 灰, 赤	
548	高杯A類	6B15	SD50	3層					杯部・脚外ヘラミガキ、脚内ナデ		10YR6/4にぶい黄橙	雲, 長, 灰, 赤	
549	蓋A類	11B16	SD83	3層	48	43	82	18			10YR8/3浅黄橙	白, 灰	器面摩耗
550	蓋B類	10B13	SD50	3層	132	52		38	外赤彩・ヘラミガキ、内ヘラミガキ		7.5R4/6赤	雲, 白, 灰, 赤	
551	高杯A類		SK55, SD83	3層	316				外・杯内ヘラミガキ・赤彩、脚内ハケ後ナデ		10R5/6赤	雲, 長, 白, 灰	
552	高杯C類	7B17	SD50	3層	208	120	126		外・杯内赤彩・ヘラミガキ、脚内ナデ・ハケメ・ヨコナデ		10R6/6赤橙	雲, 白, 灰	
553	高杯C類	10B14・15·16·25ほか	SD50	3層	212				内外ヘラミガキ		7.5YR7/6橙	雲, 長, 英, 白, 灰, 赤	
554	高杯F2類	6B13・22	SD50	3層				184	杯・脚外ヘラミガキ、脚内ナデ・ハケメ		10YR6/4にぶい黄橙	雲, 長, 白	
555	高杯F2類	8B16	SD50	3層	142				内外ヘラミガキ		10YR7/2にぶい黄橙	雲, 白, 赤, 黒	
556	高杯C類	10B14	SD50	3層	136				脚外ヘラミガキ、脚内ナデ·ヨコナデ		7.5YR6/4にぶい橙	雲, 白, 赤	
557	高杯F類	6B8	SD50	3層					内ヘラミガキ	櫛目文・直線文	10YR8/2灰白	白（少量）	
558	器台C類	9B18	SD83	3層	215	118		110	内外赤彩・ヘラミガキ		10R5/8赤	長, 白, 赤	
559	器台C類	7B1・20, 9B10他	SD50	3層ほか	219				外・受内赤彩・ヘラミガキ、脚内ナデ		2.5YR5/6明赤褐	雲, 白, 灰, 赤（大）	

弥生時代後期～古墳時代土器観察表（3）

報告番号	器種	グリッド	遺構	層位	大きさ（mm）				調整	文様	色調	胎土	備考
					口径	器高	最大径	底径					
560	器台K類	7B12	SD50	3層	106	103	122		外・受部ヘラミガキ、脚内ナデ・ヘラミガキ		10YR5/2 灰黄褐	雲, 長, 白, 灰, 赤	
561	器台K類		SD50	3層	68	77		93	外・受内ヘラミガキ、脚内ナデ・ヘラミガキ		7.5YR7/4 にぶい橙	雲, 長, 白, 灰	
562	釜A類	10B18・24		23層	164				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラケズリ	擬凹線	7.5YR8/4 浅黄橙	雲, 長, 赤	指頭圧痕無し
563	釜B類	7B22		23層	167				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		7.5YR8/3 浅黄橙	雲, 白, 赤	
564	釜B類	9B22		23層	237				口縁外ヨコナデ、体外ハケメ、内摩耗		5YR8/8橙	雲, 白, 灰	
565	釜C1類	7B24		23層	133	186	162	34	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ヘラナデ	擬凹線	5YR7/4 にぶい橙	長, 雲, 白, 灰, 赤	弥生時代後期
566	釜E類	7C1		23層	152				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラケズリ・ハケメ	擬凹線・波状文・刺突・直線文	7.5YR7/4 にぶい橙	雲, 長, 白, 赤	弥生時代後期
567	釜E類	8B23		23層	165	278	197	42	口縁ヨコナデ、体ハケメ	刺突	7.5YR8/3 浅黄橙	灰, 赤	弥生時代後期
568	釜E類	6C5		23層	118	205	170	44	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ・ハケメ		10YR7/4 にぶい黄橙	雲, 白, 灰, 赤	弥生時代後期
569	釜C1類	7B21, 7C1		23層	158		206		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ・ヘラケズリ	刺突	7.5YR8/3 浅黄橙	雲, 赤, 白	
570	釜C1類	9B21		23層	126				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ		10YR8/1 灰白	雲, 白, 赤	
571	釜C1類	7B22		23層	171				口縁ヨコナデ、体外ハケメ		7.5YR7/4 にぶい橙	雲, 白	
572	釜C1類	8B21		23層	194		216		口縁ヨコナデ､体外ハケメ､､体内ハケメ後ナデ		10YR8/2 灰白	雲, 長, 白, 灰, 赤	弥生時代後期
573	釜C2類	6B12		23層	168				口縁ヨコナデ、体ハケメ		10YR6/4 にぶい黄橙	雲, 白, 灰	
574	釜C2類	6B25・7B21		23層	142				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		10YR6/4 にぶい黄橙	雲, 白, 灰, 赤	
575	釜C2類	10B25		23層	136				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		10YR6/4 にぶい黄橙	雲, 長, 白, 赤	
576	釜C2類	7B22		23層	214		234		口縁外ヨコナデ、体外ハケメ、内摩耗		7.5YR7/6 橙	雲, 白, 赤	
577	釜C3類	7B23		23層	218				口縁ヨコナデ、体ハケメ		10YR6/6 明黄褐	雲, 白, 灰	
578	釜C3類	4C25		23層	246				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙	雲, 長, 白, 灰	
579	釜C3類	6B12・16・17		23層	142		214		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ		10YR5/3 にぶい黄橙	雲, 長, 白, 赤	
580	釜C3類	6B12		23層	170				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラナデ		10YR5/2 灰黄褐	白、砂質強い	
581	釜C2類	7B22		23層	138		162	52	口縁ヨコナデ、体ハケメ		7.5YR8/1 灰白	雲, 長, 白, 灰, 赤	
582	釜C1類	7B9・24		23層	153		156		口縁ヨコナデ、体内外ハケメ		10YR7/4 にぶい黄橙	雲, 灰, 赤	
583	釜C1類	9B18・19		23層	134		136		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラナデ		7.5YR6/4 にぶい橙	長, 雲, 白	
584	釜C1類	7B24		23層	144				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラナデ		7.5YR6/6 橙	雲, 白, 赤	
585	釜C2類	7B22		23層	120				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、内ヘラケズリ		7.5YR7/4 にぶい橙	雲, 長, 白, 赤	
586	釜N類	10B24		23層			62		口縁内ヨコナデ、体内ハケメ	外撚・刺突	7.5YR7/4 にぶい橙	長（多), 白	弥生時代後期
587	釜C3類	8B21		23層	121	111	112	22	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラナデ・ハケメ		7.5YR8/4 浅黄橙	白, 灰, 赤	弥生時代後期
588	釜C3類	8B24		23層	130		150		口縁ヨコナデ、体内外ハケメ		7.5YR8/2 灰白	雲, 白, 灰, 赤	
589	釜C3類	7B21		23層	114				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		5YR7/6橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	
590	釜C3類	6B25		23層	93	70	90	丸底	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ミガキ		10YR7/2 にぶい黄橙	雲, 灰, 赤	
591	釜E類	7B21		23層	158				口縁ヨコナデ、体ハケメ	櫛目文・直線文	5YR7/4 にぶい橙	長, 白	弥生時代後期
592	釜E類			23層	174				口縁ヨコナデ	櫛目文	7.5YR8/4 浅黄橙	白, 灰, 赤	弥生時代後期
593	壺L類	6C3		23層	150				口縁内・体外ヘラミガキ	擬凹線	10YR7/4 にぶい黄橙	雲, 赤, 灰	弥生時代後期
594	壺L類	6B24, 6C5		23層	152				口縁ヘラミガキ、体外ハケ後ヨコナデ、体内ナデ		7.5YR8/3 浅黄橙	雲, 白, 灰, 赤	
595	壺L類	6B11		23層	128				内外ヘラミガキ		7.5YR7/3 にぶい橙	雲、長、白	
596	壺L類	10B17		23層	128				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	雲, 灰	
597	壺M類	6C2・5		23層	168				内外ヘラミガキ	刺突	10YR7/3 にぶい黄橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	
598	壺M類	6B19		23層	173				内外ヘラミガキ	円形浮文	10YR6/3 にぶい黄橙	海針, 白, 赤	
599	壺M類	5B9		23層					外ハケメ後ヘラミガキ、口縁内ヘラミガキ、頸内ハケメ、体内ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙	雲, 白	

弥生時代後期～古墳時代土器観察表（4）

報告番号	器種	グリッド	遺構	層位	大きさ（mm）				調整	文様	色調	胎土	備考
					口径	器高	最大径	底径					
600	壺P類	6C9		23層					外ヘラミガキ、内ナデ	直線文・鋸歯状・円形竹管	7.5R4/6赤	灰，赤	
601	壺V類	10B16		23層	158				口縁ヨコナデ、頸・体外ハケメ、頸内ナデ、体内ヘラナデ		10YR8/4 浅黄橙	長，灰	弥生時代後期
602	壺S類	8B22		23層	96				口縁・体外ヘラミガキ、体内ハケメ・ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	長，白，赤	弥生時代後期
603	壺C類	6C3・4・7・8		23層			212	68	外ハケメ後ヘラミガキ、内ハケメ後ナデ		7.5YR7/6 橙	雲，白，赤，黒	弥生時代後期
604	壺I類	7B17		23層	127				口縁ヨコナデ、体外ヘラミガキ、体内ハケメ後ナデ		7.5YR7/4 にぶい橙	雲，白，灰	
605	壺I類	10B19		23層	140				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		10YR5/6 黄褐	雲，長，灰（多）	
606	壺L類	6B20・25		23層	120		142		内外ヘラミガキ、頸内ハケメ		7.5YR7/4 にぶい橙	白（少）	
607	壺E類	7B24		23層	75	78	108	丸底	口縁内･外赤彩･ヘラミガキ、体内ナデ・ハケメ		10R5/6赤	雲，白，灰，赤	口縁部小孔２
608	壺	7B23		23層	124				体外ハケメ後ヘラミガキ、体内ハケメ		10YR8/3 浅黄橙	雲，白，黒	
609	鉢A類	9B19		23層	124				内外赤彩・ヘラミガキ		10Y4/8赤	雲，白，赤	
610	鉢A類	8B19・21・23		23層	155				内外赤彩・ヘラミガキ		10R6/8赤 橙	雲，長，白，灰，赤	
611	鉢A類	7B21・24・25		23層	158		104		内外ヘラミガキ	擬凹線	10YR5/4 にぶい黄褐	英，灰，赤	
612	鉢A類	9B18		23層	156	120			内外ヘラミガキ		7.5R4/8赤	雲，灰（少）	
613	鉢A類	9B18		23層	143	94		60	杯内外・脚外ヘラミガキ、脚内ヨコナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	雲，白，灰，赤，黒	
614	高杯A類	9B16・21・22他		23層	220				外ハケメ・ヘラミガキ、内赤彩・ヘラミガキ	暗文風鋸歯状文	10YR7/4 にぶい黄橙	雲，長，白，灰	弥生時代後期
615	高杯A×器台B×C類	10B21		23層	300				内外摩耗		10YR8/3 浅黄橙	雲，白，灰，赤	弥生時代後期
616	高杯A類	7B24		23層	160	90		68	杯内外・脚外ヘラミガキ、脚内ナデ・ヨコナデ		7.5YR7/4 にぶい橙	雲，白，灰	
617	高杯F類	4C14		23層	121	97		166	杯部・脚外ヘラミガキ、脚内ヘラミガキ・ヨコナデ		10YR6/4 にぶい黄橙	雲，白	
618	蓋B類	4C10		23層				28	内外ヘラミガキ	刺突	7.5YR7/3 にぶい橙	白，灰	
619	高杯C類	7B22		23層				134	杯部・脚外ヘラミガキ、脚内ナデ・ハケメ・ヨコナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	雲，白，灰，赤	
620	高杯C類	7B25		23層			102		外・杯内ヘラミガキ、脚内ナデ	円形透かし８か所	7.5YR8/3 浅黄橙	雲，白，灰	
621	高杯C類	7B17		23層			158		内外ヘラミガキ		7.5YR8/4 浅黄橙	雲，白，灰，赤	
622	器台A類	7B25		23層	164				脚内ハケメ・ナデ、他摩耗		7.5YR7/4 にぶい橙	雲，長，白，灰，赤	弥生時代後期
623	器台A類	7B25		23層					外ヘラミガキ、内ナデ		10YR8/6 黄橙	雲，白，赤	弥生時代後期
624	器台	9B10		23層			156		脚端ヨコナデ、脚外ヘラミガキ、脚内ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	雲，長，白，灰，赤	弥生時代後期
625	器台A類	9B18		23層	129	78		86	外・受内赤彩・ヘラミガキ、脚内ナデ・ハケ後ヘラミガキ	擬凹線	10YR7/3 にぶい黄橙	雲，白，灰	
626	鉢D類	10B17		23層	157	66		54	内外ヘラミガキ		7.5YR7/4 にぶい橙	雲，白，灰，赤	
627	鉢D類	7B21		23層				32	外ナデ、内指頭圧痕		10YR6/4 にぶい黄橙	雲，白，黒	
628	鉢D類	9B18		23層	80	40		36	内外ヘラミガキ		10YR6/4 にぶい黄橙	雲，白	古墳時代中～後期
629	釜a類	6C3	SD51	1層	200		216		外・口縁内摩耗、体内ハケメ後ナデ		7.5YR6/4 にぶい橙	長，白，灰，赤	
630	釜C3類	9B13, 10B12・18	SD83	1層	158				口縁ヨコナデ,体外ハケメ、体内ヘラケズリ		7.5YR8/3 浅黄橙	雲，白，灰，赤	
631	釜C2類	C区	SD83	1層	154	231	215	21	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラナデ・ハケメ・ナデ		10YR7/6 明黄褐	雲，白，灰	
632	釜C3類	9B11	SD83	1層	125	244	212	60	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラナデ・ナデ		7.5YR6/2 灰褐	雲，長，白，赤	
633	釜C3類	10B8	SD83	1層	132		134		口縁外ヘラナデ、体外ハケメ、内ナデ		7.5YR8/4 浅黄橙	雲，白，灰，赤	
634	鉢E類	7B18	SD50	1層	82	69	91	24	口縁ヨコナデ、体外ハケ後ナデ、体内ナデ		10YR5/3 にぶい黄橙	雲，長，白	
635	鉢E類		SD50	1層	70	59	92	25	外ハケメ、口縁内ヨコナデ･体内ハケメ・指頭圧痕・ナデ		7.5YR6/4 にぶい橙	雲，長，白，灰，赤	
636	釜C3類	9B13・18ほか	SD83	1層ほか	208	281	290	80	口縁外ヨコナデ、体外・内ヘラミガキ		10YR7/3 にぶい黄橙	雲，白，灰	壺I類の可能性がある
637	壺O類	10B12	SD83		157	303	290	66	口縁ヨコナデ、体外ヘラミガキ、体内ハケメ	擬凹線、棒状浮文、刺突	10YR7/4 にぶい黄橙	長，雲，赤	
638	壺L類	9B21	SD83	1層	103				内外ヘラミガキ		7.5YR8/3 浅黄橙	雲，白，赤	

弥生時代後期～古墳時代土器観察表（5）

報告番号	器種	グリッド	遺構	層位	大きさ（mm）				調整	文様	色調	胎土	備考
					口径	器高	最大径	底径					
639	高杯C類	9B11	SD83	1層	226				外ハケメ後ヘラミガキ、内ヘラミガキ		5YR8/3淡橙	雲, 白, 赤	
640	高杯H類		SD50	1層	140	115		100	外・杯内赤彩・ヘラミガキ、脚内ヘラミガキ		10R5/8赤	雲, 長, 白	赤彩
641	高杯F類		SD50	1層				236	外ヘラミガキ、内ハケメ・ヨコナデ		10YR7/3にぶい黄橙	雲, 白, 黒	
642	釜C2類	11B16	SD83		163	249	209	34	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ		10YR6/4にぶい黄橙	雲, 長, 白	
643	器台C類	7B10, 8B20	SD50	1·2層	256				外摩耗、内ヘラミガキ		7.5YR7/3にぶい橙	雲, 白, 灰	弥生時代後期
644	高杯F類	6B14	SD50		190				内ヨコナデ	櫛目文・直線文	10YR6/2灰黄褐	長, 灰	
645	釜C2類	5A25, 6A16	SD47	2·5層	180				口縁ヨコナデ、体内外ハケメ		7.5YR7/3にぶい橙	雲, 赤	弥生時代中期の釜の可能性がある
646	釜C1類	5A25, 6A16	SD47	2·5層	176				口縁ヨコナデ、体内外ハケメ	擬凹線	7.5YR3/1黒褐	雲, 白	弥生時代後期
647	釜C1類	6B7	SD46	2層	186				体内ヘラケズリ、他摩耗		7.5YR8/2灰白	雲, 白, 灰, 赤	弥生時代後期
648 649	釜C2類	5A20, 6B24	SD46	2層	270		316	40	口縁外ヨコナデ、口縁内ヘラミガキ、体外ハケメ、体内ナデ		7.5YR6/4にぶい橙	雲, 白, 赤, 灰	
650	壺M類	5A25	SD46	2層					頸ヨコナデ、体外ヘラミガキ、体内ナデ		7.5YR8/3浅黄橙	雲, 白, 灰	
651	釜C2類	8B22ほか	SD50 SK85	3層 3層	149	263	309	40	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ・ハケメ		7.5YR8/4浅黄橙	雲, 長, 白	
652	釜C3類		SK85	3層	180				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラナデ		7.5YR5/6明褐色	雲, 長, 白	
653	釜C3類		SK85	3層	152				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ		7.5YR6/6橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	
654	壺M類		SK85	3層	168				口縁ヨコナデ		7.5YR7/6橙	雲, 白, 灰, 赤	頸部摩耗
655	高杯F類	3D20	SK70		112				内外ヘラミガキ		5YR6/6橙	英, 白, 赤	
656	鉢D類	3D25	SK70		129	78		4.4	口縁外ヨコナデ、体外ハケメ・ヘラミガキ、内ヘラミガキ		7.5YR7/4にぶい橙	白, 赤	
657	壺L類	3D25	SK70		117				口縁・体外ヘラミガキ、体内ナデ		5YR8/4淡橙	雲, 白, 灰, 赤	
658	壺G類	3D25	SK70		36	39	44	20	口縁·体外赤彩·ヘラミガキ、体内ナデ		10YR7/3にぶい黄橙	雲, 白, 灰	
659	壺G類	3D25	SK70		70	71	65	35	口縁ヨコナデ、体ハケメ・ナデ		7.5YR7/6橙	雲, 長, 白, 灰, 赤	
660	（壺C×E類）	3D25	SK70		130				口縁ヨコナデ	櫛目文	5Y7/6橙	雲, 白, 灰	弥生時代中期
661	釜C3類		SK55	3層	192	258	216	26	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ		10YR7/3にぶい黄橙	雲, 白, 灰, 黒	
662	壺N類		SK55	3·5層	159	300	222	69	口縁・体外ヘラミガキ、体内ヘラケズリ		10YR8/2灰白	雲, 長, 英	
663	鉢M類	6C3・4	SK55	23層	300				口縁外ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラミガキ		7.5YR7/4にぶい橙	長, 白, 赤	
664	壺Q類		SK55	3層	98	132	145	丸	口縁ヨコナデ、体外ハケ後ナデ・体内ナデ・ハケメ		10YR7/3にぶい黄橙	白, 灰	
665	鉢C類		SK55	3層				24	外ヘラケズリ、内ヘラナデ·ナデ		7.5YR7/3にぶい橙	白, 灰, 赤	
666	釜C3類		SD33	3層	131	163	144	30	口縁ヨコナデ、体ハケメ		10YR7/3にぶい黄橙	雲, 長, 白	
667 668	釜C1類		SD33	2層				60	口縁ヨコナデ、体ハケメ	擬凹線	10YR8/3浅黄橙	雲, 長, 白	弥生時代後期
669	器台A×C類	8B9	SD33	3層				102	受け部·外赤彩·ヘラミガキ、脚内ハケメ後ナデ・ヨコナデ		10YR7/2にぶい黄橙	雲, 白, 灰	
670	釜C2類		SK40		138				口縁ヨコナデ、体ハケメ		7.5YR8/4浅黄橙	雲, 白, 灰, 赤	
671	釜C3類		SK40	1層	186		202		口縁ヨコナデ、体ハケメ	刺突2列	7.5YR7/3にぶい橙	雲, 長, 灰	
672	釜C2類		SK95	2層	158	190	196	34	口縁ヨコナデ、体外ハケメ·ヘラケズリ、体内ハケメ・ナデ		10YR6/3にぶい黄橙	雲, 白, 灰	古墳時代中期
673	高杯G類		SK95	2層	204	123	136		口縁ヨコナデ、体外ハケメ		10YR7/4にぶい黄橙	雲, 長, 黒, 白	古墳時代中期
674	高杯G類		SK95	1層	182				外ヘラミガキ、内ハケメ後ナデ		10YR5/4にぶい黄褐	雲, 長, 白	古墳時代中期
675	高杯G類		SK95	2層				123	外・内下ヘラミガキ、内上巻き上げ痕		10YR6/3にぶい黄橙	雲, 白	古墳時代中期
676	釜C3類	6C7		21層	164				口縁ヨコナデ、体ハケメ		10YR7/3にぶい黄橙	雲, 白	
677	釜C3類	3D10		21層	176		226		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		5Y7/6橙	雲, 長, 白, 赤	
678	釜A類	3D19		21層	150				口縁ヨコナデ、体内ハケメ	擬凹線、刺突	7.5YR7/6橙	雲, 白, 赤	

弥生時代後期～古墳時代土器観察表（6）

報告番号	器種	グリッド	遺構	層位	大きさ（mm）				調整	文様	色調	胎土	備考
					口径	器高	最大径	底径					
679	釜B類	3D15 4D11		21層 Ⅵb層	130				口縁外ヨコナデ、体外ハケメ、内摩耗		5YR6/6橙	雲，長，英，白	
680	鉢E類	6C9		21層	102	74	106	50	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内摩耗		10YR8/3 浅黄橙	雲，長，白	
681	高杯F類	6C7		21層				202	内外ヘラミガキ	波状文・刺突	7.5YR6/4 にぶい橙	雲，長	
682	壺I類	3D10		21層	114				内外摩耗	凸帯	7.5YR6/4 にぶい橙	白，赤	
683	手づくね土器？	3D9		21層				30	外指頭圧痕、内ナデ		7.5YR8/4 浅黄橙	雲，白，灰	
684	須恵器杯蓋	6C17		20層	128	48		130	頂外ロクロケズリ、他ロクロナデ		2.5Y7/1灰白	白（少）	
685	鉢E類	5C20		20層	104				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ヘラナデ		10YR7/2 にぶい黄橙	白，灰，赤	
686	鉢D類	4B24		20層	96	69	109	50	外ヘラミガキ、内ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙	白，灰	
687	鉢D類	4B25		20層	74	38		40	内外指頭圧痕		10YR7/4 にぶい黄橙	雲，白，赤	古墳時代中期？
688	釜C2類	5B8		Ⅵc層	119	129	11.1	丸底	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙	雲，長，白，赤	弥生時代後期
689	長釜b類	6B20・25		23層・ Ⅵc層	154				口縁ヨコナデ、体外ハケメ後ヘラケズリ、体内ヘラナデ		10YR6/3 にぶい黄橙	雲・長・白	古墳時代後期？
690	壺N類	7B17		Ⅵc	138	224	196	50	口縁ヨコナデ、体外ヘラミガキ、体内ハケメ		10YR7/3 にぶい黄橙	雲，白，黒	
691	手づくね土器	6B20		Ⅵb層	44	37		46	内外指頭圧痕		10YR5/3 にぶい黄橙	雲，白，灰，赤	古墳時代中期？
692	壺G類	6C2		Ⅵc層			68	20	外ヘラミガキ、内ナデ		7.5YR7/6 橙	雲，長，白，赤	
693	長釜a類	11B19・24	旧川道 （SX88）	青廃砂	174				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラケズリ		10YR7/3 にぶい黄橙	雲，白，灰，赤	古墳時代後期
694	長釜a類	11B3	旧川道 （SX88）	青灰砂	206				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラケズリ		10YR6/4 にぶい黄橙	雲，長，赤，白	古墳時代後期
695	長釜a類	10A19	（SX88）	青灰砂	190				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		10YR6/2 灰黄褐	雲，長，赤	古墳時代後期
696	長釜a類	11A21	（SX88）	青灰砂	166				口縁ヨコナデ、体ハケメ		10YR6/3 にぶい黄橙	雲，白，黒	古墳時代後期
697	甑	11B8	（SX88）	青灰砂 ③	343		352		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		7.5YR8/2 灰白	雲，白，灰	古墳時代後期
698	杯a1類	11A25, 11B16	（SX88）	青灰砂 ③	130	45		丸底	口縁ヨコナデ、体外ヘラミガキ、体内摩耗		7.5YR7/4 にぶい橙	雲，海針，白，赤	古墳時代後期
699	杯a1類	11A10	（SX88）	青灰砂	151	60		丸底	外ヘラミガキ、内ヘラミガキ・黒色処理		7.5YR8/2 灰白	白，赤	古墳時代後期
700	杯a1類	11A12	（SX88）	青灰砂	140	57		丸底	外ヘラミガキ、内ヘラミガキ・黒色処理		10YR5/3 にぶい黄橙	雲，長，白，灰	古墳時代後期
701	杯a1類	11A11	（SX88）	青灰砂	148	60		丸底	外ヘラミガキ、内ヘラミガキ・黒色処理		10YR6/3 にぶい黄橙	雲，白，灰	古墳時代後期
702	杯a1類	11A25	（SX88）	青灰砂	152	61		丸底	外ヘラミガキ、内ヘラミガキ・黒色処理		7.5YR8/2 灰白	雲，長	古墳時代後期
703	杯a1類	11B18	SX88	砂層	152	66		丸底	外ヘラミガキ、内ヘラミガキ・黒色処理		7.5YR6/2 灰褐	雲，白，赤	古墳時代後期、漆継ぎ
704	杯a2類	11A12	（SX88）	青灰砂	144				外ヘラミガキ、内ヘラミガキ・黒色処理		7.5YR6/2 灰褐	雲，白，灰	古墳時代後期
705	杯b類		SX88	砂層	125	54		47	口縁ヨコナデ、体外ナデ、体内ヘラミガキ・黒色処理		7.5YR6/1 褐灰	雲，長	古墳時代後期
706	杯c2類	12B1	（SX88）	青灰砂	124	54		丸底	内外ヘラミガキ		7.5YR8/1 灰白	白	古墳時代後期
707	杯c1類		SX88	砂層	111	57		丸底	内外ヘラミガキ		7.5YR8/2 灰白	雲，白	古墳時代後期
708	杯c2類	11A16	（SX88）	青灰色	133	46		丸底	内外ヘラミガキ		7.5YR6/1 褐灰	雲，海針，白	古墳時代後期
709	鉢E類	11A20	（SX88）	青灰砂	90		104		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	雲，長，白	古墳時代前期？
710	壺c類	11A11	（SX88）	青灰砂	97	98	91	丸底	口縁外ヨコナデ、体外ヘラミガキ、口縁内ハケメ、体内ナデ		10YR8/1 灰白	白，灰，赤	古墳時代後期
711	壺c類	11A12	（SX88）	青灰色	112		122		口縁ヨコナデ、体ナデ		7.5YR8/1 灰白	雲，白，灰，赤	古墳時代後期
712	壺a類	11B16	（SX88）	青灰砂 ③	132				ヨコナデ・指頭圧痕		10YR6/3 にぶい黄橙	雲，白，灰（多）	古墳時代後期
713	高杯a×b類	11B3	（SX88）	青灰砂	196				内外ヘラミガキ		7.5YR7/4 にぶい橙	雲，長，白，灰	古墳時代後期
714	高杯a類	11B18	旧川道 （SX88）	青灰砂 ⑤				133	外・内下ヘラミガキ、内上ヘラケズリ		10YR7/2 にぶい黄橙	雲，長，灰	古墳時代後期
715	高杯a×b類	11A6	（SX88）	青灰砂	208				内外ヘラミガキ		10YR6/3 にぶい黄橙	雲，長	古墳時代後期
716	高杯b類	10A9	（SX88）	青灰砂				138	脚外ヘラミガキ・ヨコナデ、脚内上巻き上げ痕・ヘラミガキ・ヨコナデ		10YR6/2 灰黄褐	雲，白，灰	古墳時代後期
717	釜C3類		SK49		210		262		口縁ヨコナデ、体ハケメ		10YR7/3 にぶい黄橙	雲，長，白，灰，赤	古墳時代中期？

弥生時代後期～古墳時代土器観察表（7）

報告番号	器種	グリッド	遺構	層位	大きさ（mm）				調整	文様	色調	胎土	備考
					口径	器高	最大径	底径					
718	釜C3類		SK6	1層	148		160		口縁摩耗、体外ハケメ、体内ヘラナデ		7.5YR7/2 明褐灰	長，白	弥生時代後期？
719	釜C1類	7B23		⑥層	185				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラケズリ	擬凹線	7.5YR8/4 浅黄橙	雲，白，灰，赤	弥生時代後期
720	釜C2類	7B25		⑥層	131				口縁ヨコナデ、体ハケメ	刺突	7.5YR8/3 浅黄橙	雲，白，灰，赤	弥生時代後期
721	壺	7B24		⑥層			53	26	体外ナデ・ヘラケズリ、体内ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	雲，白，灰	
722	鉢E類	11A14		Ⅷa層	94	69	95	50	口縁ヨコナデ、体・底外ハケメ、体内ナデ・ハケメ		10YR8/3 浅黄橙	雲，白，灰，赤	
723	蓋B類	7A11・12		Ⅷb層	102	47			内外ヘラミガキ		10YR8/2 灰白	雲，長，白，赤	
724	器台M類	2D15・20		B・D層	101	110	120		外赤彩・ヘラミガキ、内ヘラミガキ		10R5/6赤	雲，長，白，灰	
725	高杯b類	7B19		Ⅵb層	164	115		118	外・杯内ヘラミガキ、脚内摩耗		10YR8/2 灰白	長，白，灰	古墳時代中～後期
726	壺b類	6C7，7B6・11		Ⅵb層	145				口縁ヨコナデ、頸～体ハケ後ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙	雲，長，白，灰	古墳時代中～後期
727	須恵器杯蓋	7B19		Ⅵb層	130	49			頂外ロクロケズリ、他ロクロナデ		N5/灰	白	古墳時代後期
728	須恵器杯身	6C5		Ⅵb層	96	39	116	116	底外ロクロケズリ、他ロクロナデ		N4/灰	白（少）	古墳時代後期
729	須恵器甕	10B8		Ⅴd層			80		、体外下ロクロケズリ、他ロクロナデ	波状文・櫛目文・沈線	N4/灰	白（多）	古墳時代後期
730	壺E類？	6A23		Ⅵb層			70	35	外ヘラミガキ、内ハケメ後ナデ		10YR8/3 浅黄橙	雲，白，灰	
731	手づくね土器	4D7		Ⅵb層	33	33	39	33	内外摩耗		5YR8/3淡橙	雲，白，赤	古墳時代中期？
732	手づくね土器	4D16		Ⅵb層	37	31	46	40	外指頭圧痕、内ナデ		7.5YR8/4 浅黄橙	雲，白，灰，赤	古墳時代中期？
733	手づくね土器	4D11		Ⅵb層	39	34		41	内外摩耗		7.5YR7/2 明褐灰	雲，白，灰	古墳時代中期？
734	手づくね土器	6B25		Ⅵb層	46	37		35	外指頭圧痕、内ナデ		10YR5/3 にぶい黄橙	雲，白，灰	古墳時代中期？
735	手づくね土器	6C21		Ⅵb層				27	外ハケメ、内ナデ		10YR6/4 にぶい黄橙	雲，白，灰	弥生中期？
736	手づくね土器	4D11		Ⅵb層	37	25	41	34	外指頭圧痕、内ナデ		7.5YR8/4 浅黄橙	雲，英，白，赤	古墳時代中期？
737	手づくね土器	4D16		Ⅵb層	38	35	45	30	外指頭圧痕、内ナデ		7.5YR7/4 にぶい橙	雲，長，灰	古墳時代中期？
738	手づくね土器	4D6		Ⅵb層	39	30		40	内外摩耗		10YR8/3 浅黄橙	雲，白，灰	古墳時代中期？
739	手づくね土器	7B21		Ⅵb層				35	外ナデ、内ハケメ		7.5YR8/3 浅黄橙	雲，白，灰	古墳時代中期？
740	釜C3類	6C8		Ⅵb層	168				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	雲，白，灰，赤	
741	釜C1類	6C10		B層	180		183		口縁ヨコナデ、外ハケメ、内ハケメ後ナデ	刺突	10YR8/3 浅黄橙	雲，長，白，赤	
742	釜B類	2E6		B層	132				口縁縁ヨコナデ、体内ナデ		7.5YR6/3 にぶい褐色	雲，白，灰	弥生時代後期
743	壺V類	3E1，10B17		Ⅵb層		113			口縁ヨコナデ、体内外ハケメ		7.5YR7/3 にぶい橙	雲，長，白，灰，赤	
744	壺H類	9B3		Ⅵb層	63	149	130	19	口縁ハケメ後ヨコナデ、体外ヘラミガキ、体内ナデ・ハケメ		10YR7/4 にぶい黄橙	雲，長，白，灰，赤	弥生時代後期
745	蓋A類	6C3		Ⅵb層	53	39	80	22	内外ヘラミガキ		10YR6/2 灰黄褐	雲，白，赤	
746	高杯E類	6B7		31層					杯部摩耗、脚外赤彩・ヘラミガキ、脚内ナデ		7.5R4/8赤	白，灰，赤	
747	鉢C類	2E1		D-②層	180			50	外ヘラミガキ、内ヘラナデ		10YR7/6 明黄褐	雲，赤，白	
748	壺B類	9C3		耕土a			123	75	外赤彩・ヘラミガキ、鉢部内ヘラケズリ、脚内ハケメ後ナデ		10YR8/3 浅黄橙	雲，長，白	
749	壺M類	G区崩落土		23層	176				内外ヘラミガキ		10YR7/3 にぶい黄橙	雲，白，灰，黒	
750	壺O類	G区		崩落土	146				口縁外ヨコナデ、頸外ナデ、内摩耗	棒状浮文・凸帯	7.5YR8/3 浅黄橙	雲，白，灰，赤（多），海針？	
751	壺Ⅰ類	1E9		A層	133				外・口縁内赤彩・ヘラミガキ、体内ナデ		7.5R4/8赤	雲，白，灰，赤	
752	壺C類	2E4		B層	66				外ヘラミガキ、内ハケメ（後ミガキ？）	擬凹線	10YR8/4 浅黄橙	雲，灰，赤	
753	手づくね土器	2D24		B層				26	外指頭圧痕、内ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	雲，白，灰	
754	鉢K類	2E2		A層	94	74		28	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		5YR7/6橙	雲，白，灰，赤	
755	釜J類	11B19		XⅠ層	71		98		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ		5YR7/6橙	雲，長，白，灰，赤	
756	壺	9A22		XV層			86	71	外ヘラミガキ	凸帯	10YR8/2 灰白	雲，白，灰，赤	

古代土師器・須恵器観察表

報告番号	種類	器種	グリッド	遺構	層位	法量（mm）			調整	色調	胎土	備考
						口径	器高	底径				
757	須恵器	杯蓋	5D3		Ⅳ層	150			外ロクロケズリ、内ロクロナデ	2.5Y6/1 黄灰	C3	重ね焼きⅡA類
758	須恵器	杯蓋	10B16		Ⅵb層	16			内外ロクロナデ	N5/ 灰	C3	重ね焼きⅡA類
759	須恵器	杯蓋	2D21・22		D層	150			頂部ロクロケズリ、口外・内ロクロナデ	10YR6/1 褐灰	B	内面摩耗、重ね焼きⅡA類
760	須恵器	有台杯	4D13		Ⅵb層			104	内ロクロナデ、底外回転篦切り、高台貼付け後ロクロナデ	10YR5/1 褐灰	C3	見込み・高台端摩耗
761	須恵器	有台杯	4D14		Ⅳ層			83	内外ロクロナデ、底外回転篦切り、高台貼付け後ロクロナデ	N5/ 灰	C1	
762	須恵器	無台杯	10B21		23層	130	33	94	内外ロクロナデ、底外回転篦切り	5Y6/1 灰	C1	直接重ね焼き
763	須恵器	無台杯	7C4		Ⅵb層	124	32	84	内外ロクロナデ、底外回転篦切り	5Y6/1 灰	B	直接重ね焼き、底外墨書「衣女」
764	須恵器	無台杯	5B3・7		Ⅵc層	118	32	78	内外ロクロナデ、底外回転篦切り	7.5Y6/1 灰	B	直接重ね焼き、底外墨書「生」カ
765	須恵器	無台杯	9B20・25		23層	124	31	85	内外ロクロナデ、底外回転篦切り	7.5Y6/1 灰	B	直接重ね焼き
766	須恵器	無台杯	11C2	SX87	Ⅵa層	119	32	72	内外ロクロナデ、底外回転篦切り	2.5Y6/1 黄灰	B	直接重ね焼き、底外墨書「内」
767	須恵器	無台杯	102D12		Ⅳ	132	35	40	内外ロクロナデ、底外回転糸切り	10YR7/3 にぶい黄橙	C3	直接重ね焼き、緋襷
768	須恵器	長頸瓶	7B8		Ⅳ層	154			内外ロクロナデ	2.5Y6/1 黄灰	B	
769	須恵器	長頸瓶	9C24 8B25		⑥層	61			内外ロクロナデ	5Y4/1 灰	B	
770	須恵器	瓶類	5C24		黒色土③層			60	内外ロクロナデ、高台貼付け後ロクロナデ	5Y4/1 灰	C1	
771	須恵器	甕	4C8		Ⅳ層				内ロクロナデ、外ロクロナデ・櫛描波状文	5Y5/1 灰	C3	
772	土師器	無台椀	8B23		Ⅳb層	114	39	66	内外ロクロナデ、底外回転篦切り	7.5YR7/4 にぶい橙	長・白・灰	
773	土師器	無台椀	11D4		Ⅴa層	116	40	52	内ロクロナデ、底外回転糸切り	7.5YR8/4 浅黄橙	白・灰・赤	
774	土師器	小釜	9B17		砂層	126			内外ロクロナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	白・赤	
775	土師器	長釜	Bベルト		Ⅵa～Ⅵc層	170			内外ロクロナデ	2.5YR7/4 浅黄橙	長・白・灰	
776	土師器	長釜	BベルトA列		Ⅵb層	102			内ロクロナデ・カキメ、外ロクロナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	長・雲	
777	土師器	長釜	8B3		Ⅵb層	190			内ロクロナデ、外ロクロナデ・カキメ	10YR8/3 浅黄橙	白・赤	
778	土師器	鍋	4D6		Ⅵb層	330			内外ロクロナデ	10YR8/3 浅黄橙	白・灰・赤	

縄文時代前期土器観察表（追加）

報告番号	分類	グリッド	層位	口縁端部	法量（mm）			文様帯		地文		口縁施文			胴部区画			内面	底部形態	底部文様	胎土	色調	備考
					口径	器高	底径	文様	施文具	種類	原体	文様	口唇	方向	形状	文様	方向						
779	深鉢Ⅴ1C類	8B5	XV	方						ループ文	RL	爪形3列	×	矢羽	平坦	爪形3列	矢羽	摩耗			繊・雲・白・灰	2.5Y7/2 灰黄	
780	深鉢Ⅰ類	9A22	XV	方						非結束羽状縄文	LR＋RL	爪形1列	○	－				斜縄文			繊・雲・白・灰	10YR7/3 にぶい黄橙	
781	深鉢Ⅰ類	6B13	XV	内反り						斜縄文	RL	爪形2列	○	矢羽				斜縄文			繊・雲・白	7.5YR4/2 灰褐	
782	深鉢Ⅱ1A類?	11A12	XV	内反り	114					結束回転文	L	爪形1列	○	－	無し?			擦痕			繊・雲・白	10YR7/3 にぶい黄橙	
783	深鉢Ⅱ類	9A25	XV	方	134					斜縄文	RL	爪形3列	○	同一・矢羽				平滑			繊・雲・白・灰	7.5YR6/3 にぶい褐	
784	深鉢Ⅰ類	6B13・16	XV	内反り	106					網目状撚糸文	L	無し	×	－				摩耗			繊・雲・白	7.5YR7/3 にぶい橙	
785	深鉢Ⅰ類	11A11	XV一括	方	206					網目状撚糸文	L	凸帯・爪形1列	×	－				擦痕			繊・長・雲	10YR7/3 にぶい黄橙	
786	深鉢Ⅰ1A類?	6B21	XV	丸	96					条痕?		無し	×	－	無し?	－	－	平滑			繊・雲・白・灰	10YR7.2 にぶい黄橙	
787	深鉢Ⅰ類	9B12	XV	内反り						ループ文	RL＋LR	無し	×	－				摩耗			繊・白・灰	10YR6/2 灰黄褐	
788	深鉢ⅠD類?	5C17	XV	内反り				蕨手状文・連結文（連続刺突）	棒状工具	不明	－	刺突2列	×	－				摩耗			繊・雲・白	7.5YR7/3 にぶい橙	
789	深鉢	9B3	XV	内反り	240					ループ文 斜縄文	LR RL	押圧1列	○	－	無し?			擦痕			繊・雲・白	10YR7/3 にぶい黄橙	
790	深鉢Ⅰ類	5D6	XV	丸						非結束羽状縄文	RL＋LR	無し	×	－				平滑			繊・雲・白	7.5YR5/2 灰褐	
791	深鉢Ⅰ類	11A17	XV	方				コンパス文		組紐	L	爪形2列	×	同一				ミガキ			繊・白	10YR6/2 灰黄褐	
792	深鉢Ⅰ1A類?	10A13	XV一括	丸						非結束羽状縄文	LR+RL	無文帯・刺突2列	○	－	無し?			平滑			繊・雲・白・灰	10YR7/2 にぶい黄橙	
793	深鉢Ⅰ1A類?	10A18	XV	丸						結束回転文	RL	無し	×	－	無し?	－	－	摩耗			繊・雲・白・灰	7.5YR5/2 灰褐	
794	深鉢	6B5・10	XV							非結束羽状縄文	RL+LR							摩耗			繊・雲・白・灰	10YR7/3 にぶい黄橙	0段多条
795	深鉢ⅠD類?	7A18	XVd	内反り				多段の凹線		不明	－	無し	×	－				平滑			繊・雲・白	10YR6/2 灰黄褐	
796	深鉢Ⅱ類	6B14・15	XV	方						斜縄文	RL	爪形2列	×	矢羽				漆焼き付け			繊・雲・白	10YR3/2 黒褐	
797	深鉢	9A22	XV				96			爪形								摩耗	平底	爪形（渦巻き）	繊・雲・白・灰・黒・赤	2.5Y7/2 灰黄	797と同一個体?

縄文時代中期～晩期土器観察表（追加）

報告番号	器形		グリッド	層位	文様など	形式	地文	原体	大きさ（mm）				胎土	色調	備　考
	器種	口縁							口径	器高	最大径	底径			
798	深鉢	平縁	9A12	XVa		大木８～９	斜縄文	RL	315		342		雲・白・黒・灰	10YR6/3 にぶい黄橙	
799	壺		5C21	XIIIb	入組三叉文・沈線	大洞B	斜縄文	LR					雲・白	10YR7/3 にぶい黄橙	第Ⅲ群、外面赤色漆
800	深鉢A類	平縁	5C2	XIIa	結節回転文	大洞C1	斜縄文（縦位）	LR	124	127		78	長・白・灰	10YR7/2 にぶい黄橙	第Ⅵ群

弥生時代中期土器観察表（追加）

報告番号	器形		グリッド	層位	大きさ（mm）				調整	文　様			色調	胎土	備考
	分類	口縁			口径	器高	最大径	底径		施文具	外面	内面			
801	釜D類	波状?	5D2	灰色粘土	120				外ハケメ、内ヘラミガキ	棒	直線文・鋸歯状文	無文	10YR7/3 にぶい黄橙	雲・白	
802	壺J類		4C25	23層					内外ミガキ	棒、RL縄文	沈線、斜縄文	無文	10YR7/3 にぶい黄橙	白・灰	
803	壺J類		5D4	灰色粘土					内ミガキ	円形竹管、LR縄文	竹管文、斜縄文ン	無文	10YR6/3 にぶい黄橙	白・灰・雲	
804	壺J類	平縁	4D4・5・10	灰色粘土	48				内ナデ	棒、RL縄文	鋸歯状文、直線文、刺突、斜縄文	無文	7.5YR7/4 にぶい橙	雲・白・灰・赤、砂質強い	
805	壺		4D3	灰色粘土					内外ナデ	－	凸帯３条	無文	10YR7/3 にぶい黄橙	白・杯	
806	壺A類	平縁	4C25	23層					内ヨコナデ、頸外ハケメ	櫛	斜行短線文	櫛目文	10YR8/3 浅黄橙	長・白・灰	
807	壺A類	平縁	3D21	F層	182				口ヨコナデ、頸外ハケメ、頸内剝落	櫛	矢羽状櫛目文	無文	10YR5/2 灰黄褐	雲・白・黒・灰	
808	壺B類	小波状	3D23	D層	162				内外ナデ	櫛	矢羽状櫛目文	無文	10YR7/4 にぶい黄橙	白・灰	
809	壺		4D5	灰色粘土					外ハケメ、内ナデ	篦状工具	凸帯２条、刺突	無文	10YR8/3 浅黄橙	雲・白・灰	
810	壺C類	平縁	4D5、5D1・6	灰色粘土	216				内外ハケメ	櫛	櫛目文・直線文	矢羽状櫛目	7.5YR7/4 にぶい橙	長・白・黒・灰・赤	
811	壺E類	小波状	4D12	灰色粘土	158				内外ハケメ	櫛	櫛目	無文	10YR7/3 にぶい黄橙	雲・白・黒	
812	壺E類	小波状	5D2	灰色粘土	180				口ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ	櫛	櫛目文、直線文	櫛目文	5YR8/4 淡橙	長・雲・白・黒	
813	壺D類	平縁	5D6	灰色粘土	94				内・口ヨコナデ、頸外ハケメ	櫛	櫛目文、直線文	無文	10YR8/2 灰白	雲・白・灰	
814	壺E類	小波状	5D2	灰色粘土	100				内外ナデ	櫛	直線文	無文	10YR8/3 浅黄橙	白・黒・灰・赤	
815	異形土器	平縁	3D25、4D6	F層					内外摩耗	－	無文	無文	5YR8/2 灰白	長・白・黒・灰	
816	鉢B類	小波状	4C23	23層	280				口外ヘラミガキ、口内ヨコナデ、体内外ハケメ	棒	刺突、波状文	無文	10YR6/2 灰黄褐	長・白・灰・赤	
817	鉢B類	小波状	4D13	灰色粘土	216				内外ナデ	篦状工具	刺突	無文	10YR7/2 にぶい黄橙	黒・灰・赤	
818	鉢B類	平縁	3D5	灰色粘土					外摩耗、内ハケメ	篦状工具	刺突・凸帯	無文	7.5YR8/3 浅黄橙	雲・長・白・灰	
819	鉢B類	平縁	5D3	灰色粘土	181				外ハケメ、内ナデ	櫛	櫛目文・矢羽状櫛目文	無文	10YR6/2 灰黄褐	長・雲・白	
820	鉢A類	平縁	4D13	23層	148				外ハケメ、内ナデ	櫛	無文	矢羽状櫛目	10YR5/2 灰黄褐	雲・白・灰	
821	把手		3D11	F層					内外ナデ	－	無文	無文	7.5YR7/6 橙	雲・白・灰・赤	
822	脚部		5D7	灰色粘土				48	外ハケメ、内ナデ	－	無文	無文	2.5Y5/2 暗灰黄	雲・白・灰	
823	脚部		4D16	F層				62	外ハケメ、体内ナデ、脚内ハケメ後ナデ	－	無文	無文	7.5YR6/4 にぶい橙	雲・白・赤	
824	脚部		4D11	Ⅵb層				42	内外ハケメ	－	無文	無文	10YR6/3 にぶい黄橙	雲・白・灰	
825	脚部		4D16	F層				112	外ハケメ後ナデ、内ナデ	－	無文	無文	7.5YR7/6 橙	雲・白・黒・灰	
826	脚部		3D18	F層				76	外ハケメ、内ナデ	－	無文	無文	10YR7/4 にぶい黄橙	雲・海針・白	
827	脚部		5D2	灰色粘土					外ハケメ、体内ハケメ、脚内ナデ	－	無文	無文	2.5Y7/2 灰黄	雲・白・灰	
828	脚部		4D10	灰色粘土				96	内外ナデ	－	無文	無文	7.5YR7/6 橙	雲・白・褐	
829	釜C類	平縁	6B11（SX48）	Ⅶb層	190		198		内外ハケメ	櫛	櫛目文・直線文	無文	10YR7/3 にぶい黄橙	雲・白・褐	
830	釜B類	小波状	5D2・3	灰色粘土	169				口ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ	櫛	廉状文・扇状文・斜行短線文・円形浮文	矢羽状櫛目	10YR7/3 にぶい黄橙	長・雲・白・灰・赤	
831	釜A類	小波状	4D5、5D1・6	灰色粘土	140	121		66	内外ハケメ	－	無文	無文	10YR8/3 浅黄橙	雲・白・黒・灰	

弥生時代後期～古墳時代土器観察表（追加）

報告番号	器種	グリッド	遺構	層位	大きさ（mm）				調整	文様	色調	胎土	備考
					口径	器高	最大径	底径					
832	釜C2類	4D2		23層	286				外ハケメ、内摩耗		10YR7/4 にぶい黄橙	雲・白・黒・赤	
833	釜C1類	6B13	SD47	2層	68	99	80	30	口ヨコナデ、体内外ハケメ		10YR7/3 にぶい黄橙	長・雲・白・黒	
834	小型壺	6D21		灰色粘土層	44	53	58	28	口ヨコナデ、体内ナデ、体外摩耗		10YR8/4 浅黄橙	雲・白・灰・赤	
835	壺Q類	8B22		Ⅶ層			96	丸底	口ヨコナデ、体外ヘラミガキ、体内ナデ		10YR8/3 浅黄橙	雲・白・黒・赤	胴部打ち欠き？
836	壺I類	4D5		23層	228				内外摩耗	擬凹線文	7.5YR7/3 にぶい橙	長・雲・白・黒・灰	
837	壺L類	3D25		F層	204				口・頸内外ヨコナデ、体内ナデ	擬凹線文	5YR7/4 にぶい橙	長・雲・白・黒・赤	
838	壺I類	4D8		23層	140				内外摩耗		10YR7/2 にぶい黄橙	雲・白・黒・赤	
839	蓋B類	4C24		23層	140	65		42	内外ハケメ		10YR6/4 にぶい黄橙	雲・白	
840	鉢M類	6B12	SD47	2層	108				外ヘラミガキ、口内ヨコナデ、体内ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	白・黒・灰	
841	壺Q類	4D8		23層	101	76	92	16	口ヨコナデ、体内ナデ、体外上ヘラミガキ、体外下ハケメ		10YR7/3 にぶい黄橙	長・雲・白・黒・灰・赤	
842	鉢M類	4D1		23層	194				口ヨコナデ、体内ナデ、体外ハケメ		10YR5/2 灰黄褐	雲・白・黒・褐	
843	結合器台	4C19		23層			(140)		内外ヘラミガキ		10YR7/3 にぶい黄橙	白・灰	
844	器台C類	4D14		23層	200				内外ヘラミガキ		10YR7/2 にぶい黄橙	雲・白・灰	
845	高杯×器台	4D3・6・9		23層				200	内外ヘラミガキ	円形透かし	5YR7/6橙	長・雲・白・灰・赤	
846	高杯×器台	4D7		23層				232	内外ヘラミガキ	凸帯・円形透かし	10YR8/4 浅黄橙	長・雲・白・灰	
847	高杯	8B17	SD50	3層	302				内外ヘラミガキ・赤彩		5YR5/3 にぶい赤褐	雲・白・黒・赤	
848	高杯A類	9B17	SD83	1層				172	外ヘラミガキ、外上ハケメ後ナデ、内下ヨコナデ		10YR6/3 にぶい黄橙	雲・白・灰・赤	
849	須恵器杯蓋	4C21		Ⅵb	124	5.2	－	－	頂部ヘラケズリ、他ロクロナデ		5Y6/1灰	D類	内面酸化
850	須恵器甕	11C13		Ⅳb層			96		内・外上ロクロナデ、外下平行叩き		N/6灰	D類	
851	壺I類	10A1、10B21	SE89		131	241	229	60	口ヨコナデ、体外ハケメ・ヘラミガキ、体内ナデ・ハケメ		7.5YR8/4 浅黄橙	白・黒・赤	体外下煤

土製品観察表（1）

報告番号	種別	グリッド	遺構	層位	大きさ（mm）			重（g）	色調	胎土	文様	調整	備考
					縦	横	厚						
1	土鈴	6B13		XVb	27	38	21	8.7	7.5YR8/3浅黄橙	白・灰・雲			
2	不明土製品	8A16		XV	59	24	19	27.1	10YR7/3にぶい黄橙	長・雲		手づくね	
3	不明土製品	7B25		XV	20	38	17	11.7	10YR8/2灰白	白・雲		手づくね	
4	土偶	2E3		D-②層	4	6	2	36.4	10YR8/3浅黄橙	灰・白・雲・			
5	土器片錘	10A12		XV	42	51	10	22.4	7.5YR6/2灰褐	繊・雲・白	非結束羽状縄文	内ナデ?	
6	土器片錘	6B10		XV	56	66	10	42.0	7.5YR7/4にぶい橙	繊・雲・白・灰	ループ文	内擦痕	
7	土器片錘?	7B1		XVb	66	74	11	47.0	10YR7/3にぶい黄橙	繊・長・雲・白	結節回転	ナデ	
8	土器片錘	10A13		XV	66	80	11	55.7	10YR6/2灰黄褐	繊・雲・長・灰	非結斜	内ナデ	
9	土器片錘	7A22		XVd	59	75	12	52.3	10YR7/2にぶい黄橙	繊・雲・白	斜縄文	内ミガキ	
10	土器片錘	6B15		XV	62	43	10	29.1	10YR7/3にぶい黄橙	繊・雲・白	斜縄文	内擦痕	
11	土器片錘	6B18		XV	60	72	10	51.6	10YR7/2にぶい黄橙	繊・長・雲・白	斜縄文	内摩耗	
12	土器片錘	6B5		XVb	50	79	10	40.4	10YR5/2灰黄褐	繊・長・雲・白	斜縄文	内ナデ	
13	土器片錘	6B19		XV	72	76	9	57.2	10YR6/2灰黄褐	繊・長・雲・白	非結束羽状縄文瓜形	内ミガキ	
14	土器片錘	6B14		XV	56	73	14	51.5	7.5YR6/4にぶい橙	繊・雲・長・灰	斜縄文	内擦痕	
15	土器片錘	9A22		XV	5	8	1	37.0	7.5YR7/2明褐灰	繊・雲・白・灰	組紐	内ナデ	
16	土錘	3D20		21層	27	23	22	11.3	10YR7/2にぶい黄橙	雲・白・灰			
17	土錘	8B18		23層	40	40	38	63.5	10YR6/3にぶい黄橙	白		指頭圧痕	略完形
18	土錘	6B25		23層	55	53	20	58.7	10YR6/2灰黄褐	白・灰		指頭圧痕	過半欠
19	土錘	10B13	SD83	1層	59	54	54	173.4	10YR6/2灰黄褐	海針・白・灰		指頭圧痕	略完形
20	紡錘車?	4C13		XVb	6	3	1	11.1	2.5Y2/1黒	白・雲・赤	矢羽状沈線		
21	把手?	6B14	SD53		21	29	16	8.7	10YR6/3にぶい黄橙	雲・白・灰			
22	転用紡錘車	3D10		21層	64	68	5	25.9	10Y7/3にぶい黄橙	雲・白・赤・灰		内外ハケメ?	
23	転用紡錘車	6C11		21層	50	56	7	23.1	7.5YR6/2灰褐	白・雲		外ハケメ、内ナデ	
24	転用紡錘車	6B20	SD50	3層	54	59	8	31.2	7.5YR7/3にぶい黄橙	長・雲・白・灰	波状文・廉状文	外ハケメ、内ナデ	
25	転用紡錘車	4D10		灰色粘土	49	50	6	18.4	10YR6/2灰黄褐	長・雲・白・灰		外ハケメ、内ハケメ	
26	転用紡錘車	4B24		Ⅶ	42	46	7	15.3	10YR5/3にぶい黄褐	雲・白・灰		外ハケメ、内ナデ	
27	転用紡錘車	5B9	SD51	1層	40	41	7	12.3	10YR7/3にぶい黄橙	雲・白・灰		外ハケメ、内ハケメのちナデ	

土製品観察表（2）

報告番号	種別	グリッド	遺構	層位	大きさ（mm）			重（g）	色調	胎土	文様	調整	備考
					縦	横	厚						
28	転用紡錘車	2D23		D層	29	31	7	7.7	7.5YR7/4にぶい橙	雲・白・赤		外ハケメ、内ハケメのちナデ	
29	転用紡錘車	3D6		D層	36	33	5	7.1	10YR6/4にぶい黄橙	雲・白・灰		外ハケメ、内ナデ	
30	転用紡錘車未成品？	3D5		F層	44	47	1	11.7	10YR8/3浅黄橙	長・雲・白・灰		外ハケメ、内ナデ	
31	転用紡錘車未成品？	7B12	SD50	2層	49	51	1	22.4	7.5YR5/2灰褐	長・雲・白・灰	直線文・波状文	外ハケメ、内ハケメ	
32	土器片円盤	9B19	SD83	Ⅳa	66	73	19	65.6	7.5YR7/4にぶい橙	長・雲・白・灰・赤			
33	土器片円盤			崩落土	40	40	8	11.7	10YR7/2にぶい黄橙	長・雲・白・灰		外ハケメ、内ナデ	
34	土器片円盤	6A13		Ⅳb	42	47	11	18.8	10YR7/3にぶい黄橙	長・雲・白・灰			
35	土器片円盤	6B14	SD50	3層	38	39	6	7.7	7.5YR8/3浅黄橙	長・雲・白・灰		外ミガキ?、内ナデ?	
36	土器片円盤	4D13		Ⅳb	53	59	12	28.7	10R8/2灰白	雲・白		内黒色処理・ミガキ、外摩耗	
37	土器片円盤	103C8		Ⅶ	45	47	8	16.3	10YR8/2灰白	雲・白・灰		外ハケメ、内ナデ	
38	支脚?	4D7		21層	66	54	53	213.2	10YR8/2灰白	雲・白・灰		手づくね	
39	土製勾玉?	3E5		XVb	17	11	5	0.8	10YR7/2にぶい黄橙	白・赤・黒			

石器・石製品観察表（1）

報告番号	種　別	分　類	石　材	出　土　位　置				属　性（単位：mm/g）（　）は破損品の残存値				備　　考
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	
1	石鏃	完形	珪質頁岩	A	SD47	2	6A17	20.0	17.0	2.0	0.50	
2	石鏃	完形	玉髄（半透明頁岩）	C		Ⅵb	9B9	19.0	15.0	3.0	0.50	
3	石鏃	破損品	ガラス質安山岩	F		XVb	11A24	20.0	(13.0)	3.0	0.50	
4	石鏃	完形	黒曜石	－		－	－	21.0	15.0	2.0	0.50	
5	石鏃	完形	流紋岩	B		XV	8A24	25.0	17.0	3.0	0.60	
6	石鏃	破損品	頁岩	F		XVb	11A23	(30.0)	(12.0)	2.0	0.30	鋸歯縁
7	石鏃	完形	珪質頁岩	F		XV	10A23	19.0	11.0	2.0	0.30	
8	石鏃	完形	珪質頁岩	D		排土	－	29.0	19.0	3.0	0.50	
9	石鏃	破損品	珪質頁岩	A		XV	6B19	(3.0)	14.0	4.0	0.90	
10	石鏃	完形	珪質頁岩	B		XV	－	37.0	18.0	4.0	1.40	
11	石鏃	完形	珪質頁岩	－		－	－	26.0	12.0	3.0	0.50	
12	石鏃	破損品	珪質頁岩	A		XV	5C4	27.0	(14.0)	4.0	1.10	
13	石鏃	完形	珪質頁岩	－		－	－	24.0	18.0	5.0	1.30	
14	石鏃	完形	玉髄	－		－	－	24.0	16.0	4.0	1.00	
15	石鏃	破損品	流紋岩	F		XV	10A18	(26.0)	(15.0)	4.0	0.90	
16	石鏃	完形	珪質頁岩	D		C	3D11	58.0	15.0	6.0	4.50	
17	石鏃	破損品	流紋岩	F		XVb	11A18	(32.0)	10.0	4.0	0.80	
18	石鏃	破損品	珪質頁岩	F		XVb	11A18	(17.0)	9.0	2.0	0.30	
19	石鏃	未成品	凝灰岩	F		XVb	11A	20.0	14.0	4.0	0.50	
20	石鏃	未成品	珪質頁岩	B		XVb	7A17	21.0	12.0	7.0	2.40	
21	石鏃	未成品	珪質頁岩	B		XVf	6B10	29.0	24.0	11.0	4.50	
22	石鏃	未成品	珪質頁岩	B		XV	9A21	38.0	25.0	10.0	6.50	
23	石鏃	未成品	珪質頁岩	G		XV	4C20	32.0	26.0	6.0	3.00	
24	石鏃	未成品	珪質頁岩	F		XV	9B3	33.0	26.0	8.0	3.00	
25	石鏃	未成品	頁岩	－		－	－	37.0	23.0	11.0	7.00	
26	石鏃	未成品	頁岩	F		XV	9A15	34.0	24.0	7.0	4.60	
27	石鏃	未成品	頁岩	F		XV	10A22	29.0	24.0	9.0	4.90	
28	石鏃	未成品	鉄石英（赤）	－		－	－	32.0	22.0	8.0	4.90	
29	石鏃	未成品	メノウ	－		－	－	37.0	28.0	10.0	8.60	
30	石鏃	未成品	頁岩	B		XV	8A25	51.0	43.0	12.0	22.70	
31	石鏃	未成品	頁岩	B		XV一括	6B5・10・15	55.0	30.0	12.0	22.50	
32	石鏃	未成品	凝灰岩	F		XV	10A14	27.0	19.0	7.0	2.50	
33	石鏃	未成品	珪質頁岩	A		XV	5C5	64.0	41.0	9.0	22.50	
34	石鏃	未成品	鉄石英（赤）	G		XV	5C21	65.0	43.0	9.0	31.00	
35	石錐	完形	珪質頁岩	G		XV	5C11	54.0	9.0	7.0	3.70	
36	石錐		凝灰岩	F		XV	9B5	49.0	35.0	10.0	9.00	
37	石錐		珪質頁岩	A		XV	6B14	53.0	38.0	16.0	19.50	
38	石錐		凝灰岩	A		XVb	6B17	(41.0)	46.0	15.0	15.50	
39	石匙	完形	珪質頁岩	E		XⅢ～XV	－	46.0	18.0	5.0	2.50	松原型石匙
40	石匙	完形	珪質頁岩	F		XV	10A22	54.0	23.0	6.0	6.00	松原型石匙
41	石匙	完形	珪質頁岩	B		XV	6B15	95.0	31.0	10.0	20.50	松原型石匙
42	石匙	完形	珪質頁岩	F		XV	10B4	73.0	26.0	11.0	12.00	松原型石匙
43	石匙	完形	珪質頁岩	F		XV	10A25	80.0	23.0	8.0	10.00	松原型石匙
44	石匙	完形	珪質頁岩	A		XVb	6B12	78.0	33.0	12.0	22.60	松原型石匙
45	石匙	完形	珪質頁岩	F		XV	11A12	69.0	28.0	10.0	13.50	松原型石匙
46	石匙		珪質頁岩	－		XV	－	78.4	22.7	10.7	11.91	
47	石匙	完形	珪質頁岩	F		XV	10B4	78.0	45.0	8.0	19.50	松原型石匙
48	石匙	完形	珪質頁岩（玉髄化）	F		XV	11A16	72.0	44.0	12.0	17.00	松原型石匙

石器・石製品観察表（2）

報告番号	種　別	分　類	石　材	出　土　位　置				属　性（単位：mm/g）（　）は破損品の残存値				備　　考
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	
49	石匙	完形	珪質頁岩	G		XⅡa	4D9	37.0	25.0	6.0	3.50	
50	石匙	完形	珪質頁岩	F		XV	10A23	73.0	40.0	7.0	17.00	松原型石匙
51	石匙	完形	流紋岩	F		XV	10A20	56.0	28.0	11.0	11.50	
52	石匙	完形	凝灰岩	F		XV	10A21	63.0	25.0	12.0	11.50	
53	石匙	完形	流紋岩	A		XV	7A21	71.0	27.0	14.0	18.00	
54	石匙	完形	珪質頁岩	A		XV	6B10	56.0	23.0	9.0	10.00	
55	石匙	完形	黒色頁岩	B		XV	6B14	75.0	26.0	10.0	20.00	松原型を模倣し在地石材で製作か？
56	石匙	完形	黒色頁岩（白色風化）	B		XV	9A23	40.0	17.0	7.0	3.00	
57	石匙	完形	流紋岩	A		XⅣd・XV	6C2・7	40.0	57.0	10.0	15.00	
58	石鏃	未成品	凝灰岩	A		XV	6B18	75.0	29.0	14.0	15.40	
59	異形石器	破損品	鉄石英（赤）	－		－	－	(23.0)	17.0	5.0	2.00	
60	尖頭器	破損	緑色凝灰岩	G		XV	5D1	(44.0)	(47.0)	(15.0)	27.00	
61	石篦		凝灰岩	F		XV一括	9G5・10	64.0	38.0	7.0	36.50	スクレイパー
62	石篦	未成品	鉄石英（黄）	B		XV	6B14	67.0	35.0	15.0	31.00	
63	石篦		頁岩	F		XV一括	10A21	54.0	40.0	15.0	30.50	
64	石篦		珪質頁岩	F		XV	10A11	64.0	44.0	13.0	33.00	
65	石篦	未成品	凝灰岩	－		－	－	65.0	41.0	16.0	44.00	
66	原石		黒曜石	F		XV	11A17	27.0	25.0	16.0	7.50	
67	楔形石器		頁岩	A		XV	5C4	70.0	56.0	28.0	118.50	
68	楔形石器		流紋岩	B		XV	9B1	30.0	27.0	9.0	6.50	
69	楔形石器		黒色頁岩	F		XV	9A25	61.0	17.0	17.0	13.00	
70	楔形石器		頁岩	G		XV	4D9	36.0	29.0	11.0	12.00	
71	楔形石器		頁岩	F		XV	9A20	22.0	13.0	5.5	1.50	
72	楔形石器		珪質頁岩（半透明頁岩）	F		XV	10A17	32.0	25.0	11.0	10.50	
73	楔形石器		頁岩	F		XV	10A18	32.0	30.0	16.5	14.50	
74	楔形石器		頁岩	A		XV	5C6	51.0	55.0	20.0	56.00	
75	楔形石器		珪質頁岩	F		XV	10A13	36.0	46.0	8.0	13.00	
76	楔形石器		黒曜石	A		XV	6B14	37.0	36.0	17.0	21.00	
77	石核		黒色頁岩	F		XV	10B7	66.0	70.0	35.0	142.00	
78	不定形石器		珪質頁岩	F		XV	9B4	37.0	63.0	8.0	20.50	
79	原石		黒曜石	B		XV	9A11	34.0	27.0	21.0	19.00	
80	不定形石器		緑色凝灰岩	B		XV	6D15	40.0	38.0	7.0	8.00	
81	異形石器		黒曜石	F		XV	10A22	37.4	36.8	8.9	11.74	
82	石核		玉髄	－		－	－	28.0	70.0	55.0	95.50	
83	剥片		珪質頁岩	A		XV	6B9	63.0	26.0	8.0	13.00	
84	石鋸		流紋岩	B		XVb	7B2	59.0	50.0	30.0	35.00	
85	石鋸		砂岩	B		XVb	7B1	56.0	77.0	20.0	58.50	
86	磨製石斧	完形	ガラス質安山岩	G		XV	4C24	49.0	30.0	10.0	22.50	
87	磨製石斧	完形	蛇紋岩	B		XV	9A12	45.0	19.0	8.0	9.50	
88	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F		XV	10A20	(38.0)	27.0	7.0	12.00	基部折損
89	磨製石斧	完形	蛇紋岩	F		XV	11A22	58.0	34.0	10.0	31.50	
90	磨製石斧	完形	蛇紋岩	F		XV	11A21	52.0	36.0	7.0	21.50	
91	磨製石斧	完形	蛇紋岩	F		XV	9A23	58.0	37.0	9.0	32.50	被熱（黒化）
92	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F		XV	11A14	(62.0)	39.0	(9.0)	24.00	基部折損
93	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F		XV	9B5	(62.0)	34.0	10.0	33.00	基部折損
94	磨製石斧	完形	蛇紋岩	F		XV	9B6	93.0	47.0	19.0	138.50	刃部使用痕顕（摩擦）
95	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F		XV	11A16	(49.0)	(44.0)	(19.0)	55.50	基部折損
96	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	A		XV一括	6B17・18	(55.0)	43.0	20.0	62.00	基部折損
97	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F		XV	9B4	(62.0)	49.0	26.0	116.00	基部折損
98	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	－		－	－	(61.0)	47.0	20.0	92.50	基部折損
99	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	－		－	－	(73.0)	44.0	23.0	107.50	基部折損
100	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	A		XV	6A14	(87.0)	53.0	25.0	167.00	基部折損のち加工
101	磨製石斧	破損品	閃緑岩	F		XV	10A24	(94.0)	56.0	34.0	267.50	基部折損のち加工
102	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	F		XV	10A21	126.0	52.0	30.0	267.50	
103	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F		XV	9B4	(78.0)	52.0	23.0	150.50	基部折損
104	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	B		XV	8A13	(86.0)	58.0	31.0	228.50	基部折損
105	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	B		XV～XVb	7A14・15	(66.0)	55.0	24.0	130.50	基部折損
106	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F		XV	11A16	(61.0)	63.0	23.0	85.50	基部折損
107	磨製石斧	破損品	硬砂岩	F		XV	10A25	(100.0)	56.0	32.0	286.50	基部折損
108	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F		XV	6B18	(96.0)	56.0	27.0	137.50	刃部折損
109	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F		XV	9A25	(103.0)	66.0	33.0	294.50	刃部折損
110	磨製石斧	破損品	安山岩	B		XV	6A25	(103.0)	53.0	28.0	218.50	刃部折損
111	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F		XV	10A24	(98.0)	63.0	33.0	292.50	刃部折損
112	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F		XV	10A20	(94.0)	52.0	23.0	140.50	刃部折損
113	磨製石斧	破損品	安山岩	G		XV	4C20	(75.0)	45.0	28.0	120.00	
114	磨製石斧	破損品	硬砂岩	A		XV	5C4	(85.0)	45.0	36.0	166.00	刃部折損
115	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	G		XV	4D3	(88.0)	72.0	32.0	323.00	半損
116	磨製石斧	未成品	硬砂岩	F		XV	11A11	98.0	64.0	26.0	187.50	
117	磨製石斧	未成品	硬砂岩	F		XV	10A16	97.0	52.0	25.0	199.00	

石器・石製品観察表（3）

報告番号	種　別	分　類	石　材	出　土　位　置				属　性（単位：mm/g）（　）は破損品の残存値				備　　考
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	
118	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	G		XV	4D13	73.0	38.0	15.0	44.00	石箆か
119	磨製石斧	未成品	蛇紋岩？	B		XVa	9A18	133.0	82.0	53.0	717.50	刃部折損
120	磨製石斧	未成品	硬砂岩	F		XV	9F25	118.0	62.0	43.0	431.50	半損
121	磨製石斧	未成品	安山岩	B		XV一括	6B10・15	108.0	62.0	26.0	268.50	
122	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	F		XV	10A19	97.0	68.0	28.0	302.50	
123	磨製石斧	未成品	安山岩	B		XV	7B1	119.0	58.0	21.0	203.50	
124	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	F		XV	10B15	104.0	63.0	31.0	258.00	
125	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	B		XV	6B14	84.0	63.0	32.0	257.50	
126	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	B		XV	9B2	84.0	52.0	26.0	153.50	
127	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	F		XV	10A18	78.0	52.0	21.0	116.50	
128	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	－		XV	－	71.0	42.0	13.0	43.40	
129	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	F		XV	10B5	57.0	38.0	15.0	43.50	
130	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	F		XV	11A22	86.0	58.0	19.0	146.00	
131	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	－		－	－	118.0	94.0	44.0	739.00	
132	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	F		XV	10A12	53.0	32.0	13.0	23.90	
133	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	B		XV	8B7	52.0	27.0	11.0	23.00	
134	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	B		XV	7A18	79.0	49.0	25.0	127.00	
135	原石	完形	蛇紋岩	B		XV一括	6B5・10・15	65.0	50.0	20.0	95.50	
136	石錘	A1	安山岩	B		XV	8B13	112.8	153.4	26.9	727.91	
137	石錘	A1	安山岩	B		XV一括	6B5・10・15	94.5	126.0	34.6	622.11	
138	石錘	A2	安山岩	F		XV	10A25	126.0	122.0	19.7	441.32	
139	石錘	A1	流紋岩	B		XV	7B5	81.8	97.5	25.0	251.91	
140	石錘	A2	砂岩	C		XV	9B6	89.1	92.8	27.6	269.48	
141	石錘	A1	花崗岩	F		XVb	11A18	67.9	107.9	19.8	228.16	
142	石錘	A1	安山岩	A		XV	6B21	61.8	99.0	30.0	269.11	
143	石錘	A1	花崗岩	F		XV	10A13	88.5	107.3	29.3	429.83	
144	石錘	A1	砂岩	G		XV	5D2	78.7	108.9	25.0	318.19	
145	石錘	A1	砂岩	G		XV	5C4	73.9	88.0	27.2	253.36	
146	石錘	A1	安山岩	A		XVb	6B13	58.5	71.5	24.1	126.41	
147	石錘	A1	安山岩	F		XV	9B9	61.6	105.5	23.2	183.69	
148	石錘	A1	安山岩	A		XV	5C13	36.5	32.4	10.6	16.95	
149	石錘	A1	安山岩	B		XV	7B1	73.9	84.6	15.3	153.31	
150	石錘	A2	安山岩	A		XV	5C9	74.4	72.3	23.0	172.46	
151	石錘	A1	安山岩	B		XVb～XV	7B1	79.0	104.1	22.3	296.12	
152	石錘	A2	砂岩	G		XV	4D4	77.2	78.3	17.8	117.74	
153	石錘	A1	砂岩	G		XV	4D2	58.8	67.5	15.0	90.61	
154	石錘	A1	蛇紋岩	B		XV	8A25	50.8	64.8	17.7	78.94	
155	石錘	A1	安山岩	F		XV	10A17	44.4	85.0	15.1	94.37	
156	石錘	A1	粘板岩	G		XV	5C8	38.6	44.7	9.3	20.05	
157	石錘	B	安山岩	B		XV一括	6B5・10・15	100.8	68.0	19.9	184.10	
158	石錘	B	砂岩	G		XV一括	5C16・17	76.8	108.0	32.4	357.21	
159	石錘	A1	頁岩	B		XV	8A13	61.4	80.0	21.3	160.54	
160	石錘	A1	凝灰岩	B		XV	6B15	62.5	116.9	29.0	258.55	
161	石錘	A1	凝灰岩	C		XV	9B7	67.6	61.1	18.4	94.46	
162	石錘	A	凝灰岩	C		XV	8B15	80.4	43.1	26.7	103.44	
163	磨石類	A2	流紋岩	A		XV	6B18	127.0	89.0	39.5	550.58	
164	磨石類	B1	砂岩	B		XV	8B1	120.1	99.0	35.8	488.18	
165	磨石類	A’	硬砂岩	G		XV	5C22	145.0	72.0	44.0	632.66	
166	磨石類	B2	安山岩	A		XV	5C5	91.0	71.5	34.7	264.06	
167	磨石類	B3	安山岩	A		XV	6B14・19	99.5	81.0	39.0	574.07	
168	磨石類	B3	安山岩	B		XV	7A22	101.0	76.0	35.0	403.80	
169	磨石類	B3	安山岩	F		XV	10A17・18・22・23	105.5	70.0	48.0	554.70	
170	磨石類	B4	凝灰岩	B		XV	8A11	111.5	88.5	54.5	558.10	
171	磨石類	C3	安山岩	B		XV	7B11	98.0	88.0	50.0	581.23	
172	磨石類	C1	硬砂岩	A		XV	5C4	89.5	63.0	34.0	293.03	
173	磨石類	C2	安山岩	B		XV	7B19	88.5	84.0	36.5	376.71	
174	磨石類	C4	硬砂岩	B		XV	8A12	111.5	70.5	39.0	516.67	
175	磨石類	C4	硬砂岩	B		XV	8B23	94.5	72.0	35.0	334.63	
176	磨石類	C6	礫岩	B		XVb～XV	7B1	98.0	87.0	43.0	638.61	
177	磨石類	C8	花崗岩	B		XVb	7A22	115.5	94.0	46.5	823.86	
178	磨石類	C5	流紋岩	B		XV	8B9	135.0	51.0	40.0	425.04	
179	磨石類	D1	花崗岩？	F		XV	10B4	160.0	81.5	50.0	1035.62	
180	磨石類	D2	硬砂岩	C		XV	9A14	(109.0)	68.0	43.5	543.29	
181	石皿	－	安山岩	B		XVb～XV	7A22	158.0	185.0	41.0	1609.80	
182	石皿	－	安山岩	G		XV	5D16	161.0	135.0	41.0	1406.02	
183	石皿	－	安山岩？	B		XV	8A13	200.0	161.0	56.0	1919.08	
184	台石	－	安山岩	F		XV	10A16・17	221.0	115.0	67.4	2120.00	
185	砥石	－	凝灰岩	F		XV	11A17	118.0	77.0	47.0	525.35	
186	砥石	－	砂岩	B		XV	7A19	126.0	68.5	32.0	228.73	
187	砥石	－	凝灰岩	G		XV	6C7	73.0	73.5	32.0	167.07	

石器・石製品観察表（4）

報告番号	種　別	分　類	石　材	出　土　位　置				属　性（単位：mm/g）（　）は破損品の残存値				備　　考
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	
188	砥石	－	砂岩	C		XVc	9B8	125.0	84.5	15.0	203.56	
189	砥石	－	砂岩	A		XV	6B19	145.5	89.0	30.4	703.70	
				F		XV	10A19					
190	砥石	－	砂岩	G		XV	4D12	91.0	107.0	35.7	416.83	
191	砥石	－	砂岩	A		XVb	6B17・18	148.0	134.0	37.0	829.71	表面一部剥落
192	砥石	－	砂岩	B		XV	8A17	500.5	150.0	147.5	1439.00	砥面3面
193	砥石	－	砂岩	B		XV	7A23	91.0	70.5	34.6	385.97	
194	砥石	－	砂岩	F		XV	10A19	149.0	79.0	47.6	518.16	
195	類石棒	－	安山岩	A		XV	6B14	77.0	57.5	58.0	303.00	敲打痕　工程品か
196	類石棒	－	流紋岩	F		XV	10A15	117.5	45.0	33.0	295.15	断面六角形
197	玦状耳飾	破損品	滑石(黄　不透明)	C		Ⅳb	9B18	42.0	24(46)	8.0	9.00	
198	玦状耳飾	破損品	滑石（黄）	A		20	6C8	43.0	43(46)	6.0	12.00	接合
198	玦状耳飾	破損品	滑石（黄）	C		Ⅳb	9C22					
199	玦状耳飾	破損品	滑石（黒）	C		XⅣb	9A22	31.0	28(32)	11.0	7.50	
200	玦状耳飾	破損品	滑石（黒）	B	SD50	3	7B15	46(49)	24(50)	7.0	11.00	
201	玦状耳飾	破損品	滑石（黄）	G		XⅢd	5C8	43.0	23(46)	7.0	11.00	
202	玦状耳飾	破損品	滑石（黄）	B	SD50	3	8B19	37.0	22(39)	8.5	11.50	
203	玦状耳飾	破損品	滑石（黒）	C		XⅣb	9A23	38.0	20(44)	5.5	7.00	
204	玦状耳飾	破損品	滑石（黄）	F		XⅢe	－	22.0	14(33)	5.0	3.00	
205	玦状耳飾	破損品	滑石（黄）	A		XV	5C4	31.0	21(40)	5.5	6.00	
206	玦状耳飾	破損品	滑石（黄）	G		Ⅳ	5D1	34.0	21(39)	8.0	8.00	
207	玦状耳飾	破損品	滑石（緑）	B		XVe	6B10	33.0	22.5(35)	6.0	6.00	
208	玦状耳飾	破損品	滑石（黄）	B		XⅢb	8B12	36.0	26(36)	6.0	7.50	
209	玦状耳飾	破損品	滑石（黒）	C		耕土a	9C5	16(35)	18(38)	5.0	2.50	
210	玦状耳飾	破損品	滑石（黒）	A		XV	5C19	35.0	30(43)	7.0	10.50	
211	玦状耳飾	破損品	滑石（黒）	F		XV	10A20	37.0	22(34)	9.0	11.50	破損面に研磨痕
212	垂玉？	完形	滑石（茶）	D		C	3D2	32.0	31.0	7.0	6.50	玦状耳飾からの転用品
213	玦状耳飾	未成品	滑石（黄）	C		XⅡb	9B12	34.0	28.0	8.0	8.00	円盤状素材
214	玦状耳飾	未成品	滑石（黄）	C		トレンチ23	9B20・25	35.0	29.0	16.0	25.00	円盤状素材 穿孔、切目作出途中
215	玦状耳飾	未成品	滑石(黄　不透明)	C		XⅢa	9B6	43.0	33.0	7.5	19.00	円盤状素材
216	管玉	破損品	滑石（黒）	A		XV	5B25	21.0	19.0	12(19)	6.50	
217	管玉	破損品	滑石（黄）	F		XV	10A20	23.0	15.0	7(13)	3.00	
218	管玉	未成品	滑石（黒）	－		XⅡ	－	50.0	18.0	16.0	24.00	
219	垂玉	完形	滑石（黒）	A		XVb	6B12	27.0	17.0	5.0	3.00	
220	垂玉	完形	滑石（黒）	B		XⅢ	8B12	28.0	15.0	6.0	3.00	
221	垂玉	破損品	滑石（黄）	F		XV	11B1	(20.0)	11.0	3.0	0.50	
222	垂玉	破損品	滑石（黄）	C		XⅣb	9A22	30(36)	14(16)	5.0	3.00	
223	不明石製品	破損品	蛇紋岩	A		XVa	6B6	(34.0)	(12.0)	7.0	4.00	擦切技法
224	不明	破損品	滑石(黄　不透明)	F		XV	10A11	27.0	31.0	7.0	9.50	
225	原石	－	滑石（黄）	F		XⅠc	11B1	40.0	31.0	13.0	18.50	求心状の剥離で円盤状に成形
226	原石	－	滑石（黄）	A		XV	5C3	52.0	44.0	27.0	78.50	
227	原石	－	滑石（黄）	B		XⅢb	8B12	28.0	23.0	10.0	8.50	
228	石鏃	破損品	凝灰岩	B		XVa	9A18	(26.0)	17.0	4.0	1.20	
229	石匙	完形	珪質頁岩	B		XVa	6B15	46.0	26.0	8.0	6.00	松原型石匙
230	石匙	完形	珪質頁岩（玉髄）	B		XVa	9A16	50.0	27.0	7.0	6.00	松原型石匙
231	石匙	完形	鉄石英（赤・黄混）	A		XVa	7B6	39.0	50.0	15.0	18.50	
232	不定形石器		珪質頁岩	B		XVa	9A17	45.0	42.0	7.0	18.00	
233	礫器	完形	凝灰岩	B		XVa	7B1	144.0	64.0	43.0	372.50	
234	石箆	完形	頁岩	B		XVa	8A16	65.0	39.0	13.0	33.50	
235	砥石	－	砂岩	B		XVa	9A18	126.0	125.1	27.1	696.60	砥面不明瞭
236	石錘	A1	安山岩	B		XVa	6B12	51.0	61.9	16.4	76.34	
237	石錘	A1	安山岩	B		XVa	7B2	76.2	107.3	37.0	401.65	
238	石錘	A1	砂岩	B		XVa	7A19	81.5	89.7	25.6	275.13	
239	石錘	A1	凝灰岩	B		XVa	6B15	62.9	86.8	22.6	142.00	
240	楔形石器	A2	珪質頁岩	B		XⅣb	8A20	31.9	34.1	8.5	10.23	
241	石核	B	凝灰岩	C		XⅣb	9A22	53.5	49.4	21.6	49.01	
242	磨石類	C8	安山岩	B		XⅣb	8A8	111.0	86.5	36.5	539.09	
243	石錘	A1	硬砂岩	B		XⅣb	8A20	111.0	78.0	20.5	232.07	
244	石錘	A1	礫岩？	B		XⅣb	8B5	77.0	87.0	31.0	239.18	
245	石錘	B	安山岩	F		XⅣb	10A16	99.0	88.0	32.5	385.67	磨石類転用
246	砥石	－	砂岩	B		XⅣb	8A20	122.5	87.0	22.5	215.59	
247	砥石	－	砂岩	B		XⅣb	8A23	110.0	82.0	35.0	318.00	
248	砥石	－	凝灰岩	B		XⅣb	8A20	72.0	36.0	15.0	32.00	
249	石皿	－	砂岩	B		XⅣ	8A13	176.0	151.0	30.0	775.03	磨面不明瞭
250	石鏃	完成品　A3	頁岩	C		XⅢb	9B6	16.2	14.8	3.2	0.55	アスファルト付着
251	石鏃	完成品　A3	チャート	C		XⅢb	9B8	33.6	17.2	5.4	2.31	アスファルト付着
252	石鏃	完成品　D1	珪質頁岩	A		XⅢ	6A22	36.7	12.3	9.9	3.10	アスファルト付着
253	石鏃	完成品　D2	流紋岩	A		XⅢ	4C5	43.5	12.3	7.4	3.01	アスファルト付着
254	石鏃	完成品　D2	頁岩	A		XⅢ	6B18	43.6	9.8	5.6	2.23	アスファルト付着

石器・石製品観察表（5）

報告番号	種　別	分　類	石　材	出　土　位　置				属　性（単位：mm/g）（　）は破損品の残存値				備　　考
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	
255	石鏃	D1　完成品	凝灰岩	C		XIIIb	9B10	21.8	14.0	4.2	1.13	アスファルト付着
256	石鏃	D2　完成品	珪質頁岩	A		XIIIe	5B16	28.2	7.9	3.6	0.76	アスファルト付着 衝撃剥離痕
257	石鏃	B　未成品	珪質頁岩	C		XIIIb	9B7	44.4	34.3	11.6	16.21	
258	石鏃	B　未成品	珪質頁岩	F		XIIIe	11A22	33.3	24.3	8.1	5.73	
259	石鏃	C　未成品	流紋岩	B		XIIIb	8B10	40.5	29.9	12.1	11.83	
260	石鏃	C　未成品	流紋岩	A		XIIIb	6C2	40.9	31.5	8.9	10.85	
261	石錐	A	流紋岩	A		XIIIa	4B25	29.0	8.7	8.4	1.51	
262	石錐	A	流紋岩	G		XIIIb	4D9	61.0	17.8	17.0	13.17	
263	石錐	D	頁岩	B		XIII	8B19	30.7	53.9	13.8	15.51	上部アスファルト付着（石鏃転用）
264	石錐	B	玉髄	A		XIIb	6C11・12	(28.4)	15.2	9.2	3.03	
265	石錐	D	頁岩	B		XIIId	8A14	49.8	45.7	28.5	51.62	
266	石錐	E	頁岩	A		XIIIa	6A10	29.9	11.5	6.2	1.69	
267	石匙	－	ガラス質安山岩	A		XIII	6B12	35.2	47.6	8.0	12.19	
268	石匙	－	珪質頁岩	A		XIIIe	6C11	56.0	50.3	11.1	24.68	
269	楔形石器	A2	頁岩	B		XIIIe	8B8	35.5	46.8	12.0	20.27	
270	楔形石器	B	流紋岩	A		XIII	4A3	26.9	35.8	8.6	7.49	
271	楔形石器	A1	流紋岩	A		XIII	6B18	50.3	33.5	13.6	22.60	
272	不定形石器	C	頁岩	B		XIII	8B9	36.7	65.0	9.2	18.72	
273	不定形石器	A	珪質頁岩	B		XIII	7B7	74.7	36.0	14.7	31.02	
274	不定形石器	B	流紋岩	A		31	5A24	34.4	59.1	15.7	21.37	
275	不定形石器	G	珪質頁岩	B		XIIIe	8B9	43.8	51.8	12.3	25.31	
276	不定形石器	E	頁岩	G		XIIIe	4D5	57.5	41.8	17.7	35.18	
277	石核	A	珪質頁岩	D		XIIIa	4D6	27.0	80.8	22.0	35.49	
278	不定形石器	I	頁岩	A		XII	6B11	47.5	40.0	12.0	15.28	
279	磨製石斧	A2　完形	蛇紋岩	C		XIIIe	9A22	58.0	28.6	9.7	24.95	
280	磨製石斧	A2　破損品	蛇紋岩	C		XI？	9B12・17	36.9	22.2	8.9	12.37	基部折損
281	磨製石斧	A2　完形	蛇紋岩	A		XIIIa	4B20	38.4	20.1	6.3	8.50	
282	磨製石斧	A1　破損品	硬砂岩	B		XIIb	6B25	94.5	52.5	27.2	238.14	基部折損
283	磨製石斧	A1　破損品	閃緑岩	A		XI	5B15	(100.1)	59.0	35.8	360.79	基部折損
284	磨製石斧	C　未成品	安山岩	F		XIb	11B6	(105.3)	74.5	35.7	489.36	半損
285	磨製石斧	B　未成品	蛇紋岩	B		XIIb	6C5	60.5	37.0	16.2	55.50	
286	石錘	A1	礫岩	A		XIIIe	6C6・7	39.0	43.5	12.5	27.42	
287	石錘	B	花崗岩	C		XIIIe	11B22	64.0	117.5	40.0	440.81	
288	石錘	A1	砂岩	G		XIIIb	4D7	88.5	95.5	32.0	457.39	
289	石錘	A1	流紋岩	B		XIIIe	8B7	82.0	95.0	29.5	291.35	
290	磨石類	A1	安山岩	G		XIIIb	4C25	92.5	84.4	59.1	662.21	
291	磨石類	B4	頁岩	B		XIIIa	8B7	109.8	36.6	26.1	172.85	
292	磨石類	E	硬砂岩	－		XIIb	－	123.0	56.0	28.0	270.82	
293	磨石類	A'	硬砂岩	A		XIIIe	5B22	95.0	62.0	31.5	286.46	
294	磨石類	B2	花崗岩	B		X	8A25	105.0	67.0	33.0	352.50	
295	磨石類	C1	硬砂岩	A		XIIIe	5C7・8	91.0	72.0	45.0	411.48	
296	磨石類	C4	安山岩	－		XIIIb	－	159.0	65.0	57.0	823.63	
297	磨石類	C8	安山岩	A		XIIIa	5B18	105.0	82.5	54.0	628.21	
298	原石	－	琥珀	C		XIIIb	9B12	31.0	30.0	14.0	4.50	産地：岐阜県瑞浪
299	石皿	－	砂岩	B		XIIIe	8B3	69.0	140.0	31.5	249.38	
300	類石棒	－	粘板岩	A		31	5B5	116.7	29.0	10.9	55.02	剥落著しい
301	石鏃	A1　完形	流紋岩	D		F	3D19	35.5	12.0	4.3	1.34	
302	石鏃	A1　完形	流紋岩	D		F	4D16	37.7	15.7	4.8	2.10	
303	石鏃	A1　完形	流紋岩	G		灰色粘土	5D8	28.9	14.3	3.5	1.06	
304	石鏃	A1　完形	流紋岩	D		21	3D9	24.3	14.3	4.0	1.04	
305	石鏃	A1　完形	緑色凝灰岩	D		21	3D9	15.9	10.5	3.4	0.49	
306	石鏃	A2　完形	流紋岩	H		V	109B2	32.3	11.5	5.1	1.39	
307	石鏃	A2　完形	流紋岩	A	SD50	2	6B19	32.7	11.2	5.0	1.21	
308	石鏃	A2　完形	流紋岩	D		D	3D17	28.9	11.2	4.1	1.03	
309	石鏃	A3　破損品	流紋岩	D		D	2D10	36.1	13.2	5.1	1.68	
310	石鏃	A3　完形	頁岩	D		F	3D17	19.9	10.7	2.8	0.50	
311	石鏃	A3　完形	流紋岩	D		21	3D4	28.1	15.1	5.0	1.82	アスファルト付着
312	石鏃	D1　完形	玉髄	D		F	3D12	31.0	15.3	5.7	1.94	
313	石鏃	A　完形	流紋岩	D		21	3D20	43.1	16.4	3.8	2.49	
314	石鏃	D1　完形	珪質頁岩	－		不明	－	42.3	13.1	6.5	3.30	アスファルト付着
315	石鏃	D2　完形	流紋岩	D		F	4D11	23.2	11.9	5.2	1.39	
316	石鏃	E　完形	流紋岩	A	SK55	1	－	32.0	12.5	6.3	2.12	
317	石鏃	D2　破損品	頁岩	D		V	4D21	(38.0)	11.3	9.6	3.93	衝撃剥離痕
318	石鏃	F　破損品	結晶片岩	D		21	3D4	(27.3)	14.9	2.6	1.09	
319	石鏃	F　破損品	粘板岩	D		F	2D20	(21.9)	10.5	2.6	0.79	
320	石匙	完形	ガラス質安山岩	A		IV	4C7	14.5	18.8	2.4	0.55	
321	石錐	A　完形	流紋岩	C		23	9B21	29.5	9.4	5.1	1.74	使用痕顕著
322	石錐	A　完形	流紋岩	D		B	2D25	19.6	7.8	5.0	0.72	
323	石錐	A　完形	流紋岩	D		D	2D23	31.7	11.4	8.0	2.78	

石器・石製品観察表（6）

報告番号	種　別	分　類	石　材	出　土　位　置				属　性（単位：mm/g）（　）は破損品の残存値				備　　考
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	
324	石錐	B　完形	珪質頁岩	D		不明	－	42.4	20.7	7.8	5.95	
325	石錐	C　完形	流紋岩	A		Ⅶa	6B18	35.9	15.7	7.3	4.32	
326	石錐	E　完形	緑色凝灰岩	G		灰色粘土	5D13	18.5	10.5	3.2	0.58	
327	石錐	D　完形	流紋岩	B		Ⅵc	7B8	35.0	24.3	9.6	6.31	
328	石鏃	A　未成品	流紋岩	B	SD33	2	－	44.0	29.9	13.1	15.09	取上げNo.9
329	石鏃	A　未成品	流紋岩	B	SD50	3	8B16	59.6	32.4	13.5	19.22	
330	石鏃	B　未成品	珪質頁岩	D		D-2	3D19	50.9	31.8	9.4	14.91	
331	石鏃	B　未成品	流紋岩	D		F	2D25	48.6	23.1	9.6	8.71	
332	石鏃	C　未成品	玉髄	B		Ⅷa	8A14	47.2	17.7	10.7	7.80	
333	石鏃	C　未成品	緑色凝灰岩	B		Ⅵb	8B18	34.5	17.1	7.9	3.68	
334	石鏃	C　未成品	流紋岩	D		F	4D21	34.2	22.6	12.1	7.02	
335	楔形石器	A1	チャート	C	SD50	砂	10B13	30.6	24.5	6.4	6.14	
336	楔形石器	A2	頁岩	B	SD50	3	7B11	26.0	43.1	10.4	11.20	
337	楔形石器	A1	頁岩	－		Ⅵb	－	44.9	28.1	9.6	12.43	
338	楔形石器	B	頁岩	D		23	3D5	31.8	35.0	13.8	15.63	
339	楔形石器	B	流紋岩	B	SD51	3	7B15	27.8	39.1	9.8	8.58	
340	不定形石器	A	鉄石英	A	SD7	1	4B25	58.5	46.6	13.0	44.30	
341	不定形石器	A	流紋岩	D		F	3D15	35.2	50.7	11.8	18.02	
342	不定形石器	B	頁岩	G		23	5C21	31.0	40.0	8.6	10.40	
343	不定形石器	C	流紋岩	B	SD50	3	8B17	67.4	38.3	11.5	28.14	
344	不定形石器	C	流紋岩	A		23	6B25	53.2	29.7	12.0	15.07	
345	不定形石器	E	流紋岩	C	SD50	砂	10B20	39.5	43.5	10.8	21.54	
346	不定形石器	G	流紋岩	G		23	3D5	37.5	59.4	13.3	20.32	
347	不定形石器	G	流紋岩	A	SX4	1	4B18	42.8	50.2	8.2	14.05	
348	不定形石器	I	流紋岩	A		Ⅶb	5A24	35.6	43.8	8.8	11.62	
349	石核	G	流紋岩	D		D	2D17	39.2	37.8	20.7	28.86	
350	石核	D	ガラス質安山岩	D		F	3D7	56.2	57.2	38.0	136.31	
351	石核	×	頁岩	B		Ⅵc	7B25	49.1	71.4	38.5	119.90	
352	石核	E	流紋岩	D		Ⅵb	4D11	60.3	72.6	38.4	142.87	
353	板状石器様	－	凝灰岩	G		23	4C3	52.0	55.6	9.1	30.50	
354	打製石斧	－	凝灰岩	C	SD50	砂	10B13	98.0	68.8	13.0	83.15	使用痕　上部・下部に光沢あり
355	打製石斧	－	凝灰岩	－		Ⅵc	－	136.1	81.0	25.6	455.73	
356	打製石斧	－	蛇紋岩？	G		崩落土	－	95.6	54.0	16.3	98.18	使用痕　下部に光沢あり
357	磨製石斧	A1　破損品	緑色凝灰岩	D		D-2	3D11	92.7	46.0	19.8	135.53	刃部欠損
358	磨製石斧	A1　破損品	安山岩	D		F	2D15	(96.3)	55.0	32.5	290.27	基部折損
359	磨製石斧	A1　破損品	硬砂岩	A		20	6C1	(88.5)	(39.0)	29.0	155.28	刃部折損
360	磨製石斧	A3　破損品	硬砂岩	G		23	5D8	(81.5)	(43.0)	32.0	140.21	刃部折損
361	磨製石斧	A3　完形	凝灰岩	－		F	－	78.2	44.3	9.6	48.09	自然扁平礫に刃部作り出したのみ
362	磨製石斧	B4　完形	蛇紋岩	B		不明	6B14	40.3	7.4	7.3	4.15	
363	磨製石斧	A2　完形	蛇紋岩	C		24	10B23	34.2	18.0	5.9	5.63	
364	磨製石斧	B2　破損品	緑色凝灰岩	A		20	5C20	(84.0)	(35.0)	(21.7)	82.48	基部・片面折損
365	磨製石斧	B2　破損品	緑色凝灰岩	G		Ⅳ	4B21	(57.9)	(39.9)	(21.6)	77.21	半損
366	磨製石斧	B2　破損品	緑色凝灰岩	A		20	5C10	(110.5)	(12.3)	43.0	89.09	片側面のみ残存
367	磨製石斧	B2　破損品	緑色凝灰岩	A		21	5C14	(111.0)	(20.5)	(43.3)	113.00	両側面・刃部折損
368	磨製石斧	B1　破損品	閃緑岩	B		23	7B24	(87.2)	71.1	41.5	403.74	基部折損
369	磨製石斧	B3　破損品	閃緑岩	G		灰色粘土	5D5	(59.4)	62.3	20.0	143.06	基部折損
370	磨製石斧	B1　破損品	閃緑岩	A		21	5C14	148.0	65.2	41.0	724.39	刃部欠損
371	磨製石斧	B1　破損品	閃緑岩	A		23	6C8	(150.5)	67.0	40.0	499.23	基部に敲打痕 基部欠損
				A		24	5C5					
				D		D-3	2D19					
372	磨製石斧	B1　破損品	閃緑岩	D		Ⅵb・25	3D4	(83.7)	64.1	38.9	333.36	基部折損
373	磨製石斧	B3　完形	閃緑岩	A		Ⅷa	6A24	94.0	56.7	18.5	183.71	
374	磨製石斧	B3　完形	硬砂岩	B		23	8B21	80.5	33.3	13.7	53.35	
375	磨製石斧	B3　完形	蛇紋岩	G		23	4D8	57.6	38.1	13.7	45.26	
376	磨製石斧	C　未成品	安山岩	B		Ⅳb	8C6	(99.0)	73.0	54.0	458.99	
377	磨製石斧	C　未成品	閃緑岩	D		D	3D11	(129.0)	79.2	51.7	862.74	
378	磨石類	A1	安山岩	B	SD50	3	8B16	119.0	106.0	33.0	597.17	
379	磨石類	A2	安山岩	D		F	3D17	122.0	71.0	44.0	646.30	
380	磨石類	A2	安山岩	B	SD50	1	7B20	58.0	70.0	52.0	283.39	
381	磨石類	A'	硬砂岩	A	SD46	2	5A9	115.0	81.0	43.0	562.29	
382	磨石類	B2	安山岩	D		D	2E1	100.0	84.5	49.5	525.33	
383	磨石類	B3	安山岩	C		Ⅵb	9B16	95.5	87.0	37.0	545.68	
384	磨石類	C1	蛇紋岩	B	SD50	1	7B18	143.0	106.5	68.0	1578.83	取り上げNo.13
385	磨石類	C2	流紋岩	A		20	6C16	79.0	58.0	54.0	329.35	
386	磨石類	C3	安山岩	A	SD53	－	6B10	99.0	78.0	50.0	517.49	
387	磨石類	C3	安山岩	B		23	7B16	86.0	48.5	49.0	497.61	
388	磨石類	C5	安山岩	G		灰色粘土	5D3	96.0	79.0	51.0	491.23	
389	磨石類	C6	流紋岩	A		20	－	125.0	92.0	74.0	1106.60	
390	磨石類	E	閃緑岩	B	SD50	3	6B15	107.7	60.5	31.9	382.82	

石器・石製品観察表（7）

報告番号	種　別	分　類	石　材	出　土　位　置				属　性（単位：mm/g）（　）は破損品の残存値				備　　考
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	
391	磨石類	E	蛇紋岩	A		Ⅵb	6C5	63.0	38.0	29.0	103.57	
392	磨石類	E	閃緑岩	D		Ⅳb	4D22	115.5	71.3	43.7	600.56	
393	多面体敲石	－	流紋岩	D		F	2D22	77.0	76.0	66.0	515.88	
394	石皿	－	安山岩	G		崩落土	－	(222.0)	(171.0)	42.0	2130.00	
395	石皿	－	安山岩	C		D-4	10B24	(121.0)	(172.0)	37.0	894.77	
396	台石	－	花崗岩	D		Ⅵa	3D	220.0	188.0	101.0	6880.00	
397	台石	－	砂岩	A		Ⅳb	6C12	(154.0)	123.0	52.0	1027.19	裏面破損
398	砥石	－	砂岩	C		23	11B23	(86.0)	(99.0)	29.0	251.98	
399	砥石	－	流紋岩	B	SD50	3	8B19	150.0	86.0	29.0	393.65	
400	砥石	－	砂岩	D		23	4D2	156.0	106.0	23.0	448.07	
401	砥石	－	砂岩	D		23	4D2	200.0	169.0	82.0	2460.00	
402	砥石	－	砂岩	D		D-4	2E4	(165.0)	(141.0)	55.0	1324.24	
403	砥石	－	砂岩	D		D	2E6	(96.0)	74.0	65.0	701.42	
404	砥石	－	砂岩	G		F	4D12	(77.0)	(75.0)	50.0	269.09	敲打痕
405	砥石	－	砂岩	B		23	7B23	129.0	92.0	26.0	367.13	
406	砥石	－	砂岩	D		Ⅵb	3D4	(123.0)	97.0	49.0	654.13	
407	砥石	－	砂岩	D		不明	－	31.5	34.5	13.0	14.67	
408	砥石	－	砂岩	A	SD50	3	7B	299.0	102.0	85.0	3970.00	砥面４面
409	砥石	－	砂岩	A	SD47	－	6A	90.0	75.0	26.7	179.26	
410	砥石	－	砂岩	G		23	4D1	(64.0)	24.0	11.0	29.62	
411	砥石	－	砂岩	D		D	3D2	(40.5)	22.5	11.0	13.49	砥面非常に平滑
412	砥石	－	砂岩	D		F	3D17	(88.0)	(72.0)	42.0	308.24	
413	砥石	－	砂岩	C	SD83	ガツボ	10B18	(24.5)	28.5	21.0	22.69	砥面４面
414	砥石	－	凝灰岩	D		D	2D12	123.0	70.0	53.0	556.93	
415	砥石	－	凝灰岩	A		20	5C15	89.0	45.0	44.0	330.06	
416	砥石	－	凝灰岩	D		D-4	3D13	(101.0)	60.0	26.0	222.69	
417	砥石	－	砂岩	B		23	7B21	49.0	35.0	27.5	63.48	
418	砥石	－	凝灰岩	D		21	3D19	(76.0)	(52.0)	15.0	71.32	
419	砥石	－	凝灰岩	D		F	3D14	(77.0)	68.0	25.0	128.04	
420	砥石	－	軽石	A	SD51	3	5B4	96.0	67.0	49.0	93.00	
421	砥石	－	頁岩	D		23	3D19	(136.0)	(49.0)	15.0	112.37	
422	石錘	A1	安山岩	D		D	2E4	33.0	41.6	15.8	28.82	
423	石錘	A1	砂岩	A	SD46	2	5A	34.4	49.5	13.0	28.11	
424	石錘	A1	硬砂岩	B	SD50	3	8B19	74.5	86.5	23.5	200.27	
425	石錘	A1	凝灰岩	－		排土	－	68.5	93.5	29.5	190.29	
426	石錘	A2	砂岩	C		Ⅸb	10B22	108.5	82.5	21.0	198.62	
427	石錘	B	安山岩	D		21	4D17	70.0	114.0	31.0	358.50	敲打痕 磨石類転用
428	石錘	A2	ホルンフェルス	G		23	4D14	101.0	52.0	18.0	143.77	
429	石錘	C	安山岩	D		D	2E3	72.0	82.0	20.0	143.03	敲打痕 磨石類転用
430	石錘	－	砂岩	D		Ⅵb	4D12	29.5	33.0	28.0	27.67	
431	研磨具	－	軽石	B	SD50	3	8B21	27.2	30.0	25.0	6.12	
432	研磨具	－	軽石	F		青灰砂	11B	46.0	44.0	12.0	7.41	
433	研磨具	－	軽石	B	SD50	3	7B20	50.0	36.5	37.5	8.03	
434	不明石製品	－	蛇紋岩	D		F	1E9	24.5	32.5	3.5	3.18	表裏平滑に研磨 剣先状
435	不明石製品	－	粘板岩	D		不明	－	34.2	20.5	5.4	4.69	台形状 四方を平滑にする
436	磨製石剣か	－	黒色頁岩か	D		F	2D23	64.0	44.0	16.0	37.34	鎬あり
437	不明石製品	－	粘板岩	G		23	4D2	34.0	70.8	14.4	33.72	
438	不明石製品	－	粘板岩	G		23	4C21	42.3	62.7	15.2	53.04	孔１か所
439	不明石製品	－	黒色頁岩	C		23	9B17	75.5	36.1	8.0	16.83	正面研磨痕、周縁に剥離
440	不明石製品	－	粘板岩	B		Ⅷa	8B12	51.6	31.6	15.3	30.49	上面が刃部？ 上部に孔２か所
441	不明石製品	－	黒色頁岩	－		不明	－	26.7	15.6	5.5	2.80	正面裏面に研磨痕
442	石包丁か	－	粘板岩	A		25	6C8	51.2	37.3	8.5	25.75	孔２か所、 刃部わずかに残存
443	ミガキ具	－	蛇紋岩	A		20	5C13	46.0	44.0	12.0	32.96	
444	石製模造品	－	滑石	B		23	7B22	23.1	21.6	4.0	3.59	２孔１対
445	石製模造品	－	滑石	A		23	6C9	20.7	20.7	2.9	2.69	２孔１対
446	石製模造品	－	滑石	B		⑥	7C7	15.5	16.4	2.6	1.28	２孔１対
447	石製模造品	－	滑石	C	SD83	ガツボ	9B18	18.0	19.4	2.5	1.37	２孔１対
448	不明石製品	－	砂岩	G		灰色粘土	4D9・10	46.0	67.5	19.1	43.90	
449	不明石製品	－	凝灰岩	C		23	9B22・23	27.5	31.1	7.1	6.61	孔３か所、下部に磨痕
450	不明石製品		凝灰岩	D		21	4D11	38.1	18.3	16.2	13.47	
451	不明石製品		凝灰岩	D		不明	－	28.8	10.7	9.3	5.06	
452	管玉工程品	石核	緑色凝灰岩	A		Ⅵb	6B23	40.7	52.5	35.4	60.29	
453	管玉工程品	石核	緑色凝灰岩	D		F	4D16	26.5	43.1	28.4	32.97	
454	管玉工程品	石核	緑色凝灰岩	B		Ⅵc	8B12	39.8	85.9	68.0	220.07	
455	管玉工程品	石核	緑色凝灰岩	A		21	6C4	50.5	40.6	36.4	113.41	
456	管玉工程品	剥片	緑色凝灰岩	A		Ⅷa	6B10	21.0	45.1	26.0	18.48	

石器・石製品観察表（8）

報告番号	種　別	分　類	石　材	出　土　位　置				属　性（単位：mm/g）（　）は破損品の残存値				備　　考
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	
457	管玉工程品	大型剥片	緑色凝灰岩	－		不明	－	86.0	66.0	21.4	91.17	
458	管玉工程品	剥片	緑色凝灰岩	C	SD50	砂	10B10	20.3	64.9	24.3	26.60	
459	管玉工程品	角柱状：大	緑色凝灰岩	G		23	4D8	30.7	22.3	16.6	12.83	
460	管玉工程品	角柱状：大	緑色凝灰岩	D		F	2E2	34.6	19.2	20.6	19.91	
461	管玉工程品	角柱状：大	緑色凝灰岩	G		灰色粘土	5D3	60.0	18.5	17.3	26.38	
462	管玉工程品	角柱状：大	緑色凝灰岩	－		不明	－	23.8	14.5	12.6	7.60	
463	管玉工程品	角柱状：大	緑色凝灰岩	G		灰色粘土	4D9	28.0	15.1	13.1	9.61	
464	管玉工程品	角柱状：大	緑色凝灰岩	B	SD50	3	8B9	47.1	19.8	17.1	28.04	
465	管玉工程品	角柱状：大	緑色凝灰岩	D		Ⅵb	4D17	42.0	17.0	15.0	15.04	
466	管玉工程品	側面剥離：中	緑色凝灰岩	D		21	3D10	24.3	9.8	9.0	2.92	
467	管玉工程品	側面剥離：大	緑色凝灰岩	D		D	2E6	38.5	20.7	19.9	18.98	
468	管玉工程品	多角柱：大	緑色凝灰岩	－		不明	－	22.2	19.5	19.7	8.33	
469	管玉工程品	板状：小	緑色凝灰岩	－		不明	－	32.9	24.4	13.3	17.73	
470	管玉工程品	板状：小	緑色凝灰岩	－		不明	－	31.8	31.2	18.0	19.37	
471	管玉工程品	角柱状：小	緑色凝灰岩	G		23	5D11	32.1	12.8	10.0	5.21	
472	管玉工程品	角柱状：小	緑色凝灰岩	B	SD50	3	6B15	33.5	11.2	8.8	3.44	
473	管玉工程品	角柱状：小	緑色凝灰岩	B	SD50	3	8B17	21.8	10.8	10.1	4.02	
474	管玉工程品	角柱状：小	緑色凝灰岩	A	SD48	1	6A17	26.5	9.7	5.6	2.86	
475	管玉工程品	角柱状：小	緑色凝灰岩	D		Ⅵb	3D20	22.3	10.1	7.5	2.27	
476	管玉工程品	側面剥離：小	緑色凝灰岩	－		不明	－	21.9	6.2	6.1	1.43	
477	管玉工程品	側面剥離：小	緑色凝灰岩	－		不明	－	20.3	5.9	5.1	0.77	
478	管玉工程品	側面剥離：小	緑色凝灰岩	D		21	3D19	11.6	4.2	3.8	0.30	
479	管玉工程品	扁平柱：小	緑色凝灰岩	D		F	3D17	23.8	7.6	5.4	0.98	
480	管玉工程品	扁平柱：小	緑色凝灰岩	G		灰色粘土	5D2	23.2	6.6	4.0	0.92	
481	管玉工程品	扁平柱：小	緑色凝灰岩	－		不明	－	10.4	7.1	4.5	0.50	
482	管玉工程品	扁平柱：小	緑色凝灰岩	D		20	4D6	18.9	5.7	3.7	0.54	
483	管玉工程品	扁平柱：小	緑色凝灰岩	D		F	4D16	25.4	6.1	3.7	0.83	
484	管玉工程品	扁平柱：小	緑色凝灰岩	D		Ⅵb	4D16	23.2	6.6	4.6	0.43	
485	管玉工程品	扁平柱：小	緑色凝灰岩	D		Ⅵb	3D20	11.1	5.4	4.6	0.33	
486	管玉工程品	多角柱：小	緑色凝灰岩	D		Ⅵb	4D16	13.4	3.3	3.3	0.26	
487	管玉工程品	多角柱：小	緑色凝灰岩	D		Ⅵb	3D20	16.0	2.9	2.5	0.21	
488	管玉工程品	多角柱：小	緑色凝灰岩	－		表採	－	11.5	2.7	2.5	0.16	Bメインセクションベルト上
489	管玉工程品	多角柱：小	緑色凝灰岩	D		Ⅵb	3D18	13.5	2.6	2.6	0.10	先細り 下端径1.2mm
490	管玉工程品	多角柱：小	緑色凝灰岩	D		D	2D23	8.5	3.0	3.3	0.13	
491	管玉工程品	穿孔：小	緑色凝灰岩	D		不明	－	8.7	3.0	2.9	0.10	孔径1.2mm
492	管玉工程品	穿孔：小	緑色凝灰岩	D		不明	－	9.3	2.3	2.3	0.08	孔径上1.0mm 下0.6mm
493	管玉工程品	仕上げ研磨：小	緑色凝灰岩	D		F	3D21	7.7	2.7	2.6	0.09	孔径1.0mm
494	管玉工程品	仕上げ研磨：小	緑色凝灰岩	－		不明	－	14.5	2.7	2.6	0.15	孔径1.3mm
495	管玉工程品	完成品：小	緑色凝灰岩	D		F	2E4	10.0	2.6	2.6	0.11	孔径1.3mm
496	管玉工程品	完成品：小	緑色凝灰岩	D		Ⅵb	4D16	9.3	3.2	3.2	0.16	孔径1.7mm
497	管玉工程品	完成品：小	緑色凝灰岩	D		Ⅵb	4D16	7.5	2.4	2.4	0.06	孔径1.2mm
498	管玉工程品	完成品：小	緑色凝灰岩	D		21	3D14	6.6	3.2	3.1	0.11	孔径1.7mm
499	管玉工程品	完成品：中	緑色凝灰岩	D		Ⅵb	4D16	28.7	7.7	7.7	3.10	孔径2.9mm　両面穿孔
500	管玉工程品	穿孔：中	緑色凝灰岩	A		20	5C20	22.1	7.1	7.1	1.06	孔径2.5mm 両面穿孔、破損
501	勾玉工程品	研磨痕	ヒスイ	D		Ⅵb	3D4	45.0	41.0	21.5	84.46	
502	勾玉工程品	研磨痕	ヒスイ	D		B	1E14	35.0	33.5	21.5	38.80	
503	勾玉工程品	穿孔痕	ヒスイ	A		20	5B16	23.0	26.1	18.6	12.24	
504	勾玉工程品	研磨痕	ヒスイ	D		F	3D8	61.0	36.5	16.0	51.54	
505	勾玉工程品	施溝	ヒスイ	H		Ⅳ	108B5	65.4	35.7	30.7	145.71	
506	勾玉工程品	施溝	ヒスイ	G		崩落土	－	53.3	42.5	34.2	141.51	
507	勾玉工程品	施溝	ヒスイ	G		Ⅵ	6D21	21.6	12.6	4.8	5.43	
508	勾玉工程品	施溝	ヒスイ	－		F	－	41.2	32.7	22.8	63.80	
509	勾玉工程品	施溝	ヒスイ	G		灰色粘土	5C22	38.5	29.6	23.6	39.28	
510	勾玉工程品	成形（D字前）	ヒスイ	－		不明	－	17.3	10.9	8.0	3.01	
511	勾玉工程品	成形（D字前）	ヒスイ	G		灰色粘土	5D6	37.6	27.4	16.7	33.64	敲打痕あり
512	勾玉工程品	成形（D字前）	ヒスイ	D		Ⅵb	4D11	26.8	15.0	14.6	10.01	磨痕
513	勾玉工程品	成形（D字前）	ヒスイ	D		F	3D15	17.0	12.3	7.5	2.14	磨痕
514	勾玉工程品	整形（D字状）	ヒスイ	G		灰色粘土	5C16	26.8	20.5	14.0	12.71	
515	勾玉工程品	整形（D字状）	ヒスイ	G		崩落土	－	21.6	15.1	10.9	7.89	
516	勾玉工程品	整形（D字状）	ヒスイ	－		不明	－	9.6	6.0	4.9	0.68	
517	勾玉工程品	整形（D字状）	ヒスイ	D		不明	－	11.8	9.4	6.0	1.55	
518	勾玉工程品	整形（D字状）	ヒスイ	－		不明	－	15.7	8.9	8.4	3.27	
519	勾玉工程品	整形（D字状）	ヒスイ	D		F	2D18	16.2	8.4	5.7	1.31	
520	勾玉工程品	整形（抉入）	ヒスイ	A		Ⅵb	4B17	25.2	17.1	11.7	9.51	
521	勾玉工程品	整形（抉入）	ヒスイ	G		灰色粘土	5C24	20.5	13.7	11.5	5.88	
522	勾玉工程品	整形（抉入）	ヒスイ	D		21	3D13	18.0	9.6	5.4	1.31	
523	勾玉工程品	整形（抉入）	ヒスイ	－		不明	－	10.7	7.8	5.4	0.71	
524	勾玉工程品	整形（抉入）	ヒスイ	G		灰色粘土	5D6	10.9	7.9	5.6	0.86	

石器・石製品観察表（9）

報告番号	種　別	分　類	石　材	出　土　位　置				属　性（単位：mm/g）（　）は破損品の残存値				備　　考
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	
525	勾玉工程品	完成品	ヒスイ	G		灰色粘土	4D9	14.5	10.1	6.2	1.76	
526	勾玉工程品	完成品	ヒスイ	D		不明	－	14.2	10.0	6.2	1.48	
527	勾玉工程品	穿孔中	ヒスイ	D		排土	－	12.8	10.1	6.6	1.32	
528	勾玉工程品	完成品	ヒスイ	－		不明	－	11.0	6.8	6.2	0.93	
529	勾玉工程品	仕上げ研磨か	蛇紋岩	－		不明	－	7.1	5.8	2.9	0.16	
530	勾玉工程品	完成品	ヒスイまたは軟玉	－	P413	－	－	9.4	6.9	4.2	0.51	
531	勾玉工程品	穿孔中	石英か	D		D	2D19	7.6	5.8	3.2	0.25	
532	勾玉工程品	完成品	蛇紋岩	D		F	2D18	7.1	4.4	2.2	0.10	
533	石針工程品	角柱状	安山岩	G		灰色粘土	5D7	12.2	2.8	2.7	0.15	
534	石針工程品	角柱状	安山岩	D		F	3D24	10.7	1.7	1.7	0.05	
535	石針工程品	剥片状	安山岩	－		不明	－	10.2	3.2	2.0	0.02	
536	石針工程品	完成品	安山岩	D		不明	－	13.3	2.5	2.4	0.14	底面回転痕あり
537	石針工程品	完成品	安山岩	D		F	1E10	23.8	2.5	2.5	0.31	
538	石針工程品	完成品	安山岩	D		不明	－	22.7	2.1	2.1	0.20	
539	石針工程品	完成品	安山岩	D		F	2E4	18.1	2.7	2.6	0.20	底面回転痕あり
540	石針工程品	完成品	安山岩	D		F	2E5	14.3	2.3	2.3	0.17	底面回転痕あり
541	石針工程品	完成品	安山岩	D		不明	－	13.5	2.4	2.4	0.16	底面回転痕あり
542	石針工程品	完成品	安山岩	D		21	3D8	11.8	2.0	2.0	0.09	側面回転痕あり 下部折損
543	石針工程品	完成品	安山岩	－		不明	－	12.5	2.6	2.6	0.16	底面・側面回転痕あり
544	擦切具	－	流紋岩	D		F	3D17・20	36.0	101.0	8.5	36.72	
545	擦切具	－	珪化木	D		F	3D20	15.0	39.0	5.0	4.86	
546	擦切具	－	流紋岩	G		灰色粘土	4D9	28.0	77.0	7.0	14.23	
547	擦切具	－	流紋岩	I		Ⅶ	103C10	53.0	86.0	7.3	23.70	
548	擦切具	－	凝灰岩	A		不明	6C3	76.0	145.0	11.0	115.64	
549	擦切具	－	凝灰岩	C	SD83	－	9・10B	56.0	62.0	13.0	25.53	
550	擦切具	－	凝灰岩	B		23	6C5	34.5	46.5	6.5	9.40	
551	擦切具	－	凝灰岩	C		23	9B21	36.5	52.0	5.5	15.75	
552	弾車	－	砂岩	G		灰色粘土	4D3	(89.2)	(56.7)	20.5	113.15	直径100mm
553	弾車	－	凝灰岩	G		灰色粘土	4D9	(43.5)	(44.0)	(24.8)	26.18	直径推定114mm
554	弾車	－	硬砂岩	D		撹乱	3D13	(58.5)	(51.0)	19.0	51.38	直径推定104mm裏面平坦
555	弾車	－	硬砂岩	D		灰色粘土	4D7	107.0	105.0	18.0	217.66	直径106mm
556	弾車	－	砂岩	B	SD50	3	6B15	(99.0)	102.5	19.5	182.30	直径102.5mm
557	敲石	－	ヒスイ	D		B	3D12	64.5	60.0	41.5	262.03	磨痕あり
558	敲石	－	ヒスイ	－		不明	－	52.0	43.5	28.5	114.35	磨痕あり
559	敲石	－	ヒスイ	G		F	4D6	58.0	33.5	26.0	104.41	磨痕あり
560	敲石	－	ヒスイ	A		20	6C16	65.0	63.5	49.5	292.36	磨痕あり
561	敲石	－	ヒスイ	D		－	トレンチ	59.5	62.0	48.0	190.43	磨痕あり
562	勾玉	完成品	黒色頁岩	－		不明	－	39.7	23.5	10.7	12.13	
563	勾玉	完成品	滑石	B		Ⅵc	7B23	23.7	14.6	5.6	2.53	
564	勾玉	完成品	滑石	D		B	2D25	11.0	7.2	4.2	0.50	
565	勾玉	破損品	滑石	D		F	2E3	13.5	10.7	5.0	0.95	
566	垂玉	完成品	ヒスイ	－		不明	－	5.1	4.9	2.3	0.10	孔径0.5mm
567	勾玉	破損品	ヒスイ	A		Ⅵc	5B13	14.5	10.5	6.0	0.93	
568	小玉	完成品	ヒスイ	A		XIIIa	4B25	6.8	7.0	5.5	0.36	孔径　上：1.7mm、 下：4.7mm
569	小玉	未成品	石英か	－		不明	－	4.4	4.8	5.2	0.14	孔径2.0mm
570	白玉	破損品	石英か	－		不明	－	4.9	6.2	2.5	0.13	孔径1.7mm
571	管玉	完成品	滑石	D		F	－	14.8	9.7	7.8	1.79	孔径5.3mm
572	白玉	完成品	滑石	I		Ⅲ	104D7	9.5	10.5	4.5	0.56	孔径4.2mm
573	丸玉	－	緑色凝灰岩	B		Ⅵb	7B21	12.0	10.2	7.0	0.98	
574	白玉	完成品	滑石	C		Ⅵb	11B24	4.5	4.4	3.7	0.14	孔径1.4mm
575	白玉	完成品	滑石	D		F	2E1	4.9	4.9	3.7	0.14	孔径1.7mm
576	白玉	完成品	滑石	D		21	2D25	5.2	5.3	2.6	0.14	孔径1.4mm
577	白玉	完成品	滑石	G		不明	－	5.7	5.4	2.3	0.14	孔径1.4mm
578	白玉	完成品	滑石	－		不明	－	4.1	4.1	3.4	0.10	孔径1.7mm
579	白玉	完成品	滑石	G		Ⅳ	5D7	5.2	5.2	1.3	0.05	孔径2.0mm
580	白玉	完成品	滑石	G		灰色粘土	5D5	3.1	3.1	1.7	0.03	孔径1.2mm
581	白玉	完成品	滑石	G		灰色粘土	5D14	3.3	3.5	1.7	0.04	孔径1.4mm
582	丸玉	完成品	ガラス（青色）	D		Ⅵb	3D25	7.0	7.0	2.0	0.18	半損
583	小玉	完成品	ガラス（淡青色）	D		B	2D22	4.6	4.7	4.8	0.15	孔径1.3mm
584	小玉	完成品	ガラス（淡青色）	A		Ⅶ	6B23	5.2	5.8	3.8	0.14	孔径2.1mm
585	小玉	完成品	ガラス（群青色）	A		23	6C8	4.3	4.5	2.0	0.06	孔径1.4mm
586	小玉	完成品	ガラス（淡青色）	C		Ⅵa	10B21	3.5	3.6	1.9	0.03	孔径1.3mm
第28図1	石鏃	A2	黒曜石	M	SD（中世）	2	104E21	48.9	21.3	5.8	5.04	上下欠損
第28図2	石包丁か		粘板岩	G		Ⅵb	4C25	34.1	45.0	7.8	14.49	
第28図3	磨製石斧	B3	閃緑岩	G		Ⅵb	4C13	32.5	28.0	16.0	27.67	
第28図4	石棒か		安山岩	C		Ⅳb	9C23	107.0	51.0	43.5	291.51	

大武遺跡　木製品・漆製品観察表（1）

樹種:分析していない個体のうち、肉眼観察により判断できたものについては広葉樹＝「広」、針葉樹＝「針」と記載した。

報告番号	種　類	形状・断面	樹　種	試料番号	木取り	地区	出土位置				法量（cm）			備　考
							遺構番号	覆土層位	グリッド	グリッド層位	長さ	幅	厚さ	
1	杭				芯持丸木	G	SK96	1	6D21		31.7	2.6	2.4	樹皮残存
2		杭状	広		削出	G	SK96	1	6D21		40.3	5.1	5.7	
3		杭状	広		削出	G	SK96	1	6D21		45.2	8.3	5.3	
4		杭状	広		芯持丸木	G	SK96	1	6D21		43.5	9.6	3.9	樹皮残存
5	井戸枠側板		クリ	210	丸木剝抜	E	SE89		5U11		80.1	直径60.0	4.0	内面加工痕
6	杭				芯持丸木	C	SE89			Ⅶ	33.5	3.1	3.4	
7		箆状	広		板目	A	SK49				29.3	4.2	1.5	
8	加工材		広		ミカン割	A	SK49				8.8	2.2	2.4	片側に抉り
9		板状	スギ	141	柾目	A	SK49	2			10.0	4.7	0.7	
10	杭				芯持丸木	A	SK55	2, 3			40.7	8.0	7.1	
11	杭		広		芯持丸木	A	SK55	3			18.0	4.5	3.8	
12		短冊状	針		柾目	A	SK55	3			11.5	4.8	0.7	形代の可能性あり
13		短冊状	キハダ属	152	柾目	A	SK55	3			16.8	4.1	0.8	形代の可能性あり
14		板状	広		板目	A	SK55	3			43.3	5.5	2.8	
15		棒状	広		削出	A	SK55	1			89.0	8.8	7.2	
16	角枠型田下駄（桟）か		スギ	105	板目	B	SD33	1			38.1	3.1	1.0	下部枘状
17	角枠型田下駄（桟）か		スギ	106	板目	B	SD33	1			30.8	2.9	1.2	下部枘状
18	角枠型田下駄（桟）か		スギ	107	板目	B	SD33	2			21.8	3.3	1.0	下部枘状
19	盾か		モミ属	112	板目	B	SD33	3			21.9	4.0	1.0	径 1mm の小孔列（縦約 8mm・横約 5mm 間隔）
20	部材	板状	スギ	108	柾目	B	SD33	2			26.0	7.4	1.4	抉り？２か所　表面全面炭化
21	礎板か	板状	広		板目	B	SD33	3			39.9	11.6	4.5	上下欠損
22	部材	板状	針		板目	B	SD33	3			27.0	2.8	0.9	上欠損
23	部材	板状	スギ	109	流柾目	B	SD33	3			36.4	4.1	0.9	両端に孔（直径約 1cm）　左側面抉り
24	部材	板状	スギ	111	板目	B	SD33	3			42.8	5.0	1.1	上欠損
25	建築材か	板状	スギ	227	板目	B	SD33	2			101.5	9.4	2.3	一部炭化
26	建築材か	板状	スギ	216	流柾目	B	SD33	2			88.3	11.4	1.7	楕円形の孔がほぼ等間隔で一列４個（片側）
27		板状	針		柾目	B	SD33	2			26.7	6.2	1.4	上下欠損
28		板状	針		板目	B	SD33	3			31.4	3.5	1.1	切込み　上下欠損
29		板状	針		柾目	B	SD33	1	8B15		34.3	5.0	1.1	上下欠損
30		棒状（平）	針		板目	B	SD33	2			41.8	4.1	2.8	
31		板状	針		柾目	B	SD33	1			17.1	4.7	0.7	上下欠損
32		短冊状	広		板目	B	SD33	3			7.1	2.8	0.6	上欠損
33		棒状（平）	針		柾目	B	SD33	3			25.1	1.7	0.6	上下欠損
34		棒状（角）	針		削出	B	SD33	3			24.6	1.2	0.9	上欠損
35		棒状（角）	針		削出	B	SD33	3			29.5	1.8	1.1	上欠損
36		棒状（角）	スギ	110	板目	B	SD33	3			33.9	2.1	1.3	上欠損
37		棒状（角）	針		削出	B	SD33	3			34.8	2.7	1.8	上下欠損
38		棒状（角）			削出	B	SD33	1			43.4	5.3	4.8	上下欠損
39	杓子（ヘラ）		スギ	203	柾目	E	SD46				27.5	7.2	0.8	
40	栓か		コナラ属アカガシ亜属	121	削出	E	SD46		4U20	Ⅱ？	22.1	3.5	2.8	上部釘頭状に作出　下部細める・炭化
41	栓か		針		削出	A	SD46	1			16.6	3.5	3.0	
42	楔か		針		板目	E	SD46		5U11		21.1	4.3	1.9	
43		箆状	針		板目	E	SD46	2	4U20		15.4	1.1	0.9	上欠損
44	形代か		スギ	113	板目	E	SD46	2	4U20		17.8	2.1	0.7	
45	不明製品		スギ	114	削出	A	SD46	2	5A25		14.1	3.9	1.4	上部円形状の把手状
46	部材	板状	スギ	118	流柾目	A	SD46	4			22.0	2.5	0.9	両端斜方向に加工　木釘痕
47	部材	板状	スギ	120	流柾目	E	SD46		5U11		26.2	8.0	1.4	大小円孔２　裏面線状痕　一部炭化
48	部材	棒状（平）	スギ	212	削出	E	SD46		4U20		54.4	6.0	3.1	
49		杭状	クリ	117	芯持丸木	A	SD46	2			54.8	4.4	4.4	Y字状の自然木利用　下部細める
50	部材	棒状（角）	スギ	116	削出	A	SD46	2			50.4	2.7	1.4	対称形　抉り２か所ずつ
51		板状	スギ	119	板目	E	SD46		4U10		20.4	8.2	0.8	上端に逆台形状の抉り
52		板状	針		流柾目	A	SD46	1			47.7	8.5	0.8	
53		短冊状	針		流柾目	A	SD46	2			19.7	3.9	0.9	
54		短冊状	針		板目	E	SD46	2	4U20		19.5	3.0	0.7	上下欠損
55		板状	クリ	115	板目	E	SD46	2	5U16		29.0	20.6	3.2	礎板の可能性あり
56		棒状（平）	針		板目	E	SD46		4U15		25.0	2.6	0.9	上欠損
57		棒状（平）	針		柾目	E	SD46	2	5U16		26.5	3.1	1.3	上下欠損
58		板状	針		柾目	E	SD46		5U21		10.5	1.4	0.5	上下欠損
59		棒状（角）	針		削出	E	SD46		5U16		11.4	1.2	0.7	
60		棒状（角）	針		削出	E	SD46	2	4U20		11.9	1.1	1.0	上下欠損
61		箸状	針		削出	A	SD46	4			12.0	0.8	0.8	上下欠損
62		棒状（円）	針		削出	E	SD46		5U21		20.4	2.0	1.3	加工丁寧　裏欠損
63		棒状（平）	針		板目	A	SD46	2			38.0	3.0	1.9	上欠損
64		棒状（角）	針		削出	A	SD46	1			45.5	3.4	1.9	

大武遺跡　木製品・漆製品観察表（2）

報告番号	種　類	形状・断面	樹　種	試料番号	木取り	地区	出土位置				法量（cm）			備　考
							遺構番号	覆土層位	グリッド	グリッド層位	長さ	幅	厚さ	
65		棒状（角）	針		板目	A	SD46	2			31.1	4.2	2.4	上欠損
66	柄か	棒状（角）	針		削出	E	SD46		5U16		34.4	4.1	2.4	上下欠損
67		棒状（角）	針		削出	A	SD46	1			50.7	4.2	2.2	上下欠損
68		棒状（角）	広		削出	E	SD46		5U21		53.5	3.8	3.8	
69	直柄鍬身 平鍬		コナラ属 コナラ節	130	柾目	A	SD47	2	6B13		22.2	7.9	2.4	着柄角度 65°
70	一木鋤		コナラ属 アカガシ亜属	139	板目	E	SD47		5A4		(59.9)	16.8	2.2	
71	角枠型田下駄（桟）か		針	239	柾目	A	SD47				45.4	3.8	0.9	端部枘状　上欠損
72	角枠型田下駄（桟）か	棒状（平）	スギ	137	柾目	A	SD47				54.4	4.9	1.0	端部枘状
73	角枠型田下駄（桟）か	棒状（平）	スギ	136	柾目	A	SD47				54.6	4.9	0.9	端部枘状
74	角枠型田下駄（枠）		スギ	221	柾目	A	SD47				68.7	5.1	2.1	枘孔 11　5 孔に枘および楔残存　両端近くに抉りまたは凹み　枘孔長 1.2 ～ 2.2cm、幅 1.1 ～ 1.8cm、間隔 3.4cm ～ 4cm
75	棍棒か	棒状（円）	コナラ属 アカガシ亜属	131	削出	A	SD47	2	6B13		34.6	5.5	5.0	
76	匙か		スギ		柾目	A	SD47	2	6A12		9.6	3.8	1.5	周縁欠損
77	弓		イヌガヤ	132	芯持丸木	A	SD47	2			26.1	1.3	2.0	弭部分　弓腹に平坦面作出　加工丁寧　下欠損
78	弓		イヌガヤ	134	芯持丸木	E	SD47		5U17		25.5	1.9	1.5	弓腹部分を面取り　上欠損
79	刀剣把		カヤ	140	削出	E	SD47		5U16		10.1	4.5	1.9	裏欠損
80	刳物桶		スギ	123	縦木取り	A	SD47	1			12.9	13.5	2.3	内面に突帯めぐる　上部に把手
81	指物か		スギ	142	柾目	B	SD47	2	6B13		7.4	26.4	1.0	
82	不明製品	板状	スギ	135	流柾目	E	SD47		5U23		19.6	7.0	1.1	
83	刀形		スギ	122	柾目	E	SD47	1	5U11		31.7	1.4	0.5	
84	部材	棒状（平）	モミ属	138	板目	E	SD47		5U1		26.9	2.5	1.2	片端　抉りにより頭状に作出
85	部材	棒状	スギ	124	削出	E	SD47	2	5U24		33.2	7.1	1.5	両端湾曲　側孔 3
86	部材	棒状（角）	針		削出	E	SD47		5U1		22.6	2.7	1.5	小孔列
87	部材	板状	スギ	125	板目	A	SD47	2	6A12		59.2	7.5	1.0	孔 4 か所配列　樺皮綴じ　上欠損
88	部材	杭状	モミ属	127	削出	A	SD47	2	6B2		10.3	3.8	2.1	上欠損
89	浮子		スギ	128	柾目	A	SD47	2	6B3		12.3	3.8	0.9	亀甲状　小孔 2
90		加工材	広		芯持丸木	A	SD47	2	6B3		19.4	7.9	8.6	両端加工
91		加工材	ヤブツバキ	126	芯持丸木	A	SD47	2	6B12		26.6	11.8	11.5	両端加工
92		加工材	広		削出	A	SD47	2	6A22		11.0	3.6	2.6	
93		加工材	針		板目	A	SD47	2	6B7		22.0	4.9	1.8	上下欠損
94	斧柄か		広		削出	A	SD47				22.6	5.1	2.9	
95	柄か	棒状（角）	広		柾目	A	SD47				53.7	4.0	4.6	
96		加工材	広		ミカン割	A	SD47	2			24.4	4.9	2.4	
97		加工材	広		板目	A	SD47	2	6A22		11.5	7.4	3.4	
98		加工材	広		板目	A	SD47				21.7	9.3	3.4	下欠損
99		杭状			芯持丸木	A	SD47	2			31.0	10.0	7.2	上・裏欠損
100	杭		トネリコ属	129	芯持丸木	A	SD47	2	6B12		46.7	9.3	8.5	上・裏欠損
101		棒状（角）	針		削出	A	SD47	2	6B3		18.9	1.5	1.2	下欠損
102		棒状	針		削出	E	SD47		5U17		16.0	2.6	1.0	裏欠損
103		棒状（平）	針		柾目	A	SD47	2			21.3	2.3	1.0	
104		棒状（角）	針		削出	E	SD47		5U23		26.3	2.7	2.2	上欠損
105		棒状（角）	針		削出	E	SD47		5U16		24.8	2.0	1.5	
106		棒状（角）	針		削出	A	SD47	2	6B3		29.5	2.4	1.7	
107		棒状（角）	針		削出	A	SD47	2			28.9	1.4	1.2	断面五角形　上下欠損
108		棒状（角）	針		削出	E	SD47		5U23		47.7	3.1	2.2	
109		棒状（角）	針		板目	A	SD47	2	6B13		12.9	1.1	0.6	
110		棒状（円）	針		削出	E	SD47		5U22		40.9	2.2	2.2	加工丁寧
111		棒状（角）	針		削出	A	SD47	2	6B2		44.6	1.8	1.6	下部炭化
112		棒状（角）	針		削出	A	SD47	2	6B7		52.0	2.3	1.5	
113		棒状（平）			板目	E	SD47		5U16		46.2	3.4	0.9	上欠損
114		棒状（角）	針		柾目	A	SD47	2			69.0	4.3	3.2	
115	角枠型田下駄（桟）か	棒状（平）	針		柾目	A	SD47				35.5	3.8	0.8	上下欠損
116		板状	トネリコ属	133	柾目	A	SD47	2			(51.7)	7.9	1.8	加工丁寧
117		板状			柾目	E	SD47		5U23		65.4	16.5	1.7	
118		短冊状	針		柾目	E	SD47		5U23		20.6	2.3	0.7	
119		板状	針		板目	A	SD47	2	6B8		18.6	4.8	0.8	上下欠損
120		短冊状	広		柾目	A	SD47	2	6A17	XI	15.9	2.8	1.1	上部炭化
121		短冊状	針		柾目	A	SD47	2			16.5	1.8	0.7	
122		短冊状	針		柾目	A	SD47	2	6B13		14.3	1.6	0.8	
123		短冊状	針		柾目	A	SD47	1			14.6	1.6	0.5	
124		短冊状	針		板目	A	SD47	2	6B12		9.8	2.9	0.6	上下欠損
125		短冊状	針		柾目	A	SD47	1			10.9	2.2	0.5	
126		杭状	針		削出	A	SD48	1			39.9	2.9	2.4	
127		棒状（平）	針		板目	A	SD48	1			52.1	3.9	1.7	

大武遺跡　木製品・漆製品観察表（3）

報告番号	種　類	形状・断面	樹　種	試料番号	木取り	地区	出土位置				法量（cm）			備　　考
							遺構番号	覆土層位	グリッド	グリッド層位	長さ	幅	厚さ	
128		棒状（角）	針		削出	A	SD48	1	6B18		35.5	1.7	1.2	
129	建築材か	棒状（平）			板目	A	SD48	1			79.3	6.6	2.8	
130	斧柄（曲柄）		コナラ属コナラ節	146	削出　柄は枝利用	B	SD50	3	8B16		16.6	?	3.5	枝利用
131	直柄鍬身平鍬		コナラ属クヌギ節	232	柾目		SD50	1			13.6	7.9	3.7	
132	高杯		トチノキ	204	横木取り	B	SD50	3	11B11		直径43.6	－	0.8	残存高 11.1cm　有段
133	把手付容器		スギ	144	横木取り	B	SD50	1	6B15			12.4	3.4	残存高 9.2cm　方形か
134	錘か		クリ	49	芯持丸木	B	SD50	1			16.3	4.9	4.1	中央部分に抉り
135	不明製品		トネリコ属	84	芯持丸木	B	SD50	1	8B16		19.8	6.2	5.4	上部釘頭状に作出　下部細める栓か
136	弓か				削出	B	SD50	1	7B14		27.3	2.2	1.7	
137	叩き板		スギ	145	板目	B	SD50	3	7B16		25.4	10.4	2.1	先端炭化
138	杓子状		スギ	45	流柾目	B	SD50	1			50.3	6.3	0.7	櫂の可能性もある 上下右側欠損
139	櫂		スギ	214	柾目		SD50	1			79.4	9.7	3.0	
140	櫂		コナラ属アカガシ亜属	217	板目	C	SD50	3			107.1	9.1	2.8	
141	梯子		モクレン属	215	板目	B	SD50	1			84.7	18.2	9.8	脚２段残存
142	部材	棒状（円）	イヌガヤ	72	芯持丸木	C	SD50	3	10B16		32.1	1.5	1.1	上端に切込　全面に細かい加工 弓転用か
143	部材	棒状	スギ	143	削出	B	SD50	1			26.6	2.0	2.0	284 と近似
144		加工材	広		芯持丸木	B	SD50	3	8B18		15.0	8.7	7.3	
145		加工材	ヤマグワ	62	芯持丸木	B	SD50	3	8B17		15.8	9.5	9.2	一部炭化
146		加工材	広		芯持丸木	B	SD50	3	8B17		15.7	8.7	8.7	樹皮残存
147		加工材	広		芯持丸木	B	SD50	3	8B19		10.9	6.8	6.4	
148	直柄又鍬泥除けか		スギ	55	板目	B	SD50	3	7B13		23.7	14.9	1.0	上部左右端に孔２
149	部材	短冊状	スギ	41	柾目	B	SD50	1	7B12		20.2	3.1	0.7	孔２
150	部材	板状	スギ	44	板目	B	SD50	1			24.0	8.2	1.0	左側に方形孔３、右側に円形孔３
151	部材	板状	スギ	48	板目		SD50	1			23.6	7.8	1.1	大小の孔　樺皮１か所残存　上欠損
152	指物		スギ	52	柾目	B	SD50	1			26.3	8.3	1.2	右側面に抉り　上下端木釘痕
153	指物		スギ	66	柾目	B	SD50	3	8B22		28.2	8.2	1.0	右属面に木釘３
154	部材	板状	スギ	46	流柾目	B	SD50	1			43.6	11.7	1.1	横一列に孔６　別か所に木釘孔 樺皮残存
155	部材	板状	スギ	57	板目	B	SD50	3	7B14		33.3	12.4	8.0	孔３
156	部材	板状	スギ	73	板目	B	SD50	3			37.1	8.1	7.0	
157	部材	棒状（角）	針		削出	B	SD50	3	7B12		60.5	4.4	2.7	木釘痕３
158	指物		スギ	64	柾目	B	SD50	3	8B18		13.3	5.5	0.6	木釘痕４
159	部材	板状	スギ	40	流柾目	B	SD50	1	6B15	Ⅶ・Ⅷ	22.9	7.9	0.8	孔２、紐掛け痕　上端に孔またはＵ字状抉り
160	部材	板状	スギ	85	板目	B	SD50	3	8B17		21.9	9.7	0.9	大小孔４　上下欠損
161	部材	板状	スギ	47	板目	B	SD50	1			33.2	11.6	2.6	方形孔２
162	部材	板状	スギ	68	柾目	C	SD50	3	10B15		29.8	8.6	1.3	上部切込み　方形孔１
163	部材	板状	針		流柾目	B	SD50	3	7B15		16.7	5.0	1.1	孔１
164	部材	板状	スギ	70	流柾目	C	SD50	3	10B11		21.8	5.5	0.9	孔１　片端弧状　上欠損
165	部材	板状			柾目	B	SD50	1	7B12		42.9	4.9	0.9	樺皮綴じ痕　孔３
166	部材	棒状（平）	スギ	39	柾目	B	SD50	1	6B15	Ⅶ・Ⅷ	10.7	4.8	1.6	方形孔列か
167	板状	棒状（平）	針		板目	B	SD50	1	7B14		7.1	2.2	0.6	孔１
168	部材	棒状（平）	スギ	74	柾目	B	SD50	3			14.4	2.1	0.8	方形孔列か
169	部材	板状	トネリコ属	60	柾目	B	SD50	3	8B17		14.6	7.6	0.9	上部半円状抉り
170	部材	板状	スギ	43	流柾目	B	SD50	1	7B17		18.1	5.6	1.0	側面に抉り　周縁炭化
171		板状	スギ	54	流柾目		SD50	1			7.3	9.9	9.0	上下欠損
172	部材	板状	スギ	56	板目	B	SD50	3	7B13		23.7	6.7	0.7	半円形抉り
173	部材	板状	還孔材	51	板目		SD50	1			35.7	9.2	2.3	両端（上下）対称形
174		棒状（角）			板目	B	SD50	1			89.4	5.9	3.5	
175	部材	板状			流柾目	B	SD50	1			113.9	23.5	1.6	両端（左右）抉りか
176	部材	棒状（平）	還孔材	50	削出	B	SD50	1			160.1	5.6	3.1	端部欠込
177	棒状	棒状（角）	針		削出	B	SD50	1	7B12		60.5	2.5	1.6	下部欠込
178	杭				削出	B	SD50		8B17		111.7	5.5	4.9	杭 No.35
179	杭		スギ	42	削出	B	SD50	1	7B16		27.5	1.9	1.4	
180	杭		針		削出	B	SD50	1	7B15		44.1	15.1	3.3	上欠損
181	杭		針		削出	B	SD50	3	7B12		38.3	4.1	3.0	上欠損
182	杭		広		削出	B	SD50	3	8B17		32.7	3.4	2.2	
183	板杭か		広		削出	B	SD50	3	8B17		(43.1)	9.6	3.3	
184	杭		ヤブツバキ	228	芯持丸木		SD50		8B22		57.3	12.4	9.5	杭 No.15　樹皮残存
185	杭		コナラ属アカガシ亜属	76	芯持丸木	B	SD50		7B16		64.3	8.9	8.6	杭 No.7
186	杭		クリ	223	削出	B	SD50		8B21		67.5	8.3	8.3	杭 No.12
187	杭				半割	B	SD50		7B16		66.5	8.9	3.9	杭 No.3
188	杭		還孔材	65	芯持丸木	B	SD50	3	8B22		31.1	8.9	8.4	杭 No.9　半割材利用か　裏欠損
189	杭		広		削出	B	SD50	3	7B12		18.7	9.3	8.5	杭 No.8　枝利用　上欠損
190		板状	針		板目		SD50	1			19.5	2.2	0.9	杭 No.24

大武遺跡　木製品・漆製品観察表（4）

報告番号	種　類	形状・断面	樹　種	試料番号	木取り	地区	出土位置				法量（cm）			備　考
							遺構番号	覆土層位	グリッド	グリッド層位	長さ	幅	厚さ	
191		棒状	針		削出	C	SD50	3	10B20		19.2	1.8	0.8	杭 No.22
192	杭		広		芯持丸木	B	SD50	3	8B17		33.9	16.4	6.1	
193	杭				芯持丸木	B	SD50		8B11		71.6	6.6	6.0	杭 No.9　半割材利用か
194	杭		広		芯持丸木	C	SD50	3	10B15		35.3	3.9	3.0	
195	杭		エゴノキ属	63	芯持丸木	B	SD50	3	8B17		21.9	2.8	2.4	
196	杭		広		芯持丸木	B	SD50		8B11		73.3	6.2	6.7	杭 No.8　枝利用
197		加工材	広		削出	B	SD50	3	8B17		43.0	17.0	8.6	製品素材または礎板か　加工不明瞭
198		加工材	広		半割	B	SD50	3	8B17		42.1	24.4	13.5	製品素材または礎板か　下面加工か　上欠損
199		棒状（平）	針		柾目	B	SD50	1			72.7	3.5	2.5	
200		板状	スギ	69	柾目	C	SD50	3	10B11		43.6	2.1	0.6	
201		板状	針		板目	B	SD50	1	7B13		41.7	3.5	1.2	一部炭化
202		加工材	広		板目	A	SD50	1			53.0	10.0	5.0	
203		板状	広		板目	B	SD50	3	8B17		68.1	7.8	2.2	一部平面加工
204		板状	針		柾目	B	SD50	1			36.6	7.2	2.2	
205		板状	針		板目	B	SD50	3	8B19		34.7	3.1	0.8	線状痕わずか
206		短冊状	針		柾目	B	SD50	1			15.4	2.9	0.7	線状痕わずか
207		短冊状	針		柾目	B	SD50	3			11.6	3.7	0.3	上下欠損
208		板状	針		柾目		SD50	1			18.6	4.4	1.1	欠込あり　下欠損
209		板状	広		板目	B	SD50	1	7B20		18.1	5.3	0.9	加工丁寧
210		板状	針		柾目	B	SD50	3	8B17		16.8	5.0	0.8	上下欠損
211		板状	針		柾目	B	SD50	1			24.6	6.0	1.4	上下欠損
212		板状	広		削出	B	SD50	1	8B16		69.9	9.1	1.8	加工丁寧　下欠損
213		板状			板目	B	SD50	1	6B15		67.6	9.0	0.7	
214		加工材	広		削出（板目）	B	SD50	3	8B16		25.6	17.7	4.5	挽物または刳物素材か
215		加工材	針		板目	C	SD50	3	10B20		23.0	6.3	2.4	上部欠込　下欠損
216		棒状（平）	広		削出	B	SD50	1	6B15	Ⅶ・Ⅷ	27.4	16.4	2.2	側面抉り２か所　上欠損
217		棒状（角）	広		削出	B	SD50	1	8B16		16.8	3.4	2.1	
218		棒状（角）	広		削出	B	SD50	3	8B16		25.8	4.8	3.0	下欠損
219		棒状（角）	広		削出	B	SD50	1	8B11		36.6	5.2	3.5	線状痕多数（新しいものか）
220		棒状（平）	広		削出	B	SD50	1	6B15, 7B11	Ⅶ・Ⅷ	37.0	4.8	2.2	
221		棒状（角）	針		削出	B	SD50	3	7B12		29.6	4.9	3.4	面取り
222		棒状（角）	広		削出	B	SD50	3	7B15		26.9	2.9	1.8	
223		棒状（角）	針		削出	B	SD50	3	7B19		21.0	4.6	4.9	上部炭化
224		棒状（角）	広		削出	B	SD50	1	6B15	Ⅶ・Ⅷ	19.5	4.0	3.7	断面五角形
225		棒状（円）	広		削出	B	SD50	3	8B17		11.6	4.5	3.8	一部面取り　加工丁寧
226		棒状（円）	カエデ属	83	削出	B	SD50	1	8B16		12.1	3.1	2.3	上下欠損
227		棒状（円）	カエデ属	89	削出	B	SD50	1			19.5	3.1	2.3	加工丁寧　線状痕　下欠損
228		棒状（角）	広？		削出	B	SD50	1	6B15	Ⅶ・Ⅷ	43.0	6.3	4.8	上下欠損
229		棒状（角）	針		削出	B	SD50	1	7B12		20.8	2.4	1.6	下欠損
230		棒状（角）	針		削出	C	SD50	3	10B11		23.7	1.9	1.0	上下欠損
231		棒状（角）	針		削出	B	SD50	1	7B13		18.7	1.4	0.8	上欠損
232		棒状（角）	針		板目	B	SD50	3	8B19		14.7	2.4	1.4	平面加工　線状痕　上下欠損
233		棒状（平）	広		柾目	B	SD50	1	6B20		41.9	3.3	1.6	
234		棒状（角）	針		削出	B	SD50	1	7B17		42.9	3.2	2.9	
235		棒状（角）	広		削出	B	SD50	1	6B15	Ⅶ・Ⅷ	45.0	3.6	2.3	
236		棒状（角）	広		削出	B	SD50		8B16		50.7	5.1	3.3	上下欠損
237		棒状（平）	針		板目		SD50	1			50.0	7.0	3.4	上下欠損
238		棒状（角）	スギ	53	削出	B	SD50	1			37.5	1.9	1.5	
239		杭状	スギ	87	削出	D	SD50	1			26.9	1.3	1.3	
240		棒状（角）	スギ	86	削出	B	SD50	1	8B22		26.6	0.9	0.7	上欠損
241		棒状（角）	針		削出		SD50	1			29.9	0.7	0.4	
242		棒状（平）	針		削出	B	SD50	1			20.6	1.0	0.6	下部に刃物痕　下欠損
243		箸状	針		削出	B	SD50	1	7B11		33.8	1.2	0.7	
244		杭状	スギ	67	削出	B	SD50	3	8B23		37.2	1.0	1.0	
245		杭状	針		削出	B	SD50	3	7B12		54.9	2.1	1.9	
246		棒状（角）	針		削出	B	SD50	1	7B13		63.0	1.8	1.4	
247		棒状（角）			削出	B	SD50	1	7B13		88.3	2.4	2.2	加工丁寧
248		棒状（角）	針		削出	B	SD50	3	7B20		54.5	2.5	2.3	
249		棒状（平）	針		板目	B	SD50	1	7B20		46.2	2.0	1.0	
250		棒状（平）	針		削出	B	SD50	1	7B12		53.1	2.2	2.1	中央付近で扁平面が 90° 捩れる
251		棒状（平）	広		削出	B	SD50	1	6B15	Ⅶ・Ⅷ	59.2	3.7	2.4	
252		棒状（平）			削出	B	SD50		8B16		115.4	6.7	5.4	杭 No.24
253		棒状（円）			削出	B	SD50		8B14		57.9	3.9	3.3	杭 No.22
254		棒状（角）	スギ	75	削出	B	SD50	1	6B15		36.8	2.6	2.0	
255		棒状（平）	針		柾目	B	SD50	3	8B22		33.4	1.8	1.2	
256		棒状（平）	針		柾目	B	SD50	3	7B13		22.0	2.5	0.9	
257		棒状（角）	スギ	71	削出	C	SD50	3	10B15		42.7	2.5	1.6	上欠損
258		棒状（平）	針		流柾目	B	SD50	1	6B15	Ⅶ・Ⅷ	21.8	1.6	0.8	

大武遺跡　木製品・漆製品観察表（5）

報告番号	種　類	形状・断面	樹　種	試料番号	木取り	地区	出土位置				法量（cm）			備　考
							遺構番号	覆土層位	グリッド	グリッド層位	長さ	幅	厚さ	
259		棒状（平）	針		削出	B	SD50	3	7B13		16.8	1.4	0.9	上欠損
260		棒状（平）	スギ	59	板目	B	SD50	3	8B17		16.9	1.8	0.6	
261		棒状（角）	スギ	88	削出		SD50	1			20.6	2.7	1.8	
262		棒状（平）	広		板目	B	SD50	3	8B19		9.5	2.7	1.6	
263		棒状（平）	針？		板目	B	SD50	3	8B16		8.4	1.4	0.5	
264	直柄鍬身平鍬		コナラ属クヌギ節	150	柾目	B	SD51	3	6B20		21.9	10.4	2.1	
265	不明製品		スギ	149	削出	A	SD51	3	6B6		14.9	3.8	2.0	上端欠込み　栓の可能性ありか
266	部材	板状	針		流柾目	A	SD51	3	5C13		30.0	8.1	0.8	片側面抉り２か所　上下欠損
267	部材	棒状（平）	スギ	148	板目	B	SD51	3	8B11		47.5	4.0	0.9	片端に孔１
268	部材	板状	クリ	151	柾目	B	SD51	3	7B14		54.1	9.7	2.3	方形孔２
269		加工材	広		板目	A	SD51	3	6B24		22.7	21.6	3.7	下端丸く作出
270		加工材	コナラ属アカガシ亜属	147	板目	A	SD51	3	5C8		30.8	14.9	4.8	
271		棒状（円）	針		削出	A	SD51	1			22.2	2.0	1.4	加工丁寧
272		棒状（円）			削出	A	SD51	1			72.0	1.9	1.6	
273	竪杵		コナラ属アカガシ亜属	153	削出	C	SD83		10B13		60.3	8.6	8.7	下欠損
274	盤		針			F	SD83		11B6		37.0	12.5	5.2	脚付　外面底面炭化
275	刳物桶		スギ	155	（流柾目）	F	SD83		11A21		27.0	6.9	4.3	
276		加工材	コナラ属アカガシ亜属	80	芯持丸木	C	SD83		9B20		19.3	6.6	4.6	裏欠損
277	竪櫛	折曲げ	タケ亜科	156	－	C	SD83	ガツボ	10B13		3.3	3.5	0.4	折曲げ　黒漆塗　312 と近似
278	不明製品		アサダ	157	削出	F	SD83	ガツボ	11B1		13.7	5.2	2.3	
279		箆状	広		削出	F	SD83	ガツボ	11A21		20.0	3.2	1.4	上欠損
280	円形板か		スギ	154	柾目	F	SD83	底面	10B10		24.0	13.2	1.1	
281	部材	板状	針		柾目	F	SD83	底面	10B10		18.5	4.2	1.4	孔１　上下欠損
282	部材	円			芯持丸木	C	SD83		9B		47.4	5.9	5.6	上部釘頭状に作出　下部細める
283	部材	棒状（平）	スギ	78	削出	C	SD83	ガツボ	9B18		50.4	2.9	1.5	加工丁寧
284	部材	円	スギ	77	削出	C	SD83		10B13		54.9	3.2	2.8	加工丁寧　143 と近似
285	部材	板状	スギ	220	板目	C	SD83	ガツボ	9B12		63.0	15.2	1.9	方形孔２
286	部材	板状	針		柾目	C	SD83				66.0	3.8	0.8	孔３
287	部材	棒状（平）	スギ	79	柾目	C	SD83	ガツボ	9B18		66.3	1.8	0.8	両端に抉り
288	部材	棒状（平）	広		半割	C	SD83		10B12		63.8	11.2	5.7	半割材を面取り　方形孔１
289		加工材	ヤブツバキ	81		C	SD83		9B		34.5	15.7	11.0	製品素材または礎板か
290		杭状	広		芯持丸木	C	SD83		9B		44.0	13.3	10.2	製品素材または礎板か　樹皮残存
291	杭				芯持丸木	C	SD83		9B		66.6	5.7	5.5	杭 No.3　樹皮残存　上部劣化
292	杭				芯持丸木	C	SD83		9B		69.2	5.7	4.1	杭 No.15 自然木利用 枝落とし
293	杭		トネリコ属	82	芯持丸木	C	SD83				32.4	4.1	3.6	杭 No.11
294		板状	スギ	158	柾目	F	SD83	ガツボ	11B1		19.5	6.1	1.1	
295		棒状（平）	針		柾目	C	SD83		10B13		19.2	4.4	1.7	左側連続加工　上欠損
296		板状	針		柾目	C	SD83	ガツボ	9B16		36.2	6.4	1.3	上欠損
297		板状	針		削出	F	SD83	ガツボ	11A21		24.0	2.5	0.9	上下欠損
298		棒状（角）	針		削出	F	SD83	ガツボ	11A21		32.8	2.2	1.7	下欠損
299		棒状（角）			削出	C	SD83		10B11		52.8	4.6	3.3	上下欠損
300		棒状（平）	針		削出	F	SD83	ガツボ	11B2		21.2	2.3	1.4	
301		棒状（平）	針		削出	C	SD83		10B11		33.4	1.9	1.4	上欠損
302		棒状（円）	針		削出	C	SD83		9B20		32.4	2.0	1.5	
303		棒状（平）	針		柾目	C	SD83	ガツボ	10B18		41.0	3.1	1.8	
304		箆状	広		削出	C	SD83		9B		42.0	4.0	1.9	
305		棒状（角）	針		削出	C	SD83	ガツボ	9B18		52.3	1.8	1.5	下欠損
306		棒状（円）	針		削出	C	SD83	ガツボ	9B18		42.1	2.0	1.7	
307		棒状（角）	針		削出	C	SD83	ガツボ	10B18		18.6	1.1	1.1	
308		棒状（角）	針		削出	C	SD83	ガツボ	10B18		18.0	9.0	0.8	上下欠損
309		棒状（角）	針		削出	C	SD83		10B13		15.5	0.7	0.4	下欠損
310	鋤・鍬未成品か		トネリコ属	160	板目	G	SK95	1	6D21		23.9	14.1	3.6	
311	直柄鍬身又鍬		コナラ属アカガシ亜属	167	板目	G	SK95	1	6D21		29.7	14.7	4.0	泥除け装着孔（方形）２
312	竪櫛	折曲げ	タケ亜科	234	－	G	SK95	1	6D21		4.2	5.2	0.4	折曲げ　黒漆塗　277 と近似
313	杓子形		スギ	165	柾目	G	SK95	1	6D21		57.0	4.0	1.8	加工丁寧
314	火鑽臼				柾目	G	SK95	1	6D21		8.1	1.9	1.9	
315	部材	板状	スギ	161	柾目	G	SK95	1	6D21		10.1	5.9	0.8	
316	不明製品	杭状	針		芯持丸木	G	SK95	1	6D21		15.0	1.9	2.0	
317	不明製品	棒状（平）	スギ	168	柾目	G	SK95	2	6D21		21.0	2.7	1.1	下部炭化
318		棒状（角）	トネリコ属	162	削出	G	SK95	1	6D21		18.3	2.6	2.2	
319	杭		トネリコ属	159	ミカン割（削出）	G	SK95	1	6D21		39.0	4.5	2.3	樹皮残存
320		棒状（平）	広		芯持丸木	G	SK95	1	6D21		33.9	2.4	1.8	
321		棒状（平）	針		削出	G	SK95	1	6D21		28.5	2.9	1.5	上下欠損
322		棒状（平）			削出	G	SK95	1	6D21		24.0	2.4	0.7	下欠損
323		棒状（平）			削出	G	SK95	2	6D21		51.1	1.1	0.3	
324		棒状（円）	ハコヤナギ属	166	削出	G	SK95	2	6D21		20.3	0.7	0.6	

大武遺跡　木製品・漆製品観察表（6）

報告番号	種　類	形状・断面	樹　種	試料番号	木取り	地区	出土位置				法量（cm）			備　　考
							遺構番号	覆土層位	グリッド	グリッド層位	長さ	幅	厚さ	
325		棒状（平）	トネリコ属	163	柾目	I	SK95	1	6D21		43.1	2.4	1.4	
326		棒状（角）	広		削出	G	SK95	1	6D21		18.5	1.7	1.2	
327		棒状（平）	広		板目	G	SK95	1	6D21		21.6	2.9	1.2	
328		棒状（平）	広		柾目	G	SK95	1	6D21		38.4	3.1	1.2	
329	部材	棒状（平）	広		板目	C	SX87				47.0	4.9	2.8	孔 1
330	板田下駄か		クリ	97	柾目	C	SX88		11B23		21.0	18.1	1.5	上欠損
331		棒状（平）	広		流柾目	C	SX88	ガツボ	11B25		12.1	3.6	1.7	上欠損
332	容器蓋か				樹皮	C	SX88	下	11B13,18		33.2		0.5	周縁に孔列
333	弓（長弓）		イヌガヤ	207	芯持丸木	C	SX88		11B18		168.0	2.7	2.7	片側全面加工
334		加工材			芯持丸木	C	SX88		11B17		10.8	4.9	4.6	
335	部材	棒状（角）	クリ	96	削出	C	SX88	ガツボ	11B20		15.9	4.3	4.4	両端に差込孔（上端円形・下端方形）
336		加工材	針		削出	C	SX88		11B17		14.8	5.1	3.2	
337	井戸枠側板か		スギ	219	板目	C	SX88	下	11B13,18		106.5	20.5	2.6	下部平面加工　一部炭化
338		板状	針		柾目	C	SX88	ガツボ	11B19		44.6	5.7	1.0	上端表裏面を面取り　下欠損
339		板状			削出	C	SX88		11B17		30.5	9.1	2.4	
340	杭				芯持丸木	C	SX88	ガツボ	11B18		68.5	7.1	6.7	
341	杭				芯持丸木	C	SX88	砂	11B18		121.6	7.8	7.2	
342	杭		広		芯持丸木	C	SX88		11B17		85.8	5.5	4.8	
343	杭				芯持丸木	C	SX88	ガツボ	11B18,24		70.1	12.6	12.6	
344	杭		広		芯持丸木	C	SX88	ガツボ	11B19		30.5	6.1	3.4	上・裏欠損
345	杭		広		芯持丸木	C	SX88		11B17		36.9	5.0	4.4	
346		棒状（平）			柾目	C	SX88		11B17		19.4	1.3	0.7	
347		棒状（平）	ヤマグワ	95	柾目	C	SX88	ガツボ	11B18		31.9	3.3	1.4	上欠損
348		棒状（円）			削出	C	SX88		11B18		117.1	3.0	2.2	
349		棒状（平）	広		削出	C	SX88	ガツボ	11B18		23.6	5.0	2.8	下欠損
350		加工材	トネリコ属	94	板目	C	SX88	下	11B13,18		33.4	17.0	6.8	劣化著しい　礎板または製品素材か
351			広		芯持材	C	SX88		11B17		33.9	13.4	8.7	劣化著しい　礎板または製品素材か
352		棒状（平）			板目	C	SX88		11B17		38.3	2.7	1.1	
353		棒状（角）	広		削出	C	SX88		11B17		43.1	3.8	3.3	
354		棒状（角）			削出	C	SX88	ガツボ	11B19		22.1	2.0	1.9	
355		棒状（角）			削出	C	SX88		11B23		64.7	3.0	2.1	
356		棒状（平）			板目	C	SX88	ガツボ	11B		27.6	1.6	1.0	
357		棒状（角）	針		削出	C	SX88	ガツボ	11B18		20.2	0.8	0.4	
358	脚付盤か		ヤマグワ		縦木取り	E			5T24	XIIIe	38.2	20.2	2.1（盤）	全体高 12.9cm、台高 9.0cm、盤幅 18.9cm　上面線状痕
359		杭状	コナラ属コナラ節	2	芯持丸木	B			7A	XV	13.5	5.0	4.0	
360		杭状	クリ	3	芯持丸木	C			9A21	XV	43.9	6.3	6.6	
361		杭状	広		芯持丸木	B			7A	XV	61.8	4.9	2.8	
362		棒状（平）	スギ	1	柾目	B			7D23	XVd	18.1	1.8	0.7	
363		棒状（円）	クリ	5	芯持丸木	B			7A15	XIV	19.5	3.4	3.4	樹皮残存
364		加工材			芯持丸木	B			7A15	XIV	9.5	3.8	3.1	
365		加工材	サワグルミ	172	柾目	E			5T24	XIVb	10.7	6.0	1.9	
366	籃胎漆器（壺）		不明	171	不明	G			4C19	XIId	－	－	0.3	残存高 9.7cm、胴部最大径 24.5cm　赤漆塗　補修孔と思われる孔 1
367	棒状	棒状（平）	ヒノキ科	19	板目	E			5T22	XII砂	17.2	1.2	0.5	
368		加工材	針		削出	A			3A5	XII	34.0	7.4	3.4	
369		加工材	カマツカ属	170	芯持丸木	B			6C13	XIIId	19.9	5.8	5.4	
370	斧柄（曲柄）		モチノキ属・ヤブツバキ		芯持丸木枝利用	B			6C13	XIIId	34.5	10.4	5.5	添え木固定式　樹種：（370・370a）モチノキ属・（370b・c）ヤブツバキ
371	不明製品	板状	広？		板目	B			8B2	XIIIa	24.7	20.0	1.4	樹皮残存　下端連続加工
372	漆塗腕輪		ニシキギ属		－	F			10A22	XIc	（推定径 8.0）		2.4	赤漆塗　内径推定 5.5cm
373		加工材	広		偏平割	F			10A25	XIc	38.8	33.1	11.8	
374		杭状	広		芯持丸木	F			11B13,18	XIc	27.2	11.9	7.6	
375	円形板		スギ	181	流柾目	G			4C23	X直上	19.9	8.4	0.6	
376	不明製品		針		削出	E			4U20	IXa	14.8	3.5	4.4	節部分周辺を加工
377	紡錘車		スギ	23	柾目	F			11A22	IXc	7.0	7.5	0.9	中心に孔 1　直径 4 ～ 5mm
378	弓		広		削出	B	SD51		6B15,20	IX	43.8		2.7 ～ 3.7	
379	部材	棒状（角）	スギ	24	削出	F			11A22	IXc	48.0	4.8	2.3	上部に欠込　建築材の可能性もあり　下欠損
380	井戸枠側板か		クリ	226	削出	E			5U23	IXc	85.5	20.7	6.0	
381	杭		ブナ属	20	芯持丸木	C				IXc	36.5	6.2	6.4	樹皮残存
382		棒状（角）	広		削出	F			10B6	IXc	39.7	7.7	6.5	
383	柱根か		広		削出	F			11A24	IXc	51.3	10.2	6.1	柱根か　劣化により加工痕不明
384		加工材	ハンノキ属ハンノキ節	21	ミカン割	E			6U16	IXc	29.3	16.7	8.0	表面と下端加工　礎板または製品素材か
385		棒状（円）	スギ	225	削出	F			11A22	IXc	102.3	3.8	4.0	
386		棒状（角）	スギ	22	削出	F			11A19	IXc	59.9	3.3	2.6	上下欠損

大武遺跡　木製品・漆製品観察表（7）

報告番号	種　類	形状・断面	樹　種	試料番号	木取り	地区	出土位置				法量（cm）			備　　考
							遺構番号	覆土層位	グリッド	グリッド層位	長さ	幅	厚さ	
387		棒状（角）	針		削出	F			11A22	Ⅸc	27.4	3.2	2.2	
388		棒状（角）	針		削出	F			10B1	Ⅸc	12.6	1.1	0.6	上下欠損
389		短冊状	ヒノキ	180	柾目	G			4D13	灰色粘土	6.0	2.9	0.2	下部に浅い円形凹みあり
390		短冊状			柾目	G			4D13	灰色粘土	15.3	3.1	0.2	
391	円形板か		針						4c トレンチ	灰色粘土	31.1	8.4	0.8	
392		短冊状	スギ	183	柾目	D			3D17	F	17.4	2.0	0.3	上部片側に抉り
393		短冊状			板目	D			3D17	F	20.4	1.6	0.2	
394	部材	板状	スギ	179	柾目	D			3D7	D	14.8	3.2	0.6	上端に孔１　下欠損
395	部材（円形板）	板状	ヒノキ	178	柾目	D			2D25	D	26.7	12.1	1.2	孔　左側に２個１対、上部に１刃物痕
396		棒状（角）			削出	A			5B10	31	27.7	2.5	1.8	上部切込
397	部材	板状			柾目	A			4A10	31	28.3	3.6	1.1	
398	板杭		針		流柾目	A			6A12	31	35.9	5.8	2.3	
399		棒状（角）	針		削出	A			6C3	27	32.8	4.1	5.7	
400		棒状（平）	針		流柾目	A			6C3	27	29.0	2.7	1.0	
401		棒状（角）	針		削出	B			6B25	27	30.1	1.7	1.4	上下欠損
402	部材	板状	スギ	184	柾目	G			4C19	23	20.1	5.3	1.6	
403	部材	板状	スギ	182	流柾目	A			5B15	23	15.7	7.0	1.2	孔列　樺皮残存（二重に巻く）
404	刳物桶		スギ	185	縦木取り	G			崩落土	23	27.3	16.2	3.0	
405		棒状（平）			削出	G			4D15	23?	22.7	2.3	1.3	
406		棒状（平）	針		削出	A			6B16	23	27.1	2.6	1.6	下欠損
407	建築材か		スギ	218	流柾目	A			5A24	23	125.0	26.5	5.1	左側に抉り２、間に浅い凹み
408	柱根か		クリ	175	芯持丸木	G			5D8	23?	52.0	15.8	13.2	
409		棒状（円）	針		芯持丸木	A				21	31.2	1.4	1.5	
410		棒状（平）	針		削出	A			5C10	21	12.6	2.2	1.3	下部炭化
411		棒状（平）	針		削出	A			5C8	20	26.8	3.2	1.6	
412		短冊状	針		柾目	D			3D13	20	9.8	1.8	0.4	
413		棒状（角）	針		削出	B			7A24	Ⅷb	32.0	4.7	3.0	
414		棒状（平）	針		削出	B			7A24	Ⅷb	46.7	2.9	2.3	
415		棒状（角）			削出	A			5A19	Ⅶb	62.0	1.6	1.8	
416	部材	板状	針		柾目	B			7B6	Ⅷa	25.3	9.3	0.5	楕円形孔１
417		板状	針		柾目	B			8A19	Ⅷa	9.0	14.7	1.4	下・左側欠損
418		短冊状	針		板目	E			5U23	Ⅷa	15.1	6.5	0.6	
419	部材	板状	スギ	222	板目	B			8B7	Ⅷa	55.6	12.1	1.4	左側に孔３配列　建築材の可能性もあるか
420		棒状（角）	針		削出	E			5U23	Ⅷa	44.8	5.7	4.3	上欠損
421		棒状（平）	針		柾目	A			6B12	Ⅷa	45.7	4.9	2.1	上下欠損
422		棒状（平）	針		削出	E			5U6	Ⅷa	30.7	3.0	1.6	上部欠込　下欠損
423		棒状（角）	針		削出	E			5U6	Ⅷa	27.5	2.6	1.3	下欠損
424		棒状（角）	針		削出	A			5B8	Ⅷa	17.8	2.1	1.1	
425		短冊状	針		板目	A			5B10	Ⅷa	12.5	1.9	0.5	下欠損
426		棒状（角）	針		削出	E				Ⅷa	16.7	3.7	2.4	
427	直柄鍬身（柄差込部分）		コナラ属アカガシ亜属	28	板目	A			6A17	Ⅶ	15.4	6.0	1.9	鍬身の柄差込部分が剥落したものか　劣化著しい
428	浮子		スギ	34	柾目	F			11A20	Ⅶ	8.9	1.2	0.5	
429	弓		イヌガヤ	213	芯持丸木	C			11C5	Ⅶ	75.3	径 3.2		全面に細かい加工痕　上下欠損
430	杓子形		スギ	35	板目	F			11B7	Ⅶ	33.0	6.6	7.0	
431	栓か		トネリコ属	36	芯持丸木	C			11B23	Ⅶ	4.8	2.4	2.1	上端切込　下部加工
432	曲物底板		スギ	169	柾目	C			11B23	Ⅶ	16.3	16.4	1.0	側面木釘６か所
433	槽		スギ	224	柾目	I			102C4	Ⅶ	103.0（推定）	21.5	底 0.7 ～ 2.0	残存高 8.2cm、短辺厚 5.0cm 底部厚みなし
434	不明製品		針		削出	A				Ⅶ	7.6	4.1	1.6	裏欠損
435		棒状（角）	針		削出	A			6B18	Ⅶ	11.7	2.1	1.4	節のある枝を面取り　下欠損
436		棒状（角）	針		削出	A			6B18	Ⅶ	13.7	1.4	1.8	
437	鋤か		散孔材	233	削出	C			11B23	Ⅶ	32.6	9.5	4.6	
438	刀形か		ケヤキ	38	削出				4a トレンチ	Ⅶ	31.6	3.4	1.5	加工丁寧　刀状か
439		棒状（円）	スギ	29	削出	A			6B18	Ⅶ	32.8	2.1	1.8	断面多角形　下端有段
440		棒状（角）	スギ	37	削出	C			11C4	Ⅶ	28.4	1.8	1.4	上部四角形状に作出
441	剣形か		スギ	211	板目	C			11B18	Ⅶ	65.9	6.8	1.3	
442		棒状（円）	スギ	26	削出	A			4A5	Ⅶ	49.6	4.2	3.4	
443		加工材	針		削出	A			6B18	Ⅶ	13.3	7.4	1.8	
444		棒状（角）	針		柾目	A			6B18	Ⅶ	10.2	2.0	1.0	
445		棒状（角）	針		削出	A			6B18	Ⅶ	11.7	1.9	1.3	上欠損
446		加工材			削出				11B18	Ⅶ	27.2	4.2	3.8	
447	部材	板状	針		流柾目	A			6A12,17	Ⅶ	29.1	4.3	0.9	上下に孔２個１対　下部両側に抉り
448	部材	板状	針		流柾目	A			6A11	Ⅶ	24.9	6.8	0.9	
449	部材	板状	トネリコ属	231	芯持丸木				4a トレンチ	Ⅶ	55.0	16.4	2.9	２個１対の孔３
450	部材	板状	モミ属	27	板目	A			5A3	Ⅶ	37.1	4.9	1.6	２個１対の孔２、単孔５
451		板状	針		柾目	A			6B17	Ⅶ	43.9	6.0	0.9	上欠損
452		板状	針		柾目	A			5A19	Ⅶ	43.1	6.8	1.2	上下欠損
453		板状	針		柾目	E			4U5	Ⅶ	29.4	11.1	2.8	表面加工痕、線状痕

大武遺跡　木製品・漆製品観察表（8）

報告番号	種　類	形状・断面	樹　種	試料番号	木取り	地区	出土位置				法量（cm）			備　考
							遺構番号	覆土層位	グリッド	グリッド層位	長さ	幅	厚さ	
454		短冊状	針		柾目	A			6B18	Ⅶ	9.9	2.1	0.4	
455	部材	板状	スギ	32	柾目	A			6B23	Ⅶ	53.5	6.6	0.8	孔４　上欠損
456		棒状（角）	針		削出	A			6A22	Ⅶ	36.5	4.1	2.2	
457		棒状（角）	針		削出	A			6A4	Ⅶ	34.3	3.9	2.8	上欠損
458		棒状（平）			削出	C			11B18	Ⅶ	27.7	5.0	3.3	
459		杭状	広？		芯持丸木	C			11B23	Ⅶ	47.2	2.4	2.4	上欠損
460	板杭		アサダ	33	柾目	A			6B18	Ⅶ	60.0	9.0	4.3	
461		櫂状	針		板目	A			5A3	Ⅶ	60.9	6.1	2.0	
462		棒状（平）	広		削出				4a トレンチ	Ⅶ	49.3	3.8	2.1	
463		棒状（角）	広		削出	I			102C10	Ⅶ	43.4	2.9	2.0	
464		棒状（平）	針		削出	B			6B9	Ⅶ	47.3	2.8	1.5	
465		棒状（角）	針		削出	A			6B18	Ⅶ	27.9	2.2	1.4	
466		棒状（角）	スギ	30	削出	A			6B18	Ⅶ	21.3	1.8	1.2	下欠損
467		棒状（平）	針		柾目	A			6A17	Ⅶ	22.9	1.6	0.8	
468		棒状（平）	針		板目	I			103C20	Ⅶ	13.3	1.0	0.4	
469		棒状（平）	針		削出	A			6B18	Ⅶ	17.3	3.0	1.8	下欠損
470		棒状（角）	針		削出	C			11B12	Ⅶ？	19.1	1.1	0.7	上欠損
471		棒状（角）	針		削出	I			103C23	Ⅶ	20.0	1.2	1.1	下部炭化
472		棒状（平）	針		柾目	I			102C10	Ⅶ	15.2	1.8	0.7	下部炭化
473		棒状（角）	針		削出	I			103C12	Ⅶ	12.1	1.5	0.9	全面炭化
474		棒状（角）	針		削出	I			103C13	Ⅶ	16.1	0.9	0.7	下部炭化
475		棒状（角）	針		削出	I			103C7	Ⅶ	22.8	0.9	0.7	下部炭化
476		棒状（角）	スギ	31	削出	A			6B18	Ⅶ	23.7	1.7	1.2	
477		棒状（円）	針		芯持丸木	A			5B18	Ⅶ	16.5	1.2	8.0	
478		棒状（角）	針		削出	I			103C13	Ⅶ	15.5	0.9	0.8	上部欠込　炭化
479		加工材	クリ	25	削出	A			6A21	Ⅶb	9.6	6.5	5.1	
480		杭状	針		芯持丸木	A			6B1	Ⅶb	26.3	5.5	2.4	
481		板状	針		板目	A			6A21	Ⅶb	52.3	10.0	2.0	
482		棒状（角）	針		板目	A			5A25	Ⅶb	35.0	3.1	1.9	上下欠損
483		棒状（円）	針		削出	A			5A14	Ⅶb	34.7	2.2	1.8	
484		棒状（平）			板目	A			5A19	Ⅶb	91.4	5.0	2.6	上下欠損
485		棒状（円）	針		削出	A			6A1	Ⅶb	42.4	1.8	1.5	
486		棒状（平）	針		柾目	A			5A19	Ⅶb	24.1	2.4	0.7	
487		箸状	スギ	93	削出	I			101D5	Ⅵ	10.1	0.6	0.6	上下欠損
488		箸状	スギ	90	削出	A			6A21	Ⅵc	17.5	0.7	0.6	
489		短冊状	針		柾目	F			10B5	Ⅵc	6.5	3.1	0.5	上欠損
490	角枠型田下駄（桟）か		針		削出	C			9B3	Ⅵc	35.8	2.3	1.5	上欠損
491		棒状（円）	針		柾目	F			10A25	Ⅵc	34.9	4.4	1.1	両端枘状
492		板状	針		板目	A			6B12	Ⅶa	29.7	10.9	2.6	
493		棒状（角）	針		削出	A			5B18	Ⅶa	22.6	1.7	1.2	上下欠損
494	不明製品	棒状（角）	スギ	92	削出	B			ベルトA列	Ⅵb	14.0	2.0	1.2	下端に断面長方形の未貫通孔 孔内は炭化
495	円形板か		スギ	91	柾目	B			ベルトA列	Ⅵb	14.0	2.9	0.5	
496		板状	針		柾目	B			ベルトA列	Ⅵb	22.6	4.1	0.6	
497	柱根				芯持丸木	C			11B18	Ⅵb	57.4	20.3	17.2	
498		杭状	針		板目	B			8B20	Ⅵb	49.9	3.5	1.8	上欠損
499		棒状（平）	針		柾目	A			6C7	Ⅵb	23.7	1.6	0.8	
500		棒状（円）	針		削出	B			ベルトA列	Ⅵb	15.4	1.5	1.2	上欠損
501	部材	棒状（平）			柾目	B			ベルトB列	Ⅴ・Ⅵa	22.8	1.8	1.1	表面上部に木釘２残存、側面に木釘孔１
502	部材	板状	スギ	200	柾目	B			ベルトB列	Ⅴ・Ⅵa	24.0	3.3	0.9	上下端形枘状　右側に木釘孔列
503		棒状（円）			削出	B			ベルトB列	Ⅴ・Ⅵa	15.0	1.1	1.0	
504	差歯下駄（歯）		スギ	201	柾目	B			ベルトB列	Ⅴ・Ⅵa	12.5	7.0	2.3	
505	曲物側板		ヒノキ	195	板目	F			11B7	Ⅴ	10.1	4.5	0.4	ケビキ痕
506	不明製品	短冊状	スギ	198	柾目	E			5T20	Ⅴ	8.8	2.9	0.2	上部つまみ状に作出
507	不明製品	短冊状	スギ	197	柾目	E			4U18	Ⅴ	11.1	2.4	0.2	上部つまみ状に作出　形代か
508	円形板か		スギ	102	柾目				ベルトB列	Ⅴ	16.0	8.9	0.6	
509	円形板か		スギ	103	柾目				ベルトB列	Ⅴ	16.5	8.2	0.9	
510		板状			板目	C			11B5	Ⅴ	54.6	11.8	3.7	裏面中央炭化
511	部材	棒状（角）	スギ	101	削出	I			103C24	Ⅴ	14.4	2.6	2.2	上部欠込状
512	不明製品	杭状	スギ	104	削出	C			2a トレンチ	Ⅴ	44.4	3.0	2.0	加工丁寧　加工痕明瞭　上欠損
513		杭状	スギ	99	削出	I			102D10	Ⅴ	21.6	1.0	0.8	
514		棒状（円）	アスナロ	100	削出	I			102D10	Ⅴ	16.9	1.6	1.0	加工丁寧　上欠損
515		棒状（平）	スギ	98	板目	A			6B16	Ⅴ	12.0	2.1	1.0	上欠損
516		棒状（角）	針		柾目	E			6T11	Ⅴ	15.7	1.4	1.1	上下欠損
517		加工材	針		削出	A			6C3	Ⅴ	10.7	16.5	1.1	上下欠損か
518		棒状（平）	針		柾目	B			7B22	Ⅴ	8.7	1.6	0.6	
519		棒状（平）	針		柾目	L			104E1	Ⅴ	7.5	1.5	0.6	
520		加工材	広		板目	C			11B14	Ⅴ	9.1	3.6	1.4	上欠損
521	不明製品	棒状（平）	スギ	208	削出	F			11A8,13	Ⅴd	128.3	9.7	2.2	両側面に抉り　不規則に連続
522	部材	板状	スギ	206	板目	G			11A9	Ⅴd	33.8	15.4	1.6	孔１

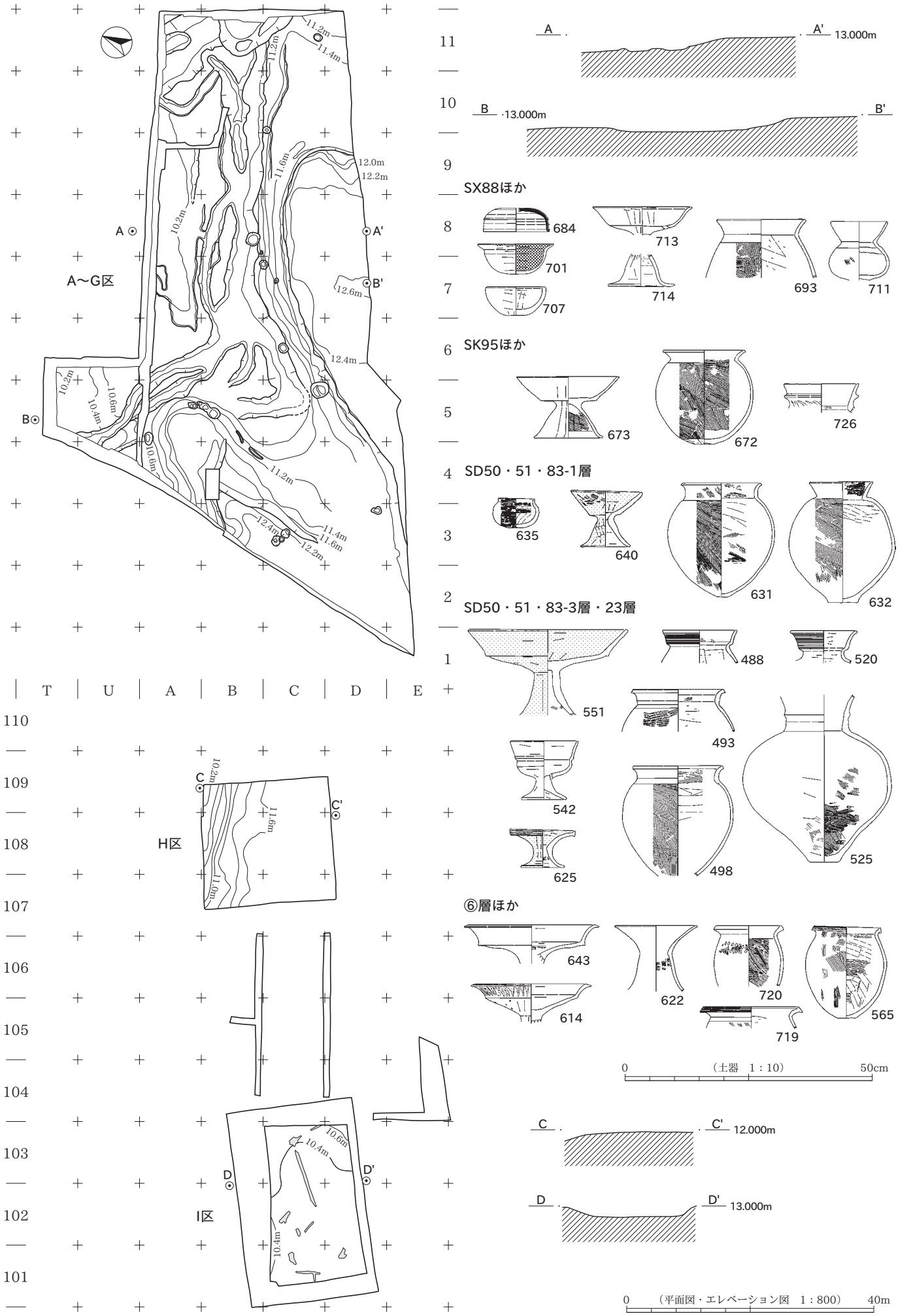
大武遺跡　木製品・漆製品観察表（9）

報告番号	種　類	形状・断面	樹　種	試料番号	木取り	地区	出土位置				法量（cm）			備　　考
							遺構番号	覆土層位	グリッド	グリッド層位	長さ	幅	厚さ	
523		板状			板目	F			11A12	Vd	45.0	12.0	3.0	
524		棒状（円）			削出	G			11A24	Vd	51.2	1.4	1.2	
525		棒状（平）	針		柾目	F			11B9	Vd	18.7	2.0	0.8	上欠損
526		棒状（平）	針		柾目	F			11B10	Vd	26.9	3.4	1.3	上欠損
527	部材	棒状	スギ	202	削出	F			11A18	Vc	27.9	3.2	1.4	左側に方形抉り
528	浮子		針		柾目	F			11A13	Vc	9.5	1.1	0.6	両端に抉り
529	不明製品	棒状（平）	スギ	209	流柾目	F			11B23	Vc	59.7	7.4	1.9	両側面に抉り　不規則に連続下欠損
530		棒状（円）			削出	F			11B8	Vc	39.1	1.3	1.1	
531		板状	スギ	205	板目	F			11B7	Vc	38.0	11.7	3.0	
532		棒状（角）	スギ	199	削出	F			11A7	Vc	23.0	3.3	3.4	上端つまみ状に作出
533	円形板		ケヤキ	196	柾目	B			7B22	Vb	14.3	7.9	0.5	周縁やや厚み減　底板か
534		棒状（平）	針		板目	A			5C13	Va	14.2	2.5	0.9	上欠損
535	箸		針		削出	E			5U2	Va	9.7	0.7	0.8	下欠損
536	人形か		スギ	6	板目	F			11A8	青灰砂（下）	11.3	3.0	0.8	
537	槽		スギ	237	横木取りか	F			11A18	青灰砂	44.0	16.1	2.7	器高 9.7cm
538	曲柄鍬身平鍬		コナラ属アカガシ亜属	11	板目	F			11A20	青灰砂	36.0	11.3	1.6	
539	櫂または鋤・鍬か		アサダ	4	柾目	F			4B10	青灰砂	30.1	11.6	1.4	
540	部材	板状	スギ	7	板目	F			11A12	青灰砂	22.1	6.7	1.6	上部方形孔１
541	指物	板状	スギ	16	柾目	F			11B3	青灰砂	45.4	9.3	1.9	下部に欠込　左側面木釘４、裏面５
542	部材	板状	スギ	8	板目	F			11A16	青灰砂	19.1	5.2	1.4	上端抉り　孔縦列２
543	指物	板状	スギ	12	板目	F			11A24	青灰砂	22.3	4.5	0.7	両端撥形に広がる　孔４
544	部材	板状	スギ	18	板目	F			11B9	青灰砂	24.1	6.1	0.6	孔３（小２・大１）
545	指物	板状	スギ	14	柾目	F			11A25	青灰砂	13.0	5.4	0.6	右側に弧状の抉り、切込
546	部材	板状	スギ	15	柾目	F			11A16	青灰砂３	26.3	6.9	1.1	上部孔１　線状痕
547	不明製品	板状	スギ	236		F			11A23	青灰砂	29.6	8.6	2.4	
548		棒状（平）	広		削出	F			11A19	青灰砂	59.9	4.2	2.0	上部欠込
549	建築材か		針		削出	F			11B7	青灰砂	48.6	4.5	5.0	両側面欠込状
550		加工材	針		削出	F			11A11	青灰砂	31.0	5.2	4.0	
551		加工材	広		板目	F			11A17	青灰砂	20.5	4.7	2.3	上欠損
552		加工材	コナラ属アカガシ亜属	10	板目	F			11A19	青灰砂	31.3	12.7	5.2	礎板の可能性あり
553		加工材	針		板目	F			11A16	青灰砂３	13.0	3.7	1.7	上欠損
554	作業台か		アサダ	13	板目	F			11A25	青灰砂	35.2	21.7	5.5	線状痕多数
555	杭		広		不明	F			11A21	青灰砂	20.2	7.5	6.6	上欠損
556	杭		広		芯持丸木	F			11A6	青灰砂３	82.5	9.5	4.3	裏欠損
557		板状			板目	F			11B3	青灰砂	54.8	10.0	1.5	
558		板状			柾目	F			11A8	青灰砂	26.7	6.1	1.3	
559		板状	針		柾目	F			11B11	青灰砂	20.7	5.3	1.2	
560		板状	針		柾目	F			11B5	青灰砂５	16.7	4.4	0.7	線状痕　上下欠損
561		板状	針		柾目	F			11A11	青灰砂	15.2	4.9	1.1	
562		板状	針		柾目	F			11B7	青灰砂	14.2	4.8	1.1	線状痕　上欠損
563		短冊状	針		柾目	F			11A17	青灰砂２	16.5	1.6	0.6	上下欠損
564		短冊状	針		柾目	F			11B10	青灰砂	11.3	2.4	0.6	
565		棒状（平）			柾目	F			11A15	青灰砂	9.9	1.5	0.8	
566		棒状（角）	針		板目	F			11B10	青灰砂	13.7	3.5	2.1	
567		棒状（角）	広		板目	F			11B10	青灰砂	15.3	2.5	1.8	
568		棒状（角）	針		削出	F			11A6	青灰砂	24.3	2.9	3.4	上欠損
569		棒状（円）	針		削出	F			11A6	青灰砂	24.6	2.3	1.5	上下欠損
570		棒状（平）	針		柾目	F			11A17	青灰砂３	16.5	1.6	0.6	
571		短冊状	針		板目	F			11B4	青灰砂	35.1	1.7	0.2	曲物側板か　上下欠損
572		棒状（角）	針		板目	F			11B10	青灰砂	29.7	2.3	2.3	欠込み
573		棒状（角）	針		削出	F			10A7	青灰砂	38.3	2.8	2.0	上欠損
574		棒状（平）	針		板目	F			11B4	青灰砂	38.9	4.0	1.6	接合
575		棒状（角）			板目	F			11A17	青灰砂	64.1	7.3	3.9	
576	斧柄か	棒状（平）	クリ	9	板目	F			11A18	青灰砂	54.7	6.7	2.8	
577		棒状（平）	針		柾目	F			11A21	砂	37.7	5.0	1.8	下欠損
578		棒状（平）	針		柾目	F			11A17	青灰砂	36.0	3.3	1.2	
579		棒状（平）			板目	F			11A6	青灰砂	31.2	14.4	1.6	
580	柄か	棒状（円）	針		削出	F			11A11	青灰砂３	60.0	2.5	2.6	
581	柄か	棒状（円）			削出	F				青灰砂	64.1	2.7	2.5	
582		杭状	針		削出	F			11A17	青灰砂	24.9	2.2	1.5	
583		棒状（平）	針		柾目	F			11A13	青灰砂（下）	16.0	1.9	1.0	上欠損
584		棒状（円）	針		削出	F			11B10	青灰砂	19.5	1.4	1.0	
585		棒状（平）	針		削出	F			11A16	青灰砂	15.7	2.3	1.0	加工丁寧
586		棒状（円）	針		削出	F			11B6	青灰砂２	15.6	1.0	0.7	上下欠損
587		棒状（平）			削出	F			10A8	青灰砂	158.7	7.2	3.6	
588		棒状（角）			削出	F			11A20	青灰砂	178.1	12.3	7.6	節残る　側面加工

大武遺跡　木製品・漆製品観察表（10）

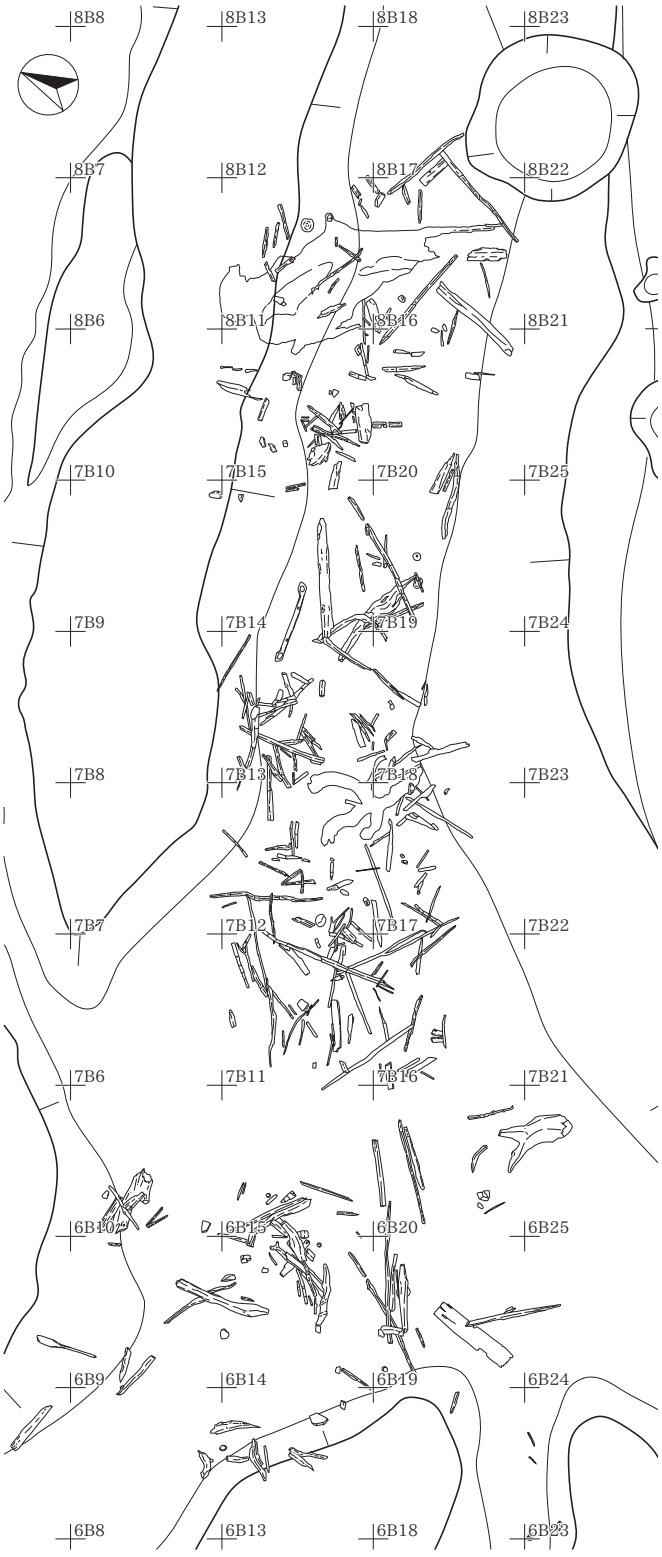
報告番号	種　類	形状・断面	樹　種	試料番号	木取り	地区	出土位置				法量（cm）			備　　考
							遺構番号	覆土層位	グリッド	グリッド層位	長さ	幅	厚さ	
589		棒状（角）			ミカン割	F			11A17,22	青灰砂	（推定238.8）	9.5	5.6	
590		棒状（角）			ミカン割	F			11A12	青灰砂	212.4	5.5	5.5	
591	不明製品		スギ	177	削出	A			6A21	B	17.4	2.6	1.9	形状は木鏃に近似
592	不明製品	板状	スギ	176	柾目	D			4E1	B	28.0	6.7	0.5	加工丁寧　線状痕多数
593		短冊状			柾目	D			3D13	C	11.9	1.6	0.5	線状痕
594	部材	棒状（平）			柾目	A			4A10	C	21.1	3.5	1.1	下部枘状　上部孔１（破損）
595	部材	板状			流柾目	A			5A13,15	C	39.0	7.1	1.7	右側に方形孔２
596	部材	棒状（角）			削出	A			4A9	C	37.5	2.3	3.2	欠込状
597		棒状（角）			削出	A			5A3	A	74.6	3.0	2.5	
598		棒状（円）			削出	A			4A8	C	97.1	5.4	2.9	
599	板田下駄		スギ	192	柾目				不明		32.0	20.2	3.0	緒孔３
600	部材	板状	スギ	235		D			3D12	D	15.2	2.7	0.5	
601	指物		スギ	173	流柾目	D			4D22	撹乱	15.8	9.7	1.4	箱の部材か　一部炭化
602	箸		スギ	174	削出	D			4D22	撹乱	10.2	0.6	0.4	上欠損
603	箸		スギ	193	削出				不明		12.3	0.7	0.5	上下欠損
604	不明製品	短冊状			柾目				不明		7.7	4.0	0.4	孔３
605	不明製品	板状	スギ	190	板目	E			5U22	撹乱	9.0	2.4	0.7	刀状　上部に孔１
606	不明製品	板状			柾目	D			排土		10.0	5.6	0.7	
607	不明製品	板状			柾目				不明		18.2	6.3	0.5	線状痕
608	部材	棒状（平）			柾目				不明		19.7	3.8	0.9	
609	部材	棒状（角）	スギ	189	板目	D			排土		26.8	2.1	1.6	上下削る　上部抉り　木釘孔２
610	部材	板状	スギ	191	柾目				不明		30.1	7.7	0.8	左側方形孔１、中央に円形孔１
611	部材	板状			柾目	G			崩落土		35.1	3.5	0.5	
612	部材	板状	スギ	186	柾目	A			崩落土		37.3	4.8	1.1	上下に孔２
613	部材	板状			柾目				不明		40.0	10.0	2.3	上部に長方形孔１
614	部材	棒状（平）	ヒノキ	229	板目		SD50	3	不明		109.3	9.7	2.6	上下対称形、孔も対称
615	部材	板状			柾目				不明		69.6	8.5	2.1	孔１　上下欠損
616	部材	棒状（角）			削出	A			6B7	①	60.1	2.2	2.9	上部浅い抉りか
617	不明製品	棒状（角）	クリ	194	削出	A			6B7	①	41.4	4.7	2.6	
618	直柄鍬身か		コナラ属コナラ節	188	柾目	D			排土		22.6	5.3	1.8	
619		棒状（平）			板目	G			崩落土		21.3	2.4	1.3	
620		棒状（角）				A			6B17	2	9.0	0.9	1.1	
621	樺皮								不明		3.7	5.4		
622		加工材			削出	G			崩落土		14.7	3.7	1.6	楔状
623		加工材	スギ	187	削出	G			崩落土		19.1	7.5	2.2	
624	杭		広		芯持丸木	F			11A17		53.5	7.0	6.4	
625	杭		クリ	230	削出				不明		175.9	20.1	13.9	
626	漆紐		－						6B14・15	XV	－	－		幅 0.15 ～ 0.20cm
627	漆紐		－						6B	XV	－	－		

図　　版

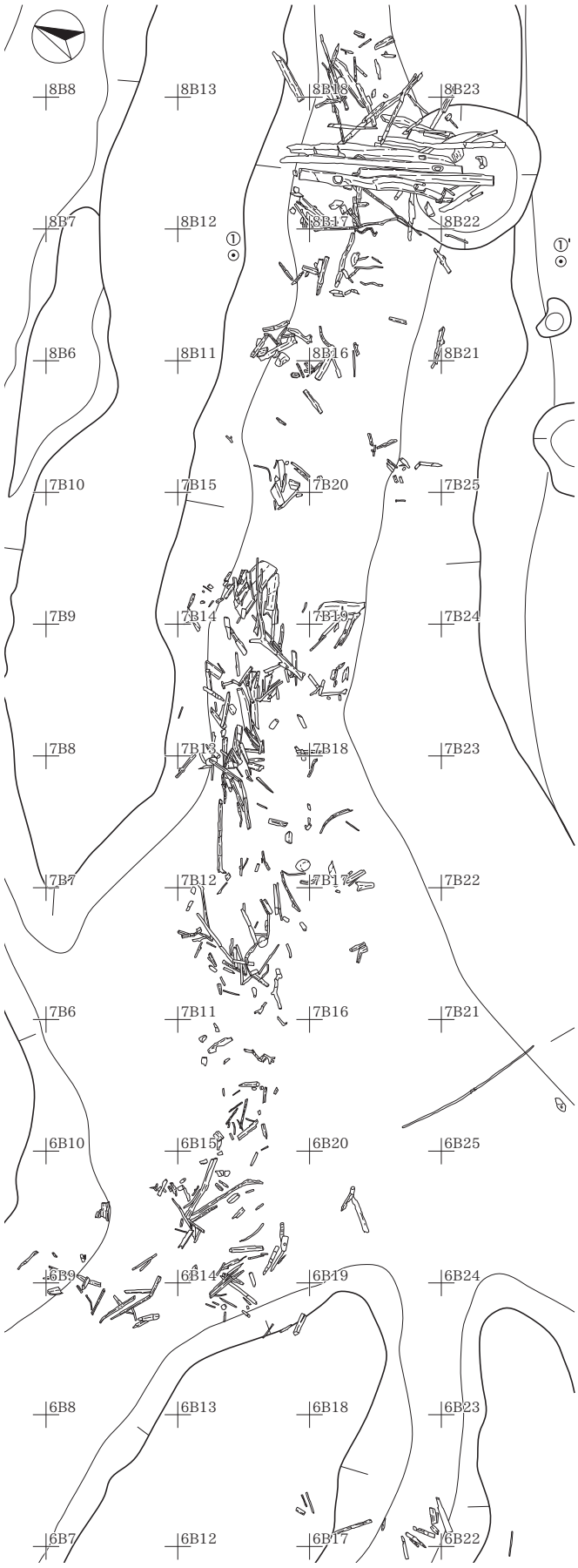

A～G区
H区
I区
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
T
U
A
B
C
D
E
11.2m
11.4m
11.6m
12.0m
12.2m
12.6m
12.4m
10.2m
10.6m
10.4m
SX88ほか
SK95ほか
SD50・51・83-1層
SD50・51・83-3層・23層
⑥層ほか
13.000m
12.000m
684
713
701
714
707
693
711
673
672
726
635
640
631
632
551
488
520
493
542
525
625
498
643
614
622
720
565
719
0
（土器　1：10）
50cm
0
（平面図・エレベーション図　1：800）
40m

A ～ G 区Ⅷb 層上面平面図

SD50（5～8AB）1層木製品等出土状況



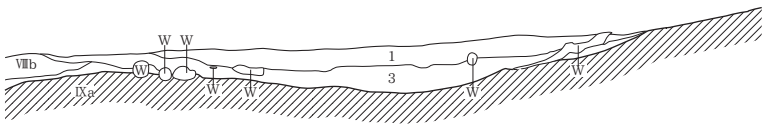
SD50（5～8A・B）3層木製品等出土状況



0　（平面図　1：100）　5m

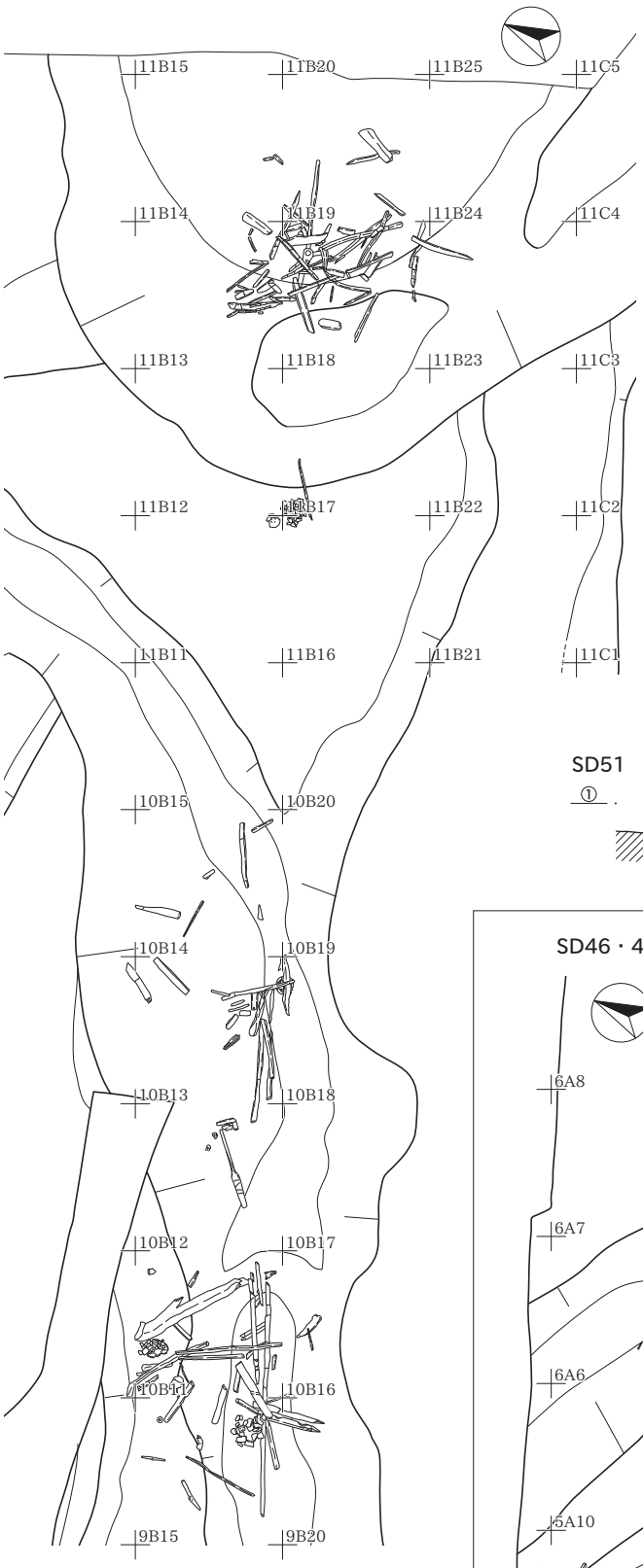
0　（断面図　1：50）　2m

SD50

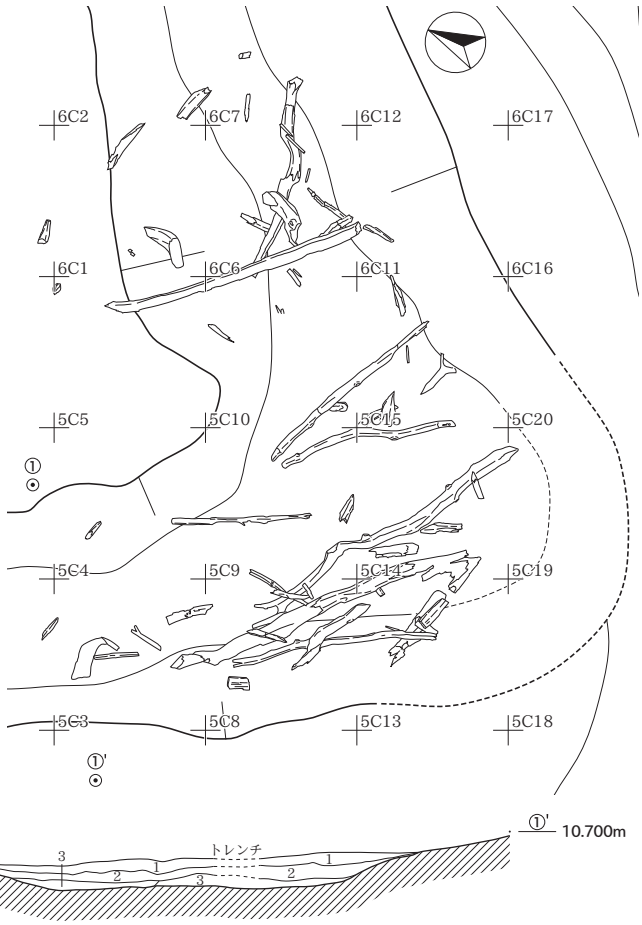


SD50
1　黒褐色ピート層。基本層序Ⅶ層に同じ。
3　暗黄褐色砂層。遺物多く含む。
　　SD33・51の3層に同じ。
W：木製品・自然木

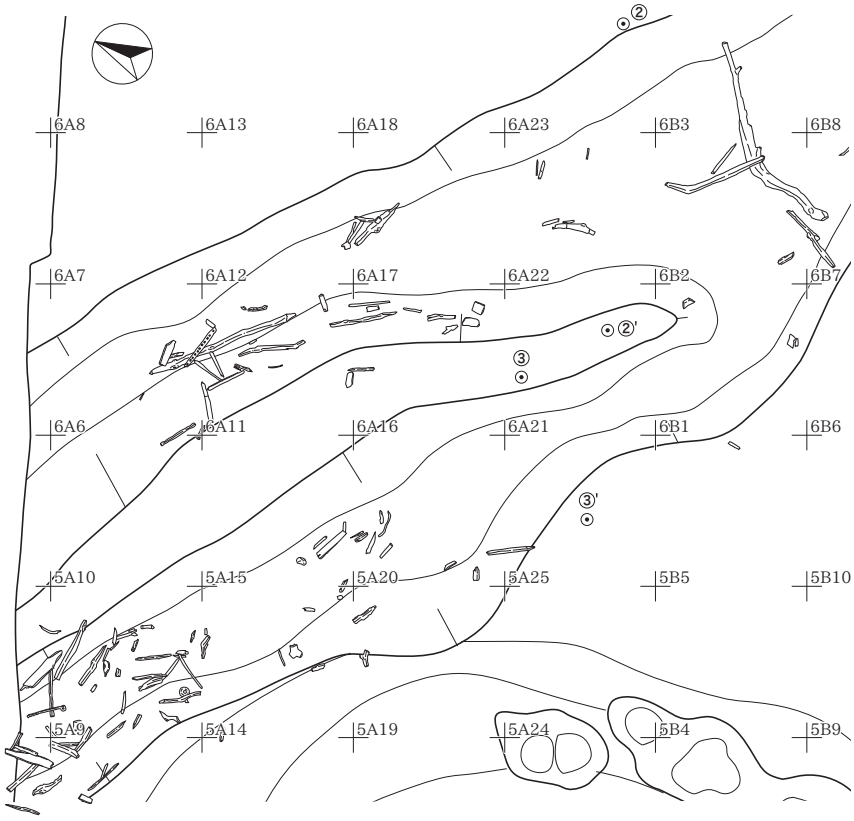
SD83（9・10・11B）木製品等出土状況



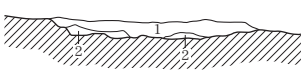
SD51（5・6C）木製品等出土状況



SD46・47（5・6A）木製品等出土状況

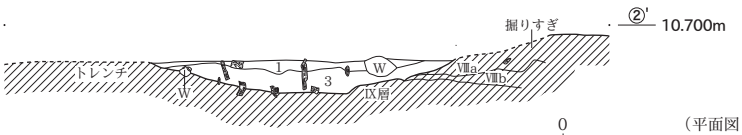


SD46



SD46
1　暗黄褐色砂層。
2　黒褐色砂層。

SD47

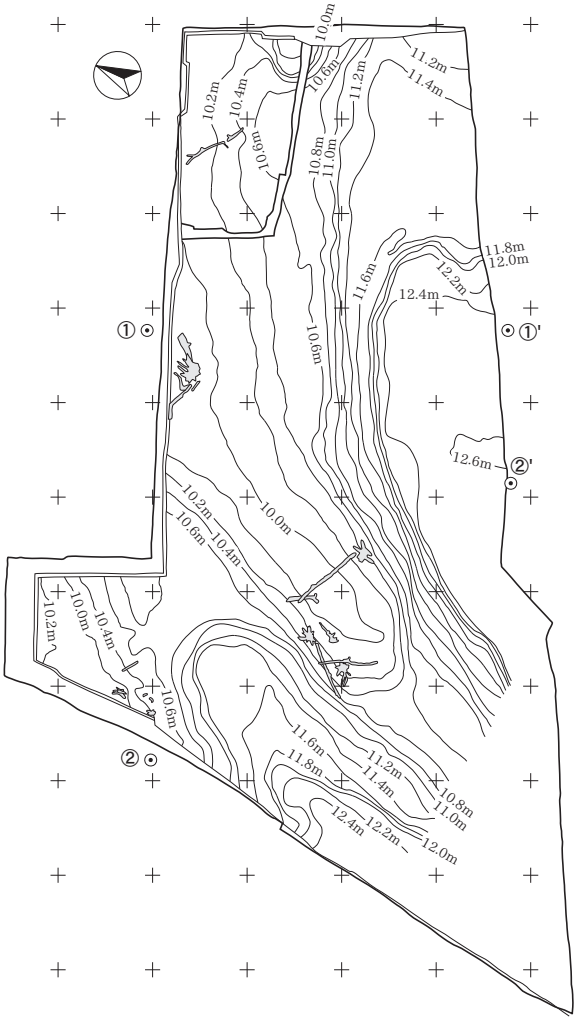


SD51
1　暗灰色粘土。斜面堆積層21層に同じ。炭化物・遺物多い
2　暗褐色粘土。粘性強い。
3　暗黄褐色砂層。SD33・50の3層に同じ。

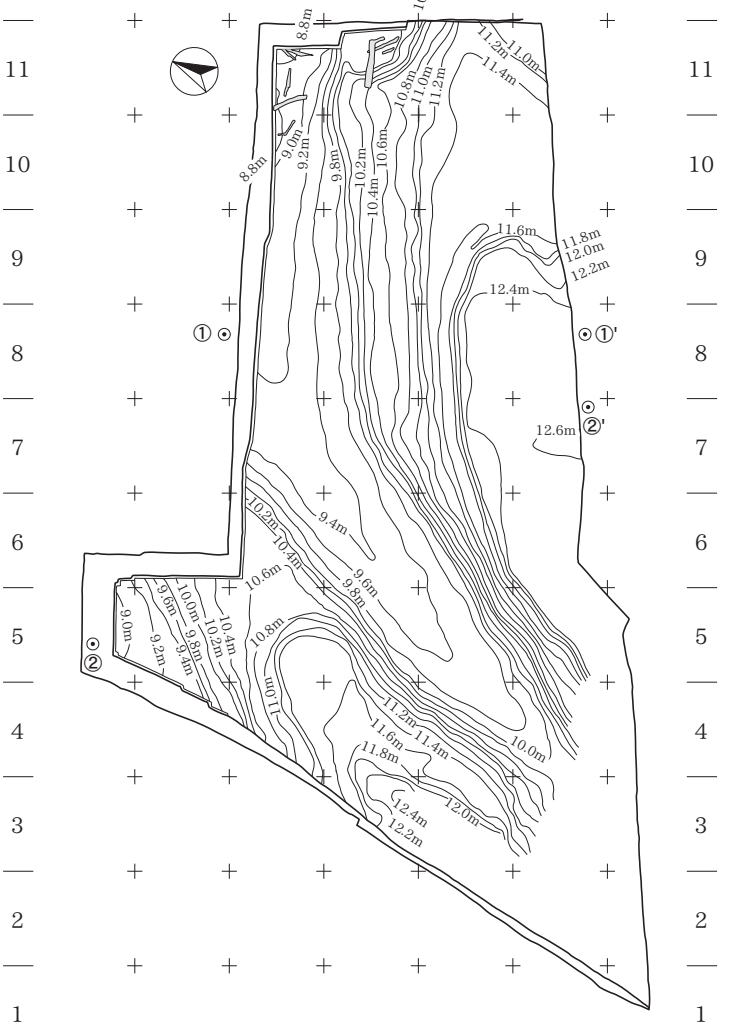
SD47
1　黒褐色ピート層。基本層序Ⅶ層に同じ。
3　暗黄褐色砂層。遺物多く含む。SD50・51などの3層に同じ。

0　（平面図　1：100）　5m　　0　（断面図　1：50）　2m

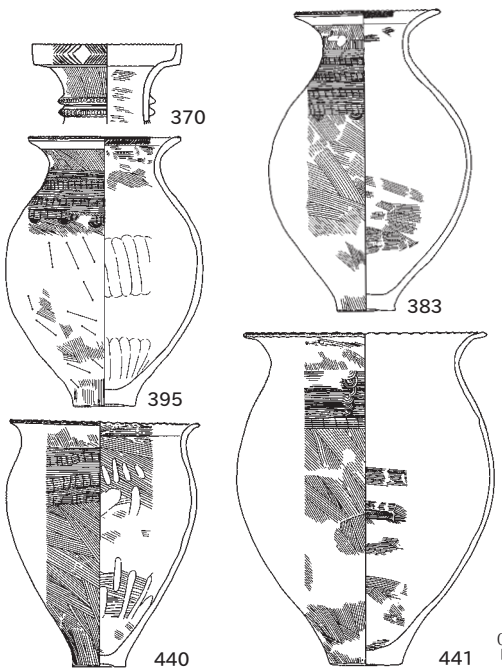
A～G区X層コンタ図



A～G区XIIIa層上面コンタ図

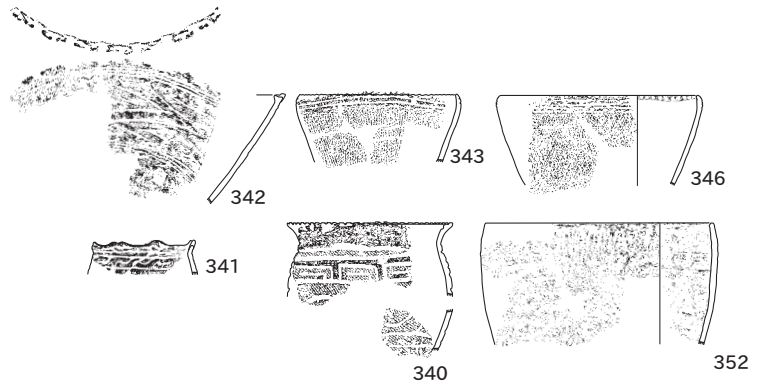


D区F層・G区灰色粘土層（IXa～c層相当）



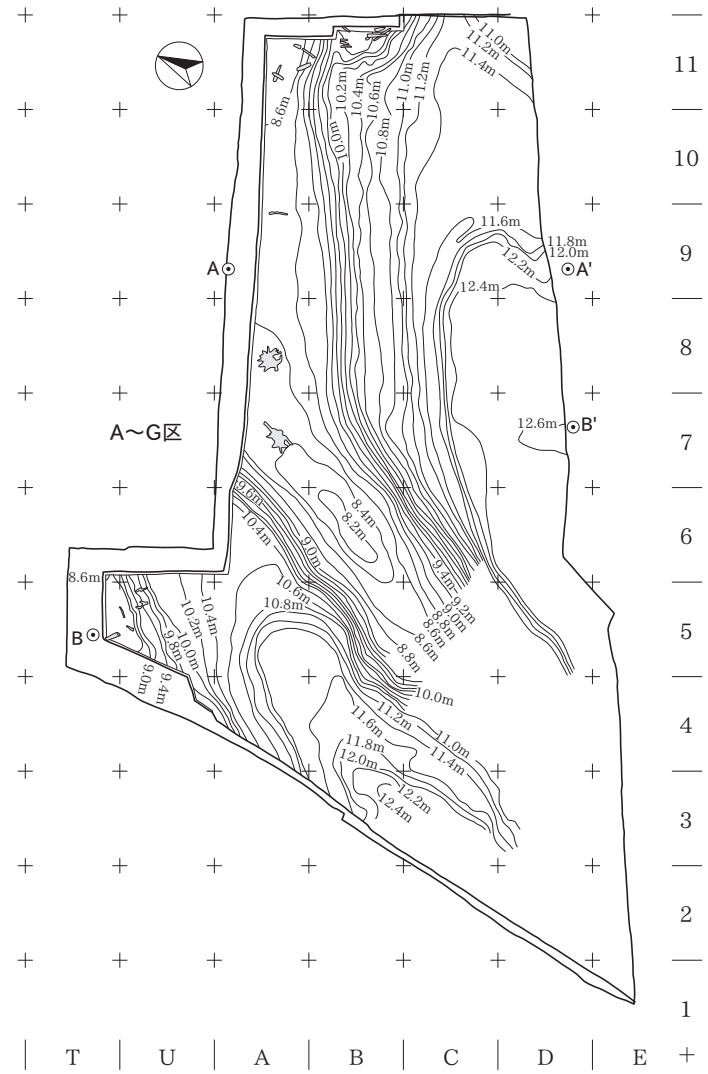
XIIa層

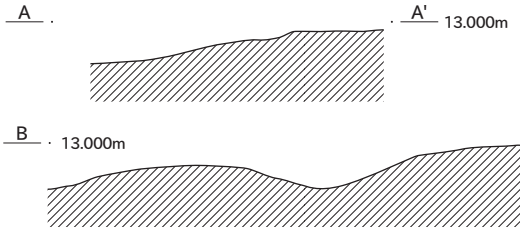
XIIb層



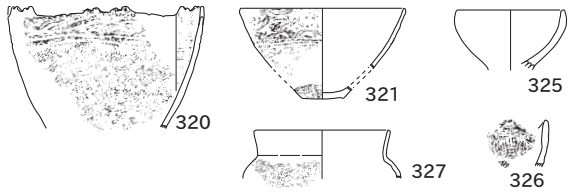
0 （平面図・エレベーション図 1：800） 40m　0 （土器 1：10） 50cm

G 区灰色粘土層土器出土状況



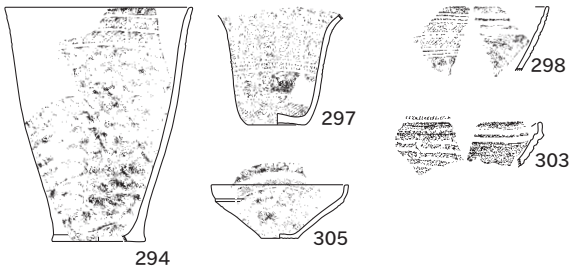


XIIIa層

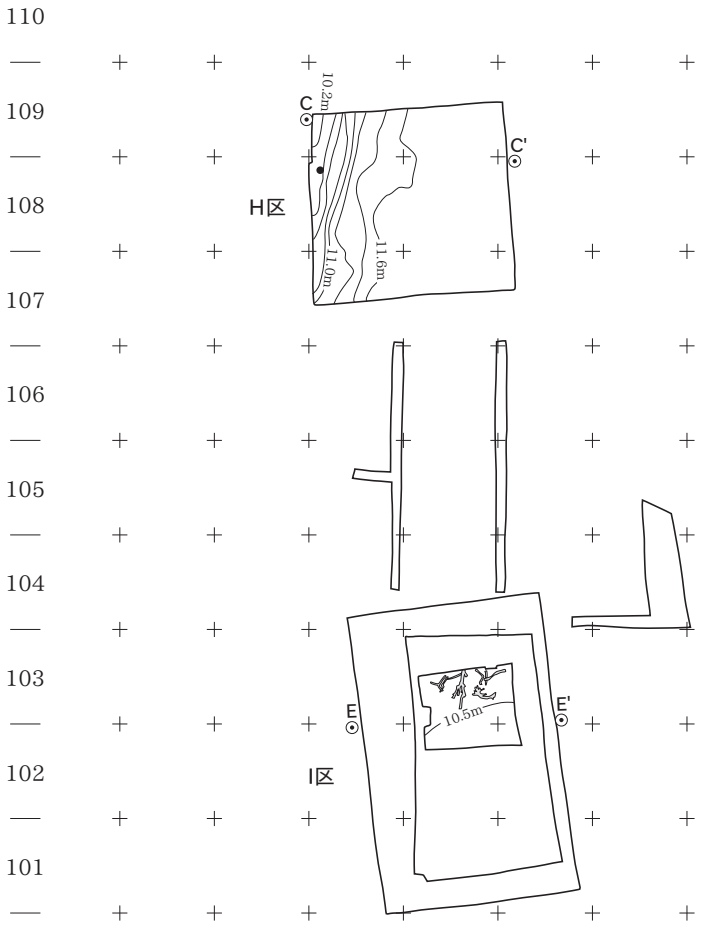


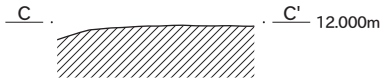
XIIIb層

XIIIe層

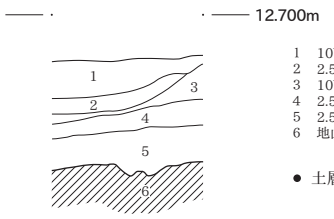


0　（土器　1：10）　50cm





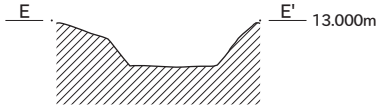
H区土層柱状図（ドットの位置）



1　10YR4/1褐色粘土。緑灰色粘土ブロック含む。
2　2.5YR4/2暗灰黄色シルト。
3　10YR4/1褐灰色粘土。緑灰色粘土ブロック含む。
4　2.5YR4/2暗灰黄色シルト。
5　2.5YR3/2黒褐色粘土。緑灰色粘土ブロック含む。
6　地山（XVI層）

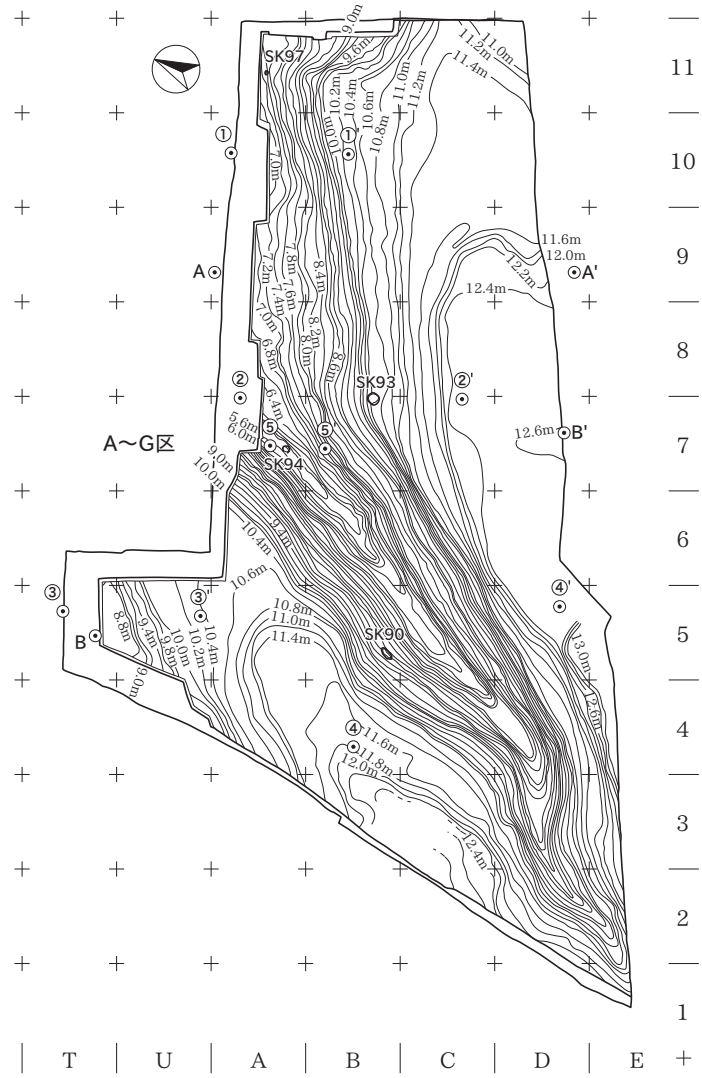
● 土層柱状図の地点

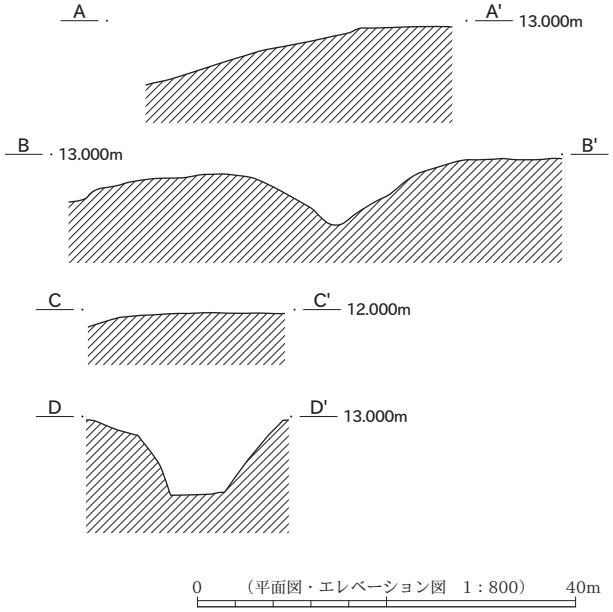
0　（1：40）　2m

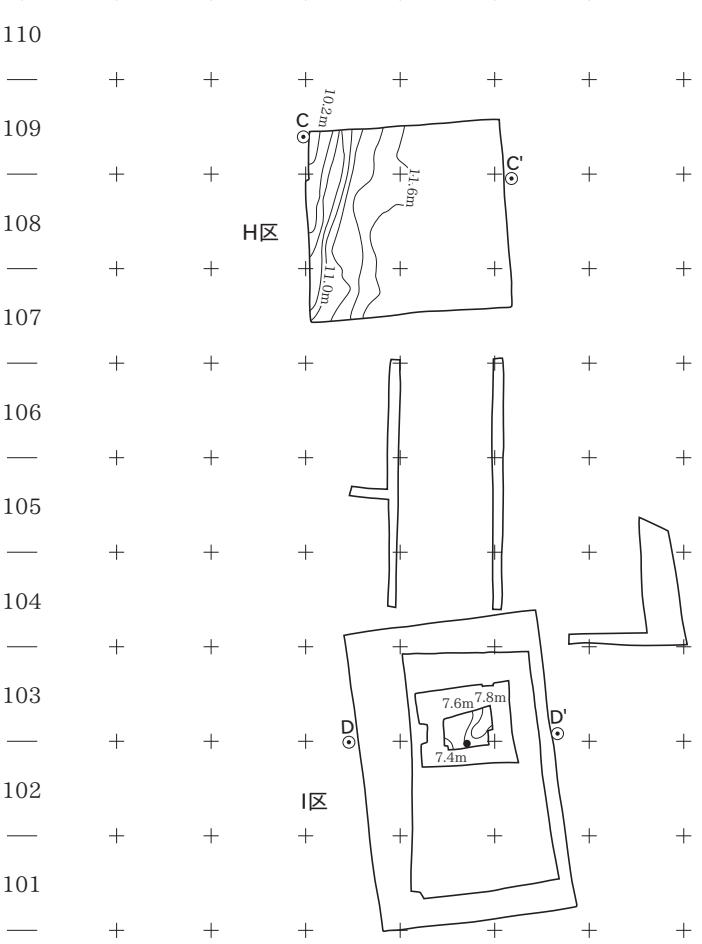


0　（平面図・エレベーション図　1：800）　40m

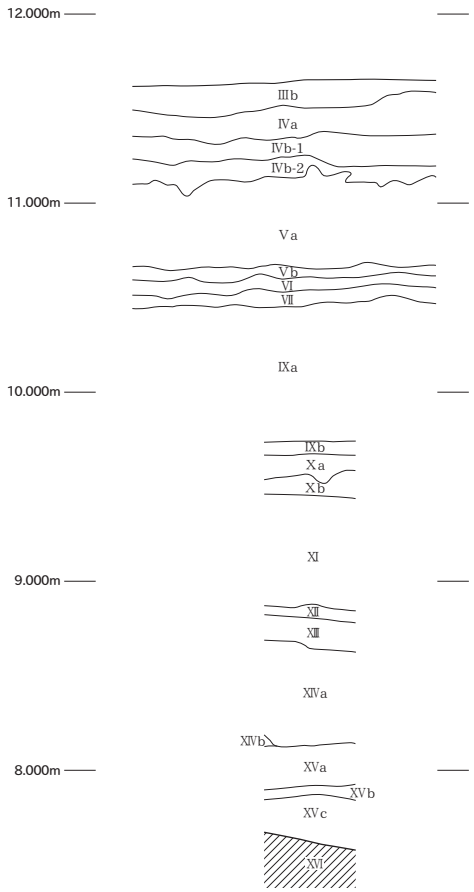
XVI層上面全体図







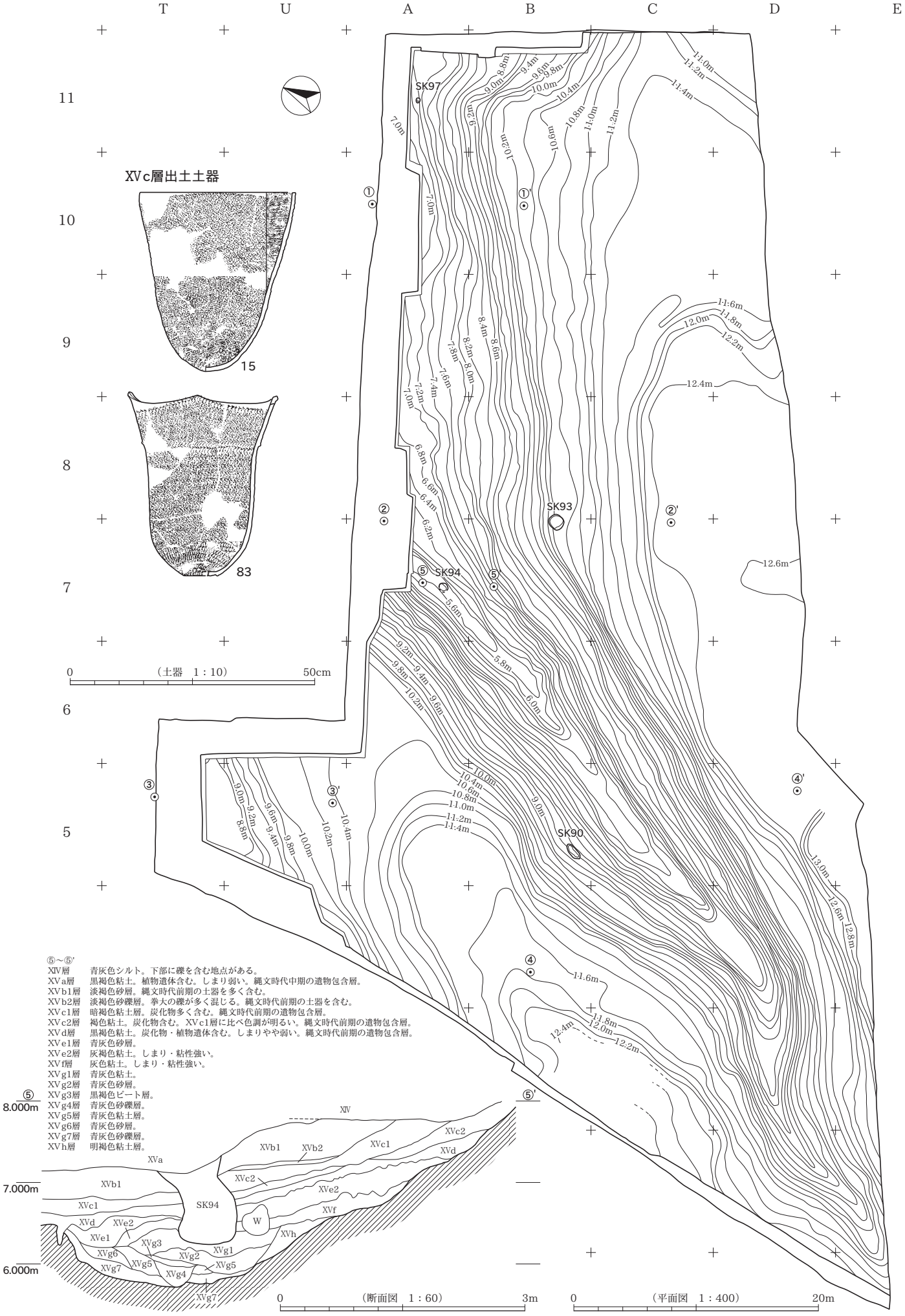
Ⅰ区土層柱状図（ドットの位置）

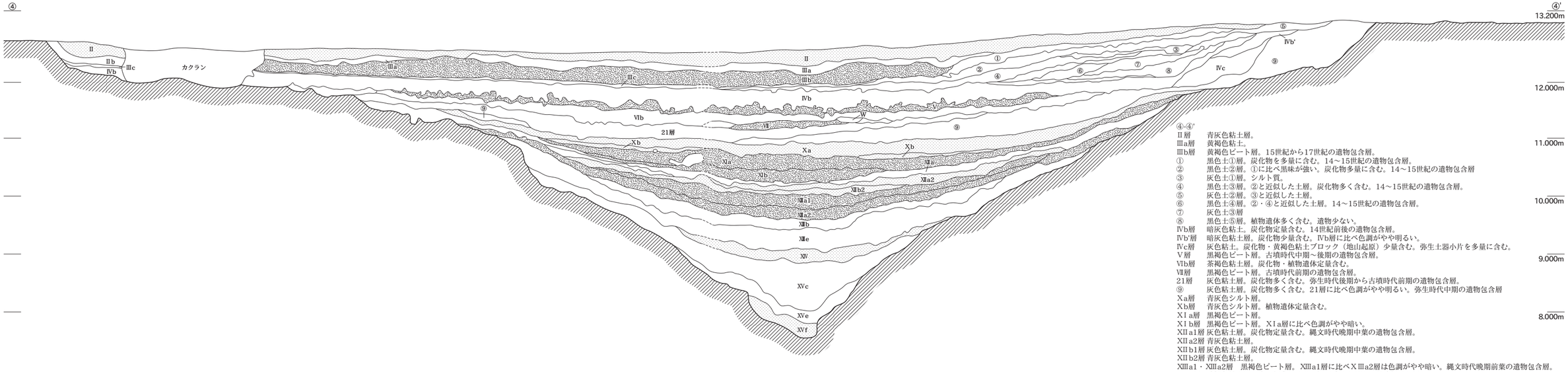


Ⅲb層　黄褐色ビート層。15～17世紀頃の遺物包含層。
Ⅳa層　青灰色粘土層。
Ⅳb1・Ⅳb2層　暗青灰色粘土。炭化物少量含む。Ⅳb1層とⅣb2層の間に部分的に薄い砂層あり。
Ⅴa層　黒褐色ビート層。古代の遺物包含層。
Ⅴb層　黒褐色ビート層。Ⅴa層に比べ色調がやや明るく粘性がやや強い。。
Ⅵ層　茶褐色ビート層。Ⅴa・b層にに比べ色調が明るく、粘性がやや強い。
Ⅶ層　黒褐色ビート層。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層。
Ⅸa層　黄灰色シルト質粘土層。
Ⅸb層　黒褐色ビート層。
Ⅹa・b層　青灰色シルト層。Ⅹb層は植物遺体を定量含む。
Ⅺ層　黒褐色ビート層。縄文時代晩期の遺物定量含む。
Ⅻ層　灰黄褐色粘土層。
ⅩⅢ層　黒褐色ビート層。
ⅩⅣa層　青灰色シルト層。
ⅩⅣb層　青灰色砂礫層。
ⅩⅤa層　黒褐色粘土層。しまり弱い。炭化物・植物遺体少量含む。縄文時代中期の遺物包含層。
ⅩⅤb層　褐色砂層。
ⅩⅤc（ⅩⅤ）層　褐色粘土。炭化物含む。縄文時代前期の遺物包含層。

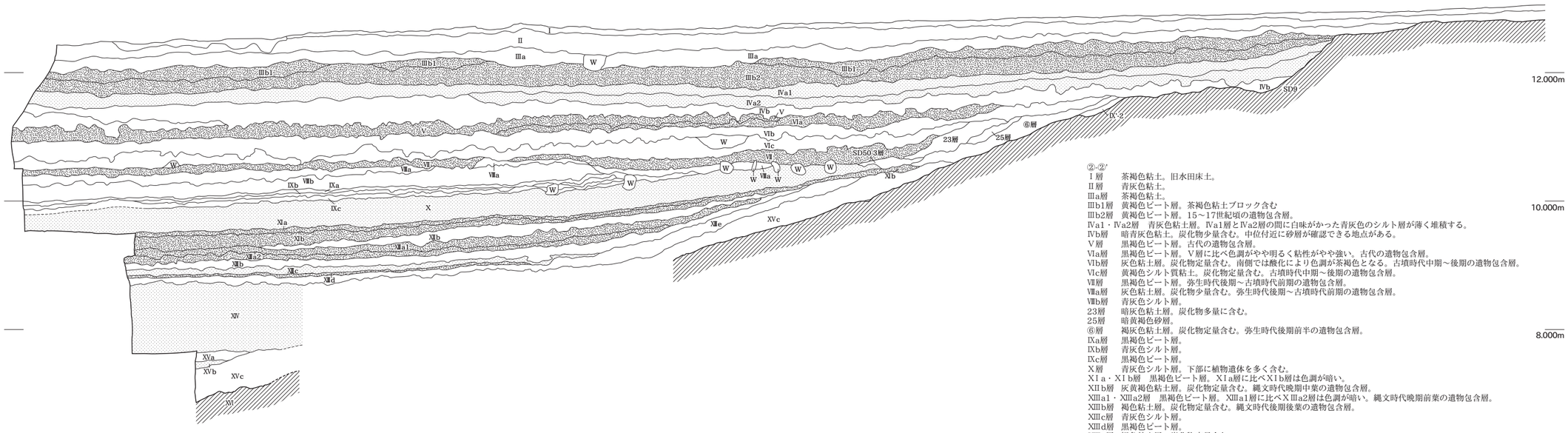
● 土層柱状図位置

0　（1：40）　2m


T
U
A
B
C
D
E
11
10
9
8
7
6
5
XVc層出土土器
15
83
0　（土器　1：10）　50cm
SK97
SK93
SK94
SK90
①
①'
②
②'
③
③'
④
④'
⑤
⑤'
⑤～⑤'
XIV層　青灰色シルト。下部に礫を含む地点がある。
XVa層　黒褐色粘土。植物遺体含む。しまり弱い。縄文時代中期の遺物包含層。
XVb1層　淡褐色砂層。縄文時代前期の土器を多く含む。
XVb2層　淡褐色砂礫層。拳大の礫が多く混じる。縄文時代前期の土器を含む。
XVc1層　暗褐色粘土層。炭化物多く含む。縄文時代前期の遺物包含層。
XVc2層　褐色粘土。炭化物含む。XVc1層に比べ色調が明るい。縄文時代前期の遺物包含層。
XVd層　黒褐色粘土。炭化物・植物遺体含む。しまりやや弱い。縄文時代前期の遺物包含層。
XVe1層　青灰色砂層。
XVe2層　灰褐色粘土。しまり・粘性強い。
XVf層　灰色粘土。しまり・粘性強い。
XVg1層　青灰色粘土。
XVg2層　青灰色砂層。
XVg3層　黒褐色ピート層。
XVg4層　青灰色砂礫層。
XVg5層　青灰色粘土層。
XVg6層　青灰色砂層。
XVg7層　青灰色砂礫層。
XVh層　明褐色粘土層。
8.000m
7.000m
6.000m
XIV
XVa
XVb1
XVb2
XVc1
XVc2
XVd
XVe1
XVe2
XVf
XVg1
XVg2
XVg3
XVg4
XVg5
XVg6
XVg7
XVh
SK94
W
0　（断面図　1：60）　3m
0　（平面図　1：400）　20m

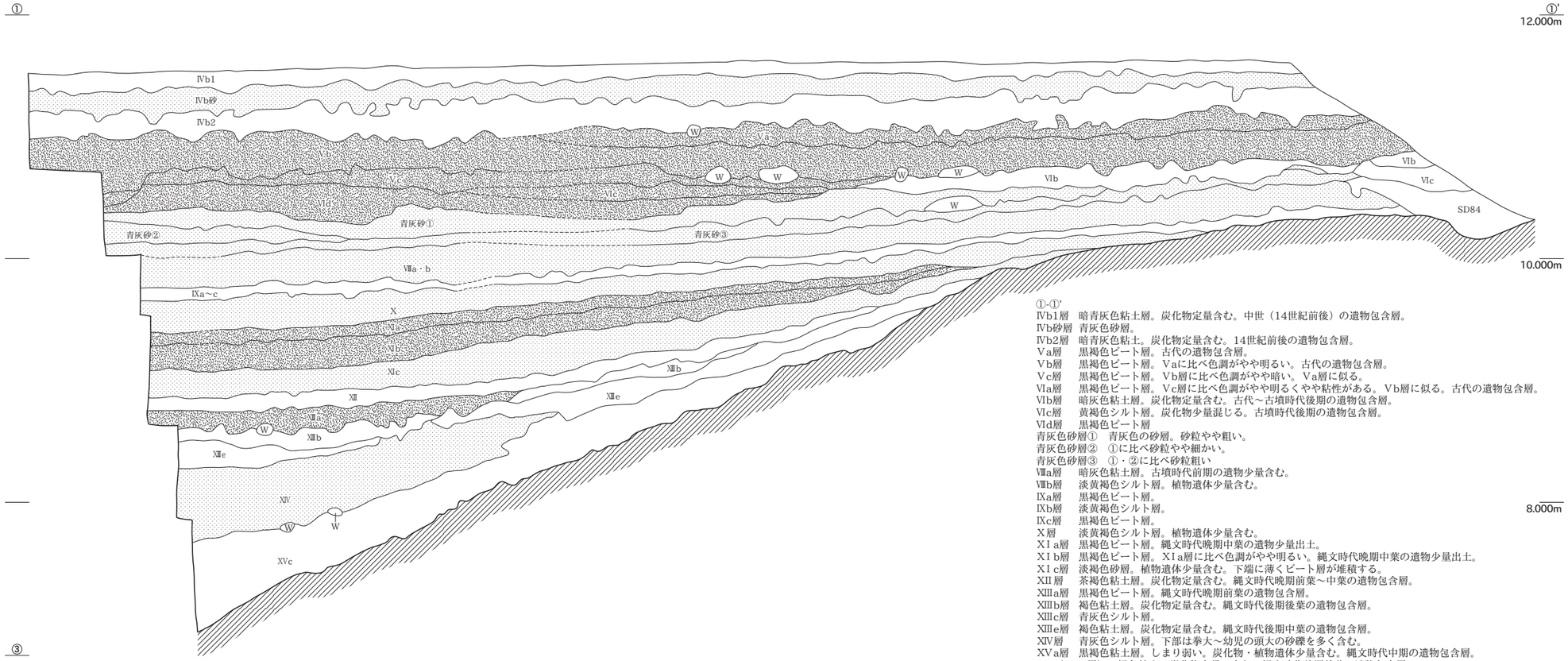


④-④'
Ⅱ層　青灰色粘土層。
Ⅲa層　黄褐色粘土。
Ⅲb層　黄褐色ピート層。15世紀から17世紀の遺物包含層。
①　黒色土①層。炭化物を多量に含む。14～15世紀の遺物包含層。
②　黒色土②層。①に比べ黒味が強い。炭化物多量に含む。14～15世紀の遺物包含層
③　灰色土①層。シルト質。
④　黒色土③層。②と近似した土層。炭化物多く含む。14～15世紀の遺物包含層。
⑤　灰色土②層。③と近似した土層。
⑥　黒色土④層。②・④と近似した土層。14～15世紀の遺物包含層。
⑦　灰色土③層
⑧　黒色土⑤層。植物遺体多く含む。遺物少ない。
Ⅳb層　暗灰色粘土。炭化物定量含む。14世紀前後の遺物包含層。
Ⅳb'層　暗灰色粘土層。炭化物少量含む。Ⅳb層に比べ色調がやや明るい。
Ⅳc層　灰色粘土。炭化物・黄褐色粘土ブロック（地山起原）少量含む。弥生土器小片を多量に含む。
Ⅴ層　黒褐色ピート層。古墳時代中期～後期の遺物包含層。
Ⅵb層　茶褐色粘土層。炭化物・植物遺体定量含む。
Ⅶ層　黒褐色ピート層。古墳時代前期の遺物包含層。
21層　灰色粘土層。炭化物多く含む。弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層。
⑨　灰色粘土層。炭化物多く含む。21層に比べ色調がやや明るい。弥生時代中期の遺物包含層
Ⅹa層　青灰色シルト層。
Ⅹb層　青灰色シルト層。植物遺体定量含む。
ⅩⅠa層　黒褐色ピート層。
ⅩⅠb層　黒褐色ピート層。ⅩⅠa層に比べ色調がやや暗い。
ⅩⅡa1層 灰色粘土層。炭化物定量含む。縄文時代晩期中葉の遺物包含層。
ⅩⅡa2層 青灰色粘土層。
ⅩⅡb1層 灰色粘土層。炭化物定量含む。縄文時代晩期中葉の遺物包含層。
ⅩⅡb2層 青灰色粘土層。
ⅩⅢa1・ⅩⅢa2層　黒褐色ピート層。ⅩⅢa1層に比べⅩⅢa2層は色調がやや暗い。縄文時代晩期前葉の遺物包含層。
ⅩⅢb層　暗褐色粘土層。炭化物定量含む。縄文時代後期後葉の遺物包含層。
ⅩⅢe層　褐色粘土層。炭化物定量含む。縄文時代後期中葉の遺物包含層。
ⅩⅣ層　青灰色シルト層。
ⅩⅤc層　褐色粘土。炭化物多量に含む。縄文時代前期前葉の遺物包含層。
ⅩⅤe層　淡褐色粘土層
ⅩⅤf層　青灰色粘土層。褐色・淡褐色粘土層少量含む。
W：倒木

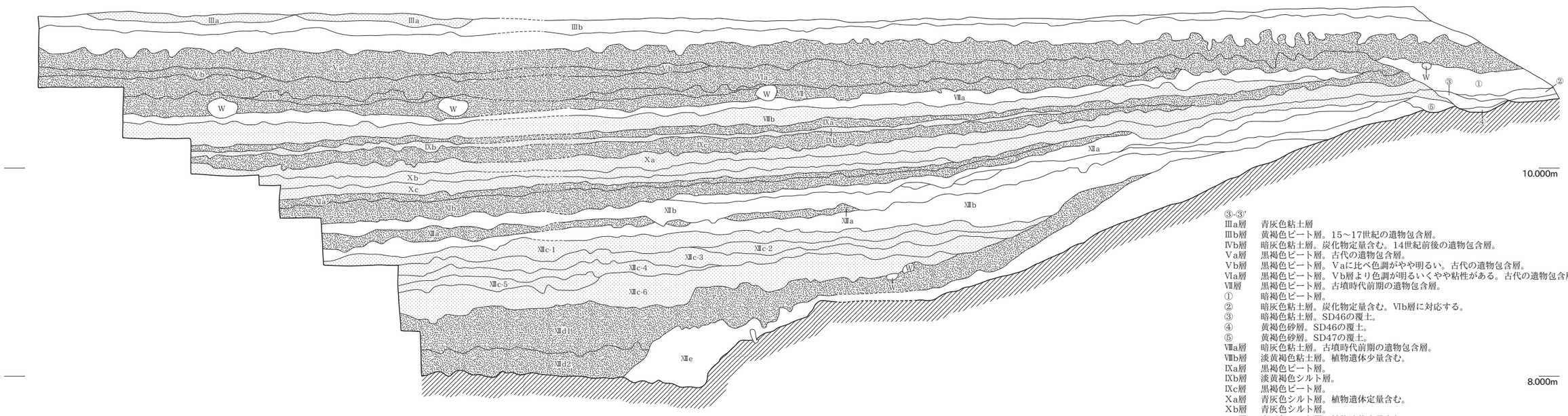


②-②'
Ⅰ層　茶褐色粘土。旧水田床土。
Ⅱ層　青灰色粘土。
Ⅲa層　茶褐色粘土。
Ⅲb1層　黄褐色ピート層。茶褐色粘土ブロック含む
Ⅲb2層　黄褐色ピート層。15～17世紀頃の遺物包含層。
Ⅳa1・Ⅳa2層　青灰色粘土層。Ⅳa1層とⅣa2層の間に白味がかった青灰色のシルト層が薄く堆積する。
Ⅳb層　暗青灰色粘土。炭化物少量含む。中位付近に砂層が確認できる地点がある。
Ⅴ層　黒褐色ピート層。古代の遺物包含層。
Ⅵa層　黒褐色ピート層。Ⅴ層に比べ色調がやや明るく粘性がやや強い。古代の遺物包含層。
Ⅵb層　灰色粘土層。炭化物定量含む。南側では酸化により色調が茶褐色となる。古墳時代中期～後期の遺物包含層。
Ⅵc層　黄褐色シルト質粘土。炭化物定量含む。古墳時代中期～後期の遺物包含層。
Ⅶ層　黒褐色ピート層。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層。
Ⅶa層　灰色粘土層。炭化物少量含む。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層。
Ⅶb層　青灰色シルト層。
23層　暗灰色粘土層。炭化物多量に含む。
25層　暗黄褐色砂層。
⑥層　褐灰色粘土層。炭化物定量含む。弥生時代後期前半の遺物包含層。
Ⅸa層　黒褐色ピート層。
Ⅸb層　青灰色シルト層。
Ⅸc層　黒褐色ピート層。
Ⅹ層　青灰色シルト層。下部に植物遺体を多く含む。
ⅩⅠa・ⅩⅠb層　黒褐色ピート層。ⅩⅠa層に比べⅩⅠb層は色調が暗い。
ⅩⅡb層　灰黄褐色粘土層。炭化物定量含む。縄文時代晩期中葉の遺物包含層。
ⅩⅢa1・ⅩⅢa2層　黒褐色ピート層。ⅩⅢa1層に比べⅩⅢa2層は色調が暗い。縄文時代晩期前葉の遺物包含層。
ⅩⅢb層　褐色粘土層。炭化物定量含む。縄文時代後期後葉の遺物包含層。
ⅩⅢc層　青灰色シルト層。
ⅩⅢd層　黒褐色ピート層。
ⅩⅢe層　褐色粘土層。炭化物定量含む。
ⅩⅣ層　青灰色シルト層。下部は拳大～幼児の頭大の砂礫を多く含む。
ⅩⅤa層　黒褐色粘土層。しまり弱い。炭化物・植物遺体少量含む。縄文時代中期の遺物包含層。
ⅩⅤb層　褐色砂層。下部に拳大の礫を含む。
ⅩⅤc（ⅩⅤ）層　褐色粘土。炭化物多量に含む。縄文時代前期前葉の遺物包含層。
W：倒木

0　（1：60）　3m



①-①'
Ⅳb1層　暗青灰色粘土層。炭化物定量含む。中世（14世紀前後）の遺物包含層。
Ⅳb砂層　青灰色砂層。
Ⅳb2層　暗青灰色粘土。炭化物定量含む。14世紀前後の遺物包含層。
Ⅴa層　黒褐色ピート層。古代の遺物包含層。
Ⅴb層　黒褐色ピート層。Ⅴaに比べ色調がやや明るい。古代の遺物包含層。
Ⅴc層　黒褐色ピート層。Ⅴb層に比べ色調がやや暗い。Ⅴa層に似る。
Ⅵa層　黒褐色ピート層。Ⅴc層に比べ色調がやや明るくやや粘性がある。Ⅴb層に似る。古代の遺物包含層。
Ⅵb層　暗灰色粘土層。炭化物定量含む。古代～古墳時代後期の遺物包含層。
Ⅵc層　黄褐色シルト層。炭化物少量混じる。古墳時代後期の遺物包含層。
Ⅵd層　黒褐色ピート層
青灰色砂層①　青灰色の砂層。砂粒やや粗い。
青灰色砂層②　①に比べ砂粒やや細かい。
青灰色砂層③　①・②に比べ砂粒粗い
Ⅶa層　暗灰色粘土層。古墳時代前期の遺物少量含む。
Ⅶb層　淡黄褐色シルト層。植物遺体少量含む。
Ⅸa層　黒褐色ピート層。
Ⅸb層　淡黄褐色シルト層。
Ⅸc層　黒褐色ピート層。
Ⅹ層　淡黄褐色シルト層。植物遺体少量含む。
ⅪⅠa層　黒褐色ピート層。縄文時代晩期中葉の遺物少量出土。
ⅪⅠb層　黒褐色ピート層。ⅪⅠa層に比べ色調がやや明るい。縄文時代晩期中葉の遺物少量出土。
ⅪⅠc層　淡褐色砂層。植物遺体少量含む。下端に薄くピート層が堆積する。
ⅪⅡ層　茶褐色粘土層。炭化物定量含む。縄文時代晩期前葉～中葉の遺物包含層。
ⅪⅢa層　黒褐色ピート層。縄文時代晩期前葉の遺物包含層。
ⅪⅢb層　褐色粘土層。炭化物定量含む。縄文時代後期後葉の遺物包含層。
ⅪⅢc層　青灰色シルト層。
ⅪⅢe層　褐色粘土層。炭化物定量含む。縄文時代後期中葉の遺物包含層。
ⅪⅣ層　青灰色シルト層。下部は拳大～幼児の頭大の砂礫を多く含む。
ⅪⅤa層　黒褐色粘土層。しまり弱い。炭化物・植物遺体少量含む。縄文時代中期の遺物包含層。
ⅪⅤ（ⅪⅤc層）　褐色粘土。炭化物多量に含む。縄文時代前期前葉の遺物包含層。
W：倒木



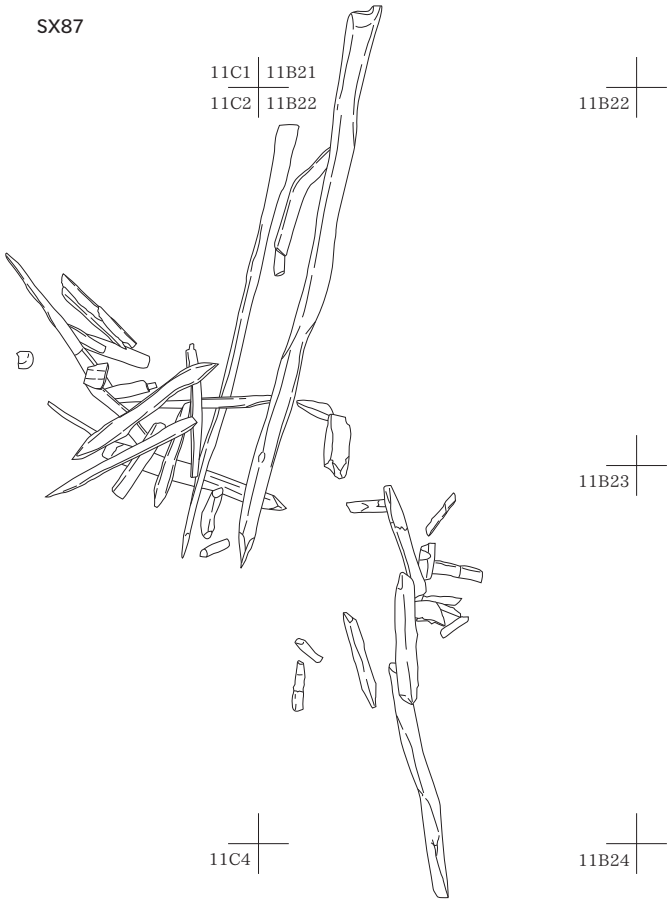
③-③'
Ⅲa層　青灰色粘土層
Ⅲb層　黄褐色ピート層。15～17世紀の遺物包含層。
Ⅳb層　暗灰色粘土層。炭化物定量含む。14世紀前後の遺物包含層。
Ⅴa層　黒褐色ピート層。古代の遺物包含層。
Ⅴb層　黒褐色ピート層。Ⅴaに比べ色調がやや明るい。古代の遺物包含層。
Ⅵa層　黒褐色ピート層。Ⅴb層より色調が明るいくやや粘性がある。古代の遺物包含層。
Ⅶ層　黒褐色ピート層。古墳時代前期の遺物包含層。
①　暗褐色ピート層。
②　暗灰色粘土層。炭化物定量含む。Ⅵb層に対応する。
③　暗褐色粘土層。SD46の覆土。
④　黄褐色砂層。SD46の覆土。
⑤　黄褐色砂層。SD47の覆土。
Ⅶa層　暗灰色粘土層。古墳時代前期の遺物包含層。
Ⅶb層　淡黄褐色粘土層。植物遺体少量含む。
Ⅸa層　黒褐色ピート層。
Ⅸb層　淡黄褐色シルト層。
Ⅸc層　黒褐色ピート層。
Ⅹa層　青灰色シルト層。植物遺体定量含む。
Ⅹb層　青灰色シルト層。
Ⅹc層　青灰色シルト層。植物遺体定量含む。
ⅪⅠa層　黒褐色ピート層。縄文時代晩期中葉の遺物少量出土。
ⅪⅠb層　黒褐色ピート層。ⅪⅠa層に比べ色調がやや明るい。縄文時代晩期中葉の遺物少量出土。
ⅪⅡa層　灰色粘土層。炭化物少量含む。縄文時代晩期中葉の遺物包含層。
ⅪⅢa層　黒褐色ピート層。縄文時代晩期前葉の遺物包含層。
ⅪⅢb層　褐色粘土層。炭化物定量含む。縄文時代後期後葉の遺物包含層。
ⅪⅢc1～c6層　砂混灰色シルト層。植物遺体含む。砂・植物遺体の多寡で細分。
ⅪⅢd1層 黒褐色ピート層。
ⅪⅢd2層 黒褐色ピート層。ⅪⅢd1層に比べ暗くしまりが弱い。
ⅪⅢe層　褐色粘土層。炭化物定量含む。縄文時代後期中葉の遺物包含層。
W：倒木

青灰色砂・シルト・粘土

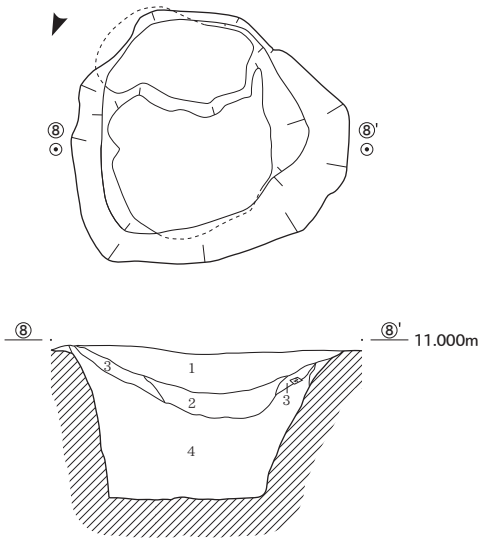
ピート層

0　（1：40）　2m

SX87

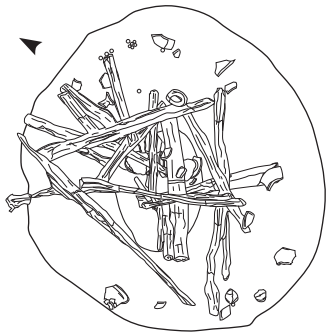


SK40

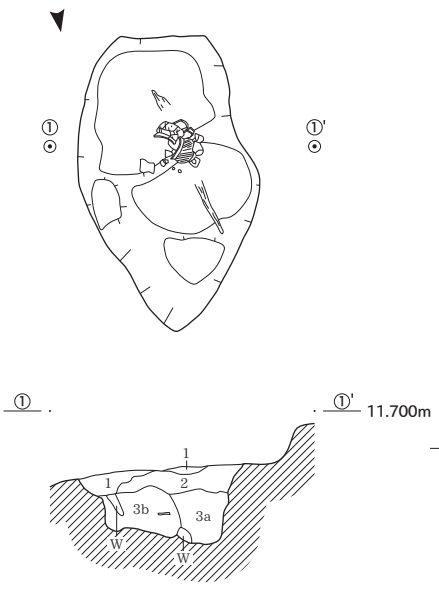


1　暗褐色粘土。しまり強。遺物多く含む。
2　黒褐色粘土。しまり強。
3　黒褐色粘土。灰色粘土ブロック混じる。
4　黒褐色粘土。青灰色粘土ブロック混じる。

SK55

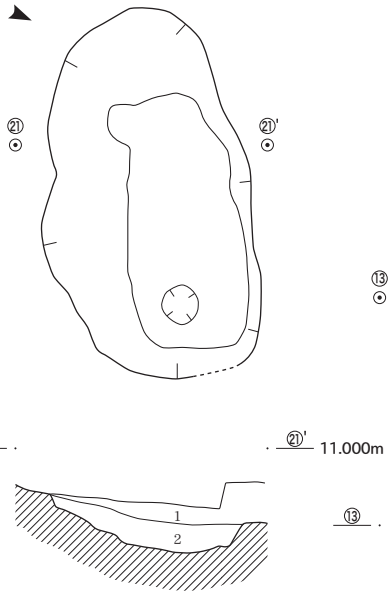


SK6

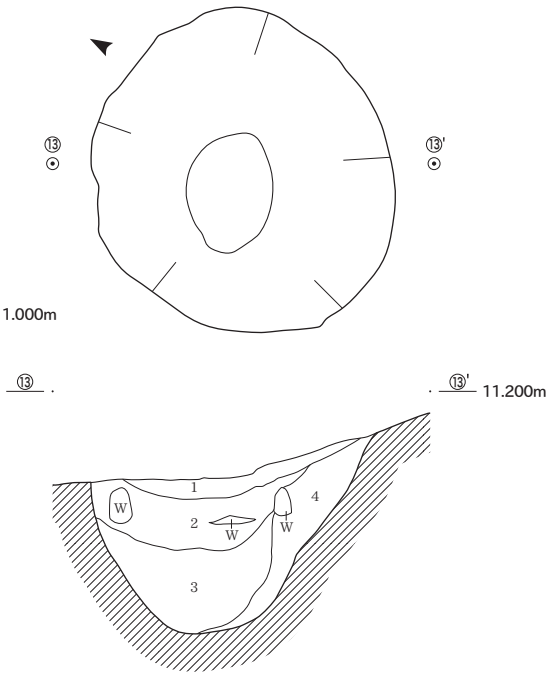


1　灰色粘土。しまりが弱・粘性強。
2　黄白色粘土。しまり弱・粘性強。
3a　灰色粘土。しまり弱・粘性強。青灰色粘土ブロック多く含む。炭化物含む。
3b　灰色粘土。しまり弱・粘性強。
W：木製品・自然木

SK59



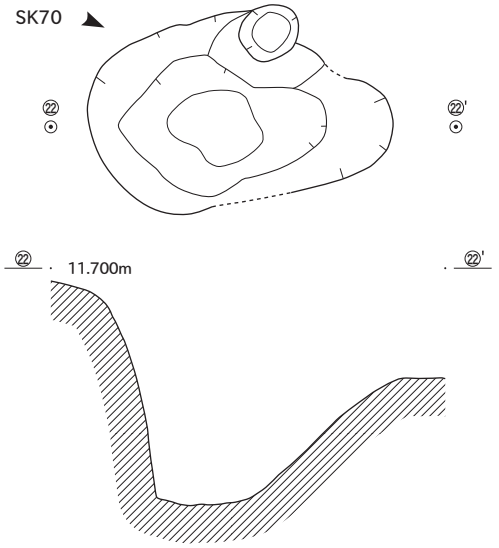
1　黒色ピート。基本層序Ⅸ層。
2　黒色ピート。砂・青灰色粘土を少量含む。



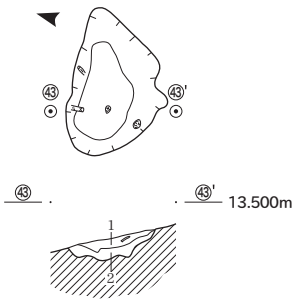
1　明褐色粘土。しまり強。遺物少ない。
2　明褐色粘土。しまり弱・粘性強。木器・自然木多く含む。
3　暗褐色粘土。粘性強。下部に砂・土器含む。
4　暗褐色粘土。しまり強。青灰色粘土ブロック混じる。
W：木製品・自然木

0　（1：40）　2m

SK70

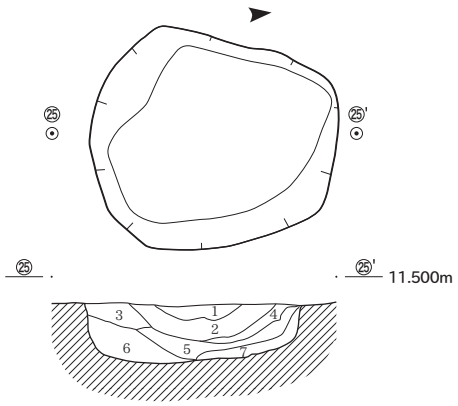


P61



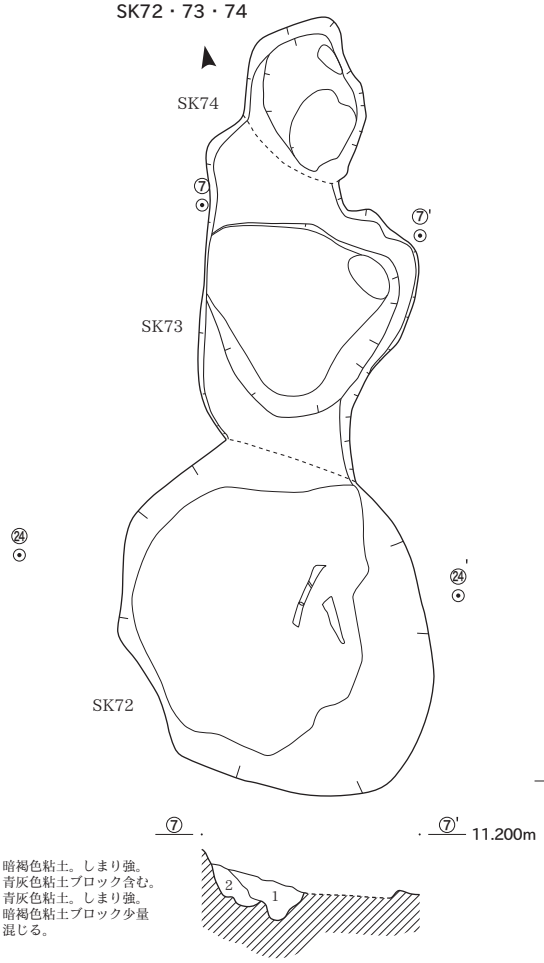
1　暗褐色粘土。植物遺体・径1～10mmの炭化物を多量に含む。
2　灰褐色粘土。青灰色粘土ブロック・径1～3mmの炭化物を少量含む。

SK76



1　7.5YR3/1黒褐色粘土。粘性強。5cm前後の7.5GY6/1緑灰色粘土ブロック・1cm前後の炭化物含む。平安時代の土師器出土。
2　7.5YR3/1黒褐色粘土。1cm前後の炭化物含む。
3・4　7.5YR3/1黒褐色粘土。粘性強。5cm前後の7.5GY6/1緑灰色粘土ブロック・1cm前後の炭化物含む。
5　7.5YR3/1黒褐色粘土。1cm前後の炭化物含む。
6・7　7.5YR3/1黒褐色粘土。粘性強。5cm前後の7.5GY6/1緑灰色粘土ブロック・1cm前後の炭化物含む。

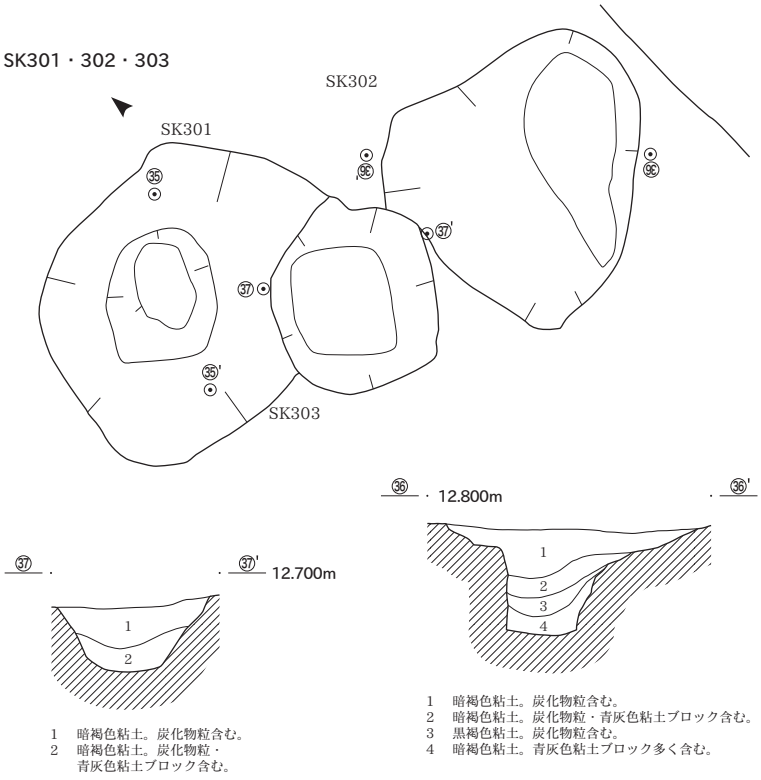
SK72・73・74



1　暗褐色粘土。しまり強。青灰色粘土ブロック含む。
2　青灰色粘土。しまり強。暗褐色粘土ブロック少量混じる。

1　暗褐色粘土。しまり・粘性強。
2　暗褐色粘土。青灰色粘土ブロック含む。
3　青灰色粘土。暗褐色粘土ブロック含む。
4　黒褐色粘土。青灰色粘土ブロック多く含む。
5　暗褐色粘土。青灰色粘土ブロック多く含む。

SK301・302・303

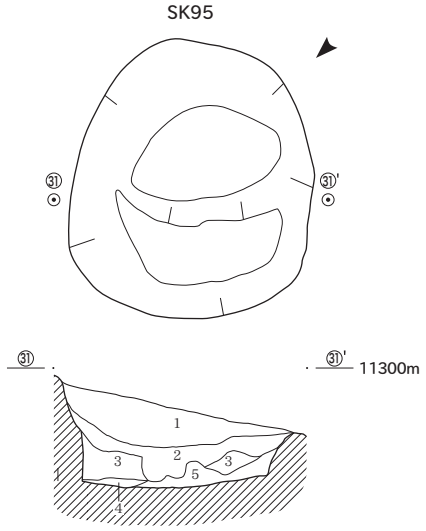


1　暗褐色粘土。炭化物粒含む。
2　暗褐色粘土。炭化物粒・青灰色粘土ブロック含む。
3　黒褐色粘土。炭化物粒含む。
4　暗褐色粘土。青灰色粘土ブロック多く含む。

1　暗褐色粘土。炭化物粒含む。
2　暗褐色粘土。炭化物粒・青灰色粘土ブロック含む。

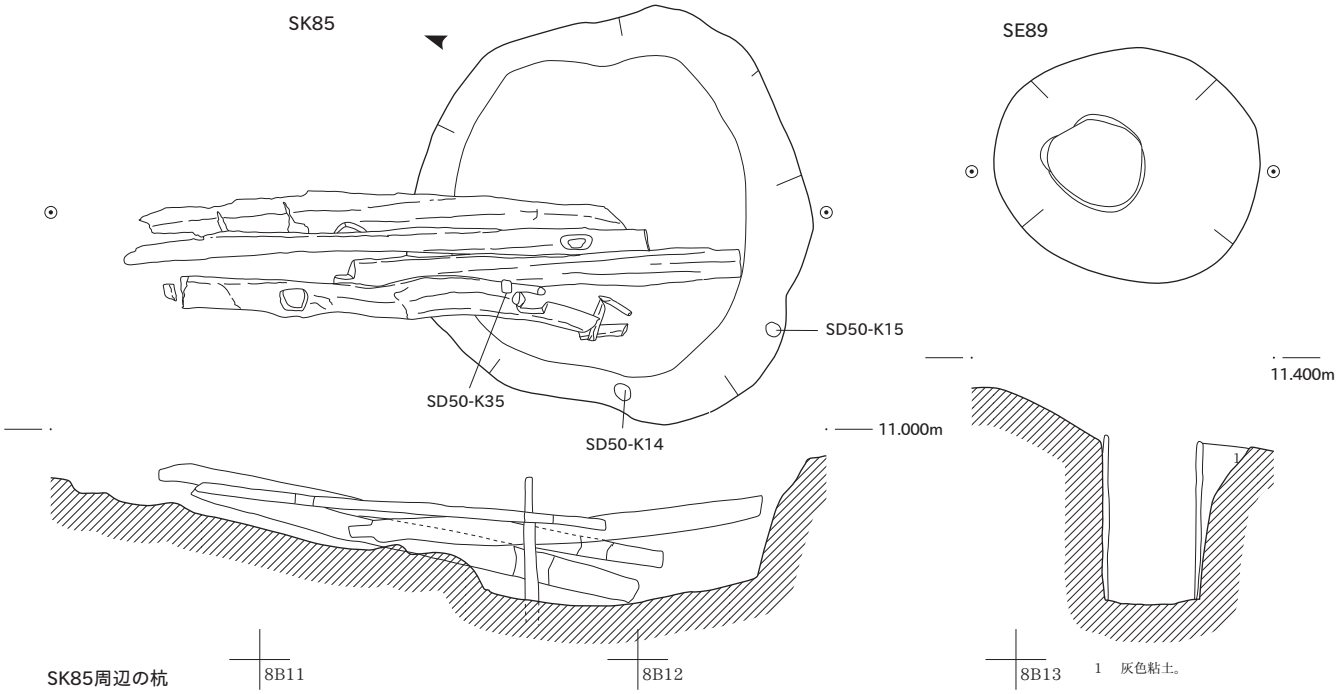
1　暗褐色粘土。炭化物粒混じる。
2　暗褐色粘土。炭化物粒・青灰色粘土ブロック含む。

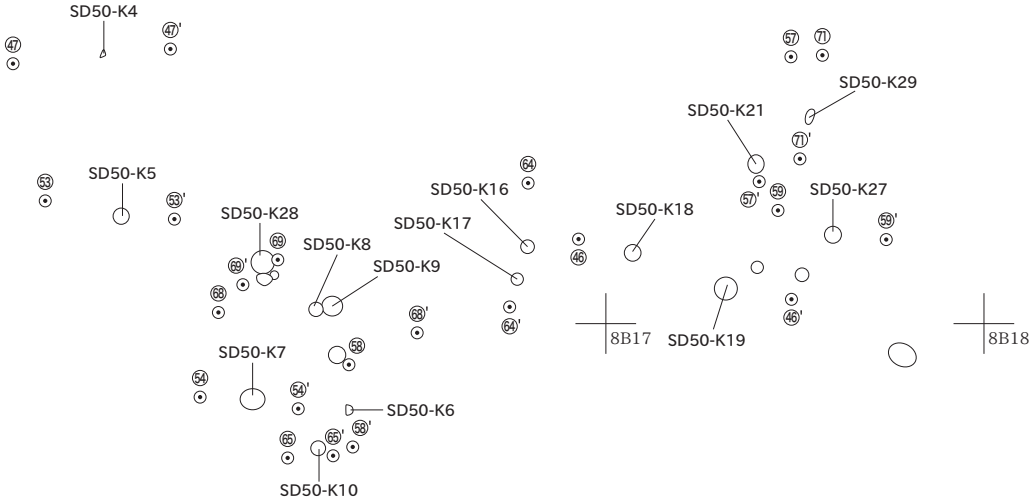
SK95

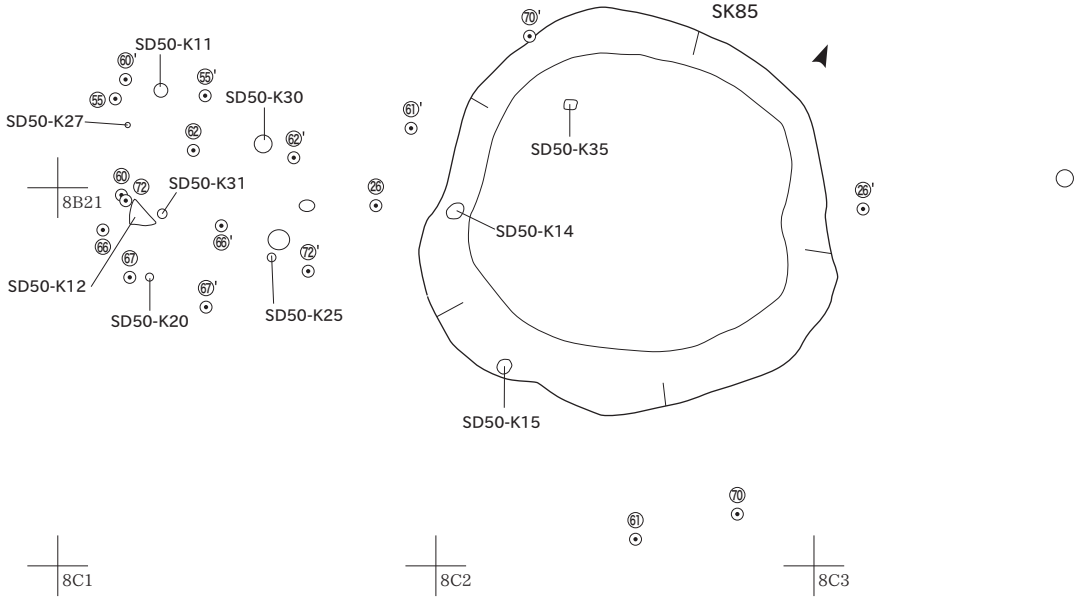


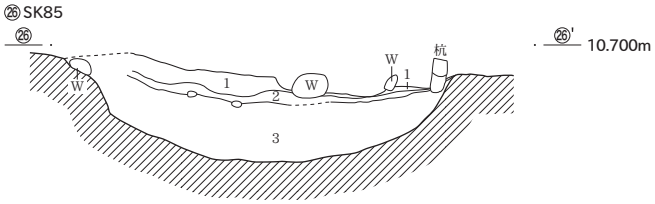
1　10YR3/1褐灰色粘土。炭化物含む。
2　10YR4/1褐灰色シルト。
3　10G7/1明緑灰色シルト。7.5Y4/1褐灰色シルトブロック・土器・木器含む。
4　7.5Y4/1灰色シルト。砂粒少量含む。
5　10G7/1明緑灰色砂。しまり強・粘性弱。

0　（1：40）　2m





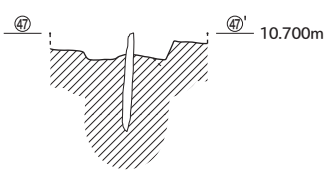




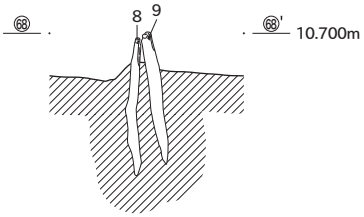
1　暗灰色粘土。しまり強。斜面堆積23層。遺物多い。
2　暗褐色粘土。砂粒多量に含む。SD50の3層。
3　暗褐色粘土。しまり弱・粘性強。
W：木製品・自然木

0　（1：20）　1m

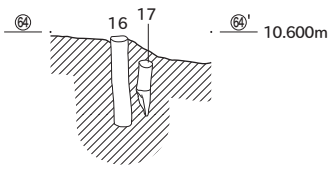
㊼SD50-K4



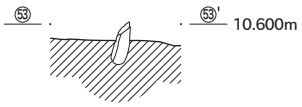
㊽SD50-K8・9



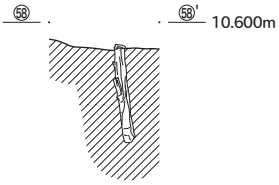
㊹SD50-K16・17



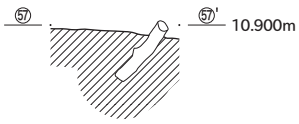
㊸SD50-K5



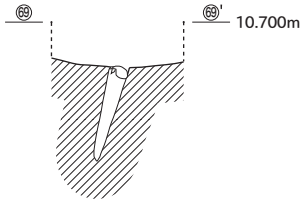
㊽SD58-K6



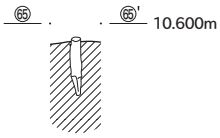
㊼SD50-K21



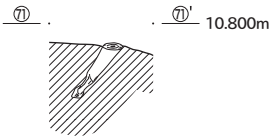
㊾SD50-K28



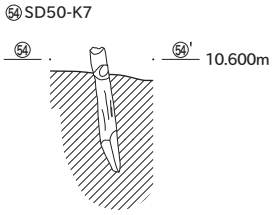
㊺SD50-K10



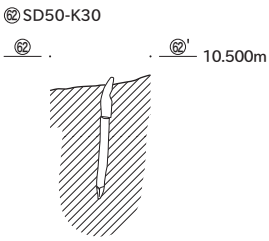
㊶SD50-K29



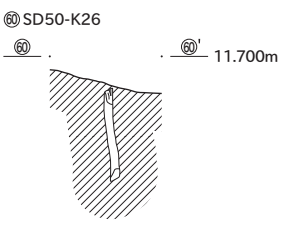
㊹SD50-K7



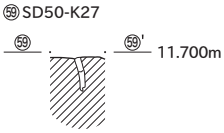
㊷SD50-K30



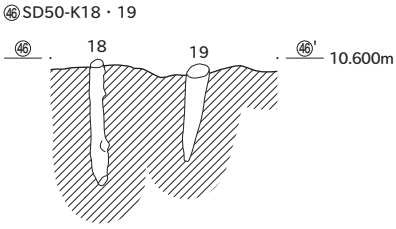
㊻SD50-K26



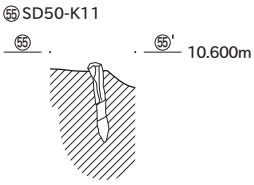
㊾SD50-K27



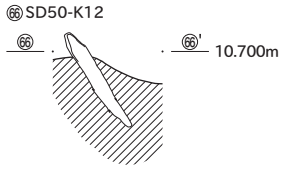
㊻SD50-K18・19



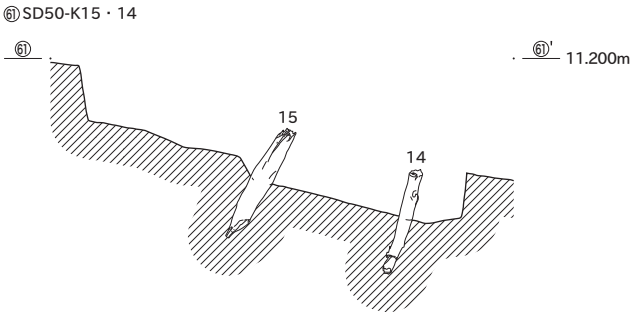
㊺SD50-K11



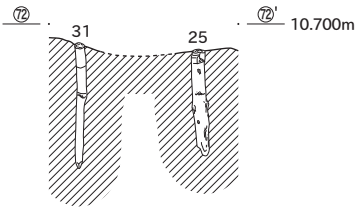
㊻SD50-K12



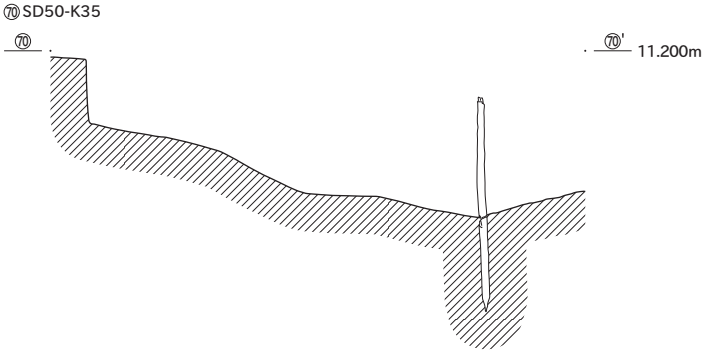
㊶SD50-K15・14



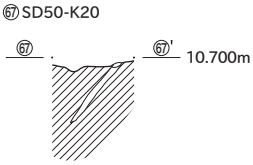
㊷SD50-K31・25



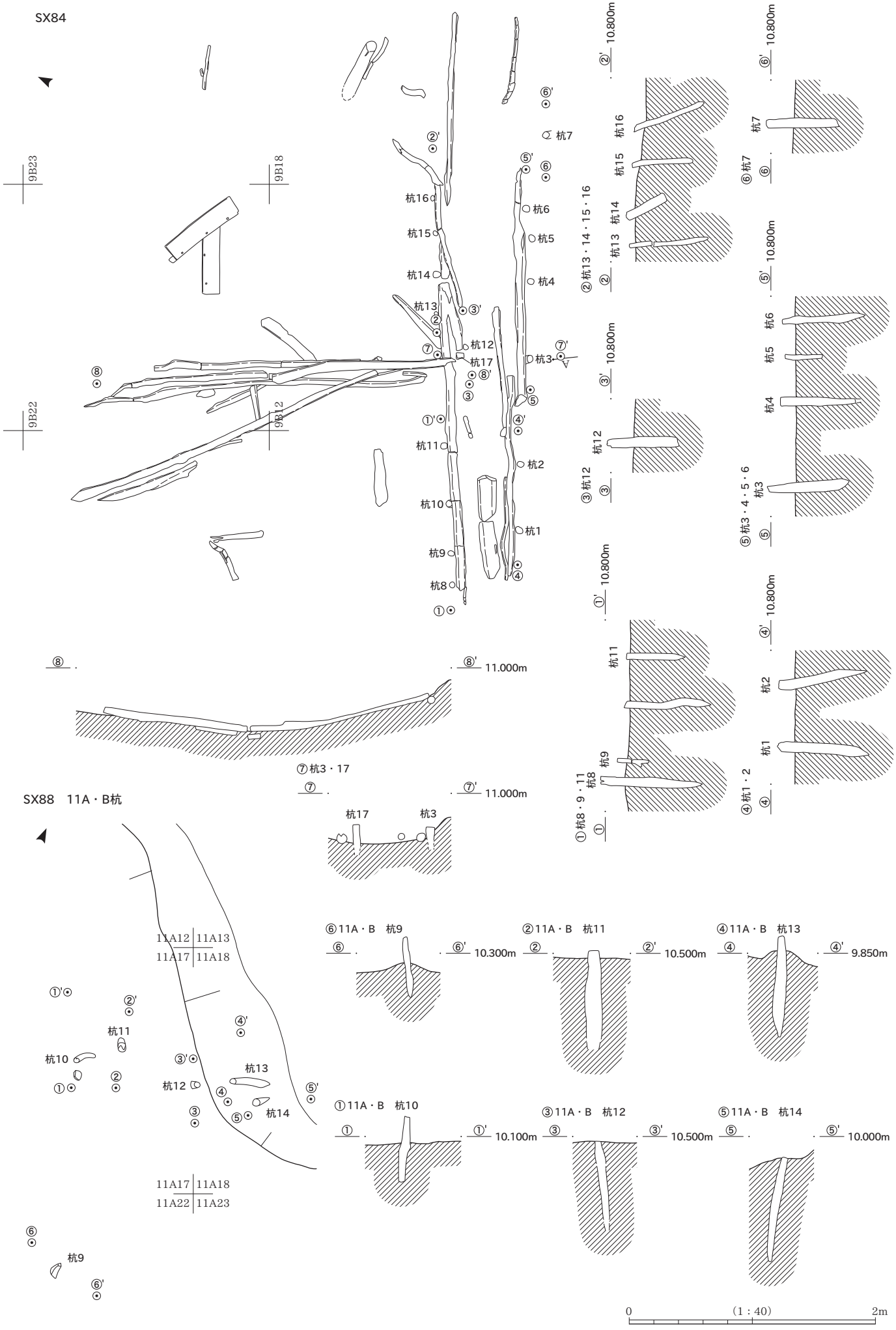
㊿SD50-K35



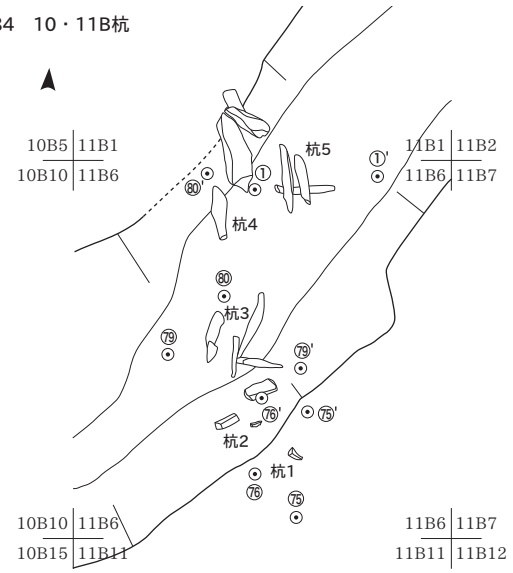
㊼SD50-K20

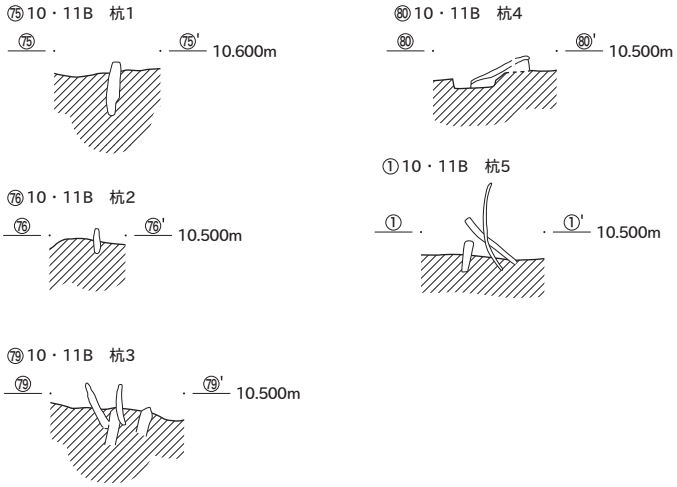


0　（1：40）　2m

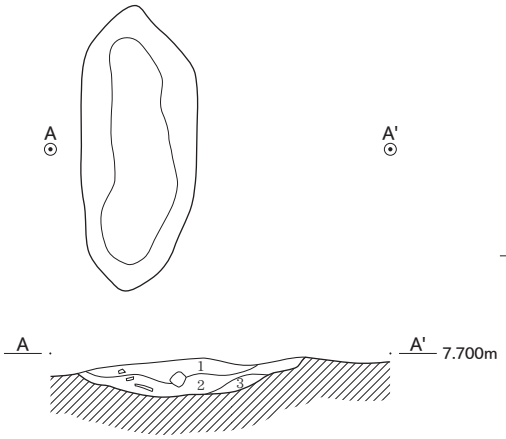

SX84
9B23
9B18
9B22
9B12
杭16
杭15
杭14
杭13
杭12
杭17
杭11
杭10
杭9
杭8
杭7
杭6
杭5
杭4
杭3
杭2
杭1
10.800m
11.000m
②杭13・14・15・16
③杭12
①杭8・9・11
⑥杭7
⑤杭3・4・5・6
④杭1・2
⑦杭3・17
SX88　11A・B杭
11A12 11A13
11A17 11A18
11A22 11A23
⑥11A・B　杭9
10.300m
②11A・B　杭11
10.500m
④11A・B　杭13
9.850m
①11A・B　杭10
10.100m
③11A・B　杭12
10.500m
⑤11A・B　杭14
10.000m
0
(1：40)
2m

SD84　10・11B杭



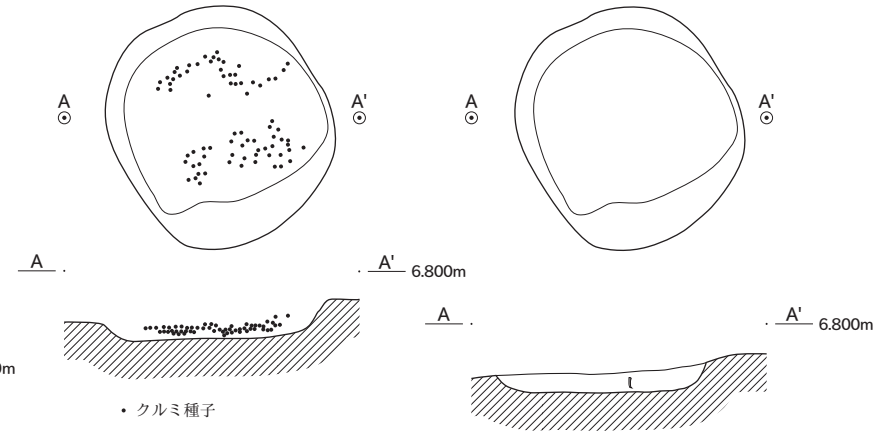


SK90



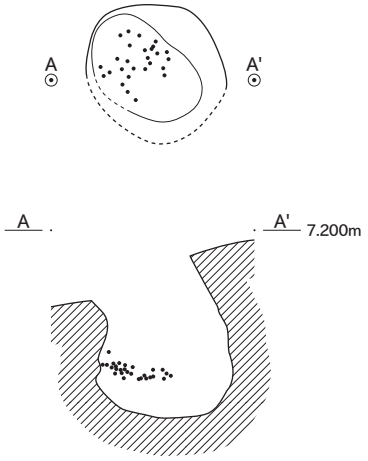
1　褐色粘土。炭化物少量含む。基本層序のXVc層に同じ。
2　褐色粘土。炭化物・青灰色シルトブロック定量含む。
3　青灰色シルト。炭化物・褐色粘土ブロック少量含む。

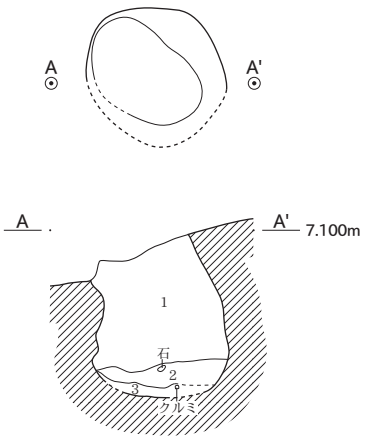
SK93



1　褐色粘土。炭化物・クルミ種子含む。基本層序のXV層に同じ。

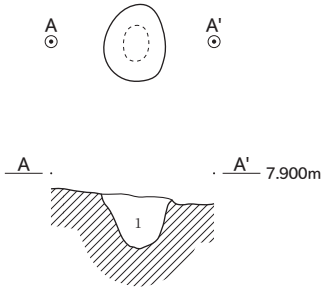
SK94





1　黒褐色粘土。植物遺体定量含む。基本層序のXVa層に同じ。
2　灰黄褐色粘土。混入物少なく均質な土層。クルミ種子含む。
3　黒褐色粘土。1に比べ植物遺体少なく。しまり弱い。

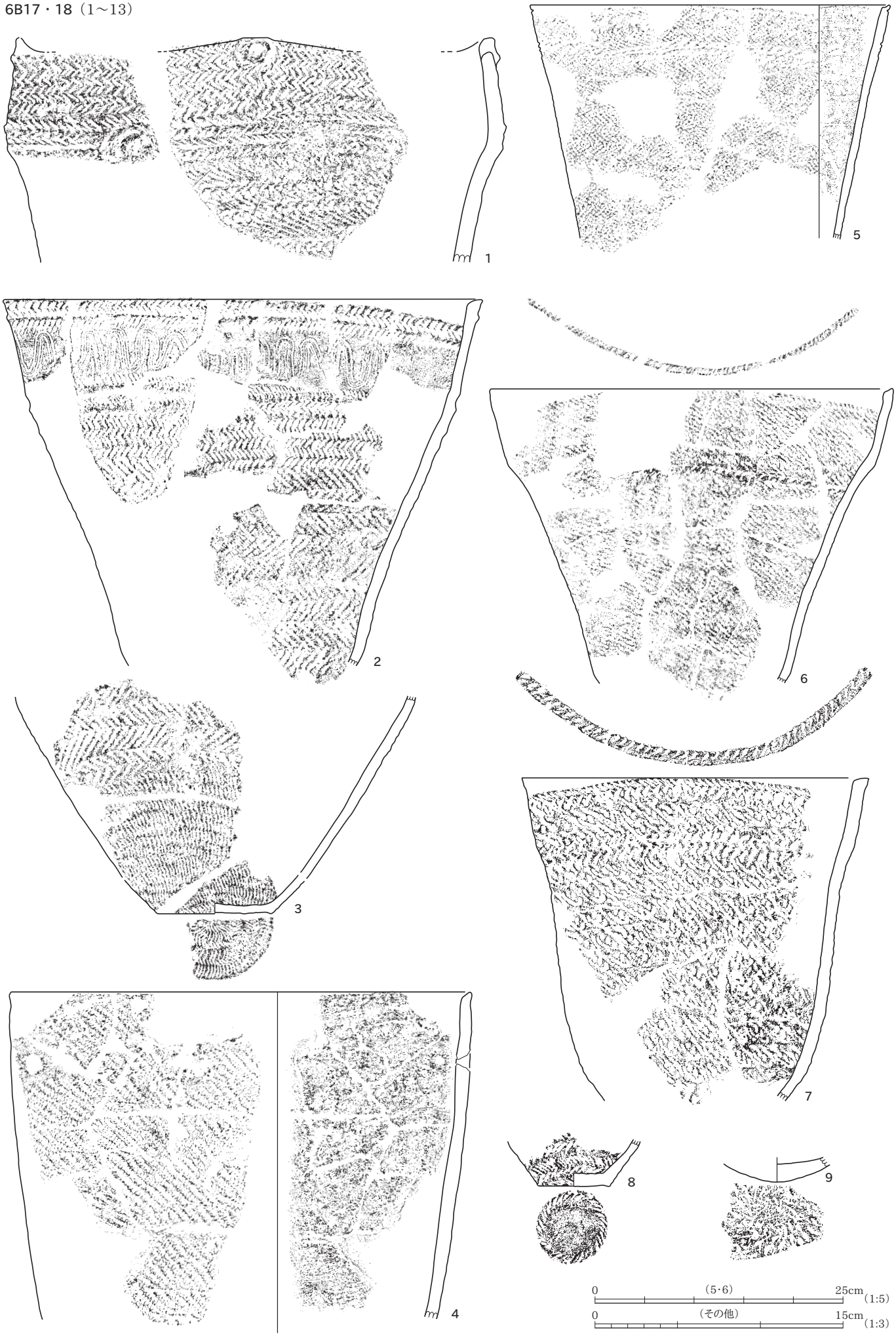
SK97



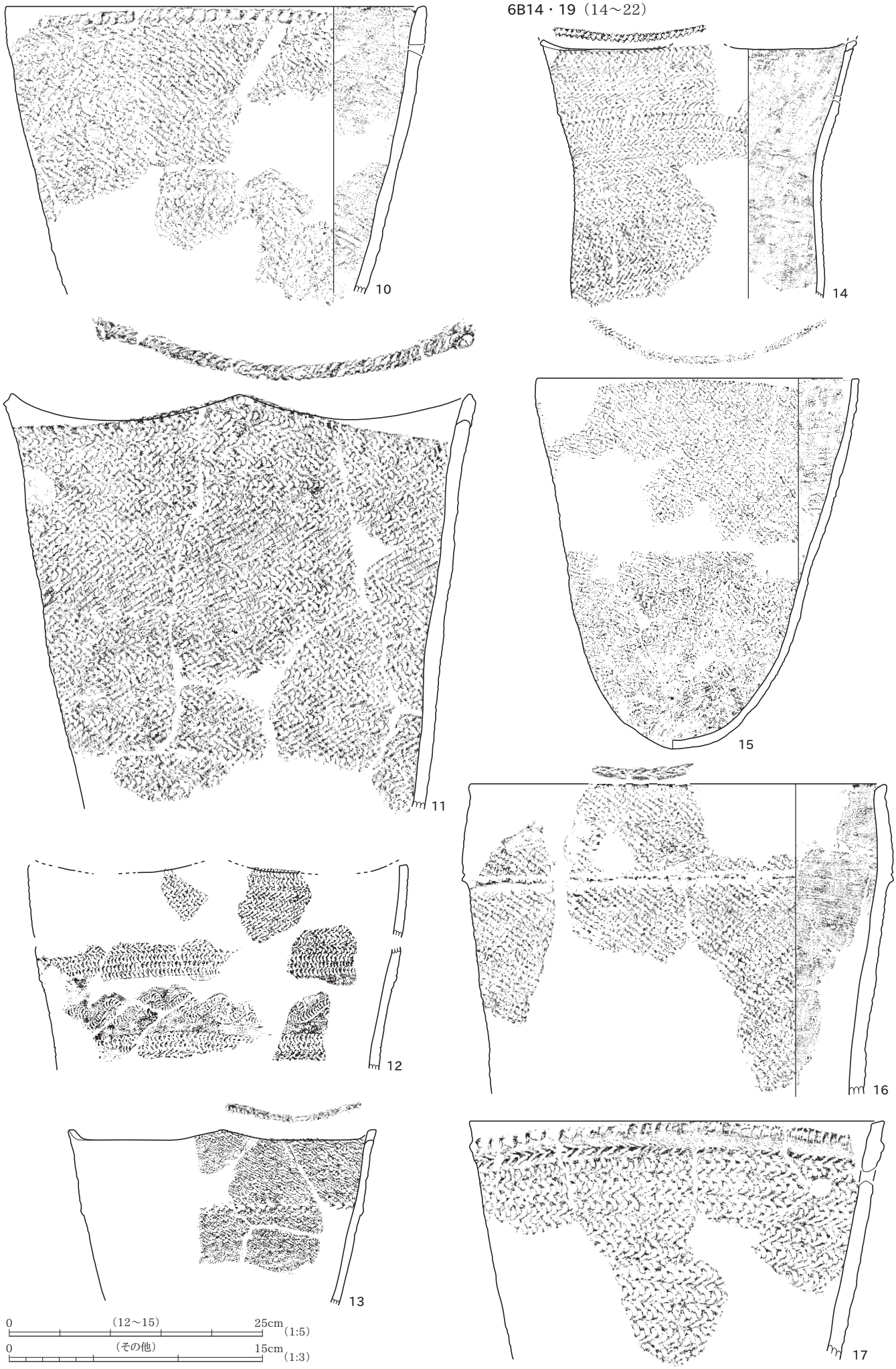
1　クルミ種子。

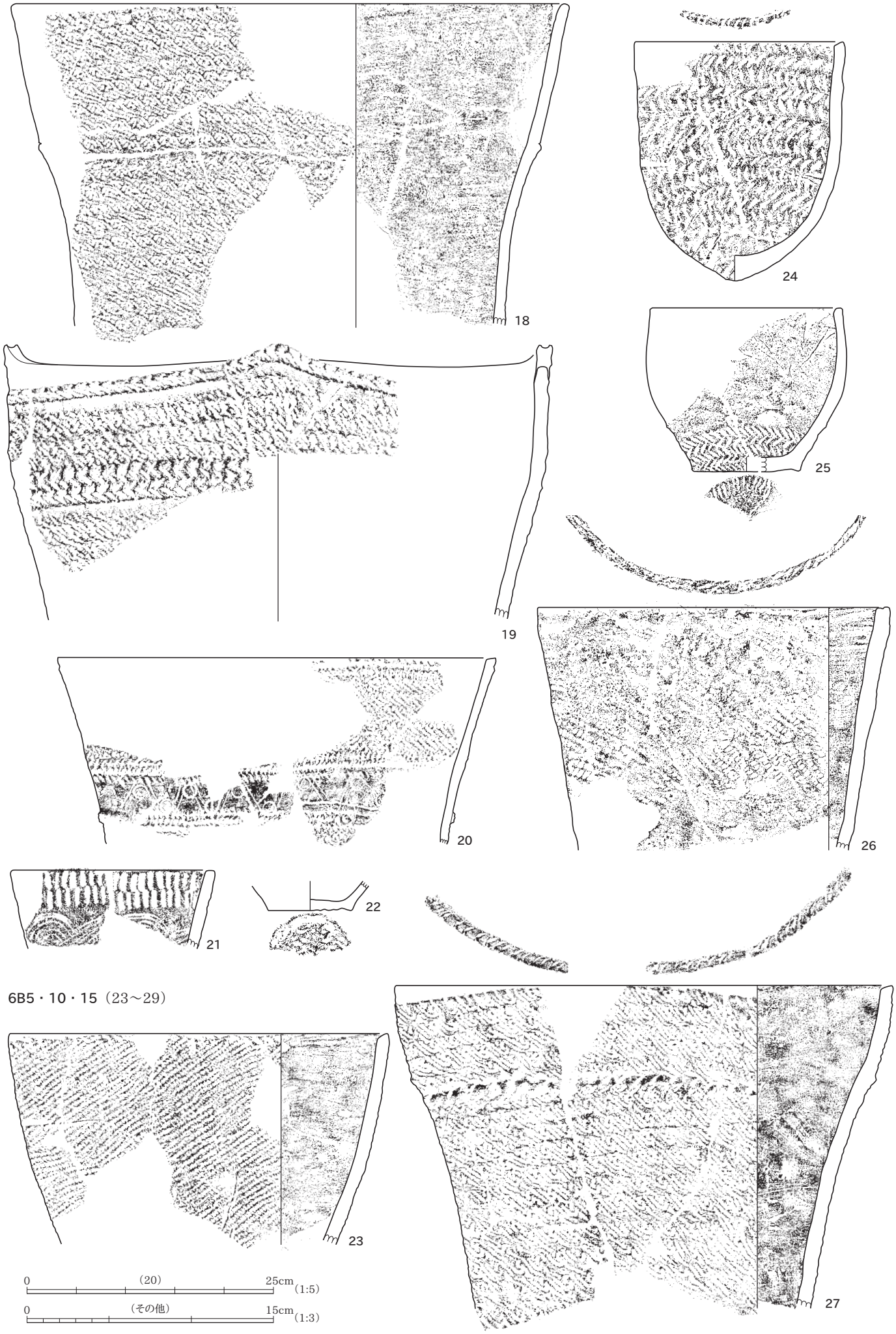
0　（1：40）　2m

6B17・18（1～13）

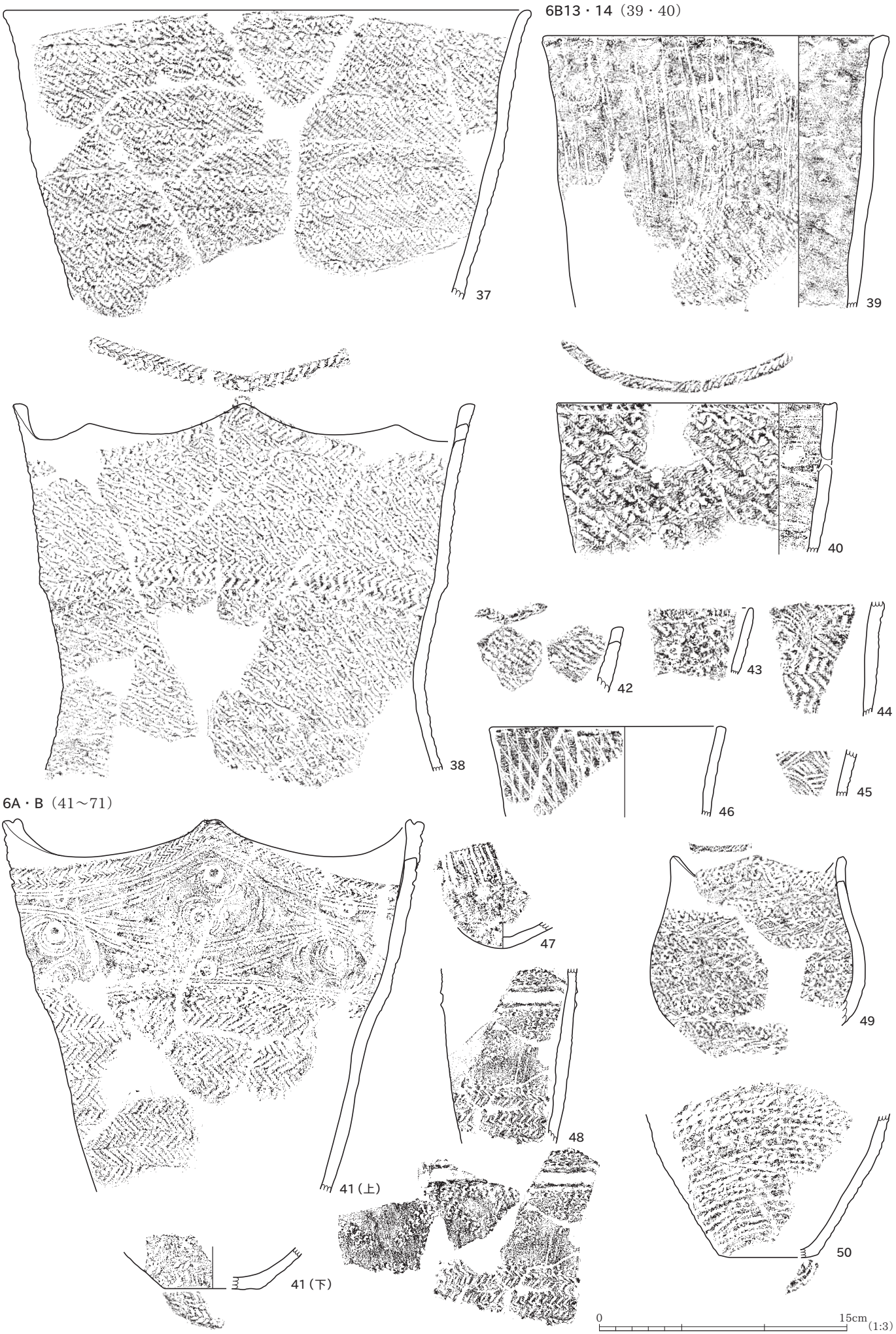


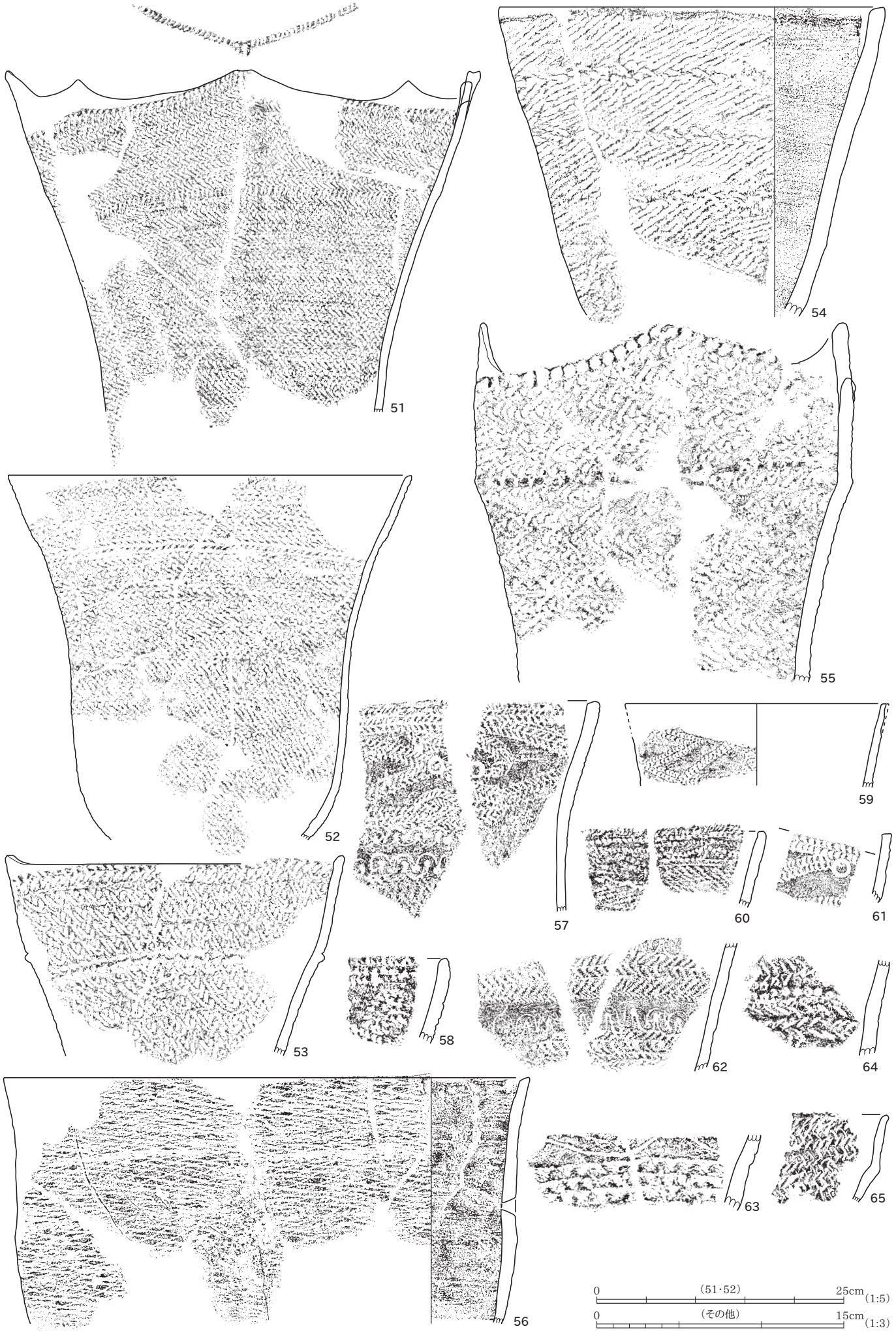
6B14・19（14～22）




18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
6B5・10・15（23～29）
0
(20)
25cm
(1:5)
0
(その他)
15cm
(1:3)

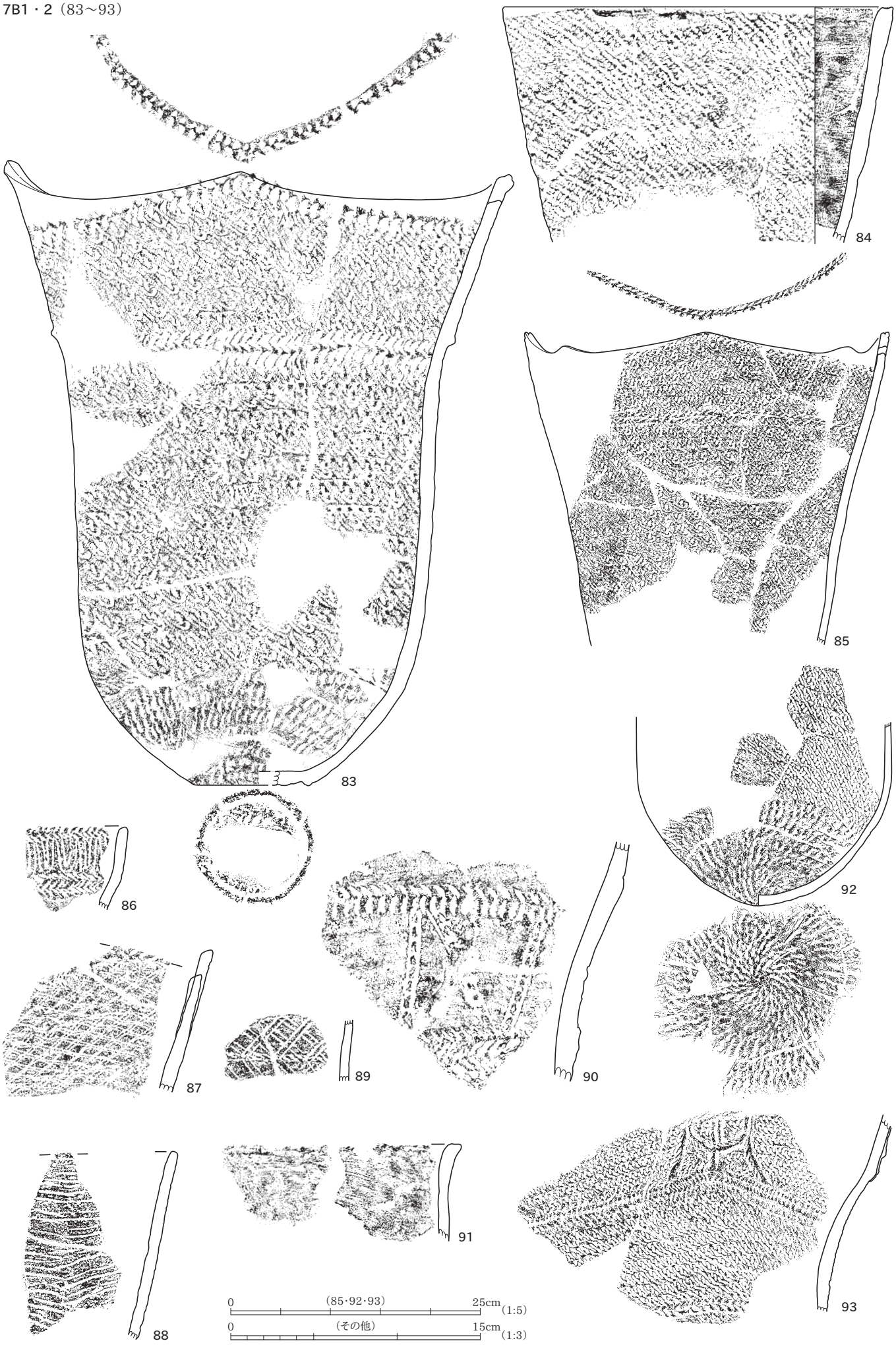
6B5（30～35）
28
30
31
29
33
32
34
35
6B9（36～38）
36
0
（31･32）
25cm
(1:5)
0
（その他）
15cm
(1:3)


6B13・14（39・40）
37
39
40
38
42
43
44
45
46
6A・B（41～71）
47
48
49
50
41（上）
41（下）
0
15cm
(1:3)

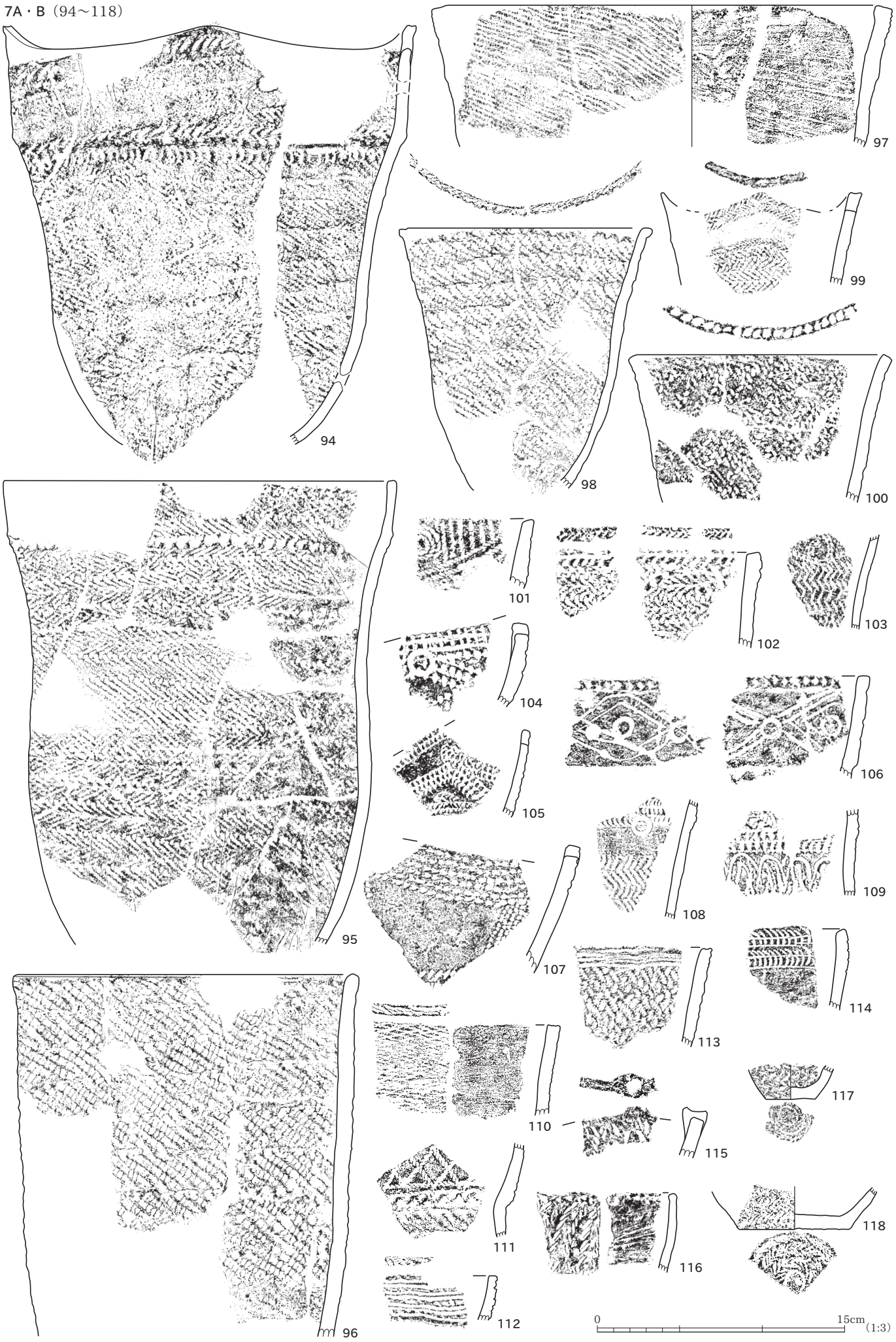

51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
0
(51･52)
25cm
(1:5)
0
(その他)
15cm
(1:3)

66
67
68
69
70
71
7A XVd層（72～82）
0 (72) 25cm (1:5)
0 (その他) 15cm (1:3)
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82

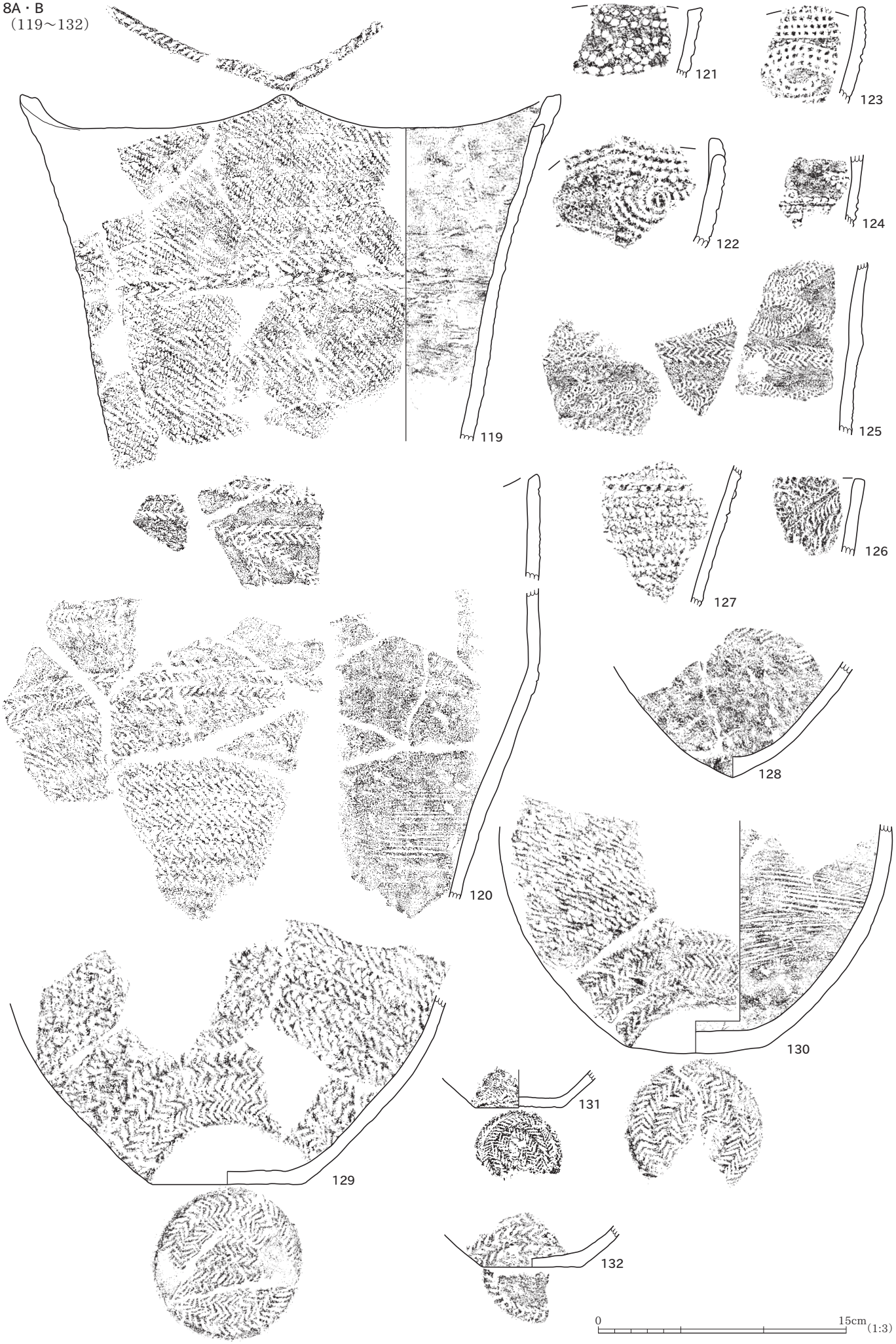
7B1・2（83～93）



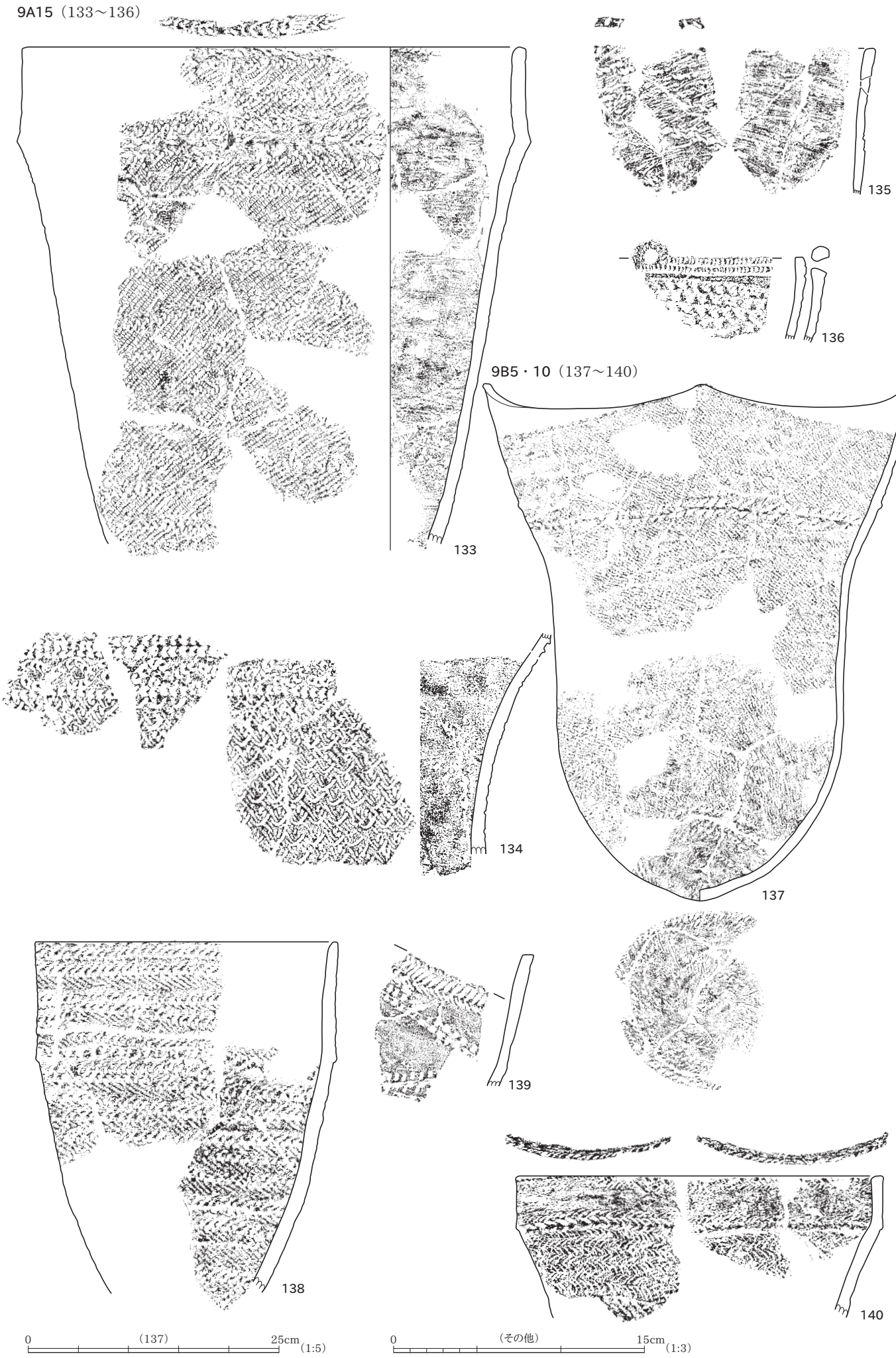
7A・B（94～118）


94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
0
15cm
(1:3)

8A・B
（119～132）

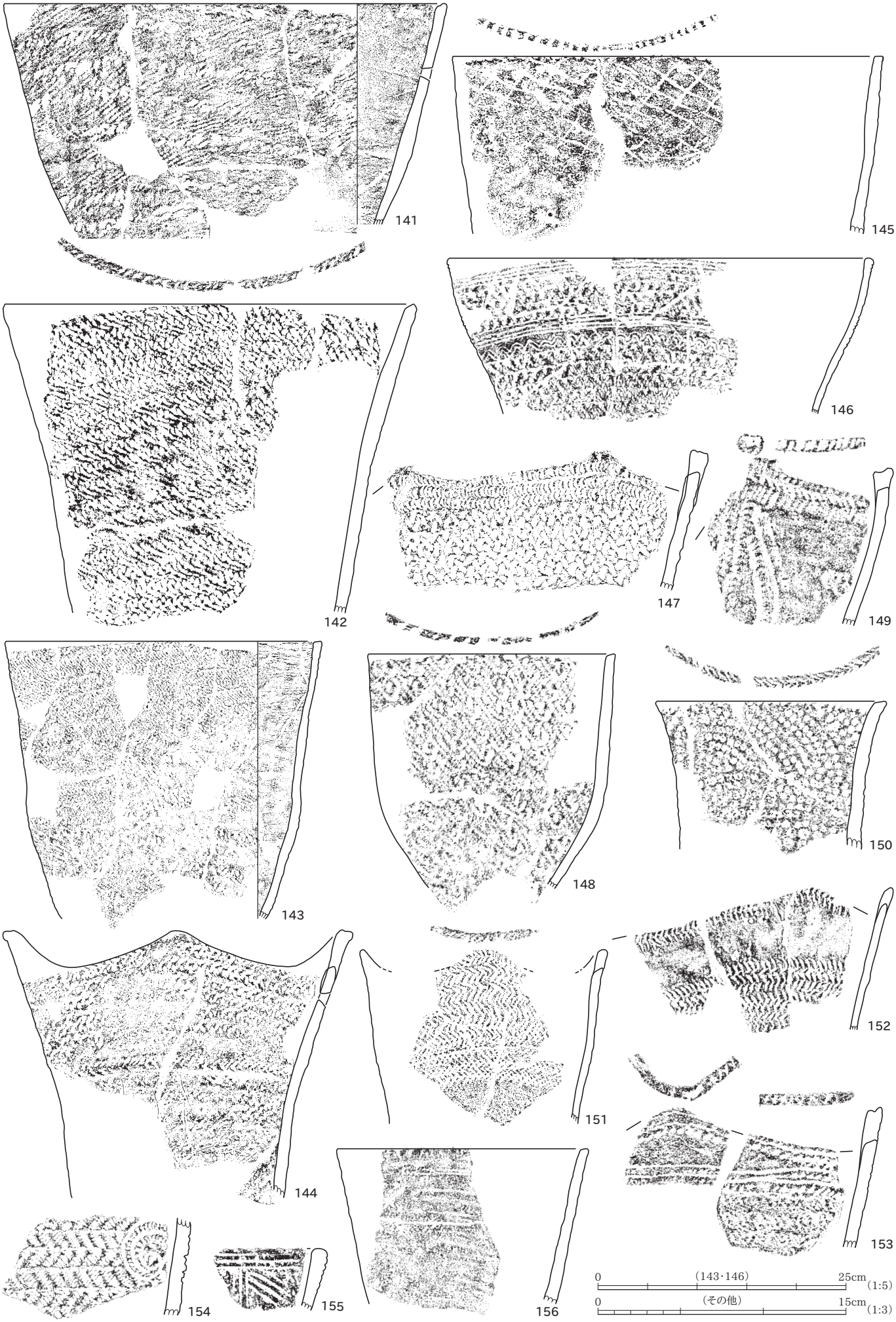


9A15（133～136）

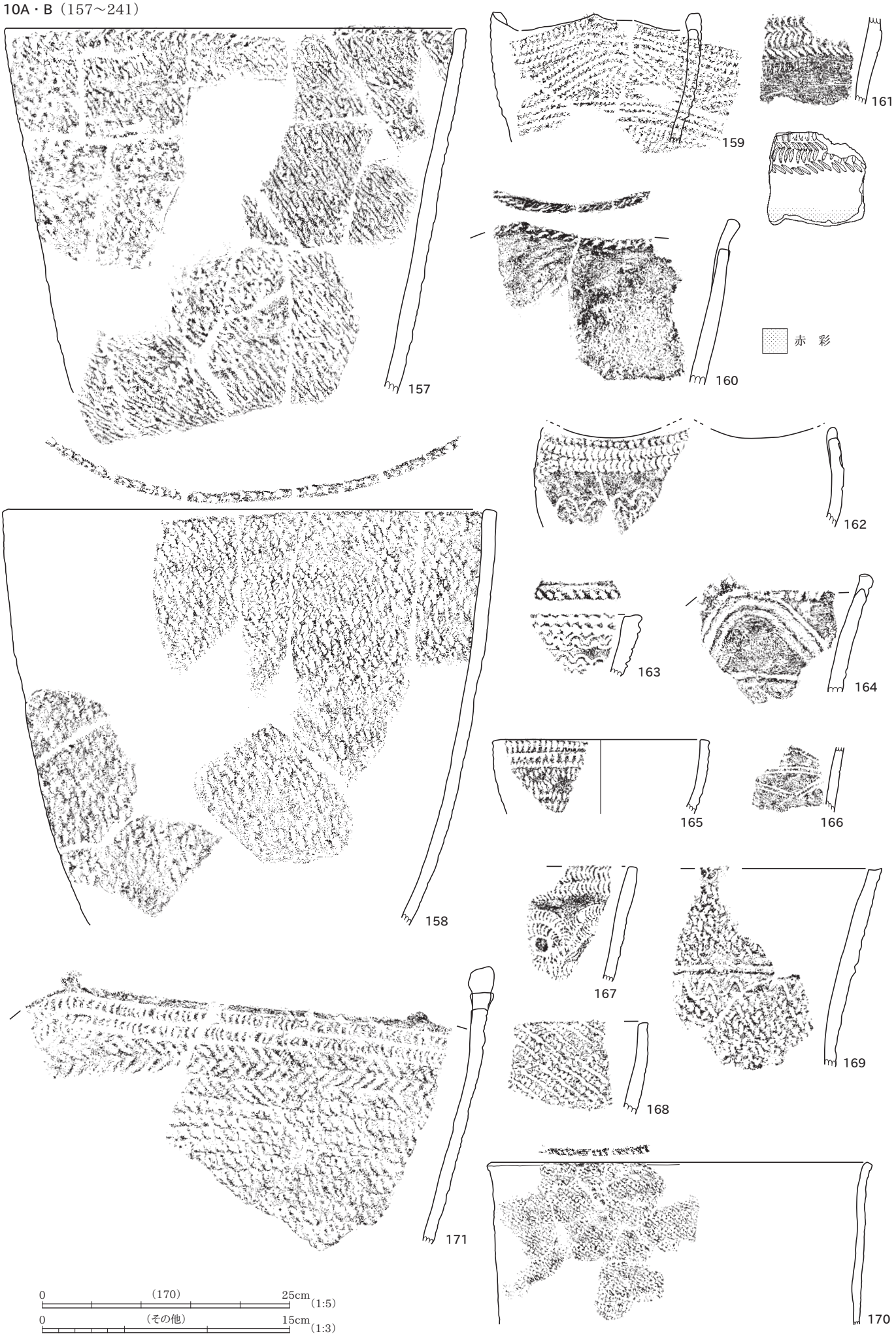


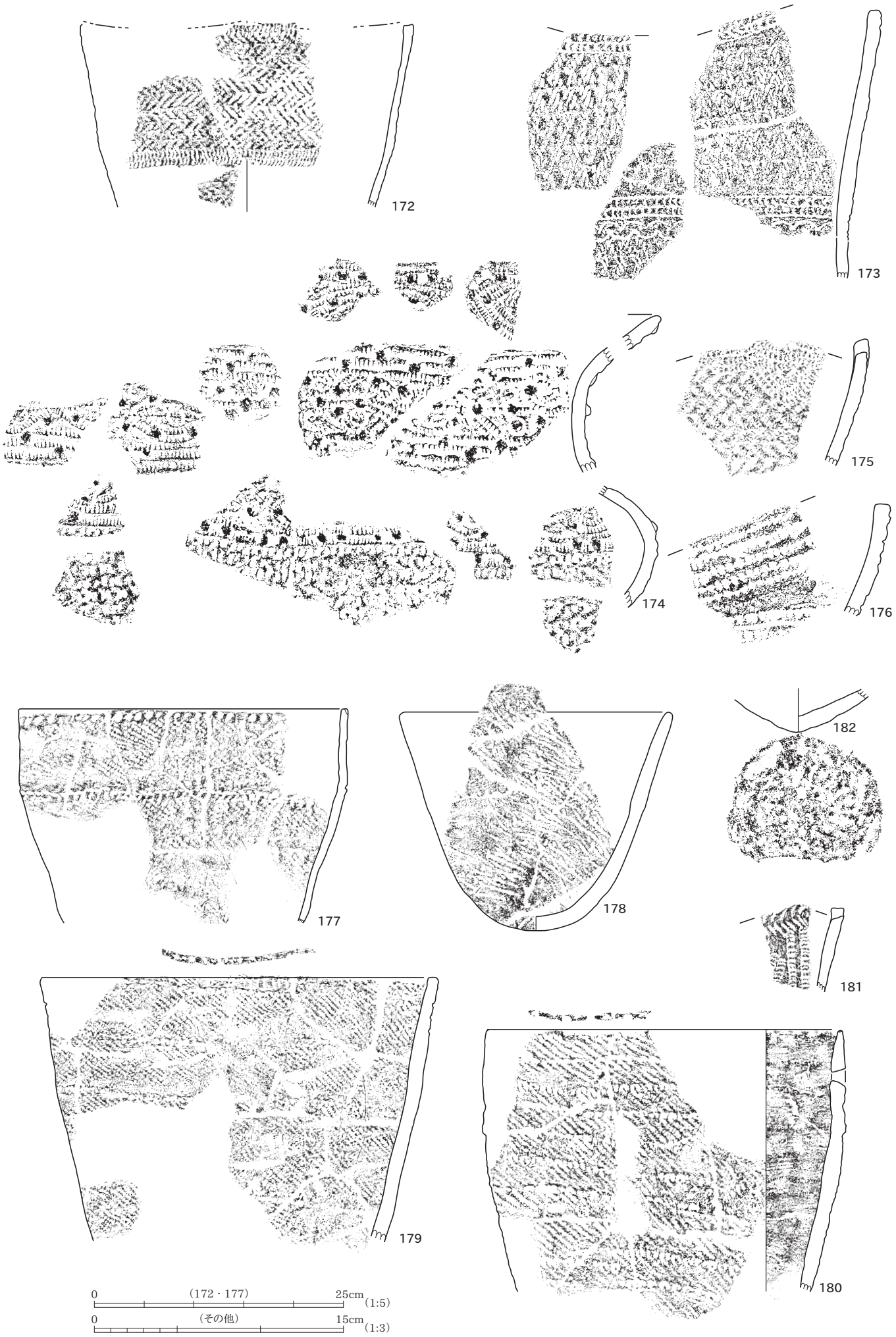
9B5・10（137～140）

9A・B（141～156）

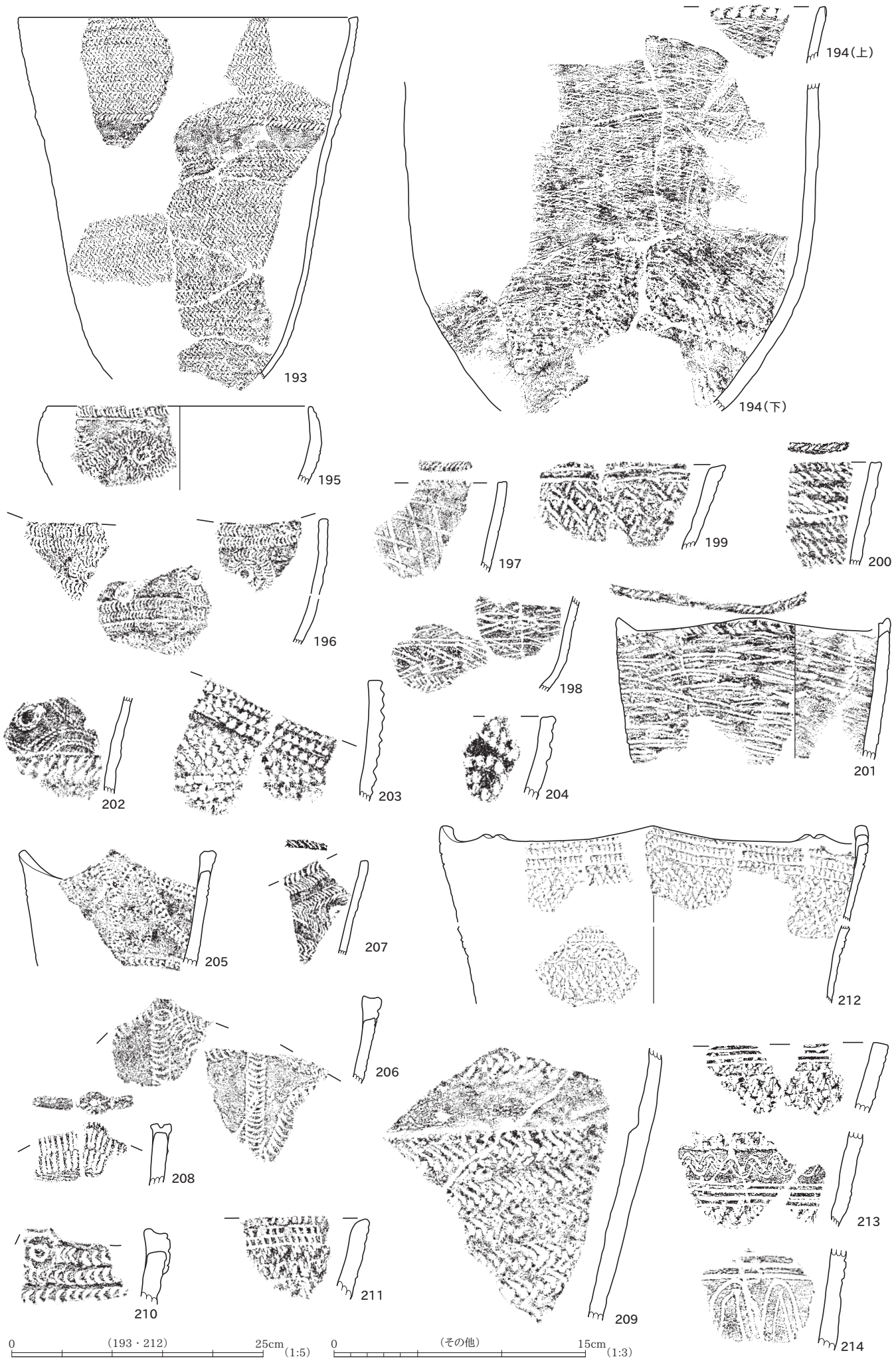

141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
0
(143・146)
25cm
(1:5)
0
(その他)
15cm
(1:3)

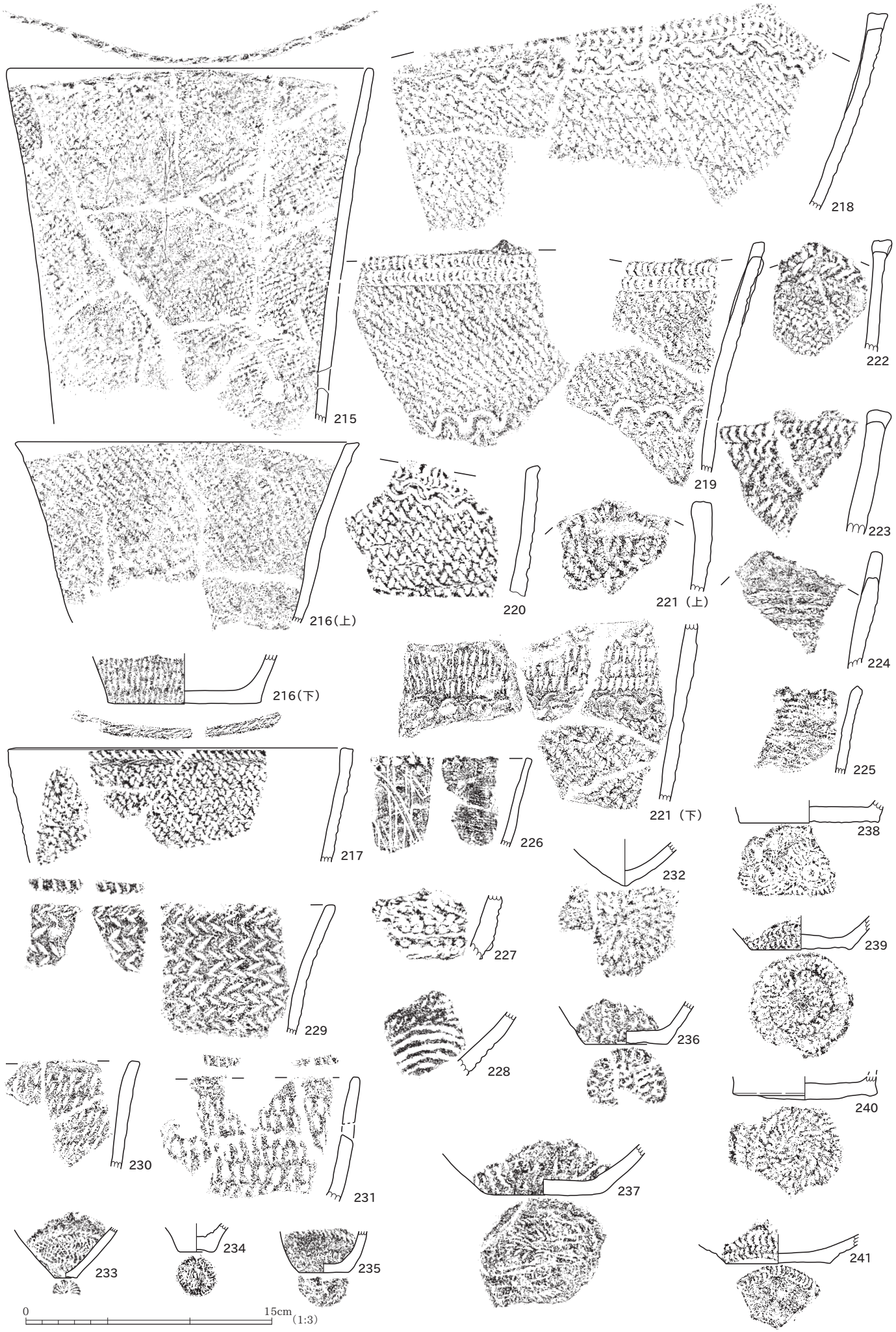
10A・B（157～241）


157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
赤 彩
0 (170) 25cm (1:5)
0 (その他) 15cm (1:3)

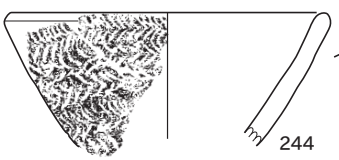

172
173
175
174
176
177
178
182
181
179
180
0
(172・177)
25cm
(1:5)
0
(その他)
15cm
(1:3)

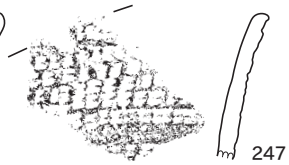
183
184
185(上)
185(下)
186
187
188
189
190
191
192
0 (188・189・190・191) 25cm (1:5)
0 (その他) 15cm (1:3)

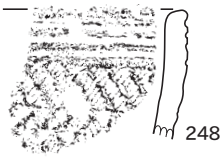

193
194(上)
194(下)
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
0
(193・212)
25cm
(1:5)
0
(その他)
15cm
(1:3)

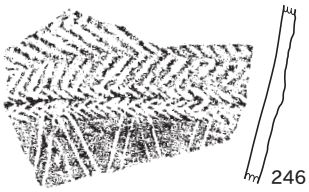

215
216(上)
216(下)
217
218
219
220
221（上）
221（下）
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
0
15cm
(1:3)

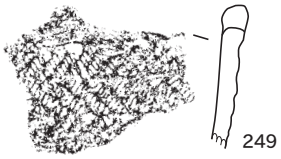
11A・B（242～249）

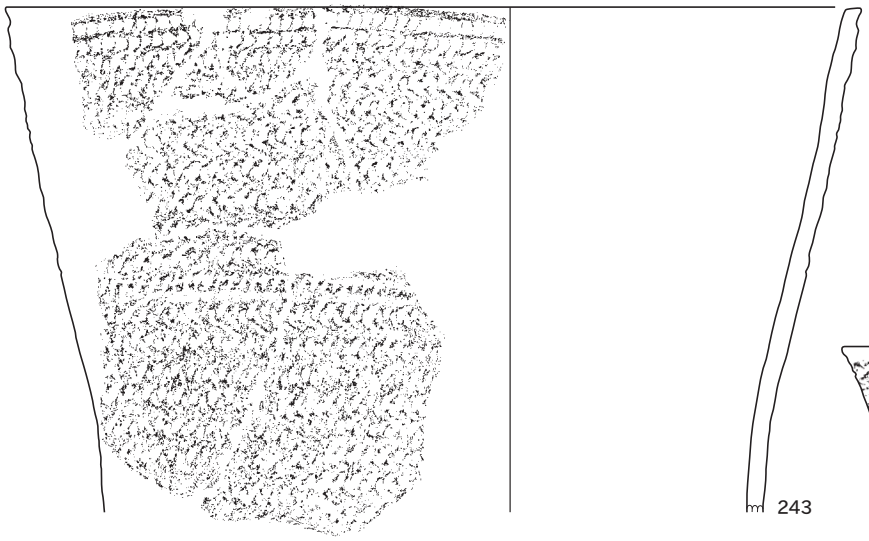


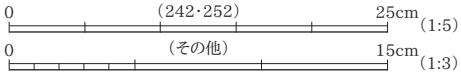


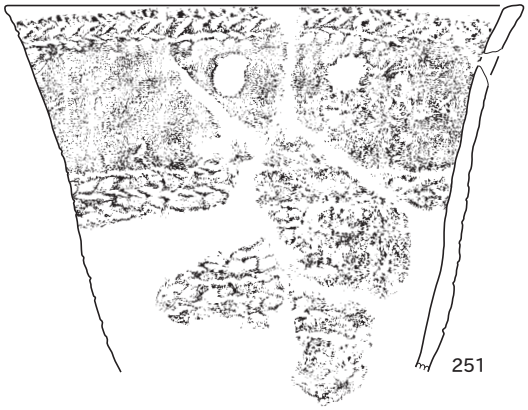




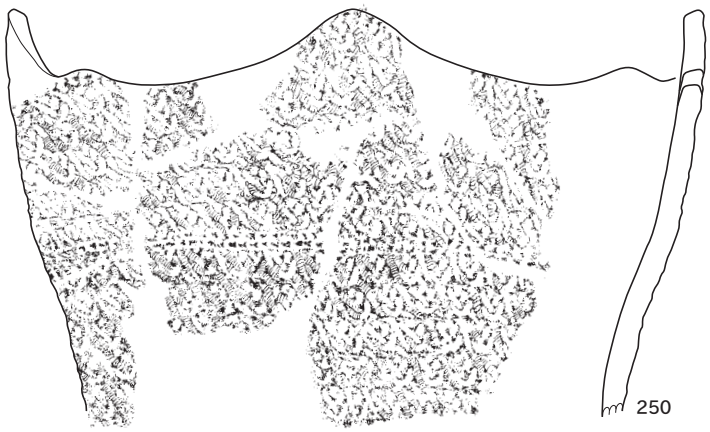


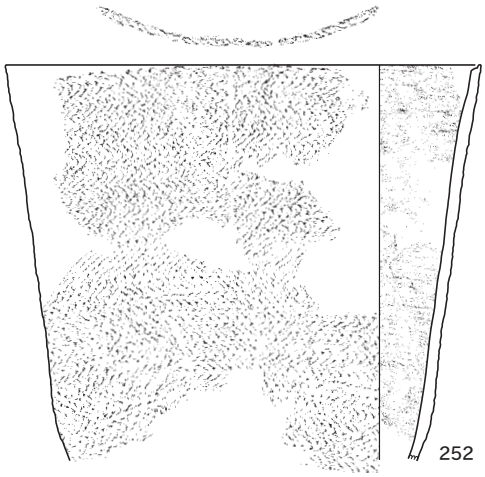


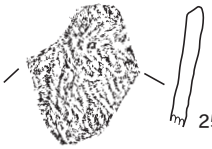


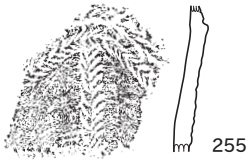


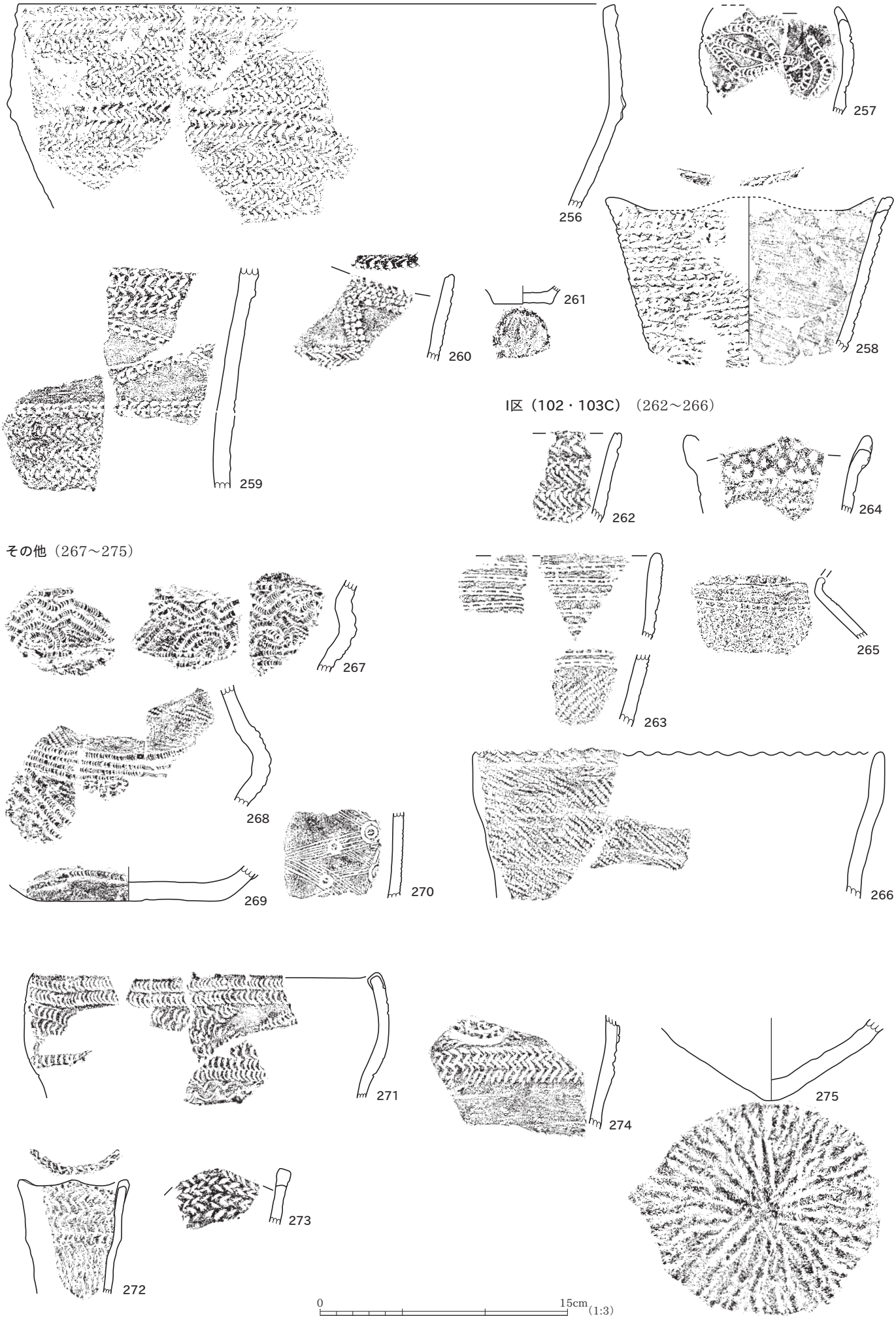
4C・D、5B・C・D（250～261）



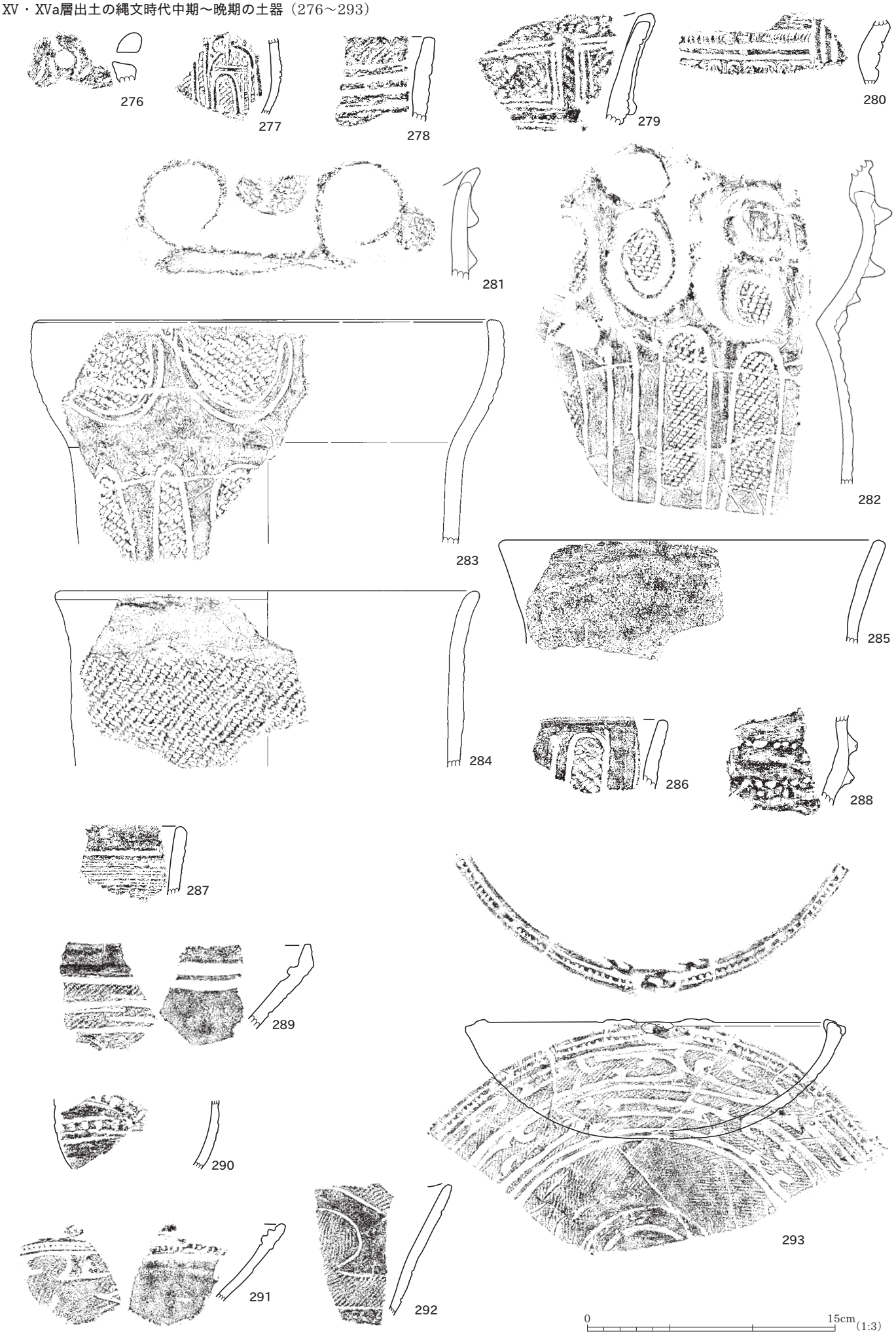




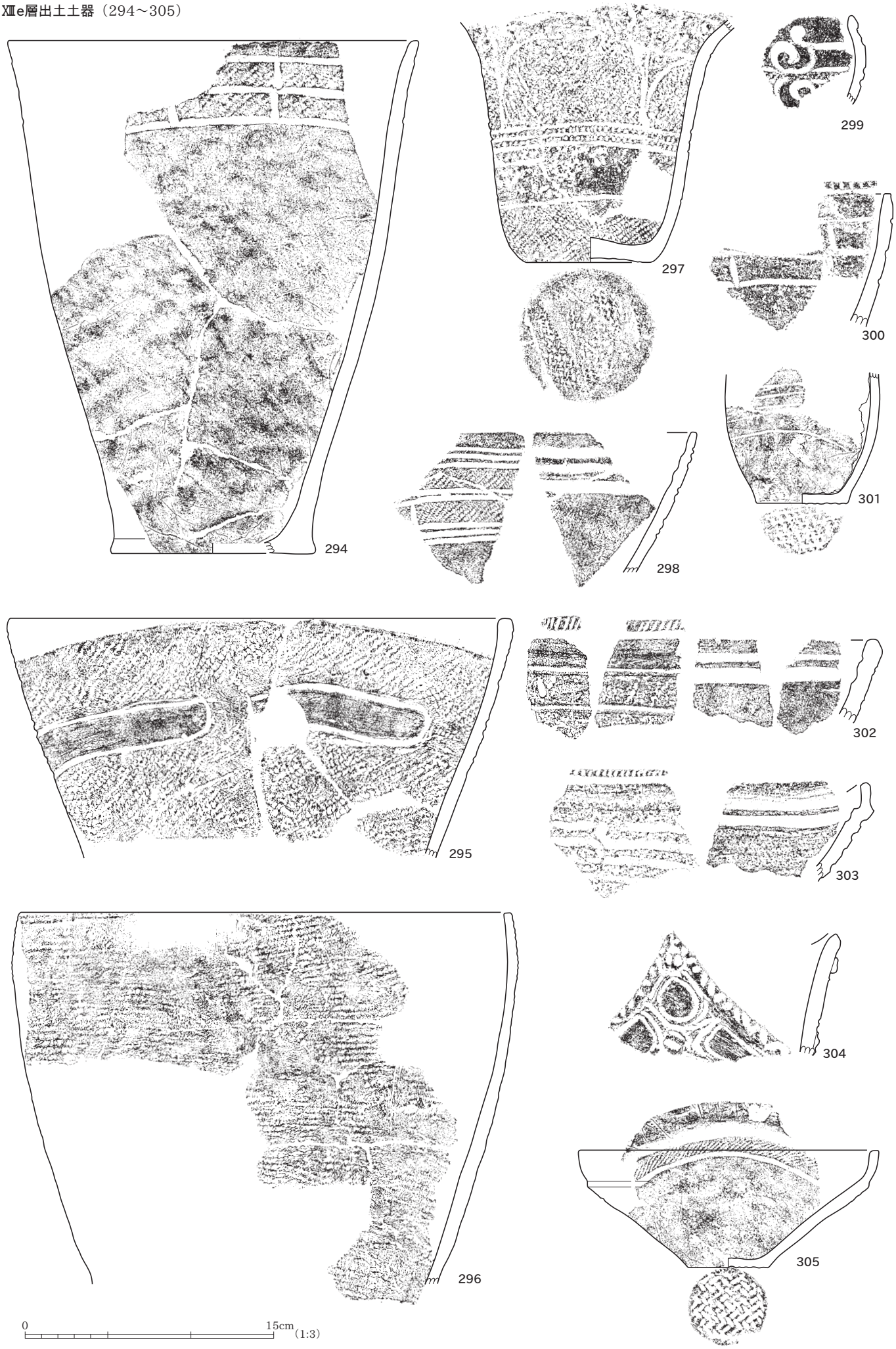



256
257
258
259
260
261
I区（102・103C）（262～266）
262
263
264
265
266
その他（267～275）
267
268
269
270
271
272
273
274
275
0
15cm
(1:3)

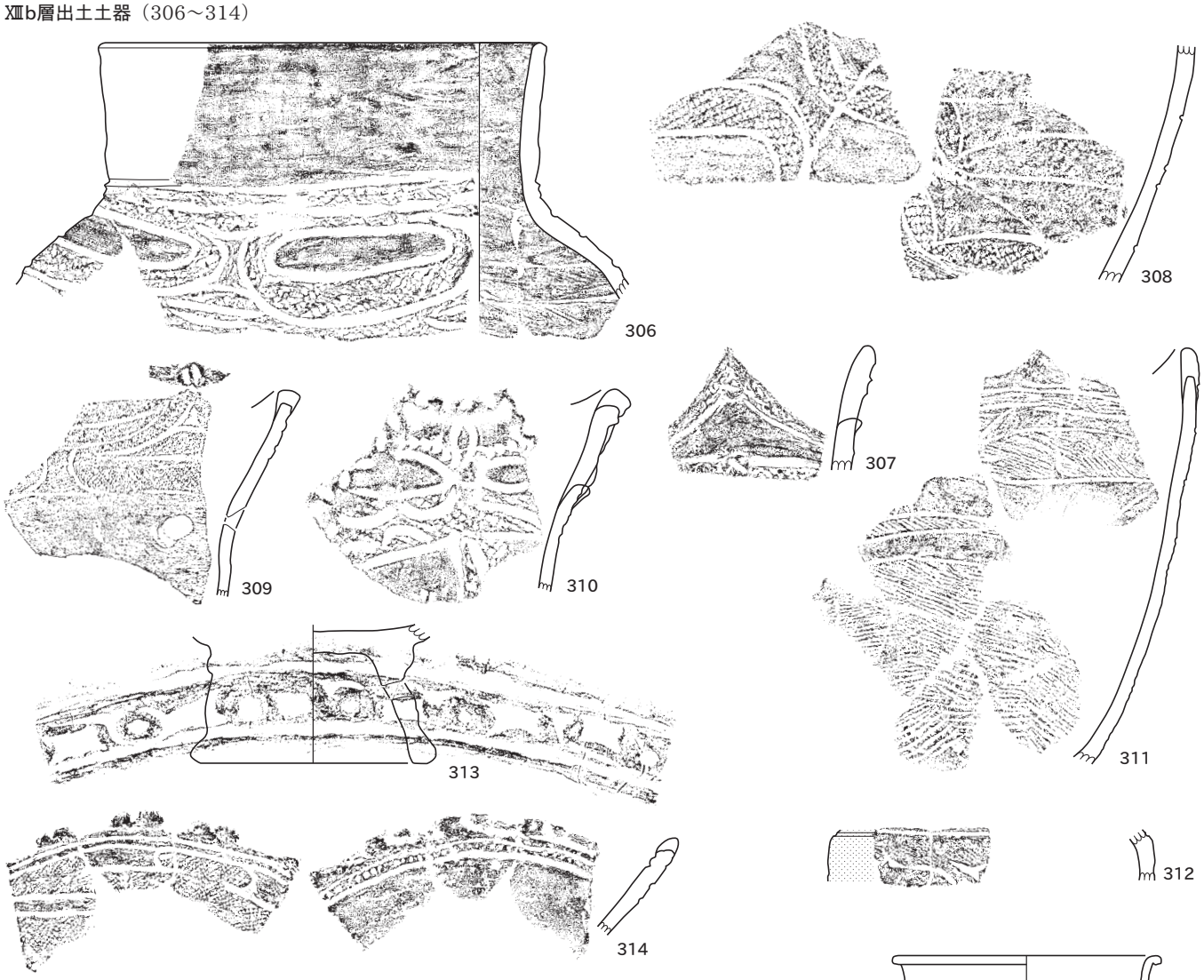
XV・XVa層出土の縄文時代中期～晩期の土器（276～293）



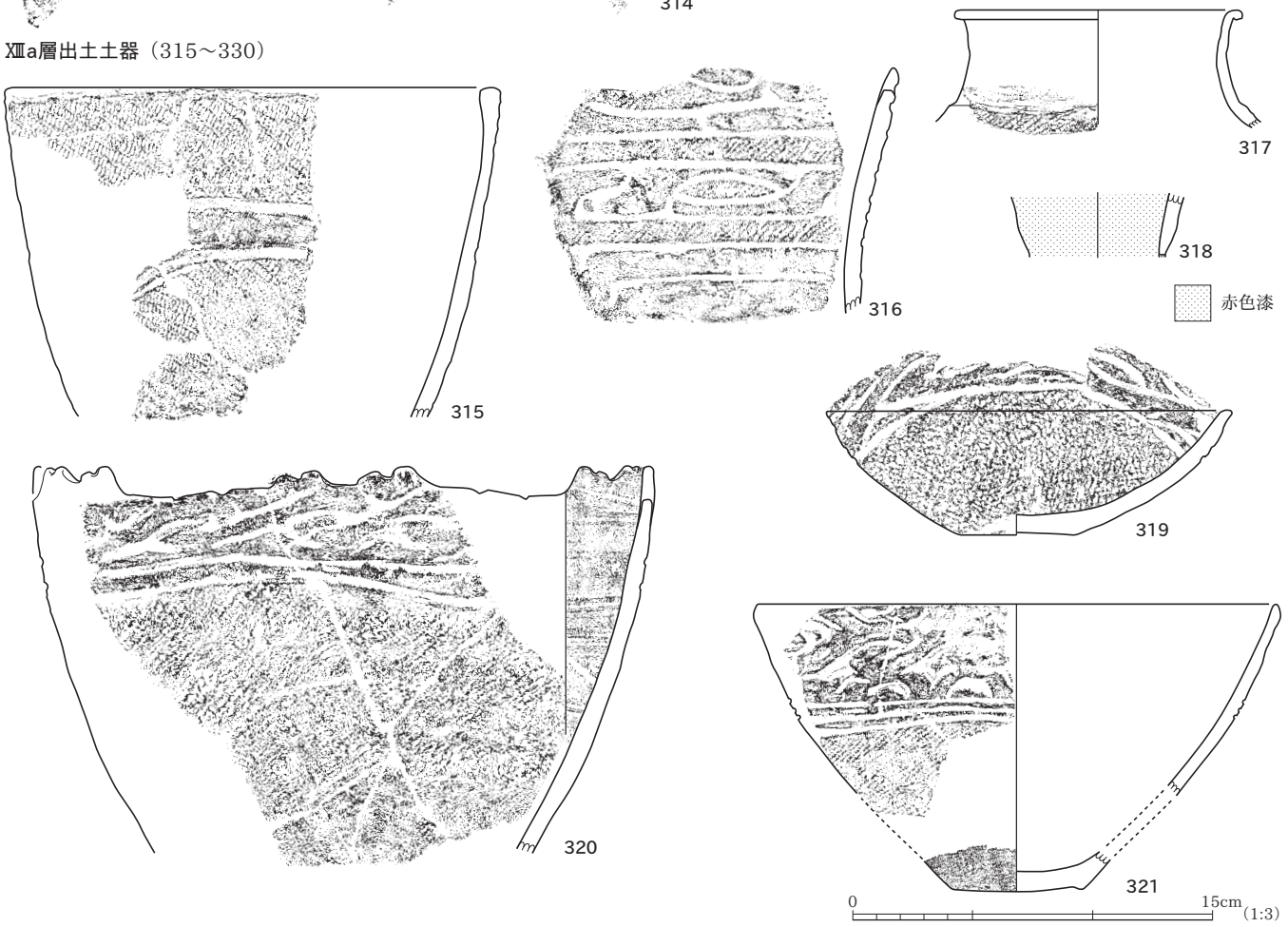
XIIIe層出土土器（294～305）

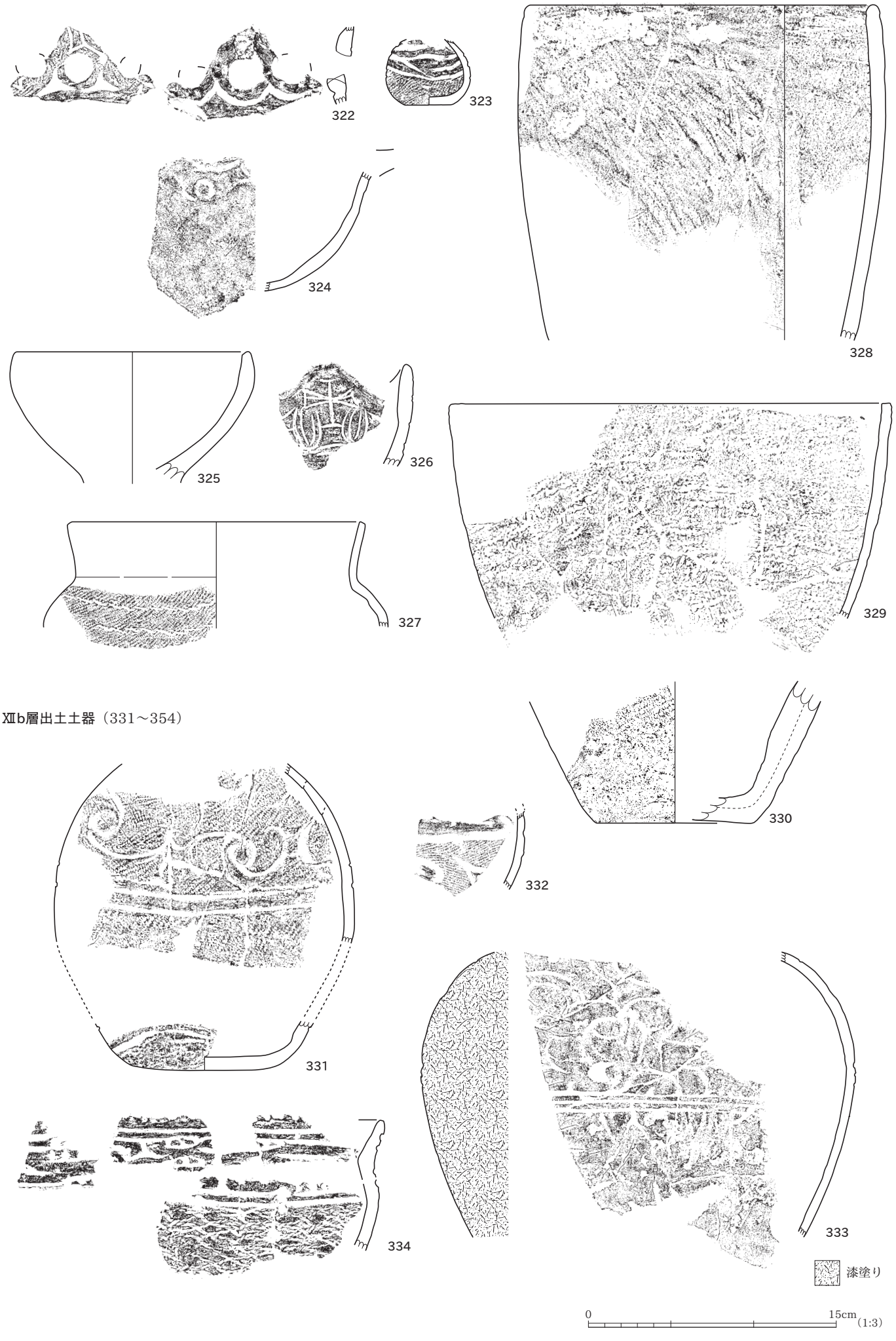


XIIIb層出土土器（306～314）

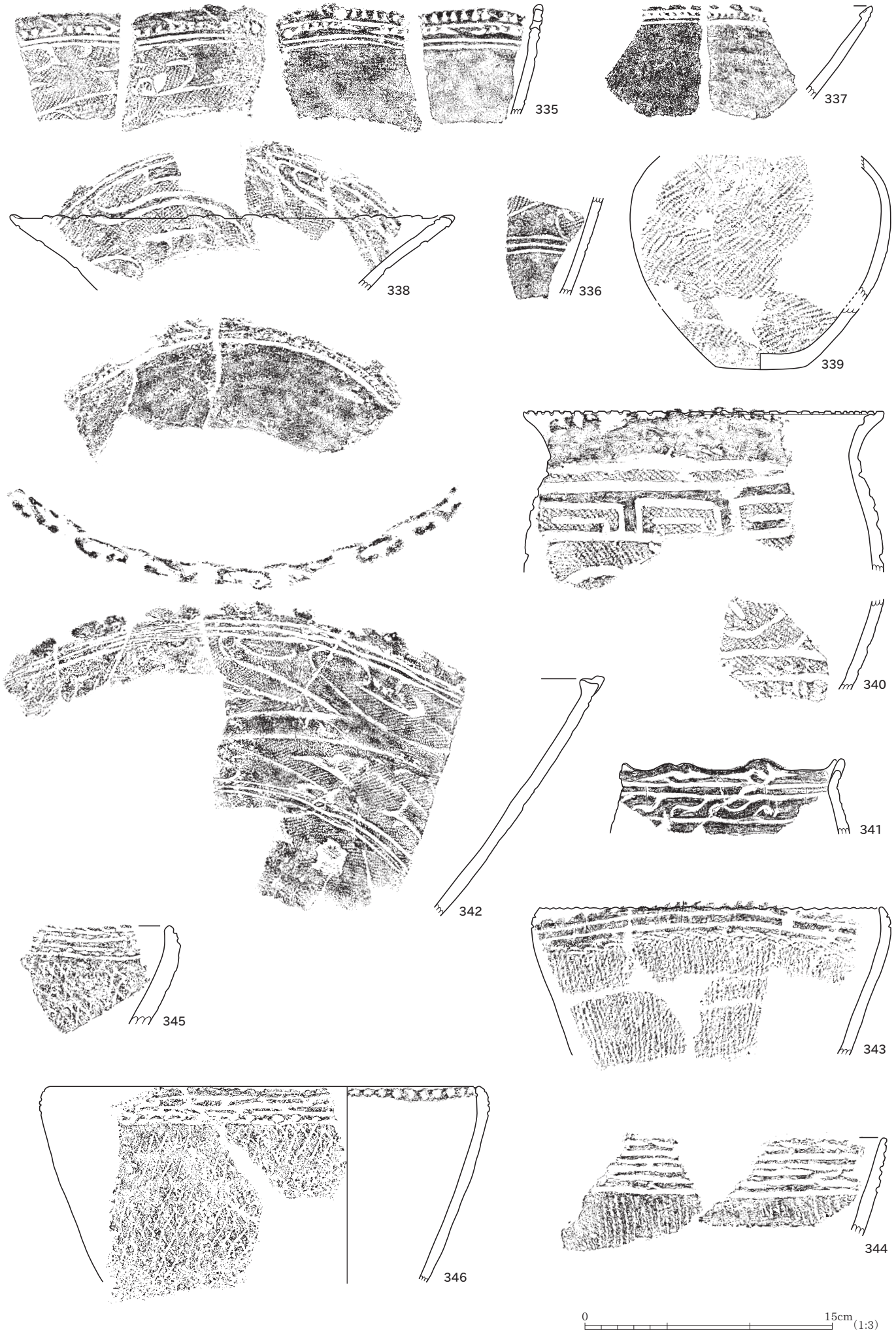


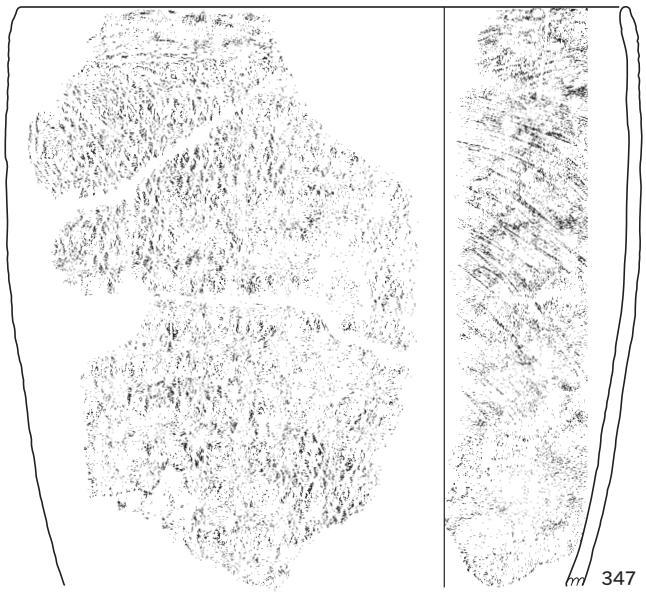
XIIIa層出土土器（315～330）

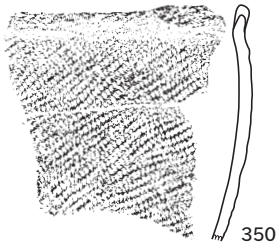


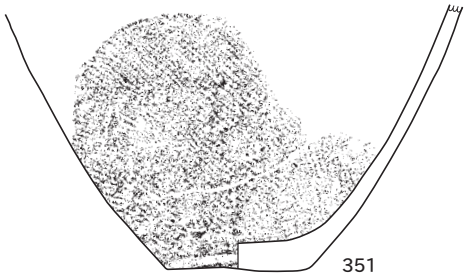


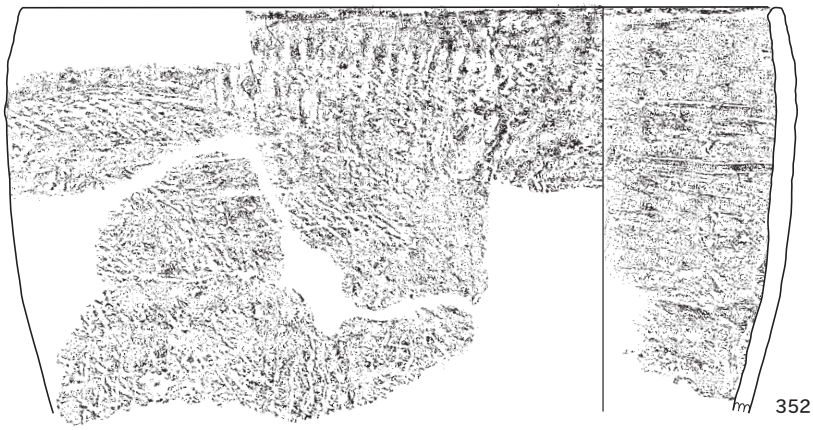
XIIb層出土土器（331～354）

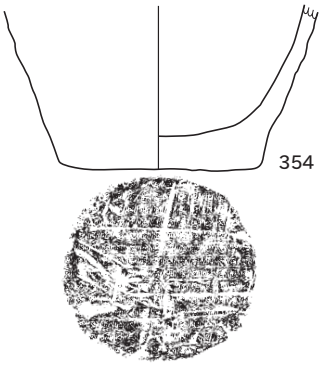

335
337
338
336
339
340
341
342
343
344
345
346
0
15cm
(1:3)

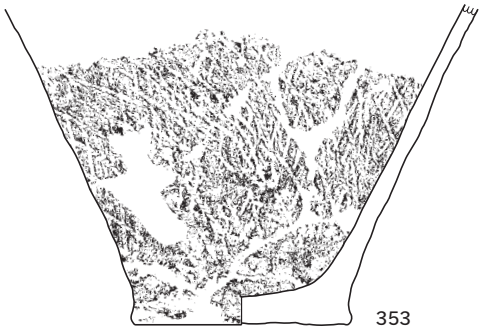








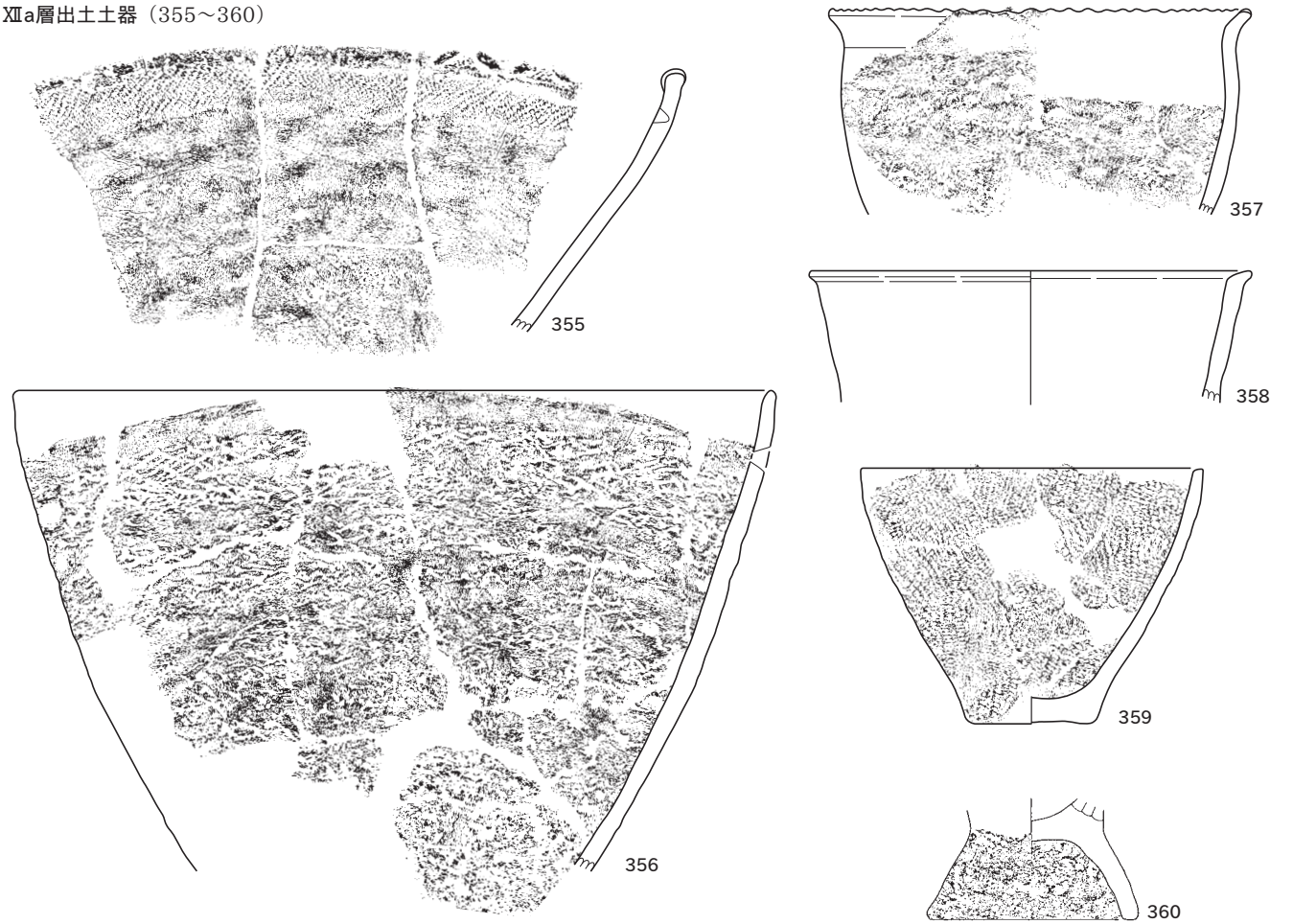




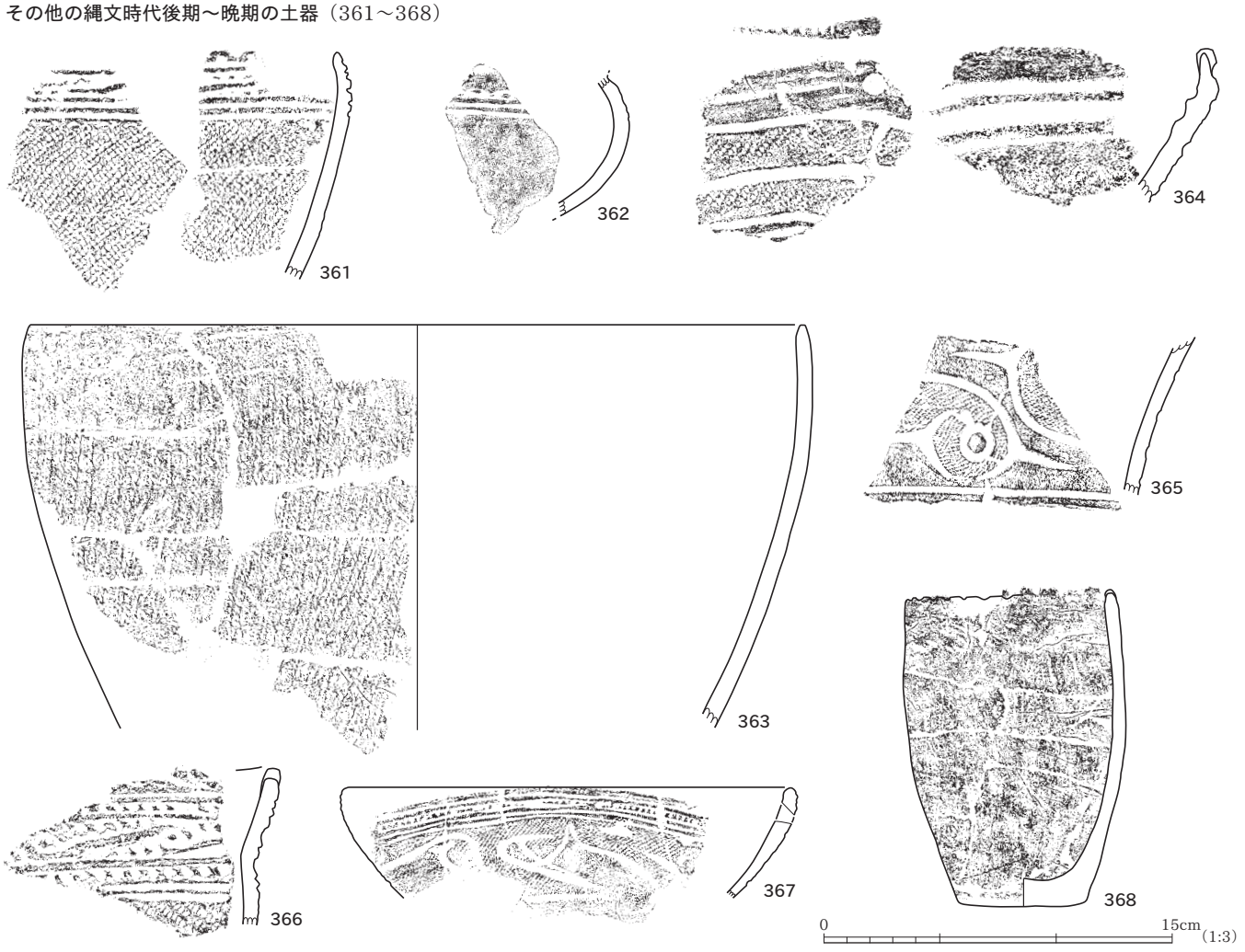
0 (347) 25cm (1:5)

0 (その他) 15cm (1:3)

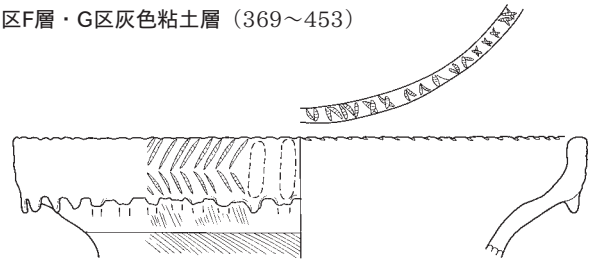
XⅡa層出土土器（355～360）

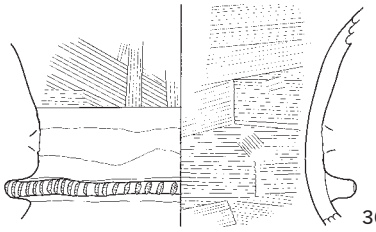


その他の縄文時代後期～晩期の土器（361～368）

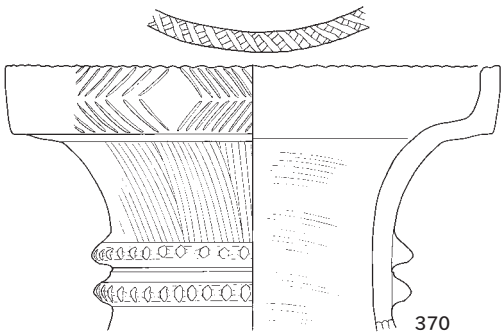


D区F層・G区灰色粘土層（369～453）

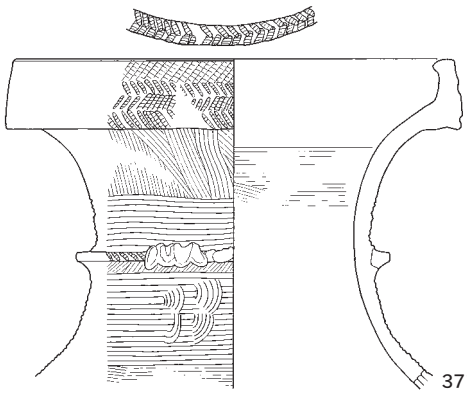




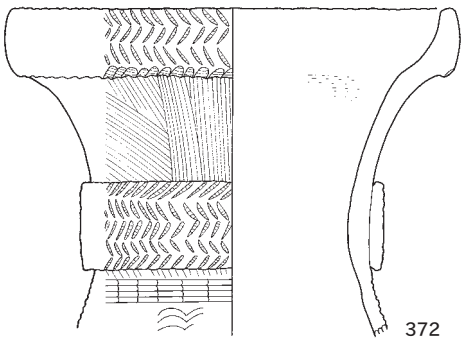
369



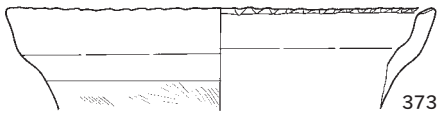
370



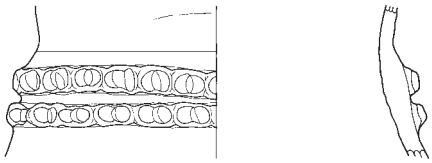
371



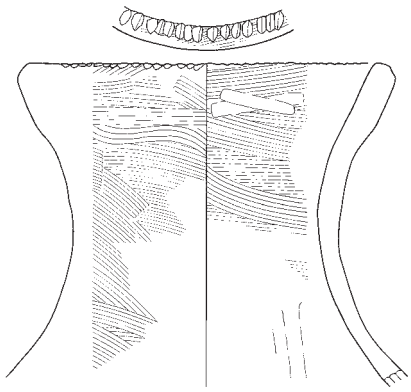
372



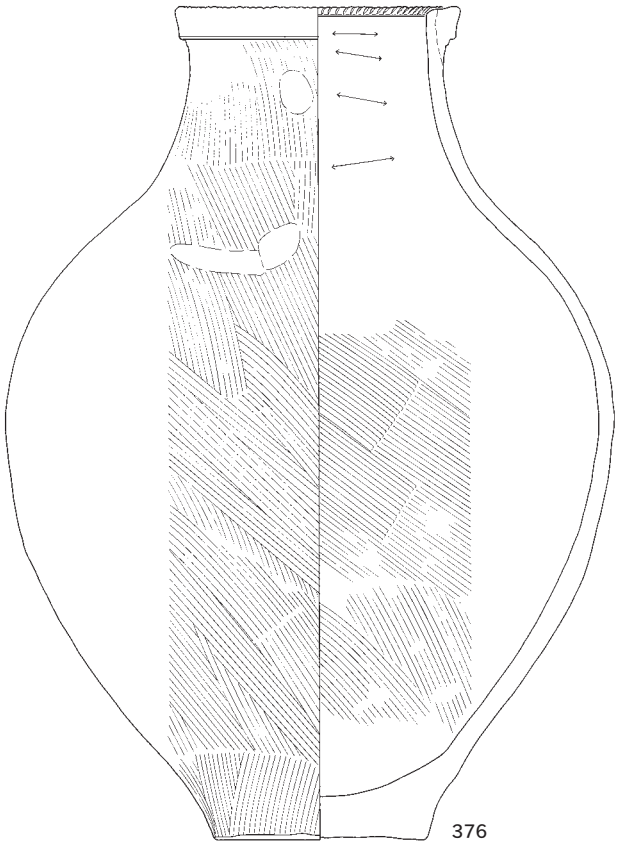
373



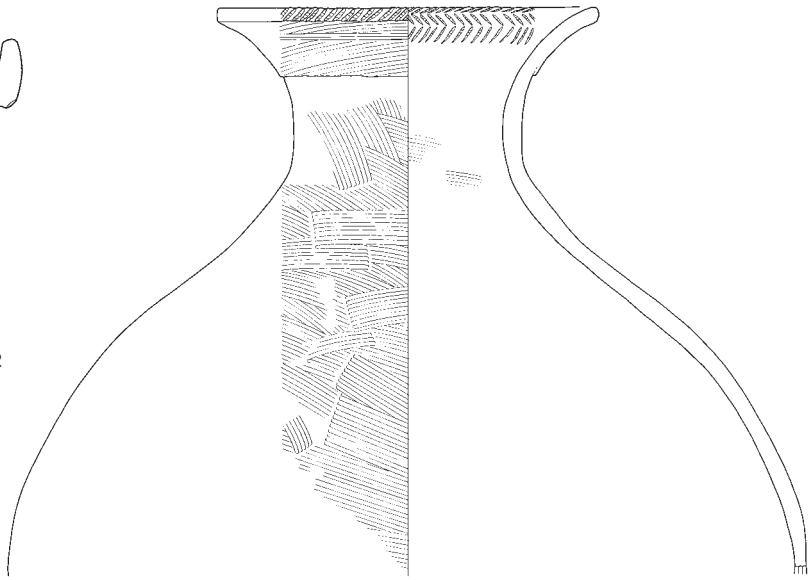
374



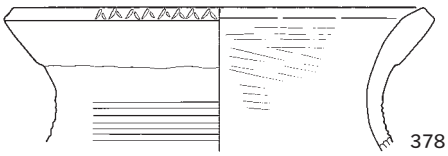
375



376



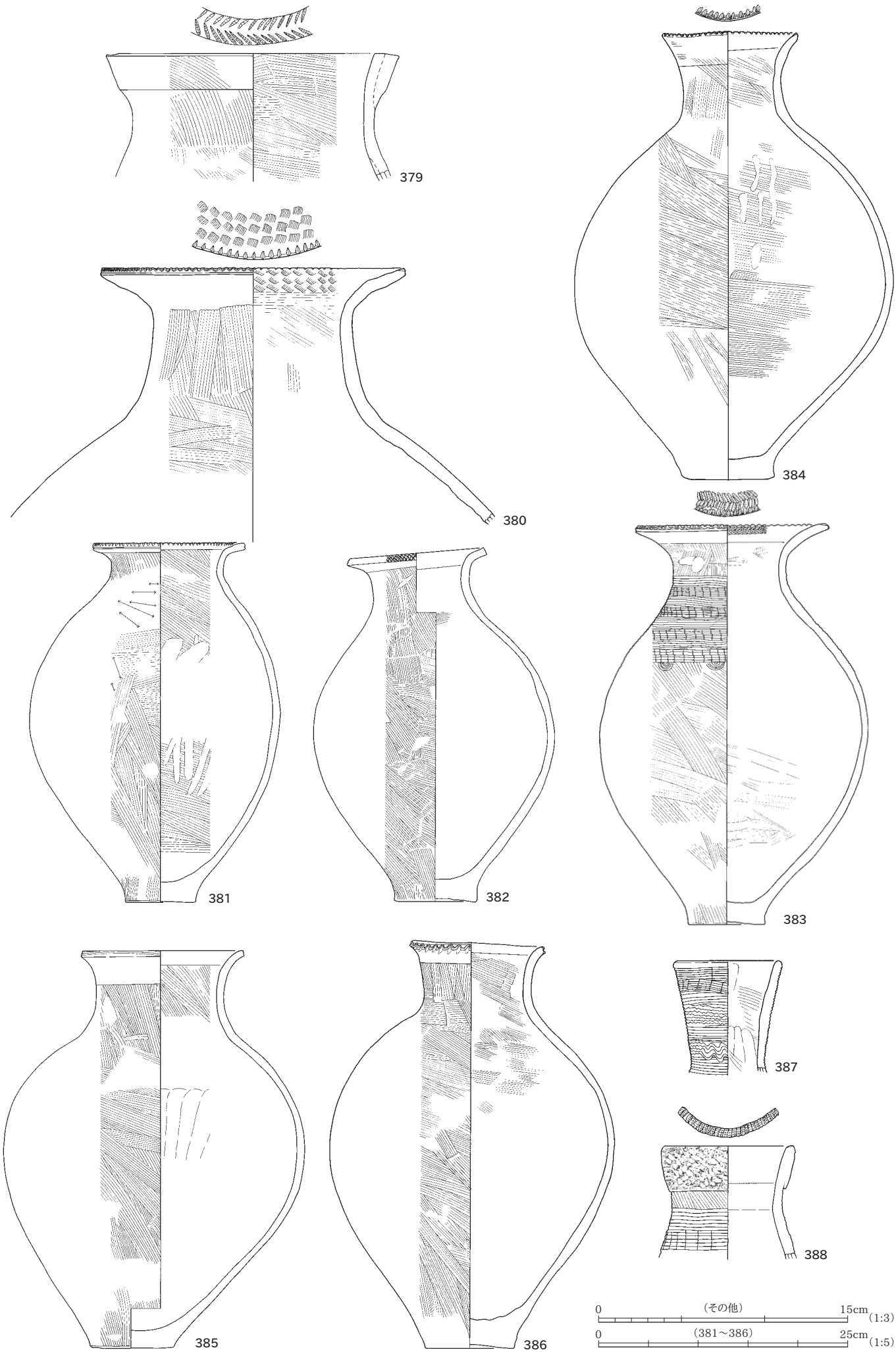
377

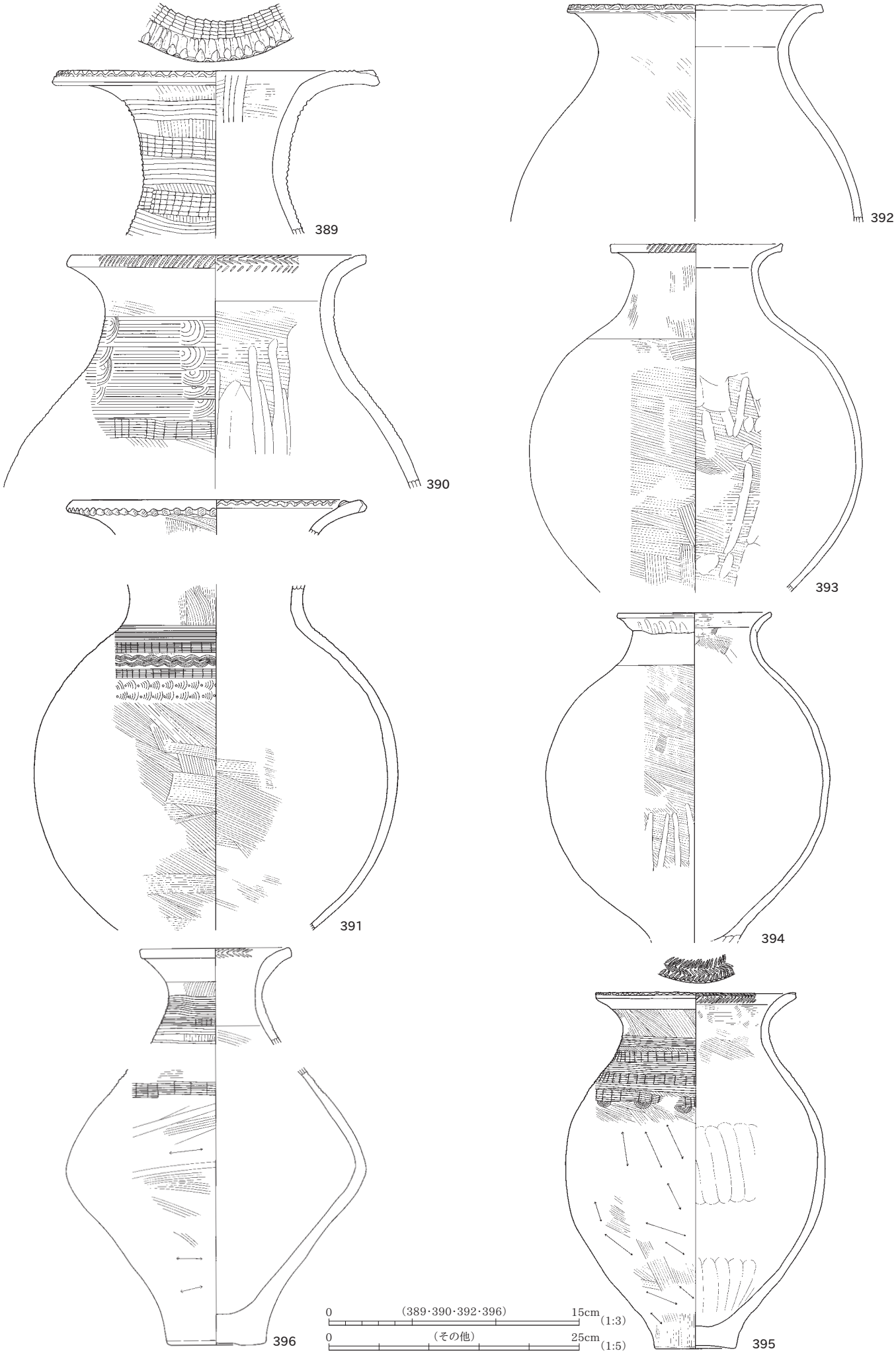


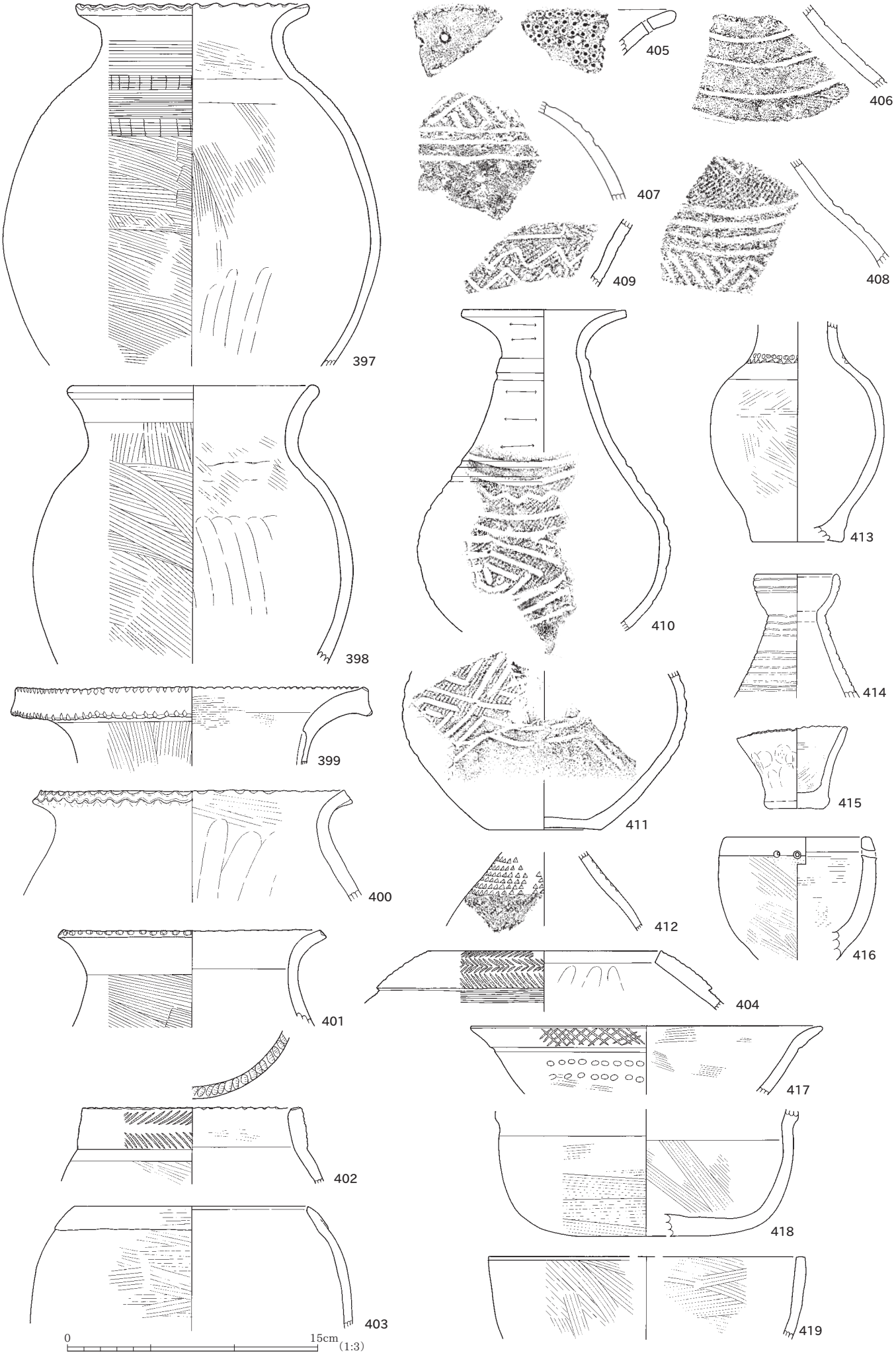
378

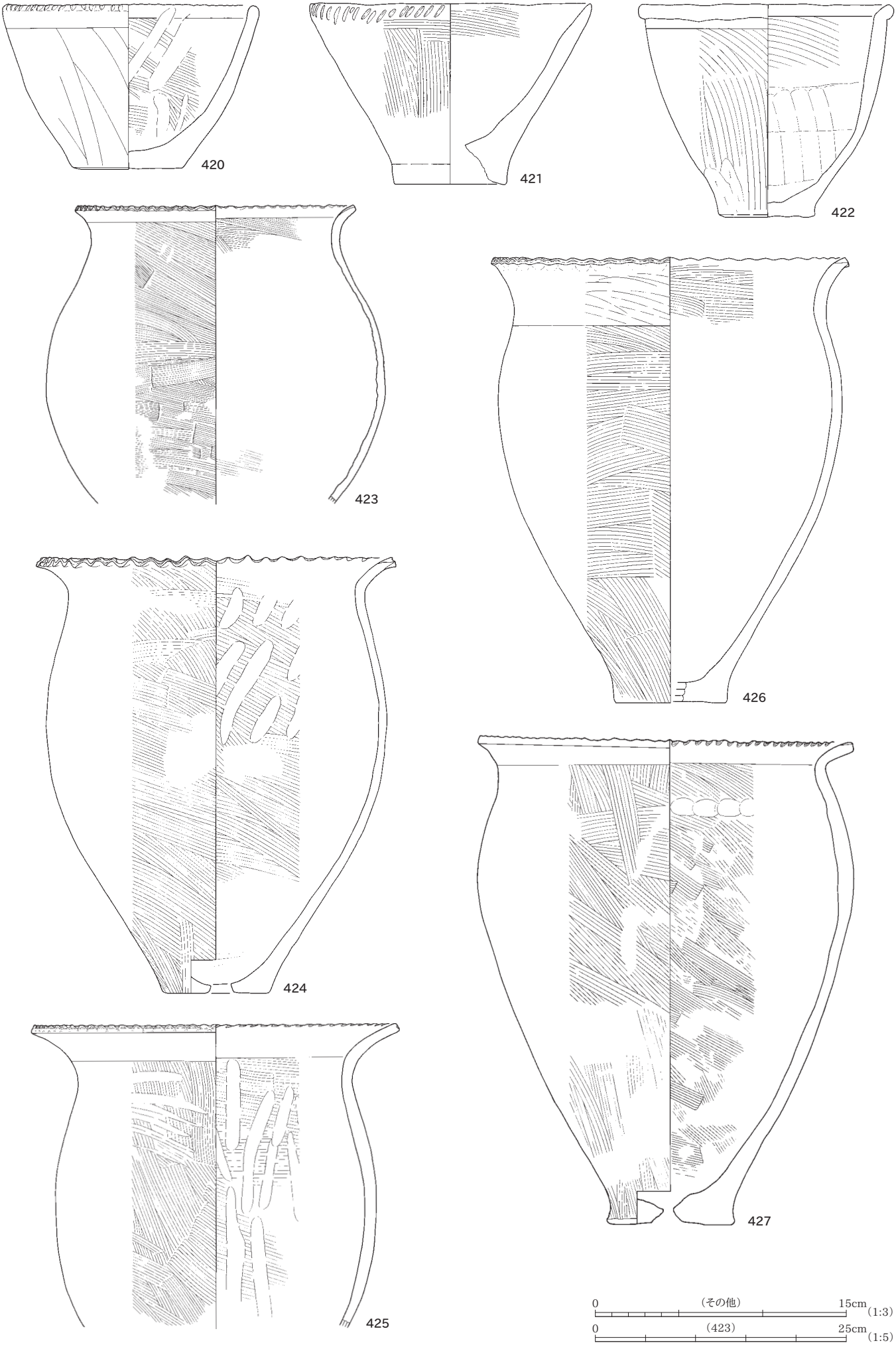
0　15cm（1:3）

土器（28） Ｄ区Ｆ層・Ｇ区灰色粘土層（2）

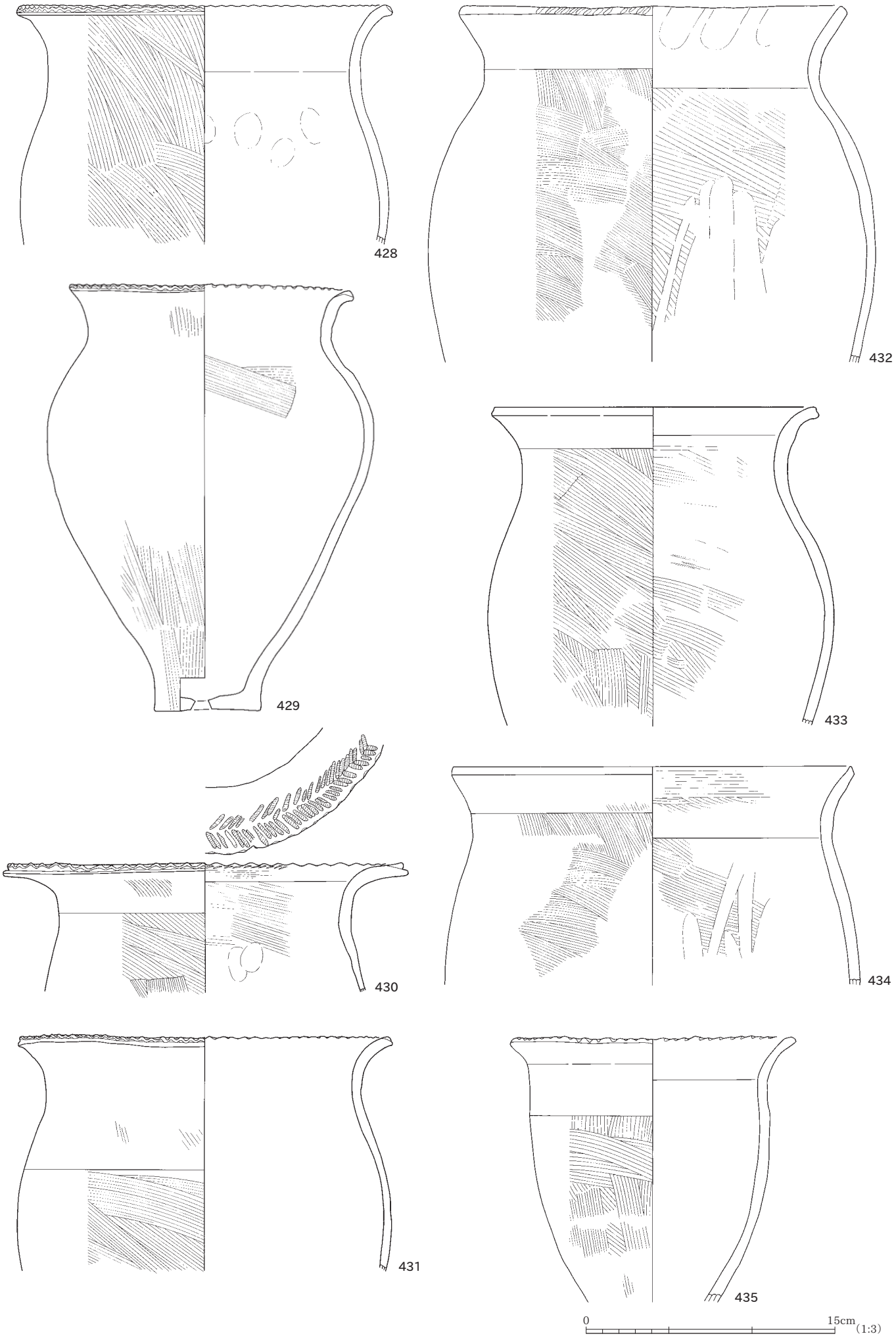


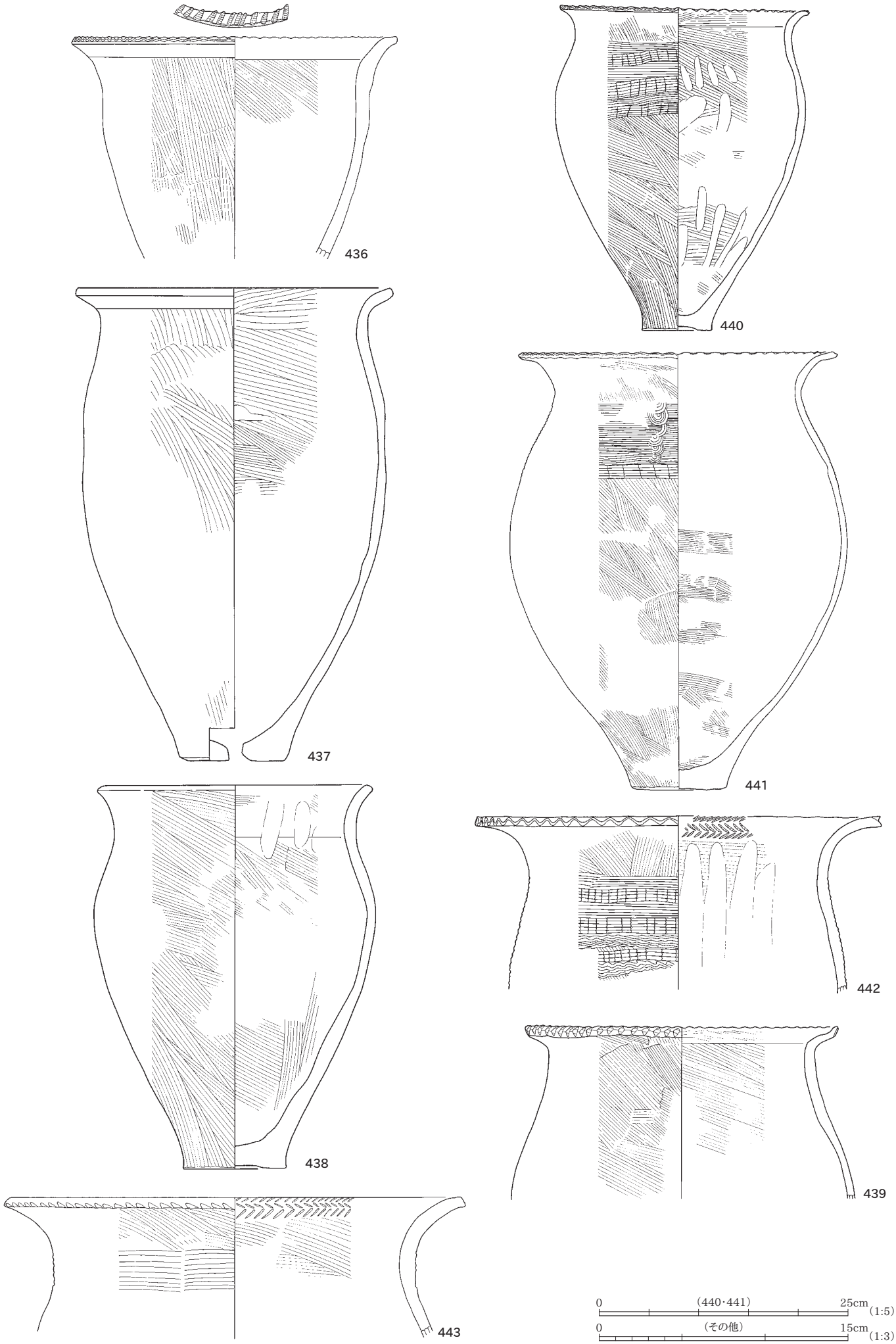

389
390
391
392
393
394
395
396
0 (389·390·392·396) 15cm (1:3)
0 (その他) 25cm (1:5)


397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
0
15cm
(1:3)

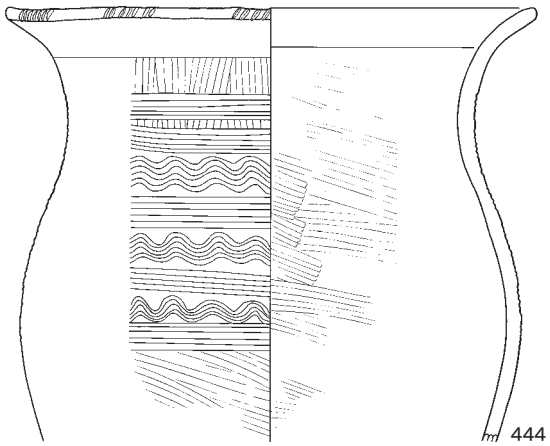

420
421
422
423
424
425
426
427
0
（その他）
15cm
(1:3)
0
（423）
25cm
(1:5)

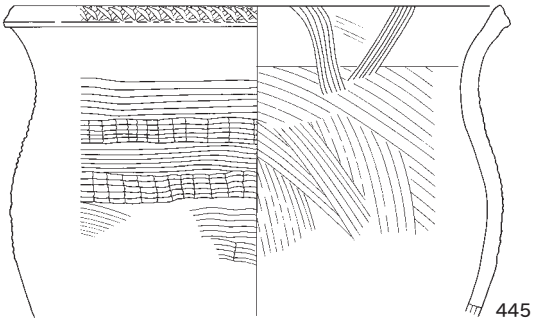
土器（32） Ｄ区Ｆ層・Ｇ区灰色粘土層（6）

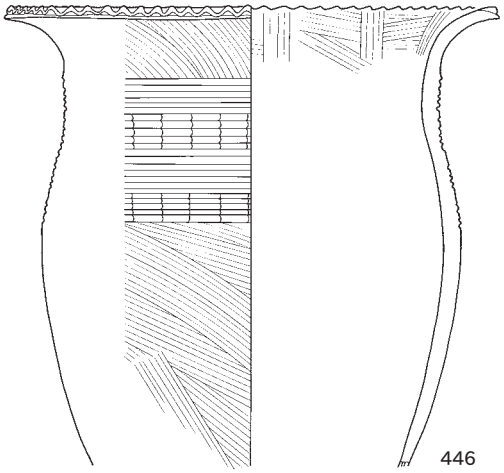


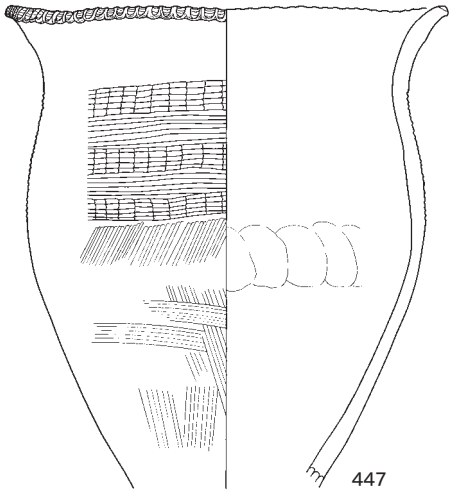

436
437
438
443
440
441
442
439
0
（440・441）
25cm
(1:5)
0
（その他）
15cm
(1:3)

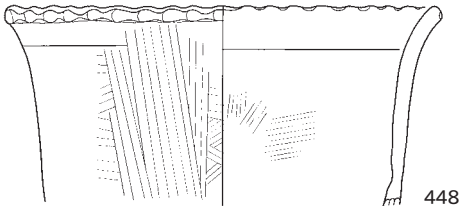
土器（34） Ｄ区Ｆ層・Ｇ区灰色粘土層（8）

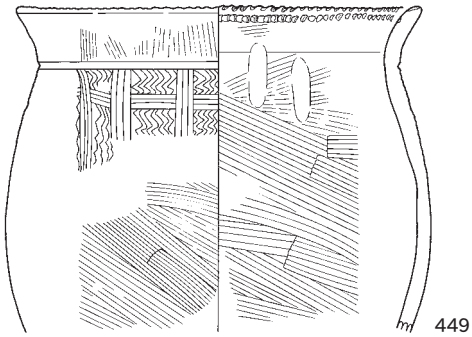


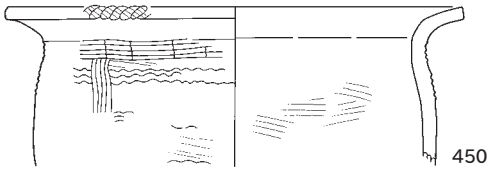


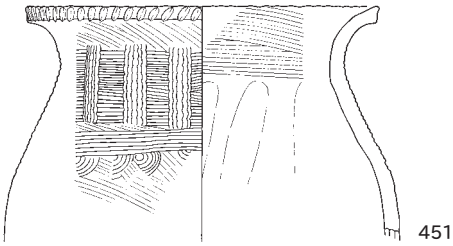


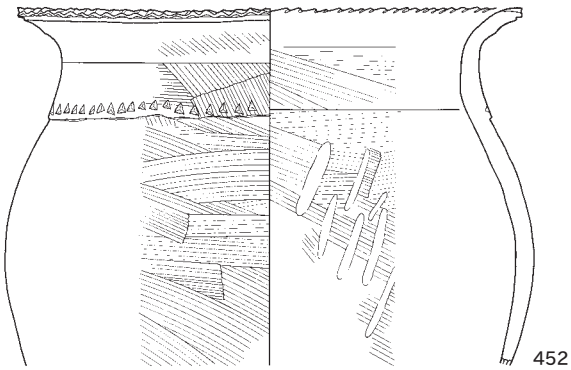


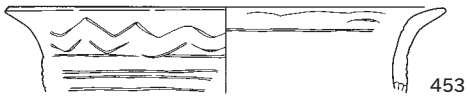






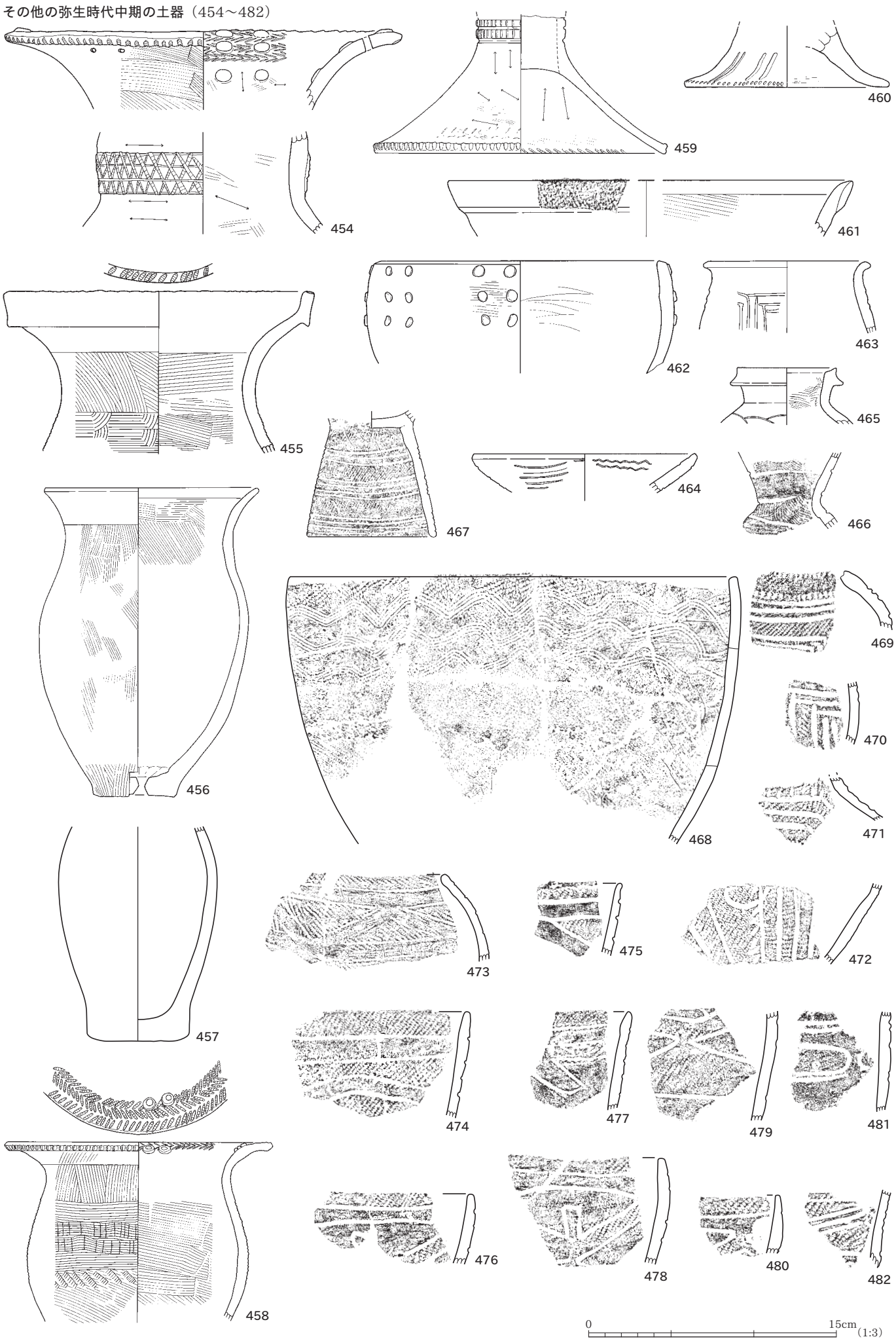




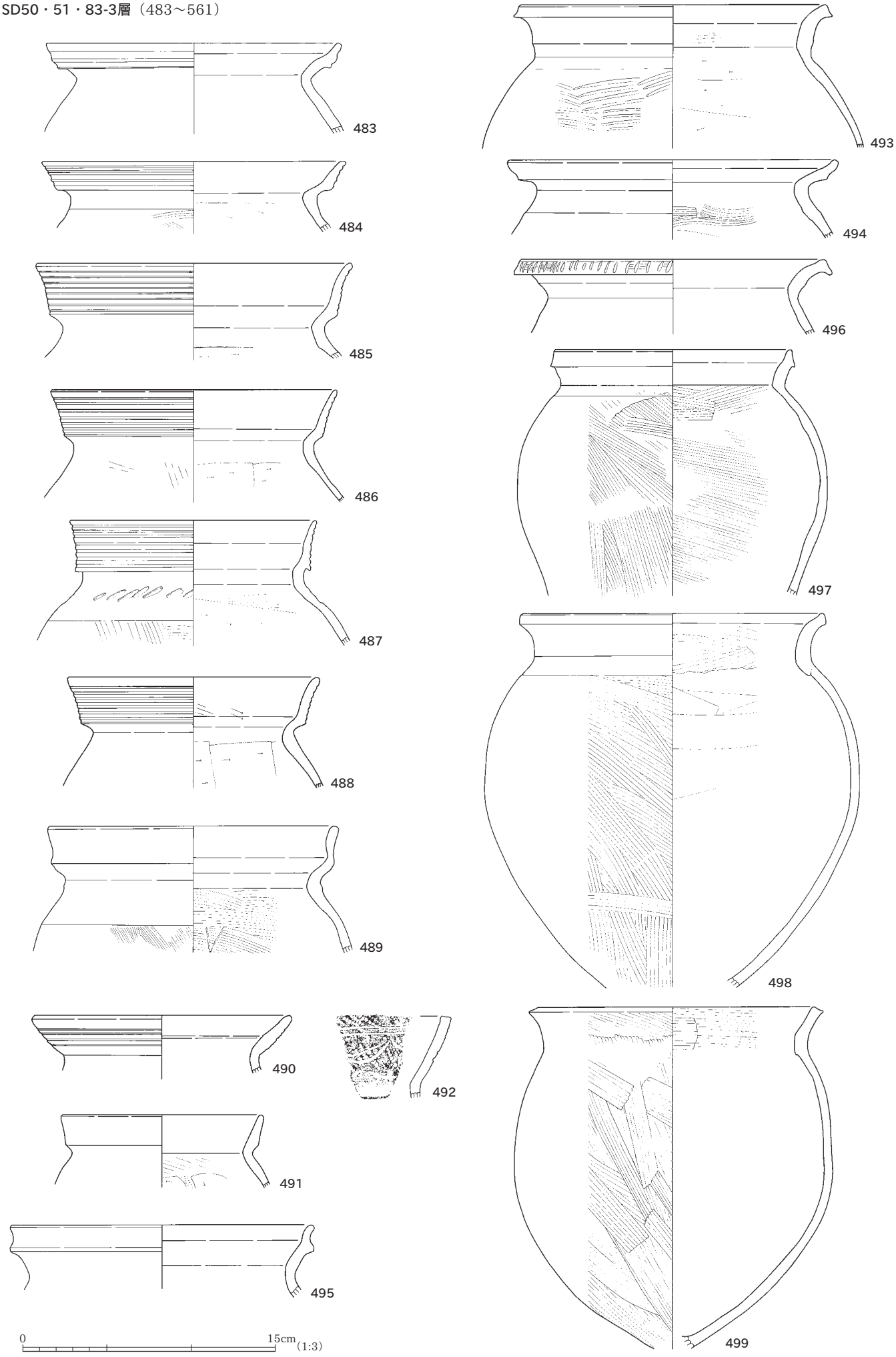


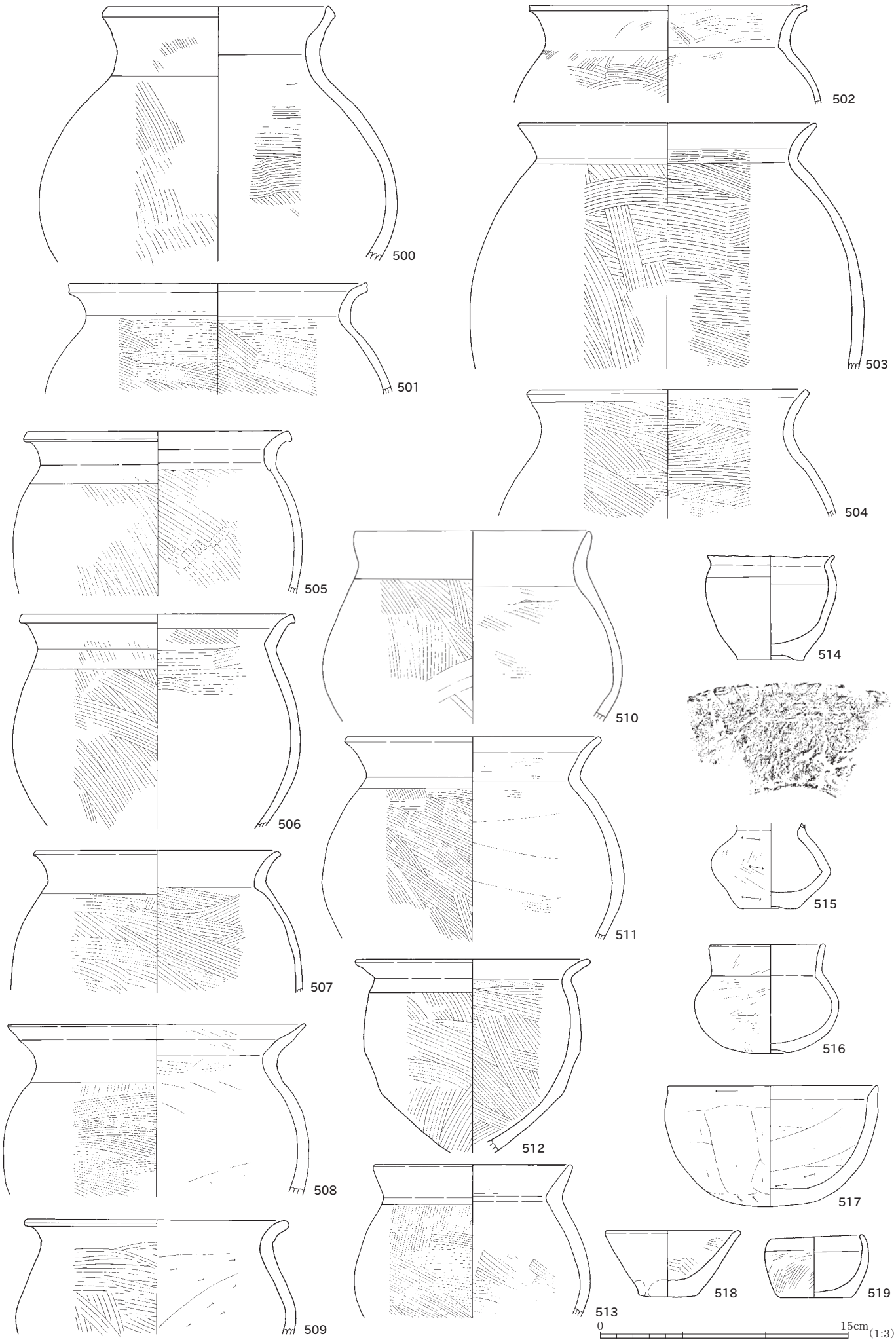
0 15cm (1:3)

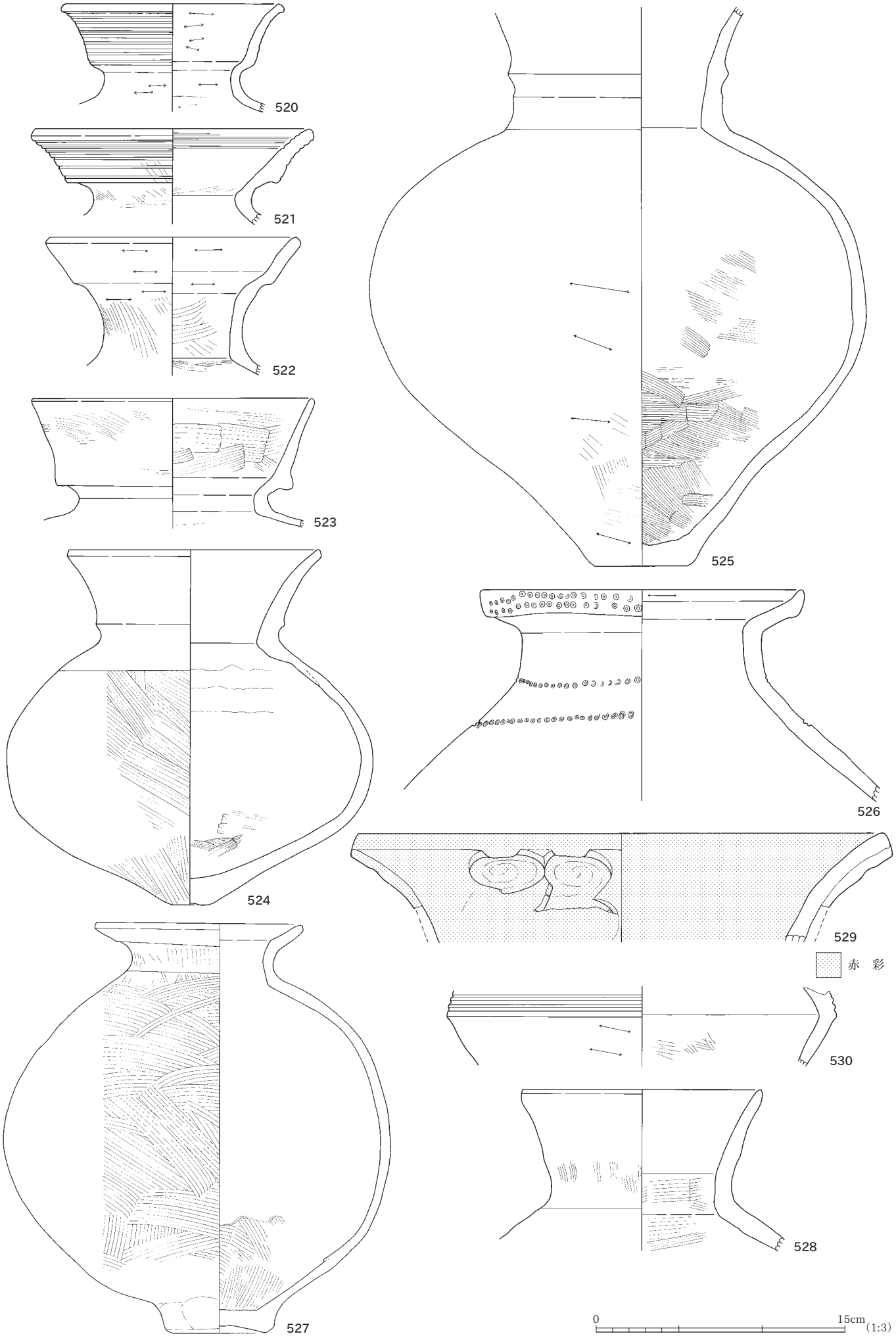
その他の弥生時代中期の土器（454～482）

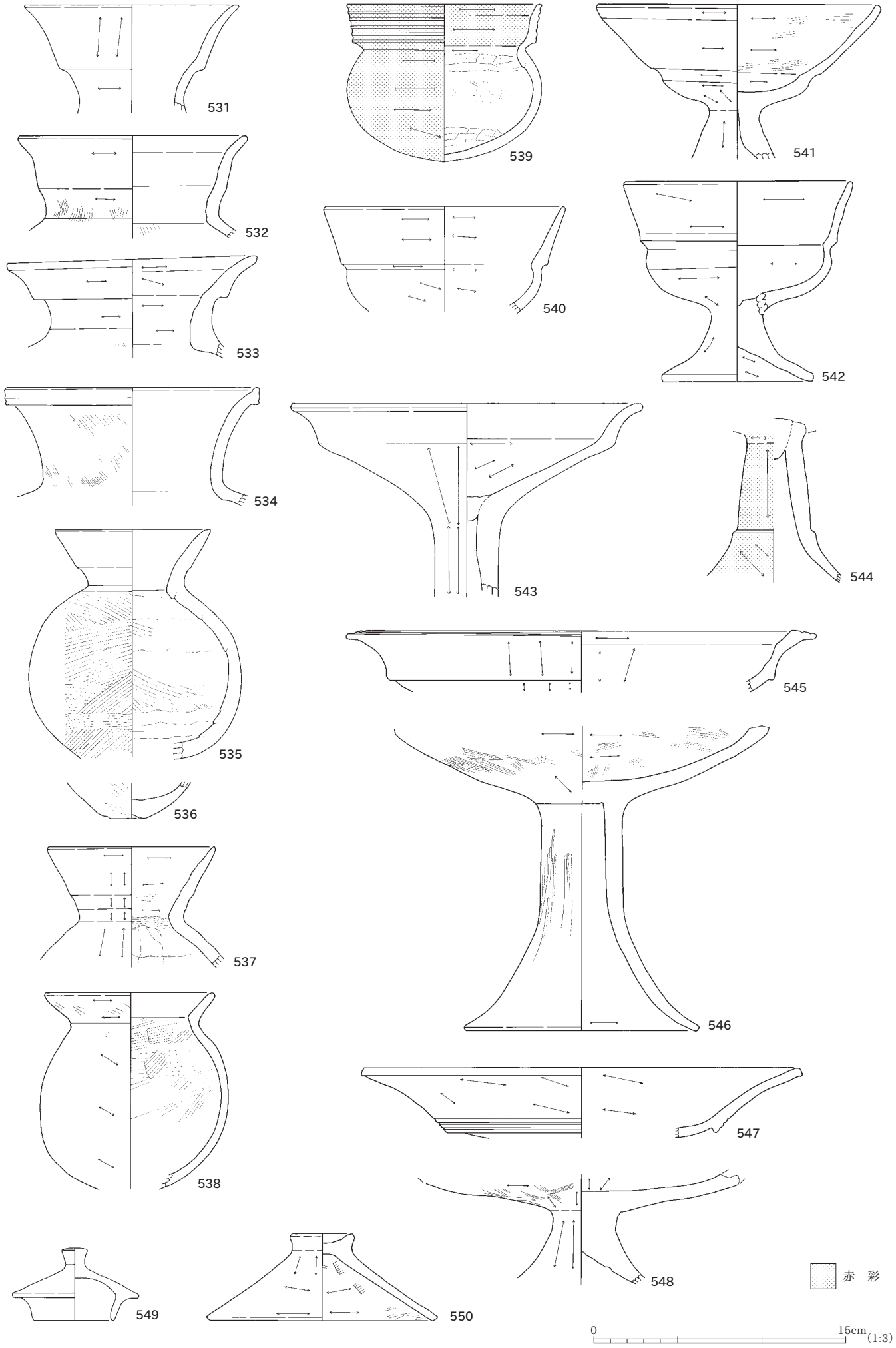


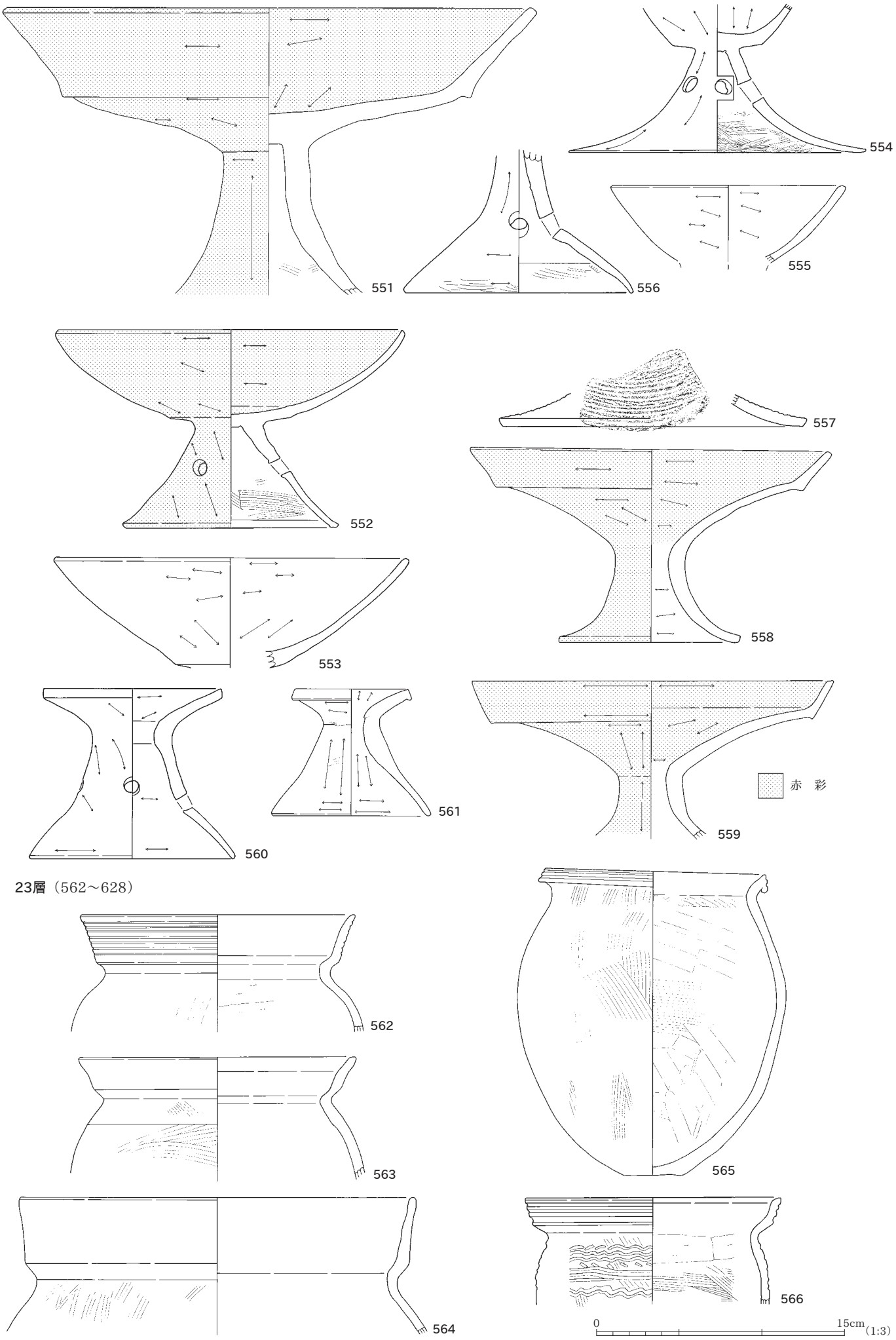
SD50・51・83-3層（483～561）

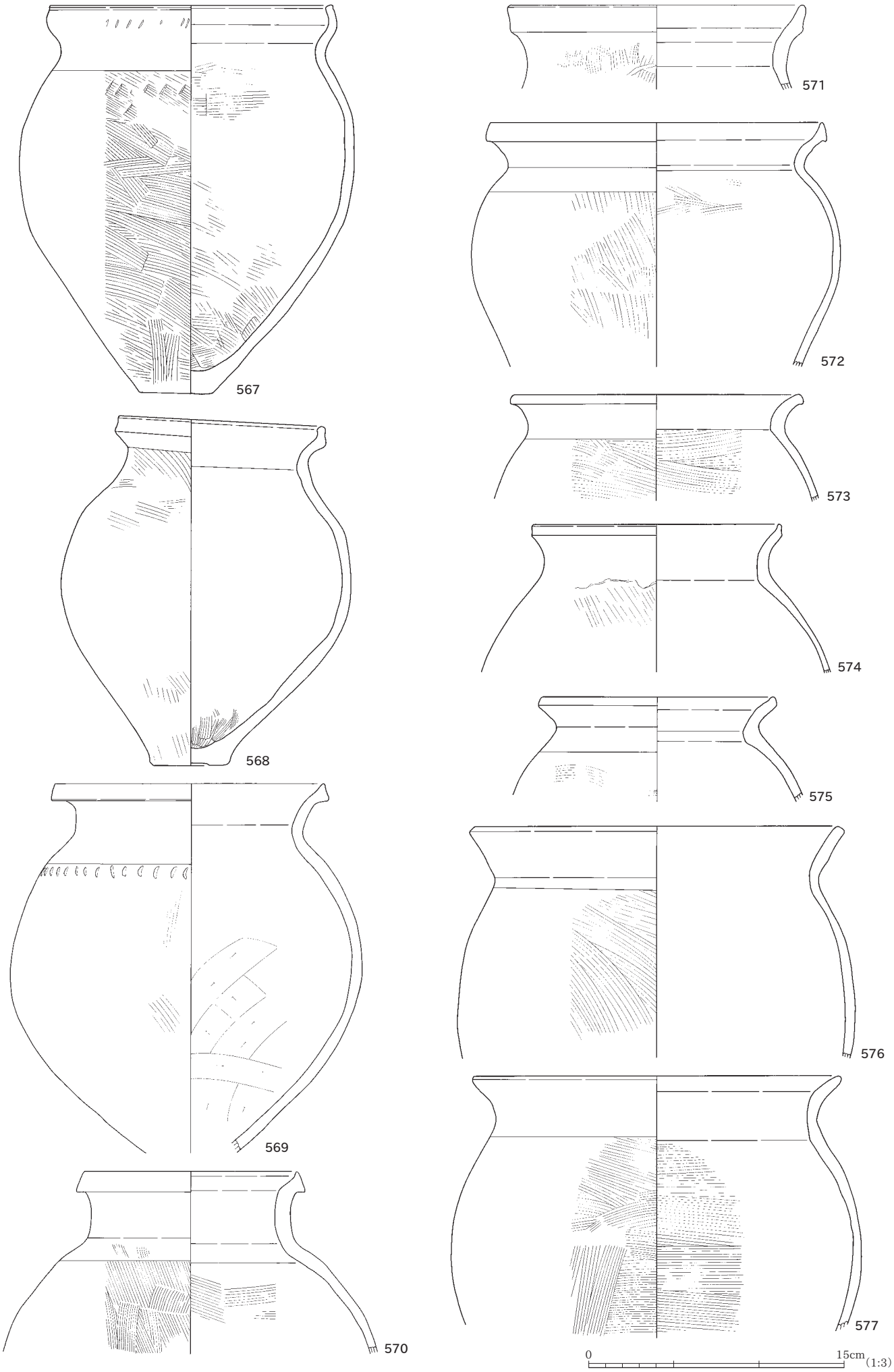


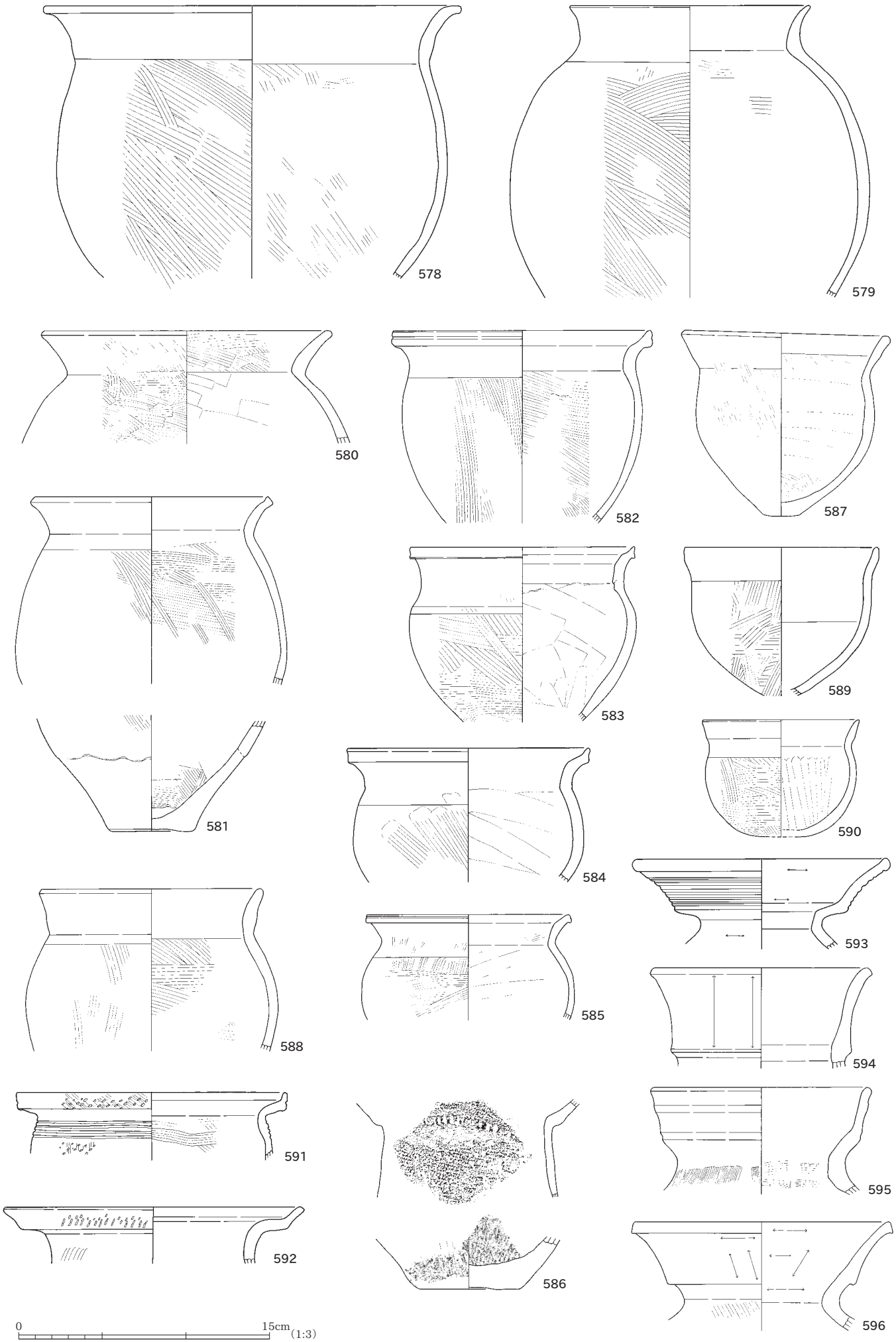

500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
0
15cm
(1:3)

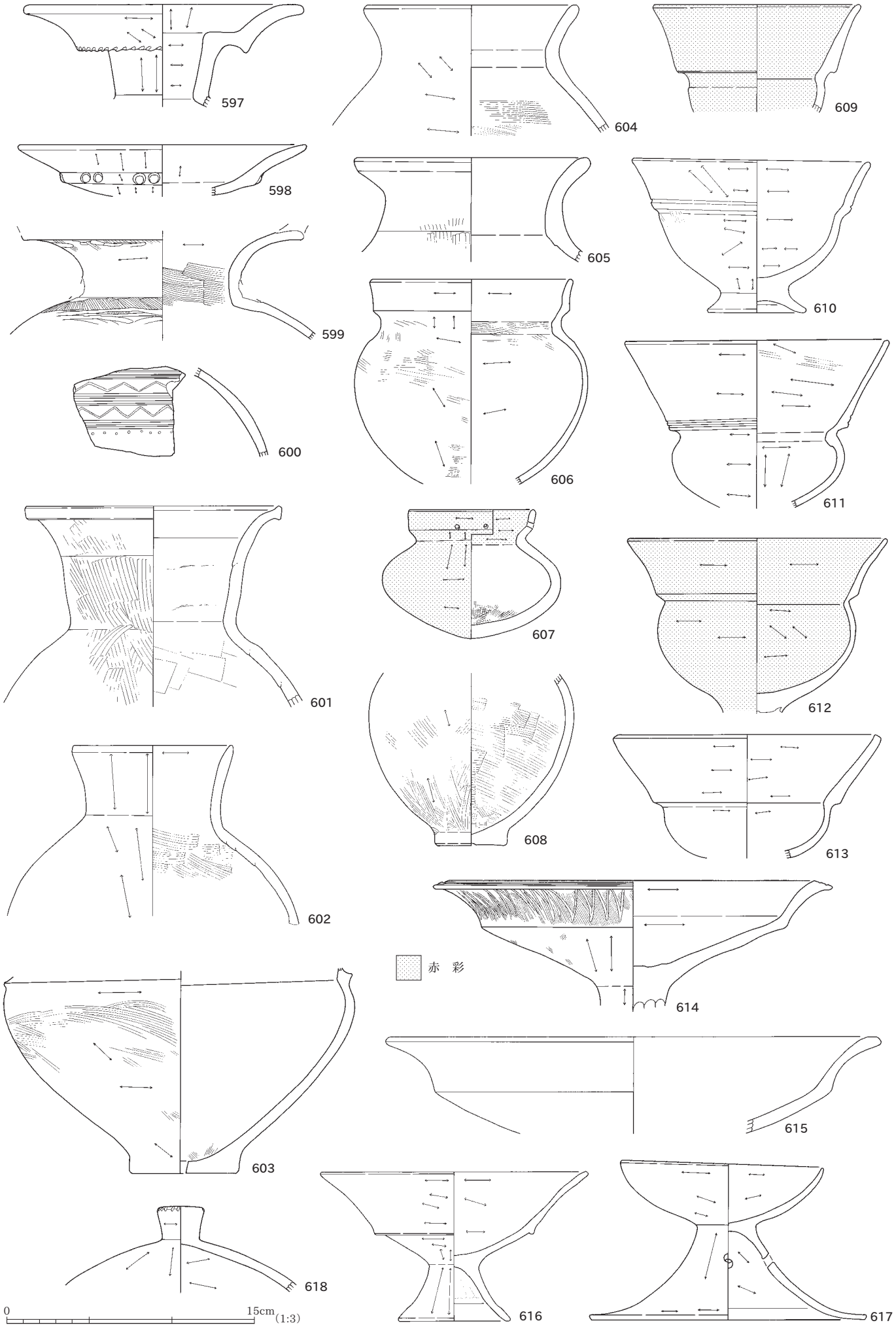

520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
赤 彩
0
15cm
(1:3)

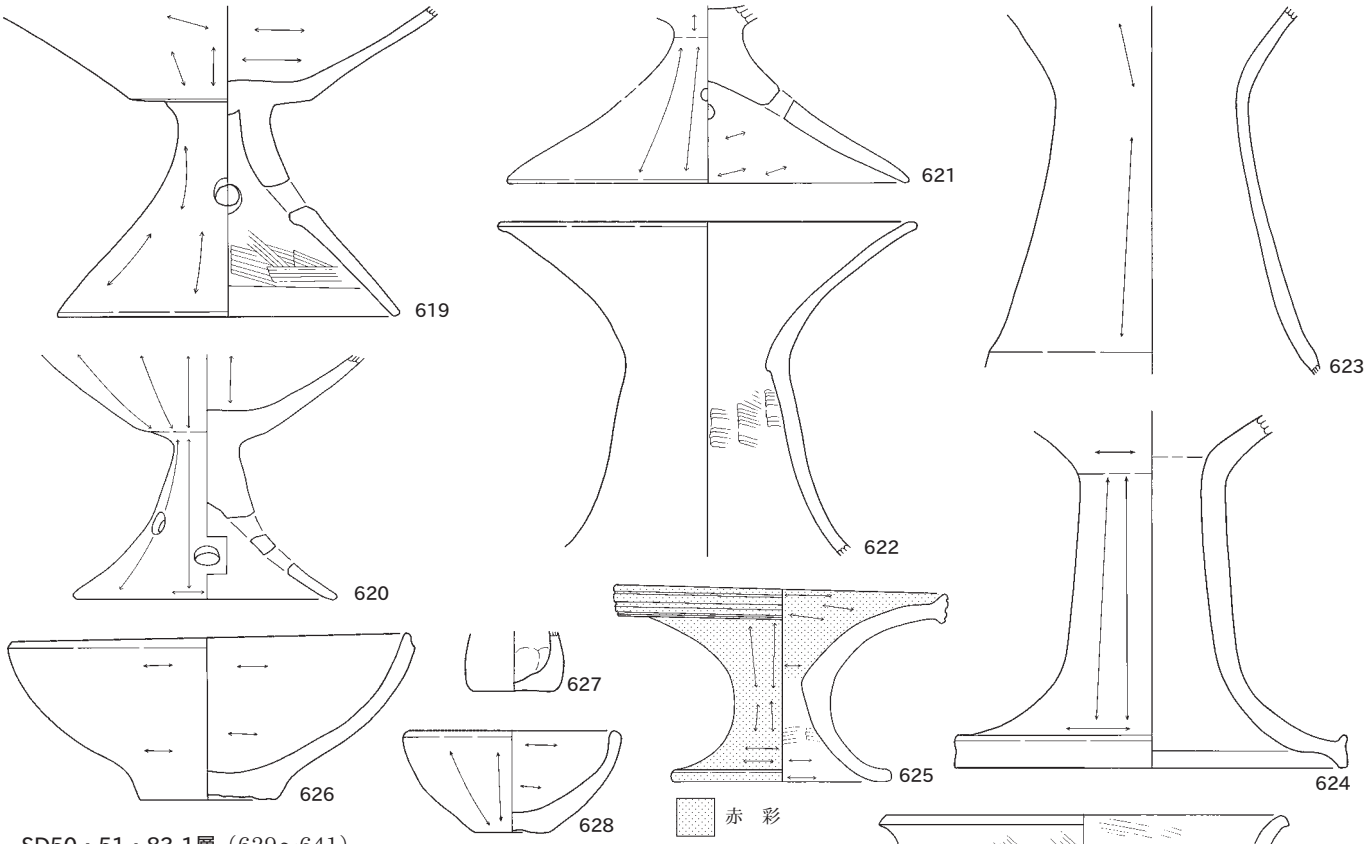

531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
赤 彩
0
15cm
(1:3)


551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
赤 彩
23層（562～628）
562
563
564
565
566
0
15cm
(1:3)

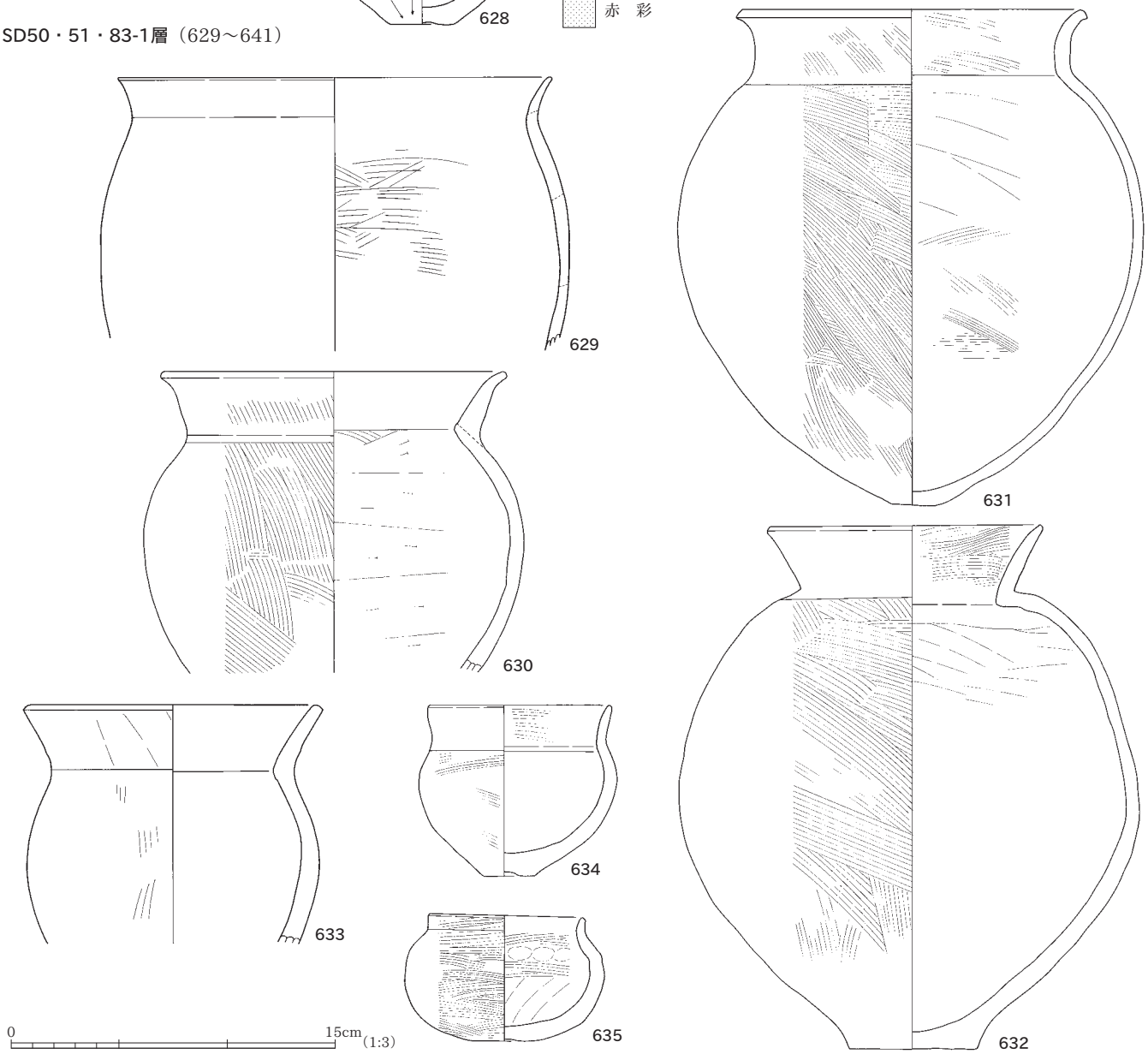

567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
0
15cm
(1:3)

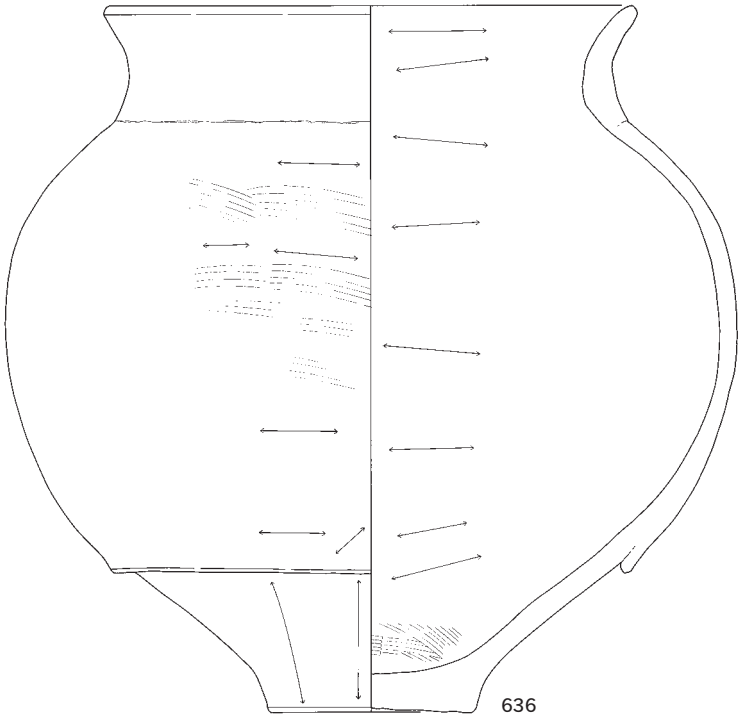

578
579
580
582
587
581
583
589
584
590
588
585
593
594
591
586
595
592
596
0
15cm
(1:3)

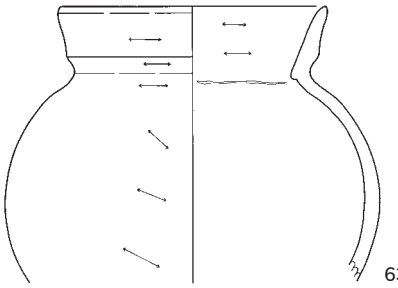

597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
赤 彩
0
15cm
(1:3)

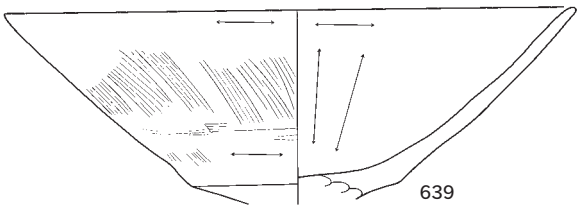


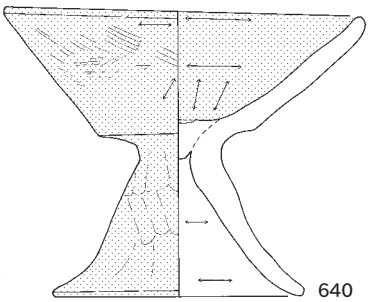
SD50・51・83-1層（629～641）

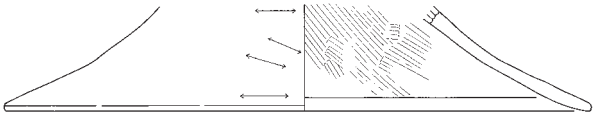


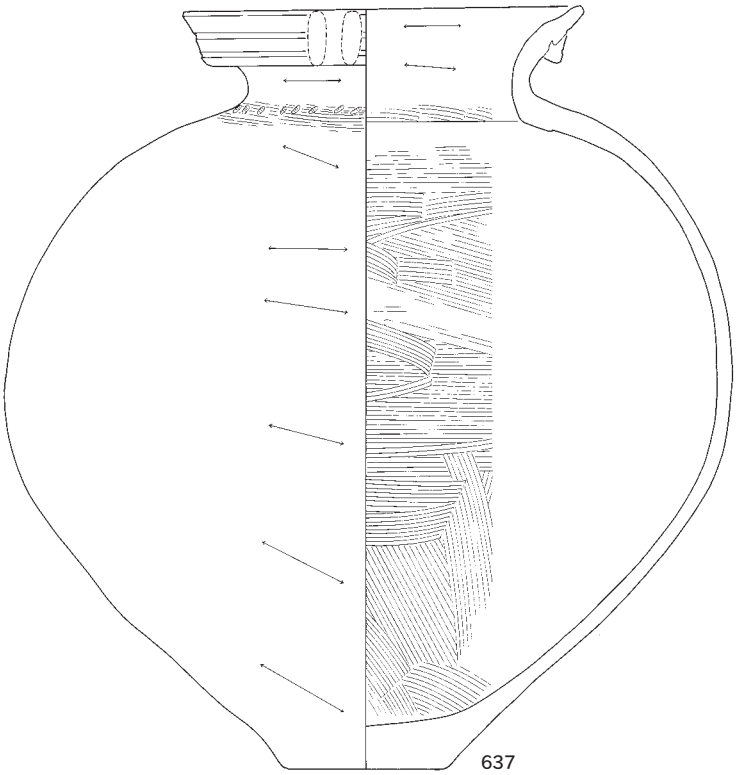


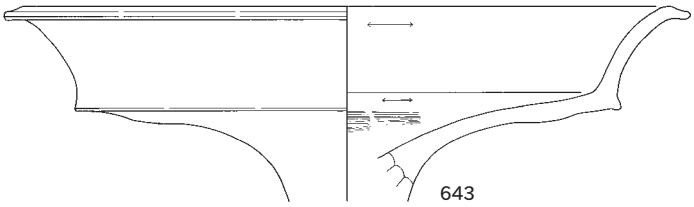




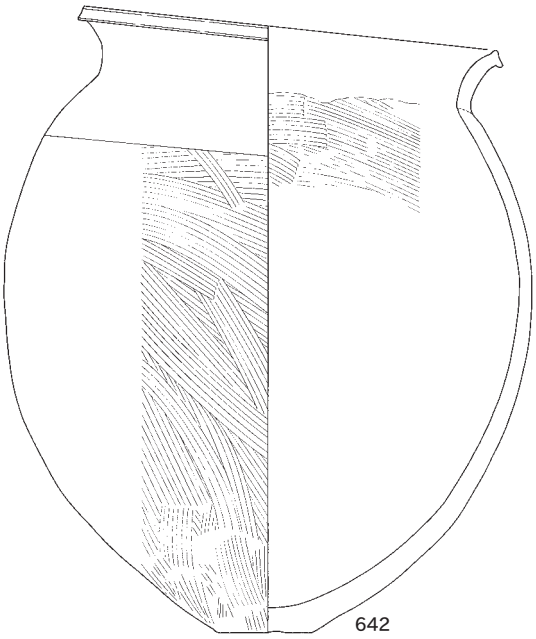




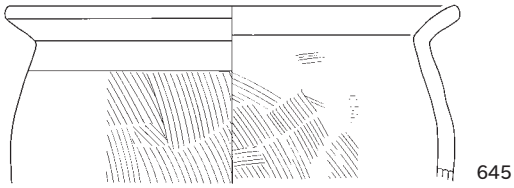


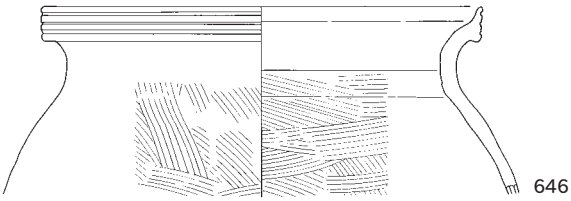


SD50・51・83-その他（642～644）

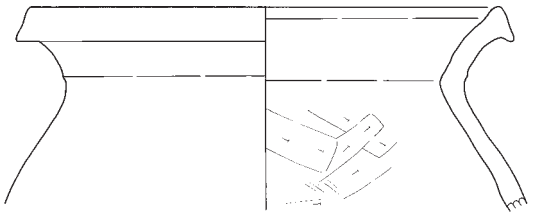


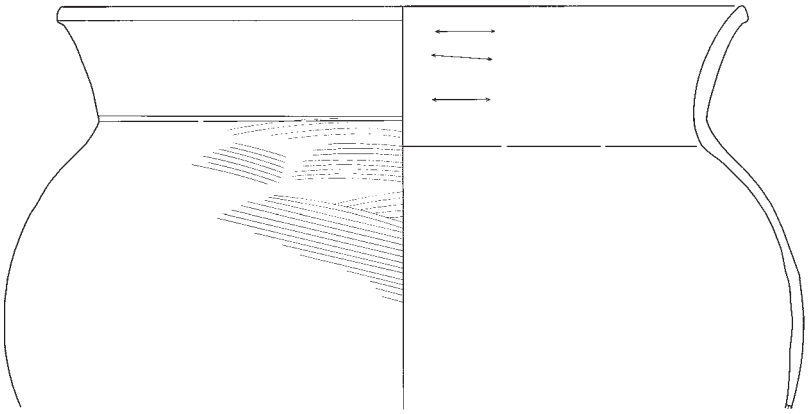
SD47（645・646）

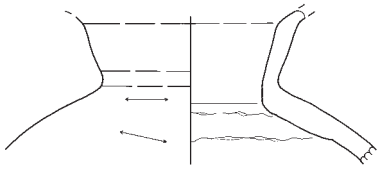




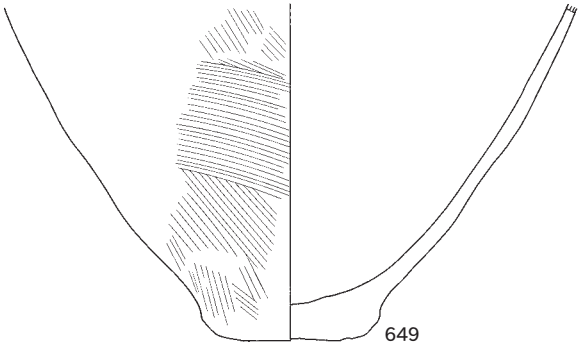
SD46（647～650）


647

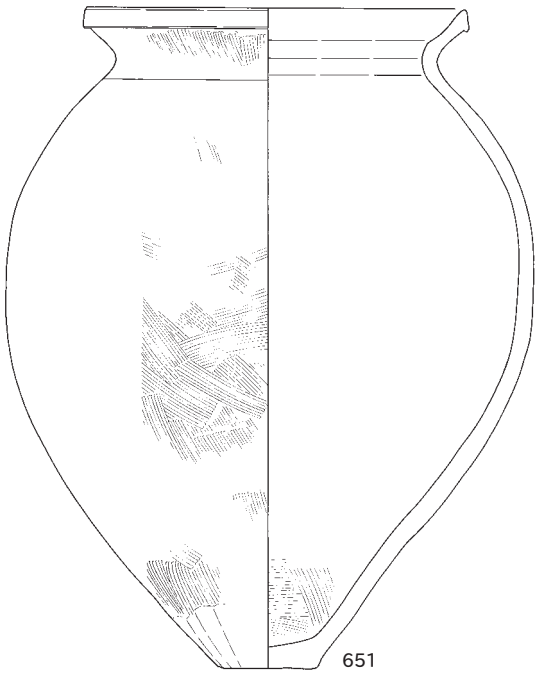

648

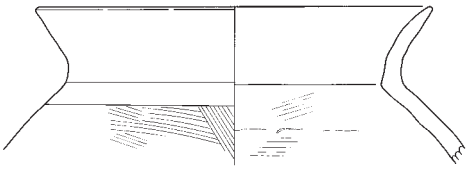

650

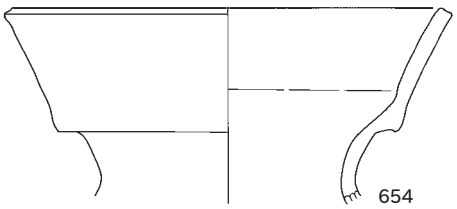
SK85（651～654）

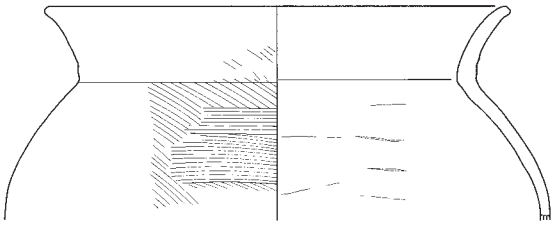

649

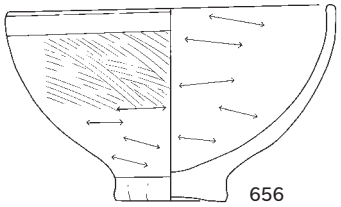
0　15cm（1:3）


651

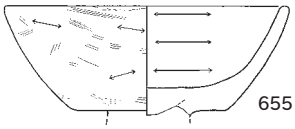

653

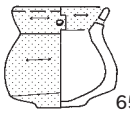

654


652

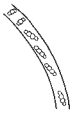

656

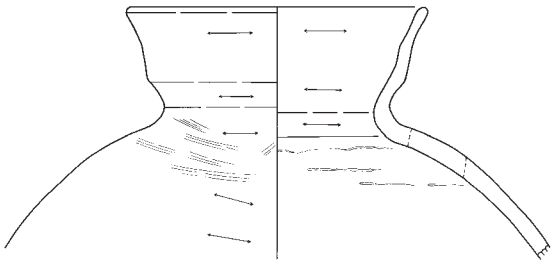
SK70（655～660）

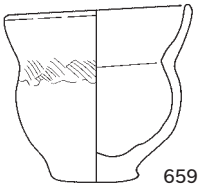

655

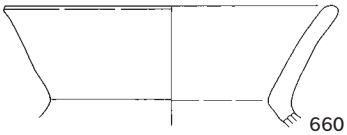

658

赤　彩

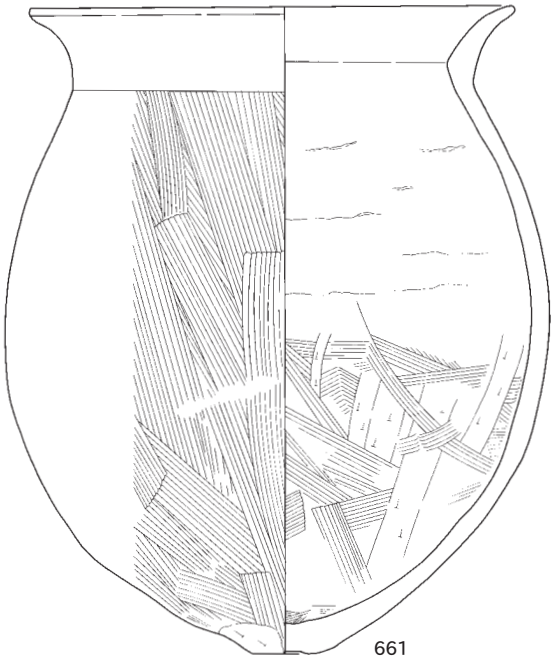


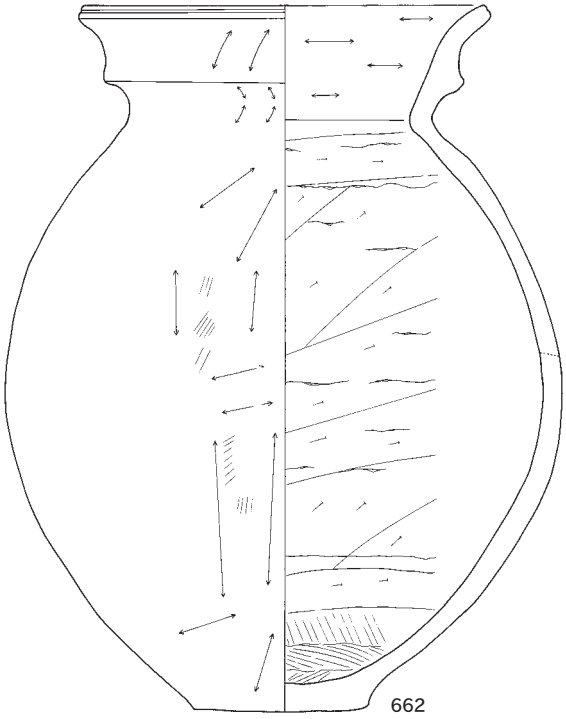

657

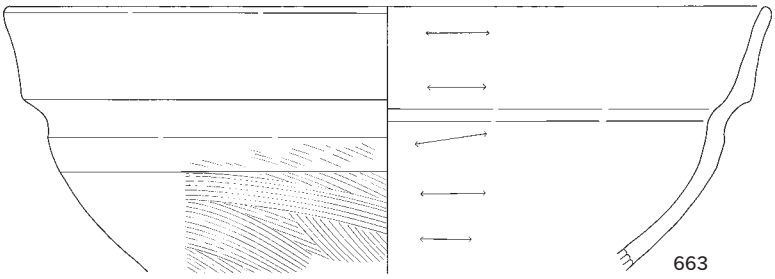

659

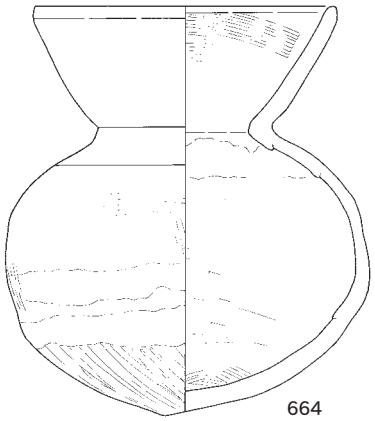

660

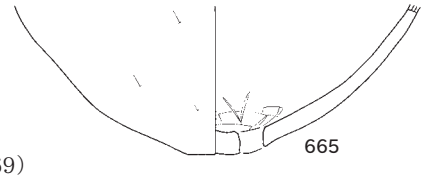
SK55（661～665）





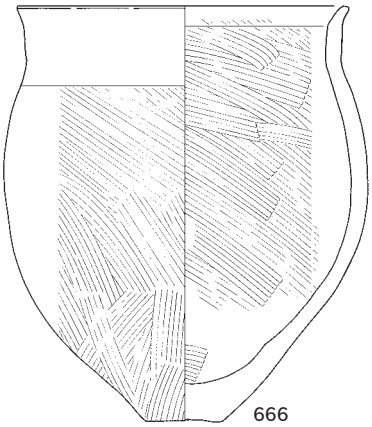


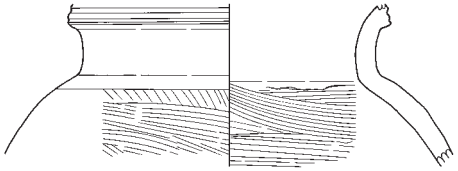


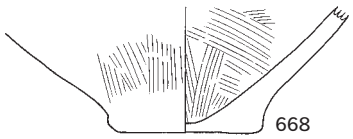


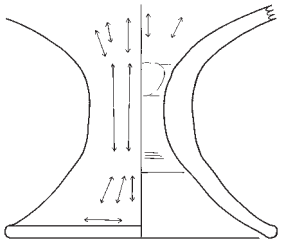
0 15cm (1:3)

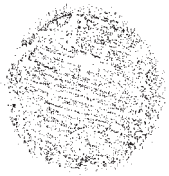
SD33（666～669）



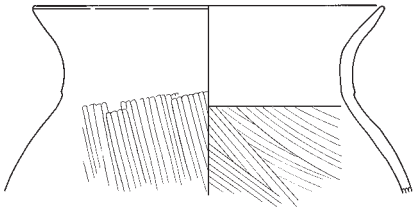


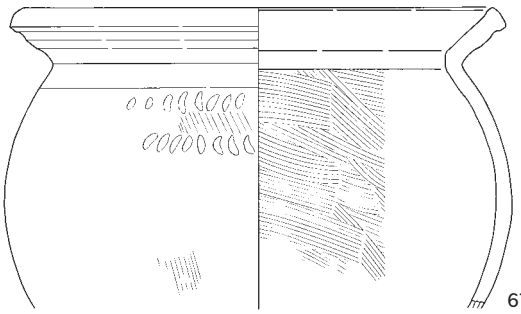




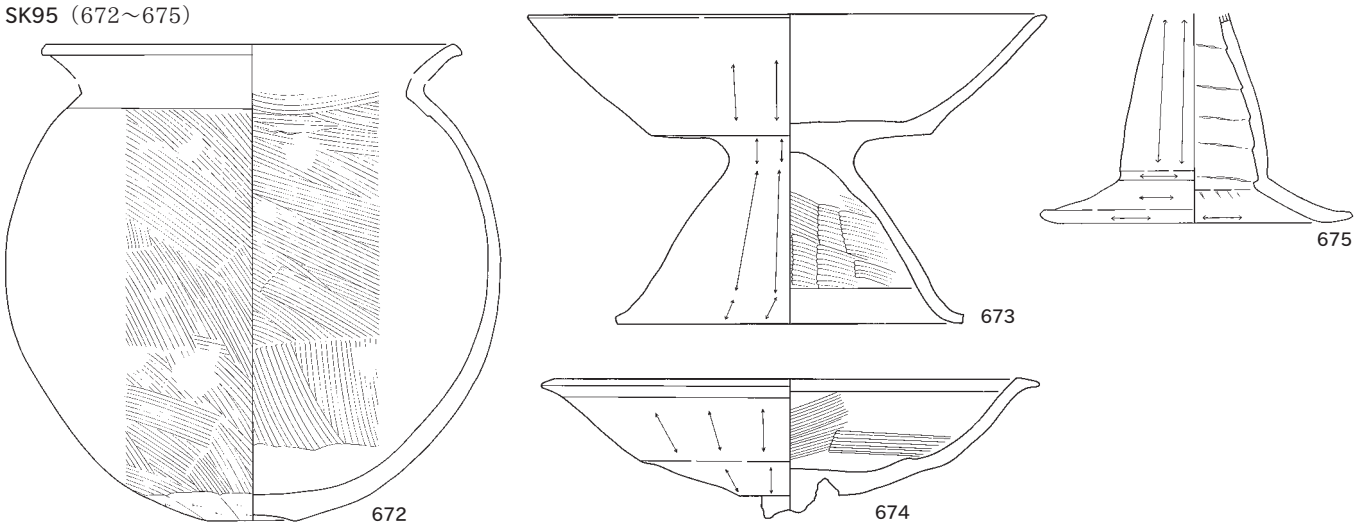


SK40（670・671）

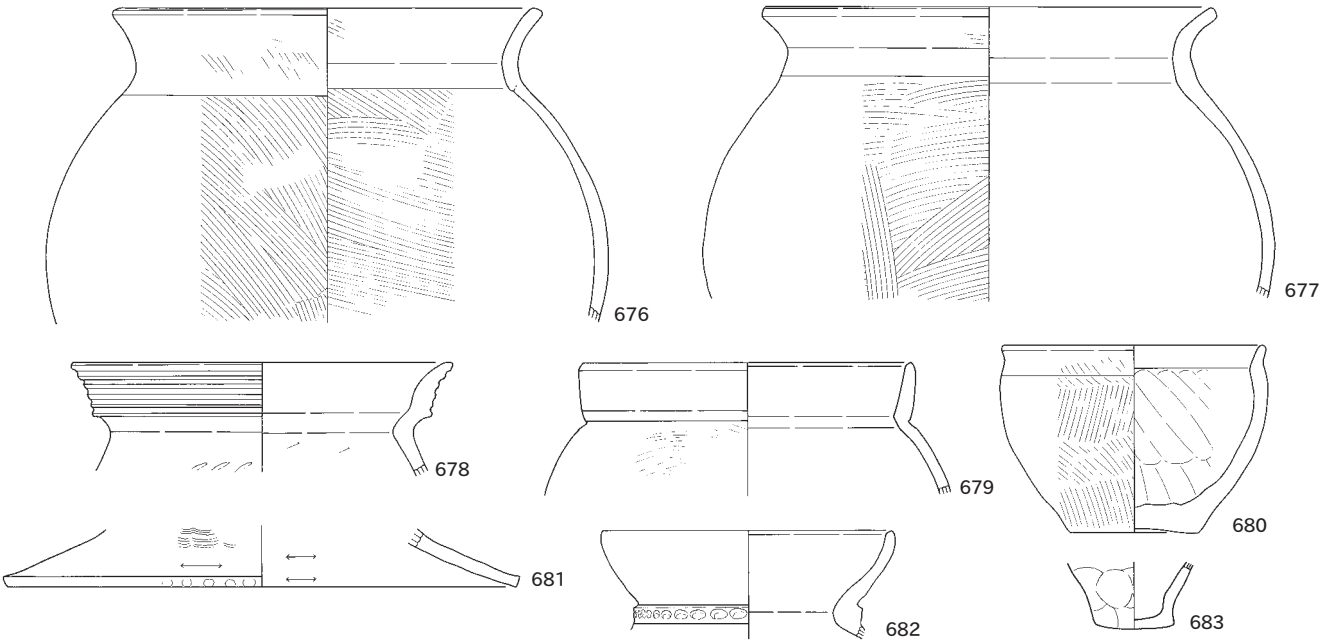




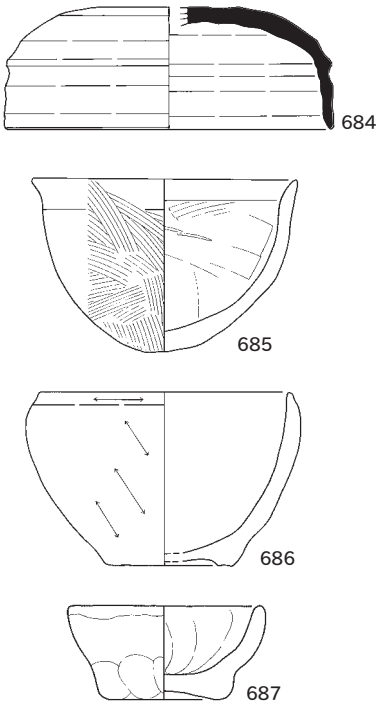
SK95（672～675）



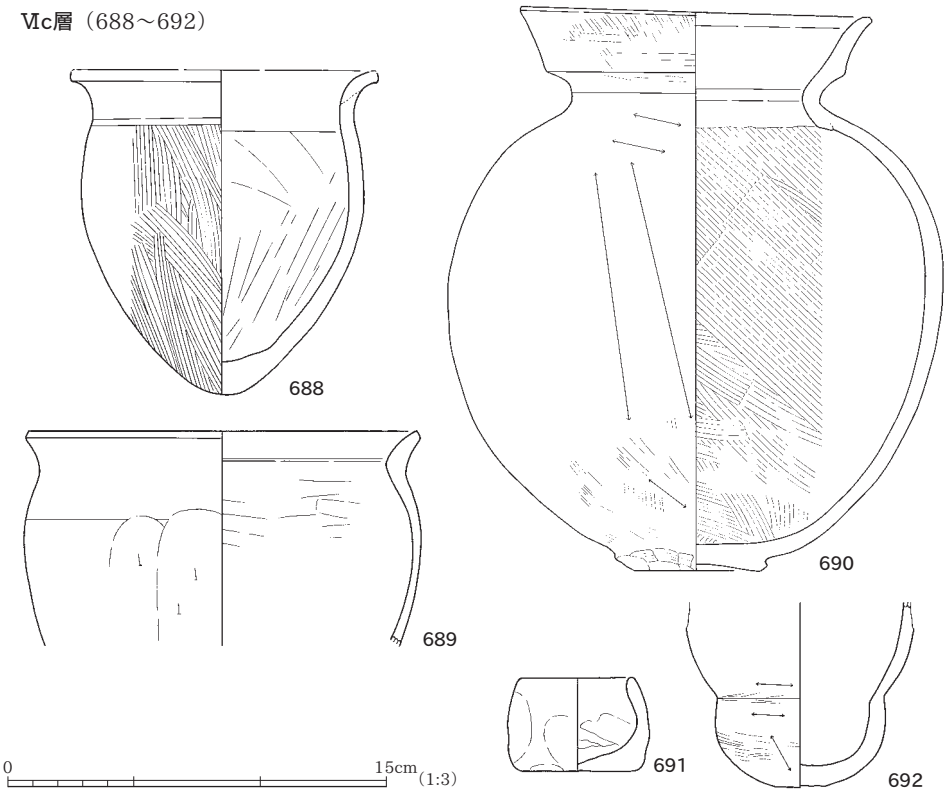
21層（676～683）



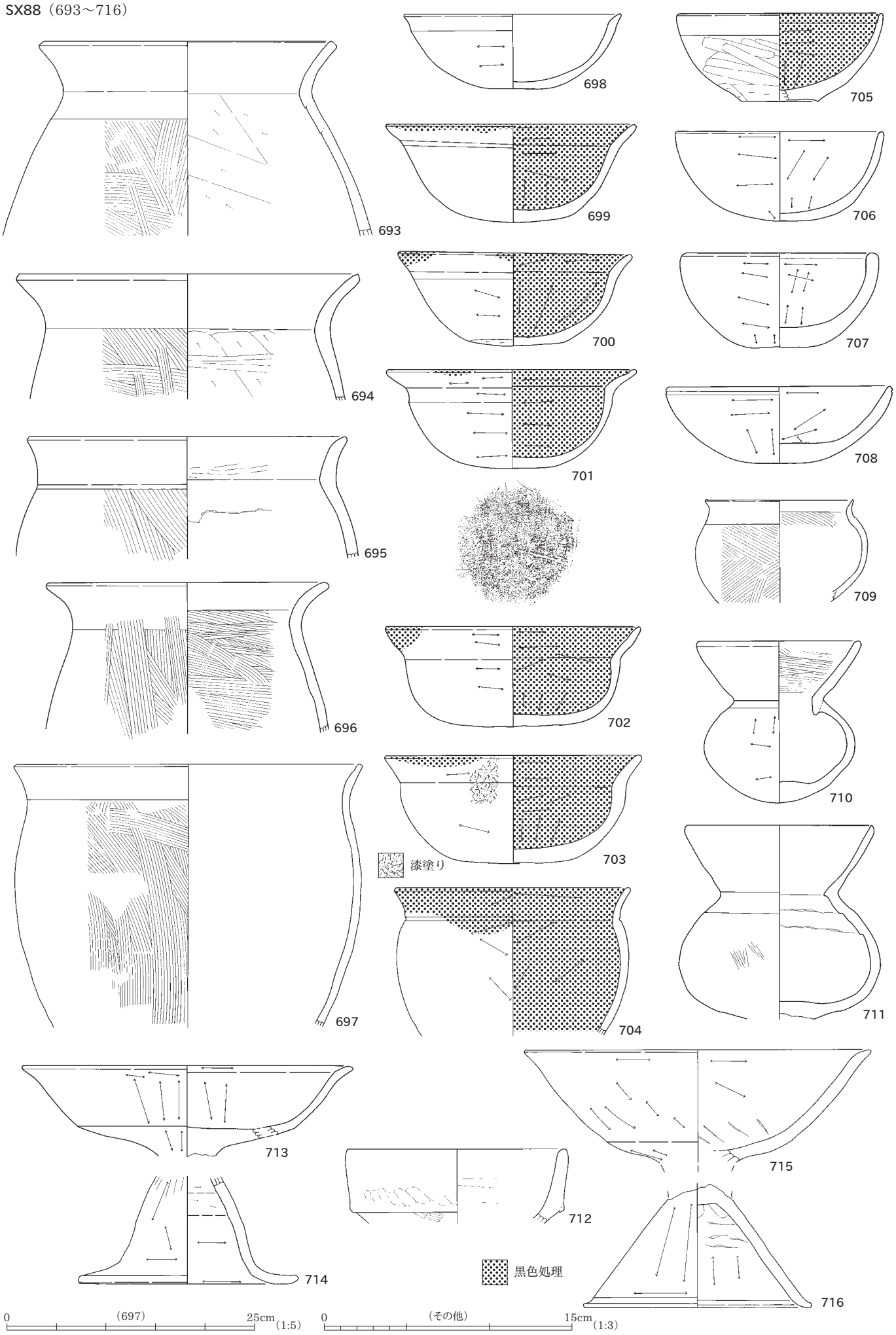
20層（684～687）



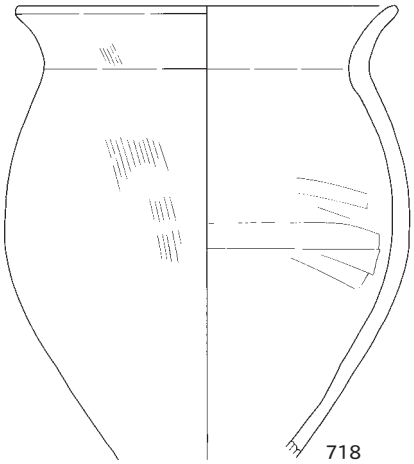
Ⅵc層（688～692）



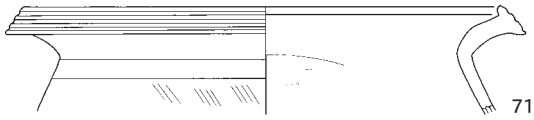
SX88（693～716）

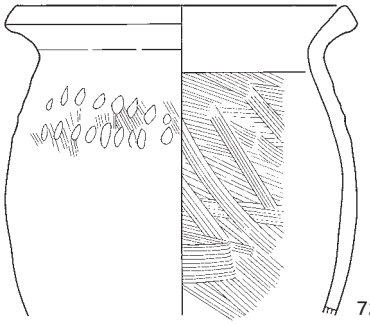

693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
漆塗り
黒色処理
0 (697) 25cm (1:5)
0 (その他) 15cm (1:3)

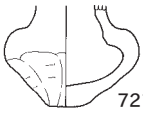
その他の土坑（717・718）



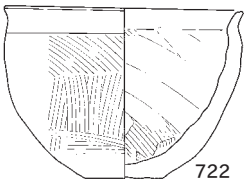
⑥層（719～721）

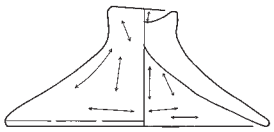


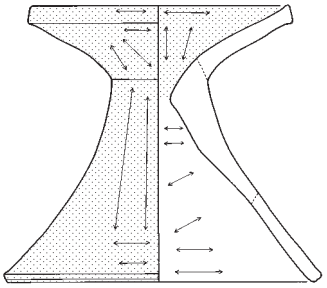




Ⅷa・b層相当層（722～724）

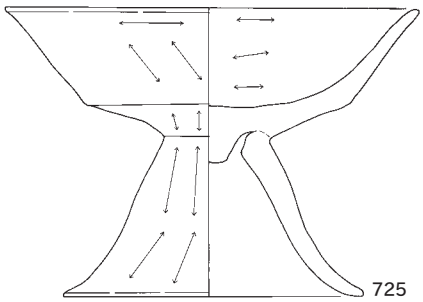


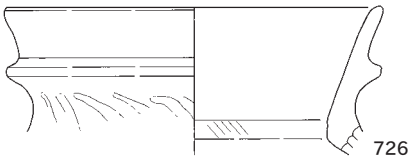


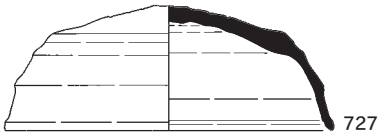


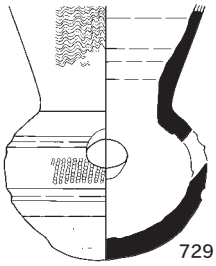
赤　彩

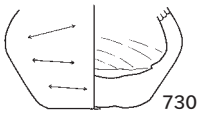
Ⅵb層・B層（725～745）

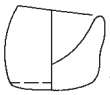


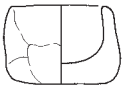


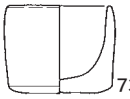


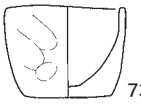


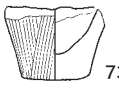


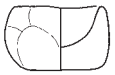


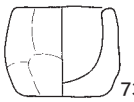


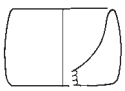


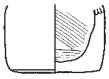


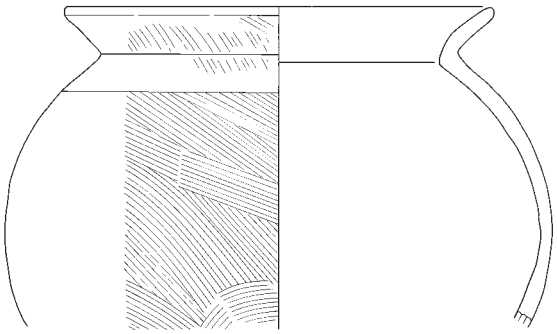


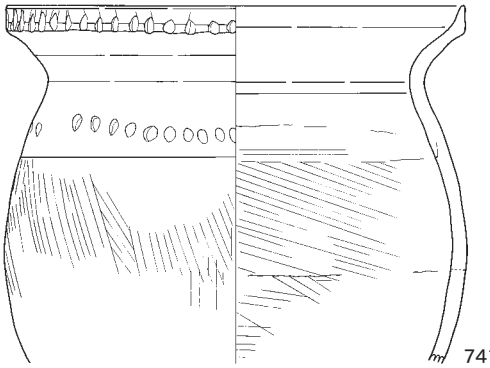


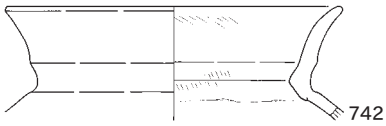




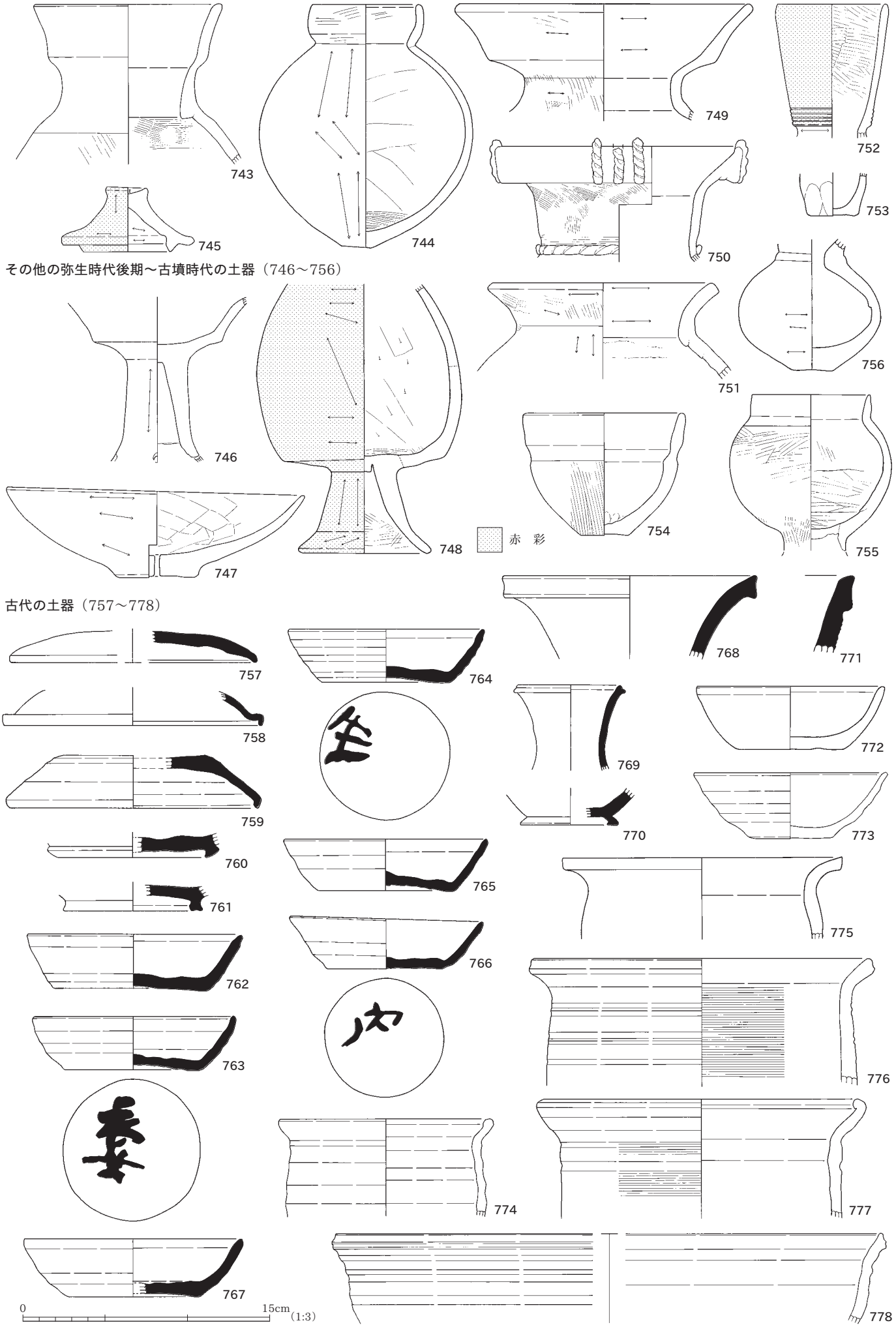




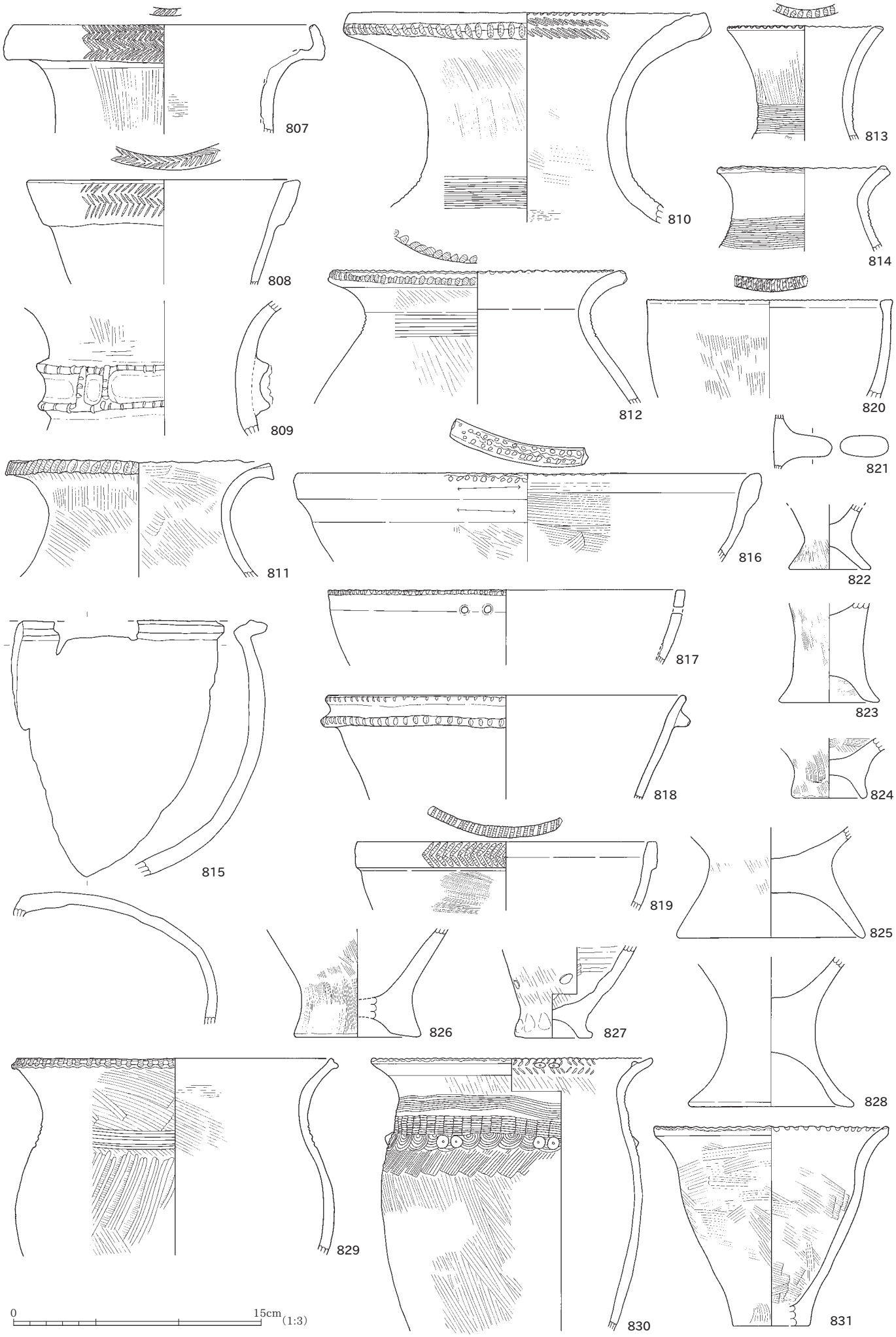


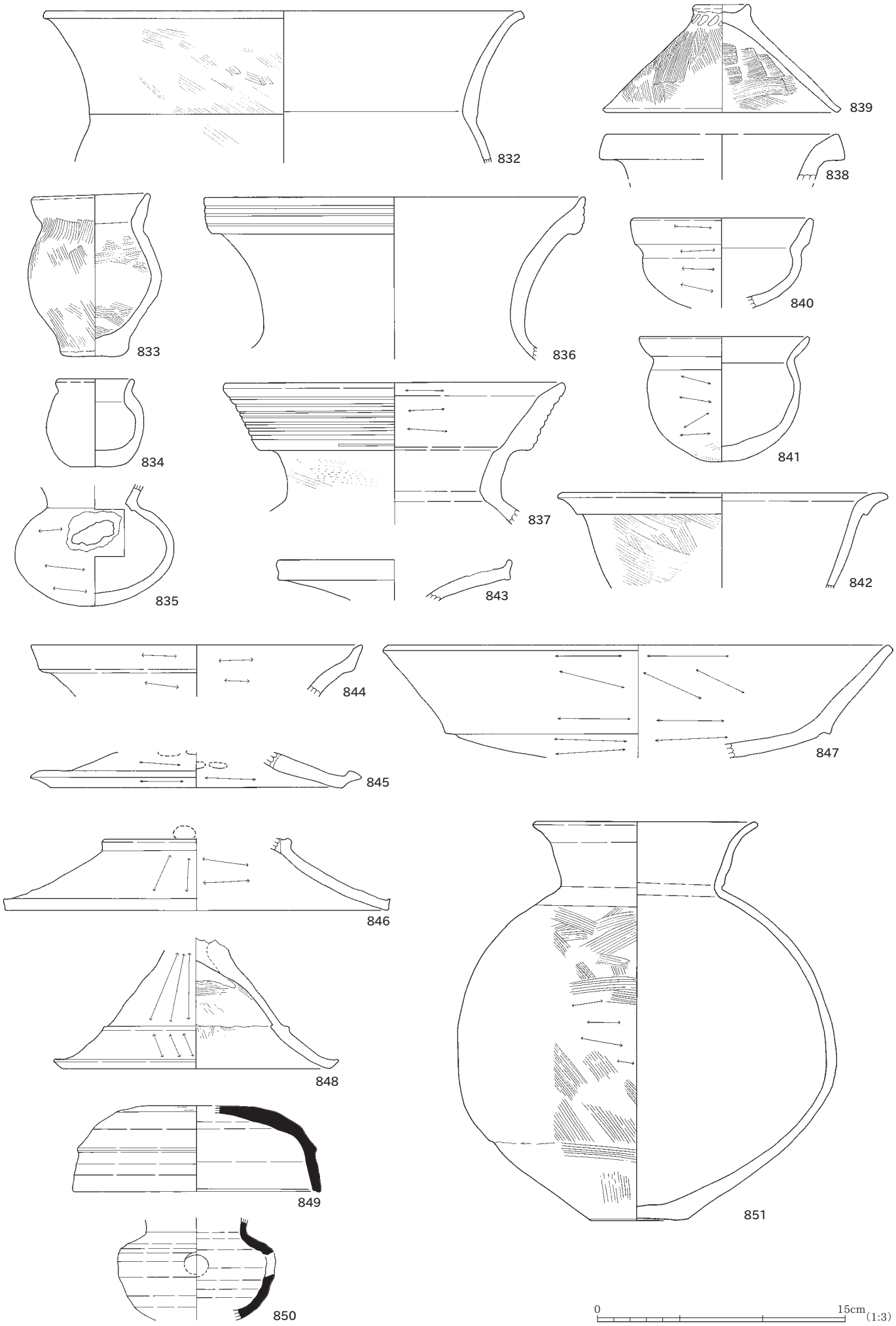


0　15cm（1:3）

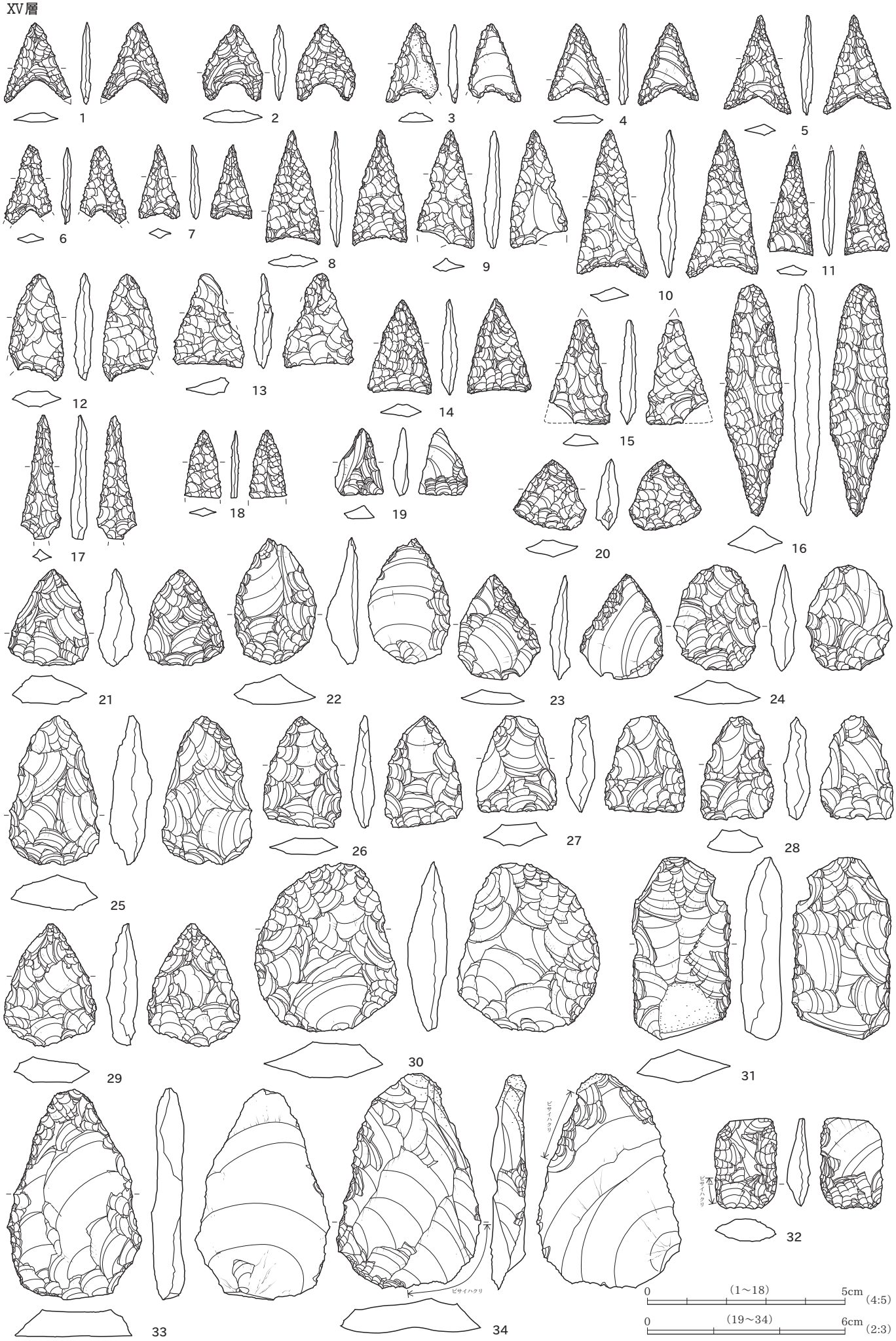

743
744
745
749
750
751
752
753
756
その他の弥生時代後期～古墳時代の土器（746～756）
746
747
748
赤 彩
754
755
古代の土器（757～778）
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
0
15cm
(1:3)

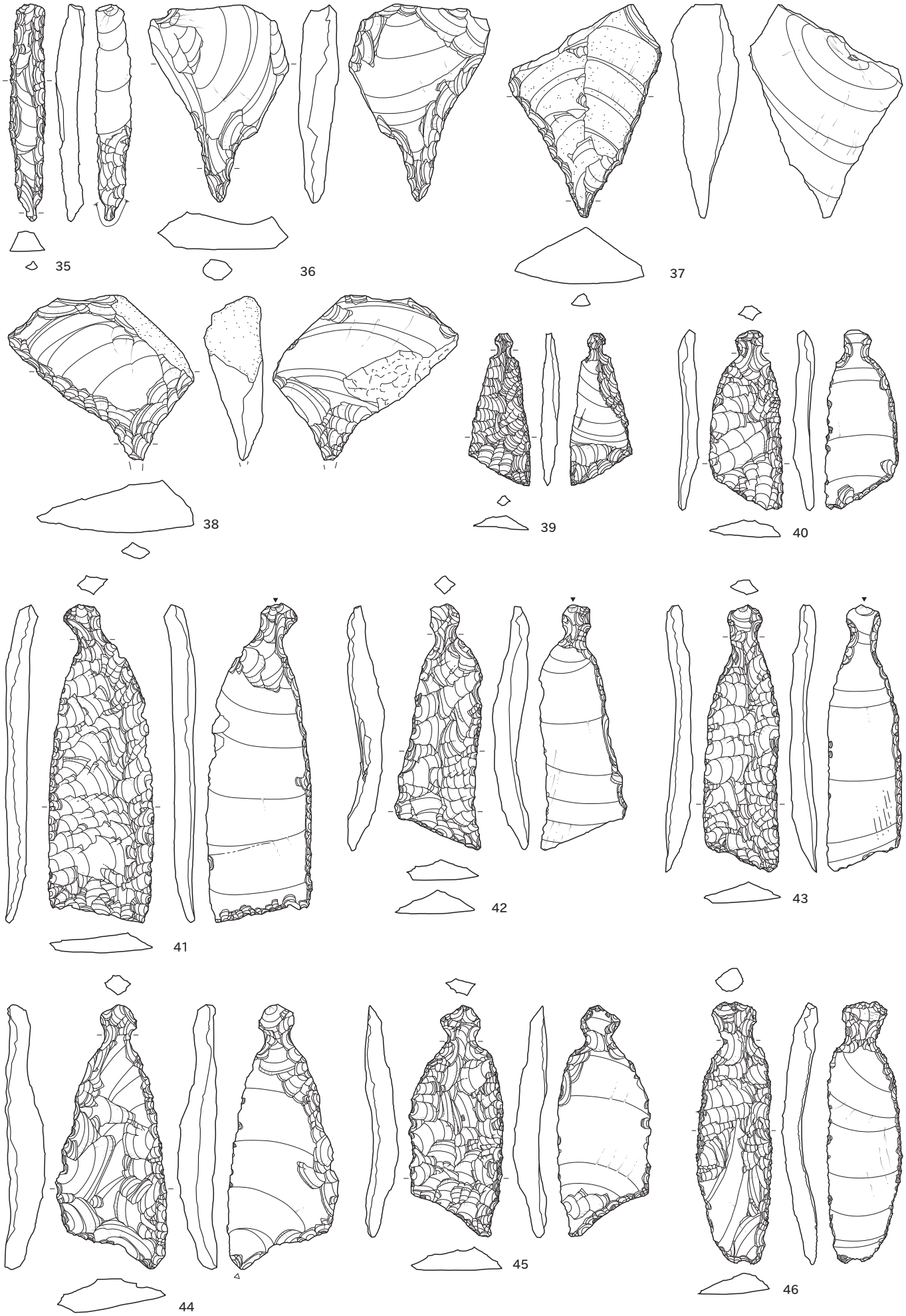
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
799
800
801
802
803
804
805
806
漆焼付
赤色漆
0 (798) 25cm (1:5)
0 (その他) 15cm (1:3)

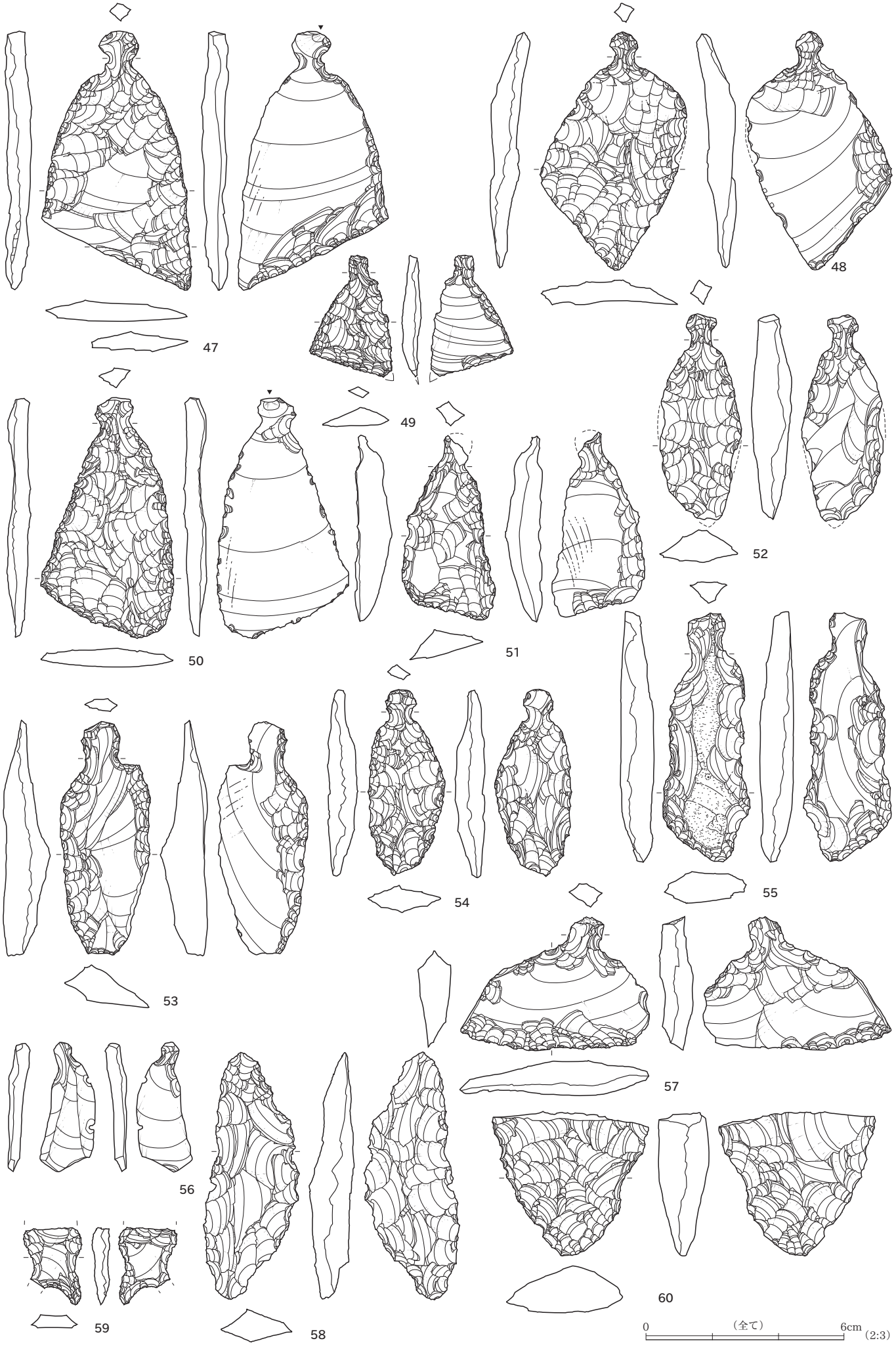

807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
0
15cm
(1:3)

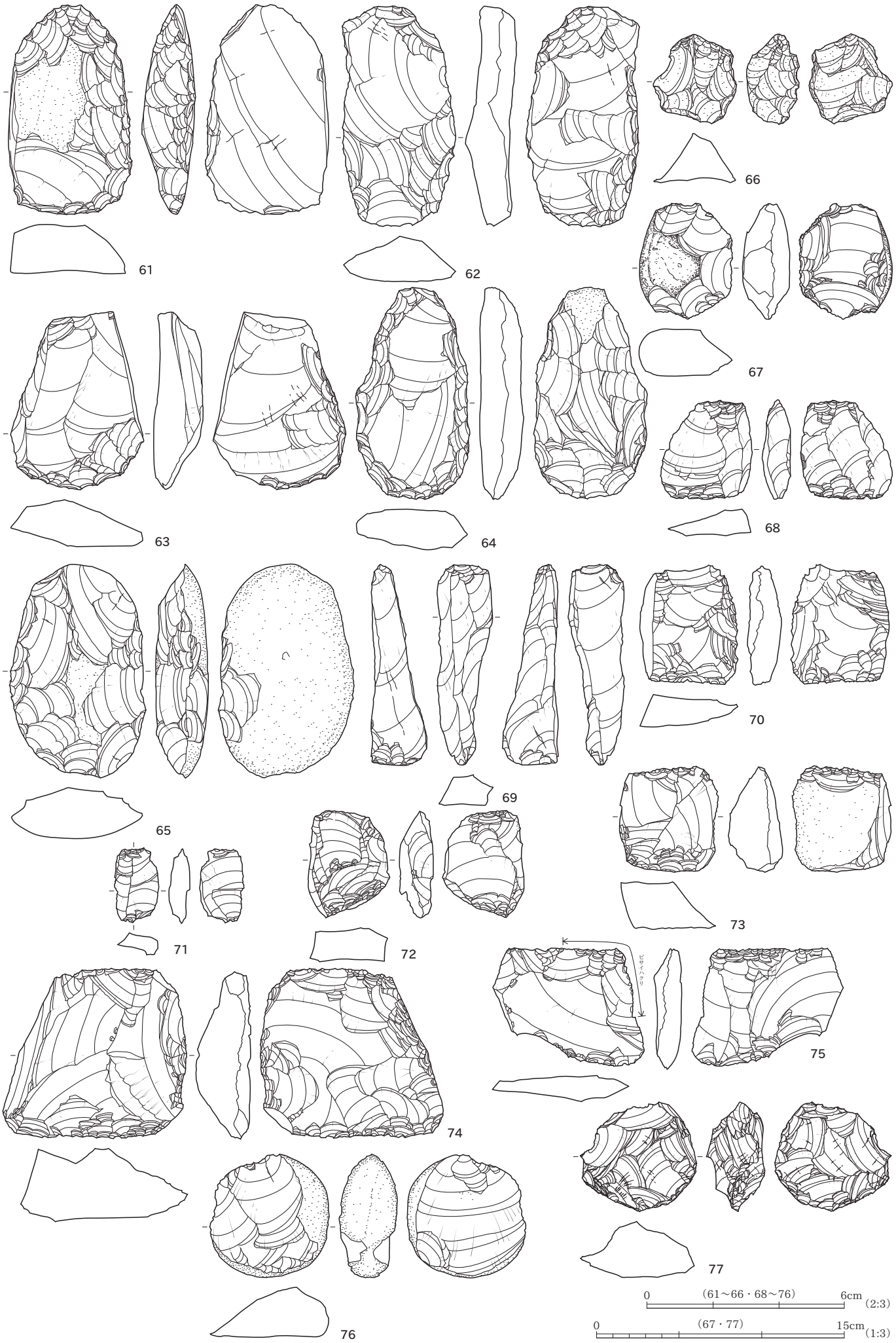

832
839
838
833
836
840
834
837
841
835
843
842
844
847
845
846
848
849
851
850
0
15cm
(1:3)

XV層

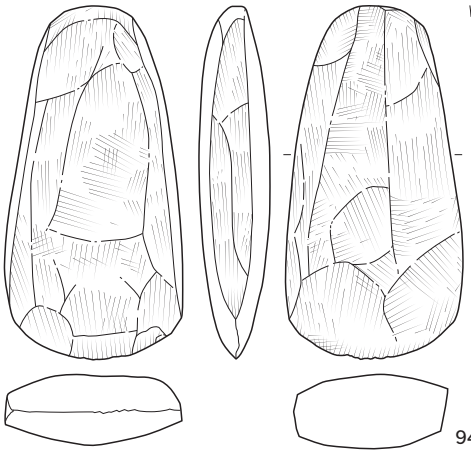

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
ビサイハクリ
ビサイハクリ
ビサイハクリ
ビサイハクリ
0
(1～18)
5cm
(4:5)
0
(19～34)
6cm
(2:3)

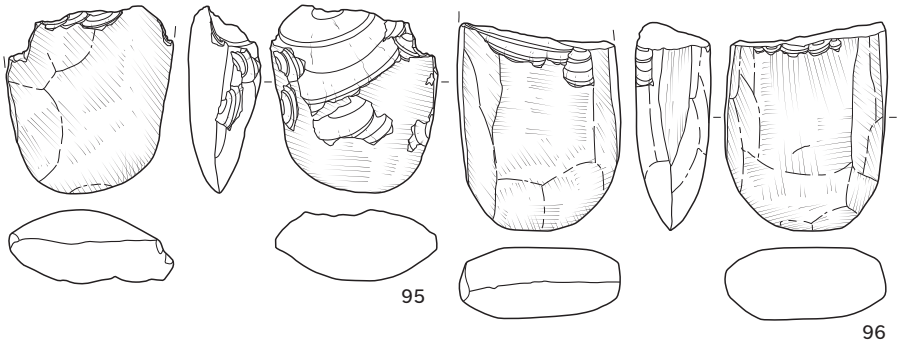

35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
0
(39～46)
6cm
(2:3)
0
(35～38)
5cm
(4:5)

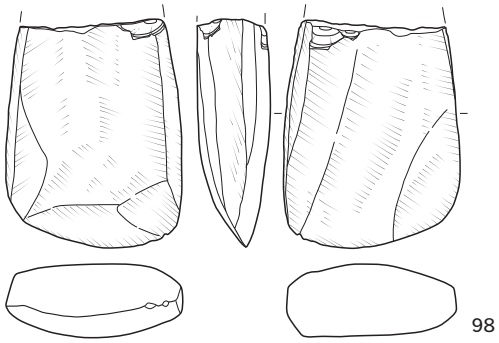

47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
0
（全て）
6cm
（2:3）

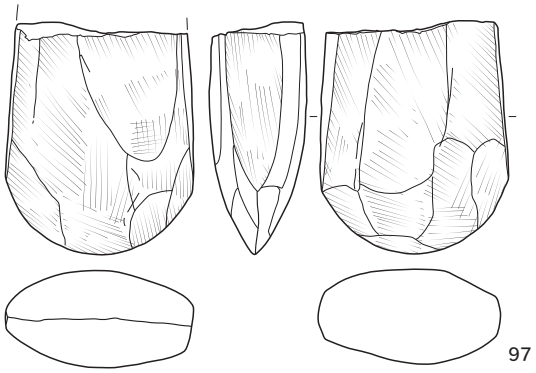

61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
0　(61～66・68～76)　6cm (2:3)
0　(67・77)　15cm (1:3)

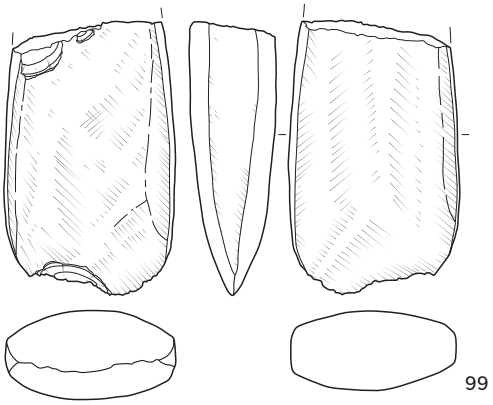
78
80
79
81
82
83
84
85
86
砥　面
87
88
89
90
91
92
93
0 (80) 5cm (4:5)
0 (78～81・83～85) 6cm (2:3)
0 (82・86～93) 10cm (1:2)

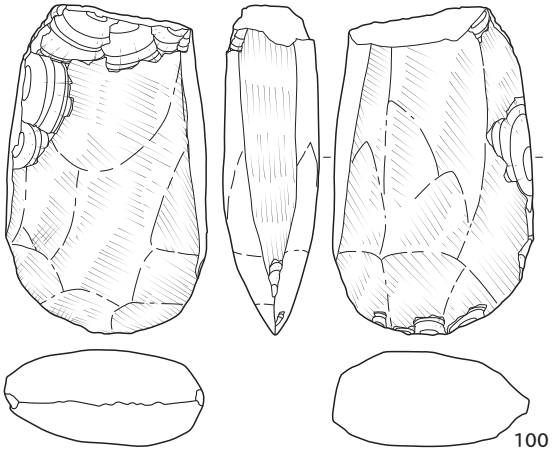


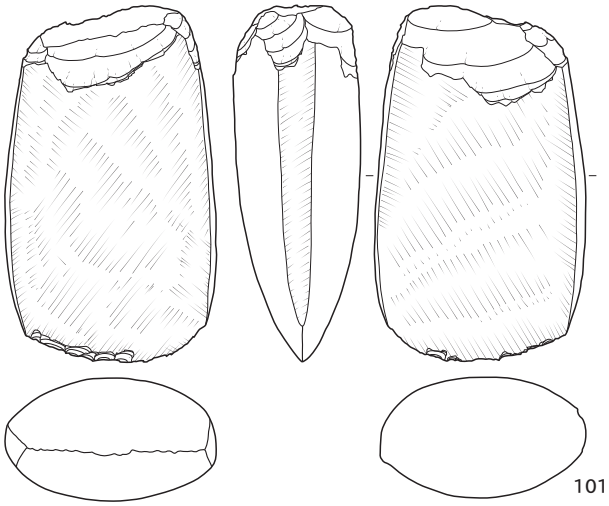


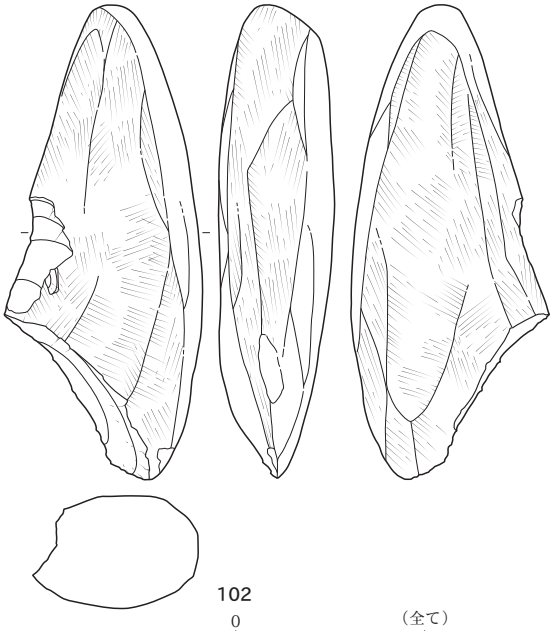


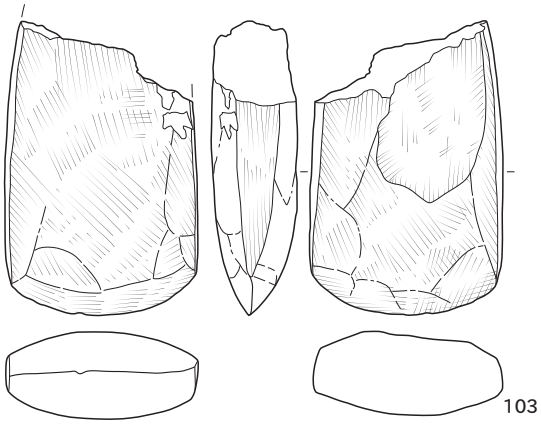




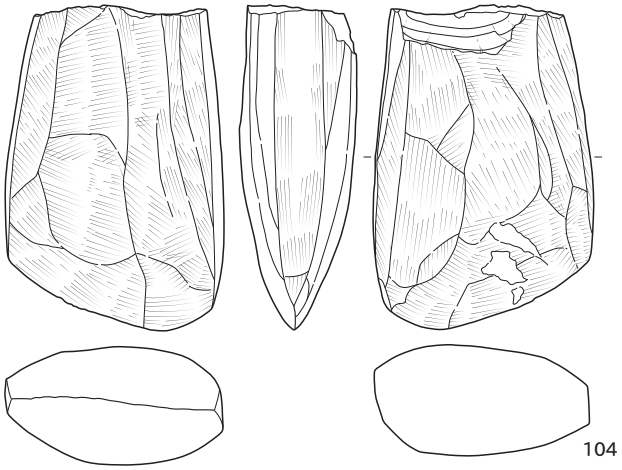


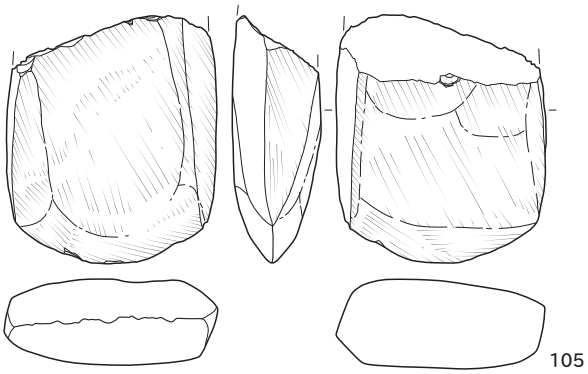


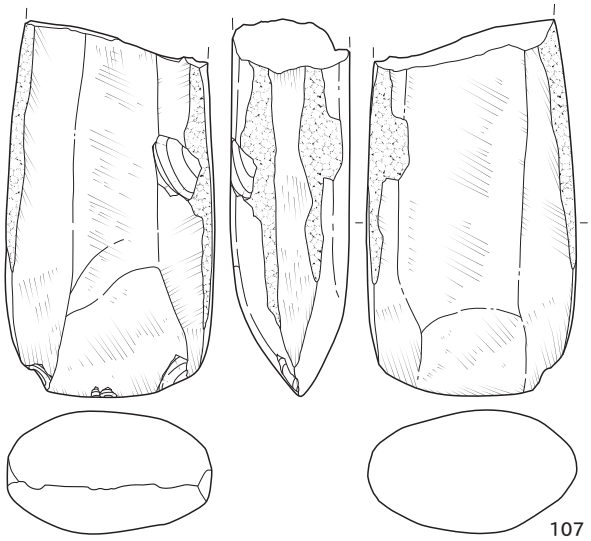


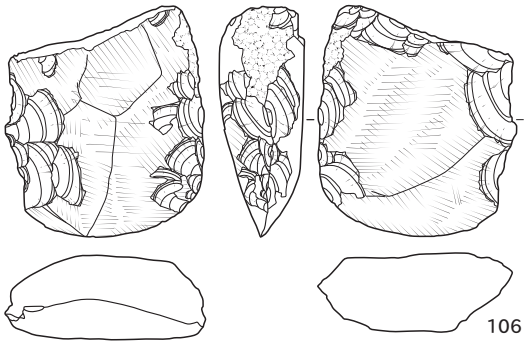


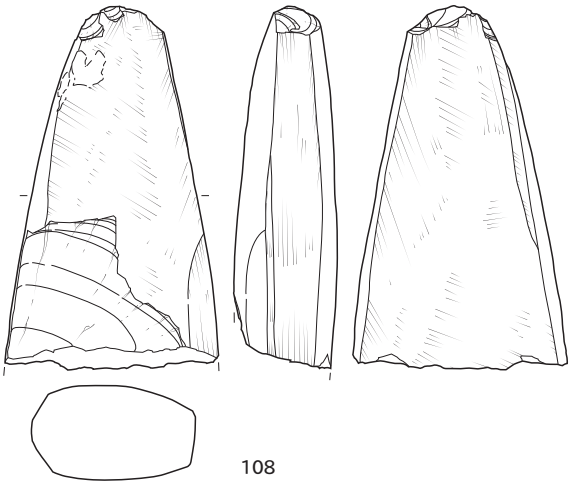
0　（全て）　10cm　(1:2)

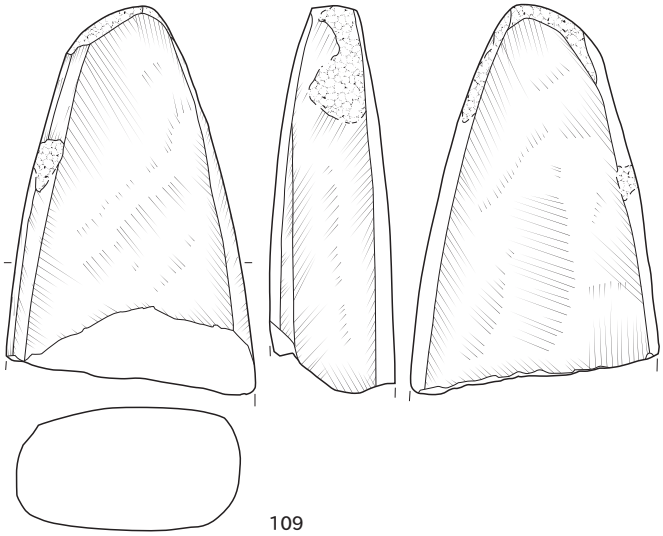


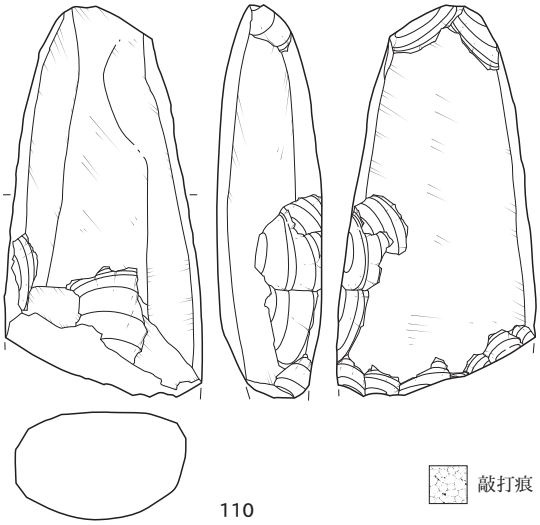


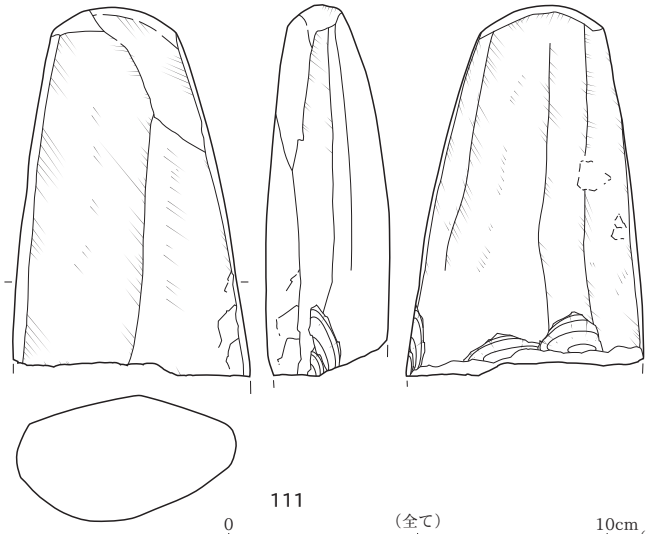




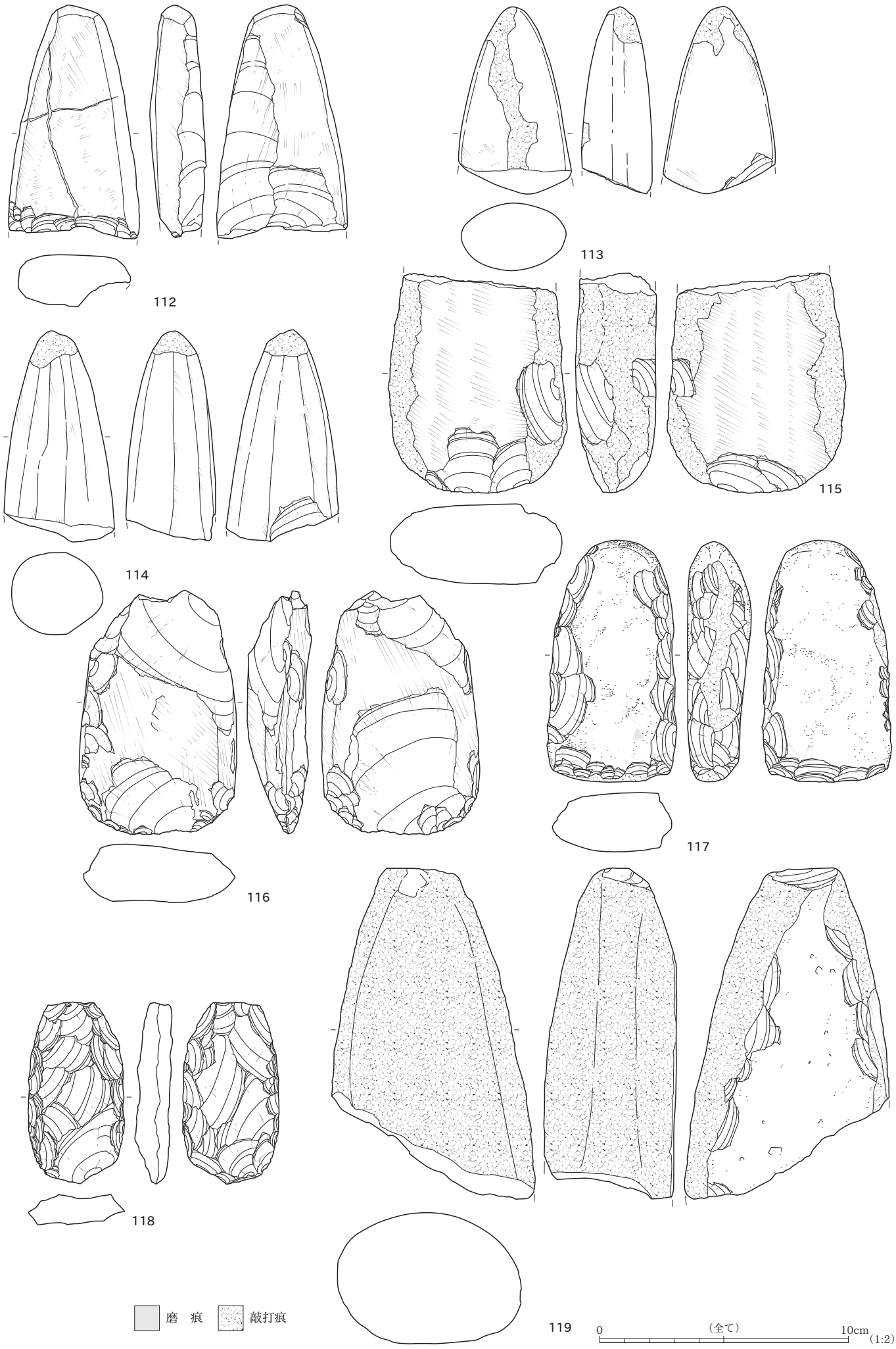


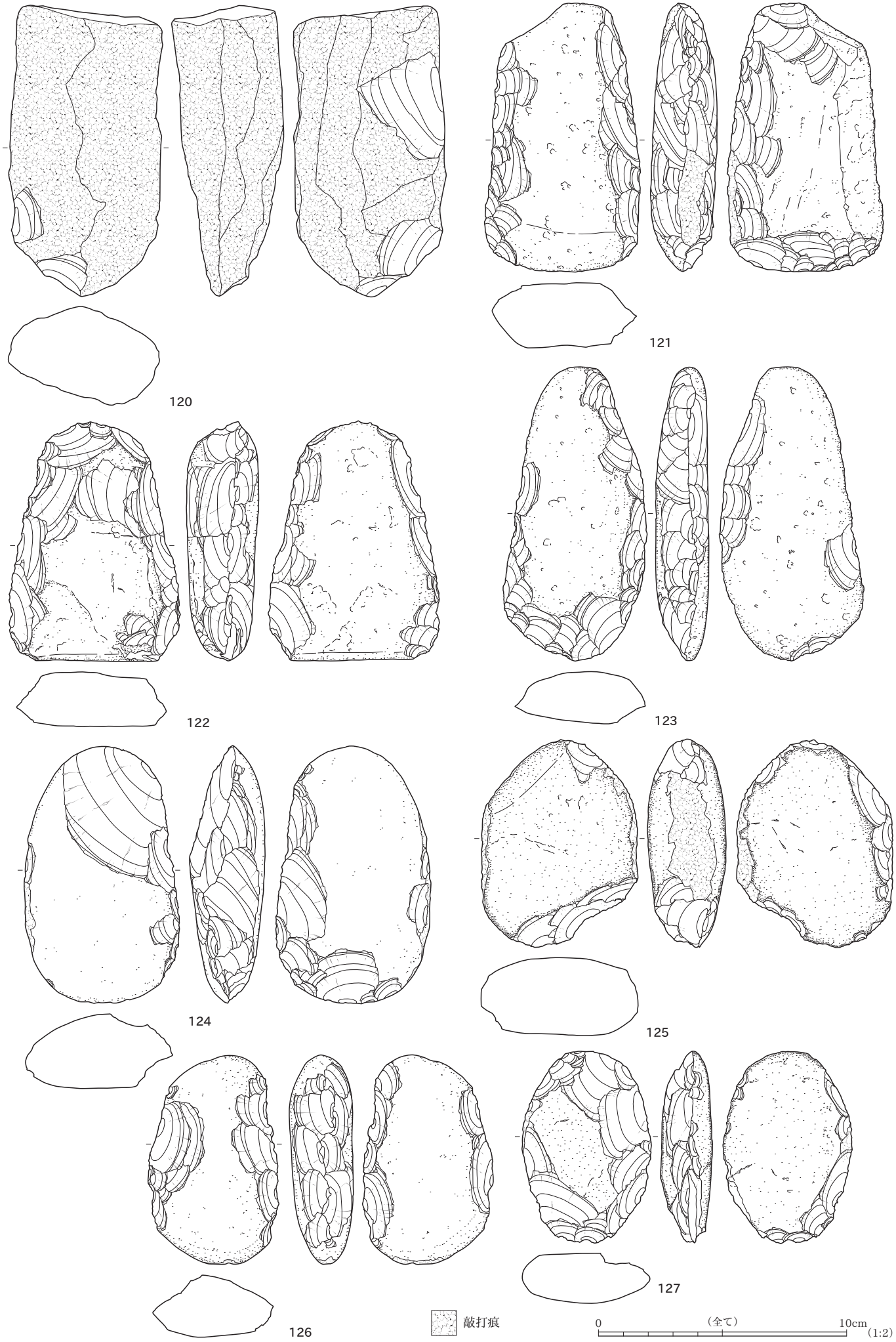


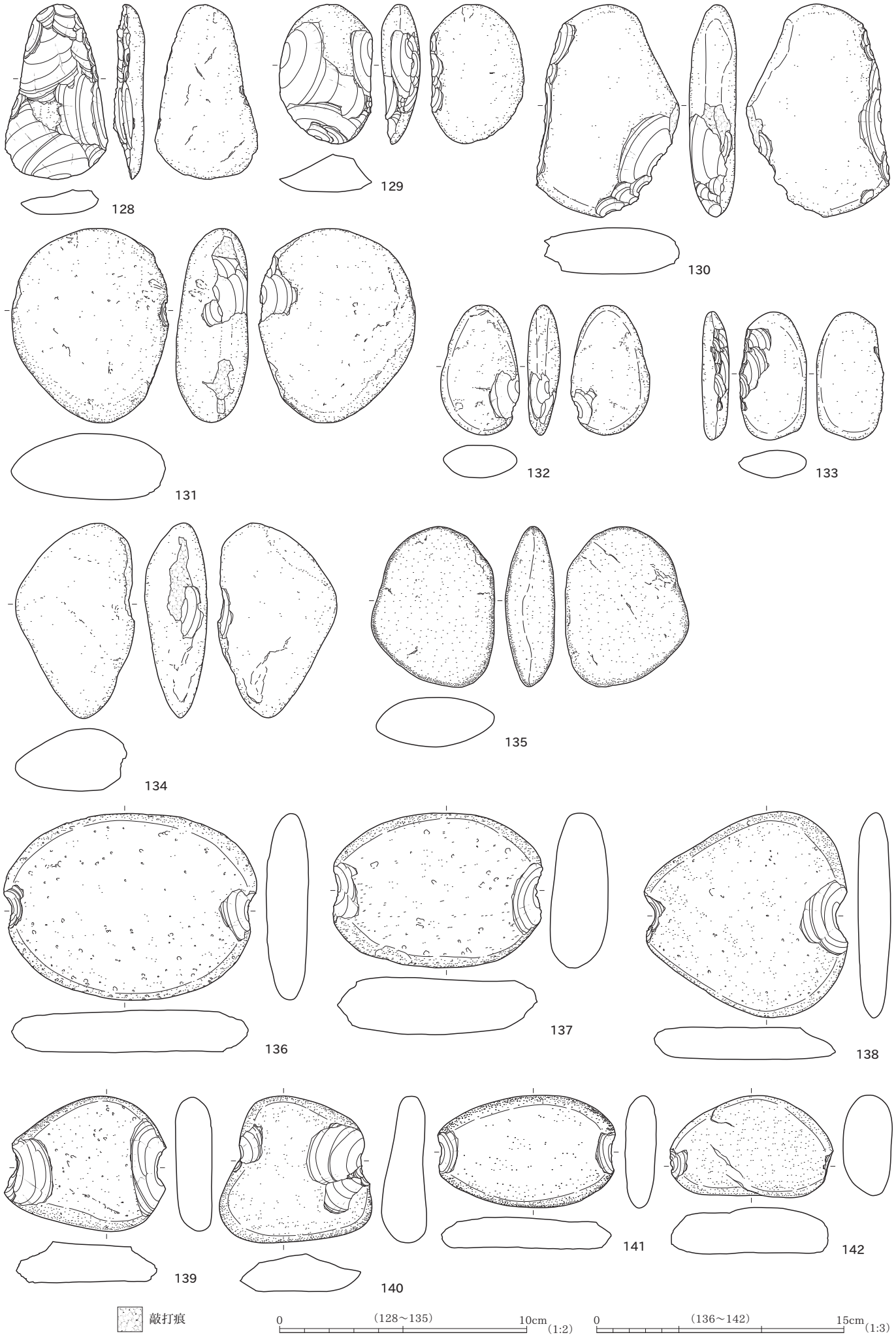


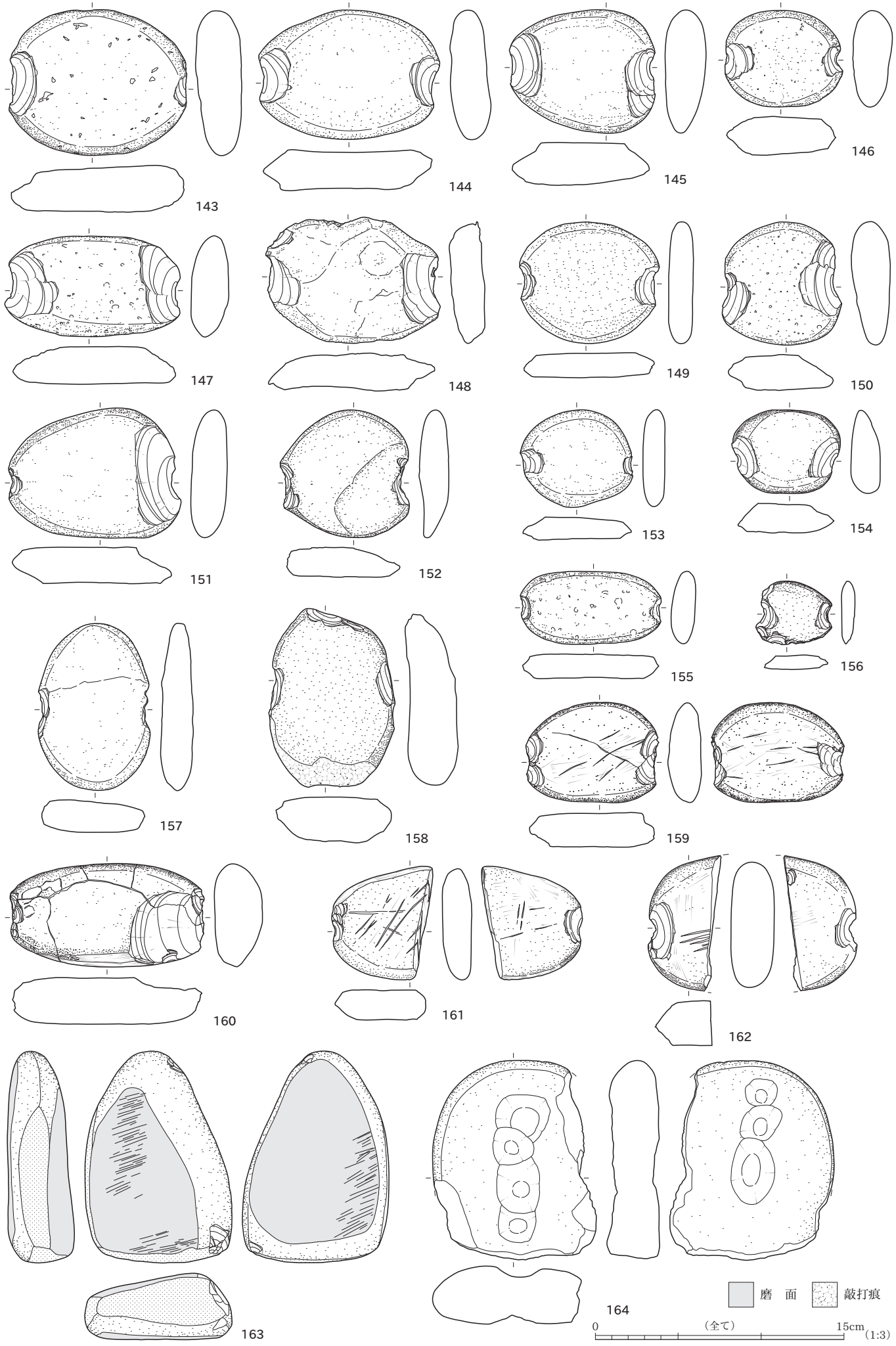


0　（全て）　10cm　（1:2）

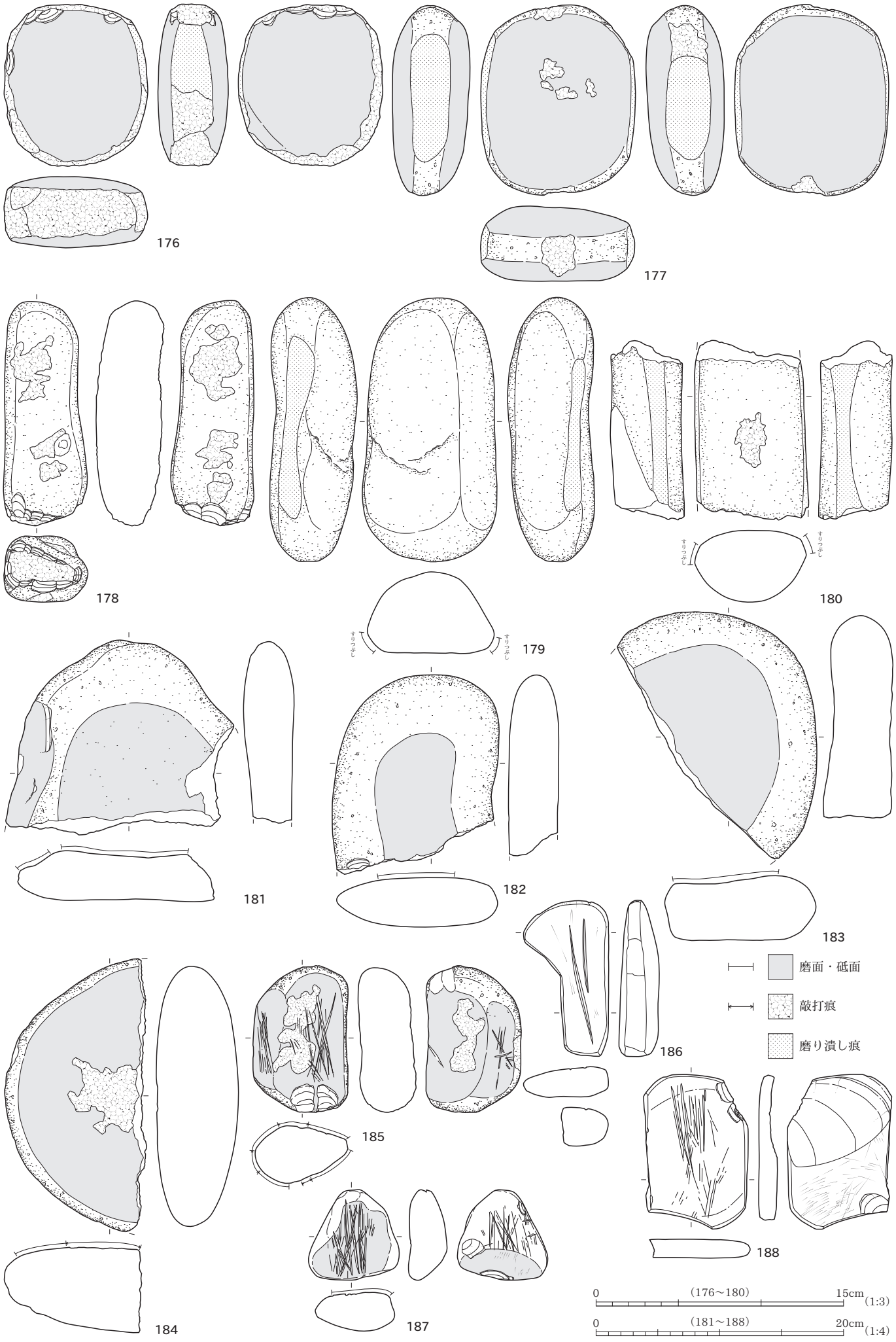

112
113
114
115
116
117
118
119
磨　痕
敲打痕
0
（全て）
10cm
(1:2)

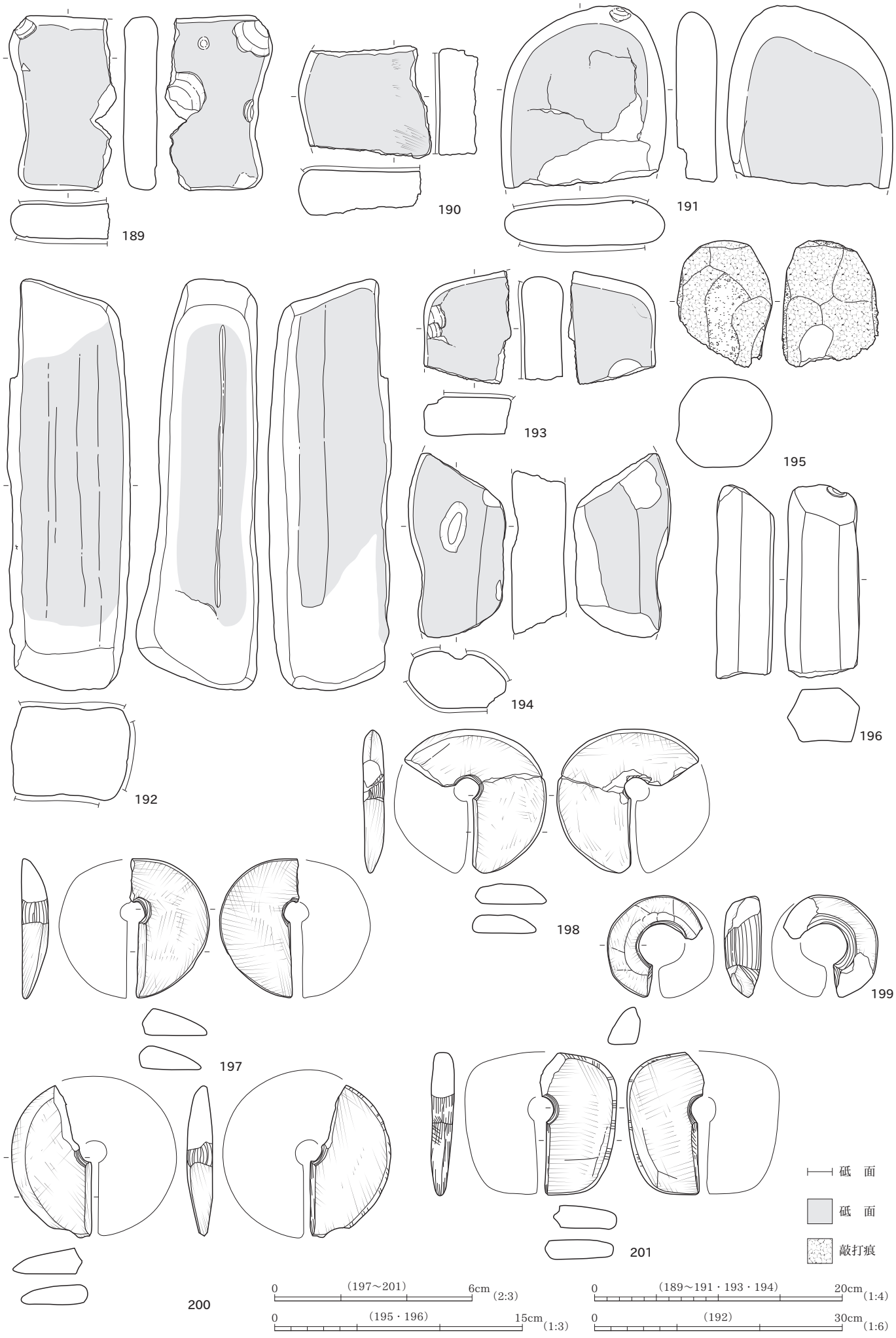

120
121
122
123
124
125
126
127
敲打痕
0
（全て）
10cm
(1:2)

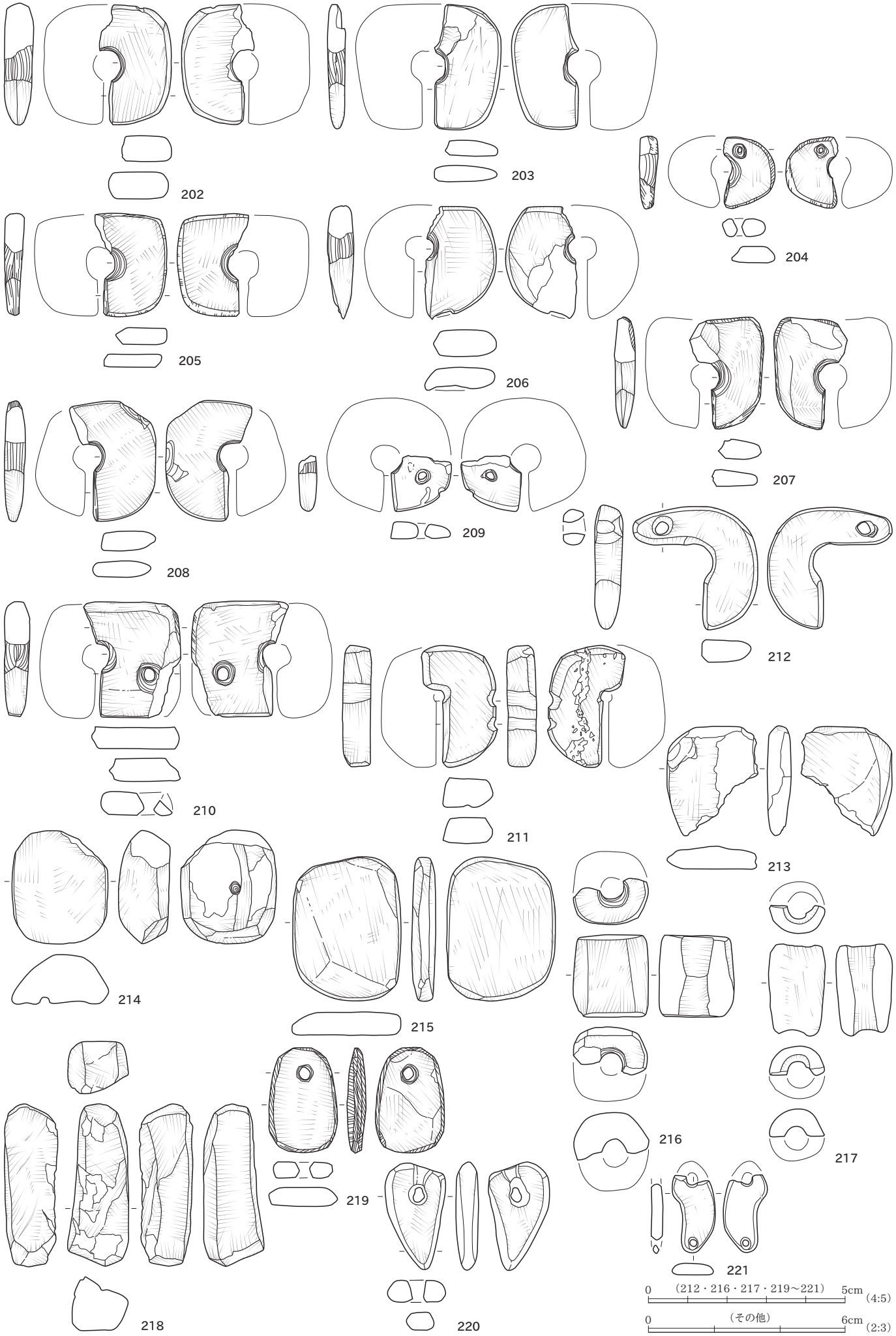

128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
敲打痕
0
(128～135)
10cm
(1:2)
0
(136～142)
15cm
(1:3)

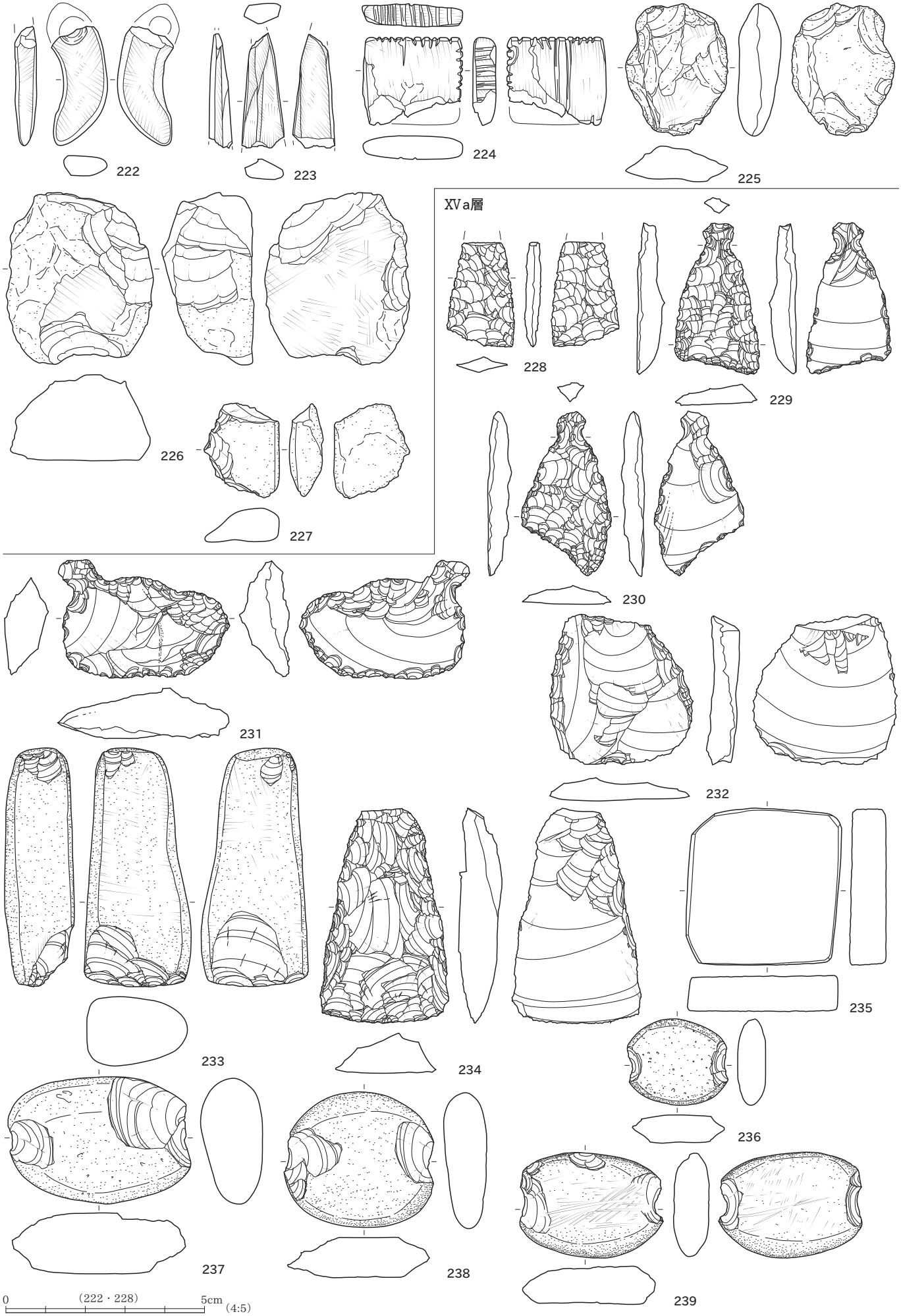

143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
磨　面
敲打痕
0
（全て）
15cm
(1:3)

165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
磨　面
磨り潰し痕
敲打痕
0
（全て）
15cm
(1:3)

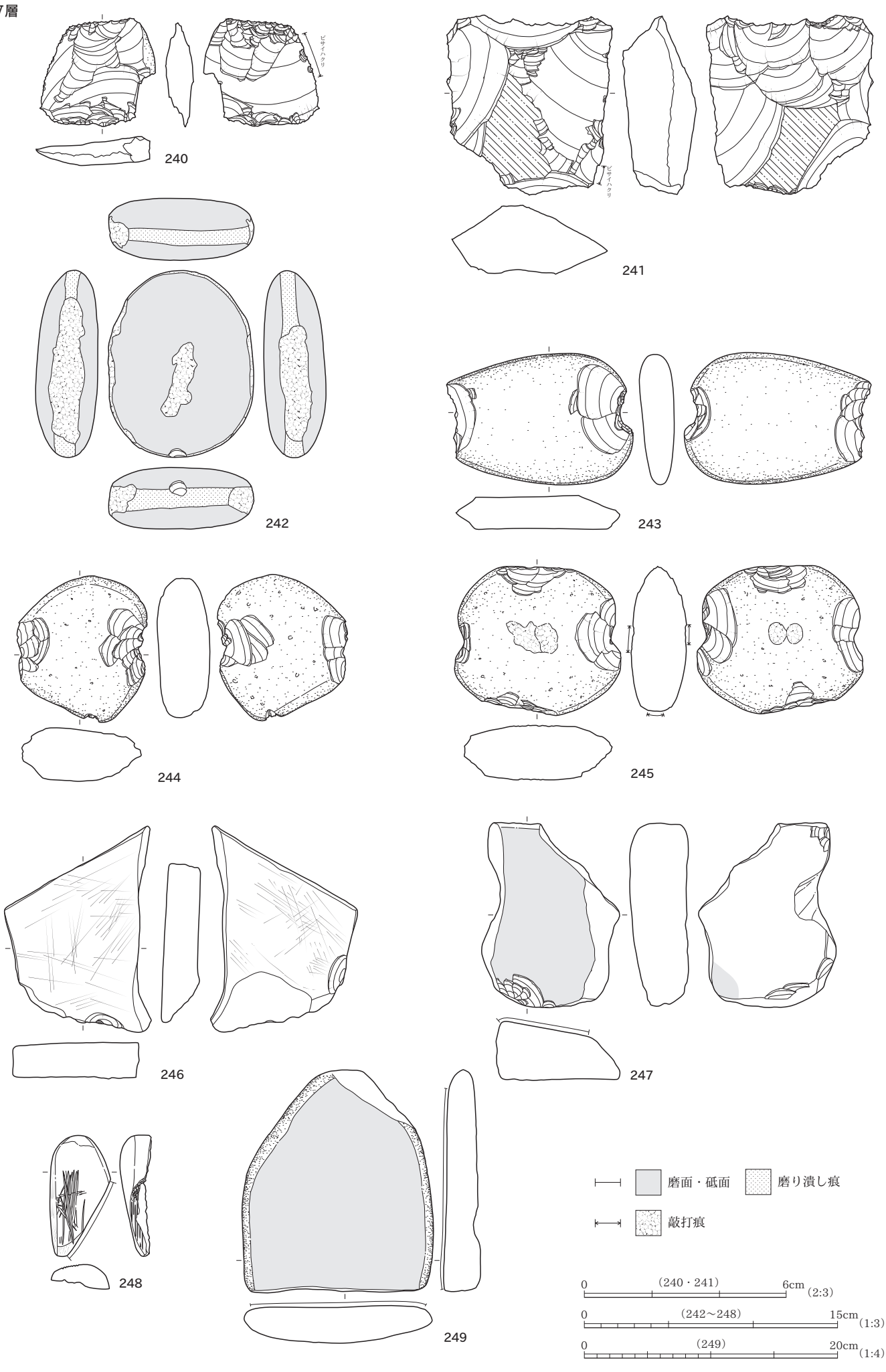

176
177
178
179
180
すりつぶし
181
182
183
184
185
186
187
188
磨面・砥面
敲打痕
磨り潰し痕
0
(176～180)
15cm
(1:3)
0
(181～188)
20cm
(1:4)


189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
砥　面
砥　面
敲打痕
0　(197～201)　6cm (2:3)
0　(189～191・193・194)　20cm (1:4)
0　(195・196)　15cm (1:3)
0　(192)　30cm (1:6)

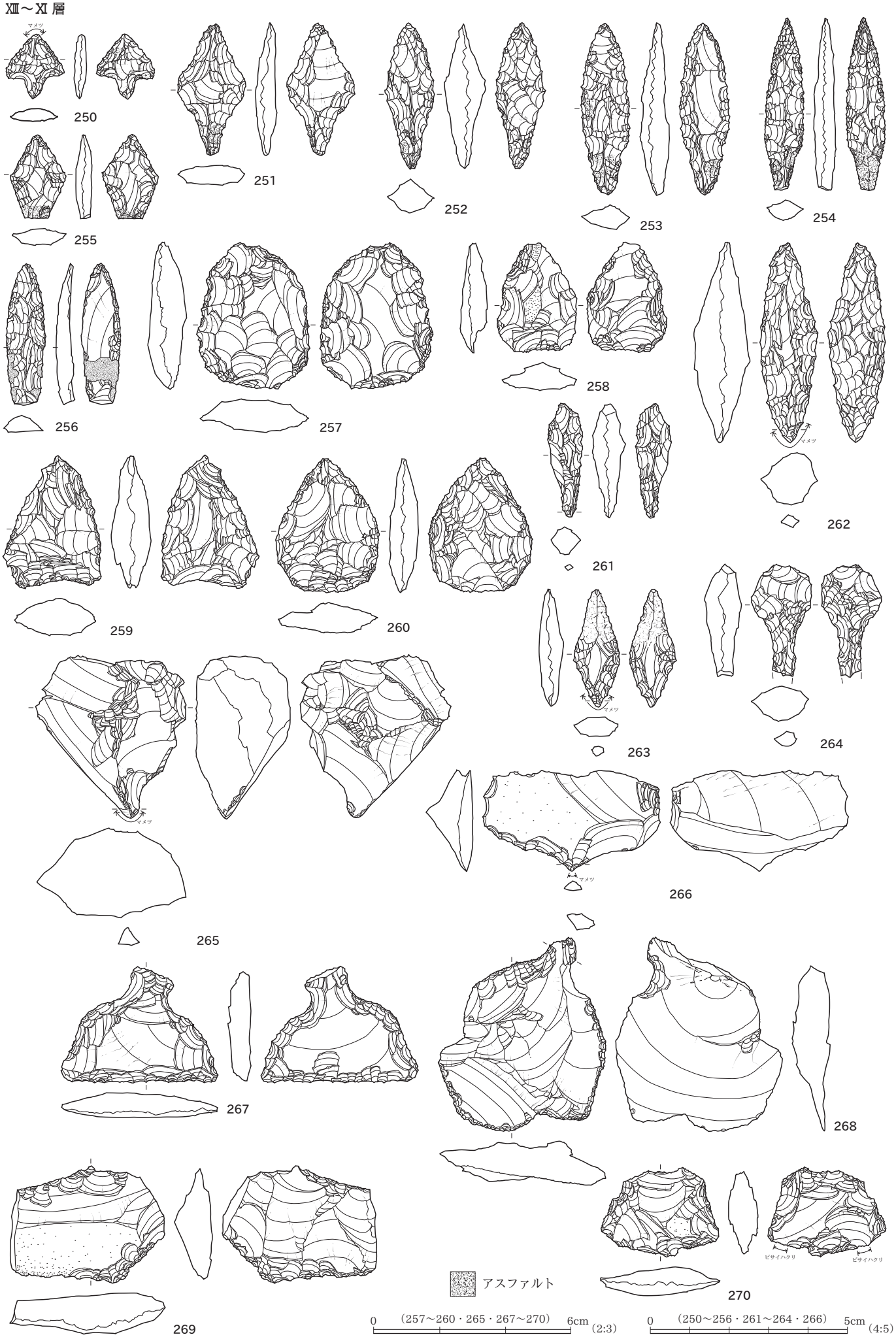

202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
0 （212・216・217・219～221） 5cm (4:5)
0 （その他） 6cm (2:3)

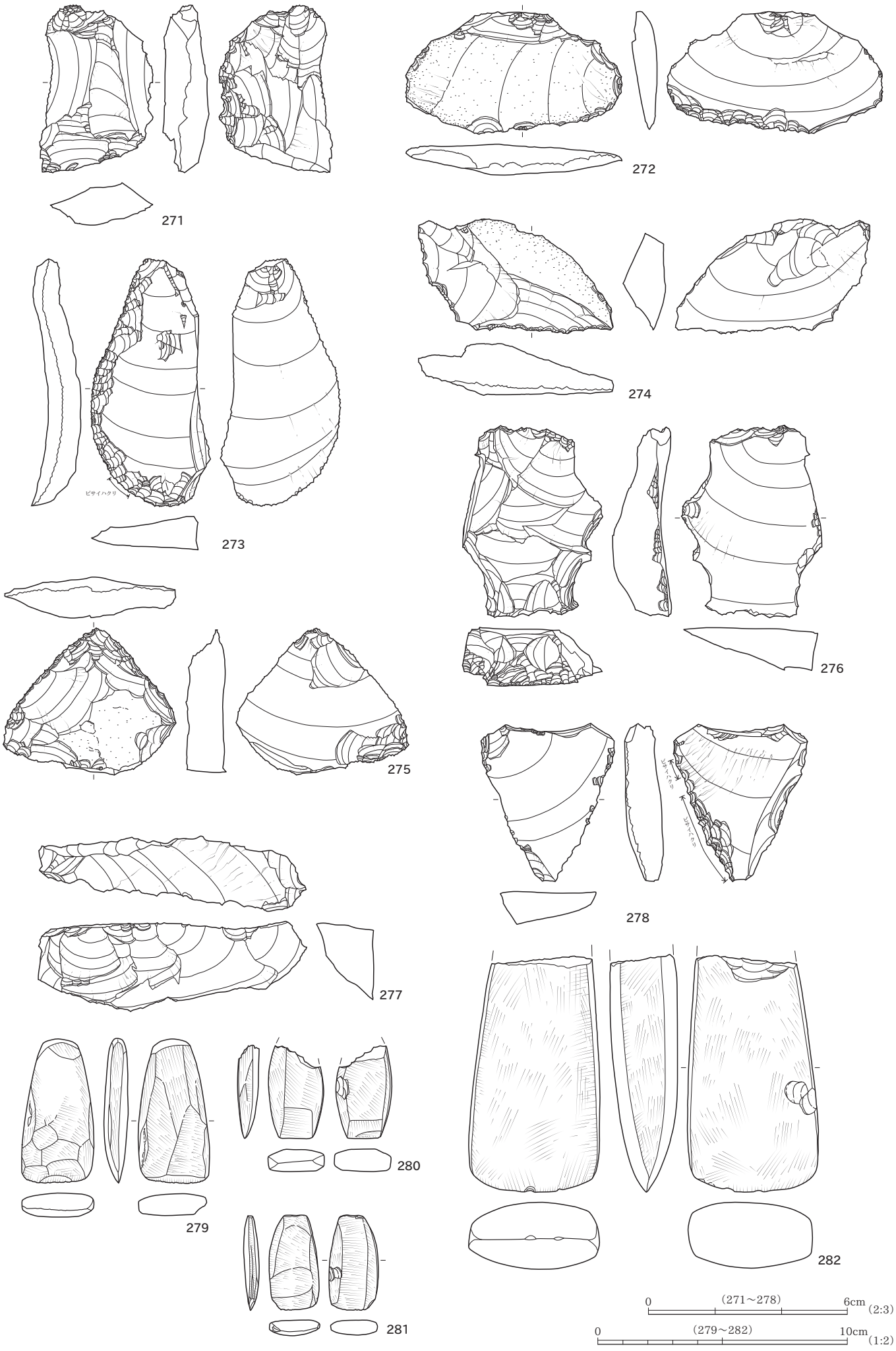

222
223
224
225
XVa層
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
0 (222・228) 5cm (4:5)
0 (223～227・229～232・234) 6cm (2:3)
0 (233・236～239) 15cm (1:3)
0 (235) 20cm (1:4)

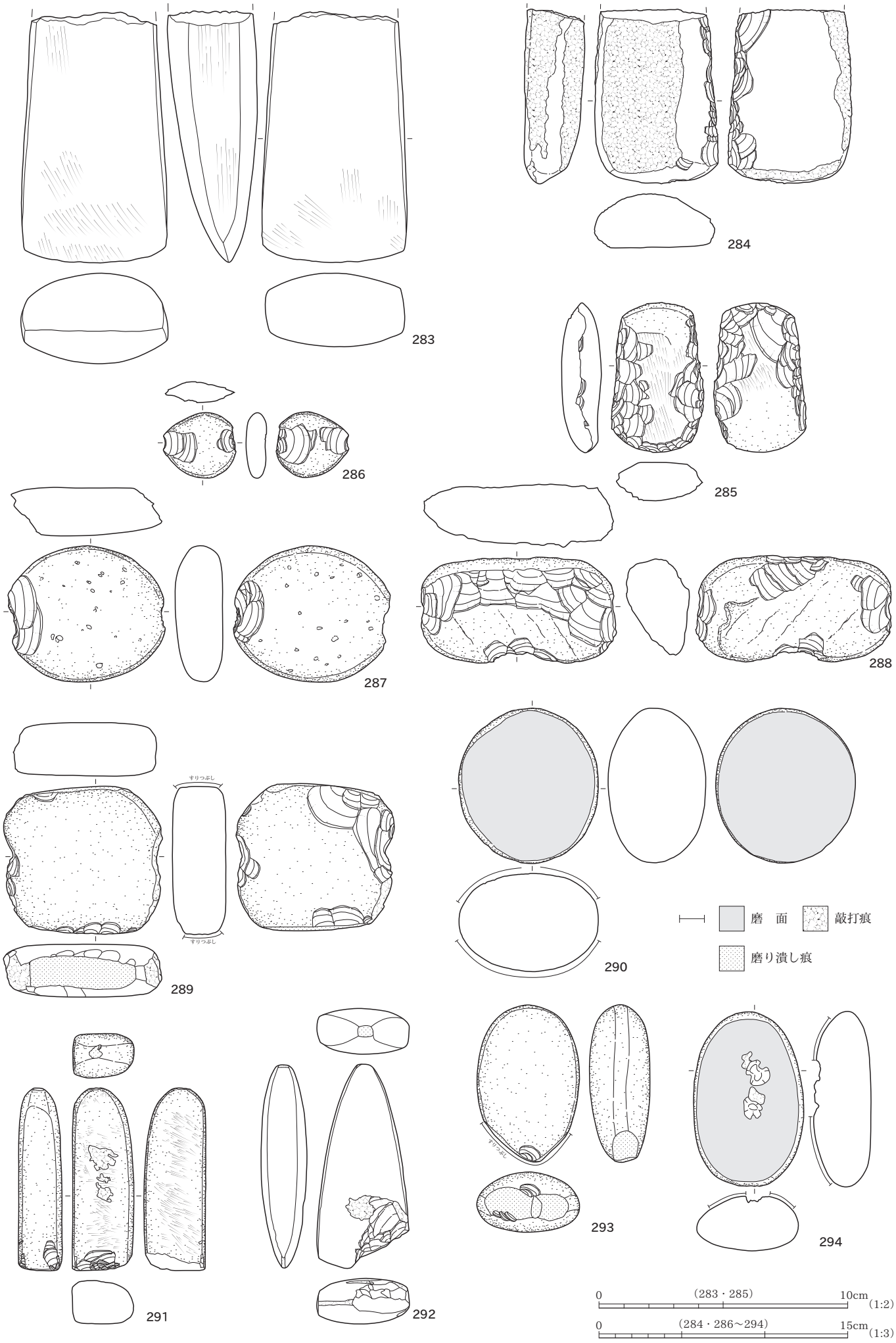
XIV層

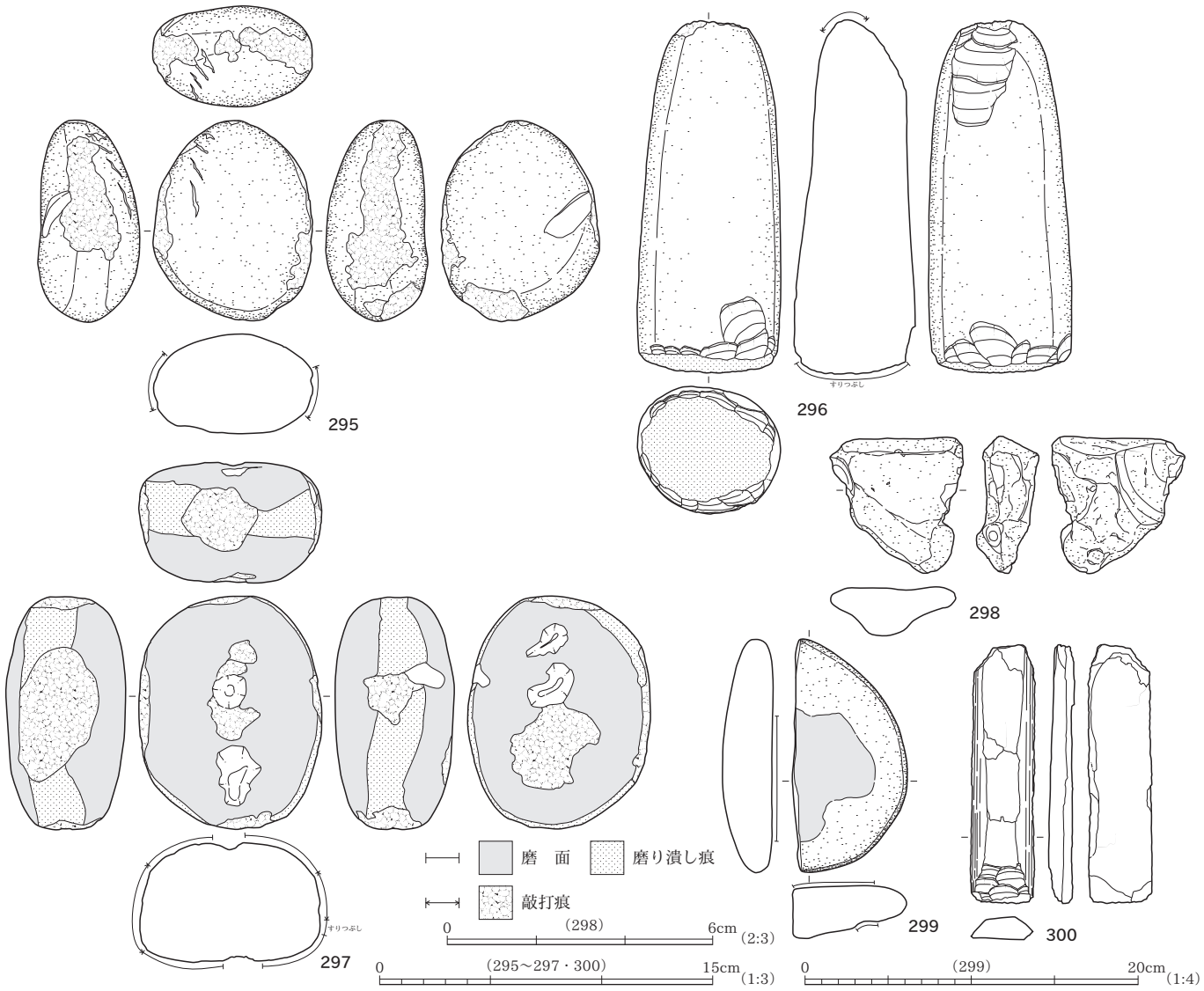

ビサイハクリ
240
ビサイハクリ
241
242
243
244
245
246
247
248
249
磨面・砥面
磨り潰し痕
敲打痕
0 (240・241) 6cm (2:3)
0 (242～248) 15cm (1:3)
0 (249) 20cm (1:4)

XIII～XI 層

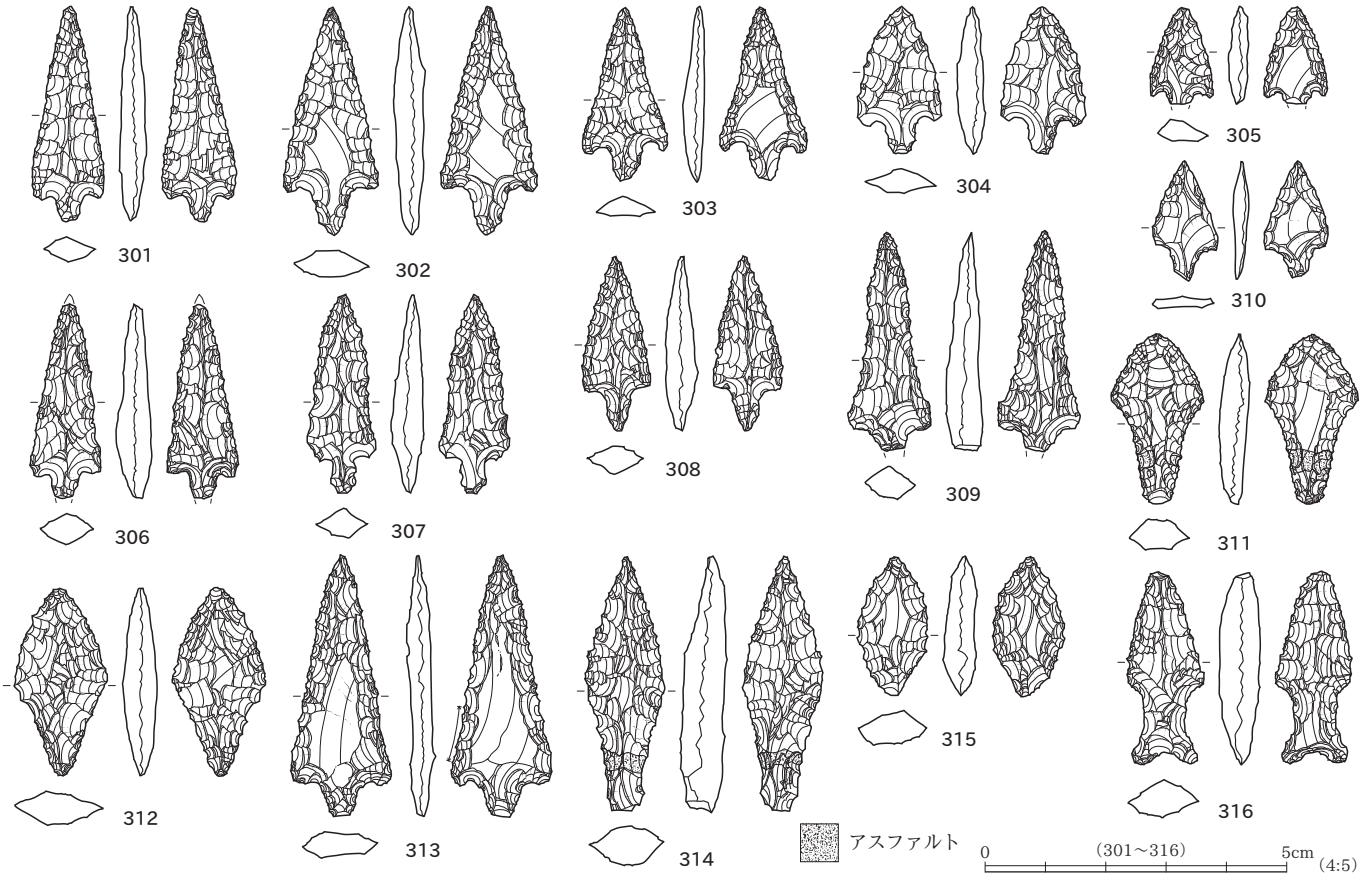

マメツ
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
ビサイハクリ
ビサイハクリ
アスファルト
0 （257～260・265・267～270） 6cm (2:3)
0 （250～256・261～264・266） 5cm (4:5)

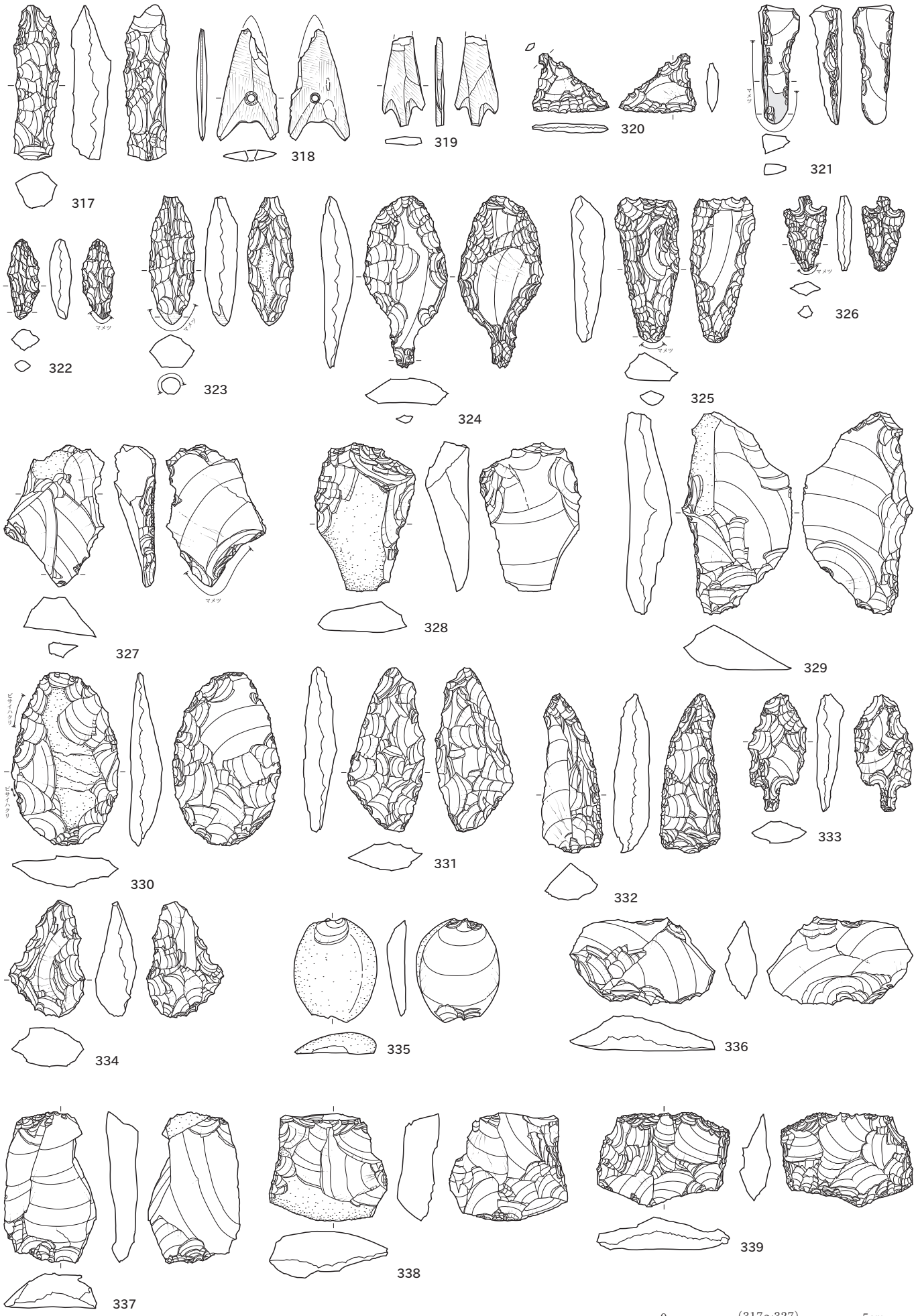

271
272
273
ビサイハクリ
274
275
276
277
278
279
280
281
282
0 (271～278) 6cm (2:3)
0 (279～282) 10cm (1:2)

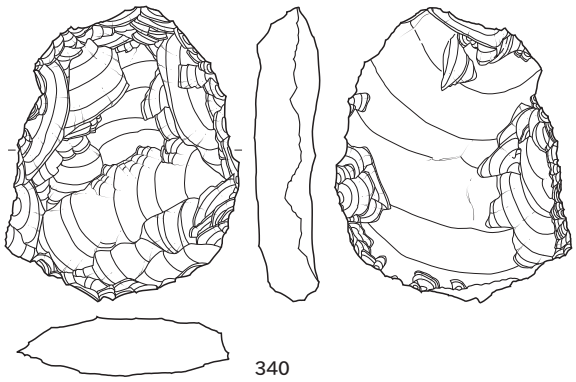

283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
すりつぶし
すりつぶし
すりつぶし
磨　面
敲打痕
磨り潰し痕
0
(283・285)
10cm
(1:2)
0
(284・286～294)
15cm
(1:3)

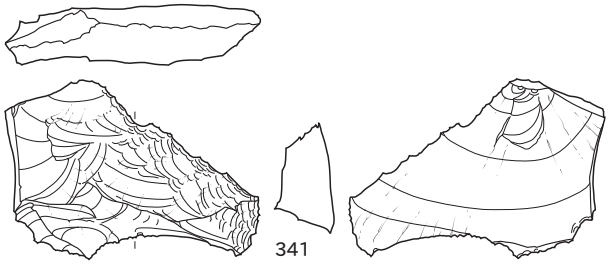

295
296
すりつぶし
297
298
299
300
磨　面
磨り潰し痕
敲打痕
0 (298) 6cm (2:3)
0 (295～297・300) 15cm (1:3)
0 (299) 20cm (1:4)

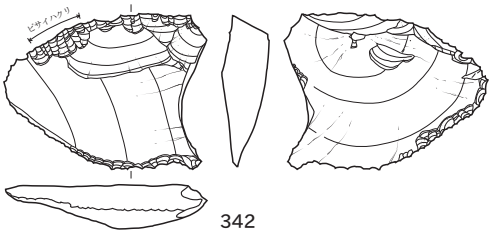
IX層より上層

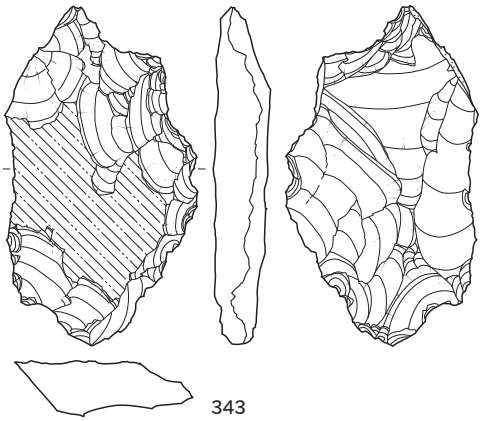

301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
アスファルト
0 (301～316) 5cm (4:5)

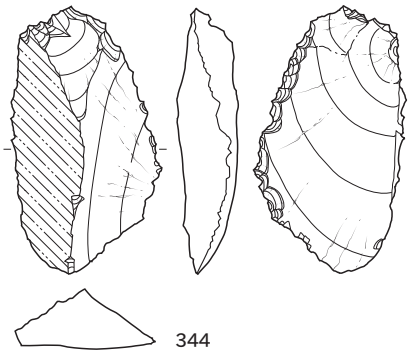

317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
使用痕
0 (317～327) 5cm (4:5)
0 (328～339) 6cm (2:3)

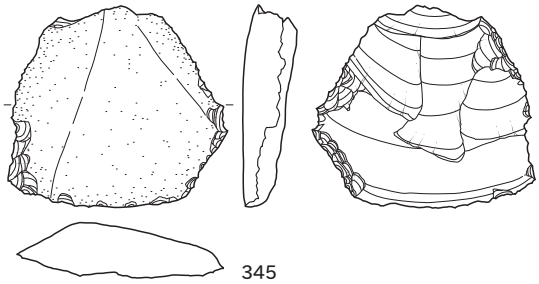

340

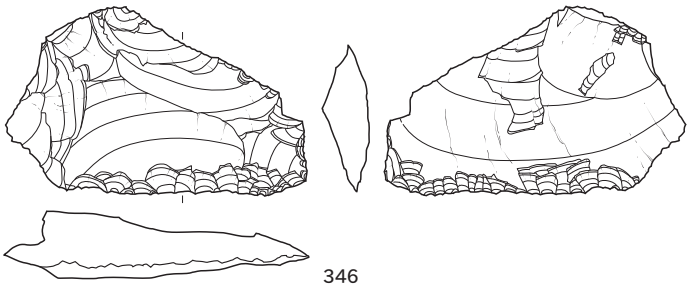

341

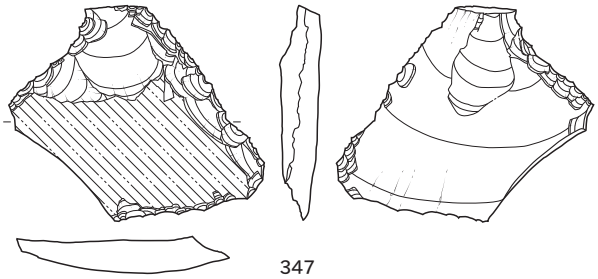

342

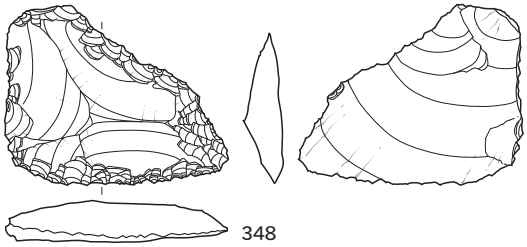

343

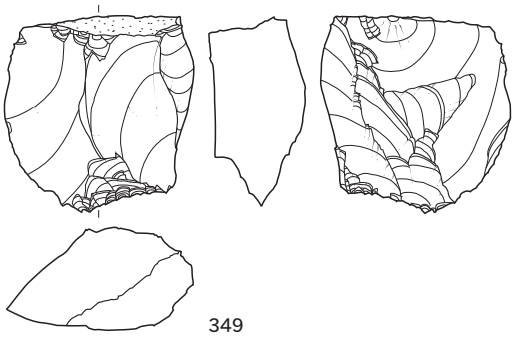

344

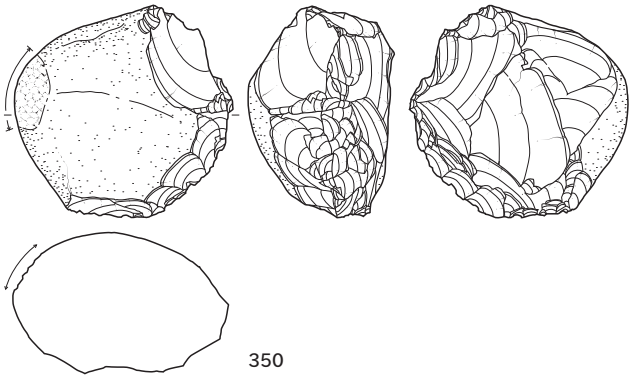

345


346


347


348

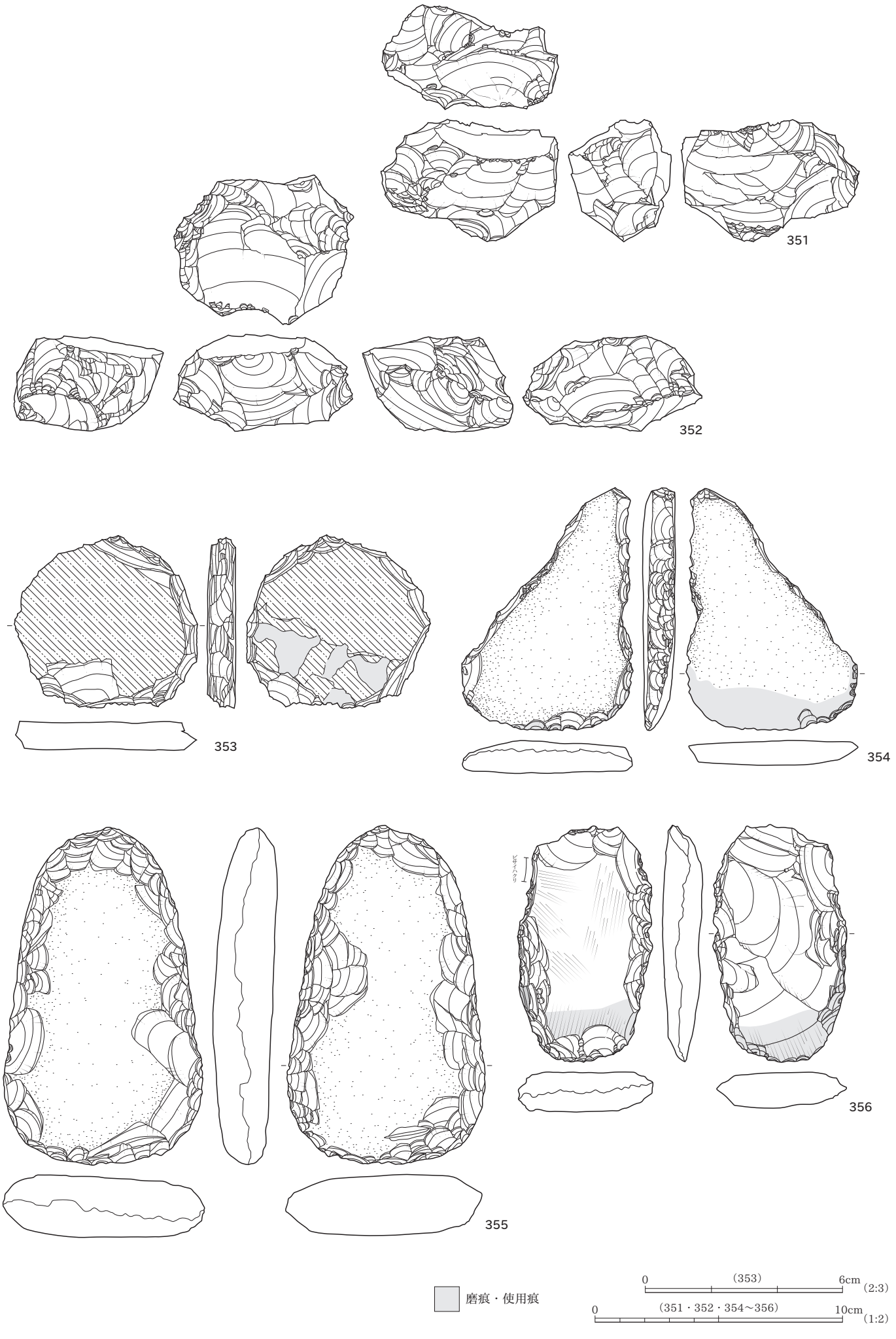

349


350

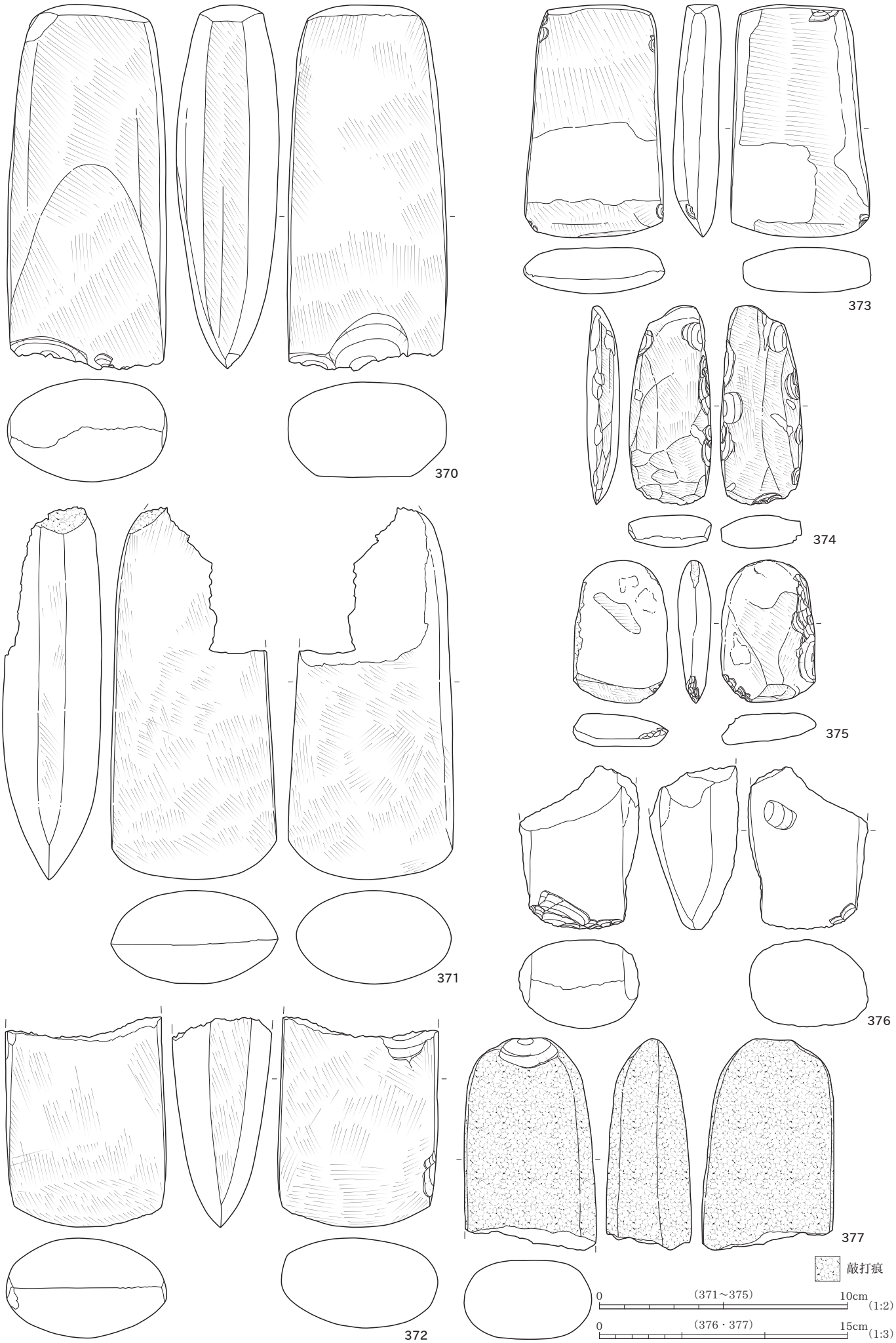
敲打痕

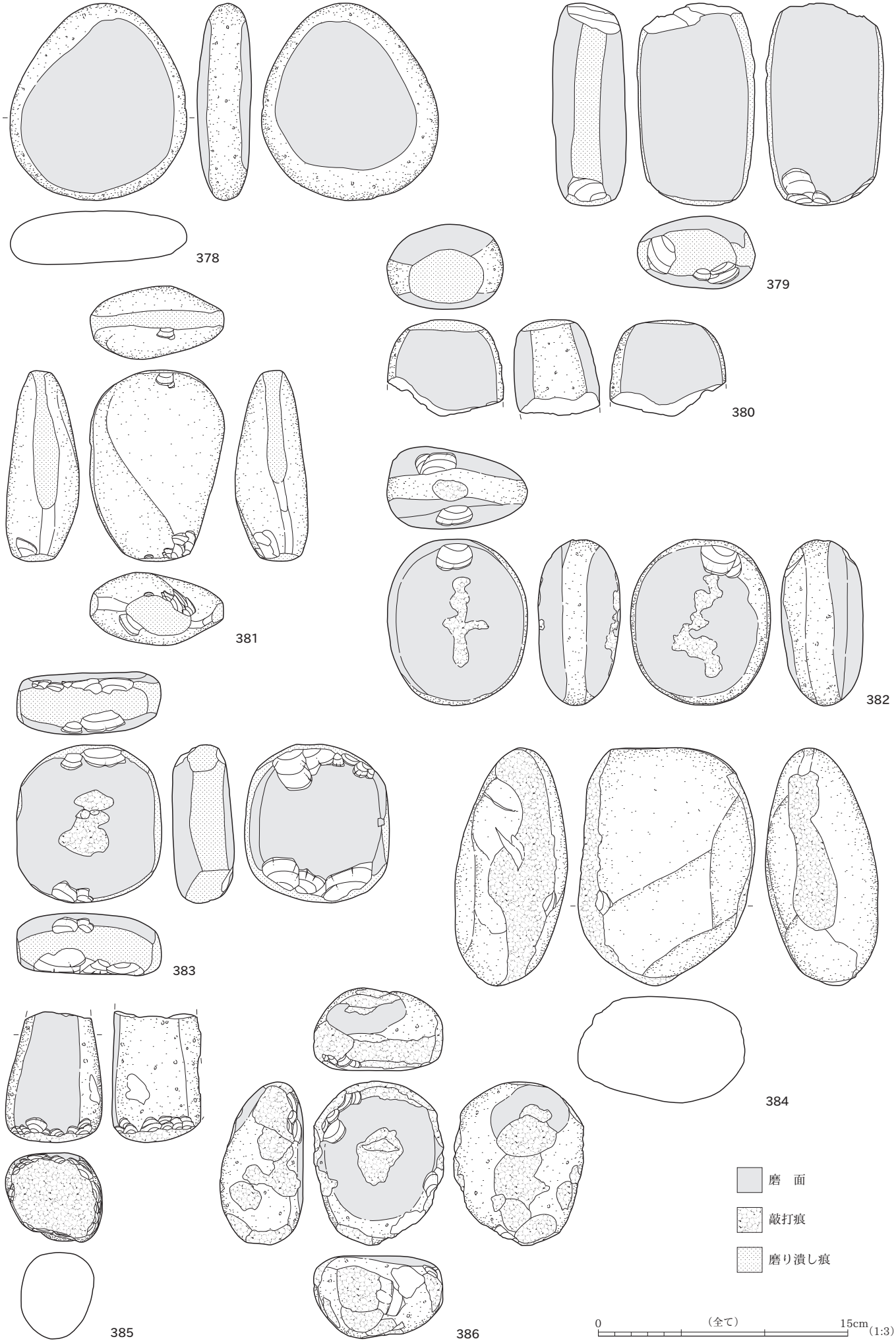
0 (340～349) 6cm (2:3)

0 (350) 10cm (1:2)

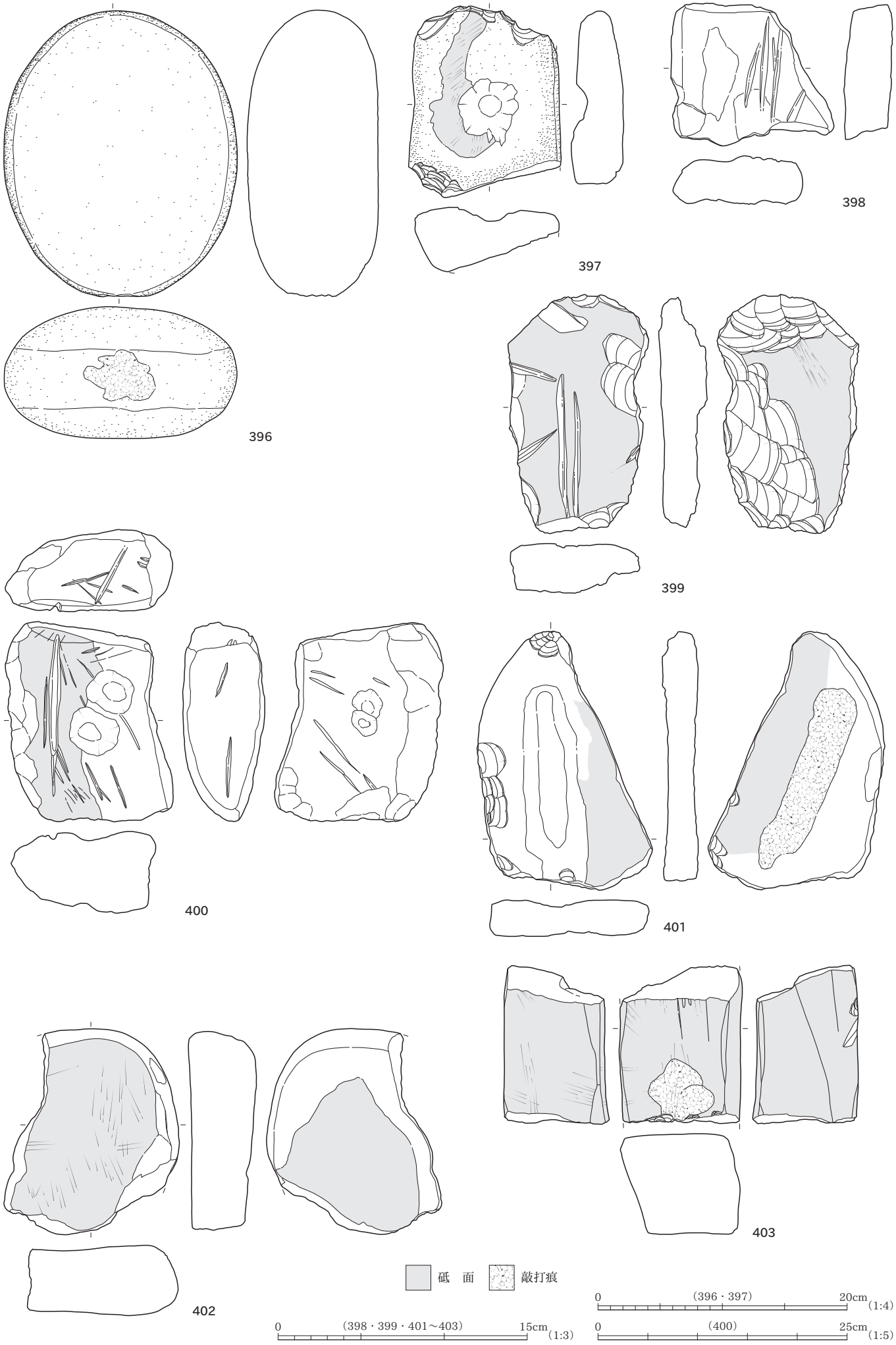

351
352
353
354
355
356
ビサイハクリ
磨痕・使用痕
0
(353)
6cm
(2:3)
0
(351・352・354～356)
10cm
(1:2)

357
358
364
359
360
365
361
362
363
366
367
368
369
0
（全て）
10cm
（1:2）

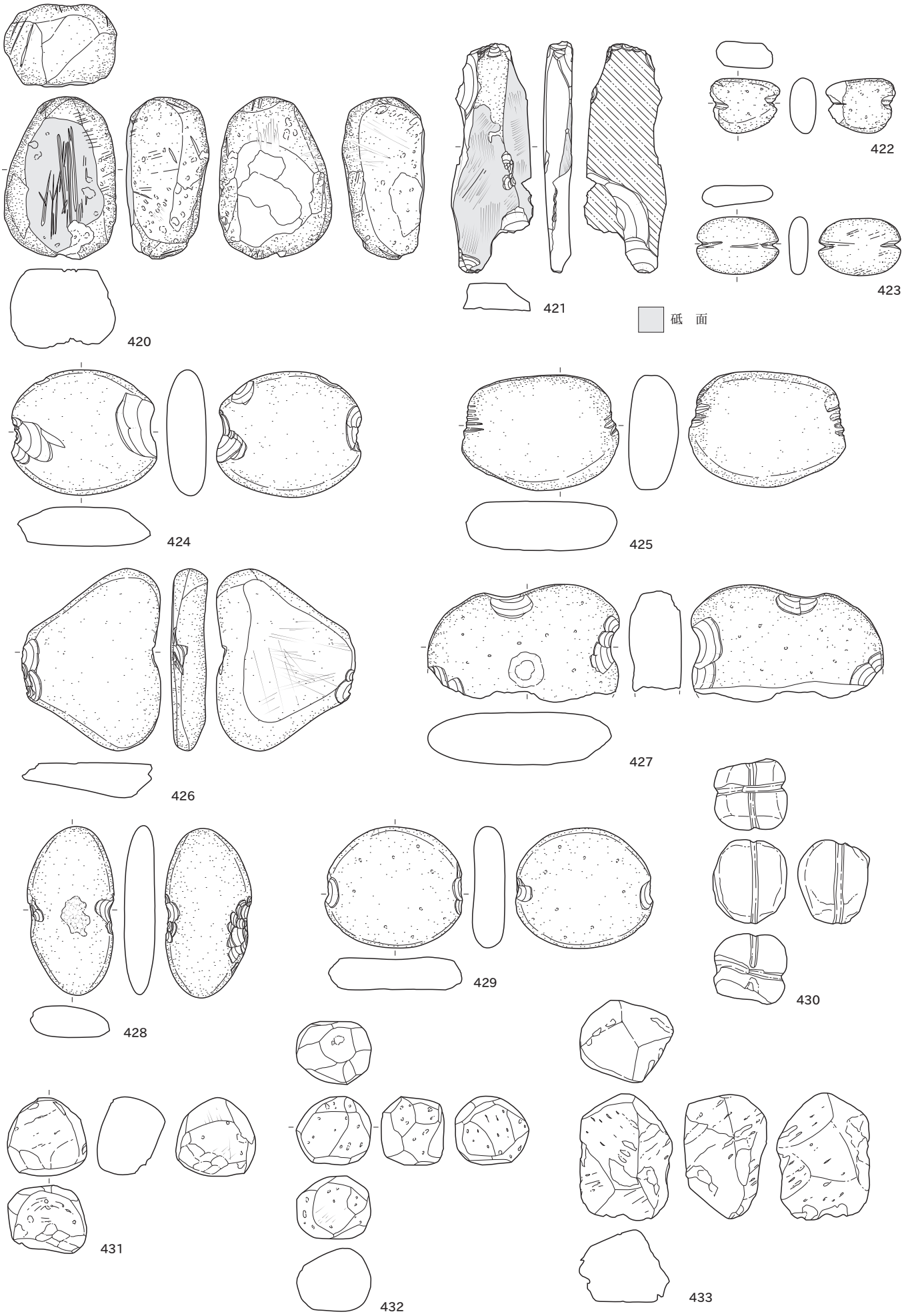

370
371
372
373
374
375
376
377
敲打痕
0　(371～375)　10cm (1:2)
0　(376・377)　15cm (1:3)

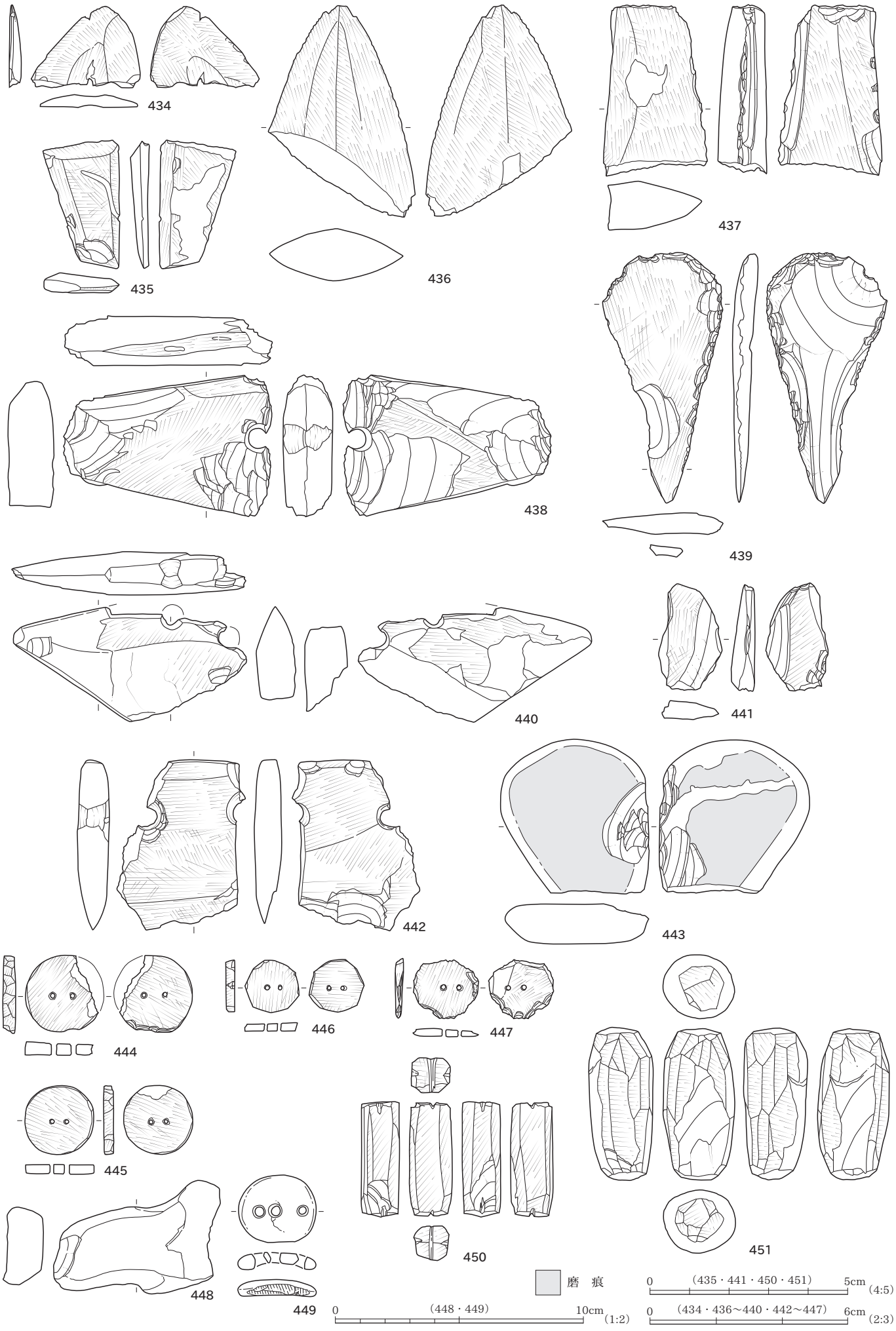

378
379
380
381
382
383
384
385
386
磨　面
敲打痕
磨り潰し痕
0
（全て）
15cm
(1:3)

387
388
389
390
391
392
393
394
395
磨　面
磨り潰し痕
敲打痕
0
(387～393)
15cm
(1:3)
0
(394・395)
20cm
(1:4)


396
397
398
399
400
401
402
403
砥　面
敲打痕
0 (398・399・401～403) 15cm (1:3)
0 (396・397) 20cm (1:4)
0 (400) 25cm (1:5)

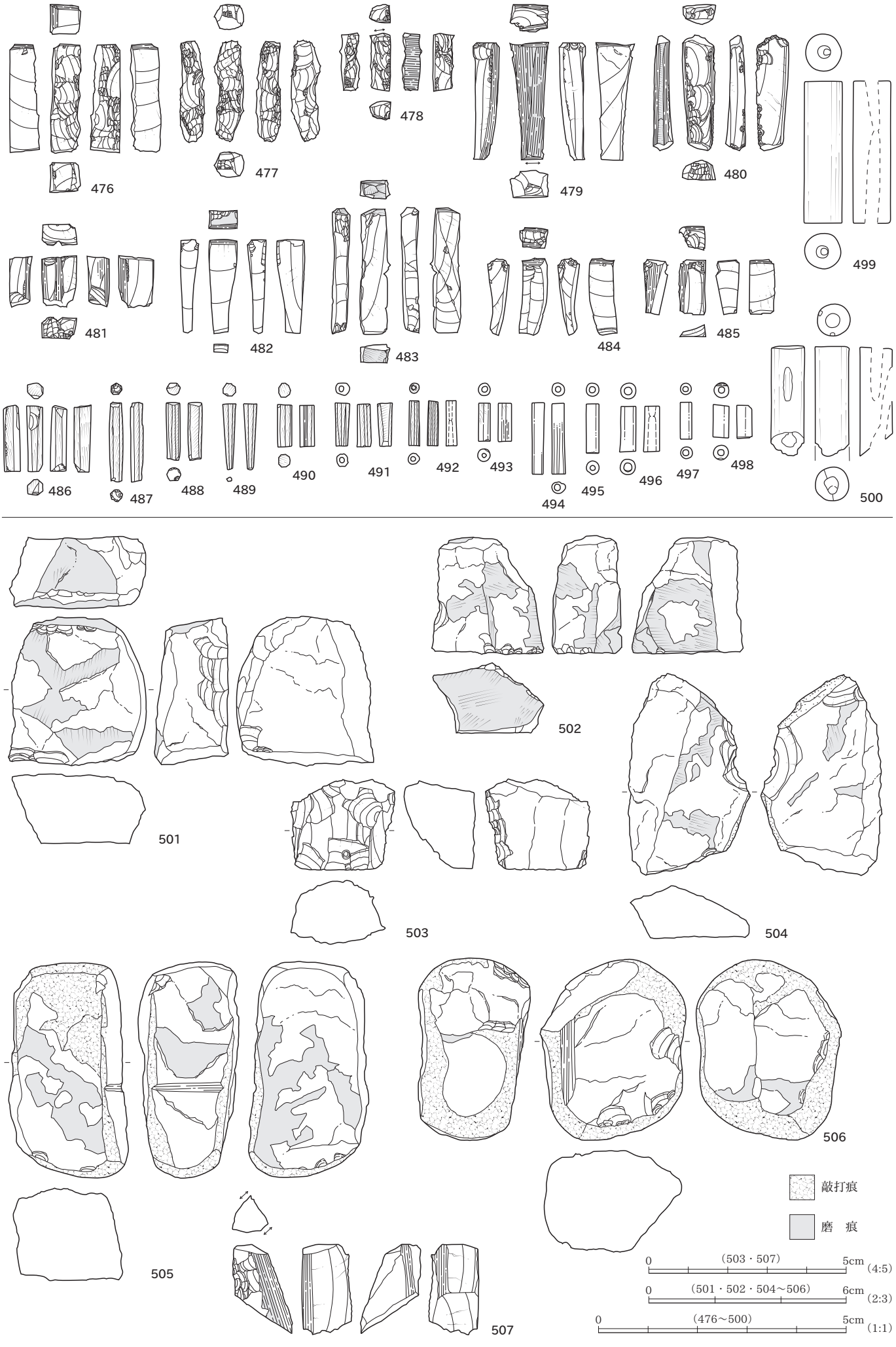
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
砥　面
敲打痕
0
（その他）
15cm
(1:3)
0
(408)
25cm
(1:5)

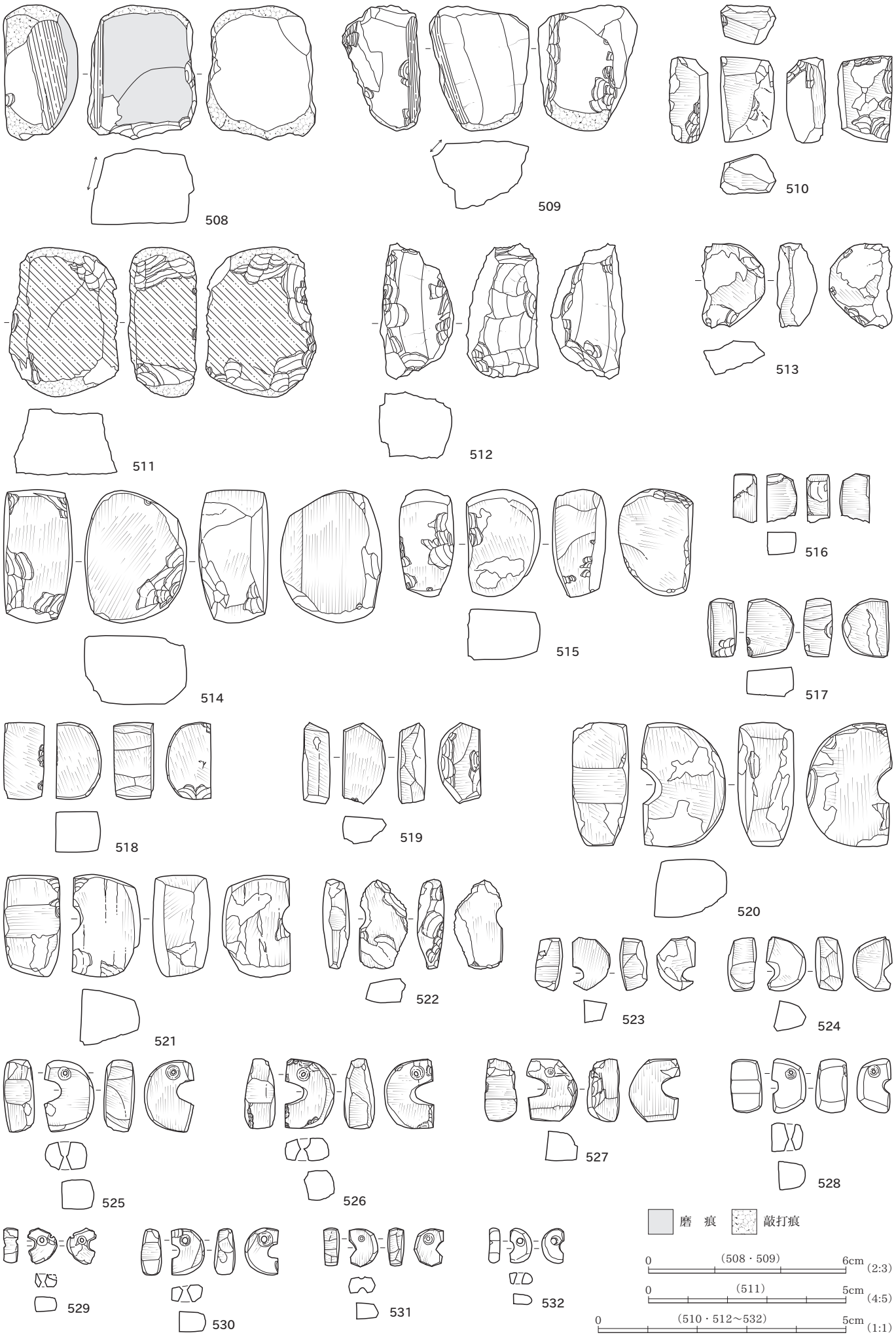

420
421
砥 面
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
0 (420～429) 15cm (1:3)
0 (430～433) 10cm (1:2)

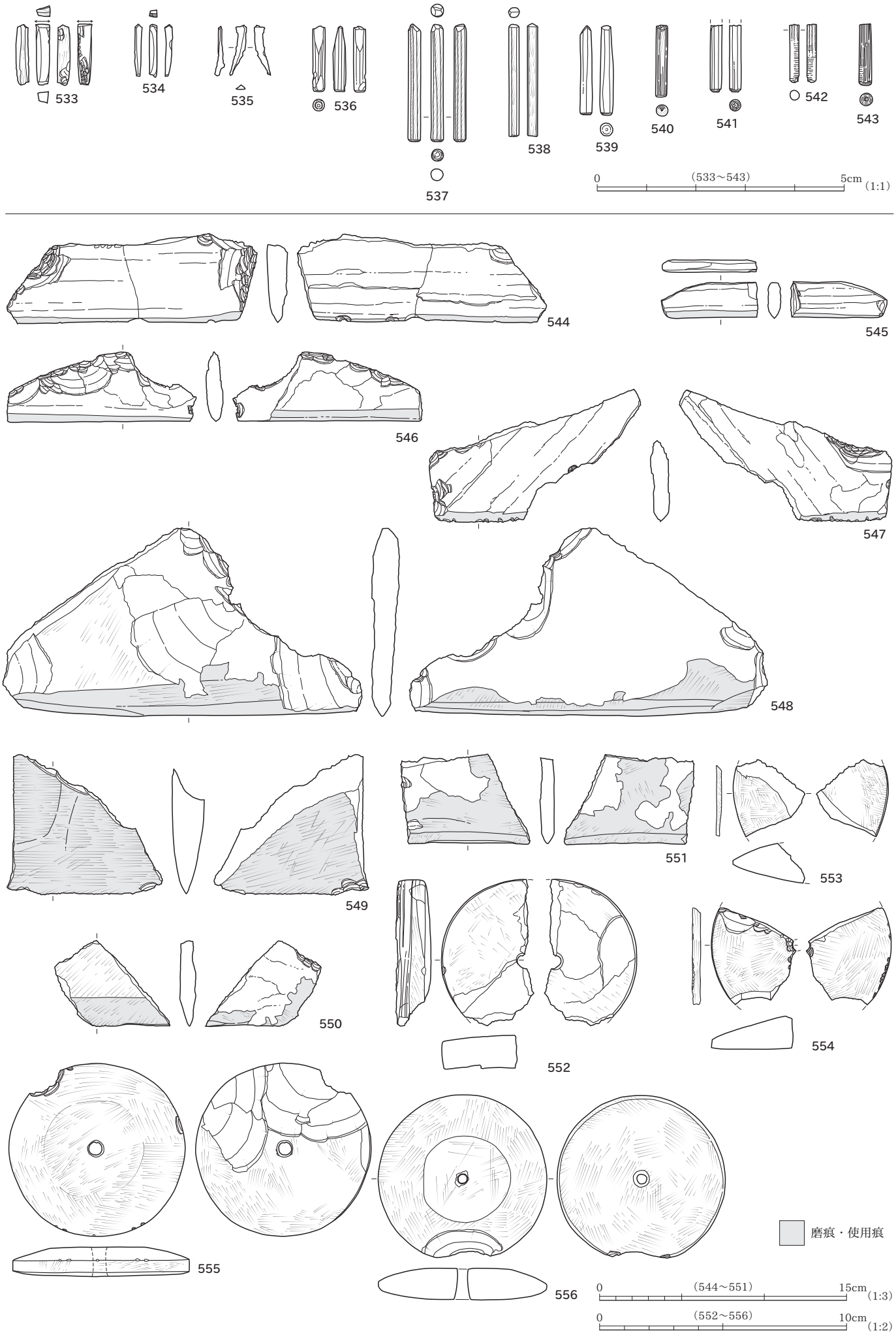

434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
磨　痕
0　（435・441・450・451）　5cm　（4:5）
0　（448・449）　10cm　（1:2）
0　（434・436～440・442～447）　6cm　（2:3）

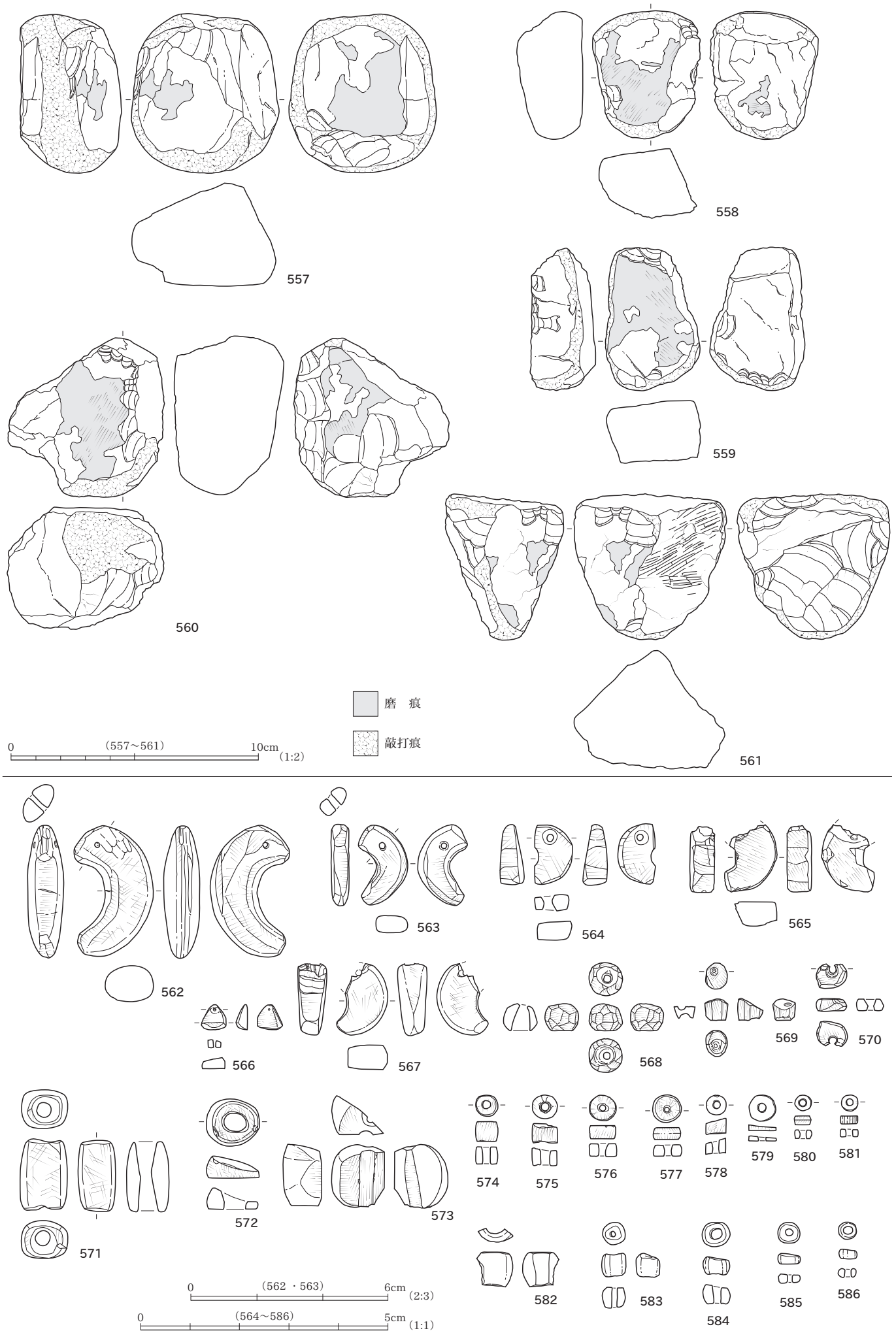
452
453
454
455
456
457
458
459
460
0 (459・460) 5cm (4:5)
0 (452・453・455・456・458) 6cm (2:3)
0 (454・457) 10cm (1:2)

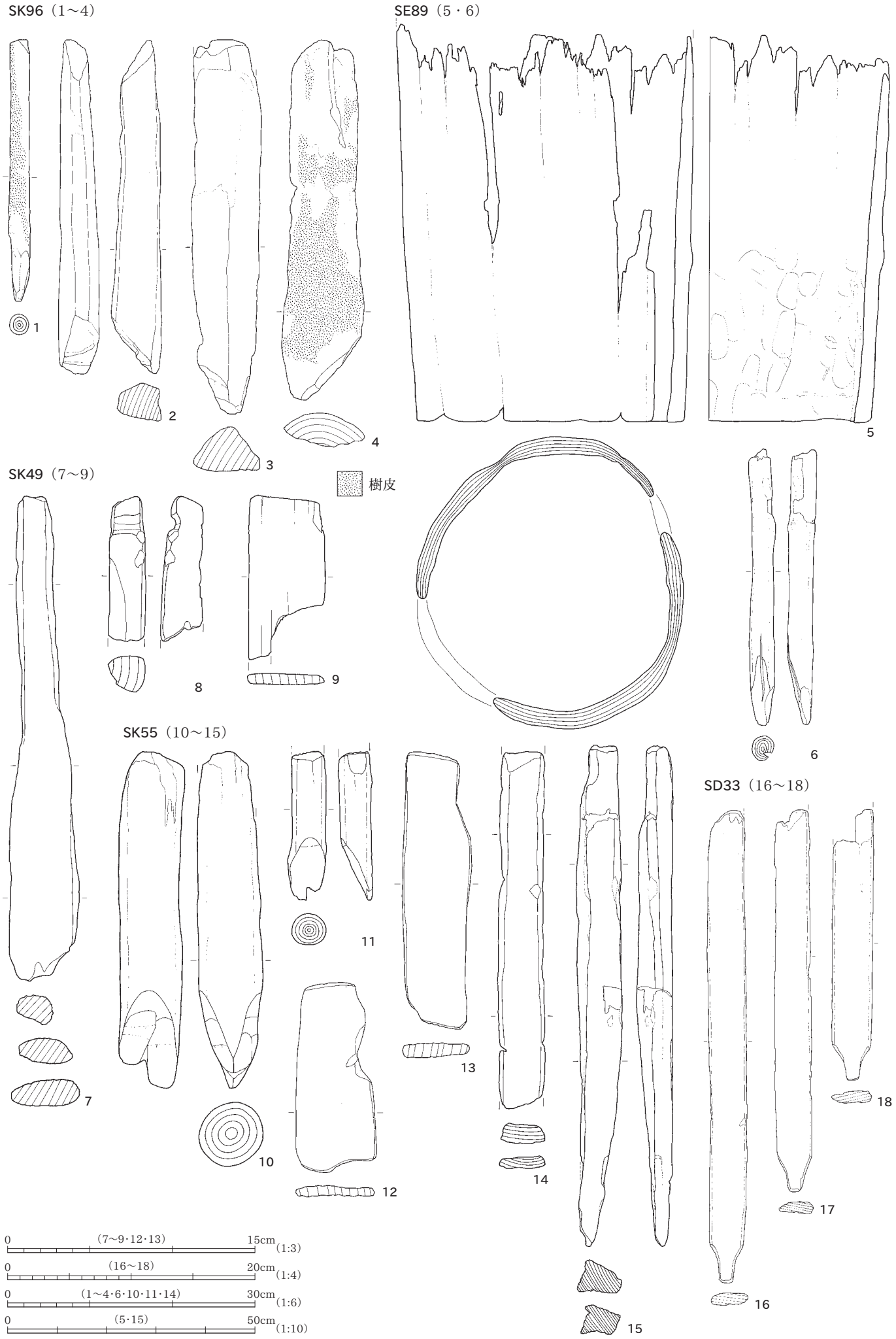
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
節　理
0　（461～465・467・469・470）　5cm（4:5）
0　（466・468・471～475）　5cm（1:1）

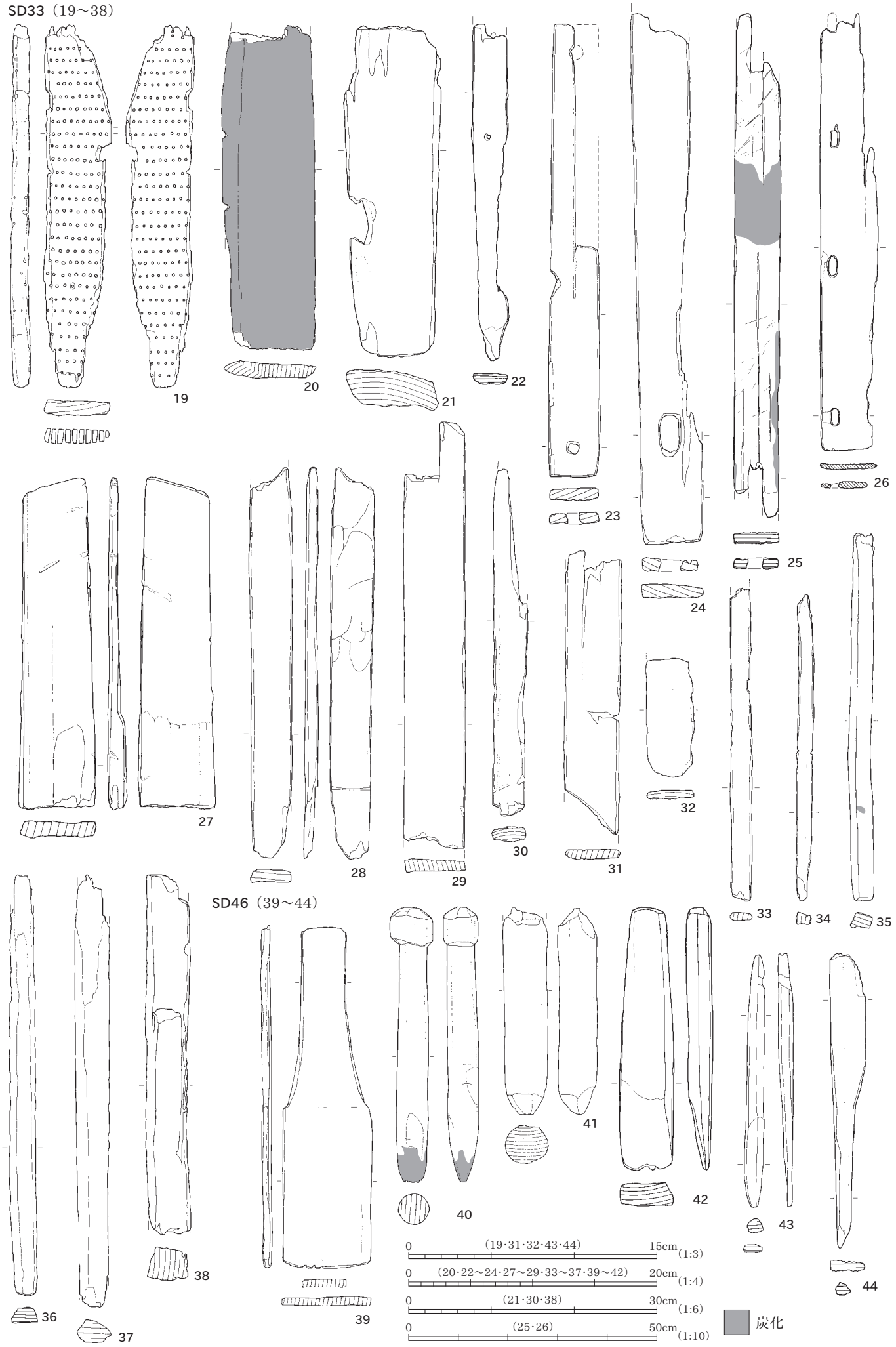

476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
敲打痕
磨　痕
0 (503・507) 5cm (4:5)
0 (501・502・504～506) 6cm (2:3)
0 (476～500) 5cm (1:1)


508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
磨　痕
敲打痕
0　(508・509)　6cm (2:3)
0　(511)　5cm (4:5)
0　(510・512～532)　5cm (1:1)

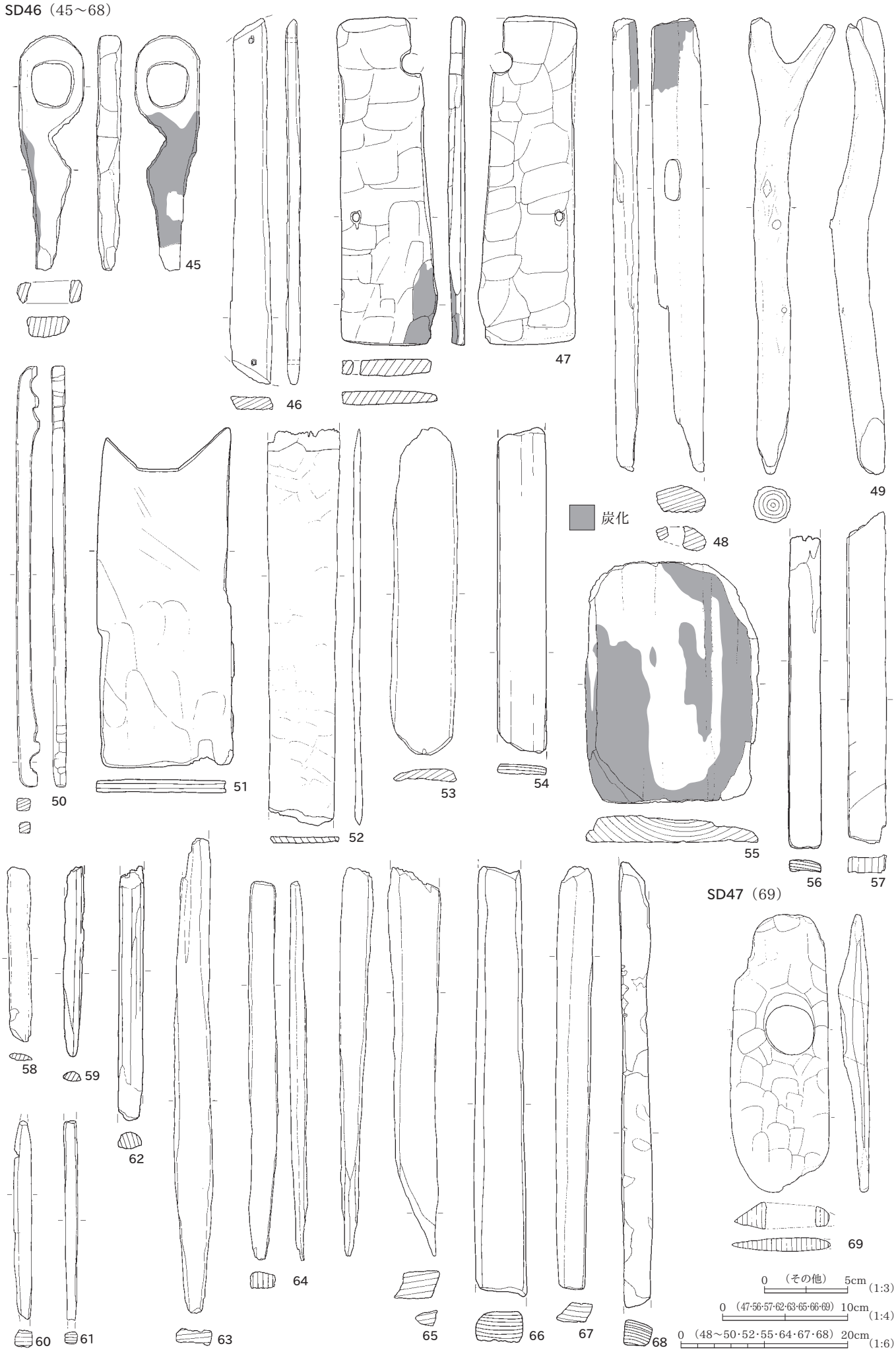

533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
0 (533～543) 5cm (1:1)
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
磨痕・使用痕
0 (544～551) 15cm (1:3)
0 (552～556) 10cm (1:2)


557
558
559
560
561
磨　痕
敲打痕
0
（557～561）
10cm
（1:2）
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
0
（562 ・563）
6cm
（2:3）
0
（564～586）
5cm
（1:1）

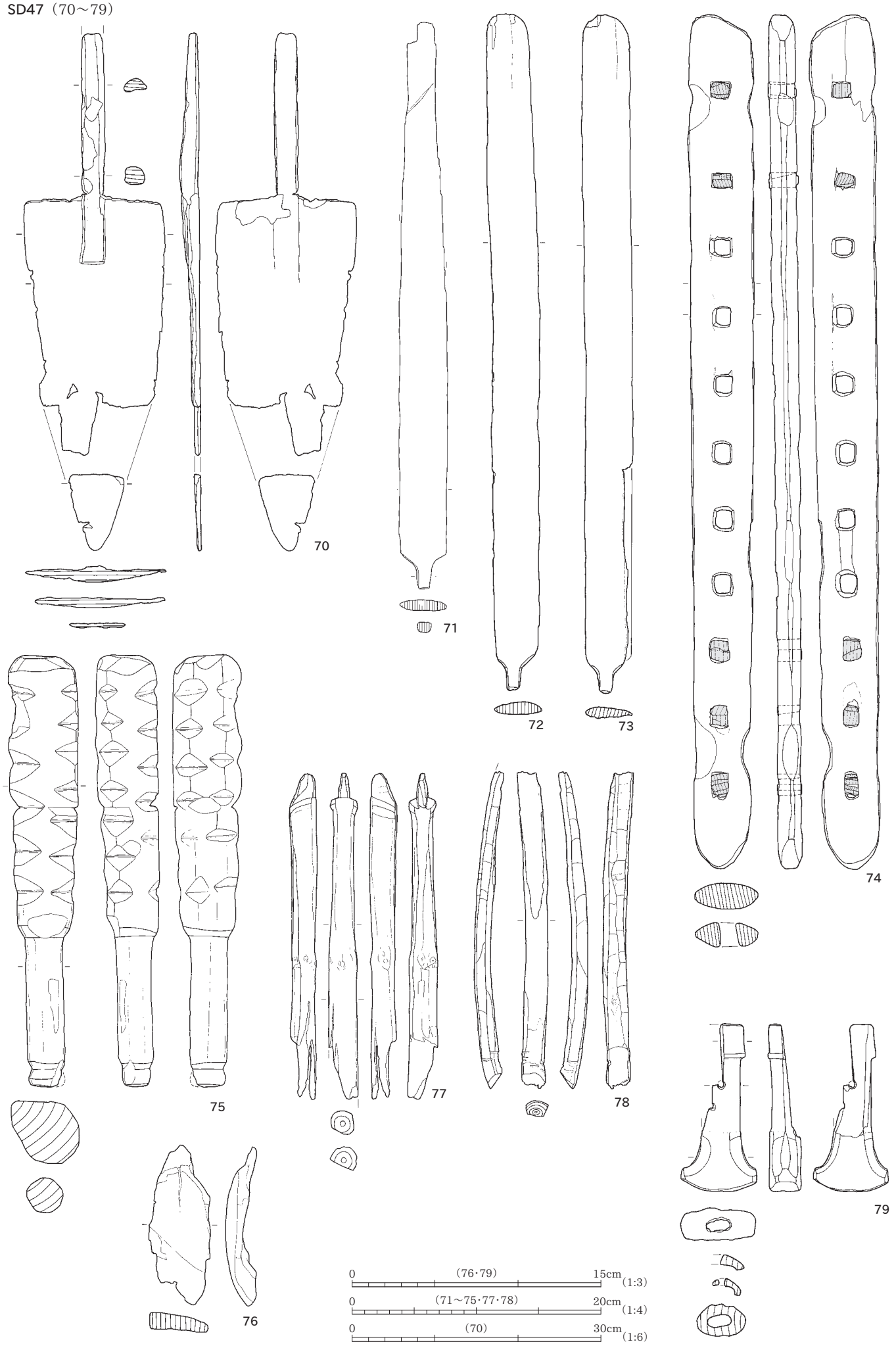

SK96（1～4）
SE89（5・6）
SK49（7～9）
樹皮
SK55（10～15）
SD33（16～18）
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
0 (7～9·12·13) 15cm (1:3)
0 (16～18) 20cm (1:4)
0 (1～4·6·10·11·14) 30cm (1:6)
0 (5·15) 50cm (1:10)


SD33（19～38）
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
SD46（39～44）
36
37
38
39
40
41
42
43
44
0 (19・31・32・43・44) 15cm (1:3)
0 (20・22～24・27～29・33～37・39～42) 20cm (1:4)
0 (21・30・38) 30cm (1:6)
0 (25・26) 50cm (1:10)
炭化

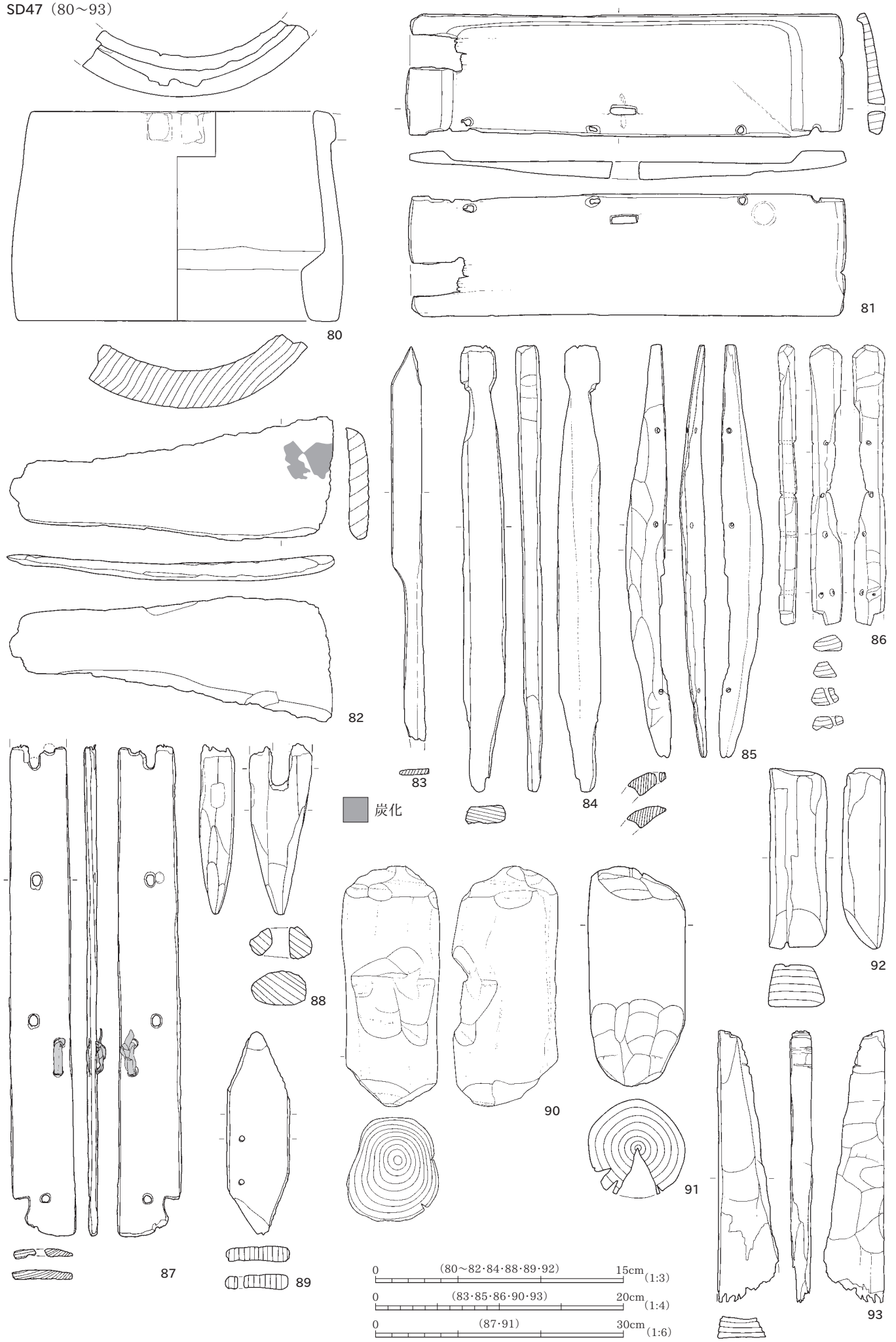
SD46（45～68）


45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
炭化
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
SD47（69）
69
0 （その他） 5cm (1:3)
0 （47·56·57·62·63·65·66·69） 10cm (1:4)
0 （48～50·52·55·64·67·68） 20cm (1:6)

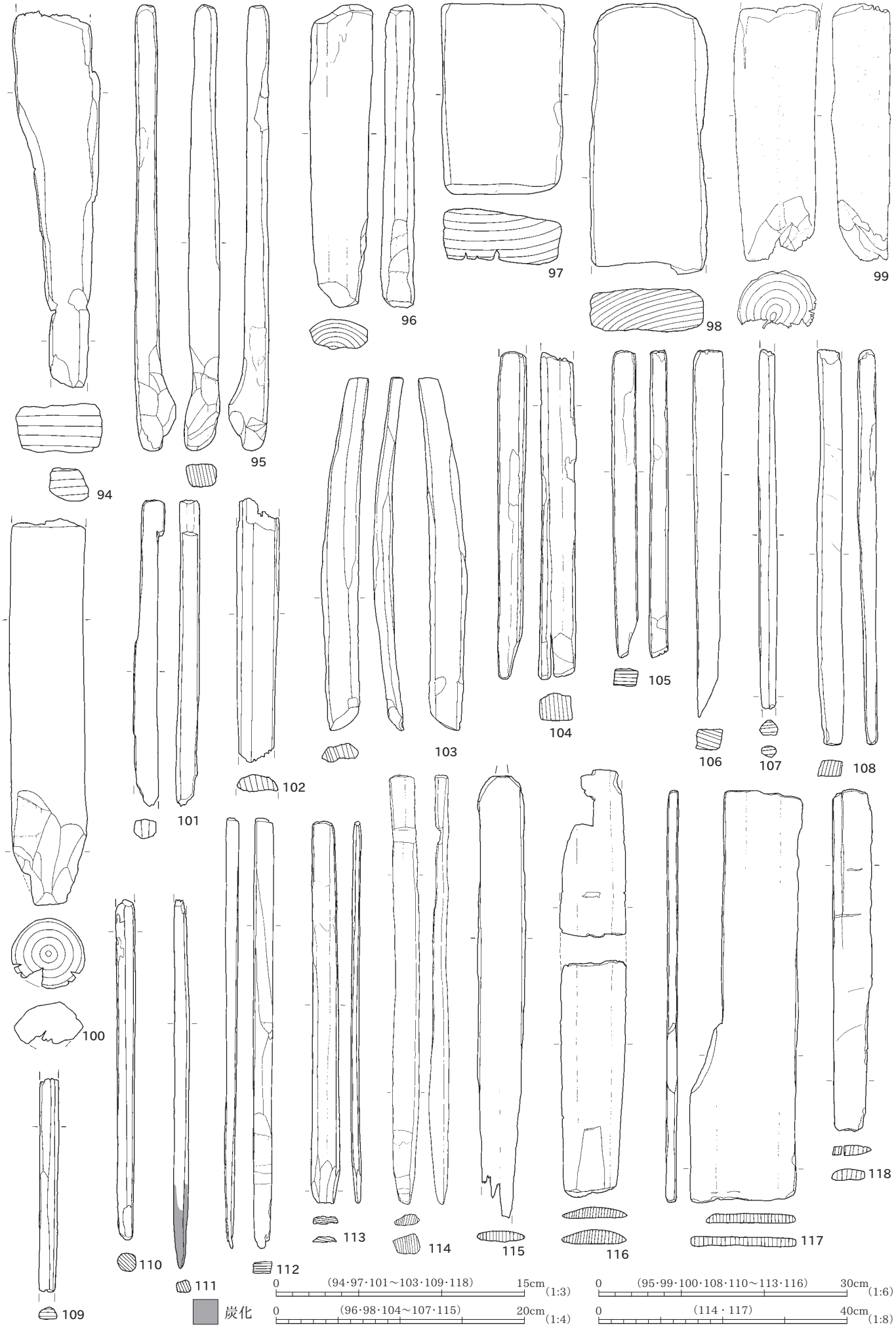
SD47（70～79）


70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
0 (76･79) 15cm (1:3)
0 (71～75･77･78) 20cm (1:4)
0 (70) 30cm (1:6)

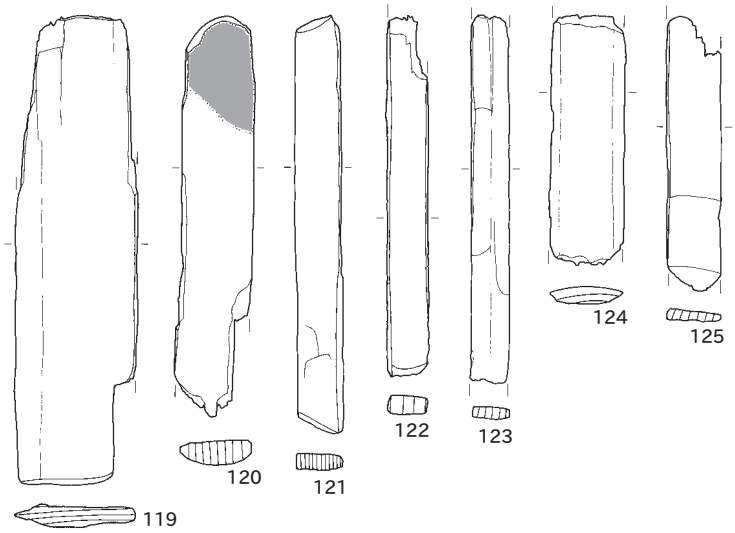
SD47（80～93）


80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
炭化
0 (80～82·84·88·89·92) 15cm (1:3)
0 (83·85·86·90·93) 20cm (1:4)
0 (87·91) 30cm (1:6)

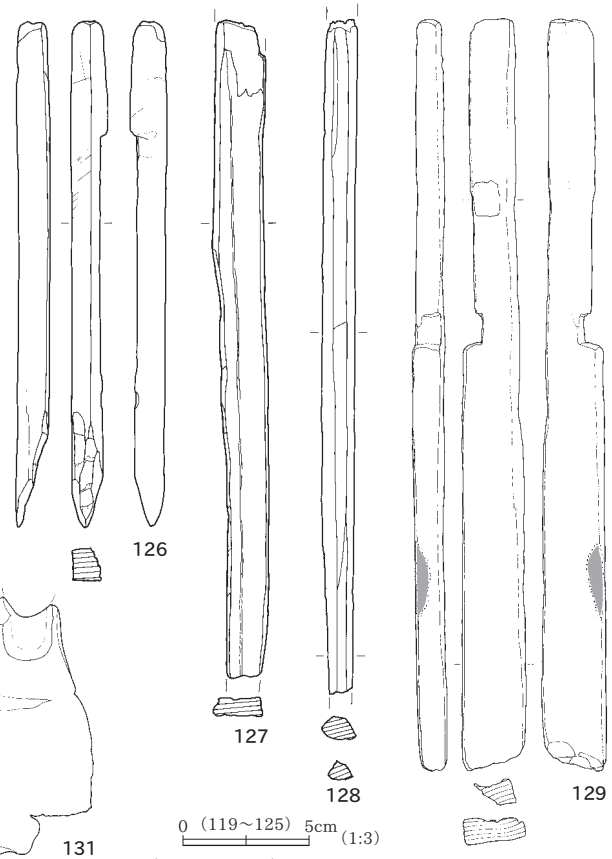
SD47（94～118）


94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
炭化
0 (94·97·101～103·109·118) 15cm (1:3)
0 (95·99·100·108·110～113·116) 30cm (1:6)
0 (96·98·104～107·115) 20cm (1:4)
0 (114・117) 40cm (1:8)

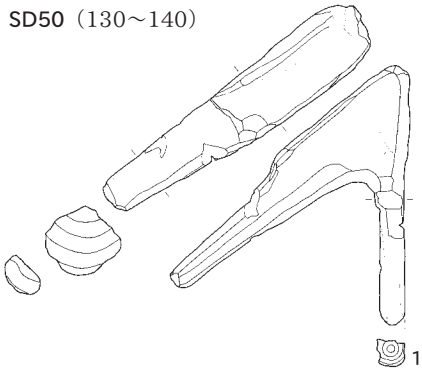
SD47（119～125）

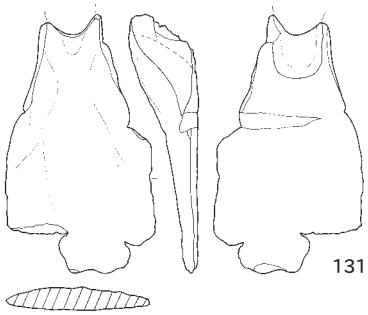


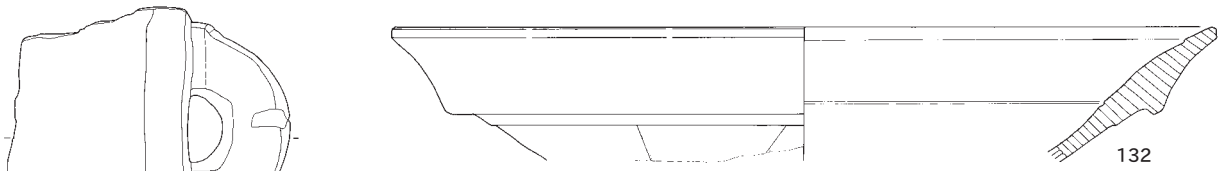
SD48（126～129）

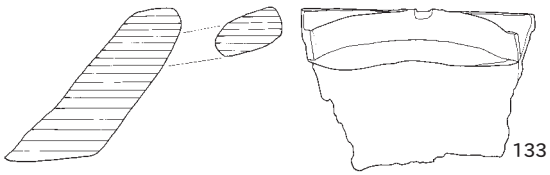


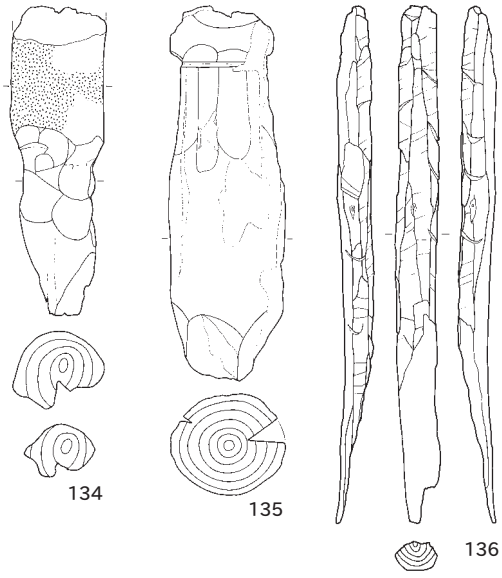
SD50（130～140）

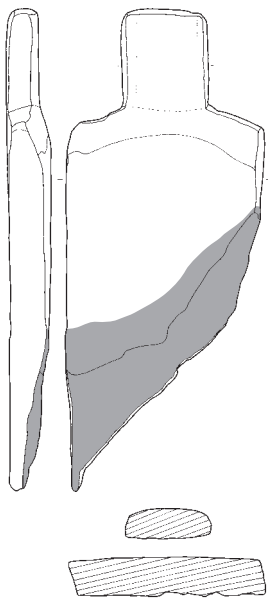


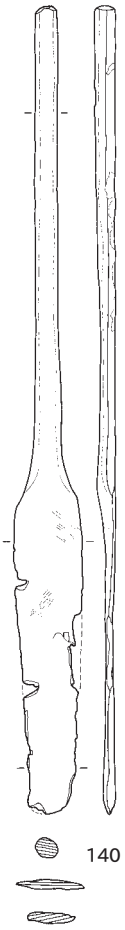








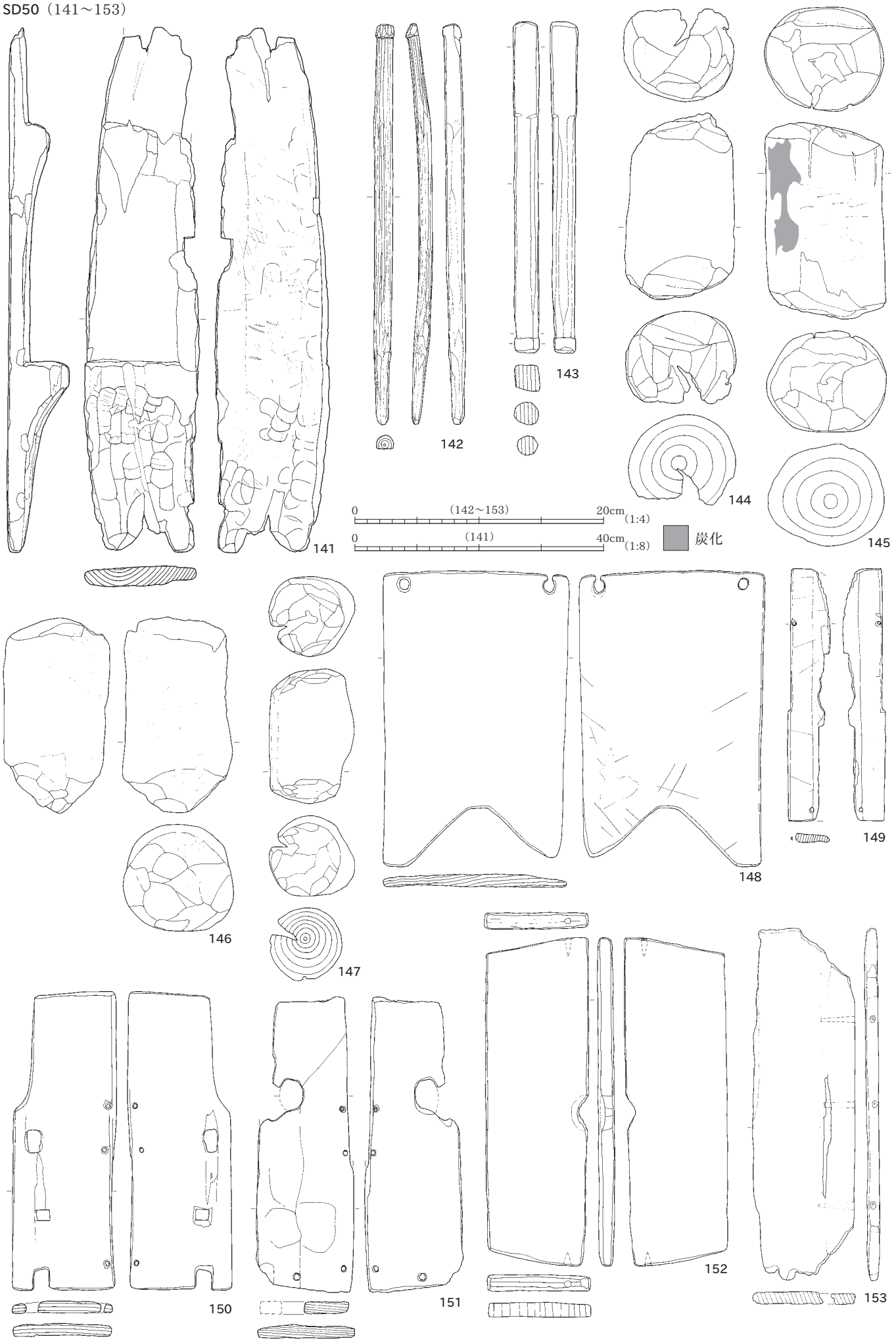




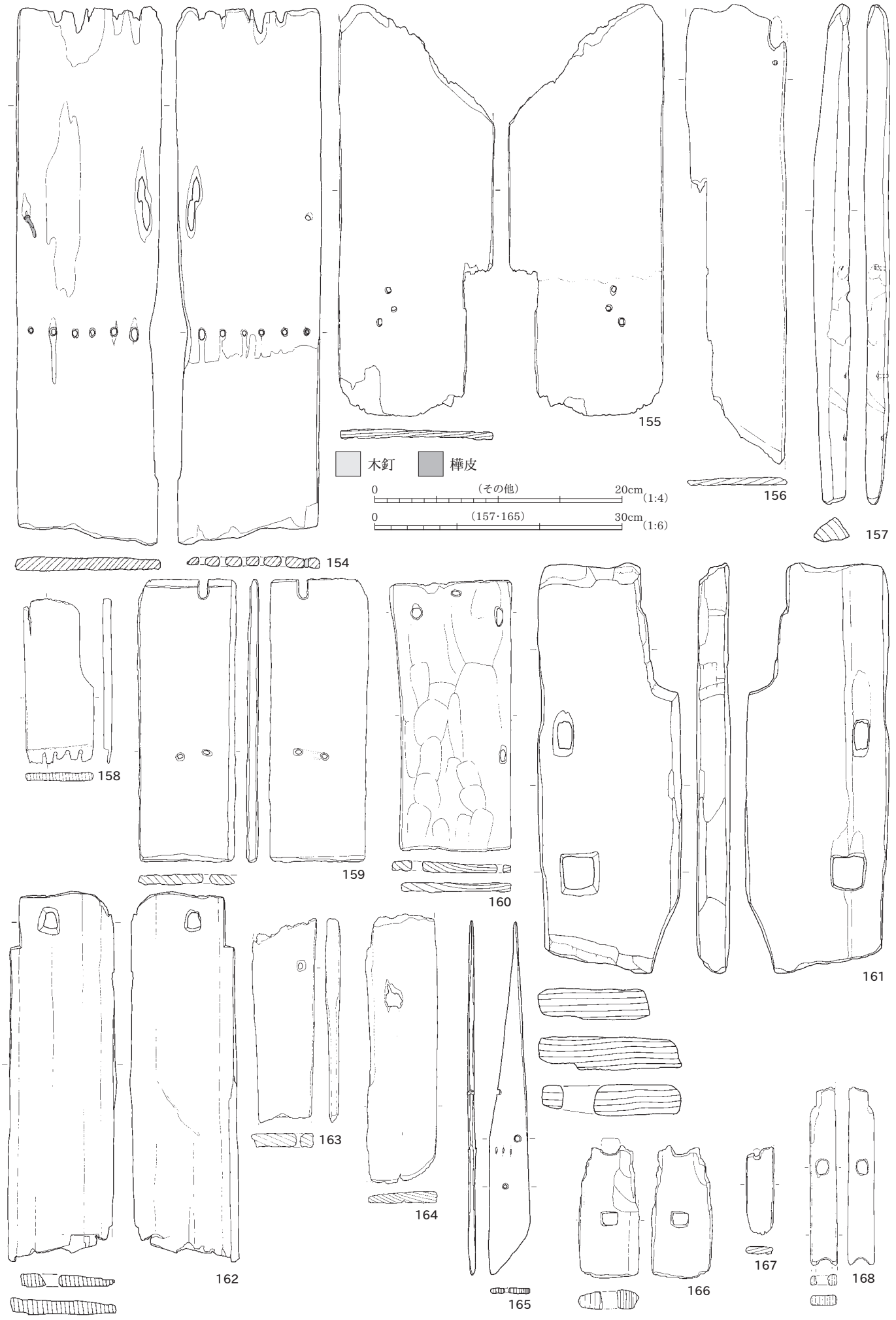
0 (126・127・138) 30cm (1:6)
0 (129) 40cm (1:8)
0 (139・140) 50cm (1:10)

炭化
樹皮

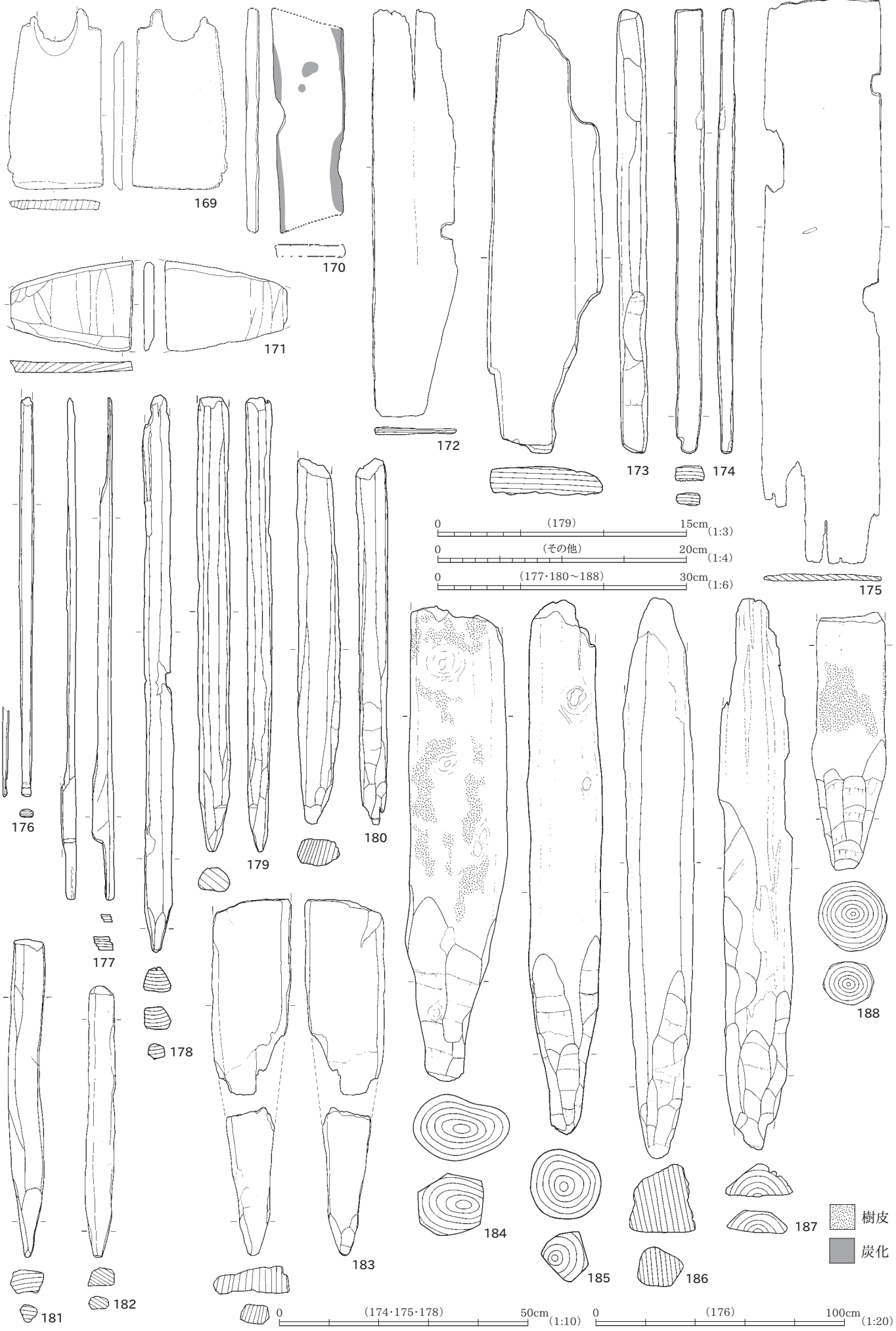
SD50（141～153）


141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
0 (142～153) 20cm (1:4)
0 (141) 40cm (1:8)
炭化

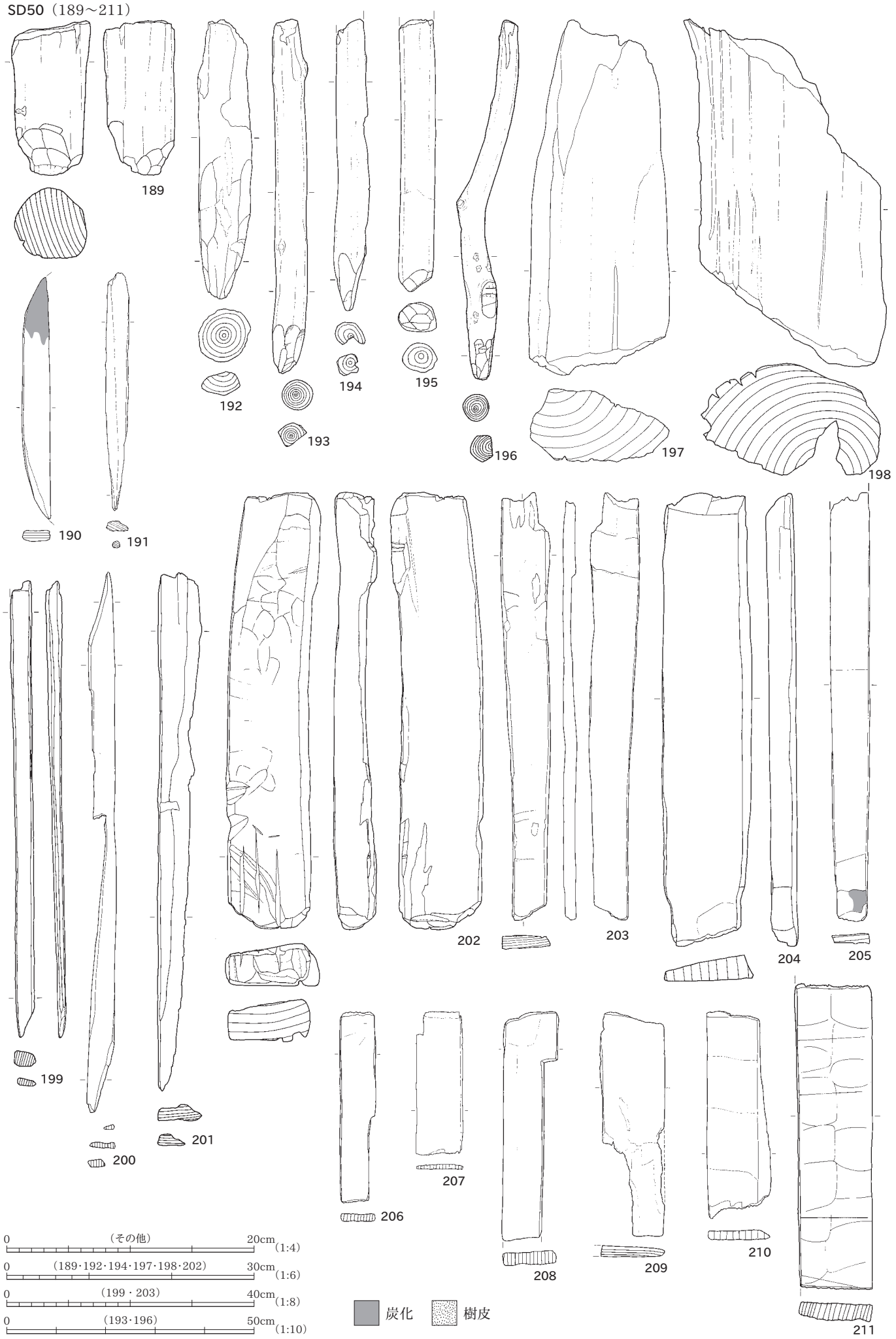
SD50（154～168）


木釘
樺皮
0 （その他） 20cm (1:4)
0 （157・165） 30cm (1:6)
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168

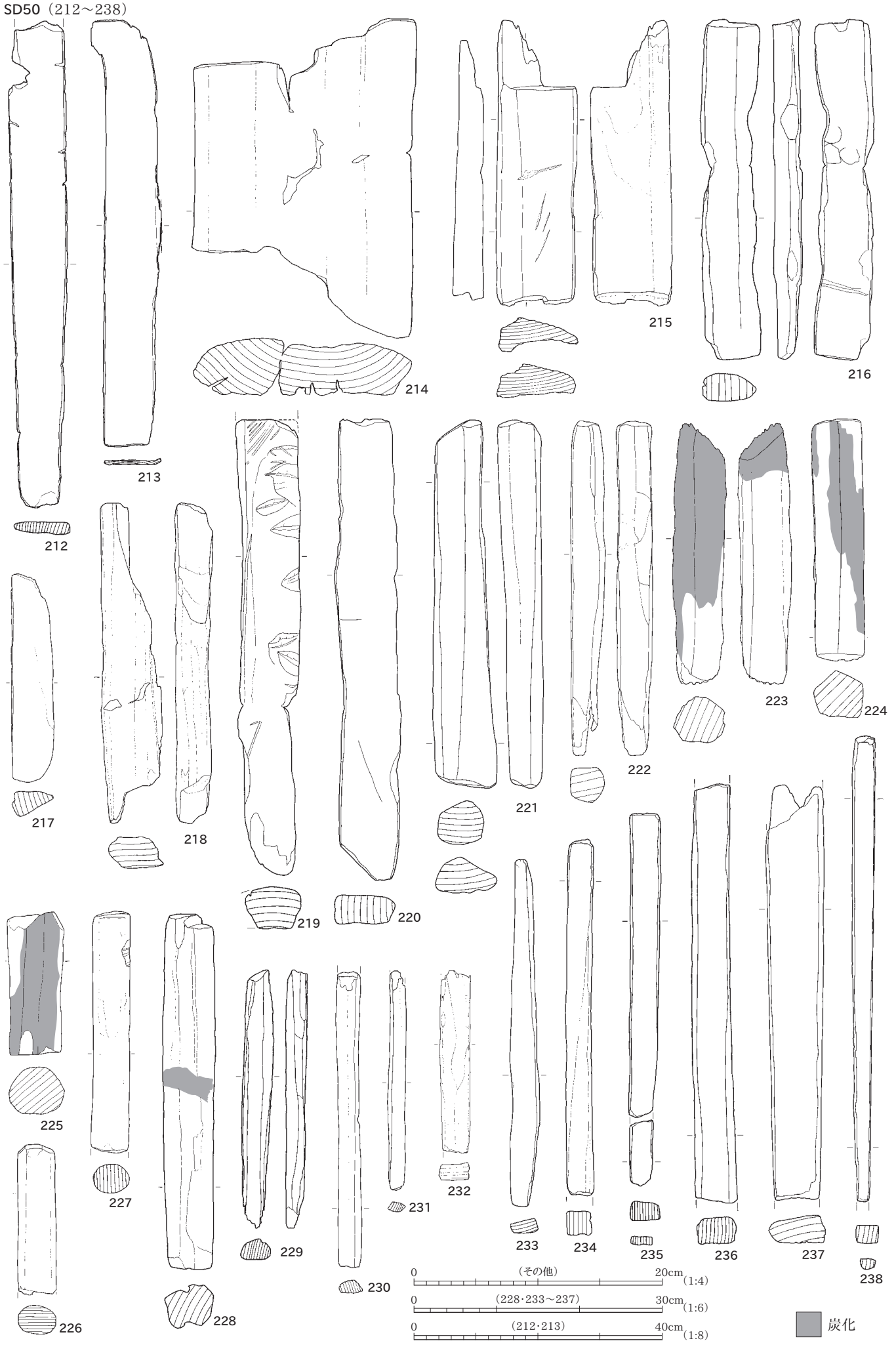
SD50（169～188）


169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
0 (179) 15cm (1:3)
0 (その他) 20cm (1:4)
0 (177・180～188) 30cm (1:6)
0 (174・175・178) 50cm (1:10)
0 (176) 100cm (1:20)
樹皮
炭化

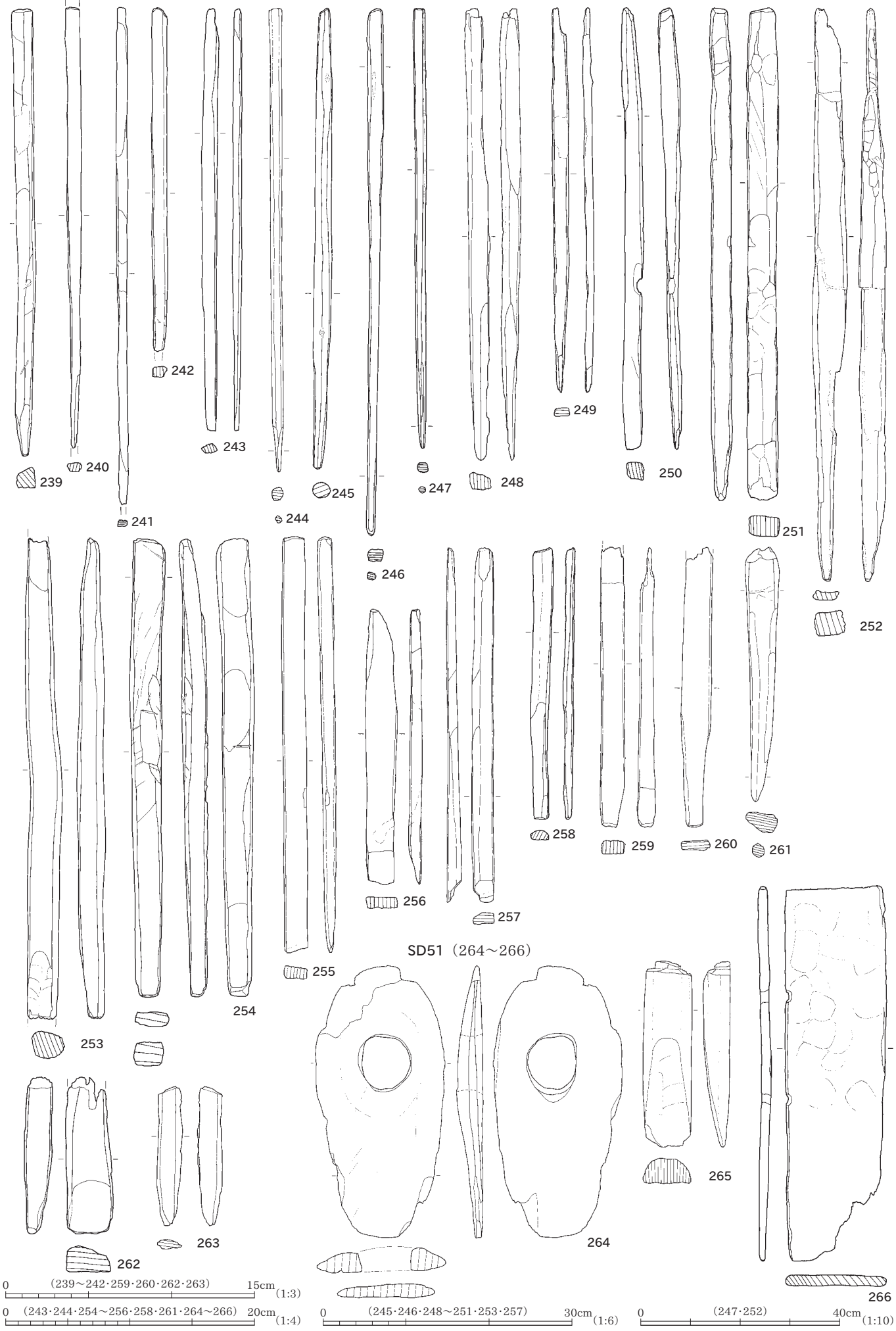
SD50（189～211）


189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
0 （その他） 20cm (1:4)
0 （189･192･194･197･198･202） 30cm (1:6)
0 （199・203） 40cm (1:8)
0 （193･196） 50cm (1:10)
炭化
樹皮

SD50（212～238）

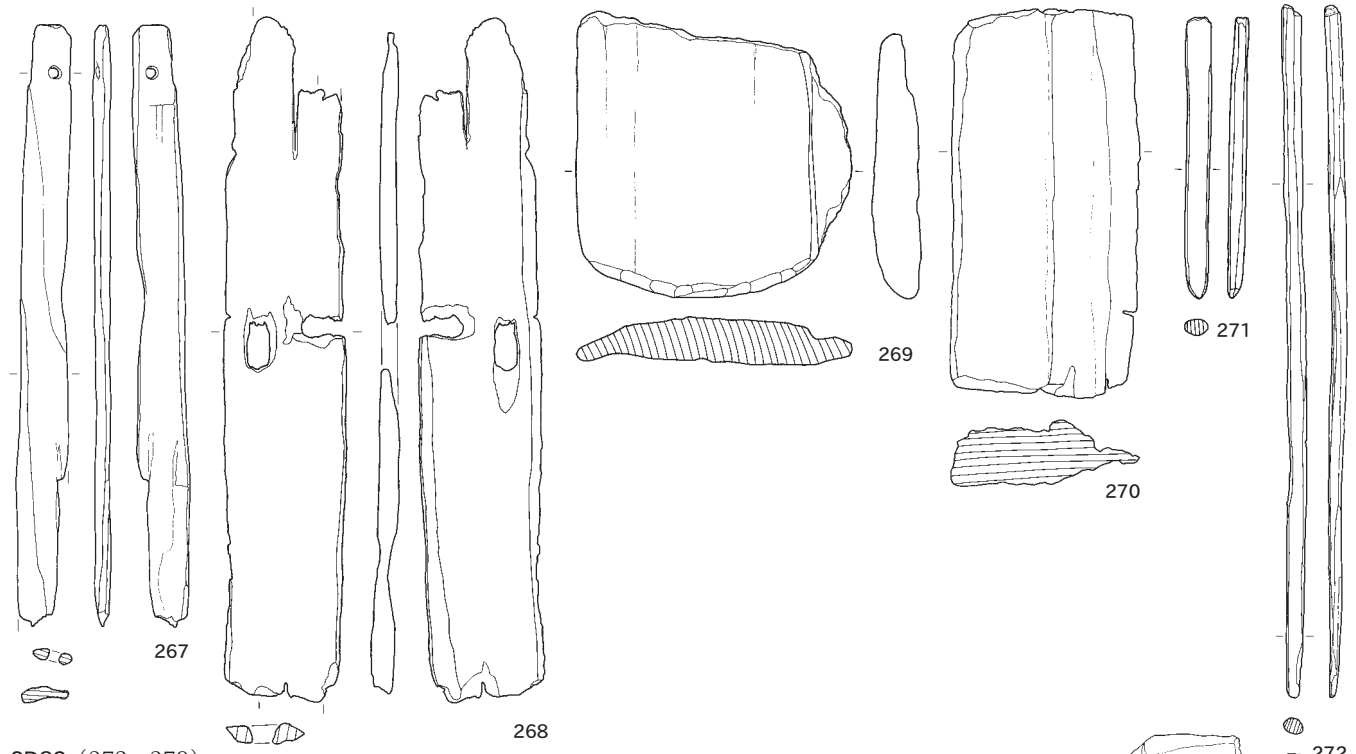

212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
0 （その他） 20cm (1:4)
0 （228・233～237） 30cm (1:6)
0 （212・213） 40cm (1:8)
炭化

SD50（239～263）

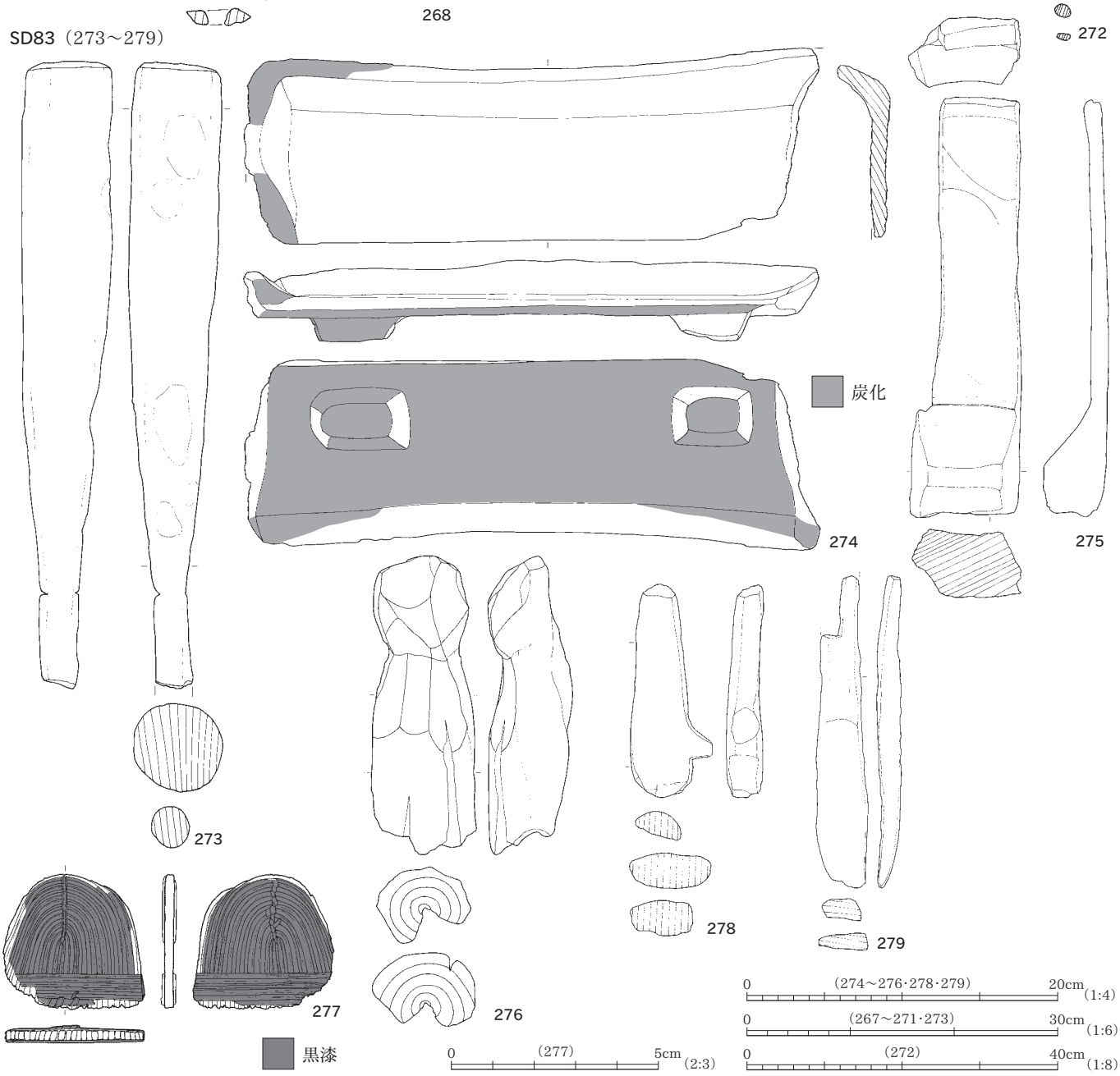


SD51（264～266）

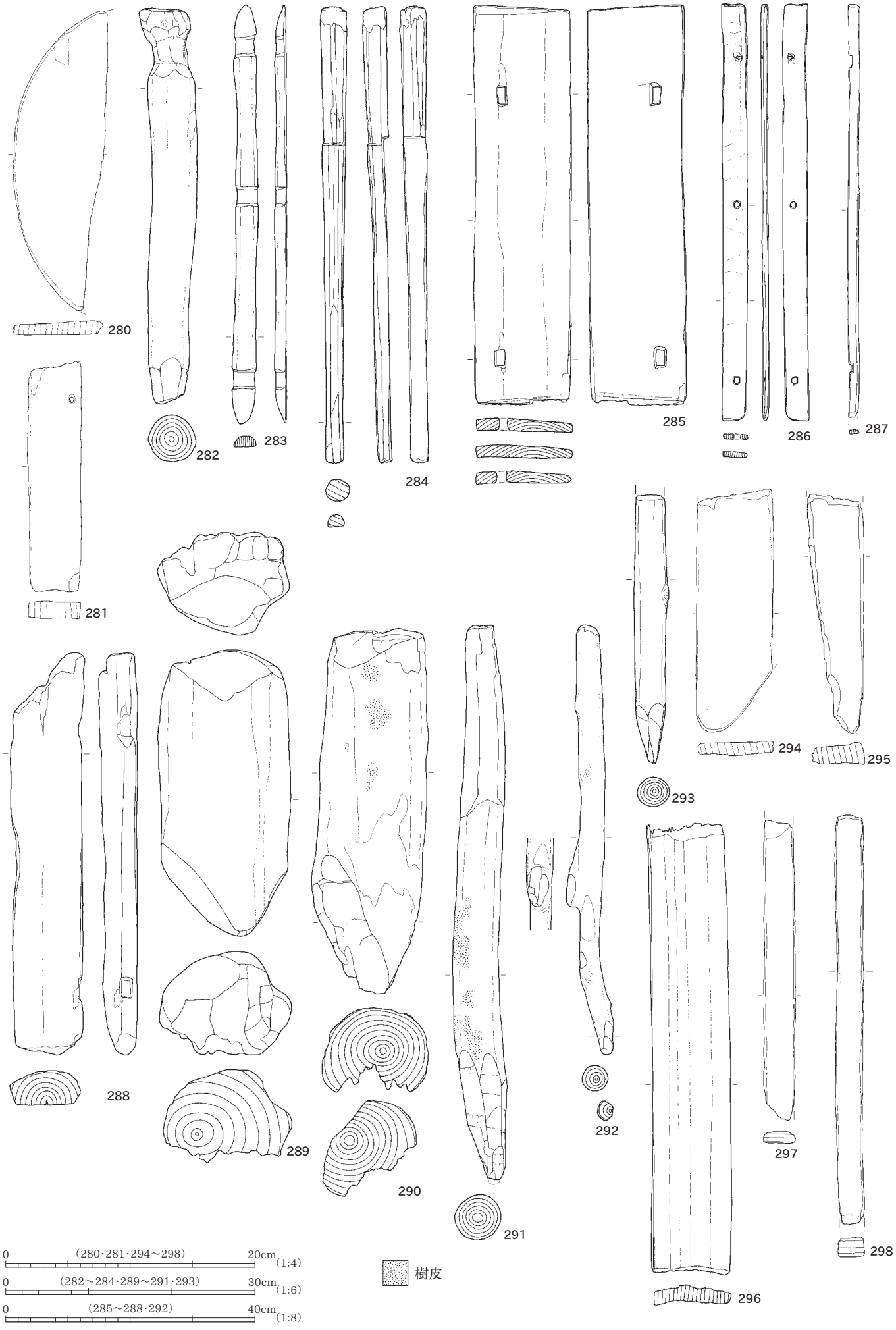
SD51（267～272）

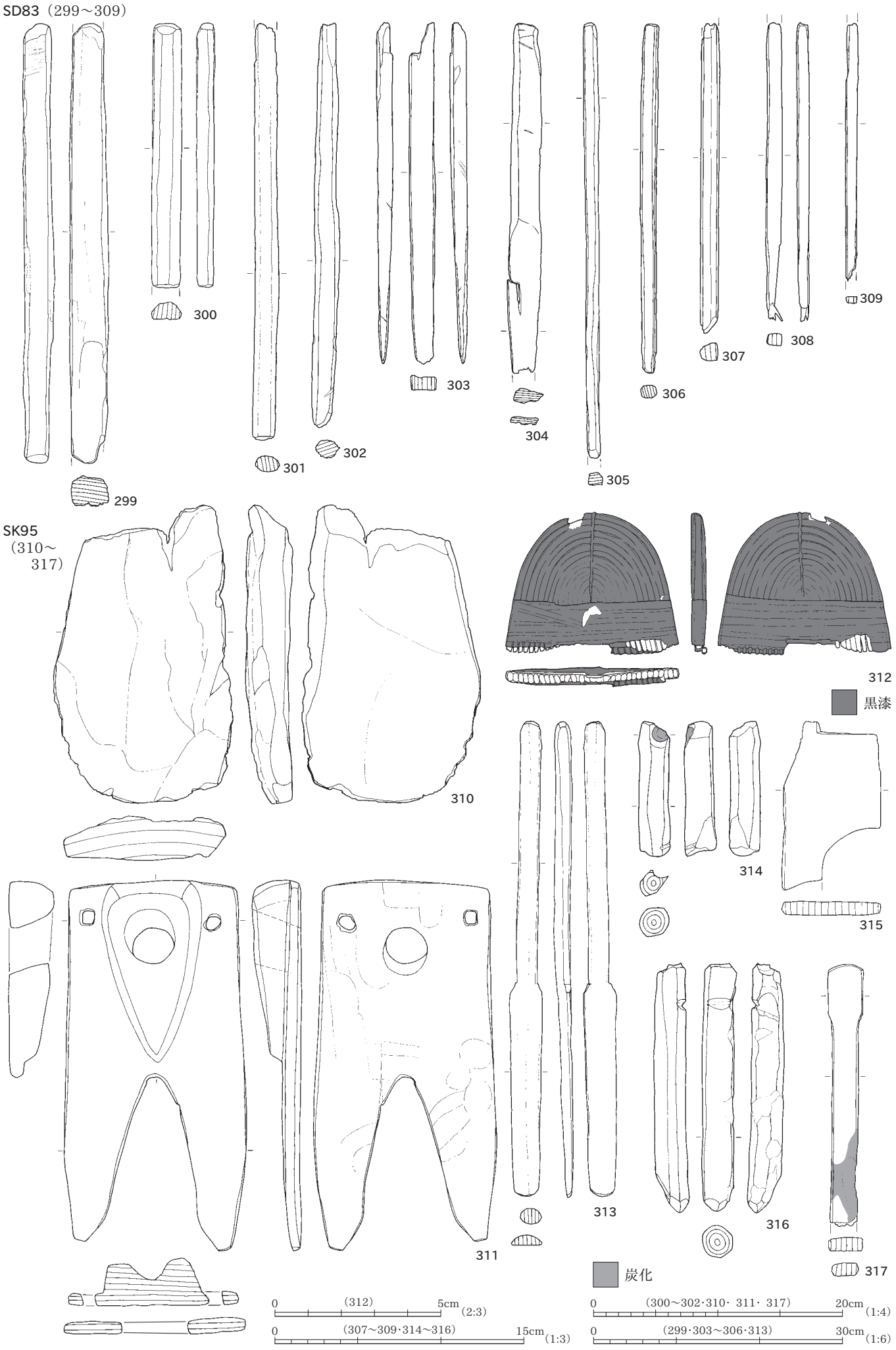


SD83（273～279）

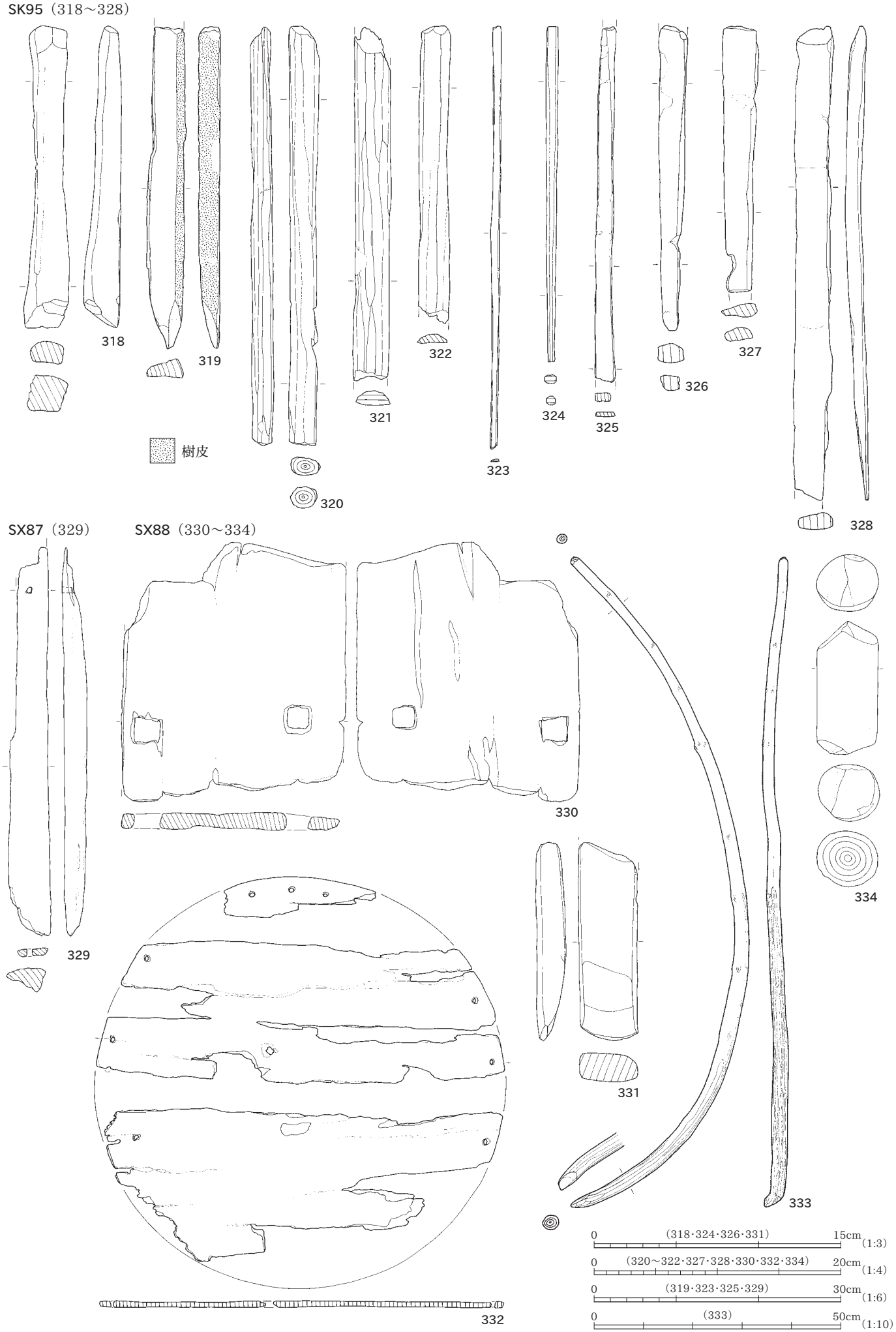


SD83（280～298）

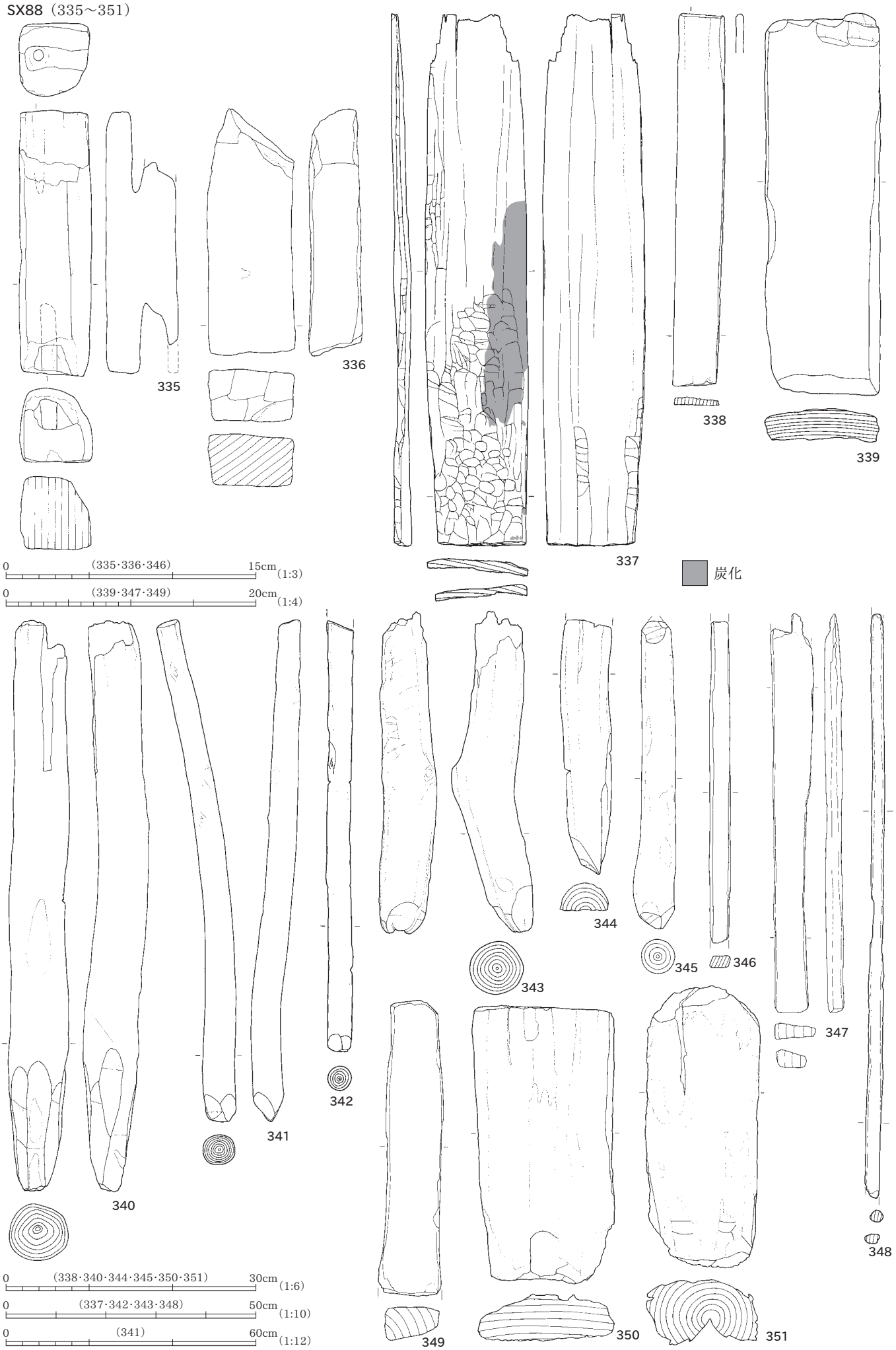

280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
樹皮
0 (280·281·294～298) 20cm (1:4)
0 (282～284·289～291·293) 30cm (1:6)
0 (285～288·292) 40cm (1:8)

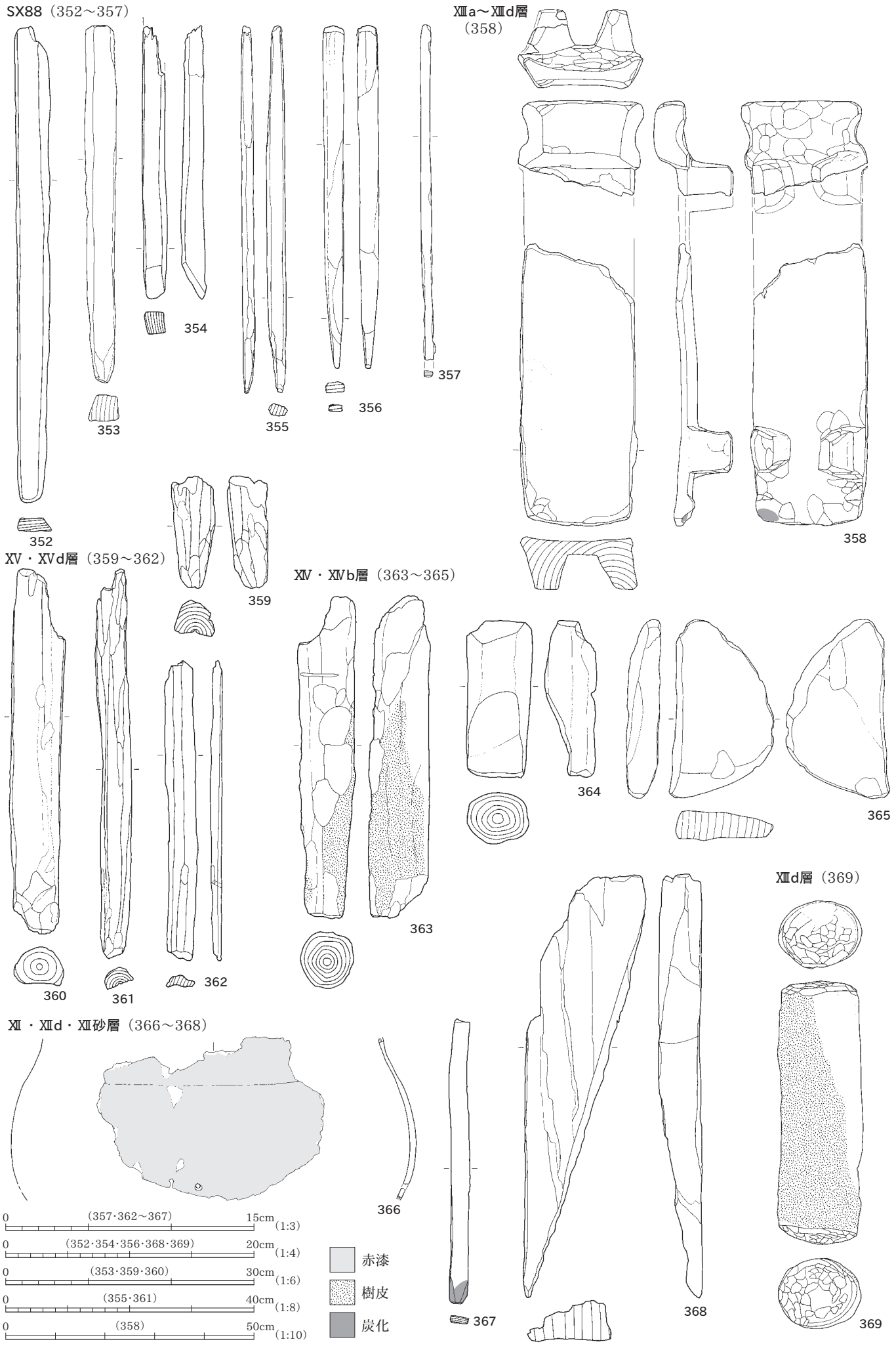

SD83（299～309）
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
SK95
（310～
317）
310
311
312
黒漆
313
314
315
316
炭化
317
0 (312) 5cm (2:3)
0 (307～309·314～316) 15cm (1:3)
0 (300～302·310· 311· 317) 20cm (1:4)
0 (299·303～306·313) 30cm (1:6)

SK95（318～328）

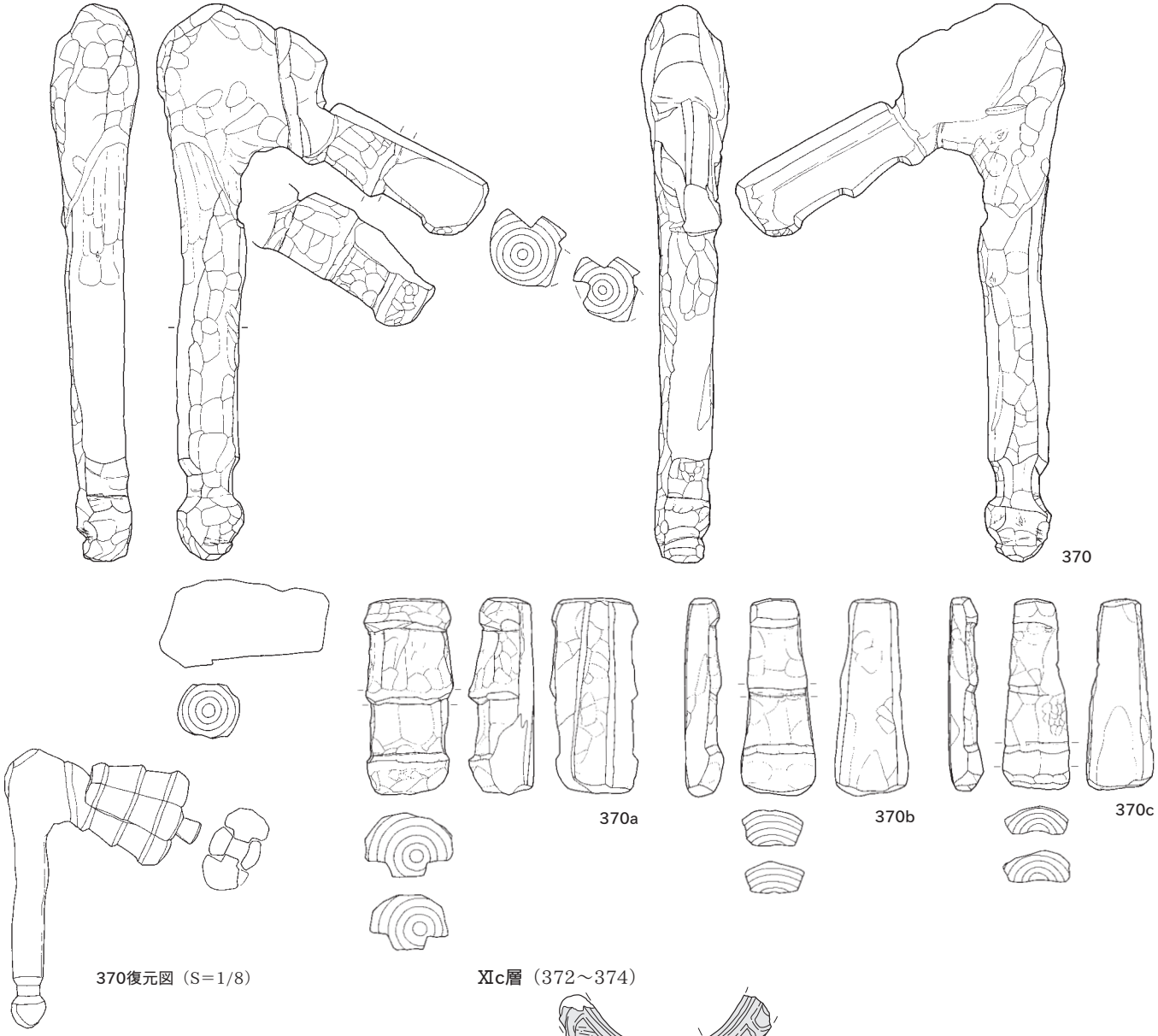

318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
樹皮
SX87（329）
SX88（330～334）
329
330
331
332
333
334
0 (318・324・326・331) 15cm (1:3)
0 (320～322・327・328・330・332・334) 20cm (1:4)
0 (319・323・325・329) 30cm (1:6)
0 (333) 50cm (1:10)

SX88（335～351）

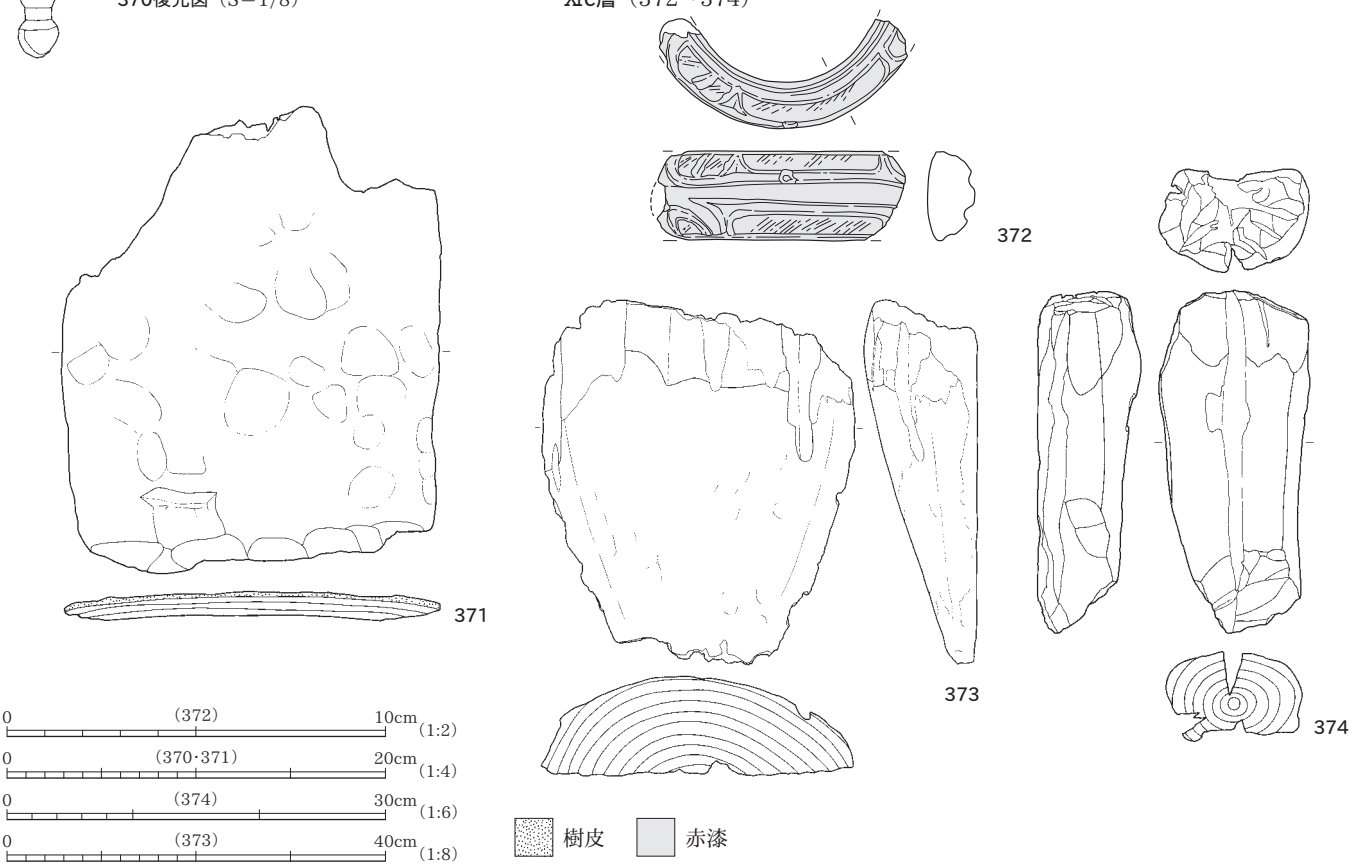

335
336
337
338
339
炭化
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
0 (335·336·346) 15cm (1:3)
0 (339·347·349) 20cm (1:4)
0 (338·340·344·345·350·351) 30cm (1:6)
0 (337·342·343·348) 50cm (1:10)
0 (341) 60cm (1:12)


SX88（352～357）
XIIIa～XIIId層（358）
XV・XVd層（359～362）
XIV・XIVb層（363～365）
XIIId層（369）
XII・XIId・XII砂層（366～368）
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
0 (357·362～367) 15cm (1:3)
0 (352·354·356·368·369) 20cm (1:4)
0 (353·359·360) 30cm (1:6)
0 (355·361) 40cm (1:8)
0 (358) 50cm (1:10)
赤漆
樹皮
炭化

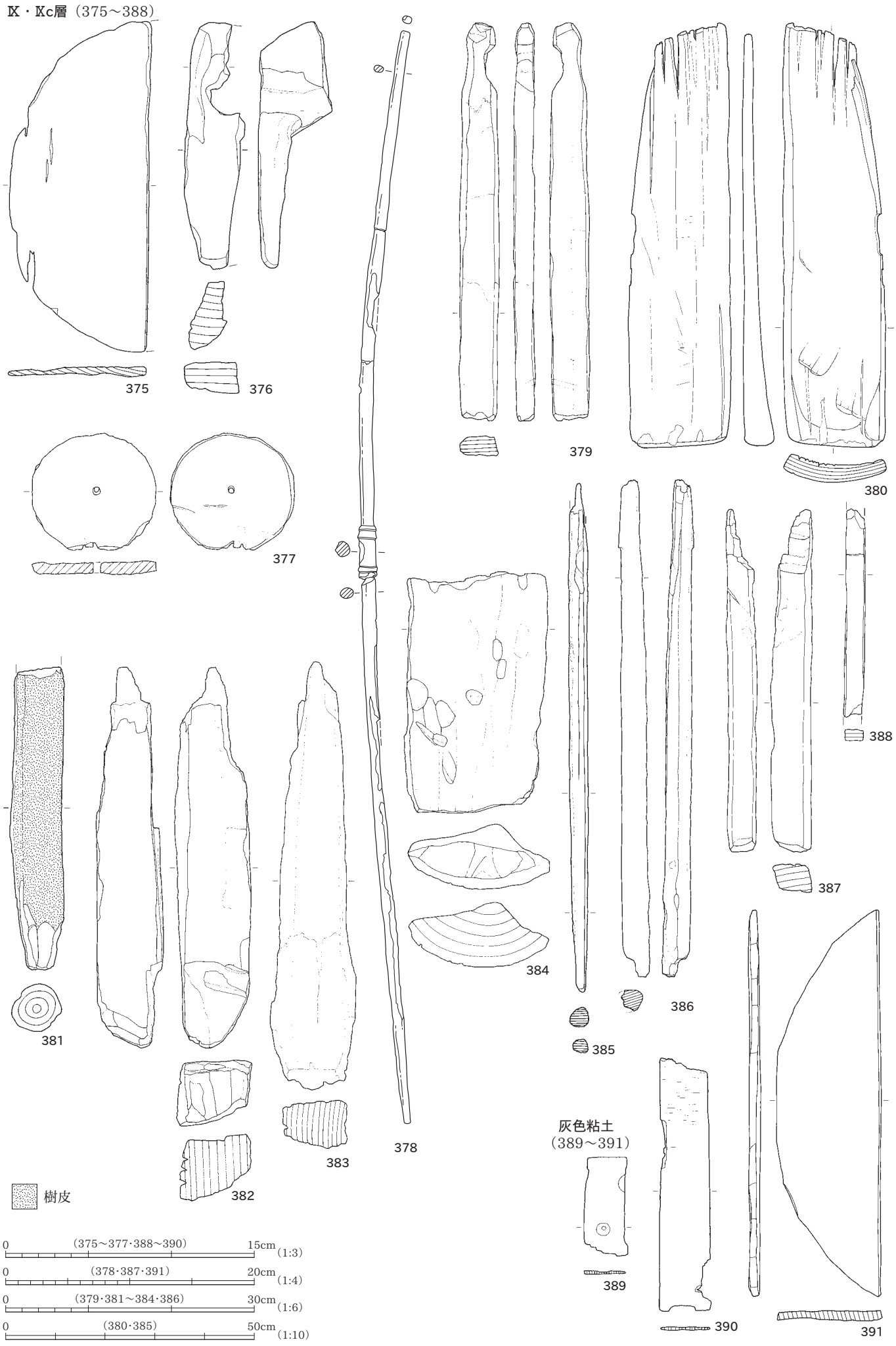
XIIIa・XIIId層（370・371）

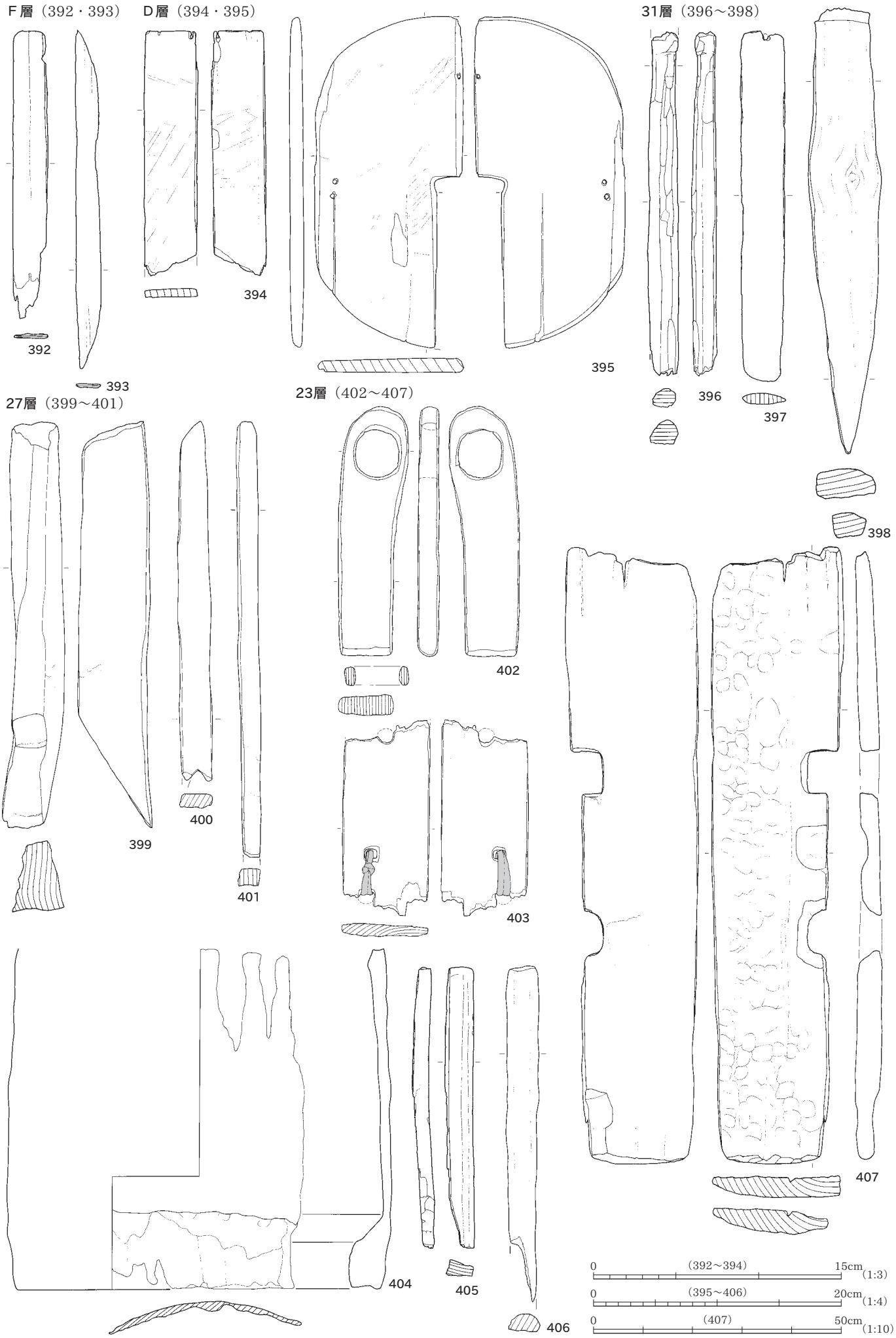


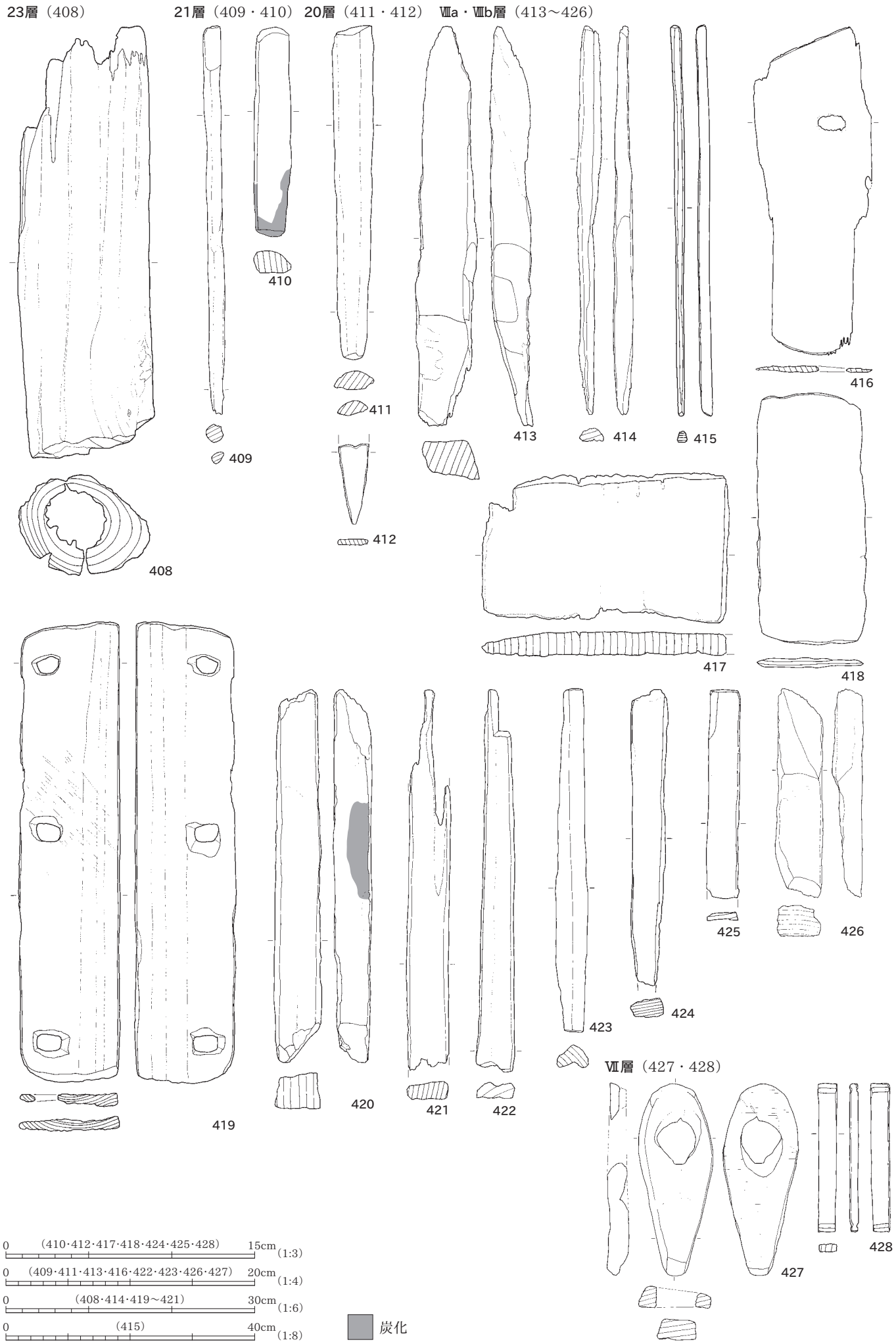
XIc層（372～374）



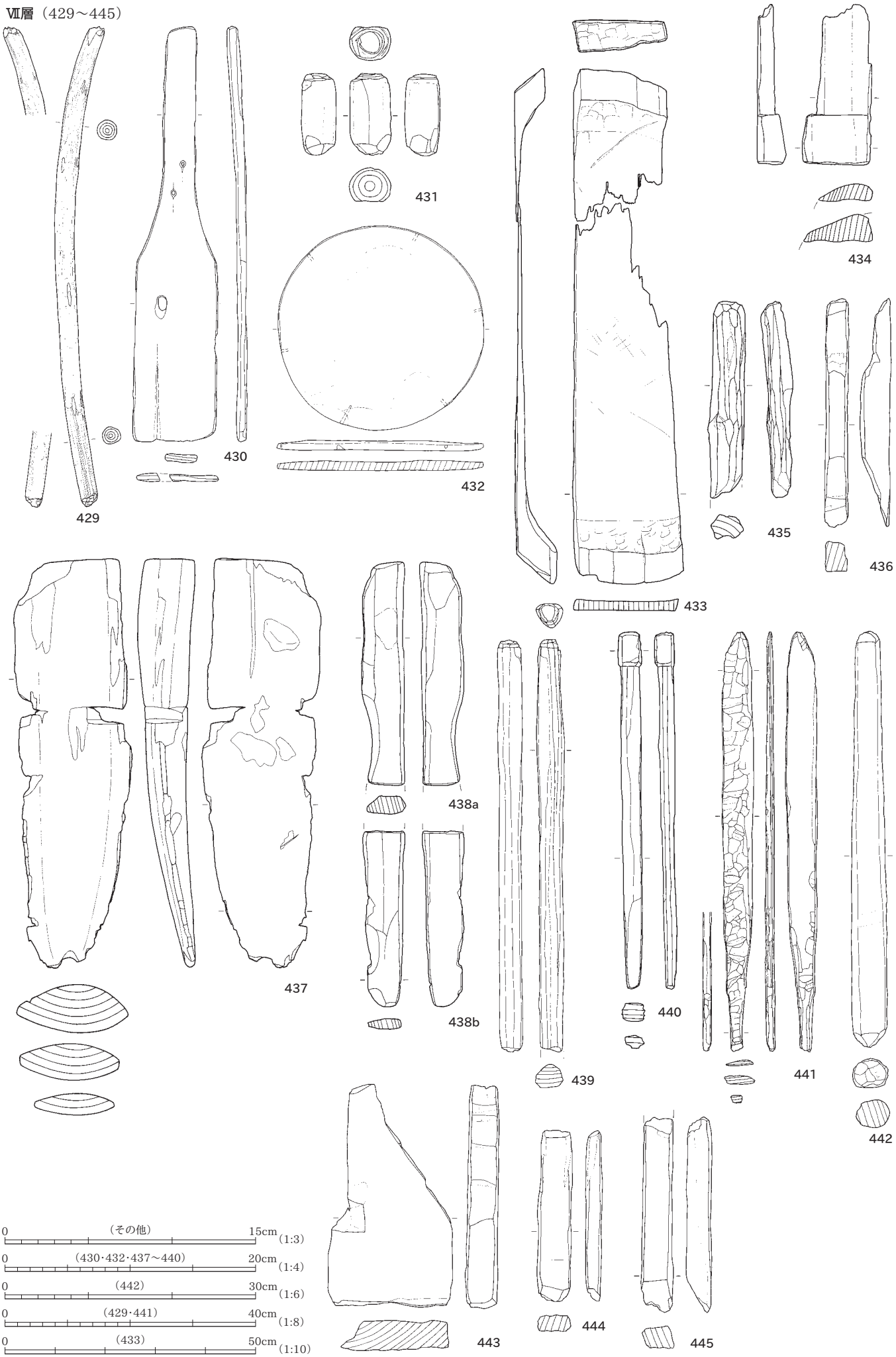
Ⅸ・Ⅸc層（375～388）


375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
灰色粘土
（389～391）
389
390
391
樹皮
0 （375～377・388～390） 15cm (1:3)
0 （378・387・391） 20cm (1:4)
0 （379・381～384・386） 30cm (1:6)
0 （380・385） 50cm (1:10)

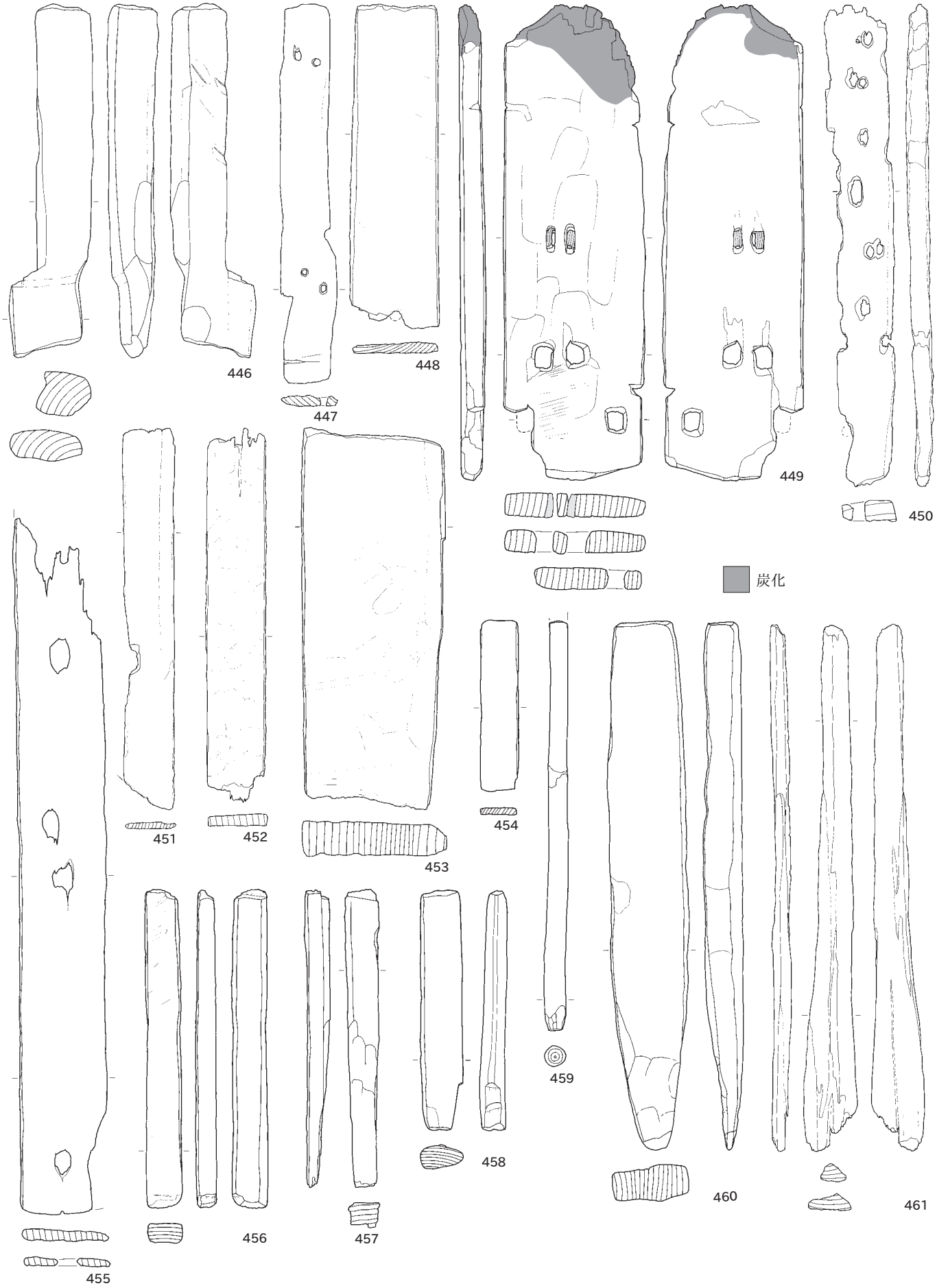

F層（392・393）
D層（394・395）
31層（396～398）
27層（399～401）
23層（402～407）
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
0 (392～394) 15cm (1:3)
0 (395～406) 20cm (1:4)
0 (407) 50cm (1:10)


23層（408）
21層（409・410）
20層（411・412）
Ⅷa・Ⅷb層（413～426）
Ⅶ層（427・428）
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
0 （410・412・417・418・424・425・428） 15cm (1:3)
0 （409・411・413・416・422・423・426・427） 20cm (1:4)
0 （408・414・419～421） 30cm (1:6)
0 （415） 40cm (1:8)
炭化

Ⅶ層（429～445）

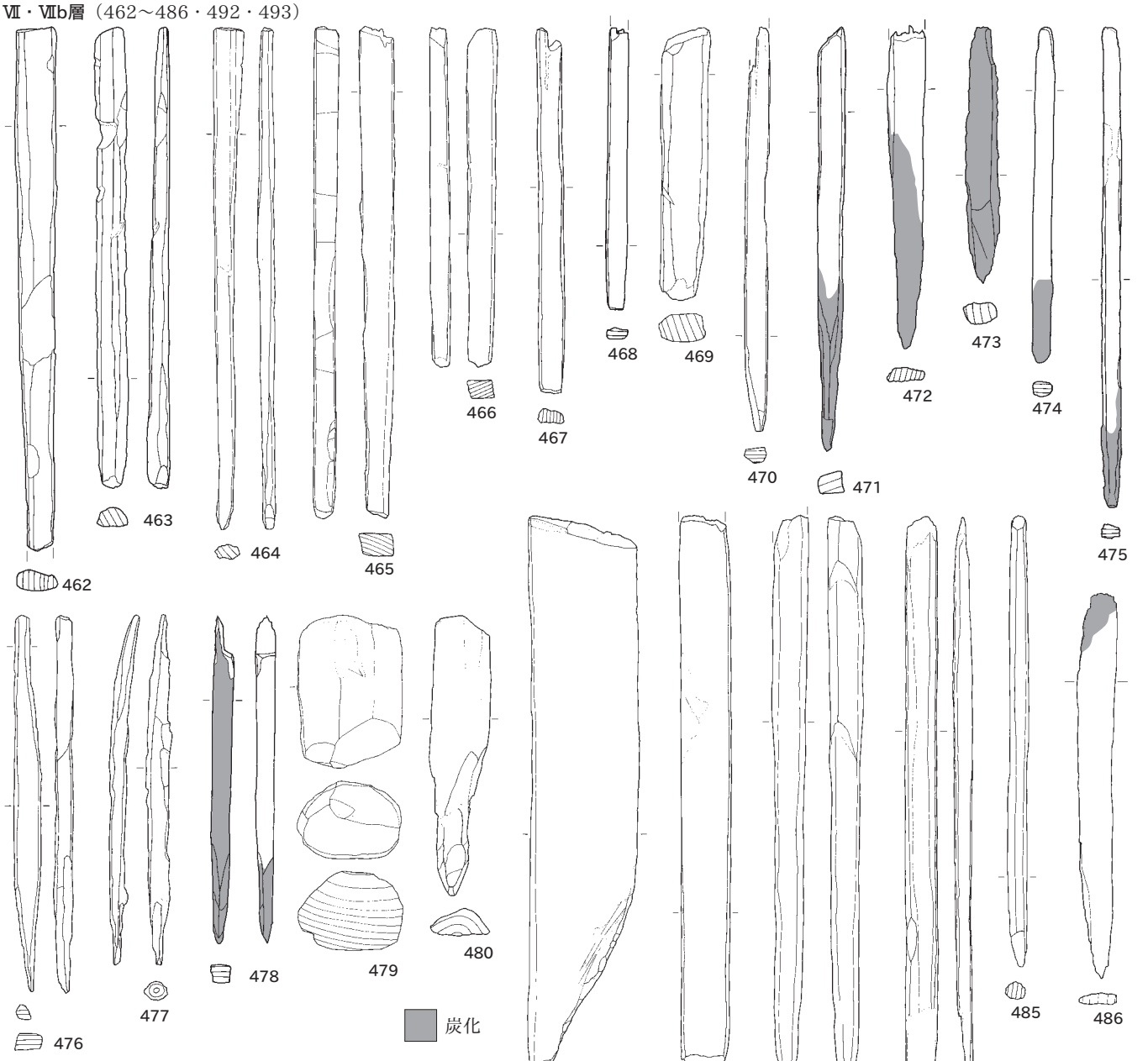

429
430
431
432
433
434
435
436
437
438a
438b
439
440
441
442
443
444
445
0 （その他） 15cm (1:3)
0 （430･432･437～440） 20cm (1:4)
0 （442） 30cm (1:6)
0 （429･441） 40cm (1:8)
0 （433） 50cm (1:10)

Ⅶ層（446～461）

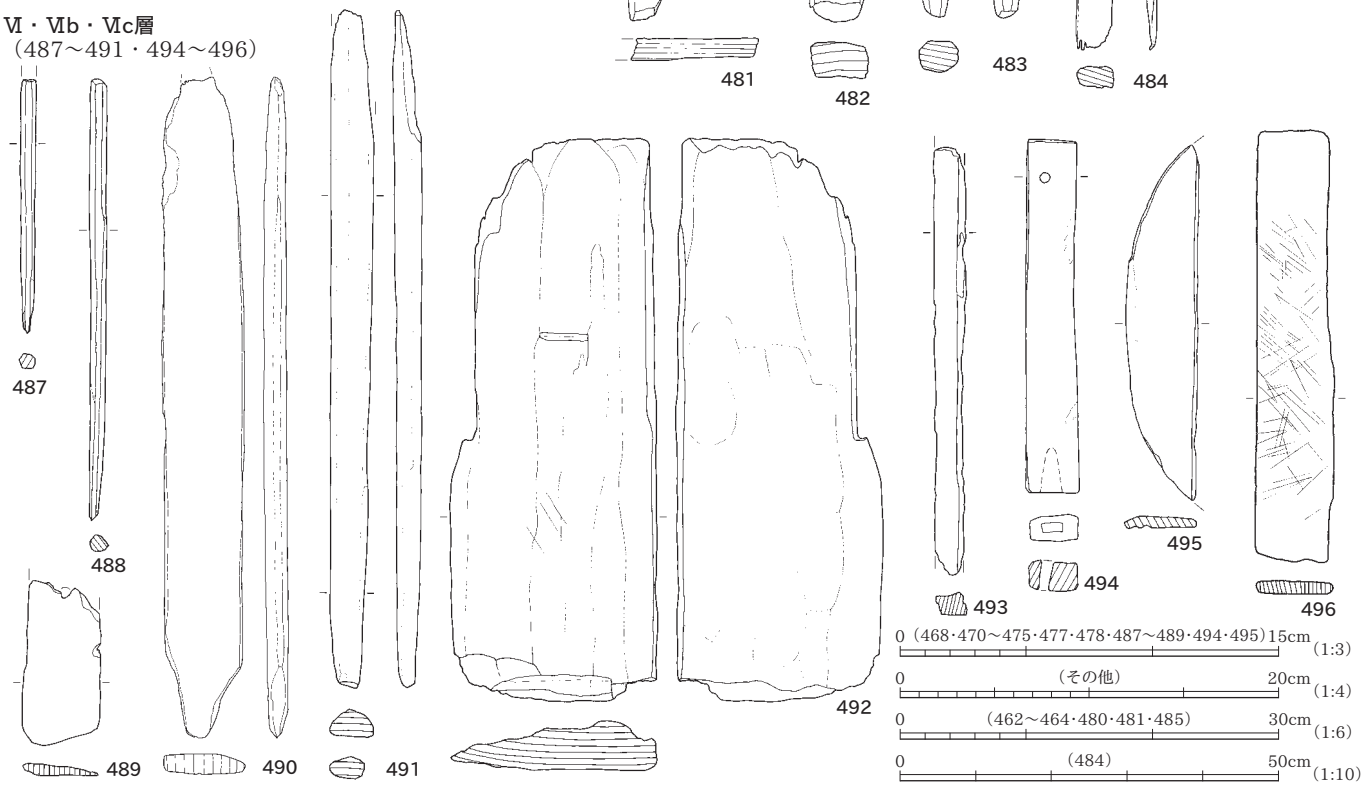


0 (454) 15cm (1:3)
0 (446～448・450・453・455) 20cm (1:4)
0 (449・451・452・456～461) 30cm (1:6)

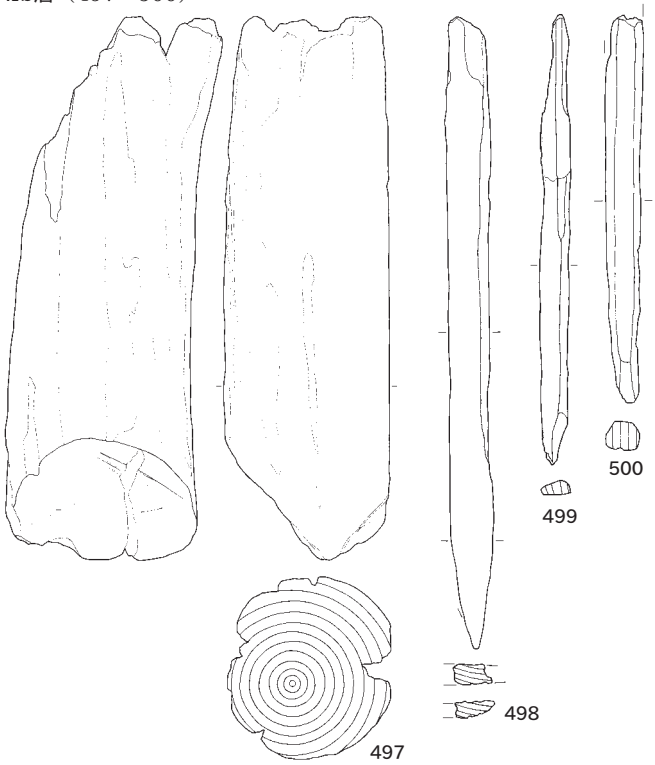
Ⅶ・Ⅶb層（462～486・492・493）



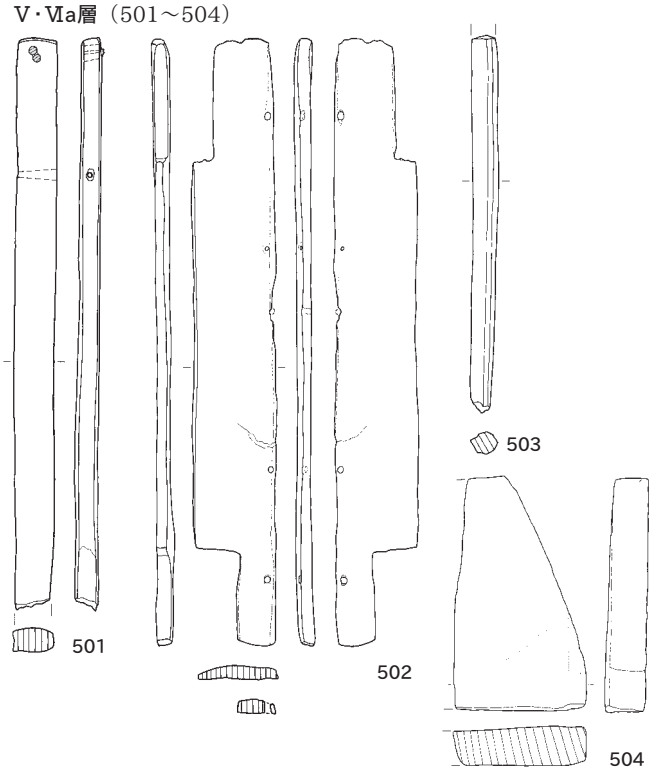
Ⅵ・Ⅵb・Ⅵc層
（487～491・494～496）



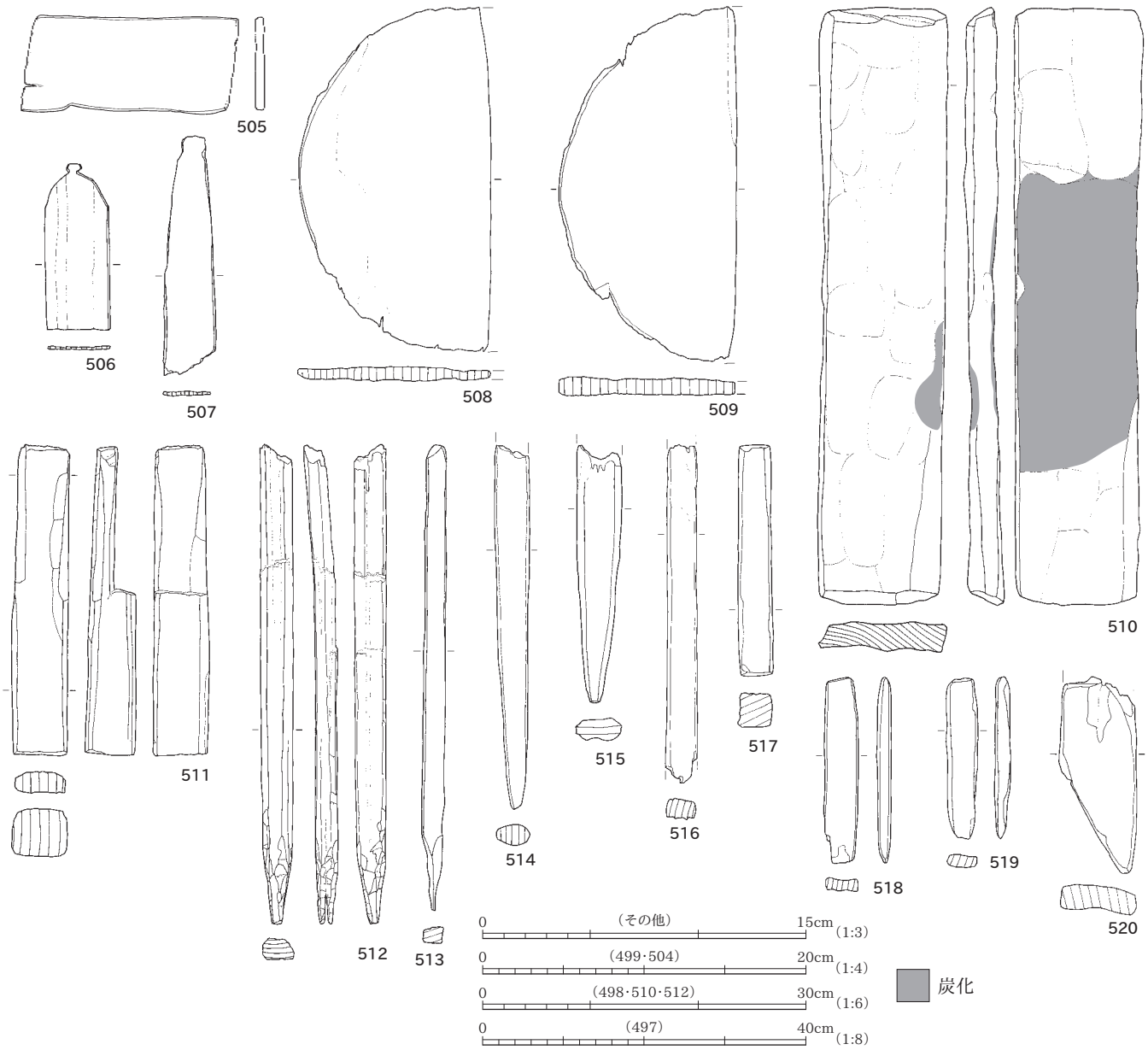
Ⅵb層（497～500）



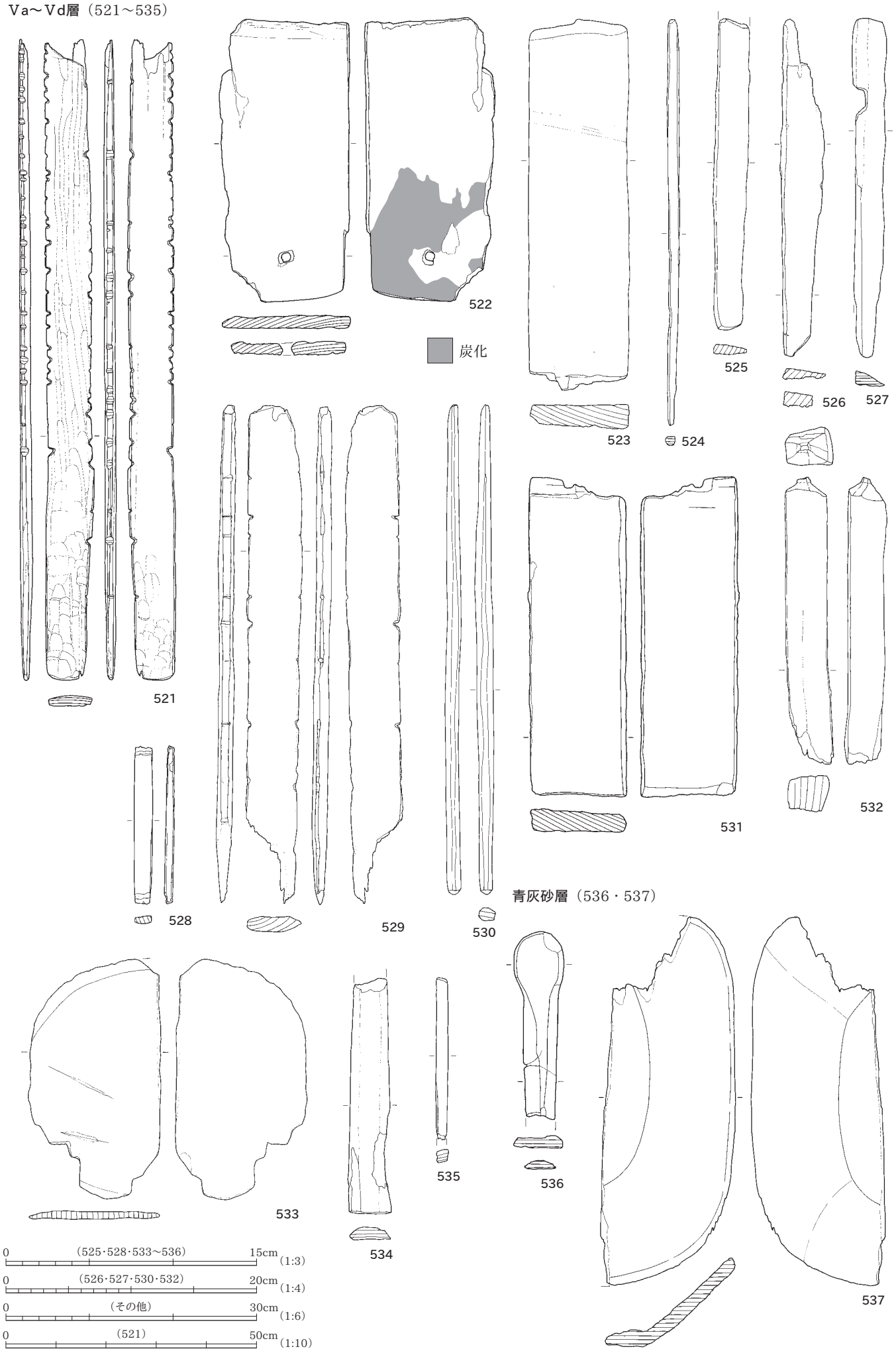
Ⅴ・Ⅵa層（501～504）



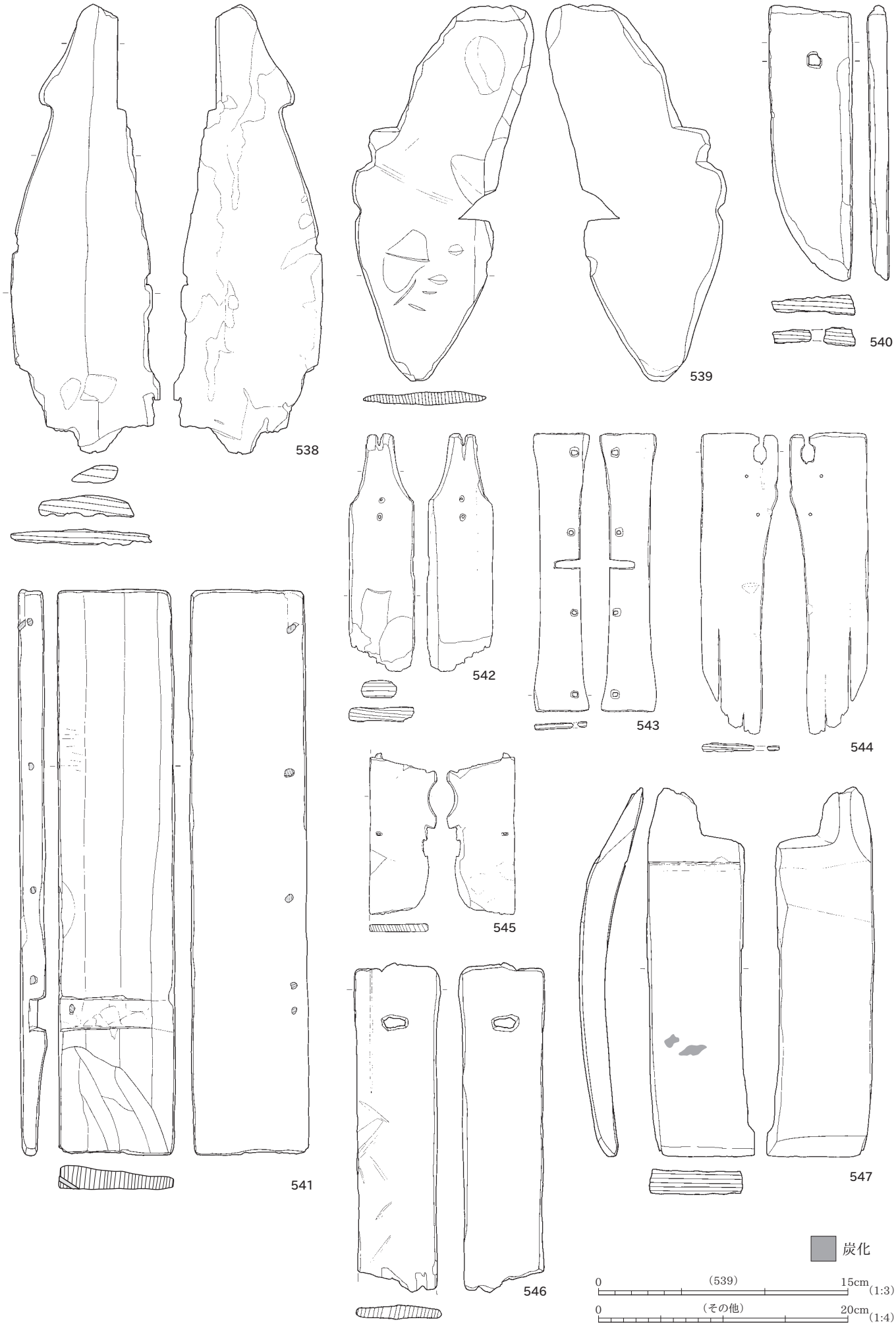
Ⅴ層（505～520）



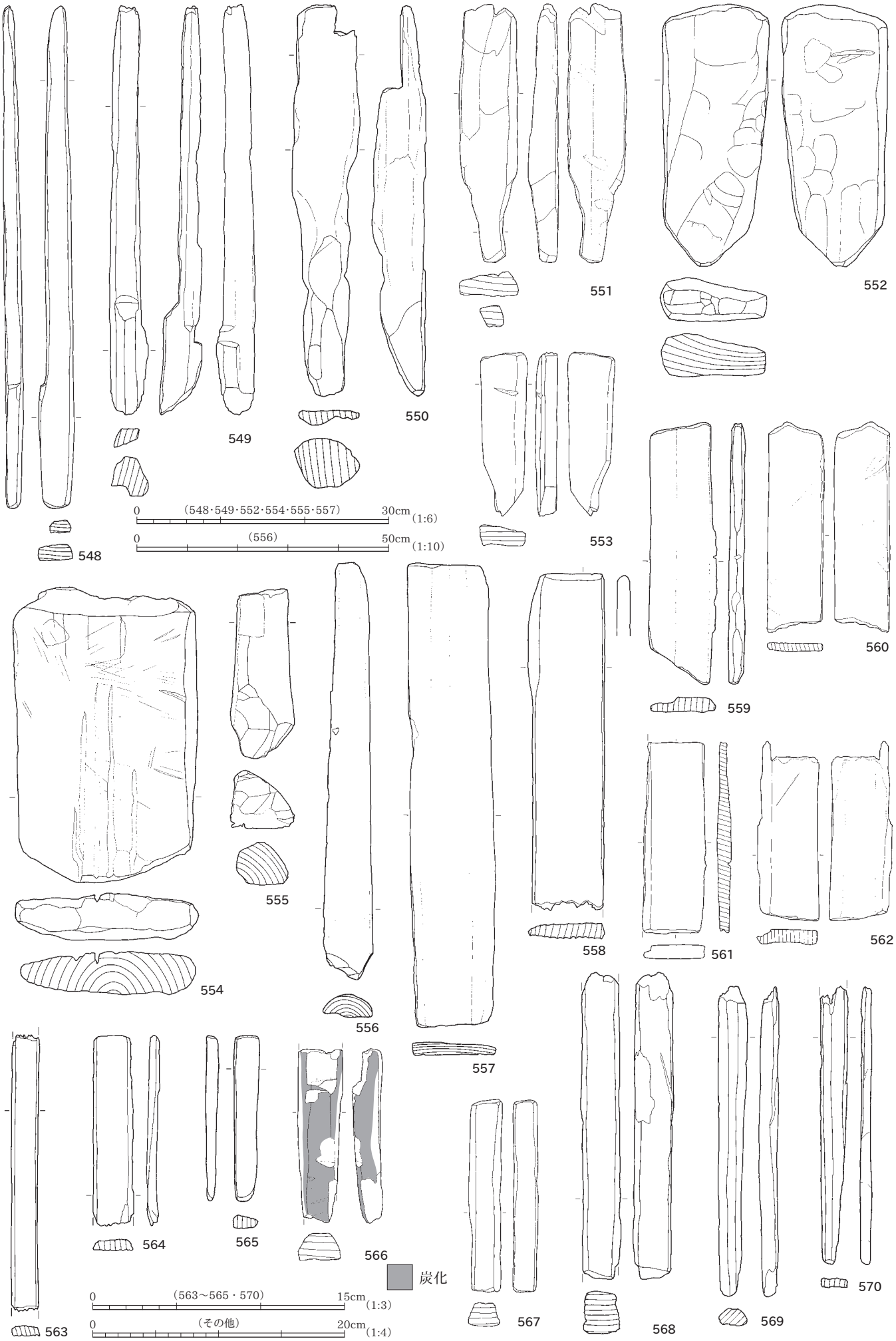
Va～Vd層（521～535）



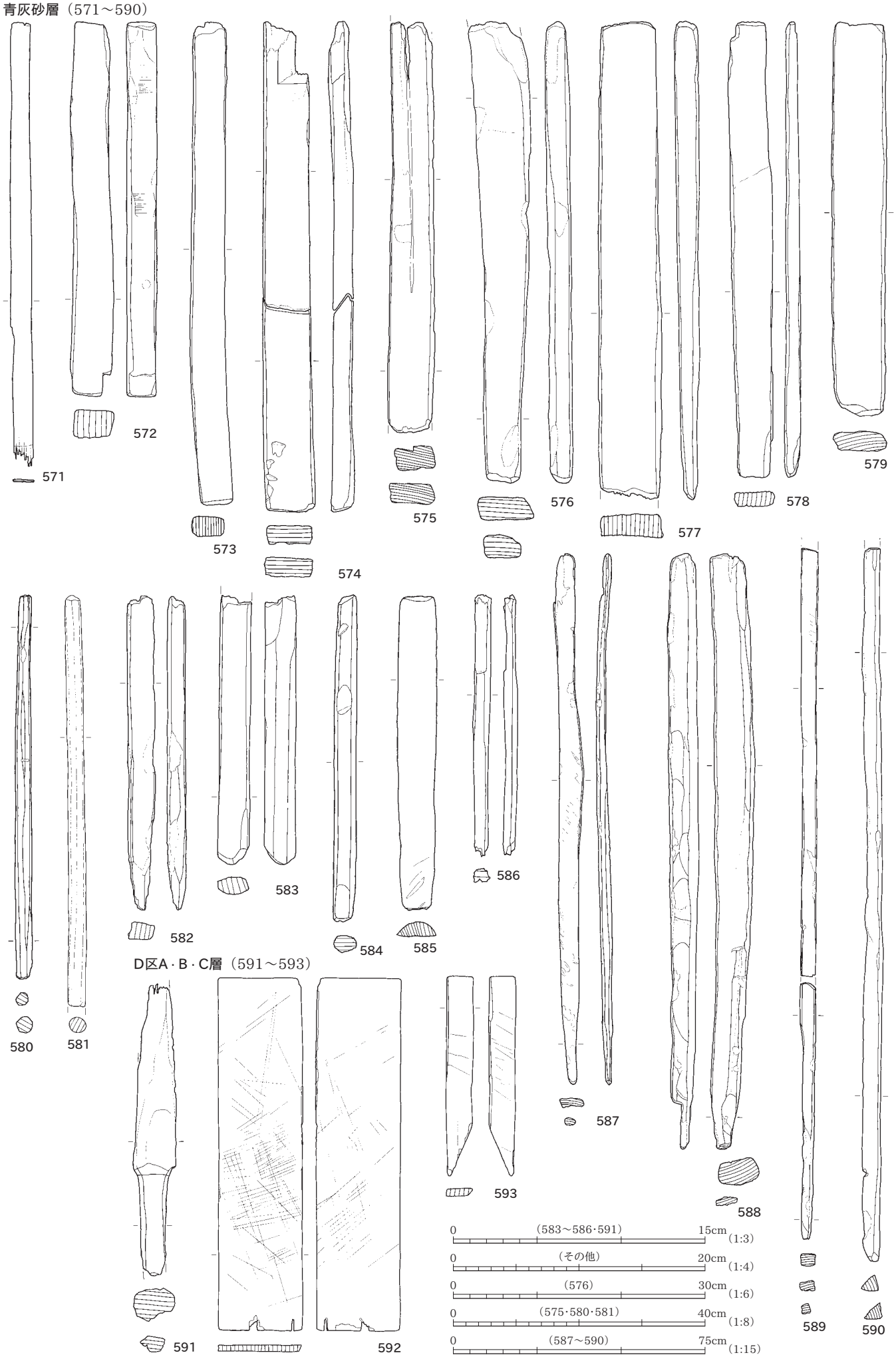
青灰砂層（538～547）


538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
炭化
0 (539) 15cm (1:3)
0 (その他) 20cm (1:4)

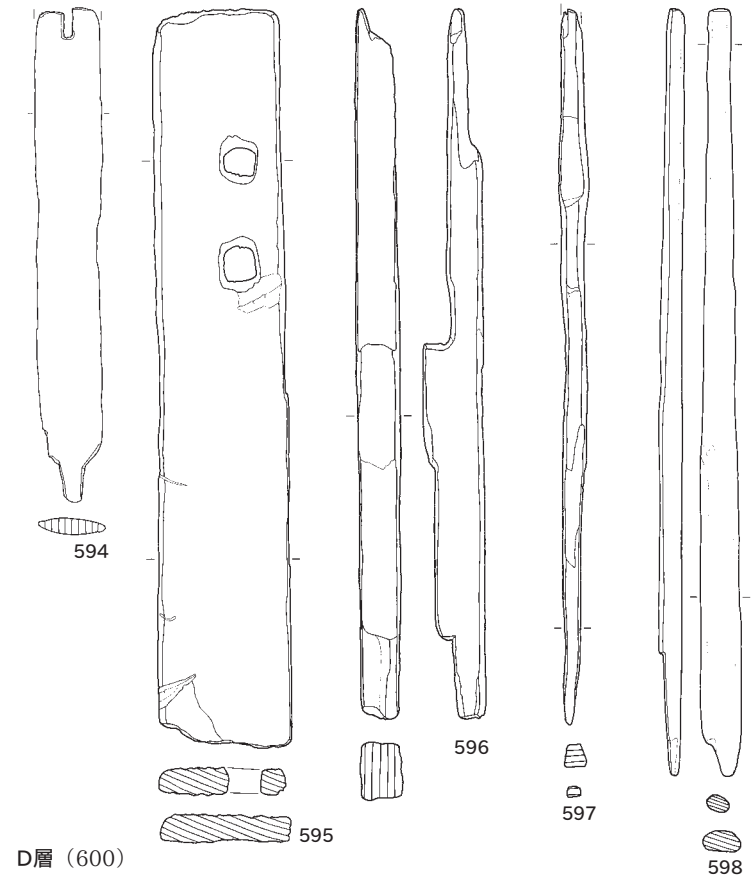
青灰砂層（548～570）


548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
0 (548・549・552・554・555・557) 30cm (1:6)
0 (556) 50cm (1:10)
0 (563～565・570) 15cm (1:3)
0 (その他) 20cm (1:4)
炭化

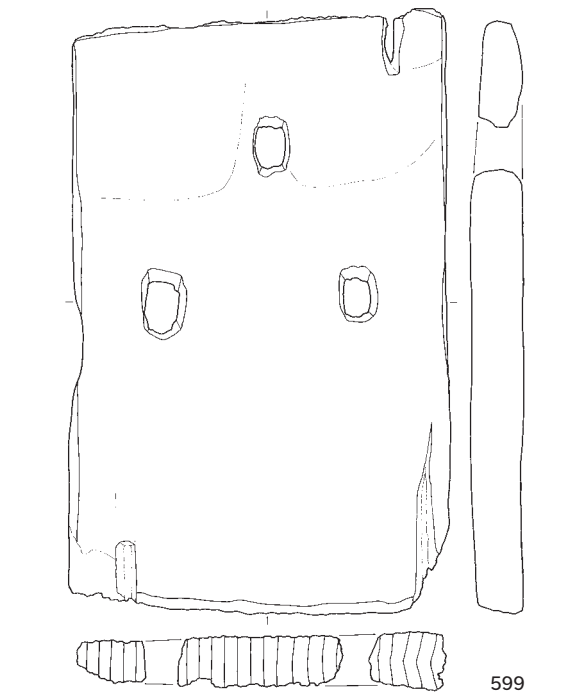
青灰砂層（571～590）


571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
D区A・B・C層（591～593）
591
592
593
0 (583～586・591) 15cm (1:3)
0 (その他) 20cm (1:4)
0 (576) 30cm (1:6)
0 (575・580・581) 40cm (1:8)
0 (587～590) 75cm (1:15)

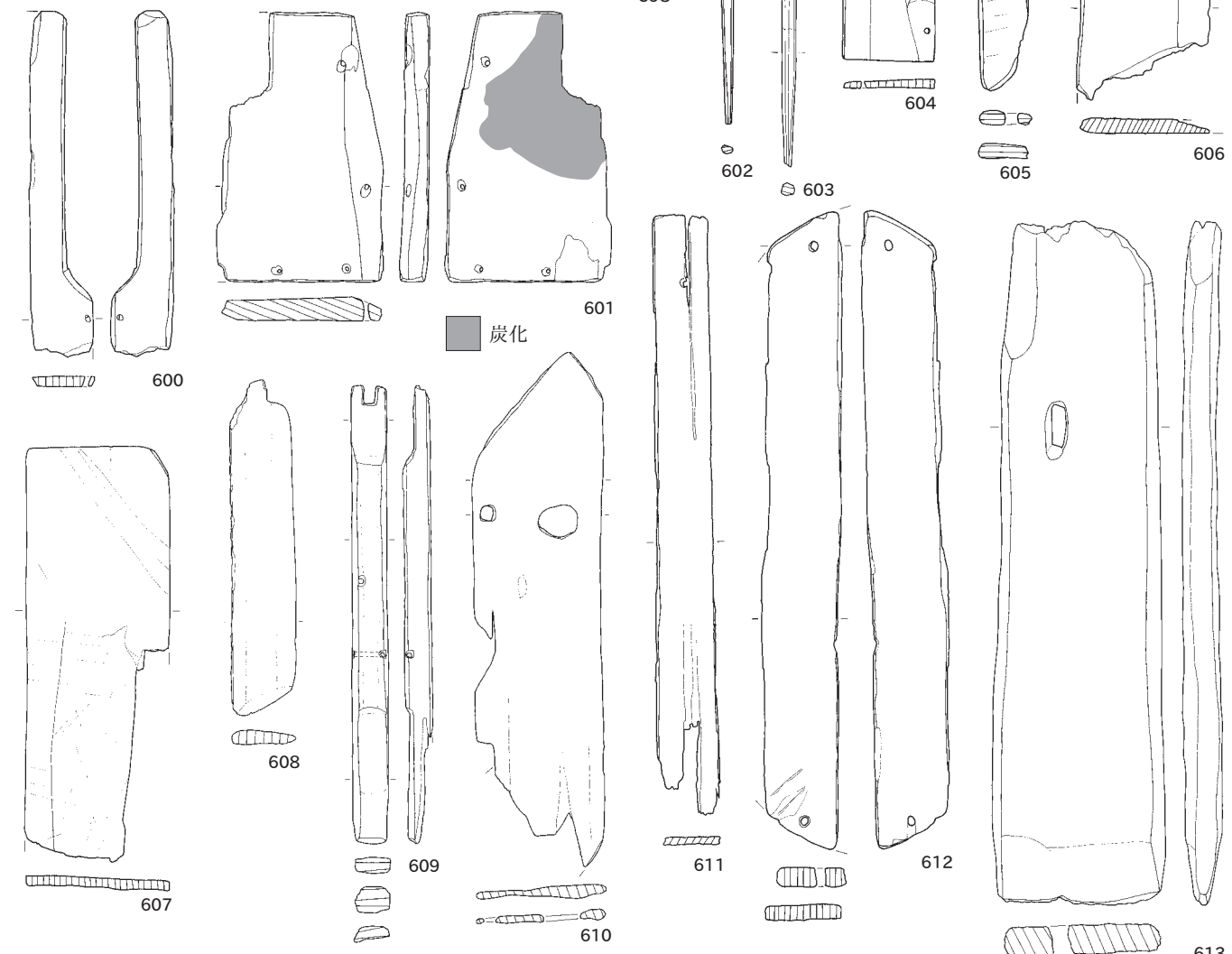
D区A・B・C層（594～598）



不明など（599・601～613）



D層（600）



0　(600・602～607)　15cm (1:3)
0　(その他)　20cm (1:4)
0　(597)　40cm (1:8)
0　(598)　50cm (1:10)

SD50（614）　不明など（615～625）

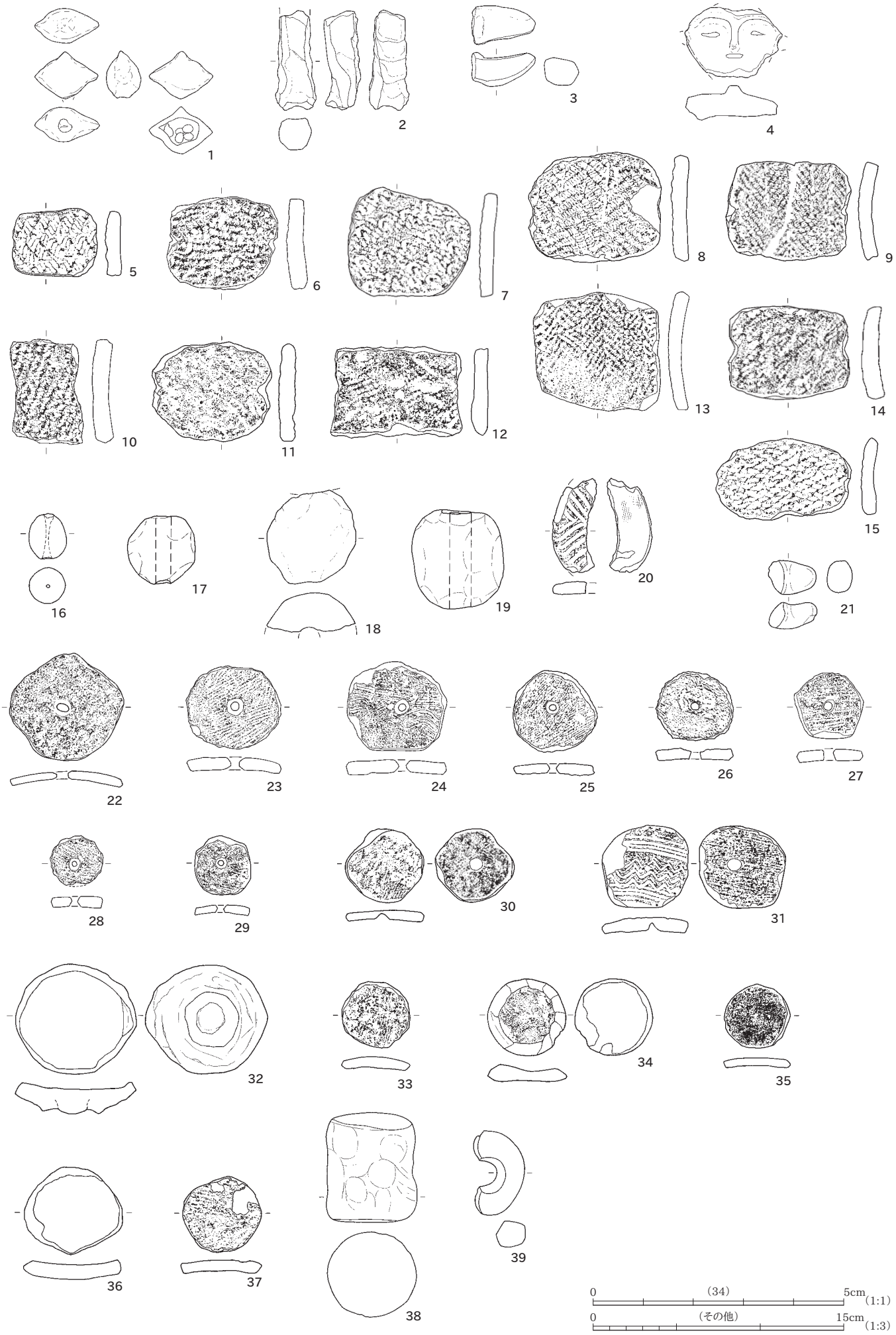
614　615　616　617　618　619　620　621　622　623　624　625

XV層（漆紐）

626　627

赤色漆

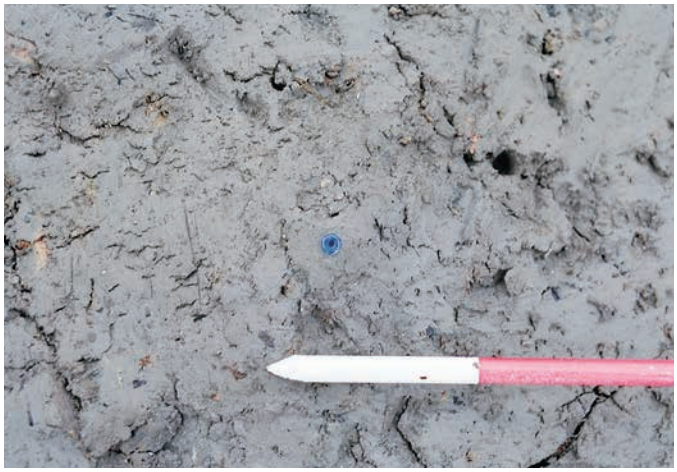
0 (626) 10cm (1:2)
0 (619～623) 15cm (1:3)
0 (618) 20cm (1:4)
0 (627) 5cm (4:5)
0 (615～617・624) 30cm (1:6)
0 (614) 50cm (1:10)
0 (625) 75cm (1:15)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
0 (34) 5cm (1:1)
0 (その他) 15cm (1:3)

遺跡遠景（南から）

A・B 区完掘（北東から）

23 層土器出土状況（北から）



23 層ガラス玉（報告 No.585）出土状況（北から）

灰色粘土層土器・緑色凝灰岩出土状況（西から）

Ⅵb 層勾玉未成品（報告 No.520）出土状況（北から）

XⅠc 層腕輪（報告 No.372）出土状況（西から）

XⅡd 層土器・籃胎漆器（報告 No.366）出土状況（東から）

XⅤc 層漆紐（報告 No.626）出土状況（西から）

XⅤ層（6B）赤色ペースト状塊出土状況（西から）

Ⅰ～Ⅷb 層（西から）

Ⅰ～Ⅷb 層（西から）

XⅡa 層～XⅢd 層（西から）

Ⅰ～Ⅷb 層（西から）

XⅤa 層～XⅤd 層（南から）

Ⅸa 層～XⅠb 層（西から）

XⅣ層～XⅥ層（西から）

縄文時代前期・弥生時代中期・古墳時代の土器

縄文時代前期の土器

弥生時代中期の土器

古墳時代の土器

漆紐（報告 No.626）と石匙（報告 No.46）・土器（報告 No.796）

脚付盤か（報告 No.358）

斧柄（報告 No.370） 使用例

漆紐（報告 No.627）

腕輪（報告 No.372）

堅櫛（報告 No.312）

緑色凝灰岩製管玉工程品

ヒスイ製勾玉工程品

石匙（縄文時代前期前葉）

玦状耳飾・玉類（縄文時代前期前葉）

磨製石斧（縄文時代前期前葉）

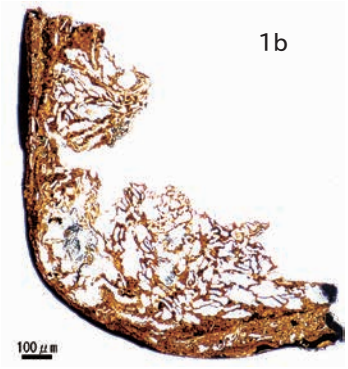
石鏃（弥生時代中期）

磨製石斧（弥生時代中期）

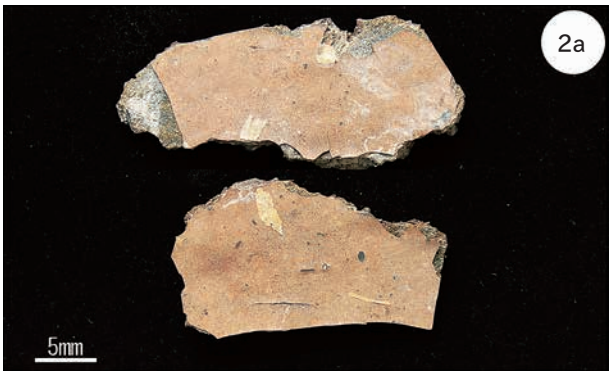
石製品（弥生時代中期）

ヒスイ原石・分割工程品

玉類（弥生～古墳時代）



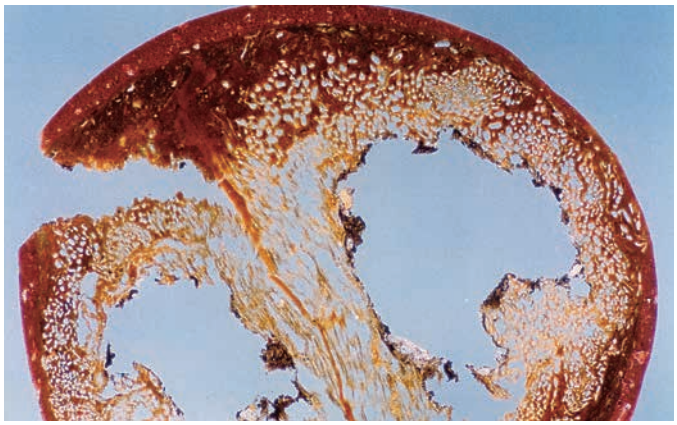
漆膜分析　試料 No.1（報告 No.626）　　試料 No.1　横断面



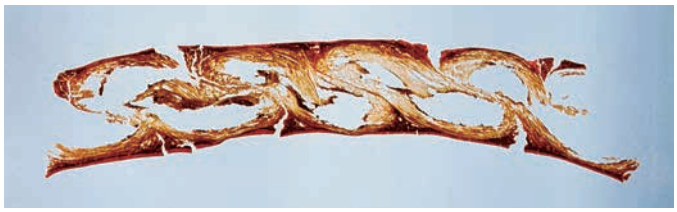
漆膜分析　試料 No.2（報告 No.366）

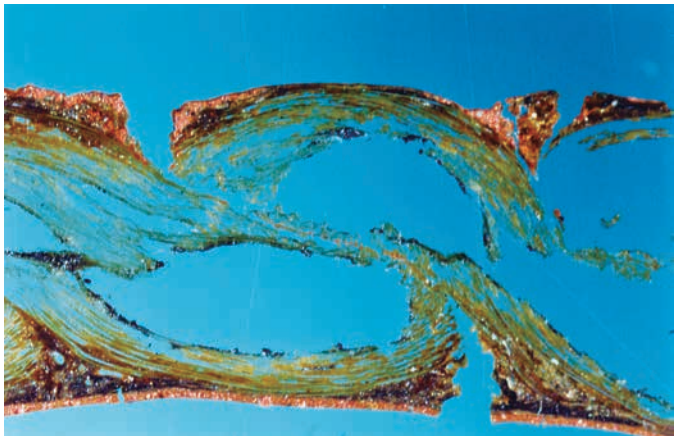
報告 No.626　　2.5 ×

上：報告 No.626　下：報告 No.627　　5.0 ×



横断面　　上：50 ×　下：90 ×





縦断面　　上：14.5 ×　下：50 ×

XIV層上面（南から）

VIIIb層上面（東から）

作業風景（A・B区XVI層上面の清掃　北東から）

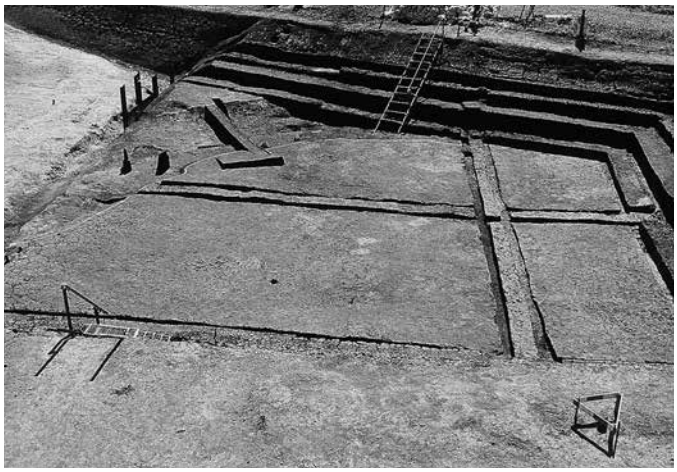
XIb層掘削（南から）

F区完掘（東から）

F 区Ⅷb 層上面（東から）

E 区Ⅵa 層上面（東から）

F 区Ⅹ層上面（東から）



E 区Ⅷb 層上面（東から）

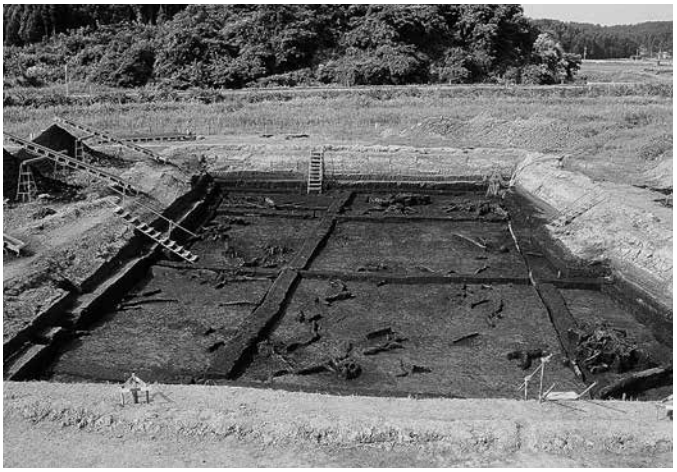
F 区ⅩⅢa 層上面（東から）

E 区ⅩⅢa 層上面（東から）

F 区ⅩⅣ層上面（東から）

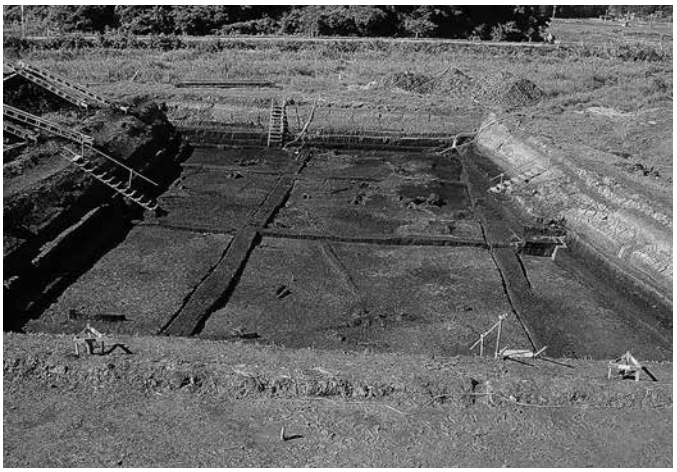
E 区完掘（東から）

G区Ⅹ層上面検出状況（東から）

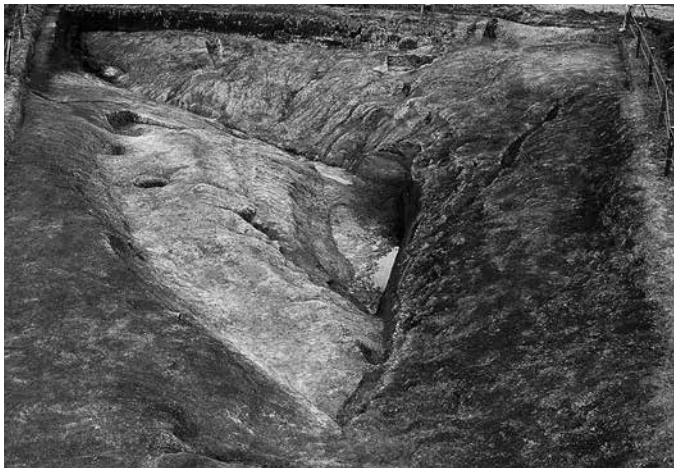


I区Ⅵa層上面（東から）

G区ⅩⅢa層上面（東から）



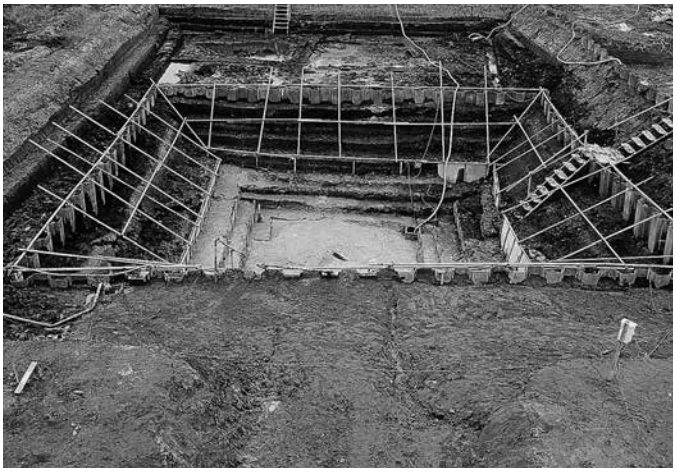
I区Ⅷb層上面（東から）



D区完掘（北から）

I区ⅩⅣe層上面（東から）

H区完掘（東から）



I区完掘（東から）

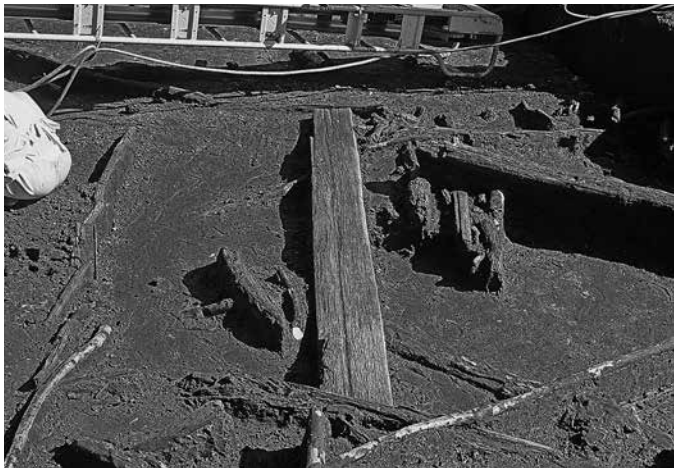
Ⅰ～Ⅷb 層（西から）

XⅤa 層～XⅥ層（西から）

XⅡa 層～XⅢc 層（西から）

SX87 検出状況（東から）

XⅤa 層～XⅤe 層（西から）



10・11A　Ⅴ層遺物出土状況（東から）

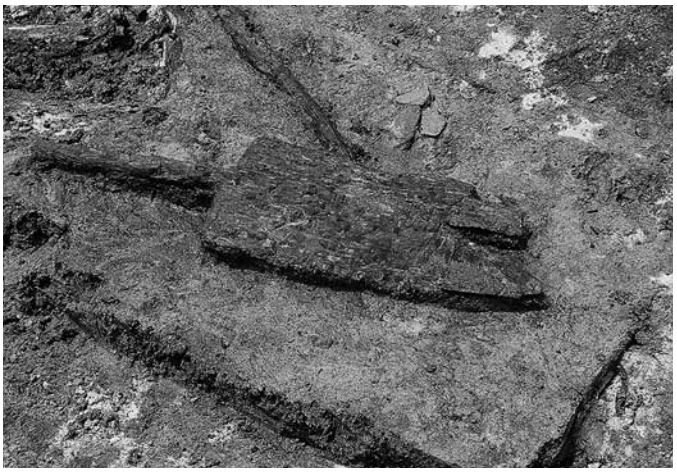
XⅤe ～XⅥ層（西から）

Ⅴ層（5B）須恵器無台杯（報告 No.764）出土状況（南から）

9B 杭（南から）

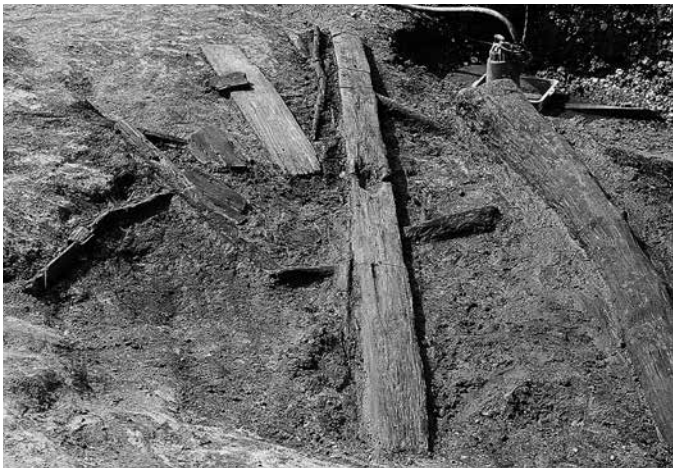
SX88　青灰砂層木製品（槽 報告 No.537）出土状況（南から）

10A 杭（南から）



SX88　青灰砂層木製品（鋤 報告 No.70）出土状況（南から）

11A 杭（南から）



SX88　青灰砂層木製品出土状況（南から）

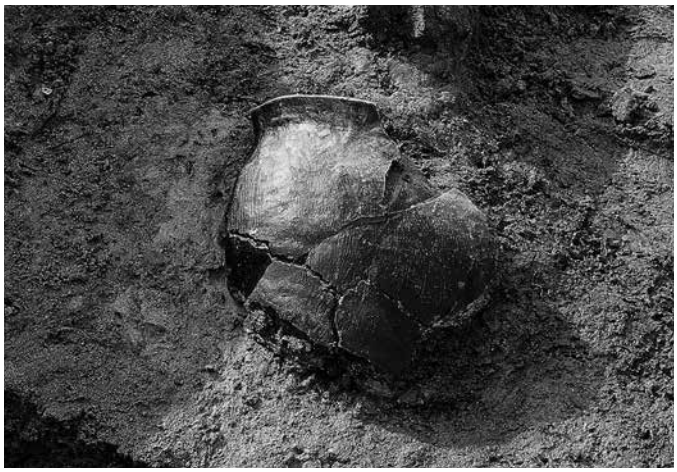
SX88　青灰砂層木製品出土状況（南から）

SX88　青灰砂層木製品（槽 報告 No.547）出土状況（南から）

SX88　青灰砂層土器（報告 No.705・715・710）出土状況（東から）

SX88　青灰砂層土器出土状況（西から）

SX88　青灰砂層土器（報告 No.705・715・710）出土状況（南から）



SX88　青灰砂層土器（報告 No.697）出土状況（東から）

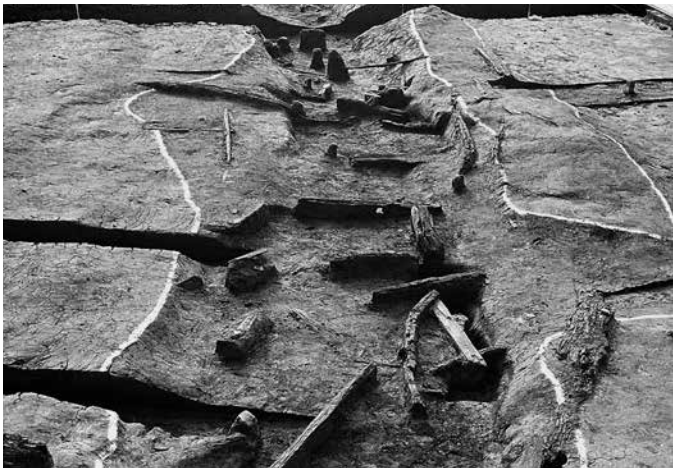
Ⅵb 層土器（報告 No.725）出土状況（西から）

SX88　青灰砂層土器（報告 No.711）出土状況（東から）

Ⅵb 層須恵器（報告 No.729）出土状況（東から）

Ⅵb 層須恵器（報告 No.728）出土状況（南から）

SD33・水田跡完掘（西から）

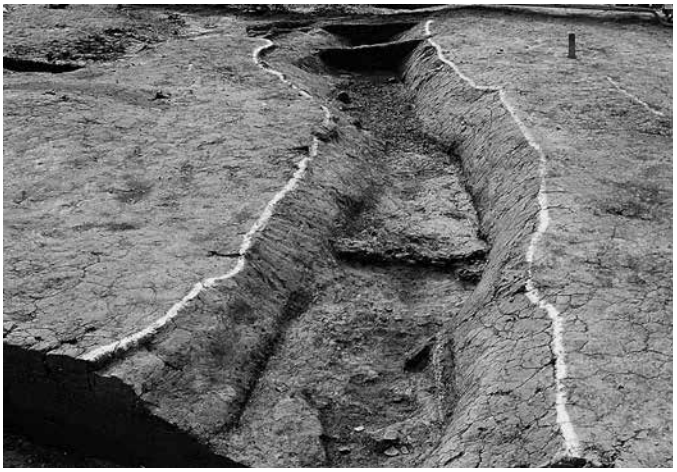


SD33 木製品出土状況（西から）

SD33 断面（西から）

SD33 木製品出土状況（西から）

SD33 断面（西から）



SD33 完掘（西から）

SD33 断面（西から）

畦畔断面（西から）

SD50・33・水田跡完掘

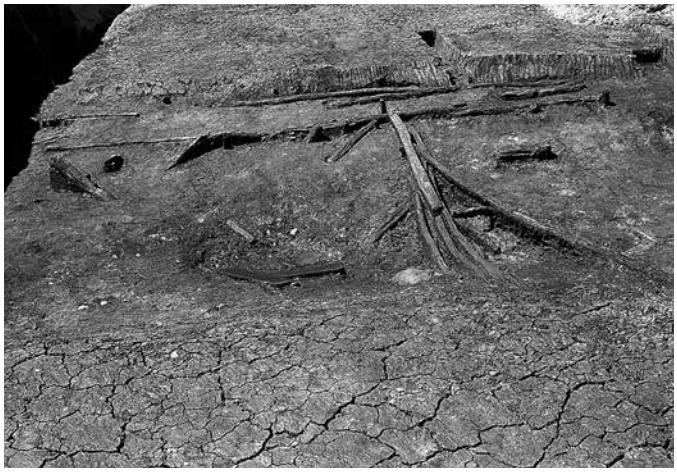
SD50 断面（西から）

SD50 断面（西から）

SD50 断面（西から）

SD50 断面（東から）

SX84 検出状況（西から）



SX84 検出状況（南から）

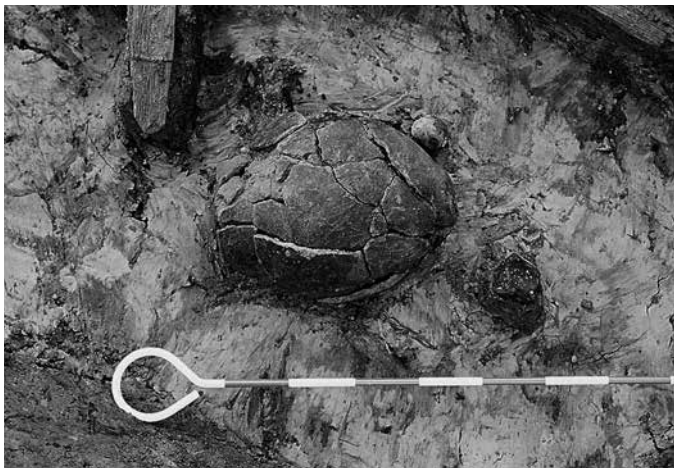
SD50・51 検出状況（北西から）

SX84 杭列（西から）

SD50・51 検出状況（西から）

SD50　3 層土器（報告 No.541）出土状況（北から）

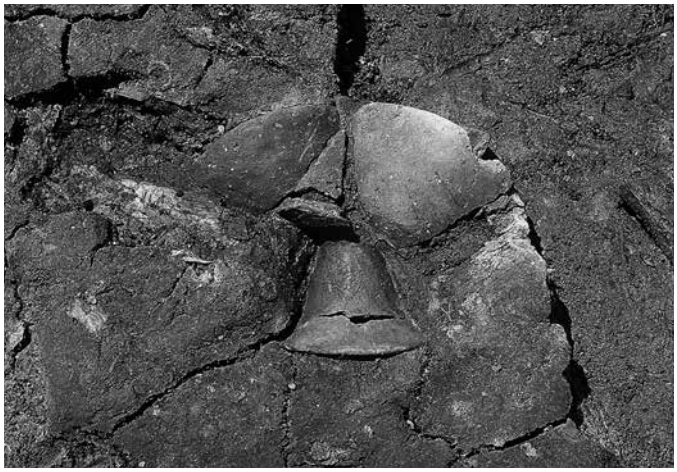
SD50　3 層土器（報告 No.833）出土状況（東から）



SD83　土器（報告 No.642）出土状況（南から）

SD83　1 層土器（報告 No.637）出土状況（東から）

SD83　1 層土器（報告 No.631）出土状況（南から）



SD50　1 層土器（報告 No.640）出土状況（西から）

SD83　1 層土器出土状況（南から）

SD50　3 層石器（左 報告 No.390、右 報告 No.556）出土状況（西から）

SD50　3 層木製品出土状況（南から）

SD50　3 層ひょうたん出土状況（西から）

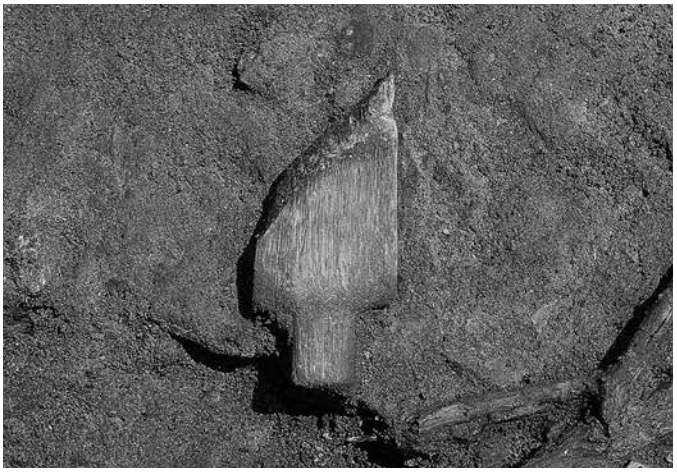
SD50　3 層木製品出土状況（東から）

SD50　3 層木製品（高杯 報告 No.132）出土状況（南から）

SD50　3 層木製品（斧柄 報告 No.130）出土状況（南から）

SD50　3 層木製品（報告 No.614）出土状況（南から）

SD50　3 層木製品（櫂 報告 No.140）出土状況（南から）



SD50　3 層木製品（報告 No.137）出土状況（西から）

SD51　3 層木製品（鍬身 報告 No.264）出土状況（南から）

SD83　3 層木製品（竪杵 報告 No.273）出土状況（南から）

SD50　1 層木製品（容器 報告 No.133）出土状況（西から）

SD50　1 層木製品（櫂 報告 No.139）出土状況（南から）

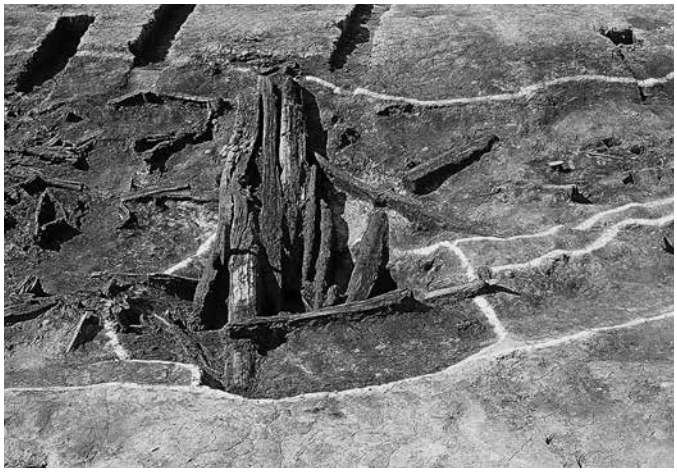
SD50　1 層木製品（梯子 報告 No.141）出土状況（西から）

SD47　3 層木製品出土状況（南から）

SD47　2 層木製品（報告 No.81）出土状況（南から）

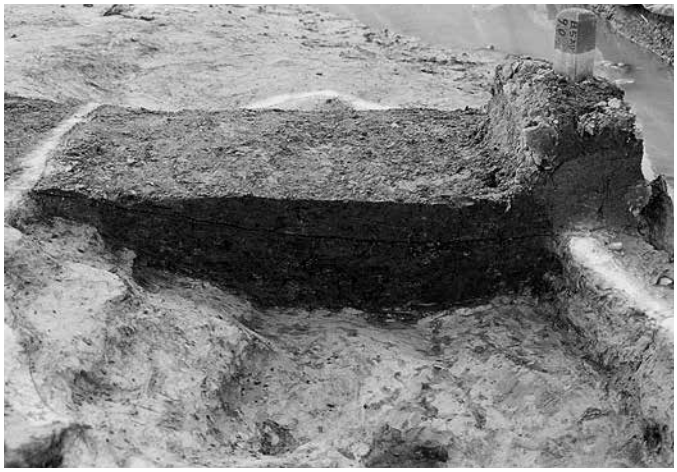
SD47 2 層木製品（鍬身 報告 No.69、棍棒 報告 No.75）出土状況（南から）

SK85 木製品検出状況（西から）

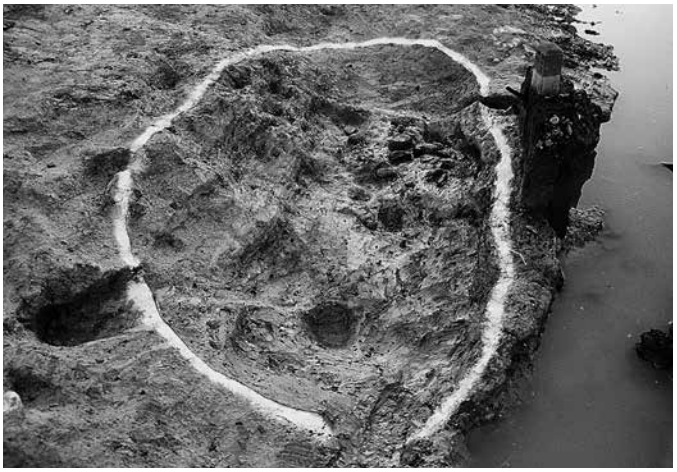


SK85 木製品検出状況（南から）

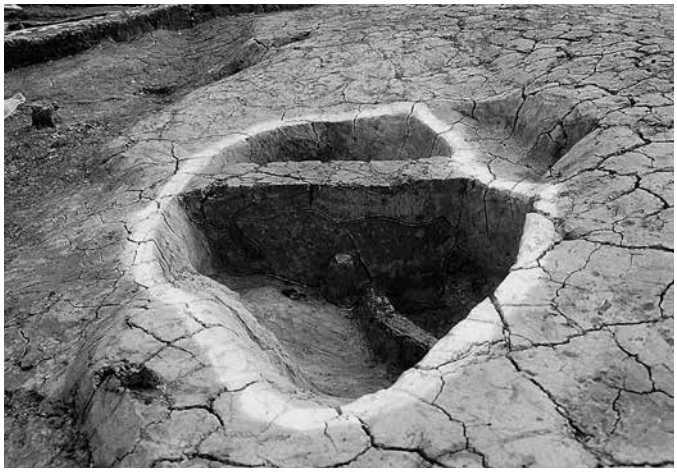
SK85 完掘（南から）



SK59 断面（東から）

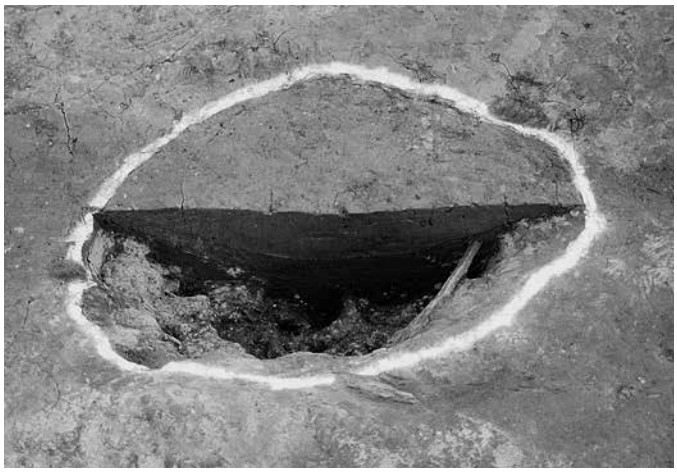


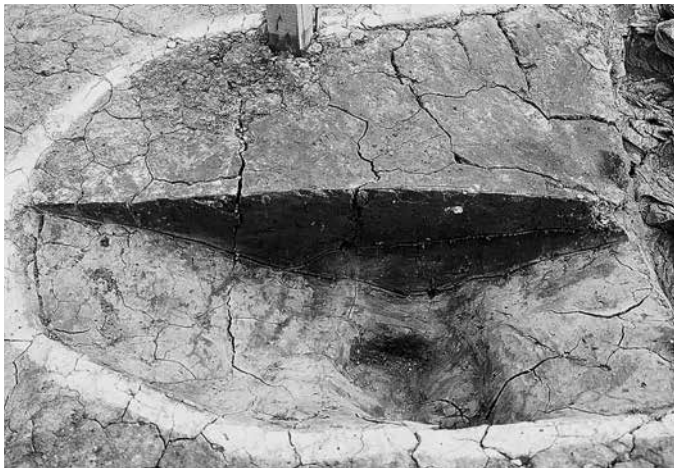
SK59 完掘（東から）

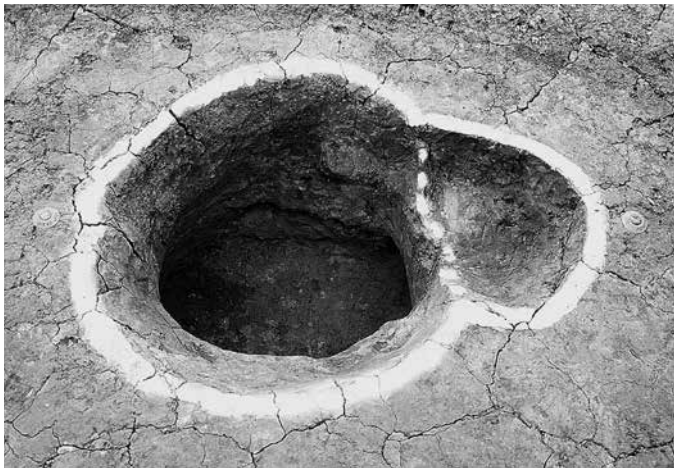

SK6 断面（北から）

SK6 遺物出土状況（西から）

SK6 遺物出土状況（西から）


SK40 断面（北から）

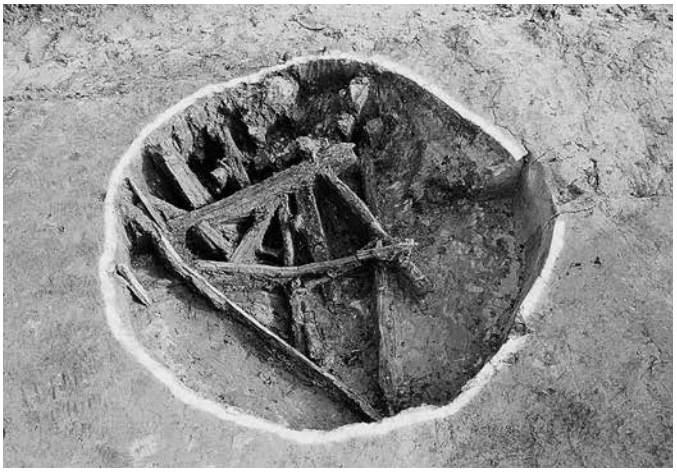

SK43 断面（南から）


SK40・43 完掘（南から）

SK70 遺物出土状況（南から）

SK70 遺物出土状況（北から）

SK55 断面（南から）



SK55 木製品出土状況（南から）

SK55 土器出土状況（南から）

SK55 土器出土状況（南から）

SK55 土器出土状況（南から）

SK55 完掘（西から）

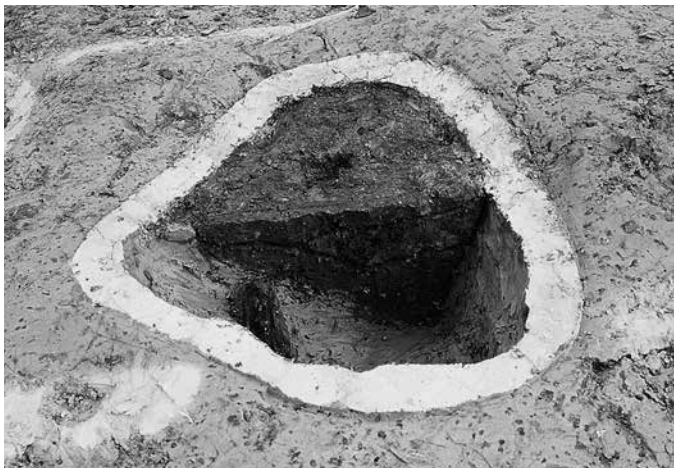
SE89 断面（西から）

SE89 土器出土状況（南から）

SK49 断面（西から）

SK49 遺物出土状況（西から）

SK72 断面（南から）



SK74 断面（南から）

SK72・73・74（南から）

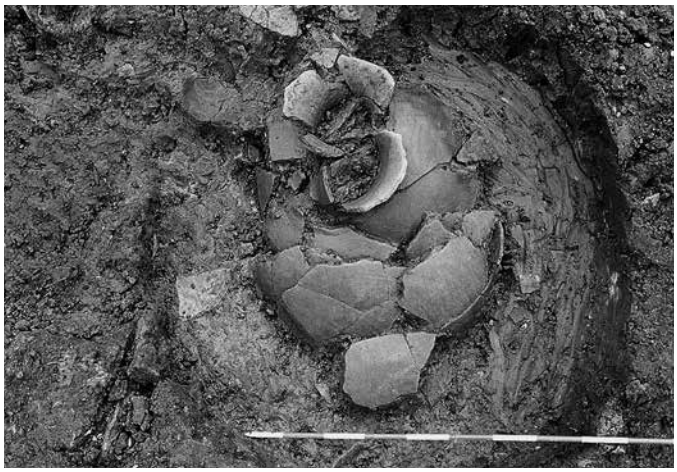
SK95 断面（東から）

SK95 木製品出土状況（鍬　報告 No.311）（東から）

SK95 完掘（東から）

23 層（10B）土器出土状況（南から）

23 層（7B）土器出土状況（北から）



23 層（8B）土器出土状況（北から）

23 層（7B）土器出土状況（南から）

灰色粘土層（4・5D）土器出土状況（東から）

作業風景（灰色粘土層土器出土状況清掃　東から）

灰色粘土層（4・5D）土器出土状況（南から）

灰色粘土層（4・5D）土器出土状況（南から）

灰色粘土層（4・5D）土器出土状況（南から）

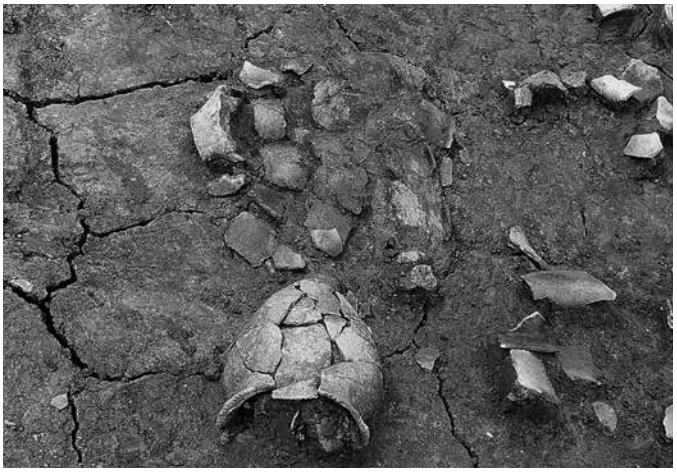
灰色粘土層（4・5D）土器出土状況（南から）

灰色粘土層（4・5D）土器出土状況（南から）

灰色粘土層（4・5D）土器出土状況（東から）

灰色粘土層（4・5D）土器出土状況（東から）

灰色粘土層（4・5D）土器出土状況（東から）


灰色粘土層（4・5D）土器出土状況（北から）

灰色粘土層（4・5D）土器出土状況（東から）

灰色粘土層（4・5D）土器・石器出土状況（南から）

灰色粘土層（4・5D）石器出土状況（東から）

F 層（3D）土器出土状況（南から）

F 層（3D）土器出土状況（南から）

F 層（3D）土器出土状況（南から）

XⅡ層（10A）土器（報告 No.359）出土状況（南から）

XⅡ層（6B）土器出土状況（南から）

XⅡb 層（4D）土器（報告 No.339）出土状況（南から）

XⅡb 層（4C）土器（報告 No.333）出土状況（北から）

XⅡb 層（7A）土器（報告 No.347）出土状況（東から）

XⅡb 層（6B）土器（報告 No.353）出土状況（南から）

XⅢa 層（7B）土器（報告 No.323）出土状況（南から）

XⅢa 層（5C）　土器（報告 No.313）出土状況（南から）

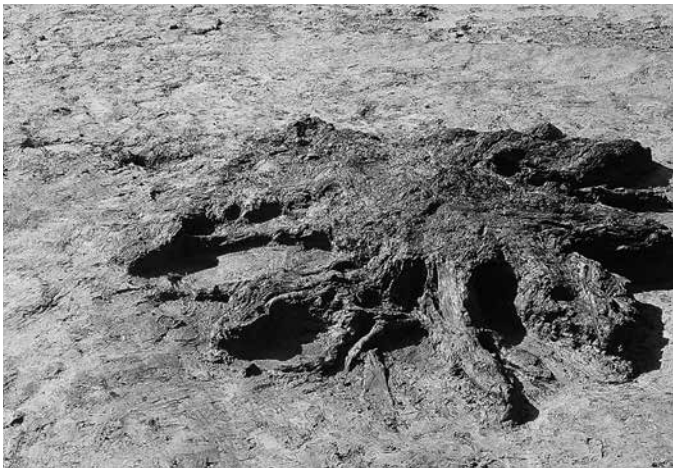
XIIIb 層（9B）土器（報告 No.308）出土状況（西から）

XIIIb 層（4D）土器出土状況（西から）

XIIIe 層（5B）土器（報告 No.305）出土状況（北から）

XIIIe 層（5U）土器（報告 No.297）出土状況（北から）

XIIIe 層（5U）木製品（報告 No.358）出土状況（南から）



XIV 層上面（8A）樹木根検出状況（西から）

SK97 検出状況（東から）

SK97 断面（東から）

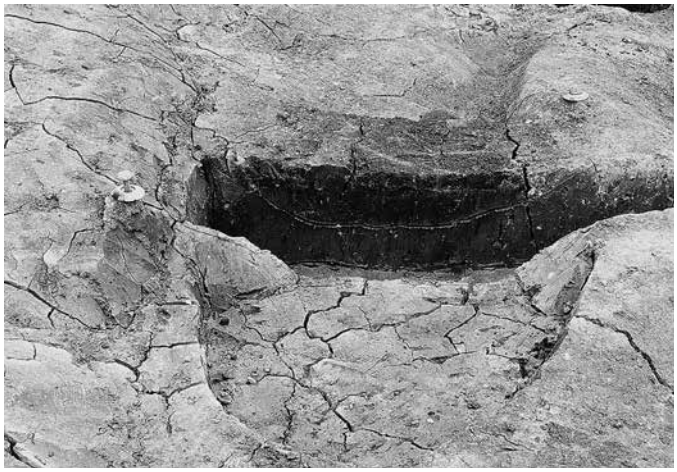
SK93 断面（東から）

SK93 クルミ種子出土状況（東から）

SK94 断面（西から）

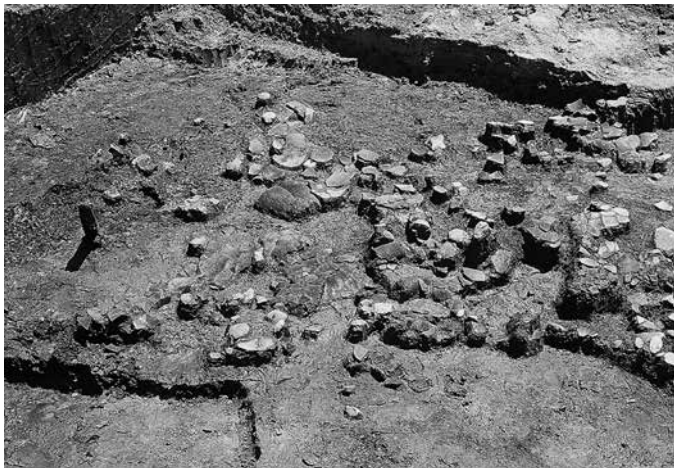
SK94 クルミ種子出土状況（東から）

SK94 完掘（東から）



SK90 断面（西から）

XVc 層（10・11AB）土器出土状況（北から）



XVc 層（10AB）土器出土状況（東から）

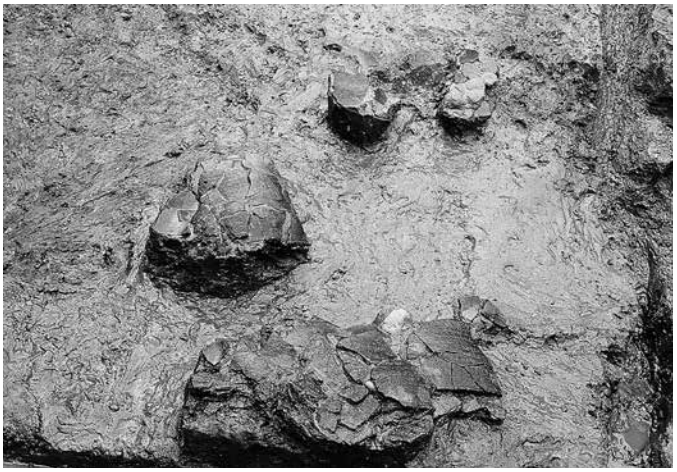
XVc 層（10A19・20）土器出土状況（東から）

XVc 層（10B1・2）土器出土状況（北から）

XVc 層（10A17・18）土器出土状況（東から）

XVc 層（10A）土器出土状況（東から）

XVc 層（11A11・16）土器出土状況（北から）



XVc 層（6B17・18）土器出土状況（北から）

XVd 層（7A22）土器出土状況（西から）

XVc 層（10B1）土器出土状況（南から）

XVc 層（9A4・9B23）土器出土状況（北から）

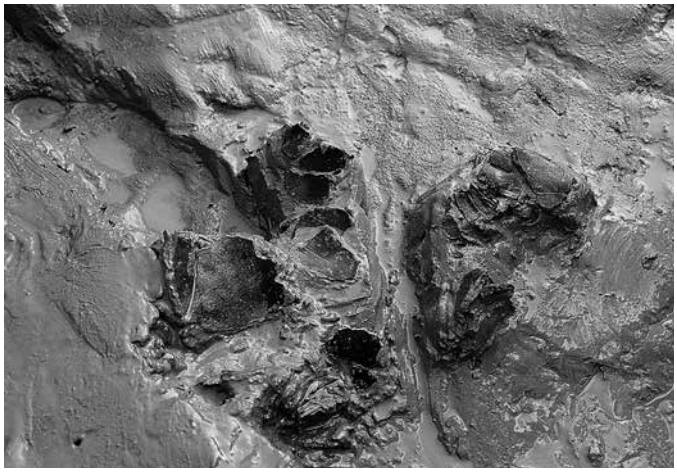
XVc 層（10A11・12）土器出土状況（南から）

XVc 層（10B1・5）土器出土状況（東から）

XVc 層（11A）土器出土状況（北から）

XVc 層（6B14・19）土器出土状況（東から）

XVc 層（9B5）土器出土状況（北から）



XVc 層（103C）土器出土状況（東から）

XVc 層（103C）石器（石錘）出土状況（東から）

冬期の作業風景（1994 年 12 月　D 区　北から）

夏季の集中豪雨による調査区水没（1995 年 8 月　東から）

矢板打設後のXⅣ層掘削（1996 年 10 月　西から）

矢板の打設（1996 年 9 月　南から）

矢板打設後の作業風景（1996 年 9 月　南西から）

矢板打設後の作業風景（1997 年 5 月）

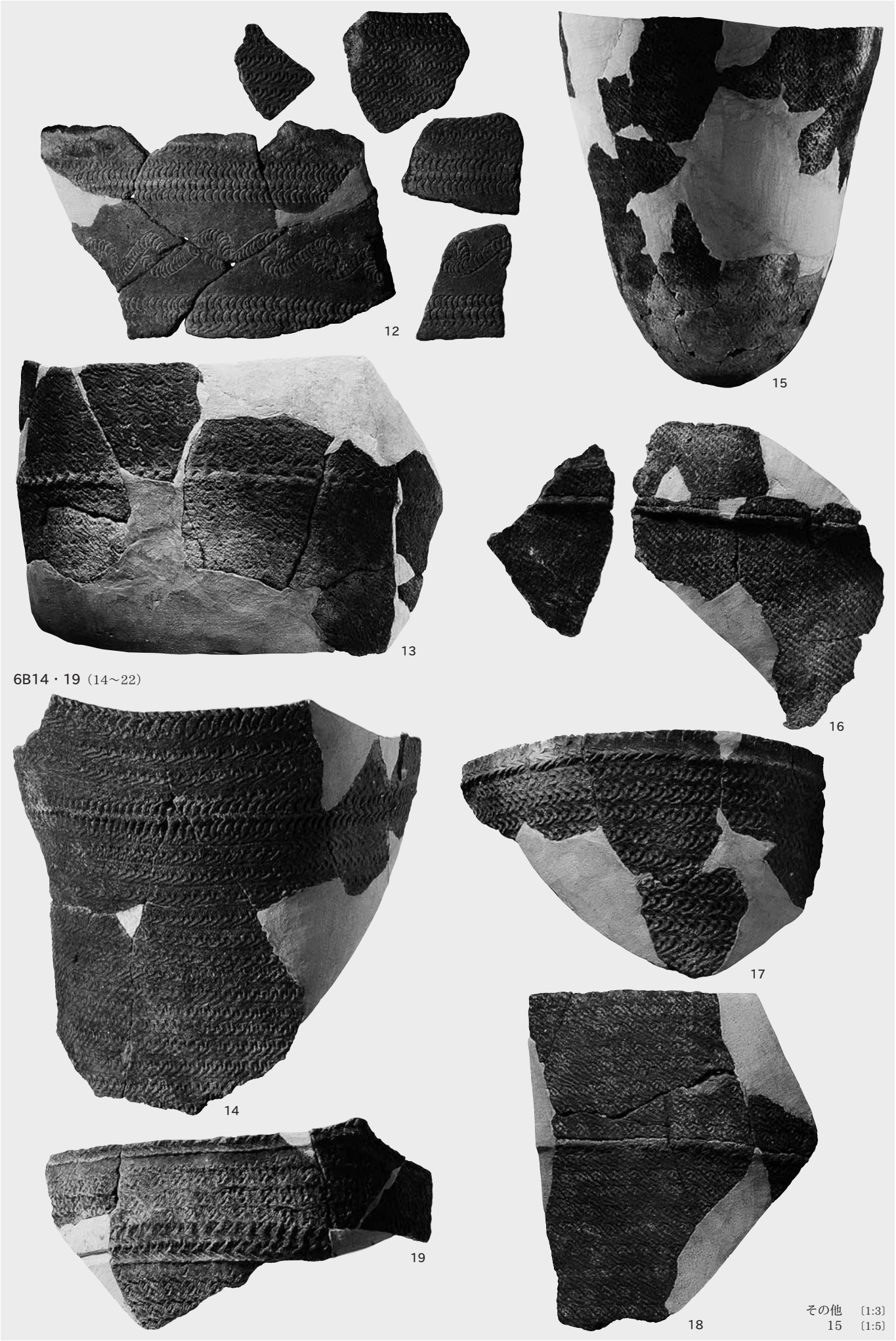
Ⅰ区の下層確認作業（鋼管の打設　南から）

Ⅰ区の下層確認作業
（ワイヤーをかけての交換の抜き取り　南から）

溶接を取り外した鋼管中の土壌

6B17・18（1～13）

その他 〔1:3〕
5・6 〔1:5〕



その他 〔1:3〕
15 〔1:5〕

21

22

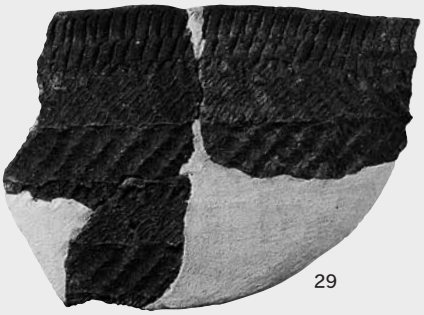
20

25

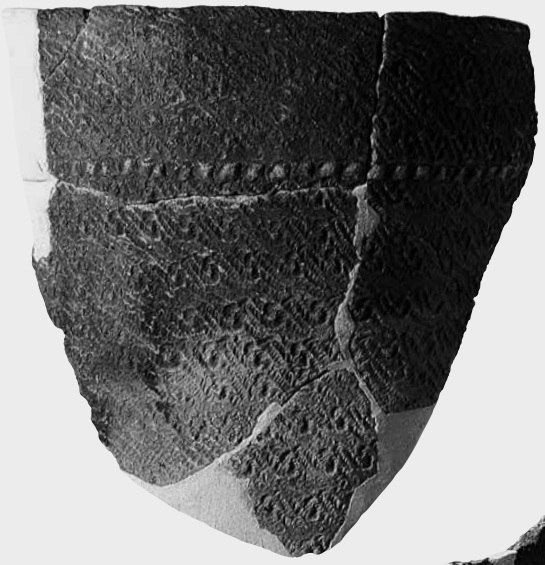
24

6B5・10・15（23～29）

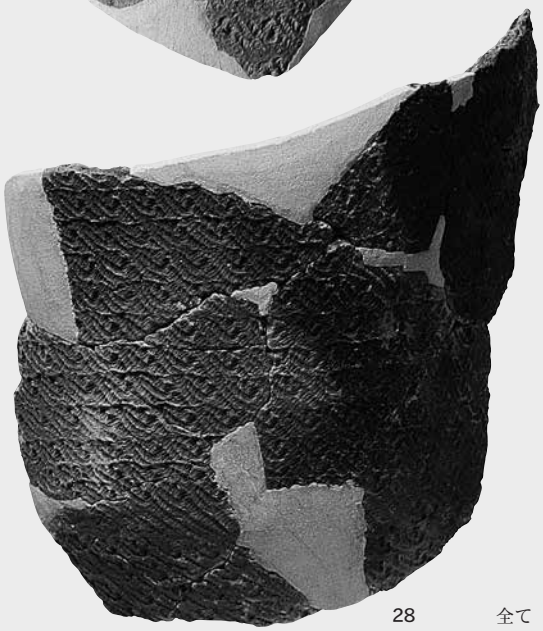
23


29

26



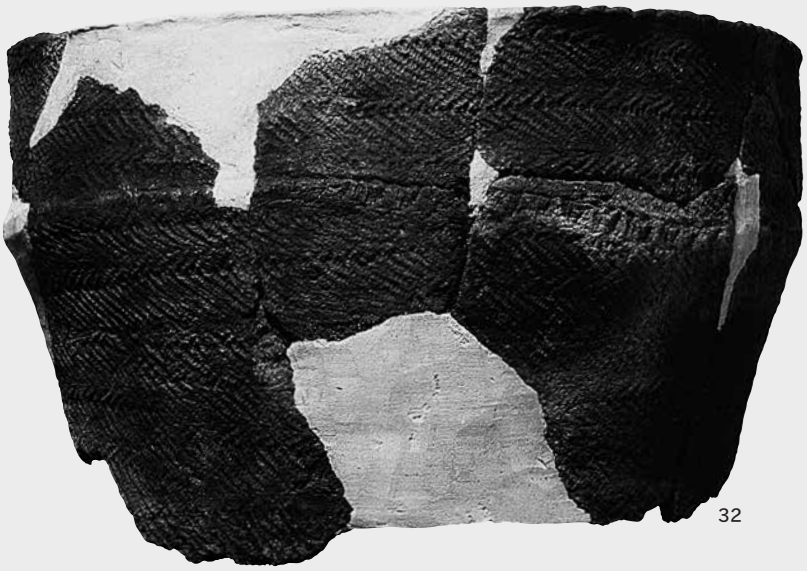
27


28

全て　〔1:3〕

6B5（30～35）

30


32

33

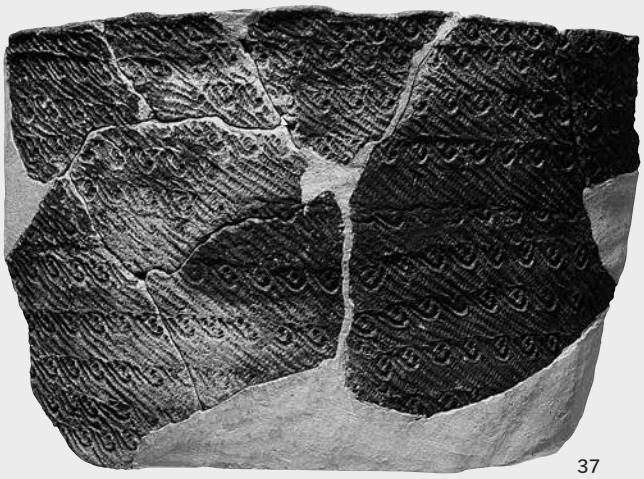
31

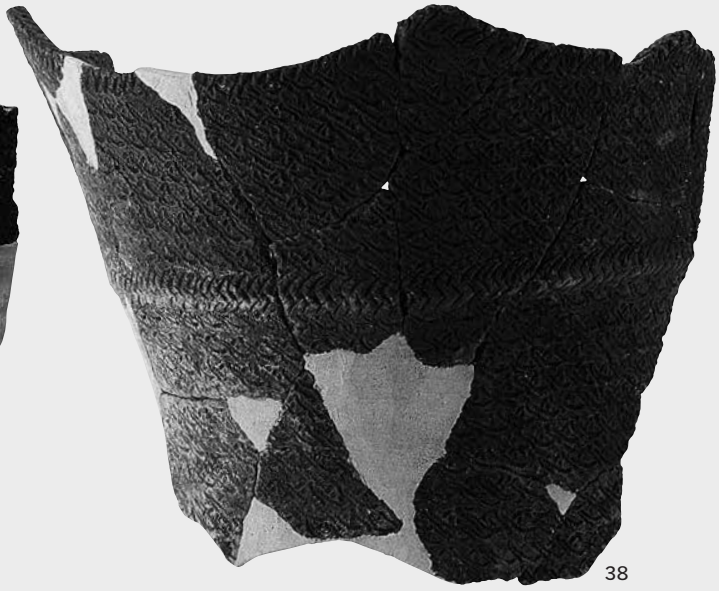
34

35

6B9（36～38）

36


37


38

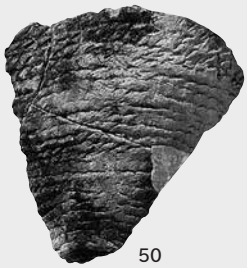
その他　〔1:3〕
31　〔1:5〕

6B13・14（39・40）

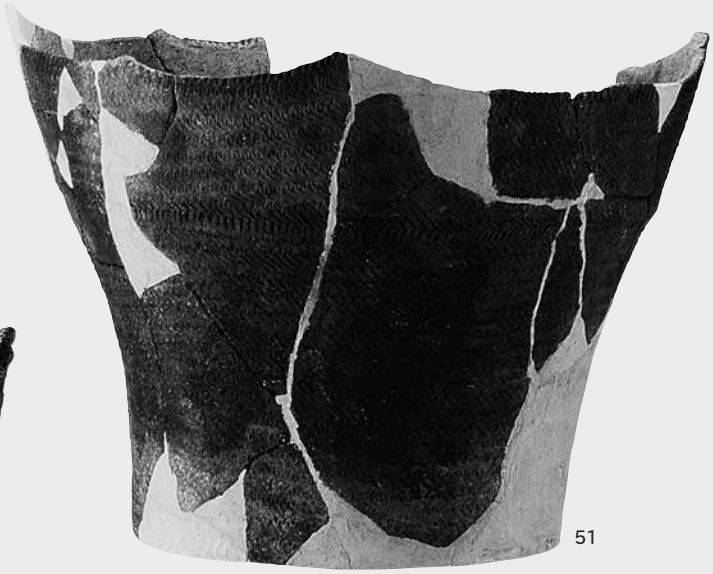
39

48

49


50

40


51

6A・6B（41～71）

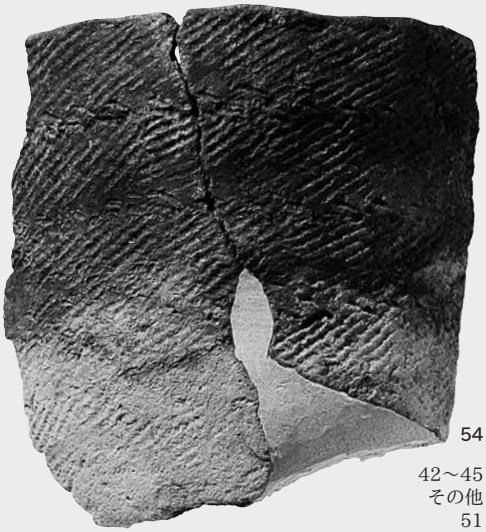
41

53

42

45

44

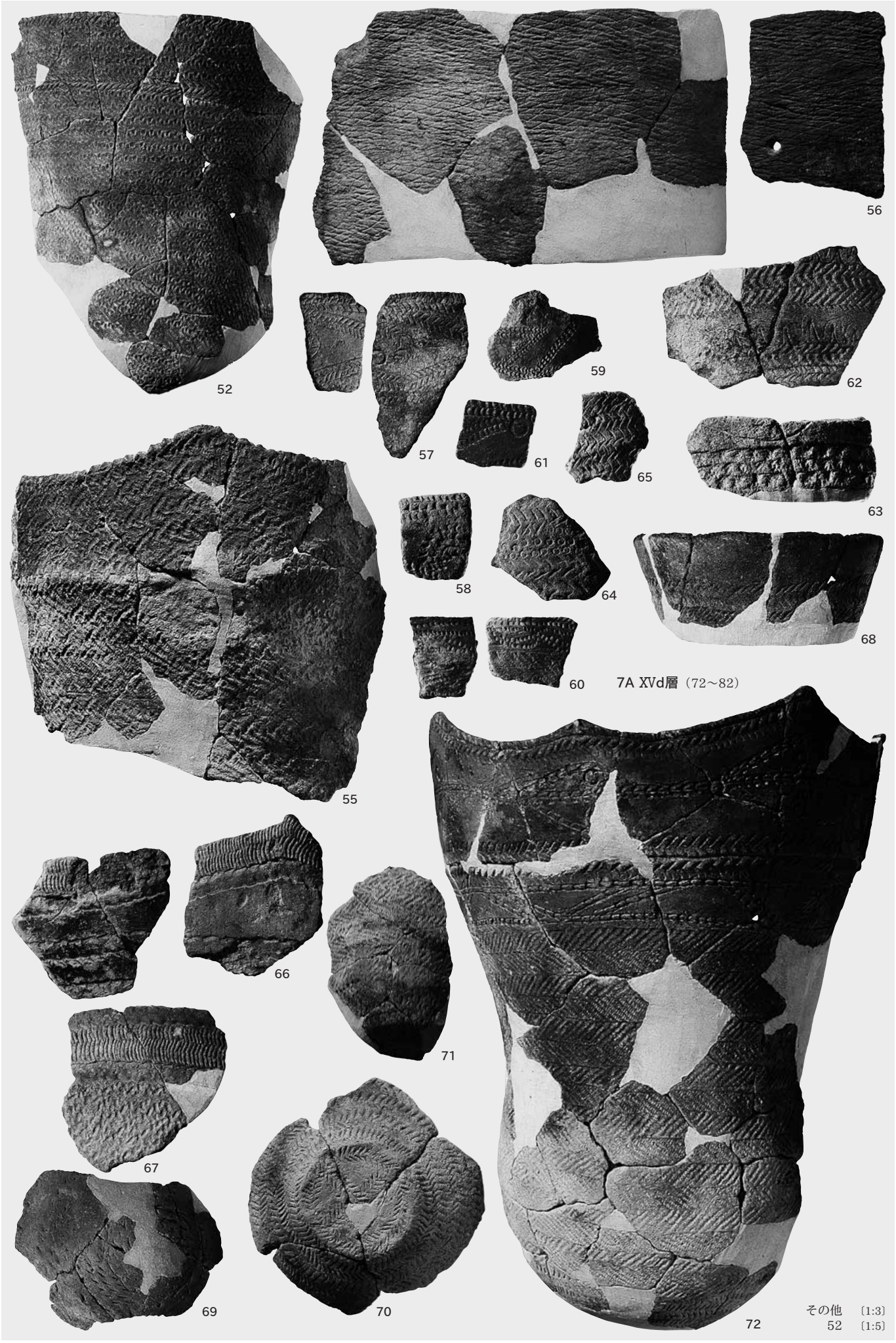

54

43

46

47

42～45　〔1:2〕
その他　〔1:3〕
51　〔1:5〕



その他 〔1:3〕
52 〔1:5〕

73

75

76

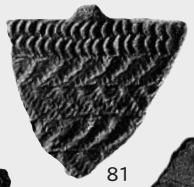
82

77

78

79

80


81

74

7B1・2（83～93）

85

86

89

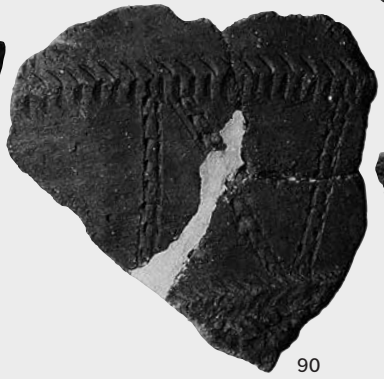
88

87

83

93

84


90

91

その他　〔1:3〕
83　〔1:5〕

7A・B（94～118）

92

94

95

97

98

99

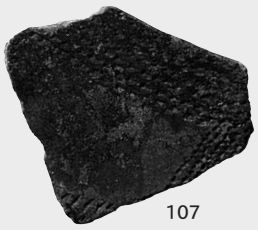
105

100

106

96

101


107

110

111

102

108

112

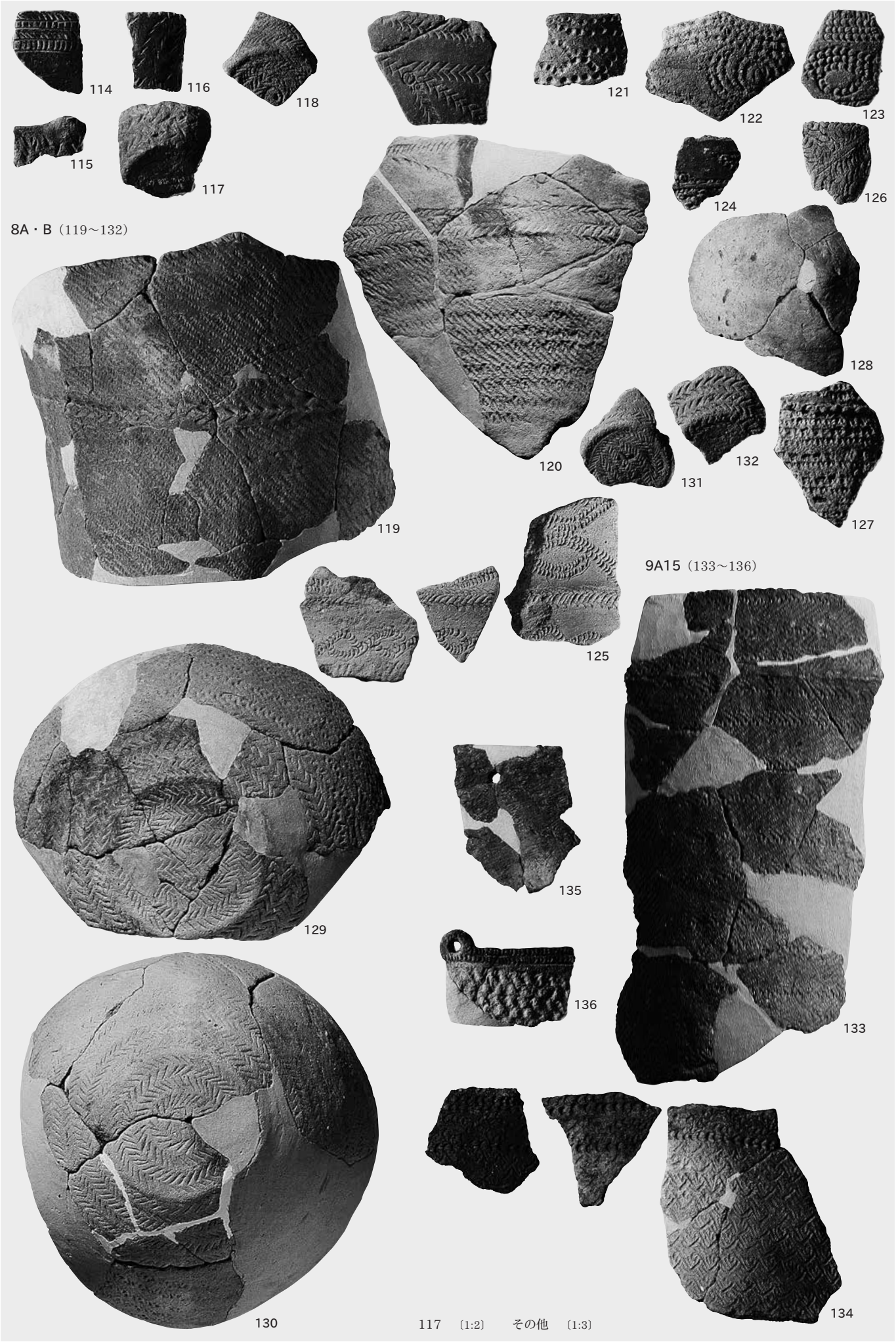
103

104

109

113

101　〔1:2〕
その他　〔1:3〕


114
116
118
121
122
123
115
117
124
126
8A・B（119～132）
128
120
132
131
127
119
9A15（133～136）
125
129
135
136
133
130
134

117 〔1:2〕　その他 〔1:3〕

9B5・10（137～140）

137（上）

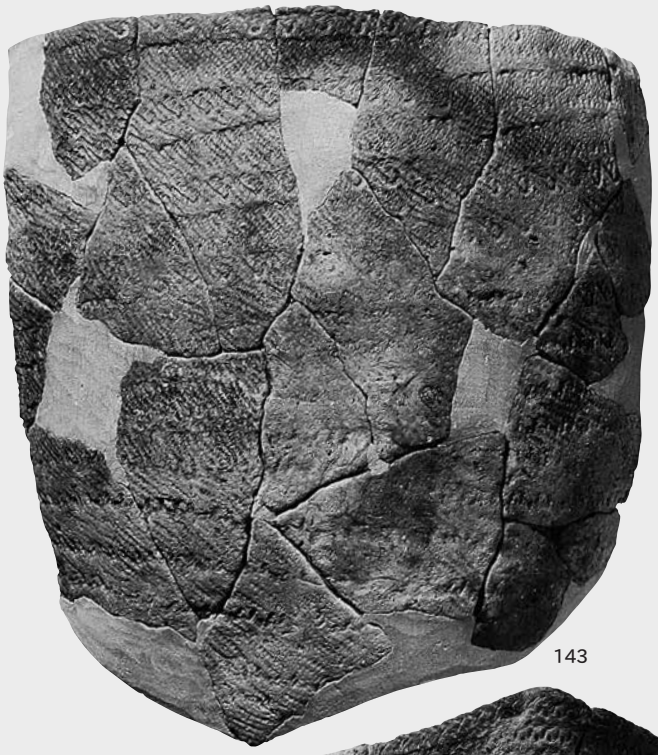
138

9A・B（141～156）

141

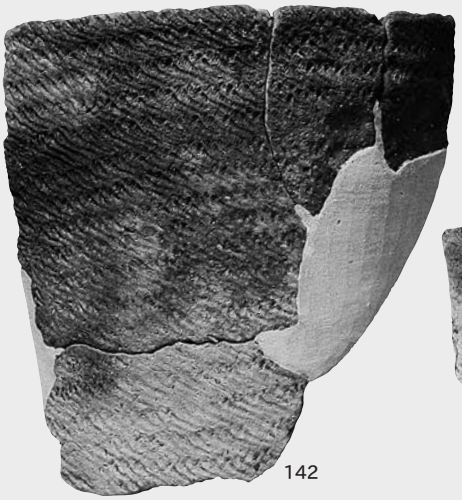
137（下）

139



143

140



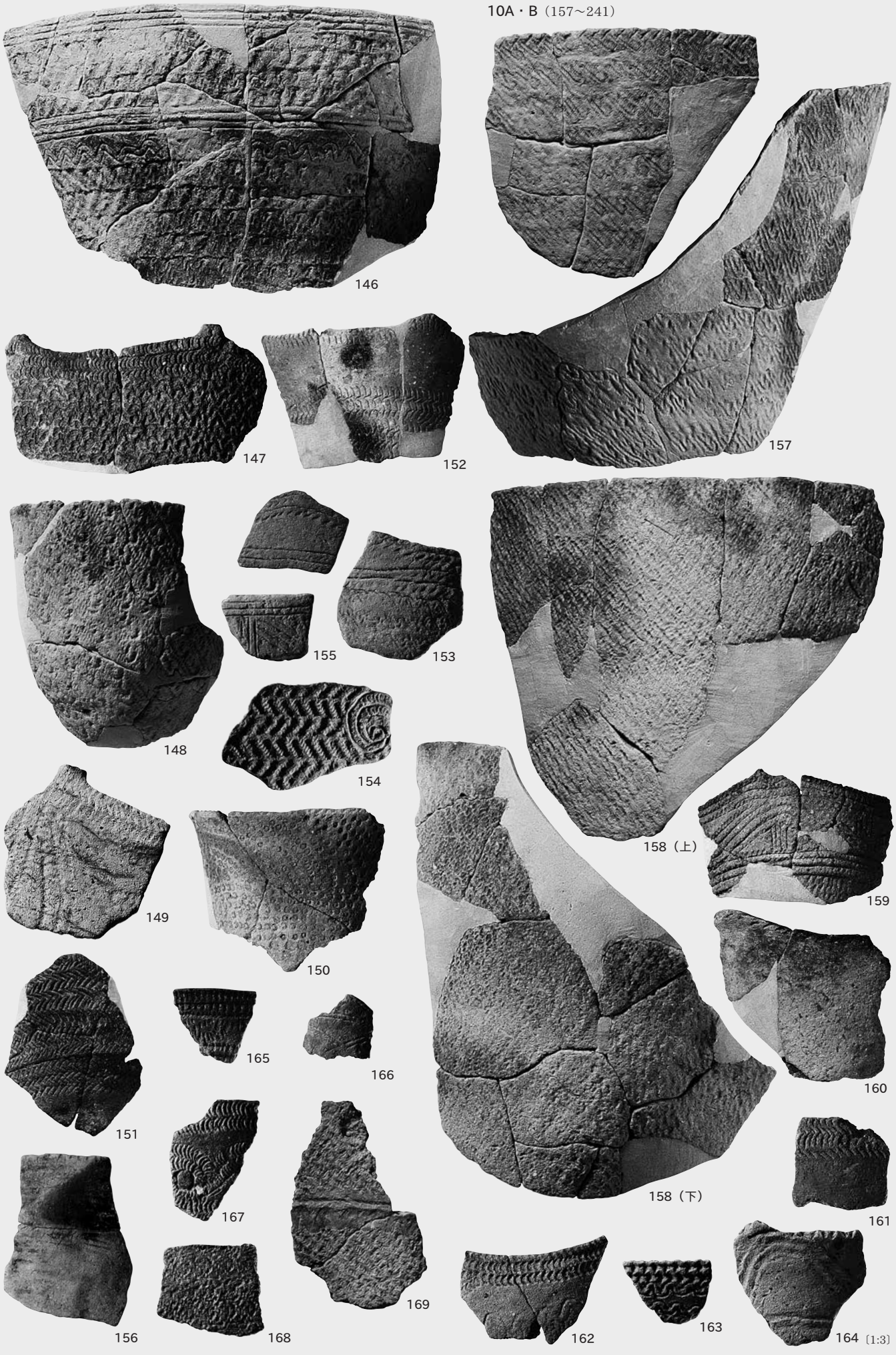
142

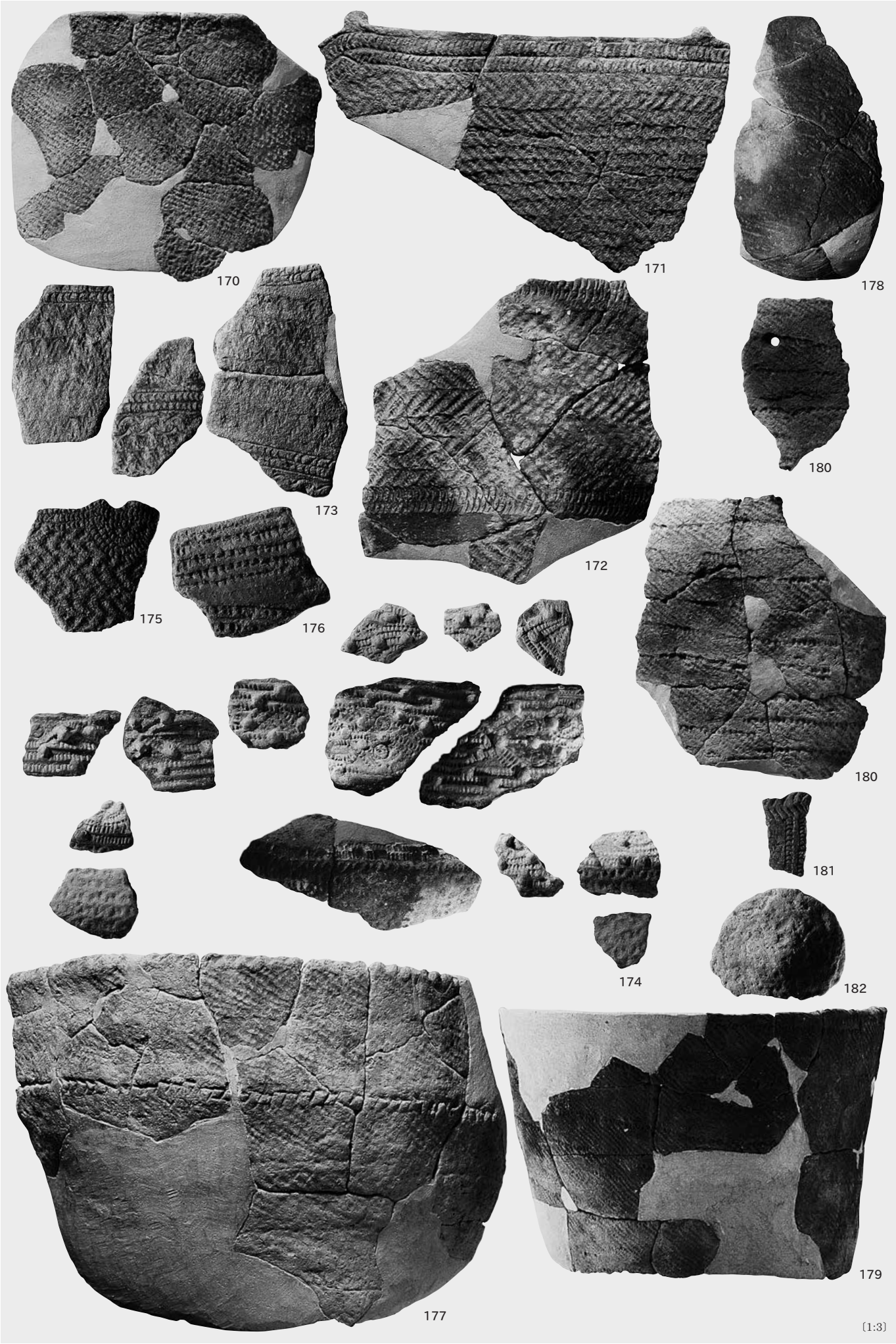
145

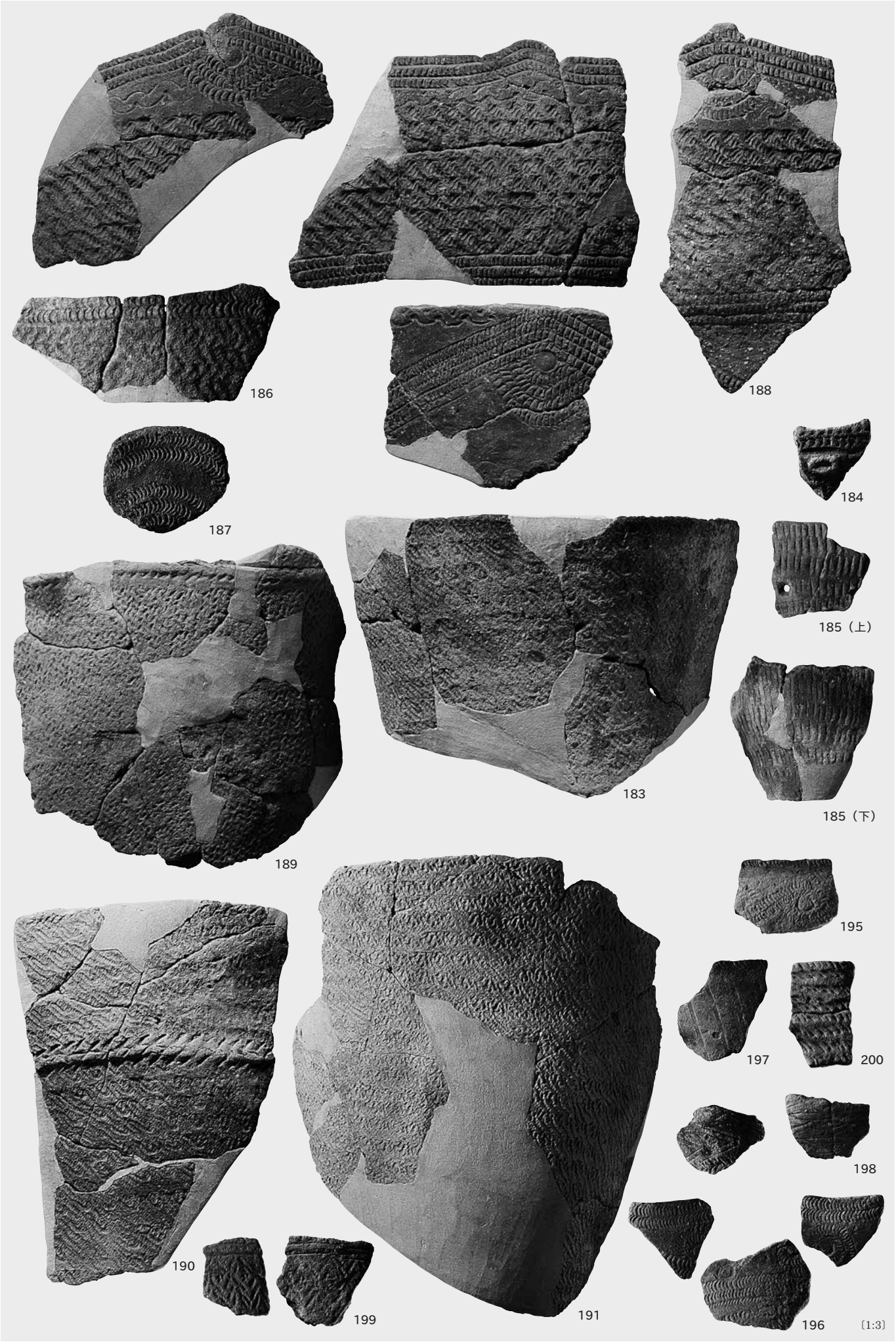
144

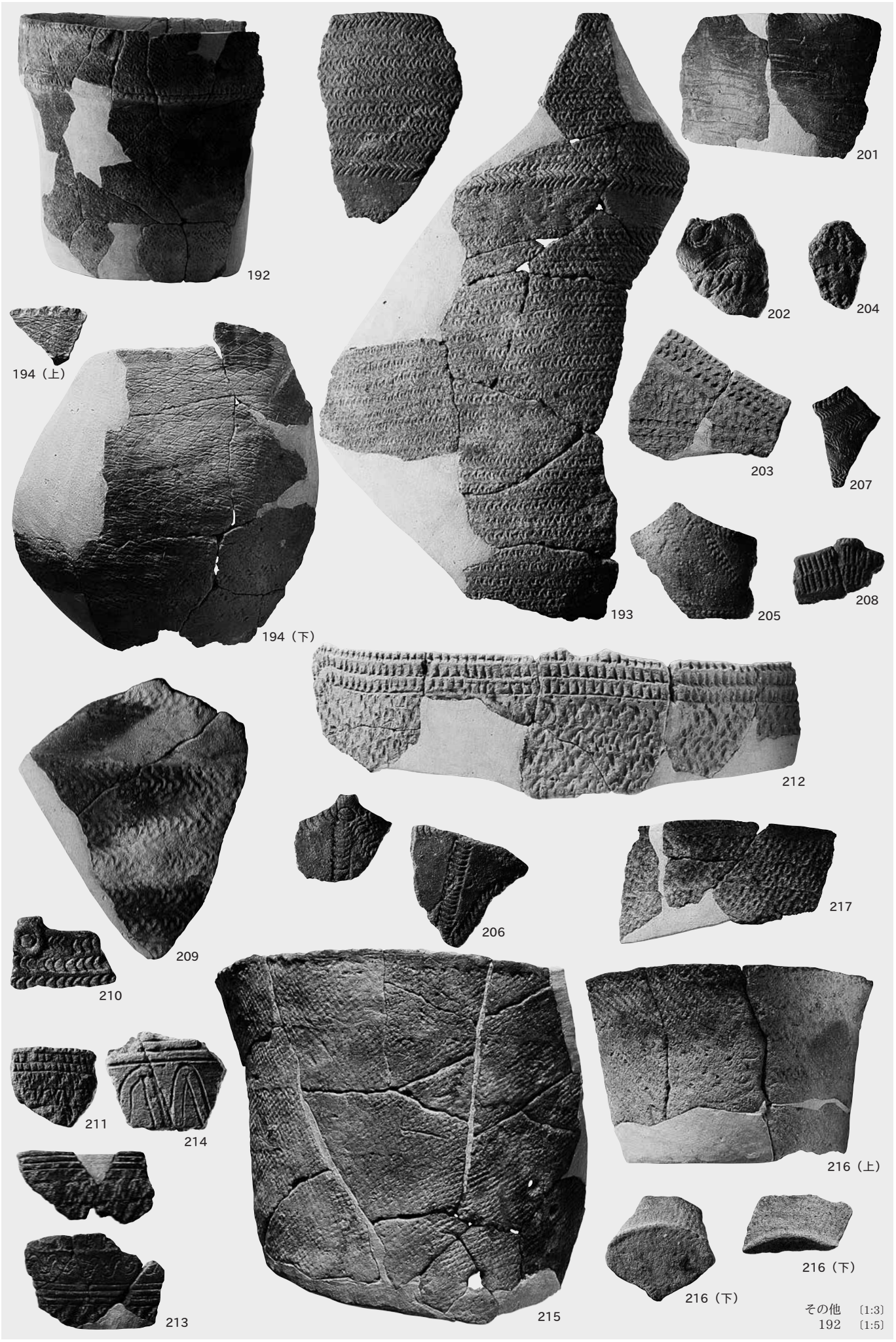
その他〔1:3〕　137〔1:5〕

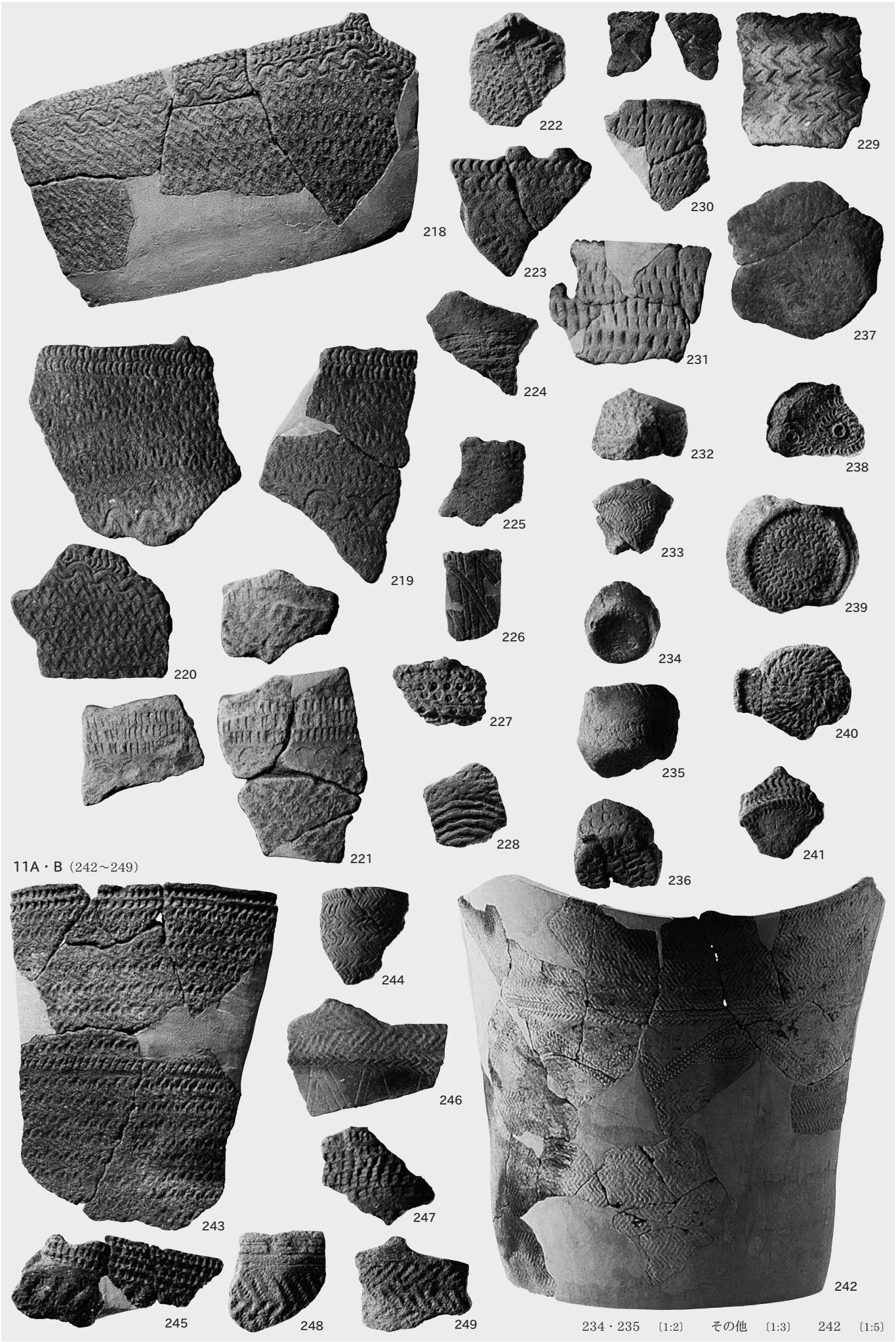
10A・B（157～241）


146
147
152
157
148
155
153
154
158（上）
159
149
150
160
165
166
151
158（下）
161
167
169
156
168
162
163
164 〔1:3〕


170
171
178
173
172
180
175
176
180
181
174
182
177
179
〔1:3〕


186
188
187
184
189
183
185（上）
185（下）
195
190
197
200
198
199
191
196
〔1:3〕

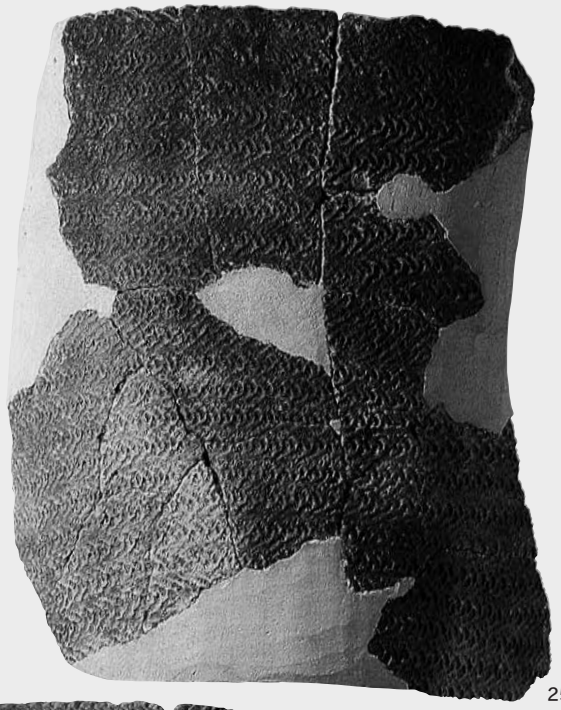

192
193
194（上）
194（下）
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216（上）
216（下）
216（下）
その他 〔1:3〕
192 〔1:5〕



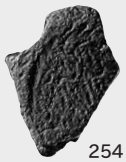
234・235 〔1:2〕　その他 〔1:3〕　242 〔1:5〕

4C・D、5B・C・D（250～261）

250


252

253


254

255

251

256

257

259

Ⅰ区（102・103C）（262～266）

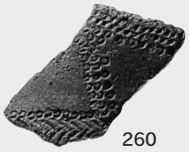
262

263

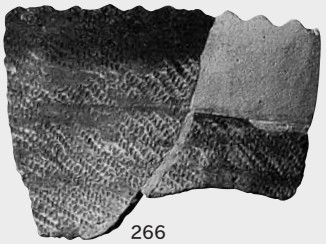
265

258

264


260

261


266

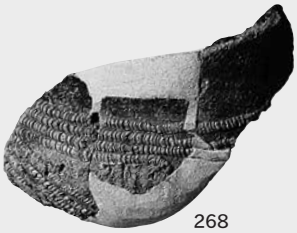
その他（267～275）

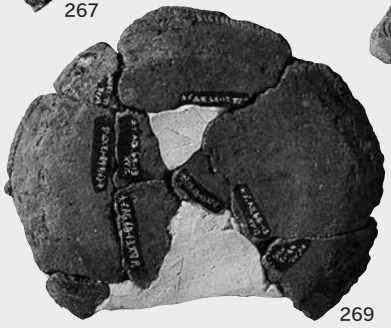
267

270

272

274


268


269

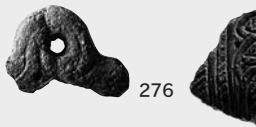
271

273

275

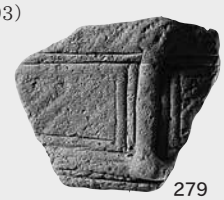
〔1:3〕

XV・XVa層出土の縄文時代中期～晩期の土器（276～293）


276

277

278


279

282

280

283

281

286

284

285

287

288

XIIIe層（294～305）

289

290

291

294

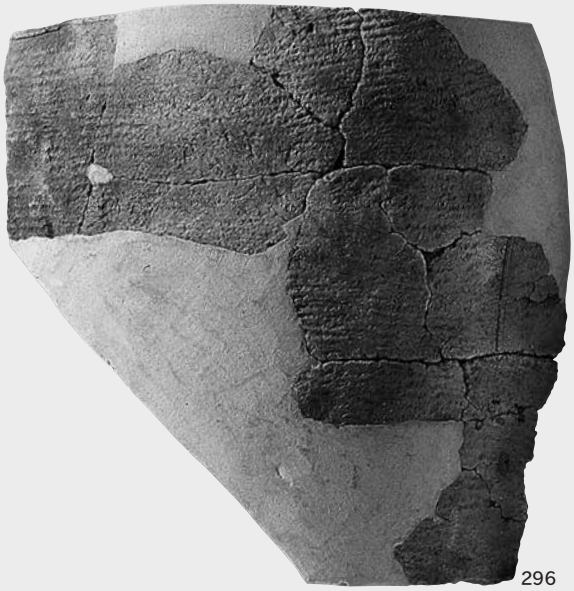
292

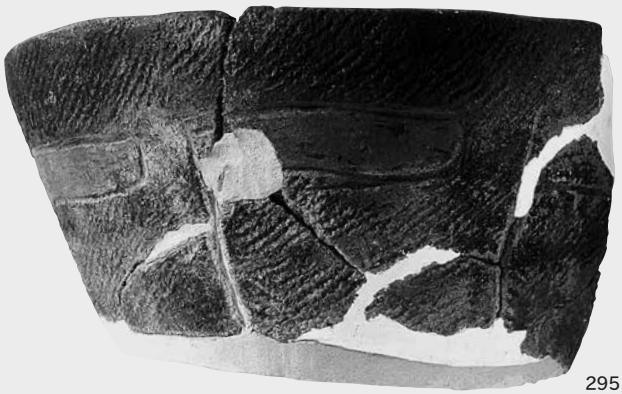
293

298

299

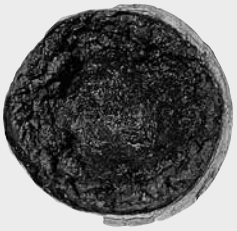
300


296


295

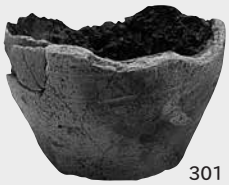
〔1:3〕

297



302

303


301

304

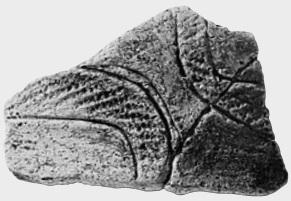
305

XIIIb層（306～314）

306

307

309



308

310

311

312

313

314

319

321（上）

XIIIa層（315～330）

315

317

318

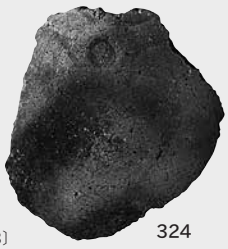
321（下）

320

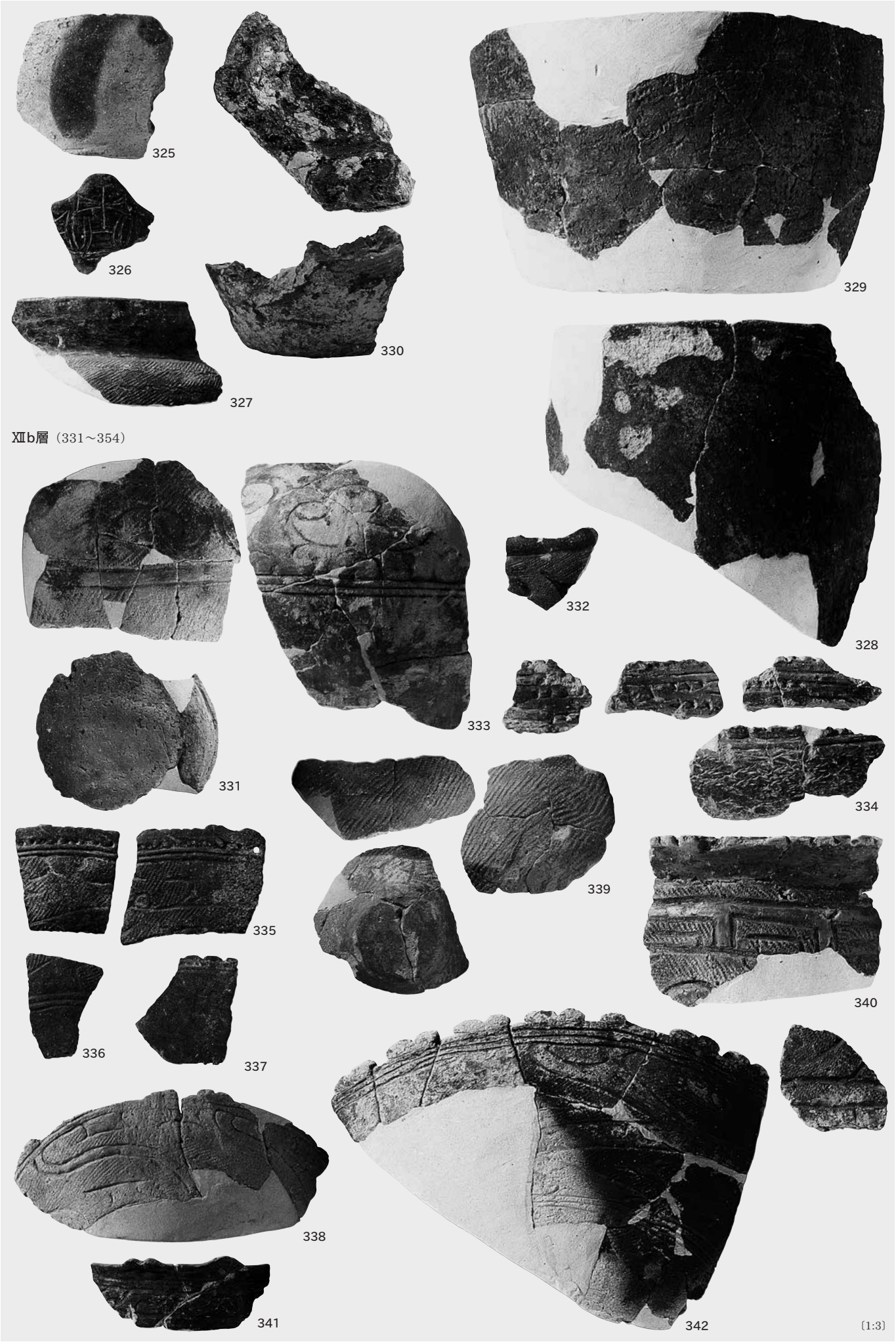
322

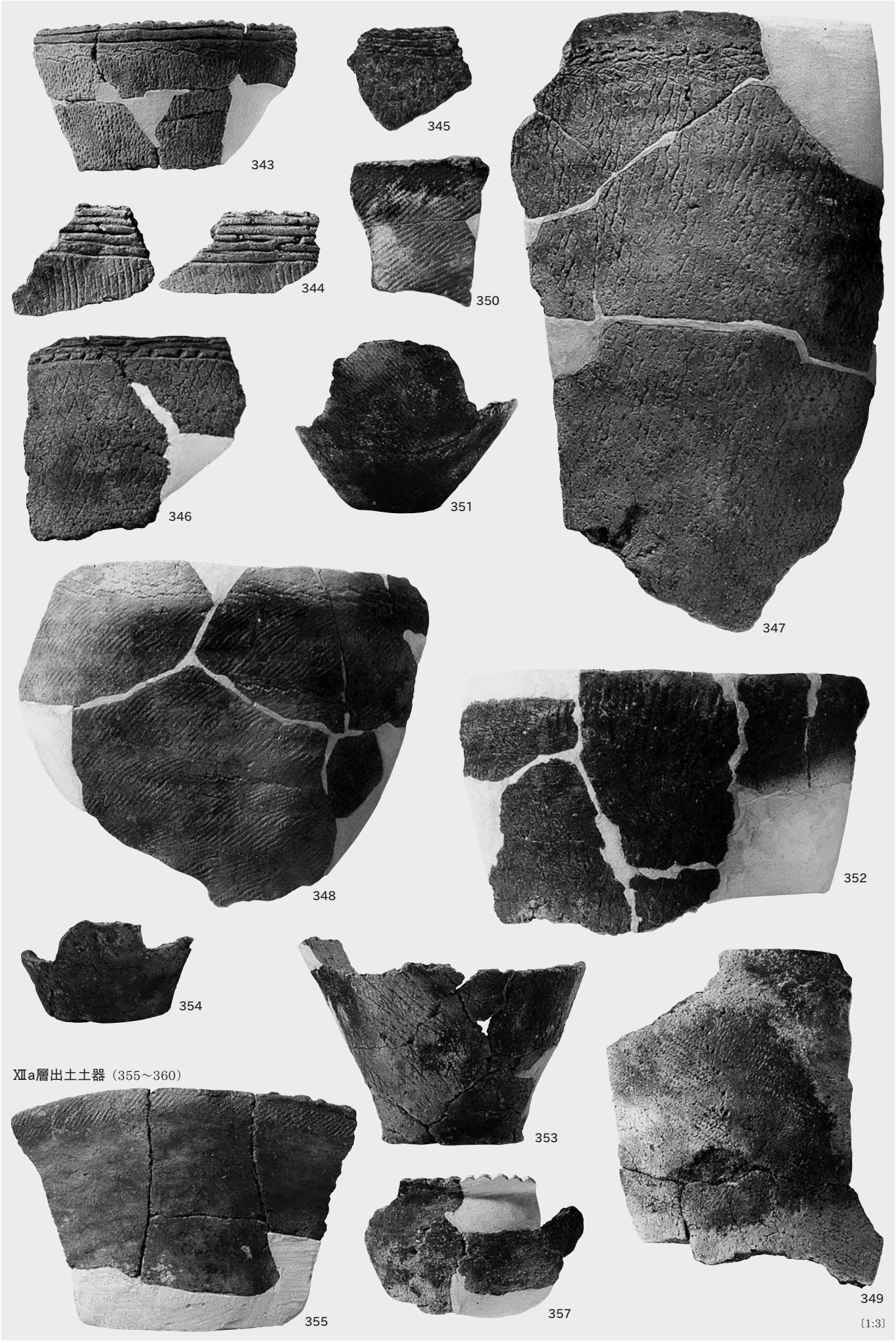
316

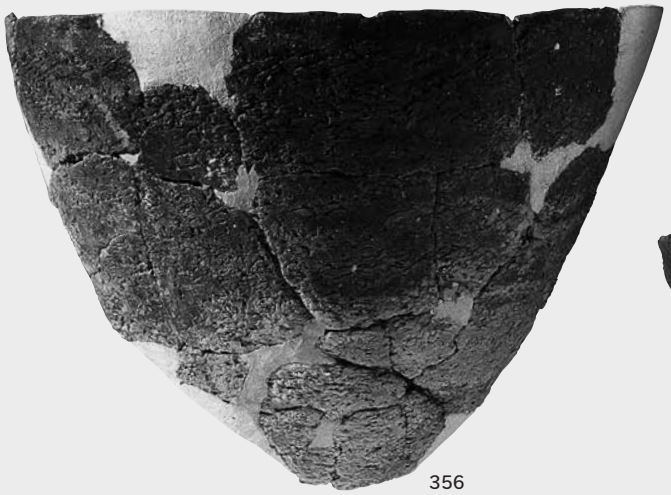
323


324

323 〔1:2〕　その他 〔1:3〕


325
326
327
330
329
XIIb層（331～354）
332
328
333
331
334
335
339
340
336
337
338
341
342
〔1:3〕


343
345
344
350
346
351
347
348
352
354
353
XⅡa層出土土器（355～360）
355
357
349
〔1:3〕


356

358

360

359

365

366

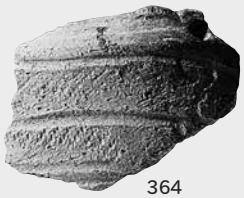
その他の縄文時代後期～晩期の土器（361～368）

361

363

367

362


364

368

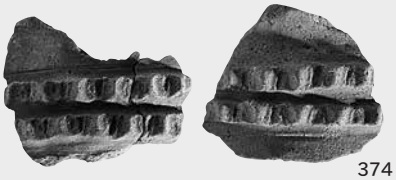
D区F層・G区灰色粘土層（369～453）

370

369

371

373

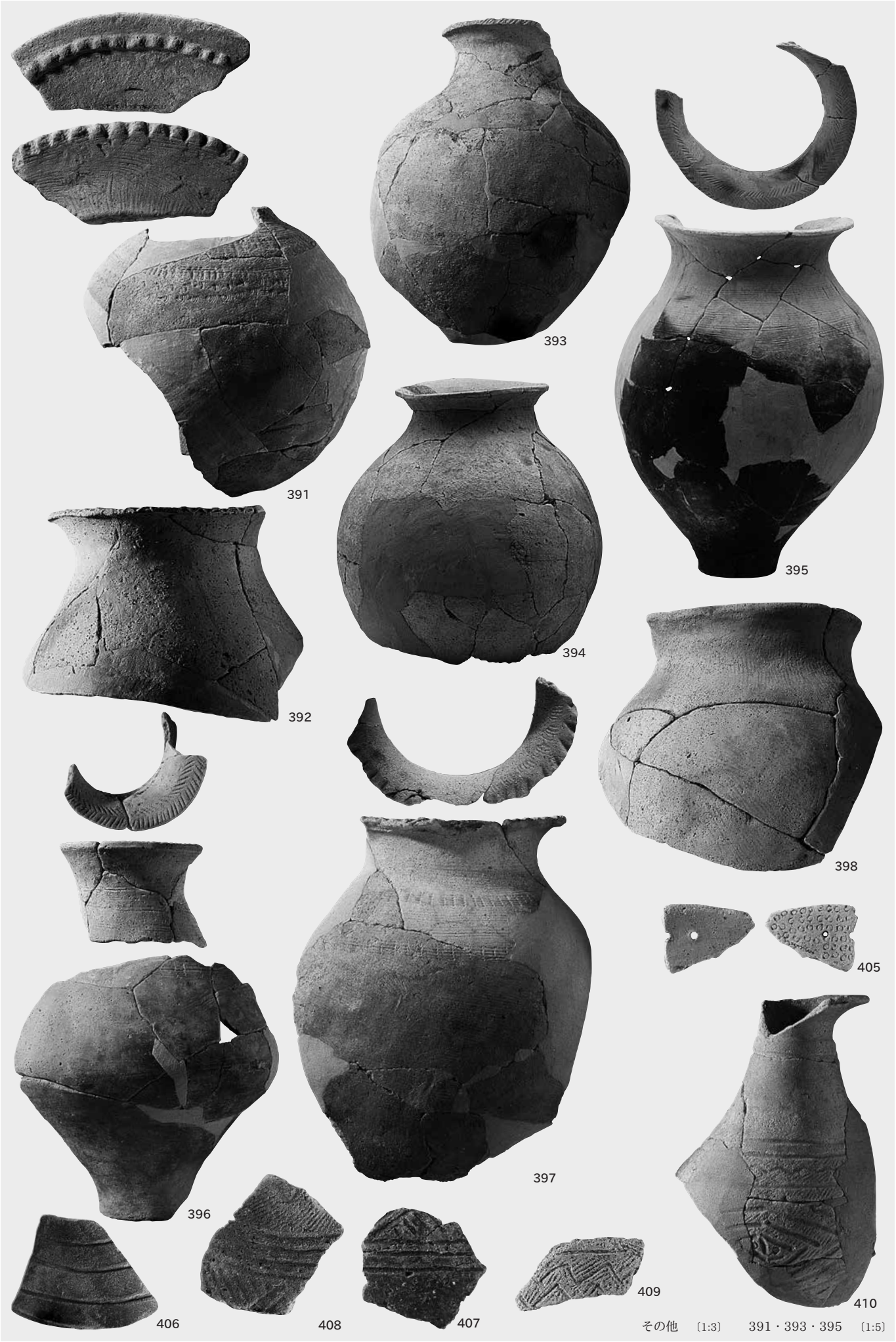

374

〔1:3〕

その他 〔1:3〕　376・377・381・382・385 〔1:5〕

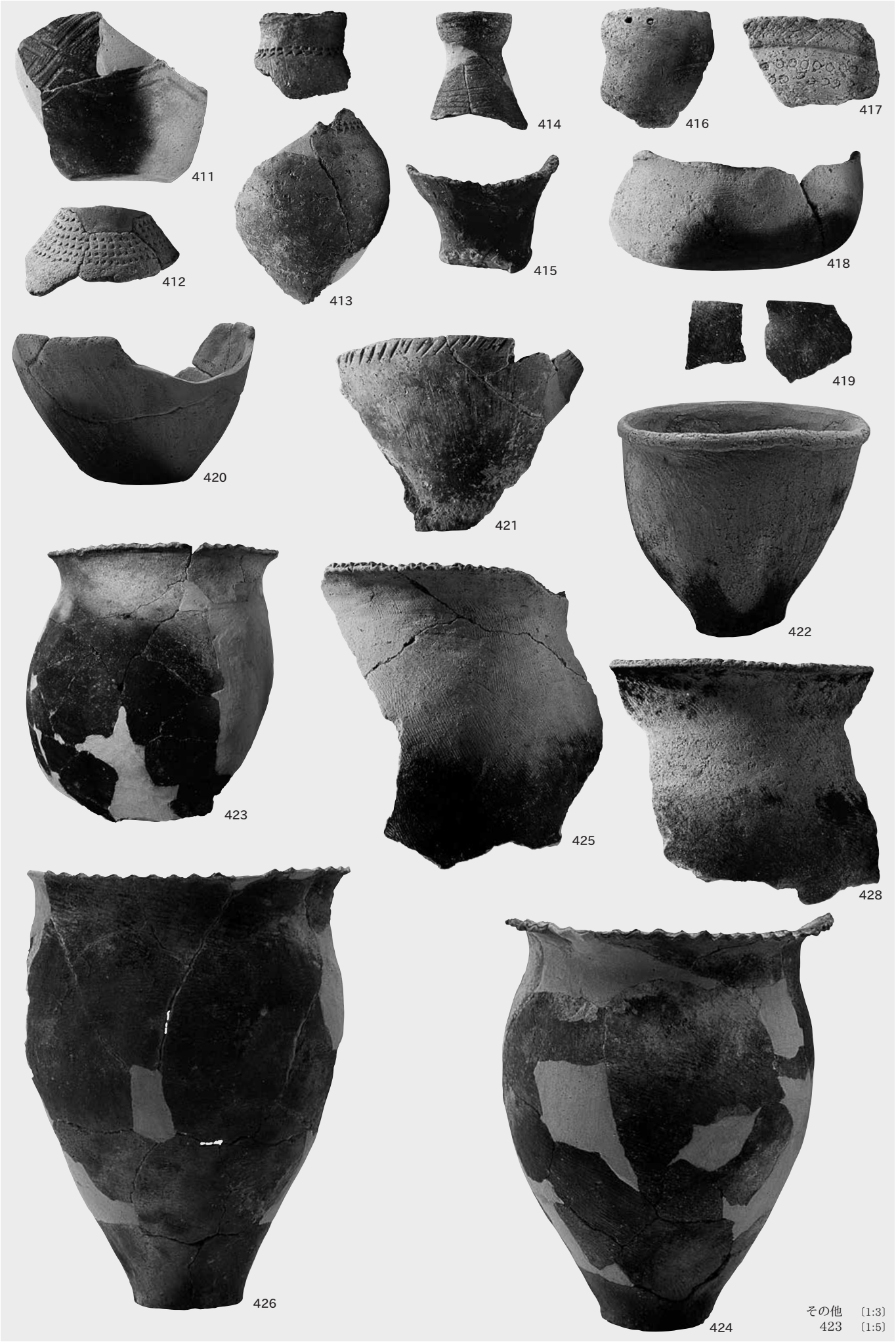
土器（23） Ｄ区Ｆ層・Ｇ区灰色粘土層（3）

その他 〔1:3〕 383・384・386 〔1:5〕



その他 〔1:3〕　391・393・395 〔1:5〕

土器（25） Ｄ区Ｆ層・Ｇ区灰色粘土層（5）



その他 〔1:3〕
423 〔1:5〕

427

431

433

429

434

439

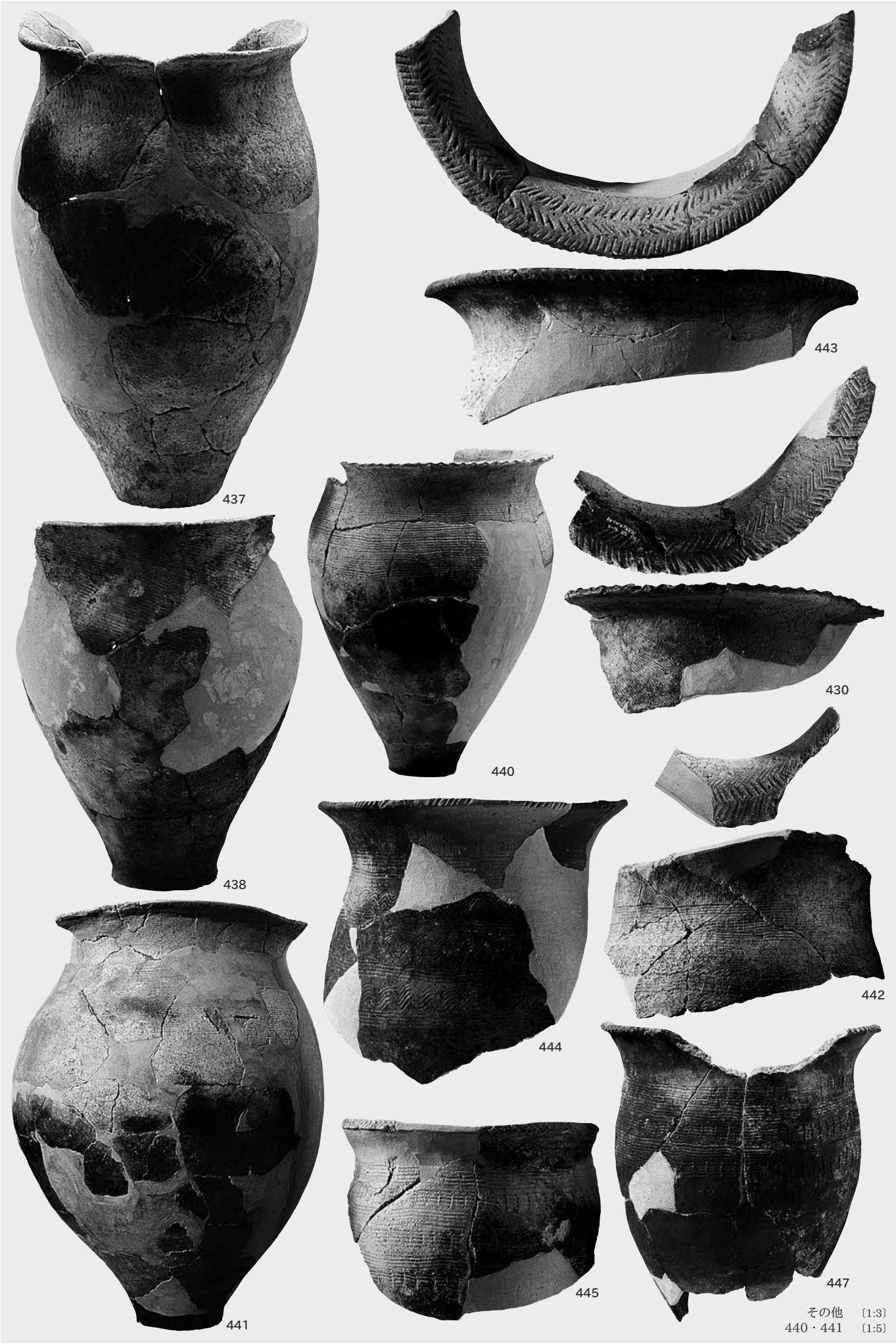
432

435

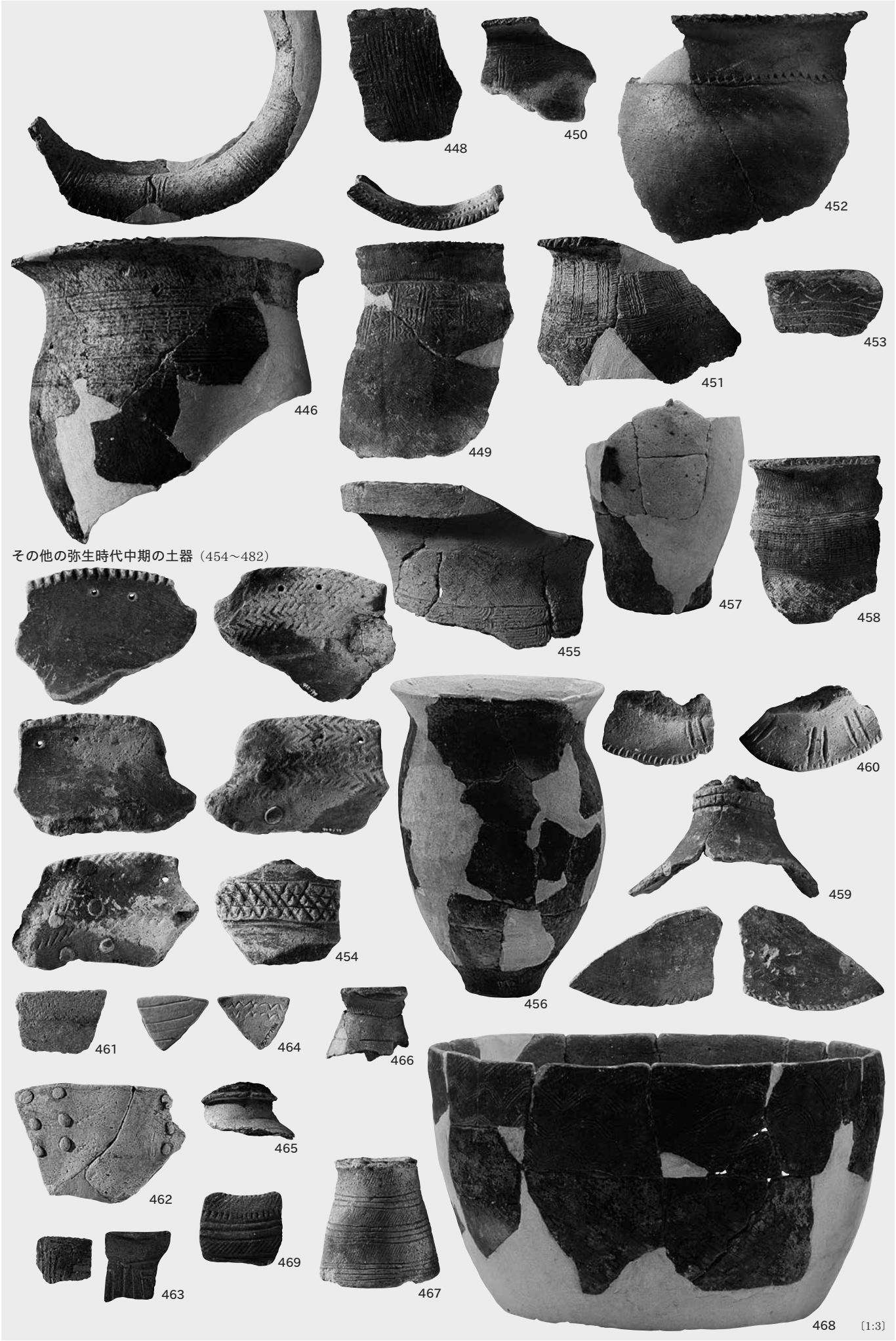
436

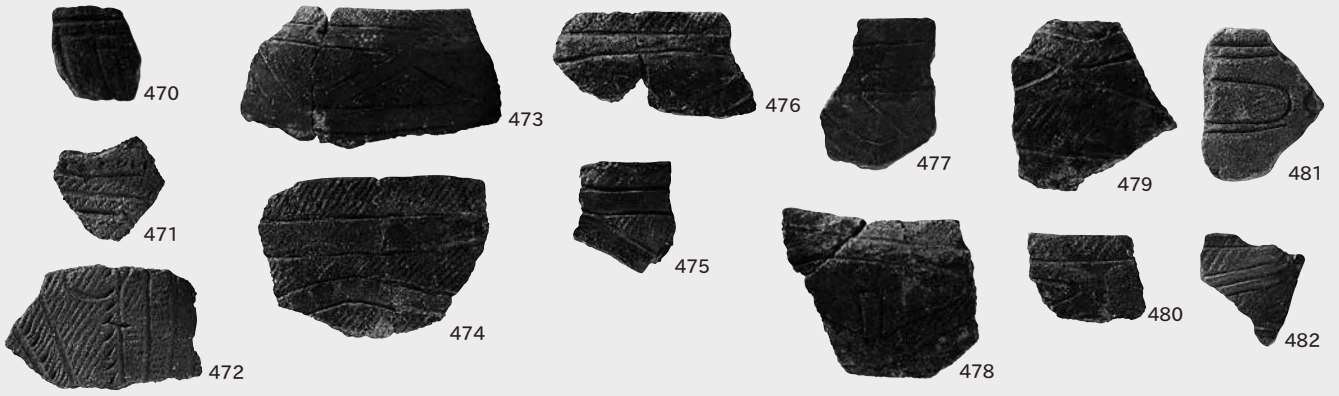
〔1:3〕

土器（27） Ｄ区Ｆ層・Ｇ区灰色粘土層（7）



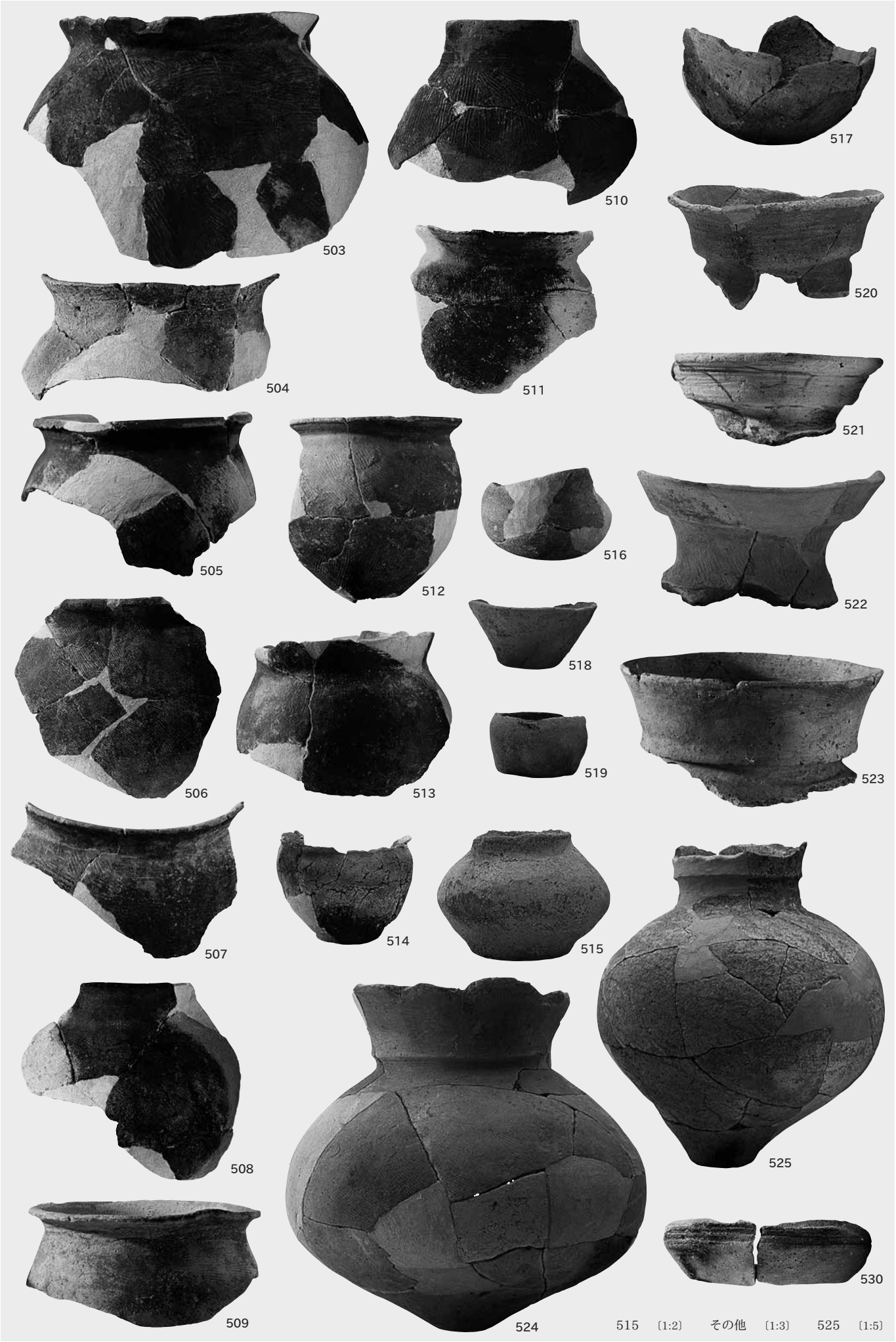
その他 〔1:3〕
440・441 〔1:5〕


448
450
452
446
449
451
453
457
458
455
その他の弥生時代中期の土器（454～482）
460
459
454
456
461
464
466
465
462
469
467
463
468
〔1:3〕



SD50・51・83-3層（483～561）

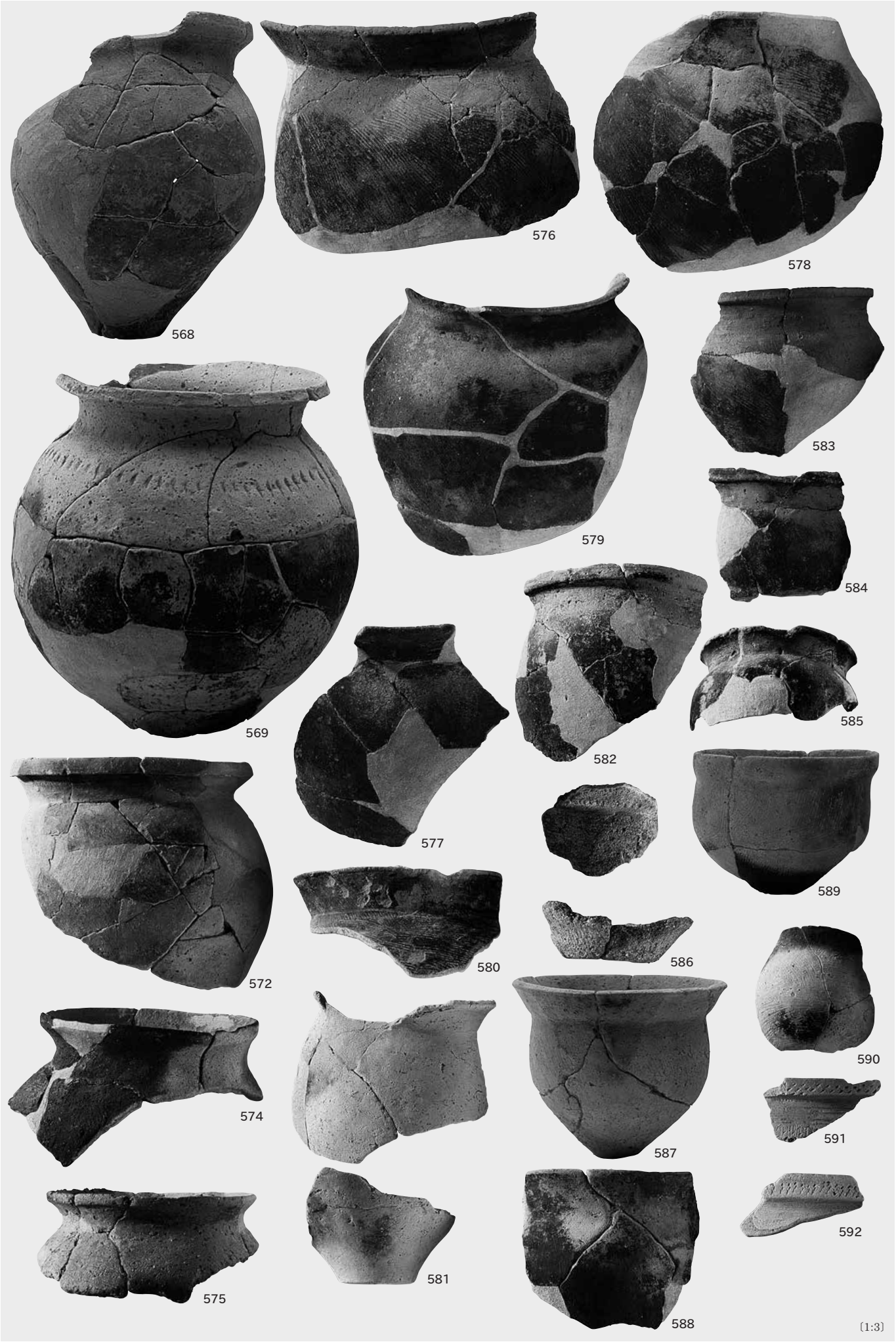
〔1:3〕



515 〔1:2〕　その他 〔1:3〕　525 〔1:5〕

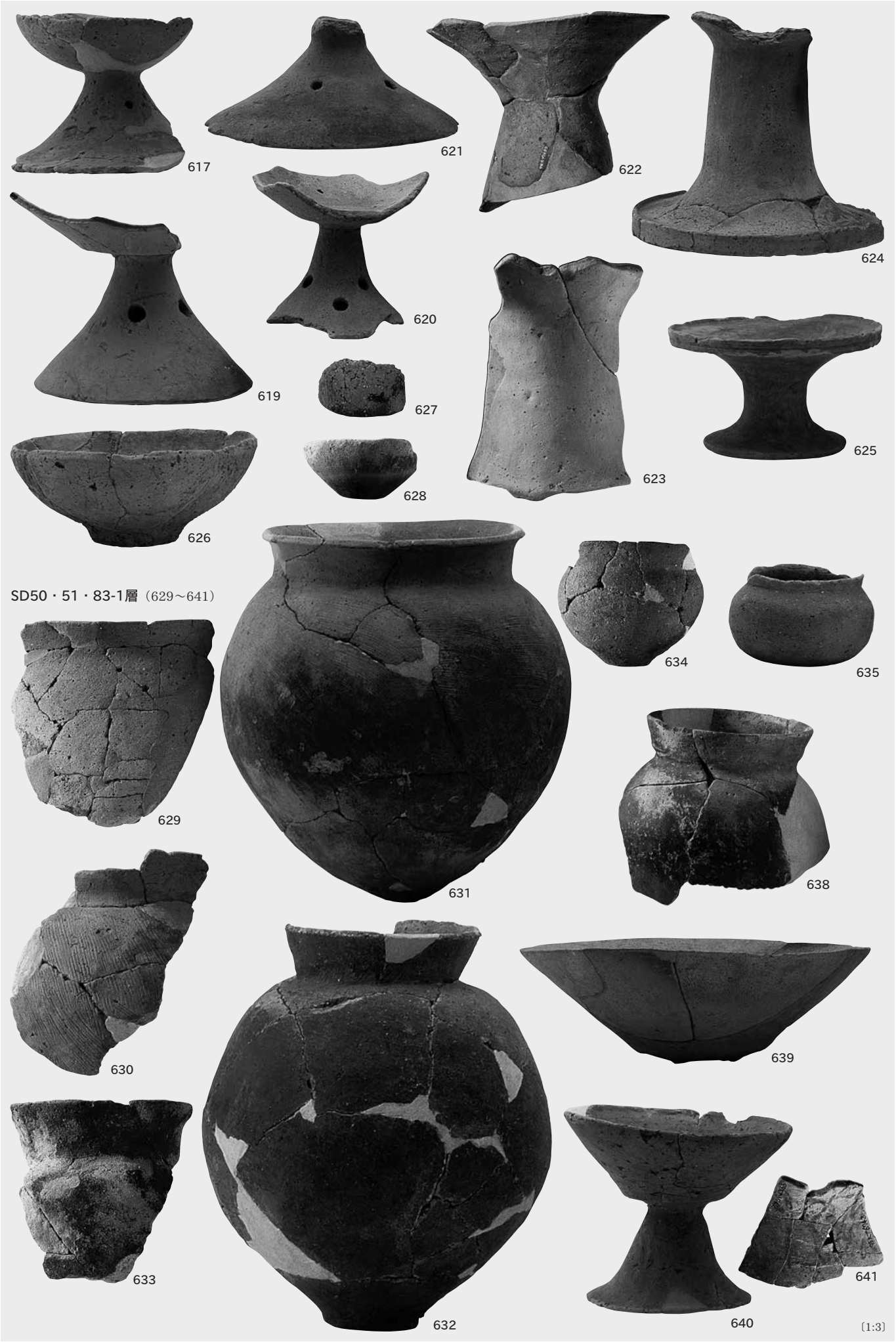
土器（31） SD50・51・83-3 層（3）

549
550
555
556
551
554
557
558
560
552
559
561
553
23層（562～628）
562
563
565
567
566
564
570
571
573
〔1:3〕

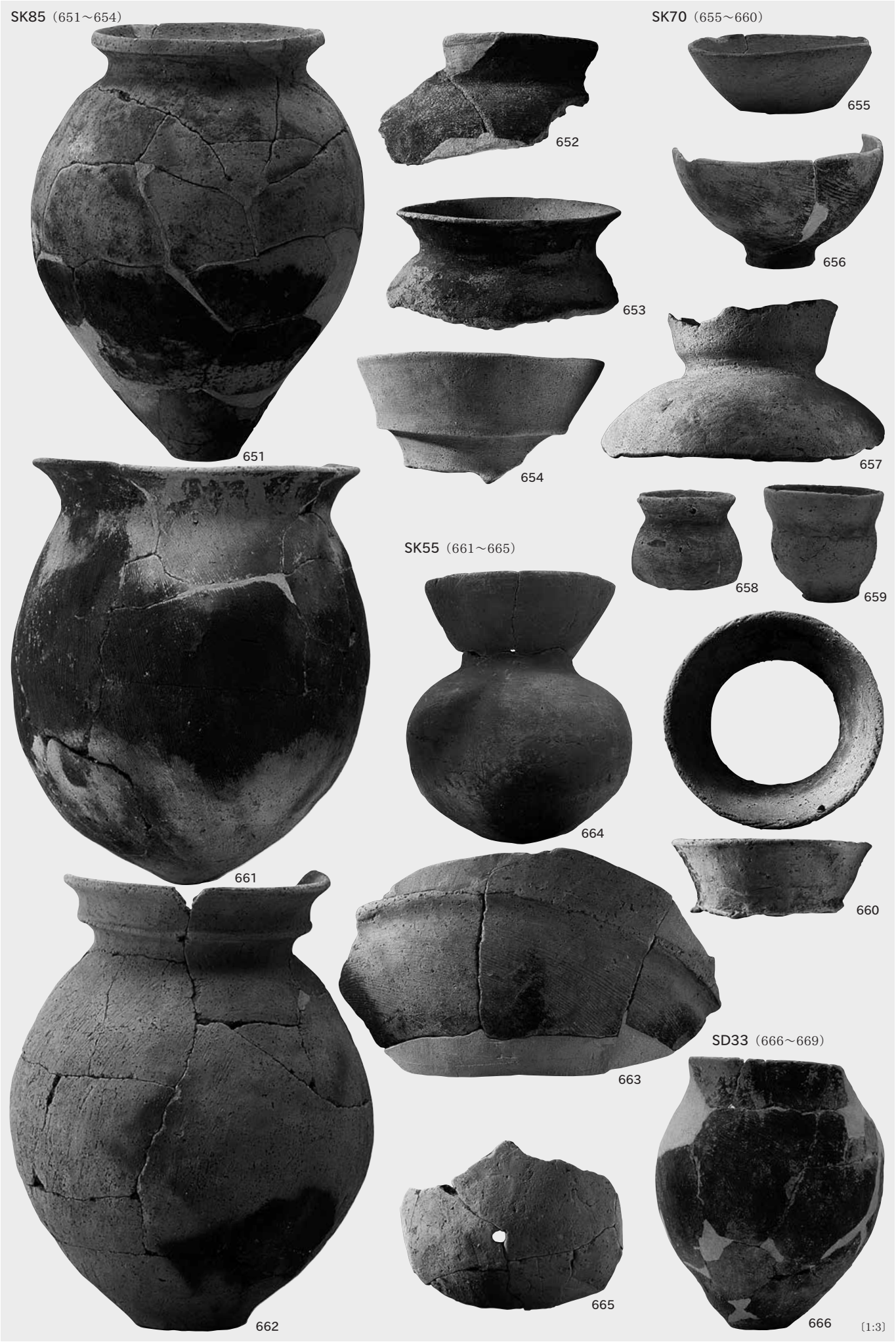

568
576
578
579
583
569
584
582
585
577
589
572
580
586
590
574
587
591
575
581
588
592
〔1:3〕

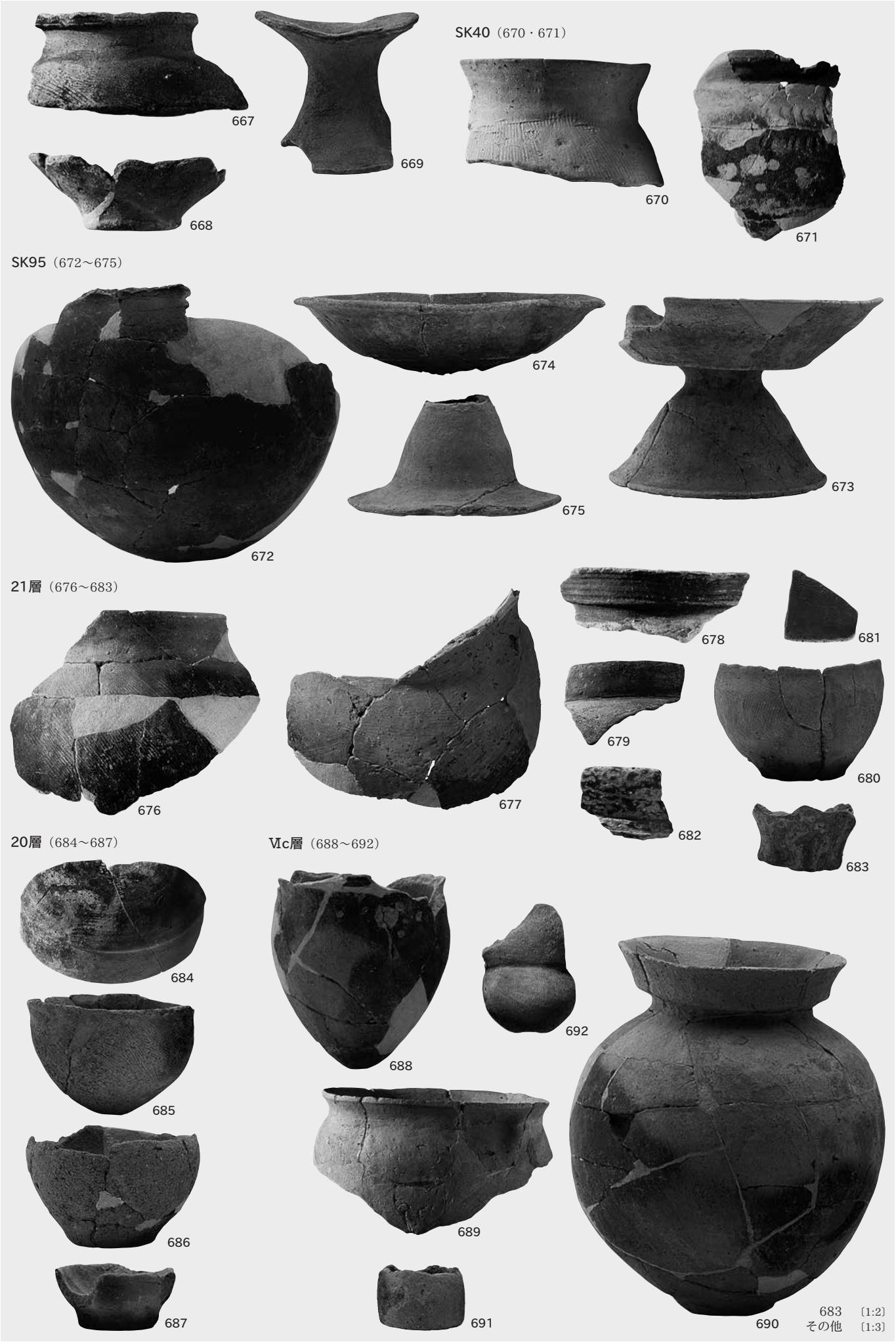
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
618
〔1:3〕

土器（35） 23 層（4）、SD50・51・83-1 層（1）



SD50・51・83・その他（642～644）
636
644
642
643
637
SD46（647～650）
647
648
SD47（645・646）
645
650
646
649
〔1:3〕

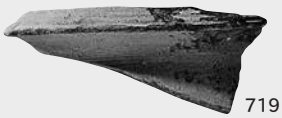

SK85（651～654）
651
652
653
654
SK70（655～660）
655
656
657
658
659
660
SK55（661～665）
661
662
663
664
665
SD33（666～669）
666
〔1:3〕


667
668
669
SK40（670・671）
670
671
SK95（672～675）
672
674
675
673
21層（676～683）
676
677
678
679
680
681
682
683
20層（684～687）
684
685
686
687
Ⅵc層（688～692）
688
689
690
691
692
683 〔1:2〕
その他 〔1:3〕

SX88（693～716）
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
SK49（717）
717
〔1:3〕

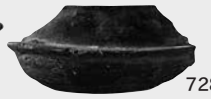
SK6（718）

⑥層（719～721）



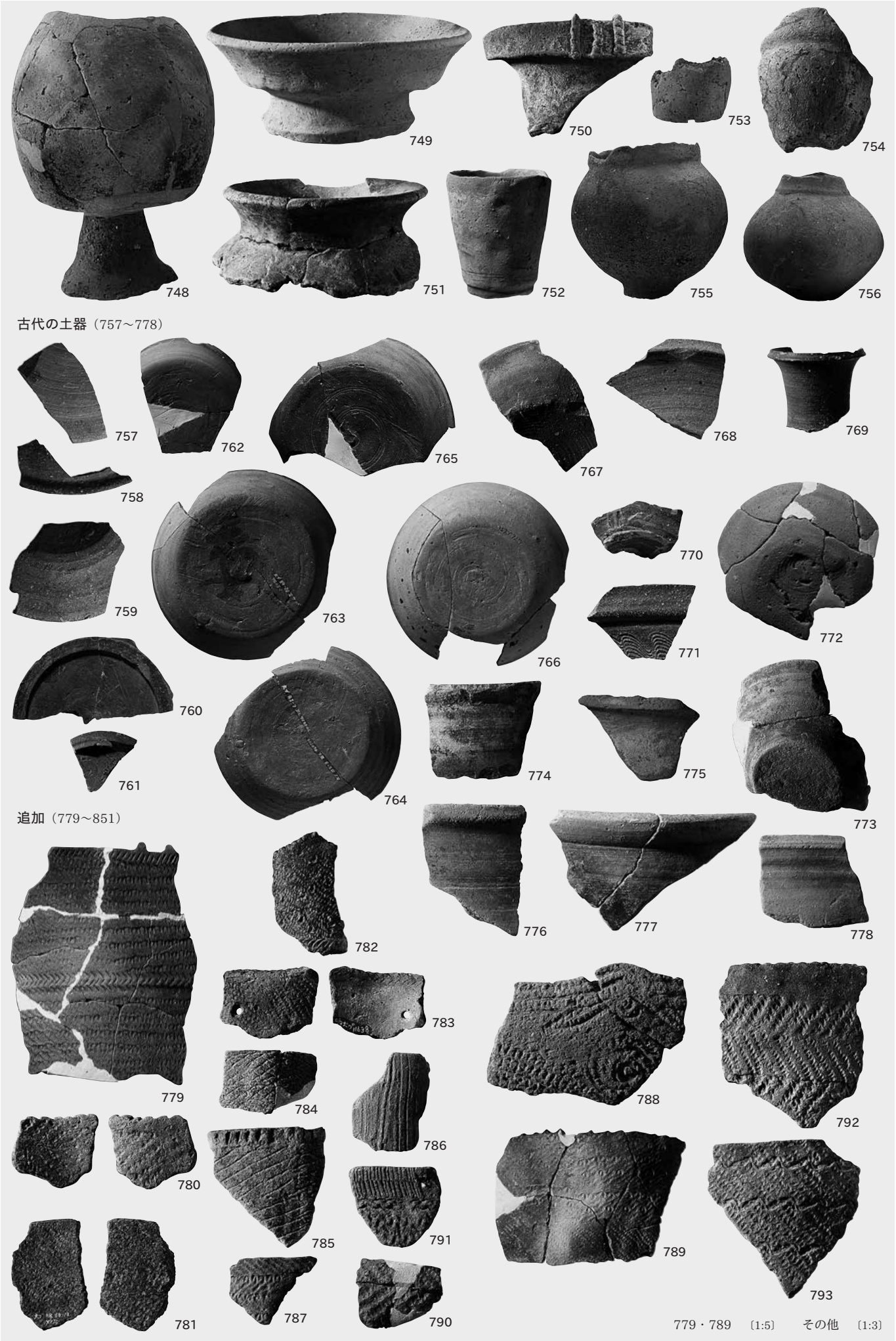
Ⅷa・b層（722～724）

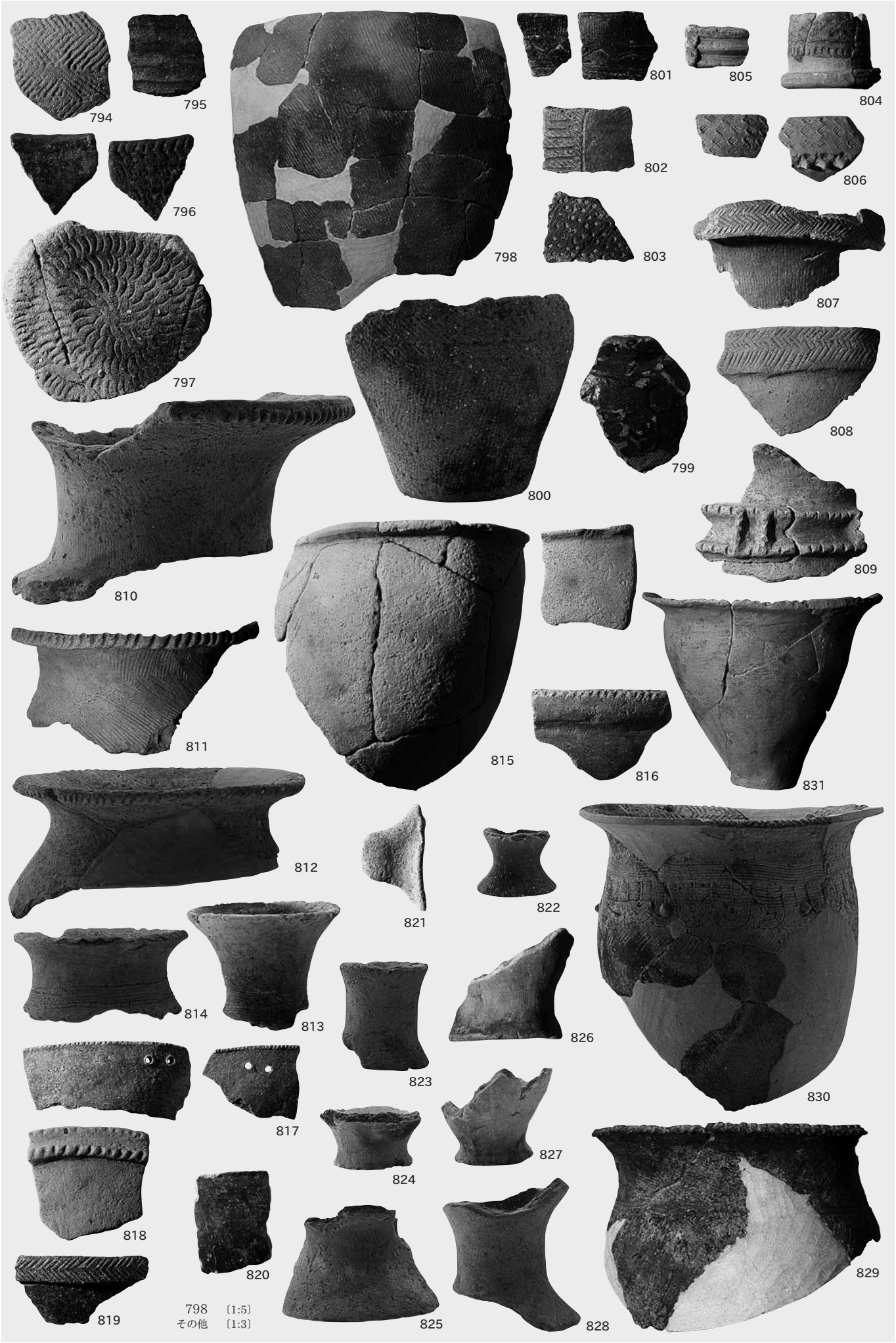
Ⅵb層・B層（725～747）



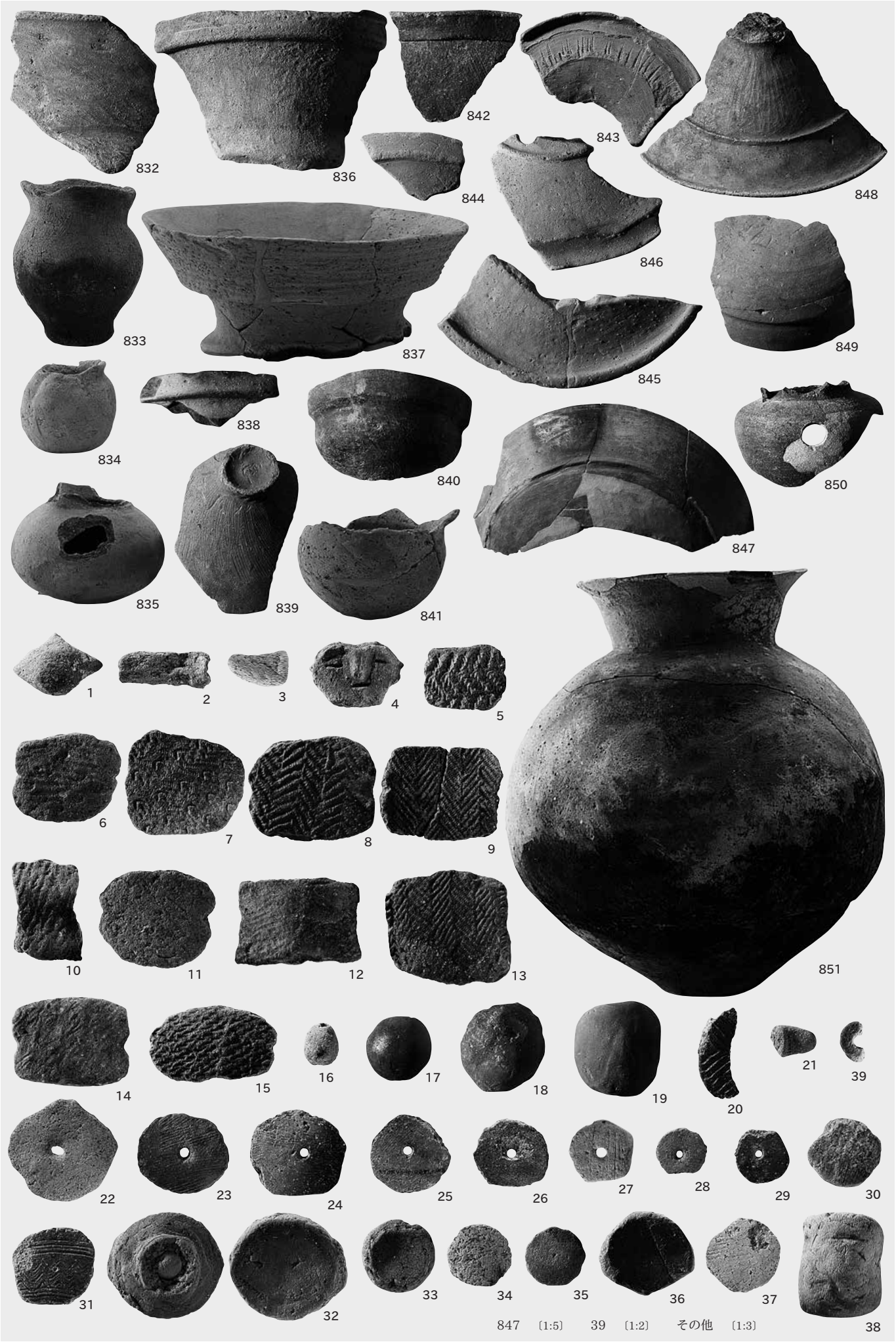
その他の弥生時代後期～古墳時代の土器（746～756）

730～739 〔1:2〕 その他 〔1:3〕


748
749
750
753
754
751
752
755
756
古代の土器（757～778）
757
762
765
767
768
769
758
759
763
766
770
771
772
760
764
774
775
773
761
追加（779～851）
776
777
778
782
779
783
784
788
792
786
780
785
791
789
793
781
787
790
779・789 〔1:5〕　その他 〔1:3〕

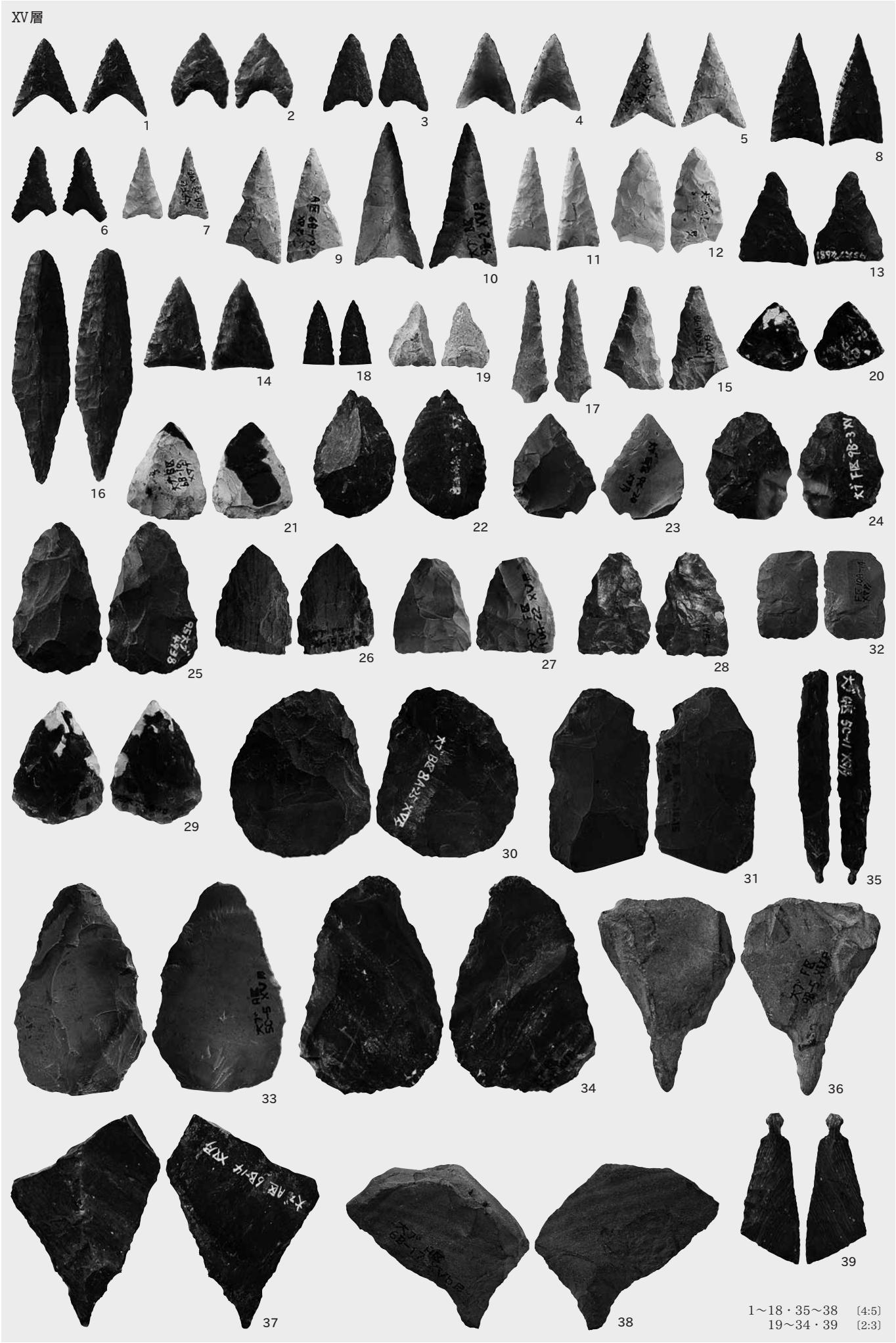

794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831

798　〔1:5〕
その他　〔1:3〕

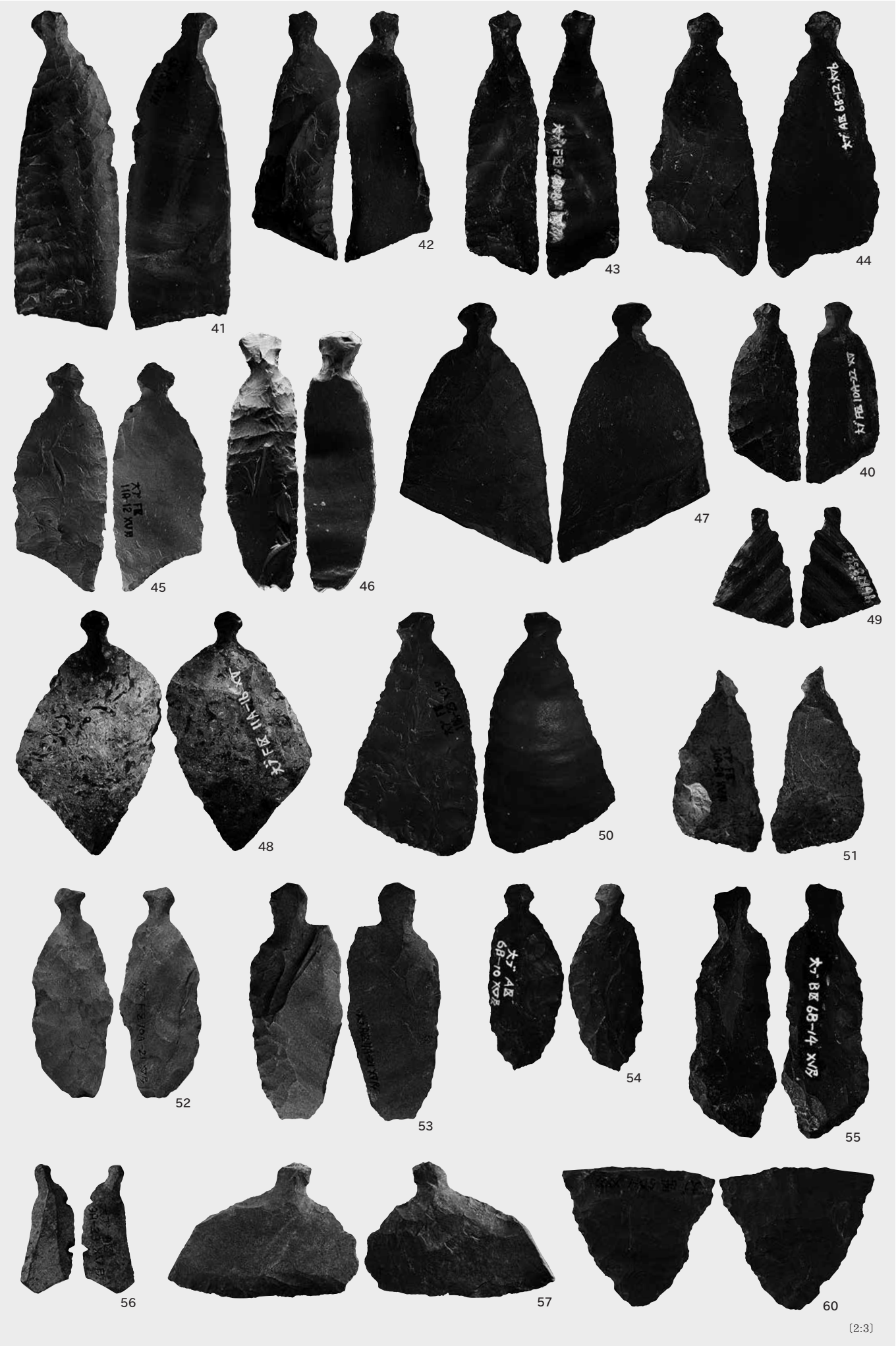


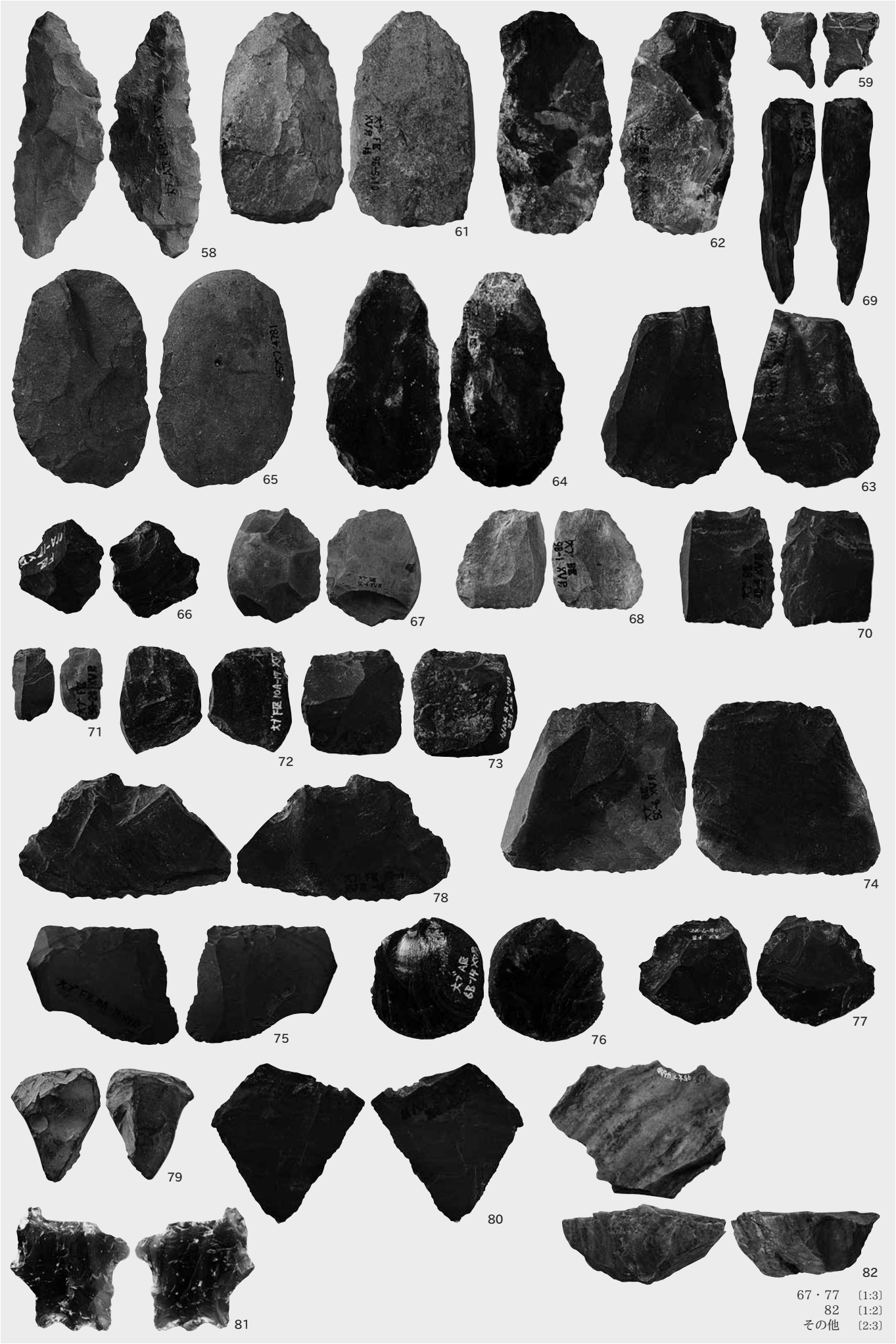
847 〔1:5〕　39 〔1:2〕　その他 〔1:3〕

XV層

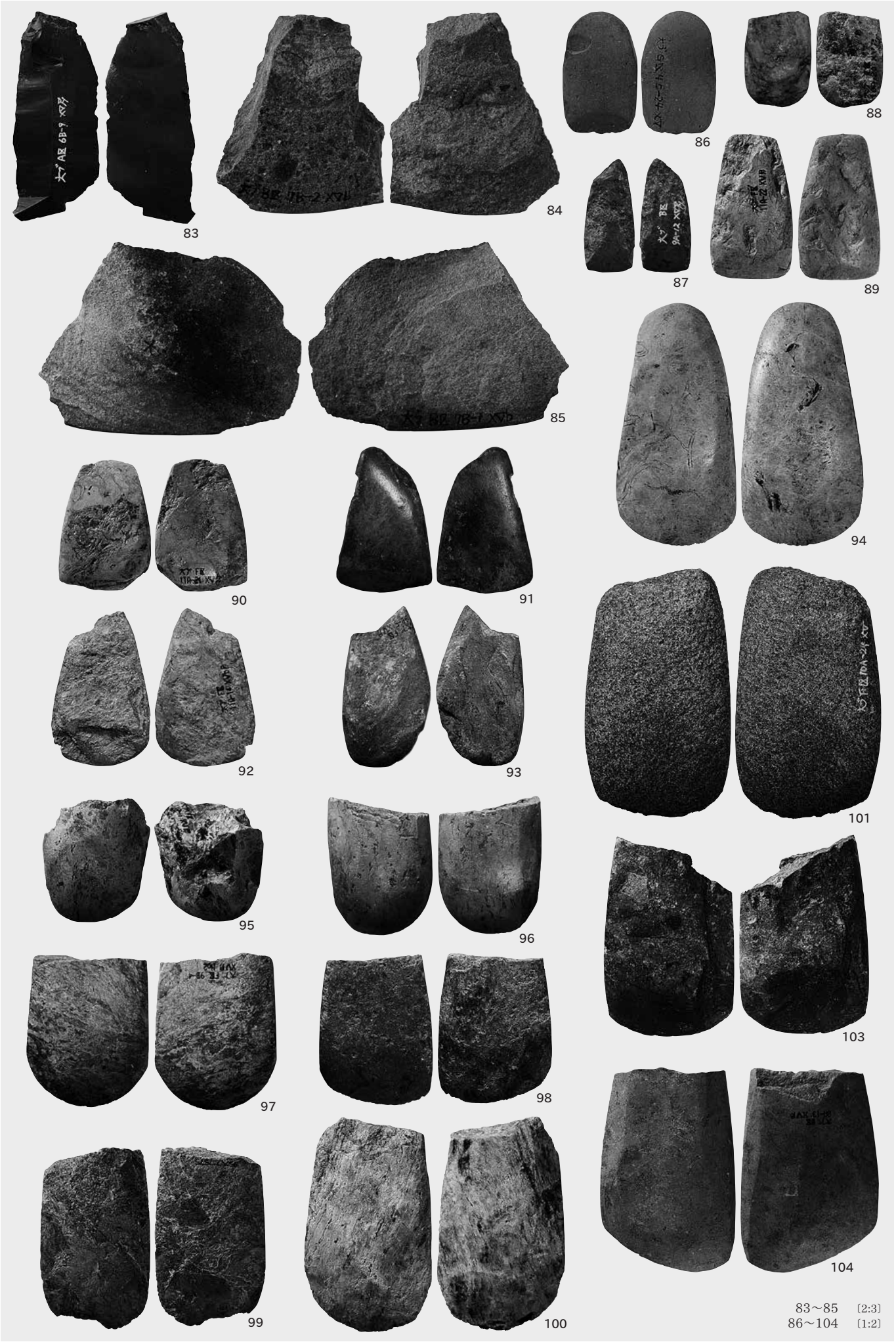


1～18・35～38　〔4:5〕
19～34・39　〔2:3〕

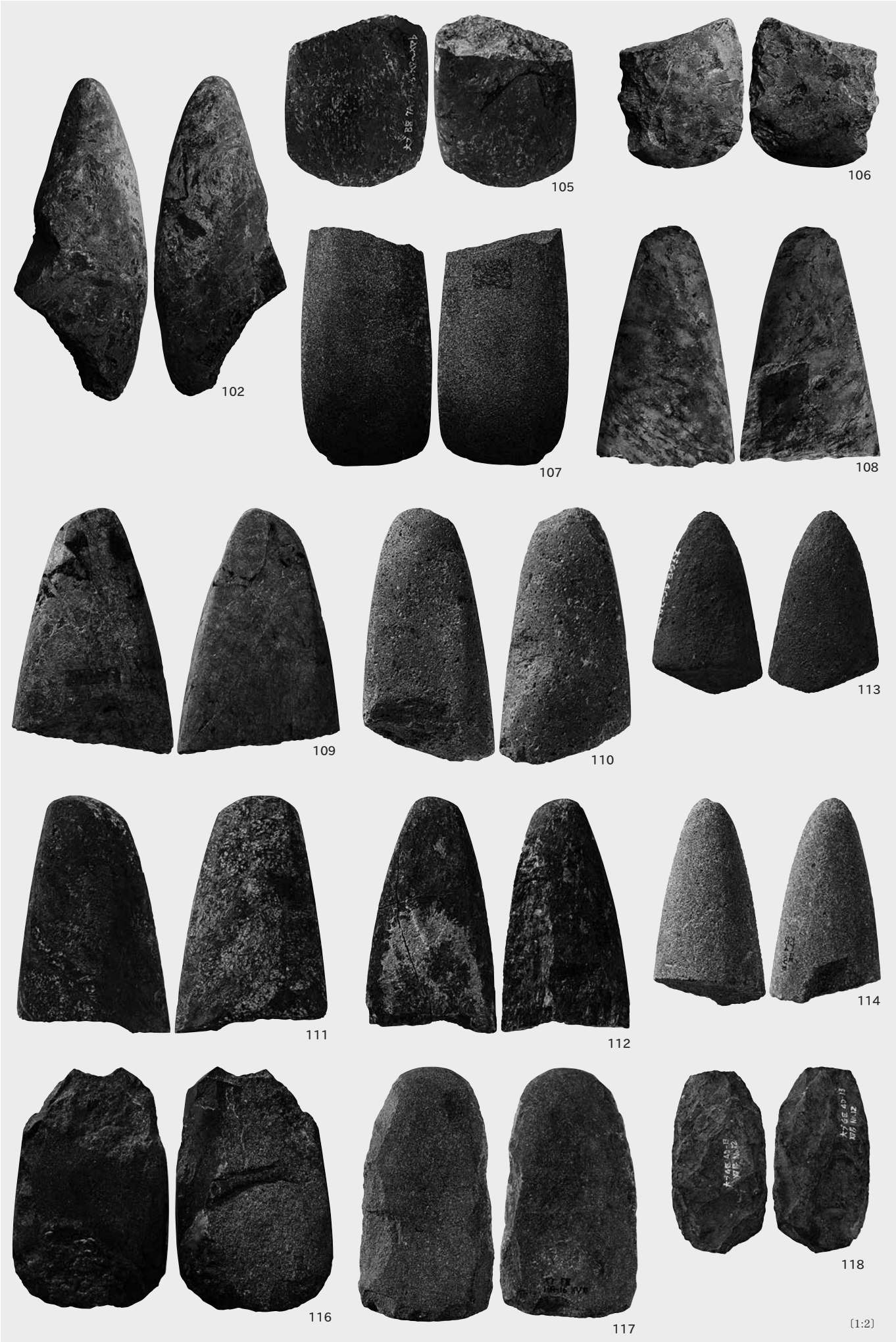

41
42
43
44
45
46
47
40
49
48
50
51
52
53
54
55
56
57
60
〔2:3〕



67・77　〔1:3〕
82　〔1:2〕
その他　〔2:3〕

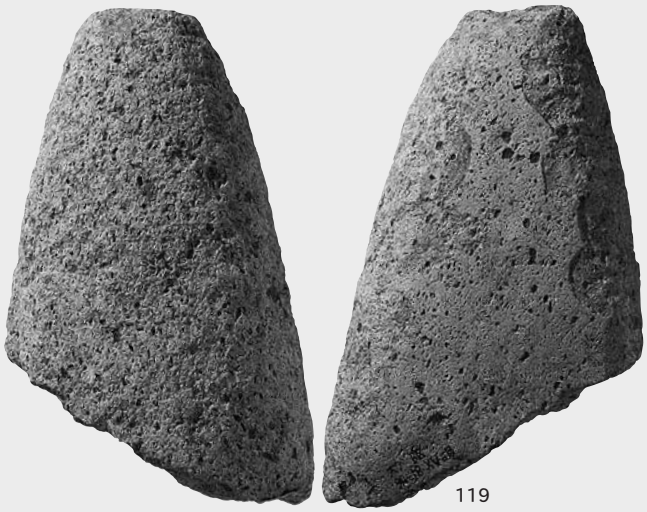


83～85　〔2:3〕
86～104　〔1:2〕

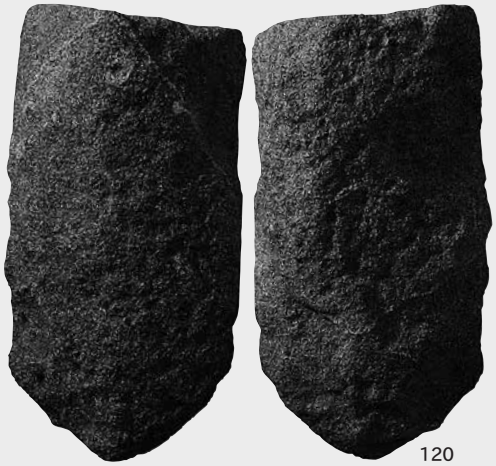

102
105
106
107
108
109
110
113
111
112
114
116
117
118
〔1:2〕

115

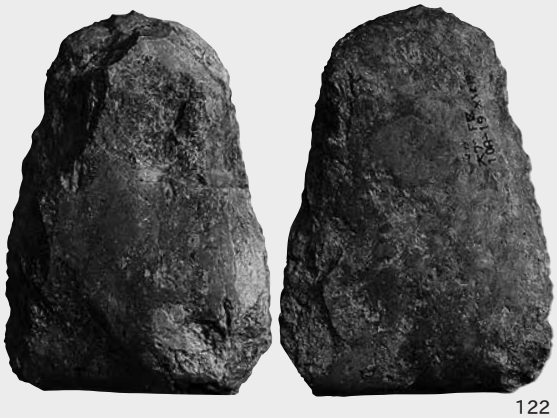
121



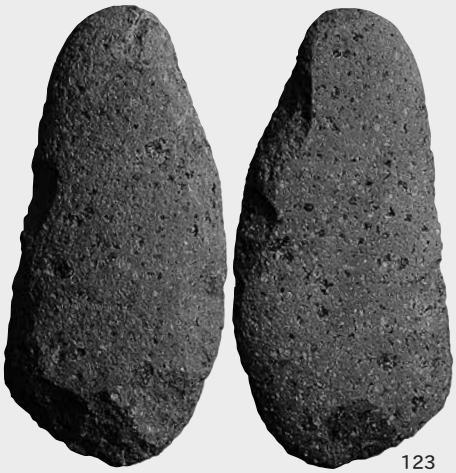
119



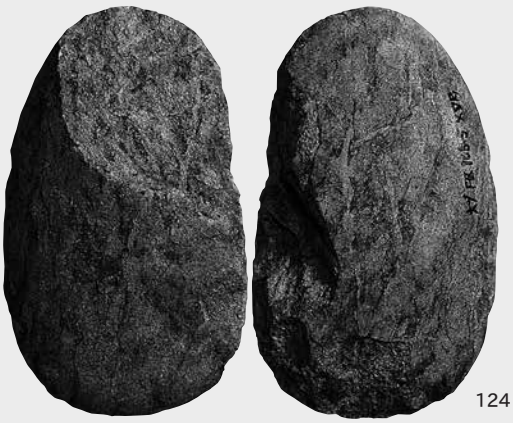
120



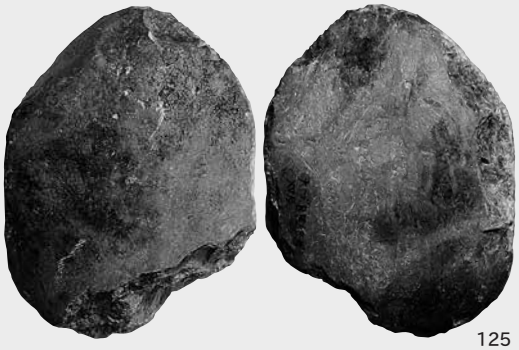
122



123

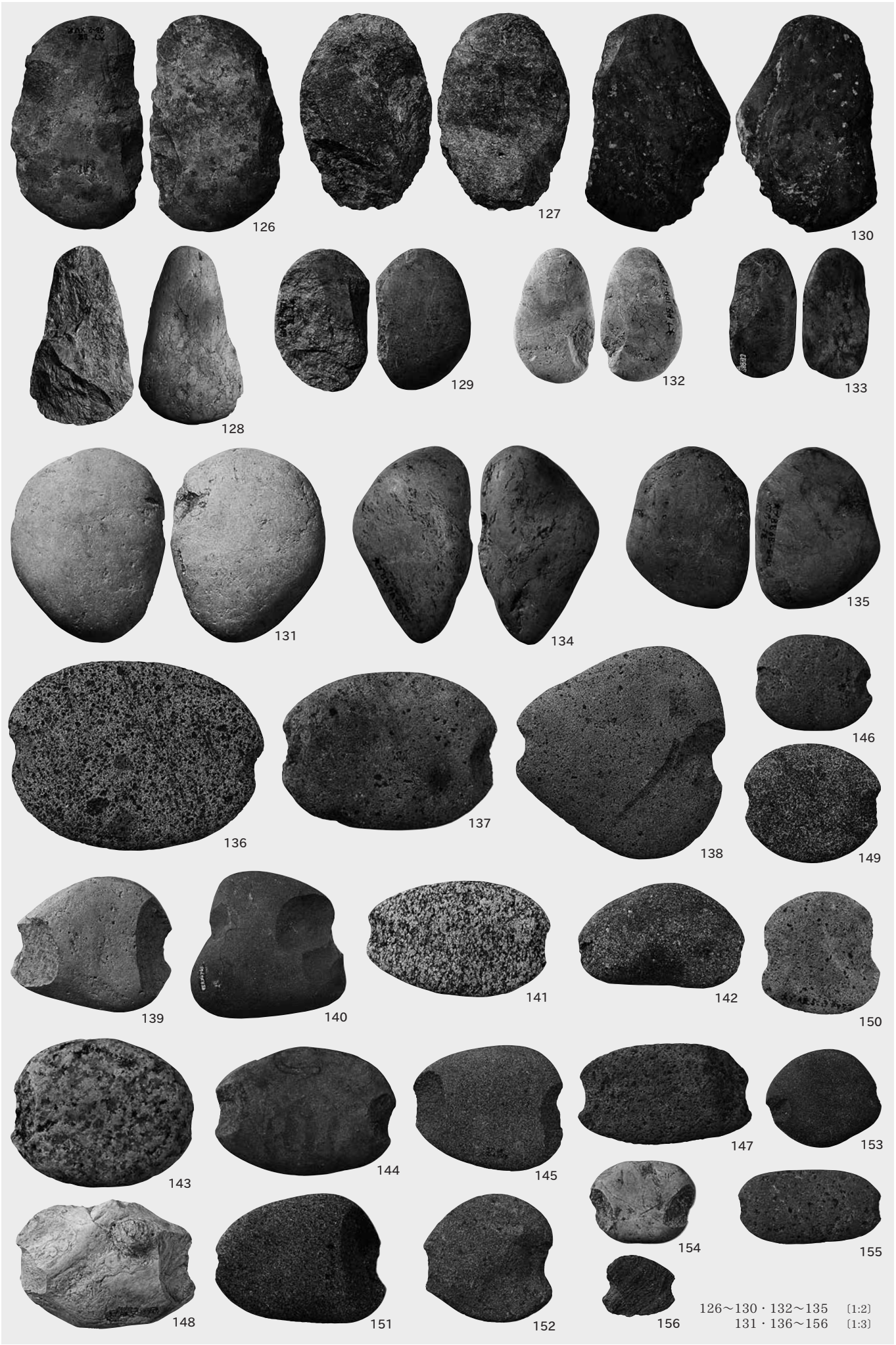


124

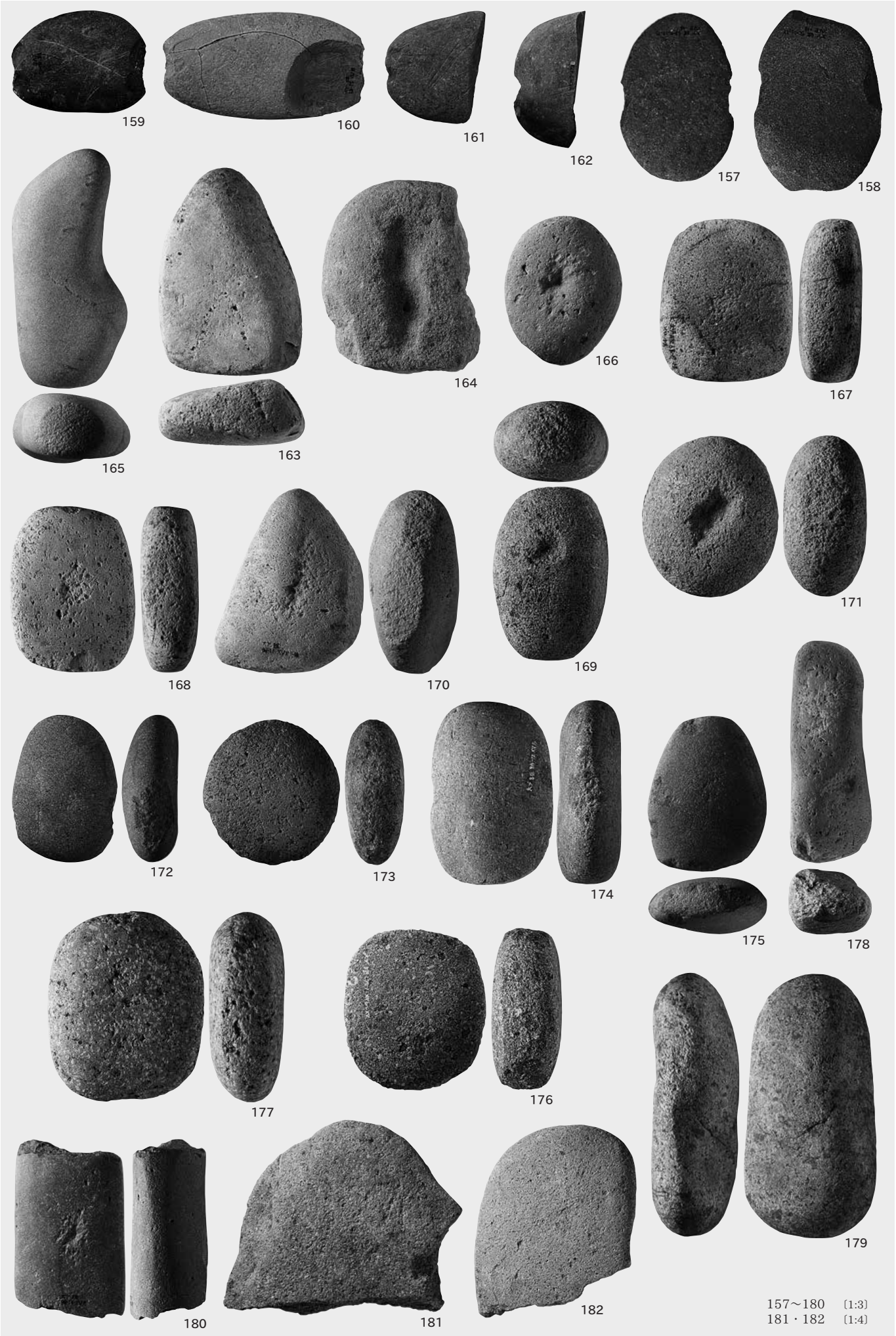


125

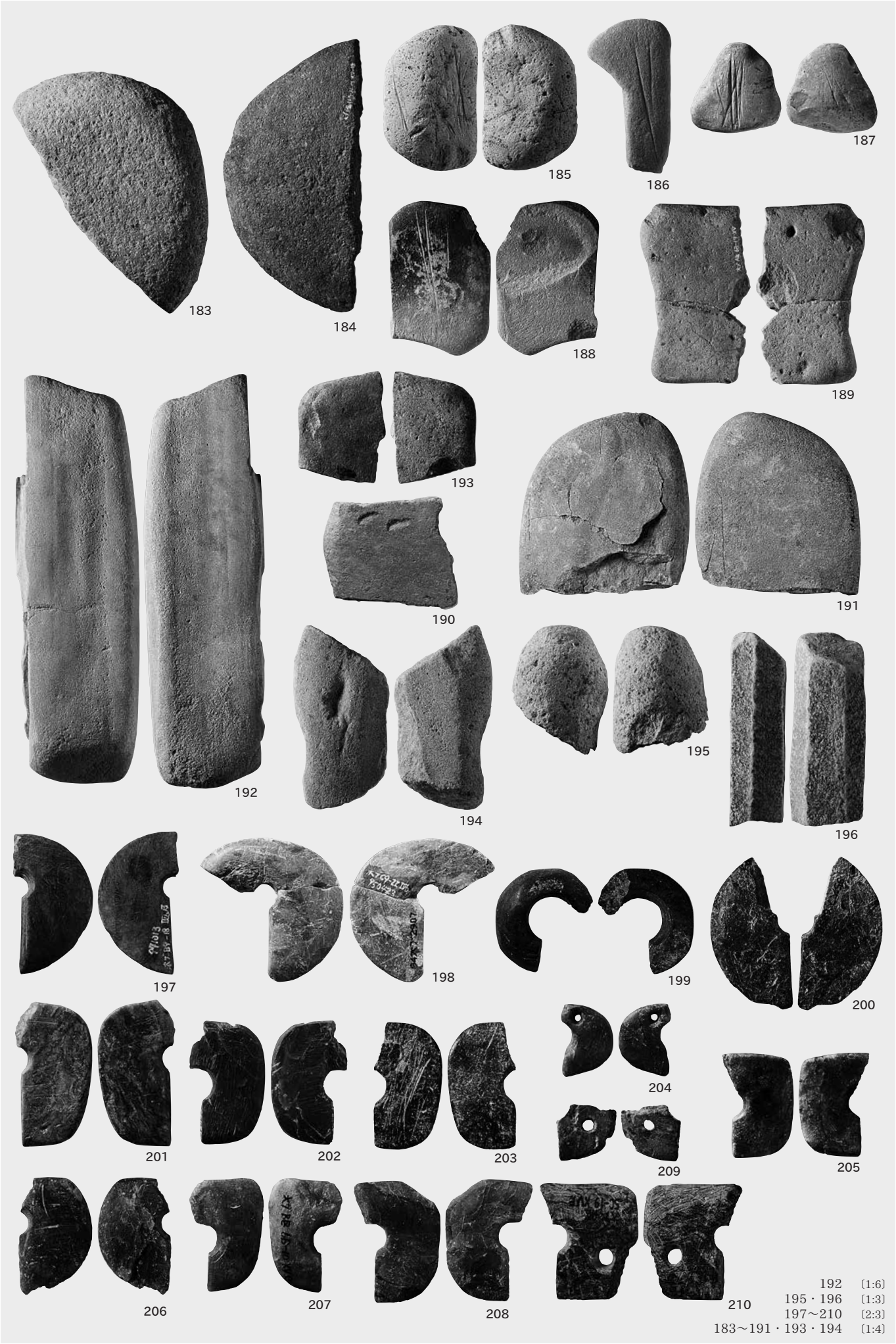
〔1:2〕



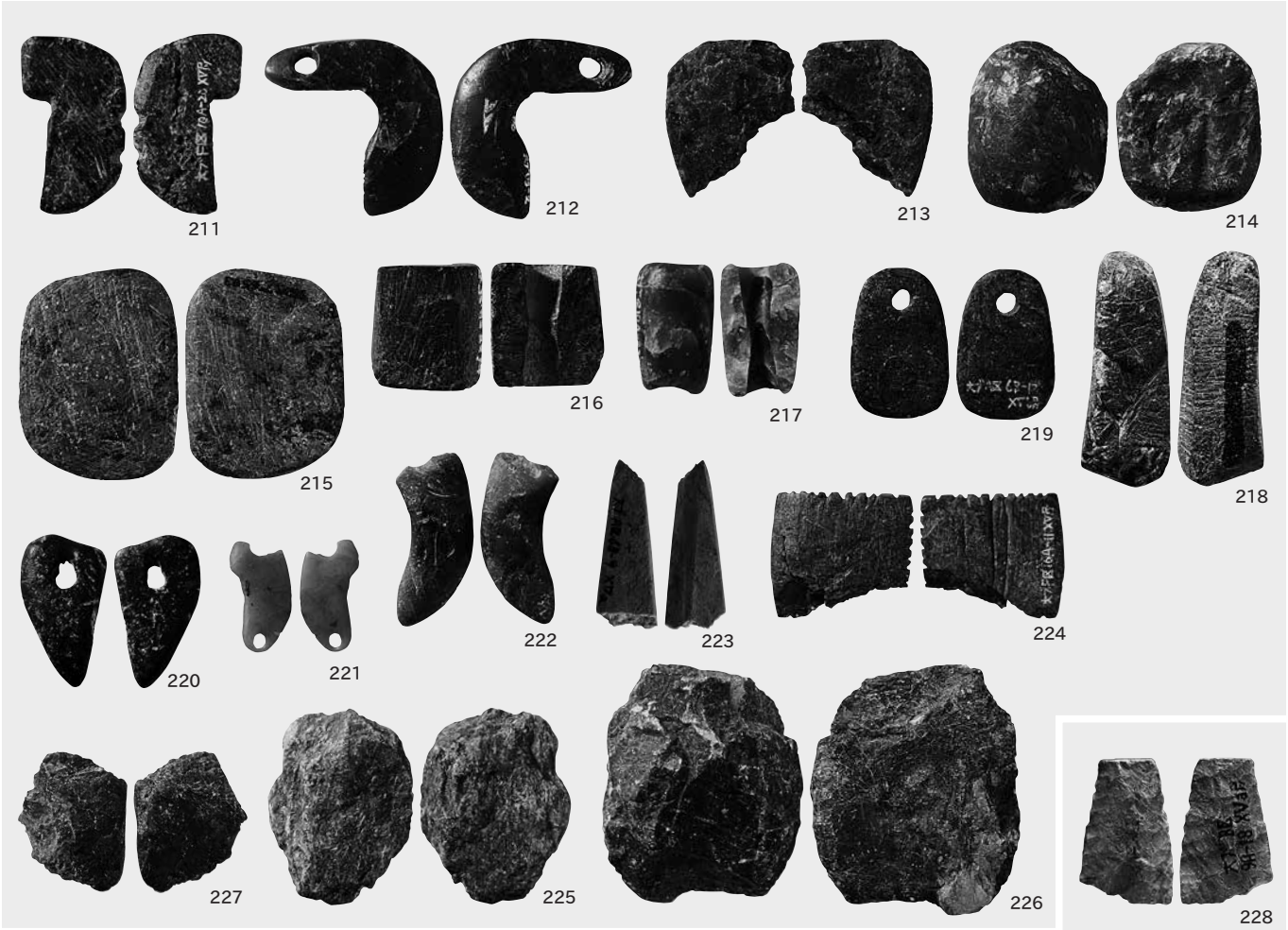
126～130・132～135　〔1:2〕
131・136～156　〔1:3〕



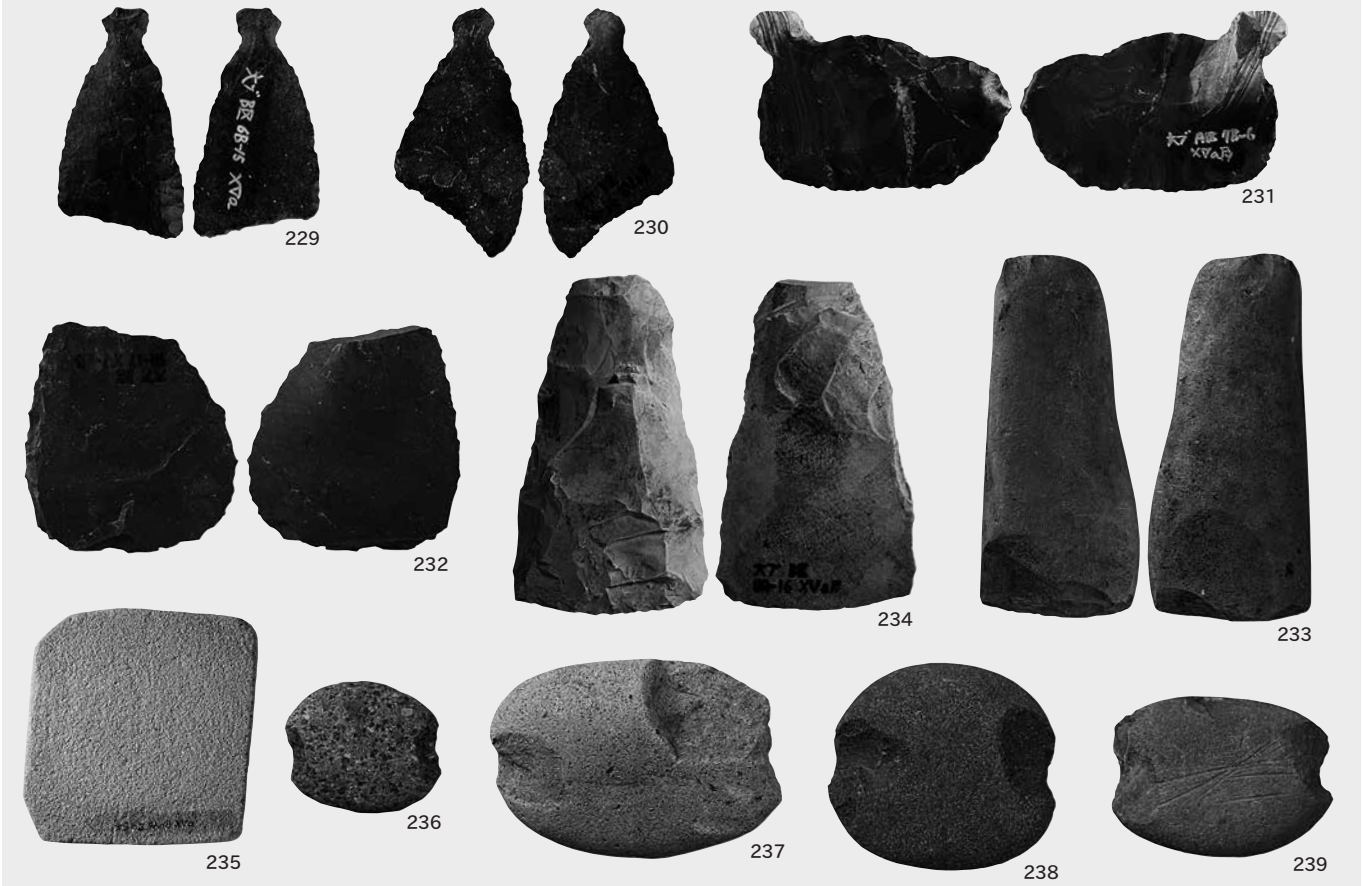
157～180 〔1:3〕
181・182 〔1:4〕



192　〔1:6〕
195・196　〔1:3〕
197～210　〔2:3〕
183～191・193・194　〔1:4〕

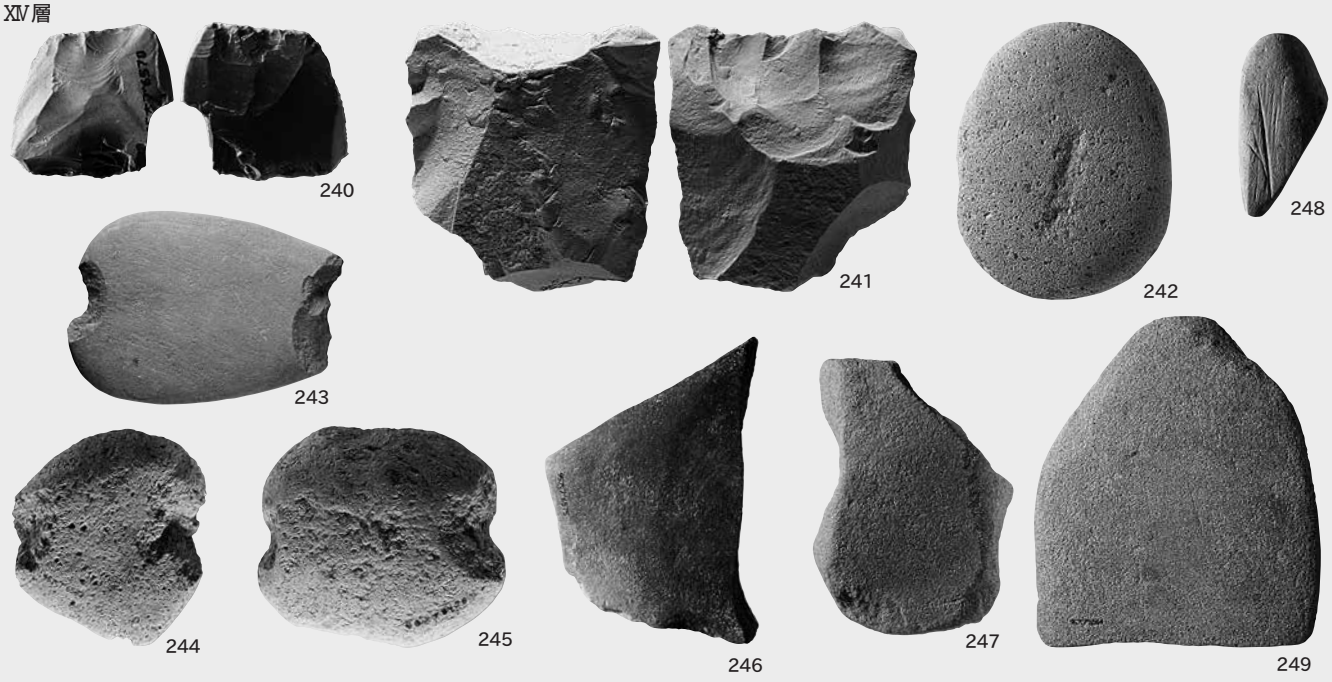


XVa層

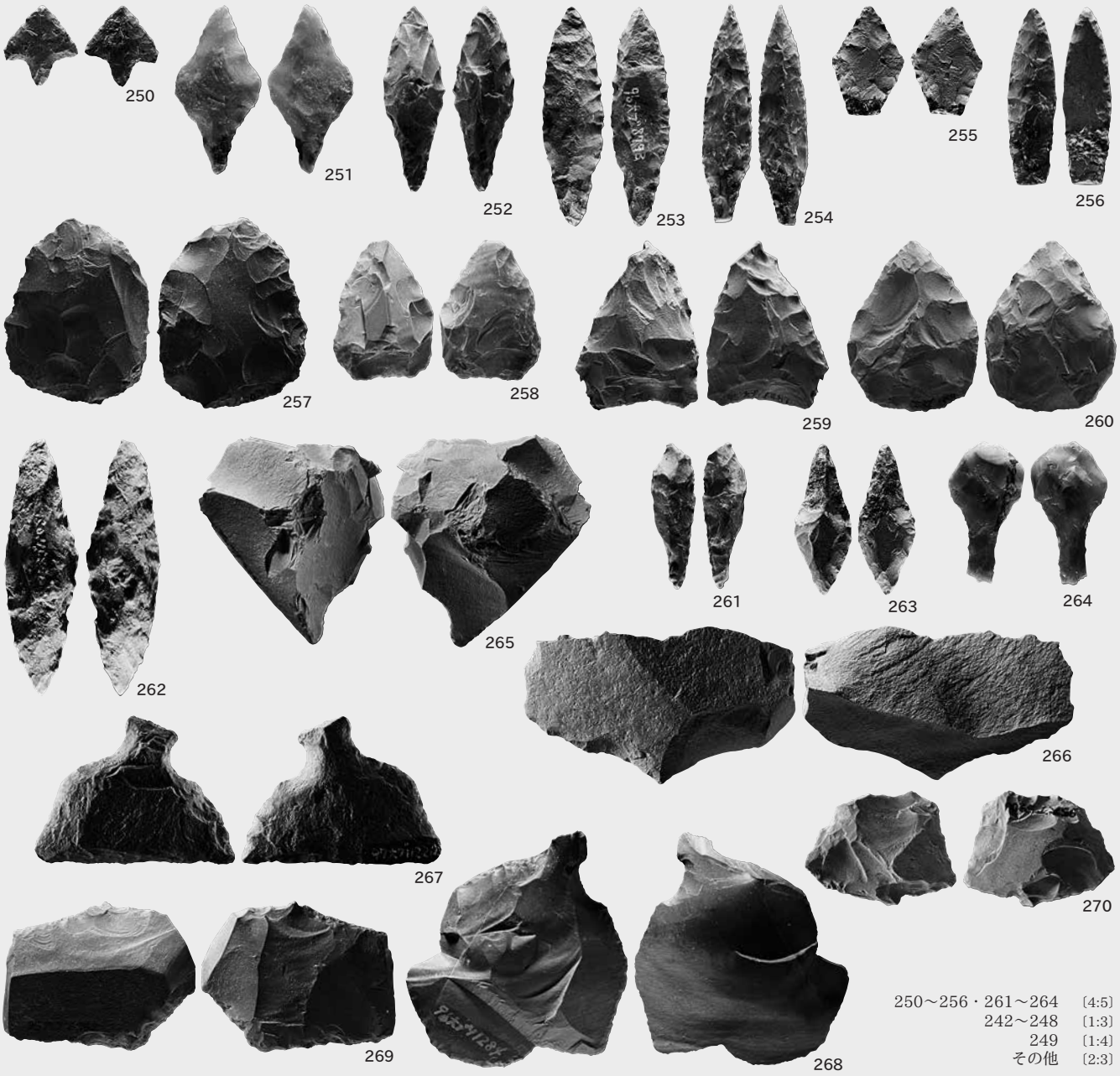


212・216・217・219～222・228　〔4:5〕
233・236～239　〔1:3〕
235　〔1:4〕
その他　〔2:3〕

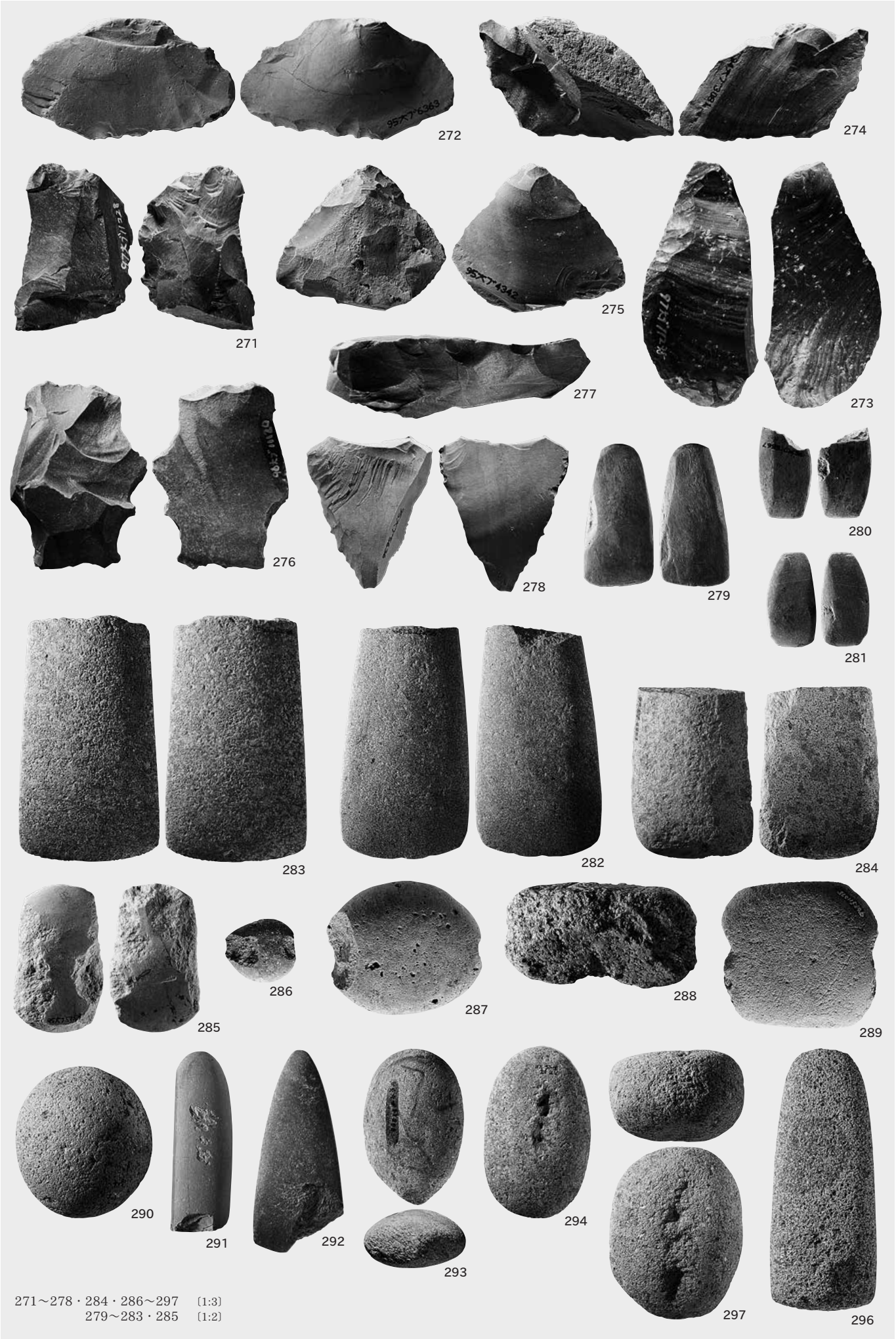
XIV層



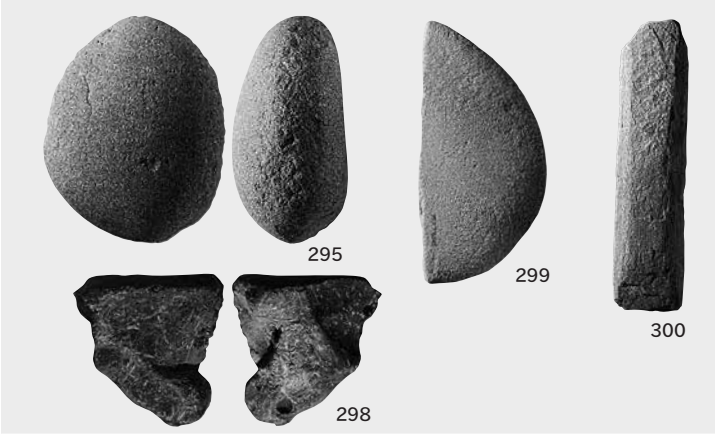
XIII～XI 層

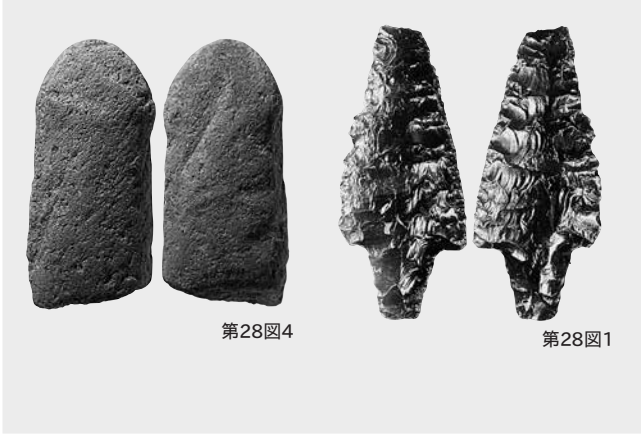


250～256・261～264　〔4:5〕
242～248　〔1:3〕
249　〔1:4〕
その他　〔2:3〕

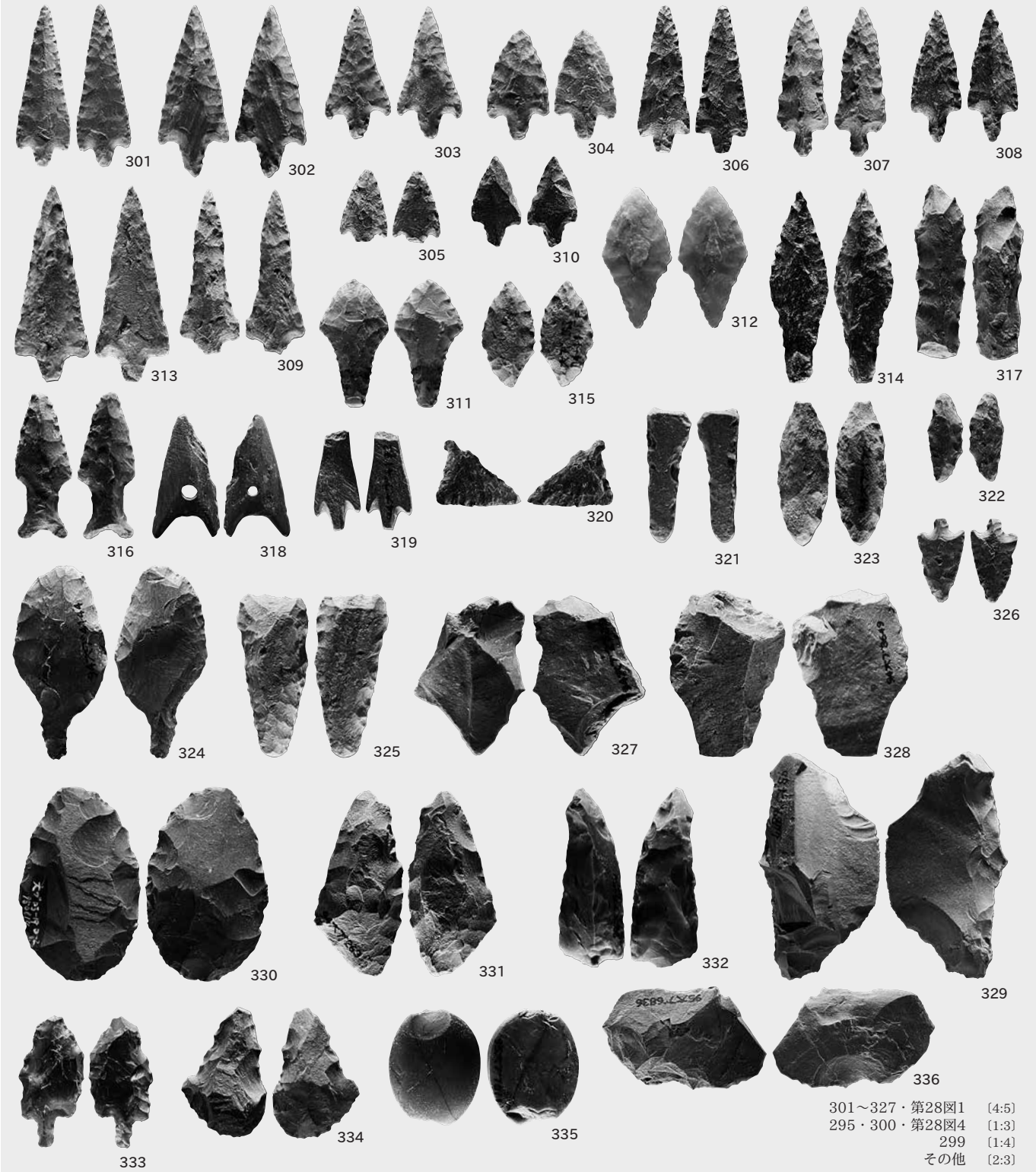


271～278・284・286～297　〔1:3〕
279～283・285　〔1:2〕

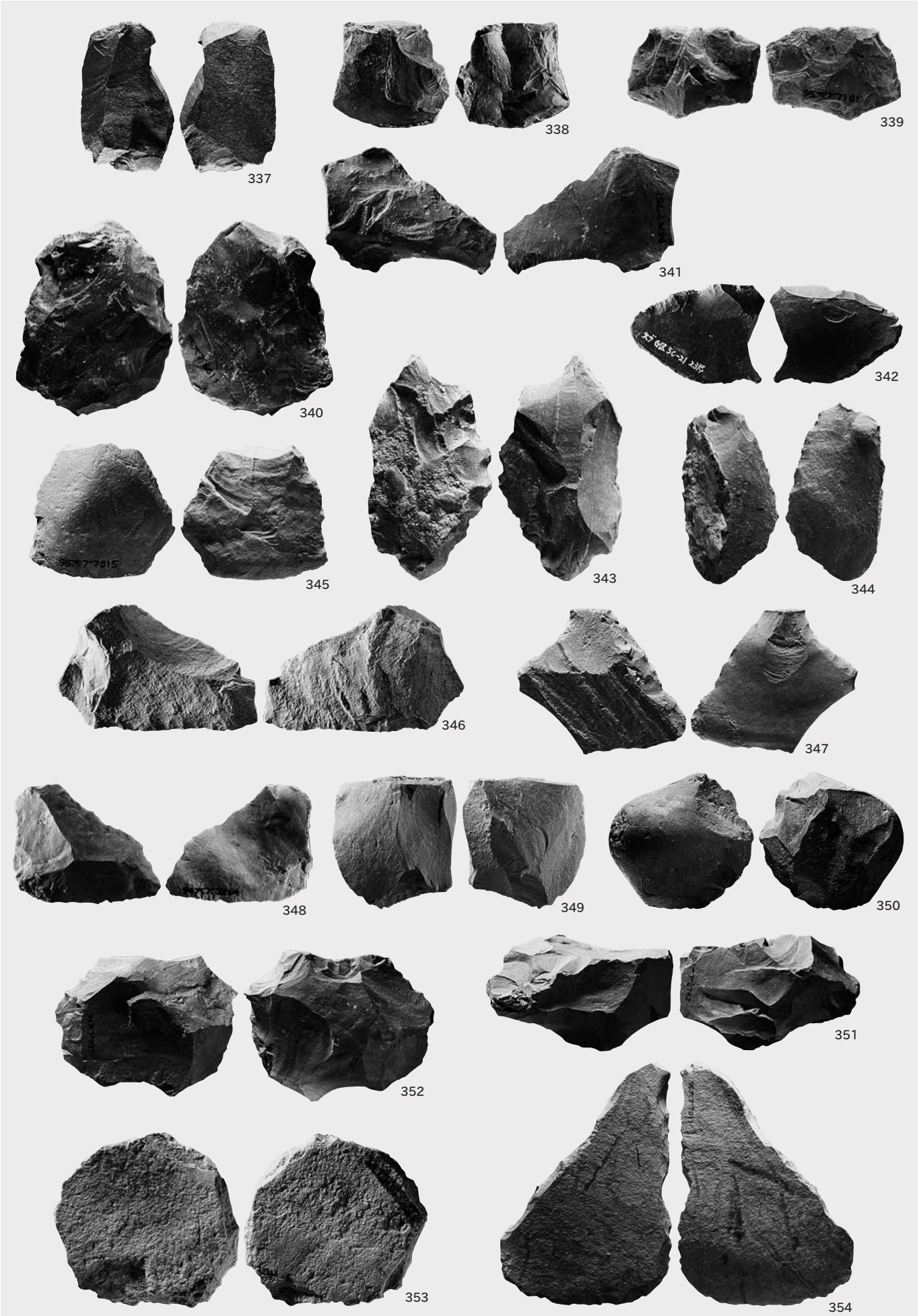




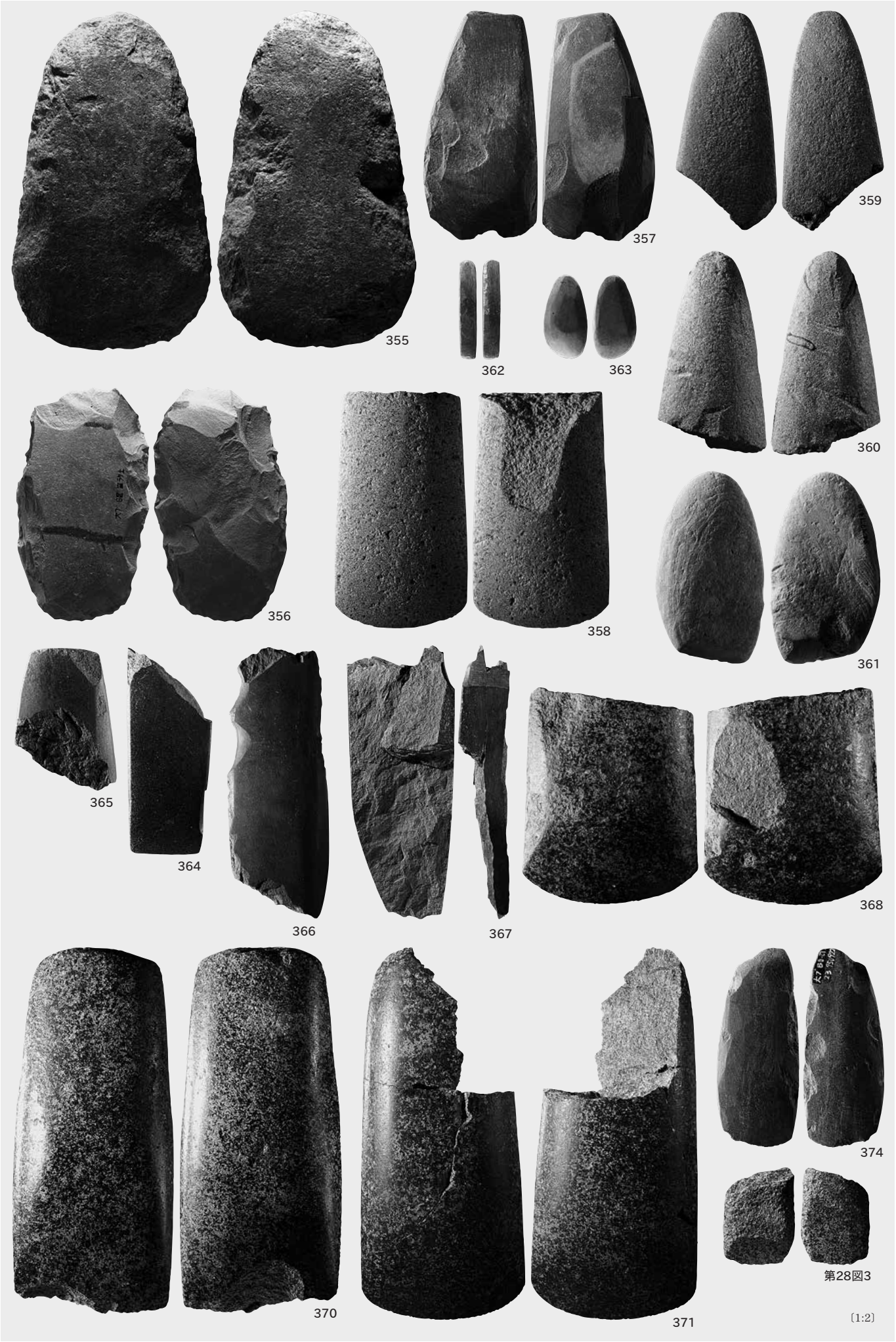
IX層より上層

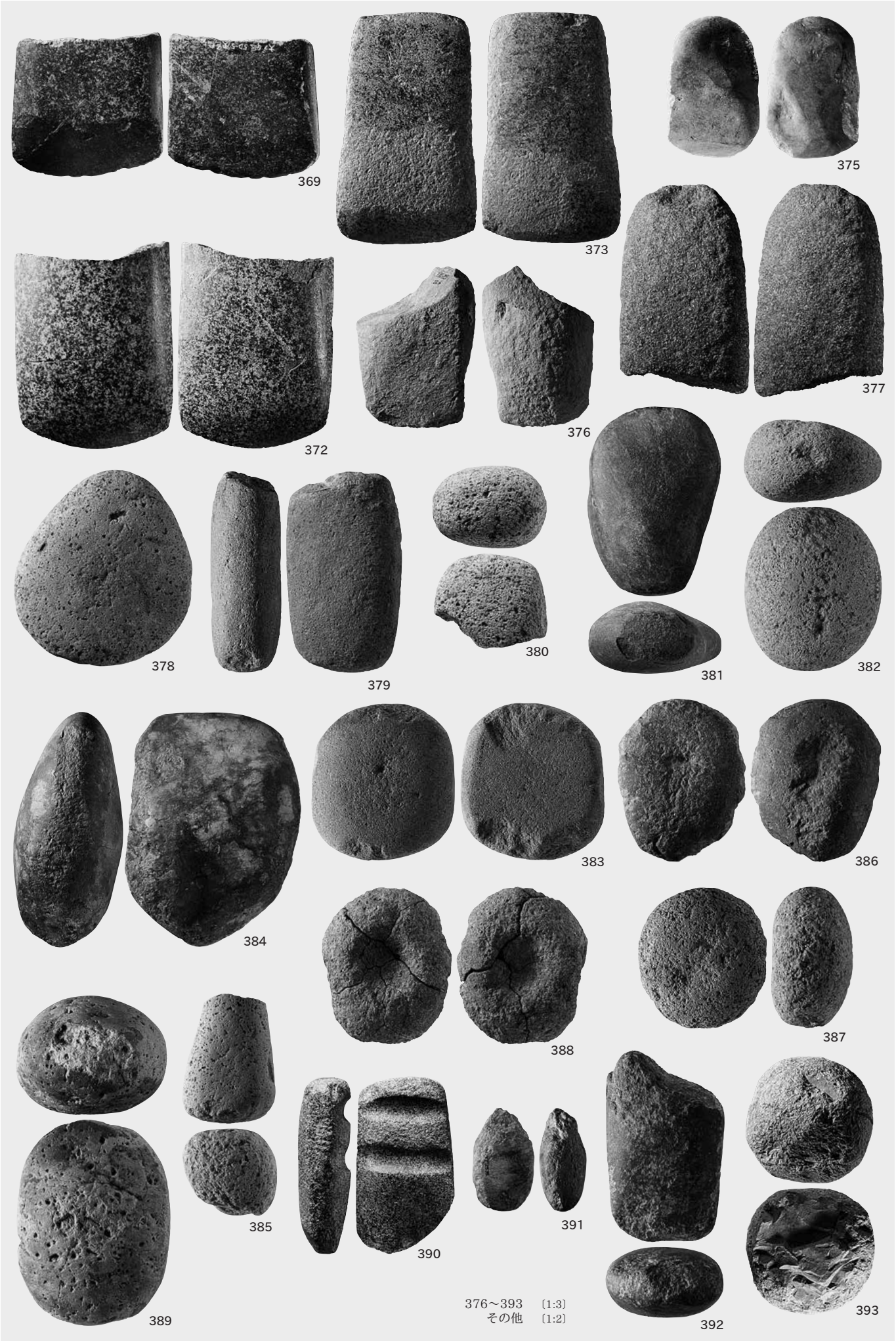


301～327・第28図1　〔4:5〕
295・300・第28図4　〔1:3〕
299　〔1:4〕
その他　〔2:3〕

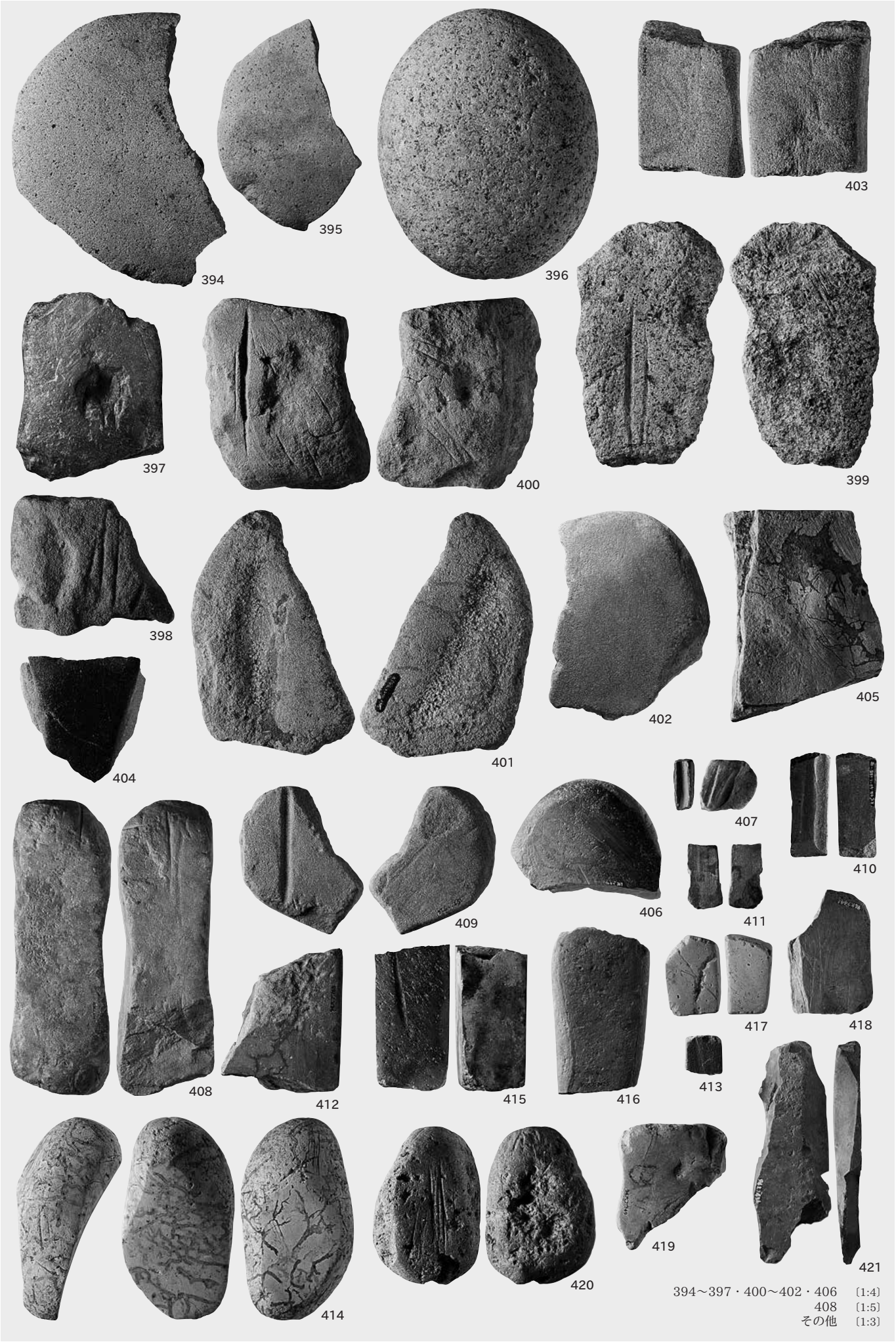


350～352　〔1:2〕
その他　〔2:3〕

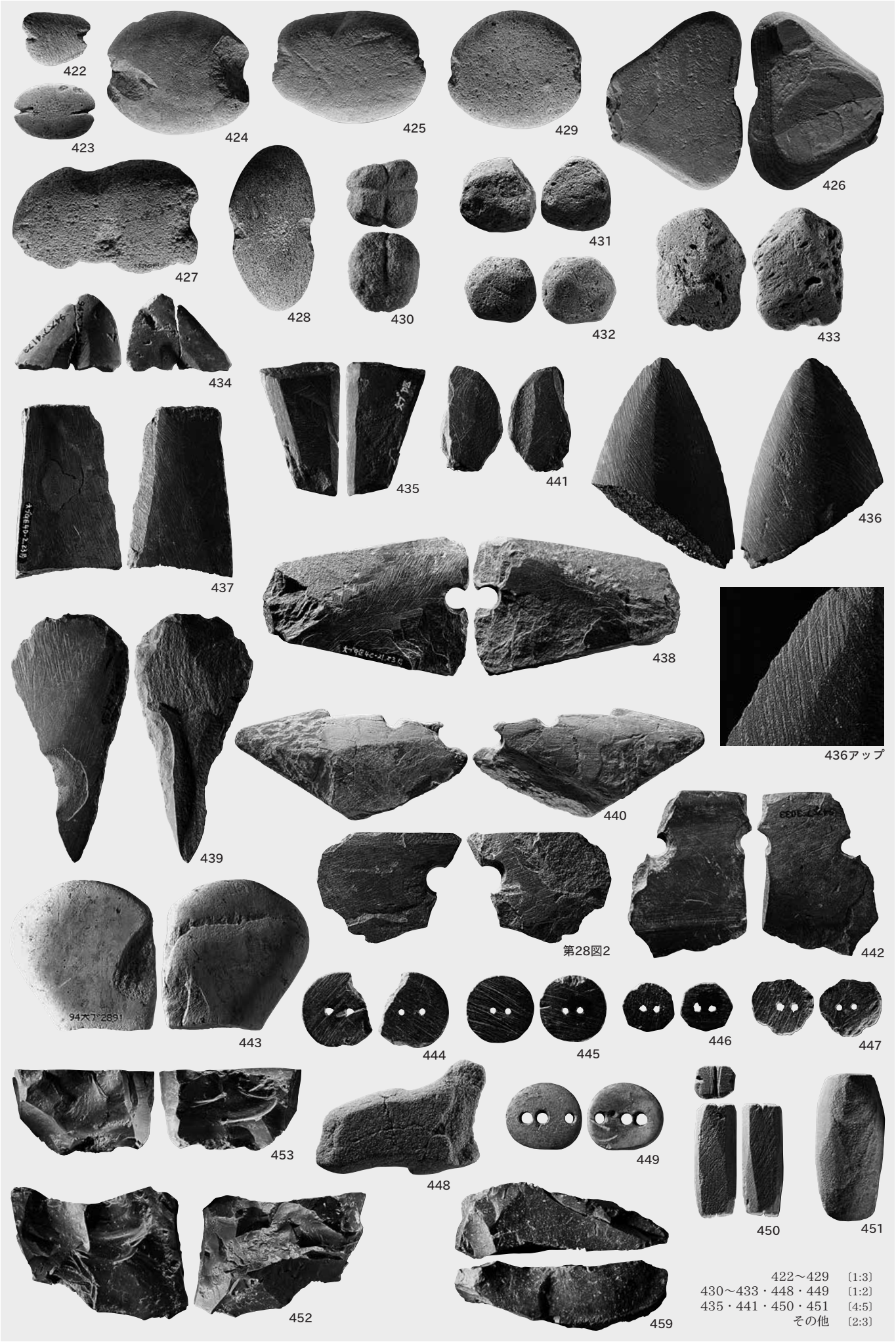

355
357
359
362
363
360
356
358
361
365
364
366
367
368
370
371
374
第28図3
〔1:2〕



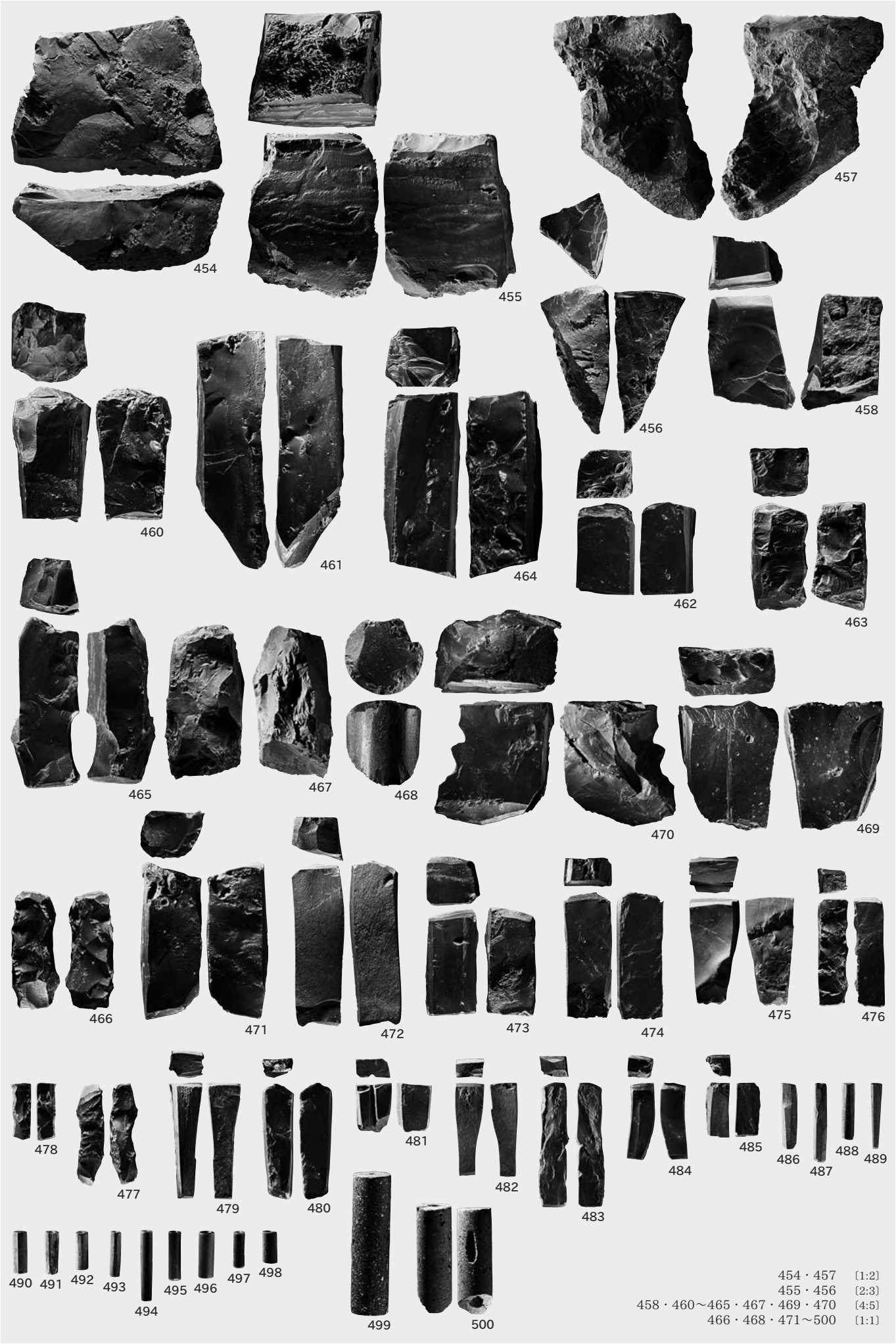
376～393　〔1:3〕
その他　〔1:2〕



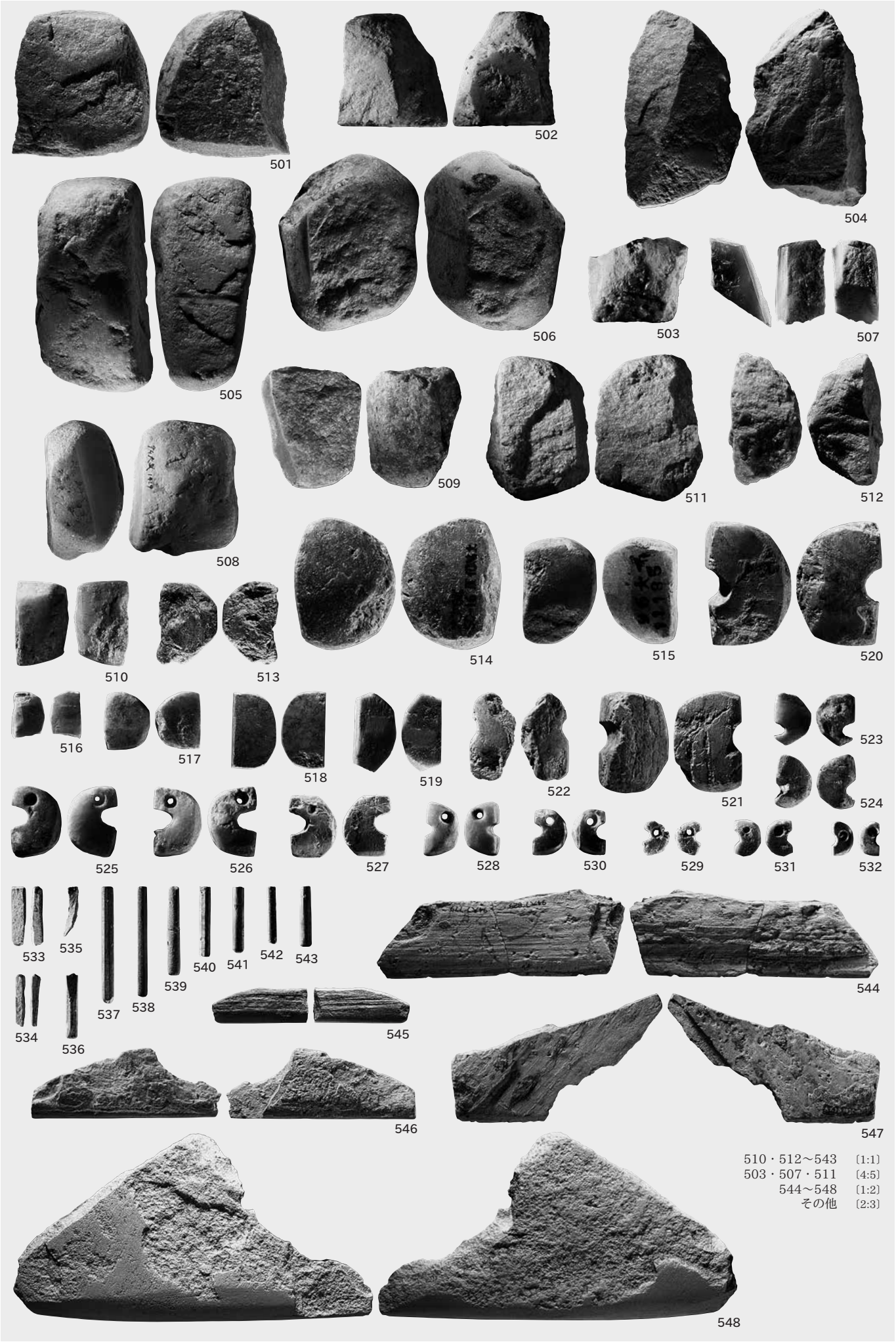
394～397・400～402・406　〔1:4〕
408　〔1:5〕
その他　〔1:3〕



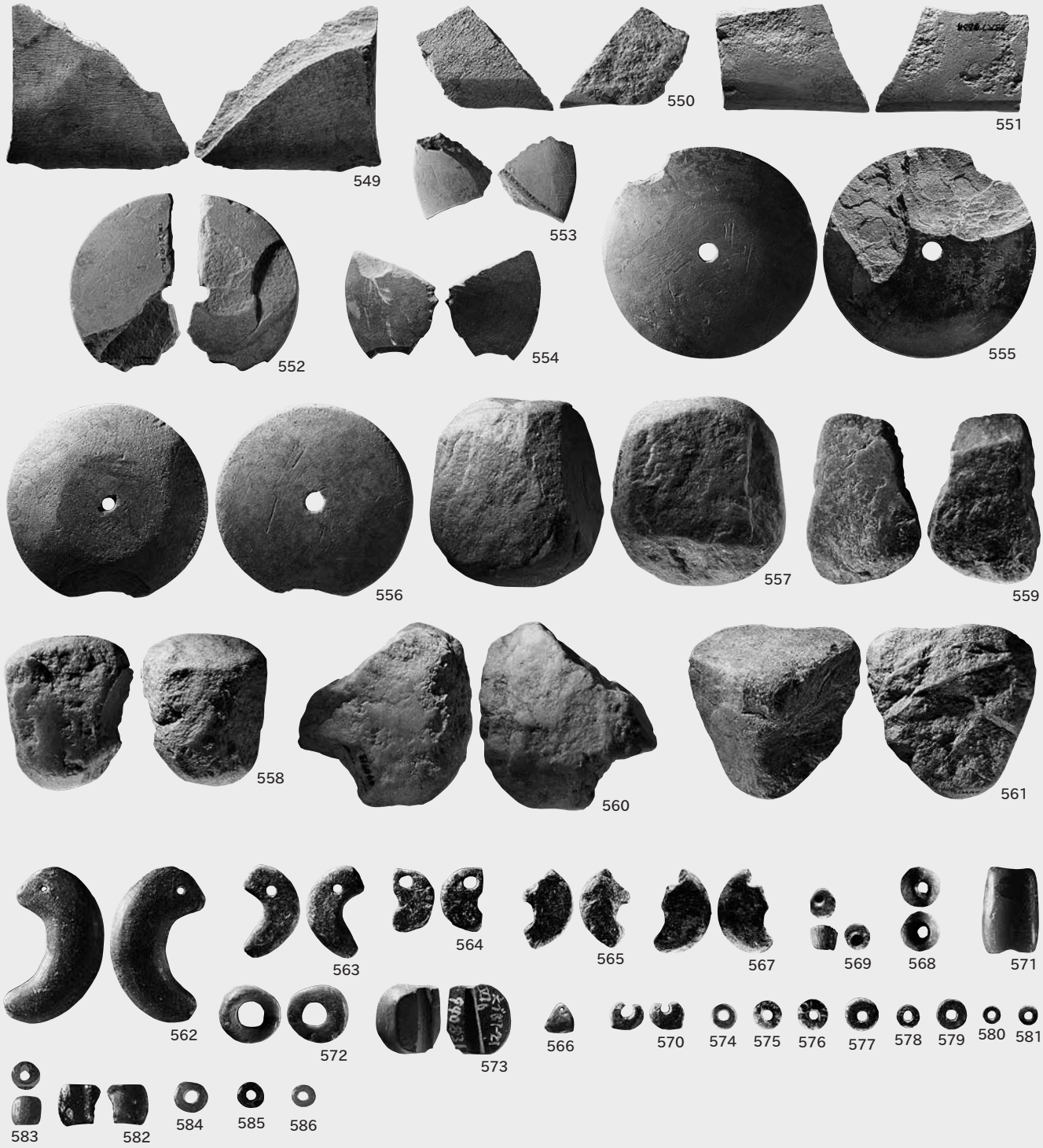
422～429　〔1:3〕
430～433・448・449　〔1:2〕
435・441・450・451　〔4:5〕
その他　〔2:3〕



454・457 〔1:2〕
455・456 〔2:3〕
458・460～465・467・469・470 〔4:5〕
466・468・471～500 〔1:1〕

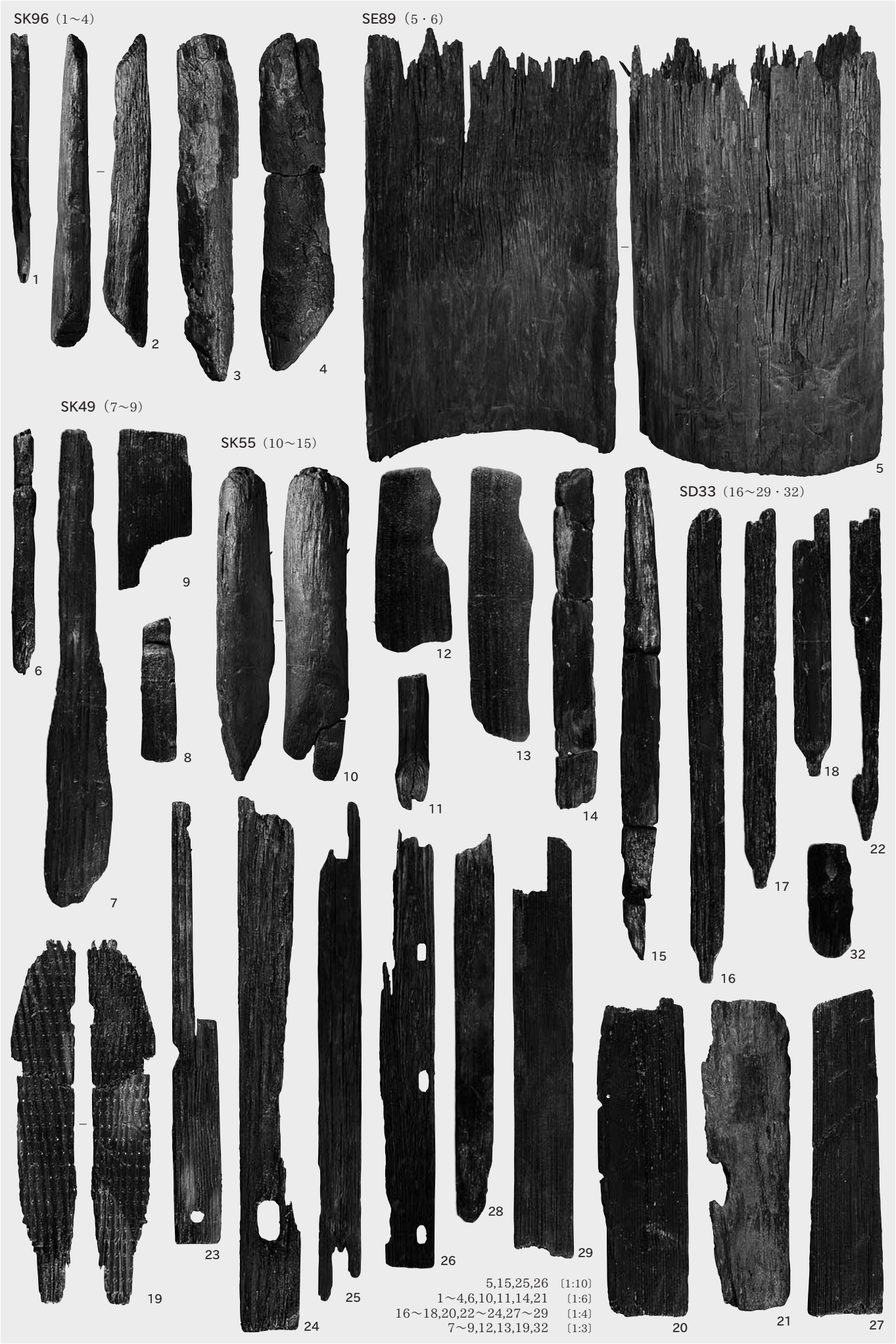


510・512～543　〔1:1〕
503・507・511　〔4:5〕
544～548　〔1:2〕
その他　〔2:3〕

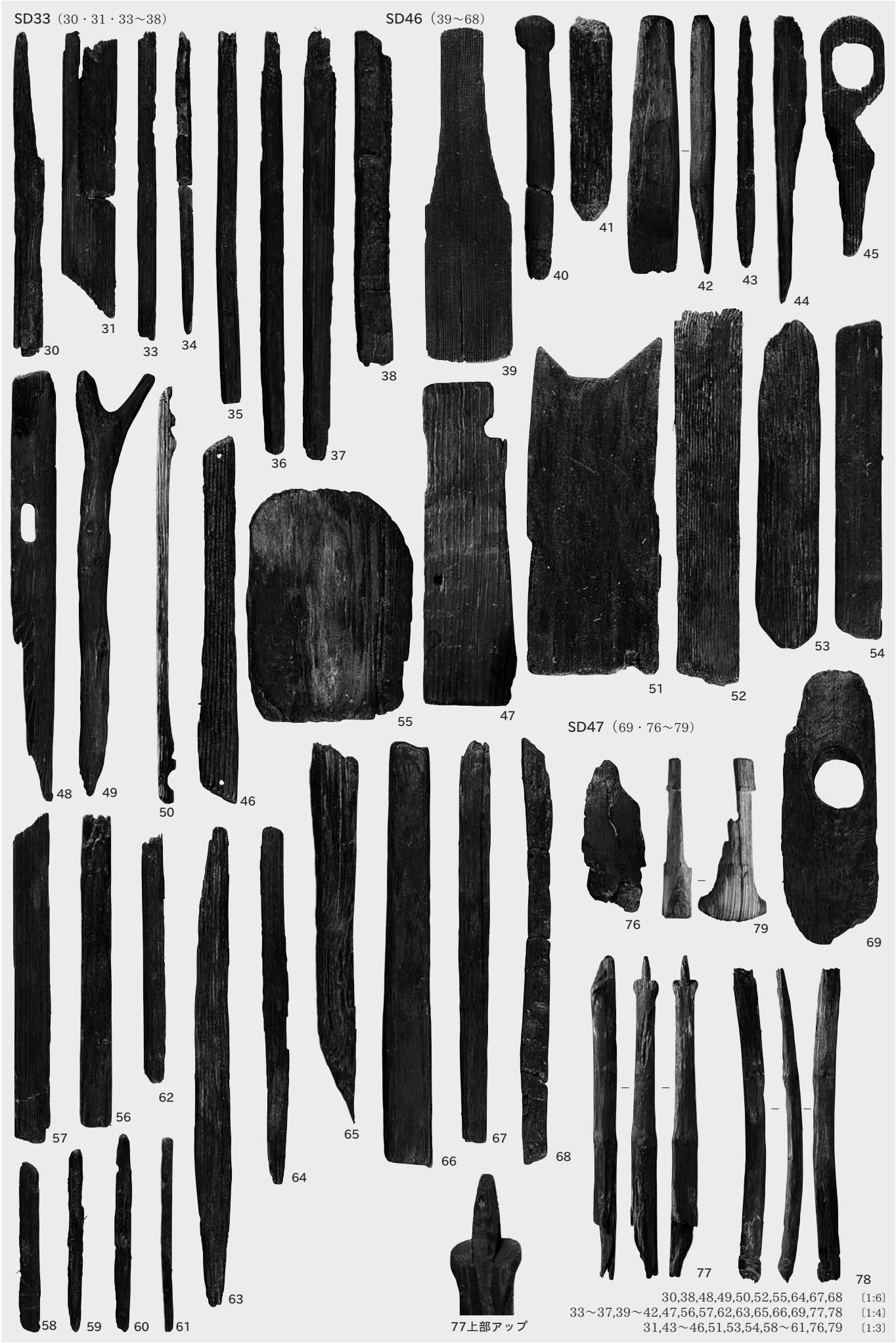


549～551・557～561 〔1:2〕
552～556 〔1:3〕
562・563 〔2:3〕
564～586 〔1:1〕

木製品（1） SK96、SE89、SK49・55、SD33

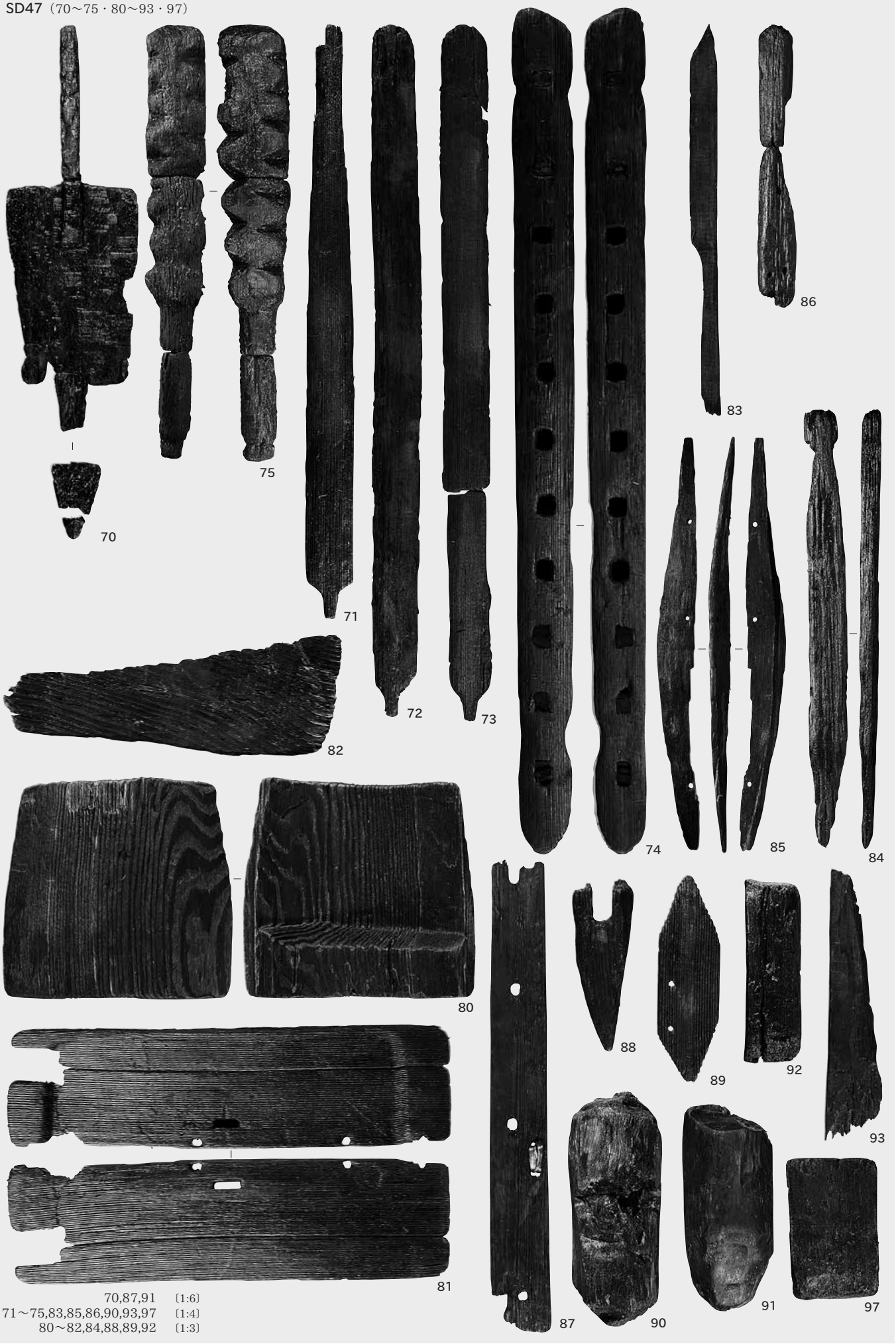


5,15,25,26 〔1:10〕
1～4,6,10,11,14,21 〔1:6〕
16～18,20,22～24,27～29 〔1:4〕
7～9,12,13,19,32 〔1:3〕

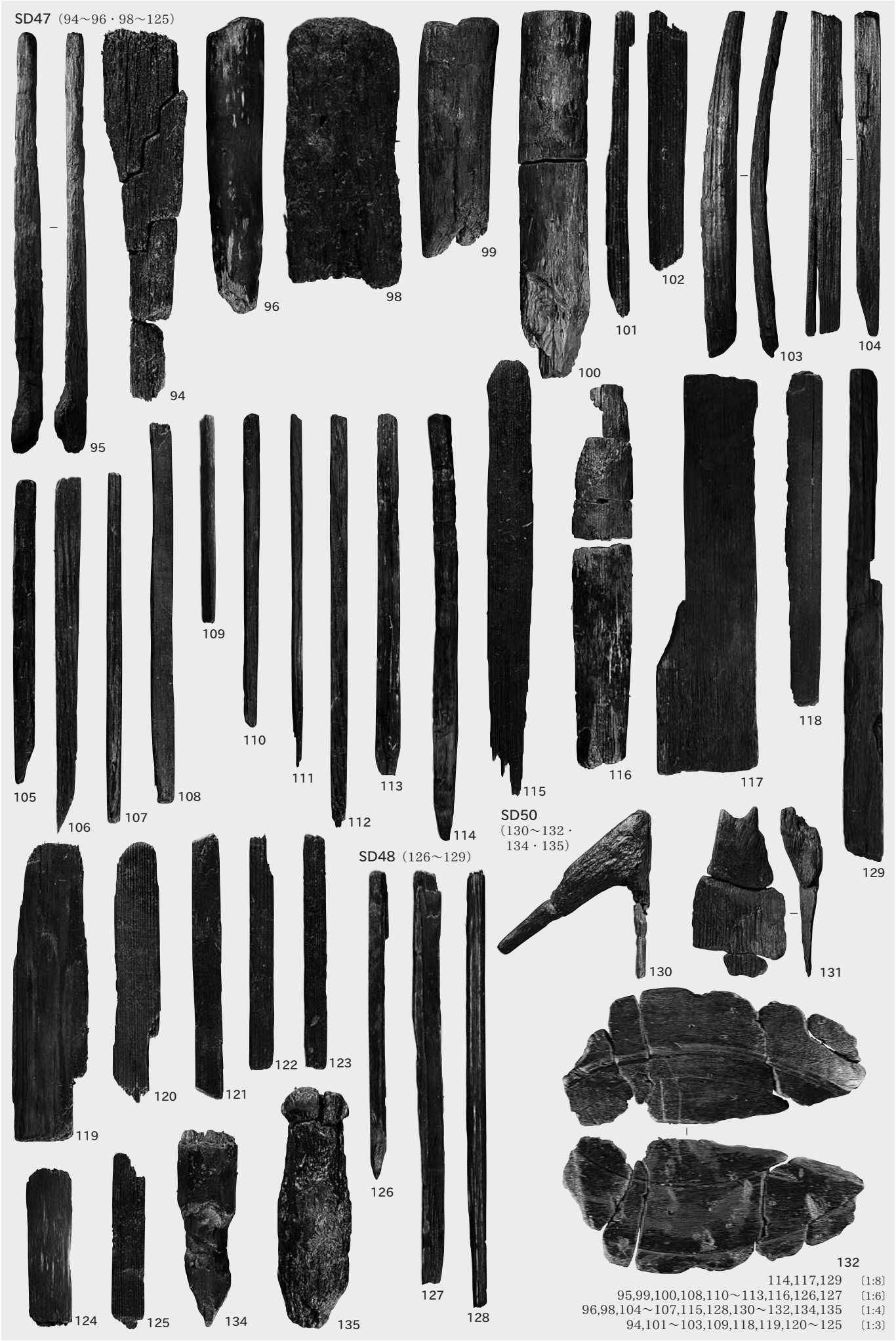


30,38,48,49,50,52,55,64,67,68 〔1:6〕
33～37,39～42,47,56,57,62,63,65,66,69,77,78 〔1:4〕
31,43～46,51,53,54,58～61,76,79 〔1:3〕

SD47（70～75・80～93・97）

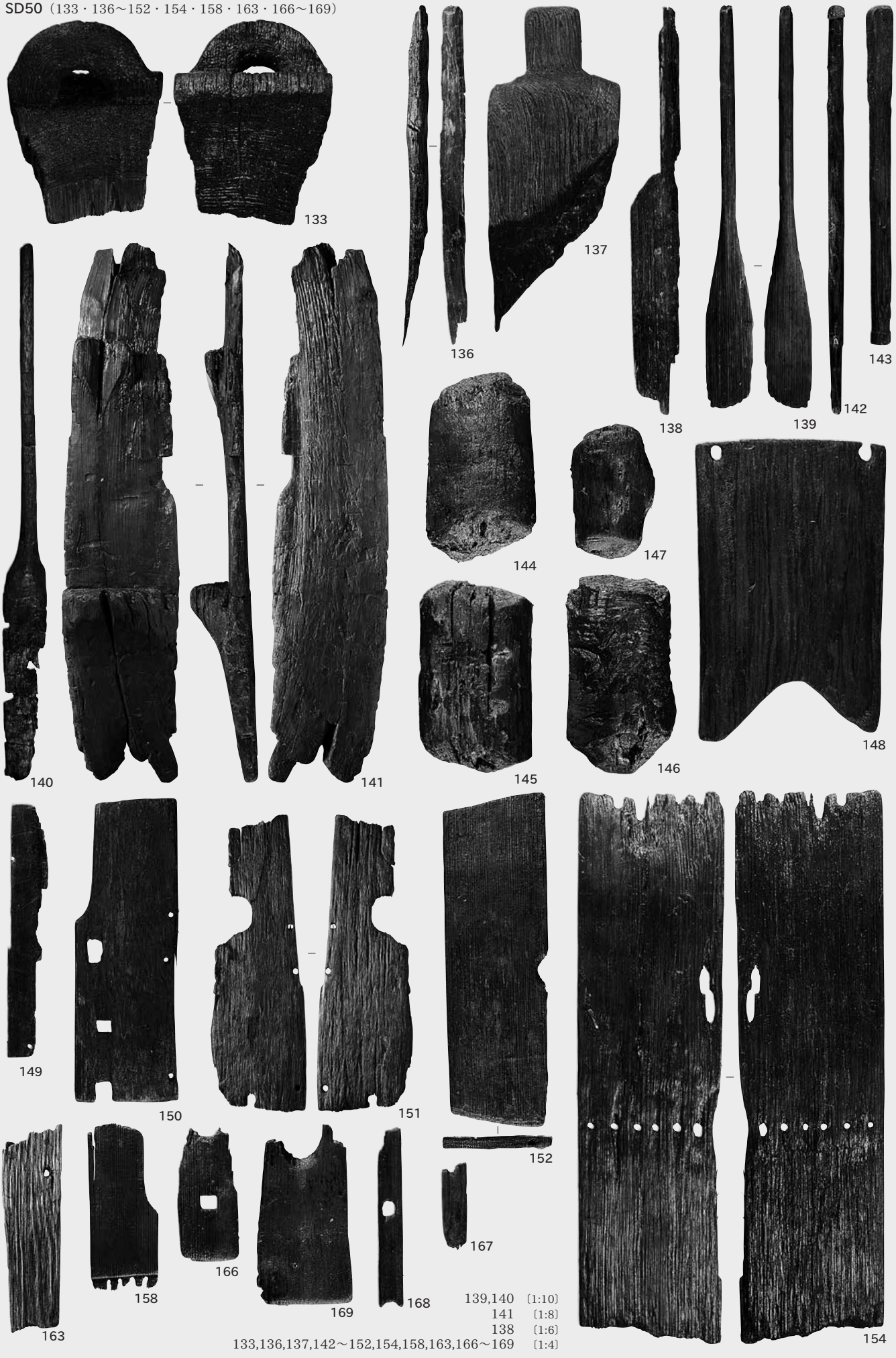


70,87,91 〔1:6〕
71～75,83,85,86,90,93,97 〔1:4〕
80～82,84,88,89,92 〔1:3〕



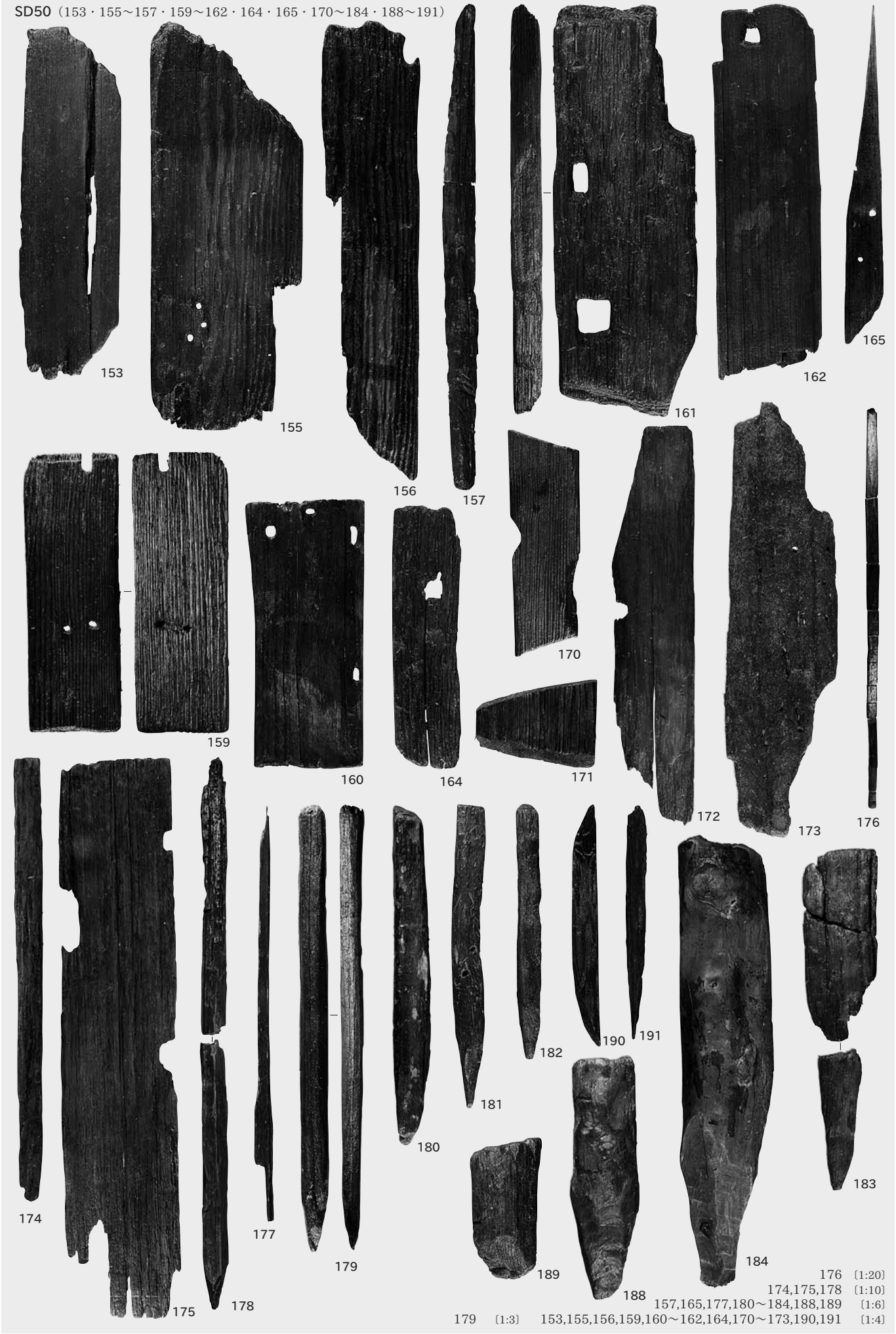
114,117,129 〔1:8〕
95,99,100,108,110～113,116,126,127 〔1:6〕
96,98,104～107,115,128,130～132,134,135 〔1:4〕
94,101～103,109,118,119,120～125 〔1:3〕

SD50（133・136～152・154・158・163・166～169）



139,140 〔1:10〕
141 〔1:8〕
138 〔1:6〕
133,136,137,142～152,154,158,163,166～169 〔1:4〕

SD50（153・155～157・159～162・164・165・170～184・188～191）

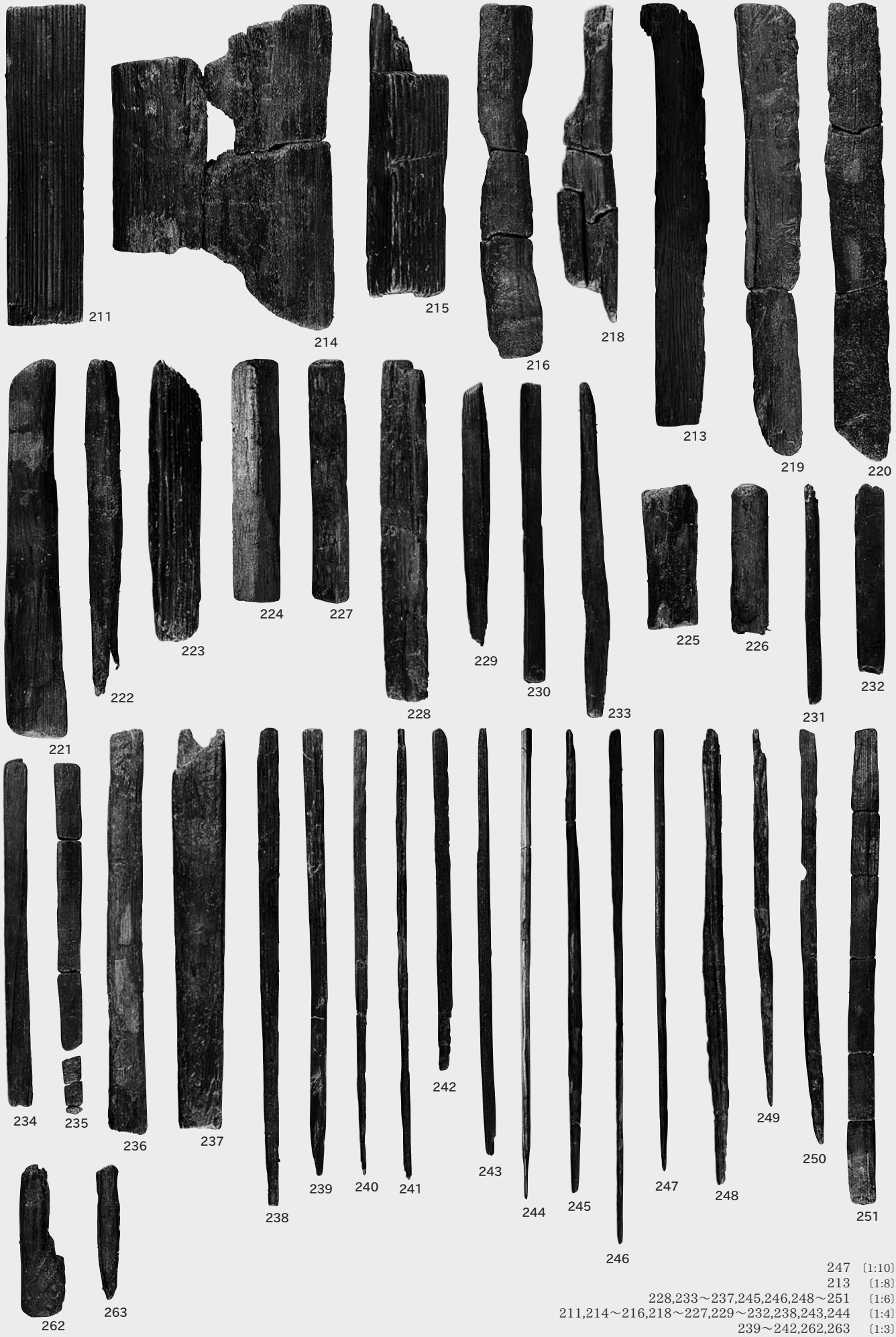


176 〔1:20〕
174,175,178 〔1:10〕
157,165,177,180～184,188,189 〔1:6〕
179 〔1:3〕 153,155,156,159,160～162,164,170～173,190,191 〔1:4〕

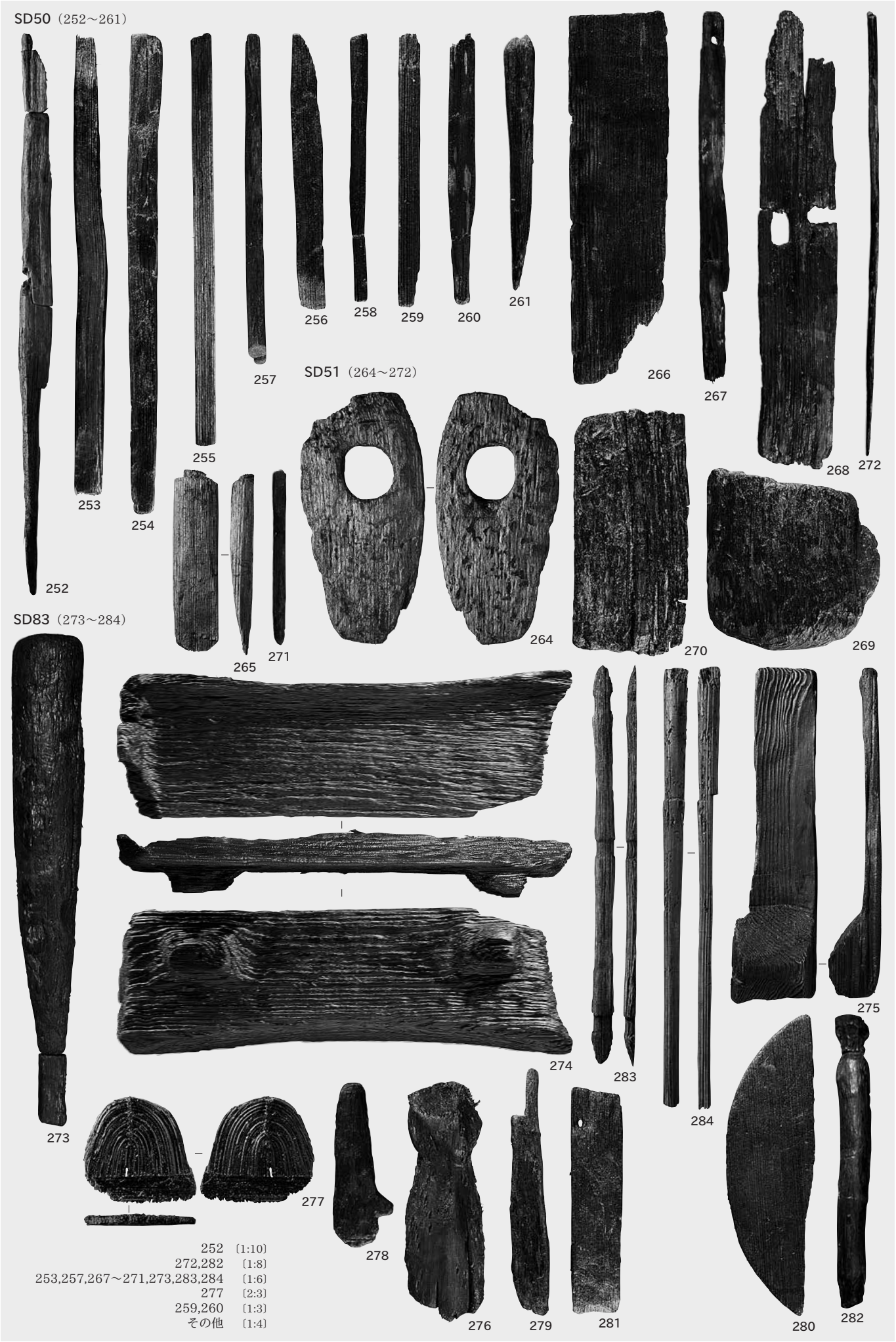
SD50（185～187・192～210・212・217）

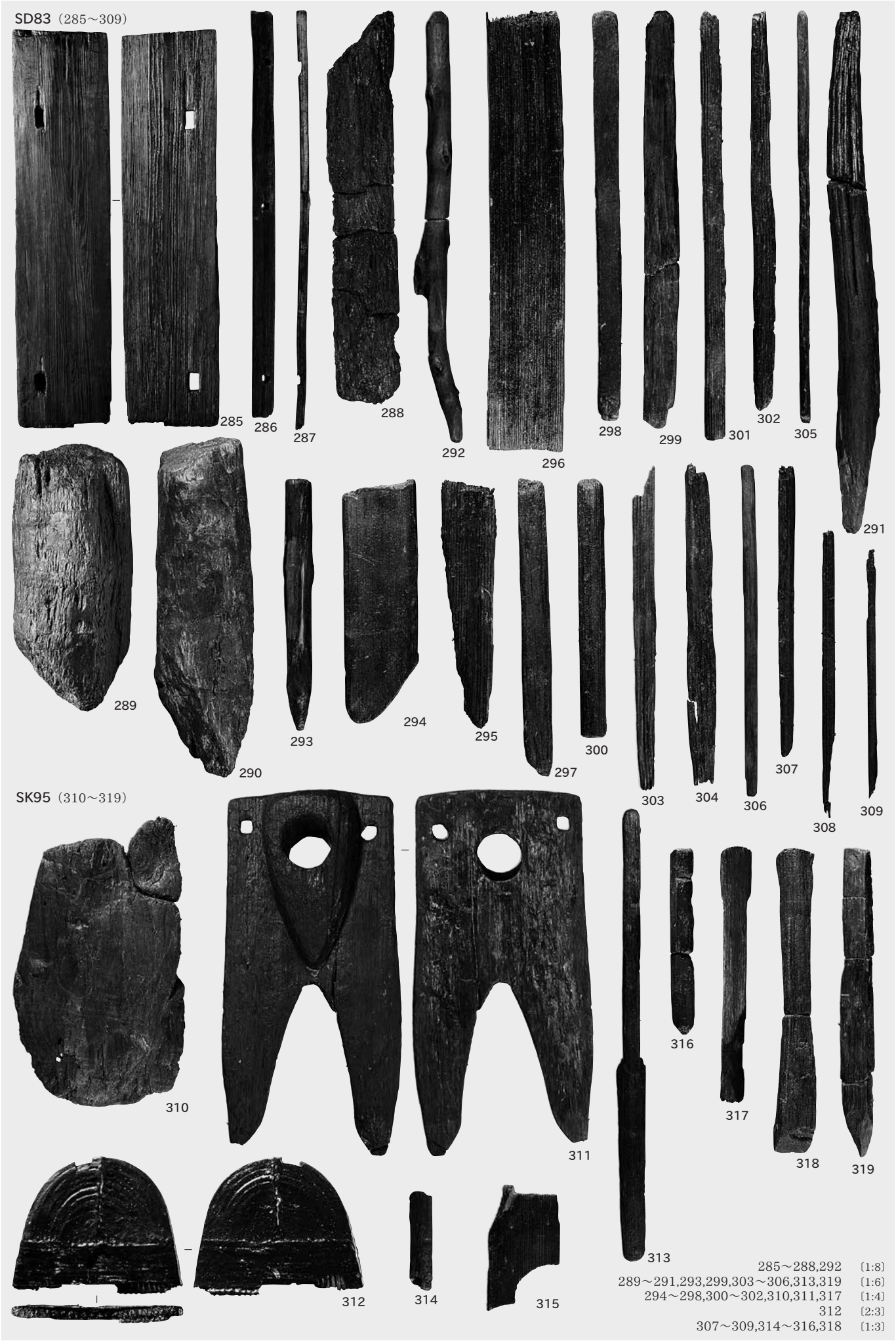
193,196 〔1:10〕
199,203,212 〔1:8〕
185～187,192,194,197,198,202 〔1:6〕
195,200,201,204～210,217 〔1:4〕

SD50（211・213～216・218～251・262・263）



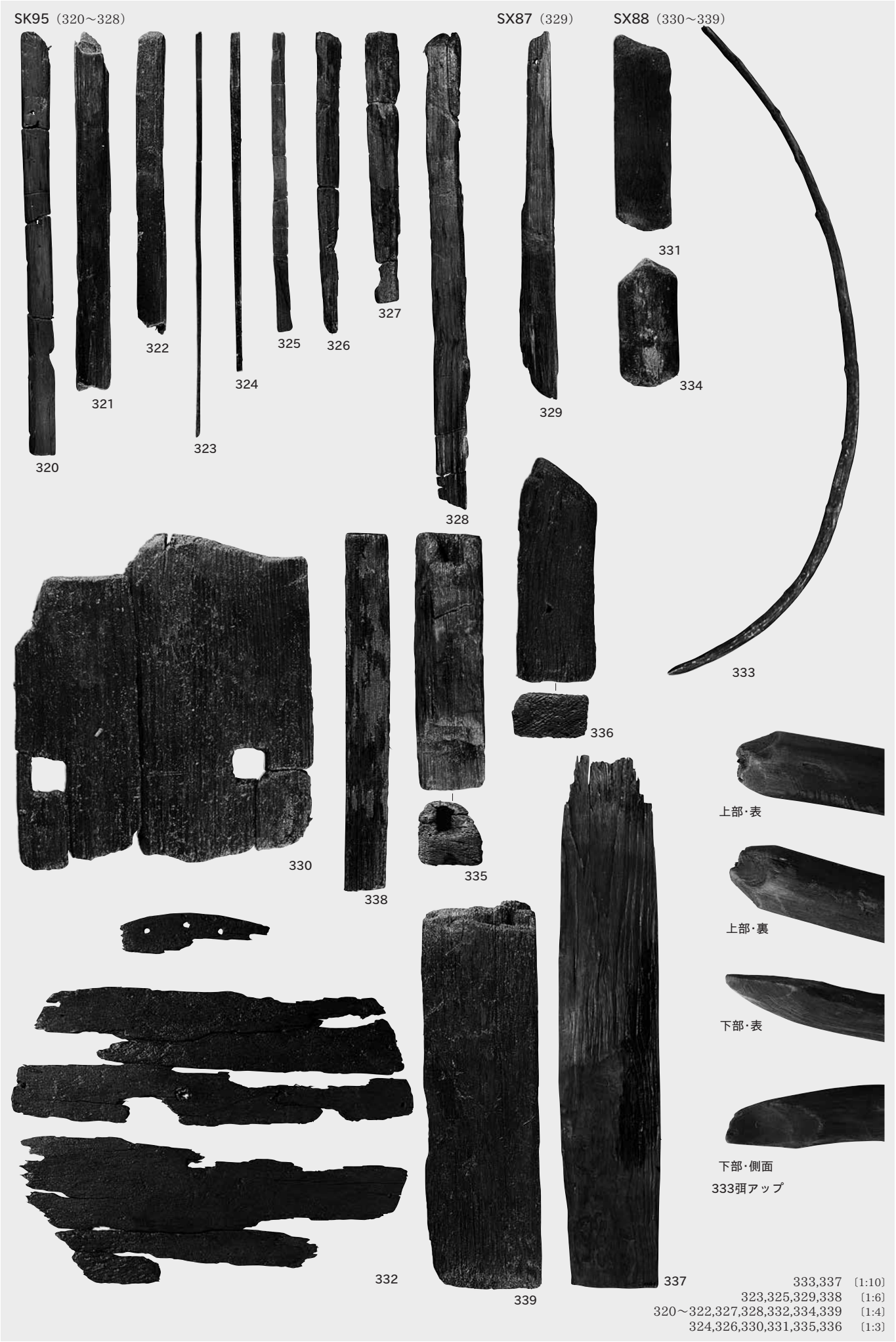
247 〔1:10〕
213 〔1:8〕
228,233～237,245,246,248～251 〔1:6〕
211,214～216,218～227,229～232,238,243,244 〔1:4〕
239～242,262,263 〔1:3〕


SD50（252～261）
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
266
267
268
272
SD51（264～272）
264
265
269
270
271
SD83（273～284）
273
274
275
277
278
279
280
281
282
283
284
252 〔1:10〕
272,282 〔1:8〕
253,257,267～271,273,283,284 〔1:6〕
277 〔2:3〕
259,260 〔1:3〕
その他 〔1:4〕

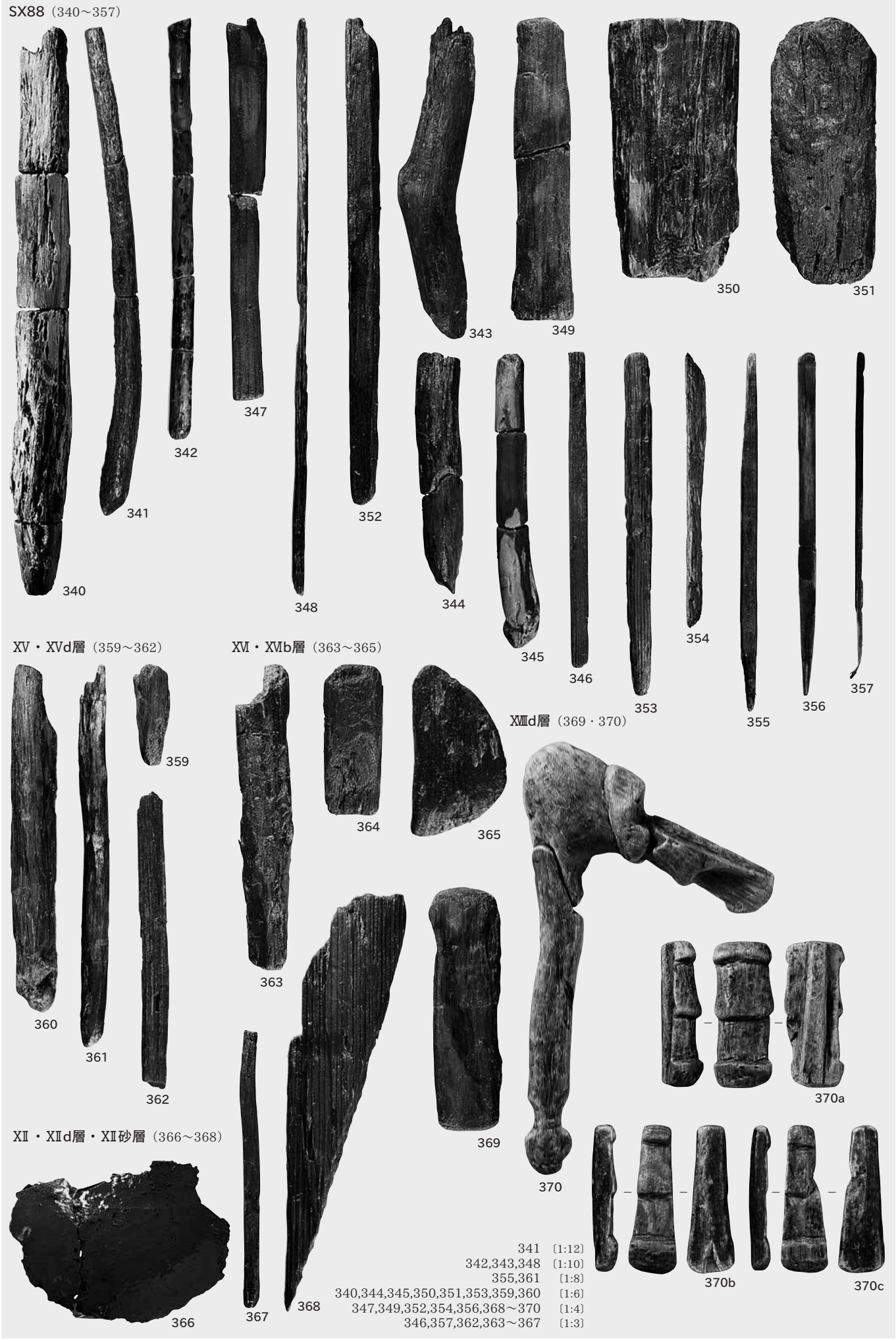


285～288,292 〔1:8〕
289～291,293,299,303～306,313,319 〔1:6〕
294～298,300～302,310,311,317 〔1:4〕
312 〔2:3〕
307～309,314～316,318 〔1:3〕

木製品（11） SK95、SX87・88



333,337 〔1:10〕
323,325,329,338 〔1:6〕
320～322,327,328,332,334,339 〔1:4〕
324,326,330,331,335,336 〔1:3〕


SX88（340～357）
340
341
342
347
348
352
343
349
350
351
344
345
346
353
354
355
356
357
XV・XVd層（359～362）
359
360
361
362
XVI・XVIb層（363～365）
363
364
365
XVIIId層（369・370）
369
370
370a
370b
370c
XII・XIId層・XII砂層（366～368）
366
367
368
341 〔1:12〕
342,343,348 〔1:10〕
355,361 〔1:8〕
340,344,345,350,351,353,359,360 〔1:6〕
347,349,352,354,356,368～370 〔1:4〕
346,357,362,363～367 〔1:3〕

XIIIa層（371）　XIc層（373・374）　IX・IXc層（375～388）

371

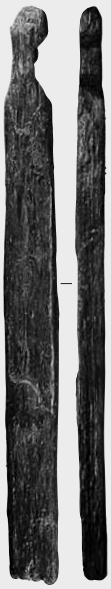
373

374

375

376

377


379

380

381

382

383

384

385

386

387

388

灰色粘土層（389～391），F層（392・393），D層（394・395）　31層（396～398）

389

390

392

393

394

391

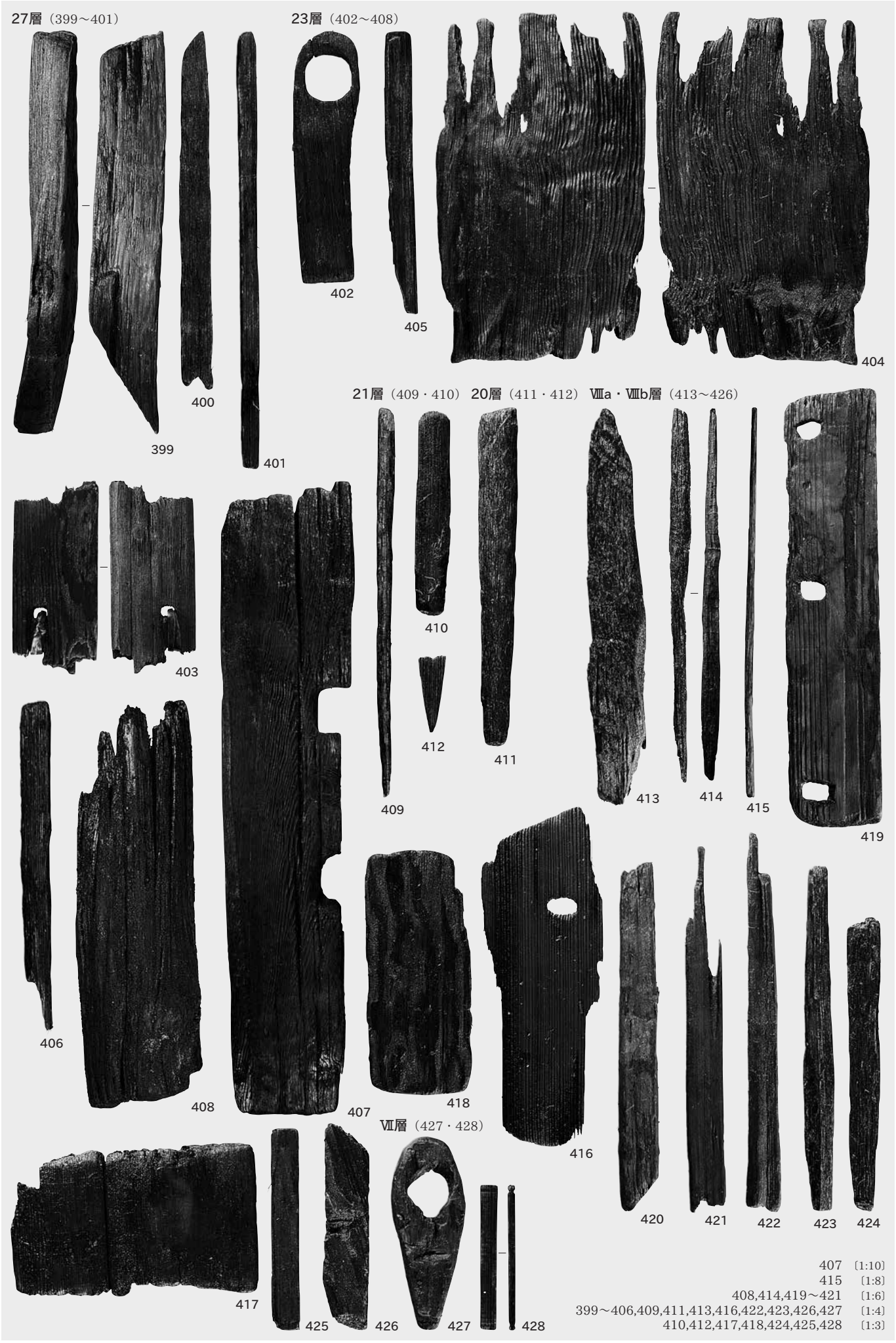
395

398

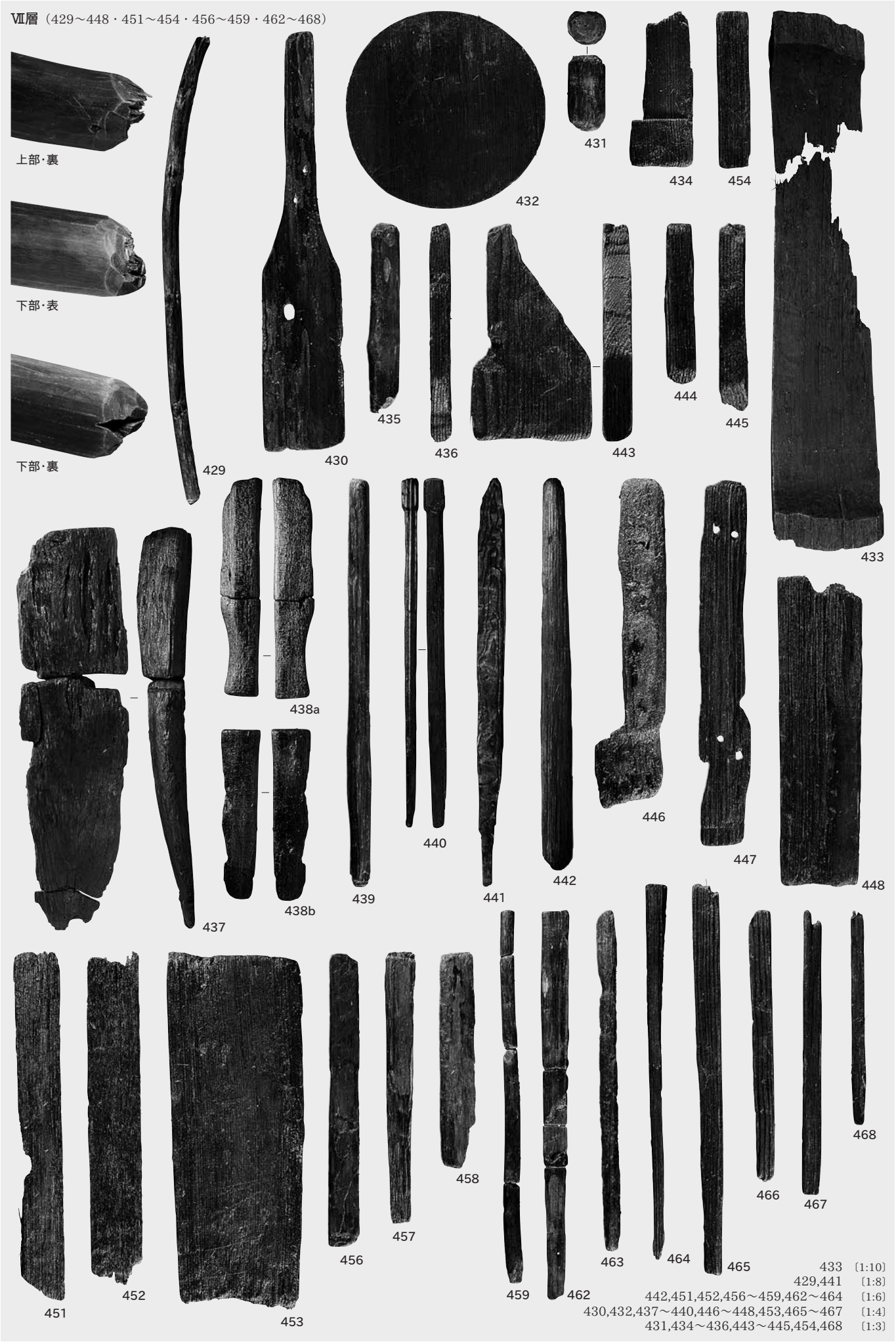
396

397

380,385　〔1:10〕
373　〔1:8〕
374,379,381～384,386　〔1:6〕
371,387,391,395～398　〔1:4〕
375～377,388～390,392～394　〔1:3〕



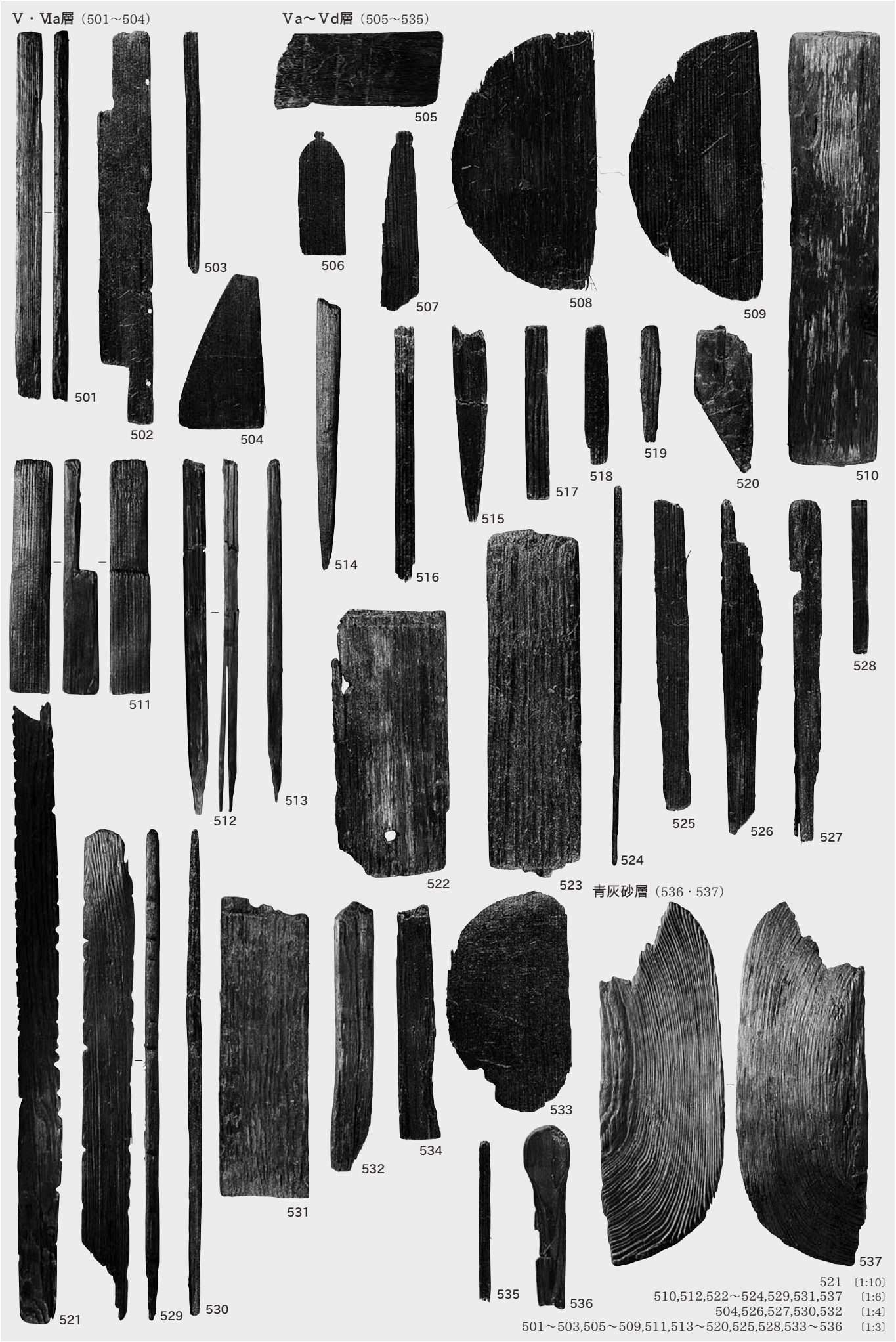
407 〔1:10〕
415 〔1:8〕
408,414,419～421 〔1:6〕
399～406,409,411,413,416,422,423,426,427 〔1:4〕
410,412,417,418,424,425,428 〔1:3〕


Ⅶ層（429～448・451～454・456～459・462～468）
上部・裏
下部・表
下部・裏
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438a
438b
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
451
452
453
454
456
457
458
459
462
463
464
465
466
467
468
433 〔1:10〕
429,441 〔1:8〕
442,451,452,456～459,462～464 〔1:6〕
430,432,437～440,446～448,453,465～467 〔1:4〕
431,434～436,443～445,454,468 〔1:3〕

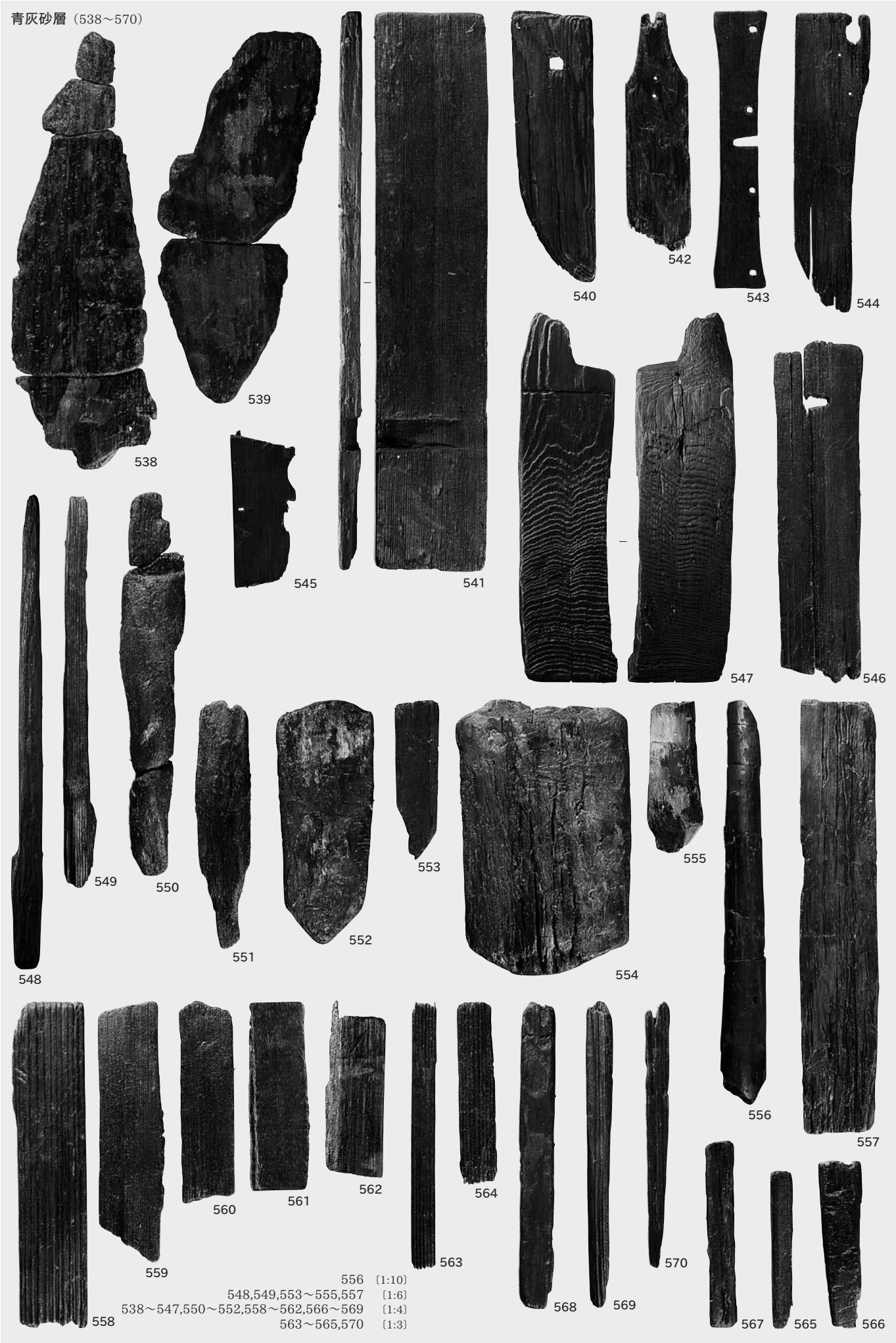
Ⅶ・Ⅶb層（449・450・455・460・461・469～486）

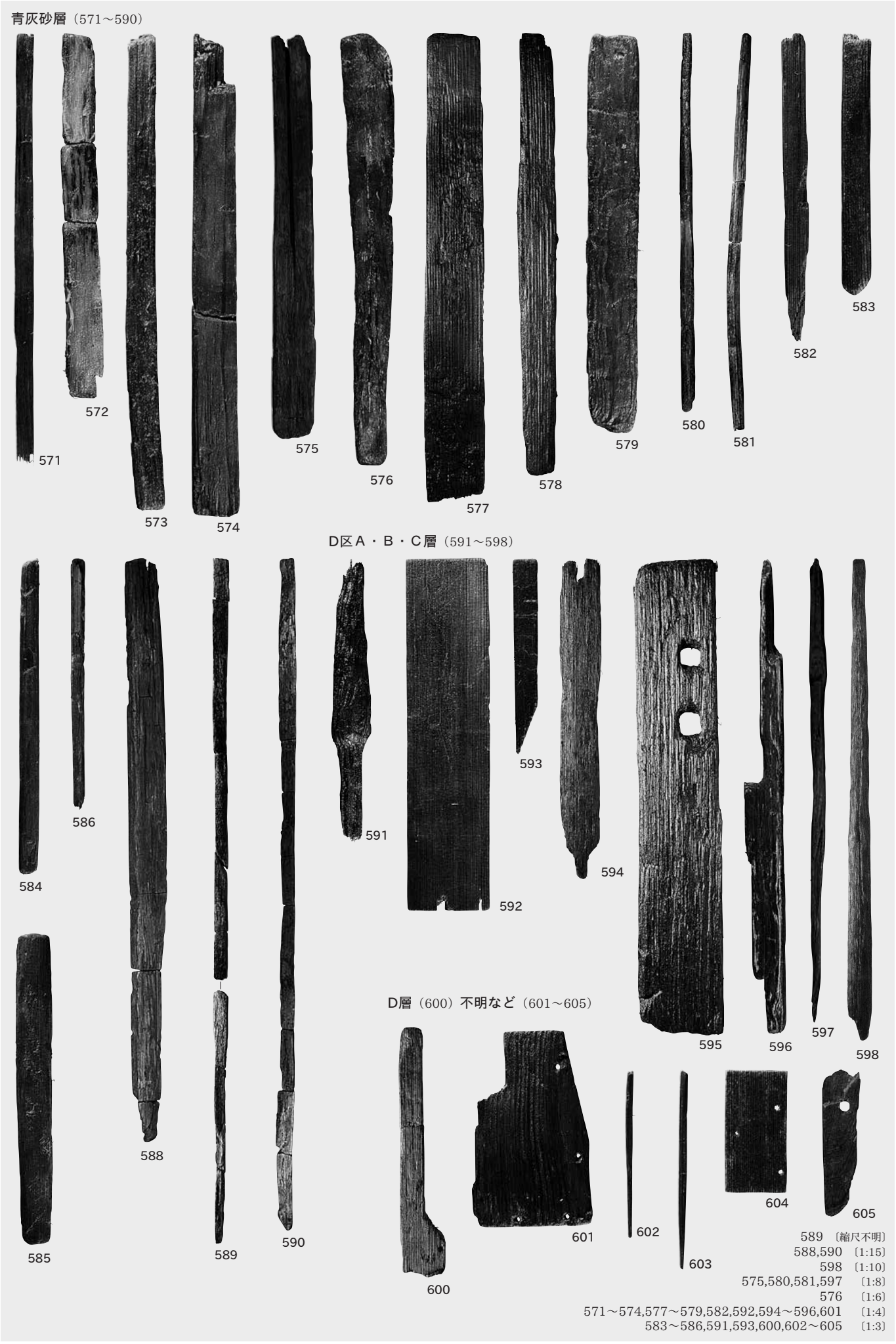
Ⅵ・Ⅵb・Ⅵc層
（487～500）

484 〔1:10〕
497 〔1:8〕
449,460,461,480,481,485,498 〔1:6〕
450,455,469,476,479,482,483,486,490～493,496,499 〔1:4〕
470～475,477,478,487～489,494,495,500 〔1:3〕



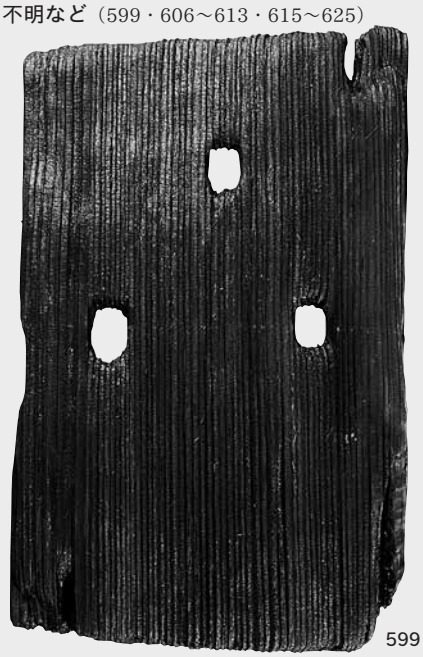
521 〔1:10〕
510,512,522～524,529,531,537 〔1:6〕
504,526,527,530,532 〔1:4〕
501～503,505～509,511,513～520,525,528,533～536 〔1:3〕


青灰砂層（538～570）
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
556 〔1:10〕
548,549,553～555,557 〔1:6〕
538～547,550～552,558～562,566～569 〔1:4〕
563～565,570 〔1:3〕



589 〔縮尺不明〕
588,590 〔1:15〕
598 〔1:10〕
575,580,581,597 〔1:8〕
576 〔1:6〕
571～574,577～579,582,592,594～596,601 〔1:4〕
583～586,591,593,600,602～605 〔1:3〕

不明など（599・606～613・615～625）


599

606

607

608

609

610

611

SD50（614）

612

613

614

615

616

617

619

624

625

618

622

620

621

623

626

625 〔1:15〕
614 〔1:10〕
615～617,624 〔1:6〕
599,608～613,618 〔1:4〕
606,607,619～623,626 〔1:3〕

報告書抄録

ふりがな	だいぶいせき　に　こだいからじょうもんじだいへん
書　　名	大武遺跡Ⅱ（古代～縄文時代編）
副 書 名	一般国道116号和島バイパス関係発掘調査報告書
巻　　次	Ⅳ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第249集
編著者名	春日真実・加藤　学・坂上有紀（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）、金原正子（株式会社古環境研究所）、竹原広展・藤根　久・米田恭子（株式会社パレオ・ラボ）、植田直見（財団法人元興寺文化財研究所）、坂本　稔（国立歴史民俗博物館）、永嶋正春・今村峯雄（国立歴史民俗博物館（当時））
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
所 在 地	〒956－0845　新潟県新潟市秋葉区金津93番地1　　TEL　0250（25）3981
発行年月日	2014（平成26）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	調査面積 （㎡）	調査原因
大武（だいぶ）遺跡	新潟県長岡市（にいがたけんながおかし） 島崎字大武（しまざきあざだいぶ）1910 ほか	15202	1004	37° 35′ 36″	138° 46′ 21″	19940413～19941216 19950410～19951208 19960415～19961126 19970414～19971128	6,800 17,983 14,270 9,730 合計 48,783	一般国道116号 和島バイパス建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大武遺跡	遺物包含地	縄文時代前期前葉	土坑2	土器（布目式・新谷式）、土鈴、漆焼付土器、石器（石鏃・石錐・石匙・磨製石斧・磨製石斧未成品・石錘・磨石類・石皿・台石・砥石・玦状耳飾・滑石製玉類）、漆紐	土鈴・漆紐・滑石製玉類・磨製石斧製作資料（縄文時代前期前葉）、琥珀原石・腕輪・斧柄・脚付盤・籃胎漆器（縄文時代後期中葉～晩期中葉）、緑色凝灰岩製管玉製作資料・ヒスイ製勾玉製作資料・大陸系磨製石器類（弥生時代中期）、剣把・盾・弓・木製容器類・木製農具・斧柄・櫂・梯子（古墳時代前期）などの出土遺物が注目される。
	遺物包含地	縄文時代中期	土坑2	土器（新保式・新崎式・大木9a式）	
	遺物包含地	縄文時代後期中葉～縄文時代晩期前葉		土器（加曽利B式・瘤付土器・大洞B式・大洞BC式・大洞C1式）、石器（石鏃・石錐・石匙・磨製石斧・石錘・磨石類・石皿・台石・砥石・琥珀原石）、腕輪・斧柄・籃胎漆器	
	遺物包含地	弥生時代中期		土器（南御山Ⅱ式・小松式・新諏訪町Ⅲ式・栗林Ⅰ式・同Ⅱ式・川原町口式）、石器（石鏃・石錐・打製石斧・太型蛤刃石斧・扁平方刃石斧・柱状方刃石斧・抉入柱状方刃石斧・石剣・緑色凝灰岩製管玉製作資料・ヒスイ製勾玉製作資料・石針・磨切具・弾車）	
	生産域	弥生時代後期～古墳時代後期	井戸1、土坑12、溝、水田跡、河道	土師器・須恵器・滑石製模造品・ガラス玉・木製品（剣把・盾・武器型木製品・弓・高杯・桶・槽・櫂・浮子・鍬・鋤・竪杵・田下駄・斧柄・梯子）	
	遺物包蔵地	古代（8～9世紀）	木製品集中地点	土師器・須恵器・木製品（曲物・円形板・下駄・浮子）	

要　　約

縄文時代前期前葉から16世紀にかけて断続的に営まれた遺跡。埋没谷から当期の土器・石器・木製品などが層位的に出土した。特に縄文時代前期前葉・弥生時代中期・弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が多く出土している。

建物跡は検出していないが、土坑・井戸・溝・水田跡を検出した。集落本体は調査区南西に位置する、「大武畑」と呼ばれていた微高地上に存在し、西側に接する奈良崎遺跡と関連しながら展開した可能性が高い。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第249集

一般国道116号和島バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ

大武遺跡Ⅱ

2014(平成26)年3月28日印刷
2014(平成26)年3月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950－8570　新潟市中央区新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956－0845　新潟市秋葉区金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　株式会社ハイングラフ
〒950－2022　新潟市西区小針1丁目11番8号
電話　025（233）0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第249集『大武遺跡Ⅱ』　正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	弥生時代　遺物	方刃石斧	片刃石斧
抄録	弥生時代　遺物	磨切具	擦切具